

スリザリンの継承者—魔眼の担 い手—

寺町朱穂

目を覚めると、世界は一変していた。『モノの死』が広がる視界、切り離された9年間の記憶、突如知らされた『魔法』の存在。——これは、非日常の世界に放り込まれた、1人の少女の物語。

※Arcadiaに投稿している『スリザリンの継承者（ハリポタ×型月）』のリメイク作品です。

※死の秘宝編まで完結済み。

※呪いの子編のオリジナル前日譚、執筆開始

目次

賢者の石編

1 話	壊れた世界	1
2 話	私は東へ、君は西へ	22
3 話	魔法使いの街	34
4 話	9 と 4 分の 3 番線の旅	58
5 話	組み分けの儀式	81
6 話	闇の魔術と魔法薬	104
7 話	飛行訓練	131
8 話	10 月 31 日	146
9 話	スリザリンの継承者	173
10 話	クリスマスの前に	186

11話 賢者の石.....

12話 2つの顔.....

13話 青い瞳.....

秘密の部屋編

14話 8月の日差しの中で.....

15話 9月1日.....

16話 ナルシストの防衛術.....

17話 蛇語のルーツ.....

18話 早朝の図書館.....

19話 禁書.....

20話 決闘クラブ.....

21話 ポリジュース薬.....

22話 日記のリドル.....

23 話 秘密の部屋.....

24 話 勝者の条件.....

アズカバンの囚人編

25 話 ニコラス・フラメル.....

26 話 見えない敵.....

27 話 甘いお菓子と吸魂鬼.....

28 話 赤い夢と現実.....

29 話 リディクラス.....

30 話 守護霊よ来たれ.....

31 話 真実と虚構／恐怖の敗北.....

32 話 深夜の訪問者.....

33 話 かつてない危機.....

34 話 人形の夜.....

35 話 セレネのクリスマス……………

36 話 もしもの話……………

37 話 予言……………

38 話 シリウス・ブラック……………

炎のゴブレット編

39 話 リトル・ハングルトン村……………

40 話 リドルの館……………

41 話 ホグワーツ特急に乗って……………

42 話 新生……………

43 話 服従の呪文と魔法の目……………

44 話 三大魔法学校対抗試合……………

45 話 イレギュラーの代表選手……………

46 話 杖調べと新聞記事……………

47 話	第一の課題（前編）	921
48 話	第一の課題（後編）	945
49 話	予期せぬ課題	975
50 話	クリスマス・ダンスパーティー	1003
51 話	卵の謎とリータ・スキーター	1033
52 話	第二の課題	1060
53 話	新たな魔法	1088
54 話	来訪者	1115
55 話	第三の課題	1148
56 話	赤い現実と帝王	1177
不死鳥の騎士団編		
57 話	14歳の夏	1217

58 話 オックスフォード・ストリート……………

59 話 それは、人間らしく……………

60 話 ガマガエルと深夜の密会……………

61 話 弱点……………

62 話 ホッグズ・ヘッドと防衛術……………

63 話 ガマガエルとお茶を……………

64 話 もっとも邪悪なる闇の魔術……………

65 話 未来視……………

66 話 蛇と獅子……………

67 話 幸福な記憶……………

68 話 選択の自由……………

69 話 禁じられた森……………

70 話 神秘部の戦い.....

71 話 闇の魔法使い.....

IF 番外編 プリズマ☆セレネ爆誕！.....

謎のプリンス編

72 話 霧のロンドン.....

73 話 3つ目の分霊箱.....

74 話 ホラス・スラグホーン.....

75 話 秘宝.....

76 話 1クヌートと誕生日.....

77 話 クリスマス前夜.....

78 話 雲泥の差.....

79 話 もう何も怖くない.....

80話 非暴力的で合法的な会談.....

81話 約束と嘘.....

82話 初恋.....

死の秘宝編

83話 闇の魔法使い、動く.....

84話 8人のポッター作戦.....

85話 結婚式.....

86話 魔眼と御伽噺.....

87話 魔眼蒐集列車【前編】.....

88話 魔眼蒐集列車【後編】.....

89話 共闘.....

90話	マルフォイの館	2502
91話	冬の星が輝くとき	2543
92話	グリーンゴッツ	2581
93話	ホグワーツの秘密主義者	2625
94話	レイブンクローの髪飾り	2668
95話	最後の分霊箱	2708
96話	蛇と蛇、そして獅子	2744
97話	セレネ去る／キングズ・クロス	2773
98話	誤算	2804
99話	19年後	2839
100話	月の娘の物語	2881

ホグワーツ七不思議編

特別番外編 「俺様ゲーム」

純血令嬢の序奏

1話 未知との遭遇

2話 七つの不思議

3話 グリフィンボール塔のダンブルドア

4話 禁じられた森の生き残り

5話 “それ”と会ったら、終わり

6話 秘密の部屋の密談

7話 地下牢の亡霊

8話 もう1つの秘密の部屋

賢者の石編

1 話 壊れた世界

目が覚めた時から、私の記憶は壊れていた。

記憶喪失ではない。

記憶は記録のように残っている。

だけど、それが自分の物とは思えないだけ。

こんな変な状況を治す術なんて、11歳の私には分からない。

今の状況を例えるなら、機械に記憶を移植したような状態、といえば分かりやすいだろう。自分が自分ではないような、私が私ではないような薄気味悪さがある。そもそも、私が私なのかすら分からない。

まるで、出来の悪いSF映画みたいだ、と自嘲する。いまの私はSF映画なんて見たことがないのに、単語だけ知っているのが、どこか滑稽で笑いそうだ。

私は誰だろう？

ここは、どこなのだろう？

私は、なんでここにいるのだろうか？

考えれば考えるほど、泡のような思考が頭の中で溢れかえって混乱してしまう。
まるで、鏡の中の迷路に迷い込んだみたい。

だから、今の私にできることはただ一つ。

私の物と思われる「壊れた記憶」をテープレコーダーのように視聴し続けるしかない。

いや、視聴と呼ぶにはおこがましい。

他人事のように「自分自身の壊れた記録」を眺めている。

視界が塞がれている以上、自分の内側に潜っていくしかない。

そう、今の私にできるのは、それだけだった。

「やあ、落ち着いたかい？」

扉が軋みながら開く音をする。

部屋に入ってきた人物は、そんな言葉を投げかけてきた。

声のした方向を向くが、当然何も見えない。包帯が両目を塞ぐように巻かれてい
るのだから、見えるわけがなかった。

でも、人のいる気配はしていた。どこか作り物のような優しい声。この声は知っ

ている。昨日、自分の自傷行動を力尽くで止めた男だと直感する。

あの後、まるで睡眠薬を盛られ、ぷつんと電源が落ちるように眠ってしまった。だから、あまり覚えていない。

それでも、確信に近い思いを抱いて問いに答えた。

「よく分からない、です。……貴方は医者ですか？」

昨日の周囲の様子。そして、今も鼻に入ってくる病院独特の消毒液の匂いから、ここが病院だということが分かった。

おそらく、いま私の横にいる声が、いわゆる担当医と呼ばれる人間なのだろう。

「そうだね。君……セレネ・ゴントさんを受け持っている医者です。セレネさんは知らないと思いますが、2年前に君が入院した時から、受け持っているんです」
「2年前？」

「そう、2年前です。2年前、君は交通事故でトラックと接触したんです。覚えていませんか？」

「……まあ、一応は」

覚えているといったら、それは嘘になる。

先ほどまで視聴していた目覚める前の「最後の記憶」には「トラック」なんて映っていない。映っているのは、悪臭のする灰色の髪をした男が襲い掛かってくところ。黒い服を着た少女は、必死でその男から逃げていた。そして、鋭い歯を持った男が、少女に触れようとしたとたん、急に遠くまで飛ばされていったということ。そして、どこからともなく放たれた赤い閃光に当たったところで、少女、すなわち、おそらく私自身、セレネ・ゴーンの記録が途絶えていた。

次の映像は……正直、思い出したくない。

あれを夢と呼ぶには、いささか強烈過ぎる。

「セレネ、大丈夫かい？」

今度は、別の男の声がした。私は新たな声の方を見る。

「僕だよ？ クイール・ホワイトだよ」

「……義父さん？」

先程の記録を頼りに、答えれば、見えてなくても彼が喜んでいる様子が伝わってきた。

彼の名前はクイール・ホワイト。セレネ・ゴーストの養父だ。

本当の父親は、どうやら生まれて間もなく死んだらしい。

そのあたりは曖昧でセレネの記憶に残されていなかったが、繋ぎ合わせた情報から察するに『殺人事件』だったようだ。家には鍵がかけられていたはずなのに、その日は何故か開いていた。だから警察は、殺人の線も疑った……けれども、父親には外傷がなく、だからといって病気の痕跡も見つからなかった。

まさに、ミステリーって奴。母親は死ぬのをまるで予期していたかのように、セレネを幼馴染のクイールに預けたそうだ。

そして、彼はセレネを実の娘の様に育て、セレネも彼を実の父親の様に慕っている。

勉強も運動も学年1番の神童で、誰よりも上に輝く「優等生」。

それが私、セレネ・ゴントらしい。

とはいっても、実感が全然わかない。

ついさつき——医者 of 言葉を借りれば、私の実感があるのは2年ぶりに目を覚ましてから、今に至るまでの一日分の記憶しかない。

それ以前の記憶は、すっかり私から切り離されていた。思い出そうと努力すれば、記憶は記録のように浮かび上がってくる。

ただ、それは『セレネ・ゴント』という少女が歩んだ9年間の記録映画を視聴するみたいに、味気のなく遠く離れた世界の話に感じてしまうのだ。

2年近く、昏睡状態だったからだろうか？

ここにいる私は、産まれてから一日程度しか経過していない。

少なくとも、セレネ・ゴントの生きた9年間の記憶は、壊れてしまっていた。だから、優等生なんて言われても実感がわかないし、目の前の義父を慕うこともできない。

「大丈夫かい、セレネ？」

クイールの心配そうな声が耳に届いた。私は咄嗟に、

「はい、問題ありません。ただ、少し身体が硬いです」

と、答えてしまう。

半分だけ、嘘をついた。記録映画のセレネ・ゴントは、クイールと名乗る養父に心配かけまいと動いていた。だから、今の私も同じように動いた方が色々都合良
いと判断する。

「あと1週間もすれば目の包帯も取れるみたいだよ」

「目？」

ああ、そうだった。

私は、包帯を巻かれた目に指を這わせた。

そう、私は目の前に広がった『世界』に嫌気がさし、とっさに眼球を押し潰そう
とした。

未遂に終わったが、悲しいことに、回復してしまうらしい。

「そしたら外も見えるようになるね」

「外、ですか」

「嫌かい？」

「——いえ、楽しみです」

そう言って強張った顔の筋肉を動かし、笑ってみせると、ほんの少しだけ安心した雰囲気グイールだけからでなく、医者からも伝わってきた。本音を言うと、外なんて見たくない。でも、そんなことを言うと、入院が長引くかもしれない。それが嫌だった。

「また来るからね」

遠ざかっていく人の気配。私は、また枕に頭をつけた。

それからの私は、当たり前のようにイイ子を装った。

薄っぺらい味のする病院食を黙って食べたし、診察も無抵抗で受けた。早く退院したいと思っていたから。

だが『退院して何をしたい？』と問われると答えに詰まる。特にしたいことは思いつかない。

……ただ無性に、明らかに非日常な空間から逃れたかった。

かといって、日常に戻って何がしたいと言われても言葉に詰まってしまふ。

本音を言えば、きっと更に入院が長引くだろう。

だって、言えるわけがない。

この世界が、こんなにも怖くて脆く見えることを治したい、だなんて。

そのうちに、就寝時間が過ぎたのだろう。

うるさかった外が静かになる。

やることがなさ過ぎて寝すぎたせいで、夜はこうして頭が冴えている。無論、することは何もない。時折聞こえるのは看護師の巡回の足音を聞きながら、自分らしくなるための手がかりとしての記録を見返すだけ……のはずだった。

「ほう、起きてすぐに『球血膜下出血』に陥るほどの眼球圧迫とは」
誰かいる。

誰かが自分の横に立っている。面会時間でもないし、主治医でもない人物がいる。私は慌てて跳ね起きると、手探りでナースコールを押そうとした。

「ちょっとだけ待ってくれないかの。君は知りたいのではないかね？」

その目に映るようになった『死の線』について」

ボタンを押そうとしていた指が、ぴたりと止まった。

この人——今なんて言った？

「誰ですか？」

私は慎重な声色で尋ねた。

声の質から考えるに、横に立っているのは相当の歳を取っている男だ。

当然、私の知っている医者でもないし、クイールでもない。看護師でもなさそうだ。こんな夜更けに一体何の用なのだろうか？

「はじめまして、セレネ。ワシはダンブルドア教授と言うものじゃ」

「教授？——それは、医者 の 類 でしょう か？」

でも、口にしてから、その考えは少し違っているかもしれない、と思った。

もし、いつも昼間に現れる主治医が私の状態を調べるためによこした医者なのだ

としたら、なんでこんな時間に現れるのだろうか？

そもそも、面会時間もとくに過ぎた時間にやってくるなど、まともではない。どうやら、私の記憶部分だけが壊れただけでなく、完全に頭が狂ってしまったのかもしれない。もしかしたら、これも恐ろしくて怖い夢の続きで、自分の妄想が生み出しているのかもしれない。

そう考えると、薄ら笑いが浮かんでしまう。

だけどその一方で、狂っていると思いたくない私もいた。

だから、ダンブルドアと名乗る怪しげな老人に対して、警戒心を一層強めた。

「いやいや、ホグワーツという名の学校に勤めている教師じゃ。近い未来に君が入学する予定の学校じゃよ」

「私は近隣の公立学校に入学する予定だと、義父から聞いています。そんな名前の学校じゃないです。……なにを企んでいるんですか？」

警戒心をむき出しにして話しかける。

だが、彼の放つ雰囲気は穏やかなままだ。本当に何を考えているのか分からなくて、気味が悪くなってきた。

セレネの記憶の自分は「優等生」らしく振る舞っていたが、こんなとき、正解が浮かんでこないことを考えると、果たして本当に「優等生」だったのかと自分を疑いたくなった。

「うむ……そうじゃのう。君の本当の両親の知り合いとでも言おうかの。そろそろ頃合いかと思い、会いに来たのじゃ」

「……本当の両親の知り合いですか？」

「知り合いじゃ。もつとも、言葉を交わしたことはないがのう」

教師を名乗る男は、どこか愉しそうに話します。

実に怪しい話だった。

本当の両親の知り合いなのだろうか。話したこともないのに、知り合いだなんてナンセンス。

そもそも、本当に知り合いだったと仮定しても、どうして人目を避けるような時間帯に尋ねてくるのだろうか。

「これでも仕事が忙しくてのう。残念なことに、この時間しか空けられなかったんじゃないよ。『闇の魔術に対する防衛術』の先生の不始末に対する苦情の吼えメールで

部屋が黒焦げになってしまつてのう」

私は少し、ぞっとした。

今、もしかしてこの男は私の考えを読んだのだろうか？

しかも、何て言つた？ 何メール？ 闇の魔術？ 学校というのは、オカルト的な学校なのか？ やはり、これは私の頭が見せている妄想なのか？ 疑問符ばかりが、泡沫のように浮かんでくる。

もちろん聞きたいことは、沢山ある。だから、その中でも最も分からない言葉の意味を尋ねることに決めた。

「最初に言つた『死の線』ってなんですか？」

「それは君が一番よく分かつている事柄じゃ。君が視えてしまつておる線のことじゃよ」

ダンブルドアと名乗つた男は、穏やかな口調でそう言つた。

一番よく分かつている。当然だ。眼を開けた瞬間、この世界に広がつた黒い線。

脆そうで、触れれば世界が崩れ落ちてしまいそんな幻覚に陥る、恐ろしくて怖くてたまらない線。

いや、幻覚ではない。

私は幻覚ではなく、本当にあの線を切ったら世界が崩壊する、と確信していた。

「君は視たのじゃろう？ この2年間『を」

ダンブルドアが手を差し伸べるように、言葉をかけてくる。

この人は、本当に自分のことを分かっている。あの上っ面の言葉しかかけてこない主治医よりも、ずっと私の状態を見抜いている。

そのことに、ぞっとしながら、ゆっくりと震える指で触れるように、この2年間見続けてきた悪夢の記憶に手を伸ばした。

あそこは暗くて、底は昏かった。

光も音もない海の中に浮かんでいる。そこに果てなんてなかった。いや、初めか

ら堕ちてなどいなかったのかもしれない。

何もない空間。光も闇もない。俗にいう「無」という言葉すらそれには当てはまらないだろう。形容することが無意味に思える『』の中において唯一の異物——それが私、セレネ・ゴントだった。

目を背けたくなるような毒毒しい色彩をした『』。

ずっと、遠くを見ても——ずっと何かを待っていても何もない。そうだ——これが「死」なんだと思った。死者しか到達しえない世界で、たった1人の生者が私だった。意識を失っていた2年間ずっと「」を観測し続けていた。

ああ、思い出したくもない。

永遠と続く悪夢を観測し続けていたのだ。

否。

観測ではない。

気が狂いそうになる中で、死という概念に触れていたということは、むしろ観測

ではなく戦いの激しさに近かったのかも知れない。だから、目が覚めた途端、あの世界にひたすら近くなった異様な視界に気付き、怖さのあまり目を潰そうとした。この両目は、あのおぞましい世界につながっている。

昏睡から目が覚めて初めて目にしたものは、線だった。人にも壁にも空気にも、禍々しくも清麗な線がついている。その線は常に動いていて一定していない。けれど、確実にそこにあって、今にもそこから「死」がしみ出しそうな強迫観念にとらわれた。あの線を斬ったら、そこからボロボロと崩れていくのが見えた気がした。

もう、あんな世界に行きたくない。

あんな、怖い世界に堕ちたくない。

怖くて、気味の悪い思いはもうたくさんだ。

だから、目を潰そうとしたのだ。主治医や看護師が全力で止めてきたから、失敗したけど。

「やはりそれは『直死の魔眼』じゃ」

「直死の、魔眼？」

私は呆けたように聞き返しながら、さらにダンブルドアなる男に対する警戒心を引き上げた。

こいつ、やっぱり人の心を読んでやがる。

どんな手を使ってるのかは、知らないが。

しかし、自分にはない答えを持っている。私は警戒しながらも、慎重に耳を傾けた。「非常に珍しいものじゃ。わしも昔からの友人から聞いたことがあるくらいじゃよ。その友人でさえ、見たことがないと言っておったのじゃからの。」

いや——実に、実に珍しいモノじゃ。あっ！これこれ、早まるでないわい。例えその眼を潰したところで、見えてしまうものは視えてしまうぞ？」

「そうですか。珍しいなら、手術でもなんでもして売りさばこうと思ったところだったんですよ。残念ですね」

そう言って、眼に伸ばしかけた手を膝に戻す。

気のせいか、手が震えている。寒くないのに、怖くて怖くてたまらなかった。目を取っても纏わりついてくる、この薄気味悪い世界とどう付き合っていけばいいの

だろう？

「セレネ、いいかね？」

穏やかな口調の中に真剣な色が混じっている。もしかしたら、ここからが本題なのかもしれない。

「わしは、その能力を避ける方法は知らない。だが、忠告を授けることは出来る」
「忠告、ですか？」

「いかにも。よいか、セレネ。」

『死』を恐れることは大事な事じゃ。じゃが、『死』を避けることを考えてはいかんぞ」

「私は——」

あんな世界に堕ちたくない。死にたくない。あれを見てないから、そう言えるのだ。だから、私はもう死にたくない。

男は、そんな私の想いを見透かしたように首を横に振るった。

「だが、それはおろかな事よ。特に、君は一步間違えればより深い闇へと堕ちていく可能性が、他の誰よりも強いのじゃよ」

それはどういうこと？と問う前に、男は立ち上がった。まるで、私の質問を遮るように話し始める。

「いかにいかに。そろそろ時間じゃ。続きの話はまた今度にしよう。では、また会おうセレネ。」

なにしろ、君が産まれたときから、ホグワーツに入学することが決まっていたのじゃからのう。それでは、学校で会おう」

そう言うと、パチンつという音と共に、男の気配がまるでなくなってしまった。病室には、ふたたび静寂が訪れる。まるで、だれもいなかったように。

いまのは、夢、だったのだろうか？

いや、違う。夢じゃない。妄想でもない。いったい何者なのだろうか。

私は、しばらくそれを考えていたが、いつの間にか浅い眠りへと堕ちていった。

はじめまして、寺町朱穂です。

リメイク前の作品とは違った味が出るよう、しっかりとした完結を目指して頑張りたいと思います。

以後、よろしくお願いします。

2 話 私は東へ、君は西へ

世界が、気持ち悪い。

気分転換に散歩に出かけてみたが、頭痛はひどくなる一方だった。私は痛くなる頭を押さえ、公園のベンチに腰を掛ける。

空を見上げる。

空だけは自分の知る青空で、眺めているとホッとした。

目が覚めるような青い空を雲が悠々と流れ、視界から消えていく。あの世界には不気味な「死の線」は映っていない。

空を見ているうちに、頭痛と吐き気が少しずつ波をひいていくのを感じる。

「なんとか慣れてきたけど、それでもキツイ」

退院して1か月。

視界に浮かぶ『死の線』は、相変わらず消えない。

気を抜かないようにすることで、なんとか視えなくなる。だけど、ふと気を緩め

た瞬間、たとえばTVをボンヤリと眺めている時や目が覚めた瞬間などに、いきなり飛び込んでくる。

完全に不意打ちの一撃は、たまったものではない。

だから、疲れはたまっていくな一方だ。

「勉強もしないといけないし、はあ……」

私は嘆息した。

眠っていた2年分の溝は、予想以上に大きかった。

学校に復学したが勉強についていけず、補習や特別な支援を受け、家ではクイールに手伝わしてもらいながら勉強をする日々を送っていた。それでも、2年の溝を埋めることは難しい。

勉強漬けで疲れ果てれば、また気が抜けて、線が視界一面に広がってしまう。

しかし、セレネ・ゴントが——記憶で見る限り、優等生だった彼女が、疲労困憊で落ちこぼれる姿なんて、露見させてはいけないのだ。そう思い、私は記憶にあった『セレネ・ゴント』らしく頑張れば頑張るほど、頭が加熱されたように痛む。

そう——今みたいに。

私は歯を食いしばって、身体を丸めた。

空を見ているのも辛くなり、瞼を閉じて、ただただ疲れが取れるのを待つ。

「——っ」

遠くから、子どもが遊ぶ声が聞こえてくる。

幸せ絶好調と言った声は、私の心を逆なでする。みんなこの線が視えないから、普通に笑っていられる。だけど、私は……一生、この眼から離れられない。潰してもどうにもならない以上、永遠に恐ろしいまでに継ぎ接ぎだらけの世界に生きていかなければならないのだ。

そのことを考えるだけで、再び吐き気が込み上げてくる。脳の痛みは頂点を越し、額からは汗が絶え間なく流れ落ち始めた。

「ねえ」

そんな時だった。

ふと、可憐な声が降ってきた。

誰かが自分を見下している。身体を起こし、注視してみると、そこには女性が立っていた。

赤くて長い髪が特徴的な女性は、どこか遠くに行くのだろうか。大きなトランクを抱えていた。

「あなた、辛いでしょ？」

彼女はまるでこちらの心を見透かしたように、透き通った青い目で覗き込んでいる。

「あなたは……？」

私の顔色は、見知らぬ女性に心配されるほど悪かっただろうか。私が「大丈夫」とやせ我慢の返答をする前に、彼女は私の手をつかんできた。そして、硬くて冷たいなにかを握らされる。

「これ、あげるわ」

冷たいそれは、何の変哲もない眼鏡。

女性はいたずらに成功したときのように微笑むと、私の鼻を軽くつついてきた。「いいかしら。この眼鏡は線を消すことができるの。そのことだけは覚えておいて。

私、この世界にあまり干渉したらいけないって言われてるから、出会った記憶は消させてもらうけど、眼鏡のことだけは覚えてるように調整するから」

赤い髪が美しくたなびかせながら、女性は寂しげに微笑んだ。

彼女の言っていることの意味が分からず、痛む頭を押さえながら質問しようとしたが、その前に彼女は手をすっと私の頭にかぶせてきた。

途端、焼き切れそうだった脳が甘く蕩ける。目を閉じてはいけない、と第六感が叫んでいた。だが、私は唐突に訪れた眠気に耐えられない。意識がブラックアウトする瞬間、女性の口元が動くのが見えた。

「じゃあね、縁があったらまた会いましょう。

でも、次にそんなところに寝転がっていたら、蹴り飛ばしちゃうから」

これが、赤い魔女と私の最初の出会い。

しかし——この出会いを思い出すことはない。

私が魔女と再会するのは、当分先の話——。

「大丈夫？」

肩をゆすられ、ゆっくりと眼を開ける。

額に傷のある少年が、覗き込んできていた。どうやら、頭が痛すぎて意識を失ってしまっていたらしい。

「……はい、問題ありません」

額に手を当てようとし、軽く握った眼鏡の存在に気がつく。

そうだ、眼鏡をかけなくては——。私は、握っていた眼鏡をかけた。

すると、いままで世界に漂っていた『線』が綺麗に拭い取られていく。ようやく、ホッと息を吹き返せたように思えた。これで、常に気を張り詰めさせる必要がなくなる。それだけで、ずっと気が楽になった。

「あつ、君も眼鏡をかけているんだ」

私は顔を上げて、少年の顔を見た。額に稲妻型の傷がある少年も眼鏡をかけていた。

壊れかけの眼鏡だ。家が貧乏なのだろうか。見れば服もだぶだぶでサイズが合っていない。

「ええ、まあ」

「あれ？　ねえ、ひょっとして、君——セレネ？」

「そうですが、貴方は？」

正直、見覚えがない。

私が尋ねると、少年の顔に少し笑顔が広がった。

「僕だよ、ハリー・ポッター！覚えていない？」

「ハリー・ポッター？」

記憶に検索をかける。

しかし、該当する名前が見当たらない。私は申し訳なさそうに首を横に振った。すると、ハリーと名乗る少年は、しょんぼりとうな垂れる。その姿を見て、若干申し訳ないような気持ちになった。

このハリー・ポッターと名乗った男の子は、私の名前を知っている。いったい、彼はどこで知ったのだろうか？

「実は4年くらい前——セレネのお父さんが、担任の先生だった時期があるんだ。

その時に一緒に遊んだんだよ？覚えていない？」

「4年前？」

すると、ひょろつとした眼鏡の少年が浮かび上がってきた。

だが、一緒に遊んだ時間は極めて短かった。遊び始めた直後、大柄な少年達がハリーをイジメてきたのだ。ハリーと一緒に、その少年達から逃げ、気がつくとき——

どういふわけか、ハリーは校舎の屋根の上に座っていた。

「そうだよ！　僕だよ！」

まさか、ここで再会するとは思わなかった。

私は、重たい腰を上げる。ハリーは、再び少し寂しそうな顔に変わった。

「えっ、もう行っちゃうの？」

「はい、そろそろ夕飯の支度をしないといけませんから」

「そうなんだ、それなら仕方ないね……また、会おう！」

私は、ハリーと握手をして別れた。

私は東に、ハリーは西に。それぞれの帰路へ向かう。

夕焼けの中に、2つの影が長く伸びている。

この時の私は、まだ自分の運命を知らなかった。

そして、たぶん——ハリー・ポッターも。

※ 3月1日…誤字訂正

※ 2018年11月…大幅改定

3 話 魔法使いの街

7 月 31 日 ロンドン。

「おかしいな……確かこの辺りなんだけど」

クイールは、キヨロキヨロっと辺りを見渡した。地図を片手に、何度も何度も首をかしげている。

出発前「ロンドン」は大学時代から通っている。僕の庭のようなものさ！」と鼻を高くしていたのが、まるで嘘のようだ。

「漏れ鍋なんてパブ、どこにもないな。地図だとこの辺りなんだけど……」
クイールは地図とにらめっこを続けている。

私は地図から目を離し、ぼんやりロンドンの通りに目を向けた。

「そもそもパブに魔法の杖や箒が売っているのでしょうか？」

つい、疑問を口にする。

「私たち、騙されているのでは？」

「そんなことはない！」

ずっと抱いていた疑問を口にする、クイールはムッと眉間にしわを寄せた。

「セブルスは悪人顔だけど良い奴なんだ!! そんな嘘をつくはずない、と信じた
い」

後半、クイールの目がわずかに泳いだ。

やはり、信じ切れていないようだ。当然である。私自身、半信半疑だ。私は「入
学案内」に目を落とし、小さく呟いた。

「このご時世に、魔法学校なんて」

そもそも始まりからして、おかしい話だった。

昨日の夕方、前触れもなく、不思議な訪問者が玄関先に現れた。

『セブルス・スネイプ』と名乗った男は、真夏なのに黒いローブを羽織っていた。この時点でおかしく、警戒するはずなのに、クイールは全く警戒しなかった。どうやら、クイールは、彼の知り合いだったらしい。クイールは久々の知人の来訪に驚き、慌てて歓待の準備をし始めようとした矢先、セブルスはそれを止めた。

『今日はお前の義娘に用がある』

セブルス・スネイプはそう言うのと、封筒を差し出してきた。

『ホグワーツ魔法魔術学校』の入学案内を。

そう、おかしい。

絶対にありえない。私が魔女で、魔法使いの学校に通うことになったという時点で、なにかがおかしい。いやダンブルドアなる教授からホグワーツとやらの存在は聞いていたが、それでも俄かに信じがたい。

しかも、魔法の学用品を買うために、ロンドンの平凡なマーケットを訪れているなんて、やっぱりおかしい。しかも、学用品を買うために、まずは「漏れ鍋」なる

パブを探すなんて、絶対におかしい。

「いや、ありえないことが、ありえないのかな？」

つい、目を抑えながら呟く。

眼鏡のおかげで視えないが、今も私の前には『死の線』が広がっているはずだ。それは科学的に「ありえない」。まさに「魔法」の所業といっても過言ではない、はずだ。

だから、パブに魔法の学用品が売っていても、おかしくない、のかもしれない。

「それで『漏れ鍋』でしただけ？」

私はクイールの持っている地図に目を落とし、再び顔を上げ――

「あれですよ、義父さん」

案外、あっさりと見つけることができた。

文字通り、目と鼻の先にある。

「義父さん、アレでは？ ほら、その本屋とレコード店の間」

まあ、見落としてしまうのも無理はないかもしれない。

『漏れ鍋』というパブはちっぽけな薄汚れたパブだったし、足早に道行く人たちは、

パブの隣にある本屋から反対隣りにあるレコード店へと目を動かし、真ん中の寂れたパブなんて全く目もくれていないのだから。

「ん—— あっ!! そうだ、あれだよ!! なんで気が付かなかったんだ?」

クイールはおどけたように笑い、いそいそとパブの入り口に近づいた。古びた入り口だったが、取っ手はかなり磨かれている。見た目のわりに、それなりに、繁盛した店なのかもしれない。

「よし、行くよ。セレネ、パブは大人の店だから、僕から離れないようにね」

クイールはそう言うと、ゆっくり扉を開けた。

パブに足を踏み入れてみれば、薄暗い空間が広がっていた。ガヤガヤとしゃべっている人はいるが、そこまで気にならない程度のモノだ。ロンドンの喧騒とは全く違う。酒と煙の臭い。

だけど、それだけだ。

私は、内心がっかりした。

「魔法の欠片もない」

賑やかな空間だ。

着ている人の服装こそ、古風極まりないマントや山高帽が目立つが、それ以外は特に目立って奇妙なところは見当たらない。ただのコスプレ会場のよう to 考えていると、1 人の男の人が近づいてきた。

最初は暗くて顔がよく見えなかったが、その顔がはっきり見えたとき、クイールの顔に浮かんでいた緊張の色が消え、代わりに、ぱあっと花が咲いたように明るくなった。

「セブルス！来てくれたのか!!」

「耳元で叫ぶな」

眉間にしわを寄せる男。

彼の名前は「セブルス・スネイプ」。先日——私に入学案内の手紙を届けた人物であり、クイールの友人だ。ねっとりとした黒髪に鉤鼻、土気色の顔をした男で、先日と同じ漆黒のローブを纏っている。

……見た目からして、スネイプ教授は魔法使いだと主張している。一体、どのような経緯で、魔法使いと非魔法使いの彼らが友達になったのかは知らないし、興味もない。私は優等生らしく大人しく黙って、彼らの行動を見守った。

「お前達は魔法界のことを全く分らないから、来てやったまでのことだ。

それに我輩も葉問屋と本屋に行かねばならんのだな」

「あはは。本当に素直じゃないな。まっ！そういうところがセブルスだけだ」

——気のせいだろうか？

今一瞬、スネイプ先生がため息をついたような気がした。

「まあいい。とにかく行くぞ。」

特にセレネ、お前はこれからすることをしっかり覚えておけ」

そう言うときスネイプ先生はパブを通り抜けて、壁に囲まれた小さな中庭に私たちを連れだした。ゴミ箱と雑草が2・3本生えているだけの庭だ。

その壁のレンガを杖で、とんとんと叩く。すると、叩いたレンガが震えて、次にクネクネと揺れたのだ。真ん中に小さな穴が出来た。そう思うと、それはどんなと広がり、目の前には人が余裕で通れるくらいの大きなアーチ型の入り口が出来た。

アーチの向こうには、小綺麗な石畳が続いている。

「ここが『ダイアゴン横丁』だ。」

魔法関係のモノなら大抵のものがそろっ横丁だ。覚えておけ」

アーチの向こうを覗き込み、私は思わず

「……すごい！」

と、感嘆の声を漏らしてしまった。

漏れ鍋に感じた魔法感のなさど期待外れ感は、一気に遠くへ飛んで行った。

ロンドンのマーケットにも負けず劣らずの賑わいが広がっている。

それぞれ違ったマントやらローブやらを着ている魔法使いが楽しそうに語り合
い、見たこともない凛々しい花を抱えていた。店の外に積み上げられている大鍋が
日の光を浴びてキラキラと反射している。その隣では、フクロウやカラスが愉快気
に鳴くペットショップがあった。いや、フクロウだけでなく、動物図鑑に乗ってい
ない二股の猫や曲芸をするネズミも店先に並んでいる。

本屋なんて、表紙の絵が動いていた。

トリックアートではない。写真の人物が生きているように不規則な動きをしてい
るのだ。

どこを見ても初めてみるモノばかりで、キョロキョロと辺りを見渡しながら進

む。心なしか、歩調がスキップを刻み始めていた。

「すごい、すごいです！」

初めて見るものに、とめどなく溢れ出てきた感動を現していた。

もしかしたら、目が覚めてから初めて「楽しい」と感じた瞬間だったかもしれない。

自分が「魔女」だと知らされたときも刺激があったが、この横丁の雰囲気の方が刺激的だ。まさかロンドンに……しかも、こんな空間が、あんな薄汚れたパブの裏に広がっていたなんて、想像したこともなかった。

「スネイプ先生、どの店に行くのですか！」

自分の声が弾んでいることが分かる。

心がうきうきした。純金の鍋が鎮座していた薬屋か、伝統のありそうな杖の店か、それとも煌びやかなローブがショールウィンドーに並んでいる服屋か。

私が尋ねると、スネイプ先生は淡々と教えてくれた。

「まずは金を換金しないとな。マグル……非魔法族の金はこの世界では使用できない」
「へえー。銀行もあるのか」

「あるに決まっておろう。ここが『グリンゴッツ魔法銀行』。魔法界唯一の銀行だ」
そこに建っていたのは、小さな店が立ち並ぶ中、ひとときわ高くそびえる真っ白な建物だった。磨き上げられたブロンズの観音開きの扉の両脇に、黄金と深紅の制服らしき服を着た謎の生物が立っていた。

何処からどう見ても、明らかに人間ではない。

なにしろ、11歳の私よりも小さいのだ。彼らは、せいぜい5歳児ほどの身長しかない。

その上、浅黒く賢そうな顔つきをし、先のとがった顎髭を持ち——どう見ても人間のモノより遙かに長い指。

「その、セブルス？ あれは人間か？」

クイールも同じことを考えたらしく、こっそりスネイプ先生に耳打ちをしていた。

「あれは小鬼、ゴブリンだ」

声を低くしてそう教えるスネイプ先生。

なるほど、道理で人間っぽくないわけだ。

グリンゴッツの中では、沢山の小鬼が秤を使って金を量ったり、大きな帳簿をつけたりしている。

どの小鬼も真剣にその仕事に取り掛かっていた。

その小鬼の1人に、手持ちの金を魔法界の金に換金してもらおう。

「これ……純金、ですか？」

どっしりと重い金貨を、しげしげと見つめてしまう。

「無論だ、混ざりものなど価値もない。

よく覚えておけ、セレネ」

スネイプ先生が、私の掌の上に銅貨を並べた。

「この銅貨が、1クヌートだ。

クヌートは29枚で、1シッケル——この銀貨と同じ価値を持つ。そして、銀貨が17枚で、1ガリオンだ」

スネイプ先生が、貨幣の説明をしてくれた。

私は、今言われたことを口の中で反芻する。

「この金貨——ガリオンは、シッケル銀貨17枚分。それで、このシッケル銀貨は、

クヌート銅貨29枚分、ということですね？」

「そうなるな」

子どもながらに、本当に銅貨29枚と純銀1枚が釣り合っているのか……と、少し疑問に思うが、きっと魔法で解決できる問題なのだろう。

私は慎重に手のひらサイズの金貨や銀貨を財布にしまい、ようやく本題の買い物が幕を開けたのだった。

「とりあえず、まずは制服だな。」

その店で買ってこい。その間に我輩は薬問屋に行ってくる」

グリーンゴツから出ると、スネイプ先生は1つの店を指差した。看板には『マダム・マルキンの洋裁店』と書いてある。

「確かに採寸の間は僕たち、暇だからね。」

じゃあ、僕もセブルスについて薬問屋に行ってくるけど、1人で大丈夫かい、セレネ？」

「父さんは心配性ですね。私はもう11歳ですよ」

私がしっかり答えると、心配そうだった顔をしたクイールは、一瞬で笑顔になった。

クイール・ホワイトは、本当に分かりやすい人だ。やはり……何故この人と、少し陰気な雰囲気が漂うスネイプ先生が友達になれたのだろう。

しかし、考える時間は今ではない。まず制服を買うことが最優先課題である。私は古めかしい扉を、ゆっくりと開けた。

「ごめんください」

「いらっしゃい、お嬢ちゃん。ホグワーツなの？それならここで全部そろいますよ？」

私が扉を開けると、中から紫色の服を纏ったずんぐりとした体型の魔女が出てきた。

「はい、今年入学なので制服を一揃え欲しいのですが」

「分かったわ、じゃあ今から採寸をしますわよ」

私はもう1人いた魔女に踏み台の上に立たされると、頭から長いローブを着さ

せられて、ピンでとめ始めた。動いてはいけな、と指示されたので、目だけを動かし、周囲を観察した。

だが、面白いところは見つからない。長いロープが置いてある以外は他の洋服店と変わりなかった。自動で伸びる巻き尺とかあるのかと思ったが、意外と手動で採寸している。だから、されるがままに、突っ立っていた。

そうしているうちに、時間が過ぎ——誰かまた客が来たようだ。

私と同じくらいの男の子だ。プラチナブロンドの髪が特徴的で、どこことなく自信に満ち溢れた顔をしている。

「やあ、君も今年入学するのかい？」

男の子が話しかけてきた。どうやら、彼も今年入学するらしい。

「まあ——そうです」

「僕の父上は隣で教科書を買ってる、母上はどこかその先で杖を見ている」
ずいぶん気取った話をする子だ。魔法使いの良家の子なのかもしれない。

「そうですか」

「それで、これから僕は、2人を引っ張って競技用の箒を見に行くんだ。

1年生が自分の箒をもっちゃいけないなんて、理由が分からないね。父上を脅して一本買わせて、こっそり持ち込んでやる。君は自分用の箒を持っているのかい？」

男の子が尋ねてきた。

私は返答に困ってしまった。箒を持っているには持っている。庭掃除用の箒だが――。

たぶん、掃除用とは違う『この世界の箒』について聞いているのだろう。やはり、物語に登場する魔法使いのように、自由に空を飛ぶ箒が存在するのだ。そう考えると、ちょっとだけ、心が躍った。

「いいえ」

「クイディッチはやらないの？」

「いいえ。もしかして、クイディッチとは、箒を使った競技ですか？」

「そんなことも知らないのか？ まさか、穢れた血か？」

男の子の目に『嫌悪』の色がチラつき始めた。

「穢れた血」なんて、あまり良い言葉には思えない。おそらく、魔法族でないこと

に対する侮辱の言葉だろう。

生粋の魔法使いってのは非魔法族を嫌っている、というところだろうか？

白人が黒人や黄色人種を差別するみたいに、この世界にもそういう観念であるのかもしれない。魔法使いも、実に人間らしい発想をするものだ、頭のどこかで感じた。

「穢れた血という意味が分かりませんが、非魔法族の社会で育ったことは事実です。ただ、魔法使いの親を幼い時に失くし、それからは非魔法族の社会で暮らしていました」

だから、たぶん自分は魔法族生まれだと答える。

正直なところ、両親の記憶となると、途切れ途切れの『セレネの記憶』に、さらに靄がかかってしまう。

クイールの友人だから、母親はマグルだったということは分かる。しかし、父親はどうだろうか？

あの夜——私を訪ねてきた自称『魔法使い』の老人が「君の父親を探していた」と言っていたことから考えると、恐らく父親が魔法使いだったのだろう。ゆえに、

私はマグル生まれではない。

「それは大変だったね」

すると、その眼から『嫌悪』の色が薄れた。入れ替わる様に、憐れむような色が滲み始める。

「そうでもないですけど」

そう答えたとき、丁度採寸が終わったらしい。

私は、すくと踏み台から降りた。

「君の名前を教えてくれないかい？」

私が勘定を終えた頃、男の子がそう尋ねてきた。

「『セレネ・ゴント』です」

「僕は『ドラコ・マルフォイ』。じゃあホグワーツで会おう。たぶんね」
やはり、少し気取った感じだ。私は少し微笑み、手を振った。

「それでは、マルフォイ。ホグワーツで会えたらいいですね」

外に出ると、丁度クイールとスネイプ先生が戻ってきた。

クイールが大きな鍋を抱えている。その中を覗き込んでみると本や薬の材料らし

きものなどが入っていた。材料らしきものは——あまり、口に出して気持ちのよいモノではないから、直視しなかった。

「他の学用品も買ってきてくれたの？」

「葉問屋に行くついでにね。凄かったよ、まさに黒魔術で使いそうなものばかりで——興味深かったけど、ちょっと気持ち悪かったな。

来年は一緒に行こうか」

クイールは、子どものように目を輝かせている。

私は静かに頷いた。コレが最後の機会じゃないのだから、来年行けばいい。

そして、改めて「必要なもののリスト」に目を落とした。

「鍋もあるし、教科書もある——葉の材料もあるし、制服の予備もある——望遠鏡は自分の奴を持っていけばいいから——あとは、杖ですね。

そういえば、このフクロウってどういう意味ですか？入学案内にも『フクロウ便』って書いてありましたけど？」

「魔法界ではフクロウが手紙を配達する。

そういえば、お前はフクロウをまだ持っていないかったな」

「フクロウに手紙？ 珍しいな」

クイールはほうっと腕を組んだ。

「ハトに手紙を持たせるなら聞いたことがあるけど、フクロウに手紙を持たせるなんて。それじゃあ、非魔法族の方法で手紙を出すとそっちにはつかないのか？」

「いや、つくことにはつくが、時間がかかりすぎる。

……そうだな、入学祝いとして、我輩が買ってやろう」

スネイプ先生が、なんかありえないことを言い始めた。

スネイプ先生にとって、私はクイールの義理の娘に過ぎない。なのに、何故こんなによく接してくれるのだろうか？ 私の理解の範疇を超えていた。

「そんな……もったいないです」

私が恐縮すると、スネイプ先生は片眉を上げた。

「そこまで驚くことがあるか？ そもそも、お前の名付け親は我輩だぞ？」

「そんなこと……え？ 父さん、その話は本当でしょうか？」

クイールに視線を向けると、彼も驚いたように目を丸くした。

「あれ!? セレネには言ったことがなかったけ?」

「はい、少なくとも記憶にありません」

「そうだった、か。」

うん、実はね、セレネのお母さんは最初、僕に名付け親になってくれるように頼んだんだ。でも、あまり良い名前が思いつかなくてね……。だから、セレネのお母さんに許可を貰って、共通の知り合いだったセブルスに頼んだのさ」

……そんな秘話があったのか。

私はまじまじとスネイプ先生を見つめる。

まさかこの目の前にいる怪しげな魔法使いが名付け親だったなんて、かなり意外だ。

「まあ、そういうことだ。分かったなら行くぞ」

そのまま、スネイプ先生は近くの店に進んでいった。私とクイールは、慌てて後を追いかける。鳥の糞の臭いが鼻を刺した。ペットショップだ。店中はどことなく薄暗く、宝石のように輝く目があちらこちらでパチクリさせている。

「フクロウだらけ、ですね」

人生で初めて、こんなにフクロウを見た気がする。少し不気味だったけど、セレネらしく——私は背筋を伸ばしてフクロウを視た。

「そうですね」

私は、慎重にフクロウを見ていった。

プライバシーのぎっしり詰まった手紙を運ぶフクロウなのだ。ちゃんとしたフクロウを買わなければ、のちのち問題になる。

そうこうしているうちに、また客が入ってきたようだ。

「ん？ スネイプ教授!!」

客は入って来るなり、大きな声で叫んだ。

フクロウたちがびっくりしてバサバサッと羽を動かす。でも、大声を出さなくて驚いたかもしれない。だって、入ってきた客は黒い髭モジャの大男だったのだから。

「ハグリッド。そうか……そういうことか」

スネイプ先生は、ハグリッドの横をチラッと見てそう言う。私も彼の視線を辿ると

「もしかして、ハリー・ポッター、ですか？」

「えっ!? まさかセレネ!? セレネが何でここにいるの!？」

やせっぽっちの眼鏡男子、ハリー・ポッターだった。

どうやら、ハリーも魔法使いだったらしい。

「ポッター? ポッターか!」

クイールは、満面の笑みを浮かべてハリーに近づいていく。

そういえば、ハリーはクイールの教え子だったわけ。ハリーは、驚きのあまり今にも目が零れ落ちそうだ。

「ホワイト先生、久しぶりです。もしかして、先生も魔法使いだったんですか？」

「いや、僕は違うよ。セレネがその——ホグワーツ?へ入学することになってね。

それにしても、しっかり食べてるかい? 一回り痩せているじゃないか」

クイールとハリーが、話に花を咲かせている。

久し振りの教え子との再会なのだ。ハリーもクイールには懐いていたらしく、どことなく懐かしそうな顔をしていた。今は、そっとしておこう。

私は彼らからそっと離れて、スネイプ先生の近くに歩みを進めた。だが、近づい

てみて先生の雰囲気、先程までと少しだけ違うことに気がつく。

「スネイプ先生？」

気のせいかな。

ハリーのことを、睨んでいるような気がする。彼は懐かしさと憎悪と寂しさと愛おしさという形容しがたい感情が入り混じった視線をハリーに向けていた。

「スネイプ先生？」

私はもう一度、先生に呼びかけてみる。

ここでようやく、先生の瞳から奇妙な色が消えた。

「なにか、セレネ・ゴント？」

「……いえ、なにも」

疑問を口にしかけたが、やっぱりやめることにした。

別段、興味はない。今はフクロウの品定めに専念しよう。

私は気づかないふりをして、再びフクロウに目を向けた。

※ 3月3日.. 誤字訂正
※ 3月5日.. 一部改訂
※ 7月24日 大幅改定

4 話 9 と 4 分 の 3 番 線 の 旅

「本当に大丈夫かい？ イジメとか有ったらすぐに連絡をよこすんだぞ？

それから、男と 2 人つきりにならないこと。それから——」

「大丈夫ですよ、父さん」

心配そうに顔を歪めるクイールを、私は手で制した。

記憶にある養父は、ここまで心配性だっただろうか？ と浮かび上がる疑問を一蹴し、私は静かに答えた。

「心配してくれてありがとうございます。私は大丈夫です。もう行かないと、今度は父さんの方が間にあいませんよ？」

今日はこれからロンドンで会議があるらしく、クイールはそれに出席しないといけないらしい。キングス・クロス駅までは送ってくれたが、今から車をとばさないと会議に間に合わないはずだ。だがしかし、クイールは一向に動こうとせず、心配そうな顔を崩さない。

まったく、そんなに私が頼りなく思えるのだろうか。

「分かってるか？ いいか、男は狼なんだぞ？

特に発情期の男というのは、肥えた兎を見るとすぐさまとびかかるような連中ばかりで——」

「大丈夫ですって!! そんな奴らは撃退できますから」

大げさではなく、撃退できる。

運動神経はそこそこにある方だと自負しているし、今の私には『杖』がある。最悪——クイールは知らないが、退院してから、こっそり購入したナイフを懷に忍ばせてある。このナイフと『眼』を使えば、どんな怪物が来ても倒せる自信があった。クイールは、しばらくブツブツと何か言っていたが、最後に大きなため息をついた。

「はあ、そうだな。そこらの男よりセレネは強いからな。

でも、困ったことがあったらすぐにフクロウを使うんだぞ？ それからセブルスに相談するように!!」

そう言うと、クイールは傍に停めた車へ向かった。何度も何度も振り返り、不安げにしていたクイールだったが、やっと車に乗り込み大通りへ消えていく。

「……さて」

私は彼が去ったのを見届けてから、少し重たいカートを押した。

「でも、問題はここからなんだよな」

優等生の皮を捨てた私は、大きくため息をついた。

下種な男共は、簡単に撃退できるが、この問題は撃退できそうにない。

誰かに聞くのが恥ずかしく、クイールにも相談できないまま終わってしまった切符に目を向ける。

「どこだよ、9 と 4 分 の 3 番 線 っ て」

改めて案内板を見上げるが、そんな場所があるわけない。

切符も入学案内も隅から隅まで読んでみたが、どこにも行き方なんて書いてなかった。

魔法使いの常識なのかもしれないが、私みたいなマグル出身者相手に不親切すぎるだろ？ こういうことは、しっかりと書いておいてほしい。

とりあえず、9番線と10番線のあたりまでカートを押してみる。悲しきかな。やはり『4分の3番線』なんて、何処にも見当たらない。

「はあ……あんまりやりたくないけど」

こうなったら、最終手段に出るしかない。

私はそっと、眼鏡を外してみる。

途端に浮かび上がってくる『線』『線』『線』。薄らと吐き気が込み上げてきた。だが、この程度の『線』なら問題ない。

ダンブルドア教授は、このうじゃうじゃと絡み合う『線』を、『死の線』だと教えてくれた。

それは、私にも何となく理解できる。この『線』斬れば——いや、なぞるだけで、きっと『線』は壊れて、その場所は死ぬ。それは、人にも無機物でも変わらない。

もし……9と4分の3番線が、魔法によって隠された場所なのだとしたら、その場所にも『線』が絡みついているはずだ。私は空間に目を凝らし、9番線と10番線の間をゆっくりと歩いた。

「あれかな？」

1 柱だけ。

9 番線と10番線の間の柱が……そう、ちょうど3本目の柱だけ、他の柱と比較して『線』がやたら多い。なるほど、だから9と4分の3番線なのか。納得しながら、眼鏡をかけなおす。私は3本目の柱に近づき、そっと手をかざしてみた。

「っ!？」

柱に手がめり込む。

だが、痛みはない。いや、魔法で隠された入口だとは予想はついていたが、これはこれで驚く。

私はカートを反転させて、ゆっくりと柱へ向けて進む。

柱の向こうに広がっていたのは、ロープの人影で溢れる「もう1つの駅」だった。紅色の蒸気機関車が、乗客でごったがえすプラットホームに停車している。

ホームの上には『ホグワーツ特急11時発』と書いてあった。———なんとか、無事に辿り着けたようだ。

「さてと——空いている席を探すか」

まだまだ時間はある。早く空いてる席を見つけて、のんびり本でも読んでいよう。そんなことを考えつつ、私はカートを押しながら人の溢れるホームを歩き始めた。「ここでもいいかな」

席は案外、簡単に見つけられた。まだ、時間が早いからだろう。

コンピュータメントに押しこんだランクから、適当な本を取り出した。

ホグワーツに来るまでは、予習と復習漬けの日々を送っていたので、こういうのんびりとした時間は久しぶりだ。11歳までのマグルの勉強は、なんとか終わった。しかし、私の勉強は終わらない。このまま魔法界に身を埋めるなら、ホグワーツの勉強だけで問題ないだろう。だが、万が一——魔法界が肌に合わなかったら、マグルの世界に戻らなければならない。

イギリスにおける義務教育の年齢は16歳。

数学や語学、理科や社会。それらの科目は、当然のことながらホグワーツにない。マグルの世界で生きること視野に入れるのであれば、もっと勉強しなければならぬのだ。

「優等生のセレネ・ゴントならば、両方勉強する」

マグルの教科書や参考書は、すでにトランクに入っている。

ペットのフクロウ……バーナードに頼み、クイールへ送付すれば採点してもらえ
るだろうから、何も問題ない。ページを開こうとしたが、少し思いとどまった。出
発の時くらい、勉強しなくてもいいだろう。記憶の中の『セレネ』の価値基準に照
らし合わせ、そう判断した『私』は、別の本をめくった。

そうしているうちに、時間が過ぎていたのだろう。突然、汽笛が鳴る音がホーム
に響き渡った。汽車が滑り出す。私は、本から顔を上げて外を眺めた。

母親や父親が、各々の子供に手を振る。赤毛の女の子が半べその泣き笑いで、汽
車を追いかけてくる。だが、もちろん追いつけるわけもなく、途中で立ち止って手
を振っていた。

「出発だ」

心なしか、うずうずしてきた。

汽車がカーブを曲がると駅が見えなくなる。家々が窓の外を飛ぶように過ぎてい
くのを、ぼんやりと眺めていた。肩肘をついて、ぼんやりロンドンの町並みに思い
をはせる。

これから1年は、今までいた『日常』には戻れない。

この先には、新しい『日常』が待っている。『魔法』と名のつく『非日常』の世界が――。

「私……本当に、魔法使いなんだ」

ポケットから、新品の杖を取り出してみた。

オリバンダーと名乗る老人の所で購入した一品。

沙羅の木にセストラルの毛、29 cmの杖は、私を確かに選んだ。その時のことを思い返すたびに、オリバンダー老人が私の耳元で囁いた不審な言葉が、脳裏によみがえってくる。

『こちらの杖は、そちらの方の額に傷を残した魔法使いのモノになる予定だった杖なのです。』

しかし、この『沙羅の木』から作られたということが気に入らなかったらしく、あの人はその杖ではなく、イチイの杖を選ばれました』

『そちらの方の額』というのは、ハリーの額にはしる稲妻型の傷のこと。

あの時は詳しく知らなかったけど、どうやら『ヴォルデモート』とか名乗るサイコパスがハリーを襲った時に受けた傷らしい。つまり、この杖はヴォルデモートの手に渡る予定だった、ということになる。

「まあ、杖なんて誰が使っても同じのように思えるけど」

だけど……なんとなく嫌な感じ。

「私」が「サイコパス」と同じだと告げられたみたいで、嫌な気持ちになる。

確かに私は、曖昧な存在だ。私が誰なのか、いまだに分からない。ただ、『セレネ・ゴースト』という過去の記憶に従って動いているだけだ。それでも、大量殺人鬼と同じだと言われるのは胸糞悪い。思い出すだけで、腹が立ってきた。

「ここ空いてる？ 他の所はどこもいっぱいなの」

ガラリッとコンパートメントが開いたので、私の思考は一旦中断する。

入ってきたのは、栗色の髪をした女の子だった。私は瞬時に『セレネ』の顔を作り上げる。

「別に構いませんよ」

「ありがとう。助かったわ」

少女はニッコリ笑って、私の前の座席に座る。

窓の外に流れていたロンドンの町並みは消え、代わりに牧草地帯が広がっていた。

「私は、ハーマイオニー・グレンジャー。あなたの名前は？」

「セレネ・ゴーストと言います。こっちはバーナード」

「フクロウを飼ってるのね、もしかして魔法界出身なの？」

「いいえ、私はマグル出身です。親は魔法使いらしいですが」

そう言うと、ハーマイオニー・グレンジャーの眼が益々輝いた。

がしりつと両手を捕まれ、眼を覗き込まれる。

「あなたもマグルで育ったのね！私も同じなの！仲良くしましょ！」

「あっ……はい」

彼女に押し切られるような形で、私は頷いた。

それから彼女は、物凄い勢いでしゃべり始めた。

自分がマグル生まれで、両親は魔法使いではないということ。手紙が届いたとき

は物凄く驚いたということ。でも、それと同時にとても嬉しかったということ——などなど。

私は相槌を打ちながら、彼女の話に耳を傾けていた。話を聞いて分かったことだが、彼女もセレネ同様『優等生』らしい。むしろ、中身がいい加減な『私』より『優等生』なのではないかと思う。小匙分ほどの親近感が芽生えた。

「ふう——そろそろ着替える？」

ハーマイオニー・グレンジャーの話に区切りがついたのは、ちょうど昼ごろだった。

私達はいそいそと着替えて、ネクタイを整えた所でコンパートメントの扉が叩かれる。いぶかしみながら開けてみると、そこに立っていたのは、人のよさそうなオバサン魔女だった。

「嬢ちゃんたち、なにかいかが？」

「そうですね……」

私は、財布から銅貨を何枚か取り出しながらカートを覗き込んでみる。

一応、昼飯は持ってきてあるが、ここで売っているのは魔法界のモノだ。

みたこともない珍しいモノが、カートの中にあるのかもしれない。カートを覗き込むと、色とりどりの菓子が並んでいる。どれもこれも、見たことのないものばかりだ。私はハーマイオニーと一緒に勧めを聞きながら、いくつかの菓子を買うことにした。

「やっぱり、魔法界の絵ね！　すごいわ、イラストが動いてる」

ハーマイオニーは、蛙チョコレートについてきた『マーリン』のカードをしげしげと眺める。花の魔法使いはカードの向こうで優しく微笑んでいた。だが、その微笑みは、どことなく胡散臭い花の魔法使いである。

「チョコにも魔法がかかってたし。」

セレネは不思議に思わないの？　私と同じで、手紙が来るまで別の学校に進学する予定だったのでしょ？」

ハーマイオニーは不思議そうに、こちらに視線を向けてきた。

「そうですね」

私は、持ってきたサンドイッチの最後のひとかけらを口に押し込んだところだった。

しばらくモグモグと噛んで、飲み込んでから話し始める。

「魔法界ですし、絵が動くくらいありえない話ではないと思いますよ。」

それよりも、車内販売で菓子以外のモノが売ってなかったのが気になりました」
「菓子以外のものが売ってない？」

「はい。昼時です。で車内販売で軽食が売っていても不思議ではありません。しかし、魔法の菓子しかありませんでした」

かぼちゃジュースと言う名の飲み物があつたが、胸焼けするくらい甘つたるい。魔法使いは、虫歯率が高いのではないかと邪推してしまう。いや、虫歯を魔法で治すから問題ない、のか？

「セレネって変なところに気がつくのね」

「そこまで変なところ、でしょうか？」

くすりと笑うハーマイオニーにムツとして、言い返そうと思ったが——大人げないので怒りの矛を収める。——そんな時だった。

ガラリッと予告なしに、コンパートメントの戸が開かれる。丸顔の少年が立っていた。

「あの……ヒキガエル見なかった？僕から逃げてばかりなんだ」

「ヒキガエル？みなかったけど、セレネは？」

「私も見ていません。もしかしたら、家に忘れてしまったのでは？」

「そんなことないよ！」

丸顔の少年は、肩をしゃくりあげながら反論してきた。

「汽車に乗る前もいなくなっちゃって……でも、それは婆ちゃんが見つけてくれたからよかったんだけど、乗ってからしばらくしたらいなくなっちゃったんだ」

「なら、探しましょ！」

「……そうですね、手伝いましょう」

ハーマイオニーが、そして、やや遅れて私が立ち上がる。すると、丸顔の少年がキョトンとした顔をした。

「ヒキガエルでいいのよね？」

「そうだけど、なんで手伝ってくれるの？」

おいおい。今まで、誰も手伝う連中がいなかったのか。

まあ、仕方ないと言ったら仕方ないのかもしれないが。私自身、『優等生』であ

る『セレネ』を演じていなかったら、面倒だと思って手伝わない。自分に一利もないことに労力を割いても、意味がないと思う。

——けれど、私は『セレネ』なのだから、手伝わなければならない。

もったも、そんな本当の理由なんて言えず、私は黙り込んでしまった。

何も言わない私の代わりに、ハーマイオニーが口を開いた。

「困ってる人がいたら助けるのが当たり前でしょ？」

私は、ハーマイオニー・グレンジャー。この子はセレネ・ゴースト。アナタの名前は？」

「僕はネビル。ネビル・ロングボトムっていうんだ。

ありがとう、ハーマイオニーとセレネ！」

ネビル・ロングボトムは顔を真っ赤にして礼を口にした。いくらホグワーツに到着するまで時間があるとはいえ、もう昼を過ぎてしまっている。私達は、三手にわかれて探すことにした。

「先に制服に着替えておいてよかった」

つついっい呟きながら、窓の外に目を向ける。

窓から差し込んでくる光は、車両を蜜色に染める時間帯だった。

あと、少してホグワーツへとたどり着くのだろう。それなのに、トレバーという名の蛙は全く見つからない。もう1時間は探している。

「やっぱり、ロングボトムが忘れてきたんじゃないか？」

だけど、手伝うと私は言ってしまった。

探さなければならぬ。内心ため息をつきながら、次に調べようとしたコンパートメントをノックしようとする。

そんな時だ。中から悲鳴が聞こえてきたのだ。咄嗟に、私は蹴破るように扉を開け放った。

「何かありましたか!?」——ってハリーとドラコ・マルフォイ?」

コンパートメントのありさまに、私は思わず『素』に戻ってしまう。

菓子とその包み紙が床に散らばるコンパートメント。そこにいた5人の少年のうち、2人は見覚えのある少年だった。しかも、今にも取っ組み合いを始めそうな情けない姿をさらしている。

「「セレネ?」」

「……なにがあったのですか?」

急激に熱が冷めていった。

体格のいい少年は、血がにじんでる指をかばっていた。

口元に赤い何かを滴らせているネズミ。そのネズミを、赤毛の少年が抱いている。恐らく、赤毛の少年が持っているネズミが、あの体格のいい少年の指を噛んだ

のだろう。悲鳴の原因は、たぶんそれだ。

「なに。僕たちの所のお菓子がなくなっただんで、貰おうとしたらゴイルの指にウィーブリーのネズミが噛みついたんだ」

マルフォイが、落ち着き払った感じで答えた。すると、ハリーがムツとした表情を浮かべ言い返す。

「僕たちのお菓子を、無理矢理取ろうとしたんだ」

どうやら、この2人は凄く仲が悪いらしい。火花が飛び散っていた。首を突っ込むんじゃないかった。『後悔』の二文字が頭を横切り、心の中でため息をつく。

もう「あ、そう。喧嘩はするなよ」とだけ言って、帰りたい。だけど、私は『セレネ』なのだから、この場を優等生らしく円満に収めなければならない。

どうやったら、円満に済ませることが出来るだろうか。少し悩んだ結果、1つしか解決案が思い浮かばなかった。

「私は現場を見ていないので、詳しいことは分かりません。

ただ、そろそろ汽車がつく時間帯です。菓子ならホグワーツでも買えると思いますので、今は我慢したらいかがでしょうか？」

「なんだって、セレネ」

マルフォイの眉間に筋が立つ。

その奥にいる取り巻き達の拳が、わなわなと震えていた。

だけど、こうするしかないのだ。状況的に判断して、どちらが良いのか悪いのか、決めるのは不可能なのだから。もつとも、これだと一方的にマルフォイが悪かったみたいになってしまうので、ハリー達側にも一言――

「ハリー、貴方たちも気を付けた方がイイですよ？」

沢山お菓子を持っていたのだから、1つや2つ分けてあげることが出来る『心のゆとり』を持つべきです。それから——赤毛の貴方、ネズミの管理はしっかり行うこと。傷口から細菌が入る恐れがあります」

勝ち誇っていたハリーと赤毛の顔が歪んだ。

誰もが何か言いたそうだったが、これ以上巻き込まれるのは御免だ。私はさっさとコンパートメントから離れた。しばらくすると、また揉めあう音と本日2回目の悲鳴が聞こえてきたが、私は無視する。もう巻き込まれるのは、嫌だった。

「今、悲鳴聞こえなかった？」

ハーマイオニー・グレンジャーが前から走ってきた。

「聞こえました。でも、たいしたことじゃないから放って置いていいと思います」

私は正直に伝える。

ただの菓子を取り合いの延長戦だろう、たぶん。私の答えを聞き、少し悩んだハーマイオニーだったが

「でも、心配だから見てくるわ」

そう口にする、ハリー達の居るコンパートメントの方に走っていった。

私はハーマイオニーの背中を見送ると、窓の外を眺める。

汽車がどんどん速度を落としている。窓の外の山や森が薄紫色の空の下に沈んでいた。

ホグワーツはもうすぐだ。

※
3
月
3
日
..
誤
字
訂
正

5話 組み分けの儀式

一部、追記しました（2019年5月16日）

「まもなく『組み分けの儀式』が始まります。ここで待っていなさい」

マクゴナガル副校長と名乗った魔女は、それだけ言うて去って行った。

その途端、静まり返っていた広間に、ざわめきが波のように広がり始める。

「組み分け、か」

ぼつり、と呟く。

マクゴナガル副校長は、詳しい内容を何も話してくれなかった。

魔法使いらしく、魔方陣の上に乗って呪文を唱えるのか？ それとも、怪しげ

な水晶玉で占ったりするのだろうか？

いずれにしろ、この人数だと時間がかかりすぎると思うから、簡易的な儀式だと

思うが……

正直、不安はあまりなかった。どこまでも広がる湖と星空の向こうに、このホグワーツを見た瞬間から——不安なんて吹き飛んでしまっていた。むしろ、この素晴らしい城で魔法を学ぶことに對する期待ばかりが膨らんでいく。

それに、たかが寮を決める組み分けで死ぬような目にはあわないだろうし、高い金を払ってまでして学用品までそろえた子供を『儀式不適合だから退学！ マグルの中等教育学校に行きなさい』って真似はさすがにしない……と思う。

ありえないと信じよう。

「おや、1年生だ」

そんなことを考えていると、壁の中から人が現れた。

半透明で、どことなく古めかしい——ダイアゴン横丁で見かけた魔法使いたちよりも一段と古めかしい衣装を身に纏っている。

彼らは、自らを『ゴースト』、つまり、死んだ人間だと名乗り、ピーブズがどうか、思い思いのことを言って、再び壁の中へ去って行った。いや、壁を通り抜けたというべきか……

それにしても、死んでゴーストになるなんて、不思議な現象だ。

しかもゴーストというのに、眼鏡をずらして『眼』で睨みつければ、最初は視えなかったが、注視してみると、きりきりと痛む頭痛と共に、彼らにも線が薄らとついていることが分かった。幽霊になっても、『死』が待っているなんて、嫌な感じがする。

いくら『魔法界』でも、『不死』という概念はないのかもしれない。もしくは、あったとしても『禁忌』か、あるいは……。

「セレネ、どうしたの？眼鏡の調子が悪いの？」

ロングボトムが、話しかけてきた。

先程見つけたヒキガエルをしっかりと抱きしめ、不安そうな顔をしている。

私は外しかけた眼鏡を元に戻し、ロングボトムに向き合った。

「いいえ、ちょっと曇っていたので拭いていただけです。——あつ、副校長先生が戻ってきましたよ？」

丁度良い具合に、マクゴナガル先生が戻ってきた。

「みなさん、始めります。着いてきなさい」

「うう、とうとう組み分けが始まるんだ」

ロングボトムは、蛇に睨まれた蛙のように震えだす。お腹が痛み始めたのか、片手で腹を撫でていた。

どうやら、無事に話題を逸らすことが出来たらしい。内心、ホツとしながら歩みを進める。

他の生徒たちの足取りは、どことなく重い。無理もない、これからやる儀式の内容を知らされていないのだから……。

私も、彼らの列に混じって大広間に入った。

「うわあ……」

広間に入った瞬間、思わず、感嘆の声を漏らしてしまった。

大広間の中には、まさに『魔法』に満ち溢れた『黄金』と呼ぶにふさわしい空間が広がっていた。つい、浮き足立ちそうになる。

何千というろうそくが空中に浮かび、4つの長いテーブルを照らしている。テーブルには、おそらく四つの寮ごとに分かれて上級生が客席し、ろうそくの明かりでキラキラ輝く金色の大皿とゴブレットが置いてあった。

まだ、何も置いていないということは、これから食事が配られるのだろうか。しかもこの量となったらかなりの時間が必要だ。きっと、これにも魔法を使うに違いない。

広間の奥の上座には、もう一つ長いテーブルがあって、先生方が座っていた。

スネイプ先生や、ハグリッドもそこにいた。マクゴナガル先生は、上座のテーブルの所まで私達を引率する。私達を興味深そうに眺めてくる上級生の視線が痛い。「空じゃなくて天井よ、魔法で夜空のように見えるだけ。『ホグワーツの歴史』という本に書いてあったわ」

ハーマイオニーが得意げに話し始めた。

私もつられて上を見上げてみる。すると、そこには夜空が描かれていた。

プラネタリウムに負けず劣らずの夜空だと、感心してしまう。いや、プラネタリウムとは違いこちらの夜空には雲もある。

魔法って凄い！

「やはり魔法で作られた天井なのですな。超高性能プラネタリウムかと思いました」
「あら、知らないの？ ホグワーツの中だとマグルの機械製品は狂うのよ？」

「——そ、そうですよね」

……しまった。

そうとは知らずに、ステレオを持ち込んでしまった。

イヤホンがあれば問題ないだろう、と思ってトランクに詰めた私のバカ。少し落ち込んでしまう。狂ったまま動かなくなる前に、クイールの所へ送り返そう。

愛想笑いでその場をごまかしながら、なんとか別の話題を探す。

「それにしても、とても綺麗な場所ですね。本物と見間違えてしまいます」

「そうね——あれ？ねえ、セレネ。あの帽子は何かしら？」

ハーマイオニーは、不安そうに前を指した。

指先を辿れば、この歓迎色が漂う晩餐会には相応しくない薄汚れた帽子が鎮座していた。

「さあ……分かりません」

素直に答えた時だった。

なんと帽子が動き出して詩を歌い始めたのだ。

AIか？あの帽子は人工知能が内蔵されているのか？私が目を疑っている間

にも、帽子の唄は進んでいく。

どういう仕組みか分からないが、この帽子が「組み分け」をするらしい。詩の内容は四つの寮の特色を謳ったものだった。

・グリフィンドール

勇敢な騎士道精神を持った人が集まる寮

・ハッフルパフ

心優しく忍耐強い人間としてできた人が集まる寮

・レイブンクロー

勉強に対する意欲が一際強く、学力の高い人が集まる寮

・スリザリン

どんな手段を使っても目的にたどり着こうとする人が集まる寮

簡単にまとめると、こんな感じだった。

私はどこの寮に入るのだろう？

私は、まだ記憶が確かに持てなくて、どこか曖昧な存在だけど、それでも、この

数週間で、多少なりとも自分の傾向が分かってきていた。

まず、グリフィンドールは……たぶん違う。

私に騎士道が似合うとは思わない。だいたい騎士道なんて堅苦しいとさえ、思っ
てしまう。騎士様は人助けとか利害関係なしに率先して行うのだろうが、自分はメ
リットとデメリットについて考えてから動いてしまう。正々堂々な行動も性に合わ
ない。

だから、たぶん違う。

ハーマイオニーはその寮に入りたがっているみたいだが、どうなのだろう？ 知的
なハーマイオニーはレイブンクローが似合う気がする。ちなみにロングボトムは、
ハッフルパフだろうか？ 先程も私に氣遣ってくれたし、なんだか全体的に優しい
感じがする。

さて、グリフィンドールは消去するとしたら、残る寮は3寮。

だが、ハッフルパフもない。私は、自分が優しいとは思わない。もし、優しいの
であれば、これまでのセレネを考えてから行動する以前に、ロングボトムを助ける
ために動いただろう。

そうになると、残るはレイブンクローカスリザリン。優等生路線まっしぐらの『セレネ』なら、レイブンクローが一番向いているのかもしれない。

「名前を呼ばれたら順に前に出てきてください。

ハンナ・アボット！」

金髪のおさげの少女が前に転がるようにして出ていく。

ハンナと呼ばれたその少女に、マクゴナガル先生が古びた帽子『組み分け帽子』をかぶせると彼女の目が隠れた。

そして一瞬の沈黙。

「ハッフルパフ！」

右側のテーブルから歓声と拍手が上がり、ハンナはハッフルパフのテーブルに着いた。

「ねえ、改めて聞くけど、セレネはどこの寮がいいの？」

後ろに並んでいるハーマイオニーが、こっそり尋ねてきた。

「そうですね、平穩に暮らせるならどこでもいいです。

さきほどの帽子の歌を聞く限りですと、消去法で『レイブンクロー』か『スリザリン』でしょうか？」

「『スリザリン』!？」

信じられない!! と、ハーマイオニーは驚愕を露わにした。その隣にいるロングボトムも驚いて目を大きく開いている。何か不味いことでも言ったのだろうか？
とりあえず、理由を説明することにする。

「私は、騎士道精神は持ち合わせていませんし、ハッフルパフが求めるような忠実
は持ち合わせていませんから。」

となると、レイブンクローかスリザリンかと思ひまして」

「セレネはスリザリンは止めておいた方がいいわ。闇の魔法使いを多く輩出しているって言うし、評判を聞く限りだと『最悪』よ!？」

かなり真剣に訴えかけてくる。

そんなに評判悪いのか、スリザリン。チラッとスリザリンのテーブルの方を見る。
まあ、確かにガラの悪そうな奴もいるが、ガラの悪そうな奴ならグリフィンドールやレイブンクローにだっている。

「そうでしたか……たとえばこの寮に組分けされても、よろしくお願いします」

「そうね。出来れば同じ寮がいいけれど」

ハーマイオニーが囁いたその時だった。

「セレネ・ゴースト」

私の名前が呼ばれた。

いつの間にか私の番が来たらしい。私は前に進み出た。

全校生徒が私の方を見てる。

先生方も私の方を見ている。

突き刺さる視線が痛い。

少しだけ緊張してきた。私が、こんなに注目されたのは初めてだ。

けれど、ここは記憶にあったセレネらしく堂々と歩く。周囲の視線なんて気にしてない、と言わんばかりに。

マクゴナガル先生が私の頭の上に、すっぽりと帽子をかぶせる。私の視界を闇が覆った。

『む!?まさかゴースト家の子かね?』

頭の中で低い声が聞こえる。恐らく帽子の声だろう。こうして帽子と対話をしながら、寮を決めるのかもしれない。

「ゴントの家名を御存じなのですか？」

『もちろん知っている。まさか生き残りがいたとはな』

「生き残り？つまり、私以外は全て死んでいるということですか？」

『いや、1人だけ生きている可能性はある奴はいるが……』

おしゃべりはこのくらいにしておこう。ゴントの家系ということは君の寮は決まっておる。

その寮に入れば偉大なる魔法使いへの道が開けるだろう。

君の入るべき寮は――

スリザリン!!』

帽子が、最後の言葉を広間に向けて叫んだのが聞こえる。

途端にスリザリンから、歓声が湧きあがった。帽子を取ると、私はスリザリンの席へと向かう。

そうか、私はレイブンクローではなく、スリザリンだったか。予想は外れたが、

それにしても『ゴーストの家系』で選ばれるなんて……これまで家系なんて意識したこともなかったけど、有名な家系なのか？

そんなことを考えながら、ふと途中でチラリとハーマイオニーやロングボトムの方を見た。2人とも『信じられない』という顔をしている。少し近くに佇んでいたハリーも、同じような顔をしている。マルフォイも意外そうな顔をしていた。

少し、心外である。

そこまで嫌われているのか、スリザリンという寮は。

でも、私を迎え入れてくれた上級生は普通に私を歓迎してくれた。私は、先にスリザリンに迎え入れられていた体格のいい女子生徒の横に座った。

「あんたさ、てっきり『グリフィンドール』かと思った」

「どうしてですか？」

初対面で、そんなことを言われるなんて。

私が『わけわからない』という顔をしていると、その女子生徒は言葉を付け足した。

「アタシはミリセント・ブルストロード。聖28一族のブルストロード家出身よ。あんたは、列車の中でヒキガエル探してた子でしょ？」

その瞬間、記憶が蘇る。

そうだ、確か……ロングボトムのカエル探しの時に尋ねたコンパートメントで、『いないわよ、さっさと出て行って』

と、追い出された。あまりいい思い出ではないが、ある意味、十分に予想出来る反応だ。他人のカエルの行方なんて、普通は興味がないわけだし。

「そういえば、その時に尋ねたコンパートメントで会いましたね」

「お人好しと言ったら『グリフィンドール』か『ハッフルパフ』って相場決まってるからね。

で、あんたは馬鹿そうに見えなかったから『グリフィンドール』って思ったのよ。まさか、スリザリンに来るなんてね」

少し『嫌悪』の色が強い視線が突き刺さる。

なんかむかつく。だが、そんな色を微塵も出さずに、私は平然を装った。これで

マグル生まれだと知られては、ますます馬鹿にされる。ここは、魔法使いの家系だと示した方が良いでしょう。

「帽子が『ゴースト家の人はみんなスリザリン』って言っていましたが——ゴーストって家系を知っていますか？」

「『ゴースト』？ 聞いたことがないわよ。どうせちっぽけで細々と続いてきた家系でしょ？」

「あんだ、自分の家系のことも知らないの？」

「両親は物心つく前に死んで、以後はマグルの家で過ごしていましたので」「それは災難だったわね。まあ、これから7年間、よろしくね」

「ミリセント・ブルストロードが手を差し出してきた。」

口調に反して、意外と礼儀はあるみたいだ。聖なんたら一族といていたが、魔法界の名家のお嬢様に違いない。私はその手を握り返した。

「やあ、ゴースト。君もスリザリンだったんだね」

ブルストロードと少し話をしていると、隣に誰かが腰を掛けてきた。

ドラコ・マルフォイだ。

「どうやら、彼もスリザリンだったらしい。」

「あなたもスリザリンだったんですね」

「……僕の組み分け、見てなかったのか？」

「ごめんなさい、見ていませんでした。7年間、よろしくお願いします」

そう言って手を差し出せば、ふんっと鼻を鳴らした。

「どうやら、先程のことをまだ根に持っているらしい。腕を組んだまま、マルフォイは口を開いた。」

「とりあえず7年間、僕に迷惑をかけるなよ。それにしても驚いたな。君はレイブンクローか、グリフィンドールかと思ったのに」

「何故、そろいもそろってグリフィンドールかレイブンクローと言われるのだろう。記憶にあったセレネらしく演じているので、レイブンクローというのは分かる。だが、そんなに私はグリフィンドールらしく見られているのだろうか。」

「ほらごらん、有名人の組み分けだ」

視線を向けてみると、ハリーが壇上に上がるところだった。

ハリーが組み分けつてことは、ハーマイオニーとロングボトムは終わってるに違

いない。

見回してみると、2人ともグリフィンドールの席に座っていた。

心の中に冷たいものが、じんわりと広がった。

まあいい。今は、ハリーの番だ。

広間に奇妙な沈黙が広がる。そして、あちらこちらから囁き声が聞こえてきた。そういえば、ハリー・ポッターは有名人だったことを思い出す。

「どうせグリフィンドールよ」

ミリセントが、吐き捨てるように言った。

私はああ、と納得する。

「たしか、ハリーは魔法界の英雄でしたっけ？」

なるほど、騎士道精神を謳うグリフィンドールは、英雄と呼ばれる人間を輩出している寮なのかもしれない。事実、この国では『騎士道』英雄』というイメージがある。例えば、アーサー王伝説がその筆頭だ。アーサー王もガウェイン卿やトリスタン卿など騎士道を遵守する騎士たちが英雄と謳われてきた。

しかし。

「赤子の時に、ヴォルデモートとかいうサイコパスを倒したから英雄だなんて。本当かどうか、本人に自覚がないのに英雄扱いなんて……少し迷惑でしょうね」

私の知る限り、ハリーは自分のことを英雄だと認識していなかった。

むしろ、虐待されていた。クイールから聞いたが、彼の両親は幼い頃に亡くなり、いまは叔父叔母のところ暮らししているらしい。担任時代は『児童相談所に通報するべきかどうか……』と悩んでいたそうだ。

「だいたい、ヴォルデモートって……どうしましたか？」

そう呟いてから、周囲の様子がおかしいことに気がついた。

私の周りだけ、不自然に静まっている。マルフォイもブルストロードもハリーの方を見ていたはずなのに、私の方を見て唖然としていた。

「どうしましたか？」

「ご、ゴント？　今、『あの人』の名前を……」

その先の言葉は、グリフィンドールから湧き上がった歓声で聞こえなかった。

よく聞き取れないが、どうやら私は言うてはならないことを言ってしまったらしい。もう少し、調べてから話すようにしよう。そうしなければ、『優等生』の皮が

はがれてしまう。

私は、とりあえず

「ごめんなさい」

とだけ、謝っておいた。

その後、宴が始まった。

宴の前にダンブルドア校長が立ち上がり、なにか言うのかな？と身構えると、校長はにっこりと微笑んだ。

「新人生の諸君、入学おめでとう。在校生の諸君、久しぶりじゃ。歓迎会を始める前に、わしから言うことはこれだけじゃ。

それ、わっしょい、こらしょい、どっこらしょい。以上じゃ。それでは、宴を始めるでしょうかのう」

私がぼかんとしていると、ダンブルドアが手を挙げる。

すると、金色の皿の上に、大量の料理が現れたのだ。私は少し、眼をぱちくりさせた。この怪奇現象について、上級生は何も語らず、賑やかに食事を始める。先輩

方が食べているので、これはホログラム的な何かではなく、本当の料理なのだろう。私は手近なローストビーフを皿に取ると、おそろおそろ一口、食べてみる。

「……おいしい」

料理は頬が落ちるくらい美味しかった。

ちよつと味付けが濃いような気もしたが、それを打ち消せるほど美味しい。もしかしたら、意識が回復してから、いや、今まで食べた中で、最もおいしい料理かもしれない。

「ふん、まあまあな料理だな。僕の屋敷の料理の方が凄いいけど」

マルフォイが高説を述べている。

彼はぺらぺらと自分の家の料理がどれほど美味しいかを語っていた。彼の隣に座った少し犬に似た顔立ちの女子生徒が、うっとりとして聞き入っている。

彼の話聞き、相槌を打っている者がいるなら、もう自分は関係ないだろう。

私はそう判断すると、素晴らしき料理を味わうことに専念するのだった。ローストビーフにシェパードパイ、ヨークシャープディング、そして、見たことのない肉や野菜料理の数々……なお、ニシンの頭が飛び出てるパイやウナギのゼリー寄せに

は、手を付けなかった。

最後のデザートも食べ終わり、ナプキンで口を拭いていると、再びダンブルドア校長が立ち上がった。

「皆大いに食べ、大いに語り合ったことだろう。寮へ行く前に一言二言、伝えなければならぬことがある。

まず、校庭にある禁じられた森への立ち入りは禁止じゃ。1年生と一部の上級生に注意しておくぞ」

一瞬、ダンブルドアの青い瞳がグリフィンドールの方へと向けられた。

おそらく、そこに「一部の上級生」がいるのだろう。

「続いて、管理人のフィルチさんからじゃ。授業の合間に廊下で魔法を使うことは禁じられておる。同時に、噛みつきフリスビー、叫びヨーヨーなど使用を禁じられている魔法道具一覧の長いリストに記されておる。もし、気になる生徒がいれば、見に行くと良い」

ダンブルドア校長はそう言いながらも「きっと、誰も見に行かない」と思っているような口ぶりだった。フィルチと呼ばれた管理人は、少し怒ったように校長を見ている。

「最後に一つだけ言っておこう。

今年度に限り、4階の右側の廊下は立ち入りが禁じられている。そこに近づいてはならない。恐ろしい死が待っているからのう」

恐ろしい死。

最後の言葉だけ、ダンブルドアの口調に真剣な色が混ざった。

周囲の上級生も息を飲む空気が伝わってくる。廊下で魔法を使うな、とか噛みつきフリスビーを使うな、なんてことはダンブルドアにはどうでもよくて、最後の4階の廊下の話だけは本気のようなのだ。

よほどのことがない限り、近づかないようにしよう。

死ぬのは怖い。

そう思ってしまうくらい、死のイメージは強烈である。

わざわざ4階に近づいて、『』の世界に飛び込むような真似はしたくなかった。

6 話 闇の魔術と魔法葉

7 月 27 日…大幅改定

なにごとも、はじめが肝心である。

肝心……なのだが……

「……迷った」

先ほどから同じ廊下をぐるぐるぐる回っている気がする。

右に行っても左に行っても、階段はおろか脇道すら見当たらない。そもそも、どこからこの廊下に入ってくる事ができたのだろうか。

もうくたびれて、そのまま廊下に座り込みたくなってしまった。

入学してから 1 週間、ほとんど勉強に明け暮れていた。

授業で指名されても、もちろん予習した範囲のことは答えられる。いずれ、今ま

での予習も追いつかなくなるので、授業の復習をテキパキと終わらせて、次の予習を取り組む。その時間を縫って、マグルの勉強に取り組む。

こんな毎日を送っていたせいだろう。

「友達もできないし、こうして1人で移動し迷子になってしまふなんて」

無様だ、私。

鞆に入りきらなかった本をぎゅっと抱え込む。

しかし、過去の記憶で見た『セレネ・ゴースト』でいるためには、こうして勉強しないといけない。

『私』が『セレネ』である以上、常に『優等生』として頂点に君臨せねばならないのだ。

もっと、もっと頑張らなくては――

「どうしたらいいんだよ、本当に」

しかし悲しきかな。

現実とは非情である。叫んだところでも状況は変わらない。

だいたい、何にでも魔法を使うモノじゃない。

その典型的な例が階段だ。ホグワーツには142もの階段があつて、しかもそれ一つ一つに何かしらの特徴があるなんて馬鹿げている。もちろん、浪漫はあるが限度というものがあるのだ。広くて壮大な階段や、狭くてガタガタ揺れる階段ならば、まだ許せる。だが、金曜日にはいつも違う所へ繋がる階段や、真ん中の辺りで毎回1段消えてしまふ階段というのは正直やめて欲しい。

いや——階段よりも、扉の方がたちが悪い。

丁寧をお願いしないと開かない扉や、正確に一定の場所をくすぐらないと開かない扉、扉に見えるけど実は固い壁のふりをしてる扉などなど、奇妙な扉が多すぎる。

「オマケに、肖像画の人物もしょっちゅう訪問しあっている。場所の把握がしにくいじゃないか」

いろんな場所に魔法をかけすぎているせいで、逆に不便に感じる。これも勉強の1つなのか？記憶力を養う為とか？冗談は、休み休みにしてほしい。

「誰かに聞くべきか？ いや、でもこの辺りに人は……」

いなかったはず——と呟きながら角を曲がった時だった。

鏡の前でコソコソ何かしている2人組が目には飛び込んできたのである。

背格好からして上級生だろう。2人とも赤毛ののっぽで、瓜二つの外見をして
いた。

「奇跡だ！」

顔の筋肉が緩むのが分かった。いそいそと道を尋ねようと近づいていく。日頃の
行いの良さが、報われたのだろうか？ 私が駆け寄って声をかけるより先に、2
人は私に気づいたらしい。同じタイミングで振り向くと、オウムのように代わる代
わる口を開いた。

「こんなところで何してるの？」

「いきなり授業をサボるつもり？」

「新学期早々、授業をサボるなんて、たいした度胸だよな」

「ま、オレたちもサボってるけど」

「ははは、たしかに」

2人は顔を見合せて笑っている。声から笑い方までそっくりだった。まるで、
鏡を見ているかのようなのである。そんなことを頭の隅で考えながら、私は早口で尋ね

た。

「実は道が分からなくなってしまうまして、『闇の魔術に対する防衛術』の教室はどこでしょうか？」

「なーんだ。ただの迷子ってこと？」

「制服も新品だしね。おっと、スリザリン生か」

私のネクタイに視線が向けられる。

緑の地に銀の縞模様が入ったネクタイは、少しおしゃれで、着けていると誇らしい気持ちになる。

「はい、スリザリンの1年生です」

「珍しいな、スリザリンの迷子って」

「スリザリン生って常に群れてるイメージあるからな」

「もしかして、いじめられているとか？」

「仲間外れか。そういえば、マグル出身者がスリザリンに入ってたって噂になったな」

「そんなことありません！」

私は頬を膨らませながら反論する。

「私、マグルの世界で育ちましたが、いじめなんて受けていませんから」

少しムキになって答えると、双子は「冗談さ」と笑った。

「『闇の魔術に対する防衛術』の教室だろ？ 反対側の塔さ」

「反対側ですか——って嘘だろ？」

私は愕然とした。

反対の塔……ここからだ、軽く20分はかかってしまう。下手したら30分かかるかもしれない。ショックのあまり、抱え込んでいた本が数冊、ばらばらと床に落ちてしまった。

「人生、山あり谷ありさ。スリザリンの新入生よ」

そんな私を慰めるかのように、肩をぽんと叩かれた。

「だが特別に、短縮ルートを教えて進ぜよう」

「おっと！ ただとはいわないぜ。簡単なことだ。俺たちがこの辺りをうろついていたってことを口外しないと誓えるなら教えよう」

「特にフィルチに教えるな」

「マクゴナガルやスネイプもうるさそうだな」

さあどうする？という感じで、こちらを見てくる。なんだかんだ言っていていられない。もし、嘘だとしたら先生に「この廊下で授業サボって、しかも、困っている下級生に嘘の道を教えた悪い先輩がいました」と言いつければいいことだ。私は無言でうなずくと、2人はニヤリと笑った。

「そこにタペストリーがあるだろ？ あそこの裏には、秘密の通路がある」

「通路を抜けたら、とにかくまっすぐ進む。道の奥には、牧場の絵がかかってる」

「一番大きな牛の腹をくすぐるのさ」

「そうしたら絵が扉に早変わり！」

「扉を開けて、右に曲がると後は階段を上るだけ」

「あっという間にご到着」

「ありがとうございます！！！」

私は一礼すると、一目散にタペストリーをめくる。

すると、2人の言った通り、本当に古い扉が現れた。私は迷わずその扉を開けて、急な階段を駆け下りた。

どうやら、彼らは正しいことを教えてくれたようだ。

先生が入ってくるのと、ほとんど同じタイミングで教室に滑り込むことができた。

——異様なまでに、にんにくの臭いが充満していたが、そこまで問題ではない。間に合ったことの方が大切だ。ホッと胸をなでおろす。

チャイムと同時に教室に滑り込むと、珍しそうに同寮の子達は眺めている。だけど、誰も話しかけてこない。

——まあ、別にかまわない。私には、友達を作って遊んでいる暇なんてないのだから。悲しくはない。私は何事もなかったかのように慌てず、ゆっくり席に座った。「ち、遅刻ぎりぎりですね」

席に着いた途端、ターバンを巻いた先生がおっかなびっくり話しかけてきた。

「すみません、クイレル先生。次からは気をつけます」

「べ、別にか、構いませんよ。ち、ちなみに、貴方の名前は？」

要注意生徒として覚えられたくない。これからの成績で見返してやろう。

そんなことを考えながら、静かに名前を答えた。

「セレネ・ゴーストです」

「ゴースト!？」

その瞬間、クイレル先生は飛び上がった。

あまりにも凄い勢いで飛び上がったものだから、すぐそばに立てかけてあった壺が床に落ちる。ばしゃんと音を立てて、中に入っていた透明な液体が飛散した。

「きゃっ！」

近くにいた女子生徒……ダフネ・グリーングラスが、小さく悲鳴を上げる。

しかし、誰もが零れた水よりも、度を逸したクイレル先生の驚き方に啞然としていた。

「ゴースト? き、君は、い、い、今、ゴーストと、名乗ったのかな?」

「はい」

何か問題があったのか？

今まで名前を名乗っただけで驚かれた経験は1度も——いや、1度だけある。

『組み分け帽子』を被った時だ。もしかして、『ゴースト』という苗字は一部で意外と有名なのか？ ミリセント・ブルストロードは知らなかったみたいだが……時間の合間を縫って、ゴーストについて調べてみるのも面白いかもしれない。

「し、出身は？」

「詳しいことは知りません。……両親は生まれて間もない頃に死に、マグル社会で育てられましたので」

私が正直に答えると、不思議なことに、クィレル先生は先程にもまして顔色が悪くなってしまった。まるで、得体のしれない何かに怯えているようだ。私ではなく、もっと別の何かに——。

いや、それには大して興味がない。

今は、授業をつつがなく進行してもらいたい。私のプライバシーの公表なんて『闇の魔術に対する防衛術』と関係ないように思える。

さて、授業の開始をどう切り出そうか……そうやって悩んでいるうちに、クイレル先生は、また何か聞こうと震える口を開けた。

「き、君は——」

「先生、授業を始めてください」

まるで助け舟を出すように、唐突に1人の生徒が口を開いた。

退屈そうに膝をついている背の高い男子生徒だ。1年のスリザリン生の中でも背が高く、青い瞳をしている。ニンニクの臭いが嫌なのか、顔をしかめていた。

まさに、渡りに船という奴だ。私はその男子生徒に便乗して、先生に言葉を投げかけた。

「早く授業を始めてください」

「……そうですね、授業を始めましょうか」

こうして、ようやく授業が始まった。

しかし、肝心な授業は肩透かし、といっても過言ではない。

他の授業同様、予習内容以上のことはやらなかったし、興味をひく話も聞けなかった。例えば、マクゴナガル副校長先生が担当する『変身術』では、実際にアニ

メーガスという『動物に変身する魔法』を目の前で実演してくれたり、『妖精魔法』の授業でも、マグルの科学的な理論ではありえない超常現象を見せてくれた。

しかし、そういったことは一切ない。先生自身の『闇の魔術』からの『防衛体験』もなく、唯一、教科書に記載されていなかったことと言えば――

「ルーマニアで吸血鬼に襲われてから、ニンニクを常備するなんて――それこそ非科学だろ」

魔法で対処しろよ、魔法で。

次の『魔法薬学』の授業に向かう途中、ぼつりと不満を漏らしてしまった。

そもそも、ここは学校だ。それも本によれば『今世紀もっとも偉大な魔法使い』と称されるダンブルドアが校長なのだから、そう簡単に吸血鬼なんて化け物が侵入してくるわけがない。

「本当に、変な学校」

『セレネ』の記憶にあり、私自身も通ったマグルの学校は、こんなじゃなかった。どちらがいいのか、と問われても分からないが――。まあ、どっちもどっちなのかもしれない。

「ん？」

その時だ。

とぼとぼと地下牢へ向かう丸顔の少年が、視界に入ってきた。

確か、ネビル・ロングボトム。グリフィンドールに組み分けされた少年だ。

——そういえば、次の『魔法薬学』はグリフィンドールと合同だった、気がする。まあ——別に話しかけなくても構わない。しかし、ネビルが少し暗い雰囲気を漂わせている原因も気になった。

目の前にいるのは、一人ぼっちで歩いている知り合い。

こんなとき、『優等生』のセレネ・ゴーストだったらどうするか？

無視するか、話しかけるか。

「ネビル、でしたよね？」

答えは、話しかける。

私は今日も『セレネ・ゴースト』らしく振舞った。

「うわっ、セレネ！びっくりした、どうしたの？」

私が話しかけると、ネビルはその場で跳びあがる。……予想以上に驚かれてし

まった。少し悲しい。

「次はグリフィンドールと合同授業ですから、私も地下牢へ向かうところです。

よろしければ、途中まで一緒に行きませんか？」

「うん、別にかまわないけど——その、大丈夫？」

不安そうに、ネビルは尋ねてきた。

私は首をかしげそうになる。大丈夫？と問われるようなことがあっただろうか？
その言葉は、むしろ私がかかる言葉だと思っていたが——別に体調がすぐれないわけでもないし——。

私が悩んでいると、ネビルは小動物のように辺りを見渡してから、小さな声で囁いてきた。

「セレネってスリザリンでしょ？グリフィンドールの僕と一緒にいたら、色々と言われるんじゃない？」

「別に言われたところで、成績には響きませんよ？」

「いや、そういう問題じゃないよ!!友達と仲悪くなったりしない？」

「問題ありません」

「いや、問題あると思うけど!」

私は、慌てふためくネビル・ロングボトムを落ち着かせる。

やっぱり、コイツは良い奴だ。何故、グリフィンドールなのだろうか? この優しさが勇敢さにつながるってことか?

「この一週間、セレネはどうだった?」

「珍しいことばかりでした。本と現実の違いですね」

本で読んで理屈としては理解していても、これまでマグル社会で学んできたことでは説明できない超常現象は、実際に見てみないと納得できそうにない。——特に、変身術や妖精呪文は。

「天文学も、マグルの知識とは少し違うところが興味深いです。ネビルはどうですか?」

「それが——薬草学以外は、さっぱりなんだ」

疲れたように、ネビルは肩を落とした。

私は少し目を開いてしまう。私のようなマグル育ちとは異なり、ネビルは生粋の魔法界生まれ魔法界育ちだ。超常現象は見慣れているはずだし、特に違和感なく受

け入れることが出来ると思うのだが――、思い過ぎだったのか？

『変身術』の計算とか、『妖精呪文』のレポートとか、難しくて。他の子達も――
ハーマイオニー以外、呻いているよ」

「……計算？ レポート？」

私は、少し眉をひそめてしまう。

確かに、変身の過程で計算が必要だし、課題レポートも出た。だが――

「あのレベルの計算なら、10歳で習うはずですよ。」

それに、レポートといっても授業を受けての感想文を羊皮紙1枚でしたよね？」
そのくらい、初等教育で習ってきた範囲ではないか。

もしかして、ネビルは特別な支援が必要なのか？ と思ってしまうが、どうやらそうでもないらしい。ネビルは力なく笑った。

「うん、一応あのくらいは家庭教師に習っていたけど、でも実際に授業としてやるのは初めてだったから」

「授業として初めて？ 学校には通っていなかったのですか？」

「うん。マグルの小学校に通う子もいるけど、基本的には家庭学習だよ」

「そうなんですか——って、なにそれ？」

あまりの衝撃に『セレネ』の仮面がはがれてしまった。

魔法界は、常に私の想像を超えた所にあるようだ。

「セレネ？」

「いや、問題ありません。そうですか……意外です」

つまるところ、金がない子には教育の権利が与えられないということではないか。思い起こせば、ホグワーツに入学するためにも入学金が必要だった。

魔法界は、まさかの義務教育がないことが判明した。教師のクイールには、知らせられない。学校に通えない可能性のある子がいるだなんて、聞いただけで卒倒しそうだ。

「あ、そろそろ着くみたいだね」

少し話している間に、目的地にたどり着いたらしい。

地下牢は薄暗く肌寒かった。壁にはズラリと並んだガラス瓶。その中にはアルコール漬けの動物がぷかぷかと浮いている。これはスネイプ先生の趣味で集めたコレクションなのだろうか？

スネイプ先生はまだ来ていない。寮ごとに分かれ座っているみたいだったので、ネビルと別れ適当にスリザリン生の隣に座る。隣の女子生徒——パンジー・パーキンソンは軽蔑の視線を私に向けてきた。

「あら、ゴースト？ アンタってロングボトムと仲良かったの？」

「不都合なことでも？」

「アイツ、グリフィンドールの落ちこぼれよ？」

「なにか問題ありますか？」

私は、大鍋を机に置くと頬杖をついた。パンジー・パーキンソンが文句を言いたそうに口を開いたとき、スネイプ先生がマントを翻して登場した。

「静まりたまえ」

スネイプ先生は出席を取り始める。淡々と出席を取る先生だったが、ハリーの名前まできてちょっと止まった。

「ああ、さよう、ハリー・ポッター。我らが新しい……スターだね」

猫なで声でそう告げる先生。となりのドラコとその取り巻きのクラブやゴイルがクスクスと冷やかすように笑った。そういえば、入学初日に『ハリーは魔法界の

英雄だ』と苦々しくドラコ・マルフォイが言っていたような気がする。

ハリーの方を見ると、少し嫌そうな顔をしていた。

出席を取り終えた先生は、私達を見わたした。

「このクラスでは、魔法薬調剤の微妙な科学と、厳密な芸術を学ぶ」

いつもの私なら、『魔法なのに科学って——』とツツコミを入れるかもしれないが、その時の私はそんなことを微塵も考えてなかった。

先生の口から語られる言葉に惹きつけられてしまっていた。

頬杖をついていた手は、いつのまにか膝の上に置かれていた。

「このクラスでは、杖を振り回すようなバカげたことはやらん。

そこで、それでも魔法かと思う諸君多いかもしれん。沸々と沸く大釜、ユラユラと立ち上る湯気、人の血管の中を這いめぐる液体の繊細な力、心を惑わせ、感覚を狂わせる魔力。

諸君がこの見事さを真に理解するとは期待しておらん。我輩が教えるのは、名声を瓶詰にし、栄光を醸造し、死にすら蓋をする方法である。

ただし、我輩がこれまで教えてきたウスノロたちより、諸君がまだマシであれば

の話だが」

薄暗い教室は、シーンと静まり返っていた。先生が、完全に薄暗くて肌寒いこの地下牢を支配していた。

「ポッター！」

先生の鋭い声が響き渡る。

突然のことなので、ハリーが一瞬ビクウっと身体を震わせたのが見えた。

「アスフォルデルの球根の粉末に、ニガヨモギを煎じたモノを加えると何になるか？」

私は、記憶を探った。

たしか、眠り薬。『生ける屍の水薬』と呼ばれる強力な眠り薬だったような気がする。

教科書の最初の『魔法薬学を始めるにあたって』と書かれたページに例として挙げられていた薬だ。

ハリーは、分からないらしい。

当然だ。あんな細かいところまで読む人は、滅多にいないし、今までマグルの中

で育ってきたのだから、知っているわけもない。

「分かりません」

「チッ、チッ、チ。有名なだけではどうにもならんらしい。

ポッター、もう1つ聞こう。ベゾール石を見つけて来いと言われたら、どこを探すかね？」

ハリーの隣に座っているハーマイオニーが思いつき高く、椅子に座ったままで挙げられる限界まで高く伸ばしている。が、スネイプ先生の黒く冷静な双眸は真っ直ぐハリーだけを見ている。いや、冷静というより、憎悪の色が少し混じっている気がするが、気のせいだろうか？

脳裏に浮かび上がるのは、ダイアゴン横丁でみせた複雑な視線。あの時に見せた懐かしそうな色は、何処へ行ってしまったのだろうか？この一週間の間に、なにがあったのだろうか？

疑問が渦巻いてくる。推測しようにも、私には理解できなかった。

「セレネ、一緒にやらないかい？」

ドラコ・マルフォイが話しかけてきた。

どうやら、いつの間にか話が終わって2人一組で薬を作ることになったみたいだ。特に断る理由もない。私は了承すると、さっさと調薬の支度を始めた。

「あのさ、セレネ。忠告しておくが、少し付き合いを大切にしたい方がいぞ」
材料を斬りながら、マルフォイが囁きかけてくる。

「パーキンソンやブルストロード、それからグリーングラスもずっと君と話したがつている。

さっき、セレネに助け舟を出したノットもそうだし、ザビニだって——。

勉強を減らして、もう少し柔軟に付き合ったらどうだ？ そんなに勉強しなくても、君は十分できるだろ」

「知識は、いくらあっても無駄にはなりませんよ」

人と付き合わない理由は、簡単だ。

『優等生』でいるためには、勉強しなければならない。

セレネは、優等生であり、凡人と遊んでいる暇なんてない。そのような暇があれば、勉強に回した方がいいに決まっている。確かに、誰か友達を作った方がイイ、という焦りはあるが——焦りのために、私の中身——要は『セレネ・ゴースト』を

捨てるわけにはいかないのだ。

「それに——あの程度の勉強量では、足りませんから」

「足りない？ 予習・復習にくわえてマグルの勉強までやっているなんて、正気の沙汰じゃないと思うが」

「ですから、その量が足りないと言っているのです。そろそろ真面目に取り組みましょう。」

おしゃべりは御終いです」

私は、無理やり話を切り上げた。

しばらく、沈黙が続く。私は少し、辺りを見渡した。

思った以上に、私達の班が抜き出ている。私は、本で学習済みとはいえ初めてのことで、少し手順が疎かになりがちだが——マルフォイが、意外と慣れた手で作業を進めるからか？

「ちよつと意外ですね。マルフォイは、なんにも出来ない坊ちゃんかと思っています」

「君、けっこう失礼だな。僕は純血の一族、マルフォイ家の長男なんだ。教養とし

てこれくらい出来ていて当然さ」

怒ったようにしゃべるマルフォイだったが、褒められたのが嬉しかったのだろ
う。顔が少し赤くなっていた。

「僕の父上は在学中、2 番目に得意だった科目が『魔法薬学』でね。少し予習の
手伝いをしてもらったのさ」

マルフォイは得意げにしゃべりながら、干したイラクサの量を計る。私は、適当
に相槌を打ちながらへびの牙を砕いた。気を良くしたのか、マルフォイは結構ペラ
ペラとしゃべり続ける。

しかも、先生が他の生徒に質問したり、こちらに背を向けている隙に、近くに
いる私にしか聞こえないような小さな声でしゃべるのだ。その上、作業の手も止まら
ずに順調に進めている。少し感心してしまった。

さて——どうやら、私達の所が一番進行速度が速く、うまく出来ていたらしい。
先生がスリザリンに得点を1点くれた後、皆に集まるようにと声をかけた。

その時、事件が起きた。

地下牢いっぱいに強烈な緑色の煙が上がり、シューシューという大きな音が広がった。

慌てて手で鼻をふさぎあたりを見わたすと、発生源はネビルと黄土色の髪をした少年の鍋らしいことが判明した。

なぜか鍋の原型がなくなっていて、こぼれた薬が近くの生徒たちの靴に穴を空けていた。災難だったのはネビルだ。薬を直接浴びてしまったらしく、腕や足のそこらじゅうに真っ赤なおできが容赦なく吹き出し、痛くてうめき声をあげていた。

「馬鹿者！」

スネイプ先生が怒鳴り、魔法の杖を一振りすると、こぼれた薬が跡形もなく消えて行った。

「大方、大鍋を火から降ろさないうちに、山嵐の針を入れたんだな。」

医務室に連れて行きなさい」

苦々しげにスネイプ先生は黄土色の髪の子に言いつけた。

それから突然、彼らの隣で作業をしていたハリーと赤毛の子に矛先を向けた。

「ポッター！ 針を入れてはいけないと何故言わなかった？

彼が間違えれば、自分の方がよく見えると考えたな？ グリフィンドールもう1

点減点」

ハリーは言い返そうとしていたが、赤毛の子が大鍋の陰で、先生に見えない様に、ハリーを小突いてから何かささやいている。善意に考えれば、先生はたぶん『自分のことだけをやるのではなく、常に他の人にも気を配れ』ということと言いたかったのかもしれない。

だが、ハリーに対する視線から考えると『ただ単に、意地悪したいだけ』にも見える。

……というか、たぶん後者だ。

この1週間で、スネイプ先生の恨みをかうようなことをしたのだろうか？

赤毛の男の子に慰められているハリーを横目に見ながら、静かに地下牢を出た。

3 月 7 日 .. 一部改訂
3 月 22 日 .. 誤字訂正

7 話 飛行訓練

7月27日…大幅改定

この学校には、体育の授業がない。

代わりに「飛行訓練」がある。

……けれど、それも1年生まで。

体育嫌いの子にはいいのかもしれないが、2年以後は身体を動かす授業がないのだ。食事は三食好きな物だけ食べることができるので、肥満体型になりやすいのではないか？　と思うが、この学校には丸々太った人が少ない。

その理由は、たぶん学校の作りが関係していると思う。

なにしろ、ホグワーツは城だ。あまりにも、広すぎる学校は移動するだけでも骨

が折れる。

長くて急な階段をひたすら上り下りをしたり、東の塔の上の方で魔法史の授業があったと思えば、次は西の塔の傍の温室で薬草学の授業というように、とにかく動かなければならない。先日はグリフィンドール生のおかげで、いたるところに移動を短縮するための隠し通路があるということが判明したが、どこがどこに繋がるのか分からない。

……それ以前にまず隠し通路の位置が分からない。

なので、ひたすら短縮せずに歩き回ることになる。これがかなり疲れるのだ。

「それに、授業一つ一つでも結構疲れるんだよな」

私は誰に言うのでもなく、独り言を呟いた。

例えば変身術。

モノを変身させるということは、言葉で表せば簡単だが、実際には物凄く疲れる。初回の授業の時に、マッチを針に変身させる練習をした。なんとか針に変えることが出来たが、とても疲れてしまい倒れ込みたかった。

物質の素材を理解し、理を作り替えるのだから、それは頭を使うし、神経を集中

させなければならぬ。まさに、針に糸を通すような作業である。

また、ただ理の変換をイメージするだけでなく、そのイメージを実現化させるための魔力を練らなければならぬので、疲労は更に積み重なるばかりだ。

とはいえ、嬉しかったこともある。

マツチ棒を針に変身させる事が出来たのは、学年で私とハーマイオニー・グレンジャーだけだったのだ。

いかにも厳格な雰囲気の変身術の教授、マクゴナガル先生が点数をくれ、少し褒めてくれた。

「今日のセレネさん、ちょっと機嫌が良いね」

そんな時、後ろから声をかけられた。

振り返ってみると、三つ編みのスリザリン生が微笑みながら立っていた。

「ダフネ・グリーングラスでしたっけ？ 私、普段と変わらないと思うのですが」

「ううん、違うよ。人を寄せ付けるな、という雰囲気少し和らいでいるように感じただ」

「……」

少しだけ心外そうに顔を歪めてしまった。そんなに、私は人を寄せ付けないオーラを出しているだろうか？ 確かに、特定の仲が良い人物はいない。誰かと共に動きたい、仲良くしたいとも思わないが、そこまで拒絶する空気は醸し出していない、と思う。

「人を見る目が無いですね、ダフネ・グリーングラス」

とはいえ、この少女と話す気分ではない。

私はグリーングラスを引き離すように、足早に歩いた。

空はどこまでも青々と澄み渡っていて、飛んだら自分も空気と一体化しそうなくらい気持ちの良い日だった。少し風があったが、無風の日より少し風のある日の方が好きだ。芝生の上には20本の箒が並べられている。箒を見ただけで、少し気分が高揚した。

憧れの箒が——いま、私の目の前にある。箒の周囲だけが、光り輝いて見えた。箒に乗って空を飛ぶ。

まるで、おとぎばなしの魔女みたいだ。

しかも、箒に乗って行くクリケットのようなスポーツがあるなんて。

なんて、素晴らしい……いや、興味深い話なのだろう。

「セレネさん、目が輝いているよ」

追いついてきたグリーングラスが、少しからかうような口調で話しかけてきた。

「箒に興味があるの？」

「グリーングラス、どういう意味ですか？ 私、クイディッチになんて、興味の

欠片也没有せん」

「私は、クイディッチなんて一言も言っていないよ？」

「箒といったら、クイディッチだと思っただけです」

「セレネさん、顔、赤くなってるよ」

私は、その発言を無視して箒に歩み寄った。

見た目は、ただの古ぼけた箒だ。魔力も何も感じない。本当に、これで飛べるのだろうか？ 私を支えられるのか？ 空の上で、折れたりしないのだろうか？

ちよっぴり、不安になった。

「みなさん、これから『飛行訓練』を始めます」

そんなことを考えていると、すぐに飛行魔法の先生であるフーチ先生が来た。彼

女は白髪を短く切り、鷹のような黄色い目をしている。どこまでも箒で、すばやく飛んで行けそうな人だと思った。

「何をボヤボヤしてるんですか」

フーチ先生は、開口一番で怒鳴る。

「皆、箒の側に立って。さあ、早く！」

完全に体育会系の人だ。

テキパキやらないと、ゲンコツが降ってくるかもしれない。いや、ここは魔法使いの世界だから、降ってくるのは呪文だろうか。

「右手を箒の上に突き出して。そして、『上がれ!』という」

皆が一斉に『上がれ!』と叫んだ。

すると、古くて小枝が何本かともない方向に飛び出している箒がスウッと私の手の中におさまった。だが、飛び上がった箒は少なかった。

私に見える範囲だと、ハーマイオニー・グレンジャーやダフネ・グリーングラスの箒は地面をコロリと転がっただけだったし、ネビル・ロングボトムの箒は1cmたりとも動かなかった。1度で飛び上がったのは、私を含めほんの数人しかない。

もし、魔法使いの使う箒に意志というモノがあるのだとすれば、馬の様に乗り手の気持ちに分かるのかも——とか考えてみる。中々飛び上がらないハーマイオニ達の顔は、強張っていて緊張している。馬が乗り手を舐めるように、箒も乗り手を選ぶのだろうか——。

「次に、箒の乗り方を指導します。はい、そこ！違ってる!!」

フーチ先生は1人1人箒の握り方を直していく。

私の握り方も直されてしまった。ただ普通に箒をつかめば良いという問題ではないらしい。

空を飛んでも落ちないように、私は必死になって掴み方を頭に叩き込んだ。

「さあ、私が笛を吹いたら、地面を強く叩いてください。3つ数えたら吹きますよ。

1、2……」

ところが3つ数え終わる前に、おそらく緊張してしまったのだろう。

ネビル・ロングボトムが『遅れたくない』というような顔をして地面を蹴ってしまったのだ。しかも、思いっきり強く。

「こら、戻ってきなさい!!」

ネビルは先生の声が聞こえているのだと思うが、制御できないのだろう。

シヤンパンのコルクの栓が抜けたように勢いよく飛んでいくネビル。真っ青な顔をしたネビルはどんと空へと上がっていく。怖くて悲鳴も上げられないようだ。ネビルは、真っ逆さまに落ちた。そして――

「ひいひい!!」

ネビルの悲鳴が、校庭に木霊した。

そして、壁や木々にぶつかりながら、情けなく墜落した。フーチ先生は、誰よりも早く真っ先に駆け寄った。フーチ先生が、ネビルの様子を確認する。ネビルの軽く呻いている様子が、人混みの間から見て取れた。どうやら、息はあるらしい。

「あーあ、手首が折れている」

もちろん、無傷というわけではさすがにいなかったみたいだ。

しかし――

「手首骨折ですむ？」

あの高さ――軽く6メートル以上あったのに、手首の骨折だけですんでしまうとは。

下手したら、命を落とす危険性のある高さだ。もしかしたら——ネビルは、知らない間に魔法を使っただのかもしれない。いや、フーチ先生の魔法かもしれない。

「全員、ここで待っていなさい。ただし箒には触れない事。もし、箒に指一本でもふれた場合は、クイディッチの『ク』の字を言う前に、この学校から出て行ってもらいます」

フーチ先生は厳しい口調で言い放つと、ネビルを連れて医務室へといった。

それにしても、ネビルは災難続きだ。この間の魔法薬学の時も痛そうだったし、汽車では蛙をなくしていた。誰にでも、不幸の星はあると思うが、あれは異常だろう。

「アイツの顔を見たか？あの大まぬけの」

ネビルを少し憐れんでいると、マルフォイが大声で笑い出した。

マルフォイの失敗を笑うハリー達もハリー達だが、怪我をしたネビルを笑うマルフォイもマルフォイだ。そんなマルフォイだが、手に何か丸いキラキラとした球体を持っていた。

「ごらんよ！ロングボトムの婆さんが送ってきたバカ玉だ」

よく分からないが、ネビルの持ち物が箒から落ちた衝撃で落としてしまったらしい。ガラス製みたいなのによく割れなかったな、とか場違いなことを考えてしまう。あれだけの高さから落ちたにもかかわらず、命も持ち物は無事だった。そう考えれば、ネビルは『不幸』ではなく『幸運』ということになる。『落ちこぼれだ』と公言していても、実際には『葉草学』という得意科目があるらしい……

「あっ」

だが、その瞬間、来週『葉草学』の試験があることを思い出した。ネビルの玉の行方がどうなるのか気になるが、今の私はそれどころではない。私はローブの中から教科書を取り出すと、復習を再開することにした。少しでも時間を有効活用しなければ……

「ちょっと、セレネも何か言ってやって!!」

ハーマイオニーが私の肩を叩く。セレネは教科書から顔を上げた。

「どうしたのですか、グレンジャー……何故二人は空にいるのです?」

透き通った青い空に、2人の姿が浮かんでいた。

ハリーとマルフォイが、箒に乗って空を飛んでいる。私は、少し目を見開いてし

まった。

「規則やぶりののに、みんな応援しているのよ！酷いでしょ！」

「ん、あ、ああ、そうですね」

まさか口が裂けても言えない。

本当に、箒で空を飛ぶことができる。

その事実には、驚いてしまっていたなんて。

私は、こほんと咳払いをした。

箒に対する憧れを一旦脇に置き、冷静な視線を上に向けた。そして、少し息をのむ。幼い頃から箒に乗りなれているマルフォイト、初めて箒に乗るハリーに技術の差がほとんど見られないのは、確かに驚きだ。

しかし、今は、先生がいないとはいえ授業中。キャーキャーと言う女子たちや、感心する赤毛の子はもう少し自粛するべきだと思うのも事実。私は、静かにため息をついた。

「少し静かにしたらどうでしょう？騒いでいたら他の先生に気づかれますよ。言いつけを破るのを止めなかった同罪で、叱られるのでは？」

少し咎めるように言うと、本当に一瞬だけ、水を打ったかのようにピタリと声が止まった。

「いや、でもハリーは凄いつて。だって初めてなのにあんなに飛べるんだ。マルフォイの奴なんて、飛ぶのが怖くて顔がこわばってるじゃないか」

赤毛の子が笑った。いや、アレは高くて強張ってるのではなくて、ハリーが初心者なのに頭角を現したから、だと思う。赤毛の子に続くように、それぞれの子たちが自分たちの意見を主張し、空の二人を見上げ盛り上がっている。

「取れるものなら取るがいい、ほら！」

マルフォイがそう叫ぶ声が聞こえてきた。その言葉と共に、彼はネビルのガラス球を空中高く放り投げる。透明な玉は稲妻の様に地面に急降下する。ハリーは、箒の使い方を熟知しているかのように、まっすぐガラス球に向かって飛んでいった。地面すれすれのとこで球をつかみ、間一髪でハリーは箒を引き揚げ水平に建て直し、草の上に転がるように軟着陸した。

その手に、傷一つないガラス球を握りしめて。

「ハリー・ポッター！」

マクゴナガル先生が駆け寄ってきた。ハリーの表情が誇らしげに輝いていたが、彼女の登場で一気に青ざめる。マクゴナガル先生は授業が入っていなかったのだから。

それで、私達の声を聴いて駆け付けたところ、さっきの様子を目撃したという感じだと思う。

ハリーは小刻みに震えている。

「まさか……こんなことはホグワーツで一度も」

先生の眼鏡が激しく光っている。

その時、私は小さな疑問が芽生えた。あの光は確かに激しいモノだが、怒りの色ではない気がした。

上手くは言い表せないが、例えるなら勝利への情熱というのだろうか？

それに、注意をするのであれば、ハリーだけではなくマルフォイにもしないとおかしい。

マクゴナガル先生は、うなだれるままのハリーを連れてどこかへ去る。なんと

なく奇妙な予感が胸をよぎった。

「これでポッターは、退学だな」

マルフォイは、取り巻きのスリザリン生と一緒に高笑いをしていた。

「可哀そうだね、ハリー・ポッター。もう退学なんて……セレネさんはどう？」
グリーン格拉斯が箒をつかみながら、静かに問いかけてきた。

私は静かに首を横に振る。

「私には……分かりません」

その後、フーチ先生が帰還し、残った生徒で訓練を再開することになった。

15メートル程までしか飛行を許してもらえなかったが、周りの人と比べて1番優れているかとか、「セレネ」らしく振舞えているとか、そんなことはすっかり頭から消え去った15分間だった。

鳥になった気分とは、まさにこのことだろう。

身体が浮きあがり、髪が膨れ上がる。空を自由に飛ぶのは風と一体になったみたいで快感だが、頼りになるモノは古びて折れそうな箒だけ。地面に足はつかず、きゅんっと腹の奥が縮み上がりそうになる。

理想と現実のギャップとは、まさにこのこと。

自由に飛ぶのはいいが、クイディッチみたいに競技で飛ぶのは御免である。

3月7日..誤字訂正

8 話
10 月 31 日

10 月 31 日、ハロウィーン。

朝から厨房で、こんがりとしたパンプキンパイを焼いているのだろう。甘い匂いが廊下を漂っていた。口の中に唾液がたまってくる。今にも腹が、くうっと鳴りそうだ。

しかし、ハロウィーンだからといって、私の日常は変わらない。

いつも通り授業を受け、図書館にこもる。私の変わらないルーチンワークをこなすだけ。

優等生のセレネがハロウィーンの菓子を楽しみにしている。

そんな醜聞を知られるわけにはいかないのだ。菓子の香ばしい匂いを嗅いだ瞬間、私は、いつも以上に勉強にのめり込もうと決めた。

最後の授業が終わり、足早に図書館へ向かう。少し調べ物が、たまっている。菓

子の誘惑？ トリックオアトリート？ そのような行事に浮かれ騒ぐ私ではないのだ。

さて、心躍る夕食までに、どこまで進めることが出来るだろうか——なんて考えていた時だ。

「セレネっ！」

小さな叫びが、現実私を引き戻した。

振り返ると、ネビルが人混みの中から飛び出してきたところだった。彼もハロウィーンを楽しみにしているのだろうか、と思ったが、少し様子がおかしい。

ネビルは丸い顔を不自然なくらい青ざめさせていた。

「ハーマイオニー知らない、セレネ!？」

「まったく、どこにいるんだ？」

ネビルと別れて、ハーマイオニーを探し始めて1時間。

そろそろ夕食が始まっている時間だ。いや、もうとっくに始まっている。

「女の子を泣かすようなことをするなんて、な」

ネビル曰く、ハーマイオニーは朝の授業が終わると、泣きながら飛び出してしまったらしい。その後、午後も全く姿を見せず、行方知れずのまま。どうやら、ハリーと一緒に行動している赤毛の少年が放った『頭でっかちだから、友達がいらないだよ』という陰口に傷ついてしまったようだ。いや、私——いや、優等生なセレネであっても同じことを言われたら傷つく。本人のいないところで悪口を囁かれるのも胸糞悪いが、目の前で言われるのも嫌だ。そのくらい、11歳にもなるのだから気づけての、と思う私がいた。

マルフォイにしろ、赤毛の少年にしろ、幼稚な男子が多すぎる。

「ネビルは、女子トイレのどこかにいるって言ってたけど——本当にいるのか？」

ここのトイレにいなかったら、私は夕食へ行こう。

きつと、もうすでに夕食に向かっているに違いない。そう思いたい。そんなことを考えながら、ドアを開ける。中には、人の気配はない。

「ほら、ここも空振りだ」

やっぱり、ハーマイオニーは泣きやんで夕食へ向かったのではないか？

あれから一時間ほど経過している。そうだ、きつとそうに違いない。私は小さくため息を吐くと、トイレから出て行こうとした。しかし――

「せ、セレネ？」

古めかしい音を立てながら、個室のドアが開かれる。

そこには、目元を紅く腫らしたハーマイオニーの姿があった。どうやら、ビンゴだったようだ。

「どうしたの、そ、そろそろ夕食だけど」

「それを言うなら、貴女は何故ここにいますか？」

ハーマイオニーは、少し顔を俯かせる。

頬を伝う涙が光った。少し意地の悪い問いかけをしてしまったかもしれない。

罰の悪い気持ちだが、込み上げてくる。トイレに漂う空気が、ますます淀んで取り返しのつかないものへと変わりつつあった。——この気まずい状況を、何とかしなければならぬ。

セレネだったら——こんな時、どんな言葉をかけるだろうか？
頭を抱えたその時だった。

ぐうう……。

場違いな音が、トイレに木霊する。

ハーマイオニーの泣き腫らした顔に、きょとん、とした色が浮かんでいる。私の顔が、熱くなっているのを感じた。

「と、とにかく、今は食事の時間です。食べないことが、身体に毒。

まずはしっかり食べて、しっかり休む。これが一番です！」

紅くなった顔を誤魔化すように、私は言葉を捲し上げた。

すると——どこに笑うポイントがあったのだろうか？ハーマイオニーは、初めて会った時のように、くすりと笑みをこぼした。

「なにが、おかしいんですか？」

「ううん、セレネもお腹すくことがあるんだなって思ったの」

「私も人間です。生命活動を行う上で、食事は欠かせません」

「あつ、ごめん！そういう意味で言ったんじゃないくて——」

しかし、その先の言葉は別の音に掻き消されてしまった。

——ずうん、と低く響いた謎の足音に。

途端に、ハーマイオニーの顔から笑顔が消えた。

「セレネ——この音、なに？」

「分かりません」

トイレの芳香剤の甘い匂いの中に、悪臭が漂ってきた。例えるなら、汚れてボロボロになった義父の靴下と、掃除を滅多にしない公衆トイレの臭いを混ぜたような——吐き気がする臭い。それと同時に、少しずつ近づいてくる巨大な足を引きずるように歩く音、低いブアーブアーという唸り声も近づいてくる。

「何？何が来るの？」

私は、杖と——それから、袖の下にいつも隠し持っているナイフがあることを確認する。

初歩的な呪文でなんとかなるといいけど、いざとなったら——眼鏡を外せるよう

に準備を整える。そうしているうちに、何か巨大なモノがトイレのドアを押し開けた。

「き——キャアアッアアアアアア——!!」

ハーマイオニーが、悲鳴を上げる。私も目の前に立ちふさがる巨体に、思わず言葉もなくしてしまう。

そこにいたのは、4メートルもある怪物だった。墓石のような鈍い灰色の岩石のようなゴツゴツした身体を持ち、禿げ頭。手には頑丈そうな棍棒を引きずっている。

「と、トロールがなんでここに!？」

ハーマイオニーは恐怖で動けないのか、ガクガク震えたまま突っ立っていた。

「こんな時——こんな時——」

『セレネ・ゴント』だったら、どう行動する？

棍棒を引きずって入ってくるトロールを見上げながら、自問自答した。

目の前には、既習呪文では倒せる見込みのない怪物。

倒すとしたら、ナイフを使って『線』を切るしかない。でも、体格差は一目瞭然だし、『線』を切るために近づくことも出来るか分からない。身体能力は高い方、だと思う。でも——倒せる見込みは、ほとんどない。では、怯えているハーマイオニーと一緒に逃げる？

ハーマイオニーを出口へ逃がし、自分は颯爽とトロールを始末する？でも、逃げるが勝ち、という言葉もあり、今回の場合——逃げて後は先生に任せた方がいいのかもしれない。

だが、どうやって逃げればいい？

セレネだったら——セレネだったら——私は、どう行動すればいい？

「ここは——女子トイレですよ」

手が震える。

気がつけば袖口からナイフを取り出し、トロールに向けていた。

これが、『セレネ』が考えるであろう最良の『答え』だ。一見すれば優等生らしからぬ危険な判断だが、それでも優等生らしく堂々と優雅にふるまうセレネであれば、こうして強大な敵にも立ち向かう、であろう。

「ハーマイオニーは、隙を見てあの扉から外に逃げてください」

声が、少し震えてしまった。

「でも——セレネは、どうするの？」

「すぐに後を追います。問題ありません」

私は、そう言いながらハーマイオニーの背中を軽く押した。それが合図のように、トロールが巨大な棍棒を振り下ろしてきた。なんとか私は右に転がって、ハーマイオニーは左に走り抜けて、避けることに成功した。標的を外した棍棒は、トイレの個室のドアへと振り下ろされる。木製のドアは為す術もなく、木っ端みじんに粉碎された。

なんという力だろう。背筋がぞわり、と逆立つ。だけど——この『眼』の前では無力のはずだ。私は眼鏡を外して『眼』を開けた。

「——っ！」

頭が軋む。

ここのところ、滅多に『眼』を開いていなかったからだろう。

膨大な量の『線』が視界に広がり、壁にも、床にも、トロールにも、こちらを見

ながら走るハーマイオニーにも、そして、私の手にも『線』が絡みつく。

辺り一面にはびこる『線』を視て——『死』への恐怖が蘇る。

そう、これをなぞれば『死』ぬ。ハーマイオニーも、トロールも、私も、なんにもかも。

生き物でも、生き物ではなくても、そこに『存在している』ものならば——『線』があるものならば、なにであつても『死』んでしまう。

「私——」

世界は、こんなに『死』で満ちている。

あつけないくらい簡単に、人は死んでしまう。すっかり忘れていた、大切なこと。

「私、死にたくない」

この眼鏡をかけてから、なんで忘れていたんだろう？

『死』が、こんなにも恐ろしい物だ、ということ。優等生とか、そういうこと以前に、どうしてこんな選択をしたのか、訳が分からない。

でも——口にしたことは、守らないと。

恐怖で顔を歪ませるハーマイオニーを見て、自分自身に言い聞かせた。

私は、再び持ち上げられた棍棒を見据えた。ナイフを構え、腰を低くする。

「じゃあ、その武器から仕留めますか！」

わざとその場を動かないで、挑発するような視線をトロールに向けて放った。すると、読み通り——トイレの天井すれすれまで持ち上げられた棍棒は、一気に私目がけて振り下ろされた。棍棒が急速に迫ってくる。私は、ぶつかる寸前まで引きつけて、ひょいっと左に跳んだ。棍棒は派手な音を立てて、床に大穴を開ける。タイルがはがれ、整えられたモザイクタイルは見る影もない。

「今っ！」

私は、床にめり込んだ棍棒にナイフを振り下ろした。バターを切る様に、棍棒に纏わりついた『線』を切った。『線』を切った瞬間、棍棒はただの木片と成って使えなくなつた。

トロールは、何が起こつたのか分からないらしい。

頭の悪そうな表情で、壊れなかつた棍棒の『持ち手』をしげしげと見つめている。振り落とした時のまま、身をかがめた態勢で――

私は、トロールが動き出す前に出口へ駆けた。

「セレネ！どうしよう、開かない……！」

先に辿り着いていたハーマイオニーが、ドアノブを回す。

しかし、ドアは開く気配を見せない。なんでさっきまで開いていたドアが、閉じ

ているのだろうか？

——でも、そんなことを考える暇なんてない。今にも、トロールが襲ってくるかもしれないのだ。私は真っ青な顔をしているハーマイオニーの側まで来ると、ローブの中から杖を取り出した。杖でドアノブを軽く叩く。

『アロホモラ——開け』！』

ようやく、あっさりドアが開いた。私達はトイレから出ると、急いで鍵を閉める。ドアの向こうから、トロールの唸り声と暴れ狂う音が聞こえる。——間一髪だったらしい。

「うかつだったわ。私、魔女なのよ。アロホモラは基本呪文集に載っていた基礎呪文じゃない。なんで、私は出来なかったのかしら」

呆けたようにハーマイオニーは口走っていたが、ドアにトロールが激突する音で

言葉を止めた。もし、このドアを破って襲い掛かってきたら——もう棍棒を切ることが出来ない以上、『眼』でトロールを解体しないといけない。私に、それが出来るだろうか？

いや、出来なくてもやり遂げないといけない。

「ハーマイオニー!?」

「って——セレネもなんでいるの!？」

廊下の向こうから、ハリーと赤毛の子が荒い息をして走ってきた。彼らは私達を見て何か安心したらしい。何か言おうと彼らは口を開きかけたが、トロールの怒声を聞いた途端、驚いたように口をつぐんでしまった。

「なんでもいいから、早く先生を呼びに行かないと!!」

ドスン! ドスン!! とトロールがドアを突き破ろうとしている音が、廊下まで震

わせていた。ハリー・赤毛・ハーマイオニーは、恐怖で動けないらしい。誰も何も言わずに、ただ震えながらドアを視ている。

「なにしてんだ！早く先生を呼びに行かないと、みんな死ぬぞ!？」

「ブオオオン!!」

私が3人を叩いて走り出そうとした時——とうとうトロールがドアを破壊してしまった。私は軽く舌打ちをすると、ナイフを構えて——まだ固まっている3人の前に立った。

その時だ。

「ステューピファイ！」

赤い閃光がトロールの顔面を直撃した。トロールは間抜け面をしたまま、後ろに倒れる。

私は茫然と、ナイフを降ろした。

「一体全体あなた方はどういふつもりなんですか!？」

マクゴナガル先生の鋭い声が聞こえる。振り返ってみると、そこには杖を構えたマクゴナガル先生が息を荒げて立っていた。声だけでもわかったが、怒りと冷静さが入り混じった表情をしている。彼女の後ろからはスネイプ先生、それからクイレル先生がいた。

クイレル先生はトロールを一目見ると、ヒーヒーと弱弱しい声を上げ、胸を押さえて廊下に座り込んでしまった。

「殺されなかったのは運が良かった。

なぜ寮にいるはずのあなた方が、ここにいます?」

「寮?」

時計を見るが、まだ夕食の時間だ。

察するところ、トロールが侵入したせいで寮に戻る様に指示された、のかもしれない。

眼鏡をかけながら、そんなことを考えていると、ハーマイオニーが唐突に口を開いた。

「私のせいなんです。先生」

皆の視線が、トロールからハーマイオニーへ移された。

小さいけどハッキリとした口調で、ハーマイオニーは話し始める。

「私が、トロールを捜しに来たんです。私、1人でやつつけられると思いました。あの……本で読んで、トロールについていろんなことを知っていたので。

でも、ダメでした。トイレにいたセレネが助けてくれなかったら、私は死んでいました。

セレネが、トロールの棍棒を粉々にしてくれたんです。ハリーとロンは——夕食の時に私がいないことに気が付いて、心配して助けに来てくれたところなんです」

マクゴナガル先生は私とハリー、それからロン——と呼ばれた赤毛の子を見る。ハリー達は、『ハーマイオニーの言う通り』という表情を浮かべていた。実際、たぶん間違っていないだろう——話の後半部分だけは。

マクゴナガル先生と目が合うと、私も迷うことなく頷いた。本当のことを話してもよかったが——ハーマイオニーが良しとしたんだ。私が、横から口出しすることではない。

「ミス・グレンジャー、なんとという愚かな真似を。グリフィンドール5点減点です。貴方には失望しました。」

貴方たちですよ。1年生が野生のトロールと対決しようとするなんて、生きてるのは運が良かったからです。ですが、友を思うその気持ちは大切なものです。よってミスター・ポッターとウィーズリーには5点、それから——実際にトロ―

ルに立ち向かったミス・ゴントには10点与えましょう」

私は、少し目を見開いた。

まさか、今の行いで減点されたとしても、点がもらえるとは思っていなかった。それは、ハリー達も同じことだったようで、眼には驚きの色が浮かんでいた。

「その幸運に対してですよ、3人とも。

——中断されたパーティーの続きは寮でやっていますので、まっすぐに帰るよう
に」

「はい」

私は、先生方に一礼をすると歩き出した。

だけど、3歩も進まないうちに、ふと——気になることが脳裏に浮かびあがる。私は足を止めると、その疑問を口にした。

「あの——1つ、いいですか？」

「どうしたのかな、ミス・ゴント？」

スネイプ先生が、答えてくれる。

私は、床で鼾をかいているトロールを指さした。

「あのトロール、どこから入って来たんですか？」

「侵入経路は不明だ。だが、普通に生活していれば出会うことは無い。

『禁じられた森』に生息している生物でもないのだな」

「そうですか、ありがとうございます」

私は礼を言くと、その場を立ち去った。

1人で肌寒い廊下を進みながら、先程の戦いについて思いをはせる。

あの戦いで、私が負けていたら——マクゴナガル先生の言う通り、『死んでいた』。『死』、それは、『』の世界へ落ちていくこと。そこから、這い上がることが出来な

いこと。

「嫌」

あんな怖い思いは、もうしたくない。

私は、死にたくない。まだ、死にたくない。もっと、生きていたい。

でも——あの場所に落ちたくないから、生き続けるの？

だったら——私は——何のために、生きているの？何のために、勉強しているの？

優等生でいるためだ。

だけど、それだけのただけに——私は、生きているの？

あの時、一面に映し出された『線』を見て——本当の世界を思い出した。

私は、『セレネ・ゴースト』だけど、私の知る『セレネ・ゴースト』は、9歳までの記憶しかない。

つまり、『線』がある状態で、どのように行動したのかは分からないのだ。

つまり、私は今までの『セレネ』とはいいいがたい存在であり、『セレネ』とは違う。

では——私は、誰なのだろう？

「やめた、別のことを考えよう」

言葉に出来ない恐怖を締め出すように、頭を振う。

すると、次に思い浮かんできたのは、魫をかいだトロールだった。

侵入経路不明のトロールは、この後どうなるのだろうか？

森にいたのでなかったら、誰かが手引きした可能性が高い。では、行き場を無くしたトロールはどうなってしまう？ 人里に下りてきたクマ同様、処分されてしま
うのか？

「勝ったら相手が死ぬ、でも負けたら私が死ぬ、か」

どっちに転んでも『死』が待っている。

けれど、私は『死』が怖くてたまらない。だから、勝ち続けなさいといけない。勉強でも、なんでも——勝たなければならないのだ。

これからも、勝たないと——死ぬ？

いや、さすがに行き過ぎだ。状況と場合によっては、死ぬこともあるだろうが、負けることは、良くないことだ。怖いことだ、と痛感する。

「負けるのは、ダメ」

口から零れた言葉は、闇の中へ消えていった。

7
月
27
日
..
大幅
改定

9 話 スリザリンの継承者

「おい、そこの1年生！」

図書館から帰ると、急に背の高い人たちに囲まれた。

クイディッチの緑色のユニフォームを纏い、がっしりと筋肉のついた身体つき。ざっと見ただけで、7人の大男が私を囲んでいる。いや、違うな——。直接囲んでいるのは、この7人だけが、少し遠巻き気味に険しい視線を向けてくるスリザリン生が多数いる。

何か不味いことをしただろうか、記憶を探ってみるが——これといって特に問題は起こさなかったはずだ。

「何の用でしょう？」

「何の用、だど!? しらばっくれるな、この1年が!!」

どすの利いた声で、真ん中の長身の男が叫ぶ。

薄暗い談話室に、男の声が木霊した。何事か、と寮の方から人が下りてくるのが視界の端に映る。しらばっくれるも何も、知らないのだから仕方ない。

「お前、本当にスリザリン生なのか？」

「スリザリン生ですよ？『組み分け帽子』がスリザリンだと叫んだ場面を、見ていなかったのですか？」

「そういう問題じゃねえよ!!」

ダンっと、1人がテーブルを叩く。

テーブルの上の花瓶が飛び上がり、音を立てて四散する。遠巻きに見ていた女子生徒——たしか、ダフネ・グリーングラスが、小さく悲鳴を上げたが、他の人は割れたことに無頓着だった。

「お前、グリフィンドールと仲良くしているんだってな？」

「しかも、あの憎きハリー・ポッターと」

ああ、なんだそのことか。

私は、呆れたように肩を降ろした。

「別に、仲良くしているつもりはありませんよ？」

事実、ハリーと仲良くしていたことは無い。

『あのハリー・ポッターと、1年生のロン・ウィーズリーとセレネ・ゴントが、侵入してきたトロールを倒した』という噂が広がり、3人と仲良いと勘違いされてしまっている。だけど、実際に仲良くした経験は皆無と言ってもいい。特に、ウィーズリーは、廊下ですれ違うたびに睨むような視線を向けてくる。

ハリー・ポッターとは、すれ違って会釈をする程度の仲でしかない。たぶん、義父のクイールが彼の担任をやっていないければ、もう少し疎遠だっただろう。

「グリフィンドールと一緒にいるところを、俺は何度も見ているぞ？」

「確かに、図書館でグリフィンドール生のハーマイオニー・グレンジャーと『調べもの』をすることはありますね」

ハーマイオニーは、『ニコラス・フラメル』なる人物について調査している。

ハーマイオニーが言うには、どうやら去年までは入ることが出来たらしい『4階の禁じられた廊下』に、『ニコラス・フラメル』なる人物がかかわった何かが隠されているらしいのだ。凶悪な『3頭犬』に護らせるほど、重要な何かが――。

私自身の勉強も忙しいが――1フロアを封じてまで護ろうとしている『何か』の正体が気になってしまった。だから、忙しい時間の合間を縫って協力している。今日だって、『ニコラス・フラメル』について調べていた。生憎と、これといった収穫は何もなかったが。

「しかも、クイディッチの寮対抗試合にも顔を出さないなんて――もしかして、グリフィンドール席で応援していたんじゃないだろうな？」

男はそう言うのと、隣に立つ——まるでプロレスラーのような巨体の男に合図を送る。

巨体の男は待ってました、と言わんばかりに拳を鳴らした。——嫌な予感が、胸を横切る。

「恥を知れ、この『非スリザリン』!!」

その一言と共に、拳が迫ってくる。

この圧倒的な体格差で、拳が当たっては不味い。

私は半歩、右に身体を動かそうとする。しかし、その時、視界に入ってきたのは、後ろから私を抑えつけようとする太い腕だった。

この腕に捕らわれたが最後、私は奴らの気が住むまで殴られてしまう。そんな姿、優等生である『セレネ・ゴースト』に許されるはずがない。

『弱い者は死ぬ』

何故だろう。

床に伸びたトロールが脳裏に浮かんでくる。

それとともに、強烈な『のイメージがフラッシュバックした。

そうだ、私は負けてはならない。負けて、セレネに——いや、私自身に汚点をつけてはいけない。負けることは死であり、死を避けるためには勝たなければならぬのだ。

「仕方ない」

私は、しゃがみこんだ。

もともと、体格差がかなり開いた相手だ。

ストレートの拳は、そのまま標的を変えることが出来ない。ただ、何も無い空間へと打ち出される。後ろから迫っていた太い腕も同じこと。むしろ、このままでは

自分に拳が当たってしまったので、咄嗟に左へ避けてしまったらしい。

この隙を、私は逃さない。そのまま、男の胸に下から突き上げるようにぶつかり、遥かに背が高く体格の良い男を押し倒した。

「1人目」

頭を強く打ち、気を失った巨体の男を一瞥して、他の6人に視線を向けた。

「まだやります?」

最初に話しかけてきたリーダー格らしき男に、視線を向ける。

男は怯んだようにたじろいだ。次の瞬間――逆に頭に血を登らせてしまったらしい。ローブの袖から、杖を取り出したのだ。

「この1年のガキが!!」

その途端だ。

数多の呪文が、私に向けられる。

私はその呪文の雨を潜り抜けようとしたが、1つだけ——眼鏡に当たってしまった。

眼鏡は宙を描き、リーダー格の男の手の中に納まった。

「どうだ！眼鏡が無ければ、動くことも出来ねえだろ、このガリ勉——が？」

その後の言葉は、紡がなかった。

いや、紡ぐことが出来なかった。

何しろ、眼鏡を奪われても私の足は止まらない。あの眼鏡は伊達眼鏡といってもいい代物で、度は全く入っていない。ただ『眼』を抑制するだけの眼鏡だ。線が一面に広がり、頭が痛み始める。だけど、そんな些細なことを気にする余裕はない。飛んでくる呪文を交わしながら、一つ一つ『観察』する。

そのうちに、『面白い線』が視えてきた。

「ま、マークスっ！なんでアイツ、眼鏡ないのに動けるんだよ!!
呪文が一発も当たってないぜ!!」

「まぐれだろ!?数撃てば当たる!」

その言葉に、ふんつと鼻を鳴らした。

毎時間のように図書館と教室を移動している私の脚力を、甘く見ないでもらいたい。
い。

だいたい、そんな闇雲に撃っても魔力を消耗するだけだ。効率よく、狙いを定めて撃たなければ意味がないと、『闇の魔術に対する防衛術』の教科書にも書いてあった。この人たちは、読んでいないのか。はたまた、頭に血が上っているのか。いや、そんなことはどうでもいい。

——もう避ける必要は、なくなったのだから。

私は杖を左手に移し、代わりにナイフを構えた。

後に——とあるスリザリン生は、この時の状況をこう語る。

「眼鏡が吹き飛んだ途端、アイツの纏っていた空気が変わったんだ。

黒い眼から、禍々しい青い眼に——。しばらく、アイツは避けていた。まるで、ダンスでも踊るような軽やかな身のこなしで、全ての呪文を避けていた。だけど、突然、避けるのを辞めて歩き始めたんだ。

——何でもないように、青い眼で晒いながら。

当然、呪文は歩いているアイツに集中する。だけど、アイツはナイフを鞭のように振り下ろすだけだった。ナイフを振り下ろした瞬間、呪文が全部消失するんだよ。いくらマーカスたちが呪文を撃ったところで、何も変わらない。むしろ、呪文の乱

発でマークスたちの方が、へとへとだった。だけど、アイツは汗1つかいていない。青い眼を爛々と輝かせて、くたびれたマークスたちの前に立ったんだ。もう、他のクイディッチ選手たちは一步も動くことが出来なかった。マークスだけが、最後の力を振り絞って呪文を唱えたが——それも、あっけなく消失させられてしまうと、そのまま座り込んでしまった。

セレネ・ゴーストは黒く艶やかな髪を軽くなびかせ、最後の呪文を薙ぎ払った時——静かな口調で、こう言った。

『話にならない。人の交友関係に口出しする前に、魔力の扱い方も勉強なされてはいかがかと思いますか？』

くるり、とそれっきりマークスたちに背を向ける。

その無法備な背中に向けて、マークスはここぞとばかりに叫んだ。

『サーペンソーティア——蛇よ、出でよ！』

マーカスの杖の先から、腕程の太さの大蛇が飛び出した。

蛇は、セレネ・ゴントの首元にまっすぐ飛んでいく。

だけど、彼女は一言、何か囁いた。何を言っていたのか、聞き取ることは出来なかった。それは、言葉ではなかったんだ。そう、まるで蛇が唸るようなシューという低い音、と例えるのがいいかもしれない。

すると、不思議なことが起きたんだ。先程まで殺気を纏っていた蛇が、とたんに大人しくなった。そして、なんとセレネ・ゴントを護る様に地面に這い始める。大蛇を従えて、威厳に満ち溢れ、振り返ることなく颯爽としたその姿に——傍観者と化していた僕達は確信したんだ。

優等生？ いや、優等生なんて枠を突き抜けた異彩な存在——蛇を操る『パーセルタング』の力を秘め、遥かに体格の良い上級生をも倒す。いつもの馬鹿丁寧な仮面を脱ぎ捨てた残酷な笑み——

そう、彼女こそ、『スリザリンの継承者』だ」

※
3
月
8
日
誤
字
訂
正

10 話 クリスマスの前に

クリスマス休暇が近づくにつれて、冬も一段と厳しくなっていた。

ホグワーツは、雪化粧でおおわれている。湖は叩いても割れないくらいに凍りつき、吐く息が白い霧のように立ち上る。誰もが暖かい釜に近づいて、暖をとっていた。

こんな日でも、私は図書館へ向かう。一向に『ニコラス・フラメル』が誰なのか見当もつかず、時間ばかりが過ぎていき、焦りを覚え始めていた。だが、今日は図書館へ行く前に、森番・ハグリッドの家を訪ねていた。

「この蛇、どうやって手に入れたんだ？」

ハグリッドは、蛇の鱗を無骨な指で撫でながら診断する。

私は当たり障りのないよう、真実を一部だけ伝えることにする。ハーマイオニーから聞いた話だと、ハグリッドという人物は見た目通り『単純』な男らしい。真実

を全て伝えなくても、見抜かれることは無いだろう。

「魔法の練習で生み出した蛇です」

「そうか——だから、こんなに弱つとる。今日が峠だろうな」

マーカスが最後の力を振り絞って生み出した蛇を、ゆっくりと見下ろした。

息も絶え絶えで、赤い舌は力なく動いている。その様子は、少し痛々しかった。クイディッチのキャプテンから『迷惑をかけたお詫び』として無理やり押し付けられた蛇で、正直扱いに困っていたのだが——こうして死に瀕していると情が湧くものだ。

どうしても生かしてやりたいと思ってしまう。

「助ける手段は、もうありませんか？」

「こうなっちゃった以上、運命だと思って諦めるしかねえな。魔法で生み出した生き物は、寿命が短けえから、仕方ねえんだ。魔法が切れて消滅まで一緒にいてやる

ことが、せめてもの供養っちゅうもんだ」

「……ありがとうございます」

助ける方法は、ないらしい。

私は蛇をケージの中へ入れると、ハグリッドの小屋を出る。

コートを着込んでいても震えてしまう寒さに耐えながら、雪をかき分けた。

「それにしても、今日が山場か」

やはり、魔力で作られた動物は、生み出した魔力が切れると死んでしまうようだ。元々この世にない命を、無理やり魔力で作り上げるのだから——当たり前といえ当たり前だ。

例えるなら、電池が切れると動かなくなる電気機器、といったところだろう。

この蛇も、もう少しで魔力が切れて動かなくなってしまう。電気機器と違うところは、新しい電池として魔力を供給することが出来ない。寂しい気持ちだが、心の中

に浸透していく。

「ねえ君、何持ってるの？」

ホールを歩いていると、ふと声をかけられた。

私は、内心嫌な気持ちを押しこめて、優等生の仮面を被る。――が、次の瞬間、嫌な気持ちちは消えた。そこにいたのは、スリザリン生ではなく、ドレッド頭のグリフィンドール生だった。

そう言えば、最近話しかけてくる鬱陶しいスリザリン生たちは、こんな気軽に声をかけてこない。少し考えればわかることだったが――疲れているのだろうか？

「これ、ですか？」

私は、蛇が入ったケージを見せる。

すると、ドレット頭は面白そうに目を輝かせた。

「へえ——蛇を飼ってるんだ！」

「魔法の練習で生み出しました」

「いや、それでも飼おうって思うのが凄いな。俺だったら、すぐに捨てちゃうぜ。そうだ！面白いモノを見せてもらった礼だけど、これあげるよ！」

ドレッド頭は、腕に抱えた箱を渡してきた。

気のせいか——中から動くような音がする。

死にかけた蛇を見て、『面白いモノ』と称すことは気にいらないが——それでも、あげるといわれたものを断るわけにはいかない。これといって、断る言い訳も思いつかなかった。

私はケージを床に置いて、ドレット頭の手から箱を受け取ることにする。

「ありがとうございます」

と言って箱を開くと、そこには黒い塊が入っていた。長い毛むくじらの肢が、蠢いている。

私は、思わず袖の下に隠し持っていたナイフを取り出し、振り上げた。

「ストップ!! 殺すのはタンマ!!」

ドレッド頭は泣き笑いしながら、止めてきた。私は、ハッと我に返ってナイフを下ろす。

どうやらこのドレッド頭は、私を驚かせたかったらしい。よく見れば、それは少し大きいタランチュラだった。虫は嫌いでも好きでもなく、文字通り『興味がない』。だが、こうしていきなり目の前に突き付けられると、拒否反応が出てしまう。

「いやゝまさか本気で殺そうとする人がいるなんて。というより、いつもそこにナイフ隠しているの?」

タランチュラの入った箱をドレッド頭に返すときに、自分の失態に気づく。

私は『優等生』だ。『優等生』がナイフを常備しているわけがない。だけど、これに対する言い訳は既に考えてある。私は澄ました顔で、

「護身用です。世の中、物騒ですので」

と、静かに返した。すると、ドレッド頭は少しひきつった顔をする。

「いやいや——ナイフ隠し持ってる方が物騒だろ。」

でも、おもしろいね！君なんて名前？俺はリー・ジョーダン。3年生のグリフィンドール生」

「私はセレネ・ゴントです。スリザリンに所属しています」

その途端、愉しそうな笑顔が一変し、露骨に嫌そうな顔をされる。

「あつ、そうか。スリザリン生だから蛇飼ってるんだな、ふーん」

ジョーダンは、去って行った。

私をバカにするような表情を浮かべて――。

グリフィンドール生の中には、スリザリン生を露骨に嫌がる生徒が多数いる。どうやら、あのジョーダンと言うドレッド頭もその1人だったようだ。恐らく、コートのせいでネクタイが視えなかったのだろう。私は『優等生』なので、そんな些細なことを気にしない。しかし――

「あいつら、が問題なんだ」

ジョーダンに憎悪の視線を向けるスリザリン生数名が、視界の端に映る。

私は内心ため息をつく、ケージを抱え、そのスリザリン生に歩みを向けた。

「何をなさっているのですか？」

優等生の仮面を被り、そのスリザリン生たちに歩み寄る。

すると、彼らの顔に憎悪とは別の赤味が浮かび上がってくる。正直、気持ち悪かったが——それをいつも通り無視すると、私は言いたいことだけを簡潔に伝えた。

「私はあの人と、ただ1人の『ホグワーツ生』として話していただけですよ。

それに——貴方方がこれからしようとしていることを実行したら、誰に迷惑がかかると思いますか？」

「……申し訳ありません」

謝るスリザリン生に、私は何でもないというように手を振った。

「謝る必要はありません。以後、行動に気を付けてくださいね」

「は、はい!!」

私はスリザリン生に背を向ける。

どっと疲れが出たが、ここで休むわけにはいかない。

スリザリンのクイディッチチームの選手に絡まれてから、私の環境が変わった。あの時、絡んできたスリザリン生を徹底的に、しかも談話室の入り口で倒したからだろう。それから、『スリザリンの継承者』として私を信奉する上級生が増え始めたのだ。

正直、勉強の邪魔でしかないし平穩の妨げにしなければならない。基本的に手綱を握っているつもりだが、時折——今のうちに、私に不敬を働いたグリフィンドール生に鉄槌を下そうと考える輩がいる。あの場でクイディッチ選手を倒さなかったら、こんなことにはならなかったと後悔する反面、あれでよかったのだと納得する私もある。

あの場で反撃していなかったら、私は惨めな学校生活を送ることになっていた。友達も出来ず、優等生でもない。そんな——寂しくて、誰からも見向きもされない7年間を——。

「ああしないと、死んでた」

私は死んでいた。

彼らを倒さないと、死んでいた。だから、生き残るために倒した。

その結果がどうであれ、私はこうして生きている。生きているなら、それでいいではないか。

「生きている」

ケージの中の蛇を見下ろす。

いまは、生きている。

人の手によって作り出された人工的な生命体だが、それでも生きている。

でも、もうすぐ命の炎が消えかかっている。助ける方法は、今の私にはなかった。

「それにしても、不思議」

考えてみると魔法で生き物を生み出すとは、極めて不思議な現象だ。

現代の科学において、ロボットという疑似人間を作り出すことは出来るが、ここまで完成度の高いロボットは見たことも聞いたこともない。

1年生用の基本呪文集や変身術の教科書には、何もないところから有機物を生み出す魔法は掲載されていない。マッチ棒という無機物を、全く違う物質構成である針へ変身させる方法は載っているのに――。少しずつ、変身術に興味が湧いてきた。

蛇を自室に戻したら、図書館へ行こう。今年のクリスマスは、変身術関連の本を読み漁ろう。

もしかしたら、その中に『ニコラス・フラメル』につながるヒントが隠されているかもしれない。

淡い期待を込めて、私は歩みを速めた。

3
月
12
日
..
一
部
訂
正

11話 賢者の石

「何かがおかしい」

ふと、口から言葉が零れ落ちる。

普段は誰も気にも留めない独り言だが、この時ばかりは違った。

「どうしたの、セレネ？」

まだ部屋に残っていたダフネ・グリーングラスが、私の呟きを聞きとめてしまった。

スリザリン生には、大きく分けて3種類に分かれる。私を「スリザリンの継承者」と崇める連中、私のことを恐れて避ける連中、そしてグリーングラスのようにどちらにも属さない連中だ。グリーングラスは、私に怯えることなく、かといって過剰に接することなく、以前どおりに同級生として接してくれる。少し……珍し

い存在だ。

「いや、別に何でもありませんよ」

「そう？ちょっと気になるんだけど」

グリーンガラスは、人懐っこい笑顔を浮かべていた。

私はグリーンガラスから目を逸らすと、本に目を落とす。変身術の歴史に関する本の隅に、「ニコラス・フラメル」という名前が小さく掲載されていた。変身術の亜種——鉱物を黄金に変身させることに特化した「錬金術」の権威として。

「それにしても、セレネは凄く本を読むんだね。これ、錬金術の本でしょ？」

足元に置かれた古い一冊の本を、グリーンガラスが捲り始める。

私は少しだけ、驚いてしまった。ホグワーツに「教科」として取り上げられていないこと分かる様に、かなり廃れた過去の学問だ。現に錬金術関連の本は、図書館

の隅で埃を被っている。この本だって、探し出すまでに苦労したものだ。「変身術の歴史」のコラムに記載されていなければ、私も錬金術に対して興味を抱かなかったかもしれない。

「グリーングラスは、錬金術を知っているのですか？」

「ちょっとだけ。3つ下の妹が錬金術に興味を持っているの」
「そうですか」

グリーングラスの妹は、勉強家らしい。

私よりも幼いのに、錬金術に興味を抱いているとは——だが、今はそんなこと関係ない。

「錬金術」は、鉱物から黄金を生み出す学問だったが、時が流れ「賢者の石」という伝説の鉱物を創造する学問へと変化していったらしい。「賢者の石」は、いかなる鉱物をも黄金に変身させる力があるだけではなく、飲めば不老不死になる「命の水」の源でもある。その現存する唯一の石を作り出した者こそ、「ニコラス・フラ

メル」なのだ。フラメルとフラメル夫人が600歳を超えることから察するに、この石が贋作である可能性は、0に等しい。

恐らく、3頭犬は「賢者の石」を護っているに違いない。だが――

「グリーングラス、1つ尋ねてみていいですか？」

「えっ、セレネが私に!? い、い、いいけど……上手く応えられるか、分からないよ？」

グリーングラスは、急に顔を恥ずかしげに赤らめた。

優等生の私が尋ねることなので、難しいことを考えているのかもしれない。だが、これは極めて簡単な質問だ。むしろ、他の人の意見を聞きたいという意味合いが強い。

「3頭犬——ケルベロスを知っていますか？」

「ケルベロス? うーん、物語に出てきたような……ごめん、よく分からない」

「ありがとうございます、助かりました」

やはり、ケルベロスは魔法界でも有名な怪物らしい。

記憶が正しければ、ギリシャ神話に登場する怪物だ。グリーングラスのような一般学生でも知っている可能性が高く、その気になれば伝説を調べることが出来る。つまり、簡単に突破される可能性があるのだ。つまり、ケルベロスだけに護らせている可能性は低く、他にも護りの魔法をかけている可能性が高い。だが——そんな大事な品物を、わざわざホグワーツに保管する必要があるのだろうか。しかも、今年から——

「そ、そういえば、セレネは今日予定あるの？ あっ、もしかして今日のスリザリン対レイブンクロー戦を観に行くなら、私も一緒に——」
「申し訳ありません。私は、調べ物をするため図書館へ」

私は、鞆の中に本を詰める。

あまりに大量の本を詰め込まれた鞆は悲鳴を上げていたが、そんなこと気にする余裕はなかった。新しく調べないといけないことが、出来てしまったのだ。万が一、鞆が切れてしまったら、その時はその時だ。新しい鞆を調達しても良いし、それまではビニール袋か何かに入れて運んでも良い。今は、この本の山を図書館に返し、新しい本を読まなければ――

「あ、じゃあ、玄関ホールまで一緒に行ってもいいかな？」

「構いませんよ」

優等生のセレネが、彼女の誘いを断る必要はない。

だけれども、急いでいることも事実。私は、グリーングラスより半歩前を歩いた。私を誘うだけで気力を使い果たしてしまったのだろうか、グリーングラスは嬉しそうに微笑みを浮かべたまま、何も言わなかった。

しばらくの間、黙って歩いていった。

普段は静かな休日の朝だが、今日はクイディッチの試合があるからかもしれないな

い。だが、それにしても何かがおかしい。異様なほどに騒ぐ声が、廊下で反射している。しかも、玄関ホールに近づくにつれて、騒動は大きくなっていった。

「何かあったのかな？」

グリーンガラスは、不安そうに呟いた。

私も一抹の不安を覚えたが、優等生らしく普段通りの口調、普段通りの表情を心がける。

「そのようですね」

玄関ホールは、蜂の巣をついたような大騒ぎだった。

各寮の生徒が入り混じり、口々に何かを騒ぎ立てている。寮の得点を記録している大きな砂時計が、あまりの生徒の多さに隠れて見えない。

「ゴースト、それからグリーングラスもいるじゃないか」

人混みの中から抜け出してきたマルフォイが、話しかけてきた。

いつになく上機嫌で、顔がにやけている。

「その顔を見ると、さすがのゴーストでも、何が起こったのか分からないみたいだな」

気取った口調で、マルフォイは話し始めた。余鼻歌でも歌いだしそんな雰囲気をつらいついてる。

この嬉しそうな雰囲気。私より先に情報を手に入れた、と言うことだけではないらしい。マルフォイが手放して喜びそうなこと、といえば――

「グリフィン・ドールで問題が発生しましたか？」

「その通り。ポッターとグレンジャーとロングボトムが夜に抜け出して、グリフィ

ンドールを150点減点したんだよ」

「150点!？」

私とグリーングラスの声は、同時に響いた。

150点ということは、1人50点と言う計算だ。しかし、どうにも腑に落ちない。記憶が確かであれば、夜歩きは20点の減点と罰則だと校則に規定されていたはずだ。しかし、30点も増加してしまっているとは、どうしてだろうか。

「夜歩いただけではないみたいです」

「そこに気づくとは、さすがゴースト。だが、その理由までは知らない」と

「……マルフォイは、ハリー・ポッター達は何をしでかしたのか、詳しく知っているのですね？」

そう尋ねると、ますますマルフォイの鼻が高くなった。

「あいつらは、夜中にドラゴンを運んでいたのさ」

「ドラゴン!？」

グリーングラスが、小さな悲鳴を上げた。

ドラゴンは最高級の危険度を誇る魔法生物で、取扱いには厳重な注意をしなければならぬと本に書いてあった。そんなドラゴンを、どうして一般学生に過ぎないハリー達が運んでいたのか、私には理解できなかった。とてもではないが、作り話にしか聞こえない。しかし、マルフォイは自信満々に話を続ける。

「そうさ！先生たちは、口止めしているみたいだけどね。森番が手に入れたドラゴンを、天文学の塔で専門家に引き渡す手伝いをしてたんだ」

マルフォイの話に、グリーングラスは驚きの色を隠せない。とんでもない事態に、失神してしまいそうだ。私は、視線をマルフォイから砂時計へと移す。集っていた生徒が減り、ここからでも砂時計が視えるようになっていた。マルフォイの言

う通り——積み上がっていたグリフィンドールの大粒のルビーが、シヨベルカーで根こそぎ掘ったかのように減っている。1度の授業で稼げる点数は良くて10点だと換算すると、150点を今から積み上げ直すのは至難の業だ。これで、今年のグリフィンドールが寮対抗杯を手にする可能性は限りなく0に近くなったと言える。しかし——

「2つ疑問があります、マルフォイ」

「なんだ、ゴント。他に聞きたいことでもあるのか？」

マルフォイは、今にも高笑いを始めそうだ。

調子が良い奴、とは、まさに彼のことを指すのかもしれない。そんなことを考えながら、私は指を2本——マルフォイの鼻先に立てた。

「1つ、先生が箝口令を敷いている内容を、何故そこまで詳しく知っているので
す？」

それからもう1つ。一晩でスリザリンから20点程減点されているようですが、心当たりはありませんか？」

「さ、さあ。なんのことやら、僕にはわからないね。

と、とにかく！ドラゴンなんて野蛮な物に関わるグリフィン・ドール生と関わらないことだな」

マルフォイは、急に齒切れが悪くなり、取り巻き2人と逃げるように立ち去って行った。

私は、少し肩を降ろした。調子が悪くなったら直ぐに逃げ出す、なんて3流にも程がある。授業で手際の良いマルフォイの評価を上げていたが、少し下げる必要がありそうだ。

「どうしてドラコは逃げ出しちゃったんだろう？」

グリーン格拉斯は、消え入りそうな声で呟いた。

別に教えても教えなくても良いが、私は優等生のセレネ・ゴントだ。悩んでいる人があれば、自分の分かる範囲で教えることも仕事の1つ、のはずだ。

「恐らくですが、あの夜に出歩いていたのではないのでしょうか？ ハリー・ポッター達が、ドラゴンを運ぶ現場を捕えようとしたのかもしれないかもしれません。

——それでは、グリーン格拉斯。私はこのあたりで」

まだ茫然としているグリーン格拉斯に背を向けて、私は目的地へと急いだ。

ハリー達がドラゴンを運んだこと、グリフィンドールが最下位になってしまったことなんて、もう興味がなかった。誰もいない図書館で、本を返しながら古びた天井を見つめた。吹き抜けになっている図書館の上には、3階の廊下が——そして、さらに上には、4階の廊下が広がっている。

「『賢者の石』は、この城にある」

600年以上、どこか別の場所に保管されていた「賢者の石」が、4階の廊下という手に届く場所にある。どうしてホグワーツに、それも去年までは通行できた場所に保管するのだろうか。まるで「ここにありますが、盗んでください」と言っているようなものだ。

ここで考えられる推理は2つ。

1つ目は、4階の廊下はダミーであり、他に安全な隠し場所が用意されている。2つ目は、4階の廊下に本当に「賢者の石」があるが、盗みに入ったところで見つけ出すことは出来ずに捕まるだけ。

どちらの選択肢を選んだとしても、共通点は1つ。すなわち、「賢者の石」を盗もうとしている「誰か」がホグワーツに潜入している可能性があるということだ。それでなければ、ケルベロスと言う目に見える脅威を用意する必要がない。

「まあ……そいつの正体なんて、どうでもいい。……あ、これだ」

私は、探していた本を取り出した。

誰が「賢者の石」を狙っているなんて、私には興味がなかった。必要なことは、「賢者の石」がホグワーツに、そして恐らく「4階の廊下」にあるということだ。

『ギリシャ神話——ケルベロスの伝説』、これですね」

埃をかぶった古びた本を、やっとの思いで引っ張り出した。

埃を払いながら、私は笑みが込み上げてくるのを抑えきれない。

永遠の命をもたらすという「賢者の石」を手に入れることが出来れば、もう「死」を恐れる必要がなくなる。私は永遠の存在になり、身体からは「線」が消えるはずだ。

眼鏡がないと生きていけない世界とは、これでお別れだ。
そして、あの吐き気のする空間に落ちる必要もなくなる。

「さてと、勉強しますか」

防御の魔法に関しては、勉強する必要がない。

先日的一件で、魔法にも「線」があることが判明した。防御の魔法なんて、「線」を切ればいい。だから、今の私に必要な知識は、ケルベロスの倒し方と、他に攻撃的な怪物がいた場合に対する対処魔法を覚えること。

この2点だ。教師の目を欺くことなんて、考える必要もない。

何故ならセレネ・ゴーストは、誰もが認める「優等生」なのだから――。

12話 2つの顔

前半、ハリー視点です。

僕は、愕然とした。

セブルス・スネイプの魔の手から「賢者の石」を護るため、数々の罠を乗り越えてきた。

ロンの機転とハーマイオニーの学年屈指の頭脳を借りて、ここまでやってきたのだ。

今、僕の隣に2人はいない。

ロンはチェスの間で犠牲になり、学年屈指の頭脳を誇るハーマイオニーも、先程

別れなければならなくなってしまった。

だから、僕は、2 人の想いを背負ってここにいる。

それなのに——……

「まさか……なんで」

目の前にいたのは、クィレルだった。

普段とは打って変わり冷静沈着なクィレルは、この場にヴォルデモートがいると話した。しかも、スネイプが僕のことを護っていた、と言い始めた。

僕の頭は、混乱する。今まで考えていたことが否定され、新たな真実を立てられたのだ。

しかも、クィレルは誰かと話すように独り言を呟き始めたのだ。

ぞっとする。背筋が凍りそうだ。どうすればよいのか分からず、クィレルの奇行を眺めているしかない。

「……ポッター、ここに来い」

クィレルが呼んだ。

彼の後ろには、望みを映し出す「みぞの鏡」があった。

僕は逆らいたかったが、彼の言葉には強制力があつた。

だから、逃げることも断ることもできず、鏡の前にたつた。

嘘をつかなくてはいけない。何が見えても嘘を言えればいい。必死で僕はそう考えた。青白く怯えた自分の姿が鏡に映る。

以前、見たときは自分の死んだ両親が映つた。きっと、今回も同じ光景が映るのだろう。

そんなことを考えていると、次の瞬間、鏡の向こうの自分が僕に笑いかけてきた。鏡の中の僕はポケットに手を突っ込み、血の様に赤い石を取り出した。そしてウィnkをしてポケットに石を戻す。すると、そのとたんにポケットの中に何か重いモノが落ちるのを感じた。

なぜか、信じられないけど、僕は『石』を手に入れてしまったのだ。

「どうだ？何が見える!!」

「ダ、ダンブルドアと握手してる!!僕のおかげで、グリフィンドールが優勝して

――

「嘘だ!!」

クイレルが唇を動かしていないのに、どこからか声が響く。ここまで来るときに破った「悪魔の罠」が僕をその場に釘付けにしてしまったように、指一本すら動けなくなってしまった。

『俺様が直に話そう。そのくらいの力ならある』

「分かりました」

クイレルが、ターバンをほどこうとしている。見たくない、その中にあるモノが恐ろしいモノだと直感した。でも、目を背けられない。

するりとターバンが落ちた。ターバンを巻いていないクイレルの頭はずっと小さく見えた。

僕は悲鳴を上げそうになった。けれど、喉が詰まったように声が出なかった。

クイレルの後頭部には、もう1つの顔があった。僕が、これまでに一度も見ることがないような恐ろしい顔だ。蠟の様に白い顔、獣のように血走った目、鼻孔は蛇のような裂け目になっていた。

「ハリー・ポッター。また会ったな」

恐ろしい顔は、低い声で蛇の声のように囁いた。

僕は後ずさりしたかったが、怖くて動けない。あの顔の正体は何者なのか、クィレルは口に出していなかったが、自然と名前が口から零れ落ちた。

「……お前は、ヴォルデモート……」

「そうだ。だが、この有様を見ろ。」

ただの霞と影にすぎない。誰かの身体を借りて初めて形になれる……この数週間にはユニコーンの血が俺様を強くしてくれた……この忠実なクィレルが俺様のためにユニコーンの血を飲んでいるところを森でみたはずだ。だが、完全なものとは程遠い。そのためには『石』が必要だ。命の水さえあれば、俺様自身の身体を創造することができるのだ。

さて、ポッター、まずはお前からだ。ポケットにある『石』を渡してもらおう」

ヴォルデモートは、何故か「石」を持っていることを知っていた。

途端に、魔法が解けた様に肢の感覚が戻ってきた。よろよろと僕は後ろに後退する。

どうやって守ればいい？

僕は混乱した。赤子の頃に、ヴォルデモートを撃退したらしいが、どうやったのかは全く記憶にないし、再び勝てるとも限らない。しかも、クィレルという大人の魔法使いもいるのだ。

僕は、ロンみたいに魔法界で生きてきたわけでもなく、ハーマイオニーのように学年屈指の頭脳の持ち主でもない。

魔法を習って1年足らずの、ただのハリー・ポッターだ。

一人で、勝てるわけがない。

だけど、立ち向かわないといけない。

勇気を振り絞って、勝利する算段を必死になって考え始めた時、ヴォルデモートは嘲笑うように口を開いた。

「その子鼠も、隠れていないで出てきたらどうだ？」

「「えっ？」」

僕とクィレルの声が重なる。

ヴォルデモートは鏡越しに一点を——僕の斜め後ろの柱を睨みつけていた。

「……さすが、今世紀最大の闇の魔法使いですね」

聞き覚えのある凜とした声が、部屋の中に響き渡った。

かつん、かつん、と軽快な音と共に颯爽と現れたのは、スリザリンの少女……

「セレネ？」

「魔法薬の試験以来ですね、ハリー・ポッター」

セレネが口元に微笑を浮かべていた。

彼女は同級生の中では背が低く、端正な容姿と儂げな印象を併せ持った秀才だ。ちらちら燃える炎の光が眼鏡に反射し、彼女の心情をうかがい知ることとはできない。

ただ、彼女は規則破りを嫌っているように見えた。

ハーマイオニーと似たタイプで、勉強に勤しみ、知識の吸収に励んでいる。彼女が規則を破って減点された、なんて話は一度も聞いたことがない。

だから、どうして、彼女がここにいるのか、僕には理解できなかった。

「どうしてセレネが、ここに……？」

「言わなくても分かりませんか？」

今日は試験の最終日で、どの先生も採点に忙しく、見回りに人手を割く余裕はあ

りません。もし、『ニコラス・フラメル』なる人物が関係する『大切なモノ』を暴こうとする人間がいるのだとしたら——今日は絶好の日和でしょう。

しかし……まさか、本当に『賢者の石』が隠されているとは、思いませんでした」少し驚きの色が滲んだ言葉を聞きながら、僕は記憶を辿った。

ハーマイオニーがセレネに「『ニコラス・フラメル』を知っているか」と尋ねたことがあった。

しかし、それは空振りに終わった。ハーマイオニーが少しがっかりしていたことをよく覚えていた。

もしかしたら、セレネは勉強の合間を縫って、独自にフラメルについて調べていたのかもしれない。

僕はいくらか気が楽になった。

セレネ・ゴーストが加勢に来てくれた。これで、一人ではない。

僕達が対するのは「闇の魔術に対する防衛術」の先生とヴォルデモート。

勝率は物凄く低いけど、1パーセントくらい上がった。

一人より、二人で立ち向かう方が、ずっといい。

「ゴーンの末裔だったか……どうだ、俺様と手を組まないか？」

ヴォルデモートがセレネに水を向けた。

悪の誘惑だ。

セレネは何も答えない。ゆつくりと階段を音を立てながら降りる。セレネは正体を現すように眼鏡を外しながら

「非常に興味深い話ですね」

と、小さく、しかしハッキリと呟く。

そして、ローブから優雅に杖を取り出した。

僕は雷に打たれたような衝撃を受けた。

セレネは、僕の隣まで降りて来ていた。杖で左掌を叩く様子は、まるでヴォルデモートに対して拍手を送っているように見える。心なしか、言葉の端に敬意の念が籠っているような気もする。

僕は後ずさりするように、セレネから一步離れた。

「セ、セレネ!! アイツはヴォルデモートだ、騙されちゃいけないよ!!」

「ハリー・ポッター」

鈴の音の様に美しい声が、地獄の底なし沼から響いてくるような印象を受けてしまう。セレネの眼が禍々しい青色に輝いていた。彼女の後ろに、何か強大な闇が控えているように幻視してしまう。

「セレネ!？」

「ハリー・ポッター。少しの間、動かないでくださいね」

セレネは、僕に向き合うと杖を突きつけてきた。

その様子を見て、ヴォルデモートが高笑いした。

「無様に裏切られたな、ポッター」

僕は、その場から動けなかった。

セレネの瞳に眼が引き付けられていた。青い瞳はたくさん見てきた。ロンやマルフォイ、ダンブルドアも目が青い。

けれど、セレネの青は違う。彼女の青い瞳には、限りなく「死」の色が濃厚に滲み出ている。

それは、両親が死んだ夜に眼にした、緑色の光と重なって見えた。

「セレネ、やめるんだ!!」

『ペトリフィカス・トタルス―石になれ』!!」

セレネが呪文を叫んだ。

僕は、もう駄目だと齒を食いしばる。

ところが、僕が全身金縛りで倒れることにはならなかった。

呪文を唱える瞬間、セレネは杖を僕から離し、杖の方向を左へと向けたのだ。

そう、油断し切っているクイレルの方へ。

「なっ!？」

例えるなら、バスケットボールのパスを回す光景に似ていた。

見ている方向も進行方向も確実に僕なのに、まったく別の安全な場所へボールをパスする。

呪文と言うパスを受けたクイレルの両腕は身体の脇に貼り付き、両脚は閉じられてしまった。そして、大きな音を立てながら、前のめりに倒れ込んだ。

「……さてと、これで数分間は『例のあの人』を無効化できますね。今のうちに逃げますよ、ハリー」

セレネは僕の腕をつかむと、来た道を走り出した。

僕は後ろに振り返ることも出来ずに、セレネの背中を見つめ続ける。

入口を塞いでいた黒い炎は、影も形も見当たらない。セレネは迷うことなく扉を開け、未だに軒をかいているトロールを乗り越え、チェスの間に辿り着いたとき、ようやく足を止めた。ロンやハーマイオニーの姿は、何処にも見当たらない。もうダンブルドアを呼びに行ったのだろう。そう思うと、緊張していた心が解れる気がした。

「はあ……はあ……とりあえず、ここまで来たら、一安心ですね」

セレネは荒い息を整えるように、ビジョップの残骸に寄りかかる。

僕も糸の切れた人形のように、その場に座り込んだ。しばらく互いの息の音だけが聞こえた。

「僕……僕、てっきり、セレネがヴォルデモートの味方をするかと、思ったよ」

「まさか」

セレネは、それこそありえないというように首を横に振るった。彼女の額から汗が流れ落ちている。そして、疲れた様に青い瞳を閉じた。

「この場合の勝利条件は、『賢者の石』を他の人に渡さない事です。

それから……あんな無様な姿になってまで生き延びようとする敗者の手下になんて、なりたくありませんから」

それは、優等生^{セレネ}らしからぬ侮蔑の色を帯びた発言だった。

さすがのセレネでも、ヴォルデモートの塵にも等しい無様な姿には嫌悪感を抱いたのだろう。

「しかし、そろそろ魔法が解ける頃でしょうから……作戦を考えましょう」

「作戦？」

僕が問うと、セレネは目を開けた。

やはり瞳は見慣れた黒ではなく、不気味なくらい蒼く輝いている。

「きつと、このまま走っても追いつかれてしまいます。少し『石』を見せてくれませんか？」

「あっ、うん」

セレネが指し伸ばした手に、僕は「賢者の石」を乗せた。

一見すると普通の石のようで、とてもではないが魔力を帯びているようには見え

ない。しかし、炎にかざして視ると、どこことなく赤く輝いているようにも見えた。

「これが石、ですね」

セレネは感慨深く呟くと、大切そうにローブの内側に仕舞いこむ。そして、代わりに杖を取り出した。炎に照らされた横顔は、どこことなく覚悟を決めた色を放っている。

「ハリーは、石を持ったふりをして逃げてください。私は、ここで足止めをします」

「でも、セレネは……」

「心配しないでください、私は生きて帰りますよ」

どこことなくこちない笑みに、少し不安を覚えてしまう。でも、セレネ・ゴーントは僕より遥かに上に行く魔法を扱う。もうじきダンブルドアも来ると思うから、きつと……

「よくもやってくれたな、1年生風情が!!」

クイレルの鋭い声が、宙を割いた。

セレネは声に反応する間もなく、壁に吹き飛ばされてしまった。

「セレネ!!」

「小汚い小娘の処分は後回しだ。今は石をよこせ、ポッター!!」

セレネの思惑通り、クイレルとヴォルデモートは僕が「石」を持っていると思い込んでいるみたいだ。クイレルは気を失った様に倒れ込む——現在「石」を隠し持つセレネには目もくれず、僕に襲い掛かってきた。

「石を渡せ、ポッター!!」

「やる……ものか!」

額の傷が鈍く痛む。しかし、痛みには呻いている場合ではない。クイレルが、首を絞めようと僕に手を伸ばしてきた。僕は咄嗟に手を伸ばし、クイレルの顔をつかむ。

「ああああ!!」

クイレルは、転がる様に僕から離れた。

クイレルの顔は、無残なまでに焼けただれていた。どうやら、クイレルは僕の皮膚に直接触れることは出来ないのだ。そうと分かってしまえば、話は早い。クイレルが痛みでうめいている間に、僕は飛び起きるとクイレルの腕を捕まえて、力の限りしがみついた。クイレルは悲鳴を上げて僕を振りほどこうとしたが、僕は放さな

い。そのうちに、額の痛みは益々ひどくなっていっていった。視界から色が消え、辺りが黒く染まってい——。

「殺せ！ 殺せ!!」

ヴォルデモートの恐ろしい声が、近く——いや、遠くから聞こえてくる。クィレルの悲鳴も、全て遠のいて——意識が下へ下へと沈んでいった。

「やった……やったぞ」

私は、身体中の鈍い痛みに耐えながら、ゆっくりと立ち上がった。

ハリー・ポッターに宿る力により、クィレルは土塊へと変わり、ヴォルデモート

は身体を無くして飛び去って行った。この場に立っているのは、私だけ……そう、「賢者の石」を手にした私だけだ。

「何もかも、計算通り。私が……勝ったんだ」

私は拳を高く掲げたくなった。

一人でここまで到達するのは、正直、少し難しかった。

だが、難しかっただけで、できなかったわけではない。

オルゴールでケルベロスを眠らせ、難しい罫は「眼」を使って突破した。いくつかの扉は開かなかったので、直死の魔眼で強引に突破する。

最後の最後の「鏡の間」で、クイレル先生がいたことには驚いてしまった。しかし……先生が、ターバン越しのヴォルデモートと交わっていた会話から、ハリー・ポッターが「石」を手に入れる鍵を握っていることが分かれば、そのまま隠れているだけで良かった。

ハリーからの信頼は、それなりに得ている。クイレルを一時的に無力化すれば、彼から石を受け取ることなんて朝飯前だ。

「ただ、飛ばされたのは痛かったな……まあいい。さっさと帰るか」

私は、そのまま杖を適当な駒へと向ける。

練習した変身術で「賢者の石」のレプリカを作り上げ、ハリーを連れて帰還すれば全て解決だ。ハリーは幸い、命に係わる怪我をしてなさそうだ。レプリカは本物として再び保管され、無事に守り通せたと皆は安心する。そして、私は念願の「賢者の石」を手に入れることができる。

賢者の石さえあれば、死を克服することができる。

死を克服することが出来れば、こんな眼鏡がなくても、死の線が視えない生活が送れる。

他者の線は視えてしまうかもしれないが、少なくとも、自分の身体に蔓延る線は消滅する。

もう、目覚めるたびに、自分が崩壊していく幻影を見なくて済む。

この石があれば、自分の身体から死の概念は拭い去られ、自分の身体の死を見なくて済むのだ!!

素晴らしいではないか!

まさか、誰もセレネ・ゴントが石を盗んだなど思うまい。規則破りは表面上行

わず、学年でも高い順位をキープしている少女が、それも1年生が、クイレルやヴォルデモートの目をかいくぐって盗むとは思うまい。

たとえ、石がレプリカだと気付かれても、シラを切り通せばいい。

犯人は、消滅して行方知れずとなったクイレルへ向けられるのだから――。

「『ジェミ――』」

「そろそろ帰る時間じゃ、セレネ」

この場にいるはずのない声が、チェスの間に木霊する。

突然のことで、呪文を唱える手を止めてしまった。

心臓を鷲掴みにされたような感覚が、電気のように身体を駆け抜けた。

おそろおそろ振り返ると、そこにはダンブルドア校長が立っていた。柔らかな笑みを浮かべ、私に手を伸ばしている。私は、呆気にとられて校長の掌を見つめた。

「しかし、その前に大事な石を返してくれないかの？」

次回、「賢者の石編」が終了です。

13 話 青い瞳

「石を渡してもらおうかの、セレネ」

ダンブルドアの出現により、私の脳内は今までにないくらいのもので回転する。このまま石を差し出すなんて、勿体無いことは出来ない。しかし、優等生のセレネ・ゴーンの行動を考えると、ダンブルドアに逆らうことなんてご法度だ。そもそも、ハリー・ポッターやクィレルの話によると、ダンブルドアは遠いロンドンまで出張していたはず。なのに、何故——ここにいます？

「ロンドンに着いた時、ワシはいるべき場所を離れてしまったことに気がついたのじゃよ。そして、慌てて帰って来たというわけじゃ」

「そうですか」

戻ってくるタイミングが、遅すぎるような気がするが——今はそれどころではな

い。私にとって、なんて間の悪い帰還だろう。ひとまずは、この場を切り抜ける方法を模索する。しかし、ダンブルドアは

「さて、話を戻そう。その石を渡してもらおうかの、セレネ」

全てを見透かしたような瞳で、私を覗き込む。

私は内心、小さく舌打ちをした。何と言いつつ繕ったとしても、嘘は全て見抜かれてしまうだろう。真実を言いたくない、しかし嘘をついたところで意味がない。石が欲しい。あの恐ろしい「死」から逃れる方法も、この「線」だらけの世界から逃れる方法も、全て手に入れない。しかし、実現するためには目の前の強敵―ダンブルドア―を騙さなければならぬ。しかし、ダンブルドアに嘘をついても見破られてしまう。あの青い瞳の前に、嘘は通じない。

私が目覚めてから、初めて「欲しい」と思った物を手に入れ、ダンブルドアに嘘をつかず、どこまでも優等生らしく、どこまでもセレネ・ゴントらしく振舞うた
めには――

「私は、石を護ろうとしただけです」

青い眼をしたセレネは、まったく笑っていなかった。

開心術を使わなくても、嘘をついていることは分かっていた。以前、病室で出会った時のセレネ・ゴントと今の彼女は何も変わっていないように思えた。あの時から、何も成長していない。「死」を怖がることしか出来ない、自己も持たない少女のままだ。

そんな少女が「賢者の石」を手に入れてしまったが最後、石を手放すとは思えなかった。

だからこそ、しばらく見張っていたわけだが——どうやら、目論見はあたってしまったらしい。

「先程『複製魔法』をかけようとしていたみたいじゃが、何故かね？」

「石のレプリカを作ろうとしていました。錬金術の最高峰とまで謳われる「賢者の石」を調べようと思ひまして」

セレネは、ローブの中から石を取り出した。

それは、本物の賢者の石だった。炎に照らされて、赤く輝く石を見間違えるはずがない。

しかし、あそこまで出し渋っていたセレネが素直に石を出すとは、思えない。何か裏があるはずだ。わしは「開心術」を使うことにした。セレネの眼を覗き込み、彼女の思考を探る。

「純粹に研究対象として、手に入れようとしたのじゃな？」

「はい」

セレネは、迷うことなく答えた。

わしは、戸惑ってしまった。

セレネは、嘘をついていない。研究対象としてではなく、永遠の命を手に入れるために欲していたはずだ。そう、先程までそこに漂っていたトム・リドルの様に。

「この石を、使おうと思わないのじゃな？」

「はい」

またしても、間髪入れずに答える。

そんなはずがない。明らかにセレネ・ゴーストは嘘をついている。

わしは心を読み取ろうとして、愕然とした。こんな状態、今までに見たことがない。

まさか——この年齢から、わしをも拒む「閉心術」を使いこなしているのかと思ったが、すぐに違うことに気づいてしまう。

セレネは、「閉心術」で心を閉ざしている状態ではなかった。

ただ純粹に、何も考えていなかった。今の彼女は、何も考えずに話している、ということになる。そんなことは、ありえない。

「それでは——君は、永遠の命に興味がないのじゃな？」

「興味はあります。非常に調べてみたいです」

人間は、必ず何かを考えている。

話す言葉ですら、無意識下において言葉を事前に反芻してから話します。

どれほど早く話すとしても、言葉を発するに至った考えの基盤が存在する。

しかし、今のセレネ・ゴーストにはそれが無い。自己がなく、考えもない。そう、それはすなわち——何も考えていない。

「あくまで研究目的、ということかね？」

「はい」

いや、よく思考を読み取れば、考えている。

しかし、考えが出て言葉にするまでの間が、今まで見た誰よりも早いのだ。

誰よりも早く、優等生らしい言葉が飛び出してくる。

それは1年間——どこまでも優等生らしい立ち振る舞いを自らに強要した結果、

なのだろうか。

「憐れじゃな」

言葉が零れ落ちてしまう。

わしは目を瞑ると、開心術を止めた。

まるで人形と対峙しているようで、心が痛くなる。大切な生徒が心を閉ざす以前に、これほどまでに悲惨な状態になっていようとは思わなかった。

自分の記憶を自分の物として遡ることが出来ない。その時点で既に少女は壊れていた。だが、そこから日々の積み重ねを通じること、新しい自己を獲得して欲しいと——いや、獲得できると思い込んでいた。しかし、実際には違った。

目の前の少女は、壊れたままだった。

「憐れ、ですか？」

「いや、何でもない。セレネ——君がそこまで研究したいというなら、わしからニコラス・フラメルに教えを乞う機会を作ってもよい」

「本当ですか？」

目を輝かせることもなく、淡々に応える。

決められた手段に従う人形のように。なんとも憐れな光景だろうか。果たして、彼女は本当に人間なのか疑いたくなってしまう。

しかし——

「だから、ひとまず石を返してくれないかの？」

一方で、不安要素も残る。

彼女は「意図的に」考えを放棄しているのではないかと。

「分かりました、先生。その代わり、ニコラス・フラメルさんに会わせてください

ね。直接、錬金術について聞きたいことが山のようにあるのです」

覗き込むだけで気分の悪くなる青い眼を閉じ、通常の黒い瞳へと戻った。

セレネは、ゆっくりと石を渡す。わしは石を受け取ると、表情を緩めた。わしの掌に乗せられた石は、明らかに「賢者の石」だった。

「ああ、もちろんじゃ——セレネ」

わしが姿を現す前の眩きが、脳内を反芻する。「勝った」と言う言葉は、明らかに優等生らしからぬ発言だ。——学生時代のトム・リドルを思い出してしまふ。

誰が視ても品行方正な優等生で、問題を起こさない。しかし、トムは様々な事件の黒幕として暗躍していた。そして、ヴォルデモートへと成長してしまい、すっかり闇の世界に浸かってしまった。もう、彼は戻ってくることも出来ない。わしは、トム・リドルを正しい道へ導くことが出来なかった。このままセレネを帰してしまえば——トムと同じ道を辿る気がしてしまう。

「それでは、私はこれで帰らせていただきます」

セレネはローブを翻し、わしに背を向けた。

「覚えておるかの、セレネ。以前、病室で君に言った言葉を」

わしは、遠ざかる小さな背中に声をかけずにはいられなかった。

セレネは立ち止り、ゆっくりと振り返る。その横顔は、ハツとするくらいトム・リドルと瓜二つだった。

「死を避けることを考えてはいけない、でしたよね？」

「そうじゃ——永遠の命とは、実に虚しいものじゃよ。」

決して、追い求める価値がないことじゃと分かっただけで欲しい」

「——はい、分かりました。それではお休みなさい、ダンブルドア校長先生」

小さい背中。

わしはこの一年間、クィレルの手から「賢者の石」を護るために活動してきた。それが、ハリーを護ることに繋がり、ヴォルデモートの復活を遅らせることにも繋がると思じて。

しかし、もう1つ大きなことを見逃してしまっていた。

直死の魔眼を持ち、死に怯える少女を正しく導くという重大な仕事を。

「セレネ、わしは君を信じておる」

セレネは、闇に落ちない。

こちら側に戻ってることが出来る、と。

大広間に着いたときには、既に人で溢れていた。

広間は、緑の布地を銀で縁取ったスリザリンカラーで彩られている。蛇を描いた巨大な横断幕が、味気ない壁に色を添えていた。寮対抗杯を手にした祝いとして、スリザリンのテーブルは喜びの絶頂に達していた。

「セレネ！もっと喜びなよ!!」

ダフネ・グリーングラスのツインテールが、ウサギの様に飛び跳ねている。

どうやら黙々と本に目を落とす私が、喜んでいないと思ってしまったようだ。

事実、純粹に喜ぶことは出来ない。先日の敗退は、私の心に大きな影を落としていた。しかも、私を敗退に追い込んだ人物が同じ空間にいるのだ。優等生のセレネ・ゴントの存在に傷をつけてしまった。いくら傷が小さくても、いくら傷を知る者が1人しかいなかったとしても、喜べるはずがない。

ただ、こうして借りてきた本を読み、現実を逃避する。

「優勝したことには、喜んでいますよ」

この世界は弱肉強食。

敗者は惨めに死ぬ。私の所属する寮は、他の寮に勝った。それは当然の結果であり、勝たなければならない。喜ぶまでもなく、当然の結果だ。

「ふん、こんな時まで優等生面とは——余裕だな、ゴースト」

両手に花——もとい、パンジー・パーキンソンとミリセント・ブルストロードを従えたマルフォイが、鼻で笑ってくる。パーキンソンもブルストロードも——特に、パーキンソンは恍惚とした表情を浮かべ、マルフォイの顔を見つめていた。

「それにしても、何を読んでいるんだ？試験は、とっくに終わっただろ。もしか

して、ゴーストは補習の勉強か？」

「錬金術の本ですよ、マルフォイ」

私は「錬金術」に興味があるという設定になってしまっている。

日時は未定だが、ニコラス・フラメルと面会する機会を手に入れた以上、少しでも錬金術に関する知識を蓄積しなければならない。優等生セレネ・ゴーストの勉強は、まだまだ終わることを知らなかった。

「錬金術なんて、古臭い勉強してるな」

「知識があればあるほど、役に立ちます」

それを聞いたマルフォイは、何か言おうと口を開く。

しかし——その言葉は、ダンブルドアの声に隠れてしまった。

「また、1年が過ぎた」

ダンブルドアの口調は、あの夜に話した時に似ている。どこことなく朗らかで、落ち着き払っていた。

「さて、それでは寮対抗杯の表彰を行うことになった。点数は次の通りじゃ。

4位グリフィンドール312点。3位ハッフルパフ352点。2位レイブンクロー426点。1位スリザリン472点」

1位のスリザリンと、4位のグリフィンドールの間には160点も差があった。ハリー達が以前150点を減らしたが、160点も差を広げたのだろう。しかし、結局のところ――、ハリー達が150点減点していなかったとしても、スリザリンは30点勝っている。結局は、スリザリンの優勝には変わりなかったのだ。

しかし、学校中からハリー達はイジメを受けていた。150点も寮の点数を減らした悪者として。

少しだけ、可哀そうに思えてしまう。一度でも罰則を受けて負けた者は、結果がどうであれ痛い目を見るのだ。やはり、負けてはいけない。

「よしよし、良くやったスリザリン」

スリザリンのテーブルは、嵐のような歓声と足を踏み鳴らす音で溢れかえっている。

誰もが、思い思いの方法で喜びを表していた。私も本を閉じ、手を叩く。周りの空気に当てられてだろうか、少し頬が緩んだ気がした。

「じゃが、最近の出来事も勘定に入れなければならん」

喧騒が嘘のように、大広間は静まり返った。スリザリン生から、少し笑みが消えた。なんだか、嫌な予感が胸を横切る。先生が咳払いをすると、口を開いた。

「駆け込みの点数をあたえよう。

まずは、ロナルド・ウィーズリー。

近年、稀にみる最高のチェスを披露してくれた。50点を与える」

グリフィンドールから、天井を吹き飛ばしそうな歓声が上がる。

ウィーズリーは、酷く日焼けしたように頬を紅く染めていた。どうやら、あのチェスの間を突破したらしい。だが、特別に興味はない。時間短縮のために「チェスの間」は「眼」を使い突破した。その難易度は、私に関係なかった。

「次に、ハーマイオニー・グレンジャー。

火に囲まれながら冷静な論理を用いて対処したことを称え、グリフィンドールに50点を与える」

ハーマイオニーは、腕に顔を埋めた。嬉し泣きをしているように見える。グリフィンドール生たちは我を忘れて、まるで自分たちが1位になったかのように狂

喜していた。

その反対に、スリザリン生は声が出ないみたいだ。マルフォイもダフネも、他のスリザリン生も笑顔が凍り付いている。

「次にハリー・ポッター」

大広間は、水を打ったように静まり返った。

「その完璧な精神力と、並外れた勇気を称え、グリフィンドールに60点を与える」
耳をつんざくような大騒音だった。私は思わず耳をふさいだ。

それと同時に、脳が高速で回転する。グリフィンドールの点数は、160点加算された。つまり、スリザリンと同じだ。あと1点、そう、あと1点多く入ってしまえば——スリザリンは、負けてしまう——

「続いて、セレネ・ゴント」

私は、立ち上がりそうになった。

そうだ、あの時——私はクィレルに呪文を浴びせた。1年しか魔法の勉強をしていないのにもかかわらず、大人を一時的に無力化させることに成功したのだ。これは、実際に石を護り抜いた上にクィレルを倒したハリーと同じ、は難しいかもしれない。しかし、少なくとも50点が貰える。いや、実際に罠を1人で潜り抜けてきたことも評価されると考えたなら——それより多い可能性も期待できた。

私は、期待に胸を膨らませる。

「授業や試験の範囲に限らず、ありとあらゆる分野に興味を示す、その尽きることのない探究心を称え、スリザリンに20点を与える」

「20点!」

私の叫びは、スリザリンの歓声に飲まれてしまった。

私はクィレルを無力化し、先生たちの張った罫を潜り抜けた。ハリーやハーマイオニー達よりも、多く点数を貰えるはずだ。しかし、20点とは何故だろうか。

私が考えていると、ダンブルドアの口が再び開いた。

「勇気にも色々ある」

ダンブルドアの言葉は、私の思考とスリザリンの歓声を遮った。

「敵に立ち向かうよりも、味方に立ち向かう勇気の方が難しい。

よってわしは、ネビル・ロングボトムに20点を与えたい」

爆発的な歓声が、グリフィンボールから湧きあがった。いや、グリフィンボールだけではない。レイブンクローやハッフルパフからも大歓声が湧きあがった。少なくとも、スリザリンの単独優勝が防がれたことが嬉しいのだろう。狂ったような大歓声だった。

「グリフィンドールと、同一優勝だと？」

誰かが呟いた。

スリザリン生は、誰もが啞然としていた。

私の加点がなければ、王者から滑り落ちていたかもしれない。

単独優勝を維持できなかった、しかもグリフィンドールと同点ということは、スリザリンに耐えられない屈辱だった。悔し過ぎて泣いている上級生が、ちらほら見受けられた。

「なんで？」

ダンブルドアと、目が合う。

その瞬間、単独優勝の敗因を悟った。

「探究心——しか、評価されてない？」

あの時、咄嗟に口から出た言葉しか評価されていない。

あくまでダンブルドアは、「錬金術の探究のため賢者の石を必要とした」と評価しているのだ。他諸々を触れていないのは——賢者の石を盗もうとした行為で減点されてしまっているから、公表したら傷つくと考えたのかもしれない。

記憶が正しければ、窃盗は40点の減点対象。人の物を盗むという非道徳的な行いは、夜歩きよりも罪が大きい。本来は、賢者の石を護り通せることに成功したことに対する60点。しかし、そこから40点の減点を——私の評価のために、話さないでくれた。

「優等生」という仮面を奪われたら最後、私には何も残らない。セレネ・ゴーストという存在は死んでしまう。つまり、情けをかけられたということだ。

もちろん、加点という事実には変わらない。だから、「石を護り通せた」という評価の代わりに「探究心」という言葉を掲げたのだろう。

「さて、グリフィンドールも優勝したので、装飾を変えなければならんのだ」

ダンブルドアが、大きく手を叩いた。

緑と銀で彩られていた大広間に、赤と黄金のグリフィンドールをイメージした装飾が加わっていく。

「なんか、残念だったね、セレ——ネ、どうしたの？ 眼が赤いよ？」

ハッと我に返る。

気を引き締め、ダンブルドアから目を逸らした。

眼が充血してしまうほど、屈辱を感じていたのだろうか——。優等生セレネ・ゴーストにあるまじき失態だ。

「赤い、ですか？」

「あ、うん——さっきは赤く視えたんだけど、光の加減かな？ 気のせいだった

みたい」

どうやら眼の色は、元に戻ったらしい。

それにしても——アルバス・ダンブルドアは恐ろしい魔法使いだ。

これは、もしかすると「石」を使おうとしたことに気づいているかもしれない。つまり、思考を放棄しても心は読まれてしまう。それは、人生経験の差かもしれない。

「悔しいな」

ふいに、言葉が零れ落ちる。

何が悔しいのか、少し理解できない。だが——なんとなく、悔しさの要因は分かっていた。

私は料理に向かう前に、もう一度——校長席を視た。

青い瞳は、もう私を見ていない。朗らかな笑顔を浮かべた彼は、グリフィンドー

ルを眺めている。

アルバス・ダンブルドア。

歴代最高だと称される魔法使い。

その頂は高く、私は足元にも及ばない。私は情けをかけられた敗者で、向こうは勝者。

優等生であるセレネ・ゴントは、常に優等生でなければならない。

だから負けることはご法度であり、勝たなければならない。幸い、この負けはダンブルドア以外には知られていない。

死を克服する。

そしてダンブルドアに勝って、負けを帳消しにする。

これで、私はセレネ・ゴントを取り戻すことが出来る。

完全な優等生であり、身体に奔る線に怯えることのない、セレネ・ゴントに。

賢者の石編、終了です。

次回から、秘密の部屋編に入ります。

毎日は難しいですが、投稿する際は20時投稿を心がけていきたいと思います。

※3月22日…訂正

秘密の部屋編

14話 8月の日差しの中で

秘密の部屋編、開始です。

「これも、違う」

本を棚に戻し、小さくため息をついた。

賢者の石に関する情報は、明らかに少なかった。フロリーッシュ・アンド・ブルッツ書店と言う魔法使いの本屋に来て1時間、錬金術関連の本を読み漁って見たが、どれも期待外れ。そもそも、錬金術関係の本自体が少ない。時代遅れだから

読む人もいないのだろうが——、こうも求めているモノがないとすると、他の方
法を考えなくてはならない。

「——もう12時過ぎてる」

時計を見て、小さくため息をついた。

クイールと約束した時間まで、あと30分しかない。せっかく魔法使いの本屋に
来ているのに、帰る時間は刻一刻と迫ってきていた。目星となる本が見つからない
まま、教科書だけ購入して退散なんて勿体無い。入口の喧騒とは打って変わり、閑
古鳥の鳴く錬金術コーナーを1人歩く。再び目についた書籍を手にとってみるが、
目次をみて落胆してしまった。

「また、真理の探究か」

現代において錬金術は、変身術の亜種という側面が皆無だ。

「真理の探究」という哲学的な意味合いが強い。故に、「賢者の石」に関する書籍がほとんど出版されていないのだ。やっとの思いで石関連の書籍を見つけ出したとしても、石を作り出す方法はもちろん、概要と歴史しか書かれていない。

「やっぱり、古本屋の方があったかもな——ん？」

その時だ。

埃を被った小さな本に、眼が止まる。黒い背表紙を撫でると、金糸で題名が小さく記されていた。

『大癒師ケルススを超えた者』

吸いつけられるように、ページをめくる。

そこに記されていたのは15世紀の錬金術師——「テオフラストウス・フィリッ
プス・アウレオールス・ボンバストウス・フォン・ホーエンハイム」、通称「パラ

ケルスス」の半生と残した秘術に関する物だった。そこに記されていた一文に、眼が奪われてしまう。

「石を作り出した？」

私は愕然とした。

パラケルススは、賢者の石を作り出したと書かれている。

しかし、ホグワーツで読みふけた「賢者の石」についての書籍では、パラケルススの名前は一言も出てこなかった。むしろ、ニコラス・フラメルが賢者の石を作り出した唯一の人物、だと書かれていた。これは、一体どういふことなのだろうか。諸説さまざまあるということか、それとも——意図的に隠されたのか。

「——？」

私は、ページをめくった。

マグルの医者の家系だったパラケルススは、ある事件をきっかけに錬金術へと傾倒していく。狂気めいた執念と研究への情熱が、掠れた文字から滲み出ていた。

「――、ゴースト。おい、聞いているのか!？」

肩を強く叩かれ、ようやく本から顔を上げる。

同級生の少年が、後ろに立っていた。プラチナブロンドの髪が、店内の淡い灯りを浴びて、輝きを増している。私は本を閉じると、少年に向き合った。

「久しぶりですね、マルフォイ。一体、いつからそこに？」

「少し前からだ。」

優等生様は、人がいることにも気づかないくらい、読書に夢中だったってわけか」

どことなく皮肉を含んだ言葉に、偉そうな態度。

いつものマルフォイの様子に、私は何も思うことは無い。私は時計に目を落とす

と、すでに 20 分経過していた。そろそろ、クイールとの待ち合わせの場所へ行かなくてはならない。

「興味深い本でしたので、読み込んでいました。

それでは、マルフォイ。また、ホグワーツで——」

「おい、どこに行くんだ？あまり話してないぞ」

本を籠の中に入れて去ろうとすると、マルフォイが呼び止めてきた。

マルフォイの言う通り、会ってから数秒も経っていない。しかし、今現在——マルフォイと話して私のメリットになることは特にない。それに、クイールとの待ち合わせの時間が刻一刻と迫ってきているのだ。時間に間に合うためには、早急に買い物を終わらせなければならない。

「レジへ行きます。そろそろ義父との待ち合わせの時間ですから」

「マグルの義父か？」

くだらない、と言うように鼻を鳴らす。

マルフォイは柱に寄りかかると、忌々しげに呟いた。

「今、1階はロックハートのサイン会で混みあってる。2階で会計した方が、早く済むぞ」

「ロックハート、ですか？」

つい最近、何処かで聞いたことのある名前だ。

そう——確か、これから購入する教科書の作者の名前だった気がする。籠に目を落とせば、一般的な教科書とは似ても似つかぬ豪華な書籍——の表紙の写真と目が合った。波打つブロードの髪に完璧な笑顔が特徴的なイケメン魔法使い。こちらにウィンクをしてくる写真を見ると、俳優やモデルのように思えてしまう。少なくとも、この書籍に記されているような——トロールや吸血鬼を華麗に倒す人物には、到底思えなかった。

「忠告、ありがとうございます」

私は2階で会計を済ませると、階段を下ろうとした。

しかし——降りる前に、1人の男が私の前に立ち塞がった。マルフォイと同じ髪の色をした男性は、私を値踏みするかのように見下ろしている。男が退く気配は、まるで無かった。

「ゴースト、父上だ」

マルフォイは、自慢げに男を紹介した。

私は2人を見比べてみる。

確かに、マルフォイは髪の色だけではなく、男の面影を受け継いでいるように感じた。しかし、どこことなくマルフォイと纏う空気が違う。マルフォイは偉そうにしている雰囲気しか纏っていないが、男の方は、静電気のような威圧感を放っていた。

「はじめまして、マルフォイさん。セレネ・ゴーストと申します」

「君のことはドラコから聞いている、ミス・ゴースト」

淡々とした声、仮面を被ったような無表情。

一瞬、スネイプ先生の姿が——そして、鏡の間で対峙したクィレルが脳裏に過ぎったのは、気のせいだろう。

「『スリザリンの継承者』と、呼ばれているそうだね」

「スリザリン生の一部が呼んでいるだけです。私は、ただのスリザリン生に過ぎません」

それでは、と去ろうとしたのだが、マルフォイの父親は階段を通させてくれなかった。

次第に苛立ちが湧き上がってきたが、私はセレネ・ゴースト。誰もが認める優等

生だ。苛立ちを心の奥に押しこめ、出来るだけ柔らかな口調で

「すみません。義父と待ち合わせをしていますので」

と、言ってみる。

しかし、マルフォイの父親は依然として動かない。

「君は、似ているな」

「似ている？」

「……いや、なんでもない。これから、ドラコと仲良く頼むよ」

マルフォイの父親は、私の頭を軽く撫でると場所を開けた。

誰と似ているのか、何か隠したように思えるが——生憎、私には時間がない。マルフォイの父親に頭を下げ、マルフォイに少しでも手振ると、階段を駆け下りる。入口は、ロックハートを一目見ようとする魔法使いで溢れかえっていた。なんと

か人混みを縫い、押し出されるように外に弾き出される。ギルデロイ・ロックハートの人気は、目を見張るものだった。

「そんなに凄い魅力のある人か、あいつ？」

9冊の本が入った袋を担ぎ上げると、私はクイールとの待ち合わせ場所に急ぐ。大量の本を持ち歩くことは、慣れている。しかし、夏の日差しの中で運んだのは、初めての経験だった。汗と共に体力まで流れていくような、奇妙な脱力感を覚える。

「セレネ、大丈夫かい？」

その言葉と共に、急に本を持つ手が軽くなった。

見上げてみると、そこにはクイールが微笑んでいる。

「迎えに来たよ、セレネ。よく頑張ったね」

「……ありがとうございます」

少し照れくさそうに、私は視線を逸らした。

まだ待ち合わせの時間になっていないが、大荷物 of 私を心配して迎えに来てくれたらしい。

唯一の家族だが血縁関係のない養父とは、良好な関係を築いていると思うが——
少し私に優し過ぎるように思うのは、ただの気のせいだろうか。

深く考えない方がいいのか、それとも——

「あの……すみません」

髪の毛が、くるくるとカールした少年だった。年齢は、私と同じくらいだろう。育ちの良さそうな服装をしているにもかかわらず、両親の姿は見当たらなかった。

「イーロップのフクロウ百貨店は、この先で合っていますか？」

「その通りだよ。僕達もそこに行くところなんだ。良かったら、一緒に行かないかい？」

クイールが応えると、あからさまにホッとした表情を浮かべた。

「ありがとうございます。あの——もしかして、君、スリザリン生のゴーストさんですか？」

どうやら少年は、私のことを知っているらしい。

私が頷けば、少年は明るい笑顔を浮かべた。

「ハッフルパフ生のジャスティン・フィンチ・フレッチリーです。

君のことは知ってますよ、もちろん。ハーマイオニー・グレンジャーのライバルですよね？」

「……ライバルではありませんよ?」

私が応えると、フレッチリーは不思議そうに顔を傾けた。

「そうですか? 『獅子寮のグレンジャー、蛇寮のゴースト』と例えられていますよ」
「初耳です」

確かに私とハーマイオニーは、学年の中で1番の点数を争っている。

杖を使う教科において、私はハーマイオニーの上に行くが、杖を使わない教科——すなわち、魔法史や天文学は、ハーマイオニーに一步及ばない。帰りの汽車ですれ違った時、「次は負けないからね」と言われた。

学年の1位2位を争う優等生として、競争しているように見えるのかもしれない。

「それにしても、驚いてしまいました。

ゴーストさんはスリザリン生だと聞いていたので、てっきり魔法族出身の方だと思ひ込んでいました」

スリザリン生に、マグル生まれは皆無とっていい。

大半が魔法族出身の家柄の良い生徒で構成されていることくらい、私も知っていた。

マグル育ちの私は馬鹿にされることもあったが、既に成績と魔法で捻じ伏せている。そのせいで私を蔑むスリザリン生はいなくなったが、代わりに「スリザリンの継承者」として崇拜されるようになってしまった――。

「父親は魔法使いだったらしいですよ。しかし――」

「色々あってね、今はマグルの僕と一緒に暮らしているんだ」

その先の言葉を、クイールが奪うように紡いだ。

私は少し眉間に皺を寄せたが、クイールもフレッチリーも気づいていないみたい

だ。クイールの横顔に、少しばかり焦りを視た。別に両親が死んだことくらい、隠す必要はない。私を氣遣って、か？それとも、何か別の理由でもあるのだろうか。

「そうですか……。

実は僕もマグルで育ちました。もともと、両親はマグル生まれですが」

「フレッチリーも、マグルで産まれ育ったのですね」

彼の服装は、床を掃除するようなローブやマントと似ても似つかない——私達と同じマグル世界の服装だ。良く視れば、服の端に有名ブランドのロゴが印刷されている。

「はい。元々はイートン校への入学が決まっていたいました」

「イートン校!？」

クイールは、青ざめている。

私も叫びそうになってしまった。イートン校といえば、イギリス屈指の名門校だ。制服だけで、700ポンドもかかるのだ。700ポンドもあれば、ちょっとした海外旅行が楽しめる。その大金を制服だけに費やすのだから、年間の学費なんて目を覆ってしまう大金だ。

しかも、金さえあれば誰でも入れるというわけではなく、幼い時から血の滲むような勉強を続けて来て、ようやく入学が許される。そこに入学するということは、すなわち上流階級と言うことを表し、末は政治・経済、または産業界のエリート街道が約束されたことを意味する。

「ホグワーツの入学を、辞退しなかったのですか？」

つい聞いてしまった。

イートン校に入学するまでにかかった費用や時間、それら全てを換算すると想像出来ない程の大金だ。私はホグワーツ入学に対して、そこまで何も思うところはなかった。優等生のセレネ・ゴントらしく、クイールや説明に来てくれたスネイプ

が「ホグワーツに入学しなさい」と言われたから願っただけ。進学先についても、目覚めた時期の影響で私立受験は間に合わず、公立の学校へ行くことが決まっていた。だから、金銭面で特に問題はなかった。しかし——さすがにイートン校や私立の学校へ進学が決まっていたとすれば——少しは躊躇うのではないだろうか。

「あー……うん、父様と母様は反対していましたが、魔法の訓練も大切ですから」
フレッチリーは、どことなく寂しそうに答える。

やはり、家族と揉めてしまったらしい。聞いてはならないことを聞いてしまったようで、少しだけ気まずい。もしかすると、両親と不仲になってしまった結果——
1人でダイアゴン横丁に来ているのかもしれない。

「でも、僕はホグワーツに来て良かったと思いますよ」

次に顔を上げた時、フレッチリーは嬉しそうな表情を浮かべていた。

「僕は、ホグワーツで新しい目的を探すんです。

今までは父様や母様が目的を作ってくれました。今度は、僕が1から作り上げるんです」

「目的、ですか」

フレッチリーの瞳は、輝いていた。

フレッチリーの目的は、まだ見つからない。だから、それを探すために勉強する。目的を見つけることが勉強。私には、少し信じがたい発想だ。私が勉強する目的は、優等生であり続けるため。それが、セレネ・ゴントでいる証だから。

唯一——ここにいる「私」が持つ目的と言えば——

「さあ、ついたよ。2人とも」

気がつく、ふくろう百貨店の前に辿り着いていた。

大した距離ではなかったのだが、かなり歩いたように思える。

「フクロウの餌を買ったら、3人で昼御飯を食べて、残りの買い物をするか？」
「えっ、いいんですか？申し訳ないです」

フレッチリーは、恥ずかしそうに首を横に振る。

しかし、クイールは柔らかな笑みを浮かべていた。フレッチリーに、教え子を見つめる教師の眼差しを向けている。

「買い物は、大勢でした方が楽しいよ。——ね、セレネ？」

クイールは、私に同意を求めてきた。

特別断る理由もない。むしろ、目的を探すために勉強するフレッチリーに興味が沸いた。

何より——ここで断るのは、セレネ・ゴントらしからぬ行動だ。私は静かに目

を閉じると

「構いませんよ」

その言葉は、蒼い空に消えていく。

8月の照りつける日差しの下。

私達の買い物は、まだ始まったばかりだ。

3月22日…誤字訂正

15 話 9 月 1 日

「すみません」

トランクとトランクが激突し、互いによろけてしまった。

9 月 1 日。9 と 4 分の 3 番線。ホグワーツ全校生徒と保護者が、決して広いとは言えない駅のホームに集中する。私も人の流れに注意してトランクを担いでいた。しかし、少し余所見した時に、ぶつかってしまった。

「大丈夫だよ」

その子は、少し変わった感じの子だった。

濁り色のブロンドの髪をした子で、足元の何かを拾おうとしている。彼女の視線を辿ってみると、そこには 1 冊の雑誌が落ちていた。何人もの人に踏まれたらし

く、靴の痕がいくつもついていて、あまり触れたくない雰囲気醸し出している。それでも少女は、表紙を軽くポンポンと叩いて、大切そうに抱えた。

「もしかして、私とぶつかった拍子に落としてしまいましたか？」

「そうだよ。でも、気にしないで。たぶんラックスパートにやられてたんだと思うから」

「ラックスパート？」

聞き覚えのない言葉に、首をかしげてしまう。ケルベロスという特定の魔法生物に関しての知識はあるが、その他の魔法生物についての知識はない。それでも、魔法生物と言うのはマグル世界の神話生物が多い。それにしても、ラックスパートと言う名は聞き覚えがなかった。

「ラックスパートはね、人の眼には見えないの。その辺りにふわふわって浮いていて、人の頭に入ってボンヤリさせちゃうんだ」

「そうですか」

さすが魔法界。不思議な生物がいるものだ。

私は納得すると、トランクを持ち直した。

「私、ルーナ・ラブグッド。今年入学するんだ。アンタも今年入学？」

ルーナ・ラブグッドは、スキップする様についてくる。どうやら、私も同期だと思われてしまったらしい。確かに、身長は伸び悩んでいた。スリザリンの同期の中では、私の背が1番低い。それは成績に繋がらないため、特に気にしないようにしている。

「私はセレネ・ゴントと言います。スリザリンの2年生です」

「あっ、ごめん。てっきり1年生かと思った」

「謝る必要はありません。気にしていませんから」

ラブグッドより、一步先を歩く。

ラブグッドは何か言いたげな顔をしていたが、気にしない。

私は汽車に入り込むと、空いている席を探す。

学年の指定はなく、最前列の車両以外は自由席だ。大半の席は生徒たちで埋まっていたが、中ほどの車両に1つ——誰もいないコンパートメントが残っていた。

「良かった、空いてるところがあって！」

私が入った後から、ラブグッドも入り込んでくる。

「どうしているのです、ラブグッド？」

「どうしてって？」

どうということ？と首をかしげる。文句の言葉が喉元まで上がって来たが、無理

やり捻じ伏せる。私はスリザリンの優等生、セレネ・ゴントだ。この程度で文句を言う人間ではない。

「いえ、なんでもありません」

「そう？——あっ、パパだ!!」

ラブグッドは銀髪を輝かせながら、窓から体を乗り出した。

大きく手を振る先には、一際奇天烈な男性が立っていた。その人の周りだけ、人が寄りついていないようにも見える。三角と丸を合わせたような、不思議な首飾りを提げている。

「セレネのパパは？」

「私の義父さんは——あそこですね」

ホームを覗いてみると、小さくクイールの姿が視えた。

クイールも私の顔に気づいたのだろう。ニコツと微笑み、こちらに手を振る。だから、私も彼に手を振り返した。ちょうど、それに呼応するかのように汽笛が鳴り響く。小さいクイールの姿は豆の様に小さくなり、ついには消えてしまった。ホームは遠ざかり、ロンドンの町並みが流れていく。

「あつという間の夏期休暇、でした」

小さな眩きも、窓の外と共に流れていく。

宿題とマグルの勉強、そして錬金術の勉強をしている間に、いつの間にか夏期休暇が終わってしまった。2カ月は、あつという間だった。これから長いようで短いホグワーツでの生活、再び幕を開ける。

「——っん」

その時、途端に眠気が襲ってきた。

昨日遅くまで——いや、連日遅くまで読書やら勉強やらをしていたからだろう。瞼が急激に重くなる。本を読もうとしていた指が重く、思うように動かない。

「寝てもいいよ。到着したら、起こすから」

ラブグッドは、雑誌から顔を上げないで言った。

同席相手がいる以上、寝てしまうのは失礼な気がする。しかし、これ以上——目を開けることは難しい。ここは、ラブグッドの好意に感謝することにしよう。

「ありがとうございます」

旅は長い。

これから夕暮れ時まで1人のんびり、午睡を貪るとしよう。

少しくらい——意識を手放しても許されるはずだ。そう思い目を閉じたが最後、私の意識は深く深く——沈んでいった。



小さな少女は、部屋に飛び込んだ。

成績のトップを示す通知を握りしめ、満面の笑みを浮かべている。傍から見ている私まで、表情が綻んでしまいそうだ。■■■を喜ばせるため、誰にも負けないように努力し続けた結果だった。今の少女は、ちっぽけな公立学校の頂点ではなく、イングランドでも有数の成績を誇っていた。全ては、■■■を喜ばせるため。たった1人の大切な人に笑ってもらうため。それだけのために、少女は成績のトップスコアを目指し続けていた。

目的が、ついに叶った。これで、ようやく——夢が実現する。

「私だよ、■■■！」

しかし、次の瞬間——少女の表情は固まってしまふ。部屋の中には、誰もいなかった。

レースのカーテンが風に揺れ、黄色のリコリスが白い部屋に映えている。それ以

外は、椅子とベッドしかない殺風景な部屋。ここの主は、何処へ行ったのだろうか？

「■■■？」

少女は、不思議そうに周りを見渡す。

誰も少女の声に、反応する人はいない。少女の言葉は、白い空間に吸い込まれていく。

次第に、少女は怖くなってきたのだろう。白い世界から逃れるように、廊下に飛び出た。そこで、背の高い人にぶつかってしまう。

「セレネ!!」

「ねえ、義父さん。■■■はどこ？」

クイールは、泣き出す一歩手前の表情を浮かべている。

だんだんと、少女も泣き出しそうになってきた。だけど、涙をこらえるように拳

を握りしめる。ぐしゃり、と成績通知表に皺が寄った。

……。

「あつ、セレネ。目が覚めた？」

薄らと目を開ける。

心地の良い汽車の揺れ。温かい午後の日差し。

いつの間にか——前の席には、ハーマイオニー・グレンジャーと赤毛の少女が腰を掛けていた。

「ハーマイオニーと……そちらの方は？」

「ジニー・ウィーズリーだって。空いてる席探してるみたいだったから、誘ったんだ」

ラブグッドが代わりに応える。

相変わらず、先程の雑誌を読んでいる。表紙が違うので、バックナンバーだろう。一体彼女は雑誌を何冊持ってきているのだろうか。——いや、それは置いておこう。

私は、ジニー・ウィーズリーに視線を戻すと、少し目を細めた。

「ウィーズリー？もしかして、ロン・ウィーズリーの妹さんでしょうか？」

ジニー・ウィーズリーは、私の問いかけに頷いた。

燃える様な赤い髪に、鳶色の瞳、そばかすは——どことなくウィーズリーを連想させた。

「初めまして、ジニー・ウィーズリー。私は、セレネ・ゴントと言います」

ジニー・ウィーズリーと握手を交わす。ハーマイオニーは、意味ありげに微笑ん

だ。

「ね、スリザリン生だって悪い人ばかりじゃないのよ」

「悪い人ばかり？」

私が目を細めると、ハーマイオニーの表情は苦笑いへと変わる。

大方、ジニー・ウィーズリーは兄同様、スリザリン生について好印象を持っていなかったのだろう。この寮間の溝はどうならないものかと、つい考えてしまうが——それは、優等生のセレネが気にすることではない。

「そういえば、セレネはどんな夢を見ていたの？ なんとというか——うなされていただけ」

ハーマイオニーが、話題を変えてきた。

私は数分前まで視ていた夢に、想いを馳せる。どんな夢を見ていたかは、よく思

い出せない。

小さなセレネ・ゴントが、白い部屋に走り込んでいる夢。嬉しくてたまらなかった気持ちだが、急激に萎んでいく感覚は、不思議と現実のように思えてしまう。しかし、セレネ・ゴントの9年間の記憶に、あのような場面は残っていない。きつと、ただの夢だったのだろう。だが——懐かしいような、悲しいような、胸が締め付けられる感じがした。

「問題ありません。大した夢ではありませんでした」

夢から、気持ちを切り替えよう。

私は、外を眺めた。のどかな農村風景が流れては消えていく。劇的な変化もない風景は、私を一層、憂鬱な気持ちにさせた。ふと、気を緩めると考え込んでしまうのだ。

あの夢は、本当にあった出来事ではないか、と。

16話 ナルシストの防衛術

学校が始まり、私は図書館通いを再開させていた。

錬金術師パラケルススの本は、相変わらず少ない。図書館の中でも埃臭い奥の奥を探し歩いても、1週間で2冊しか発見できなかった。しかも、そのうちの1冊は既にダイアゴン横丁で購入したもので、実質1冊しか発見できていない。何故、錬金術関連の本が少ないのだろうか。それとも、パラケルススが異端なのだろうか。

「久し振りですね、セレネ」

囁き声で、私は顔を上げる。

前に座っていたのは、ジャスティンだった。ロックハートの本を広げ、にこやかに微笑んでいる。

「こちらこそ久し振りで、ジャスティン」

ダイアゴン横丁で行動を共にしたこともあり、少し仲良くなった。スリザリンとハッフルパフと所属寮が違っているので会う機会は滅多にないが、偶にこうして図書館で会う。後に、ハーマイオニーも交えた3人で話す機会も増えるのだが——それは、また別の話。

「セレネは、ロックハートの授業の噂——聞きましたか？」

ジャスティンは、司書のいる位置を確認してから——さらに小さい声で問うてきた。あの日——書店を騒がせていたギルドロイ・ロックハートは、今年から「闇の魔術に対する防衛術」の教師に就任した。彼の行う授業は、この昼休みの後——つまり、次の時間だった。本の記述と本人に対する印象から、そこまで期待できる授業が行われるかどうか疑問を感じてしまう。しかし、もし——万が一、あの本通りの男であるならば、授業に期待出来る。本に記載されていない裏話が、聞けるか

もしれないのだ。だから若干——本当に小匙一杯分くらいの淡い期待はしていた。

「あの男——いや、失礼。あの先生の授業で、何か起こったのですか？」

しかし、ジャスティンの反応を見る限り——その期待は消え失せそうだ。

「グリフィンドールの授業で起こった出来事らしいのですが——教室に放ったピクシー妖精に為す術もなかったらしいんですよ」

「やっぱり、そうでしたか」

授業への期待は、あっけなく塵と化した。

自信満々に悪戯好きのピクシー妖精を放ち、逆に襲われ逃げ惑う姿が目の前に浮かんでくるようだ。そのような男の授業に出るだけ、時間の無駄に思えてしまう。このまま図書館に残って、パラケルススについて調べていたい。だが、授業に出ないと単位が貰えない。

私は、小さくため息をついた。

「やっぱり？」

「あの本は、まるで物語です。面白く纏められていますが——恐らく、あれはロックハート先生が体験したことではないと思います」

首をかしげるジャスティンに、私は囁き返した。

「本では、あんなに目の覚めるようなことをやっているではありませんか。もしかしたら、噂も体験授業の一環かもしれませんし」

どうやら、ジャスティンはロックハートに疑問を覚えつつも、心酔しているらしい。

心酔する理由は、分かるような気もした。電話ボックスまで追い詰められても、土壇場の逆転劇を見せたり、荒れ狂う狼人間を、素手で叩きつけたりするなんて、

華々しい活躍した人物の教えを乞う機会は、滅多にない。そのような人物は、自分から遠い世界の出来事であり、それが身近にいるとなったら——興奮するのが人というものだ。

「描写表現が、足りな過ぎます」

私は、本を閉じる。そろそろ始業10分前の鐘が鳴る時間だ。

私は貸出手続きの準備をしながら、話しを続ける。

「もし、実際に体験したことであるならば、もう少し臨場感の出る表現が出来るはずです。

しかし、全てが軽いタッチで描かれています。つまり——」

「誰かの体験談を、ロックハートがゴーストライターとして書いているということですか？」

ジャステインが、どこか辛そうに呟いた。

楽しい夢から覚めてしまったような、どこことなく陰のある苦い横顔だった。

「なんとなく——それは、僕も感じていました。実際に会ったロックハートは、目立ちたがり屋な方でしたし。この本に書いてあるような——勇気溢れる魔法使いなんて、滅多にいませんよね」

その声と共に、始業前を告げる鐘が鳴り響いた。

その瞬間、ジャステインの表情は先程までの穏やかな表情（もの）へ戻っていた。机に出していた本を鞆に戻し、私達は立ち上がる。

貸出手続きを終えた私は、ジャステインと別れ、まっすぐ前年度までクイレルが使っていた教室へと向かった。教室は様変わりしており、右を見ても、左を見てもロックハートの顔写真が微笑んでいる。スリザリンの同級生は、既に揃っていた。ダフネとブルストロードとパーキンソンの3人は、ロックハートについて、頬を染めて熱心に語っている。

反対に、ドラコ・マルフォイら男子生徒一同は興が醒めた様に退屈そうにしていた。

「みなさん、静粛に」

ロックハートは、マントを翻して現れた。

そして、ビンセント・クラップの持っていた「トロールとどのろい旅」を取り上げる。ウィnkを続ける自分自身の写真のついた表紙を、得意げに高々と掲げた。

「私だ」

本人もウィnkをする。

前方の女子3人の間に、うっとりした様な甘い空気が漂った。

「ギルデロイ・ロックハート。勲三等マーリン勲章、闇の力に対する防衛術連盟名

誉会員、『週刊魔女』5回連続『チャージング・スマイル賞』受賞。

もっとも、私はそんな話をするつもりではありませんよ。バンドンの泣き妖怪バ
ンシーをスマイルで追い払ったわけじゃありませんしね！」

ロックハートは笑うのを待ったが、ごく数人が曖昧に笑っただけだった。

しかし、その反応を気にすることもなく、ロックハートは言葉をつづけた。

「全員が私の本を全巻そろえたようだね？ 今日是最初にちよつとミニテストをや
ろうと思います。心配無用——君たちがどれくらい私の本を読んでいるか、どの
くらい覚えているかをチェックするだけですからね」

テスト用紙が配られる。

基本的な内容は、頭の中に入っている。雪男の倒し方や鬼婆との出会いの瞬間、
吸血鬼の対処法などは完璧だ。私は眼鏡を押し上げると、ペンを構える。

「制限時間は30分です。よい、始め！」

私は、勢いよくページをめくった。

- 1。ギルデロイ・ロックハートの好きな色は何？
- 2。ギルデロイ・ロックハートの密かな大望は何？
- 3。現時点までのギルデロイ・ロックハートの業績の中で、アナタは何が一番偉大だと思うか？

思わず、ペンを置きそうになった。

このテストで、本の内容をいかに理解しているのか、本当に図ることが出来るのだろうか。特に3問目は、テストではない。これは、雑誌の読者アンケートだ。本の内容を参考に自分の考えを書く問題なのかもしれないが、目の前に本人がいる以上——公正なテストとはいいたくない。

こんなことをしているならば、図書館に戻って鍊金術の本を探していた方がまし

だ。しかし、進級するためには単位は必要だ。それに、セレネ・ゴーストは優等生だ。この程度で怒り、感情の赴くままに行動するなんて、ありえない。私は記憶の断片を頼りに、全力で回答する。

例え、虫唾が走るようなロックハートの授業であっても、セレネ・ゴーストは優等生であらねばならぬ。

「ちっちっち——皆さん、ちゃんと私の本を読んでいますか？」

30分後、ロックハートは答案を回収し、クラス全員の前で捲り始めた。

ちゃんと読んでいる？もちろん、私は読破した。しかし、このテストは本の内容とは一切関係ない。全てロックハートについて、どこまで知っているのか問うテストだった。

『『狼男との大いなる山歩き』を、もう少ししっかり読まないといけない子が多いですね。』

第十二章ではっきりと書いてある様に、私の誕生日の理想的な贈り物は、魔法界と非魔法界のハーモニーですよ。それから、私の密かな大望は、この世界から悪を追い払い、ロックハート・ブランドの整髪剤を売り出すことです。みなさん、しっかり読んで来てくださいね」

読んだ。

だが、そのようなところまで目を通していなかった生徒は多いだろう。

ロックハートの悪戯っぽいウイंकに、私は内心ため息をついた。マルフォイなんて、呆れてものが言えない、という表情を浮かべていた。その後ろに座っていたセオドル・ノットとザビニ・ブレーズは、声を押し殺して笑っている。しかし、女子生徒3人はロックハートの話に、うっとりとした表情で聞き入っている。あの男のどこが魅力的なのだろうか。性別は同じでも、私には理解できなかった。

「情けないですね、グリフィンドールではミス・グレンジャーが満点を取ったというのに。」

このクラスの最高得点は、ミス・ゴーンの50点です。嘆かわしいことに、4問も間違えてしまっています」

つい、拳を握りしめてしまった。

4問しか間違えなかった、ことが奇跡だ。クラスで1番を取ったというのに、何の達成感もない。むしろ、気怠さが増したようにすら思えてしまう。

「それでは、始めましょうか。『雪男とゆっくり1年』を開いて」

それからは、ロックハートが本を読み上げるだけの退屈な時間が過ぎていく。時折、誰かを指名し——本を朗読させる。退屈極まりない授業。ロックハートの自慢話に、欠伸が出そうになった。

この1年——無駄な時間をどう過ごそうか。

形だけ真面目に聞いているふりをしながら、そればかりを考えていた。

「おや、1時間とは早いモノですね。それでは、今日はこれまで」

待ちわびた鐘の音が、教室内に響き渡る。ロックハートは白い歯を見せながら、私達に手を振った。私はロックハートに背を向けると、さっさと廊下に出た。次の授業は、マクゴナガル先生の変身術だ。変身術は錬金術と同系列の学問だ。夏期休暇中の錬金術の自学習で疑問に思ったことを、尋ねてみようか。何かヒントになりそうな事柄を、手に入れられるかもしれない。そんなことを考えながら歩いていった。

「おい、ゴースト」

振り返ってみると、そこには背の高いスリザリン生が立っていた。

セオドル・ノット。先学期は、ほとんど話したことがなかった同級生の1人だ。今頃になって、私に何か用だろうか。私は足を止めて、セレネらしい表情を浮

かべた。

「何か用ですか？」

ノットは難しい表情を浮かべ、ポケットに手を入れている。

言おうか言わないか、迷っているようにも見えた。何も言わないノットに痺れを切らし、去ろうとした時——ようやく口を開いた。

「ゴーストは、何で蛇語を扱えるんだ？」

誤字訂正

17話 蛇語のルーツ

蛇語——通称…パーセルタンク。

それは古来より、闇の魔術に深い関わりがあるとされる。

サラザール・スリザリンが蛇語を操ったとされ、その直系の末裔の者も操ったと伝承されている。イギリスにおける蛇語使いは、サラザール・スリザリン直系の末裔が非常に多い。

「そして、最後の蛇語使いは『例のあの人』ということでしたっけ？」

「生粋の貴族—魔法族家系図」という古びた本を捲りながら、セオドル・ノットの話に反芻した。心地の良い昼下がり、私はノットと一緒に談話室のソファ―に腰をおろしていた。

どうやら夏期休暇中、ノットは父親に私が蛇語を操れることを話したらしい。そ

れを聞いた彼の父親は、椅子から転げ落ちる程、仰天したそうだ。そこで初めて、ノットは「ヴォルデモートも蛇語を使う」ことを教えてもらったらしい。

「つまり、『例のあの人』は、スリザリンの末裔だ。

だから、ゴイントは『闇の帝王』の娘なんだろう？」

ノットは、杖を弄びながら断言する。

クィレルの後頭部に貼り付いていた塵も同然な姿が、脳裏に浮かんできた。せつかく夕方にはハロウィーンのパーティが待っているというのに、気分は急降下してしまう。私は、大げさにため息をついた。

「ありません」

私は、ノットの鼻の先に本を突きつけた。

「いいですか、そもそも『蛇語』が話せるからと言って、スリザリンの末裔とは限りません。」

確かに、スリザリン直系の末裔の家名は『ゴースト』です。しかし——」

「ゴースト家は、滅んでいる。ありえない、だろ？」

ゴースト家は、モーフィン・ゴーストとメローピー・ゴーストなる人物を最後に、血が途切れている。メローピーが純血の家庭に嫁入りした記録は見当たらず、子どもを為した記録も本に記載されていない。モーフィン・ゴーストに至っては妻子を持たぬまま獄中死している。

「恐らく『あの人』は、たまたま蛇語を扱えたのでしょう。私もその類です」

「たまたま『ゴースト』という苗字を持って、たまたま『蛇語』を使えるなんて妙だろ。『闇の帝王』と血の関係がないなんて、ありえない」

「では、ヴォル——『例のあの人』は、何歳なのですか？」

頭に血が上り、つい名前を口走りそうになった。

だが、既のところて言い直す。ヴォルデモートとそのまま名前を口にするなんて、優等生らしからぬ失態だ。私は息を整えると、揃えた資料を並べた。

「『あの人』が力をつけ始めたのは、1966年頃です。この時には、既にホグワーツを卒業してから年月が経過していたと考えられます。そして、私が生まれたのは1980年。もし、私の父親だとするならば、どんなに若くても、40代後半です。しかし、私の父親は20代だったと聞いています」

セレネ・ゴントの記憶に、父親の姿はない。

産まれる前に死んだのだから、姿を知らないのは当然だろう。

だが、事件に巻き込まれる前——学校の宿題か何かで両親について調べた時、確か20代だったとクイールは教えてくれた。私の父親がヴォルデモートなんてありえないし、認めたくない。

「しかも、父は死んでいます。母が私を産んだ直後に死にました。墓だってあります。」

1981年まで活動が続けていた『あの人』が父親なんて、ありません」

調べるだけ、時間を損してしまった。

さっさと本をノットに突き返して、私は錬金術の本でも読むことにしよう。「賢者の石」の材料や製造方法についての手がかりは、まだ微々たるものだ。ここで一発、発想の転換が必要かもしれない。そのためには、私には勉強が必要なのだ。くだらない蛇語のルーツを調べている時間なんて、存在しなかった。

しかし――

「だけど、これだけは言わせてくれ。

サラザール・スリザリンは東洋人だ。お前は、その血を受け継いでいると思うぞ？」

「馬鹿馬鹿しいです。そこまで、私をスリザリンの末裔にしたいのですか!？」

私はノットに本を押し付けると、談話室を飛び出した。

確かに私は、蛇語を話すことが出来る。それは、魔法界では珍しい体質かもしれないだろう。

だが、そこまで気にすることでもないだろに。私が否定しているのだから、それで引き下がればいいのに――。

「だけど――確かにイギリス人らしくない顔」

トイレに入り、鏡に映った憂鬱気な自分の表情を見る。

黒い髪は、別に目立つ程ではない。吸い込まれそうな黒い瞳は、確かにイギリスには少ない。ロマかアジア人かと思ってしまう。肌の色も、厳密に白とは言いい切れない。限りなく白に近い黄色は、やはりロマかアジア人のような気もする。

「義父さんに、聞いてみようかな」

母親のこと、父親のこと。

今まで気にも留めてこなかったことを、尋ねてみよう。

父親の写真は分からないが、クイールと仲が良かったのであれば、母親の写真くらいは残っているかもしれない。

「それに——勢いで『末裔説』まで否定したけど、末裔かもしれない」

ヴォルデモートの直子である、という説は絶対にありえない。

しかし、その場の勢いで否定してしまった「スリザリンの末裔」という点だけは、真実かもしれない。

メローピー・ゴントとモーフィン・ゴント。

この2人の名前には心当たらないが、その父親の名前には心当たりがあった。

私は、ローブから学生証を取り出す。

「あつ、セレネ！一緒に大広間に行かない？」

その時、トイレにダフネ・グリーングラスが入ってきた。

麦わら色の髪を、優雅に2つに結いている。別段断る理由もない。私が頷くと、ダフネは嬉しそうに破顔した。

「良かった。じゃあ、ちょっと待ってて。私、すぐに済ませるから」

「分かりました」

学生証の名前を見下ろしながら答える。

私は、蛇語を話せる。

私の姓は、スリザリンの直系と同じゴーントだ。

スリザリンは東から来た魔法使いであり、私は東洋人らしい容姿をしている。そして

「私の本名は——セレネ・マールヴォラ・ゴーント」

学生証に刻まれた名前を呟いた。

マールヴォラ。これは、モーフインとメローピーの父親、マールヴォロ・ゴーントと名前が似すぎている。

メローピー・ゴーントの確かな生没年が不明で、かつ短期間で足取りをつかむことは出来なかった。まさかとは思うが——私の祖母はメローピーなのだろうか。しかし、そのことを何故、名付け親のセブルス・スネイプが知っている？ 彼は、私の母と面識が無かったと言っていた気がするが。

「セレネ、ごめん。お待たせ！」

ダフネが、トイレから出てきた。

私は学生証をしまいながら、一旦この件は忘れることにする。

スリザリンの血を引いているか、いないか。そんなことは、大した問題ではない。

今は、錬金術の研究を進めて「賢者の石」を生み出す方法を探ることが先決だ。

「いいえ、問題ありません」

「そう？」

私達は、ハロウィーンの夕食の席へと向かった。

去年は諸事情で参加出来なかったので、今回が初参加となる。

「凄いでしょ、セレネ」

「はい——これは、凄いです」

少し感動してしまう。

巨大なカボチャ型の提灯が広間を照らし、生きた蝙蝠が羽ばたいている。

テーブルには、カボチャ料理が並べられていた。パンプキンパイ、パンプキンサラダ、そしてパンプキンプディング。そして、粉砂糖で化粧した城型チョコレート、

苺やブルーベリーといった宝石のような果物を乗せたタルト、ジャック・オ・ランタンを模った飴細工といった菓子類が華を添えていた。

セレネ・ゴントの記憶を見渡しても、ここまで豪華なハロウィーンなんて知らない。

「去年、来れなかったことが——非常に残念です」

ハーマイオニーも、きっと同じように感じているはずだ。

しかし、グリフィンドールのテーブルには彼女の姿が見当たらなかった。いや、ハーマイオニーだけではなく、ハリーやロン・ウィーズリーの姿も無い。今年は、3人揃って何処へ行ったのだろうか。

「セレネも、甘い物が好きなんだ！」

どの菓子も食べてみたくて少しずつ、されども全種類よそったせいだろう。気

がつくと皿から、菓子が零れ落ちそうだった。少し——はしたなかったかもしれない。優等生らしい表情を浮かべながら、

「全種類の味を確かめるためです。別に、好きと言うわけではありません」

と言ってみたが——説得力はなかったらしい。

ダフネは面白がるように、くすりと笑った。

「じゃあ私——セレネの誕生日には甘いお菓子を送るね。って、あれ？セレネの誕生日っていつ？」

「11月の末日です」

「へえー、1か月後なんだ！」

そう言えば、1月後だ。

去年は、私をスリザリンの継承者だと思い込んだ崇拝者たちが、本やら菓子を

大量に送ってきた。菓子とは、1人で食べきれぬ量ではなかったので家に送ったが——クリスマスプレゼントといい誕生日といい、大量にプレゼントが届くため、クイールには「友達が多い」と誤解されている。誤解を解いても優等生の皮が剥がれるだけなので、そのままにしているが——

いや、そのようなことはどうでもよい。

私はダフネの話に相槌を打ちながら、ハロウィーンの一時を楽しんだ。

「それにしても、今年はトロールが来なくてよかった」

帰路についたとき、ダフネは幸せそうな顔をして呟いた。

「トロールが来ても、ロックハート様がいるから大丈夫だけどね!!」

どうやら、ダフネはロックハートに心酔しているらしい。

ただ自分の著書を読むだけの授業しかできない男に、心酔する要素があるのだろうか？

「そうよね！ここでトロールが来ても、ロックハート様の武勇伝を彩るだけよ！」
愛猫を抱えながら、ミリセント・ブルストロードが近づいてきた。

「そうよね！絶対に倒すよね！」

「カッコいいよね、ロックハート様!!」

2人は、ロックハートの魅力について語り合い始めた。

彼女たちの周りに、桃色を連想する空間が構築されている気がする。ロックハートは自著を読むだけの授業しかない男であり、この間のクイディッチの試合ではハリー・ポッターの腕を治すはずが、腕の骨を全部失くしてしまうという謎の行爲をしたはずなのに、どうしてそこまで心酔しているのか理解できない。

もっとも、腕の骨をなくすという呪文には興味が尽きないが。

私は、そっと2人から離れた。

ロックハートには、興味が無い。さっさと部屋に戻り、錬金術の本を読もう。

『血の臭いがする——血の臭いがするぞ！』

「なに!？」

突然の声に、私は周囲を見渡した。

会話声で五月蠅い人混みにいるのに、異様なまでに声はハッキリ通っていた。いや、奇妙なことは、それだけではない。地獄の底から響いてきたような声なのに、誰一人として気にしていない。誰も声を気にもかけず、普段通りの会話を楽しんでいる。

「どうしたんだ？」

いつの間にか隣を歩いてたノットが、心配そうに尋ねてきた。

数十分前まで険悪な雰囲気になったのにもかかわらず、心配してくるとは——。実はお人好しなのかもしれない。だが、そのようなことは関係ない。

「いえ、なんでも」

このことは、言わない方が身のためだ。

この様子だと、誰にもこの声は聞こえていない。誰にも聞こえていない声が聞こえるなんて、頭がおかしいと思われてしまう。それは、優等生にあってはならない。

「キャ——!!」

その時、悲鳴が場を貫く。

今度は、他の人にも聞こえたらしい。悲鳴を耳にした人たちは、瞬間、異様なまでに静まり返った。

何かあったのか、隣の人と話したり、突然の悲鳴に立ち尽くしたりと、その後の反応も人それぞれだった。

「なんだ、今の悲鳴？」

ノットにも聞こえたらしい。

不快そうに眉間に皺を寄せていた。

「ちょっとどけ！道を開けろ！」

マルフォイが部下達を引き連れ、他の人達を押しつけて前に出ようとしていた。一体、前で何が起きているのか。もしかしたら、先程聞こえた声に、関係しているのかもしれない。私は、周囲の人に軽く頭を下げながら人垣を押しつけて最前列に出る。まるで、何かに突き動かされるように。最前列に出ると、禍禍しい文字が眼に入った。

その文字は、壁に何かが書かれて光っていた。高さ30センチほどのところに血を思わせるような真紅のペンキで書かれた文字が、松明に照らされて光っている。

《秘密の部屋は開かれたり 継承者の敵よ、気をつけよ》

水溜りが、文字を妖しく反射している。

管理人のフィルチの飼い猫——ミセス・ノリスが、水溜りの文字を覗き込むように固まっていた。

その先には、夕食の席にいなかった3人の姿が視えた。彼らも顔を青ざめさせ、壁の文字を見つめている。

「継承者の敵は気をつけろ！次はお前たちの番だぞ、『穢れた血』め！」

マルフォイが、静けさを破るように叫ぶ。

『秘密の部屋』は、サラザール・スリザリンが城のどこかに残したと言われる部屋のこと。

『穢れた血』とは、マグル生まれの者を蔑む純血主義の言葉のこと。

つまり、ここで言う「継承者」とは「スリザリンの継承者」を指している。
だが――

「スリザリンの継承者が、現れた？」

先程までの少し幸せな気分が、吹き飛ばされた。

私は、スリザリン生の間で「スリザリンの継承者」だと噂されている。もしかしたら、本当に私が「スリザリンの末裔」かもしれない。

しかし、私はこんなことしていない。優等生の私が、こんな真似をするわけがない。

私以外にも、スリザリンの継承者がいるのか？それとも、これは継承者の名をかたった模倣犯の仕業か？

「これは――？」

気がつく、ノットも人混みをかき分けて来ていた。

彼の視線は、壁の文字に吸いつけられている。私は彼の腕を掴むと、来た道無理やり戻った。寮へ戻るために、別の道を進む。一本別の道に入れば、そこには人がいない寂しい空間が広がっていた。

「お、おい！ゴースト!!まさかと思うが——あれは、お前の仕業なのか!?!」
「やっていません!!」

私は、即座に否定する。

スリザリンの継承者だと崇拝する連中は、明らかに私の仕業だと思うだろう。だが、あれは私の仕業ではない。しかし、このままだと罪を私に擦り付けられてしまう。ここまで積み上げてきたセレネ・ゴーストという優等生の地位が、一気に崩れ落ちることは阻止しなければならぬ。

「セオドール・ノット。貴方は私が『スリザリンの継承者』かどうか——知りた

がっていましたよね？」

本来なら、1人で調べる必要があるかもしれない。

だが、私はマグル育ちで魔法使いの家系について詳しく知らない。もちろん、図書館で調べれば解決するだろうが、他の勉強と並行して調べるとなれば、時間が足りな過ぎる。

調べている間に冤罪をかけられたら——セレネ・ゴーストは終わってしまう。

「誰が主犯なのか、一緒に探してくれませんか？」

「なんで俺が——」

「継承者が誰なのか、知りたいんですよね？」

一歩後ろに引くノットに、私は詰め寄った。

行き場を無くしたノットは、壁に背をつけた。杖を取り出そうとポケットに手を伸ばすが、私からすると動作が遅すぎる。

「『エクスぺリアームス——武器よ、去れ』」

私の方が素早かった。

ノットの杖は指から抜けて、私の左手に納まる。そのまま杖を、彼の喉元に押し付けた。

「協力してください、セオドル・ノット。

上手くいけば、貴方の抱いている疑問は解けますよ？

私が蛇語を扱う原因も、本当の継承者が誰なのかも、分かるかもしれません」

「杖を取り上げて——脅しか？」

「脅し？とんでもありません。これは交渉です」

私は、ノットから奪った杖を——ちょうど逃げるように窓から出て行く蜘蛛に向けた。

変身術で習った内容を頭に浮かべながら、杖を振るう。

「お前——いったい何を！」

ノットが言い終える前に、閃光が奔った。

閃光は蜘蛛に当たり、何の変哲もない蜘蛛は一瞬にして蛇に変わった。蛇になった蜘蛛は、驚いたように右往左往している。

「あの蜘蛛のようになりたくなければ、協力してください」

自分が蛇になった姿を想像したのだろう。

ノットの顔は、恐怖で歪む。

しかし、恐怖が浮かんしたのは一瞬だった。すぐに持ち直し、私を殺さんばかりの勢いで、睨みつけてきた。

「俺が訴えたら、どうするつもりだ？」

「蛇になってしまったら、訴えるも何もないですよ？．そもそも、蛇と会話できるのは、私だけですし」

「俺がいなくなったら——」

「ミセス・ノリスに『あのようなこと』が起こった後ですよ？

生徒が1人消えても、『継承者』が疑われるだけです」

「ならなおさら、ゴーストが疑われ」

「私には、不本意ながら崇拜者がいます。彼らと一緒にいたという事実を作り出せば、良いだけの話です」

「つく——汚いぞ、お前」

「汚い？」

こちらを睨んでくるノットを、私は一蹴した。

「私は、汚くありませんよ。セオドール・ノット。ただ、協力を申し出ているだけ

です」

しばらく無言の時が続いた。

遠くから、こちらの廊下に歩いてくる足音が響いてくる。時間がない。私は無表情を装いながらも、内心焦り始めていた。このまま誰かが廊下に入ってきたら、優等生らしからぬ行動を見られてしまう。もう少し柔らかく協力を頼めば良かった——と、後悔が湧き上がってきた。

「……」

ノットは、無言で私を睨んでいる。
そして——

「分かった。協力する」

ため息とともに、ノットは了承する。

私はホッと胸を撫で下ろした。突きつけた杖をローブに戻し、左手の杖を返す。

「ありがとうございます、ノット。もちろん、この調査のことは内密に」

「お前、とんでもない優等生だな」

ノットは、吐き捨てるように言い放つ。汚くて結構。詰まる所、人に知られなければ良いのだ。だから私は、にこやかな微笑みと共に言葉を返した。

「それでもセレネ・ゴントは、優等生ですよ」

私が本物の継承者なのか、それとも唯の勘違いなのか。

どちらにしろ、私に嫌疑の眼を向けられる可能性は高く、免罪を被せられる可能性も高い。

だからこそ、行動する。

私の無実を証明するために――。

※ 3月29日…一部訂正

18 話 早朝の図書館

ジャスティン視点です。

※3月29日…訂正

郵便の時間、僕——ジャスティン・フィンチ・フレッチリーは少しでも寂しくなる。

同じハツフルパフ寮のアニー・マクミランやハンナ・アボットやスーザン・ボーンズ、そして他の先輩方や後輩の皆には手紙が届く。——でも、僕の所には一通も来ない。僕は——フレッチリーの名を穢した異端児だから。

代々——フィンチ家もフレッチリー家も、政治家や医師を輩出している名家だ。

だから、僕も政治家になるために勉強をしていた。いや、させられていた。

勉強することに疑問を覚えることもなく、淡々と与えられた課題をこなす日々。遊ぶ時間も無く、そもそも遊ぼうという考えを抱くこともなく、僕は毎日の生活を送っていた。

イートン校に入学が決まった時も、誰も誉めてくれる人はいない。フィンチ家もフレッチリー家も、それは当然のことで誉めるに値しないのだ。とはいえ、必死に努力して積み上げた成果を誉められないのは少し悲しいことだった。

僕は——どうして勉強しているのだろうか。

このまま勉強を続けていても、誉めてもらえることは無いのではないか？

誰からも認められることもなく、親の敷いたレールの上を歩くだけの人生を送るのだろうか。

まだ、自分が何をしたいのかは分からない。でも——それでも、僕は自分で何かを選びたい。

ジャスティン・フィンチ・フレッチリーの生きる目的を探したい。

ホグワーツの入学許可証が届いたのは、そんな時だった。

両親は、入学に猛反対した。だけど、僕はその反対を押し切って——初めて、自分の意志で物事を決めた。両親に逆らったのも、それが初めてだった。両親は、僕のことを許していない。父親は「魔力なし」と判断された弟の勉強に打ち込み、僕には見向きもしない。

母親は「訓練された魔法使いがいることは、大切なことね」と言うけど、それは口だけ。僕に氣遣って言っているだけだった。

手紙が来ることもなく、出したところで意味のある手紙は帰ってこない。

だから今日も、僕は郵便の時間が来る前に大広間を出ようとする。ホグワーツに入学したこと自体に後悔はしていない。それでも——この時間は苦痛なのだ。

「あっ、今日も1人で図書館に行くのか？」

僕の背中に、アニーが声をかける。

ミセス・ノリスの事件が発生して以来、マグル出身の僕を気にかけてくれる。「スリザリンの継承者」だと噂されているハリー・ポッターに、僕がマグル出身だと漏らしてしまったから――。

「大丈夫です。彼は――まだ、食事中です」

僕はアニーに、弱い弱い微笑みを返した。

ハリー・ポッターは、友人と一緒に食事をとっている。今なら1人で移動しても何も――問題ないはずだ。

1人、図書館へ出かける。

今から始業までの1時間――いや、移動時間も考えると45分間。僕は、スリザリンの少女と一緒に本を読む。少女が読むのは、決まって錬金術関連の書物。真剣な表情で本を読み、見知らぬ物質の構造式と計算式をノートに書き写し、時折何かを考え込む。だから、話しかけることはしない。僕は、ただ予習と復習をするだけ。たまに、どうしても分からないところがあると、作業の様子を見て話しかけてみる。

そうしたら——作業を止めて、的確に教えてくれる。そんな彼女と一緒にいることは、心落ち着く一時だった。

「あつ、良かった。今日もいる」

今日も、いつもの席に腰を掛けている。

声を上げなければ、美しい人形と見間違えてしまうだろう。

セレネ・ゴントは、古びた本を読んでいる。黒い制服から覗く細い手足と、陽光とは無縁な白い肌。憂いがちな趣は、人間らしい意志を感じさせない。

誰よりも黒く艶やかな髪も、眼鏡の奥の黒い瞳も、どこことなく神秘的で——まるで、美しい絵画の様に図書館に溶け込んでいた。

「おはよう、セレネ」

椅子を引き、セレネの前に腰を掛ける。

セレネは、本から顔を上げることなく

「おはようございます、ジャスティン」

とだけ言った。

やや丁寧過ぎる声。

これが、セレネ・ゴントのセレネ・ゴントらしい特徴の1つだろう。

少し前まで、セレネ・ゴントを誤解していた。グリフィンドールのハーマイオニー・グレンジャーと同じ勉強熱心な才女かと思っていた。スリザリンであるということも加えて、マグルの世界で生きていた頃の僕と同じように英才教育を受けてきた純血主義のサラブレッドかと思いついていた。

でも、ダイアゴン横丁で出会ってから——少しずつ誤解が解けて行った。

セレネ・ゴントは魔法使いの血こそ引いていても、マグルで育っていた。

更に言えば、受け答えが人形のようなのだ。絵にかいたような優等生でありつつも、ハーマイオニー・グレンジャーとは、どこかが違う。セレネも、少し前の僕みたい

に、誰かに認めてもらいたいから勉強しているのだろうか？ いや、完璧なセレネに限って、それは無いだろう。

僕も鞆から教科書を取り出し、捲り始めた。

「……」

「……………」

朝の陽光が、窓から影を落としている。

古書の香りに包まれて、僕達は静寂の中で本を読み続ける。

早朝から図書館を使用する奇特な人間は、僕達しかない。司書のマダム・ピンズでさえ、朝食のため図書館の席を外していた。

「……」

ふと、視線を上げてみる。

セレネは、いつも通り本を読み進めていた。今日は珍しく、メモを取らないらしい。

ただ静かに、本を捲っている。本を読むセレネの姿は、図書館で最も鮮やかに見る者を魅了するようだ。完全なる不意打ちである。どうにかして意識を逸らそうと、僕は教科書に目を落とす。しかし、今度は静寂が耐えられない。僕は、つい

「すみません、セレネ。1つ尋ねてもよろしいですか？」

と、前々からの疑問を1つ——尋ねてみてしまった。

セレネは、本を捲る手を止める。しかし視線は本に落としたまま、こちらの質問に応答してくれた。

「なんですか、ジャスティン」

「その——セレネは、東洋系の血を引いていますか？」

セレネの顔立ちは、イギリス人とは違いすぎる。

正確に言えば、欧米人には無い神秘的な雰囲気醸し出していた。特徴、雰囲気、たたずまい、総合的に見ると、やはり東洋系——特に、アジア系の容姿に思えるのだ。

「詳しく分かりませんが、恐らくは東洋人の血を引いていると思いますよ」

セレネは、淡々と答えてくれた。

まるで、自分の血筋に興味がないようだ。しかし——それにしては、先日——1日だけ、「生粋の魔法族」という本を熱心に調べていた。巷を騒がす「スリザリンの継承者」について調べていたのかとも思うが、よく思い出してみれば——あれは、ハロウィーンの前だったように思う。口では興味がない素振りをしているが、実はセレネなりに、自分の血筋を探していたのかもしれない。

「しかし、何故そのようなことを聞くのです？」

「えっ——?」

セレネの眼が、僕に向けられている。

黒い瞳からは、今までの無機質・無表情・優等生らしさが消えていた。

吸い込まれるような黒い瞳は、まるで僕の魂胆を探るかのような鋭い光を携えていた。もっとも、魂胆なんかない。ただ、僕は気になっただけだ。だから、尋ねてみた。それだけである。

「いえ、他意が無いなら結構です」

セレネは、再び本に目を落とす。

このまま普段通り——特に会話もない読書に戻っていたら——この後、何も起こらなかったかもしれない。だけど、僕は気になってしまった。優等生らしさが一瞬、何故消えたのかと。

「氣になったから聞いただけです。ですが、珍しいですね。セレネから何かを尋ねて来るなんて」

「えっ？」

本を捲ろうとしていた指が、ピタリと止まった。

「そうでしたか？」

「そうですよ。何か、ありましたか？」

セレネは、本気で驚いているみたいだ。

僕を見つめて、何回か瞬きをする。しばらく僕の眼を覗き込んだ後、何事もなかったかのように首を横に振った。

「いいえ、何もありませんよ」

無機質な声が、寂しく木霊する。

僕達の会話は、これで終わった。セレネは本に、僕は教科書に没頭する。

しばらく普段通りの時間が過ぎていく。時計の針が進む音、ページをめくる音、どこか遠くで楽しく話し合う声——そう、普段通り。だけど、何かが違う。

「セレネ」

もう一度、声をかけてみる。

セレネは顔を上げることなく、

「何ですか？」

とだけ答えた。

別に、特別用があったわけではない。ただ、声をかけてみたかったから声をかけてみたただけだ。——なんて、どこことなく気恥ずかしい言葉は言えるわけもなく、

必死に話す内容を探した。

「その……いつも1人ですが、スリザリンに友達はいないのですか？」
「そうですね——」

セレネは少し考え込むように、指を持ち上げる。

「ダフネ・グリーン格拉斯は、たぶん友達ですよ」
「グリーン格拉斯さん、ですか」

しかし、果たして——セレネ・ゴントは、本当にグリーン格拉斯のことを友達だと思っているのだろうか。少なくとも、僕やアニー、ハンナそしてスーザンみたいな関係を築いているようには思えなかった。

僕は——セレネの友達なのだろうか？

「そろそろ行きます。予鈴が鳴る頃ですし」

セレネは、早々と片付けを始めてしまった。

僕は焦った。1番肝心の問いを尋ねていない。だけど、直球に「僕はセレネの友達？」と尋ねるのも恥ずかしい。でも——今聞かないと、きっと後悔する。

僕は勇気を振り絞って、顔を上げた。

「冬休み！」

「……冬休み？」

去ろうとするセレネの背中に、声をかける。

セレネは不思議そうに振り返ると、首を傾けた。

「冬休み、予定は何かありますか？」

無いのでしたら、一緒に大英博物館に行ってくださいませんか？マグル育ちの友達

は、セレネしかないんです。マグルで育っていた頃には、友達いませんでしたし……魔法族の友達には、マグルの博物館に興味が無いみたいです。だから、一緒に行ける友達には、セレネしかないんです!!」

言いたいことを、一気に言葉にする。

言い切った。僕は、人形のようなセレネの顔を見つめる。

断れば、僕は友達ではなかった。しかし、断られなければ——僕は、セレネの友達と言うことになる。

「クリスマス、ですか」

セレネの問いに、僕は無言でうなずいた。

久遠の時間が過ぎた気がする。僕の顔に熱が集まり、赤くなるのが良く分かる。もつと良い——婉曲に確かめる方法があったはずなのに、だけど僕は変な問いかけをしてしまった。

何て恥ずかしいことを言ってしまったのだろう。僕は、その場から消え失せてしまいたかった。

「……はあ」

セレネは、怪訝そうな顔をして息を吐く。ゆっくりとロープを翻しながら、僕に背を向けた。

「別にかまいませんよ。クリスマスはマグルの世界に戻る予定でしたし」

それでは、とセレネは去っていく。

図書館には、僕だけが取り残された。

一瞬の空虚な感覚の後、心躍る夢にいる様な満足感が胸を支配した。

嬉しくてたまらない。飛び跳ねて叫び出したかった。この気持ち、一体何なのか自分にも分からないけど——でも、あのセレネの友達ということが証明され

た。

それが、嬉しくてたまらない。

「必ずですよ、セレネ」

僕の眩きは、誰にも聞かれることもなく図書館に吸い込まれていく。
初めてだった。ここまで——クリスマスが待ち遠しいのは。

僕は、どこことなく浮ついた気持ちでクラスに向かうのだった。

19話 禁書

7月27日…大幅改定

それは、魔法薬学の授業のことだった。

薬を煮る音が、静かに響き渡る。

無駄な雑談は、聞こえてこない。誰もが黙々と、自分の鍋に向き合っている。

「よし、出来た」

私は、出来上がった魔法薬——「膨れ薬」を小瓶に詰める。

そっと周りを見渡してみれば、私が1番に完成したらしい。小瓶を提出すれば、

スネイプは小さく笑みを浮かべ

「よく出来たな、ゴースト。

スリザリンに20点」

と、得点をくれた。

私は軽く頭を下げると、席に戻った。

入れ代わりに、ハーマイオニーが小瓶を提出しに行く。彼女から受け取った小瓶を一瞥し、ふんつと鼻を鳴らす。そして、スネイプは

「片づけをしたまえ」

とだけ言った。

スネイプは、寮の差別が激しい。ハーマイオニーがグリフィンドール生ではなく、スリザリン生——いや、レイブンクロー生辺りだったら、点数がもらえたかも

しない。

露骨な差別は、いかなるものなのか……

「あれ？」

その時だ。

片づけを始めた視界の端に、奇妙な光景が移った。

ハリーとロン・ウィーズリーが、何やらコソコソと話している。ハリーの手の中には、何か細長いものが握られていた。目を細めてみてみれば、それは「暴れ花火」だった。普通の花火より威力の高い魔法族の花火だと聞いたことがある。

なぜ、花火を——しかも、授業中に持っているのだろうか？

考えを巡らせたその時だった。

ハリーは、花火をクラップの鍋に放り込んだのだ。

クラップは難しい顔をしながら、葉草を刻んでいる。鍋の異変に気がついていな

い。

「……まさか」

嫌な予感の中。

燃え盛る鍋に、勢いよく火花を飛び散らせる花火が投入され——そして、巨大な音が教室を震わせた。鍋は爆発し、煎じていた「膨れ菓」が空を舞う。

私は、慌てて杖を引き抜いた。

「『プロテゴ——守れ』！」

杖の先から、防御の盾が展開される。

まさに、間一髪だった。降り注がれる薬品の雨から、我が身を護る。

魔力を込めればクラス全体に展開する傘の代わりになったのかもしれないが——
——生憎、そこまでの余裕は無かった。

貫くような悲鳴が、クラス中に湧き上がる。前の席に座っていたマルフォイやパーキンソンは、顔いっぱいには菓を浴びて、整った鼻が風船のように膨れている。

鍋が急に爆発したクラブは最も悲惨な有様だ。大皿の様に大きく腫れぼったい目を、両手で覆いながら右往左往していた。

「静まれ！ 静まらんか!!」

スネイプは、怒鳴り声を上げる。

どうやら原因究明の前に、薬品を浴びた生徒の治療に乗り出らしい。薬品を浴びた生徒を集め、「膨れ薬」の対称「縮み薬」をかけ始めた。授業どころの話ではない。右も左も大混乱だった。

「一体、どうして爆発しちゃったんだろう？ セレネはどう思う？」

奇跡的に難を逃れたダフネ・グリーングラスは、不思議そうに首をかしげていた。私は、その原因を知っていたが——話す気にはなれなかった。

「問題は、どうして？ではありませんよ。何故、爆発させたのか？です」

「何故？」

困惑した様な表情を浮かべる彼女を尻目に、私は片付けの支度を再開する。

そして、逃げるように教室を去った3人組の後を追った。3人組は、辺りを確認しながら万年故障中の女子トイレに転がり込む。

「なるほど——人の寄り付かない場所は、こそこそ何か企むに丁度良いってことですね」

人が寄り付かない場所だからだろう。

私の眩きは、意外と響き渡ってしまった。トイレの中に入った3人組は、跳び上がる様に振り返る。1人の手には、毒ツルヘビの皮が握られていた。上級魔法薬でも滅多に使わないと噂される材料で、彼らは何を調合しようとしたのだろう。

3人のうちの1人……ハーマイオニーが、勇気を振り絞るように前に出た。

「セレネ。どうしたの、こんなトイレに？」

「どうしても、こちらの台詞です」

私もトイレに入り込むと、薬が煮え立つ鍋を一睨みする。

「材料を取るために、鍋に花火を入れて授業崩壊させるなんて——らしくありませんよ、ハーマイオニー・グレンジャー」

後ろに控えていたハリー・ポッターとロン・ウィーズリーの顔まで、青ざめていく。

3人とも、小刻みに震えている。

——ただ鍋を爆発させた現場を見られていたからでは、ここまで驚かない。つまり、彼らが隠れて調査中の薬品は、ホグワーツの校則に違反しているか校則どころか法律に違反しているもののどちらかである。

優等生、セレネ・ゴーストとしては咎めなければならない。

「その材料——毒ツルヘビの皮ですよね？」

大切な授業を台無しにしてまで、何を調査しようとしていたのですか？」

「セレネ、分かってくれ。これには、訳があるんだ」

ハリーが、前に出てくる。まるで、煮え立つ鍋をかばうように。

挑戦するかのように、私に対峙している。顔に浮かんでいた怯えの色は薄まり、代わりに挑戦的な色が浮かんでいた。

「訳？」

「今は言えないんだ。でも、ここは見逃して欲しいんだよ」

「……」

優等生のセレネであれば、ここは見逃さずに先生に報告する。

しかし——ハリーやハーマイオニーたちが規則を破ってする行動も気になる。しかも、この魔法薬。どこからどう見ても2年生程度の教科書に記されている魔法薬とは思えない。おそらくは、下級生閲覧禁止の棚にある類の本だ。

「セレネ、お願いだ」

「作っている薬は、合法的なモノですか？」

「それは——」

ハリーの勢い良かった言葉が萎んでいく。

私は、湯気を上げる鍋を再び確認した。鍋から上がる湯気の具合、独特な臭い、毒ツルヘビの皮、そして非合法的な薬と言えば、導き出される答えは、やはり1つしかない。

『ポリジュース薬』は、『最も強力な薬』という本に記載されているはずだ

「なんで、そこまで分かるんだよ!？」

ロン・ウィーズリーが絶句する。

どうやら「当たり」だったらしい。

ポリジューズ薬は、自分以外の誰かに変身出来る効能を秘めているらしい。スネイプが、数か月前に授業で話していた内容だ。しかし、その薬の効能は今の私には関係ない。

問題なのは、それが書かれた本が、禁書の棚にあるという一点のみだ。

「禁書の棚の本を、どうやって持ち出したのですか？

私の記憶では——下級生が「禁書」の棚の本を借りるためには、先生のサイン入り許可書が必要だったと思います」

3人は顔を見合わせて、何かを言い淀んでいる。

ここが、正念場だ。私は、セレネ・ゴントの優等生らしい笑顔を作り上げる。気を許しても良さそうな、柔らかい笑顔を3人に向けた。

「私は、貴方たちを見逃します。しかし——禁書の棚から本を借りるためには、並大抵ではない苦労が必要です。いったい、どのような方法を取ったのか——少し気になりまして」

3人の顔から、緊張が解けた。

なんだ、その程度のことを話せば見逃してもらえるのか、と思っただけ。

ハリーは、どことなく緩んだ表情で教えてくれた。

「ロックハートにサインを貰ったんだ。何を借りるかも見ないで、サインを書いてくれたよ」

「なるほど」

……悔しい。それは盲点だった。

眼から鱗が落ちるとは、まさにこのことだろう。

目立ちたがり屋なギルデロイ・ロックハートは、とにかくサインをしたがる。その悪癖を利用した良い作戦だ。何故、思いつかなかったのか——少し悔やまれる。

「分かりました。このことを、私は誰にも話しません。
無事に調合できるといいですね。それでは——」

3人に背を向けて、私は歩き出した。

視界の端に映ったハリーが、何か言おうとしていたが——私には関係ない。大切な情報は、しっかりと手に入れた。

「おい、ゴースト。どこをほっつき歩いていたんだ」

階段を降りれば、ノットが廊下の端から駆けてきた。

ハロウィーンの時に協力関係を結んで以来、こうして2人で行動する回数が増えた。もっとも、私もノットも互いに用事がなければ話しかけることはない。

ノットが話しかけてきたということは、興味深い証拠をつかんだか、その証拠が空振りに終わったか。そのどちらかだった。

「少しトイレに用に行っていました。

それで——どうしたのです？」

「……父上の伝手を使って手に入れたメローピー・ゴントの消息だ」

束になった羊皮紙を、乱暴に手渡してくる。

メローピー・ゴントは、私の祖母かもしれない人物だ。私は、歩きながら目を通した。

「マグルと駆け落ちして、1年足らずで捨てられる。

スリザリンに伝わる家宝を売り払うまで困窮した生活の末、マグルの孤児院の前で死去。寂しい死に方ですね。——彼女に子供は？」

「いた。トム・リドルと言うらしい。こっちは、今調査中だ」

「トム・リドル」

ありふれた名前だ。

少なくとも、マールヴォロやモーフイン、メローピーよりも庶民的な名前に驚いてしまう。

駆け落ちしたマグルの名前だろうか、それとも、メローピーが庶民に憧れを抱いていたのだろうか。

「なんだか、機嫌が良さそうだな」

「そうですか？ 気のせいでしょう」

私は、どこことなく弾む気分で「闇の魔術に対する防衛術」の教室へ向かった。

メローピーの出産記録により、スリザリンの末裔かもしれないという疑惑は高まってしまったが、それよりも「禁書」の棚に近づく方法が手に入ったことの方が嬉しかった。

ロックハートが自著を音読するという——普段通り退屈な授業だったが、出来る限り熱心に講義に耳を傾ける。

「あの——ロックハート先生、よろしいでしょうか？」

そして、授業が終わった後、ゆっくりと先生に歩み寄った。

出来る限り平静な声を務めて、やや控えめに許可書を差し出した。

「図書館から借りたい本があります。

『狼男と大いなる山歩き』に出てくる、『石になった僧侶』を理解するのに役に立つと思うのですが——生憎と、禁書の棚にありまして、誰か先生のサインが必要なんです。

このようなことを頼めるのは、ロックハート先生しかいません。どうか、お願いします」

「『狼男と大いなる山歩き』ね！」

ロックハートは許可書を受け取り、私に白い歯を見せた。

「あれは実に大変な経験だったよ。——面白かったかい？」

「はい。とても楽しんで読みました。非常に興味深かったです」

「そうかい、そうかい」

上機嫌のロックハートは、孔雀の羽ペンで、許可書に似合わぬ派手なサインを書き上げる。ハリーの言う通り、ロックハートは私が何を借りるのか——全く確認しなかった。

「ありがとうございます、先生」

許可証を鞆の中に滑り込ませ、ロックハートに背を向ける。

最後の手段として、マクゴナガル先生に頼もうかと思っていたが——こちらを選

んで正解だ。

正直、「石になった僧侶」など興味の欠片もない。

私が欲しいのは、賢者の石の情報だけ。

いまだ1割すら完成形を思い浮かべることが出来ない上に、図書館の錬金術関連の本は読みつくしてしまった。こうなったら、もう残された手がかりは禁書の棚だけだった。

ダンブルドアと約束した以上、ニコラス・フラメルには直接謁見できる。

それならば、今はもう1人の錬金術師——パラケルススについて調べることが先決だ。

「なに、学年の最優秀生徒を応援することに、誰も文句を言わないでしょう。

それよりも——ミス・ゴントは『決闘クラブ』に、もちろん出席しますよね？」

ロックハートの気取った声が、背中にかかる。

正直、振り切って図書館に駈け出したいところだったが——サインを書いてもらった以上、無碍にはできない。私は仕方なく、優等生らしい表情を浮かべて振り返った。

「決闘クラブ、ですか？」

「ええ、実はダンブルドア校長先生から、私が決闘クラブを始めるお許しをいただきましたね。私自身が、数えきれない程の経験をしてきたように、自らを守る必要が生じた万一の場合に備えて、皆さんをしっかりと鍛え上げる場を設けようと思ひまして」

……。

正直、興味を無くしてしまった。

せっかくの機会だという事と、優等生であることをアピールするために参加しようという心に決めていたのだが、この男主催ということで行く気が失ってしまった。

教えるのがロックハートだということで、果たして本当に決闘を学べるのだろうか

かと不安だった。しかし、セレネ・ゴントは優等生だ。ここで断ることの方が不自然である。

「はい、もちろんです、先生」

—— 渋々、頷くしかなかった。

しかし、目的は達成出来た。それだけで、良しとしよう。

私は、ロックハートの研究室に背を向けると、そのまま図書館へ向かおうとした。許可書の入った鞆を、大切に握りしめて。

※ 3月29日…誤字訂正

20話 決闘クラブ

7月27日…大幅改定

ヴァン・ホーエンハイム・パラケルスス。

彼は「遍く人々を、愛し子を救うために成すべきことを成す」をモットーに、マグルの世界に魔法や研究成果を広めた異端の魔法使いだ。

その溢れるばかりの才能をマグルのために使い、魔法使いに疎まれ、死に追い込まれた。異端の天才魔法使いが残した書物の大半は死後、処分され歴史の闇へと葬り去られてしまう。

そんな彼だが、錬金術の世界ではわずかに痕跡を残している。

彼に比肩する錬金術師は後世にいたるまで出現せず、彼の錬成した「賢者の石」

はニコラス・フラメルのもとも違った性質を携えていたという。

その性質とは――

「吸収？」

つい、セレネは声に出して読んでしまった。

理解が追い付かない。その衝撃がよほど大きかったのだろう。叫びほどはいかないが、近くのスリザリン生たちを驚かすくらい大きかったらしい。気がつけば、談話室に集ったスリザリン生たち全員が「なにごとか？」という視線を感じる。

「セレネ、どうしたの？」

やはりというべきか、最初に声をかけてきたのはダフネだった。

「いえ、少し予想外のことが書いてありましたので、驚いてしまいました」

「へー、セレネにも予想外のことがあるんだ」

「私も予想が外れることくらいあります、人間ですから」

本をぱたん、と閉じながら言い返す。

すると、ダフネはくすくす笑った。

「なにかおかしいことでも？」

「ううん、なんでもない」

どこがおかしいのか、ダフネはしばらく笑い続けていた。セレネは理由が分からず、首を少し傾げた。しかし、ダフネが笑う理由よりも今はパラケルススの「賢者の石」についての知識の探求が先だ。

夕食も終わり、寝る前の読書も兼ねて談話室で勉強をしていたが——これだと集中できそうにない。セレネは小さく息を吐いた。

「それでは、私——部屋へ行きます」

「え？ 今日決闘クラブだよ？」

立ち上がりかけたが、待ったをかけられる。

セレネは気持ちが重く沈み込むのを感じた。

「決闘クラブ、ですか」

ロックハートの決闘クラブの質なんて、たかが知れている。

正直、出る価値もない。いくら優等生を演じているからといって、ロックハートに媚を売ることができだろうか。そのようなこと、やりたくない。むしろ、優等生だから出ないという手もあるのではないだろうか、とさえ考えてしまう。

「セレネ、いやなことから逃げちゃだめだよ」

「別に嫌なことではありません。出るに決まっていますよ！」

売り言葉に買い言葉とは、まさにこのことである。

ダフネの言葉を受け、勢いに任せて参加すると言ってしまった。もう後戻りはない。

「行こう、セレネ」

セレネは彼女に引きずられるように談話室を後にする。

振りほどくことなど、簡単だっただろう。だが、たまにはこれでいいか、と思う自分もいた。

「それにしても、人が多いですね」

そう驚いてしまうくらい、夜にもかかわらず人通りが多かった。

「継承者」とやらの事件が多発し始めて以来、8時以降に廊下を出歩く生徒は稀

だった。しかし、今日は違う。どこを見渡しても人で溢れかえっていた。人ごみの中にマルフォイたちやハリーたちもいる。ジャスティンもハッフルパフ生たちと一緒にいた。

「しかも私たちくらいの生徒が多いね。あそこにいるの、一年生だし」

ダフネの視線の先を辿れば、赤毛の顔色の悪い女の子がいた。

「皆、不安なのかもしれませんね」

すでに防衛術を習っているならともかく、1、2年生はろくな防衛呪文を知らない。今年度の「闇の魔術に対する防衛術」の教師はもちろん、昨年度のターバン男もしっかり教えてくれたと言い難かった。

「セレネ、誰が教えてくれるか知ってる？」

「……知らない方がいいですよ」

むしろ、教えた方が彼女のためだったのだろうか、と考えながら決闘クラブの会場——大広間に足を踏み入れた。食事用の長いテーブルは全て取り払われ、一方の壁に沿って金色の舞台が設置してあった。何千ものロウソクが上を漂い、舞台を照らしている。

「えっ!?! セレネ、知ってるの?」

「まあ、知っていますけど……」

「だれだれ? 教えて!」

しかし、セレネがその人物の名を口にする前に、金色の舞台に男がさっそうと登場した。

ギルデロイ・ロックハートだ。

深紫色のローブを着た彼の後ろには、いつもの漆黒のローブを翻してスネイプが現れた。

「静粛に！みなさん、集まっていますか！？結構結構！では…」

ロックハートが、いつもの笑顔で話し始めた。

非常に珍しい組み合わせだ。スネイプは相当機嫌が悪いのだろう。上唇がめくれあがっている。今のスネイプなら神話上のバジリスクではないが、目だけで誰かを殺せそうだ。

よくロックハートは笑顔で演説をされるな、と少し感心してしまった。おそらく周りを見ていないのだろう。ロックハートは女性を魅了する笑顔を浮かべながら、言葉を紡いでいく。

「ご覧のように二人で作法に従って杖を構えています。それから3つ数えて最初の術をかけます、大丈夫ですよ、お互い殺すつもりはありません」

長々とした演説が終わったようなので、ロックハートの説明に耳を傾けた。お互い殺すつもりはない、とロックハートは言うが、はたして本当だろうか。少なくとも、スネイプはロックハートのことを殺しそうな勢いで睨んでいる。

もっとも、本当に殺したら牢獄行きになってしまうので、殺しはしないと思うが。

「1—2—3」

「エクスペリアームズ—武器よ去れ！」

『3』とカウントした直後に、スネイプが振り返り杖から目のくらむような紅色の閃光を繰り出す。

ロックハートの杖は吹き飛び、彼は派手な音とともに壁に打ち付けられた。ダフネや他の女子生徒たちが驚いて手で口を覆っている。

セレネは床に情けなく大の字に転がったロックハートを見て、思わず呆れてため息をつきそうになった。マルフォイやハリーたちは、堪えることなく笑っている。

「さあ、みなさん」

ロックハートは、髪が乱れたままふらふらと立ち上がる。しかし、笑顔は忘れていない。ある意味、プロ根性だ。そこだけは尊敬に値する。もっとも、尊敬はしないが。

セレネが冷ややかな目で見ている間にも、ロックハートの語りは続く。

「今のが『武装解除の術』です。ごらんのとおり…私は杖を失ったわけです——
ああ、ミス・ブラウン、ありがとう。スネイプ先生が生徒に今の術を見せたのは素晴らしい考えです。

しかし、今先生がやろうとしたことはあまりにも見え透いていましたね。それを止めようとしたら、いとも簡単に出来たでしょうが……」

ここで、ようやくロックハートは言葉を止めた。さすがに、スネイプの殺気を感じ

じたらしい。少し離れている自分がある場所まで伝わってくる濃厚すぎる殺気だから、これに気が付かない人はいないだろう。

「模範演技はこれで十分ですね！さあ、2人1組になって練習です！」

ロックハートがパンパンっと手を叩いた。

それから、セレネはしばらくダフネと一緒に武装解除の呪文を練習した。しかし

「ダフネ、それ本気？」

「ほ、本気でやってるよ！エクスペリアームス!!」

ダフネは顔を真っ赤にして呪文を口にしたが、セレネの杖はぴくりとも動かなかった。

「こうやるのよ『エクスペリアームス―武器よ、去れ』!!」

セレネが素早く口にする。すると、杖の先から赤い閃光が奔り、ダフネの杖は弧を描きながら宙を舞う。

「発音は完璧です。あとは、込める魔力の量ですね」

セレネはダフネの杖を手にしながら、考察を口にした。

「すごいな、セレネ。私、聖28族なのに、魔力量が少なくて……」

ダフネはがつくし、と落ち込む。

「聖28族？ ……ああ、純血の一族のことですか」

ノットの祖先が書いた本が、セレネの脳裏に浮かんた。

聖28族とは、1930年代の時点で「間違いない純血の血筋」と認定された一族のことである。このなかには「マルフォイ」や「グリーン格拉斯」「ブルストロッド」「ノット」など見覚えのある名前が並んでいる。よく読めば「ゴースト」という一族の名前も28族の中に入っていた。

「うん。でも、私の一族には呪いがあって——」

この先、ダフネが話そうとしていたのだろうか。

セレネは聞き取ることができなかった。

「危ないっ!!」

そもそも、最初から考慮すべきであった。

なにせ、最初の指示が「2人一組になって決闘に練習をするように」だけだっ

たのである。場所の指定がなかった以上、そこら中で——しかも、決闘の際に使用する呪文を明確にしていなかったせいで——呪いやらなにやらが乱発していた。相手にかけるだけならいい。その相手が避けてしまったとき、その呪いの標的は別の人物へと向けられてしまう。

そして、その呪いは今、まっすぐダフネに向けられていた。

いまから防御魔法を討とうにも間に合わない。セレネの足は勝手に動き出し、そして——

「——ッ!!」

自分の身体を盾にするように、ダフネと呪いの間に割り込んでいた。

当然、例えようもない激痛がセレネを襲う。

「やめなさい、やめ!! ああ、ブルストロード、首を絞めるのはやめなさい! そこ、鼻血は止まるから大丈夫。セレネ・ゴント! 気を失うのは早いですよ!」

ロックハートが何か叫んでいるのが聞こえる。

だが、痛みでどうでもいい。それも遠くなり、どんどん視界が暗くなっていく。

「セレネっ、ごめん！ ごめんね！」

ダフネが涙をいっぱいにつかべながら、自分を見下している。

自分は、なにをやっていたのだろう。

決まっている、優等生だからだ。頭のどこかでそんな声したが、それは違うような気がした。ダフネを助けようとしたとき、そんなことを考えていなかった気がする。

「私……セレネ、失格だな」

痛みは臨界点を突破している。

もう限界だ。

なにせ、石になった人を戻すことができるほどの技術がある世界だ。

この程度の傷、マダム・ポンフリーなら治すことができるだろう。

セレネはその言葉を最後に、意識を手放した。

翌朝、目が覚めたとき、セレネは医務室にいた。

痛みはなく、指も動くし、他にも不都合な点はなさそうだ。セレネは自分が起きたことを告げようとして、おかしなところに気づいた。

しかし、医務室には誰もいない。

校医の姿すら見当たらないのだ。

いったい、どういうことだろうか。

セレネが疑問を感じていると、医務室の前が騒がしくなってきた。

「早く、こちらへ」

「ひどい……こんなことって！」

天文学科のシニストラの後ろ姿が入ってくる。その後に続けて、フリットウィツクの小さな姿が。

二人は何かを運んでいる。石像のようなものの片端を重そうに持って運んでいる。セレネは目を丸くした。

「ジャステイン？」

ジャステイン・フィンチ・フレッチーだ。

冷たく、がちがちに硬直し、恐怖の痕が顔に凍りつき、虚ろな目が天井を凝視し

て
い
る。
。

セレネは眼に熱が集まるのを感じた。

21話 ポリジュース菓

ハリー視点です。

7月27日…大幅改定

今年のホグワーツは、例年にも増して人がいない。

ハロウィーンにミセス・ノリスが、クイディッチ戦の次の日にコリン・クリービーが、そして事件に拍車をかけるように、ジャスティン・フィンチ・フレッチリーが石になったというニュースは、ホグワーツに更なる混乱を招いた。

こうなったら、学校に得体の知らない怪物が徘徊しているのは事実だ。

誰もが逃げるように帰宅したため、今現在——ホグワーツは葬式かと思うくらい静まり返っている。だけど、僕達には関係ない。

その日、僕とロンとハーマイオニーは、「ポリジュース菓」の最後の仕上げに入っ

ていた。

「本当にこれで、クラブとゴイルに変身できるのか？」

汚泥のような液を睨みつけながら、ロンが呟いた。

「ええ、きっちり1時間。貴方たちはクラブとゴイルに変身して、スリザリンの談話室に潜入出来るはずよ」

僕は、スリザリンの談話室へ侵入する。

スリザリンの継承者は、絶対にマルフォイだ。彼は代々純血だと公言し、マグル生まれが次々に石になる状況を喜んでゐる。僕たちは、スリザリン生に変身してマルフォイから真実を聞き出す。

「でも、君は誰に変身するんだ？」

「私のは、もうあるわ」

そう言うと、ハーマイオニーは1本の髪の毛を取り出した。

「セレネ・ゴントよ。この間の決闘クラブの後、彼女が入院したとき、お見舞いに行ったの」

黒い髪の毛を、ポリジュース薬の中に落とす。しかし——色に変化はない。クラップとゴイルの髪の毛を入れた時は、一瞬で透明から眼を背けたくなるような色に変化したのに——ハーマイオニーのカップは、透明のままだ。

「本当にゴントの髪の毛なのか？」

ロンが眉間に皺を寄せて、ハーマイオニーを尋ねる。

「ベッドについていた髪の毛を一本拝借するくらい、造作もないわ」

「というか、正気かよ!? マルフォイが継承者じゃなかったら、アイツが継承者だ」
「セレネは違うわ、マグル育ちだもの。」

でも……変ね、色が変わらないなんて。予備の方を使うわ」

結局、ハーマイオニーは、セレネの髪の毛を入れた液は捨てた。そして、ミリセント・ブルストロードの髪の毛を使うことにした。彼女の髪の毛を入れた瞬間、あまり飲みたくないような泥色に変わる。ハーマイオニーは、嫌そうに目を細めた。

「やっぱり——捨てなきゃよかった」

「いや、捨てて正解だね。考えてみろよ、セレネ・ゴーストが継承者だったら——」
「だから、セレネは継承者じゃないわ。は、早く飲むわよ! 効力がなくなっちゃう!」

僕達は、乾杯する。

だけど、この泥まみれの液体を飲む気には中々なれなかった。

勇気を振り絞って鼻をつまんでポリジュース菓を飲む。僕は思わず両手を口に当てて吐き出しそうになった。例えるなら、煮込みすぎたキャベツっていうのだろうか。いや、もっと酷い。余りの不味さに身体が拒否反応を示すのと並行するように、身体に変化が起こり始めた。

息がまず詰まりそうになり、身体全体がどっと溶けていく気持ち悪い感じがした。身体が少し縮み、手がみるみる間に膨れ上がっていく。ハーマイオニーがこっそり調達してきたブカブカのローブが、ピッタリになった頃、僕は完全にゴイルの容姿になったみたいだ。

「2人とも大丈夫？」

ロンがいる隣の個室から、クラブの声が聞こえる。

「ああ」

僕は返事をする。でも、僕の口から出たのはゴイルの唸るような低音の声だった。僕は個室から出て先に個室から出ていたクラブの姿をしたロンと対面した。どっからどう見てもクラブ。今日の前で起こっていることが少し信じられなかった。それにしても、ハーマイオニーは何で出てこないんだろう？

心配して声をかけようとしたとき、個室の中から金きり声が聞こえてきた。

「私、行けそうにない！早く行って！1時間しか持たないのよ!!」

確かに、実行できる時間は少ない。とりあえず、ハーマイオニーの言う通りに僕たちはトイレから出て、スリザリンの談話室に急いだ。

でも、スリザリンの談話室ってどこなんだろう？ロンに尋ねようとしたけど、僕と同じ疑問をロンも持っていたらしい。まさか、あんな不味い菓を飲んだのに、何もしないまま終わりになってしまうのか？

クラブの姿をしたロンがどうするかウンウン唸りながら考えていた。はっきரிって、クラブが何か考えているそぶりをしている姿は気味悪かった。クラブ

もゴイルも何か考えて行動しているところって見たことない。

「とりあえず、スリザリン生って朝食の時、いつも地下牢の入り口から出てくるよな？」

ロンはそう言っただけで地下牢の方を指差す。僕もうなずいて、そこでスリザリン生がやってくるのを見張ることにした。

しかし、時は空しく過ぎていく。やっとの思いでマルフォイと出会い、何とか談話室まで辿り着いたのは——本当に運が良かったとしか言いようがない。

そこは、グリフィンドールの談話室と正反対の空間だった。

粗く削られた石壁の、どことなく陰湿な感じがする。

ちなみに、グリフィンドールの談話室は深紅で統一されている部屋で、暖炉がいとも暖かく燃え上っている。スリザリンの談話室も暖炉はあったが、燃え方もどこか陰鬱とした雰囲気醸し出している。作りは壁に立派な彫りが施されていて、金

がかかっているのはわかるけど——全体的に冷たい感じがした。

こんな所では——くつろげない。

「これを、読んでみる」

マルフォイはソファーに腰をおろすと、僕達に新聞を投げてよこした。

僕とロンは、氣まずい思いに駆られる。一面に記載されていたのは、ロンのお父さんが、51ガリオンの罰金を支払うことになったという記事だった。そう、僕達のせいで——。

「どうだ？おかしいだろう？」

マルフォイの問いかけに、僕は、ワテンポ遅れて、沈んだ声で笑った。

「アーサー・ウィーズリーはあれほどマグルびいきなんだから、杖を真つ二つにへ

し折ってマグルの仲間に入ればいいのに」

マルフォイが蔑むように言う。『ロンのパパを馬鹿にするな!!』と叫んで殴り掛かりたかったが、そうしたら今までの計画が全て水の泡になってしまう。僕は何とか残った理性を総動員させて、我を保っていた。怒りで顔が歪んでいくのが自分でもわかる。隣に腰を掛けているロンの顔は、異常なほど怒りで赤く染まっ**て**いて、ぶるぶると震えていた。

「ウィーズリーの連中の行動を見てみろ。本当に純血かどうか怪しいものだ」

マルフォイを……いや、スリザリン生をみると、どうしてセレネがスリザリンに入っただろうかと常々疑問に思ってしまう。マグル出身でマグルの血を引いている彼女は、純血主義とは無縁の存在だ。組み分け帽子が、ボケてしまっていたのだろうか？

彼女こそ、グリフィンドールやレイブンクローにふさわしいのに……。

「また、その新聞を見ているのか」

1 人のスリザリン生が、大量の本を抱えて入ってきた。

同じ学年だという事は知っているが、名前は知らない。こちらに話を振って来ませんように——と、必死に願う。ロンも同じことを考えているのだろう。クラブの考えている姿が異様に感じてしまうが、きっとそれは僕も同じなのかもしれない。

「他に読むものはないのか、ドラコ」

「僕が何を読もうと関係ないだろ、親衛隊隊長殿」

「……その呼び方は止めろ」

スリザリン生の額に、血管が浮かび上がった。

余程、気に障ることだったのだろう。しかし、ホグワーツで親衛隊なんて今まで聞いたことが無い。ロックハート親衛隊があるかもしれないが、目の前のスリザリ

ン生は明らかに男だ。

だから、僕は疑問に思っ、つい

「誰の親衛隊？」

と、尋ねてしまった。

途端に、2人の顔色が一変する。互いに信じられないという目付きで僕を見た。

「セレネ・ゴント親衛隊のことに決まってるだろ、ゴイル。

まったく——お前がこれ以上間抜けだったら、後ろに歩き始めるだろうよ」

「だから、俺は親衛隊に入った覚えはない！」

本を乱暴に机に放り出し、そのスリザリン生もソファアに座る。

彼は「親衛隊」と呼ばれたことを、本気で嫌がっているように見えた。

「俺が、アイツと最近一緒に行動しているせいで、信奉者共から勝手に呼ばれているだけだ。」

まったく……父上が『真の継承者に忠誠を尽くせ』なんて言われなかったら、こんな雑事を引き受けるものか」

「真の継承者？」

ロン——いや、クラブの姿をしたロンの口から言葉が零れる。

僕も、口をあんぐりと開けてしまった。真の継承者——まさか、セレネが継承者なのか？

「まさか、セレネが継承者なのか？」

「当たり前だ。聖28族のゴースト。アイツは、その末裔だ。ゴーストがスリザリンの末裔だということは、アイツに言われて調べるまで知らなかったが……」

「なら！」

「もっとも、アイツは今回の騒動を起こしていないけどな」

「えっ!？」

「少し考えればわかるだろ。ハッフルパフのマグルが襲われた時、アイツは医務室で寝込んでいた。」

しかも、授業の合間を縫って、古臭い錬金術の勉強に、血筋探し、夜は遅くまで予習復習にマグルの中等教育の勉強と来た。倒れない方が、おかしい」

親衛隊長と呼ばれたスリザリン生は、指折りながら数える。

——今更ながらに、セレネは物凄い勉強熱心だと痛感した。

ハーマイオニーと同じくらい熱心に勉強していると思っていたが、セレネがマグルの勉強もやっているとは考えたこともなかった。

魔法界まで来て、よくマグルの数学とか国語を勉強する気になれるな——と、少し感心してしまう。

「じゃあ——今騒動を起こしている奴は、誰なんだ？君なら、知っているんだろ？」

僕は、マルフォイに尋ねる。

すると、マルフォイは残念そうに首を横に振った。

「何度も言わせるな、ゴイル。僕は知らないし、父上もこの件には深く関わるな、と言っている。——だが、ノット。お前なら騒動の主を知っているんじゃないか？」

「悪いが、知らないな」

結局、情報を聞き出すことが出来ず、肩を竦めた時だった。

ロンが、脇をつついてきた。

視ると、クラップの髪が、どんどんロンそっくりの燃えるような赤髪に変わっていくところだったのだ。ぴったりだった服が、だんだん緩くなってきている気がする。葉の効き目が切れ始めているのだ。僕たちは打ち合わせ通りに、腹を抑え——

「胃薬が必要だ」

と叫んで一目散で、マルフォイ達に背を向ける。そして、ハーマイオニーが待つトイレへと駆け戻った。

どんどん緩くなっていくローブをたくし上げながら、廊下を全力疾走する。派手に音を立てながら階段を駆けのぼり、やっとの思いでトイレに転がり込んだ。

僕は荒い呼吸を繰り返しながら、柱に寄りかかった。隣で同じように、息を整えているロンが話しかけてくる。

「まあ、全くの時間の無駄にはならなかったよな」

「うん」

僕は少し落ち込んでいた。真犯人は分からなかった。でも、セレネがスリザリンの『真』の継承者だったなんて——考えもしなかった。何故、マグル育ちのセレネが継承者なのだろう。いや、問題は——そこではない。今、騒動を起こしているの

は「偽物の継承者」だということだ。それは、一体誰なのだろう。僕に濡れ衣を着せ、マグル生まれを襲っている人は誰なのか――

「襲っている奴が誰なのかは、まだ分からないけど、少なくとも本物の存在は分かった」

ロンは、少し弾んだ様子でハーマイオニーがいる個室の戸を叩いた。

しかし――

「帰って！」

「どうしたんだよ。もう元の姿に戻ったはずだろ？それとも、まだブルストロウの鼻かなにか、着けているのか？」

ロンが冗談交じりでそう言う。だが、彼女に反応がない。

「僕たちは、君に話さないといけないことが、山ほどあるんだ！」

すると、ハーマイオニーが入っているトイレの個室の扉が開いた。しかし、出てきたのはハーマイオニーではない。トイレに住み着いているゴースト『嘆きのマートル』だ。するり、と小部屋の戸から出てきたマートルは、物凄く嬉しそうに笑っている。

「見てのお楽しみ！ 酷いから!!」

僕とロンは、何て声をかければいいのか分からなかった。ロンは、後ろの手洗い台にはまりそうになってしまいうくらい驚いている。ハーマイオニーの顔は、残酷なまでに変わり果てていた。

「あれ、ね——ネコの毛だったの！ ミ、ミリセント・ブルストロードは猫を飼っていたに、ち、違うないわ！ それに、このせ、煎じ薬は動物変身には使っちゃいけないの！」

泣きわめくハーマイオニーの顔は、黒い毛で覆われ、目は鋭い黄色に変わっていき、髪の中の毛からどう見ても三角耳が突き出していた。

「セレネの、毛、を使えば良かった!!」

ローブで顔を隠し、ハーマイオニーは泣き続けた。

「医務室に行こう、ハーマイオニー。マダム・ポンフリーは追及しない人だし」

マートルが大笑いして僕達を煽り立て、その笑い声に追われるように、僕達は足を速めた。

急いで医務室に向かう僕達の背中に、マートルの意地悪い声が追いかける。

「アンタの尻尾を見て、みんな、なんて言うかしら!!」

7
月
15
日
..
一
部
訂
正

22 話 日記のリドル

お久しぶりです。

久しぶりの更新ですが、覚えていてくださっていましたでしょうか？
これからも、少しずつ地道に頑張っていきたいと思います。

あと、この回から一人称ではなく三人称で執筆していきたいです。
よろしく願います!!

——秘密の部屋。

50年ぶりに息を吹き返したそこには、怪物と少女がいた。

少女——セレネ・ゴーストはひたすら走り、滑り込むように物陰に隠れる。

セレネは、物陰に身を隠していた。

荒い呼吸を整えながら、どうしてこうなってしまったのか理由を考える。

セレネにだけ聞こえた不気味な声、水溜りの上で石になった猫、我先にと逃げ出す蜘蛛、フィルムが焼き焦げたカメラ、石になったゴーストと一緒に発見されたジャステイン——その全てから導き出される答えを模索し、怪物が蛇の王者「バジリスク」だということまで突き止めた。

そのバジリスクが、巨体を隠すためにパイプを使って移動していた、と言うところまで分かれば後は簡単だった。

（パイプを使えば、あの巨体を隠せる。そのパイプが繋がるのは、トイレだ。だから、秘密の部屋の入口は直ぐに見つかったけど——）

その瞬間、セレネは気がついた。

足元に伸びる巨大な影——バジリスクの影を見つけ、咄嗟に後ろに跳ねとぶ。先程までセレネが立っていた場所に、バジリスクの牙が突き刺さる。まさに、間一髪だった。セレネは、バジリスクの頭から目を逸らす。そして、その影に向けて叫んだ。

「頼みます、少しでいいので話を聞いてください！」

バジリスクの影を注視し、叫ぶように呼びかける。

しかし、いくら蛇語で呼びかけても無意味だった。返答として繰り出されるのは、全てを死に至らせる猛毒の牙。コミュニケーションは依然としてとることが出来ない。

（不味いな、このままだと会話する前に「眼」を視ることになる）

セレネは冷や汗をかいた。

眼を見て死ぬか、間接的に見てしまい石になるか、今もなお襲い来る毒の牙で命を落とすか。自分が死ぬ未来しか見えない。ぞくり、と震える身体を抑えつけ、セレネは脳に鞭を打った。

いくら同学年の誰よりも勉強をしているとはいえ、目の前の怪物を昏倒させる呪文は知らなかった。麻痺呪文や妨害呪文でどうにかなる相手には、到底思えない。上級生の教科書に記載されていた「許されざる呪文」を使えば、簡単に従わせることが出来るかもしれない。

しかし、そんな高度な魔法は、今のセレネに扱えなかった。

「私はスリザリンの末裔だ、バジリスク!!」

声が、空間を貫く。

セレネの真上に重なる影は、躊躇うことなく牙を振りかざした。

咄嗟に、杖を振り上げなければ——命はなかっただろう。

「つく、仕方ない——『オブスクーロ——目隠し』！」

杖先から黒い布が飛び出すのを、視界の端に捕えた。

避けようと身体を振じるバジリスクの巨体が、影となり壁に映る。

それと共に、甲高い悲鳴が頭上から降ってくる。慎重に顔を上げてみれば、バジリスクの目は黒い帯に覆われていた。怪物の脅威は、これで失われた。セレネはホッと胸を撫で下ろし、ようやく「眼」を開いた。

視界一面に広がる「線」「線」「線」。込み上げてくる吐き気に蓋をして、まっすぐバジリスクを睨みつける。バジリスクにも「線」が纏わりついていて、バジリスク本体が持つ——斬ればバジリスクが死ぬであろう「線」と、行動を縛る鎖の様に纏わりつく「線」の二種類が視える。

セレネは、軽く鼻を鳴らした。

「ああ——だから、言葉が通じなかったんだ」

いくら呼びかけても返答がない理由が、これでハッキリした。

セレネは、杖を左手に持ち替える。そして、右手のナイフを回した。脅威は完全に0になったわけではない。まだ、蛇の王者——バジリスクには全てを死に至らしめる毒の牙が残っている。毒の猛威を搔い潜り、目指すはバジリスクを縛る様に絡みつく「線」。

「目的の第一段階、開始早々失敗するわけには——いかないよね？」

あの線が、バジリスクを真に縛る線。あれさえ断つことが出来れば、バジリスクは自分の手に落ちる。不思議と、そんな確証を抱く。

セレネは狙いを定めると、勢いよく地面を蹴った。

ハーマイオニー・グレンジャーが襲われた。

今まで「ハリー・ポッターⅡスリザリンの継承者」だと思っていた生徒は、この知らせによって考えを改めた。ハリー・ポッターが親友の少女まで石にするはずがない、と。

それでは、誰が継承者なのだろうか。学校中で、様々な意見が飛び交うことになった。先生に引率されての移動中、談話室、至る所で密かに推理に花を咲かせていた。しかし、花を咲かせるだけで、実際に解き明かすため行動をする生徒は皆無に等しかった。常に先生が生徒を護る様に監視している。授業と授業の移動はもちろんのこと、トイレや図書館へ行くだけでも、寮監の引率が必要になっていた。夜間の見回りは強化され、自由に行動出来る時間など無くなってしまった。現

に、今も「呪文学」の教室まで薬草学のポモーナ・スプラウト先生が引率していた。列の最後尾を歩きながら、内心舌打ちをする。

「危険は去ったのに、何故このような見回りをするのか——驚きますね」

その時だ。前方からギルデロイ・ロックハートが引率する列がやって来るではないか。

幸運なことに、それはグリフィンドールの1年生の列だった。コリン・クリービーが石になり、どことなく沈んだ雰囲気。列の最後尾には、ジニー・ウィーズリーが歩いている。大股で歩くロックハートとは対照的に、暗く沈んで白い顔をしていた。セレネは、こっそりと杖を取り出す。そして、すれ違いざま——

『「アクシオ——日記帳よ、来い」』

消え失そうなくらい小さな声で、呟いた。

ジニーが脇に抱える本の中から、一冊の古本が飛び出しセレネの腕に納まった。古びた日記帳の表紙には、トム・リドルの名前と50年前に発行されたことを示す文字が刻まれていた。物思いに沈んでいるジニーは、日記帳を奪われたことに気がついていない。そのままぼんやりと、ロックハートについて行ってしまった。

「セレネ、どうかしたの？」

ダフネ・グリーングラスが不思議そうに振り返った。

セレネは普段通り柔らかな表情を浮かべ、

「いいえ、何もありませんよ」

とだけ言った。古びた黒い表紙の日記帳を、優しく撫でる。

——欲しい本は、手に入った。一番後ろの席に座り、日記帳を開く。案の定、何も書かれていなかった。

ビンス先生がゆらゆらと教室に入ってきたが、セレネは日記帳を隠そうともしなかった。

「では始めますよ」

ビンス先生も気にすることなく、一本調子で教科書を読み始めた。

なにせ、教科書とノートを読み上げるだけで終わる授業だ。いつも5分と経たない間に、クラス全員が催眠術にかかったように放心状態になってしまう。先生はそれすら気に留めず、淡々と講義を続けるのだ。斜め前のミリセント・ブルストロードは開始5分も経っていないのに、涎を垂らして寝入っている。奥に座るドラコ・マルフォイと取り巻き2人組は、ぼんやりと窓の外を眺めていた。普段は真面目に授業を受けているダフネ・グリーン格拉斯やセオドル・ノットの眼ですら死んでいる。

本来は授業中に別のことをやってはいけけないのだが、みんな放心状態で先生も絶対に注意してこない。魔法史の授業は、内職をするにちょうど良い時間だった。

それでもセレネはノートを取っているが、今日だけは別だ。羽ペンをインクに浸し、躊躇することなく日記帳に文字を書き込む。

「初めまして、トム・リドル」

文字は一瞬、紙の上で輝いたと思うと、跡形もなく消えてしまった。

そして、真っ白なページに戻ったかと思うと、今使ったインクが滲み出してきて、セレネが書いてもいない文字が現れたのだった。

「初めまして。どうやって、この日記を手に入れましたか？」

引き当てた。

セレネの顔が、喜びのあまり歪みかけた。しかし、喜ぶのはまだ早い。ここから先の交渉が大事なのだ。セレネは息を落ち着けると、慎重に文字を書き込んだ。

「廊下で拾いました。明日には、持ち主——ジニー・ウィーズリーへ届ける予定です。」

失礼——自己紹介が遅くなりました。私の名前は、セレネ・マールヴォラ・ゴントと申します。

恐らく、貴方の母方の祖父の曾孫にあたる人物です」

結局、父親の名前は見つからなかったが——そうしておこう。

ゴントの一族を遡ると、サラザール・スリザリンにたどり着いた。

もし、自分がゴントの末裔なのだとするならば、いろいろと合点がいく。まず蛇語を話すことができる。ミドルネームもマールヴォロ・ゴントと似すぎている。セオドル・ノットを介して手に入れた髪や瞳の色といった情報と照らし合わせても、血縁関係を完全否定できる要素はなかった。

トム・リドルの娘だか孫と名乗っても良かったが、彼に子どもはいないことは調査で分かっていたので、何か尋ねられたらモーフィン・ゴントの孫だと言い張ることにしよう。

もったも、彼に子どもがいたという記録も残っていないが。

「曾孫？ 僕の母方の親戚に、子どもはいなかったはずですが」

「貴方が日記に記憶を封じてから、生まれたのでしょうか」

返事を待つ。

日記は——いや、日記の中に宿るトム・リドルは考え込んでいるようだ。

返信の間が、最初よりも少し長くなる。だが、それでもビンズ先生が次のページをめくる前に返信が浮かび上がってきた。

「僕の血縁は全て死に絶えたとはかり考えていたので、少し驚いてしまいました」
「私も同じです。両親は既に他界し、祖父も祖母もこの世を去っていたので、こういう形で親族と話せるとは、思ってもいませんでした」

慎重に言葉を選ぶ。

相手の警戒心を、少し解かなければならない。本来なら時間をかけて行うべき作業なのだが、セレネには時間が無かった。マンドレイク薬が完成して、石になった生徒たちが目覚める前に——もっと言えば、彼らが怪物の正体を話しだす前に、出来れば全てを終わらせてしまいたい。

「本当に不思議ですね。ですが、1つ疑問が残ります。

どうしてこの日記の所有者が、ジニー・ウィーズリーだと知ったのでしょうか？
彼女は、この日記の存在を人に伝えたくなかったように思えます」

それに対する返答も、すでに用意してある。

本来ならば、もう少し会話で和んでから提示する予定だったが——聞かれたのだから、答えよう。むしろ、ここで嘘をついてしまった場合、交渉が上手く進まなくなってしまう。

「バジリスクが教えてくれました」

「バジリスク？」

さすがのトム・リドルも虚を突かれたのだろう。

日記の向こうで驚いている表情が、瞼の裏に浮かぶようだ。セレネは羽ペンにインクを浸しながら、夜に考えていた文章を反芻した。

「先日、秘密の部屋へお邪魔した時に、お会いしました」

嘘ではない。

セレネは、ずっと目を細めた。

セレネは、「50年前、秘密の部屋が開かれた時、マグル生まれが1人死んだ」と言う情報から、そのマグル生まれが死んだ場所を調べた。ハーマイオニーが石になる前だったので、今とは異なり比較的自由に校舎を歩き回ることが出来たのだ。イースター休暇を利用して「嘆きのマートル」が住まうトイレに忍び込み、使い物にならない蛇口を入口だと認定するのは、さほど難しいことではなかった。

そこで、セレネはバジリスクと対峙した。

「バジリスクに不思議な魔法がかかっていたので、解除するまでに苦労しました」

恐らく、あの呪文は上級生用の教科書に記載されていた「服従の呪文」だろう。他の誰にもバジリスクを渡さぬよう、完全に支配下に置いていた。セレネが蛇語で呼びかけても、バジリスクは応じるどころか襲い掛かってきた。

「目隠しの魔法で目を隠してしまえば、バジリスクは無効化出来たも同然です。

その後——服従の呪文を解除し、言葉を交わしました。それで、貴方が日記の中に生きていることを——ジニー・ウィーズリーを通じて、ハリー・ポッターを倒そうとしていることを、知ったのです」

「それを事実だと——貴女は、信じるのですか？」

そういう風に切り返してくる時点で、事実だと認めているようなものだ。

セレネは羽ペンにインクを浸しながら、獲物が釣竿にかかった確信を感じた。顔をノートに埋めるように、文字を書き連ねていく。

「安心してください、誰にも言いません。言ったところで、信じてもらえませんか。その代わり——私も手伝わせてくれませんか？」

「手伝う？」

「ハリー・ポッターは、私が、この騒動を引き起こしている『スリザリンの継承者』だと信じています。

どうやら、クリスマスに私の出自を知ってしまったみたいですので。

貴方でしたら——日記の中に封じられた記憶の中の『継承者』と現実の『継承者』、どちらが事件の当事者だと思います？」

どこことなく焦ったように、切迫した様に、一気に書き上げた。お蔭で、文字が乱雑になってしまうが——関係ない。ようは、セレネ・ゴントが追い詰められた状況にいると思っ込んでもらえればいいのだ。セレネは、トム・リドルの返事を

待った。

「……後者でしょうね。つまり、君は——僕の計画に協力することを申し出ているのですか？」

手に汗を握る気持ちから、解放されたようだ。

セレネ・ゴーンの考えは、日記の中のトム・リドルに伝わったらしい。——第二段階完了が近づいた。だが、少しでも気を抜いたら、日記の中から心の中を見透かされそうだった。セレネは、呼吸を落ち着かせると羽ペンを握り直した。

「貴方は、ハリー・ポッターを殺したい。私は、ハリー・ポッターに罪を押し付けたい。」

企みが達成できれば、貴方は現実世界への復帰を果たし、私は貴方の従者として仕えましょう」

「まさか、無計画と言うわけでもないではありませんよね？」

「私を貴方の傘下に加えていただけるのであれば——計画をお話しします」

そこから、ずいぶんと長い時間が経過した。

ビンズ先生がページを捲りながら、ゴブリンの反乱について話す声が遠くに聞こえる。セレネは呼吸を忘れて待ち続けた。2分——3分——そして、5分が経過した頃——待ち望んだ黒い文字が滲み上がってきた。

「いいでしょう。計画について、話してください」

セレネは、立ち上がって叫びたいくらいの歓喜に襲われる。

計画の第一段階がバジリスクの懐柔にあったとすれば、これが第二段階の完了の合図だった。

残るは、計画の第三段階のみ。あと少しで——自分の計画が達成できる。

セレネは、真の狙いが突き止められないように、浮き足立つ気持ちを抑えて「表の計画」を書き連ねた。

いずれ『秘密の部屋』の在り処を突き止めるであろう——ハリー・ポッターを陥れ、全てを手に入れる計画を——。

8月16日…一部訂正

23話 秘密の部屋

ぼたり、と天井から滴が落ちる。

秘密の部屋は、いつになく陰気な雰囲気で満ち溢れていた。

リドルに操られたジニー・ウィーズリーと一緒に部屋に来てから、どれだけの時間が経過しただろうか。

時計を見ると、既に3時間が経過しようとしていた。しかし、まだ誰もやって来ない。セレネは、次第に焦り出していた。セレネが寮にいないことを隠すよう、セオドル・ノットらに誤魔化すように命じてはあった。だが、それもそろそろ限界かもしれない。

冷たいナイフの柄を握りしめ、齒を食いしばった。

「来ないね、ハリー・ポッターは」

1 人の青年が、ぽつりと呟いた。

ジニー・ウィーズリーの生命力を吸い取り、つい数分前に具現化した青年だった。セレネが手に入れた「切り札」——何かの皮で装丁された古びた本を興味深げに見ている。セレネは石像に腰を掛けたまま、リドルから視線を逸らした。

「来ますよ、彼は」

「果たして、本当に来るかな？」

セレネは立ち上がると、杖をローブの中に終い込んだ。

ハリー・ポッターなら、きっとやって来る。セレネは、焦りながらも、どこか確信を抱いていた。しかし——いつまで待っても来る気配は無い。こうして、ぼんやりと時間を浪費するよりは、有効利用しよう。そう決めたセレネは、早速リドルに問いかけた。

「来ますよ。それに、来てもらわなければ——貴方も復讐出来ないんでしょう？」

リドルは、どことなく不機嫌な表情を浮かべていた。

彼の名前は、確かにトム・リドルだ。間違いなくメローピー・ゴントの息子であり、サラザール・スリザリンの末裔だ。しかし、彼にはもう1つの名前がある。そう——それが——

「未来の——闇の帝王」

彼の名前である「TOM・MARVELO・RIDDLE（トム・マールヴォロ・リドル）」を並び替えれば、見えてくる文字——それは、「I AM LORD Voldemort（私はヴォルデモート卿だ）」になる。

尤も、このことはセレネ自身の力では辿り着けなかった。

服従の呪文を解いたバジリスクから教えてもらい、なんとか導き出すことが出来た答えである。このことは、ある意味で「嬉しい誤算」だった。

「そうか、君は気づいたんだね。それで——どうするつもりかな？

僕がヴォルデモート卿だと知ってなお、僕に従うのかい？」

「もちろん。私の意志は変わりませんよ。

それよりも、1つ尋ねたいことがあるんです。

昨年度、未来の貴方が『賢者の石』を手に入れようとしていました。賢者の石を使い、自らの肉体を取り戻した後——どうするつもりだったのでしょうか？」

あの塵芥のような姿から、復活するために使うことは目に見えている。しかし、その後——賢者の石をどうするつもりなのか、セレネは気になっていた。

もちろん、過去のリドルが未来のヴォルデモートと同じ考えをするとは限らない。しかし、同一人物である以上、似たような思考回路を持っているはずだ。セレネは、黙ってリドルの反応を待つ。

リドルは、退屈そうに天井を見上げた。

そして——

「そうだね……砕く、かな」

「砕く？」

セレネは、眉間に皺を寄せた。

賢者の石には、永遠の命を約束する力がある。しかも、それは伝説ではない。事実、フラメル夫妻を何百年と生き続けさせている程の絶大な効力を誇っている。なのになぜ、砕くという勿体無い行為に奔るのだろうか。

「驚いているみたいだね」

リドルは驚くセレネの表情を見ると、面白そうに鼻を鳴らした。

「『賢者の石』は、確かに永遠の命を約束する。それは魅力的だろう。だけど、石自体は有限だ」

リドルは静かに言う。

その説明だけで十分だった。

賢者の石を使い切ってしまったら、もしくは落として壊したり、盗まれてしまったら——命の水を蓄えている間は死なないが、直に緩やかな死が訪れる。実際に、賢者の石が砕かれた今現在、フラメル夫妻は刻一刻と迫る死の準備をしていると聞く。

あの石の力は素晴らしいが、石自体が永遠ではないのだ。

「まあ、あの石が無くても関係ないけどね」

「関係ない、ですか？」

それはどうして——とセレネが問う前に、リドルは話題を切り替えた。

まるで、深く探られることを防ぐかのように、まったく別の話題に逸らされてしまふ。

「ところでセレネ。

君が手に入れたコレだけど、本当にバジリスクに匹敵する効力があるのかい？」

リドルは、先程から弄んでいた一冊の本を掲げた。

セレネは、何でもないように微笑んでみせる。

「もちろん。

その本を手に入れるのに、苦勞したんですよ。知り合いに頼み、『夜の闇横丁』で購入したんです。

恐ろしい魔力が籠っているんですから——『ルルイエ異本』には」

くすり、とセレネは笑ってみせる。

だが、どうにもリドルの腑に落ちないらしい。ぺらぺらとページをめくり、びっしりと書き記された複雑な漢文を眼で追っている。

「君は凄い、恐ろしいと連呼するけどね、僕にはちっとも恐ろしく感じないんだ。その神話も知らないし」

「クトゥルフ神話ですよ。」

旧支配者と呼ばれる神々と眷属の織りなす神話です」

「どこの神話？ 中国の神話なのかな？」

「アメリカ大陸です。もつとも、目撃談や伝説は世界中にありますよ。」

御存じありませんか？ ニャルラトホテプやハスターは有名ですよ」

セレネは、ハッキリと言い放つ。

リドルは、自分の知らない神話の存在に懐疑的だった。だけれども、神話を作り話だと断定しなかった。

魔法界には、神話上の生物だと思われるいたケルベロス、ユニコーン、バジリスクやケンタウロスなどが存在する。だから一概に、神話を作り話だと断定できないのだ。

「そこに書かれている呪文を唱えれば、クトゥルフを呼び寄せることが出来ます」
「のこのことポッターが来たら、まず僕がポッターから杖を取り上げ、バジリスクに襲わせる」

「バジリスクが逃げた先で私が待ち構え、至近距離でクトゥルフを召喚するということですよね」

古書を受け取ったセレネは、静かに言葉をつづける。そして、腕時計に視線を走らせた。

どんなに遅くても、ハリー・ポッターが来る頃だ。そろそろ配置についての方が良いだろう。パイプに隠れようとリドルに背を向けたセレネだったが、ふと——思い出したかのように一言、尋ねるのだった。

「そういえば、貴方は何故——不死を望むのですか？」

ダンブルドアは、「不死を求めた者の末路」として亡霊に成り果てたヴォルデモートを例示した。

そして、ついさっき「賢者の石が無くても関係ない」と、別の方法で不死を求めることを示唆していた。

リドルは、セレネの問いに目を細めた。そして、まだ侵入者の気配がないことを確認すると

「そうだね、完璧な存在になるためだよ」

淡々と、何でもないことのように答えた。

だからセレネは、追及する。セレネが聞きたかった答えは、そんな「ありきたり」の解答ではなかったのだ。

「完璧とは、つまりどんな存在ですか？」

「だから、死という欠点を補った存在さ」

リドルは、さも当然と言うように言葉を続ける。

「死は、欠点。なるほど……では、欠点を補った完璧な状態で、貴方は何を望むのです？」

「決まっているだろう。」

マグルや穢れた血を排除し、純血の魔法族で世界を統べるため——」

と、ここまで言ったとき、リドルは口を閉ざした。

そして、セレネの魂胆を見透かそうとするように睨みつけてきた。

「何故、そのようなことを聞く？」

「いえ、少し興味を抱いただけですよ。それでは、後はお任せしますね——未来の帝王様」

セレネは、優等生らしい笑みを浮かべパイプの中に去って行った。

そして、秘密の部屋の状態が分かるか分からないかの境界で足を止める。セレネは、外の様子に耳をすませた。

「ジニー！ 死んじゃダメだ！ 目を覚まして!!」

ハリーの声が、響き渡る。

ついに、待ち望んだハリー・ポッターのお出ましだ。

セレネの準備は万全だった。杖を再び取出し、ハリー・ポッターを静かに待ち構える。

「トム・リドル——君は、ヴォルデモートだったのか」

「俗なマグルの父親の名前を、この僕がいつまでも名乗るとでも？

偉大なるサラザール・スリザリンの血を引いた、この僕が。

だから、僕は自分に新しい名前を付けた。いつか——魔法界の誰もが恐怖し平伏す最強の存在になった時、口にするのを恐れる名前を！」

リドルが、自分の真の名前を言い放つ。

これは、ハリーから杖を奪い取ったという合図だ。セレネは、にやっと笑うと杖を自分の左足に突き付けた。

「『ディフェンド——裂けよ』」

躊躇うことなく、自らを傷つける。

左足が、生々しく裂けた。傷口からは、血が溢れだしてくる。

切り傷が生じた鋭い痛みにも、セレネは顔をしかめてしまったが、まだ我慢できる程度だった。流れ出す血を指ですくい、頬や腕に塗りつける。

（遠目から見たら、傷だらけの満身創痍に視えるだろうな）

セレネは、左腕も同様の行為を行う。

時間が経過すればするほど、血が流れ出ていく。セレネは、だんだんと身体が冷えてきたような気がしてきた。制服に血や周囲の泥をこすりつけ、ホッと一息ついたとき――

「さあ、バジリスクよ！

忌々しいハリー・ポッターを殺せ!!」

トム・リドルの叫び声と、誰かが逃げる足音が聞こえてきた。

激しい足音は、パイプの中に入った瞬間、大きく木霊する。だんだんと近づいてくる足音に、セレネは体勢を整えた。

（早く——早く来い、ハリー・ポッター）

徐々に、しかし、確実に足音は近づいてきていた。

セレネは、今か、今かと待ち望む。そして、ついに——

「——えっ、セレネ？」

ようやく——ハリー・ポッターが目の前に転がり込んできた。

汗と泥にまみれ、眼鏡はひび割れている。握りしめるのは、杖ではなく古びた帽子で頼りないことこの上ない有様だが、不思議と絶望していないようだ。

（知り合いの私と会ったから？ いや違う、もっと別の何かだ）

セレネは、ハリー・ポッターが絶望していない理由を考えようとした。だけれども、今はそれどころではない。後でじっくり考えましょう。そう思い直すと、セ

レネは苦々しい笑みを浮かべた。

「セレネ!? どうしてここに!？」

「それは、こっちの台詞です」

傷つけた左腕を庇いながら、セレネはハリーに近づいた。

「私は、トム・リドルから自分の所有物を取り返そうと来たんですが——貴方は、一体どうして?」

「僕は、ジニーを助けるためだよ。」

そうだ、早くジニーを運び出さないといけないんだ。だけど、僕はバジリスクに追われてるんだ。やっとの思いで振り切れたんだけど、今にも出てくるかもしれない。

それに、聞いて! トム・リドルの正体はヴォルデモートで——」

「落ち着いて、ハリー」

セレネは、興奮状態で話しだすハリーを制する。

「貴方が言わんとしていることは、分かっています。

だから——1つ提案があります」

セレネは、傍らに抱えていた古本を——ゆっくり捲った。

24 話 勝者の条件

トム・リドルは、勝利を確信していた。

馬鹿なジニー・ウィーズリーとスリザリンの末裔を名乗る小娘を利用し、もうすぐ憎きハリー・ポッターを殺すことができる。リドルは、ポッターから奪った杖を手の中で回しながら笑った。

手筈通り、そろそろセレネ・ゴーストがポッターを始末している頃だろう。奇妙な装丁の本を使い、新しい「秘密の部屋の怪物」を召喚する。

その直後——本当の怪物、バジリスクがセレネ・ゴーストを殺すことになるとは知らずに。

「運が悪かったな、あの小娘」

スリザリンの継承者は2人もいない。

いつ自分にとって代わる存在になるか、分からない不安要素は全て排除する。

確かに、あの末裔を名乗る小娘は相当の実力を持っている。服従の呪文を解除できるほど意志が強く、狡賢な知恵もまわる。本来なら、喉から手が出るほど欲しい手札だろう。

だが、それ故に排除しなくてはならない。

「スリザリンの継承者は、僕だけでいい」

その時だ。

背後に、しずしずと何かが現れる気配がした。もちろん、現れるモノといったら1つしか考えられない。リドルは、勝者の笑みを浮かべた。

「戻って来たか、バジリスク」

忠実なる下僕の名前を、振り返ることなく口にする。

ぴちゃりっという水音と共に、血にまみれた何かが放り出された。それは、獅子が刻まれたネクタイとスリザリンの紋章が縫い付けられたローブだった。どちらも、致死量と思われる血がこびりついている。

バジリスクは、見事仕事を達成してきたらしい。当面の敵は殲滅され、あと恐るべきはダンブルドア——だが、彼も既にホグワーツから追い出され、何も手出し出来ないだろう。

これから——再び自分の時代が幕を開ける。

魔法界を統べる最強の魔法使い、ヴォルデモート卿の復活だ。

「つくつくつく——はっはっはっは!!」

生き残った男の子は、運が良かっただけだったんだ!

スリザリンの継承者も、これで僕だけだ!!

これからは僕が——闇の帝王、ヴォルデモートが再び世界を支配する!!」

希望を胸に、高笑いをする。秘密の部屋に、トム・リドルの笑い声が響き渡った

直後のことだった。

「なっ……!?!」

血の塊が、口から零れた。

自分の命が、徐々に失われていく感じがする。

自分の胸を見渡せば、そこには巨大な穴が開いていた。何が起こったのか、まったく理解できない。いや、本当は理解できていたのかもしれない。リドルは、ゆっくりと重たい頭を後ろに回した。

「き……さま……!」

ハリー・ポッターが、バジリスクの牙で日記帳を貫いている。

日記帳からは、インクが激流のようにほとばしり、ハリー・ポッターの手の上を流れている。

「これが最後だ！」

ハリー・ポッターは、日記帳目がけて再び牙を振り下ろした。

「ヴォルデモート！」

日記帳に牙が突き刺さった瞬間、トム・リドルの悲鳴が響き渡った。

リドルは痛みと自分が消えうせる恐怖で悲鳴を上げながら、どうして計画が破綻したのか考える。

そして、ハリー・ポッターの後ろに佇む人影を見つけ——1つの結論に至った。

「この——小娘——がっ!!」

血まみれになったセレネ・ゴントは、勝ち誇った笑みを浮かべていた。

リドルは、彼女を呪い殺そうと睨みつけようとした。しかし、セレネの目を見た

途端、恐怖が全身を駆け抜けた。

眼鏡を外したセレネは、蒼い瞳をこちらに向けて笑っている。禍々しいまでに蒼い瞳だ。その瞳に魅入られた瞬間、死への恐怖が倍增させる。リドルは声なき悲鳴を上げた。

（あの瞳は、なんだ？

あれは、人間なのか？

それとも——）

死。

偉大なるサラザール・スリザリンも、その血を引く母ですら回避することができなかった存在が、自分の前に佇んでいる。

強大な死は、静かに微笑みを浮かべ——何かを呟いた。その口の動きを読み取り、理解した時——ハリー・ポッターが握りしめた牙が、完全に日記を両断した。

耳を貫く絶叫と共に、トム・リドルは世界から消え去ってしまった。

そう、
呆気ないくらい簡単に。

また、1年が過ぎた。

ホグワーツ特急は、生徒たちを乗せてロンドンへ走る。

セレネは、1人——車窓を眺めていた。流れゆく風景を、なんとなく目で追う。たった1年前振りだというのに、特別懐かしいとも思わない。ただ、見覚えがあるはずの景色を眺めながら、首元に軽く巻きつく蛇の鱗を撫でていた。

『これが——外の世界なんですネ』

耳元で、誰かが嬉しそうに囁いた。

舌を出して囁く蛇は、バジリスクだった。本来であれば見上げるばかりの巨体の持ち主だが、縮小呪文の効果で普通の蛇と見た目は変わらない。脅威の塊ともいえる黄色の双眼も、今であれば覗き込んでも、死んだり石になっってしまうこともない。セレネの魔眼同様、魔力を通すことで効果が発動する仕組みになっているのだった。しかも、バジリスクの方が直死の魔眼よりON/OFFの切り替えがしやすいらしく、特別製の眼鏡やコンタクトを発注する必要はなさそうだ。——もっとも、どこに発注すれば、セレネがかけてる眼鏡が手に入るか分からないが。

唯一、他の蛇と異なる点を挙げるとしたら、牙が1本欠けているという事くらいだろう。2本の牙のうち、1本はハリー・ポッターに杖に代わる武器として渡してしまっただが、いずれ生えてくるはずだ。

『私——ずっとホグワーツの中で生きてきましたから——外の世界は、素晴らしいですね』

バジリスクは、どことなく幸せそうだった。

そして、ふと思い出したかのように——バジリスクは口を開いた。

『そういえば、結局——あの変な装丁の本は何だったんですか？』

継承者様は、ハリー・ポッターと合流した後、迷うことなく燃やしていましたが』
『ああ、あの本は茶番の小道具だよ』

どうせ、このコンパートメントには自分しかない。

セレネは指を立てると、静かに蛇語で真実を告げた。

『トム・リドルに取り入るための偽物の手土産。』

ただ、仲間になりたいと言っても、信じてくれないだろうから』

『なるほどですね——しかし、手土産が受け入れられなかった時はどうするつもりだったのです？』

『受け入れられるさ。』

なにせ、この世界には神話上の生き物……バジリスクやユニコーンが本当に存在する。クトゥルフ神話の怪物がいても不思議ではないって考えるはずだ』

セレネは、車内販売のカボチャパイを齧った。

ほのかに甘い味が、口の中に広がっていく。成功を噛みしめるように、パイを咀嚼する。

『クトゥルフ神話は神話に間違いない。』

それに、ルレイエ異本は漢文で呪文が書かれている。それだけで神秘的だ。

未来の彼なら万が一と言う可能性もあっただろうけど、一介の学生に過ぎないリドルが漢文を読めるとは思えないし、それに――

マグルの作り話に過ぎないクトゥルフ神話を、純血主義のトム・リドルが知っているとは思えないだろ?』

ここが最も大事なところだ。

トム・リドルがホグワーツに在籍していたのは、1938年から1945年の7年間。

H・P・ラヴクラフトが、創り出したクトゥルフ神話が本格的に広まり始めたのは、ラヴクラフトの死後——つまり、1937年以降だ。1938年にホグワーツに入学してから、マグルの世界と半ば決別していたと考えられるヴォルデモートが——アメリカ発祥の、しかもマグルが書いた創作物を読むとは考えられない。

適当に抜粋した東洋の文字を書き殴り、魔法と魔法薬を使って古びた書物のように変身させた。一見すると、太古の昔からある古書の完成だ。

『神話と言い張れば、あとは問題ない。

私も——最初は、本当に昔からある神話だと思っていたから。

——まあ、少し考えれば、遭遇しただけで正気を失う魔法生物が存在するわけないって、分かりそうなものだけど』

バジリスクは、黙って話を聞いていた。

しかし、上手くりドルを騙すことが出来たとはいえ、セレネの表情は物思いに沈んでいた。バジリスクは、首をかしげる。

『浮かない顔ですよ、継承者様。』

聞きたいことが、聞きだせなかったのですか？』

『いや、聞き出せた』

セレネが、トム・リドルに尋ねたかったことは1つ——「何故、不死を求めるか」の一点だけだった。

セレネ・ゴントは、本当の自分が分からない。

そもそも、自分は過去のセレネ・ゴントと同一人物なのかすらあやふやで、確かな自分の気持ち分からない。

けれど——1つだけ、自分の気持ちだと断言できるくらい強い衝動があった。

そう、それは――

「私は、死にたくない」

死を恐怖する感情だ。

優等生を演じる受動的な感情からは、産まれるはずもない「賢者の石」に対する執着心。

それは、もしかしたら『と接していた期間に出会った恐怖感からかもしれない。眼鏡を外すと浮かび上がってくる、あの線のせいかもしれない。

いずれにしろ、自分の大半は「死」に対する恐怖で作られている。

それが分かるだけで、セレネは少しだけ安心することが出来た。

だから、セレネはトム・リドルの――いや、ヴォルデモート卿の思想に少なからず共感していた。死にたくない、私も石を手に入れ「死」を逃避したいと。

しかし、盲目的に共感することは危険だ。そう直感したセレネは、いつでもリド

ルを裏切ることが出来る体制を整えてから、詳しく彼の思想を本人から聞き出して——文字通り、幻滅した。

ヴォルデモートは、純血主義だ。

死を拒否した後の思想が、マグルを殲滅するという思想に共感することができなかった。

マグルの社会で生きてきたからかもしれない。他の理由があるのかもしれない。いずれにしろ、セレネはトム・リドルを切り捨てた。

全ての罪をリドルに押しつけ、再び自分は陽の下を歩く。

負けた方が「悪」であり、「死」が待っている。そして、何があろうと勝った方が「正義」で、物事を決める力を手に入れるのだ。

適当に作った「ルルイエ異本」を「リドルが使っていた謎の魔道具」だと偽り、「今やっと効果を封じ込めたばかりだ」と言えればいい。証拠もハリーの前で燃やしてしまったので、跡形も残らなかった。

バジリスクも失神呪文で気絶させた。バジリスクが死んだと勘違いしたハリーが、リドルの本体——つまり古びた日記帳——を仕留めに向かった後、「殺した」と偽って、こうして生かすことが出来た。

秘密の部屋へ乗り込んだハリーや、その協力者のロン・ウィーズリーと一緒に「ホグワーツ功労賞」なる賞を受諾し、なおかつ夏休みを利用して、ニコラス・フラメルと正式に会う機会まで手に入れた。

勝者のセレネは、全てが順調だった。

ある1点の謎以外は。

（何故——リドル本体に、死の線が視えなかった）

その理由だけが、分らない。

眼鏡を外しても、リドルの身体に纏わりついているはずの「死の線」が視えな

かった。誰にも、あの気持ち悪い線が纏わりついている。今まで、纏わりついていたのは、たった1つ。

塵芥の霞同然なヴォルデモートだけだった。

（石が無くて、不死を完成させた——ということ？

だけど、あの日記帳には線が纏わりついていた。

ハリーに「杖に代わる武器」として渡したバジリスクの牙で壊すことが出来なかったとしても、私の眼を使って破壊することが出来た。

リドルは——賢者の石を手に入れたら、最低限利用し砕くと断言していた。

日記帳という有限の道具を砕かれたら死ぬとは、考えていなかったのだろうか。もしかして——日記帳に自分の記憶を封じ込める他にも、不死の方法を幾つか用意していた、ということ？

あの日記は、捨て駒だったのか？（

セレネは、首を横に振った。

考えが纏まらない。

あの日記帳が、ヴォルデモートの不死の理由だと考えられるけれども、断定はできない。ただ単に、若い時から自分はこのように凄かったのだ、と鼓舞するためだけに作られたものかもしれない。いずれにしろ、情報が足りな過ぎる。

『まだまだ——やることがありそうですね、継承者様（あるじ）』
『そう——ね』

静かに呟いたとき、誰かがドアを控えめに叩く音がした。

セレネは、バジリスクに視線を向ける。バジリスクは意図を察したのか、黙ってトランクの中にもぐりこんだ。その尻尾が消えた時、セレネは

「どうぞ」

入室を促す。

ゆっくりとドアが開いた時、セレネは少し目を見開いてしまった。

「久し振りです、セレネ」

そこにいたのは、ジャスティン・フレッチリー・フィンチだった。

物静かなハッフルパフ寮の少年は、いつも通り控えめな笑顔を浮かべていた。何故、このタイミングで現れたのか。セレネには、理解できなかった。

「どうして、ここに？」

てっきり、ハッフルパフ寮の方々と一緒にいるとばかり」

「ええ、さっきまでアニーやハンナ達と一緒にいました。

だけど、1つ——セレネに、言い忘れていたことがあったんです」

「言い忘れていたこと？」

セレネが首をかしげると、ジャスティンは、どこか寂しそうに微笑み——ゆっく

りと頭を下げる。

「ごめんなさい、クリスマスの約束を守れなくて」

そう言われて、やっと——セレネは思い出した。

彼が石になる前に、一緒に大英博物館へ行こうと約束したことを。

たった半年前の約束なのに、大昔に起こった出来事のように思えた。遠い遠い昔の約束を思い返しながら

「あれは、トム・リドルのせいですから気にしないでください」

と言う。

約束を守れなかったのは、ジャスティンのせいではない。バジリスクにマグル生まれの生徒を襲わせていた、もっといえば、ハリー・ポッターに関わりの深いマグル生まれを襲わせていたトム・リドルのせいだ。バジリスクの視線を間接的に見

て、石になってしまった彼は被害者といえよう。

「そうかもしれませんが——それでも、約束を破ってしまったことには変わりありません。

あの、えっと、その……」

ジャスティンは、何か言い淀んでいる。

何を言い出すのだろうか、と黙って次の言葉を待つ。しかし、時は無限に与えられているわけではない。言い淀んでいる間に、車窓の風景は穏やかな農園から一変しビルが立ち並び始めていた。そろそろ、ロンドンに到着するというアナウンスが流れ始める。

ジャスティンは、情けなく息を吐いた。

「……すみません、また今度」

ジャスティンは淋しそうに別れを告げると、セレネに背を向ける。

小さな背中を眼で追うセレネだったが、大きくため息をついて——気がつく

「ダイアゴン横丁、一緒に行きませんか？」

と言っていた。

ジャスティンは、驚いたように振り返る。これ以上ないくらい目を丸くさせて、固まっていた。

「別に深い意味はありません。

ただの埋め合わせ、ですよ。時間の都合上、大英博物館は無理そうですが」

言葉通り、深い意味は無い。

セレネは、1人で行動することが多い。むしろ、この2年間で1人に慣れてしまった。

だが、偶には誰かと一緒に行動するのも悪くない。

それに、あの言い淀んでいた反応からして、彼は、マグル出身の誰かとマグル社会の話をしたかっただけにちがいない。

たまには、魔法界とは別のマグルの話をするのも良いだろう。今回、マグルの知識が役に立ったのだから、マグルも捨てたものではないのだ。

マグルの情報を手に入れる人間と関係を築いておくことで、何か良いことがあるかもしれない。

「きつとですよ！今度こそ約束ですよ、セレネ!!」

ジャスティンは嬉しそうな声を挙げ、大きく手を振りながら駆けて行った。

セレネはしばらく彼の背中を見送っていたが、自分も降りる支度をしなくてはならない。そっと、コンパートメントに戻る。

『継承者様、先程より機嫌が良さそうですね』

いつの間にか、トランクから顔を出していたバジリスクが教えてくれた。

その指摘で、セレネは自分の頬が緩んでいることに気がつく。

何故笑っているのか、セレネには分からなかった。

『そうか？』

それよりも、大人しくトランクの中に入ってな。家に帰ったら、出してあげるから』

再びバジリスクがトランクに入った時、ホグワーツ特急は動きを止めた。

窓の外を眺めれば、沢山の魔法使いやマグルの服に身を包んだ保護者が群がっている。その中に紛れて、懐かしい義父の姿を発見する。クイールも、セレネの姿を見つけたのだろう。セレネに向けて、大きく手を振ってきた。

「今は、考えるのを止めようか」

小さく呟くと、セレネはトランクを担ぐ。

今日くらいは、しっかり休もう。明日から、再び目的に向けて活動を再開すればいい。

セレネは、短い夏休みに向けて歩き出すのだった。

秘密の部屋編、これにて終了です。

次回から、アズカバンの囚人編に入ります。

アズカバンの囚人編

25話 ニコラス・フラメル

アズカバンの囚人編、始まります。

2018年11月 大幅改定しました。

太陽が、裏庭の草木を照りつける。

額から、一筋の汗が流れ落ちた。セレネは作業の手を止め、腕で汗を拭う。そのまま空を仰げば、雲一つない晴天が広がっていた。

自分の瞳の色より薄くて、どこまでも静かな青空だった。眺めているだけで、何故か落ち着く。雑草を抜き終わったあと、この芝生の上で眠ることが出来たら、どれほど心地よいことだろう。

「……まあ、無理な話だけど」

セレネは、大きくため息を吐く。

まだ、たまっている仕事は山のようにあるのだ。休んでいる暇など、セレネには無かった。腰をかがめ、再び雑草を抜く作業に専念する。裏庭の雑草をすべて抜くなんて、どんなに効率よく抜いたとしても、太陽が沈むまでかかってしまうだろう。朝、太陽が上る前から抜いているにもかかわらず、荒れ放題だった庭は、たった4分の1しか片付いていない。体力が、汗と一緒に流れていくみたいだ。

セレネは、平均以上の体力はあると自負していた。ただの雑草ならば、造作もなく引き抜けていただろう。しかし、この庭の雑草は強情過ぎた。青々とした立派な茎をもった雑草は、どれもこれも堂々と地面に根差している。本気で抜きにかからなければ、びくともしないのだ。

（本当——何年、放置していたんだよ？）

文句を胸の内に秘めて、セレネは雑草を抜く。

幾ら抜いても、抜いた気がしない。真夏の太陽は、天井を通り過ぎる。汗を拭うことすら煩わしい。もう、セレネの体力が限界に差し掛かった頃――

「セレネちゃん、ごくろうさま」

優しそうな声に、セレネはハッと顔を上げた。

振り返ってみれば、裏庭の3分の2は平らになっている。雑草の束は、小高い丘のように積み上がっていた。その奥に、小さな老婆が佇んでいる。

「本当に、見違えるようだわ。ありがとう、ちょうど昼食が出来たところよ」

老婆は、上品な笑みを浮かべる。

セレネは疲れた表情を引っ込め、優等生らしい笑顔を浮かべた。

「ありがとうございます、フラメル夫人」

待ちに待った夏休み。

セレネ・ゴントは、フラメル夫妻の家に滞在していた。

ダンブルドアと約束した通り、ニコラス・フラメルに教えを乞うためだ。ニコラス・フラメルが高齢であるということも考慮され、泊まり込みで1ヶ月と言う短い期間だったが、それでも稀代の錬金術師から学ぶことが出来る珍しい機会だ。

セレネはダンブルドアが用意してくれたポートキーという移動装置に乗って、パリに住まうニコラス・フラメルの家を訪れたのである。

しかし――

（もう今日で、3週間たつのに、何にも教えてもらっていない）

シリアルを食べながら、セレネは内心ため息をついた。

この3週間で行ったことといえば、掃除・洗濯・朝夕食の支度・買い出し・家のペンキの塗り替え・屋根の修理など、全て身の回りの家事手伝いばかりだった。肝心な錬金術について何も教えてもらっていない。炎天下の下での肉体労働ばかりなので、すっかり日に焼けてしまった。

（もしかして——私、お手伝いさんか何かと間違えられてる？）

この3週間、何度も考えた不吉な推測が浮かんでくる。

今までは、ずっと「何か理由があるはずだ」と自分に言い聞かせていたが、さすがのセレネも限界だった。あと、残された時間は1週間しかない。それが終われば、クイールの待つ家に戻らなければならないのだ。

家に帰ることは、嫌ではない。しかし、何も得ることが出来ずに終わるのだけは避けたかった。

「あの——私、いつ錬金術について教えて貰えるんでしょうか？」

その日の夕食時、とうとうセレネは口火を切った。

今言わなければ、いつ訴えればいいのか。

セレネの唐突な訴えを受けた老人——大鍊金術師ニコラス・フラメルは、最後の一口を静かに飲みこむ。そして、黙ってセレネを見つめた。

「ミス・ゴースト——。君は、今まで何を学んできた？」

「何を、ですか？」

突然の問いに、セレネは言葉に詰まってしまった。

この場合、どういう風に答えたら良いのだろうか。今まで独学で学んできたことを言えればいいのか、それとも——実はこの3週間の間、フラメルが何かを教えてくれていたのだろうか。

セレネが悩んでいると、フラメルは長く息を吐いた。

「いいかな、錬金術は科学だ」

フラメルは、静かに講義を始める。

セレネは何度か瞬きをし、思いついたまま疑問を口にする。

「だけれども、錬金術も魔法ですよ？

私が今まで調べた限りだと、どれもこれも化学的な物質法則を無視した結果を出しています」

時間の合間を縫って図書館に通い、かなり錬金術を勉強したつもりだ。

数種の魔法薬と魔法を組み合わせることで、元素を別の元素に変えてしまう。それこそ、銅に複雑な魔法薬と難しい呪文を重ねることで、金へと変化させてしまうのだ。物質の最小単位である元素を変化させることなど、現代の科学力を以ってしても考えられない。

もっとも、本物の金とは異なる。だから、溶かした瞬間に魔法が解けて元の銅に

戻ってしまおうらしい。試したことはないが、錬金術で作られているガリオン金貨を熱したら、価値が急降下しクヌート銅貨になってしまうのだろう。マグルの世界よりも金の価値が低いのは、こういった背景から来ていたりする。

「錬金術は、卑金属を他の物質に変身させる。

その時点で、マグルには不可能——つまり、錬金術は魔法に分類されるはずです」
「君は、勘違いしているようだ」

やれやれ、とニコラス・フラメルは首を横に振った。

セレネは、眉間に皺を寄せてしまう。間違ったことは、何一つ言っていないはずだ。一体、何処を勘違いしているのだろうか。

「勘違い、ですか？」

「化学は——そうだな、科学の一側面でしかない」

「それは、分かります」

「だけど、魔法は科学ではないのだよ」

フラメルは、年季を帯びた杖を取り出す。

杖を暖炉に向けて一振りすると、緑色の炎が燃え上がった。先程まで火の気が無かった暖炉は、轟々と薪を燃やしている。

「これが、魔法だ」

フラメルは、小さく呟くとまた杖を一振りする。

暖炉の火は、だんだんとおさまり、小さく、小さくなって最後には消えてしまった。

先程まで火が燃えていたとは思えない暖炉を見て、セレネは

「それは分かりますよ。物理法則を完全に無視しています」

と言いつつ放った。

何の変哲もない杖に魔力を通して振るうだけで、炎が生れるわけがない。

クイールが定期的に送ってきてくれるマグルの教材のお蔭で、これでも一通りのマグルの知識は修めているつもりだ。セレネは、物理的に化学的にそれを行うことが無理だと知っている。でも、そんな不可能を可能にする現象が魔法なのだ。セレネは、そう理解していた。

「そうだな。」

この世界は、様々な物理法則で縛られている。

魔法使いは、己の魔力を使うことで物理法則に干渉し、強引に結果を生み出す。

火の無いところに火を、水の無いところに水を、という感じだ」

しかし——、とフラメルは言葉をつづけた。

「錬金術は、少し違う。」

魔力を使い、物理法則に干渉するところまでは同じだ。

だが、錬金術師は、魔力を使い一時的に法則を書き換える。

変身術が一番近いな——『石』という自然物に魔力で干渉し、法則を書き換える」

手近な石に杖を乗せて、軽く叩く。

石は、あっという間に小さなネズミへと変わった。そのネズミをフラメルは蛇——セレネのバジリスクに放り投げる。転寝をしていたのだろうか。半分眠そうなバジリスクは、ぱくりと一口で——先程まで石だったネズミを食べてしまった。そして、何事も無かったかのように、とぐろを巻いて眠ってしまう。

「魔法は、強引に干渉して結果を生み出す——

簡単に言えば、『奇跡』を起こす。

しかし、錬金術や変身術は干渉して、そこにある法則や情報を書き換えて、まったく別の物を創り出す」

だから、変身術には論理的な思考速度が必要とされる。

いかに素早く的確な思考を行うことが出来るか、が重要視されてくるのだ。

「魔法と錬金術は、魔力の使い方が違うのだ」

ニコラス・フラメルは、机に両肘をつけた。

軽く指を組み、じっとセレネを見据える。

「この3週間、ずっとテストをしていた。

今まで出してきた雑務を、いかに的確に素早く片づけることが出来るかを」

セレネは、ハッと息をのんだ。

今までの雑務には、意味があったのだ。驚くセレネをよそに、フラメルは話を続ける。

「錬金術は、非常に繊細かつ高度な思考力と、忍耐力がいる。

ワシらのような老人に色々言われても文句を言わず、課題をやり遂げる忍耐力。そして、その課題を効率的に素早く片づける思考力と行動力を図っていたのだ」

セレネは、啞然とした。

今までの雑務の全てに意味があるのかもしれないと、考えたことはあった。しかし、考えつかなかった。その言葉のお蔭で、少しは今までの苦勞が報われる気がした。

そうでなければ、今までのことは全て徒勞に終わっていただろう。

忍耐力や思考力を図るためとはいえ、もう少し他の方法は無かったのだろうか、とも考えてしまうが——もっとも、定期的に買い出しで街に行くことで、セレネの得になったこともあった。だから、深く考えないことに決めた。

「……まあ、ワシらが楽しみたいという理由もあったがな。

さて、明日から錬金術の勉強を始めよう」

「はい！」

セレネは、元氣よく頷いた。

これで、ようやく錬金術が学べると思うと嬉しかった。

いきなり『賢者の石』について学ぶのは無理かもしれない。

だけれども、直接教えを乞うことでヒントが手に入る可能性が高い。

セレネは、この3週間を振り返る。ただの雑務に追われた3週間は、辛いばかりで良い思い出など1つも無かった。しかし――

（もしかしたら、無駄なことなんて無いのかもな）

これまでも、これからも、無駄なことなど1つも無い。

どんな些細なことでも、その積み重ねが何かに繋がるのだ。もし、少しでも手を抜いて作業をしていたら――きっと、錬金術を教えてもらう前に家へ帰されていたかもしれない。

これは、魔法で生み出された奇跡ではない。自分が、我慢してやり遂げた成果だ。
セレネの心は、いつになく晴れやかだった。

26 話 見えない敵

2018年11月23日 大幅改定

アスファルトの道が揺らいだ。

問答無用の強烈な日差しに、目を細めてしまう。セレネは、先程までいたクラ一の良く効いた文房具店に戻りたくなった。もう少し涼みたい。心なしか、後ろ髪を惹かれてしまう。

「……まあ、今日が最終日だから、早く帰らなくちゃ」

セレネは愛用の鞆を背負い直すと、石畳の道を歩き始めた。

フランスの首都 パリ。

その中心部から少し離れた場所に、フラメル夫妻の家があった。

東洋の方では、パリが「花の都」と謳われているだけあり、その活気はロンドンを思わせる。もっとも、地下鉄の治安や全体的な空気はまるで違ったが。

ずっと、フラメル家の雑用や錬金術の勉強で家に閉じこもっていたこともあるだろう。興味深い店も多く、ついふらふらと足を踏み入れたくなってしまった。

「……よし！」

セーヌ川の河岸でバカンスを楽しんでいるパリ市民を横目で見ながら、一歩、また一歩とフラメル夫妻の家へ帰る。

そして、入り組んだ裏道を抜けると、1月ほど前までは、屋根は崩れかかり、裏庭には雑草が勢いよく生い茂り、壁という壁は見事に朽ち果てていた。その幽霊屋敷を立て直したのは、紛れもなくセレネだった。

「ただいま帰りました」

玄関に手を掛け、そつと扉を開ける。

片手で扉を押し開き、家の中に入って行った。そして、家の中の異変に気がついた。中から、人の声が聞こえたのだ。フラメル夫妻しかいないはずなのに、もう1人——男性の声が聞こえてくる。セレネは鞆を背負い直すと、慎重にリビングの扉をノックした。

軽い音が響くと、一瞬——中の声が止まる。そして——

「セレネちゃん、入りなさい」

フラメル夫人の声が聞こえてきた。

セレネは軽く目を瞑ると、息を整えた。中にいる人物は、既に予想が出来ていた。だからこそ、余計に緊張する。

「失礼します」

大錬金術師のリビングは奇天烈な物が多い。

実用性でいえば、スリザリンの寮のリビングの方が居心地が良いだろう。手狭な空間には、簡素な物か奇天烈な物しか置いていない。そんなリビングには、3人の老人が額を合わせていた。どの顔も和やかで、老人とは思えない快活さを醸し出している。そのうち、2人は1ヶ月で見慣れてしまったフラメル夫妻だ。そして、もう1人は――

「1か月ぶりじゃの、セレネ」

アルバス・ダンブルドアが静かに笑った。

セレネは、とびつきり優等生らしい笑顔でダンブルドアにお辞儀をする。

「久しぶりです、ダンブルドア先生」

1カ月前、セレネをフラメル夫妻の家に連れて来てくれたのは、紛れもなくダンブルドアだった。そして、自宅に戻る今日——セレネを送るために訪れたのだらう。

「フラメル先生、街で言われたものを買ってきました」

鞆をテーブルの上に置く。切れそうなくらい膨れ上がった鞆の中には、これだけで、数週間——山籠もりが出来そうな量の食料品が詰め込まれていた。明らかに錬金術とは関係ない買い出しだ。しかし、600歳を超える御高齢のフラメル夫人の苦労を想えば、文句を言わずに引き受けたのだった。

賢者の石の力が切れるまでは、食事をしなくても生きていられたらしいのだが、いまは食事をしなくてはいけないらしい。

「ああ、ありがとう。セレネ、それは台所にしまっておいてくれないかな？」

「はい、了解しました。」

ついでに、部屋にトランクを取りに行ってきます。ダンブルドア先生、それでは後程」

セレネは、ダンブルドアと目を合わせないように――静かに退室した。

一応――設置されている冷蔵庫に食品を詰め込みながら、そっと指を鳴らす。すると、何処からともなくバジリスクが姿を現した。

『どうかしましたか、継承者様？』

『――バジリスク、他に何かがいる気配はある？』

バジリスクは、静かに辺りを見渡した。

出自はどうであれ蛇の仲間であるバジリスクは、温度で周囲を識別する力を持っている。『服従の呪文』をかけられている時のように、無理やり働かされている時は使えない能力だったが、こうして普通の状態の時には何の問題も無く使うことが出来たのだった。

——セレネは、「眼」を使えば、姿を隠した人を見つけることができる。

例え姿を消していたとしても、「死の線」まで消すことはできないのだ。

しかし、線を視るためには眼鏡を外さなければならない。眼鏡を外した時点で、辺りを警戒していることがばれてしまう。だからこそ、セレネはバジリスクを使うのだった。

『——いますね、これは——アルバス・ダンブルドアの鳥です』

『ダンブルドアの鳥？』

一瞬、手が止まる。

意味が分からなかった。

たまたま手に持っていたマーガリンに目を向ける。賞味期限を確認する様に、マーガリンのパッケージを見つめながら

『どうして、そこまで分かるの？』

と、尋ねてしまう。

バジリスクは、私の脚に寄り添いながら淡々と

『あれは、以前——ハリー・ポッターに「組み分け帽子」を届けた、ダンブルドアの不死鳥の体温に良く似ています』

『不死鳥？』

記憶を呼び起こす。

そして、セレネは思い出した。

あの秘密の部屋の決戦の時、ダンブルドアがハリーに送った『組み分け帽子』。それを届けたのは、ダンブルドアの不死鳥だった。しかも、驚くべきことに、私やハリー、ウィーズリー姉妹、それに何故か途中まで同行していたギルデロイ・ロックハートを足につかませた状態で、秘密の部屋から校長室まで疲れを見せることなく

飛ぶだけの力を持つ。

普通では考えられない筋力だけではなく、姿を隠せる特殊能力まで持っているとは、さすがに知らなかった。セレネは、小さく息を吐いた。

『姿を隠して、遠くから監視と来たか。

信用されていないな、私は』

マーガリンを冷蔵庫の中に入れ、ぱたんと扉を閉めた。

見張られているとなれば、下手な行動は出来ない。セレネはそのまま、台所の扉まで歩いた。冷蔵庫の下に、先程の鞆を置きっぱなしにしたまま――

『バジリスク、不死鳥がいなくなったら――あれを元の場所に片付けて置いてくれる？』

『了解しました』

バジリスクの声を聴いてから、廊下に出た。

荷造りは、ほとんどできていた。元々、持って来たものは少ない。薬剤調合セツトも錬金術の本も、替えの衣類も何もかも既にトランクの中だった。トランクの中に入れていないのは、出かける前まで読み込んでいた錬金術のノートだけだった。たった1週間の授業だったが、それだけでノートを2冊も消費していた。それだけ学ぶことが多く、初めて知った内容が多かったのだ。錬金術の基本となる四大元素の理論は、頭で理解していたはずだが、実際に目にしてみると理解が不十分だったことに気が付かされたり、様々な応用法の実践には呆気にとられてしまった。

だが、それにしても――

（不死鳥とやらは、今も私を監視しているのだろうか？）

ノートを優しく撫でながら、セレネは考えを巡らせた。

重たくなったトランクを引きずり、リビングに向かう。その途中で、ふと――

「あつ、鞆忘れた」

と呟き、台所に戻った。

冷蔵庫の下には、鞆が寂しそうに置き忘られていた。バジリスクの姿は無い。ホッとした様な表情を作り、鞆を抱きしめる。もちろん、鞆の上から中身を確かめて。

（よし——入ってる）

セレネは、笑みを浮かべた。

バジリスクが、忠実に主の命令を実行したらしい。セレネは何事も無かったかのように、鞆を殊更丁寧にトランクに詰めると、部屋を出た。廊下には、役目を終えたバジリスクが待機している。セレネは、バジリスクに手を伸ばした。

『ありがとう、仕事御苦労さま』

『いえ、当然のことですよ——不死鳥は、継承者様を監視していたようです。私の後についてきませんでした』

『それは良かった』

セレネの腕を伝い、バジリスクが上ってくる。

襟巻のように首に巻きついたバジリスクを撫でながら、リビングに戻った。

「先生、ただ今戻りました」

優等生の仮面をかぶり、にこやかに微笑む。

フラメル夫人は、よたよたと覚束ない足取りでセレネに近づくと

「セレネちゃん——家の仕事を引き受けてくれて、本当にありがとう。

これは、お礼よ」

そう言って、何かを握らせてくれる。

手を開けてみれば、そこには小さな黒い水晶が輝いていた。不思議に輝く黒い水晶は、持っているだけで熱を発散しているみたいだ。

「魔除けよ。錬金術師が言うのもあれだけど——今年のホグワーツは、危ないらしいから」

「危ない、ですか？」

セレネは、眉間に皺を寄せてしまった。

ホグワーツは、イギリス魔法界でも1位2位を争うくらい安全な場所とされている。第一、子供に勉強を教える場所なのだから、安全でなければならぬのだ。

「これ、お前。不安にさせてはならん。

それに、実際——奴らは校門を護るだけだ。逆に安全になった、といえるかもしれ

れんぞ？」

ニコラス・フラメルは夫人を諫めた。

ニコラス・フラメルは、セレネを見上げる。不安がるな、と言うような仕草をした後——そして、厳しい表情で言い放った。

「いいか、ミス・ゴント。

君は、修練すれば最高の錬金術師になれる——その素質がある。

くれぐれも、忍耐を忘れるな。耐えて、耐えて、耐え忍べ。そしたら、道が開ける」

「はい、フラメル先生。ありがとうございました」

セレネは背筋を伸ばし、一礼する。

フラメルは、最後の一週間で脳が悲鳴を上げるくらい錬金術を教えてくれた。

たとえば、その中に——賢者の石に関する内容が入っていなかったとしても——セ

レネは十分だった。

「それでは、行くとするかの。3、2……1」

セレネはダンブルドアの手をつかむ。

瞬間、吐き気のような回転の後、懐かしい自分の家の前に立っていた。足元には古びたバケツが転がっている。おそらく、またダンブルドアがポートキーを作ったのだろう。確か、ポートキーを個人で作るのは犯罪だった気もするが、ダンブルドアのことだ。そのあたりの許可はしっかりとっているのだろう。

セレネは、2、3度深呼吸をすると

「送ってください、ありがとうございます——ダンブルドア先生。

最高の1ヶ月でした」

ダンブルドアの手を離し、頭を下げた。

目を見た瞬間、全てが読み取られる。あの途方もなく気持ち悪い感覚を、避けるためだった。だからダンブルドアが、どのような表情を浮かべているのか——セレネには分からなかった。

「セレネが喜んでくれたなら、それで良かったんじゃないよ。

それでは、また9月に」

それだけ言うと、ダンブルドアはマグルの町並みとは不釣り合いなマントを翻し、何処かへ消えた。セレネは首に巻きつくバジリスクに、視線を向ける。

『行った？』

『はい、どこにも気配はしません。本当に——帰ったらしいです』

『そう』

今度こそ、本当にセレネの口元が歪んだ。

セレネは、家の鍵を開ける。そこには、嬉しそうに破顔させたクイールが待っていてくれた。

「お帰り、セレネ。勉強は楽しかったかい？」

「はい、義父さん。物凄く勉強になりました！　ずっと知りたかったことも、知ることが出来ましたし」

——そう、セレネは「賢者の石」に関する情報を手に入れていた。

ニコラス・フラメル部屋の掃除している途中で見つけた——賢者の石の研究ノート。

こっそり持ち出し、買い物の度に文房具屋のコピー機でコピーをしていた。貯めに貯めた小遣いは使い果たしてしまったが、大錬金術師の研究記録を手に入れたと思えば安いものだ。

ダンブルドアの不死鳥が見張りをしていると知った時には焦ったが——原本はバジリスクが元の場所に戻してくれたので、まったく問題は無い。

大錬金術師の研究記録のコピーは、最後の1ページまでトランクの中に詰め込まれていた。

これから、ゆっくり読み解いて行こう。

（耐えに耐える。何事も、無駄なことなんて無い。しっかり覚えておくよ——
フ
ラメル先生）

27 話 甘いお菓子と吸魂鬼

ホグワーツ特急に揺られながら、窓の外を眺める。

賢者の石の研究資料を読み解く気力もなく、移りゆく景色をぼんやり眺めていた。手に入れた研究資料だが、どうやら暗号化されているらしい。一見すると、研究資料ではなく何かの観察日記のようだ。しかし、ニコラス・フラメルは錬金術師だ。錬金術師は、研究資料を暗号化する習慣があると聞く。実際に、よく読めば「酸」を表わす緑色のライオンが描かれていたり、黄金を表わす太陽が大きく描かれていたりするなど、錬金術に関連した暗号が散りばめられている。

ここ数週間、睡眠時間を削って読み解こうとしてみたのだが、なかなかはかどらない。外国語の翻訳に辞書が必要であるように、解読するための資料が手元になさ過ぎた。ホグワーツの図書館を利用しなければ、暗号を読み解けそうにない。

「——はあ、暇ですね」

セレネは、ぼんやりと目を落とした。

膝の上のバジリスクも、とぐろをまいて心地よく眠りを貪っている。どこまでも静かで、汽車が走る音だけが響いていた。

「私も——寝ますか」

大きな欠伸を噛みしめて、そっと目を閉じようとする。

その時だ。がらりとノックも無しに扉が開く。突然のことだったので、セレネは反射的に杖を向けた。

「おい、なに臨戦態勢を取ってんだよ？」

そこに立っていたのは、背の高い少年だった。

その後ろには、控えめな少女の姿も見える。セレネは、肩を落とした。ゆっくり

杖をしまいながら、

「ノットとダフネですか。失礼しました」

と謝る。ダフネは曖昧に微笑んだが、ノットは気を悪くしたらしい。

「あまり謝ってるように、聞こえないぞ？」

そういうと、前の座席に荒っぽく腰を下ろした。

「……私は、同席する許可を出した記憶はありませんが」

「ごめんね、セレネ。他に空いている席が無くて」

ダフネが隣に座りながら、すまなそうに笑った。

セレネは小さくため息をついた。他に席が無いと言うなら、仕方ない。それに、

セレネ・ゴーストは優等生で通っている。ここで追い出したところで、イメージが下がってしまうだけだ。

（まあ——この2人の前では関係ないかもしれないけど）

スリザリン生の前では、既に一般的な優等生の仮面が外れかかってしまっている。セレネは、2人を気にせず寝よう——再び瞼を閉じようとした。しかし、眠ることが出来なかった。眠りに落ちかけた時、ダフネ・グリーングラスが

「せ、セレネ!? どうしたの、その蛇!？」

と、大きな声を挙げたからだ。

爬虫類を好ましく思う女は少ないことくらい、セレネも知っていた。驚かれた時の対処法も既に考えてある。セレネは、バジリスクを撫でながら静かに答えた。

「私の飼う蛇です」

「飼う——蛇？」

大丈夫？ ミリセントの猫が食べたりしない？」

そう言われて、ようやく——ミリセント・ブルストロードが猫を飼っていたことを思い出す。非常に大人しい猫で、談話室の隅で一日中眠っているような猫だ。バジリスクに襲い掛かるとは思えない。それに、ホグワーツに戻り次第——セレネはバジリスクを元の大きさに戻して、秘密の部屋に放し飼いするつもりだった。セレネは、バジリスクの鱗を撫でながら

「ご安心を。何も問題ありませんから」

と、言い放った。ダフネは、怖々——バジリスクを覗き込む。

バジリスクは面倒くさそうに薄く目を開けた。そして、鬱陶しそうにダフネから頭を背ける。

「へえ——蛇か——セレネらしいと言えば、セレネらしいのかな？」

それで、名前は？」

「名前、ですか？」

ダフネに指摘されて、初めて——今までバジリスクと呼んでいた事実気がついた。

セレネの様子を見て、気がついたのだろう。ダフネとノットは顔を見合わせる
と、苦笑いを浮かべた。

「セレネって、意外と抜けてるよね」

「たまたま忘れていただけです。今から付けますよ」

セレネは、バジリスクを見下ろした。

犬を犬と、人間を人間と呼ぶように、バジリスクをバジリスクと呼んでいたのだ

と思うと、セレネの心の中に嫌な感情が広がっていく。

『今まで気がつかなくて、すみません。バジリスク、貴方に名前はありますか？』
『——そうですね——私も、考えたことはありませんでした』

バジリスクは、考えるそぶりを見せる。

トム・リドルも、バジリスクのことはバジリスクと呼んでいた。きっと、今まで名前を付けてもらったことが無かったのだろう。セレネは、顎に軽く指を当てる。

「そうですね——どのような名前が良いでしょうか？」

「俺達に聞くな」

そう言いながらも、ノットは考え込むように腕を組む。

「そうだな——ペットの名前なんて適当で良いだろ。」

それこそ、ジョンとかマックスとか」

「犬みたいだよ、それだと。」

そうね——えっと、そういうえば、セレネは、フクロウの名前はどやって付けたの？」

ダフネが、座席の隅を指さした。

そこには、セレネのフクロウ——バーナードが居眠りをしていた。セレネはバーナードを一瞥すると、名付けた当初の記憶を掘り起こす。

「セント・バーナード犬からですね」

「セント・バーナード？」

「山岳救助犬として重宝されている犬種ですよ。」

雨の日も、雪の日も、迷うことなく手紙を運ぶフクロウになるように、と」

実際、名前の通り——バーナードはしっかり活躍してくれている。

仕事には何処までも忠実で、例え荒れ狂う嵐の日であったとしても、無事に手紙を届けてくれたこともあった。

「なるほど——うーん、難しいね、蛇の名づけて」

ダフネも、腕を組んで考え込む。

いくつか名前を口にしながら、違う違うと首を横に振り、そしてようやく——ダフネは、ぽんっと手を叩いた。

「私は、お菓子の銘柄とか植物とかをペットの名前を付けているけど——

そうだ！ セレネって、鍊金術好きでしょ——よく、鍊金術の勉強をしているし」

「まあ、好きではありませんが——勉強はしていますね」

「でしょ？ だから、鍊金術が好きなセレネの蛇ってことで、『アルケミー』はどう？」

「アルケミー？」

「そう、アルケミー！」

ダフネは、名案だと言わんばかりに嬉しそうな顔をしている。ノットも、「まあ、悪くは無いな」という表情を浮かべていた。

セレネは錬金術に興味があるだけで、特別好きと言うわけではなかった。だけでも、いちいち否定するだけ面倒だ。それに、何より——響きが良い。

『貴方の名前は、アルケミーで良いですか？』

バジリスクは、一瞬息を止めたように固まった。

そして、ゆっくりと頭を持ち上げる。黒々とした丸い目が、セレネを見据えた。

『嬉しいです。アルケミー……良い名前を頂戴いたしました。ありがとうございます、継承者——』

『その代わり、継承者様と呼ぶのは止めてください。

私は確かにスリザリンの継承者ですが、あまり呼ばれて嬉しく無いのです』

『分かりました。それでは、我が主と』

ぺろん、と長い舌を伸ばすと、セレネの顔を軽く舐めた。

そして、再び眠ってしまった。どこことなく、その横顔が先程までよりも嬉しそうに見える気がする。セレネは、思わず顔を綻ばせた。

「アルケミーで良いみたいです。

良い名前、ありがとうございます——ダフネ」

「お礼なんて、水臭いよ」

ダフネは笑いながら、百味ビーンズを開けた。

見た目こそ似たようなゼリービーンズだが、百味と言うだけあって食べるまで味が分からない。チョコ味やマーマレード味と言った様な普通の味もあるのだが、中

には臓物味や鼻くそ味といった商品化して良いのだろうか、と疑問を覚える味まで入っている。

「セレネも食べる？」

「私は——遠慮しておきます」

下手に食べて、噂の耳くそ味にあたってしまった日には目も当てられない。興味こそあるが、今までセレネは手を出したことが無かった。

「なんだ、ゴーストは怖いのか？」

ノットは、からかうように笑った。そして、適当に1粒口の中に放り込む。しかし、次の瞬間、ノットの顔から色が拭い取られた。何が起こったのか察したセレネは、かぼちゃジュースの瓶をノット目がけて放り投げる。未開封だったジュースを、ノットは一気に飲み干した。その様子を見て、セレネとダフネは顔を見合わせ

た。

「一応聞いておきます。何味だったんですか、ノット」

「……腐った卵味」

蒼い顔をしたノットは、荒い息を繰り返す。

味を聞いた瞬間、ダフネは嫌そうに百味ビーンズを見下ろした。

「セオドル……酷い味にあたったんだね。

私もあたったことあるよ……腐臭を凝縮したような——ちょっと思い出したくもないかも」

「危険なものに手を出さないことが、1番なのでは？

本当に、魔法界のお菓子は奇妙なものばかりですね」

セレネは、今まで出会った魔法界のお菓子を思い浮かべた。百味ビーンズも需要

の意味が分からない菓子の筆頭だったが、セレネは蛙チョコレートも好きにはなれなかった。本物の蛙のように飛び回るチョコレートが、食べにくかっただけでは。蛙チョコレートは、飛び跳ねて床やテーブルに降りる。埃の付着したチョコレートを食べる気には、どうしてもなれなかった。他にも、一度にたくさん食べると舌まで溶けるペロペロ酸飴や、食べると口から煙が出る胡椒キャンディーみたいな変な菓子が多すぎる。

純粹に美味しい菓子は、無いのだろうか。

「それは、偏見だよ！」

ダフネは、珍しく憤慨したような表情を浮かべた。

「セレネは、美味しい魔法界のお菓子を食べたことが無いからそう言うんだよ。

大鍋スポンジケーキは、ほっぺたが落ちそうになるくらい美味しいし、砂糖羽ペンも甘くて蕩けそうになるの。」

そうだ！ホグズミードに行ったら、ハニーデュークスの店へ一緒に行かない？
たくさんお菓子を取り扱っている店だって、上級生から聞いたことがあるんだ」

ダフネは、目を輝かせながら言った。

ホグズミードとは、3年生以上が行くことを許されるホグワーツの麓にある村だ。

イギリスだけではなく、世界で唯一のマグルの存在しない村だといわれている。
上級生のほとんどが行くことを楽しみにしており、どうやら息抜き場所になっているらしい。

「もしかして——セレネ、ホグズミードには行かない？」

「行きますよ。魔法使いだけの村には興味がありますし。ちゃんと許可証も貰っています」

セレネは、ホグズミードに興味があった。

魔法史にもたびたび登場する村には、ホグワーツの生徒や教師、学校に用事のあ
る保護者や役人が訪れる。そのためか、辺鄙な場所にある村にもかかわらず、店が
揃っているだけではなく、それぞれの品ぞろえもダイアゴン横丁に引けを取らない
らしい。

ダフネの言う菓子屋には対して興味が無かったが、セレネは本屋に行つて掘り出
し物の本を探そうと考えていた。

「早く行きたいですね、ホグズミード」
「行きたいな、ホグズミード」

どこまでも平穏な時間が、過ぎていく。

しかし、その平穏な時間の終焉を現わすかのよう——窓の外の天気は刻一刻と悪化していく。昼過ぎの時点では、車窓から見える丘陵風景が霞むほど雨が降り出して、止むことはなく、学校に到着する2、30分ほど前になると、外は雷雨で墨色に染まってしまっていた。外の様子は、まったく見えない。雨は激しく窓を打ち、風は唸りをあげていた。

「嫌だな……このまま、降らないといけないのかな？」

ダフネが、小さく呟いた。

傘をさしたところで、横から吹き付けてきそうな雨だ。せっかくクリーニングに出した制服をいきなり汚してしまうと思うと、セレネも気が滅入ってしまう。

「ゴーストは、防水魔法を使えないのか？」

ノットが、真っ暗になっている窓の外を見ながら尋ねてきた。
セレネは曖昧な表情を浮かべると、ゆっくり首を横に振った。

「残念ながら、練習中です。」

眼鏡程度の面積でしたら問題ありませんが、全身となると――」

やってみないと分からない。

セレネは最後まで言おうとして、ふと口を閉ざした。汽車が、いきなり速度を落とすし始めたのだ。時計を確認してみるが、まだ到着するには早すぎる。

セレネ達は、互いに顔を見合わせた。

「どうしたんだろう？」

「故障、でしょうか？」

「故障？ ホグワーツ特急が？」

汽車は、ますます速度を落としていく。

そして、ついに止まってしまった。あまりに急に止まったせいだろう。荷物棚からトランクが落ちる大きな音が、聞こえてきた。そして、何も前触れもなく灯りが一斉に消え、辺りが闇に包まれた。セレネは、杖を取り出すと呪文を唱えた。

『ルーモス―光を』

ぼうつと杖先に光が灯る。

不安そうなダフネの顔と、怪訝そうなノットの顔が浮かび上がった。2人も杖を取り出し、呪文を唱えるところだったらしい。3人とも杖灯りを用意すると、慎重にコンパートメントを見渡した。コンパートメントの中には、特に変化が見当たらない。ノットが窓に杖を突きつけて、外を確認しようとする。しかし、外が暗す

ぎるせいだろう。一寸先までしか見えず、あまり意味が無かった。

『アルケミー……何が起きたのか、分かる？』

セレネは、足に巻き付いてきたバジリスクのアルケミーに問いかける。

『分かりません。ただ——何かが、乗り込んでくることは分かります』

『誰？ 人？』

『さあ——分かりません』

『セレネ、お願いだから——今は蛇語を止めてくれないかな？ ちょっと怖い』

ダフネが、そっと身を寄せてくる。ダフネの身体は、小刻みに震えていた。

「分かりました。

ただ、アルケミーが言うには——誰かが乗り込んで来たらしいです」

「乗り込んできた？ 誰か乗り遅れた生徒でも——いや、違うな。この距離なら、直接ホグワーツに出向いた方が早い」

ノットが冷静に分析する。

ホグワーツまで、残り30分ほどの距離だ。わざわざ汽車を止めて乗る必要性が無い。それこそ、去年のハリー・ポッターみたいに——方法はどうであれ、直接ホグワーツへ行った方が効率的だ。汽車を止めて、全員に迷惑をかけることはないだろう。

「だいたい、どうして停電になったんだ？」

「ちょっと見てきます」

セレネは、扉にそっと近づいた。

汽車が止まったからだろう。窓を打つ雨風の音が、一段と激しく響いていた。外を確認する様に、ゆっくり扉を開く。前には何もいない。しかし——

「なに——あれ？」

隣のコンパートメントの前に、何かがいた。

マントですっぽり体を覆った天井まで届きそうなくらい大きな黒い影だった。だが、単に背の高い人というわけではない。その手は灰白色に冷たく光り、触れることを躊躇うようなかさぶたに覆われ、まるで水中で腐敗した死骸のような何かが、隣のコンパートメントを開けようとしている。

途端に、セレネは寒気を感じた。しかも、ただの寒気ではない。息が詰まるみたいに苦しかった。寒気が皮膚を通り越して、身体の内側まで深く潜り込んでいく。胸の中、そして心臓へと——

「エクスペクト・パトロナム——守護霊よ、来たれ！」

膝から力が抜けた瞬間、隣のコンパートメントから銀色の光る何かが飛び出し黒

い影を吹き飛ばした。黒い影は、弾き飛ばされるように逃げていく。黒い影がなくなると、途端に息を吹き返したかのように周囲が温かくなった。汽車に明かりが灯り、再び動き始める。

身体に温かさが戻るのは少し先になりそうだが、押しつぶされそうだと感じるほどの重圧はなくなった。セレネは立ち上がるうとしたが、手足に力が入らない。

「だ、大丈夫——何があったの、セレネ？」

ダフネが、怖々と近づいて来た。

ダフネも、その後ろのノットも、血の気が失せたような表情だった。

「何かいたのか、ゴースト？」

「分かりません——ただ、そこに——黒い影が——」

セレネの声は、聞き取りにくいほど掠れてしまっていた。

震える指で、先程まで黒い影がいた場所を指す。

すると先程——黒い影が入ろうとしていたコンパートメントから、継ぎ接ぎだらけのローブを纏った男性が出てきた。どことなく厳しい表情の男性だったが、セレネに気がついたのだろう。優しそうに微笑むと、セレネ達に近づいてきた。

「君たちは大丈夫かい？」

男性は、セレネに手を貸してくれた。

セレネは、壁に背を預けるように立つ。ダフネが、おずおずと男性を見上げた。

「あの——何かいたんですか？」

セレネが扉を開けて外を確かめた瞬間、冷気が入ってきて——セレネが座り込んで、
「じゃって、その、えっと——」

「吸魂鬼——通称、ディメンター。魔法使いの監獄——アズカバンの看守だよ」

男性は、チョコレート割りながら答えてくれた。

吸魂鬼——セレネは、魔法生物に関する本で読んだ記憶を思い出した。あまりしっかりと読んでなかったが、幸福を食料とする存在と書かれていた気がする。

「吸魂鬼——ですか？

で、でも、アズカバンから出てこないって」

ダフネの震えがひどくなる。

男性は、ダフネを落ち着かせるように軽く肩を叩くと、3人にそれぞれチョコレートを渡した。

「指名手配犯、シリウス・ブラックの搜索だよ。

さあ、チョコレートを食べなさい。気分が良くなるはずだ。僕はこの後、車掌と話があるから——これで」

男性は、ローブを翻して去って行った。

セレネは何も食べる気がしなかったが、申し訳程度に一口齧る。すると、足の先まで一気に暖かさが広がった気がした。

（魔法界のチョコ？いや——違う。マグルの世界のパッケージだ。

そういえば、雪山で遭難した時はチョコを食べて体を温めるって聞いたことがあるような）

セレネは、チョコレートを食べながら考える。

しばらくの間、誰も何も話さなかった。黙ってチョコレートを食べ続け、汽車に揺られる。汽車から降りて、黴臭い馬車に乗ってようやく——ダフネが口を開いた。

「怖いな——一生幸福な気持ちになれないんじゃないかって思った」

ようやく心の整理が出来てきたのか、ダフネの表情に少しゆとりの色が見えた。

「アズカバンに送られる真似だけは、したくねえな……」

ノットも、ぼそりと呟いた。

セレネも頷き返す。あのような生き物と24時間を共にするなんて、とてもではないが耐えられなかった。

「でも、不思議だよ——シリウス・ブラックは、どうしてアズカバンから脱走できただろう？」

あの吸魂鬼と13年間ずっと一緒にいたのに。」

「そこだよ……。別の感情に支配されていたとか、か？」

「えっ？ シリウス・ブラックはアズカバンから脱走したんですか？」

セレネは、少し驚いてしまった。

だが、セレネ以上にダフネとノットは驚いたらしい。信じられない者でも見る視

線を、セレネに投げかける。

「知らなかったの、セレネ？」

「マグルのニュースで見ましたけど——確か、殺人犯だと聞いていましたが、魔法使いだっただんですね」

「ただの魔法使いじゃないよ！

例のあの人の手下で、大量のマグルを殺したんだよ？ 本当にもう凶悪殺人犯なんだよ」

ダフネは、いかにシリウス・ブラックが恐ろしいかを説明する。

その間にも、馬車はホグワーツを目指す。壮大な鑄鉄の門を、ゆっくりと走り抜けた。門の両脇に石柱があり、その頂点に羽を生やしたイノシシの像が立っている。何故ここでイノシシの像なのだろうかと疑問に思う前に、セレネの視界に見えないモノが飛び込んできた。

また、吸魂鬼がいたのだ。

イノシシの像の上の方に2体、頭巾をかぶったそびえ立つような吸魂鬼が漂っていた。ノットやダフネの顔から、再び血の気が引いていくのが見えた。セレネは、またしても寒気に襲われる。気分を落ち着けるため、座り心地の悪い座席のクッションに深々と寄りかかった。

だが、これだけでは終わらなかった。門の傍を通過する直前、吸魂鬼が2体ともセレネの方を見たのだ。頭巾で顔が分からないが、確実にセレネの方を見た。滑るようにしてセレネの方に急降下してくる。

（これは——何か危ない）

セレネは、咄嗟に杖を引き抜いた。

「プロテゴ——護れ！」

力いっぱい、渾身の魔力を込め防御魔法を放つ。

杖先から噴出された透明の盾が、吸魂鬼の進行を阻もうとした。だが、奴らはそんな盾を気にしない。盾を軽々と払いのけると、一気に距離を詰めてくる。セレネには、もう呪文を唱える気力も、眼鏡を外してナイフを使う気力も残っていなかった。

氷のように冷たい感覚が身体の芯を貫き、目の前が霧のように霞み始める。あの2年間、『』を観測していた時の感覚が一気に押し寄せてきた。それと同時に、頭が今にも割れそうな痛みが襲い掛かってくる。遠くで、誰かの叫び声が聞こえた。それと同時に、遠くから響いてくる恐ろしい声。

でも、それが誰の声なのか——知っている誰かなのか、それとも違うのか。もう、判別することが出来ない。

視界の端に何やら銀色の生き物が映ったのを最後に、セレネは意識を手放してしまった。

一部訂正… 8月3日

28話 赤い夢と現実

白い世界は、赤く染まっていた。

燃え盛る世界に、逃げ道が何処にあるか分かっている。セレネは、後ろに逃げればいい。

ここで引き返して、走りだせばいい。そうすれば、自分は助かることが出来る。だけど――

「私は――まだ、帰れない」

口元をハンカチで覆う。

そして、精一杯走った。後ろに背を向けたまま、目的地を目指して。

「っく」

煙で目が痛い。

涙が出てくる。

だけれども、セレネは走り続けていた。

セレネ一人なら逃げる事が出来る。だけれども、この先にいる大事な人は——
火事のことを知らない。逃げないといけない事実を知らずに、そのまま焼け死んでしまう。

悪い予感に突き動かされるように、セレネは赤い空間を駆け抜けた。

「っ——■■——！」

汗が出る。

炎を飛び越え、嫌になるほど見慣れた白い扉の前に立った。

白い扉は、まだ無事だった。セレネは突き破る勢いで、扉の中に足を踏み入れた。
どこまでも白い部屋の真ん中には、やはり彼女が横たわっていた。

以前の部屋にいた時と同じ——どこことなく憂鬱そうな表情を浮かべて、リコリス

を眺めている。彼女は、セレネに気がついていないのか、それとも無視しているのか、リコリスに視線を向けたまま動いていなかった。

「■■、逃げよう！ 火がね、そこまで来てるの」

セレネは、必死に呼びかける。

しかし、彼女は全く動こうとしない。セレネは、拳を握りしめて彼女の腕を掴んだ。

「ねえ、逃げようよ!! ■■! 死んじやうよ、このままだと」

その瞬間だった。

彼女は、初めて頭を動かした。ゆっくりと動かし、虚ろな視線を向けてくる。いや、虚ろな視線ではない。

「■——■？」

「死んじやう？」

彼女は、薄く微笑んだ。

ここではない——もつと遠くのどこかを観る様な狂気を帯びた視線に、セレネは震えあがってしまった。咄嗟に、彼女から手を放そうとするが、逆につかまれてしまう。

「じゃあ、一緒に死にましょう——可愛い御嬢さん」

「——っ!!」

セレネは、声にならない悲鳴を上げる。

腕を離そうとするが、予想以上に強い力でつかまれていた。むしろ、つかむ力は益々強くなっていった。恐怖に比例する様に、身体が熱くなっていく。

熱くて、熱くて、死んでしまいそうだ。

セレネは身をよじりながら、■■■に懇願した。

誰よりも大事で、誰よりも大切に、誰よりも——自分を見て欲しい人に。

「やめてよ——まだ、まだ、死にたくないよ。

一緒に生きようよ——

ママ!!」

「――」

ゆっくりと瞼を開ける。

目覚めたばかりの頭で、ぼんやりと辺りを見渡した。

赤い色は、どこにも見当たらない。

そこは、途方もなく白い部屋だった。清潔そうなベッドが並び、薬品の香りが

漂っているだけの白い部屋。落ち着いたカーテンの隙間から、月灯りが差し込んで
いる。ここがホグワーツの医務室だと気がつくまで、そう時間はかからなかった。

「夢——？」

どことなく熱い額に、手を当てる。

あれは、間違いなく悪夢だった。ただ、悪夢にしてはハッキリと鮮明に覚えてい
ることが気がかりだが——それでも、悪夢に違いない。

セレネは、そっと胸を撫で下ろした。

脇の机に置いてあった眼鏡をかけ、立ち上がろうとする。身体が、どことなく熱
い。あんな夢を見たせいか、セレネは酷く汗をかいていた。いや、それとも熱のせ
いで——あんな夢を見てしまったのだろうか。

（顔——洗ってすっきりしよう）

セレネは、小さくため息をつく。

いつの間にか着替えていたパジャマは、汗を吸って気持ち悪い。それに、途方もなく手足が怠かった。額も熱くて堪らない。セレネは、立ち上がろうと手に力を込めてみる。しかし、不思議と上手く力が入らなかった。

風邪をひいてしまったのかもしれない。

そういえば、昨夜は酷い雨だった。

セレネは、靄のかかった頭で昨日のことを思い返す。汽車から馬車に移るとき、一応傘をさしたが全く役に立たなかった。タオルで身体を拭いた記憶が無いので、それが原因で風邪をひいてしまったのだろう。その上、あの恐ろしい吸魂鬼がやってきて――

「――っ！」

セレネは口を押さえた。

吸魂鬼に襲われた時、あの激しい悪寒と全ての感情が奪われていく感覚が一基に

襲い掛かってくる。まるで『』に再び足を踏み入れる様な感覚は、二度と味わいたくない。あの子の記憶を思い返そうと努力してみるが、どうしてもセレネは思い出すことが出来なかった。

「……気絶、したのかな？」

だから、風邪を引いて——あんな夢を見たのかも」

確認するように、セレネは呟いた。

酷いことは続くものだ。

セレネは、無理やり自分を納得させた。

自分はいったいどれほどの時間、気絶していたのか。それだけでも確認しなければならぬ。セレネは、なんとか立ち上がった時——

「ミス・ゴート、無理して動いてはいけません」

どこから現れたのか、校医のマダム・ポンフリーが自分を寝かしつける。再び横の体勢になったセレネは、ぼんやりと天井を見上げながら――

「――今は何時ですか？」

掠れる声で尋ねる。

マダム・ポンフリーは、見たことも無いような大きなチョコレートのかたまりを小さいハンマーで細かく砕き始めていた。

「ちょうど11時ですよ。

いいですか、貴方は私が良いというまで入院です。さあ、これを食べたら水と薬を飲んで寝なさい」

「……」

11時。

あれから、5、6時間は経過している。

セレネは、額に腕を置いた。どこまでも、熱かった。

「まったく——吸魂鬼を学校の周りに放つなんて。

シリウス・ブラック対策とはいえ、魔法省は何を考えているんだか」

マダム・ポンフリーは、文句を言いながらチョコレートを砕く。セレネは、その様子を眺めていた。

「他の——馬車に乗っていた人たちは、どうなりましたか？」

「みなさん命に別状はありません。夕食の宴に参加し、今は寮にいますよ——さあ、食べなさい」

次の質問をする前に、チョコレートの塊を口の中に押し込まれてしまった。

セレネは、咽かえりそうになりながらも何とか食べる。しばらく黙って食べてい

ると、廊下から何人かが歩いてくる音が聞こえてきた。

「いいかね、ポピー」

「ああ、ダンブルドア先生！スネイプ先生も。どうぞ——ただし、目を覚ましたばかりですので、あまり長時間は——」

「ほんの数分じゃよ」

チヨコレートの効果か、少しでも楽になった身体を起こしあげる。

入口からダンブルドアと、寮監であり名付け親のスネイプが入ってくるところだった。

「大丈夫か？」

スネイプは、真っ先に口を開いた。

セレネは、少し驚いてしまう。スネイプの顔が、心配そうに歪んでいる表情を今

まで見たことが無かった。余程、彼に心配をかけてしまったのだろう。セレネは頭を下げた。

「大丈夫です。心配しないでください」

「大丈夫ではありません！ 38度も熱が出ているんですよ？ 絶対安静です！」

しかし、マダム・ポンフリーがキッパリと言い放ってしまった。

やはり熱が出ていたのか、とぼんやり思いながら、セレネは3人の顔を眺めた。

「本当に、あの場にルーピン先生が居合わせていなかったら——どうなっていたのか。」

キスの執行がされていたかもしれないんですよ？」

「キス？」

「吸魂鬼が刑を執行する手段じゃよ、セレネ」

ダンブルドアが、優しく微笑みかけてきた。

しかし、どうしても——全てを見透かしてしまいそうな青い眼を覗き込むことだけでできなかった。セレネは、少しだけ俯いて目が合わないようにした。

「手段？」

「そう、手段じゃ。吸魂鬼が刑を執行することを『吸魂鬼のキス』と呼ぶのじゃよ。執行されたが最後、死よりも恐ろしいことになる」

死。

その言葉が、セレネの心に深く突き刺さった。

死より恐ろしい、とは一体何なのだろうか？ セレネの頭が、混乱する。だけれども、それと同時に——何故だか理由が分かった気がした。

吸魂鬼は、幸福と言う幸福を全て吸い尽くす。その延長線上で、人間が生活するうえで大切な何かまで吸い取ってしまうのかもしれない。

出会っただけで、人を気絶させ——時によっては死より恐ろしい場所へ誘う。セ

レネは、何故かクトゥルフ神話を思い浮べてしまった。

「いいか、ゴースト」

スネイプが、話し始めた。

セレネは意識を戻し、少しだけ顔を上げる。

「絶望を味わったことがある者であればあるほど——吸魂鬼に襲われやすい」
「絶望、ですか」

セレネは、頷いた。

『』という存在に触れていた期間を——絶望、という表現では生ぬるい。あの期間を思い出すだけで、吐き気がした。

セレネは、吐き気を抑えるように唇を噛みしめた。

「つまり——私は、これからも吸魂鬼に襲われる可能性が高いという事ですね？」
「そうだな」

スネイプは、どこことなく辛そうな顔をしていた。

なんとなく、嫌な予感が胸を横切る。セレネは、胸の上に重たい石が押し掛かったような気がした。

「今年からシリウス・ブラック対策として、吸魂鬼が学校への入り口という入口を固めている。もちろん、ホグズミード村へ向かう道もだ。だから、吸魂鬼がいる間は——たとえば、許可証があったとしても、ホグズミード村行きを許可することが出来ない」

「これも、君の命のためなのじゃ、分かってくれないかのう？」

ホグズミード村へ、行くことが出来ない。

吸魂鬼は、ホグワーツ周囲の至る所を警備している。そばを通過しただけで、セ

レネは襲われたのだ。ホグワーツから出ようとしたら——再び襲われる運命は目に
見えていた。

「対抗策は——吸魂鬼を一時的にでも追い払う呪文は無いのですか？

汽車の中で——男の方が、吸魂鬼を追い払っていました」

対策手段がない生物は、存在するわけがないのだ。

吸魂鬼を制御する術がないのであれば、どうやってアズカバンに看守として制御
しているのか分からない。

しん、とその場が静まり返る。

それは、たった数秒だったかもしれない。だけれども、セレネには途方もなく長
い時間が過ぎ去ったように思えた。

もし、断られたら独学で探すのみだ——そうセレネが決心した時、ダンブルドア
がようやく口を開いた。

「……そうじゃな、今後のためにも習得した方が良いかもしれん」

「しかし、校長——あの呪文は非常に高度な魔法です。

13歳の魔法使いが習得できるとは——」

「セブルス」

スネイプの話を制す。

そして、ダンブルドアは静かに言葉を紡いだ。

「セレネなら、あの魔法を習得できるはずじゃよ。

だが、焦らずとも良い。今はゆっくりお休み——セレネ」

それだけ言うと、ダンブルドアは去って行った。

スネイプは、何か言いたそうな表情を浮かべ、ダンブルドアが去っていった方向を見つめていた。しかし、首を横に振るとセレネに向き直る。

「今夜は、ゆっくり休め。」

お前にもしものがあつた時には、クイールに示しがない」

スネイプは、静かに囁いた。

セレネの肩を軽く叩き、口元を僅かに緩める。いつもは不機嫌そうなスネイプだが、この時は優しい表情を浮かべていた。

「何か質問はあるか、ゴント？」

「あ——はい、あります」

一瞬迷ったセレネだったが、結局質問は出来る時にした方が良いに決まっている。セレネは慎重に言葉を選びながら話した。

「先生は、私の名付け親で——私の両親を御存じなのですよ？」

ずっと前から気になっていたんです。私の両親は、どのような人だったのでしょ

うか？」

あんな夢を見たせいかもしれない。

セレネは、両親のことが気になった。両親は生まれて間もなく死んだと聞いているし、断片的な記憶を遡ってみても両親の姿はどこにも無い。先程の夢で、最後に自分が「ママ」と呼んでいた人物が出てきた。もちろん、それは現実にあったことではないと断定できる。

しかし——それでも、セレネは両親が——特に、夢に出てきたマグルの母親のことが気になってしまっていた。もちろん、クイールに聞けば、詳しく教えてくれる可能性が高い。

だけれども、今はスネイプに聞きたかった。

「お前の父親は知らない。母親は——」

一瞬、スネイプの顔に奇妙な色が浮かぶ。だが、その色は直ぐに懐かしむ色に変

わってしまった。

「メアリー・スタイン。クイール——お前の義父が好いていた幼馴染の女性だ。マグルだったが、不思議な雰囲気的女だったな」

「不思議な——雰囲気ですか？」

「ああ——」

スネイプは静かに目を閉じる。

まるで、何かを考え込むかのように——。

「科学者だったらしい。

寝食を忘れて研究し続けていたと、クイールが嘆いてた。

ああ、あとよく東洋へ旅行していたな——土産を貰ったこともある」

「土産？」

セレネは、顎に指を当て考え込む。

よく思い返してみれば、家のリビングには東洋系の置物が多い。

あれは、母が買ってきた置物だったのかもしれない。東洋に関わる研究をしていたのだろうか。母親は、どういう研究をしていたのだろうか。疑問がいくつも思い浮かんでくる。

しかし、セレネが問おうとした瞬間、

「今日は、もう遅い。」

早く寝て、体調を整えることだ」

スネイプは話を切り上げ、去ってしまった。

まるで、それ以上——話すことを拒むかのように。

「さあ、この水を飲んだら早く寝なさい」

マダム・ポンフリーは、コップを手渡してくる。セレネがコップの水を飲み干し、身体を倒したことを確認すると、安心した様に去って行った。

セレネは中々寝付けなかった。寝返りを打ち、ぼんやりと外を眺める。

いつの間にか――また雨が降り始めていた。

雨粒が窓ガラスに当たって弾け、細かい水滴となり流れ落ちていく。ランプの灯りで照らされた室内からは、漆黒の闇に覆われた外の様子は見えない。見えるのはガラスに映し出された、自分の青白い顔だけだった。

8月14日…誤字訂正

29 話 リディクラス

今年の新学期は、色々と物騒な幕開けをした。

1000人近い未成年が学校に集まれば、何かしら事件が起きるのは当たり前だ。しかし、今年のような人の生き死に関わる事件が起きるのは極めて稀だろう。

1つ目は、言うまでもなく吸魂鬼に生徒が襲われた事件だ。

シリウス・ブラックのホグワーツ侵入を防ぐために配置された吸魂鬼が、一般生徒を襲ったのだ。幸いにも近くに防衛術の先生がいたこともあり、寸でのところで救出され命に別条はなかったが、吸魂鬼の恐ろしさを学校中に震撼させた事件だった。

そして、もう1つは――

翌日になると、セレネの熱は下がっていた。しかし、「万が一のことがあるから」と、マダム・ポンフリーは退院の許可を出さなかったのだ。退院許可が下りなければ、医務室から出ることは叶わず、したがって授業にも出席できない。そのためセレネの初授業は、他の3年生より1日遅れて始まった。

しかし、特に困ることは無い。3年生から選択授業が始まり、科目数が増えたとはいえ、予習に費やす時間は十分にあった。1回や2回、出席しなかったところで障壁にすらならないだろう。特に心配することはなく、しいて懸念事項を挙げるとするならば、宿題の有無くらいだった。

「セレネ！」

古代ルーン文字学の教室に入ろうとした時、ハーマイオニーが後ろから声をかけてきた。走ってきたのだろうか、ハーマイオニーは荒く息をしていた。

「大丈夫？もう退院していいの？」

「私は大丈夫ですが——貴方の鞆の方は大丈夫ですか？」

ハーマイオニーの鞆は、今にも破裂しそうなほど教科書が詰め込まれている。今学期、彼女の鞆が限界を迎えなかったとしたら、それは奇跡としか言えない気がした。

「問題ないわ。ちょっと受講する科目が多いだけよ。それより、セレネは選択授業で何を選んだの？」

「『数占い』『魔法生物飼育学』『古代ルーン文字学』ですね」

他にも「マグル学」や「占い学」といった科目が選べるようになっていたが、それを選ぶと時間割が重なってしまう。さすがに、自分を2人に分ける呪文は知らない。そうになると、必然的に2科目ほど削る必要が出てくるのだ。魔法使いの視点からマグル世界を学ぶ「マグル学」は、なかなか捨てがたい科目だった。何しろ、セレネの周りにいる魔法族と言え、そろいもそろって純血主義ばかりで、誰もがマグルに対する偏見を持っている。純血主義ではない一般的な魔法使いのマグルに対する認識を深めておくことも、それはそれで興味深いだろう。そう考えたセレネだったが、これを受講するためには「数占い」を諦めなければならない。

錬金術書の読み取りには、計算や論理的思考が非常に関係してくる。もしかしたら、「数占い」で習う内容が関係してくるかもしれない。2つの科目を天秤にかけ、結局——数占いを選んだのだった。

「セレネは占い学を受講しないのね？」

それで正解よ！あの科目、インチキ臭いの。数占いとは大違いよ——あつ、私は全部の科目を受講しているの。今の所、数占いの授業で宿題は出てないわ」

「ありがとう。ちなみに、魔法生物飼育学で宿題は出ましたか？」

そう尋ねると、ハーマイオニーの顔色が一気に曇る。何か嫌なことでも思い返したように、教室の中を覗きこんだ。彼女の視線を追ってみると、その先にはスリザリン生が纏まって座っていた。

「あの人達が何か？」

「うん——実はね、あの人達というかマルフォイが——」

「あらっ、ゴースト!!」

ハーマイオニーは、小さく声を潜めて何か言うとした瞬間、スリザリン生の中から声が上がった。マルフォイの取り巻きの1人、パンジー・パーキンソンだ。今日は、彼女がクラブとゴイルを率いていた。

「貴方、医務室にいたんでしょ？」

ドラコの容体はどうだった？」

パーキンソンは、真っ先に昨日——医務室に緊急搬送されてきたドラコ・マルフォイの容体を尋ねてきた。そのことに思い至った時、セレネは、どうしてハーマイオニーの不機嫌な表情を浮かべたのか理解できた。

「痛がっていましたよ」

昨日の昼過ぎ——丁度、魔法生物飼育学の授業が行われていた頃、ハグリッドがマルフォイを抱えて医務室に飛び込んで来たのだ。あまりにも勢いよく飛び込んで来たものだから、医務室が揺れて棚から幾つかの小瓶が床に落ちたことを覚えている。

「遠目から見た限りですと、鋭利な刃物で切られたようでしたね。

もっとも、マダム・ポンフリーが杖を一本振りしたら塞がりましたが。念のため、一日泊まらせただけのようです」

セレネは、それだけ言うとお手近な席に着いた。

パーキンソンは何か言いたそうな表情を浮かべていたが、こちらに背を向け、スリザリン生の輪に戻って行った。

「じゃあ、マルフォイの腕は治ったのね」

セレネの隣に腰を下ろしたハーマイオニーは、どこことなく嬉しそうに話し始める。

「もちろんですよ。だいたい、骨が無くなった腕を一夜で元に戻す程の医療技術があるのですから、あの程度の傷は直ぐに治らないと逆に変です。

それで、宿題は出ましたか？」

「出なかったわ。ハグリッド、授業中に戻ってこなかったもの。

でも、良かった。マルフォイの傷が治ったなら、そこまで大きな問題にはならない——といいんだけど」

その時、教師が入ってきたので、話は終わりになってしまった。

しかし、ハーマイオニーの望みどおりに事態は進まない。マルフォイの傷は完治したはずだ。しかしマルフォイは、白い包帯を大げさなくらい巻いて退院したのだ。時折、もうないはずの傷口に手を当て、痛がって見せたりするものだから、マルフォイは重症としてホグワーツ生の間に浸透してしまった。

スリザリン以外からも、ハグリッドに対する責任追及の声が上がったのは言うまでもない。

廊下ですれ違ったハグリッドは、あまりにも落ち込んでいるのだろう。

見上げるばかりの巨体なのに、何故か小さく縮んで見えてしまった。通り過ぎていくハグリッドを横目で見ながら、「闇の魔術に対する防衛術」の教室の扉を開けた。

前任者2人と比較すると、かなりまともな教室だ。誰かの後頭部の匂いを隠すために漂っていた強烈なニンニク臭は充満していないし、自分の写真をベタベタ貼り付けているわけでもない。ただ、机とイスと黒板だけがある平凡かつ質素な教室だった。

今年から『闇の魔術に対する防衛術』の授業を担当するリーマス・ルーピンは、汽車で見かけた時より健康そうだった。セレネの記憶が確かならば、頬がこけていた。だが、今日は少し丸みを帯びて血行が良さそうになっている。もしかしたら、ずっと貧しい暮らしをしていて、ろくに食事をとることが出来なかったのかもしれない。ルーピンは、集まったスリザリン生を眺める。そして、安心させるような笑顔を浮かべた。

「教科書を鞆に戻してもらおうかな。今日は実地練習をすることにしよう。杖だけあればいいよ、ついてきて」

「実地練習？　いままでそんなこと、あったか？

僕は、こんな怪我をしているというのに」

マルフォイがクラブとゴイルに悪態をついているのが聞こえてきた。

後半の言葉には同意しないが、前半の言葉にのみ同意する。今まで、一度も授業で実地練習をしたことは無かった。

ルーピンに続いて廊下に出る。授業中のため、誰もいない廊下を歩いていく。時折、ゴーストがふわふわ浮いているのを見かけた。だが、それ以外は特に何もなく、職員室に辿り着いた。ただ今は授業中なので誰も先生いない。

「こんなところに危険が潜んでいるんですか？」

ブレーズ・ザビニが疑問を口にした直後だった。

職員室の奥のタンスが、不自然に揺れたのだ。あまりにも唐突に揺れたものだから、全員に緊張の色が奔る。セレネの隣にいたダフネが、ひいっと小さな悲鳴を上げた。

「心配しなくていいよ。中には『まね妖怪』、通称『ボガート』が入っているんだ。こいつは暗くて狭いところを好む。これみたいなタンスとか流しの下、それから食器棚などかな。さてと、では『まね妖怪』とはいったい何でしょう」

何人かが手を挙げる。ルーピンは、最初に手を上げたノットを指名した。

「形態模写妖怪。一番怖いと思うものに姿を変えることが出来る」

「その通り。だから、中の暗がりに座り込んでいる『まね妖怪』は、まだ何の姿にもなっていない。

戸の外にいる誰かが、何を怖がるのかまだ知らない。『まね妖怪』が一人ぼっちの時にどんな姿をしているのか、誰も知らない。しかし、私が外に出してやると、たちまち、それぞれが一番怖いと思っているものに姿を変えるんだ」

ルーピンが話している間にも、タンスは揺れていた。

あの中に潜む「まね妖怪」は、どのような姿をしているのだろうか。少しだけ、

興味が湧いてくる。

ビデオカメラをタンスに仕掛けておけば、その正体が分かるかもしれない。だが、ホグワーツに電気製品であるカメラを持ってきたら壊れてしまう。もし「まね妖怪」の正体が知りたいのであれば、学校の外で探さないといけないのだ。そのようなことを考えている間にも、ルーピンの説明は続いていく。

『まね妖怪』を退治するときには、誰かと一緒にいるのが一番いい。どんな姿に変身すればいいのか分からずに、混乱するからね。

こいつを退散させる呪文は簡単だ。しかし、精神力が必要だ。こいつを本当にやっつけられるのは『笑い』なんだ。君たちは『滑稽』だと思ふ姿に『まね妖怪』を変身させる必要がある。

初めは杖なしで練習しよう。私に続いて言ってみようか——『リディクラス
—バカバカしい—！—

「『リディクラス—バカバカしい—！—」

クラス全員が一斉に唱える。その声に反応したのか、タンスが呼応する様に揺れる。さらに奥にも突然揺れたタンスが見えたことを考えると、どうやら他のクラスの分もあるらしい。

ルーピンは、出席簿に目を落とした。

「よし、じゃあ、まずは——ダフネどうだい？」

「わ、私ですか!？」

突然指名されたダフネは、絶望した様に立ち尽くした。あのタンスを開け放った瞬間、自分の苦手とするものが飛び出してくるのだ。誰であったとしても、好んでやりたいとは思えない。ダフネは、おずおずと先生に近づく。ルーピンは、ダフネの方を軽く叩いた。

「ダフネ、君が世界で一番怖いと思うものはなんだい？」

「バロール」

囁くように、小さな声でダフネは答えた。ルーピンは何やら考える仕草をする。確かバロールというのは、ケルト神話に登場する魔神だ。「すべてを殺すという眼を持っている」と本に書いてあった。ある意味、自分の「眼」と似ている能力だ。セレネは、そっと眼鏡を直した。

「ふむ——つまり、『眼』さえなければバロールは怖くないよね？」

そうだな、ダフネ。出来るだけバカバカしいアイマスクを思い浮かべるんだ。出来るかな？」

ルーピンの問いを聞いたダフネは、やや考えた後、躊躇いがちに頷いた。その反応を視たルーピンは、穏やかな口調のまま口を開いた。

「『まね妖怪』がダンスからウワツ——と出てくるね？そして君を見ると『バロール』に変身するんだ。」

そしたら君は、杖を上げて叫ぶ『リディクラス』ってね。

その時に、脳内に思い描いたアイマスクに全神経を集中させる。全て上手くいけば、バロールはアイマスクで視界が遮断され、慌てふためくことになる」

「ほ、本当に？ 私に出来るかな？」

ダフネの顔色は、いつになく不安そうに歪んでいた。緊張のあまり、顔が青ざめていた。

「出来るよ、君なら。」

じゃあ、みんなもちよつと考えてみて。何が一番怖いかってこと。そして、どうやって可笑しな姿に変えられるかもね」

部屋が、静まり返る。誰もが、目をつぶって考え込んでいた。セレネも目をつぶると、少し俯きながら考え始めた。

自分の怖いモノは決まっている。昏睡状態の時に触れた「や」「死」だ。あれよ

り怖いモノは思いつかない。だが、果たして「まね妖怪」が「」に変身出来るかどうかと聞かれたら、首を横に振る。「」は、「まね妖怪」ごときが表現できるモノではない。物というよりも、概念に近いように思える。仮に「」に変身したとしても、「」をどうやったら可笑しくできるだろうか？

セレネには、まったく想像できなかった。

「みんな、いいかい？」

セレネは弾かれたように顔を上げた。周りを見渡してみれば、みんな覚悟を決めたような表情になっている。ミリセント・ブルストロードなどは準備万端らしく「いつでも来なさいよ！」と言いながら腕まくりをしていた。

セレネは無表情を装いながら、内心酷く困っていた。まだ「まね妖怪」が何に変身するのかさえ思いつかない。優等生で通っているセレネ・ゴーストならば、ここで颯爽と倒すのだろう。しかし、今のセレネにはそんな自分の姿が思い浮かばなかった。

せいぜい、自分の番が来る前に終わることを祈るしかない。

「ダフネ、3つ数えてからだ。1、2、3、それ!!」

ルーピンの杖の先から、火花が迸り、タンスの取っ手に当たった。タンスが勢いよく開き、中から何かが現れる。

寝起きのようにボサボサと広がった痛んだ長髪——ケルトの魔神「バロール」が、のっそりとタンスの中から姿を現した。片目は開きギラギラとした目でダフネを睨んでいたが、もう片方の「バロールの魔眼」と恐れられる方の眼は、大きく重い瞼で覆われていた。ダフネは杖を振り上げ、震える手で狙いを定めると、目をつぶった。

「り、リディクラス!!!」

パチンッと鞭を鳴らすような音がしたと思ったのもつかの間、次の瞬間になると

バロールが躓いた。真っ赤な布地に、人を挑発するような大きな目が描かれたアイマスクをかけられた状態で。馬鹿馬鹿しいアイマスクを取ろうとするバロールだったが、取れないらしく悪戦苦闘している。

どっと笑いが上がった。「まね妖怪」は、その笑い声に戸惑ったように動きを止める。

「パンジー、前へ！」

パンジー・パーキンソンが、前に出てきた。ダフネは、慌てて後ろに下がる。バロールはパーキンソンの方を向いた。すると、またパチンつという音を立ててバロールは消えた。

そこに現れたのは、粗い毛並に鋭い牙と爪をもった二足歩行の動物——ダラリと涎を垂らしている狼男が立っていた。ルーピンの横顔が辛そうに歪んだように見え、たのは、気のせいだろうか——。

狼男は一吼えすると、パーキンソンに襲い掛かろうと膝をかがめた。パーキンソ

ンは真っ直ぐ狙いを定めて叫ぶ。

「リディクラス！」

パチン！という音が響く。狼男の口に輪がはまり、口が開かなくなった。御丁寧なことに、鉄製の輪には可愛らしいレースがついている。ゆったりとした女性物の服も着せられており、セレネはグリム童話を思い出した。お婆さんの服を剥ぎ取った狼は、このような姿で赤ずきんを待っていたのだろうか。

「次、ドラコ」

マルフォイが、腕を庇いながら顔で前に進み出る。パチンと音を立てて「まね妖怪」が変身したものは、頭をフードにすっぽり包んだ何かだ。セレネは吸魂鬼かと思ったが、どうやら違うらしい。フードを被った何かは、まるで獲物をあさる獣のように地面を這ってきた。銀色に光る液体が、隠れた顔から滴り落ちている。

マルフォイの顔は一瞬ギクリと強張っていたが、左手につかんだ杖で何とか狙いを定めると叫んだ。

「リディークラス!!」

パチンっと音とともに、それはネズミに変身した。自分のしっぽを追いかけて、クルクル回り始める。

「次は、ザビニ!」

ネズミが尻尾を追いかけるのを止めて、ザビニの方を見た途端、パチンっと音とともに今度は巨大な黒い犬が現れる。目をギラつかせたクマほどもある大きな犬は、ザビニにゆっくりと近づいて行った。

「リディークラス!」

ザビニが叫ぶと、パチンつと音を立てて、バルーンアートの犬になった。先程までの凶暴性は消え、ふわりふわりと職員室を漂い始める。

「次、セレネ！」

もう自分の番が来てしまった。

セレネは杖を構えた。まず、「」に変身するとは思えない。死という概念に変身するとは思えない。一体、何が現れるのだろうか。碎かれた完成目前の賢者の石、とかかもしれない。そんなことを考えながら、セレネは犬の間抜け面を視た。

パチン！

「えっ？」

セレネは呆氣にとられてしまった。

現れたのは、女の子だった。

肩にかかる程の艶やかな黒い髪が風に揺れ、袖から伸びる手足は何処までも白い。どことなく儚げな雰囲気を出している。

顔は見えない。黒い影が顔にかかり、表情が見えなかったのだ。ただ、唯一——眼だけが光っていた。禍々しいくらい蒼い瞳は、まるで、そう——

「リディクラス！」

セレネは、問答無用に杖を振るう。

人形のように突っ立っていた「まね妖怪」は、前に躓いた。少女の姿は消え、一瞬、馬鹿馬鹿しい服に身を包んだピエロが浮かび上がったかと思うと、「まね妖怪」は破裂し、何千という細い煙の筋になって消え去った。

「良くやった！」

全員が拍手をする中、ルーピンが大声を出した。

「みんなよくやった！ そうだな、まね妖怪と対決したスリザリン生1人につき5点あげよう。最初に僕の質問に答えてくれたセオドルにも5点だ。

みんな、いい授業だったよ。宿題はまね妖怪——ボガードに関する章を読んで、まとめを提出してくれ。期限は次の授業までだ。今日は、これでおしまい」

その一言と共に、スリザリン生は興奮しながら職員室を出た。

しかし、セレネはあまり心が弾まなかった。まね妖怪は無事に倒すことが出来た。しかし——

「でも、最後——セレネの時、何に変身したの？ 知り合いの子？」

「さあ、分かりません。ずっと昔に出会った誰か、かもしれないですね」

ダフネの問いに、セレネは嘘をつく。

セレネにも、最初は誰に変身したのか分からなかった。だけれども、あの青い眼を見た瞬間、気がついたのだ。

まね妖怪は、自分に変身した。

セレネ・ゴーストに。

「本当に、馬鹿馬鹿しい」

小さく呟くと、セレネは図書館へ足を向けた。

今の授業を忘れ、錬金術の勉強に打ち込むために――。

30 話 守護霊よ来たれ

ハロウィーンの朝、セレネは少し不快な気持ちになった。

今日は、3年生が初めてホグズミード村へ行くことが許可される日だ。誰もが彼もが「村へ行ったら何をするか」という話題で盛り上がっている。

しかし、別にそれはどうでも良い。朝食の席でも

「まずは、三本の箒に行きましようよ！バタービールを飲んでみたかったのよねー！」

「俺達、ハニーデュークスに行く」

「お前らさ、部屋に食べきれないほどの菓子があるだろ」

「僕は叫びの屋敷だな。母上には絶対に行くな、と念を押されたけどね。なに、イギリスでもっとも怖い屋敷なんて嘘に決まってる」

「ねえ、ドラコ。2人でマダム・パディフットの喫茶店に行きましようよ。その取り巻き共は置いておいて」

などと騒ぐマルフォイ達の会話を、気にも留めてなかった。

普段通りに朝食を済ませると、誰かに話しかけられる前に席を立つ。しかし、大広間から出た瞬間に、つかまってしまった。ほとんど話したことも無いスリザリンの上級生が、セレネの前に立ち塞がったのだった。

セレネは、またか……と、うんざりしながらも、それでも寮の外なので優等生の仮面をかぶった。

「何かご用でしょうか」

「はっ、これから俺はホグズミード村へ行くのですが、何か欲しいものはございますか？」

この問いかけを、一体何度耳にしたことだろう。

ホグズミード村へ行ける日程が掲示されてから、そろそろ1ヶ月。セレネは、これまで何人もの上級生から同じ質問をされていた。共通している点は、全員スリザリンの上級生であるということと、その全員が「スリザリンの継承者」の信奉者であるということだ。

1年、2年と信奉者は増え続け、ノット曰く「セレネ・ゴースト親衛隊」なる

組織がスリザリンに結成されているらしい。全20か条以上の令が定められているらしく、その事実をノットから知らされた時、何とも言えない複雑な気持ちになったのは忘れられない。どのくらい隊員がいるのかといえば、先日入院した際、見舞い客が絶え間なく訪れたほどだ。

もっとも、マダム・ポンフリーが面会謝絶していたおかげで、その全員の訪問を受けずにすんだわけだが。

親衛隊員からの好意を受け入れるのは簡単だが、問題はその後だ。セレネの脳裏に浮かび上がるのは、去年の誕生日——11月30日の朝、目を覚ますとプレゼントの山が築かれていた光景だ。ひとつひとつ中身を確認することに1日を使ってしまい、思わず消失呪文を使いたくなってしまった。それから数日間、セレネの機嫌が悪かったこともあり、それ以後は親衛隊の条例に「継承者自身が望まぬ限り、貢物は可能な限り控えるべし」という一文が追加されたらしい。

しかし、それは裏を返せば「望むものならば、貢物をして構わない」ということであり、こうして親衛隊の生徒が何か欲しい物は無いのかと、尋ねてくることが度々あった。もちろん、何が欲しいのか言った瞬間、去年の誕生日の二の舞になっ

てしまう。

だからセレネは、好意を丁重に断り続けていた。

「ありがとう、気持ちだけ受け取っておきますね——ベイジー」

「えっ、俺の名前を知っているんですか？」

「——名前くらいは覚えていますよ」

ノットがリストアップした親衛隊のリストは、一応目を通してある。

親衛隊など興味ない。だが、いつか何かの役に立つかもしれないし、逆に問題を起こすかもしれない。だからこそ、しっかり目を通すようにしているのだ。

「それでは」

なにやら感激した様に顔を赤らめるベイジーを置いて、さっさとその場を退散する。

大理石の階段を登り、誰もいない廊下を歩く。

「セレネ!!」

その時だ。

後ろから自分呼び止める声が聞こえた。セレネが振り返ると、廊下の向こう側

からハリーが走ってくる場所だった。セレネは立ち止り、ハリーが追いつくのを待つ。

「久し振り、セレネ。マクゴナガル先生から聞いたんだけど、セレネもホグズミードに行かないで、城に残るんだよね？」

「まあ——そうですね」

そう答えると、ハリーはたちまち嬉しそうな表情を浮かべた。

「ハリーも残るんですか？」

「あー、うん。実は、叔父さんからサインを貰うことが出来なくて」

ハリーは力なく笑った。

だけれども、それでも居残り仲間を見つけられたことが嬉しかったのだろう。すぐに表情を緩め、嬉しそうに尋ねてきた。

「セレネはこの後、何をするの？」

「吸魂鬼を追い払う方法を習いに行きます、先生と約束しているので」

今後のためにも、習っておいた方が良い。

学校に在籍している間は良いが、万が一——野生の吸魂鬼と出会うことがあつ

て、対処できずに死んでしまうことは避けなければならない。だからこそ、セレネは先生に頼み込んだのだった。吸魂鬼を撃退する魔法は、標準魔法レベルを遥かに超える。故に、1日で教えることはできない。だからこうして、ホグズミード村に行けない日程を練習日に定め、教えてもらうことになったのだ。

「吸魂鬼の防衛術か——あの——もしよかったら、僕も連れて行ってもらえないかな？」

その、僕も吸魂鬼は苦手だし」

「そうですね——私は構わないのですが——」

セレネは、先生の顔を浮かべる。

飛び入りでの参加を許容してもらえとは、到底考えられなかった。だけれども、物は試しともいう。

「とりあえず、頼んでみますか？」

「頼むよ、セレネ！ 一緒に行こう!!」

セレネは、ハリーと一緒に廊下を歩きはじめる。

しかし、歩き始めて数分もしないうちに、ハリーの表情が曇った。

「あの——セレネ、ルーピン先生の研究室は、この階じゃないよ？」

何かを確認するかのよう、ハリーが囁いてくる。

ルーピンの研究室は、この階ではない。セレネは歩きながら、首をかしげる。

「それは知っていますよ。しかし——どうして急にルーピン先生の研究室が出てくるのですか？」

「いや、ほら——闇の魔術に対する防衛術の先生は、ルーピン先生じゃないか。

あつ、もしかして、ダンブルドアから直接習うとか？ それにしても、校長室

はここじゃ——」

「——ハリーは、何を勘違いしているのですか？」

とある一室の前で、セレネは立ち止る。

その頃になると、誰に習うつもりなのか理解したのだろう。ハリーの顔色は見るに堪えない程、青ざめていた。ハリーは震える指で、部屋の扉を指した。

「セレネ、その——まさかと思うけど、この部屋じゃないよね？」

「ここで間違いないと思いますよ」

「ここの部屋、あの——えっと、誰の部屋か分かってる？」

「もちろん。この部屋は、寮監で私の名付け親の——」

そこまでセレネが言った時だった。

音を立てながら、扉が開く。開かれた扉の隙間から、長身の黒い男が姿を現した。まるで、イギリスが滅んでしまったかのような仏頂面をした男の名前は——

「スネイプに、吸魂鬼撃退法を教わるの!? セレネ、君は正気?」

「ゴースト——何故、ポッターもいるのかね?」

スリザリンの寮監、セブルス・スネイプだった。

スネイプもハリー同様、心底嫌そうな表情を浮かべている。

「先程、私が吸魂撃退法を習いに行くと言ったところ、ハリーも一緒に習いたいと

——」

「いいえ! やっぱり、僕はやらなくていいです。頑張ってね、セレネ」

それだけ言うと、ハリーは逃げるように去って行った。

余程、スネイプのことが嫌いなのだろう。瞬く間に廊下の角を曲がり、ハリーの姿は視えなくなった。

「入りましたえ、ゴースト」

「はい、お邪魔します」

部屋は薄暗く、壁に並んだ棚には何百というガラス瓶が置かれていた。ガラス瓶の中には、さまざまな色合いの魔法薬が並んでいる。いや、ガラス瓶だけではない。動植物の断片が浮かんでいるガラス瓶もあった。セレネは、理科実験室にでもいる気分になった。扉を閉め、魔法薬を眺めていると、スネイプは軽く咳払いをした。スネイプは、少し開けた明るい場所に移動していた。

「さて、ゴースト——我輩が君に教えようとしている呪文は、非常に高度な魔法だ。標準魔法レベルを遥かに超える——『守護霊の呪文』だ」

「守護霊、ですか？」

「さよう」

そう言いながら、スネイプは軽く手招きをする。セレネは、棚にぶつからないように注意しながらスネイプのいる場所に移動した。

「呪文が上手く効けば、守護霊が出てくる。それが、吸魂鬼を払う盾となる」
セレネの脳裏に、ホグワーツ特急で見た光景が浮かんでくる。

恐らく、あの時目撃した銀色の光が守護霊なのだろう。スネイプは話し続けた。

「吸魂鬼は、希望、幸福、生きようとする意欲などを貪り喰らって生きる。しかし、守護霊は本物の人間なら感じる絶望というものを感じることが出来ない。だから、吸魂鬼は守護霊を傷つけることが出来ない」

スネイプは杖を取り出した。

そして、何もない空間に杖を向ける。

「何か一つ、幸福なことを思い浮かべる。その思い出を渾身の力で思いつめ、呪文を唱える。」

——『エクスペクト・パトローナム——守護霊よ来たれ！』

杖先から銀色の光が飛び出した。目が眩む程の光は動物の形をとる。それは、一頭の牝鹿だった。牝鹿は、部屋の端から端までをゆっくり駆けた。優雅に駆けていく銀色の牝鹿が、やがて霞になって消えていくと、思わずセレネは

「凄い」

と呟いていた。

これが、標準レベルを超えと言った理由に納得がいく。物質を消失させたり出現させたり、姿を変えたりする呪文とは一線を画していた。

「次は君の番だ、ゴースト。やってみたまえ」

「はい」

セレネは杖を取り出して、何もない空間に真っ直ぐ向けた。

「幸福な思い出を浮かべろ、いいな」

「はい」

返事をしたのは良いが、セレネは戸惑っていた。

いざ、幸福な思い出を浮かべようとしてみたが、何も浮かんでこないのだ。セレネ・ゴーストの記憶は途切れている。ホグワーツに入学してから、そこまで幸福なことは無かった。その前の記憶を探れば幸福な思い出があるのかもしれないが、自分の物と感じられない。セレネは悩んだ末に、ヴォルデモートを出し抜いた時のことを浮かべた。

1年生の時——初めて、賢者の石を手にした瞬間を。

『『エクスペクト・パトロナム——守護靈よ来たれ』！』

杖の先から、何かが噴き出した。一筋の銀色の煙だ。しかし、それだけだった。

煙は、形を帯びることなく消えて行った。セレネは、もう一度——賢者の石を手

した瞬間に神経を集中させる。しかし、集中させれば集中させるほど、その後何
が起きたのかまで思い出してしまふ。その想いを振り払うように、セレネは杖を振
るった。

『『エクスペクト・パトロナム——守護霊よ来たれ』！』

杖から銀色の煙が出る。一瞬、形を帯びたかと思つたが、それはセレネの見間違
いだつた。形の無い煙のまま、空間に消えて行つた。

「これでは——駄目ですよね」

「そうだな。最低でも有体守護霊——形のある守護霊を作り出せるようになる必要
がある。

最悪、それでも身を護れなくはない。しかし、吸魂鬼と対峙した極限状態の中で
作り出すとなると話が変わってくる。

——別の思い出を選んだ方が良いかもしれん。先程まで君が浮かべていた思い出
は、十分な強さではなかったようだ」

「はい——分かりました」

セレネは、眼を閉じた。

ヴォルデモートを出し抜いた、賢者の石を手に入れた。あの歓喜に勝る幸福は、いくら考えてみても無かった。

「守護靈は、強い幸福な思いが作り出す。

思いつかないのであれば、幸福な場面を自分の中に作り出すことも1つの手だ」

「幸福な場面を作り出す」

「そうだ、幸福なことを思い浮かべろ」

セレネは、ゆっくり目を開けた。

幸福なこと。自分が幸福に思う事とは、何だろうか。セレネは必死で考えた。

セレネが唯一自分の気持ちだと断言できることは、死を克服することだ。つまり、今製作しようとしている賢者の石を作り上げた瞬間、きっと自分は幸福に思うはずだ。悲願だった死を克服するのだから。

「いけるか？」

「はい」

赤い石を思い浮かべる。

赤い石が自分の手の中にある様子を、それを飲み干す様子を強く思い浮かべた。

その瞬間、自分の腕に奔っていた「線」が消えていく。そして――

『『エクスペクト・パトロナム――守護霊よ来たれ』』

杖先から、銀色の光が飛び出した。

今度は、ボンヤリとした霞ではない。煙が何か巨大な物を形造っていく。しかし、それには足が無く、手も無かった。滑らかな身体を持つそれは、蛇に見えた。しかし、蛇にしては、あまりに巨大すぎる。決して狭い部屋ではないにもかかわらず、部屋が急に狭く息苦しくなった気がする。巨大な蛇はとぐろを巻くと、セレネの方に頭を向けてくる。その蛇の目は、固く閉じられていた。

それを視た瞬間、セレネは気が付いた。

「大きな、蛇？」

バジリスクによく似た守護霊に手を伸ばそうとすると、すっと霞になってしまった。

しばらく呆然としていたが、スネイプが軽く拍手する音で我に返る。

「上出来だ、ゴイント。スリザリンに20点与えよう」

スネイプの表情には、感心するような色が浮かんでいた。

セレネは守護霊がいた場所を見つめながら、ポツリとつぶやく。

「今のが——私の守護霊ですか？」

「そうだな。守護霊には魔法使いの数だけ種類がある。」

さて、ゴースト。今日はこれで終わりだ。我輩は、これから用事がある。寮に帰りたまえ」

スネイプは、小瓶を握っていた。

どうやら、その小瓶を誰かに届けに行くらしい。セレネは丁寧に頭を下げると、その場を辞した。

図書館に向かいながら、セレネは守護霊がバジリスクの形をした理由を考えていた。それは、スリザリンの継承者だからバジリスクの姿になったのだろうか。それとも、まったく別の理由があるのだろうか。

どこからか甘い香りが漂ってくる。

厨房で、今日の夕食の準備が着実に進んでいるのだろう。

カボチャの甘い香りを吸い込んだセレネは、誰もいない廊下を歩きだすのだった。

31 話 真実と虚構／恐怖の敗北

2年近く待たせてしまい、申し訳ありません！

少しずつ更新を再開させていただきます。

秘密の部屋は、すっかり息を吹き返していた。

スリザリンの継承者が去り、そこに住まう怪物は息絶えた——ように錯覚したのは一部の人間だけ。

実際には、本物の継承者^{セレネ・ゴースト}が解放し、生き延びた怪物^{バジリスク}も無事に生息している。

そして、この日も——セレネ・ゴーストはバジリスクを連れ添い、秘密の部屋を訪れていた。

セレネは常時湿った陰気な場所を訪ねるのは嫌だったが、その嫌悪感に目を瞑ってまで訪れなければならなかった。

実は、この「秘密の部屋」の最奥部——そこには、古書で埋め尽くされた書齋が眠っている。それも、サラザール・スリザリンが正当な継承者のために残していた貴重な古書だ。残念なことに、そのうちの多く——特に、闇の魔術に関する書物は、不自然なまでに紛失しているが、幸か不幸か、セレネが必要としていた錬金術関係の書物は残されていた。

故に、こうして時折——時間を見つけては、部屋に閉じこもるような日々を送っている。

『それで、主様は帰省なさるのですか？』

スリザリンの怪物——バジリスクのアルケミーは、石の上に腰を掛ける少女に問いかけた。セレネの隣には、幾冊もの古書が積み重なっている。

『帰省する。』

ただ、煙突飛行ネットワーク——という方法を使っただけだ』

『煙突飛行？ あの汽車で帰るのではないのですか？』

『安全面を考慮して、らしいよ』

ぱたん、と書を閉じる。

守護霊の呪文を覚えた以上、吸魂鬼を払いのけることは理論上可能だ。

しかし、あくまで理論上。

吸魂鬼の前で実際に守護霊を出したわけではなく、ためすわけにもいかない。それに、セレネが作り出した守護霊が実態をとどめておく時間は短く、せいぜい5、6秒程度。

そんなもの、実際には役に立たないだろう。

さらにいえば、守護霊で払っている隙を狙ってシリウス・ブラックが行動を起こさないとは限らないのだ。だから、セレネは未だにホグズミード村へ行くことが許可されず、学校内から外に出る唯一の方法で帰省するという特例処置を受けることになったのだった。

『まったく、主様だけがホグズミード村へ行けないなんて。前の主ですら行くことが出来たのに。』

今度、こっそり秘密の抜け道を通って行きますか？　今でしたら、のんびりと土産物を購入することが出来ますよ？』

アルケミーは、静かに囁いた。だが、セレネは首を横に振る。

『遠慮しておく。それに、菓子類の土産なら貰ったから』

セレネは、ベッドの横に積み重なった菓子を思い返した。

ダフネやノット、そしてジャスティンから貰ったホグズミードの菓子だ。

ダフネは「マグルのお菓자에負けないくらい、美味しいはずだよ」と太鼓判を押してくれた。

それらは、どれもこれも奇妙な菓子だった。どんどん膨らんでく風船ガムや、舐めている間は浮き上がってしまう飴など、あっと驚く菓子ばかりだ。

この菓子と比較すれば、マグルの菓子は味気ない物にみえてしまうのも分かる気がした。

『でも……ジャスティンが買ってきてくれた飲み物は欲しいかもしれないな』

セレネはジャスティンがペットボトルに入れて来てくれた飲み物——「バタービール」を思い出し、つい頬が緩ませる。

バターの甘い香りが漂う炭酸飲料は、彼女の心をつかんだ。

一口飲んだ瞬間に、クッキーのような甘い味が広がっていく。未体験の味に、セレネは少しだけ感動してしまった。衝動に突き動かされるまま、ジャスティンに「お金は払いますから、次も買ってきてくれますか？」と頼んでしまったほどである。

……余談だが、この会話が親衛隊に聞かれており、部屋一杯のバタービールの樽が届くことになるとは、まだ誰も知らない。

「それにしても……不思議ね」

セレネは、ニコラス夫人がくれた石を触っていた。すべすべとした感覚を味わいながら、ぼんやりと呟く。

『どうかしましたか？』

『いや、吸魂鬼ってナズグールと似ているなって思ったんだ』

セレネは、「指輪物語」を思い出していた。

ナズグールとは、物語の鍵を握る「1つの指輪」を追い求める死霊のことだ。

奴らが叫べば、人の意志を砕いてしまう。黒いフードを被った彼らの吐く息は、生命力を弱めて気絶へと追い込む。

吸魂鬼は幸福を食べ物にするので少し異なるが、外見や生命力を弱まらせて気絶に追い込むという点は酷似している。

きっと、ナズグールと対面したならば、吸魂鬼と対峙した時のような恐怖を覚えるのだろう。

吸魂鬼もそうだが、ナズグールなんかとも出会いたくない。

『失礼ですが……ナズグールとは？』

『ナズグールは、さすがにトルーキンの創作か』

クトゥルフ神話も創作で、ニャルラトホテプなんて存在しない。

では、マグルの世界で語られる伝説の生物は架空の存在なのか？と思えば、フランケンシュタインの怪物は魔法史に存在するらしい。それに、シャルルマーニュ十二勇士のアストルフォが愛用していたヒップグリフは存在する。アストルフォ自身は魔法を使用した描写は存在しないにもかかわらずだ。

「……いや、アストルフォは魔女と関係していたっけ？

だけど、フランケンシュタインはメアリー・シェリーの創作だとばかり……」

どこまでが真実で、どこまでが虚構なのか。知識を深めれば深めるほど、その見極めがつくようになる。だが、調べれば調べるほど疑問が生まれる。

たとえば、魔法使いはマグルに存在がばれないように暮らしているにもかかわらず、何故アストルフォやフランケンシュタインのように、マグルへ魔法の存在が漏れているのか。

完璧に隠すのは無理だ、と断定してしまえば話は早い。

だが、フランケンシュタインや——錬金術師でいえば、パラケルススはマグル世界にも名を知られている。むしろ、断片的な記録をたどる限り、パラケルススは魔法で培った知識を広めようとしていた。

これは、いかなものなのか？

真か嘘か。真相は知識を深めればわかるものなのか、それとも永遠に闇のままなのか。

『……それで、主。考えているところすみませんが、シリウス・ブラックについて、いかがなさいましょう？』

『ああ、それも問題か』

セレネは憎々しげに言葉を返す。

ハロウィンの夜、シリウス・ブラックが侵入したのだ。

結論から言えば、教授陣は彼の尻尾を捕らえることができず、生徒たちは不安に駆られたまま授業が再開された。

いまもどこか、近くに潜んでいるかもしれない。

セレネは正直、ヴォルデモ^{サ イ コ}ートに心酔する殺人鬼^{シリウス・ブラック}なんて、心底どうでもよかった。

だが、スリザリン寮内では「スリザリンの継承者」と呼ばれてしまっている。ひよんなことから噂を聞きつけた殺人鬼が、「勝手に闇の帝王の称号を騙るな！」と襲ってくるかもしれない。

最悪、「眼」を使う——もしくは、アルケミーに戦闘を任せればよいのだが、それが公になった時の説明が大変だ。

シリウス・ブラックが身近にいると確定した以上、早急に始末しなければならぬ問題である。

なにしろ、過去の新聞記事によれば、杖の一振りで大通りにクレーターを作り上げた男だ。爆発系の魔法一発でピーター・ペティグリューという親友だった男を含めたマグル13人を殺したらしい。

あまり直接対決したくない相手である。

『……あの夜に校内に忍び込んだのは、黒い犬一匹なんですよ？』

『はい。大型の黒犬一匹です』

『……となると、奴は無許可の動物アニメーガスもどきか』

動物もどきとは、任意に動物へ変化することができる魔法だ。

有名どころでいえば、変身術のミネルバ・マクゴナガルがそれに該当する。しか

し、その習得には危険が伴い、魔法省の許可がなければ学ぶことすらできない魔法である。

『だからどうした、なんだけど。』

その黒犬が近くに來たら、撃退する。もしくは、対話を試みる。それしか対策はないか』

シリウス・ブラックが「賢者の石」や「錬金術」の知識が深い、なんて話はない。とんだ無駄な労力を使う羽目になりそうだ。セレネは嘆息する。

『もういい。今日は帰る』

石をポケットにしまい、適当に幾つかの本を手取る。

本日も大した進展はなし。賢者の石の完成に近づく記述は見当たらず、フラメルの研究ノート解説作業も進まなかった。この調子では、ホグワーツを卒業する年齢になっても、賢者の石の制作など不可能。

ホグワーツの図書室や秘密の部屋並みに本が所蔵されている場所は、少なくともイギリス魔法界になかった。

いっそのこと、将来はホグワーツで教鞭をとることを希望しようか？なんて考えながら、セレネはアルケミーの頭に飛び乗る。

『お送りしますね、主。今日はどこまで？』

『図書室の横。それでいいわ』

アルケミーの移動手段である大型パイプは、ホグワーツ内に張り巡らされている。いちいち女子トイレまで登って行くより、人目のつかない場所まで送ってもらった方が早いし、なにより怪しまれない。

『このあたりでいい。ありがとう』

セレネは適当な場所で降りると、パイプから出る。

豪雨が窓に激しく当たり、騒々しい音を出していた。外に出るのも億劫な嵐だが、図書室どころか城内の人気は少ない。

記憶が正しければ、今日は「グリフィンドールVSハッフルパフ」のクイディッチが行われているはずだ。今シーズン初の試合に、今朝は誰もが浮き足立っていた。

……クイディッチ。

セレネは筭が苦手だ。無論、それで飛べたらどれほど素敵なことなのだろう、と

夢想することはあったが、地に足がついていない感覚が恐ろしく思えるのも事実。何度か「スリザリンのチームに加わらないか？」と勧誘を受けているが、断り続けるのは、そのことが理由だったりする。

もちろん、誰にも真実を口外する気はないが。

「……ん？」

誰もいない廊下を曲がると、ひどく陰鬱な空気の2人組を見かけた。

ハーマイオニー・グレンジャーとロン・ウィーズリーだ。競技場から帰ったばかりなのか、雨と泥にまみれている。だが、そんな服装の乱れを気にしている様子はない。ただただ、黙って俯いていた。

……ハリーの姿がない。

グリフィンドールの花形である彼の姿が見当たらない。なんだか不吉な予感に駆られた。

しかし、話しかける雰囲気ではない。セレネはそっと元の角に戻ると、別の道から寮に戻ることにする。

ハリー・ポッターが吸魂鬼に襲われ、箒から落ちたことを知ったのは、数時間後のことだった。

※

ハリー・ポッターは奇跡的に生還した。

ダンブルドアの呪文のおかげか、20メートル落下したというのに眼鏡1つ割れていない。ただ、吸魂鬼に襲われたこと、そして、愛箒ニンバス2000が暴れ柳に衝突し、木端微塵になってしまったことなど、精神的な疲労は計り知れない。

故に、その週末は入院生活を送っていた。

ハリーは抵抗もせず、文句も言わなかった。

ニンバス2000の残骸を傍に置き、まるで親友の1人を失ったような辛い気持ちに耐えていた。

そんな彼の元には、次から次へと見舞客が訪れる。

ハーマイオニーとロンは夜以外、つきっきりでハリーのベッドのそばにいた。

しかし、誰がなにをしようと、なにを言おうと、ハリーはふさぎ込んだままだった。

みんなには、ハリーを悩ませていたことのせいぜい半分しか分かっていなかったのだ。

吸魂鬼に気絶まで追い込まれる恐ろしさや、死神犬グリムに憑りつかれているのではないかという疑念は話して解決するモノではないし、その恐怖を共感できるものでもない。ましてや、後者の件については誰にも話していなかった。

「じゃあね、ハリー」

「また来るからな、元氣出せよ！」

その夜、彼はハーマイオニーとロンを見送ると、そっと瞼を閉じた。しかし、眠れない。

否、睡眠に落ちることはできる。

だが、何度も何度も吸魂鬼に襲われた時の感覚が襲ってくる。

吸魂鬼がハリーに近づいたときに、ハリーは母親の最期の声を聞いたのだ。

ヴォルデモートから自分を護ろうとする母の声。そして、ヴォルデモートが母親を殺す時の笑い声を。

「やめてくれッ！」

じめつとした腐った手、恐怖に凍りついたような哀願の夢にうなされ、飛び起きた。

「はぁ……はぁ……また、夢か」

ハリーは冷や汗をかいていた。額に手を置き、呼吸を落ち着かせる。

瞼を閉じるたびに、そんな夢をみる。夢だと理解していてもなお、彼を苛むのだ。

「ずいぶんとうなされていましたね、ハリー・ポッター」

唐突に、静かな声から降ってくる。

弾かれたように視線を向ければ、そこには眼鏡の少女が腰をかけていた。古びた本に目を落し、退屈そうな表情を浮かべている。

それは、絶対に深夜、出歩いたりしないような優等生——そう、彼女の名前は

「セレネ……ゴースト？」

32 話 深夜の訪問者

「セレネ・ゴースト？ どうして、ここに？」

ハリー・ポッターの目がこれ以上ないくらい見開かれる。

当然の反応である。セレネは本を閉じた。自慢ではないが、ハーマイオニーと並び優等生の自分が消灯後に外出し、しかも、医務室に見舞いへ訪れるなどあり得る話ではない。

「お見舞いですよ、ハリー・ポッター。昼間は訪れることができませんから」

「昼間？」

「あなたのお友達は……スリザリンを必要以上に蔑視しているところがありますので」

セレネが疑問に答えると、ハリーは少し怒ったような顔になった。名前は出さなかったが、誰のことを言っているのか伝わったらしい。

「ロンは悪い人じゃないよ」

「ええ、悪い人ではありませんよ。ただ、スリザリン生全員を悪の魔法使いや差別主義者だと信じて疑わないだけで」

淡々と言えば、彼には思い当たる節があったのだろう。表情から怒りの色が少しずつ消えていくのが見えた。

グリフィンドール生の大半は、スリザリン生全員を悪として認識している。

当然である。スリザリン生は他寮と比較しても縦横のつながりが非常に堅固だ。比較的人付き合いの悪いセレネ自身でさえ、下級生と上級生の顔と名前、おおまかな性格は一致している。その分、どこの寮よりも閉鎖的だ。他寮との交流がある薬草学や魔法薬学の授業のときでさえ、スリザリン生はスリザリン生で固まる習性があった。

つまり、外部に情報が漏れにくい分、スリザリンに対する悪印象な固定観念が否定されることは少ない。ましては、固定観念を信じて疑わない生徒——主に、グリフィンドール生はスリザリンを嫌う一方である。

純血主義でも悪の魔法使いでもないスリザリン生からしたら、とんでもない風評被害であった。

もつとも、悪の魔法使い云々はともかく、純血主義者が多いことは否定しない。

「セレネは、その、『純血主義は間違ってる』って言わないの?」

「私が反対運動を起こしたところで、なにも変わりませんよ。

なにせ現在のスリザリンを率いるのは、マークス・プリントですから」

「プリント?」

ハリーの頭の上に疑問符が浮かぶのが見えた。

「クイディッチキャプテンの? マルフォイじゃなくて」

「ハリー、あなたも随分とマルフォイを敵対視していますね」

ロン・ウィーズリーほどではないが、彼のドラコ・マルフォイに対する嫌悪感尋常ではない。記憶をさかのぼれば、おそらく1年時のホグワーツ特急での出会いが起因しているのだろう。

セレネは彼らが菓子を取り合いで喧嘩する場面を思い出しながら、息を長く吐いた。

「はあ……マルフォイ家はプリント家と同格かそれ以上ですが、彼はまだ3年生

です。あなたは3年生が『グリフィンドールのリーダー』だと宣言したら、それに従うことができますか？」

「あー……えっと……」

ハリーは困惑したように考え込んだ。

この例は、ハリーに難しかったかもしれない。グリフィンドールは寮内の縦のつながりが、スリザリンほど強くないからだ。

「よく分からないけど、たぶん変な感じがする」

「そういうことです。だから、マルフォイは現時点でトップになることはありません」

セレネはどうすれば分かりやすく説明できるか、少し悩んでしまった。

「つまりですね、フrintは純血の一族です。有名どころでいいますと……そうですね、ホグワーツの校長を務めたフィニアス・ナイジェラス・ブラックの妻はフrint家出身です。」

くわえて、クイディッチの才能もあり、勉強もそこそこできるとなれば、寮のトップにたつのは必然かと」

スリザリンで頭角を現すのは簡単だ。

純血のなかでも特に有名な家系であること、もしくは、それに匹敵するカリスマ性を表せばいい。

フrintトは前者だ。

セレネたちが入学する前まで、彼がスリザリン唯一の純血一族だった。スリザリンにおいて、彼の権力は絶大だ。フrintト政権と呼ぶにふさわしい。そんな彼が大活躍するであろうクィディッチの試合を観戦に行かないのは、非スリザリンであり、いじめの対象だ。セレネがクィディッチの観戦に行かなくても無事でいられるのは、フrintト派に次ぐ第二派閥を率いているからであろう。

「そういえば……」

セレネは最近気になり始めた嫌なことを思い出してしまった。

フrintト派のなかから、ゴrintト派——つまり「セレネ・ゴrintト親衛隊」へ移籍する者が増え始めている。たとえば、エイドリアン・ピュシーはその筆頭だ。昨年の「スリザリンの継承者」騒ぎで、セレネが「ホグワーツ特別功労賞」を取ったことをキッカケに、親衛隊に入隊した。

そのせいで、今年のクイディッチチームから追い出されてしまっている。

「どうかしたの、セレネ？」

「いや、別になんでもありませんよ」

寮内の結束が固いということは、その結束から外れる者を敵対視するのは当然。だが、セレネは1年時に彼らを蹴散らした。その結果、フリント派は自分を危険視している。ゆえに、当初こそ自分たちの派閥に入れようとはしなかったが、セレネの力が大きくなるのを看過できなかったのだろう。

服従を迫るか、徹底的に叩きのめすか。

いまのところ、彼らは前者の方針を取っている。たとえば、幾度となくクイディッチチームに勧誘してくるのは、これが起因しているに違いない。

だが、いつそれが転じるか分からない。

いずれにしろ、このまま進めば、どこかで両派閥が衝突するのは必然だ。賢者の石の謎もまだ解明できていないというのに、頭が痛い。すべてノットに丸投げしてしまおうか、とさえ思ってしまう。

「それにしても、ブラックってことは、あのシリウス・ブラックと関係があるの？」
セレネが頭を悩ませていると、ハリーが話しかけてきた。セレネは慌てて思考を止め、昨年度叩き込んだ家系図を脳裏に浮かべた。

「え？……えっと、はい、そうですね。シリウス・ブラック直系の祖先だったはずです。たしか、シリウス・ブラックが最後の末裔だったかと」

「最後の末裔がアズカバンの囚人で、大量殺人犯か」

ハリーは遠い目をした。

「先祖は学校長を務めるほど優秀な人だったのに……」

「祖先がどうであれ、親戚がどうであれ、それぞれ違いますから」

セレネは、はつきりと否定した。血のつながりが人柄に通じると仮定してしまうと、自分はヴォルデモートと同類になってしまう。大量殺人犯の純血主義者で寄生しないと生きていけないような奴とつながりがある。そう考えるだけで、悪寒が身体を奔った。

「血のつながりで人柄を判断してはならない、ということの一つアドバイスです。ブラック校長は子沢山で、その大半が魔法族と婚姻を結んでいます。ブラック家

やマルフォイ家はもちろん、ポッター家も親戚です。つまり、あなたとマルフォイは親戚同士ということに——」

「マルフォイと僕が親戚だって!?!」

ハリーは病室全体に響き渡る声で叫んだ。セレネの耳がつーんと痛くなる。

これでは医務室の鬼、マダム・ポンフリーがなにごとかと起き出して来てしまう。急いで「声が大きい」とジェスチャーをすれば、ハリーは慌てて「ごめん」と謝ってくれた。幸いなことに、彼女は眠ったままだったようだ。

「でも、それ本当? 僕、信じられない」

「えつとですね……マルフォイの母親はブラック家の娘ですし、たしか……シリウス・ブラックの大叔母がポッター家に嫁いでいましたので、親戚ということになるかと」

「それ、かぎりなく遠い親戚だね」

ハリーは安心したように息を吐いた。

「……でも、たしかにその通りだ。」

僕とマルフォイは全然違うし……それに、セレネもヴォルデモートもサラザー

ル・スリザリンの末裔だけど、ぜんぜん違うよ」

「分かったならいいのです」

セレネも少しだけ安心した。医務室に來た当初、彼の顔色はかなり悪かった。それも、いまにも自死を選んでしまうのではないか、と思うほどに。

それが若干であるが和らいできている。

「まあ、それだけ叫ぶことができるのであれば、もう安心です」

セレネは椅子から立ち上がると、帰り支度を始めた。

彼は義父の教え子であり、非常に使える駒だ。事実、いままで二度も自分の都合に利用させてもらっている。敗北に落ち込んだまま再起不能になり、駄目になってしまうのはかなり惜しい。

だが、この様子なら大丈夫だ。彼なら、なんとかなるだろう。

「あのさ、セレネ」

ハリーに背を向けようとしたとき、後ろから声をかけられた。どこか自分のしようとしていることに戸惑うような顔をしている。どうしたのだろうか、と問いかける前に彼は口を開いた。

「セレネはさ、こんなこと聞くのは悪いけど、その……吸魂鬼に襲われたとき、意識を失ったことがあるよね？」

「はい、ありますけど」

「そのとき、なにか見る？ 声が聞こえる、とか」

ハリーの言葉を聞いた途端、セレネの脳裏に赤い映像が急速に浮かび上がってきた。

どこを見渡しても、赤、赤、赤。そのなかを走る小さな自分。

そして、その行く手に横たわっているのは――

「……秘密、ということにしておきます」

セレネは目を伏せると、静かに応えた。目の前で彼が落ち込む気配がする。

おそらく、彼は辛さを共有したかっただけなのだ。よくよく考えてみれば分かることである。文字通り、気を失うレベルまで吸魂鬼の影響を受けるのは、この学校には2人しかいない。しかも、同級生で一緒にヴォルデモートと戦った経験が2回もあるとなれば、仲間意識が芽生えるのは必然である。

セレネに利用されていた、という自覚がなければ。

気がつけば、セレネは口を開いていた。

「……あなたは幸運ですよ」

セレネが言葉をかけると、ハリーの纏う空気にかすかな困惑が生じた。

「幸運？　僕が？」

「筈から落ちたら、普通死にます。」

ヴォルデモートと対峙したら、普通は死にます。1年生や2年生ならなおさらです」

「それは……みんなのおかげだし、僕は運が良かっただけで……」

「そう、運が良かったのです」

セレネ自身、いままでの自分は運が良かった、と感じている。

考えに考え抜いたとはいえ、クイレルを出し抜いたときも、ヴォルデモートからバジリスクを奪い返したときも、ニコラス・フラメル夫妻から賢者の石の研究成果を手に入れたことも、すべてが綱渡りであった。

ダンブルドアという障害もあったが、それに対する策も講じ、幸運の上に成り立ったことである。

「いまのあなたがすることは、箒が壊れたことを嘆き、吸魂鬼に恐怖し閉じこもることではありません。

まずは命が助かったことを喜び、次になにをするべきか対策を考え、行動するべきです」

しかし、ハリーはまだ落ち込んでいる。

「でも、僕……もうじき死ぬかもしれないんだ。……僕、死神犬を見るし」

「たしかに、死神犬は死の先触れと言われていますが、元をたどれば墓の守り人です。

だから、見ただけで死ぬなんて、ありえません」

セレネは首を横に振った。

死神犬といえば、大きな黒犬……おそらく、アルケミーが発見した犬のことだ。あれはシリウス・ブラックであり、死神犬ではない。だが、確証がつかめていない現状、それを口にするわけにはいかなかった。

「でも、どうして『ありえない』と言い切れるの？ 違うかもしれないじゃないか」
「ハリー、それは初歩的なことです。」

魔法生物はいます。ユニコーンとかヒップグリフとか……。

しかしですね、見ただけで死ぬ、なんて魔法生物はいません。それが本当なら、その魔法生物はどうやって繁殖をするのですか？」

「あっ……」

セレネは本をハリーに押し付けた。

「入院生活は退屈でしょうから、それで時間を潰したらどうでしょうか？」

「……『バスカーヴィル家の犬』……シャーロック・ホームズって、図書室にあったの!？」

「残念ですが、トテナム・コート通りで買った本です」

セレネは苦笑いを浮かべた。そもそも、ホームズは創作物だ。無論、ホームズの生みの親コナン・ドイルが魔法使いだったこともありえない。

正真正銘、マグルの本屋で購入した一冊である。

「不可思議な現象にも、大抵はトリックがあります。

トリックさえ判明すれば、対策を立てることができるのです」

お気に入りの一冊だったが、暗唱できるほど読んでしまっている。

いまは自分よりも、死神犬に悩む彼にこそふさわしい。

これを機に、自分の見ている死神犬に疑問を持ち、恐怖を払拭してくれたら幸いだ。シリウス・ブラックだと看破してくれれば、なお良しである。

「ありがとう、セレネ。大事に読むよ」

「それでは、ハリー・ポッター。私はこれで」

セレネはそれだけ言々と、医務室の出口へ足を進ませた。

出口の向こうには、見張り役のアルケミーが主人の帰りをいまかいまかと待っている。なるべく早く帰って、今日はもう寝ることにしよう。

「あの、セレネ。その……またなにかあったら、相談してもいいかな？」

不安そうな声を背中受ける。

セレネは答える代わりに、背を向けたまま軽く手を振った。

静かな夜の出来事だった。

数日後、ハリーは退院した。

マルフォイはグリフィンドール敗北に喜び、食事中にもかかわらず、幾度も吸魂鬼の真似をしている。セレネが軽く視線を向けると、彼はいったい何を勘違いしたのか、得意げに語り始めた。

「本当に爽快だった、まさか吸魂鬼に襲われて箒に乗りながら気絶するなんて。あれだと、ポッターはクイディッチの試合に出られない。グリフィンドールは今年も優勝できずに終わるね。」

セレネも観に来ればよかったのに」

「ええ、行けばよかったですね。ハリー・ポッターと同様、私も吸魂鬼に襲われていたかもしれませんから」

「あ……そうだったな、セレネは吸魂鬼が苦手だったか」

マルフォイの顔に、罰の悪そうな色が広がっていく。

セレネはパンを口に放り込み、不快な気持ちと一緒に飲み込んだ。

「不快な思いをさせたお詫びといつてはなんだが、僕の家のカリスマスパーティーに参加しないか？ マグルで育った君にはもったいないくらいの豪華さで——」

マルフォイが「いかに我が家のクリスマスは凄いか」と自慢話を続けている間、セレネは少し考え込む。顎に軽く指を添え、視線を一瞬だけ、マークス・フリントの方に向けた。彼はおしゃべりに夢中でこちらに気を配っているようには見えない。

そうすると、導かれる答えはおのずと限られてくる。

「——どうだい、セレネ？ 来る気になったかい？」

「えー、ドラコ！ セレネばかり、ずるいわよ！ 私は誘わないの？」

パーキンソンがむっと顔を膨らませ、マルフォイに身体を密着させる。

「もちろん、当たり前だよ。君も誘うさ。それで、セレネはどうだい？ 父上の

許しもとってある」

「お父様の許しも、ですか」

「ああ、父上が君と会うのを楽しみにしているんだ」

マルフォイは得意げな顔で言った。もはや、セレネが来ることが決定しているよ
うな口ぶりである。

「まあ、君の家はマグルだから、迎えをよこすよ。帰りもしっかり送るし、なにも
問題ない」

「そうですね……魅力的ですが、先約がありますので」

「先約？」

「ええ、そちらと日程の都合がつけば、よろこんで参加させていただきます」

マルフォイの表情が固まった。

「別に構わないが、いったい誰とクリスマスパーティーに行く約束をしたんだ？
ノットやグリーン格拉斯かな？ それだったら、二人も一緒に——」

「違います」

「違う？ ……もしかして、ポッターか？ それとも、あの汚らしいグレン
ジャー？」

マルフォイの固まっていた表情が、奇妙に歪み始めた。

まさに、純血主義らしい反応である。セレネにとってマルフォイは、たんなる寮

が一緒の同期生程度の認識でしかなく、好きでも嫌いでもどちらでもなかったが、明らかに差別主義な一面には嫌悪感を覚える。

「まさか」

セレネは首を横に振ると、静かに立ち上がった。

別に答える義理はない。だが――

「じゃあ、誰と行くんだ？」

「そんなに知りたいのでしたら、教えましょうか」

一つ面白いことを思いついてしまった。我ながらに素晴らしい策である。セレネは若干口角を上げると、わざと少し嬉しそうな口調で教えた。

「私、ジャスティン・フィンチ・フレッチリーのクリスマスパーティーに招待されているんです」

33 話 かつてない危機

その日の午後のことだ。

「ゴーント、こっちに来い」

談話室に入った途端、怒りを抑えたような声が呼び止めてきた。

セオドル・ノットだ。ノットは腕を組みながら、壁に寄りかかっていた。相当いらいらしているのか、指でリズムを刻むように腕を叩いている。

「どうかしましたか？」

「どうかしましたか、じゃない！ お前な、穢れた血と付き合うのはやめろ」

開口一番、世事は抜きで本題を切り込んだ。

「自分の立場、分かっているのか？」

「ええ、もちろん」

セレネはそれとなく周りに視線を奔らせ、自分たちの他に人がいないことを確認する。

「スリザリンの継承者」

セレネはそう言いながら、手近なソファァーに腰を下ろした。

自分が「本物の継承者」であることは、スリザリンでは周知の事実だ。否。半信半疑、という言葉の方がふさわしいのかもしれないが、直接尋ねてくる猛者はおらず、親衛隊に入るような熱狂的信奉者は「セレネ＝継承者」だと本気で信じている。

「それが問題でも？」

「大ありだ、この馬鹿！」

セレネが鞆から教科書を取り出そうとすると、ノットはそれを手で制した。

「自分の立場が分かっているながら、どうして、ハッフルパフの——しかも、よりもよって、穢れた血とクリスマスパーティーに行く約束を口にした？」

「もちろん誘われたからですよ、他に予定が入っていませんでしたから」

数日前、ジャスティンに図書室で誘われたことを思い出しながら答えた。

「イギリス上流階級のクリスマスパーティーなんて、この機会を逃したら一生行けそうにありませんでしたし」

「だからってな、スリザリンの末裔が穢れた血との約束を優先するなんて……」

ノットの額に筋が浮かび上がった。だが、まだ怒りを抑えている。拳を硬く握り

しめ、深呼吸を数回すると、低い声で忠告して来た。

「いまは俺が情報統制をしているから、親衛隊が離れていかないだけだ。『穢れた血』とクリスマスを過ごすほど仲が良いなんて、嘘八百だと。」

だがな、それは時間の問題だ。このままだと、早晚に崩れるぞ」

「随分と親衛隊を気にしているのですね」

「当たり前だ。オレが隊長だからな」

「意外でした。私、てっきり、いやいや隊長を務めていたのかと」

「嫌に決まってるだろ！」

ついに、ノットの怒りが爆発した。

勢いよくテーブルを叩いた。あまりに強く叩いたせいで、ガラスのテーブルに盛大な亀裂が入る。だが、そのことに彼は気づいていない。彼の目は忌々しそうに、セレネの涼し気な顔を睨み付けていた。

「父上の命令だ。父上の命令がなければ、お前なんかの下にはついていない！
だがな！」

ノットは、音を立てながらソファに座った。

「お前が失墜すれば、俺まで被害を受ける。父上の名を出せばなんとかなるかもしれないが、残りの四年間、いや、卒業後も肩身の狭い思いをする羽目になるんだ。そんなの耐えられるか！」

「……私も同感ですよ」

セレネは軽く腕を組んだ。

「親衛隊は不本意ですが、私、こう見えて負けず嫌いなんです」

最初に襲いかかって来たスリザリン生を倒したあの夜から、目立ちたくない口では言いつつも、優等生の自分に汚点をつけることは嫌で、他の誰かに負けるのは更に嫌、失墜など御免被る。セレネはローブから杖をとり出した。杖を一目見た瞬間、ノットの身体が強張るのがハッキリ分かった。

「そう簡単に欠点を出して、敵を喜ばせると思えますか？」

「……まさか、わざとか？」

「当たり前です」

とんとんと、杖で掌を叩いた。

「これはすべて策ですよ」

それに続けて、小さな声で作戦を口にした。話が進むにつれて、ノットは目はだんだん丸くなっていく。しまいには、口まで阿呆みたいに開けていた。

「おい……まさか、それ、本気で言っているのか？」

「この私が、嘘を言うと思いますか？」

セレネはほくそ笑むと、杖先を亀裂に向ける。

『レパロ―直れ』

杖先がなぞったところから亀裂は塞がり、瞬く間に傷はもちろん、曇り一つないガラスのテーブルに戻った。

「もつとも、あなたに強制はできません。賛同いただけなければ、降りてもかまいませんよ」

セレネは一応、逃げ道を用意する。

ノットはしばらく考え込むようにうつむいていたが、意を決したのだろう。大きく肩を落とすと、長い息を吐いた。

「……分かった。こうなれば一蓮托生だ。その策、乗ってやる」

「さすが、セオドール。物分かりがいいですね」

セレネは口の端を上げた。

だんだんと寮の入り口が騒がしくなり始める。他の生徒たちも戻ってきたのだらう。ちょうど区切りも良い。セレネは立ち上がると、ノットの肩を軽く叩いた。

「あとはお願ひします」

「……ったく、オレに丸投げかよ」

「丸投げとはとんでもない。あなたを信頼しているからです」

「……最初は『蛇にしてやる』って脅してきたくせに」

「そうでしたっけ？ 私、脅しとは無縁の優等生ですよ」

わざとはぐらかすと、ノットは苦虫を潰したような表情を浮かべた。

「相変わらず、とんでもない優等生だな」

セレネはにこやかな笑みを浮かべると、そのまま女子寮に向かった。

方針は決まった。行く先も定まっている。あとは、前に進むだけだ。空のベッドに横たわり、そのまま窓に視線を向ける。ここからは、湖の底が見える。心を落ち着かせるような、静かで深い緑色の世界。

「クリスマスが待ち遠しい」

セレネは笑みを浮かべ続けていた。

クリスマスに起きるであろう出来事を想像するだけで、胸が弾み、本を読む気もうせてしまう。これほどまでに、12月を待ち焦がれたことがあっただろうか。

水中人が大イカと戯れながら、湖を悠々自適に泳ぐ——その姿を、セレネはしばらく眺めていた。

※

さて、待ち望んだクリスマス。

セレネは服を整え、こなすことを頭に叩き込み、パーティーに乗り込んだ。

出発前、セレネの世界最高峰——エベレストまでに昂った気分は、いまや最底辺まで落ちていた。気分はマリアナ海溝を突破し、なかば諦観の域に達している。

到着して早々、セレネを待ち受けていたのは予想していなかった強大な敵であった。

それはスリザリン内の派閥争いなどとは比べ物にならないくらい厄介で、ヴォルデモートより恐ろしく、ダンブルドアよりも逆らってはいけない雰囲気醸し出している。

「最悪、こんなことになるなんて」

セレネは廊下を足早に進みながら、悪態を吐いた。

派閥争いなど、頭痛の種でしかない。

ヴォルデモートは杖や「眼」で立ち向かえばいい。

ダンブルドアも慎重にことを運べば、いずれ隙をつくことができる。

ところが、セレネの目の前に立ち塞がる「今回の敵」は、頭痛そのものであり、物理的手段で攻撃することは不可能であり、精神的隙をつくことも短時間では困難を極める。

ある意味、今まで立ち向かったことのない種類の相手だ。

だが、まだ心は折れていない。

「さて、どうすればいいの」

セレネは迫りくる強敵から、いかにして、この場から逃げ出すかだけを考えていた。

ヒールで歩きにくい足を懸命に動かしながら、思考に鞭を討つ。

しかし、いくら考えても逃げ出す術は思いつかない。

ここは大通りに挟まれ、四方は高い塀と生垣で囲まれた要塞のような屋敷だ。少なくとも、一介の子供に過ぎないセレネ独力での脱出は困難を極めていた。

「誰かに助けを求めるのが一番なんだろうけど……」

セレネは、まず親衛隊を思い浮かべた。「こういうときこそ、役に立て！」と思うが、生憎、彼らメンバーは誰一人としてパーティーに呼ばれていない。バジリスクのアルケミーは騒動の元になるので、ホグワーツで留守番中だ。

唯一、助け舟を出してくれそうな義父は、仕事でここには来れない。

杖は鞆に入っているの、最悪の事態が来たら抜くことになるだろう。だが、ここは学校外。17歳以下の子供は学校外で魔法を使うことを禁じられている。

「この状況、生命の危険……に匹敵すると言い張れば、魔法省も許してくれるか？

いや、だけど——」

「見つけたわ、あそこよ！」

廊下の角を曲がった瞬間、敵と鉢合わせてしまった。

セレネの身体は、バジリスクに睨まれたかのように固まってしまふ。

「さあ、セレネちゃん。観念しなさい」

敵——三人の婦人が廊下を塞いでいた。

すぐに来た道を引き返したいが、苦手なヒールに対し、相手は踵の低い靴だ。ホグワーツで鍛えた脚力があるので負けはしないだろうが、相手はこの場を熟知している。持久戦で負けるのは目に見えていた。

よって、ここは穏便に断り、敵の戦意を喪失させ、徹底させるのが良策だろう。

セレネは慎重に言葉を選びながら、彼女たちに話かけた。

「私は……観念もなにも、ただ申し訳なく思いまして……」

「申し訳ないなんて！ そんなことないわよ。」

さあ、おとなしく綺麗になりましょう！」

婦人はにこやかに宣言すると、いかにも高価な化粧道具を掲げた。

「そうそう、女の子はおめかししなくちゃ！」

「せっかくのクリスマスだもの！」

彼女の後ろの婦人は、鮮やかなドレスを、その隣にいる婦人は煌びやかなアクセサリーを。

セレネは自分の顔が引きつるのが分かった。ゆっくりと後ずさりしながら、彼女たちとの距離を取る。

おしゃれをする？ 冗談ではない。

「私はこのままで十分ですから」

優等生らしく謙虚に振る舞う……というのは表向きの理由に過ぎない。

本当は他人が勝手に自分の身体に触れ、玩具のようにあれこれ衣装を試されるのが、たまらなく嫌だからだ。己の人権も尊厳をも侵害され、まるで物のように扱われる——なんたる恥辱だろうか。セレネの身体はぞくりと震えた。

「そもそも、ジャスティンの誘いとはいえ、私は一般庶民に過ぎませんから」

「そんなことを言わずに、さあさあ！」

「いえ、だから、私は——」

「遠慮しないで、セレネさん」

しかし、悲しきかな。

後ろから、がっしりと腕をつかまれてしまう。

ぎぎぎ、と音を立てながら首を後ろに回せば、そこにいたのはセレネ以上に腕が細く、身体も細い婦人だった。眩しいまでの無邪気な笑顔を浮かべ、セレネの脱走を拒む。

「じ、ジャスティンのお母さま？」

「せっかくのパーティーですもの。ちょっとくらい綺麗になったところで、文句は言われないわ。」

それにね——」

彼女の言葉に、悪意の欠片もない。

だが、セレネからしてみると悪魔だった。油断すれば、小さく悲鳴を上げそうになる。

「私、女の子を着飾らせるのが夢だったの」

あれよあれよという間に近くの衣裳部屋に放り込まれ、苦痛と恥辱の時間が始ま

る。

連れ込まれたら最後、抗うこともできず、うつとうしい化粧、めまぐるしく変わる衣装、触るのも恐れ多いようなアクセサリーをつけては外される。

ああ、なんでパーティーの数時間前から会う約束をしてしまったのだろうか。せめて、パーティーが始まる数分前ならこんなことにはならなかったはずである。セレネが己の未熟さを悔いている間にも、婦人たちの楽しい気な会話と服選びが途切れることはない。孤立無援とはまさにこのこと。脱出不可能、救援皆無、どこまでも孤独で絶望的な状況である。

「さあ、セレネちゃん。あなたはどんなドレスが似合うのかしら」

それから二時間弱——セレネ・ゴントはジャスティン・フィンチ・フレッチリ——の母親の着せ替え人形になった。

34話 人形の夜

「セレネ、すっごくいい！」

長い長い着せ替え人形の時間も終わり、ようやく再会した友は頬を赤らめていた。
「とっても似合っていますよ！」

いえ、セレネが到着して早々、お母さまが専属のスタイリストと連絡をとっていましたが……まさか、ここまで凄くなるとは思いませんでした！」

ジャスティンは最初からセレネを助ける気などなかったらしい。

セレネは初めて彼に殺意を抱いた。

「……あなたのお母さまが二時間以上、あれを着せたりこれを着せたりした挙句に選んだ衣装ですからね。似合っていないわけないと思いますよ」

セレネは皮肉をこめて、やや乱雑に言った。

ジャスティンはセレネのあからさまに不機嫌な様子に気づくと、少し罰の悪そうな表情を浮かべた。

「あー……ごめんなさい。お母さまは女の子を着飾るのが夢だったみたいで……
ほら、僕は男兄弟ですから」

そのことは既に知っている。

着せ替えられながら、何度となく同じ話を聞かされた。

服など機能性重視で、みっともない程度でなければ構わない。

無論、イギリス上流階級のパーティーということで、義父に「セレネのお母さんが着ていたパーティードレス」を出してもらい、ダフネから借りた本で軽く化粧をしたのだが、それはジャスティンの母親からしてみれば「まったく似合わない失敗作」だったらしい。

「……まあ、眼鏡は許して貰えましたので、それだけは良かったです」

セレネはため息をつくとき、ぎりぎり杖が入ったパーティーバッグを抱きしめた。眼鏡はとられそうになったが「視力はいいのですが、特殊な色覚異常があります」と訴えれば、あっさり許してくれた。どうやら、魔法族特有の目に関する異常だと認識してくれたらしい。

それを想えば、少しだけ掻き乱された気持ちさが落ち着いた。この眼鏡を外した瞬

間に広がる世界に比べれば、着せ替え人形になる程度、容易な課題である。

「本当にごめんなさい、母が迷惑をかけて」

「……迷惑ではありませんよ。たぶん、これほど素晴らしいドレスを着たのは生まれて初めてです」

セレネはドレスの裾をつまんだ。

迷惑でないのは嘘だが、ドレスの感想に関していえば本当だ。

セレネは、窓ガラスに映し出された自分の姿を一瞥した。

腰を結ぶ大きめなりボンとチュールが特徴的なスカートは可愛らしく、だがオフショルダーなので肩元が少し恥ずかしい。短めな黒髪も編み込まれ、優雅に結わかれていた。軽めに施された化粧は、13歳の少女を大人っぽく見せている。

まさに、別人だ。

化粧や衣装を馬鹿にしていたが、前言を撤回した方が良いのかもしれない。化粧や衣装一つ違うだけで、与える印象は大幅に変わってくる、と。

ふと——シンデレラもこんな気分だったのかと感じる。灰に汚れた娘も、魔法で瞬く間に変わっていく自分に驚きを隠せなかったに違いない。

もつとも、セレネをエスコートするのは白馬に乗った王子様などではない。たんなるホグワーツの同級生だ。セレネはジャスティンにぎこちない笑みを向けた。

「しっかりクリーニングに出して、返しますね」

「なにを言っているの、セレネさん」

その言葉を聞いた瞬間、身体が硬直するのを感じた。

ジャスティンの母親である。いつのまにか、セレネの後ろで優雅に微笑んでいたのだ。

「その服もアクセサリーも、すべて差し上げますわ」

「で、ですが……」

「その代わり、また遊びに来てくださいね。ジャスティンも他の息子たちも、着飾り慣れていない女の子を連れてくることがないのよ」

「しかし……」

「そもそも、学校の友だちを連れてくるのが初めてなのよ」

ジャスティンの母親は喜色満面で話し始めた。

「もちろん、どんな娘さんだろうと不安でしたわ。なにしろ、ほら、学校の友だちといえ、大きな言葉では言えないけど、魔法使いでしょ？　もちろん、息子の友だちは魔法の世界出身の方ばかりで、話を聞く限り、どの方も上品だったのだけど、価値観がずれているようで……とにかく心配していたのよ。私はね、ジャスティンを政治家か学者の道を志すよう教えていたのだから。イートン校に合格するために、生後間もないころから家庭教師を雇って……でも、『この子は、魔法の世界で生きていくのだから……』と諦めていたわ。」

だからね、あなたのような魔法の世界出身ではない娘さんを連れてくるなんて、もっと思わなかった！」

その勢いはまさに、怒涛。

口を挟むすきなど与えない。自分の話したいことだけを一方的に語る。否、語るなどという表現では生ぬるい。語り尽す、だ。

「どんな娘が来るか、気が気でなかったわ。家督は継がないにしても、フレッチリー家の名に恥じぬ娘でなければ許さないって思っていたの……ああ、気にしないで、セレネさん。私、セレネさんを気に入りましたよ。きつと……あら！　あ

らっ！ あそこにいるのはハリウッド俳優じゃなくって!? 大変、すぐに挨拶に行かなくては！

それでは、セレネさん、ごゆっくり。ジャスティンは、粗相がないように」
それだけ言うと、ドレスを翻し風のように走り去っていった。

まさに、嵐のような女性だ。

はたっと我に返れば、セレネのことなど忘れたかのように、俳優たちに黄色い歓声を上げていた。

「凄いお母さまですね……ジャスティン、なに笑っているのですか？」
ジャスティンはくすくす笑っていた。

「失礼。セレネが怖がっているところ、初めて見ました」

「怖がってないません。少し苦手だけです」

セレネは唇を少し尖らせた。

普段は優等生の仮面をかぶっているが、あればかりは御免被る。

優等生らしく逆らうことなく、大人しく彼女に従えばよかったのかもしれないが、ただの人形に成り果てるのは生理的な嫌悪感がある。

それから、あのように嵐のような女性は、セレネの人生の中で初めての出会いだった。ゆえに対処方法が分からず、流されるままに屈辱の数時間を過ごすことになってしまったのである。

まだ、ヴォルデモートの方が「立ち向かおう」という意思が芽生える。できれば二度と出会いたくない人種だった。

「たしかに、お母さまはおしゃべりですから」

「度が超えています」

「それは、セレネがしゃべらないだけです。スーザンやハンナも興奮すると、あれくらいしゃべります。だから、僕とアーニーはたじたじで」

話しながら歩いていると、次第に笑い声や音楽の音が大きくなってきた。

部屋に入ると、息をのむくらい開けた空間が広がっていた。気品のあるシャンデリアなどの照明器具が白い壁を黄金に輝かせている。天井からは真紅と深緑の垂れ幕が交互にかかり、テーブルにはテレビや雑誌で眺めたことのある御馳走が並んでいた。その周囲を煌びやかな男女が細いグラスを片手に談笑している。

「素敵ですね」

ウェイターが持ってきたグラスを手に取り、奥へと進んでいく。

パーティー会場の中央には、首が痛くなるほど高いモミの木が飾られていた。

クリスマスツリーは赤や金のリボンと銀の鈴で飾られ、感嘆の息を零してしま
う。あまりにも美しいので、セレネはつい

「まるで、魔法みたい」

と呟いてしまった。

この世界に魔法はある。だが、あれは確かにマグルの作ったクリスマスツリー
だ。魔法使い特性のツリーではない。だが、魔法に負けず劣らず素晴らしい。

「魔法でないってことは理解していますけど、素晴らしいですね」

「いいえ、あれは魔法ですとも」

一人の老婆が近づいてきた。

だが、彼女を老婆、と呼ぶのは申し訳ないかもしれない。

背筋は定規でも入ったかのようにピンと伸び、白髪は上品に整えられている。皺
だらけの顔も気品があり、誇り高さを感じられた。

「私の曾祖父が、魔法使いから譲り受けたクリスマスツリーよ。リボン一本一本に邪気払いの魔法がかけられているそうなの。本当かどうか分からないけど」

「おばあ様！」

ジャスティンの背中も老婆のようにびんとまっすぐになった。

「ひさしぶりね、ジャスティン。寮制の学校に入ったとは聞いていたけど、まさか外国の学校だとは思わなかったわ。そちらは、学校のお友だち？」

「……はい、セレネ・ゴントと申します」

セレネは丁寧にお辞儀をした。

ホグワーツは外国、ではなかったが、ジャスティンの反応を見る限り、祖母には彼が魔法使いである、ということを知らせていないらしい。

「……ゴント？」

ジャスティンの祖母の顔が一瞬歪んだ。セレネは首を傾げる。

「あの……なにか？」

「いえ、ごめんなさいね。ゴントという名に聞き覚えがありました」

「えっ!？」

セレネは驚きのあまり、持っていたグラスを落としそうになった。

「どうしたのですか、セレネ？」

ジャスティンが訝しそうにこちらを見てくる。

セレネは急いで驚きを隠した。

「失礼しました。ゴーストという苗字は珍しいな、と感じまして。もしかしたら、親戚かもしれないので教えていただけると嬉しいのですが」

セレネは慎重に言葉を選びながら尋ねた。

老婆はじっとセレネの目を見つめる。その眼差しはセレネの心を見透かそうとしているようだったが、ダンブルドアほどの眼力はない。セレネが真剣に見つめ返すと、老婆はややあってから口を開いた。

「六十年以上前の話よ」

静かに前置きすると、老婆はゆっくり話し始めた。

「リトル・ハングルトンにね、大富豪の一家がいたの。そこの息子がとてもハンサムで、若い娘は誰もが彼に熱を上げたものよ」

「おばあ様も含めて、ですか？」

「ええそうよ。今思えば性格は少し……いいえ、かなり傲慢で礼儀がなくなってなくて、本当に良い人とはいえなかったけど、そこらの映画俳優よりずっとかっこよかったの。」

そんな彼がある日突然、駆け落ちしたのよ。誰もが驚いたわ。美男子だったことは確かだったし、皆熱を上げていたのは間違いないのだけれど、彼と駆け落ちしてまで一緒になりたいと思う人はいなかったし、しかも、相手は、あのメローピー・ゴントだったのですもの。

その知らせを聞いた瞬間、驚きのあまり紅茶のカップを落としてしまったわ
「メローピー・ゴント」

セレネは名前を反芻した。

「生粋の貴族——魔法族家系図」に「ゴント家最後の末裔」として記されていた名前だ。

「とても美しい人だったのですね」

「いいえ、そんなことはなかったわ！」

ジャスティンが尋ねると、老婆は少し怒ったような口調で言った。

「青白くて、髪に艶がなくて……おまけに、家は村はずれの草むらの中。扉の入り口には蛇の死骸が打ち付けられているのよ。父親は犯罪者で監獄に入れられてるらしくて……。もちろん、結婚生活は長く続かなかったわ。半年後、彼女を連れず、たった一人で村に現れたの。『騙された』と言いながら。」

……まさか、あなたは彼女の親戚、かしら？」

「いいえ、知りません」

セレネは断言した。

十中八九、メローピー・ゴントはヴォルデモートの母親であり、富豪の息子が父親だろう。

大方、メローピーが魔法で富豪の心を操ったが、なにかしらの理由で魔法が解けて、富豪は逃げていったといったところだろうか。その後、メローピーはヴォルデモートを産んだ。

「私の家はロンドンですし、リトル・ハングルトンという村の名前は初めて聞きました」

「そうよね、あなたはメローピーともトムとも似ていないもの。」

不快な思いをさせて、ごめんなさいね」

「いいえ、そのようなことはありません。お話しいただき、ありがとうございます」
セレネがにこやかに答えると、老婆はほっと安心したように息を吐いた。

リトル・ハングルトン。

セレネは村の名前を心の片隅に止めた。

「ミセス！ ああ、ここにいらしたのですか！」

燕尾服の男性が声を上げて近づいてきた。

その声を合図に、初老の男性が老婆の周りに集まってくる。そのなかの数名には、マグルの新聞で見覚えがあった。閣僚や有名企業の社長だ。きつと、セレネが知らないだけで、他の男たちも似たような立場にちがいない。

ジャスティンは去りたそうにしていたが、セレネはあえて彼女の隣に立っていた。

「まあまあ、お久しぶりですわ。大臣になられたんですって？」

「おかげさまでなんとかやっていますわい」

「ミセスも御元氣そうで何より。……おや、こちらの御二方は？」

話を振られ、ジャスティンの身体がびくりと一瞬跳ねたのを感じた。

「私の孫とその友人ですの」

「はい、ジャスティン・フィンチ・フレッチリーと申します」

「セレネ・ゴーストです。よろしくお願いします」

ジャスティンは背筋を伸ばしながらも、どこかそわそわしていた。

ちらちらこちらに視線を送ってくる。まるで「はやく別の場所に行こう」と促しているようだったが、セレネはそれに気づかないふりをした。

「これはこれは、聡明そうな……ベックマンです。お見知りおきを」

初老の男が手を差し伸べてきた。ジャスティンが緊張気味にベックマンの手を握り返すのを待ってから、セレネもそっと手を差し出す。

それからしばらくは、初老の男女と手を交わす時間が続いた。ときに談笑し、聞かれた問いには持っている知識を総動員して答える。

「……すみません、この後、予定がありまして……」

最後にガリアスタの色黒い手を握り返し、別れた後——セレネはすまなそうに口を開いた。

時刻は、すでに7時を回っている。気がつけば、1時間近くが経とうとしていた。

「まあ!? 知らなかったわ!」

老婆は口到手を当て驚き、ジャスティンは酷く落ち込んだ表情を浮かべていた。「ごめんなさいね、年寄りにつきあわせてしまつて……本当は2人で回りましたでしょうに」

「いいえ、そんなことはありません。興味深い一時でした」

セレネはドレスの裾をつまみ、軽くお辞儀をした。

「僕、出口まで送っていきますよ。あ、タクシーを呼んだ方がいいですか?」

「ありがとうございます。だけど、タクシーはいりません」

セレネはジャスティンと一緒に出口へ向かう。

セレネはやや足早に、ジャスティンは少し遅めに歩みを進めていた。

「時間が経つのはあつという間です」

ジャスティンが悲しそうに口を開いた。

「僕、もっとセレネと一緒にいたかったです」

「私もですよ」

セレネも言葉を返した。

「もう少しパーティーを楽しみたかったです」

「でしたら、来年もどうですか？」

ジャスティンは少し焦り気味の口調で提案してきた。

「来年もパーティーがありますし、次は、その……もう少しのんびり……どうですか？」

「ありがとうございます。とても楽しかったです、ジャスティン。それから、お母さまにドレスの礼を伝えておいてください」

セレネは丁寧に礼を口にし、最後「それでは、ホグワーツで」と言うとすぐに出口へ飛び出した。

約束の時間が迫っている。

ヒールが脱げそうになったが、なんとかバランスを保ちながら早足で進む。

一歩路地に入ると、そこには待ち合わせ通りの人物がいた。

否、人ではない。

長い耳、テニスボールのような目、薄汚いシーツを貧相な身体に巻き付けた生物

――屋敷しもべ妖精だ。

「セレネ・ゴースト様でいらっしゃいますね」

しもべ妖精は甲高い声で尋ねてくる。セレネは頷き、肯定の意を示した。すると、しもべ妖精は枯れ枝のような手をこちらに差し出してきた。

「お待ちしていました、それではお連れ致します。お手を貸してください」

冷たい手を握りしめると、セレネは腹の底から持ち上がるような浮遊感を覚えた。事実、足が地面から浮きあがっている。風が唸り、身体が回転した。視界の景色が、めまぐるしく世界が変わっていく。例えるなら、気分はジェットコースター。安全ベルトなしで一回転しているような感じだ。または、全自動洗濯機に叩き込まれた、という例えも悪くない。

初めての感覚に吐き気を覚えながらも、どうにか真顔で足が地面に触れたとき、セレネは安堵の息をついた。大丈夫だと理解していても、知識と経験は結び付かないものである。

「つきました、ゴースト様」

小綺麗な茂みが続いている。

同じ高さで刈りそろえられた茂み、冬にもかかわらず青々と柔らかそうな芝、絶え間なく湧き出ている噴水、そして、クジャクが悠々と庭を闊歩する。

一目見ただけで、金持ちの庭だということが分かった。

「さて、やってやりますか」

良い子の人形の時間は終わり。ここから勝負どころである。

セレネは口の端を片方だけ持ち上げた。乗り込むのは、マルフォイ邸のクリスマスパーティー。

夜はまだ、これからだ。

35話 セレネのクリスマス

「こちらです」

屋敷しもべ妖精は深々とお辞儀をすると、すぐに先導を始めた。

セレネはその後ろを歩く。しもべ妖精が歩きたびに、垂れ下がった耳が跳ねるようには動いていた。

しもべ妖精を見たのは初めてだった。「幻の動物とその生息地」で概要を眺めたことはあったが、「大きな屋敷に仕える」ということくらいしか知らない。だから、実物を目にすると首を捻ってしまった。

あまりにも服装がみすぼらしすぎるのだ。

枕のカバーをくり貫いたような布だけを身に纏っている。雪がちらつく寒空の下だというのに、靴はもちろん、靴下すら履いていない。一応はシミひとつない清潔な布のようだったが、見ているこちらが寒くなってくる。

「しもべ」なんて言葉では生ぬるい。これでは、まるで「屋敷奴隷妖精」だ。だから、セレネは思わず

「あなた、上着は持っていないのですか？」

と、尋ねてしまった。

すると、しもべ妖精はびっくりしたように跳ねた。そして、身体中を震え上げながら、怯えたようにこちらを見上げてくる。

「ミズリーはこれ以上の洋服を求めません！」

しもべ妖精は金切り声のようなキーキー声で叫んだ。

「ミズリーは由緒正しいマルフォイ家にお仕えするしもべ妖精です！ ええそうですとも、服など必要ありません！」

「ですが、とても寒そうに見えますけど」

「お嬢様はお優しい御方です。しかしながら、ミズリーたちしもべ妖精のことを分かっておいではありません。しもべ妖精に服を与えるということは、すなわち『解雇』ということなのですから！」

ミズリーと名乗る妖精は「解雇」という言葉を口にした瞬間、眩暈をしたように身体を揺らした。自分で口にすることが恐ろしくなるほど「解雇」されるのが嫌なのだろう。

「寒ければ、身体を温める魔法を使えばいいだけの話でございます。新しい服など滅相もございません！」

「……そうですか」

それっきり、セレネは何も尋ねなかった。

本人が満足しているなら、部外者が口を出すことではない。

「こちらでございます、ゴースト様」

しばらく進むと、玄関があった。

セレネの倍ほどの丈がある。オーク材の玄関には意匠を凝らした彫り物が施されていた。中央にはハグリットの頭でさえ、すっぽり入りそうなくらい大きいクリスマスリースが掲げられている。

これだけでも、ドラコ・マルフォイが「マルフォイ家のクリスマスパーティーの素晴らしさ」を自慢する理由が分かった気がした。

「ミズリーさん。案内、ありがとうございました」

「敬称など滅相もございません！　また、帰宅の際にお呼びくださいませ。お送りいたします」

ミズリーは叫ぶように言うと、玄関を開けて早く中に入るように促した。

家の内装も贅の限りを尽くしたような素晴らしさだった。金銀輝く華やかな装いではなかったが、調度品の1つ1つが品よく収まっている。

ホールと思われる場所に近づくにつれ、笑い声や音楽、賑やかな話し声がだんだんと大きくなってきた。

「やあ、よく来たね！」

ホールに到着して早々、ドラコ・マルフォイは両手を広げながら現れた。

彼は黒いビロードの詰襟ローブを着ている。教会の牧師のようだったが、非常に良く似合っていた。

だがしかし、いつも引き連れている子分の姿がない。右隣には、パンジー・パーキンソン、そして左隣にはミリセント・ブルストロードが微笑んでいた。

両手に花である。

もっとも……悲しいことに、花たちのドレスはあまり似合っていなかった。

ブルストロードはせっかく大人っぽくてスタイルが良いのに、子どもっぽい可愛らしさを前面に出したフリフリピンク色のドレスを着ている。身長も高いので、アンバランスであることこの上ない。

少し小太りなパーキンソンも同じだ。フリルだらけの淡いピンク色をしたドレスは、彼女のふくよかさを強調してしまっている。

本人たちの趣味趣向の赴くままにドレス選びをしたのだと思うが、指摘した方がいいか？とを考えてしまう。

「お招きありがとう、マルフォイ」

「待ちくたびれたよ、セレネ。この僕が直々に、由緒正しい魔法族のパーティーを案内してあげよう」

「んまあ、ドラコ。ひどいわ。私という者があるながら」

「そうよそうよ。私たちも案内しなさいよ！」

マルフォイは少女二人に腕を絡めとられ、まんざらでもない笑みを浮かべていた。セレネはパーティーに集った参列者に、ざっと目を通す。ほとんどが大人の魔法使いだ。男性陣はコスプレのようなローブを身に纏い、女性陣は華やかなドレスローブを纏って談笑している。

おそらく、ホグワーツ在籍児はセレネたちだけだった。

「あなたが招待したのは、私たちだけですか？」

「もちろんそうさ。父上の許しを貰ってね」

マルフォイは、どうだとはかりに胸を張る。

完全に私的なパーティーのようだ。パーティーに誘ってきたときの様子から「私的なもの」だと予想を立ててはいたが、本当にスリザリン派閥争いも関係ないもの

だったらしい。

「すばらしいだろ、セレネ。マグルのパーティーと比べてどうだい？」

マルフォイは鼻を鳴らした。

なるほど、確かに悪くはない。

天井と壁はエメラルドグリーンと紅色の垂れ幕で優美に覆われている。天井の中央には花が咲いたようなシャンデリアが下がり、中には本物の妖精がそれぞれ金の粉をまぶしながら羽ばたいている。天井を貫きそうなほど巨大なツリーにかけられた銀のオーナメントの中にも、1匹ずつ妖精が入っていた。煌びやかな光を放ちながら、ぱたぱた飛び回っている様子は幻想的だ。

招待客の合間を縫うように、銀のお盆が歩いている。否、訂正しよう。銀のお盆を頭に乗せたしもべ妖精が歩いている。先ほどのミズリーと似たような服装をした妖精たちが、静かに料理やジュースを運んでいた。

「魔法界のパーティーもすばらしいですね。まさか、妖精が見られるとは思っていませんでした」

「そうだろう、そうだろう」

マルフォイはすっかり気分を良くしたようだ。しもべ妖精から白く泡立っている飲み物を受け取ると、上品そうに飲み干した。

「それにしても、セレネ。君の衣装はどこで手に入れたんだ？」

「そういえば、かなりいいドレスだけどマダム・マルキンのところ？ それとも、トウィルフイット・アンド・タッティングの新作？」

「もしかして、グラドラグス魔法ファッション店？ あんたはホグズミードに行けないのに、どうやって採寸したの？」

マルフォイの問いに対し、パーキンソンやブルストロードも被せて質問をしてくる。特に、パーキンソンやブルストロードは興味津々といった様子でドレスを見つ

めていた。

最初は「マグルの品なんて」とからかうつもりかと思ったが、どうやらそうではないらしい。

「ブルストロードたちもこのドレスが気になるのですか？」

「ええ。だって、あんたに似合ってるんだもの。あたしに似合わない道理がないじゃない」

「眼鏡をとれば、もっと似合うのに。ゴントって本当にお洒落のなんたるかが分かってないわね。ミリセントはどう思う？」

「ねー、パンジーもそう思うわよね。せっかくの可愛いドレスが眼鏡のせいで台無し。そのドレス、私が着たら、もっと着こなせるわ。というか、本当にどこのブランドなの？」

「隠さずにすべて白状しなさい」

パーキンソンたちは代わる代わるに言いながら、こちらに詰め寄って来た。

ご覧の通り、かなりドレスにご執心だ。

「そんなに気になります？」

「ええ、次のパーティーには絶対にそのドレスを着ていくわ」

「だから教えなさい。さあ、さあ!!」

「……実は私、よく知りません。これは、貰い物なのです」

セレネはドレスの裾を軽く持ち上げ、にこりと微笑んだ。

「フレッチリーのお母さまが見立ててくださったので、マグルの品ということは分かりますけど」

それを聞くと、パーキンソンとブルストロードは目を見開いた。パーティーというのを忘れてしまったかのように、口をあんぐり開けて凝視してくる。

「それから……」

せつかくの機会だ。セレネは放心状態の2人に近づくと、こっそり耳元で囁い

た。

「もっと、よく見られたいのでしたら、ドレスを考えるべきかと。

良いドレスなのでしょけれど、もう少し自分に合ったものを選ぶべきだと思います。

たとえば、ブルストロードはシックなドレスを格好良く着れば、大人の魅力が出ると思います。パーキンソンはもう少しピンク系ではなく暗色にした方が見栄えが良いですよ。フリルも少なめにした方が、よりすらっと見えるかと」

「あ、あんた。どこでそんな知識を……」

パーキンソンがようやく声を絞り出す。

セレネは微笑んだまま

「知識はいくらあっても悪い物ではありませんよ」
と言った。

本からの知識ではなく、ダフネ・グリーングラスとの雑談で得た知識だ。半分聞き流していたが、まさかここで役に立つとは思わなかった。

パーキンソンはしばらく顔面蒼白だったが、徐々に顔に赤みが戻って来た。赤み

なんてレベルを通り越して、真っ赤である。耳まで茹で上がったように赤く染め、セレネを睨み付けていた。

「ぱ、パンジー？」

「ドラコ、ごめんなさい。ちょっと席外すわ」

パーキンソンは放心状態のブルストロードを連れて、人ごみの中へと去って行った。

「……ちょっと言い過ぎてしまいましたか」

「君は2人に何を言ったんだ!？」

「いえ、ちょっとしたアドバイスを」

もっとも、こうなることは想定のうちだ。

むしろ、2人に席を外してもらうために指摘した助言である。

「マルフォイはどう思いました？ マグルの品とは思わなかったでしょ？」

「ふ、ふん。こっちの店の方がずっと良い品もある。別にどうってことないね」

マルフォイはぷいっと顔を背けた。

「セレネは『穢れた血』やマグル鼻屑過ぎる。スリザリンの恥だぞ」

「あら、本当に恥でしょうか？ 私、別に純血主義が悪いと言っているわけではないですけど」

セレネが驚いたように手で口を覆えば、マルフォイも不思議そうに瞬きをした。

「血を大事にすることは、別に悪いことではないと思いますけど」

「でも、セレネはマグルのドレスを着るし、今日だって『穢れた血』の誘いに乗ったんだろ？ 僕より先に！」

「前にも言ったと思いますが、そちらの方が先約だったからです」

「だけど！」

「マルフォイ。純血主義を掲げたヴォル——例のあの人は、どうして負けたのだと思いますか？」

グラスのジュースを回しながら、静かに問いかける。

マルフォイは突然の問いかけに片方の眉を上げると、少し憎々しい声で答えた。

「それは……ハリー・ポッターの力が強力だったからか？」

「たしかに、それも一理あるでしょう」

ヴォルデモートは確かに強力だ。

あの日記に封じられていた16歳のトム・リドルですら、策を講じなければ勝てなかった。もし、リドルと正面から魔法勝負をしていたら勝てたかどうかとも危うい。バジリスクの加勢があったとしても、勝利は難しいだろう。

16歳の時点で強敵なのだ。それが完全に力をつけた全盛期なら、どれほど強力な魔法使いが挑んでも勝てなかった理由が分かる気がする。

それに打ち勝った「生き残った男の子」は、ヴォルデモート以上に強力な力を秘めている——と考えるのも不思議ではない。

「ですが、それだけではないと思います」

「それだけではない？ どういうことだ？」

「つまり今の風潮にあっていなかった、それだけです」

「ふう、ちょう？」

マルフォイは首を傾げる。

セレネはジュースを一口飲むと、静かに語った。

「中世であれば、なるほど。たしかに、あの人は魔法界の頂点に君臨できたでしょう。魔女狩りで親兄弟、子どもを亡くしたばかりであれば、例のあの人が掲げる純血主義に流れるのは道理です。

ですが、現在はどうか？」

現在、中世に流行った魔女狩りは行われていない。

むしろ、マグル界で魔法はファンタジーのものだと割り切られている。いまだイギリスでは迷信が根強く残っているが、都会に出るとそれも薄くなってきている。

つまり、マグルにとって魔法使いとは「そもそも存在しないもの」なのだ。

魔法使いはマグルの脅威ではなく攻撃対象になりえない。

少なくとも、いまは。

「現在はマグル生まれも多く、混血魔法使いも多い。マグルに対する危機感も拒絶感も薄い。そのような者たちが純血主義に流れる比率は少なく、例のあの人信奉者になる率も少なかったと聞きます」

「それはそうだけど……」

「二つ目の質問です。現在の魔法世界のトップは、誰でしょうか」

魔法省大臣？ いや、違う。

行政での頂点かもしれないが、実際に最も影響力の強い魔法使いは彼ではない。

「……ダンブルドア、か？」

「ええ。アルバス・ダンブルドア。」

マグルやマグル生まれ、混血を差別せず、平等に接する賢人。そんな彼がトップに立っていて、それを多くの魔法使いが容認しています。つまり、それが世論です。この世論で再び純血主義の『例のあの人』が現れたら……間違いなく、あの方は敵側」

セレネは、ジュースの最後の一滴を飲み干す。

「あの人が掲げる純血主義も敵側になり、攻撃されるでしょうね」

「そ、そんなもの無視すればいいだろ」

マルフォイは怒ったように言った。

「あの人の味方になる、ならないはともかく！ 純血主義が正しいのは当然なんだ！

それに、あの老いぼれダンブルドアの考えがいつまでも正しいって皆が思うとは限らない」

「ええ、確かにそうかもしれませんがね。時を待つ。それも一つの手かもしれませんがですが——、とセレネは言葉が続けた。

「ダンブルドアなら、ぬかりなく後継者を選び出します」

いくら偉大で絶大な力を持つダンブルドアにも寿命がある。彼なら寿命が来る前に、自分の影響力を他の誰かに受け渡すと考えても不思議ではない。それも、似たような考えを持つ者に。

それが、ハリー・ポッターなのか。はたまた、セレネの知らない誰かなのかは分

からないが。

「純血主義が肩身の狭い思いをする世の中は、このままではいつまでも変わらないでしょう。あの人が復活しても、ダンブルドアが死んでからも」

「……」

「現在の風潮は、マグルを迫害せずに、マグル生まれを受け入れていこうというものの。

むしろ、マグル生まれが大多数を占める現在、ヴォルデモートの考え方は少数派です。……純血主義も」

セレネは空になったグラスを回す。

グラスは妖精の黄金の光を浴びて、きらきらと輝いていた。

「血を尊ぶのは否定しません。むしろ、血を誇りに思うことは素晴らしいと思います。そこは、羨ましいです」

ゴントの血は、面倒ごとを背負い込んでくる。

セレネは自分の血を胸を張って誇ることができなかった。偉大なるサラザール・

スリザリンの末裔だが、「だからなんだ？」と思うだけで、むしろ、大量殺人犯　クレイジー・サイコパスなヴォルデモートと血縁関係があると考えると虫唾が奔る。だから、マルフォイのように誇りを持って「純血主義」を語ることができるのは素晴らしく、少し羨ましく思っていた。

「マルフォイ。マグルの中にも素晴らしい技術者がいます。混血の魔法使いやマグル生まれの魔法使いの中にも。仲良く交われとは言いませんが、最低限の付き合いはしていくべきだと考えますよ。」

純血主義も寛容さを取り入れるべきだと」

ちょうど、しもべ妖精が見計らったかのように通りかかる。セレネはグラスを妖精に渡すと、口の端を上げた。

「パーティー、楽しかったです。それでは、ホグワーツで。もう少し話が聞きたければ、そのときに」

セレネは考え込むマルフォイに向かつて一方的に別れを切り出すと、そのまま出口へと向かおうとする。

すると、三步と進まないうちに、銀色の長髪を優雅に流した男性がセレネの進路に立ちふさがった。

「マルフォイのお父様ですね。本日はお招きいただきありがとうございました」

「……息子とはずいぶんと楽しそうな会話をしていたようだな」
どうやら、彼はマルフォイとの会話に耳を立てていたらしい。

「あのお方に似ていると思ったが、違うところもあるようだ」

「……それは、あの人のことですか？」

「さあ。……今後とも息子と仲良く頼む」

「ええ、私も仲良くお付き合いしたいと考えています」

二人は互いに微笑を浮かべ、それぞれ進むべき方へと去っていく。

セレネはマルフォイ氏が笑顔の下で何を考えていたのか——思いを馳せるのだっ

た。

※

「と、いうのが私のクリスマスね」

スリザリン寮の談話室。

セレネはお気に入りのソファアームに座ると、前に座る不機嫌な男子児童に話した。
「有意義なパーティーだったわ。これでマルフォイの純血主義が少し寛容になつて、フリント卒業後も友好的な関係が築けるといいのだけど」

「お前なあ……」

不機嫌な男子児童ことセオドル・ノットは疲れたように頭を抱えた。

「まあ、そんなに上手くないかないでしょうね。もう少し、マグルの技術力を見せつける工夫をした方が良かったかしら？ いずれにしろあと、1つ2つ策を弄さないと……ノット？」

セレネは軽く首を傾げた。ノットの不機嫌度が明らかに上がっている。なにか問題のあることを言っただろうか、と考え込んでいると、ノットはこちらを睨み付けてきた。

「クリスマスだったんだよな？ マグルにしろマルフォイにしろ、さぞ立派なクリスマスパーティーだったんだろ？」

「そうね。立派だったわ」

「はあ……それなら……」

ノットはため息をつくのと、呆れ果てた声色で嘆くのだった。

「お前さ、もう少し純粹にパーティーを楽しめよ」

36 話 もしもの話

クリスマス休暇が終われば、また日常が始まる。

教科書が詰まった重たい鞆を提げ、教室から教室へと移動する日々。その合間を縫って図書室や大広間へと足を運ぶ。

だが、その日常に変化が訪れていた。

「もう、セレネ。あんたさ、もう少し髪をしっかり梳かしなさいよ」

朝食をとるため大広間へ向かう途中、1人の少女が少し怒ったような口調で櫛を手渡してきた。

セレネはその櫛を受け取ると、小さく息を吐いた。

「寝癖は直っていますし、これでも問題ないのでは？」

「日々のブラッシングが大切なよ。あんたはさ、素材がいいんだから気を配りなさい」

少女——ミリセント・ブルストロードは腰に手を当てながら、むすつと言いつた。

クリスマスの日にドレスに対して意見をしてから、彼女との距離が変わった。具体的に言えば、クリスマス休暇が終わった初日の出来事。

彼女は朝食もそこに、ハッフルパフのテーブルへ赴き、ジャステインに

『セレネ・ゴーンのドレスは、どこのブランドなの？』

と尋ねたのである。

訂正。尋ねたというよりも、あれは脅迫に近かった。ブルストロードは狼人間も逃げ出すような不機嫌極まるオーラを纏い、苦虫を噛みつぶしたような顔でジャス

ティンに迫っていた。これには、ジャステインは肝を冷やしたのだろう。彼は半分泣きそうな顔になりながら教えていた。教える口調は微かに震えていたのは、きつと悪くない。

『勘違いしないで。あたしは素敵なドレスが欲しいだけ。たまたまマグルが、それを作っていたってだけよ』

ブルストロードはそう言いながら、スリザリンのテーブルへ戻って来た。

『見てなさい、ゴント。次にパーティーがあったら、あんたを絶対に招待するか。美しく着飾ったあたしを見て、後悔しても遅いんだからね』

なにを後悔するのだから、とセレネは思ったが、彼女が嬉しそうなので放っておくことにした。

それ以後、なにかある度に構ってくる。

主に身だしなみ関係で口を出してくるのだ。

「まったく。いいこと、セレネ。あんたは、あたしの服装にケチをつけたのよ？
ということは、あたしより身だしなみがなってないってことは許されないの」

「そういうものでしょうか？」

「そういうもののなの！ それに、女ってのは綺麗にしてなんぼのものよ。ねえ、ダフネもそう思うわよね？」

「まあ……たしかに、綺麗にした方がいいってことは否定できないかな」

ブルストロードの問いかけに、ダフネは曖昧に笑った。

「でも意外。ミリセントってマグルのことを毛嫌いしていなかった？」

「あら失礼ね。あたしはマグルは嫌いよ。ただ、素晴らしいドレスを作る職人だけは別。セレネの言葉を借りるなら『有能な者であれば、マグルも登用する』よ。マグルには、とびつきり素敵なドレスを作らせるの。それを、あたしがマグルより着

こなせば何も問題は起きないわ」

ブルストロードは胸を張りながら答えた。

このように、彼女の純血主義は少し寛容的になった。派閥もフリント側からセレネ側へと移り、大広間や授業の移動時間はセレネ・ダフネ・ブルストロードの三人で行動することが増えた。

結果良ければすべてよし。

ミリセント・ブルストロードは代々純血の一族のみ名を連ねることが許される「聖28族」の末裔だ。生粋の家系が派閥に入ったこともあり、危惧されていた派閥の離散は解消された。しかも、彼女がマグルの有用性を認めている。おかげで、親衛隊の中でマグルを悪く言う生徒は減少し、少なくとも自分にとって有効であるかどうかを確かめるようになった。

彼女が派閥に加入したおかげで、良いことづくめである。

しかし、そう簡単に物事はうまくいかない。

パンジー・パーキンソンとの距離感はさらに広がったように感じるし、ドラコ・マルフォイの純血至上主義が崩れるわけがない。相変わず、純血仲間ばかりと固まり、ハーマイオニーのことを邪険にしている。

別にそれでもかまわない。

最悪、蒔いたタネが芽吹かなければ別の策を考えればいいだけだ。

「まったく、本当にホグワーツにはいい男がいないわね」

ブルストロードは、嘆くように空を見上げた。

「あたしに声をかける男子が一人もないなんて。ダフネはどう？ いい男がホグワーツにいると思う？」

「うーん……ハッフルパフのセドリック・ディゴリーやレイブンクローのロジャー・

デイビースとかかな？ かつこいいと思うよ」

「……たしかに、そこはいい男ね。でも、あたしから声をかけるには勇気がいるかも……セレネはいい男知ってる？」

「いい男ですか？」

セレネは軽く腕を組んだ。

そんなこと、いままで一度も考えたことがなかった。数人の顔が浮かんだが、誰も彼も何かしらの欠陥を抱えている。セレネが知っている中で一番のいい男は、ジャスティンだ。心配りができるし、なにより話しやすい。顔だってそこまで悪くない、それなりの金持ちである。しかしながら、彼女が少しばかりマグルに対して寛容になったとはいえ、ここでマグル生まれを推薦するのは時期尚早な気がした。

セレネは口元に手を添えると、少し考えてから口を開いた。

「セオドル・ノットはどうでしょう？ とても使い勝手のいい男ですよ」

「あのね、それを言うなら、あんたの『手下』でしょ？ いい男の範疇に入らない

わ」

「それでは……ネビル・ロングボトムはどうでしょう？ 代々魔法使いの家系で

すし、性格も悪くありません」

「駄目よ、まるつきり駄目だわ。スマートさが足りないの」

ブルストロードは、呆れ果てたように首を横に振った。

「もう、セレネってばお子様ね。恋愛の基礎基本が分かっていないわー。こればかりは、私の方が勝ってるかも」

「……なんですって？」

セレネは、鼻高々のミリセントに詰め寄った。

「もう一度、言ってみてください。なにが、私より勝ってるの？」

「恋愛スキルよ。セレネは平均点以下ね」

「……平均点以下とは、ずいぶん言いますね」

セレネの本心で言えば、恋愛なんてくだらない。

正直、興味の欠片もないものだが、ブルストロードに負けるのは癪に障った。

誰かに負けること自体、虫唾が奔るのに、同級生の女子に負けるのは問題外だ。たとえ、それがくだらない恋愛スキルであっても……

「ブルストロードも人のことは言えないのでは？　恋愛スキルとやらが高いのであれば、すでに彼氏の一人二人いてもおかしくないと思いますが」

「うぐっ……せ、セレネだっていないじゃない」

「私は……いないのではなくて、作らないだけです」

「あたしだってそうよ！……わかったわ！　勝負よ」

ブルストロードはびしっとセレネの鼻に指を突き付けてきた。

「私たちのうち誰かが、来年のバレンタインまでに彼氏を作ること！ 勝った方が負けた方になんでも1つ言うことを聞かせられるっていうのはどう？」

「面白いですね、受けて立ちましょう」

セレネは不敵な笑みを浮かべた。

ブルストロードが「今年のバレンタイン」ではなく、わざわざ「来年のバレンタイン」を指定したということは、それまでに彼氏ができる自信がなかったと推察される。

この時点で勝ったも同然だ。あとは勉強と賢者の石研究に励みながら、その片手間に彼氏探しをすればいいだけである。

「あんたが負けたら楽しみね。ふふふ、継承者さんになにをしようかしら」

「もしもでもありませんよ。私も楽しみにしていますね。あなたに何をしてもらおうか、考えておかないと」

セレネが微笑んでいると、ダフネはどこか困ったような顔で話しかけてきた。

「あのさ……二人ともに質問なんだけど、引き分けの時はどうするの？」

「そんなことありえない」

セレネの声とブルストロードの声がぴったりと重なった。

それとほぼ同時に、大広間から飛び出してきた影に気付いた。ネビル・ロングボトムだ。寸でのところで躲したので、激突は避けられたが、謝る余裕もないらしい。赤い封筒を引っつかみながら、転げるように走り去っていく。気のせいだったのだろうか。赤い封筒からは、黒い煙が噴き出していたように見えた。

「いまの封筒って……」

「吼えメールよ、きつと」

ダフネが疑問に答えてくれると、ほぼ同時に玄関ホールの方から爆発音が聞こえ

てきた。ネビルの祖母だと思われる声が魔法で百倍にも拡大され、

「なんたる恥さらし！ 一族の恥!!」

とガミガミ怒鳴っていた。

一体、ネビルが何をしてしまったのか。

この疑問に答えてくれたのは、ハーマイオニーだった。

古代ルーン文字学の授業で、久しぶりに彼女とゆっくり話す時間が取れたのである。この授業をスリザリン生で受講しているのは、セレネの他、ノットとブレーズ・ザビニしかない。ノットはザビニと一緒に行動しているので、他の授業よりも彼女と話しやすい時間だった。

「グリフィンドールの寮にシリウス・ブラックが侵入したことは知ってるでしょ？」

「

「それは知ってます。なんでも、ブラックにロン・ウィーズリーが襲われかけたのか」

つい2日ほど前、深夜にブラックが侵入したと騒ぎになったのだ。

グリフィンドールの寮がブラックに襲われるのは、これで2回目である。

大方、狙いはハリー・ポッターで、今回もロン・ウィーズリーを彼と間違えたの
だろうが――

「……それと、ネビル・ロングボトムがどう関係しているのですか？」

「うん、実はネビルが書き溜めていた『今週分の合言葉』をブラックが盗んでいたらしくて……」

「それを見て、侵入したと」

「そうなのよ……ネビル、可哀そう。今のグリフィンドールの合言葉って、すぐに覚えにくい言葉に変わっちゃうから書き溜めておいていたのに」

「ですが……妙ですね」

「妙？ ネビルが？」

「いえ、ブラックが」

大量殺人鬼のシリウス・ブラック。

ヴォルデモートの腹心であり、人殺しに快楽を覚える変態が、ロン・ウィーズリーを殺せなかったのか。杖も持たずに眠りこけている相手など、たとえ目を覚まされたとしても対処できそうなものである。ましては、周りにいるのは訓練を2、3年しか受けておらず、そのうちの2年間はロクな『闇の魔術に対する防衛術』を習っていない素人魔法使いときたものだ。

この状況で、逃走する意味が分らない。

「逃走するとなると、また潜伏しないといけませんし……警備は嚴重になります。再度の侵入は困難です。となると、どうして彼は逃げたのでしょうか。確実にホグワーツに戻ってこれるという算段があったのか、それとも……」

セレネは口元に指を当てて考え込んだ。

シリウス・ブラックは恐らく『動物もどき』だ。だから容易に人の目をくらますことができる。このことを先生方に話した方が良いだろうか。しかし、話すとなると事情を最初から説明しなければならない。具体的に言えば、『秘密の部屋』のバジリスクがまだ生きていて、ペットにしている辺りから。

「あのね……セレネ、一つ相談があるの」

ハーマイオニーが少し悩んだような顔で尋ねてきた。

「もしよ、もしだけど、この城の内部が分かる地図があったら……一人一人の動きから、ホグズミードにつながる秘密の抜け穴まで書き込まれている魔法の地図が、もし手に入ったら……どうする？」

「それはもちろん！」

「自分で使う」と言いかけ、慌てて口を瞑んだ。

これは、あまりにも優等生からかけ離れた発言である。すべての人の動きが把握できるなら、面倒ごとに巻き込まれるリスクを減らせる。こっそりホグワーツを抜け出し、新しい錬金術関係の書籍やバタービールを買うことも可能だ。

だが、これらの行為は規則を破ることに繋がる。優等生なら絶対にしない。セレネは自分を落ち着かせるように深呼吸をした。

「もちろん、寮監に報告します。シリウス・ブラックが近辺に潜伏している以上、安全面から考えても渡すべきかと」

「そう……よね。そうよね、やっぱりそうなのよね」

「……まさか、そのような地図を持っているのですか？」

「私は持っていないわ！」

「……私は、ですか」

セレネは目を伏せた。

私は、ということは、ハーマイオニー以外の誰かが地図を持っている。

「まあ、最近……ホグズミードへ行く許可が出ている日に、ハリー・ポッターを見かけないので、どうしてなのかと思いましたが……その地図と関係があるのでしゅうか？」

「ま、まさか。そんなことありえないわ」

ハーマイオニーの目は泳いでいた。

図星である。

実に羨ましい話ではある。セレネは小さく息を吐いた。

「こんな時に城を抜け出すなんて、暢気なものですね」

セレネは荷をまとめながら、ふと——ハーマイオニーの顔色に気がついた。

「そんなことよりも、あなたの目の下にくまができています。ほどほどに睡眠をとった方がいいですよ？」

「ありがとう、セレネ。でも、大丈夫よ」

そう言いながら微笑む彼女だったが、はちきれんばかりの鞆を見る限り、大丈夫とは言い難かった。

今日の古代ルーン文字学でも山のような宿題が出された。他の授業でも同じである。セレネでさえ、9科目しか受講していないのに、彼女はそれを上回る12科目も履修しているのだ。セレネとは異なり、マグルの勉強や錬金術の研究をしていないとはいえ、多過ぎである。そのうち、いくつかの授業が被っているとすれば、欠席した分の補習を自分でやらなければならず、試験にも響いてしまう。

しかも、彼女の鞆の間からは『ヒッポグリフ裁判記録』『魔法生物に関する飼育条例』といった本が顔をのぞかせていた。

これは、本気で自分より追い込まれた状況である。

「倒れてからでは遅いですよ。ハリーたちも心配します」

「……そうだといいいんだけど。いま、ちょっと喧嘩中なの」

「喧嘩？」

「実はスキヤバーズ……ロンの飼っているネズミを、私の猫が食べたんじゃないかって」

ハーマイオニーは肩を落とすと、喧嘩の経緯を話してくれた。

ウィーズリーのネズミがいなくなり、彼のベットのの上には血とオレンジ色の猫の毛が残されていたのだという。

「……猫がネズミを襲うのは当たり前ですし、スキヤバーズでしたっけ？ それ
は檻にいらていなかったのですか？」

「入れてないわ。放し飼い」

「では、ハーマイオニーが文句を言われる筋合いはありませんよね」

セレネはきっぱりと言い切った。これは、完全にウィーズリーの飼育ミスである。

「気に病むことはありません。管理不足による自業自得です」

「ありがとう、セレネ」

ハーマイオニーは疲れたように笑った。

「それにしても、スキヤバーズでしたっけ？ それって、たしか……」

セレネは一度だけ、スキヤバーズと思われるネズミを見たことがあった。

1年時のホグワーツ特急で、ネズミがゴイルの指に噛みついたところを目撃したのである。指が一本ないネズミであった。それなりに太っており、猫からしたら食べ応えがあるネズミであったことだろう。

「しかし、シーツの上に血ですか……」

セレネの頭の中にモヤモヤが広がっていく。

「べつとりとついていたのですか？」

「いいえ、数滴。最初、ロンが鼻血でも垂らしたのかと思ったわ」

「……それって、本当に……」

「セレネ？」

「いいえ、なんでもありません」

血があったのだから、そのネズミは死んだのだろう。

しかし、どうしても気になってしまうのか。

たかが、飼い猫がネズミを食べたというだけの話なのに。

もしも、生きていたとしても——特に変わったことなど起きないのに。

37 話 予言

もやもやした疑念を抱えたまま、季節が過ぎていく。

これといって、セレネの身の回りに特別な変化はない。しいてあげるなら、マルフォイがホグズミード村から逃げるように帰ってきて「ポッターの生首を見た！」と馬鹿げた与太話をするなどの騒動はあった。だが、それ以外に他に特別変わったことはなかった。

セレネの日常は変わらない。

シリウス・ブラックが継承者を狙う行動に出ることもなく、安心して過ごすことができている。勉強も順調で、期末試験も問題なくクリアできそう。賢者の石や錬金術関係の解析が一向にはかどらないことだけが、セレネの悩みの種であった。

「……やっぱり、別の方法を探った方がいいかな」

セレネは小さく呟いた。

賢者の石の解析は手詰まり。他の死の攻略方法を模索した方が早い気がしてき
た。

そもそも、ヴォルデモートは亡霊のような状態に成り果てても生きている。あの
ような姿になってまで生きながらえたくはないが、彼が見出した不死の方法につい
て探るのも一つの手かもしれない。

「別の方法ってなに？」

セレネが嘆息を突くと、ダフネ・グリーングラスが覗き込んできた。

「いいえ、独り言です」

セレネは短く答えた。ダフネも少し気になる表情を浮かべているが、その隣を歩
くミリセント・ブルストロードも意外そうな顔をしている。

「ふーん、あんたにも悩みごとがあるんだ」

「私にだって、悩みごとの一つや二つありますよ」

「まあ、悩みごとなんて今は忘れましょうよ！　なにしろ、あたしたちは勉強か
ら解放されているのだから！」

ブルストロードは、セレネの背中をとんと叩いた。

彼女の言う通り、今日は期末試験の最終日だ。

3年生で「占い学」と「マグル学」を受講している生徒は試験をしている時間帯だが、それ以外の試験はすべて終わっている。試験が終わっているということは、あとは自由時間。試験結果が発表されるまで、なにをしても文句を言われない素晴らしい期間が始まるのだ。

「そうですか？ テストの復習をした方が良いのでは？

私、魔法史の『中世の魔女狩り』に関する説明文、書き漏れがあった気がしてならないの」

「セレネ、もう忘れようよ。終わったことなんだからさ」

「そうそう！ もうぱーっと忘れてのんびりしましょう。セレネはくだらない見直し以外は暇でしょ？ ちょっと付き合いなさいよ」

「くだらないとは、あんまりですよ」

セレネが抗議をしようと、ブルストロードの方へ顔を向ける。しかしそのとき、

セレネは前から走ってくる生徒に気がつかなかった。危ないと思ったときには、もう時すでに遅し。お互いの肩同士がぶつかってしまった。

「痛っ」

「すみません、って……セレネ！」

ぶつかった相手は、ハリー・ポッターだった。

よほどテストができなかったのか、と心配してしまうほど白い顔をしている。ハリーは少し迷ったように視線を上に向けると、なにか決断をしたのだろう。わずかに震える声で話しかけてきた。

「……セレネ、相談があるんだ。ちょっとこっちに来て」

「別に構いませんよ。……すみません、私はこれで」

ダフネとブルストロードに断りを入れ、ハリーに引きずられるようにその場を後にした。

ハリーはセレネを廊下の隅に連れてくると、言葉を選ぶように話し始めた。

「実は……さっきトレローニー先生が、とっても変になったんだ」

「トレローニー先生とは、占い学の先生ですよね」

セレネは酒瓶を手にして歩いている先生を思い出す。誰かに文句を言いながら千鳥足で歩いている先生の後ろ姿を見て、正直、占い学を取らなくてよかったと思つたものだ。生徒の目の前で酔っ払う先生には、あまり教えてもらいたくない。

たとえ、どれほど有能な教授であつたとしてもだ。

「うん。普段もちよつと変わつてるんだけど、普段より変になつたんだよ。声が太くなつて、白目になつて、こう言つたんだ。

『今夜、真夜中になる前、その召使は自由の身となり、ご主人様のもとに馳せ参ずるだろう』って」

「……」

「それで、他にも『闇の帝王は召使の手を借り、再び立ち上がるだろう』……って言つたんだ。

そのあとは普通というか、元に戻つたんだ。でも、自分が言つたことはなにも覚えてないみたいで……」

「闇の帝王、ですか」

セレネは腕を組むと壁に背を預けた。

「十中八九、ヴォルデモートのことですよね」

「僕もそうだと思う。あれが本物の予言だったのかは分からないけど」

「今夜、真夜中になる前。召使は自由の身となりか……つまり、今はまだ召使は自由ではないってことですね」

「そうなるよね。えっと、たしか……『12年間、鎖に繋がれていた』って言った」「それって、シリウス・ブラックのことなのでは？　いいえ、違うかもしれません」セレネは口にしてから、違うと首を横に振った。

「ブラックを縛る鎖はアズカバンを脱獄した時点で解放されています。となると、ブラックとは別の誰かが解放されるということでしょうか？」

そうなる、ヴォルデモート側の人間が確実に2人も増えてしまうことになる。しかも、ヴォルデモートが再び立ち上がるときたものだ。ヴォルデモートは『もう一人の継承者』の存在をよく思っていない。それは、昨年の日記の記憶と対峙したときに分かったことだ。あのリドルは、セレネを駒としか認識していなかった。それも、使い終わったら処分する駒として。

となると、ヴォルデモートが復活したときに命を狙われるのは明白である。

なんとしてでも、復活を阻止したい。

「それとも、ブラックを縛っていた他の鎖が切れるということなのでしょうか」

「セレネは……予言を信じるの？」

「さあ、どうでしょう」

セレネははぐらかした。

個人的には、占いなど信じない主義である。占いなど不確かなもので自分の人生や運命が決められているとは、絶対に思いたくない。そんな気持ちもあり、占い学を受講しなかった。

しかし、今回は違う。

普段から先生と接している生徒が「尋常ではない」と訴えてきているのだ。予言の内容も本当ならば恐ろしいことである。

「ですが、用心に越したことはありません。予言が本物であることを念頭に入れて、行動した方がいいかと」

「つまり、ヴォルデモートが復活するってこと!？」

「落ち着いてください。まだ予言にすぎません。予言の段階であれば、まだ覆すこ

とができます」

予言は予言だ。

まだ起きていない未来のことだ。事実ではない。つまり、今からの行い次第では、その未来を変えることができるかもしれないのだ。

「もし『12年間、鎖に繋がれていた者』がアズカバンに収監されていて、真夜中に脱獄する——ということなら、私たちに打つ手はありません。しかし、ブラックのことを指しているなら、まだ対処ができます」

「でも、僕たちはブラックがどこにいるのか知らないよ」

「その場所は見当がついています。そして、彼の目的も」

セレネは深く息を吐いた。

「ブラックは『禁じられた森』にいます。そして、おそらくブラックの目的は、ハリー……貴方を殺すことです」

セレネはハリーの胸をまっすぐ指さした。

禁じられた森へ消えていった黒い犬、二度のグリフィンドール寮への襲撃、そして何よりもシリウス・ブラックがヴォルデモートの腹心だということ。この三点が

そろえば容易に想像ができた。

もっとも、禁じられた森に潜伏していることを知った経緯は語れないが。

「禁じられた森にいるってことは知らなかったけど、目的なら僕も知ってるよ」
すると、ハリーは肩をすくめた。

「ブラックに僕の命が狙われているってこと。でも、それと予言がどうつながってくるの？」

「ブラックを縛っていた鎖が『復讐』だったらどうでしょう？」

自分の尊敬する主を殺した相手に対する復讐に縛られていたのだとしたら？」

「……復讐が終わったら、ヴォルデモートを助けに向かうってことか。

それで、今夜、ブラックは僕を本気で殺しに来るかもしれない？」

「おそらくは、ですけど」

セレネは淡々と説明したが、内心は凄く驚いていた。

「自分が殺されるかもしれない」というのに、ハリーがあまりにも平静だったからだ。しかも、彼の瞳の奥には静かな炎が燃え始めている。

「なら、ちよいどいい。僕もあいつに会いたいと思ってたんだ」

ハリーは吐き捨てるように言った。

「あいつは、僕の両親をヴォルデモートに売ったんだ。僕の両親を殺したんだ」

「……だから、シリウス・ブラックを殺すと？」

セレネが問うと、ハリーは黙って頷いた。

それを見て、つい眉をひそめてしまう。セレネには、正直——理解できない感情だった。自分に置き換えて考えてみたとしても、両親の記憶はもとより薄いので、ほとんど思いつかない。義父のクイールが誰かに殺されたら、それは想像できないくらい落ち込むだろう。だが、相手を殺すまで行かない。事故にあう前の自分なら話は変わってきただろうが、いまの自分は義父に対して特別な感情を持つことはできなくなってしまっていた。

「あいつが僕を殺しに来るなら、返り討ちにしてみせる」

「しかし、貴方が覚えている戦闘系の呪文は『武装解除』くらいでは？」

「それは……そうだけど……」

「一人では勝ち目がありませんよ」

セレネは壁から背を離すと、ハリーに一步近づいた。

「7時に玄関ホールで待ち合わせしましょう。各自、戦闘する準備を整えて」

「待って、セレネ！ それって、君もブラックと戦うってこと!？」

「ヴォルデモートに復活して欲しくありません。ですので、加勢します」

「駄目だ！」

ハリーは強い口調で否定した。

あまりに強い声に、向こうの廊下を行き来していたハッフルパフ生がびっくりした面持ちでこちらを見てきた。セレネたちは愛想笑いをする、人通りの少ない廊下を歩き始めた。

「君を巻き込むわけにはいかないよ」

ハリーが少し声を潜めた。

「これは、僕の問題だ」

「相談された時点で、すでに巻き込まれていますけどね」

セレネはため息をつく、ハリーの横に並んだ。

「私たちが一緒に闇の魔法使いと戦うのは、もう2回もあったじゃないですか。いまさらです」

正直、そこまでハリーの腕前には期待していない。

ただ、セレネは1年生の時、ハリーが得体のしれない魔法でクィレルを撃退したことを覚えていた。ブラックにもあの塵にする魔法が効くかもしれない。もし効かなければ、自分の魔法と『眼』で対処すればいい。

それに、セレネには最終手段「アルケミー」がいる。

さすがの大量殺人鬼 シリウス・ブラックでも、突如バジリスクが襲いかかってきたら対処に手間取ることだろう。そのすきに、寮監の先生方を呼べばいい。

夜歩きで20点減点されてしまうのは痛い、ヴォルデモート復活に比べれば遙かにましだ。

「……分かったけど、無理はしないでね」

「ハリーこそ、足手まといにはならないでくださいね」

セレネは軽く手を振りながら、その場を立ち去った。

待ち合わせの時間までに、まだいくらかの時間はある。その間に戦闘の準備を万全に整えなければならない。セレネは廊下に誰もいないことを確認すると、壁に身を寄せた。

『アルケミー、聞こえる？』

『……はい、主様。どうかしましたか？』

問いかけてしばらくすると、壁の向こうから声が聞こえてくる。

セレネは周りの様子を目で確認しながら、やや早口で用件を言った。

『例のシリウス・ブラックと今晚、戦うことになるかもしれない。ブラックの潜伏場所の調査と戦闘時に加勢する準備を整えて欲しい。頼める？』

『もちろんです、我が主』

アルケミーは一切悩むことなく、承諾してくれた。

『ブラックは禁じられた森にいます。戦うということは、森まで出向かれるのですか？』

『ブラックをおびき出せるなら、どこかの空き教室。無理なら、禁じられた森まで探しに行く』

『御武運を。私はいつでも動けるように待機しています』

『ありがとう、アルケミー』

セレネは軽く壁を叩くと、大広間へ向かった。

夕食をとりながら、ちらりとグリフィンドールのテーブルに目を向けてみる。ハリーはハーマイオニー・グレンジャーやロン・ウィーズリーと一緒に食事をとっていたが、どうも様子がおかしい。顔色は強張り、両腕を汲みながら食事をしている。よく目を凝らせば、ローブがわずかに膨らんでいるように見えた。

あれは、シリウス・ブラックを倒すために用意した秘策か何かなのだろうか。

「セレネ、さっきポッターと何を話していたの？」

セレネが考え込んでいると、ダフネが尋ねてきた。

「ちらちらグリフィンドールの方を見てるけど」

「トレローニー先生は変な先生だという話でした」

「あー……確かに変わっているよね。食事にも降りてこないし。でもさ、それって二人っきりで話す内容かな？」

「私も同感です。それでは、私は先に失礼します」

さらっと話を切り上げて、大広間を出る。

杖はある。

ナイフも持った。

戦闘用に使える魔法も暗記済み。アルケミーは蛇語で呼べば、すぐに来てくれる。

「あとは、隠れるだけね」

セレネは小さく呟くと、杖を取り出した。

いくら準備万端に整えていても、ハリーと出会う前に先生に発見されて寮に戻されては元も子もない。

玄関ホールを通り過ぎ、少し角に入った空き教室に姿を隠す。セレネは深呼吸をすると、ゆっくり杖を掲げた。

「『ディサリジヨメント―目くらまし』」

練習中の『目くらまし』の呪文を唱えながら、こんこんと軽く頭を叩く。

すると、身体の表面全体に冷たいものが、トロトロと流れる感じがした。視線を下に落とせば、呪文の効力で身体はすっかり見えなくなっていた。正確に言えば、透明になったというわけではない。例えるなら、カメレオンの保護色のように背後の風景と同化していた。

「よし、成功ね」

あとは、玄関ホールに向かい、ハリー・ポッターを待てばいいだけである。

セレネは玄関ホールに向かうと、寮対抗の点数を表している砂時計のへりに腰を掛けた。時計を見ると、七時十分前だ。いつハリーが来てもいいように目を凝らして待つ。

……しかし、だ。

ハリーは、待てど暮らせど来ない。

酔っぱらって上機嫌のハグリットが入ってきたり、青白い顔をしたルーピンが外へ出て行ったり、その後を追いかけるようにスネイプが走って出て行ったりしたが、一向に肝心なハリー・ポッターは来なかった。

『いやな夜ですね』

アルケミーの不機嫌な声が聞こえてきた。

『吸魂鬼の動きが活発です。いつも以上に空を飛び回っています』

『それは不吉ね……』

セレネは大きく肩を落とした。

もう待ち合わせの時間から、実に1時間以上経過している。これまで待つのは時間の無駄だ。そう思って立ち上がりかけた瞬間だった。

スネイクが戻って来た。

ハリー、ハーマイオニー、ウィーズリー、そして、シリウス・ブラックを担架に載せて。

38話 シリウス・ブラック

セレネは開いた口が塞がらなかった。

スネイプの後ろに浮かんでいるのは、確かにシリウス・ブラックだった。

ハリーが待ち合わせ場所に来ることができなかったのは、おそらくシリウス・ブラックと絡んでいるのだろうが、そのようなことはどうでもよい。

問題は、スネイプがブラックを捕まえていることである。

スネイプは満足そうな表情でダンブルドアに経緯を語っていた。要約するに、ホグズミード村のはずれにある「叫びの屋敷」にシリウス・ブラックは潜伏していた。ハリーたちはブラックに錯乱呪文をかけられており、ブラックが無実だと信じて襲いかかって来た、と。

「では、こいつはどこに閉じ込めておきましょうか？」

「……そうじゃのう。ひとまずは、わしが八階のフリットウィック先生の執務室へ連れて行こう。あそこなら、早々に脱出はできまい。」

……セブルス、すまぬがこの三人を保健室へ連れて行ってもらえないかの。コネリウスには、わしの方から連絡しよう」

ダンブルドアはそう言うのと、杖を軽く一振りした。

すると、杖先から銀色の不死鳥が現れ、悠々とどこかへ飛び去って行く。ダンブルドアはそれを見届けると、宙に浮いたままのブラックを連れて歩き始める。

セレネも少し離れた場所から、ダンブルドアの背中を追いかけた。

スネイプの方も気になったが、今はブラックが大事である。

まだ、真夜中までには時間がある。

ダンブルドアの隙について、ブラックが逃げ出さないとは限らない。

しかし、ブラックが反撃に出る様子もなく、気絶したままフリットウィックの執

務室に運ばれていった。少し離れた場所から後をつけたためだろう。セレネも執務室に入ろうとしたが、鼻先で閉められてしまった。開けることは容易だが、「目くらましの呪文」をかけた意味がなくなる。

セレネは黙って扉の傍に立ち、再び開くのを待った。

「――残念じゃよ、シリウス。君がもう少し、人間的に行動していれば――」
「いいえ、私が――」

なにやら話声が聞こえてくる。

だが、扉越しのせいで詳細な内容まで聞こえてこない。

「これでお別れじゃ、シリウス」

音を立てて扉が開かれる。

ダンブルドアの横顔を覗き込むと、不思議なことに少し寂しそうにも見えるし、

嬉しそうにも見えた。大量殺人鬼と最後に何を語り合ったのか。セレネには分からないし、そこまで興味もなかった。

……閉まりゆく扉に身体を滑り込ませ、部屋の中に入った瞬間、ダンブルドアと目が合ったのは、おそらく気のせいだろう。

ブラックは部屋の中で一人、空を見つめていた。

汚れ切った髪を掻きむしりながら、なにかぶつぶつ呟いている。

暗い落ちくぼんだ眼下の奥で目がギラギラしているのが見えなければ、まるで死体かゾンビかと思ったところだろう。血の気のない皮膚が顔の骨にピッタリ張り付き、まるで髑髏のようだ。

恐ろしい顔立ちだが、二つ顔がある男に比べれば遥かに普通である。

この機を逃すわけにはいかない。

「『フィニート―終われ』」

自分に向けて杖を振る。すると、さあーと熱い液体のようなものが身体の表面を流れた感じがした。ブラックが驚いて目を剥いたところを見るに、無事に「目くらまし」が解けたのだろう。

本当なら「目くらまし」をかけたまま奇襲をかけるのが上策だ。けれど、まだそこまで技量が達していない。それに、無言で呪文をかけることがまだできない以上、魔法を放つ際には詠唱をする必要がある。それでは、目くらましをしている意味がなくなってしまう。

どうせバレるなら正々堂々、バレた方がいい。

セレネはにやりと口角を上げると、ブラックに杖をまっすぐ向けた。

「お前は……!？」

「こんばんは、殺人鬼さん」

ブラックの目はセレネの杖に向かい、次にセレネのローブの胸に刻まれた「スリザリン」の紋章に向けられると、にやりと黄色い歯を剥き出しにするように笑った。

「お前は……スリザリン生か。スリザリンが何の用だ？」

「大した用件ではないの。ただ——悪いけど、死んでもらえないかしら？」

セレネは優等生の仮面をかぶったまま、にっこり微笑んだ。

そして、まっすぐブラックの胸に狙いを定める。

本来なら、ここで確実に相手を殺せる魔法「アバダ・ケダブラ」を使いたいところだが、まだ一度も試したことがない。

なので、ここで大事になってくるのはブラックを戦闘不能にすることだ。

吸魂鬼に引き渡せばキスが執行され事足りるが、そいつらがうじゃうじゃいるアズカバンから抜け出してきた男だ。執行ミスや取り逃がしも考えられる。

「アンタが生きていると、ちょっと困るかもしれないの」

なので、ここで確実に殺す。

殺せなくても、せめて戦闘不能に陥れる。

「『フリペンド―撃て』！」

ありったけの魔力を込めて呪文を放つ。杖から放たれた閃光は、まっすぐブラツクの胸に向かって宙を奔った。しかし、ブラックもただでは負けてくれない。閃光が届くか届かないかというところで床を蹴り、呪文を躲した。

そのまま、セレネに接近してくる。一步、一步が大きく、すぐに距離を詰められそう。

「――ッ『ステューピファイ―麻痺せよ』！」

赤い閃光が奔るが、それも躲されてしまう。

あつという間に差を詰められ、ブラックは目と鼻の先まで接近していた。セレネは次の呪文を唱えようとしたが、その前にブラックの手が右腕に伸びる。杖を握りしめる腕が拘束され、そのまま押し倒されてしまった。頭を強く打ったせいだろう。セレネの視界に銀砂が舞い、ぶつけた衝撃で眼鏡が飛んでしまった。

「あっ！」

セレネは立ち上がって、すぐに眼鏡を取ろうとするが、ブラックは足でセレネの胴体を押さえつけてきた。左手でセレネの杖を奪い取ると、すぐ右腕に持ち替えて喉元に押し付けてくる。

「形勢逆転だな、お嬢さん」

「——ッ」

セレネは起き上がろうと身体を反らしてみたが、ブラックが馬乗りになっている

せいでビクともしない。

セレネは舌打ちをした。

マグルの勉強も魔法も勉強し、規則の一つも破らない優等生で通ってきているが、所詮は少女に過ぎない。教室同士の移動はもちろん、頻繁に図書室や秘密の部屋に行くなどかなり城を歩き回り、足腰は鍛えられているとはいえ、それは少女の範疇である。

鍛え抜かれた大の男の力には、到底及ばない。

しかし――

「――ッ、さて、それはどうかしら？」

セレネは、ここで負けを認めない。

負けを認めたら最後、ブラックに殺される。ブラックほどの魔法使いならば、躊

躊躇うことなく「アバダ・ケダブラ」を使うことができるだろう。ブラックは意気揚々と唱えるはずだ、セレネの杖を使つて。

このままでは、自分自身の杖に殺されるのである。

そんな自殺めいた死に方は、絶対にごめんだ。

セレネは瞬きをするとブラックを注視した。

すると、ブラックの身体全体に黒い線が浮かび上がってくる。相変わらず、見ているだけで胸の奥から吐き気が込み上げてくるような不快な線である。それが自分の腕にも広がっているのだから、さらに反吐が出そうだった。

「お前……その目は……？」

ブラックの瞳の奥に驚きの色が浮かび上がる。

だが、その問いに答える暇はない。セレネは左手を掲げ上げる。そして、ブラックの右腕に奔る線を手刀でなぞった。

黒い薄気味悪い線をなぞった場所から血が溢れ、果実を分けているかのように切れていく。

「ぐわあ——ッ！」

ブラックは杖を握りしめたまま切断された右腕を押さえつける。

あまりの痛みに顔をしかめており、押さえつける圧力も緩んだ。この隙をセレネは逃さなかった。自由になった右腕で隠していたナイフを取ると、身体を思いっきり起こす。その勢いでブラックの首に奔る線にナイフを伸ばすと、彼は慌てたように飛び退いた。

「お前……その眼は……一体？」

ブラックは左腕で右腕の切り口を庇うように押さえつけながら、セレネを睨み付けてきた。

セレネはナイフを手の中で回した。

「どうでもいいでしょ」

セレネは床を思いつき蹴る。

ブラックには杖がない。そのうえ、片腕を失った。腕を失った痛みのせいだろうか。先ほどよりも速度が落ちている。

狙うは、シリウス・ブラックの首。

「これから、死ぬのだから」

ブラックの顔からは、ますます血の気が失せていく。

血が地面に滴り落ちる音を聞きながら、セレネは一気にブラックとの距離を詰め、そして――

『アロホモーラー開け！』

唐突に、窓が開かれた。

セレネは乱入者に気を取られ、思わず足が止まってしまった。ブラックも窓に目を向けると、固まった。

「ハリー!? ど——どうやって？」

ブラックが窓の向こうの人影に、声にならない声で尋ねた。
窓の向こうには、ハリーがいた。

ハリーとハーマイオニーがヒップグリフに乗っている。二人ともホグワーツに降り積もる雪よりも白い顔をしていた。

「シリウス、乗って！ 時間がないんです」

ハリーはヒップグリフの滑らかな首の両脇をしっかり押さえつけ、その動きを安定させた。

「ここから出ないと吸魂鬼がやってきます。マクネアが呼びに行きました」
「待ちなさい、ハリー・ポッター。これは、どういうこと？」

セレネはハリーの方へ歩み寄ると、思いつきり睨みつける。

この際、どうして医務室で気絶している彼らがヒップグリフに乗っているのかは気にしない。

ただ、大切なのは予言である。

「あの予言を成就させないためにも、ブラックを逃がすわけにはいかないと約束し

ましたよね？」

「セレネ、ブラックじゃなかったんだ。ペティグリュウのことだったんだよ！」

「ペティグリュウ？ それは、この男に殺されたのでは？」

セレネはブラックの背にナイフを突きつける。

「詳しいことは後で話す。本当にシリウスは無実で、ペティグリュウがヴォルデモートの配下だったんだ！」

「……本当に？」

「うん」

ハリーの目には、嘘の色が見えなかった。

「……ペティグリュウの特徴は？」

「太っていて少し禿げている男、ネズミに変身できるんだよ。スキヤバーズ……」

えっと、ロンのネズミがペティグリューだったんだ！」

「……そのあたりの事実、あとでしっかり聞きますから」

セレネはナイフを下ろした。

確かに、12年前の新聞を読む限り——あの事件には不可解な点があった。

巻き込まれたマグル12名の遺体は残っているのに、ペティグリューの遺体は指一本だったということだ。

通りに大きなクレーターを生じさせるほどの爆発呪文だったにせよ、見つかったのが指一本で他の肉片や服の欠片すら残っていないのは不自然である。

トカゲの尻尾きりのように、殺される直前に逃げ出したのだとしても、この12年間——ペティグリューが無実だった場合、姿を隠し続けた意味が分からない。

ペティグリューは、何者かから隠れ続けないといけない身だった。

それは——おそらく、ヴォルデモート。

「ヴォルデモートが復活したら、その男は確実に敵に回るのですから」

セレネは杖を拾うと、ハリーたちに振り返ることなく部屋を出た。

そして、壁に手を当てると早口で話し始めた。

『アルケミー。校庭にいる一本指がないネズミ、捕らえることはできる？』

『承知しました』

『朝まで探して見つからなければ、戻ってきて構わない』

もう遅いかもしれない。

完全に手遅れかもしれないが、打つべき手はすべて打っておいた方がいい。壁の向こうからアルケミーの気配が消えると、セレネはもう一度、「目くらまし」を自分にかけて寮へ急いだ。

『闇の帝王は召使の手を借り、再び立ち上がるだろう』……か』

セレネは口の中で呟いた。

予言なんて不確かなものを信じたくない。

しかし、もし——本当に成就してしまったら？

現にヴォルデモートの部下は12年の鎖から解き放たれ、逃げ去って行ってしまった。

ヴォルデモートの復活が1年後なのか、2年後なのか——はたまた、10年後なのか、それは分からない。だがしかし、事前に予防をすることはできる。

「少し、対策を整えないと」

セレネは暗い地下に続く道を降りながら、自分のやるべきことの多さに息を吐くのだった。

炎のゴブレット編

39話 リトル・ハングルトン村

リトル・ハングルトン村。

ジャスティン・フィンチ・フレッチリーの祖母が教えてくれた「トム・リドル」が住んでいた村は、非常に寂れた田舎にあった。

せつかくの夏休みに、若者がわざわざ好んで訪れようとする場所ではない。

見どころもなく、これといった産業もない。

ただ村の中心部に大きな御屋敷が立ち、いまセレネが向かっている村のはずれに寂れた小屋がある。それだけの村である。

「……暑い」

セレネは額から流れ落ちる汗をぬぐった。胸の位置まで届く雑草が陽光を浴びて、そよいでいる。そんな雑草が生い茂る中を掻き分けながら、セレネは進んでいた。

この先にある小屋を目指して。

夏の日差しは容赦なく照りつけてくる。とにもかくにも暑くてたまらない。お気に入りのシャツが汗でピッタリと身体と張りつく感触が、この上なく気持ち悪かった。

「ゴースト先輩、お水をお飲みになりますか？」

「タオルも用意してありますよ」

後ろから可憐な声をかけられる。

セレネは後ろを振り返ると、大丈夫と笑いかけた。

「ありがとう、フローラとヘスティア。貴方たちこそ大丈夫？」

「問題ありません、ゴント先輩」

「私と姉様はしっかり水分補給をしてますので」

銀髪の双子姉妹は、同じタイミングで頭を下げた。

フローラ・カロとヘスティア・カロ。二人とも聖28族出身であり、セレネ・ゴント親衛隊に属している。一学年下ながら卓越した魔法力は数多の生徒を圧倒し、親衛隊の幹部の座を射止めたらしい。

「セレネ先輩。私たちを誘ってください、ありがとうございます」

「この光栄は忘れません」

「そこまでかしこまらなくて構わないわ。気楽に行きましょう……貴方もね、ノット」

セレネはカロ姉妹の後方についてくる少年に微笑みかけた。少年は不機嫌極まらないと言わんばかりの顔をしている。

「……なんでオレが夏休みにこんな田舎に来ているんだ。しかも、お前の命令で」
「仕方ないではありませんか。義父が私一人で旅に出させてくれないのです」

セレネは肩をすくめた。

本当なら、ゴントの住んでいた小屋を一人で見に来たかった。

結局、ピーター・ペティグリュは取り逃がしてしまった。

12年間鎖で縛られていた者が解き放たれてしまった以上、トレローニーの予言が成就してしまう可能性が出てきた。ヴォルデモートが復活するかもしれないと分かった以上、彼を倒すためには彼の生い立ちも知らなければならない。そこに弱点

が隠されている可能性があるからだ。

しかし、ヴォルデモートの関連施設である以上、なにかしらの呪いがかかっている可能性がある。

そこに、マグルで一般人の義父を連れて行くわけにはいかない。だが、彼は『女の子が一人で旅をするなんて、絶対に許可できない』と許してくれないのだ。『一人で行くなら、僕も行くよ』と宣言し、付いて来ようとする。

これはまずい。

義父の同行を阻止するために、セレネは誰かホグワーツの知人を誘うことにしたのである。

ノットは大きく舌打ちをした。

「なら、他の奴を誘えばよかっただろ？ それこそ、ハッフルパフのあいつとか」「残念ながら、ジャスティンは財力がありますが、闇の魔術に対する知識がそこまでありません。その点、あなたはそれなりに呪いの知識も豊富ですし、成績も優秀

です。私の補佐にも慣れていきます」

「……本当に理由はそれだけか？」

「ええ。それだけです」

「はあ……クイディッチのワールドカップに行きたかったのにな」

ノットは不満そうに口を尖らしているが、ちゃんと来てくれている。

存外、律儀な男であった。

ちなみに、カロー姉妹を同行させたのは、義父に「男と二人で旅をするなんて……

！」と怒られたからである。

ダフネ・グリーングラスやミリセント・ブルストロードを誘っても良かったのだが、彼女たちよりもカロー姉妹の方が成績が優れていた。そのうえ、彼女たちはセレネに対する心酔度合いも高く、先学期はフリントの派閥とぶつかり、小競り合いも起こしていたらしい。

要注意人物でもあるが、忠誠心は高いのは間違いない。予期せぬ事態が起こった時に反意を翻す可能性は低く、こちらの指示を瞬時に聞き入れることができそうな双子なのである。

「ゴースト先輩、あそこではありませんか？」

ヘスティア・カローがまっすぐ指を差した。

生い茂る草の向こうに、小さな廃屋が見えてきた。年季の入った壁に、嫌というほど深緑のツタが巻き付いている。屋根瓦がごっそり剥がれ落ちて、垂木がところどころむき出しになっている。外装のほとんど全てがはげ、白いペンキが使われたのであろうと思われるところも、薄くなって消えかかっていた。

小屋の脇には何かを掘り起こしたような穴が開いていたが、その上にも雑草が生い茂り、人の手がまったく入っていないことが分かった。

「……珍しい趣味だな」

ノットは表情を引きつらせていた。

蛇のミイラが扉に打ち付けられている。セレネも眉間にしわを寄せてしまった。

恐らく、ここがスリザリンの末裔「ゴーントの家」だということは間違いない。

蛇はスリザリンを象徴しているのだろうが、扉に打ち付ける趣向は理解しがたい。いずれにしろ、スリザリンの末裔が住んでいるにしては、貧相な造りだ。ここに、こんなところにスリザリンの末裔が住んでいたなんて、誰も思わないだろう。私だって調べるまでは、もっと豪邸に住んでいたのかと思っていた。

それこそ、リトル・ハングルトン村にあるような豪邸に。

「一応、鍵はかかっているようね」

セレネはドアノブを回してみるが、扉はビクともしない。

「仕方ない。オレがやる」

ノットが大きくため息をつくとき、体重を扉にかけるように押し開けた。

その途端、何十年も小屋の中に充満していた埃が一気に襲ってきた。思わず、咳

き込んでしまいそうだ。それにしても、真っ暗で中が良く見えない。

「姉様」

「ええ、こちらに灯りがありますわ」

フローラ・カローがランプに明かりを灯した。

「……これは酷い」

天井には蜘蛛の巣がはびこり、床は何十年も溜まりにたまった埃で覆われている。テーブルにはカビだらけの腐った食べ物と思われる残骸が放置されているし、汚れのこびり付いた深鍋の中にも蜘蛛の巣がかかっていた。そこらじゅうに酒瓶と思われる瓶が転がり、溶けた蠟燭が1本だけ忘れられたかのように転がっている。こんなところに、ヴォルデモートの生い立ちに繋がる何かが残されているとは、到底思えなかった。

「……気持ち悪いですね」

「……ええ、本当にひどい。一応、警戒しなさい。なにか呪いがかかっているかもしれないわ」

セレネは眼鏡を外した。

いくら『廃屋』とはいえ『スリザリンの末裔』が住んでいた小屋だ。未知の魔法がかけてられているかもしれない。たとえば、何かに触れた瞬間に死んでしまう呪いとか。安全の確認を、した方がイイだろう。そっと『眼』を開けてみると、そこら中に今にも崩れ落ちてきそうな『線』が浮かんでいる。だが、特に魔法をかけられた痕跡はなさそうだ。…ある一角を除いて。

「……あれは？」

セレネは汚れがこびりついている大鍋の影に隠された小箱に注目した。

他の器物とは比較にならないくらい、大量の「線」が密集している。そう、まるで、幾重にも魔法が複雑に駆けられているかのように――。

「しばらく話しかけないでください。あれを解体するので」

セレネはナイフを構えた。

小箱を取り囲むように、複雑に張り巡らされた『線』を慎重に斬っていく。どんな強力な魔法でも、この『眼』の前には無力だ。作業をしている間にも、汗が絶え間なく流れ落ち、口が渴いてくる。

「隊長、あれはもしかして――噂に聞く、ゴースト先輩の不思議な力ですか？
1年生の時、フリントたちの魔法をことごとく切り伏せたという――」

「見えない糸を切っているみたいですね……あれは、ナイフで魔法を解いているのですか？」

「オレも詳しく知らないが、一種の消失呪文だろうよ」

三人が後ろでひそひそと話している声が遠くから聞こえてくるようだ。

やっと最後の一本を斬り終えたとき、箱は解体され、中から金色の指輪が転がり落ちてきた。

「これは……?」

金の指輪は、金メッキとは比べ物にならないくらいの味わいを醸し出していた。中央に嵌められた怪しげに光る黒い石には、不思議な三角の印が彫られている。まるで、美術館に展示されていたとしても、おかしくない。絶対にこの家にあるものすべてを売り払ったとしても、この指輪を購入することは出来ないだろう。

「このマーク……もしかして……」

フローラが小さく呟いた。

「知っているのですか、フローラ？」

「ええ。たしか……ペベレルの家紋だったかと」

セレネには聞き覚えのない言葉だった。解説を求めるように、ノットに視線を向ける。すると、彼は肩を落として説明してくれた。

「ペベレルは何世紀も前に途切れた純血の家名だ。知ってるだろ、『三兄弟の物語』。あれのモデルになった一族だ」

「三兄弟の物語？」

聞いたことのない話に、ますます眉間に皺を寄せる。

すると、ノットは驚いたように瞬きをした。

「吟遊詩人ビードルの物語だ。魔法使いに伝わるおとぎ話だよ」

「つまり、赤ずきんや美女と野獣みたいなものか」

「それは分からないが、そういうものだ」

「そう……」

少し興味を惹いたが、それよりも問題なのは指輪にこびりつく「線」の多さだ。先ほどの箱とは比較にならないほど、おびただしい量の魔法が掛けられている。これを指にはめたが最後、考えられないほどの呪いが襲いかかってきそうだ。

セレネは口の端を上げた。

「とにかく、きっちり殺した方がいいですね」

呪いが密集している黒い石に、ナイフの切っ先を向ける。

ちょうど一年前、フラメル夫人に貰った黒い石とよく似た石だ——と思ったのもつかの間、表面に人の顔が浮かび上がって来た。

秘密の部屋で対面したトム・リドルに瓜二つの顔だ。

後ろから覗き込んでいたノットたちが、あつと声を飲む声が聞こえてきた。

「おまえの心を見たぞ……お前の心は俺様のものだ」

石の中心から、押し殺したような声が聞こえてきた。

「お前の夢を見たぞ、セレネ・ゴースト。俺様と組めば、その願望はたやすく叶えられる。願いを叶える方法を教えてやろう。なに、安心しろ。俺様も試した方法だ。さあ、この指輪をはめろ、セレネ・ゴースト」

どうやら、この一瞬でセレネの心を読んってしまったらしい。
セレネはふっと小馬鹿にするように笑った。

「……生憎と命乞いする奴と組む気はない、トム・リドル」

刃が光り、ナイフが躊躇なく振り下ろした。鋭い金属音と長々しい叫び声が、廃屋が音を立てて揺れるくらい響き渡る。天井が今にも崩れ落ちてくるのではないかと思った時、ようやく声が途切れた。パキンと乾いた音を立てて、黒い石に亀裂がはいる。

何年も忘れ去られていた廃屋に、静けさが戻った。

「そこに宿っていたモノは、消えたみたいです」

「先輩、今のはもしかして……」

フローラとヘスティアが話しかけてきた。

ヘスティアは少し怖かったのか、セレネの袖をぎゅっと握ってくる。セレネはヘスティアの頭を軽く撫でると、指輪を拾い上げた。

「一応、嵌めない方がいいんじゃないか？ なにかまだ宿ってるかもしれないぞ」

「忠告、ありがとう」

セレネは指輪をポケットに滑り込ませる。

この指輪の他に特別目立ったものはない。

セレネたちが外に出る頃には、すでに日は傾き始めていた。空は蜜色に染まり、家々に明かりが灯り始めている。

「……はあ、今頃はクイディッチワールドカップが開催されているのだろうか」

ノットが肩を回しながら、ぶつくさと文句を口にした。

「今夜、勝ったチームが明後日、アイルランドと戦うんだよ。気になるし、見に行きたかったぜ」

「隊長。嘆かなくても結果は見えています」

「絶対にブルガリアが勝利するに決まっていますわ。あのビクトール・クラムがいる

のですから」

「いいえ、姉様。絶対に日本です。トヨハシ・テングには敵いませんわ」

「ごめんなさいね、クイディッチワールドカップがあるというのに」

セレネが言うと、カロー姉妹は慌てて「そんなことはない」と口にした。

「ご心配しないでください、先輩！ 私たちは明後日の決勝戦は見に行けるのです」

「先輩、私たちは切符が手に入っているのです。ゴースト先輩もどうですか？」

「ありがとう、でも遠慮しておくわ。それに……」

セレネは丘の上の屋敷に目を移した。

「まだ、今日の用件は終わってないもの」

40 話 リドルの館

リドルの館のいまの持ち主は、大金持ちだったが屋敷に住んでいなかった。

村人に話を聞けば「税金対策」で所有しているだけだと言ったが、詳しく聞いてみても分からないと首を傾げていた。

丘の上にひっそりとたたずむ屋敷は怪しげで、なにか幽霊が出てもおかしくない怖さを感じさせる。

「……おい、お前本当に行くのかよ」

セレネが門を乗り越えると、ノットが不安そうな声で尋ねてきた。

「不法侵入だろ、これ。犯罪だぞ？」

「あら、先程の小屋も不法侵入よ。許可なしに入ったのだから。それに、侵入しているのは私だけではないみたいよ」

セレネは二階の窓を指さした。灯りがないはずなのに、ちらちらと光が見え隠れしている。

「お化け屋敷みたいですわね、ヘスティア」

「少しワクワクしますわね、姉様」

カロー姉妹は少し浮足立った声色で会話している。彼女たちはとっくに門を乗り越えてセレネ側に来ている。

こちらに来ていないのは、ノットただ一人だった。

「もしかして……あなた、怖いのですか？」

「まさか！ オレが怖いなんてありえない！」

ノットは怒ったように言うと、セレネの後に続いて門を乗り越えた。

「それにしても、ゴースト先輩。ここに『例のあの人』が暮らしていたのですか？」
「それは分かりません。ですが、あいつの父親が暮らしていた屋敷です」

いままで調べた記録によると、ヴォルデモートの父親は彼が産まれる前に妻を捨てて屋敷に戻って来た。それ以後、我が子のことを気にかけた様子もなかったらしい。

そして、死んだ。

ある夜、毒殺、刺殺、射殺、絞殺、窒息の跡もない、まったく傷つけられていない状態で。

「おそらくですけど、父親は『例のあの人』自身の手によって殺されたのですね。マグル生まれであることを嫌悪していたみたいですし」

「なら、ここには『闇の帝王』の痕跡はないんじゃないか？」

「そうですね。可能性が限りなく低い。ですが、0%ではありません。だから探

す、それだけです」

「本当に……それだけか？」

「さあ、どうでしょう」

セレネは不敵な笑みを浮かべた。

理由は単純。面白そうだからである。カロー姉妹が言ったように、お化け屋敷みたいで楽しそうだったからだ。ヴォルデモートの痕跡を探るのも理由の一つだが、夜の屋敷に侵入して探すのは少し心が躍った。優等生らしくない行動だが、たまにはいいだろう。

「姉様、姉様。これは……この壁に開いた二つの穴は……？」

「ヘスティア、それは通気口よ、ええ、きつとそうよ」

「ですが、姉様。このような細い穴では空気を通す意味をなさないので？」

カロー姉妹は電気のコンセントに興味津々だ。

ランプを近づけてじっと見つめている。

「フローラ、ヘスティア。一応、杖だけは忘れないようにしなさい」

セレネは杖を握りしめながら二人に声をかけた。

「どこに闇の魔術が隠されているか、分からないのだから。それから、それは電気のコンセント。通気口ではないわ」

「電気……？ マグルが魔法の代わりに使うものですか？」

「ええ。結構役に立つのよ、ホグワーツの外では」

セレネはそう言いながら階段を上った。

一応は先ほど、外から見えた灯りの正体を目指して進んでいる。もしかしたら、地元の子供たちが遊び半分で忍び込んでいるのかもしれないが、もしかしたら闇の魔術に関する何かかもしれない。少し用心しながら、階段を上っていく。

「マグルの絵画は動かないんだな……ん？」

ノットが小さく呟く声が聞こえてきた。

セレネがノットの方を振り返ると、ちょうど彼の傍を一匹のネズミが通っていくところだった。

そう、指が一本足りないネズミだ。

「『アクション——来い』!!」

セレネは考えるより先に呪文を叫んだ。

途端、ネズミがセレネの手の中に納まる。ネズミは手から逃れようと、キーキー鳴きわめきながら抵抗していた。

「おい、ゴースト！ 未成年の魔法の使用は——」

「禁じられているかもしれないけど、そうでもしないと捕まえることができなかったもの——痛っ！」

ネズミがセレネの指を思いっきり噛んでくる。痛みで目を細めながら、血が滲む様子を見下した。

「このネズミ風情が……先輩に傷をつけるなんて……」

「ええ、姉様。許せません。許しがたいことです」

カロー姉妹が静かに怒りを燃やしている。

「アバダ・ケダブラを使いますか？」

「磔の呪いをかけた方がいいでしょうか？」

「……二人とも、過激すぎよ。もう少し優し目の呪いをかけなさい。」

それに、『許されざる呪文』をこのネズミにかけたら、アズカバン行きよ。だって、これ、人間だもの」

「人間？……ということは、動物もどきか？」

ノットが不審そうに目を細める。

「マクゴナガルが猫に変身するように、こいつはネズミに変身してると？」

「ええ、それも例のあの人の配下、ピーター・ペティグリュ」

てつきり、ヴォルデモートが身を隠していると噂されるアルバニアに向かったと思っていた。まさか、ロンドンから300キロも離れた片田舎に潜んでいるとは驚きである。

「だが、どうやって証明するんだ？」

「そうですね……」

セレネは考え込んだ。

1 番手っ取り早い方法は、『フィニート・インカンターテム―呪文よ、終われ』だ。呪文すべてを終わらせる魔法なので、おそらく動物もどきの変身も解ける。しかし、この状況で解いてどうしろというのだろうか。未成年の魔法使い四人で元に戻ったペティグリューを拘束するのか。拘束したとしても、どうやって大人に伝えればいいのか。

あれこれ考えを巡らせたが、自分たちでどうにかできる問題と思えなかった。セレネは肩を落とした。

「……仕方ない。ノット、このネズミを持っていてくださいね」

セレネは暴れるペティグリューをノットに手渡すと、再び杖に力を込めた。

「『エクスペクト・パトローナム―守護霊よ、来たれ』」

杖の先から現れた白い煙が銀色の大蛇になり、空を這うようにして飛び去って行く。

「……スネイプ先生に伝言を送りました。上手く着くといいいのですが」

守護霊に伝言を持たせる呪文である。先学期末、ダンブルドアはひょいっと簡単に行っていたが、非常に高度な技量が必要になってくる。セレネはこれまで何度か試してみたのだが、一向に上手くいかない。今回も上手くいっている保証はなかった。

というよりも、上手くいかない可能性の方が高いのだ。無理だった時の対抗策を、早急に考えないといけない。

ところが、5分後。

ネズミが逃げ出さないように格闘していると、ぼんつと軽い弾くような音と共に、スネイプが現れたのである。彼は休暇中にもかかわらず、ホグワーツで教鞭を

とっている時と同じ黒いローブを纏っていた。

「セレネ・ゴント、未成年者は学校の敷地内以外で魔法を使用してはいけな
習ったはずだが？」

「すみません、先生。火急の要件でして……」

この様子だと、守護霊に伝言は乗せられていなかったのだろう。

セレネは少しだけ悔しい気持ちになったが、いまはそんな些細なことよりペティ
グリュである。

「実はこのネズミのことなのですが……」

セレネが事情を説明すると、スネイプは静かにうなずいた。

「なるほど……事情は分かった。にわかには信じがたいがな。だが、試してみる価

値はある。

これは、実に簡単な呪文で正体を明かすことができるのでな。カロー、下がっているがいい。ノット、ネズミから手を離すな」

スネイプは杖を抜くと、無言で杖を振った。すると、青白い光が杖からほとばしった。ネズミは宙に浮き、そこに静止した。小さな黒い姿が激しくよじれた。そして、ぽとりと地面に落ちて、そして――

「この人が、ピーター・ペティグリュー？」

一人の男が手をよじり、後ずさりしながら立っていた。

まばらな色褪せた髪はくしゃくしゃで、てっぺんに大きな禿があった。ネズミ臭さが漂っており、はあはあと浅く早い息遣いでセレネたちを見渡した。

「せ、セブルス・スネイプ……」

「久しぶりだな、ペティグリュウ。まさか、我輩のことを覚えていたとは」

ペティグリュウが何か答えようとする前に、スネイプはまた杖を鞭のように振った。杖先から縄が飛び出し、瞬く間にペティグリュウを拘束する。

「す、スネイプ。学生の時のことは悪かったと思ってる。だから――」

「我輩としては、どうして12年間、生きながらえてなお姿を現さなかったことの方が不思議だ」

スネイプはねっとりとした声色でペティグリュウに話しかける。ペティグリュウはキーツとネズミのような小さな悲鳴を上げた。スネイプはそんなペティグリュウを一瞥すると、セレネたちの方へ視線を向けた。

「この男は一度、しかるべき場所へ連れて行く。カロー、ノット。君たちの保護者にも、迎えに来るよう連絡しておこう。セレネはここで待っているがいい。我輩が

直接送ろう」

スネイプは二匹の白銀の鹿を創り出すと、ペティグリューを連れて姿くらましをした。

おそらく、彼が作り出した守護霊は、伝言をノットとカロー姉妹の保護者に伝えるに行ったのだろう。スネイプは顔色一つ変えずにあそこまで高度な呪文を成功させたのだ。セレネは、やはりホグワーツの教師は凄いと感心した。

最初に来たのは、ノットの父親だった。

セレネの手を握り、「これから息子をよろしく頼む」と言うと、ノットを連れて颯爽と姿くらましをして去って行った。

フローラとヘスティアの両親は来なかった。

代わりに来たのは、彼女たちの従兄であった。アレクト・カローと名乗った従兄は、ずんぐりしていて目が細い。色白で不健康そうな男であった。

「ほう……お前が『スリザリンの継承者』か」

と、じろじろとセレネのことを値踏みするように視てくる。

実に気色悪い視線である。さらに、さっさと帰ってくればいいのに

「またスネイプは戻って来るんだろ？ オレはあいつに話があるんだ」

と言い出し、そのあたりをぶらぶらと歩き回り、そこかしこに置かれているマグルの製品にケチをつけている。

やがて、アレクトは

「ん、あっちに灯りが見えるぞ」

と叫ぶと、階段を上って行ってしまった。姿が見えなくなると、フローラが申し訳なさそうな顔で謝って来た。

「すみません、ゴースト先輩。従兄が失礼なことを……」

「いいのよ、別に構わないわ」

セレネがそう言うと、再びぼんつと軽い音が聞こえてきた。

スネイプが戻って来たのかと思ったが、現れたのはマクゴナガルだった。

「スネイプ先生は手が離せない状態ですので、私が代わりに来ました。ゴースト、貴方を自宅まで送りましょう。」

フローラ・カロー、ヘスティア・カロー、貴方たちの保護者はまだ来ないのですか？」

「マクゴナガル先生、それが……上へ行ったきり帰ってこないのです」

「従兄のアレクトが来たのですけど……」

「アレクト、ですか」

マクゴナガルの眉がぴくつと動いた。

「仕方ありません、呼んでくることに——」

と、マクゴナガルがそこまで言ったときだった。

アレクトが戻って来た。

しかし、様子がおかしい。白い顔からさらに血の気が失せ、身体中がぶるぶると震えている。右腕を痛そうに抑えながら、血走った眼はある一点を見つめていた。

「……アミカスを呼んでこねえと……はやくしねえと……」

小さい声でなにやらぶつぶつと呟いている。狂ったように呟く様子は、まさに異様であった。

「アレクト・カロー？」

「い、いや、なんでもない。なんでもない！ ほら、フローラ、ヘスティア。さっさと帰るぞ」

すぐにでもこの場から逃げ出したいと言わんばかりの早口で、双子姉妹の手を握り「姿くらまし」をした。

一体、彼は何を見てしまったのだろうか。上の階にはなにがあるのだろうか。セレネは上を見上げる。たしかに、階段の踊り場の先——廊下の一番奥のドアが半開きになっており、隙間からちらちらと灯りが漏れていた。黒い床に金色の長い筋を描いている。

「……誰かいるのでしょうか？」

「そうですね。ですが、あとのことはマグルに任せましょう」

マクゴナガルが下の階を指さした。

腰の曲がった男が鍵をじゃらじゃら鳴らしながら上って来るのが見えた。おそら

く、この屋敷の管理人か誰かだろう。

ここにいては、少し面倒なことになりそうだ。

セレネはマクゴナガルが差し出した手を握りしめた。

はたして、アレクト・カローは何を目撃したのか。

管理人のマグルが、このあとどうなってしまったのか。

それが分かるのは、
まだまだ先の未来の話。

41 話 ホグワーツ特急に乗って

『クイディッチ・ワールドカップでの恐怖』……か』

セレネは日刊預言者新聞の一面をさっと流し読みした。

写真の中では、ヴォルデモートの証、通称「闇の印」がちかちかと点滅している。クイディッチワールドカップで起こった死喰い人たちの暴動と死人が出た噂のことが記載されていた。

ペティグリューのことについては、本当に小さな記事しか出てなかった。

しかも、記事によれば、魔法省大臣が事情を聴きだすために連れて来た吸魂鬼がペティグリューに襲いかかり、12年前の事件の詳細を話すことができなくなってしまったらしい。

結果、まだシリウス・ブラックの容疑は晴れず、指名手配されている。12年前のマグル大量殺害事件の真相は闇のままだ。

「まあ、どうでもいいけど」

新聞をベッドの上へ放り投げる。

ブラックの生死はもうどうでもいい。

無実なものにも関わらず、腕を斬ってしまったことは申し訳なく思っている。恨まれているかもしれない。

だが、それよりも大事なことは予言である。ペティグリューが捕縛されたことにより、予言は成立しなくなった。よって、ヴォルデモートの復活も阻止できたかもしれない。

そう思うと、セレネは比較的心が楽になった。

運命だの予言だの定められた未来を信じたくないし、興味をそこまで持つことができない。

しかし、もしそれが本当に実現するのであれば、全力で阻止するまでである。そして、今回はできる限りのベストを尽くした。これで駄目なら、あとは復活に備えて魔法などの修練を重ねるしかない。

「セレネ、そろそろ行く時間だよ」

下の階から、義父の呼ぶ声が聞こえてきた。

セレネは行儀よく返事をする、重たいトランクを持ち上げて階段を駆け下りた。

今日は9月1日。

ホグワーツ特急が発車する日である。

「また半年間もセレネと会えなくなるなんて、寂しいな」

義父のクイールは寂しそうな笑みを浮かべた。

「たまには手紙を書いてくれると嬉しいよ」

「分かりました、お義父さん」

車にトランクを詰め込みながら、セレネはにっこりと笑い返した。

「なにか学校で困ったことや危険が迫った時は連絡するんだよ。できる限り力になるから」

「ありがとうございます」

「……絶対だよ？　僕は君のお母さんから君を託されているんだからね」
「お母さん、ですか」

セレネは小さく呟いた。

セレネは自分の母親の顔を知らない。

名前はメアリー・スタイン。性別は女。クイールの友人。科学者？であり、東洋に旅行する趣味がある。この程度の情報しか知らなかった。

「お義父さんは心配し過ぎです。私、もう大人ですよ」

セレネは後部座席に乗り込みながら、やや怒ったような口調で言ってみる。
すると、運転席のクイールは少し乾いたような笑い声をあげた。

「ははは、セレネはまだまだ子どもだよ。14歳じゃないか。だから、僕に心配させてくれ」

「それでも、私は十分大人です。学校の規則を破ったこともない優等生です。なので、心配しなくても大丈夫です」

ぷいっと口を尖らせて言えば、クイールは苦笑いをしながらエンジンをかけた。しばらく車内は静寂に包まれる。車にぶつかる雨音だけが、やけに響いて聞こえた。ホグワーツに着く頃には雨がやんでいるといいな、なんて考えながら窓の外を見つめる。灰色の風景に自分の浮かない顔が映し出され、セレネは心の中で舌打ちをした。

こんな風景を見ると、昨年度、吸魂鬼に襲われて医務室に入院したことが蘇ってくる。

あの夜も今のように自分の顔は歪んでいて、雨が窓に弾けて流れていった。

「……メアリー・スタイン」

だからだろうか。気がつくと、セレネはぼつりと呟いていた。

「私のお母さんは、どのような人だったのですか？」

「それは……」

クイールは言い淀む。そして、言葉を選ぶように教えてくれた。

「セレネのお母さんはね、不思議な人だったんだよ」

「不思議？」

「丘の上のお屋敷に住んでいてね、幼い頃から僕と一緒に遊んでいたんだ。でも、学校は別々だね。大きくなると彼女はフランスの学校に留学したんだ。よくね、フランスから手紙が届いたよ」

その時のことを思い出したのだろう。クイールの目元が緩んだのが見えた。

「ボーバトンだっけ？ そんな感じの名前だったよ。ピレネー山脈のどこかにあるって言ってたっけ。」

その学校を卒業してからは、ずっと屋敷にこもって研究していたよ」

「どのような研究ですか？」

「それが、僕が聞いても笑って答えてくれないのさ」

クイールの答えに、セレネは眉をひそめた。

「もしかして、怪しい研究をしていたのでしょうか？」

「あはは、そうかもね。だって、子どもの頃……メアリーは言ってたんだ。『私の将来の夢はあるモノを創り出すこと』だって」

「あるモノとは？」

「それは、さすがに教えてくれなかったよ。なんとなく、想像は出来たけど」

「……そうですか。ちなみに、私の父は？」

すると、彼は悲しそうな顔になった。ゆっくり首を横に振り、知らない口にする。

「あの家に男の人が出入りしているところは、一度も見たことがないんだ。だから、あの日——メアリーから乳飲み子のセレネを託された日は、とても驚いたよ。」

『名付けは、セブルス・スネイプに頼みたい。ただし、ミドルネームはマールヴォラ。ファミリーネームはゴント』って」

「もう、すでにゴントというファミリーネームは決まっていたのですか？」

「うん。そうだよ」

セレネは口元に手を添えて考え込んだ。

その時点で、自分のミドルネームとファミリーネームは決まっていた。

ゴント家の当主に、マールヴォロ・ゴントと言う名の男がいる。

あまりにも彼と似たミドルネーム。そして、ファミリーネームは蛇語を使えるゴントだ。こうなると、随分と父親候補が限られてくる。

しかし、これは明らかに矛盾が生じてくる。

マールヴォロはもちろん、『生粋の貴族魔法界家系図』に記されていた最後のゴント家の人物、モーフインもセレネが産まれる遙か昔に死んでいる。

そうなると、残された人物はトム・マールヴォロ・リドルのみとなってしまう。つまり、ヴォルデモートだ。セレネとしては、あんな亡霊紛いの大量殺人鬼が父親だと思いたくないし、絶対に認めない。

「それまで、母はゴントの関係者と付き合っていなかったのですか？」

「そうだね、ゴントなんて初めて聞いたから『ゴントってどんな男なんだ？』っ

て聞いたことがあるんだ。そしたら、凄い剣幕で『いまはそれどころじゃない』って怒られたよ。

……それから数時間後に……」

クイールは顔をわずかに伏せた。

「メアリーの屋敷から、父親の遺体が発見されたんだ」

「……えっ？」

セレネはクイールの顔をまじまじと見つめた。

クイールはちらりとセレネの方を一瞥すると、申し訳なさそうな顔になった。

「君も大きくなったから言っている頃かもしれない。

僕が『やっぱり、赤子なんてあずかれないよ』って言いに行ったんだ。そしたら、家の鍵が開いていて、玄関に入ってすぐのところ……倒れていたんだよ。白い髪で赤い目をした男が」

「それって……」

セレネが身を乗り出したとき、車はキングス・クロス駅の駐車場に停車した。

「この話の続きは、またクリスマス休暇にしよう」

「そんな……」

とてもいいところだったのに、とセレネは頬を膨らませた。御馳走を目の前で取り上げられた気分である。

クイールはどこか寂しそうな笑顔で車からトランクを下ろした。手際よくカートに載せると、駅構内に向かって押し始める。

「それなりに長い話になるんだ。君は……あまり、思い出したくない話もあるだろうし」

「そんなものではありませんよ」

「強がらなくていいんだ。君はまだ庇護される存在なんだからね」

クイールはセレネの髪を優しく撫でた。

その手は少し硬かったが、撫でられているとじんわりと身体が温かくなっていく気がした。

「だ、大丈夫ですから！」

セレネは頬を赤らめると、その手から逃れる。そのままクイールからカートの持ち手を代わると、てきぱき9と3／4番線へ急ぐ。

そんな時だった。

「あっ、ゴーストじゃないか」

聞きなれた声に、優等生の仮面をつけ直す。

振り返ると、そこにはドラコ・マルフォイがいた。彼の下僕——クラブとゴイルの姿は見えない。代わりに、父親であるルシウス・マルフォイがいた。

「こんにちは、マルフォイ。良い夏休みでしたか？」

「もちろんさ。僕はクイディッチワールドカップの決勝戦を貴賓席で観覧したんだ。目の前でビクトール・クラムがウロンスキー・フェイントをかけるところを見たのさ」

どうだ、と言わんばかりの表情で自慢話をしてくる。

生憎、セレネは箒に興味はあってもクイディッチにそこまでの関心はない。

「そうですか。貴賓席とは凄いですね」

「そうだろう。父上が聖マンゴ魔法疾患障害病院に多額の寄付をして——」

「それよりも、前を見ていないと柱にぶつかりますよ」

「えっ——うわっあ」

マルフォイは間一髪のところまでカートを逸らし、柱を回避した。少し恥ずかしかったのだろう。彼の耳が真っ赤に染まっていく。セレネはそんな少年を横目で見ると、ルシウス・マルフォイに頭を下げた。

「こんにちは、マルフォイさん。クリスマスは招待してくださり、ありがとうございます
いました」

「あれは、ドラコがしたことだ。礼を言われるようなことではない」

そんなことを話していると、クイールが少し嬉しそうに目を輝かせながら近づいてきた。

「セレネ、もしかして学校の友だち？」

「え……いえ、友だちというよりも同寮の同級生です」

「そうなんだ。僕には仲がよさそうに見えたけどね。君、セレネと仲良くしてくれ

てありがとう」

マルフォイはクイールを見ると何も答えなかった。

純血主義の彼にとって、マグルなど虫けら以下の存在である。ただ、小さく、本当にわずかに黙したまま頭を下げると、セレネの方を振り返ることもなく早足で去って行った。

もしかしたら、クイールがマグルとはいえセレネの育て親だったからかもしれない。

意外と礼儀正しい男である。セレネは口元に笑みを浮かべた。

「恥ずかしがり屋なのかな、あの子は」

「さあ、どうでしょう」

何気ない話をしながら、9と3、4番線の柵を通りに受ける。

もうすでに紅色に輝く蒸気機関車 ホグワーツ特急は入線していた。吐き出し白

い煙の向こう側に、ホグワーツの学生や親たちが大勢、ゴーストのような影になって見えた。フクロウの声も時折聞こえ、魔法の世界に足を踏み入れたような気持ちがあった。

誰もいないコンパートメントを見つけると、クイールに手伝ってもらいながら荷物運び入れた。

「それじゃあ、またクリスマスにね」

「そのときは、さっきの話の続きをお願いします」

窓から身体を少し乗り出し、ホームに立つ義父に話しかける。

これで、また約半年間も会えないと思うと少し寂しく思えた。そのうちに汽車がしゅーっという音を上げ、音を立てながら進み始めた。

「なにかあったら、すぐに連絡するんだよ」

クイールは汽笛に負けないくらい大きな声で叫んだ。

「君は、僕の義娘なんだから！」

クイールは微笑みながら手を振ってくる。セレネも大きく振り返した。そして、列車がカーブを曲がると、彼の姿は小さく小さくなり、点となって消えた。

「……行ってきます、お義父さん」

もう聞こえない相手に向かって、小さく呟いた。

セレネは席に腰を掛け直すと、鞆の中から本を取り出した。錬金術関係の本を読み、賢者の石の錬成方法を解析したいところだったが、生憎と資料が足りない過ぎる。こればかりは、ホグワーツに戻る必要があった。

しかたないので、マグルの書籍——ベオウルフを読むことにする。

セレネは汽笛を遠くに聞きながら、最初の一ページをめくろうとした——その瞬間だった。

「セレネ師匠！！！」

コンパートメントの扉が勢いよく開き、小さな影が飛び込んでくる。

セレネは考える間もなく杖を取り出し、影にまっすぐ突き付けた——が、その影はセレネの足元に蹲ると額を床にこすりつけながら、感極まる声で叫び出したのであった。

「セレネ師匠！ スリザリンの末裔様！ どうか、私を弟子にしてください！！」

42 話 新入生

「……弟子、ですか？」

セレネは困惑してしまった。

小さな子どもは、今も自分の目の前で床に額をこすりつけている。

顔をよく見ていないので詳しく分からないが、少なくとも親衛隊に所属するスリザリン生でないことだけは確かであった。

しかし、このホグワーツ特急に乗っているのも、ホグワーツの生徒であることは違う。セレネは小さく息を吐くと、杖をしまった。

「……申し出はありがたいのですが、私は弟子を取っていませんので。強くなりたいたのであれば、他所を当たってください」

「そこをなんとか！ スリザリンの末裔から直々に指導を頂きたいのです」

「……私の指導よりもホグワーツの教授陣の方が立派な指導をしてくれるわ。弟子になる以前に、授業を真面目に受けて、予習復習をしっかりとしなさい」

「謙虚なところもさすがですー！」

その子は顔を上げると、目をキラキラと輝かせながら見つめてきた。その眼に見つめられるとセレネはだんだんむず痒くなってくる。

「そもそも、貴方は誰ですか？ いきなり扉を開けるなんて、礼儀がなくなっている」

「あっ、申し遅れました」

ぴしっと立ち上がると、これ以上ないくらい背筋を伸ばした。

「僕は、グラハム・プリチャード！ 今年の新入生——」

と、彼が名乗り始めた、その時のことだった。

「そこまでです」

開けっ放しになった扉の向こうに、2人の少女が姿を現した。

フローラ・カローにヘスティア・カローだ。彼女たちは塵芥を見るような視線をグラハムに向けていた。

「通報を受けました。ゴースト先輩に直接弟子入りを志願する不届き者がいると」
「私たちでさえ、恐れ多くてできないことをやってのけるなんて……なんて、羨ましい！」

「代わりに、私たちから教育を授けてあげましょう」

静かな怒気を孕んだ声色で通告すると、それぞれ片方ずつグラハムの腕をつかみ上げた。

「えっ、えっ？ な、なにが起きるんですか!？」

「言い訳は私たちのコンパートメントで聞きます」

「親衛隊に入隊するのですよね？ それならば、規則を徹底的に頭に叩き込んでもらいます」

グラハムは情けない悲鳴を上げながら、カロー姉妹に連行されて去って行った。

「……まったく、なんなんだ」

「セレネは人気者だね」

セレネがコンパートメントから顔を乗り出し、去り行くカロー姉妹の背中を眺めていると、声をかけられた。聞き覚えのあるおっとりとした声に、今度はホッと胸をなでおろす。

「ダフネ・グリーングラスですか。お久しぶりですね」

「うん、久しぶりだね。あつ、コンパートメントいっしょに座ってもいいかな？
いい席が見つからなくて」

「どうぞ……そちらは？」

ダフネの後ろに隠れるように佇む影に声をかける。

先ほどのグラハムと同じくらい小さく縮こまった影であった。セレネに話しかけられると、ひっと小さな悲鳴を上げ、ますます縮こまってしまった。なにが恥ずかしいのか分からないが、耳まで赤く染めている。

「あー、私の妹のアステリアよ。普段はこんなに大人しくなくて、いつも話しているような子なんだけど……」

ダフネはコンパートメントに入りながら苦笑いをした。

「きつと緊張してるのね。だって、アステリアはセレネのファンなの」

「ファン？ 私、特に何もしてませんが」

セレネも席に座りながら、こてんと首を傾げた。

「1年生の時はダンブルドア先生から直々に20点も貰ったし、秘密の部屋の謎を解いて『ホグワーツ特別功労賞』を貰ったし、蛇語だって使えるし、成績は1位2位を争っているし……十分、ファンができると思うよ。現に親衛隊だってあるし」

「……たしかに、それは事実ですが……」

セレネは小さく肩を落とした。

目の前で恥ずかしそうにもじもじとしているアステリア・グリーングラスにしろ、先程のグラハム・プリチャードにしろ、自分のことを直接知りもしないのに好意を持っている。その事実を知ると、なんだかむず痒い気持ちになった。

「変なことを吹き込まないでください。私は一介の生徒です」

「一介の生徒がスリザリンの巨大派閥のリーダーをしていないと思うけど」

「一介の生徒です」

セレネが強調すると、ダフネは「まあ、そんなところもセレネだよね」と言ってみて笑った。

それからしばらく、雨脚が強くなる音を小耳に挟みながら、2人で他愛もない話に花を咲かせた。

その多くはクイディッチワールドカップの話だった。

「見てこれ、ビクトール・クラムの人形なの！ ワールドカップで買ったんだ」

ダフネはミニチュア人形を出す。クラムは真っ黒な眉をした無愛想な顔をした青年だった。

「ワールドカップで直接見たんだけど、とってもカッコよかったんだ。サイン、貰いたかったな……」

「有名人からサインは早々もらえませんか。よほどの運がない限り」
「そうだよー、本当に」

ダフネはがっくりと肩を落とす。その背中を軽く叩きながら、セレネはクラム人形を見下した。セレネには、正直小気難しそうな男の良さが分からなかった。少なくとも、ダフネがほったを赤らめながら興奮気味に話すほど、彼が良いとは感じなかった。

そんな話をしているうちに、汽車は次第に速度を遅めていった。それと引き換えに、雨脚はますます強くなっていく。空は完全に黒く染まり、デッキの戸が開いたときなんて頭上で雷が鳴り響いた。外は土砂降りで、誰もが背を丸めて目を細めながら降りていく。

まるで頭から冷水を何倍も浴びせかけるように、雨は地面に激しく叩きつけていた。

一年生は伝統にしたがい、ハグリッドに引率され、ボートで湖を渡ってホグワーツ城に入る。

「……………うわ……………こんな日に湖を渡りたくないな」

ダフネは妹の背中を見送りながら、身震いをした。

セレネたち上級生は馬車に乗り込み、城を目指す。

「本当に奇妙な馬ですよね」

セレネは馬車を引く馬を一瞥した。

馬車を引く馬は、以前から気になっていた。見た目は馬というよりも爬虫類に近い。まったく肉がなく、黒い皮が骨にピッタリと張り付いていて、骨の一本一本が

透けて見える。頭はドラゴンのようで、瞳のない目は白濁し、じっと遠くを見つめていた。しかも背中隆起した部分からは巨大な翼が生えている。

魔法生物なのだろうが、あまりにも奇妙である。

少なくとも、現時点におけるセレネの知識と符合する魔法生物はいなかった。

「馬？」

しかし、ダフネはきょとんとした。

「なにもいないけど？」

「……そんなはずありませんが……」

セレネは馬車に乗り込みながら、もう一度馬に目を向けた。

やはり、白濁の目をした馬が目の前にいる。手を伸ばせば触れることだってできそう。

「すぐそこにいますよ。ほら、棒と棒の間に」

「でも、馬なんていないよ？」

「いや、馬はいるもん」

すると、セレネの脇で夢を見るような声がした。

隣に目を向ければ、先に馬車に乗り込んでいた少女がこちらを見ていた。レイブ
ンクローのネクタイを巻いている。

「あんたがおかしくなったわけでもないよ、私にも見えるもん」

「よかった。そうですよね」

「えっ、ということは私がおかしいのかな」

馬が見える人間が二人もいることで、ダフネは焦りを感じたのだろう。慌てて目をこすったが、やはり何も見えないのか、不思議だなーと首を何度も傾げていた。

ますます豪雨は激しさを増し、びしょぬれになったこと以外は特に変わったこともなく、ホグワーツに到着した。組み分けの儀では、アステリア・グリーングラスとグラハム・プリチャードを含む数人の生徒がスリザリンに入り、拍手で迎え入れた。

アステリアは可愛らしく笑っていたが、セレネと目が合うと慌てて目を逸らされてしまった。

同じくグラハムからも目を逸らされてしまったが、彼は宴中もずっと何かに怯える様にびくびく震えていた。

「……一体、フローラたちは何をしたんでしょうか？」
「気にするな。あいつらが行き過ぎた指導をしただけだ」

セオドル・ノットがセレネの独り言を拾い、はあっと疲れたように肩を落とした。ブレーズ・ザビニが彼の肩を慰めるように叩く姿が見えた。

「……なんか、申し訳ないことをしたのかもしれないね」

「そんなことはない。お前が一人でも弟子を取ってみろ。後が大変だぞ」

「そうかもしれません……」

セレネはグラハムにちらつと視線を向ける。彼は皿にフォークやナイフが当たる音だけでもびくつと震え、きよろきよと辺りを見渡していた。おそらく、彼をそのようなにした原因——カロー姉妹は優雅に上品な手つきでステーキを切り分けていた。

「さあ、新入生諸君よ」

ダンブルドアが前に立ち、手を大きく広げた。

「おめでとう。古顔の諸君よ、お帰り。」

みんなよく食べ、よく飲んだことじゃろう。いくつか知らせがある、もう一度耳を傾けてもらおうかの」

ダンブルドアは笑顔で全員を見渡した。

彼が語るのは例年通り、管理人のフィルチからの通達事項、禁じられた森への立ち入り禁止について、ホグズミード村へは三年生になってから——など、いつもの諸注意事項だった。

しかし。

「寮対抗クイディッチ試合は今年は取りやめじゃ。これを知らせるのは、わしは辛い役目での」

この話以外は。

誰もが絶句し、悲鳴を上げた。スリザリンのクイディッチチームに所属するモン

ターギューは、驚きのあまり口をパクパクさせている。

だが、しかし、同じくクイディッチチームの花形、シーカーを務めるはずのドラコ・マルフォイは違った。彼はさもありなん、仕方なしと肩をすくめていた。

これは、いったいどうしてなのか。

セレネが考えている間に、ダンブルドアは話を進めた。

「これは、10月に始まり、今学期末まで続くイベントのためじゃ。

実はもう、今年はホグワーツで『三大魔法学校対抗試合』が開催されることになった」

「御冗談でしょう!!?」

グリフィンドールのテーブルの方から大声が聞こえてくる。

「いいや、ミスターウィーズリー。わしは決して冗談なんぞ言っておらんのだ」

ダンブルドアは愉快そうに言った。

「三大魔法学校対抗試合とは、ヨーロッパの三大魔法学校の親善試合じゃ。若い魔法使い、魔女たちが国を越えて絆を築くには、これが最も優れた方法だと衆目一致するところじゃった。

夥しい数の死者が出るに至って競技そのものが中止されたのじゃが、今年から復活することにする」

いたるところで、興奮した声がささやきあうのが聞こえた。「夥しい死者」という箇所に触れている人はごく少数で、誰もが「どんな競技をするのか」とか「優勝したら何がもらえるのか？」とかそんな類の話に花を咲かせていた。

「優勝者には1000ガリオンが与えられる。じゃが、安全面を考慮して、参加資格がある生徒は17歳以上じゃ」

ダンブルドアがそう告げた瞬間に、少し騒ぎが静まった。「出場したい！」というオーラを醸し出し興奮していた16歳以下の生徒たちが、しゅんとなっている。

17歳以上ということは、6年生以上ということ。

4年生のセレネには関係ないことだった。

「セレネさんは、立候補するのですか？」

アステリア・グリーングラスが掠れたような声で尋ねてきた。

「立候補するなら、私、全力で応援します」

「……ありがたいのですが、私は10月で13歳です。参加することはできません」

「あっ……す、すみません」

アステリアは熟しきった林檎よりも赤く顔を染めると、顔を俯かせ、それっきり

なにも話さなくなってしまった。

「でも、出場できたらカッコいいわよねー」

ミリセント・ブルストロードが夢見心地な声で言うてくる。

「セレネはどう思うの？」

「私は出場したくありません。……死にたくないの」

セレネは「優等生のセレネ」ならば立候補していたと考えていた。

しかし、それ以前に死の危険は冒したくない。

死を回避し、あのおぞましい線を視ない生活を送りたいのに、わざわざ死の危険に飛び込むような真似は絶対にごめんであった。

今回は観戦するだけになってしまうが、そこから何か学べるものがあるかもしれ

ない。何にしろ、外国の魔法使いをみるのが出来るのだ。しかも、おそらく代表選手はエリート中のエリート魔法使い。そうとう凄い人が来るのだから、勉強になること間違いなしだ。

もしかしたら、なにか「賢者の石解析」のヒントに繋がるものが見つかるかもしれない。

雨に濡れて滑りやすい廊下を歩きながら、セレネは少しだけ10月が待ち遠しくなった。

……弟子入り志願者はあの子だと思いましたか？

残念、別の子です。原作では名前しか上がっていない男の子でした。
彼女の性格も変わっているので、今後もしメイク版をお楽しみください。

43 話 服従の呪文と魔法の目

新学期になり、初めての授業は散々な結果に終わった。

『魔法生物飼育学』の授業で扱った『尻尾爆発スクリュート』。

それは、いままで聞いたこともなければ見たこともない生物だった。なにしろ、殻をむかれた奇形の海老のような姿で、ひどく青白いぬめぬめとした胴体からは勝手気ままな場所に足が突き出し、頭らしい頭が見えない。それが百匹近く籠の中に詰め込まれていたのだ。

木箱の中でうようよと闇雲にうごめく様を見て、グリフィンドールの女子生徒が

「ギャーっ!!」

と悲鳴を上げて飛び退いたのは、絶対に悪くない。

パーキンソンやミリセントは卒倒して、白目をむいて気絶しかけていた。

「ハグリッド先生、この生物は……教科書に記載されていませんが」

セレネがそう言いながら『幻の動物とその生息地』を掲げると、ハグリッドは得意げな様子で答えてくれた。

「そりゃ、こいつが新種の生物だからだ。いま孵ったばかりだ。

sonで、おまえたちが自分で育てられるっちゅうわけだ！ そいつをちいっとプロジェクトにしようと思っちょる」

セレネは呆れて返す言葉がなかった。

尻尾が爆発し、針で刺してくるような生き物を生徒に任せていいのだろうか。新種ならなおさらのこと、専門家の仕事である。そのような未知の生物を生徒に触れさせ、万が一のことがあったらどうするのだろうか。

セレネと同じ班でスクリュートを飼育しているダフネ・グリーングラスは遠い目をしながら

「……魔法生物飼育学って、もつともふもふな魔法生物と触れ合える授業かなって思ったのに……」

と呟いていた。

一つ向こうの班では、ドラコ・マルフォイが

「おやおや、なぜ僕たちがこいつらを生かしておこうとしているのか、僕にはわかったよ。火傷させて、刺して、噛みつく。これが一度にできるペットだもの、誰だって欲しがるだろ？」

と、皮肉たっぷりに言っていた。

それを受け、ハーマイオニー・グレンジャーが

「可愛くないからって役に立たないとは限らないわ。ドラゴンの血なんか素晴らしい魔力があるけど、誰もペットにしたいとは思わないでしょ？」

と反論している。しかし、彼女の表情は酷く強張っている。

おそらく、あれはマルフォイを黙らせるためだけに言ったのだろう。事実、今日の授業を見る限りでは、ハグリッドも「尻尾爆発スクリュートの有効性」が分かってないようだった。

「うー、いやいや!! こんな授業はもうごめんよ!」

ミリセント・ブルストロードがスクリュートの爆発に巻き込まれ、火傷した手を庇いながら叫んだ。

「絶対にダンブルドアの許可は取っていないわ!! パパに手紙を書いて訴えてもらおうかしら!」

「本当にその通りだよ」

ダフネも涙目で同意する。

「セレネもそう思うよね？」

「まあ……そうですね」

あれが成長して手が付けられなくなったとき、ハグリッドはどうするのだろうか。それこそ、『三大魔法学校対抗試合』に選ばれたエリートに競技の中で倒してもらうのだろうか。そのことを話すと、彼女たちは苦笑いをした。

そのあとは、特に目立った事件はなかった。

ネビル・ロングボトムが魔法薬の授業中に、大鍋を溶かしてしまったことを除いては、だが。彼は魔法薬学との相性が悪く、これで溶かした鍋は六個目である。

ネビルは泣きながら樽一杯の角ヒキガエルの腸を出す、という処罰をやっていた。宿題もそこまで出されることもなく、普段のマグルの勉強と賢者の石の研究をするため図書室や秘密の部屋に通う日々を送っていた。

図書室では、ハーマイオニーとすれ違ったが、会釈をするだけで終わった。

昨年度末のシリウス・ブラックの件以降、セレネはハーマイオニーとハリーから少し避けられていた。

無理もない、とセレネは考える。目の前で無実だった男の腕を切り落とす様子を見せられたら、危ない人物だと避けられても不思議ではない。

ただ、そこまで彼らに避ける気がないのだろう。二人とも、こちらに何か伝えたような顔をしていた。

ただし、ロン・ウィーズリーは別である。

彼はいまや完全な敵意を向けてきていた。過激派のフローラたち親衛隊に襲撃されるのは、きっと時間の問題だろう。

「……止めるように先に命令を出そうかしら」

セレネは小さく呟いた。

「命令ですか？」

その言葉を拾った少年がいた。

ハッフルパフのジャスティン・フィンチ・フレッチリーだ。今日も制服のローブをしっかりと締め、背筋を伸ばして立っている。

「命令だなんて、しもべ妖精……でしたっけ？に言うみたいですね」

「気にしないでください。こちらの話です。スリザリン内で、いろいろありまして」「そうですか……なにかあったら言うてくださいね、僕、できる限り力になりますから」

そう言って、にかつとジャスティンは爽やかに笑った。

「ありがとうございます」

セレネも微笑み返したが、内心では現状、彼の助けを得るようなことは起こらないと考えていた。

マグルの世界に伝手を作るためには彼の力を借りる必要があるだろうが、今のところ必要ない。今のセレネに必要なのは、賢者の石の解析方法と他の不死に至る方法を探ること、そして、万が一にもヴォルデモートが復活したときのために備える力を手に入れることだ。

「僕、次は『薬草学』の授業なんです。玄関ホールまで一緒に行きませんか？」
「別に構いませんよ。私は『闇の魔術に対する防衛術』なので」

すると、ジャスティンの顔が少し青ざめた。

「何回目ですか？」

「防衛術の授業ですか？ 次で二回目ですけど」

セレネがさらっと答えると、ジャスティンの顔は更に強張ってしまった。

『闇の魔術に対する防衛術』

昨年度のリーマス・ルーピンが「人狼である」ことが判明し、退職してしまったため、新しい先生が担当していた。

それも悪の魔法使いと戦う歴戦の「闇払い」アラスター・ムーディだ。

初回の授業なんて、魔法使いに禁じられた三つの呪文『服従の呪文』『磔の呪い』『アバダ・ケダブラ』を目の前で蜘蛛を使って実演したのだ。

本来は魔法省が六年生以上に見せることを限定させている呪文を、わずか四年生に見せるなんてどうかしている。だが、彼の解説は分かりやすく非常に実践的であった。

なので、セレネは少し——次の授業を楽しみにしていたのである。

「あれは……ずいぶん怖かったです。セレネも気をつけてください」

「そこまで凄い呪いを実践したのですか？」

「僕は……口にするのもおぞましいです」

少し震えるジャスティンと別れると、セレネは杖を取り出した。

毎晩磨いているので、清潔に保たれている。魔法も魔力も万全、どのような呪いを習っても大丈夫な心構えもできている。

むしろ、少しでも実践的な呪いを学びたい。

セレネは少し口角を上げて、闇の魔術に対する防衛術の教室の扉を開けた。

そして、驚いた。

まさか、ムーディーが「服従の呪文」を一人一人にかけて、呪いの力を示し、果たして生徒がその力に抵抗できるかどうかを試すと発表したのだ。

ジャスティンが怯えていた理由も分かった気がする。

おそらく彼は、呪いに抵抗することができなかったのだ。

ムーディは机を一振りして机を片付けると、教室の中央に広いスペースを作った。そのとき、ノットが迷いながら手を挙げる。

「先生、それは前回、人にかけるのは違法と習いました」

「ダンブルドアがこれがどういうものなのかを、体験的におまえたちに教えて欲しいというのだ」

ムーディの義眼「魔法の目」がぐるりと回って、ノットを見据え、瞬きもせず、不気味な眼差しで凝視した。

「お前の父親が裁判で『抵抗できなかった』と証言した呪いだぞ？ ええ？ ヴォルデモートにかけられて、仕方なく悪事を働いたとな」

ヴォルデモートの名が出たとき、一同の身が固まった。ダフネとミリセントは悲鳴を上げ、パーキンソンはマルフォイにしがみついた。

「お前たちの父親のことをよく知っとるぞ……親父に言っとくんだな、ムーディが目を離さない」と

ノットは黙り込んだ。

その後、ムーディは一人一人を呼び出して『服従の呪文』をかけ始めた。

呪いのせいで、スリザリン生たちがおかしなことをし始めるのを、セレネは黙ってみていた。

クラップとゴイルは本物そっくりな豚の物まねをし、ダフネは部屋の真ん中で見事なバレエを踊り始めた。マルフォイはビートルズの曲を歌いながら、教室をケンケン跳びで三周した。マルフォイがマグルのメジャー曲を知るわけがないのに、完璧に歌いきっている。

これは、かなり恐ろしい呪いである。セレネはごくりと唾をのんだ。

自分ならば、魔法をかけられる直前に『線』を叩き切ればよいが、かかってしまっ

てはそうもいかない。呪いをかけられてから『魔眼』を使うことができるのだろうか。

誰一人として、呪いに抵抗できたものはいなかった。呪いを解いたとき、初めて我に返るのだ。

マルフォイは絶望で顔が青ざめていた。

「そんな……この僕がマグルの歌を……」

「心を強く持てば、支配を受けないですむ。いついかなるときでも、心を強く持てば支配されぬ！ まさに油断大敵！

次、ゴースト!!」

セレネが前に出ると、その杖はすぐに胸へ向けられた。

「『インペリオ—服従せよ』!」

それは、最高に素晴らしい気分だった。

すべての思いや悩みも優しく拭い去られ、漠然とした幸福感に包み込まれていく。気分が緩み、ふわふわと浮かぶような感じがした。

……ウサギの真似をしろ

誰かの声が聞こえた。

ムーディの声だ。義父よりも優しく、すべてを委ねたくなるような甘くて柔らかく包み込まれるような声である。セレネはその声に従うように、足を曲げた。

……腕を頭の横で伸ばせ。そして、教室を跳ねまわるのだ。

腕を動かしかけ、ふと——どうしてこんなことをするのだろうか？と疑問に思う。周りにはスリザリン生が多くいる。皆が自分のことを見ている。なのに、何故——ウサギの真似をしなければならないのだろうか。

……ウサギのように跳びはねるのだ。

そのようなことは、気が進まなかった。

どうしてやらなければならぬのか、ちっともセレネには理解できなかった。そうなる、いま足を曲げている意味も分からない。

セレネがふわふわした感情の中、悩んでいると、再びムーディーの声が聞こえてきた。

……早く跳びはねろ。跳ねれば楽になれるぞ。

その声と共に、ふわふわと春の長閑な氣候が雪崩れ込んできた。

ああ、このままこの声に委ねてしまいたい。そう気もちが緩んだとき、眼鏡の向こうに『線』が見えた。床一面に張り巡らされた黒く禍々しい『死の線』だ。

セレネはぎょつとして身体が固まった。

それと同時に、なんて馬鹿なことをしているのだろうという気持ちが一気に広がっていく。

……ウサギのように跳べ!!　　いますぐに!!

「やるものか!!」

セレネは闇雲に杖を振った。

次の瞬間、セレネの脳内から長閑な感覚が一掃された。

冬の朝に洗顔したように、一気にすっきり澄み渡る感覚が爪先から頭までを貫いた。

幸福感は一切なくなり、現実が戻ってくる。

すると、セレネは、いま足をかなり曲げていることに気づいた。

それと同時に、ムーディが己の前に盾の呪文を構築していることにも。

「よくやった!! わしに針刺し呪いをかけようとしたな!? よい、それでいいのだ!!」

ムーディは唸るように笑った。

杖でコツ、コツとセレネに向かってくると、肩を強く叩いた。

「見たか、おまえたち! ゴーントが打ち勝ったぞ!! やつらは、おまえを支配するにはてこずるだろうよ。スリザリンに10点をやろう!」

セレネは照れくさくなった。

完全に支配されたわけではなかったが、少し足を曲げる程度にはムーディに支配されてしまった。それはすなわち——負けを意味する。

「すごいね、セレネ!!」

ダフネに拍手で迎えられたが、セレネの心はそこまで晴れない。

結局、この時間に抵抗できたのはセレネだけだった。

「ちょっと来い、ゴースト」

終業のベルが鳴り、皆が帰る頃――、ムーディはセレネだけを呼び止めた。
青くギョロツとした眼がセレネを見据えている。

「お前のことは、ダンプルドアから聞いているぞ」

「……校長先生からですか？」

「そうだ。『闇の帝王』の配下を気取っていたクィレルと戦ったのかな」

セレネは黙った。

ムーディが何を言おうとしているのかが、まったく理解できなかったからだ。

「興味深い術を使うとも聞いた。今回はそれを使ったとは思えなかったが、一度見せてもらってもいいか？」

「……申し訳ありません。あまり使いたくないので」

おそらく、彼が言っているのは『直死の魔眼』のことだろう。

危険を感じたときは迷わずに使うが、今はその時ではない。セレネは軽く頭を下げると、ムーディは何か考え込むように黙ってこちらを睨み付けていた。

不敵な笑みを浮かべたムーディは、分厚いコートの中に手を突っ込んだ。杖を取り出すのかと思い、セレネは素早く杖を構える。だが、彼が取り出したのは使い古した携帯用酒瓶だった。酒瓶を持ち上げグイッと飲み干すと、不味そうに顔をしかめる。

「もういい、行け。今日はよくやった」

それだけ言うと、セレネを解放してくれた。

彼は、いったい何を言いたかったのだろうか。

セレネは釈然としない思いを抱えて、教室を飛び出した。

その背中を、じっと「魔法の目」が見つめていることを感じながら。

44 話 三大魔法学校対抗試合

「ボーバトン、だと？」

つい、セレネは素で呟いてしまった。

玄関ホールに掲示板に書かれていた『三大魔法学校対抗試合開催に関する諸注意事項』を読み、呆気にとられてしまっていた。

「へー、ダームストラングとボーバトンが来るんだね。楽しみだね、セレネ。……セレネ？」

ダフネが心配そうに顔を覗き込んでくる。

セレネははっと我に返ると、いつもの優等生の仮面をかぶった。

「そうですね、とても楽しみです」

「そう？　なんだか、驚いているみたいだけど……」

「そんなことはありませんよ。ほら、急がないと次の授業に遅れてしまいます」

セレネは掲示板に背を向けると、颯爽と歩き始めた。ダフネが慌てて後を追いかける音が聞こえる。セレネは冷静を装っていたが、内心はかなり動揺していた。なにしろ、自分の母親——メアリーの母校の名前と同じだからである。

マグルだと思い込んでいた母親が、れっきとした魔女だった可能性が出てきたのだ。

もしかしたら、ボーバトンが来校したら母に関する話を聞くことができるかもしれない。クイールから聞くよりも、より詳しく思い出を語ってくれるかもしれない。

そう思うと、かなり気分が弾み始めた。

具体的に言えば、グラハム・プリチャードのノートにサインするくらい気分が良

くなっていた。この事実を聞きつけた親衛隊員たちがこぞってサインを求め、セレネの前に長い行列が生じ、気分が降下したのは、また別の話である。

そして、ついにダームストラングとボーバトンが来校する日になった。

大広間はもちろん、廊下の隅から隅まで清掃され装飾がされている。この大広間1つとっても、普段とは様変わりしていた。壁には各寮を示す巨大な絹の垂れ幕が掛けられている。スリザリンは緑地に銀の蛇で、グリフィンドールは赤に金の獅子。レイブンクローは青にブロンズの鷲で、ハッフルパフは黄色に黒の穴熊だ。廊下に飾ってあった煤けた肖像画の何枚かが汚れ落としされているし、甲冑も今までにないくらい磨かれ輝いていた。

出迎えのため、玄関ホールに向かうと各寮の寮監が生徒たちを整列させていた。

「ゴイル、帽子が曲がっているぞ。クラブ、ボタンがとれている。ワリントン、

お前はもっと背筋を伸ばせ」

スネイプが低い声で注意を飛ばしていた。

そのまま、皆が並んだまま正面玄関を降り、城の前に整列した。寒い夕方だった。良く晴れ渡り雲一つ見当たらない。透き通ったような夕闇が迫り、禁じられた森の上には青白い月が輝き始めていた。

アステリア・グリーングラスたち一年生が期待で本当に震えているのが見えた。

「ほほー！」

ダンブルドアが先生方の並んだ最後列から声を上げた。

「わしの目に狂いがなければ、ボーバトンの代表団が近づいてくるぞ！」

誰もがダンブルドアの指した方向を見た。

すると、6年生が森の上空を指して叫んだ。

「あそこだ!!」

なにか大きなもの、箒よりもずっと大きいものが濃紺の空をぐんぐん大きくなりながら疾走してくる。

「ドラゴンだ!!」

グラハム・プリチャードが気が動転したような金切り声を上げた。

「違うよ、あれは空飛ぶ船だよ!」

グリフィンドールの一年生、デニス・クリービーが叫ぶ。

結論から言うと、デニスの推測の方が正しかった。

巨大な黒い影が禁じられた森の梢をかすめたとき、城の窓灯りがその影を捕らえた。巨大なパステルブルーの馬車だ。大きな館ほどの馬車が十二頭の天馬に引かれて、こちらに飛んでくる。

その天馬も金銀に輝くパロミノで、それぞれがゾウほども大きい。

「きれい……」

アステリアの感嘆する声が聞こえてきた。

金色の天馬は着地すると太い首をもたげ、火のように赤く燃え上がる大きな目でこちらを見てきた。

馬車の扉が開くと、ぴかぴか輝く黒いハイヒールが片方現れた。子どものそりほどもある靴である。続いて現れた女性は、セレネが今までに見た中で最も背が高く、貫禄のある女性だった。彼女に続き降りてきた淡い水色の薄手のローブを着た

少年少女がより小さく見えてしまう。女性は長身のダンブルドアよりも頭三つ分ほども高く、巨人かと思ってしまう。

「きつと、あれがボーバトン校長のマダム・マクシームだわ」

ミリセント・ブルストロードがセレネに耳打ちして来た。

セレネの位置からでは、マダム・マクシームとダンブルドアがなにを話しているのか分からない。ただ、マダムが寒さで震えるボーバトンの生徒たちを引き連れ、城の中へ入っていくのを見届けた。

「ほら、セレネ。あっちを見て!! 湖よ!」

ダフネがセレネの袖を引き、そちらに視線を向けると、ちょうど湖から巨大な帆船が浮かび上がるところだった。まるで、映画に出てくる海賊船のようだ。難破船のようにも見える怪しげで巨大な船は、ゆらりゆらりとこちらへ近づいてくる。

斜め前にいるカロー姉妹が

「あれが、ダームストラングですね」

「姉様、どの人も皆強そうですね」

と、乗員が下船してくる様子を見ながら、こそこそと話していた。校長と思われる男は滑らかで銀色の毛皮を羽織っている。ひどく痩せて、貧相なあごをした男だった。

少し離れたところにいるマルフォイが

「あれが、イゴール・カルカロフ校長さ。僕の父上の古い馴染みでね」

と、パーキンソンに向かって鼻高々に語っている。

セレネはダームストラングはボーバトンほど興味がない。早くこの歓迎が終わり、大広間に入って料理を食べたくて仕方なかった。

「見て！ 見て、セレネ!!」

「凄い、まさか、本物!?!」

なので、いきなり周囲の女子生徒が金切り声を上げ始めたので驚いてしまった。

「どうしたのですか、2人とも」

「ああ、セレネ。羽ペン持っていない？」

「ごめんなさい。寮にあります。なぜ、いま羽ペンが必要なのですか？」

セレネが尋ねると、ダフネもミリセントも顔を真っ赤にしながら高らかに叫んだ。

「「ビクトール・クラム様が来てるからよ!」」

と。

セレネは2人の視線の方向を辿った。すると、確かにダフネがホグワーツ特急の中で見せてくれた人形そっくりの男が歩いている。

「あれが、世界最高のクイディッチ選手ですか」

「そうよ。まさか、学生だったなんて……あー、サインを貰いたいわ」

ミリセントが蕩けた声で呟いた。セレネは彼女の背中を軽く押した。

「大丈夫です。しばらくこの城に滞在するのですから、きっと貰う機会がありますって」

「そうだといいいんだけど」

セレネも適当に言った慰めだったが、その機会は意外と早く訪れた。

歓迎の夕食の時、ダームストラングの生徒たちが、スリザリンのテーブルに着いたからである。これにはスリザリン以外の多くの生徒たちが落胆していた。

その生徒たちの顔を横目で見ながら、マルフォイは誰よりも得意げな顔をしていた。彼は身体を乗り出すようにして、クラムに話しかける。

「やあ、君があ有名なビクトール・クラムだって？　僕は、ドラコ・マルフォイ。イギリス魔法界でも由緒正しき血統の末裔さ」

マルフォイが話しかけると、クラムはむすつとした表情をした。しかし、根は律義なのだろう。マルフォイが次々に繰り出してくる問いに一つ一つ丁寧に答えている。おかげで、まだ分厚い毛皮のコートを脱げていない。

セレネはため息をついた。

「マルフォイ。彼はまだコートも脱いでいません。なのに、それを妨げるように話しかけるのは、いかがなものでしょう？」

セレネは隣の席のマルフォイに話しかけた。

「客人を優先しない行為は、スリザリン生の品位に関わると思いますか」

「うっ……」

マルフォイは喉を詰まらせたような表情になると、それ以降、しばらく何も語らなかった。

クラムを含むダームストラングの生徒たちは毛皮のコートを脱ぐと、興味津々で星の瞬く天井を眺めている。対するレイブンクローの席に座るボーバトンの生徒たちは、いまだにスカーフやショールを身に着けたまま震えていた。

これは、学校間の差異という奴だろう。

場所しかり、教育しかり。ホグワーツと異なっている。まさに、これは異文化交流だ。

「皆、大いに食べ、飲んだことじゃろう。」

そろそろ三大魔法学校対抗試合の代表選手を決める方法を発表するかの」

食事が終わる頃、ダンブルドアが大きく手を開いた。

彼の背後には、今回の対抗試合開催に尽力した魔法省の二人——ルード・バクマ
ンとバーテミウス・クラウチが座っている。

「参加三校からは各一人ずつ、代表選手を選出する。その代表選手を選ぶのは、公
正なる『炎のゴブレット』じゃ！」

ここで、ダンブルドアは管理人のフィルチが持ってきた箱を杖で三度叩いた。
すると、箱はゆっくり溶けていき、中から大きな荒削りの樹のゴブレットが現れ
た。一見見栄えしない杯だったが、その名の通り、青い炎が踊っている。

「代表選手に名乗りを上げたい者は、羊皮紙に名前と所属校名をはっきり明記、ゴ

ブレットの中に入れなければならぬ。ただし、年齢に満たない生徒は誘惑にかられることがないように。

『炎のゴブレット』の周りには、わし自らが年齢線を書くことにする」

「ダンブルドア自らが年齢線を書くのか」

それなら、ますます参加は不可能である。

眼を使い、年齢線そのものを破壊してしまえば簡単だが、そのあとに年齢線を張り直すことができない。あのダンブルドアのことだ。壊したのが何者か、すぐに突き止めてしまおうだろう。

なので、セレネはたいして気に留めることなく翌日の土曜日——ハロウィンを迎えた。

大広間の飾りつけは、すっかり変わっていた。生きた蝙蝠が群がって魔法のかかった天井を飛び回っていたし、何百というカボチャが浮かび、にたあっと笑っていた。

セレネが一足早く椅子に座り、本を読んでいると、隣にノットが腰を下ろした。

「スリザリンから誰が立候補したか、知ってるか？」

「いいえ、誰です？」

「ワリントンとモンタギュー」

「……そう」

二人とも、スリザリンのクイディッチ選手である。

二人とも昨年度はフリントの右腕・左腕として腕を鳴らしていた人物だ——が、セレネからしたら小物である。一年生のセレネにあっけなく負けていた時点で、代表選手にはまづなれまい。

「まあ、2人は無理でしょうね」

「親衛隊からも誰か立候補させるか？」

「いいえ、別にいいわ。誰が代表選手になっても、一丸となって応援すればいいだけよ」

セレネは本に目を落としたまま、淡々と言った。

親衛隊に代表選手になれそうな実力者はいるが、みんな17歳に達していなかった。

「ちなみに、他は誰が立候補したか知ってる？」

「オレが知っている限りだと、グリフィンドールのアンジェリーナ・ジョンソン。レイブンクローのロジャー・デビス。それから、ハッフルパフのセドリック・ディゴリーだ」

「みんなクイディッチ選手ね。まるで、スポーツの祭典なこと」

「……なんだか、乗り気じゃないみたいだな」

ノットが眉を上げて尋ねてきた。

セレネは本をぱたりと閉じると、自分の頭上で笑うカボチャを睨みつけた。

「今日がハロウィンだからよ」

「……ああ、そういうことか」

ノットも合点したように目を閉じる。

毎年、ハロウィンの日に何か騒動が起こっている。

1年目はトロールの襲来。

2年目はバジリスクのアルケミーがミセス・ノリスを石化させた。

そして昨年度、つまり3年目は、ヴォルデモートの支持者と思われていたシリウス・ブラックが『太った婦人』を襲った。

このように毎年何か事件が起こっているのだ。今年の『三校対抗試合』の『代表

選手』を決めるという1つのイベントはあるが、先程から感じるこの悪寒は何なのだろう。

なにか、とんでもないことが起こりそうな気がする。

「まあ、さすがに4年連続はないだろ」

ノットは樂觀的な声色で言った。

「この状況でどんな事件が起きるんだよ。名門魔法学校の校長が三人もそろっているんだぞ？　どんな事件が起きても対処できそうじゃないか」

「それはそうですけど……」

「さて、ゴブレットは、ほぼ決定したようじゃ」

ダンブルドアは髭を撫でながら、ゴブレットを見上げた。

ダンブルドアがゆっくり手を伸ばすと、ゴブレットの炎が青から紫色に近い赤へと様変わりする。火花が飛び散り、一気にメラメラと宙を舐めるかのように燃え上がった。その炎の舌先から焦げた紙が1枚、ダンブルドア先生の手の中にハラリと落ちていく。炎の色は青白い色に戻り、静かにゴブレットは燃え続ける。

「ダームストラングの代表選手は…『ビクトール・クラム』」

老人と思えないほど力強く、はっきりとした声でダンブルドアは読み上げた。
大広間が拍手の嵐、歓声の渦に包みこまれる。

「そうよ、やっぱりクラム様よね!!」

「そうそう、クラム様が代表選手に決まってるわ!!」

ミリセントとパーキンソンが黄色い声を上げていた。そのまま二人は、スリザリ
ン寮のテーブルの奥で立ち上がったクラムの後を追っている。彼は右に曲がり、教

職員テーブルに沿って歩き、その後ろの扉から、隣の部屋へと姿を消した。クラムが私たちの前から姿を消した頃、再びゴブレットの炎が赤く染まる。炎に巻き上げられるように、焦げた紙が飛びだし、ダンブルドアの手に収まった。

「ボーバトンの代表選手は……『フラー・デラクール』」

レイブンクローの席にっていた美少女が、優雅に立ち上がる。シルバードロンの豊かな髪をさっと振って後ろに流し、滑るように進み始めた。全身から『私が選ばれるのは当然よ』というオーラが滲み出ている。美少女が大広間を横切る間、たくさんの男の子が振り向き、何人か呆けたように口を開けていた。

そして、三度、「炎のゴブレット」が赤く燃えた。

次は、ホグワーツの番だ。誰もが息をのみ、身を乗り出すようにダンブルドアの声を待つ。

「ホグワーツの代表選手は……『セドリック・ディゴリー』」

まるで大統領就任式かと思われるくらいの歓声が、大広間を包み込んだ。ハッフルパフ生が総立ちになり、叫び、嬉しそうに足を踏み鳴らした。セドリックと思われる青年がニコリと笑いながら立ち上がる。その中には、普段は大人しいジャスティンもいた。笑顔で喜ぶ彼を見ていると、不思議と自分まで嬉しくなってくる。

「結構、結構。さて、これで3人の代表選手が決まった。選ばれなかった生徒も含め、あらんかぎりの力を振り絞り、代表選手たちを応援してくれることを信じている。選手に声援を送ることで、みんなが本当の意味で貢献でき——」

突然、ダンブルドアの言葉が切れた。不自然な静寂に大広間が包まれる。

「セ、セレネ。あれ……」

ダフネが手で口を覆い、ゴブレットを凝視している。ダフネだけではない。セレ

ネを含めた全校生徒が「炎のゴブレット」に目を向けていた。

「炎のゴブレット」が再び燃え始めたのだ。

何が起こったのだろうか？　と考える前に、火花がほとばしり、炎が空中を舐めるように燃え上がり始める。眼がおかしくなったのかもしれないと思い、眼鏡をさらに押し上げ腕で目をゴシゴシと擦る。そして眼鏡を元の位置に戻して見てみると、燃え上がっていた火は消えていた。

しかし、代わりにダンブルドアが羊皮紙の切れ端を凝視している。

長い長い沈黙が大広間を支配する。ダンブルドアが珍しく、困惑した表情を浮かべていた。彼にも何が起こったか分からないみたいだ。

今日はハロウィーン。

例年同様、かぼちゃがにたあと嘲笑うような事件が起きてしまったようだ。

セレネは「願わくば、巻き込まれませんように」と心の中で祈る。

「ハリー・ポッター」

ダンブルドアが長い沈黙を破り、声を上げる。

大広間の目が一斉にグリフィンドールの男の子に向けられた。セレネは石のように固まった彼に視線を向けると、内心、ほっと一息をついた。

よかった。妙な事件に巻き込まれないですみそうだと。

そんなことを想いながら、セレネはダンブルドアに視線を戻した。

彼は、ハリーの名が書かれた羊皮紙を凝視している。否、違った。羊皮紙は重なっており、もう一枚、何者かの名前が書かれた紙があった。

いま、ホグワーツの生徒の名前が呼ばれたのだ。

次は、ボーバトンかダームストラングの生徒の名前に違いない。誰もが困惑したまま沈黙を保ち、ダンブルドアが次の呼ぶ名前を待っている。

長い沈黙の後、ダンブルドアは重たい口を開いた。

「セレネ・ゴースト」

ハリーに続き、今度は自分が固まる番だった。

45 話 イレギュラーの代表選手

「ありえません!!」

気がつくつと、セレネは叫んでいた。

「私が、私が入れるはずありません!」

セレネは立ち上がり、主張していた。

いままで表向きは、まったく規則を破らない模範的な優等生を演じてきた。そのことは一部の人間を除き、誰もが知っている事実である。

ホグワーツの四年生で優等生の名を挙げるなら、セレネ・ゴントとハーマイオニー・グレンジャーの二人の名前が真っ先に上がるほどだ。四年生という枠をはずしても、セレネの名前は上がるだろう。

いままで四年間、積み上げてきたものをここで崩してたまるものか！
セレネは身を乗り出しながら、ダンブルドアに向かって叫んだ。

「筆跡を確認してみてください！ 私は——っ！」

「ハリー・ポッター！ セレネ・ゴント！ ここへ来なさい！」

しかし、ダンブルドアは意に介さない。

どこか怒ったように声を荒げながら、セレネとハリーの名前を呼ぶ。

「セレネ、行きなよ」

ダフネが優しくセレネの背中を押しながら囁いた。

セレネはスリザリンとレイブンクローのテーブルの間を歩いた。拍手も歓声も上がらない。当然である。セレネは混乱する頭で必死に事態を整理する。

自分は確実に入っていない。

少なくとも、この二日間はダフネ・グリーングラスやミリセント・ブルストロド、それか親衛隊のスリザリン生と共に行動していた。周りには常に誰か人がおり、入っていないことは自他ともに証明できる。

そうになると、選択肢は一つ。

だけれが、セレネの名前を入れた。

一番怪しいのは、カロー姉妹を筆頭とする最もセレネを崇拝している親衛隊幹部陣だが、彼らは一様に17歳を超えていない。

そもそも、彼らがハリー・ポッターの名前も入れる意図が分からない。

つまり、親衛隊は完全に白だ。

全生徒の突き刺さるような視線を感じながら、セレネとハリーはダンブルドアの前に立った。

「さあ、あの扉から……ハリー、セレネ」

ダンブルドアは微笑んでいなかった。

教職員テーブルの横を黙って進みながら、他の先生方の反応を確認する。どの先生方も、客人であるマダム・マクシームやカルカロフ、それからクラウチやバグマンも驚ききった顔を浮かべている。ハリーを鼻屑しがちなハグリッドでさえ呆然とし、口を大きく開けていた。普段、生徒の前で動揺しているそぶりを見せないマクゴナガルとスネイプでさえ狼狽している。

代表選手達が消えて行った扉から大広間を出ると、代表選手の控室に繋がっているであろう短い廊下があった。ゆっくりと降りながら、ちらりとハリーを横目で見える。

彼の表情からは、なにも読み取ることができない。

だが、あの時——ハリーが呼ばれた瞬間の様子から考えるに、彼は代表選手に自分から立候補していない。

通路を進んだ先にあった小部屋の扉を開けると、そこは暖かそうな部屋が広がっ

ていた。暖炉の火が轟々と燃えている。心地よさそうな暖炉の前に、すでに選ばれていた代表選手のクラム、フラーそしてセドリックが座っていた。3人とも——当然の反応だと思うが——なぜ新たな生徒、しかも見るからに年下の生徒が二人も入って来たのか分からないらしく当惑の色を浮かべていた。

最初に不愉快な沈黙を破ったのは、ボーバトンの代表選手、フラー・デラクールだった。

「どうしまーしたか？ わたーしたちに、広間に戻りなさいーということでは？」

どうやら、伝言を伝えに来たと思っただけらしい。

セレネは彼女にどう伝えたらいいか分からなかった。ちらりとハリーに視線を向けると、彼も困惑しており、助けを求めるような視線をこちらに向けてくる。

セレネは小さく息を吐くと、首を横に振った。

「すみません、私もどう説明すればいいかわかりません」

代表選手が三人とも、セレネたちの周りに集まってくる。

皆、とても背が高い。顔を見るためには、見上げなければならなかった。

「どーいうことでーすか？」

フラーの問いに答える前に、背後の扉が開いた。

せかせかした足と共に、ルード・バグマンが部屋に入ってくる。バグマンはセレネとハリーの腕をつかむと、はしゃいだ声で叫んだ。

「いや、すごい!! まったくすごい!! ご紹介しよう、信じがたいことかもしれないが、三校対抗代表選手だ!! 四人目と五人目のね!!」

クラムはむっとりとした顔で、セドリックは当惑し、そして、フラーはこれ以上

ない笑顔を浮かべた。ちなみに、フラーの表情こそ完璧な笑顔だったが、目はまったく笑っていない。

「とてーも、おもしろいジョークです」

「いやいや、とんでもない！ ハリーとこの子の名前が出てきたのだ!!」

すると、フラーは軽蔑したようにバグマンに言った。

「このひとは、競技できませーん。若過ぎまーす!!」

彼女が言うと、背後の扉が開き、大勢の人が入って来た。

ダンブルドアを先頭に、すぐ後ろからクラウチ、カルカロフ、マクシーム、マクゴナガル、それからスネイプだ。マクゴナガルが扉を閉める前に、壁の向こうで何百という生徒が騒ぐ声が聞こえてきた。

「マダム！」

フラーがマクシームを見つけると、つかつかと歩み寄った。

「この小さい男の子と女の子も競技に出ると、このひとが言ってます!!」

セレネはつい杖に手が伸びそうになった。

だが、寸でのところで押しとどめる。セレネがアステリア・グリーングラスやグラハム・プリチャードのことを幼く見ているように、彼女たち17歳からしたら自分たちは子供である。

ハリーも同じことを感じたのか、むっとした顔をしていた。

「これは、どういうことですか？」

「私もぜひ、知りたいですな、ダンブルドア」

マダム・マクシームに続き、カルカロフも続けて声を上げた。彼は冷徹な笑みを浮かべている。まるで彼の青い眼は氷のかけらのようだ。

「ホグワーツの代表選手が、3人とは？開催校は代表選手を3人出してもよいとは——伺っていないのですが——それとも、私の規則の読み方が浅かったのですかな？」

カルカロフは意地悪い笑い声をあげた。

ダンブルドアは何も答えない。ただ、ハリーとセレネを見下した。

「ハリー、セレネ。君たちはゴブレットに名前を入れたのかね？」

「「いいえ」」

セレネとハリーの声が重なった。

「上級生に頼んで、君たちの名前を入れたのかね？」

「いいえ！」

「ああ、でもこの人は嘘をついていまーす！」

マクシームが叫んだ。

セレネはつい彼女を睨み付けた。

「嘘ではありません！ 筆跡鑑定をしてみてください。真実薬を飲ませても構いません！ それから——」

「もういい、セレネ」

スネイプがぼんつとセレネの肩を叩いた。

マクゴナガルも怒ったように、マクシームの前に進み出る。

「まったく、バカバカしい！ ハリーとセレネが年齢線を越えるはずがありません！ 4年間、彼らを受け持ってきた私には分かります！ 上級生を説得して代

わりに名前を入れさせるようなこともしていないと、私たちは信じています!!
もちろん、ダンブルドア校長もです!

それだけで、みなさんは十分だと存じますか!」

マクゴナガルの言葉に、セレネは思わず胸を打たれた。

セレネにとって、マクゴナガルは「変身術」の先生でしかない。とても厳しく、上手く呪文を成功させたときのみ優しく微笑んでくれる先生だ。

その先生が、すっかり自分たちのことを見ていてくれたのだと思うと、なんだか無性に嬉しくなった。

「……規則は絶対だ」

一瞬静まり返った場に、クラウチの声が響き渡る。

「炎のゴブレットから名前が出た。ならば、その者は試合で競う義務がある」

「しかし!!」

カルカロフとマクシームが彼の判断に食い下がる。

その間、セレネは再び——どうして、自分の名前がゴブレットに入れられていたのかを考える。

あのダンブルドアの質問を考えるに、下級生でも上級生に入れさせてもらえれば立候補できたことが分かる。それは物凄い抜け穴のような気がするが、問題は17歳以上の人間なら、当人でない名前を入れることができたということだ。

では、その者は、ハリーとセレネの名前を入れて何をしたかったのか。

セレネは自分たちの共通点を考えてみる。

ホグワーツの4年生、眼鏡をかけている、蛇語を使える、そして、ヴォルデモートと対峙したことがある。

だが、これだけでは分らない。

次にどうしてセレネたちを出場させたかったのか。命の危険がある大会に、わずか14歳の子供たちを。まるで、殺したいと言っているようなものだ。では、セレネとハリーが死に、一番得するのは誰なのだろうか。そこまで考えたとき、セレネの顔は蒼白になった。

「……まさか、ヴォルデモートの仕業？」

セレネが呟くと、辺りはしんと静まり返った。

「なかなかいい着眼点だな、ゴースト」

コツコツと音を立てながら、ムーディが入って来た。

「魔法契約の拘束力だ。選ばれた者は戦わなければならん。簡単なことだ。ゴブ

レットからポッターとゴーストの名前が出るように仕組んだ。ポッターとゴーストが代表選手に選ばれ、死ぬようにな」

息苦しい沈黙が流れた。

その沈黙を意に介さず、ムーディは語る。

「何者かが、強力な錯乱の呪文を使い、ゴブレットを欺いた。わしの想像では、ポッターとゴーストの名前を四校目と五校目の候補者として入れ、それぞれ一人ずつしかいないようにしたのだろうよ」

「まさか！」

「……いや、そのまさかのようにじゃのう」

ダンブルドアは紙を広げる。

切れ端には、それぞれ「マハウノトコロ ハリー・ポッター」「レイエン女学院
セレネ・ゴースト」と記されていた。

誰もが息をのむ。その緊迫した空気の中、ムーディは携帯用酒瓶を開き、荒っぽい仕草で飲み干した。そして、身震いをすると同に向かって言い放つ。

「ポッターとゴーストを殺そうとしている者がいる。おそらく『闇の帝王』の関係者が、この城の中にな」

「バカバカしい、生徒の悪戯の類だろうよ」

しかし、それをバグマンが一蹴した。ムーディの魔法の目がじろりと彼を睨みつけたが、まったく意に介していない。

「さて、そろそろ開始といきますか」

バグマンはこのような状況だというのに、なぜかうきうきとしている。ニコニコした顔をしながら部屋を見渡した。

「そうだな、規則は絶対だ」

クラウチも同意する。彼はバグマンのように喜んではない。むしろ、病気のようだった。目の下には黒いくまが浮きあがり、皺皺の皮膚に青白い顔をしている。

「君たちの勇気を試す課題だ。」

どんな内容かは教えられないが。未知のものに遭遇した時の勇気は、魔法使いとして非常に重要な資質だ。

11月24日。全生徒、並びに審査員の前にて行われる。

選手は、競技の課題を完遂するに当たり、どのような形であれ、先生方を含む一切の他人からの援助を頼むことも、受けることも許されない。自力で解決しないとしない。それから、選手が会場に持ち込める武器は杖だけだ。

第一の課題が終了後に、第二の課題についての情報が与えられる。試合は過酷で、また時間にかかるものであるため、選手たちは期末テストを免除される。

……アルバス、これで全部だと思うか？」

「わしもそう思う」

ダンブルドアはクラウチをやや気遣わし気に見ながら言った。

「バーティ、さっきも言うたが、今夜はホグワーツに泊まっていた方がよいのではないか？」

「いや、ダンブルドア。私は役所に戻らねばならない」

「私は泊まるぞ、クラウチ！」

同じ魔法省の役人であるバグマンが、陽気に叫んだ。

「役所よりこっちの方がずっとおもしろいじゃないか！」

そういう問題か？とツツコミたくなったが、クラウチは黙って首を横に振ると、小部屋から出て行った。マダム・マクシームはフラーの肩を抱き、早口のフランス

語で何か話しながら素早く部屋から出て行き、それに続くようにカルカロフもクラムと一緒に黙って部屋を出て行った。

両校とも、顔は強張り、怒ったような空気を纏っている。

「ハリー、セドリック、セレネ。3人とも寮に戻って寝るがよい」

ダンブルドアが微笑みながら言った。

「グリフィンボールも、ハッフルパフも、スリザリンも君たちと一緒に祝いしなくては待っておるじやろう」

セレネたちは三人一緒に部屋を出た。

大広間にはもう誰もいなかった。蝋燭が燃えて短くなり、くり貫きのカボチャがギザギザの歯を不気味に光らせていた。

「いったい、どうやって名前を入れたんだ？」

セドリックが、興味深そうに見てきた。

「僕は入れてない。本当のことだよ」

「私も同じです。入れていません」

「ふーん…そうか」

セドリックは信じていないことが分かった。そのまま、彼は大理石の階段を登らず、右側のドアから消えて行った。

「……まったく、本当に災難ですよ」

セレネは長く息を吐いた。

「セレネは……セレネは、信じてくれるよね？　僕が入れていないって」

「当たり前です。私も同じ立場なのですから。それより、よろしくお願いしますね」

セレネは当惑するハリーを見据えた。

「これで三度目です。おそらく、私たちの名前を入れたヴォルデモートの配下と戦うのは。それも二人一緒に」

「あっ……そうだね」

「それでは、せいぜい互いに死なないように頑張りましょう」

セレネは軽く手を振ると、地下に続く道を降りて行った。

肌寒い廊下を小走りで進みながら、粗く削られた石壁に向かって合言葉を唱えて寮に入る。

その途端、大音響がセレネの耳を直撃した。

何が起こったのかを把握する前に10人余りの手が伸び、セレネをガッチリと捕まえて談話室に引っ張り込む。振り払おうとしたが、セレネをつかんでいるのは、2倍ほど体格のいい年上の男子生徒達だ。腕力で敵うわけがない。抵抗も出来ないまま、拍手喝采・大歓声・口笛を吹きならしているスリザリン生全員の前に立たされた。

「……なんて、面倒なことなのかしら」

セレネが小さく呟いたことなどおかまいなしに、次から次へとスリザリン生が話しかけてくる。

「ゴースト先輩、素晴らしいです！」

「さすがです、どうやってゴブレットを出し抜いたのですか!？」

「『老け薬』も使わないで入れたなんて、びっくりですよ！」

誰もが年齢線を出し抜き、ゴブレットに名前を入れたのかを気にしている。聞きたがっている。セレネの気持ちなど気に留めることもなく。

セレネは最初こそ一つ一つ否定していたが、次から次に来る質問の波に辟易とし、上級生が軽々しく肩を叩いてきたとき——プチンと切れた。

『黙れ』

蛇語で呟き、肩の手を払いのけると一気に静まり返った。

「私、入れていないと言いましたよね？ だいたい、この私がわざわざ死ぬ可能性のある大会に出場すると思いますか？」

「……たしかに、それはないよな」

最初に口を開いたのは、セオドル・ノットだった。彼はくしゃくしゃと髪を掻きながら、面倒くさそうに眉をひそめ、セレネを見据えた。

「お前が選ばれた時の顔を見たぞ。うん、あれで入れてないと確証した。」

ということは、問題は誰がゴブレットに名前を入れたかということか？」

「……まあ、その通りね」

セレネは少し頬が赤くなるのを感じた。

ダンブルドアに名前を呼ばれた時、完全に自分は取り乱していた。あまり見られて心地の良いものではない。

「生徒にゴブレットを騙すなんてできないから、まさか……先生か魔法省の役人が騙したってこと？」

ダフネが疑問を挟む。何人かの生徒がそれに同意した。

「セレネを代表選手にして、どうするの？ 死の危険もあるのに」

「それよ、ムーディも言ってたけど、おそらく……そいつの目的は私とハリー・ポッターを殺すため」

あえて、ヴォルデモートの手先とは言わなかった。それを言わなくてもここにいる大半は気づいてくれるだろう。ポッターを殺したい人間がいるという段階で、多少勉強していればだいたい相手は予想できるはずだ。

「……ハリーはともかく、どうして私を殺すのかが分からない。継承者は2人もいないから?」

「ゴースト先輩は殺させません」

フローラ・カローが声を上げた。

その声を皮切りに、次々と声が上がった。主に親衛隊に属する生徒たちが声援を上げる。

「先輩は課題に集中してください。私たちがこの校内に紛れ込んだ『あの人』の手先を探します！」

「そうですよ、怪しい人を見かけたらすぐに知らせます！」

「がんばってください!!」

「僕たちが絶対に死なせません!!」

その声は、先ほどまでの好奇心に満ちたものではない。とても温かく、優しい声だった。セレネは目を見開いた。まさか、ここまで親衛隊を含むスリザリン生が自分と協力的だとは思わなかったのだ。

「……ありがとうございます」

セレネは声が詰まりそうになりながらも、お礼の言葉を口にする。

その一方、頭の冷めた部分で、ハリー・ポッターのことを考えていた。

いまではこんなに優しいスリザリン生たちだが、最初は好奇心に突き動かされる

まま質問攻めにされていた。自分は半ば蛇語で脅すように静かにさせたが、それはハリーにできるとは思えない。

彼は……大丈夫だろうか？

46 話 杖調べと新聞記事

セレネが思っている以上に、親衛隊の行動は素早かった。

構成員の誰もが「セレネ・ゴーントを守る」という目標に向けて、一丸となって怪しい人物、ヴォルデモートとつながりがありそうな人物について、片っ端から調査を開始したのである。

セレネが代表選手に選ばれてから数日も経てば、幅が5センチほどの調査資料が出来上がっていた。

「そう……カルカロフは死喰い人だったのね」

魔法薬学の授業に行く途中、セレネは資料をめくりながら歩いていた。セレネが何気なく書いてあった内容を呟くと、隣を歩くダフネ・グリーングラスが息をのんだ。

「……ねえ……それなら、カルカロフがセレネを殺そうとしてるの？」

「いや、それはないです」

セレネはダフネの考えを一蹴した。

「ここに、彼は『アズカバンの投獄を免れるため、多くの死喰い人の名前を告発した』と書いてあります。これでは、ヴォル……『あの人』や死喰い人に嫌われているはずですよ。」

……まあ、私の首を手土産に、仲間に戻ろうとしているのかもしれませんが……『あの人』全盛期ならいざしらず、いまは塵以下の存在になっている以上、わざわざ危険を冒してまで命を狙ってくる意味が分かりません」

「じゃあ……あんまり考えたくないけど、スネイプ先生？　元、死喰い人ってここに書いてあるよ」

ダフネはあたりを見渡すと、小声で囁いてきた。それも、セレネは首を横に振っ

て否定する。

「カルカロフと同じ理由です。わざわざ危険を冒して、私を殺す意味が分かりません」

「じゃあ……だれ？」

「それが分かれば、苦労しませんよ……ん？」

資料を鞆にしまおうとしたとき、前の方から、ハッフルパフ生が歩いてくるのに気付いた。

誰もが赤いバッジを胸に掲げている。バッジには「セドリック・ディゴリーを応援しよう！——ホグワーツの真の代表選手を！」と赤い蛍光色の文字が燃えるように輝いていた。

その中の一人——ジャステイン・フィンチ・フレッチリーの胸にも、そのバッジは輝いている。

「あっ……」

彼は、セレネが近づいてくることに気づいたのだろう。

気まずいような表情になると、バッジを隠すように胸を抑えた。バッジはちょうど色が緑色に変わり、「汚いぞ、ポッターとゴースト」という文字が点滅していた。

「あの、セレネ……これは、その……みんながしているからで……してないと、仲間外れにされるような感じがして……」

「ごほん。ゴースト、君にはもうジャスティンに関わらないでもらいたいんだ」

ジャスティンが口ごもっていると、同じくハツフルパフの男子生徒アーニー・マクミランが前に出てきた。少し胸を張るような態度で、こちらに向かってくる。

「卑劣なスリザリン生が、僕の友だちに近寄らないで欲しい」

「卑劣？ 私のが卑劣ですって？」

「ゴブレットを出し抜いて、正規の方法以外で立候補したんだろ。どう考えても卑怯者だ。……行こう、ジャスティン」

マクミランはジャスティンの背中を押しながら、セレネの横を通り過ぎていった。ジャスティンの申し訳なさそうな横顔に、セレネは胸がぎゅうっと誰かに握りしめられたように息苦しくなった。

悲しいことかな。

次の日になると、学校中の生徒がスリザリン生と同じように、セレネが自分で試合に名乗り上げたと思っていた。

しかし、スリザリン生のように誰もがセレネを応援しているわけではない。

まず一番、反感が強いのは、ハッフルパフだった。

ハッフルパフとしては滅多に脚光をあびることがないのに、その栄光もグリフィンドールとスリザリンという特に目立つ寮が横から奪い去っていったように思えたのだろう。

ジャスティンとマクミランの反応は、そこからきているのである。

ちなみに、次に反応がひどいのはグリフィンドールだ。

普段からスリザリンとは犬猿の仲であるので、これは特に驚くことではない。しかし、レイブンクローまでもが反感を掲げていることには驚いた。だが、これも良く考えれば分かることである。

グリフィンドール、ハッフルパフ、そしてスリザリンの三つの寮から代表選手が選ばれている。

レイブンクローからは誰も出場していないとなると、良い気持ちがないのは簡単に想像できた。ただ、レイブンクローの怒りの矛先は、大半がハリーに向けられている。彼らはハリーがもっと有名になるために名乗り上げたのだと思っているのだ。

「セレネ、気にしたら駄目よ！」

ミリセントがふんつと鼻を鳴らした。

「見てなさい、第一の課題でセレネが活躍するんだから!! あんなバッジをつけている奴ら、実力で見返してやればいいのよ!」

「……ありがとう」

セレネはミリセントに微笑んだ。

彼女の言う通り、選ばれた以上は実力で見返すつもりだったが、他人に言われるとさらにヤル気が沸いてくる。それに、自分のために誰かが怒ってくれたのだと思うと、少し心が温かくなった。

セレネが礼を言っていると、彼女は頬を赤らめ、ぷいっとそっぽを向いた。

「べ、別に。それより、代表選手は二号教室に集合するんだって。早く行ってきたさい。スネイプ先生には私から事情を伝えておくから」

セレネはもう一度彼女に礼を言おうと、三号教室へと急いだ。

教室には、ハリー以外の代表選手が集っていた。机の大部分が部屋の隅に迫いやられ、真ん中に大きな空間ができていた。椅子が六脚並び、その一つにルード・バグマンが座っていて、濃い赤紫色のローブを着た魔女と話し込んでいる。

バグマンは、セレネに気がつくと、嬉しそうに手を振った。

「ああ、来たな。五人目の代表選手！これから『杖調べ』の儀式をするところだ。まあ、全員揃うまで寛いでいてくれ」

「杖調べですか」

聞けば、杖の状態が万全かどうか調べる儀式らしい。

隣にいる化粧の濃い魔女は、日刊預言者新聞の新聞記者なのだそうだ。彼女が短い記事を書くらしい。セレネが軽く頭を下げると、新聞記者はずけずけと近づいてきた。

「まあ、最年少の代表選手の片割れさんしょ？　ふうーん？」

まるで、身体を舐めまわすように爪先から頭の毛先まで眺めてくる。

「男さんすか？　それとも、女？　まな板だから分からなかったさんす」

「っ!？」

セレネはつい杖に手が伸びそうになった。

たしかに、自分の顔だけは中性的である。それは否定しない。胸もそこまでなく、装いを男性向きにすれば少年と言い張ることもできそうな顔立ちである。だが、こ
うも正面からずけずけと言われたことはない。

これは、確実に侮辱だ。

セレネが静かに怒りを煮えたぎらせていると、セドリック・ディゴリーが近づいてきた。そして、新聞記者に聞こえないよう耳元で囁いてくる。

「気にするなよ、あの女は他の人にも酷いこと言ってる」

「他の人にも？」

セレネが囁き返すと、ディゴリーは苦笑いを浮かべた。

「フラーには『美しい顔の裏には、どんな醜い秘密が眠ってるのか』って言ってたし、僕にも『ハンサムボーイの隠された薄汚い本性を暴きたいものぞんすね』って」
「……それは、ひどいですね」

セレネは新聞記者——リータ・スキーターが遅れてきたハリーを引きずるように隣に併設された箒置き場に行く様子を眺めた。

いったい、もうすぐ杖調べが始まるというのに、彼女はハリーと何をしようというのだろうか。

セレネが疑問を抱いていると、ダンブルドアや審査員たちが部屋に入ってきた。審査員の後に続き、ダイアゴン横丁のオリバンダー老人も姿を現した。おそらく、

彼が杖を調べるのだろう。

「さて、そろそろ杖調べを始めようかの。……一人、足りないようじゃが？」

ダンブルドアは部屋を見渡した。

もちろん、ハリーのことである。バグマンは額の汗をぬぐいながら陽気な調子で答えた。

「ああ、ダンブルドア。ハリーはいまインタビューを受けているんだよ。えっと、どこだっけ？」

「私、呼んできます」

セレネの位置が一番、箒置き場に近かった。

セレネは戸をノックした後、そと扉を開ける。すると、リータ・スキーターとハリーが物置で窮屈そうに座っていた。

「セレネ!!」

ハリーはセレネを見ると、目を輝かせた。この女と離れられるのが嬉しくてたまらないという顔だ。よほど、この女のインタビューが不快だったに違いない。セレネは小さく息を吐くと、事務的な口調で「もう杖調べが始まるので終わりにしてください」と伝えた。ごたごた言っただけで粘るかと思ったが、リータはあっさり立ち上がった。

「いいざんしょ。あ、最後に一つだけ質問するけど……」

羽ペンがリータの脇でふわふわ浮きながら、羊皮紙に何かを書き連ねている。

「ハリー。代表選手としてライバルになる彼女のこと、どう思う？」

「え、セレネのこと？ えーと……」

ハリーの目が泳ぐ。その間にも羽ペンが動いていることが気に入らない。まだ何も話していないというのに、なにを書くことがあるのだろうか。

セレネはぐずぐず考えるハリーを出口の方へ引っ張ると、毅然とした態度でリータと対峙した。

「どう？ 戦うのは怖い？ もしかして、彼女が友達だったりする？」

「私はたとえ相手が顔馴染みであろうと、戦う覚悟ができています。ハリーも同じ気持ちです。」

それでは、私たちは杖調べがあるので、これで」

セレネはそのままハリーを引きずりながら、杖調べの会場に戻った。

「ありがとう、セレネ。おかげでたすかったよ」

「あなたのあいまいな態度がいけないのです。次は助けませんからね」

しかし、新聞記者という者は嫌な人種である。

時間を守らないし、あの羽ペンの動き方から察するに、ハリーについてないことないこと書き記していそうだ。しかも、リータ・スキーターはハリーに酷く関心を持ったらしく、他の代表選手の杖調べの時もハリーの方ばかりじっと見つめていた。他人のボロを探しているかのように……。

杖調べは、無事に終わった。

セレネの杖は、特に問題なく、最高の状態であると判明した。

問題は、後日——代表選手のことや日刊預言者新聞の記事になった日のことだ。

その日は、なぜか朝から視線を感じた。

他寮からもひそひそ声と視線を感じる。なぜだろうか、と考え込んでいると、大広間の奥からグラハム・プリチャードが駆け寄って来る。彼はセレネと目と鼻がつきそうなほどの距離まで近づくと、唾を飛ばしながら尋ねてきた。

「せ、セレネ先輩！ あれって本当ですか!？」

「……近いですよ。それに、あれとはいったい？」

「あれって、あれですよ!! 新聞の——」

グラハムがなにか口にした瞬間、彼の喉元に何者かの杖が突き付けられた。ヘスティア・カローの杖だった。ヘスティアはどこか血走った目でグラハムを睨みつける。

「そのことは禁句です、と今朝の親衛隊の通達に出したはずですが」

「ご、ごめんなさい」

「……ヘスティア、通達とは何のことですか？」

セレネが聞くと、ヘスティアは顔を真っ赤にしてぶんぶん首を振った。そして、震えるグラハムを抱えると、消え入りそうなほど小さな声で「すみません、私の口からは言えません」と呟き、走り去っていつてしまった。

いったい、どうしたのだろうか。

この日に限って、セレネの周りに話せる人がいなかった。

仕方なしに疑問を解決しないまま、朝一番の魔法生物飼育学の授業に向かう。ちょうど、マルフォイたちが得意げな顔で、ハリーたちに新聞を読み上げているところだった。

『ハリーはホグワーツで愛を見つけた。親友のコリン・クリービーによると、ハ-

マイオニー・グレンジャーなる人物と離れることは滅多にないという。この人物はマグル生まれのとびつきり可愛い女子生徒で、とても優等生だ』。驚いたな、グレンジャーのどこがとびつきり可愛い女子生徒なんだい？ ただの出っ歯じゃないか」

最後、マルフォイがおどけたように言うと、パンジー・パーキンソンがけたけたと笑った。

「そうね、グレンジャーがなにと比べて可愛いのかしら？ シマリス？」

「……あら、シマリスは可愛いと思いますけど？」

あまりに空気が悪かったので、セレネは間に入った。

ただでさえ「尻尾爆発スクリートの世話」という、やる気の欠片もわからない授業なのに、空気まで悪くされてはたまらない。

しかし、セレネが間に入ると、マルフォイたちはやけに気まずそうに視線を逸らした。普段なら「ポッターの味方をするのか？」と声を荒げそうなものだ。今日

はそれが無い。さて、どうしたのだろうか。セレネが首を傾け、新聞に目を落とし
たとき――

「……なんですか、それ」

記事の中に自分の名前を見つけて、固まってしまった。

「マルフォイ……私の見間違いでしょうか？ その記事には続きがあるようです
けど」

「あー……うん、まあそうだね。でも、君が気にするようなことじゃ……」

「ちょっと貸してください」

セレネは抵抗するマルフォイから新聞を奪い取ると、文章に目を通した。

リータ・スキーターが三校対抗試合の代表選手のことを書いていた。ただ、その
内容は八割がハリー・ポッターに関する記事である。ハリーの両親に対する思いか

ら恋の悩みまで嘘と嘘で塗り固められている。極めつけは、最後の文章だ。

『……そんなハリーの恋路に待ったをかける人物がいる。同じく代表選手のセレネ・ゴントだ。ボーイツシュで学年随一の優等生は、ハリーの心変わりを蛇のようには狡猾に狙っている。噂では、恋の妙薬を作ろうとしているらしい。あわや、ハリーの恋の運命はいかに！』

セレネは黙り込んだ。

完全に、でたらめである。

周囲の空気が冷えていくのが良く分かった。

「……そう、このことだったのね」

新聞を強く握りしめる。あまりに強く握りしめたせいで、一面に映ったハリーの顔に大きく皺が寄った。

おそらく、箒置き場での態度が気に入らなかったに違いない。自分のことを面白おかしく着色され、セレネは恥ずかしさより怒りが湧き上がって来た。怒りのほけ口が見つからず、わなわなと震えていると、セオドル・ノットが様子をうかがうように、言葉を選びながら話しかけてくる。

「あー……今朝のうちに、みんなには嘘だと伝えてあるぞ。こんな記事、誰も本気にするわけない。だから、気にするな。そうだよな、ドラコ」

「あ……あ、ああ。リータ・スキーターなんか書く記事を本気にするやつはいないさ」

「そ、そうよ。彼女の記事は脚色が多すぎて、とっても有名よ？」

ノットに続いて、マルフォイとパーキンソンも気遣うような声をかけてくる。

「……そうね、放っておけば、いつか消えていきますよね」

「そうだ。人の噂はなんとやらっていうだろ？ この僕が保証する」

マルフォイが胸を張って答える。

セレネは無理やり笑顔を作ると、マルフォイたちに向き合った。

「私の前で金輪際、その記事を口にしないでくださいね」

セレネは彼らの返答を聞かずに、城へ向かって歩き始めた。ハグリッドが授業を始めるため近づいてきたが、「体調不良で休む」とだけ言う。

そのままセレネは誰もいない廊下を歩きながら、三階の女子トイレ——秘密の部屋
の入口を目指した。

47話 第一の課題（前編）

秘密の部屋の奥……そこには、サラザール・スリザリンが真の継承者のために残した書齋が眠っている。

セレネは書齋に荒々しく足を踏み入れると、片っ端から呪い関係の本をめぐり始めた。

ここまで真剣に呪いや闇の魔術を調べたのは、生まれて初めてである。

自分を徹底的に馬鹿にし、屈辱の泥を塗ったあの女を許しておけるはずがない。これまで積み重ねてきたイメージが、あの女が書いた数行のせいで台無しである。

いかにして、あのリータ・スキーターに制裁を下すべきか。

嘘を嘘で塗り固めるのが趣味で、なおかつ、それに対してまったく嫌悪感を抱いていない厚化粧女に、どのような呪いをかければこの屈辱を晴らすことができるのだろう。

呪いを受けてあの女が泣いて詫び、這って許しを乞うような呪いはどこにあるの

だろうか。もっとも、全身全霊で謝られても許すつもりは一ミリたりともない。

『……継承者様？　どうかされましたか？』

するとバジリスクのアルケミーが姿を現した。

セレネはアルケミーを一瞥すると、不敵な笑みを浮かべた。

『そうよ、アルケミーを使えばマスゴミ女を……！』

セレネは目を輝かせた。

アルケミーは二年前——厳戒態勢のホグワーツ城内でも、誰にも気付かれずにマグル生まれの生徒たちを襲ってきたのだ。

警戒心の薄そうなマスゴミ女など、一瞬で殺すことができるだろう。

眼で睨み殺してもいい。

猛毒の刃で噛み殺してもいい。

前者は痛みを感じる間もなしに、あっけなく死ぬ。

後者は痛みにうめきながら、みじめったらしく死ぬ。

ああ、なんて素晴らしいのだろうか。

と、ここまで考えて、セレネは首を横に振った。

バジリスクを使えば、手っ取り早くリータ・スキーターを殺すことができるが、
なにも殺すまで望んでいない。侮辱された程度で殺していては、それこそヴォルデ
モートと同じになってしまう。怒りのまま行動するのは良くない。

それに、アルケミーはマスゴミ女を一睨みで殺してしまう。

それでは、後悔させることも這いつくばって許しを請わせることもできない。

噛み殺す方が、まだ現実的である。

アルケミーにマスゴミ女を噛ませて、苦しみでのたうちまわっている相手の目の
前で解毒剤を提示し、いろいろと懇願させてもいい。理想を言えば、さんざんリ

タ・スキーターに屈辱的な懇願させたあと、目の前でにこやかに笑いながら解毒剤を割るのだ。

それはきっと、彼女の顔が絶望の色で染まることだろう。

ただ、アルケミーは関係ない。

これは、セレネとリーター・スキーターの問題である。

アルケミーの手を汚すような問題ではなかった。

『マスゴミ女とは……なんです？』

『……いいえ、こっちの話よ』

セレネは大きく深呼吸をした。

古書特有の少し黴臭い香りをかぐと、少し気持ちが落ち着いてきた。

リーター・スキーターを始末するのは、いつでもできる。

方法も目星がつき始めた。

しかし、今重要なことは火曜日に迫った「第一の課題」だ。これは、まだ「勇気を試す課題」という情報以外、なに一つ手に入れていない。

課題はぶつつけ本番でもかまわないが、可能な限りの備えをしておきたかった。調べられるだけのことを調べて、万全の状態で課題と向き合いたい。

そこで、セレネは既に図書室で過去に行われた第一の課題の内容を調べてみた。すると、その多くは狂暴な魔法生物と戦うという趣旨の課題であった。

「ケルベロスかキマイラか、それともヒュドラか……」

セレネは背もたれに思いっきり寄りかかると、天井を見上げた。一年生の時、ケルベロスに脅威を覚えなかったのは『音楽を聞けば眠る』という対策を講じていたからである。今回は、まだどんな狂暴な生物と鉢合わせになるのか知らされていない。

『ねえ、アルケミー。狂暴な魔法生物が校内に入ってこなかった？　もしくは、そういう噂を聞いていない？』

『ああ、一件だけありますよ。禁じられた森の奥に、ドラゴンが入ってきました』
『ドラゴン？』

セレネは跳ね起きた。勢い良く起きたものだから、椅子ががたんと大きく音を立てる。

『何頭？』

『たしか、五頭だったと』

『……間違いなく、第一の課題の相手ね』

完全にビンゴである。

ドラゴンといえば、分厚い鱗の持ち主で、その皮膚は最強の呪文以外は貫くこと

ができないと言われるほど倒すのが困難な魔法生物だ。ベテランのドラゴン使いたちでさえ、数人で一斉に失神呪文をかけて、ようやく動きを鎮静化させるほど扱いが難しいと本で読んだことがある。

『ドラゴンの弱点は目だけ……いい魔法が思いつかないや』

ロックハートの『狼男との大いなる山歩き』のなかでもドラゴン退治の場面が出てきた。その際、ロックハートはドラゴンの弱点である目に狙いを定め、『結膜炎の呪い』をかけたのだ。その結果、ドラゴンは盛大に暴れまわり、あやうくロックハートと狼男は踏み潰されそうになる。あわれな狼男はここで逃げ遅れ、ドラゴンに踏まれて片腕を失うことになってしまうのだ。

よって、下手に弱点を狙うわけにもいかない。

『継承者様、私でよければ戦いますけど。ドラゴンなんて一撃で倒せます』

『アルケミー対ドラゴンか……』

セレネは少し想像してみた。

ローマのコロッセオのような競技場で、狂暴なドラゴンとバジリスクのアルケミーが対峙している。

いくら牙があり、そこらの魔法は受け付けず、火を吹けるドラゴンでも、アルケミーの魔眼を見てしまったが最期だ。バジリスクの眼からは、たとえドラゴンであつたとしても逃れることができない。

勝負は一瞬で着く。

しかし――

『とてもいいけど、それだと観客に甚大な被害が出そうね。ありがたいけど、遠慮しておく』

『そうですか……いい案だと思ったのですけど』

アルケミーはしゅんつと項垂れた。

可哀そうだが、観客もバジリスクの魔眼の巻き添えをくらうだろう。ゆえに、この案は却下しなければならない。

『でも、バジリスクって案はいいかもね』

セレネは口の端を上げると、開いたままの本を閉じた。

そもそも、第一の課題は『勇気を見る』ための課題だ。

ドラゴンを倒す課題ではない。

第一、訓練や飼い慣らしをすることが不可能と言われているドラゴンを、わずかに17歳の代表選手が倒せるとは思ってもいいはずだ。

つまり、出し抜くことが出来た時点で試合終了、と考えるのが妥当なところだろう。

そうなる、とるべき作戦は定まってくる。

「さてと、魔法の練習をしないとね」

セレネは腕まくりをした。

火曜日に行われる課題まで、あと残り一週間もない。それまでにとある術を完璧にマスターしなければならぬ。

賢者の石の研究は落ち着くまで凍結するとしても、課題と並行してリータ・スキーターへの仕返しも煮詰めなければならない。できれば、第一の課題が終わってすぐにスキーターの件は決行したい。

やることは山積みだ。

セレネは杖を構えると、さっそくマスターする呪文を詠唱した。

さて、ついに月曜日になった。

明日は課題本番である。

一応、必要な魔法はすべて習得することができたが、本番に緊張してしまうと
限らない。

午後に授業もなかったのも、はやく秘密の部屋に行って最後の調整をしよう、と
思ったときだった。

「セレネ！」

ハリーが後ろから走ってきた。

セレネは居心地が悪くなった。まだ例の記事が出て数日余り。彼と一緒にいたら、なにかと噂されてしまう。

「……どうしたのですか？ 私、急いでいるの」

だから、すこし素っ気ない態度をとってしまった。
しかし、それをハリーが気にする様子はなく

「セレネ、第一の課題はドラゴンだ」

早口でしゃべりかけてきたのだ。

セレネは少し目を見開いた。

「ドラゴン？」

「うん、五頭だよ。1人に1頭ずつ。僕たち、ドラゴンを出し抜かないといけないんだ」

「……そうですか……」

セレネは驚いてしまった。

ドラゴンのことは事前に知っていた情報だ。おそらく、ハリーも何かしらの方法で手に入れたのだろう。しかし、セレネが驚いたのはそこではない。

「ハリー。あなた……どうして、私に情報を教えたのですか？」

「えっ？　だって、フェアじゃないよ。」

知ってるのは僕だけじゃない。フラーもクラムも知ってるはずだ、マダム・マクシームとカルカロフもドラゴンを見たから。

セドリックには、さっき伝えてきたんだ。だから、まだ知らないのはセレネだけだって……」

「いや、だから……どうして、私に教えたのですか？」

セレネは本当に困惑していた。

ドラゴンのことを知っているなら、それを話さなければいい。

そうすれば、何人かは脱落の危機に陥らせることができる。情報を手に入れるのも課題の一つだ。脱落したなら、情報を集めきれなかったことが悪い。

「私は、もう腹をくくっています。選ばれたからには、優勝をすると。」

……あなたは、勝ちたくないのですか？」

「え……？」

ハリーは心底信じられないという顔をしている。

「何の準備もなく、あんな怪物に立ち向かわせるなんて……できるわけないじゃないか。そりゃ、マルフォイやスネイプだったら黙ってるかもしれないけど……」

とにかく、これで僕たち全員が知っている。これで足並みがそろったじゃないか」

ハリーは手を広げながら言った。

セレネは感心した。少なくとも、セレネにはそこまで思い至らなかった。これこそ、グリフィンドールの騎士道精神という奴なのだろう。演じない限り、自分には微塵も持っていない志だ。

セレネは少し肩をすくめた。

「そうですか……貴重な情報をありがとうございます」

ただ、このまま情報を与えてもらってばかりというのは、セレネの性に合わなかった。

せめて、自分たちの名前をゴブレットに入れた死喰い人（仮）に関する情報を共有しておこう。セレネはそう考えると、鞆の中からさらに分厚くなった資料を取り出した。

親衛隊の一人が仲良くなったダームストラング生から、カルカロフはあの夜——どこにも出かけなかったという事実を聞き出したのである。

となると、死喰い人と思われる人間はボーバトンの関係者かホグワーツ城内にいた教諭もしくは魔法省の人間になる。

「ところで、ハリー。私たちの名前をゴブレットに入れた犯人のことですが……」

と、ここまでセレネが言いかけたときだ。

聞き慣れたコツ、コツと杖の音が背後から聞こえてきた。振り向くと、ムーディが近くの教室から出てくる姿が目に入った。

「ゴースト、一緒に来い」

ムーディが唸るような声で言った。

「ポッター、お前にはやることがあるはずだ」

「でも、先生。僕はセレネと話が……」

「かまわん。お前は行け。さっさと課題に向けて、呪文の練習でもなんでもするこ
とだ。」

「ゴイント、来い」

ムーディにそこまで呼ばれるようなことをしただろうか。

セレネは頭を悩ませながら、ムーディについていった。一瞬、後ろを少しだけ振り返ると、ハリーが心配そうな顔で見送ってくれていた。

セレネはムーディの部屋に入った。ムーディはドアを閉め、向き直ってセレネを見た。魔法の目も普通の目も、セレネに注がれていた。

「いま、ポッターから聞いたな？ 第一の課題を」

「……ええ。聞きました」

セレネは慎重に返答を考えた。

「昼食後、ハリーに呼び止められて……偶然です。まさか、話の内容が課題に関するものだとは思っていませんでした。

……これは、カンニング扱いになるのでしょうか？」

「いや、大丈夫だ。むしろ、カンニングは三校対抗試合の伝統で、昔からあった」

ムーディはにやりと笑った。

笑うと頬に奔っている傷も引き延ばされ、一層不気味に見えた。

「まあ、とりあえず座れ」

ムーディに言われ、改めて周りを見渡した。

実に不思議な部屋だった。

いままで、スネイプ以外の教授の部屋に入ったことがなかったので、凄く新鮮に感じる。とびぬけて奇妙なものばかりが置いてあった。

ひびのはいった大きなガラスの独楽のようなもの、幾重にも折り重なったようなトランク、うすぼんやりとしたなにかが常にうごめいている鏡、くねくねとした金色のテレビアンテナのような金属……。おそらく、彼が闇払いをしていた頃の私物なのだろう。

「いいか。セドリック・ディゴリーはお前の年の頃には、笛を歌う小鳥に変えた」
ムーディはセレネに言い聞かせるように語り始めた。

「フラー・デラクルは、わしの可愛らしい妖精版だ。呪文のきれがいい。

ビクトール・クラムは頭はおがくずだが、カルカロフがついている。クラムの特徴をいかした作戦を立ててくるはずだ。

そして、ハリー・ポッター。14歳だが『闇の帝王』を2度も出し抜いている。幸運の持ち主だ。それなりに才能もある。

……お前は、どうする？」

ムーディがぶつきらぼうに聞いてきた。

「お前はどうかやってドラゴンを出し抜く？」

「私は……」

ここまで言いかけて、はたっと大会の規約を思い出した。

「先生、教師が代表選手に関与するのはルール違反では？」

「カンニングが公然と許される時点で、ルールなどあったものではない。むしろ、敵はルールなど気にしてくれんぞ」

「……それもそうですね」

たしかに、敵はルールなど気にしない。

たとえば、ヴォルデモートが決闘の礼儀作法にのっとってお辞儀をするだろうか？

ヴォルデモートは絶対にお辞儀をしないと断言できる。むしろ、ヴォルデモートがお辞儀をするところなど想像できない。決闘を始める合図なしで、いきなりアバダ・ケダブラを放ってくることだろう。

ただ、今回はルールの定まった競技大会である。

少し話が違ってくるような気もしたが、ムーディがいいというなら別に構わないのだろう。ようは、カンニング同様、主催者である魔法省側にバレなければいいのである。

「安心してください。作戦は立ててあります」

「ほう……いま、聞いたばかりなのにか？」

「いえ、実は事前にいくつか目星をつけてありまして」

セレネはいたずらっぽい笑顔を浮かべる。

「では、本当に大丈夫なのだな？」

「ええ。あとは呪文の最終調整をするだけです」

ムーディはセレネをじっと見据えた。「魔法の目」もほとんど動かなかった。

「では、行ってよろしい」

「はい。……ありがとうございます」

セレネは軽く頭を下げた。

先ほど、ムーディも言っていたが、改めて考えてみても強敵ぞろいだ。

本来の代表選手である17歳の三人とは経験と勉強量に大きな差がある。

ハリーは経験はどっこいどっこいで勉強量はこちらの方に遥かな分があるが、な

にしろ「生き残った男の子」だ。セレネには知らない隠された力を持っているのかもしれない。だから、彼にも油断はできない。

「先生の言葉を借りるなら、油断大敵ですね」

「そうだ。油断大敵だ。」

それから一つ。お前は自分でゴブレットに名前を入れた輩を調べなくていい」

ムーディが唸るように言った。

セレネはきょとんとしてムーディを見た。

「お前は課題に集中しろ。そこところは、ダンブルドアとわしで調べる」

「……わかりました」

セレネは立ち上がると、もう一度頭を下げた。

ムーディは氣遣って言うてくれたのだろう。しかし、それに従うつもりは、さらなかった。

自分を害した奴は自分の手で制裁を下したい。

リータ・スキーターのように……。

とはいえ、ムーディが言ったことにも一理ある。

なにより、第一の課題まで時間がない。セレネは大きく息を吐くと、通い慣れた秘密の部屋への道を歩き始めるのだった。

——第一の課題まで、あと1日。

48話 第一の課題（後編）

課題当日も時間はいつも通りに流れる。

午前の変身術の授業でもドラゴンに対する不安を表すこともなく、完璧に授業をやり切った。セレネはこの3年間、錬金術を学んだ結果、ほど近い変身術が一番得意な教科になっている。今日もスリザリン生の中で一番最初にハリネズミを針山に変えることができた。

「見事です、ゴースト。スリザリンに5点あげましょう」

マクゴナガルは銀色に尖った針を一本、針山から抜くと微笑みかけてくれた。

「ありがとうございます、先生。」

一つ質問があるのですが、よろしいでしょうか？」

「ええ、いいですよ」

「この針山に、ハリネズミの意識はあるのでしょうか？」

セレネは針山を掌に載せると、ぴんつと指で弾いた。

「ありません」

マクゴナガルは即答した。

「ハリネズミは構成ごとまったく別の無機物になってしまっているのです。このように、呪文を解けば——」

マクゴナガルは杖を取り出すと、完璧な針山を軽くとんと叩いた。すると、もぞもぞと針山が動き始め、手足が生え、頭が突き出し、尻尾が飛び出し始める。あつというまに、セレネの掌にあった針山は、ハリネズミに戻ってしまった。

「また、意識は回復します。おそらく、針山だった時の記憶はないでしょう」

「ありがとうございます」

「ゴント……もしかして、今のは課題に関する質問ですか？」

マクゴナガルが探るような視線でこちらを見据えてきた。

「いいえ、個人的な興味です」

「……そうですか」

マクゴナガルはほっと息を吐いた。

教師陣は基本的に課題に関して協力しないことになっている。きっと、マクゴナガルは課題に関する質問なのだと考えたのかもしれない。

そこまで考えたとき、セレネはドラゴンに変身術で対抗しても良かったかもしれないと考える。だが、少し考えてすぐに諦めた。

今の自分の実力では、巨大で魔法に耐性があるドラゴンを無機物に変身させられ

るとは思えない。

「教えてくださり、ありがとうございました。先生」

セレネはマクゴナガルに微笑みかけると、再びハリネズミを銀色の針が刺さった針山に戻した。

そして、午後――。

昼食のベーグルにクリームを塗っていると、スネイクがやってきた。

「セレネ・ゴント。代表選手はすぐに競技場に行かねばならん。第一の課題の準備をするのだ」

「わかりました」

ベーグルが少し惜しかったが、セレネは立ち上がった。

「がんばって、セレネ！」

ダフネが囁いた。

「きっと、大丈夫よ」

「そうそう。セレネなら課題なんてへっちゃらよ！」

ダフネに続き、ミリセントも応援の声をかけてくれた。

「ありがとうございます。行ってきますね」

と、ここまで言いかけて、ふと思い出した。

ローブに手を入れ、ずっとこの日のために用意していたモノを取り出す。

「これ、お願いします。このボタンを押した後、こっちの赤いボタンを押せばいい

だけですから」

そして、ダフネに前もって言っておいたものを手渡した。

ダフネは少しおそろおそろそれを受け取った。

クイールからフクロウで送ってもらったビデオカメラだ。

マグルの電化製品はホグワーツ城に満ちている魔力のせいで狂ってしまう。ビデオカメラも例外ではない。しかし、泡頭の呪文を使えば話は変わってくる。

泡頭の呪文とは、その名の通り、泡を頭から被ることで新鮮な空気を確保するための魔法である。本来は水中にもぐるときやガスが充満する空間で活動するために使う呪文なのだ。危篤状態の療術を行うときも、周囲を無菌状態にするために応用して使用するらしい。

つまり、この魔法は外界と空間を遮断することができる。

そう、それはすなわち魔力が満ちていない新鮮かつ清潔な空間だ。

自分の順番が分からない以上、セレネは他の選手の試合を見ることができないか

もしれなかった。

もし、第二の課題がバトルロイヤルや決闘の類だった場合、他の代表選手の戦闘スタイルをいかに把握しているかが勝敗の鍵になってくる。

だから、他の代表選手の戦いをビデオカメラで録画してもらおうことにしたのである。

もともと、ダフネは生粋の魔法族の生まれだ。ビデオカメラなんて初めて扱う上に、泡がいつ弾けてしまうかもわからない。

もう少し余裕を持って、クイールに要望を出していればよかったと後悔する。

ビデオカメラが届いたのは、今朝だったのだ。

「うー……上手くいなかったらごめんね」

「大丈夫です。無理を承知ですし、失敗しても気にしませんから」

セレネは2人に軽く手を振ると、スネイプと一緒に大広間を出た。

彼はいつも通り黒いローブを翻しながら歩いているが、少しいつもと様子が違った。目をわずかに細め、どこことなく心配そうな顔をしている。

「お前の实力は知っている」

スネイプが言った。

「我輩が教えてきた中でも、五本の指に入るだろう。だが、経験が浅すぎる。危険だと感じたら、迷うことなく赤い花火を打ち上げろ。すぐに、救助にかけつけることができるように待機している」

「ありがとうございます」

セレネは微笑もうとし、顔が強張っていることに気づいた。

自分が思っている以上に、緊張しているらしい。

「でも、大丈夫です。いままで習ったことを総動員して挑みますから。

それに……本当に危ない時は逃げますよ。……私、まだ死にたくないの」

そう口では言ってみたが、実際には逃げる自分を想像することができなかった。逃げる＝敗者である。

戦略的撤退というものもあると聞くが、絶対に目の前の脅威から逃げたくない。その脅威を見事に打ち払ってこそ、セレネ・ゴーストであると考えている。

スネイプと禁じられた森の淵を回り、テントに辿りついた。

「ここに入って、他の代表選手と一緒にいろ。……ベストを尽くせ」

「ありがとうございます」

スネイプの褒め言葉など、滅多にない。

セレネは言葉を囁みしめながら、堂々とテントの中に足を踏み入れた。

そこには、他の代表選手が全てそろっていた。

フラー・デラクルは低い木の椅子に座っている。いつもは落ち着きを払っている彼女だが、青ざめて冷や汗をかいていた。クラムはいつもよりさらに機嫌悪そうにむっとりしていた。：一見すると緊張していないように見えるが、あれが彼なりの不安の表し方なのかもしれない。いや、そもそも世界的に有名なクイディッチ選手だ。この程度の緊張は何度か経験しているので落ち着いているのかもしれない。セドリックは、行ったり来たりを繰り返していた。

ハリーはその近くで佇んでいる。セレネを見つけると、少しだけ微笑んだ。否、微笑みのようなものを向けてきた。顔は強張り、ほとんど真顔だった。

「よしよし、全員揃ったな！」

バグマンが極限まで張りつめた空気を壊すかのように、楽しそうに言う。

「楽しんでたまえ。さてと……では、話して聞かせる時が来た！」

バグマンは、陽気に代表選手に向けて話し始める。右手に紫色の絹で作られた袋を振ってみせた。

「観衆が集まったら、私から諸君 1 人 1 人にこの袋を渡す。そして中から、諸君がこれから直面するものの小さな模型を選び取る！ さまざまな——エー——違いがある。

それからもうひとつ、言うことがあったな。えっと……ああ、そうだ！ 諸君の課題は『金の卵』をとることだ！」

以上、と言うようにバグマンはセレネたちを見渡した。

セドリックが無言で頷き、再び行ったり来たりを始めた。フラーは椅子に座ってかすかに震えていた。クラムは同じく座り込んでいたが、微動だにしていなかった。

た。ハリーはどうしたらいいのか分からないみたいで、隅のほうに突っ立っている。セレネは近くにあった小さな椅子に座ると、これから自分がするであろうことを反芻する。微妙に腹が空腹を感じ始めていたが、気にならない程度だ。それ以外は万全のコンディションである。

できる限り、高得点を狙う。

誰の思惑なのか分からないが、せっかく大会に出るのだから、優勝しなくてはならない。

セレネは深呼吸を繰り返した。

何百、何千もの足音がテントの傍を通り過ぎるのが聞こえた。足音の主たちは興奮して笑いさざめき、冗談を言い合っている。……本来ならあの群衆の中に、自分もいたはずなのだ。なのに、誰かが名前をゴブレットに入れたせいでこんな羽目になっている。

そう思うと、ふつふつと怒りがこみあがってきた。

「さてと……レディー・ファーストだ」

バグマンは紫の絹の袋の口を開けると、フラーの方に持っていく。フラーは震える手で袋に手を入れ、精巧なドラゴンのミニチュア模型を取り出した。首の周りに『2』という札をつけている。

バグマンは次に、セレネに袋を向けた。セレネが中に手を入れると、もぞもぞと袋の中でフィギュアが動いているのが分かった。セレネは手ごろな模型を取り出すと、やはりフラーと同じドラゴンの模型であった。首に『4』という札をつけている。ただ種類はフラーと違った。セレネの掌の上で翼を広げ始めたドラゴンは、背中に漆黒の隆起部がある。

「おお、それはノルウェー・リッジバックだ」

セレネは事前に読んだドラゴンの図鑑を思い返す。

たしか、牙に毒があるドラゴンだ。ただでさえドラゴンには近づきにくいのに、

これでますます容易に近づけなくなった。

セレネの横に立っていたハリーが、小さい声で「あっ！」と叫ぶ。彼には、このドラゴンに見覚えがあるのかもしれない。

次にクラムが首に『3』とついているドラゴンを取り出し、セドリックが『1』という札をつけた青みがかったドラゴンを取り出した。最後がハリーで『人生が終わった』という顔をしながら『5』という札をつけたドラゴンを取り出す。

「さあ、これでよし！」

諸君は、それぞれが出会うドラゴンを引き出した。番号はドラゴンと対決する順番だ。

いいかな？さて、私は間もなく行かねばならん。解説者なんですね。ディゴリー君、君が1番だ。ホイッスルが聞こえたら、まっすぐに向こうのスタジアムまで来てくれ。さてと……ハリー、ちょっと話があるんだが……いいかな？」

「えーと……はい」

ハリーは何も考えていないような顔をして、バグマンと一緒に外に出て行った。なんかバグマンがヒントでも言おうとしているように見えた。しかしながら、今までのバグマンの言動から考える知的能力だと、世辞にもいい案を提案するとは思えない。

セレネは再び椅子に腰をかけた。

どこか遠くでホイッスルが鳴る。

その音と共に、セドリックが青ざめた顔をしてテントから出ていく。代わりにハリーが『この世の絶望』という顔をして中に戻って来た。

どうやらバグマンとの会話は、ハリーの恐怖心を駆り立てるだけで終わったようだ。

「とりあえず、座ったらどうです？」

セレネはぼけっと立っているハリーを一瞥した。ハリーは曖昧な声で何かを言う
と、隣に恐る恐る腰を掛ける。傍から見ていても不安になるほど、彼の緊張感が伝
わって来た。

フラーがセドリックの足跡をたどるように、テントの中をグルグル歩き回って
いた。クラムはまだ、地面をじっと見つめている。

「おおおおおう!! 危なかった! 危機一髪だ!! これは、おっと危険な賭けだ。
下手したら死ぬぞ!」

バグマンの解説が、このテントの中にまで聞こえてきた。

セレネは家に置いてきたウォークマンが恋しくなった。あの恐怖心を逆なです
かのような解説である。実に不愉快だ。イヤホンをして、お気に入りの曲を最大限
にかけながら時を待ちたい。

そのうちに、セドリック、フラーの番が終わり、クラムが呼ばれて行った。

次は、自分の番だ。

ホイッスルの音で立ち上がると、セレネは歩き始めた。

ハリーに言葉をかけるべきかと悩んだが、今は自分のことだけに集中する。彼は怖がってはいるが、怯えてはいない。対処法をそれなりに練習してきたのだと感じさせた。

テントを出て競技場へと向かうが、いざその時を迎えると手に汗をかいているのが分かった。

そのまま木立を通り過ぎ、巨大なスタジアムの中に入る。できるだけ普段通りの足取りでスタジアムに入ると、大歓声が耳を貫いた。何百何千という人の顔が、こちらを見下ろしている。

おそらく、あのどれか一つにダフネたちがいるのだろう。

セレネは観客から目を逸らすと、今度はスタジアムの全体像に目を向けた。

すり鉢状になっているスタジアムは岩だらけで、その奥にドラゴンが構えてい

た。ドラゴンは黄金の卵をしっかりと抱え込むと、両翼を半分だけ開き、黄色に光る眼で睨みつけている。

セレネは杖を手の中で回した。

そして、ドラゴンと距離をできるだけ取りながら、なるべく全体が見渡せそうな岩場を登る。ドラゴンはセレネを警戒しているらしく、チリチリつと牙を鳴らした。びりびりとしたドラゴンの緊迫感が、これほど離れているというのに伝わってくる。

「……物騒な奴だこと」

セレネは口の中で呟いた。

課題の金の卵は、ドラゴンが後生大事に守っている。それを奪わないといけないなんて骨が折れる。スタジアム全体の構造を把握すると、セレネは深呼吸をした。

遠くで観衆が大騒ぎするのが聞こえる。それが好意的なものなのか、そうではな

いのか知ったことではない。

自分はドラゴンの前足の間に挟まっている金の卵をとればいいだけだ。なるべく、無傷で。

本当なら『呼び寄せ呪文』を使って、金の卵を手元まで呼び寄せたい。しかし、それが出来るのであれば課題にならないだろう。呼び寄せ呪文を防止する呪文が、かかっていると考えるのが妥当だ。

「なら、当初の計画でやるしかないか」

セレネは覚悟を決めると、思いつきり地面を蹴った。ドラゴンめがけて疾走し始める。そんなセレネを見たドラゴンは、思いつきり息を吸い込んだ。

おそらく火を吐くのだろう。

案の定、全てを焼き払うような炎を噴射する。そのままの速度をなるべく維持しながら、セレネは真横に跳躍した。そのまま転がりこむように、巨大な岩の後ろに姿を隠した。

隠れるのとはほぼ同時に、オレンジ色の炎がセレネが隠れた岩の真横を通り過ぎた。炎の威力は想像よりも強力だった。炎が当たった頑丈そうな岩は、じゅわりと音を立てながら溶けてしまった。セレネはごくりと生唾を飲み込んだ。あの炎は盾の呪文程度では回避できなかったであろう。

「危なかった……」

セレネはドラゴンの視界に入らない岩の後ろを選びながら、徐々にドラゴンへ近づいて行った。2撃目を放とうと、ドラゴンが再び息を吸い込んでいる音が聞こえる。

気のせいではなく、先程の一撃目より吸い込む量が多い。どうやら、ドラゴンはセレネのいる位置がわからないので、手当たり次第に岩を壊そうと考えたらしい。オレンジ色の業火が、周囲に点在するいくつもの岩を溶かしていく。

セレネは炎から逃れるように岩の後ろを移動する。その際、少しでも眼鏡をずらして炎を見てみた。這うように移動しながら、思わず口元が歪みそうになる。

炎の威力は予想外だったが、何度も乱発してくれたおかげで、炎の『死の線』が視えた。もともと物質でないモノの線は視にくいのだが、何度も何度も炎を視たおかげで『死の線』を視ることができたのだ。

…オレンジ色の炎の中で渦巻いている、美しくも何処か禍々しい深紅の線を…直死の魔眼を人前で使いたくない。

1年生の時、身を守るために使用したが、おそらくあの観客の中には忌々しいマスゴミ女もいる。彼女たちの前で使用するのはできる限り避けたい。これは、身を守る最終手段である。

身を守る最終手段を手に入れたところで、いよいよセレネは本腰をあげることにした。

ドラゴンがすべての炎を吐き終え、次の炎を発射するために再び息を吸い込もうとした時、セレネはドラゴンの目の前の岩の上に立った。まるで、ドラゴンに姿を見せつけるかのように。

ドラゴンは『やっと見つけた』と言いたげに、鼓膜が破れそうな音量で吠えた。セレネは杖を高く空に向けた。

マスゴミ女が自分の前で這いつくばって許しを請う姿を思い描きながら、事前に考えておいた念と一緒に送る。

『『エクスペクト・パトローナム―守護霊よ、来たれ』!!』

杖の先から銀色の巨大な大蛇が三匹噴射された。三匹の大蛇は、東洋のドラゴンのようにユラリユラリと身体を揺らしながら空へめがけて進んでいく。

観客の目もドラゴンの目も、セレネから外れ大蛇に向けられた。その隙にセレネは『目くらましの呪文』を自分にかける。本当は、より正確に魔法をかけるために詠唱したかった。しかし、詠唱した途端、ドラゴンの視線が守護霊から逸れてしまいそうなので、練習した無言呪文を使う。

頭の中で呪文を思い浮かべながら、セレネはコンコンッと脳天を叩く。すると、身体の表面全体に冷たいものが、トロトロと流れる感じがした。

そして、なるべく音をたてないように走りながら、自分の体を確認する。

自分の身体は見えなくなっていた。透明になったというわけではなく、カメレオンの保護色のように、セレネの身体が背後の岩と同化している。

さて、空に昇って行った三匹の守護霊は消えずに点滅していた。

そして、セレネの何倍にも拡大された声で——ドラゴンに向けて言い放つ。

「このボロ雑巾みたいなノルウェー・リッジバック！」

しんと会場が静まり返った。

ドラゴンも目を細める。それを気にすることなく、セレネの守護霊は代わる代わる吹き込まれた念を語り続ける。

「豚のように泣き喚いて、本当にみっともない奴だこと」

「蛇の方がずっと頭がよさそう。同じトカゲなのに、馬鹿っぽい」

「馬鹿馬鹿馬鹿、この大馬鹿ドラゴン!!」

ドラゴン は代わる代わる繰り出される罵倒に、怒りが湧き上がって来たのだらう。大きく一吼えすると、業火を噴出した。しかし、守護霊に炎は効果がない。罵倒は続き、怒り心頭のドラゴンは翼を大きく広げ、羽ばたこうとした。

解説者のバグマンが遠くで何か叫んでいるような気がしたが、セレネは特に気にならなかった。

自分らしくない罵倒だということは分かっている。

もう少しスマートに勝つ方法もあったはずだ。守護霊だけを打ち上げても良かったかもしれない。それだけでも、ドラゴンの気を逸らすには十分だ。

しかし、これは競技だ。

ドラゴンを出し抜く方法だけでなく、呪文の質も採点に入ってくるはずである。そうすると、7年生が受ける魔法テストレベルの呪文——守護霊の呪文の応用

術は、かなりの高得点になるはずだ。

いまや、ドラゴンの興味は守護霊に向かっている。

本来なら守護霊はすぐに消滅してしまうが、言葉を吹き込んであるので、それがすべて終わるまで消えることはない。とはいっても、そこまで罵倒の言葉を吹き込んでいくわけではないので、姿を隠しているうちに金の卵へ一気に近づいた。

足音に気づかれないように、クツシヨンの呪文を足にかけ、足音も消しているのが万全である。

ドラゴンはいまやセレネのことなど頭にないのだろう。

狂暴な牙を観客に見せつけながら、守護霊に吠え掛かっている。足は金の卵から離れ、少し浮き始めていた。あとほんの数歩でドラゴンの前足と前足の間に挟まっている卵に手が届く、という時に、さあーっと熱い液体のようなものが身体の表面を流れた感じがした。

何が起こったのだろうか、と思い自分の身体を見て愕然とした。

付け焼刃ともいえる無言呪文で、不完全にかかっていたのであろう『目くらましの呪文』が解けてしまっていたのだ。

今も罵倒を続ける守護霊に炎を噴射しようと構えていたドラゴンの眼に、卵に手を伸ばすセレネの姿が大きく映る。

「——ッ!!!!!!!!!!」

ドラゴンが大きく吼えた。セレネが金の卵を抱えこんだのと、ドラゴンがセレネめがけて炎を吐くのは、ほぼ同時だった。オレンジ色の業火が渦巻きながら襲い掛かる。

この距離で隠れる場所はない。

セレネの盾の呪文では、きっと効果がない。

いまたとえ赤い花火を打ち上げたところで、救助が間に合う距離ではない。

セレネは考えるより先に眼鏡を取り外していた。

とっさに杖で宙を切るように振るい、オレンジ色の炎の中で渦巻いている深紅の線を切った。その途端、炎がもともとなかったかのように霧散する。

ドラゴンは何が起こったのか分からずに、闇雲に辺りかまわず炎を噴射させた。セレネは金の卵を左腕でしっかりと抱えたまま、再び杖の先で『線』を切る。

混乱したドラゴンは、三度息を吸い込んだ。そして――

「『『プロテゴ―守れ』！』」

もう一撃、セレネの方に炎が噴射された時、目の前に巨大な壁が現れ炎を弾き飛ばす。振り返ると、ドラゴン使いだと思われるマントを着た人たちが、慌てて駆けてくるところだった。その向こうには、スネイプとマクゴナガルが蒼白な顔をして駆けてくる。

さらに奥にはムーディ先生が少しニヤついた顔で立っていた。

そうだ。金の卵を無事にとったから、課題は終わったのだ。ぼんやりと頭の片隅で考える。課題が終わったという現実感がない。

セレネはその場に座り込みたくなる気持ちを抑え、教授たちの方へ歩き始める。ところがだ。

教授陣のところに辿りつき、スネイプが何か言おうとしたその時、割り込むように誰かが入って来た。

「素晴らしい戦いだったぞんすね、お嬢ちゃん」

リータ・スキーターが割り込んできたのだ。

マイクを持って、カメラをこちらに向けてくる。セレネは言いようもない嫌悪感を押し込め、これまでにない笑顔を向けた。

「ありがとうございます」

「この綺麗な口からあの罵倒が出たのだと思うと、ぞくぞくするぞんす。それから、最後の消失呪文は――」

「それについては、後日お話ししましょう。私、貴方が喜びそうな話をたくさん知っているんです。

……三本の箒の個室で会いませんか？」

セレネがした手に出ると、彼女はふんつと笑った。

「まあ、よいでござんしょ。クリスマスの後で良いなら」

「ありがとうございます、スキーターさん!!……なので、今はそっとしておいてください。ちょっと疲れているんです」

セレネは引きつりそうになりながらも、精一杯の笑顔で対応した。

……クリスマスの後がこれほどまでに楽しみだったことはない。

セレネは課題が終わったこと、そして、リータ・スキーターと約束を交わしたことに。その二つの幸福感を味わいながら、審査員席の方へ歩み始めるのであった。

49話 予期せぬ課題

第一の課題が終了した後、スリザリンの談話室では盛大なパーティーが開催された。

声を発する守護霊でかなりの高評価を得たことにくわえ、怪我もなく、卵を壊すこともなく、代表選手の中で二番目に早く卵の元へたどり着くことができた。炎を『眼』で消したことも、消失呪文を無言で唱えたと勘違いしてくれたので一安心である。

最後に「目くらましの呪文」が解けてしまった点は減点対象になるかと思ったが、目くらましの呪文が解けたのは卵を取ってからだった。

これについては審査員の見解が分かれ、おのおのの判断で点数をくれた。なので例をあげると、調子のよいバグマンや規則厳守のクラウチは10点をくれたが、カルカロフは1点だった。卵を半分潰したビクトール・クラムに10点をあげていた

ので、完全なるえこひいきである。

その結果、三位。

ビクトール・クラムやハリーの同点一位に次いで、の三位である。

のちにビデオを見返して分かった。

セレネの戦いには二人に比べて、華がなかった。

ビクトール・クラムがドラゴンにかけた『結膜炎の呪い』はビデオ越しに見ても惹かれてしまう圧倒的な力強さがあった。そして、ハリーの箒を活かした戦法は見る者を魅了していた。

セレネの戦いにはそれがなかった。

守護霊を囚にするために口から放った言葉も、あまり綺麗な言葉とは言えない。下手すれば、自分のイメージを傷つけかねないものだった。

クラムに負けたのは、まだなんとか許容ができる。

彼は17歳だ。しかも、クイディッチとはいえ大人の世界で戦う者である。

しかし、同じ年のハリー・ポッターに負けたことが悔しかった。魔法も勉強も自分の方が優れているのに、彼は呼び寄せ呪文だけで勝ってしまった。だから、セレネは悔しくて、悔しくてたまらなかった。

しかしながら、セレネの悔しい気持ちを他所に、スリザリンの談話室は熱気に包まれていた。

三位とはいえ、17歳のフラー・デラクールやセドリック・ディゴリーを破ったのだ。とくに、スリザリンはハッフルパフのシーカーであるセドリック・ディゴリーに痛い目にあわされているので、そのこともあいまって誰もが歓喜していた。

代表選手に選ばれた日もお祭り騒ぎだったが、その時とは違った心地の良い雰囲気、セレネも悔しい気持ちを抑えて、パーティを楽しんだ。大好物のバタービールや大鍋ケーキがあったことも楽しめた理由の一つだったかもしれない。

思いつきり食べ、大いに飲み、そして、そのうちに誰かが叫んだ。

「ゴースト先輩。その卵を開けてみたらどうですか？」

卵とは、第一の課題で手に入れた金の卵だ。

この卵が第二の課題に繋がってくると、すでに知らされている。

セレネに頼みを断る理由はない。皆に見守られる中、セレネは卵の周りについている溝をこじ開け——後悔した。

卵の中身は空っぽで、世にも恐ろしい咽び泣くようなキーキーした音が談話室中に響き渡ったのである。嫌悪感しかなく、耐えがたい音にセレネを含めた誰もが耳を覆った。

それ以降、誰も卵を開けようとは言わなかった。

恐ろしい音に「バンシー妖怪と戦うのか？」とか「悲鳴を上げるような過酷な環境の中で戦うのか!？」とかいろいろと案が出てきたが、どれもあまりピンとくるものがなく、十二月になっても、セレネは卵の謎が解けないでいた。

「でも、まあ大丈夫だよ」

セレネが悩んでいると、ダフネは樂觀的な声で話しかけてきた。

「だって、第二の課題は二月でしょ？まだまだ先だもの。気長にやればいいと思うよ。それよりも、まずいま大切なのはダンスパーティーだよ！」

「そう、まさしくそれよ!!」

ダフネが嬉しそうに話すと、それに続くようにミリセントも声を上げた。

ミリセントはダフネとセレネの前に歩み出ると、目をぎらぎらさせながら話し始めた。

「三校対抗試合の伝統、クリスマスダンスパーティー!!」

四年生以上の参加が許され、イケメンと知り合う絶好の機会!! レイブンクローの知能派イケメンからダームストラングの肉体派イケメンまでより取り見取りよ!

あー、なんて、素晴らしい機会なのかしら!

よーし、まずは、クラムを狙うわよー!!」

ミリセントは黄色い声を上げた。

それをセレネは冷ややかな目で見る。先日、セレネはクラムが湖に飛び込み、泳ぐ姿を目撃していた。これには、セレネは思いつきり引いた。いまは12月だ。ホ

グワーツ城の屋根には分厚い雪が降り積もり、湖の一部には氷が張っている。こんな季節に水着だけを着用して飛び込むなんて、正気の沙汰ではない。

ダムストラングの伝統かと思ったが、他に飛び込んでいる生徒はいなかった。つまり、クラムの意思で冬の湖に飛び込んでいる。

冬の湖で寒中水泳をするなんて、自殺行為だ。ちょっと奇行のようにさえ思える。セレネだけでなく、ミリセントもあの姿を見ていたというのに、まだ惚れているのが信じられなかった。

「そうだ、セレネ!!」

ミリセントは思い出したようにセレネの名を呼ぶと、こちらに指を向けてきた。

「一年前の約束、覚えているでしょうね!？」

「……あー……来年のバレンタインまでに、という奴ですよね」

セレネはすっかり忘れていた約束を思い出した。

昨年度、彼女と「来年のバレンタインまでに彼氏を作る。彼氏ができた方ができなかったほうに、何でも一つ命令することができる」という約束を結んだのである。

代表選手になったので、すっかり忘れていたが、そのこともどうにか片付けなければならぬ。

セレネにはまだ一人も彼氏ができていなかった。それは、ミリセントも同じである。

「私、ここで彼氏を作るわよ。見てなさい、セレネ。あんたに勝ってやるんだから!!」

ミリセントは勝ち誇ったように高らかに笑いだす。セレネは面倒くさそうに頭を掻いた。

本当はクリスマスは家に帰りたい。

だが、秘密の部屋であることをしているため、帰ることができないのである。けっして、ダンスパーティーに興味があるわけではない。

確かに、相手を作るには申し分ない機会だが、セレネは出席しないことに決めた。ダンスはあまり得意ではないということが一番大きな理由だが、そこまで楽しみを見出せそうになかったからだ。夜通し遊ぶのは楽しいだろうが、いまは特別

仲の良い男子もない。一人で行くくらいなら、部屋にいた方がわびしい思いをせずにすみそうだったからだ。

「そうですか、頑張ってくださいね」

セレネはミリセントを軽く流すと、再び卵の謎に思考を割いた。

ミリセントの約束も重要だが、それよりもまずは卵の謎である。あの音にヒントが隠されているのだと思うが、音に法則性が見いだせない。ただ煩いだけである。そもそも、よく聴くことができない。

さて、それでは、どうしたらいいのだろうか。

「ふ、ふーん。考え込んでやって……セレネは余裕なのね」

ミリセントが顔を引きつらせているのが見えたが、セレネは無視して歩き続ける。すると、前から本を抱えたマクゴナガルがやってきた。

「ちょうどよかったです。ゴーント、少し話があります。来なさい」

マクゴナガルに呼び止められ、セレネは一旦、ダフネたちと別れた。

「なんででしょうか、先生」

「いいですか、ゴーント。代表選手とそのパートナーは——」

「すみません、私出席しませんけど」

セレネが即答すると、マクゴナガルはセレネが冗談を言っているのではないかと疑うような目つきをした。

「伝統にしたがい、代表選手とそのパートナーが、ダンスパーティーの最初に踊るのです」

「しかし——」

「しかしもなにもありません。いいですか、ゴント。必ずパートナーを連れてきなさい」

「……先生」

「いいですね、ゴント」

マクゴナガルはきっぱりと言い放った。まっすぐセレネの目を見据えてくる。

セレネに拒否の選択肢はなかった。

「……分かりました、これも課題だと思って参加します」

さっさと、それなりの相手を決めてしまおう。

セレネは諦めて、ダンスパーティーに参加することに決めた。

しかし、一週間経っても、パートナーは見つからなかった。

セレネは困った。

秘密の部屋に行っていたせいで夕食に遅れ、一人でシチューを飲みながら溜息を吐いた。

困り度で言えば、ドラゴンとの対決が分かった時以上である。

決して、誘われないわけではない。

ハッフルパフの二年生が誘ってきた。レイブンクローの三年生なんて友だち同士2人連れ添い、顔を真っ赤にしながら誘ってきた。しかし、全員断った。なにしろ、一度も口をきいたことのない相手なのだ。セレネだって参加する以上、少しはパーティーを楽しみたい。

それに、下級生を誘う気にはなれなかった。

なにしろ、このパーティーは代表選手の参加が義務付けられている。

もしかしたら、このパーティーは第二の課題に関係しているのかもしれない。卵の謎を解く手がかりがあるのかもしれない。

そう考えると、魔法の習熟が甘い下級生を誘う気が削がれるのであった。

しかし、かといって誘ってくる上級生にもロクな人がいない。

たとえばグリフィンドールのコーマック・マクラーゲンは、自分のクイディッチ技術がどれだけ素晴らしいかしか話さなかったので丁重にお断りした。ナルシストな奴と一緒に過ごしても、つまらないことが目に見えている。申し出を断ると唾を

飛ばしながら怒り始めたので、一緒にいたダフネに先生を呼んできてもらった。

「でも、本当に困ったわ……」

食事を終えたセレネは、廊下を歩きながら呟いた。

不思議と、スリザリン生から声をかけられることは皆無だった。

正確に言えば、2 回だけ誘われた。

一回目は、いつもの過激信者 グラハム・プリチャード。

彼は「先輩、ダンスパーティーに——」と言った段階で、カロー姉妹が急行し、そのまま拉致られてしまった。無論、最後まで言葉を聞いていたとしても、OKを出すわけがない。

ただ、その後、カロー姉妹と会った際に、プリチャードはどうなったのか聞いたところ

「マナーを破った隊員には、説教が必要です」

「そもそも、一般隊員が先輩をダンスに誘うなど、ありえないことです」

「先輩から誘うなら別ですが……ほとんどの隊員は恐れ多くて申し出ができないのですよ」

と、正面から言われてしまった。

これで、親衛隊のスリザリン生が誘いに来ないのは、恐れ多いからだということが判明した。

そして、それ以外のスリザリン生が誘いに来ないのは、親衛隊が怖いからなのかもしれない。他の寮なら別だが、スリザリン寮内の半端な学生がセレネを誘った暁には、その後、親衛隊から「身分をわきましろ」なんて制裁があるかもしれない。あまり、考えたくないことだが。

ちなみに、二回目はドラコ・マルフォイからだった。

朝食の席で、やれやれと肩をすくめながら「どうせ、まだセレネは誘われていな

いんだろ？ 僕と一緒にダンスパーティーに行かないかい？」と上から目線で誘ってきたので、特に考える素振りもみせずには断った。マルフォイの席の向こうから、パンジー・パーキンソンの視線を感じたのも断った理由の一つである。パーキンソンはマルフォイに熱を上げているのだ。彼女の目は嫉妬に狂い、「ドラコの誘いを受けたら呪ってやる!!」と言っているようだった。

いまは自分のことで手いっぱいなのに、余計な喧嘩を買う気にはなれないのである。

ダームストラングからも数名、「朝食を食べる姿が上品で素敵でした」とか「守護霊の呪文凄すぎです。付き合ってください」と誘いが来たが、ほとんど相手のことを知らないで断った。

「……だからって、誘いたい人は……いないのよね」

灰色の天井を少しだけ見上げる。

一緒にパーティーへ行っても良い男子生徒は、いないことはない。

まず、ジャスティン・フィンチ・フレッチリー。

優しくて、気配りもでき、それなりに顔も良い。話や趣味もそれなりにあう。おそらく、昨年度までで一番仲の良い男子生徒は彼だった。

しかし、彼はハッフルパフ生である。

第一の課題以来、いくどかすれ違っていたが、彼が「セドリック・デイゴリーを応援しよう」バッジをつけているところを見たことはない。何度も話しかけたそうに、口をパクパク動かす姿を目撃している。ただ、彼の友人はセレネと話をすることを快く思っていない。すれ違う時、ジャスティンを庇うように胸を張りながら歩くのである。

この状況でセレネがジャスティンを誘い、万が一、OKが出たとき——ジャスティンの友情にヒビを入れてしまうことに繋がるかもしれない。

それに、彼はお世辞にも魔法の腕が良いとは言えない。せいぜい平均レベルだ。第二の課題が絡んでいる可能性が浮上してきた以上、彼を危険に巻き込むわけにはいかない。なので、彼は対象外だ。

次に考える相手は、セオドール・ノット。

親衛隊の隊長を務めるだけあり、それなりに魔法もあり権力も持っている。

最初は脅して配下にしたようなものだったが、いまでは雑談をするくらいの関係にはなっていた。きつと、こちらから誘えば、いやいやながら親衛隊隊長として引き受けてくれるだろう。

けれど、彼の私生活はいつも親衛隊に翻弄されている。

カロ姉妹を筆頭とする過激幹部を抑えたり、プリチャードのように規律を乱す者を取り締まったり、情報を統制したり、喧嘩を沈めたり、会報を作ったり、新たな規約を作ったり、調査資料をまとめたり——と、なんやかんや大変なのだ。

それに、彼にだって誘いたい女子生徒の一人や二人いるはずだ。せっかくのクリスマス・パーティーのときくらい、親衛隊の仕事を忘れて羽を伸ばしてもらいたい。だから、彼は除外しよう。

そうになると、誰も一緒に行きたい男子生徒がいないのである。

さて、どうするべきか——このままでは、クラブかゴイルと一緒に行く羽目になってしまう。

それだけは、絶対に避けなければならなかった。あの二人と踊っている姿を想像したくなかった。もう選り好みせず、魔法の腕さえ良ければ、あまり親しくない相手でも誘いを受けるべきか——。

「よう、セレネ」

馴れ馴れしく名前を呼んでくる声に、セレネは後ろを振り返った。

そこには名前の知らないハッフルパフ生がいた。愛想がよさそうな顔をしている。おそらく、パーティーの誘いだろうが、この時点で乗り気がしなかった。今まで誘ってきた生徒は、「ゴーストさん」か「セレネさん」と呼び掛けてきた。にもかかわらず、この男はいきなり呼び捨てである。この時点で相手の男の器量が知れるというものだ。

ただ、一応、セレネは眉を顰めて用件を聞くことにした。

「……はい、そうですけど……どうかしましたか？」

「僕は、ザカリアス・スミス。どうだい、セレネ。僕と一緒にダンスパーティーに行くだろうか？」

「お断りします」

セレネは考える間もなく断っていた。

マルフォイでさえ「行かないかい？」と言っていたのに、この男ときたら「行くだろう？」である。案の定、セレネが断ると一瞬、憤慨したような顔になった。だが、すぐにまた元の愛想笑いを浮かべると、こちらに尋ねてきた。

「どうしてだい？」

「どうしてもなにも、私は貴方のことを知りませんし——」

「それなら、これから知っていけばいいだろう？」

「……それに、わたしは代表選手です。ダンスパーティーも第二の課題に絡んでくるかもしれません。知り合って二秒の貴方を巻き込むわけには、とても——」

セレネは申し訳なさそうに肩を落とす。すると、スミスは何を勘違いしたのか、得意げに胸を張り始めたのだ。

「なら、問題ない。僕はクイディッチチームのチェイサーだし、セドリックが卒業したらキャプテンになるんだ。体力もあるし、魔法だって失敗したことがないんだぜ？」

「……それなら、ここで『武装解除』をしてもらえませんか？」

セレネは提案した。

二年生の時、『決闘クラブ』でスネイプがロックハートに披露した呪文だが、これが意外とできない生徒が多いのである。決闘クラブでは結局習得できずに、殴り合いをしたり首を絞めたり別の呪いをかけたりしていた。これは、同級生だけでなく、上級生もだ。

きつと、このスミスもできないだろう。断る理由作りにちょうどよい。

すると、彼の顔は少し歪んだ。

「ぶ、武装解除？」

「ええ。今年の闇の魔術の対する防衛術の教科書のコラムページに掲載されていたよね？」

その程度の呪文もできないのに、危険なパーティーに連れて行くわけにはいきま

せん」

「な、舐めるなよ。」

『エクスペリアームズ―武器よ去れ』!!」

スミスが勢い良く杖を振った。

しかし、セレネのローブにしまわれた杖もナイフもぴくりとも動かなかった。スミスの顔に苛立ちの色が広がっていく。

「無理のようですね」

「う、うるさい！ お前、杖を持っていないんだろ!？」

「まさか」

セレネは杖を抜き放つと、スミスの高い鼻に突きつけた。

「残念でしたね、ザカリアス・スミス。他の人を誘ってください」

セレネはそう言い放ち、杖をしまうと彼に背を向けた。

だがしかし、そのときだった。スミスがセレネの手をつかんできたのである。セレネは手を一瞥し振り払おうとしたが、意外と強い力で握りしめてくる。もしかしたら、痕がついてしまうかもしれない。

「……離してください」

丁寧に言ってみたが、スミスは聞き入れず、ますます力を込めてくる。

「どうして、僕と行けないんだ!？」

父様も母様も純血の魔法使いで優秀な魔法使いだ。もし、僕がゴブレットに名前をいれていたら、セドリックじゃなくて代表選手になっていたに決まってる！

それだけ優秀な僕の頼みを、なぜ断るんだ!？」

彼は唾を飛ばしながら怒鳴ってきた。

本当に面倒な相手である。セレネは目を細めた。先日、誘ってきたコーマック・マクラージェンが逆切れしたときは、傍にダフネたちがいたので穏便に済ませることができた。しかし、今回は一人である。

簡単な呪いで追い払うか、優等生の仮面を外すか——だが、こんな小物相手にいままで積み重ねてきたイメージが崩れるのも惜しい。

守護霊で先生を呼んでくることにしよう、と決めたセレネは、ローブのポケットに手を伸ばそうとした。しかし、その腕もザカリアス・スミスがつかんでくる。手が塞がってしまったので、これでは杖を使うことができない。

「……武装解除はできなかったのに、優秀ですか？」

「あれはまぐれだ!! だから、つべこべ言わずに、僕のパートナーになれ！」

セレネは冷静に考える。

これでは埒が明かない。もう優等生の仮面を外し、口と眼でこいつを撃退しよう。セレネがそう決めて、すっと目を伏せた——そのときだった。

「うっとうしい男は嫌われるぞ」

第三者の声がした。

見ると、スミスの肩に何者かの手がのっている。スミスは手の主を思いっきり睨みつけた。

「なんだよ、お前っ！ 僕はいま、ダンスパーティーのことで彼女と話し合ってるんだ!!」

「話し合っているようには見えなかったけどな。」

それに、オレが先約だ。婉曲に断っているうちに立ち去った方がいい。蛇にされるぞ」

スミスは舌打ちをすると、「男がいるならとつとつと言いやがれ」と捨て台詞を残

して去って行った。

セレネは握りしめられた腕をさすりながら、助けてくれた男——セオドール・ノットを見上げた。

「助けてくれてありがとうございます。ですが、貴方と行く約束をした覚えはありませんけど」

セレネは、自分より頭一つ分ほど高い位置にある顔を軽く睨んだ。だがしかし、彼は素知らぬ顔をしていた。

「ああ言わないと、解放しなさそうだっただろ。」

ハッフルパフのザカリアス・スミスといえば、高慢で有名だ。マクラーゲンに次いで、そんな奴に目をつけられるなんて……お前、男運悪いんじゃないか？」

「……それ以上言うなら、貴方を蛇にします。いえ、ここまでの付き合いがあるの
で、変身したい動物くらいは聞きましょう。さあ、なにが良いですか？」

「あー、悪かった悪かった」

ノットはさして悪くないと思っ
ているような顔で、手を振った。そして、気怠けな顔のまま口を開いた。

「それで、どうするんだ？」

「どうするって……なにをです？」

セレネが小首を傾げると、彼は大きく肩を落とした。そして頭を乱雑に掻きむしりながら、どこか投げやりな口調で話し始める。

「オレと一緒に行くかってことだよ。スミスの野郎に先約だって言っただろ？」

お前は どうしたいんだ？」

「それは……貴方と行くのが一番楽ですけど」

セレネは少し困惑した。

「今のは、その場を切り抜けるための作戦でしょ？」

「それはそうだが、まだ決まっていんだろ？ 代表選手が一人で踊るなんて、みっともない。だったら、親衛隊長のオレが、可哀そうな代表選手様の相手をすれば丸く収まる。それにオレがお前の相手なら、過激派の奴らも暴走しないですむほら、すべてが上手くいく」

「でも……貴方にも誘いたい人はいるのでは？」

そう問い返すと、彼の頬が朱に染まった。

きつと、その思い人のことを想像しているに違いない。セレネは小さく息を吐いた。

「……いるんですね。だったら、その人を誘いなさい。先学期、仕事を忘れてパーティーを楽しめと忠告したのは、貴方ではありませんか」

「それは……そうだけどさ……」

「話はこれまでです。それでは、寮へ——」

戻りましょう。

そう言いきる前に、再び手をつかまれる。だが、スミスのように力づくで留まらせようとするものではなく、いつでも振り払えるくらい軽く、弱弱い握り方だった。普段の彼からは考えられない握り方である。

セレネは振り返って彼に目を向けると、ますます困惑が深まっていった。ノットは薄暗い廊下でも良く分かるほど赤くなっていたのだ。形の良い耳の先まで茹で上がったように真っ赤である。ノットとは目が合わない。彼はずっと床の一点を見つめ続けている。

「お前は……フレッチリーを誘わないんだろ？」

「そうですね。彼の友人関係にヒビを入れるわけにはいきませんから」

「他に気になる奴はいるのか？」

「それは……いないですね」

「……それなら、オレでもいいだろ」

消え入りそうな声で呟かれる。

「オレは……親衛隊隊長のオレは、そこらの奴を誘うわけにはいかないんだよ。示しが見つからないからな。」

今後のオレのためだと思って……誘いを受けてくれないか？」

「……そういうことですか」

セレネは少し納得した。

おそらく、プライドが高い彼は、わざわざ頭を下げて「パーティーへ行かないか」と頼むのが嫌だったのだろう。きつと、それが彼の顔が赤い理由である。恥ずかしがって照れているのだと思うと、セレネは彼が少し可愛く見えてきた。

「それならいいですよ。危険が伴うかもしれませんが、よろしくお願いします」
セレネがそう言うと、ようやくノットの顔が上がった。彼は、はにかんだように

嬉しそうに笑っていたのである。思い返せば、4年の付き合いになるが、笑っている顔をこれまで一度も見ることがなかった。それだけ彼の笑顔はひどく新鮮で、セレネは少し驚いてまじまじと見つめてしまった。

「な、なんだよ。オレの顔になんかついてるのか？」

「いいえ。ただ、笑顔が珍しいなと思って」

「……別に、オレがいつ笑うかなんて、自分の勝手だろうが」

ノットは笑顔を引っ込めると、早足で歩き始めてしまった。

「ほら、早く寮に戻るぞ。代表選手様がフィルチにつかまったとなったら一大事だ」

「代表選手ではなくても面倒です」

セレネは言い返すと、彼の後を追いかけるように寮への道を歩いた。

とりあえず、ダンスの相手が見つからずに、ゴイルと踊るなんてことにはならなくて良かったと、セレネは一安心した。

そして、一つだけ——疑問を持った。

どうして、彼はここを通りかかったのだろう。

セレネが夕食の席に着いた時点で彼はおらず、寮に戻っていたはずなのに――。

50 話 クリスマス・ダンスパーティー

しんしんと雪が何日もわたって降り続けたせいだろう。

ホグワーツの城は例年同様、すべてを覆い隠すような雪で城も校庭もおおわれていた。ポーバトンの薄青い馬車は粉砂糖のかかった巨大な冷えたカボチャの馬車のように見えたとし、ドームストラングの船窓は氷で曇り、帆やロープは真っ白に霜で覆われている。

だから、ドームストラング生とポーバトン生が城に行き帰りする道だけが、深い溝になって道ができていた。

これだけの雪が降り積もっているのです、校庭は無限にある雪を使って遊ぶ生徒で溢れているのだが、今日は太陽が傾き始めても遊ぶ生徒は数人だった。

なぜなら、クリスマス・ダンスパーティー当日だからである。

男子生徒はともかく、ほとんどの女子生徒は夕方になると寮へ戻り、パーティー

に参加するための支度を始めるのだ。セレネでさえ、日中は「秘密の部屋」にもつていたが、6時になると支度のための寮へ戻った。すると、もうすでにパーキンソンやミリセント、ダフネは支度を始めており、ミリセントから「遅い」と指摘されてしまった。

セレネは昨年、ジャスティンの母に見繕ってもらったドレスを着る。

腰に大きめなりボンを結び終わると、鏡で全身を映してみた。落ち着いた青色のドレスを着た少女がそこにいる。オフショルダーは恥ずかしいので、今回は赤いボレロを羽織っているが、それもなかなかの味を出していた。「直死の魔眼」のせいで眼鏡は外せないが、それでも十分、ドレスは似合っている。

セレネは化粧をすませると、鏡を見ながら杖で肩まで伸びた黒髪を結わせていった。滑らかな黒髪をシニヨンみたいに結びあげ終わると、薄桃色のふわふわとした花飾りを編み込んでいく。

「うぐっ、セレネ……正装すると、あんたってやっぱり可愛いのよね」

後ろからミリセントの押し殺したような呻き声が聞こえてきた。

「いつもは中性的なのに、化粧ひとつでぐっと良くなってるわよ」

「ありがとう。貴方も素敵だと思いますよ」

セレネは鏡越しにミリセントを見た。

昨年度、セレネが言った通りのドレスだった。黒を基調としたシックなドレスをカッコよく着こなしている。黒いスカートのひだからは白い足が伸び、赤いハイヒールが輝いているのもかっこいい。

「去年より、ずっといいです。かっこいいですね」

「当然でしょ！ あんたのドレスと同じブランドなんだから！」

ミリセントは得意げになって、右腕を脇を見せるように頭の後ろへ回した。

「たしかに、今日のミリセントは魅力的だね」

ダフネも支度を終えて鏡の前にやって来る。

彼女はスリザリンらしい深緑のドレスを纏っていた。袖口の黒いレースが特徴的である。セレネと同じように、肩が出て恥ずかしいのか黒いボレロを纏っていた。

「ちょっと、ダフネ！ 今日のってどういうこと!?! 今日でしょ!?!」

「ごめんごめん」

「そういえば、ダフネは誰と行くのですか？」

セレネがノットと一緒に行くのは、瞬く間に寮内に知れ渡ってしまったのだが、彼女が誰と行くのかまだ知らなかった。

「うん。私はレイブンクローのアンソニー・ゴールドスタイン君だよ。ゴブストーンクラブで一緒なの」

「ゴールドスタインね……」

セレネが感想を言う前に、ミリセントが呟いた。

「そこそこの名家出身じゃない。アメリカにも親戚がいるって聞いたことがあるわ」
「うん、あのニュート・スキヤマンダーの遠い親戚よ。スキヤマンダーとの直接の血の繋がりはないけどね。」

って、私は血筋で選んだんじゃないってば！」

ダフネが顔を真っ赤にして否定すると、ミリセントはふんつと笑った。

「まあ、私の相手には負けるわね！」

私が選んだのは、コーマック・マクラージェンよ！ 魔法省の高官とのつながり

も深い、マクラージェンの長男と一緒に踊るの!!」

ミリセントはセレネに向かって勝ち誇ったように笑った。

だが、セレネは黙ってダフネと顔を見合わせる。

マクラージェンはクイディッチをやっている自分を一番愛している。そんな彼とミリセントの話が合うかといえば、確実に否である。ダンスを一曲踊ったあと、きつと破局するだろう。ダフネも彼がセレネにパートナーの申し込みをしたときに一緒にいたからか、苦笑いをしていた。

「ちょっと、どうして二人とも変な顔をしてるのよ？」

「いえ、頑張ってくださいね」

「言われなくてもそのつもりよ！ 見てなさい、このパーティーの中で最も幸せなカップルになってみせるんだから！」

「そうなるといいですね」

セレネは浮かれるミリセントを横目に、杖をリボンの合間に挟んだ。ナイフも持ち歩きたかったが、今日は隠す場所がない。最悪、会場に置かれている食事用のナイフを使うでしょう。

「そうそう、ゴースト。ちょっと聞きたいの」

そんなことを考えていると、パーキンソンが話しかけてきた。

彼女はミリセントとは違い、昨年度——マルフォイの屋敷に着てきたピンクのドレスを纏っていた。

「あんた、あの出っ歯の穢れた血と仲がいいじゃない？ 誰と行くか知ってる？」

「いいえ、知りませんけど」

セレネが正直に答えると、パーキンソンは興が削がれたような顔になった。彼女はハーマイオニーを敵視しているのだ。

「まあいいわ。私とドラコ以上に映えるペアがいるとは思えないしー」

そう言いながら、パーキンソンは部屋を出て行った。

そろそろ時間である。

セレネたちも彼女に続いて、談話室に向かった。談話室はいつもの黒い制服の群れではなく、色とりどりの服装で溢れかえり、いつもとはまるで様子が違っていった。ノットは暖炉の傍でマルフォイと話し込んでいた。

「ドーラコー!!」

パーキンソンがマルフォイに抱きついていくのが見える。その横で、クラブとゴイルが苔むした大岩のように黙って立っている。結局、彼らにはパートナーが見つからなかったらしい。

「すみません、待たせてしまいましたか？」

セレネはマルフォイとパーキンソンがいちゃつく様子を横目で見ながら、ノットに近づいた。彼の服装はあまりいつもと変わらない。ただ制服が黒を基調としたシンブルなローブに変わったただけだ。ただ、制服でないだけに大人っぽく見えるから不思議である。

「いや、いま来たばかりだ」

彼はそう言うのと、じっとセレネを見つめてきた。

「お前……よく化けてるな」

「化けているとは酷くないですか？」

セレネが文句を言うと、ノットは鼻で笑った。

ここで、文句を言っても時間の無駄だ。セレネは肩をすくめると口を開いた。

「……まあいいです。それでは行きますか」

セレネたちは談話室から出ると、後に続いて他の生徒たちもぞろぞろと出てくる。どうやら、セレネが出るのを待っていたらしい。セレネたちが先頭で、その後ろをカロ姉妹やエイドリアン・ピュシー、ベイジーなど親衛隊の幹部が続き、その後ろからマルフォイたち純血至上主義の旧フリント派が歩いている。一般生徒たちは、さらにその後ろだ。

セレネはスリザリンの組織力を改めて実感しながら、玄関ホールに足を踏み入れた。

大広間のドアが解放される8時を待って、玄関ホールは生徒でごった返し、誰もがうろうろとしている。普段は人がたくさんいると息が詰まりそうになるが、それ抜きで心が少し弾んでいた。

セレネはホグワーツで迎えるクリスマスは初めてだった。

だから、装飾を見て思わず

「凄い」

と呟いてしまった。

大理石の階段の手すりには、万年氷の氷柱が下がっている。クリスマスツリーの

装飾も手が込んでいて、紅く輝くヒイラギの実から本物のホーホーと鳴くフクロウまで盛りだくさんだった。廊下に並んでいる甲冑の全部に魔法がかけられ、誰かがそばを通るたびにクリスマス・キャロルを歌っていた。

やがて、正面玄関の櫺の扉が開いた。

ダームストラングの生徒が、カルカロフと一緒に入ってくる。

先頭はクラムで薄いピンク色のドレスを着た茶髪の子を連れていた。どこかで見ることがある気がする。セレネが頭を悩ませていると、マクゴナガルの

「代表選手はこちらへ！」

という声が聞こえてきたので、前の方へ進み出る。そこで、ようやくセレネは気づいた。

「もしかして、ハーマイオニー？」

「ええそうよ。こんばんは、セレネ」

ハーマイオニーは緊張気味に微笑みかけてきた。天然パーマ気味の髪が魔法でストリートになっただけで、随分と印象が違う。パーキンソンには可哀そうだが、これは容姿・ドレス・パートナー、そのすべてにおいてハーマイオニーの完勝だ。

「凄い綺麗ですね。ドレスもよく似合っています。でも……てっきり、ハリーと行くのだと思っていました」

「セレネ、まさかりータ・スキーターの記事を信じてるの!? 私がハリーの彼女だって!」

「まさかつ!! あのマスゴ……ごめんなさい、あの記事を信じたのではなくて、いつも一緒にいるので誘われたのだと思ったのです。」

……正直、ハリーから誰かを誘う絵が思い浮かばなかったのです」

セレネが申し訳なさそうに言うのと、ハーマイオニーはくすりと笑った。

「たしかに、そう考えられても仕方ないかも。だって、ハリーはかなりパートナー探しに苦労していたから」

そんなハリーは、グリフィンドールの同級生を連れていた。インド系顔立ちで、ピンクのドレスに金のブレスレットが特徴的な可愛い女の子である。

だが、ハリーはこちらに近づいてきても一言もしゃべらない。いつもなら、話しかけてきそうなものだ。セレネが不思議に思い、彼の視線の先を追うと、そこにはセドリック・ディゴリーとそのパートナーがいた。レイブンクロウの女子生徒だ。

そこそこに可愛く、金色のチャイナドレスを纏っている。

ハリーは彼女をずっと目で追っていた。おそらく、彼女のことが気になるのだろう、隣にいる可愛らしいグリフィンドール生よりも。

ちなみに、フラー・デラクールはレイブンクロウのロジャー・デイベースを連れていた。デイベースも鼻筋が通ったかなりのイケメンのだが、フラーの輝くばかりの美貌に負けてしまっている。しかも、完全にフラーの魅力に負けてしまい、デイベースがエスコートする側なのに、エスコートされていた。

大広間の扉が開かれると、クラムを付け回していたファンの女の子たちが恨みがましい目で見ながら通り過ぎて行った。ダフネはパートナーの男子と仲良く歩きながらこちらに手を振り、ミリセントはもうすでにマクラージェンと言い争いをしながら通り過ぎていく。思った通りの展開に、セレネは苦笑いを隠せなかった。

「ミス・ゴント、表情を引き締めなさい」

すると、マクゴナガルの指摘がとんだ。セレネが慌てていつもの顔に戻すと、マクゴナガルは満足そうに頷いた。

「さあ、みなさんの入場です。それぞれ組になって並び、私の後に付いてきてください」

そう言うと、マクゴナガルは歩き始める。

セレネはそのまま付いていこうとすると、ノットが手を回すように小さな声で伝えてきた。見ると、ハリーでさえパートナーの少女の手を取っている。

セレネは彼の腕に手を回すと、指示に従って大広間に入った。みんなが左右に分かれて拍手で迎えてくれた。その間を通りながら大広間の奥をを目指す。

セレネは第二の課題につながる何かがあるかもしれないと、目を凝らして大広間の内装を見渡してみた。大広間の飾りつけは、いつにもまして豪華だった。壁は銀色に輝く霜に覆われ、星の瞬く様子を映し出している黒い天井にはヤドリギや蔦が絡んでいる。今日はダンスを踊るためか、大きな寮ごとのテーブルはない。代わりに10人程度座れるテーブルがいくつも置かれていた。

その一番奥にあるのが、審査員の座る大きな丸テーブルである。すでに審査員は席に着き、代表選手たちの数分だけ席が空いていた。

……あの卵が発する気を逆なでるような音に関する物は、何一つない。

セレネはスカートが皺にならないように気をつけながら腰を下ろした。そのとき、審査員のクラウチの姿がないことに気づいた。代わりに、ロン・ウィーズリーとよく似た赤毛の青年が座っている。得意満面の笑みを浮かべながら辺りを見渡しているが、どうして審査員が変更になったのだろう。出張だろうか？ その説明くらいすればいいのに、とセレネは思ってしまった。

席の前には金色の皿と小さなメニューが置かれていた。これから運ばれてくるのかと思ったが、ダンブルドアが自分の皿に向かって注文を言うと、料理が浮かび上がってくるのを見て、それぞれ料理を注文し始めた。

ダンブルドアは豚肉を頼んでいたが、このような時こそ高級そうな牛肉を頼むべきである。

セレネは自分を庶民だと思いながら、金の皿に現れた肉をナイフで切った。じゅうわりと赤味から肉汁が溢れ出し、それだけでもぐくりと生唾を飲み込んでしまう。一口、口に入れてみると口の中でトロツととろけ、悶えそうになるくらい美味しかった。セレネは丁寧に切り分けた肉を平静を装いながら食べる。

しばらく食べていると、ノットがこちらを見ていることに気づいた。

「……なんですか？」

「いや、あいかわらず食べ方が綺麗だと思っただけさ」

ノットは淡々と言った。

「マナー教室でも通ってたのか？」

「まさか、独学ですよ」

セレネはノットを一瞥すると、再び肉に目を落とした。

ダームストラング生にも同じ点を褒められたが、そのときは感じなかった嬉しさが込み上げてきた気がする。

「義父のやり方を見様見真似でやっていたら、身についただけです。貴方はどうなんでしょうか？」

「そうだな……オレもマナーに関してはそうだな。オレの場合、死んだ母上だった
が」

「えっ？」

セレネは、肉を切り分ける手が止まってしまった。

ノットは苦笑いを浮かべながら、自分の肉に目を落とす。

「言ってなかったか。オレの母上は9歳の時に死んだ」

「そうだったんですか……ごめんなさい、変なことを思い出させてしまって」

「別にいいさ」

彼はグラスを飲み干すと、いつもの顔でこちらを見てきた。

「死ぬことは分かってたし、覚悟はできていたからな。」

お前はどうかんだ、ゴースト？」

「私、ですか？」

「ああ、お前にも最初は両親がいたんだろ？」

「……そうですね……父親は生まれてすぐに死にました。母親は……」

セレネは肉をつつきながら考え込んでしまった。

父同様、母に関する記憶はない。一度だけ、吸魂鬼に襲われたときに母親にまつわる変な夢を見てしまったが、それが本当に母なのかも分からなかった。そのことを思い出すと、胸がきゅうっと握りつぶされるような感覚になる。

「良く分かりません。きつと、父と一緒に死んだんでしょう。ボーバトン出身かも

しれないということは、分かりましたけどね」

セレネは素っ気なく言った。

「まあ、私には義父がいるので問題ありません。両親と過ごした期間より、義父と暮らした期間の方が長いですから」

義父との仲は良好だ。

優等生としての表面しか見せていない付き合いだが、それなりに上手くやっている」と自認している。

「……そうか。」

まあ、お前の義父上は鼻が高いだろうな。義理とはいえ一人娘が学校の代表選手になったんだ。いくらマグルでも、その凄さは分かるだろ」

「義父に言っていますけどね」

「はあっ!？」

ノットは思いつきり目を見開いて、セレネを凝視してきた。

「お前、何考えてるんだよ!? 家族にくらい報告しろよ! 経緯はどうであれ、誇らしいことだろうが」

「心配をかけるわけにはいきませんから」

学年で実技教科で一位をとったことは、すでに義父に伝えてある。

だが、この詳細まで話さなければならぬこと——たとえば、トム・リドルを倒してホグワーツ功労賞をとったことなどは言っていない。口を滑らせたが最後、心配されること間違いなしである。下手をすれば

『バジリスクがうようよういるような危険な学校に通わせるわけにはいかない!』と、転校手続きをとりそうだ。

セレネはホグワーツにそれなりの愛着を持っている。ここまできて転校などしたくはない。

「そろそろ食事が終わったかの?」

食事を終わると、ダンブルドアが立つように促した。皆が席を立つと、彼は杖を一振りさせてテーブルを横に退ける。代わりに入場して来たのは、怪しげなバンド……妖女シスターズだった。ローブの変なところを切り刻んでいたりと、髪を爆発させていたり、ごてごてしたベルトをまいたりしている。彼らは、それぞれ手にした楽器で最後のチューニングを行っていた。

そろそろ踊るのだと思うと、セレネは少し不安になってきた。

「……ノット。今さらですけど、あなたは踊れますよね？」

「あたりまえだろ。これでも5歳の時からホグワーツ入学前まで、家庭教師から習っていたんだからな。」

お前だって踊れるだろうが」

セレネは何も言わずに、わずかに目を逸らす。すると、ノットはあからさまに意地悪そうな笑みを浮かべた。

「そうか、ゴーストは踊れないのか！」

「踊れますよ！　ただ、第二の課題に繋がるヒントを探しながら踊るのは、至難の業だと思っただけでして」

セレネが言い返すと、彼はうんうんと適当に頷き返した。

「大丈夫だ。それなりに、オレだって上手い。リードしてやるから、安心して踊れ」
彼がそう言ったとき、妖女シスターズは物悲しいスローテンポのワルツを奏で始めた。

ノットは「安心しろ」なんて大きな口を叩いたくせに、とてもぎこちなくセレネ

の腰に手を回した。緊張しているのか、顔も少し強張っている。言っていることと行動が違っているので、セレネは少しだけくすりと笑った。

「よろしく願いますね」

セレネは彼の差し伸ばされた手を握ると、リズムに乗ってステップを踏み始めた。足の動きに気を配りながら、周囲をさりげなく見渡していく。だが、特にヒントになりそうなモノは見つからなかった。他の代表選手たちも踊りに夢中である。ハリーのみ違ったが、あれは課題のヒントを探っているというよりも、ダンス自体に興味がないように思えた。

「……どうやら、私の勘違いだったみたい」

セレネはスローなターンをしながら、ノットの耳元で囁いた。

すでに踊っているのは代表選手だけでなく、一般生徒から教職員まで仲睦まじく踊っている。もはや、代表選手は注目の的ではない。誰もが一緒に踊っているパートナーか、それかもしくは目立つペア……たとえば、フレッド・ウィーズリーとアンジェリーナ・ジョンソンのように十一月の夜のように寂しいワルツなのに、フラ

メンコのように元気を爆発させて情熱的に踊っているペアに視線を向けている。

「課題のヒントになるようなものは、なにも見当たらなかったわ」

「……そうか」

セレネはノットの返答を聞いて、少しだけ首を傾けた。

顔だけでなく、声も強張っている。ステップも少しぎこちない。

「さっき、上手いと言っていたのは誰でしたっけ？」

「う、うるさいな。気が散るから話しかけるな」

彼は頬を真っ赤に染めながら、ずっとこちらを見下している。あまりにも凝視されているので、頬が熱くなってきた。セレネは彼に見るのをやめてくれ、と伝えようとす。その直前に、彼はちらりとある一点に目を向けた。

「あっ」

セレネもくるとターンする瞬間にそちらの方へ目を向ける。

すると、そこにはジャスティンの姿があった。一人で席に座っている。まだ一曲目なのに座っている生徒は少ない。そもそもパートナーがいないクラブとゴイル、退屈そうなパートナーを連れたおんぼろローブのロン・ウィーズリーくらいで

ある。

ジャスティンはどうしたのだろう。彼女と喧嘩別れでもしてしまったのか、ひどく寂しそうな顔をしていた。

「なあ、いまはダンスに集中しろよ」

ターンを終えると、ノットが少し手を引いてきた。身体が密着し、心臓の早鐘を打つ音が伝わってくる。

「お前が足を踏みそうになるから、自然に避けるのが大変なんだぞ」

「すみません。それでは、この曲で終わりにしましょうか」

「までまで。せっかくダンスパーティーに参加しているんだ。楽しまないと損じゃないか？」

ノットは頬を赤らめたまま、いたずらっぽくにやりと笑った。

確かに、彼の言うとおりである。

課題に関係なかったとしても、ダンスパーティーはダンスパーティーだ。夜遅くまで遊んでも処罰されることのないお祭りである。

セレネは少し肩を落とすと、口元を綻ばせた。

「わかりました。あと数曲、一緒に踊りましょう」

「そうこないとな！」

ワルツが終わり、アップテンポの曲に変わっても踊り続ける。

浮かれ騒いだ生徒たちがフリットウィック教授を胴上げし始めた頃、セレネたちはダンスホールから降りて、庭にほど近いテーブルに移動しようとした——その時だった。

セレネは前から走って来た人とぶつかってしまふ。ぶつかったといっても、肩と肩が少しだけこつんとぶつかった程度だ。

セレネが「すみません」と囁くため、相手の顔を見たとき、驚いてしまった。

「ハーマイオニー？」

両目を真っ赤に腫らし、目じりには涙が滲んでいる。

先ほど、クラムとホール中央で踊っていた時の様子とは雲泥の差である。あの時の明るさや楽しさは、彼女から一欠けらも感じられなかった。ハーマイオニーはセレネの顔をろくに見ることなく、青ざめた顔のまま人ごみの中へと消えて行ってしまう。

ハーマイオニーのあまりの様子に、セレネは追いかけようとした。しかし、

「セレネ！」

と、やけに馴れ馴れしい声をかけられてしまい、足を止めてしまう。

ルード・バグマンだ。太った身体を揺らしながら近づいてくる。

「パーティーは楽しんでるかな？ ん？」

「ええ、おかげさまで」

「そうかそうか。それはなによりだ。ところで、第二の課題についてだが――」

ここで、バグマンは急に声を潜めてきた。ノットには聞こえないように、セレネに目一杯近づいて聞いてくる。

「どうだい？ 卵の謎はとけたかな？」

「そうですね、もう少し時間がかかりそうです」

「それなら、少しくらいヒントを出そうか!? なに、ちよつとくらい後押しをしたって――」

セレネはバグマンの薔薇色の丸顔や赤ん坊のような青い瞳を見上げた。

「申し訳ありませんが、課題は自分で解きたいのです。解けにくい謎こそ、燃えて

くるものでして」

「いや……しかし、だな……」

セレネがにこやかに断ると、じれったそうに言ってくる。どうしてもこの男は、自分に八百長をしたいらしい。そのようなズルをしなくても、次こそは一位を手に入れて、そのまま優勝してみせるというのに。セレネは面倒くさくなって、話題を切り替えることにした。

「そういえば、クラウド氏の姿が見えないようですが……出張でしょうか？」

「え、ああ、うん。クラウドは体調が良くなってね、しばらく病気で欠勤するそうだ。それよりも、課題のことだが――」

話題を切り替えてもなお、バグマンは喰いついてくる。

セレネはうんざりしてきた。審査員とはいえ、自分に馴れ馴れしく話しかけてくる時点で嫌悪感を覚えるというのに、その上に「魔法ゲーム・スポーツ部」の部長自らルールを破って八百長を申し出てくるなんて最悪だ。それが明るみに出た場合、彼はどう責任を取ってくれるのだというのだろう。

しかし、かといって下手に断って相手の機嫌を損ね、カルカロフのように点数の

意地悪をしてくるようになったら質が悪い。呪いや目を使って追い払うにも、周りに人が多すぎる。

セレネはちらりとノットを見上げた。彼は自分の隣で退屈そうに立っている。セレネは小さく息を吐くと、覚悟を決めた。

「いいかな、セレネ。君が一言でいいんだ。助けを求めてくれたら——」

「ごめんなさい、バグマンさん」

セレネは勢いよく、ノットのがら空きだった腕に抱きついた。

「今日は課題のことを忘れて、彼と2人で楽しく過ごそうって決めていたんです」
この場を思いっきり利用した逃げ方である。バグマンがセレネに肩入れして何かを企んでいるにせよ、仲睦まじくしているペアを邪魔するような無粋な人間ではない。案の定、バグマンは多少バツの悪そうな顔になった。

セレネはしょんぼりとした顔を作ると、バグマンに少し頭を下げた。

「申し訳ありませんが、またの機会にお願いします。それでも、どうしてもというのでしたら……お話をお聞きたいしますが……」

セレネがそう言いながら腕にしがみつくと、バグマンは慌てたように首を横に

振った。

「い、いやいや、私もこんな賑やかなパーティーに課題の話なんて、悪かった悪かった。ただ、心配だったただけなんだよ。なにか困ったことがあったら、ふくろうを送りなさい」

「ありがとうございます。……行きましょう」

セレネは彼の返事を待たず、腕を引っ張ったまま庭へと抜け出した。

「……すみません、いきなり」

バグマンが追ってこないのを確認すると、するすると腕から手を離した。

「でも、ああでもないかと解放してくれなさそうだったので……それにしても、クラウチは病氣なんですね。てっきり、出張だと思っていました。『国際魔法協力部』と言っていましたし、外国へ………ノット？」

ノットは難しい顔をしていた。耳の先まで、まるで湯気が立ちそうなほど赤く染まっている。怒っているのかと思ったが、怒りの雰囲気は感じない。どちらかといえば、戸惑っているようだった。

「あの……そんなに嫌だったですか？」

「いや、嫌じゃない、が……ふいうちだったというか、なんというか……気にするな」

そして、彼は赤くなったままの顔に掌を載せて、深く息を吐いた。赤色が少し落ち着き始めた頃、彼はようやく口を開いた。

「……で、悪い。何の話だったか？」

「クラウチが病気の話です。国際魔法協力部なので出張かと思ったんですけど……」

「あー、それか。まあ、出張と考えるのが妥当だよな」

ノットは顔に手を置いたまま話し続けた。

「噂だと、クラウチは150か国語話せるらしい。どこに出張しても対応できるだろうよ。アメリカ、フランス、ドイツ、日本、中国といった主だった国々の言葉はもちろん、小鬼のゴブルディグック語や水中人のマーミッシュ語、あと巨人の——」

「待って、いまなんて言いました!？」

「ん？ 巨人の言語のことか？」

「いえ、その前。たしか、水中人の……なんでしたっけ？」

「マーミッシュ語？」

「そう、そうです」

セレネは腕を組むと考え込んだ。

水中人のマーマッシュ語。

水中人は歌が得意で、歌を奏するような会話するようだ。——水中の中限定で。というのも、水の外に出た瞬間、彼らの美しい声は聴くに堪えない声へ変わってしまうのだ。

「ありがとう。もしかしたら、課題が解決できそうです！」

「そうか？ オレは何もしてないが」

あの卵を水につけてみたら、なにか分かるかもしれない。

もしかしたら、ただの徒労に終わるかもしれないが。

「いいえ、貴方のおかげで課題が解決できそうです。さっそく、明日にでも試してみますね」

「明日？ 今日じゃなくてか？」

ノットは片方の眉を上げた。

「だって、貴方が言ったんですよ。パーティーを楽しまないと損だって」

セレネは、ホタルのように淡い光を放つ妖精たちを眺めながら言った。

この庭を見て回るだけでも、楽しそうだ。なにしろ、何の変哲もなかったはずの庭が、たった数時間で薔薇の茂みが生える迷路のような庭へと変化を遂げたのだ。素晴らしい魔法である。

「……それなら、オレの父上が主催するパーティーにも来るか？」

「え？」

「……魔法使いのパーティーは珍しいんだろ？ 去年のマルフォイのところだと、ろくに楽しめなかっただろうし……来年、来いよ」

「でもいいんですか？」

「別に構わない。ほら、行くぞ。お前のことだから、この庭を散策したいんだろ？」
彼はそう言うと、先に歩き始めた。

「そうね、行きますか」

セレネはくすりと微笑むと、いつにないくらい心地よい気持ちで薔薇が生い茂る庭を歩き始めた。

51話 卵の謎とリータ・スキーター

深夜——セレネはベッドを抜け出すと、卵を抱えてある場所へ向かった。

監督生用の風呂場である。

水中人の声が卵の謎を解くヒントになるのだとしたら、水に卵を浸して頭を突っ込めばいい。だが、いまは12月。真冬である。セレネには、氷のように冷たい水に頭を突っ込む趣味はない。そんなことをしたら、風邪をひいてしまう。

どうせなら、水ではなくてお湯、それも温かい風呂につかりながら考える方が遥かに健康的にも良いだろう。

そこで、さっそく親衛隊員の女監督生から監督生専用浴場の合言葉を聞き出すと、セレネはこうして人目を忍んでつかりに来たのであった。

「これは……なかなかいい所ね」

セレネは蝋燭の灯ったシャンデリアを見上げながら呟いた。

シャンデリアの灯りが白い大理石造りの浴室を柔らかく照らしていた。床に埋め

込まれた長方形のプールのような浴槽も白い大理石である。浴槽の周囲に、百本ほどの金の蛇口があり、取っ手のところには宝石が埋め込まれていた。

これを自由に使えるのだとすれば、監督生もなかなか捨てたものではない。

セレネはそう思いながら、壁に向かって話しかけた。

『アルケミー、見張りはよろしくね』

たいして大きな声を出していないのに、壁に当たって反響し浴室中に木霊していた。

『了解しました、継承者様。近づく人間は、私が殺せばいいのですね』

『いや、人が近づいてきたら教えてくれたらいいの。あとは、私が『目くらまし』で姿を消すから』

セレネは苦笑いをしながら蛇口をひねった。

一応、アルケミーに見張りはさせているが、こんな夜中に風呂に浸かりに來ないだろう。もし、スリザリン以外の監督生がやってきたら、目くらましで姿を消すか、言い訳をすればいい。たとえば、『代表選手の疲れを癒すため、先輩がここを教えてくださいましたんです』とかだ。

セレネは服を脱いで隅に置いてあつた籠に置くと、そつと爪先から湯に足をつけ
てみた。

「ううー……」

いままで感じたことのない感覚に、セレネの身体は強張つた。爪先からびりびりと痺れ、胸まで苦しくなってくる。しかし、我慢してつかっていると、なんともいえない良い気持になつてきた。肌を薄氷のように覆っていた緊張がじつくりと溶け、全身から力が抜けていくようだった。

「お風呂って良い文化かも」

湯気がかすむ天井の模様を眺めながら、セレネは呟いた。

東洋では毎日湯につかるらしい。この話を聞いた時は信じがたく思つたものだが、案外これはいける。自分が監督生になったら、毎日通いそうだ。この快感を知ると、もうシャワーのみの生活には戻れそうになかった。

「さてと、そろそろ卵の謎を解かないと」

浴槽の端に置いておいた金色の卵を引き寄せてみる。

そして、思いつきり沈めてみた。すると、もうあの金切り声は聞こえず、代わり

にごぼごぼという泡と共に歌声が聞こえてきた。やはり、この状態では聞こえない。セレネは眼鏡を外した。その途端、数えきれないほどの『線』が周囲を覆いつくしていく。頭が痛むのを歯を食いしばって堪えながら、セレネは大きく息を吸うと湯に潜った。

すると、湯の中で卵から幻想的な声のコーラスが聞こえてきた。

『探しにおいで 声を頼りに 地上じゃ歌は 歌えない

探しながらも 考えよう 我らが捕らえし 大切なもの

探す時間は 1時間 取り返すべし 大切なもの

1時間のその後は……もはや望みはありえない

遅すぎたなら そのモノは もはや2度とは戻らない』

セレネは水面から顔をだし、湯気で少し曇った眼鏡をつけた。ポタリポタリと髪から湯が滴り落ち、水面に波紋を作っていく。セレネは肩までつかりながら、先程聞いた不思議なコーラスを反芻した。

「大切なものを探す……1時間以内に、か。なんだ、本当にダンスパーティーは関係なかったのね」

セレネはがっくりと首を倒した。

「水中人がいるのは湖。まさか……1時間も湖に潜るの？」

温かな湯につかっているというのに、身体がぶるりと震えてしまった。

この極寒の下、湖に潜るのは正気の沙汰ではない。早急に、防寒魔法を習得する必要がある。ホグズミード村辺りで、すでに防寒魔法がかかった水着を購入するのもいいかもしれない。

1時間潜るというのは、とりあえずなんとかなるだろう。

泡頭呪文で新鮮な空気を確保すればいいだけである。マグルのダイビングセットをお小遣いで購入し、試合開始後に呼び寄せ呪文で取り寄せるといふ手もあるが、ダイビングのスーツを着るのに時間がかかるし、酸素ボンベなどの装着に戸惑っている間に、他の代表選手に先を越されてしまう。

なのでここは、泡頭呪文となにかを併用して考えるべきだろう。

「でも……大切な物ってなんだろう？」

一番大切なものは、自分の命だ。

だが、これを水中人に奪われたが最後、課題に参加することはできない。

次点は、セレネが大切なものは杖である。

しかし、肌身離さず持っている杖を奪われるわけにはいかない。むしろ、杖がなかったら課題を解決することができないので、これもありえないだろう。

となると、残りはお守り代わりに持っているフラメル夫人から貰った黒い石やゴーンの指輪だが、これも肌身離さず持ち歩いているので、そもそも奪うことができない。

では、大切なものとは何か。

「……ま、細かいことは後で考えよう」

やるべきことは分かった。

あとは、練習を重ね、実戦に備えるまでだ。それに、セレネには第二の課題の前に片付けなければならない問題があった。

セレネは湯から上がると、白いタオルで身体を拭き始めるのだった。

※

卵の謎が解けてから、あつという間に時計の針は進んでいった。

気がつけば、セレネが待ちに待った1月の週末——ホグズミード村行きの日になつていた。

3年の時は行くことができなかったが、吸魂鬼がいなくなったので、めでたく今年から村へ行くことを許可されたのである。

セレネたちは重い荷物を抱えながら雪でぬかるんだハイストリートを突き進むと、「三本の箒」に足を踏み入れた。このパブはいつも込み合っている。どのテーブルも込み合い、ホグワーツ生や魔法使いたちで賑わっていた。セレネは人の波を縫いながら、カウンターへ近づいていった。

「すみません、個室を予約したゴーントですけど」

セレネはカウンターに辿りつくと、マダム・ロスマルタに話しかけた。

「ああ、ゴーントさんね。201号室をどうぞ。これが鍵よ」

「ありがとうございます」

セレネは小さな鍵を受け取ると、人ごみを縫いながら二階に上がっていった。このパブの二階には個室が並んでいる。それなりの値段が張るが、秘密の話をするには都合の良い場所だ。セレネは201号室を開けると、荷物をほどこき始める。何の変哲もないティーセットだ。まっさきに古代ルーン文字が刻まれたお気に入りのカップが割れていないことを確かめると、セレネは杖を振りながら楽しいお茶会の準備をし始めた。お茶会があまりにも楽しみなので、ついマグルの歌を口ずさんでしまう。

「あら、聞き覚えのない歌さんすね」

セレネがカップに湯を注いで温めていると、一人の女性が乱暴に扉を開けて入ってきた。リータ・スキーターだ。バナナ色のローブを身に纏い、長い爪をシヨッキングピンクに染めている。

「ビートルズですよ」

「かぶとむし？」

「マグルの人気グループです。もうずいぶん前に解散してしまいましたが」

セレネはそう言うのと、リータ・スキーターに自分にできる最高級の微笑みを向けた。

「今日は来てくださってありがとうございます。ごめんなさい、人気記者で忙しいのに……」

「かまわないわよ。あたしは貴方に興味があるんです。あなたが、ハリーのことをどう思っているのかとか、聞きたくてたまらないわあ」

彼女の目はまるで、捕食者のようだった。か弱い獲物をどう食するのか——そう考えている目だ。

「ええ、ハリーのことについても語りたいと思います。きっと、リータさんが欲しい情報だと思いますから」

彼女が欲しがっているのは、読者が喜ぶ記事だ。

そのためなら、人の尊厳を傷つけたってかまわない。セレネがハリーのことを好きでたまらないと、でっちあげるのもその一つだ。

おそらく、今日——もし、セレネがハリーについて正直に語ったら、思いっきり

着色されるだろう。たとえば、課題でハリーを事故に見せかけて殺し、無理心中を
図ろうと企んでいるヤンデレ女だとか――。

「リータさん、すみません。この個室をとるのでお小遣いが精いっぱい……私の
淹れるお茶で我慢してくださいませんか？ それなりの茶葉を使っているので」

セレネは申し訳ないと謝ってみせた。

すると、リータはふんつと鼻を鳴らしながら、椅子に腰を掛けた。

「代表選手の淹れるお茶さんしょ？ とても楽しみだわねえ！」

「ありがとうございます!! リータさんに飲んでいただけるなんて、とても光栄
ですよ！」

どうせ、そのあとに思いつきりこき下ろし、新聞のネタにするのだろう。

セレネは目を伏せながらお茶を入れた。

「でも、まさかあんたが取材OKしてくれるとは……正直、思わなかったぞんす」

「それはもちろん、貴方が素晴らしい記者だからです。」

新聞を読みました。ハリーの内面をあそこまで取材するなんて、そう簡単にでき
ることはありませんよ……あ、ミルクは入りますよね？」

セレネはリータに渡すカップにミルクを注ぎ込みながら、困ったように笑った。

「どうぞ」

リータがカップに口をつけて飲んだ。ごくりと喉が動く。

「どうです、お味は？」

「……普通なんです。そこらの小娘が淹れたお茶にしては、まあまあ合格点でしょう。もちろん、あたしが飲むには下の下なんです……？」

リータはそこまで言ったとき、わずかに眉をひそめた。その反応に、セレネは少し驚いて片方の眉を上げる。だが、すぐに元の優等生スマイルに戻すと、セレネはリータに伺いを立てるような声色で話しかけた。

「あの……もう一口飲んでいただけませんか？　一口ごとに味が変わるようにしたのですけど」

「そんなことができるんですか？」

「私は魔女ですよ。しかも、代表選手です。そのくらいの魔法をかけるのは簡単なんです。それに――」

セレネも自分のカップに注いだストレートティーを飲みながら、嬉しそうに微笑

みかける。

「今日のゲストはリータさん、あなたです。だから、楽しんでもらわないと」

セレネが無邪気に微笑みながら言うのと、リータはもう一口、二口と。ミルクティーを口にした。

「味が変わらないぞんすけど？」

「それは、おかしいですね」

セレネはきょとんと首を傾げた。

「リータさん、一つ質問をしますね。紅茶を飲むときに砂糖を入れましたか？」

「入れてないぞんすよ？」

「そうですか。……では、リータさん。次の質問です。もしかして、貴方——

人に言えない秘密がありますよね？ それ、今ここで話してもらえませんか？」

セレネはにこやかな笑顔を浮かべたまま、リータに本題を切り出した。「今日の天気は晴れですか？」と尋ねるような、ごくごく自然な口調で。

すると、リータは怒ったように眉間に思いつきり皺を寄せた。紅茶の感想を聞か

れるのかと思ったら、いきなりプライベートと真ん中の質問を聞いてきたのだ。いきなり土足でずかずかと家に入り、その家の金庫の開け方を聞いているようなものである。

リータでなくても怒るに決まっている。事実、リータの口調はかなり荒々しい物だった。

「あんた、なに聞いてるざんしょ!! 人に言えない秘密う? そんなもの、あたしは未登録の動物もどきでコガネムシになれることに決まってるざんしょ!! ……ッ!!」

リータは慌てて自分の口に手を当てたが、もう後の祭りである。

セレネはしっかり聞いてしまった。セレネは自分のカップをことりとテーブルに置くと、リータに悠々と微笑みかける。

「そうですか、そうですか。あのリータ・スキーターが未登録の動物もどき。しかも、コガネムシということは……もしかして、無断でホグワーツの校舎内に入ったこともあったのでは?」

「あたりまえざんしょ、クリスマス・ダンスパーティーの夜や休み時間に入って、

いい話がないか探して飛び回ったぞんすよ——ッ、この口!!」

リータはべらべらと話しながら、自分の口を押えようと格闘する。彼女はセレネを睨みつけると、冷たく言い放った。

「小娘え……このあたしに真実薬を盛ったわねえ」

「真実薬？」

セレネはとぼけてみせる。

「それは、たしかに真実薬を個人的興味の一環で作ったことはありましたが……まあ、大変っ！ 真実薬をミルクの中に落としてしまったことを忘れてしました。ごめんなさい、リータさん。真実薬は無色無臭なので、すぐに気づけませんでした」セレネはリータにしらじらしく謝って見せる。

もちろん、大嘘だ。

最初から彼女をはめるために、真実薬を作ったのである。薬を作るのには一か月もかかるので、秘密の部屋をなかなか離れることができずに大変だったが、ようやく満足のいく出来栄だったようだ。リータ・スキーターの反応がそれを証明している。

セレネの顔はますます笑みが深くなっていた。

「ということは、いまのはすべて真実ということ。まさか……人の不幸を餌にして生活しているリータ・スキーターが、未登録の動物もどきで、しかも不法侵入を繰り返していたなんて、これは大スクープです。良かったですね、リータ・スキーター。貴方のことは新聞の一面になるはずですよ！」

「調子に乗るなよ、小娘ごときが」

いまや、リータは甘い顔を一切脱ぎ捨てていた。おそらく、こちらが本性なのだろう。めらめらと憎悪に燃える目でセレネを睨み付けてくる。

「私が実際に変身している時ならまだしも、14歳の小娘の言い分なんて、誰も信じるわけないぞんすよ」

「そうかもしれないですね——聞いたのが私、一人だけなら、ですけど」
セレネは杖を一振りした。

誰もいなかったはずの空間に数人の人が浮かび上がってくる。

フローラ・カローにヘスティア・カロー、エイドリアン・ピュシー、ガウエイン・ウルクハート。

親衛隊の幹部たちである。

「私の友だちです。私がリータと二人っきりで会うのが不安だと心配してくれまして、こうして『目くらましの呪文』をかけてついてきてくれたのです」

これには、さすがのリータの顔にも恐れの色が滲み始めた。聞いた人間がピュシーとウルクハートだけなら、まだリータは強がることができたかもしれない。しかし、この場所には政治界にも発言力の強い聖28族の一角——カロー一族の跡継ぎがいるのだ。彼女たちの父親を通して、しかるべき場所にこの情報を持っているか、れた暁には、リータの記者生命が失われるどころか、アズカバンに送り込まれてしまう。

「もちろん、貴方の声は録音させていただいています」

セレネは録音機を片手で放りながら、リータの方に歩み寄って行った。

「でも、私——貴方とは仲良くしたいと思っていますのですよ」

「仲良く？」

「ええ。だって、貴方は新聞記者。それも、動物もどきにもなれる優秀な魔女です。その能力を活かして色々な取材もできますし、なにより——ここで、貴方を殺した

ら、どこぞの塵以下のサイコパスと同じになってしまいますから」

セレネは余裕を持って微笑みかけた。

本当ならここで、治癒魔法を併用して死なないように加減しながら、呪いをかけたあと、八つ裂きにして大通りに晒したいところなのだが、そこまでしたら、完全にサイコパスだ。そもそも、憎らしいことをされたぐらいで人を殺していたら、ヴォルデモートと同じになってしまう。

すでに、彼女の弱みは握っている。

あとは、完全に自分の支配下に置くだけだ。

「リータさん、貴方は私の下僕になってくださいね」

純粹な暴力で、リータを屈服させることも考えた。

現在、「三本の箒」の個室はすべて親衛隊で押さえている。リータが悲鳴を上げても、同じ階からは誰も助けに来ない。この女に呪いをかけたり殴ったり蹴ったりするのだ。セレネはもちろん、今日連れて来たメンバーは相手が大人であろうと手加減をしない。セレネの命令通り、忠実にリータを痛めつけるだろう。そんなことを三十分程度もすれば、きつと屈服し、許しを請うに違いない。

しかし、それでは美しくない。

痛みでの支配なんて、自分にふさわしくない。なによりも、片付けるのが面倒である。

だから、セレネは丁寧をお願いした。

「私の言うことには絶対服従。逆らったら罰を受けます。いいですね？」

「下僕っ!？」

リータは目を剥いた。

「冗談じゃないぞんす！　いくら動物もどきのことを知られたからって、誰が下僕になんか——」

「ところで、リータ。これはご存知ですか？」

セレネはリータが使っていたカップを指さした。

古代ルーン文字が刻まれている以外、何の変哲もないカップだ。リータも困惑したのか、眉間に皺を寄せて考え込んでいる。セレネは朗らかに微笑んだまま、説明をした。

「古代ルーン文字……もちろん、古代に使用されていた魔法文字ですが、たんなる

文字としての使用以外にも使われていたことをご存知でしょうか？」

「そのくらいは知ってるぞんす」

リータはちよつと憤慨したような声で言った。

「文字を書くだけで発動できる太古の魔法ぞんしょ？　でも、ほとんどは失われて意味をなさないぞんすけど、それが、どうして——……まさか」

リータは何か感づいたのだろう。彼女は慌てたようにカップを凝視し始めた。その様子を見て、カロー姉妹がくすくす笑っている声が聞こえてくる。セレネもその声に合わせてるように笑った。

「ええ、その通りです。でも、私はちよつと失われたルーンを復活させることができまして」

秘密の部屋で見つけたのは、なにも錬金術の書物だけではない。

サラザール・スリザリンの時代ですら、すでに失われつつあったルーン文字が大量に残されていたのである。

セレネは今回、その中の一つをカップに刻んでいた。

「そのルーンの効能は、実に簡単です。」

そのカップで紅茶を飲んだ者に、こんな魔法をかけるんです。

そう……『セレネ・ゴントに服従しなければ、ヒキガエルになる』。ね、簡単でしょう？」

リータは呆気にとられたように口を開いた。そこには自信に満ち溢れ、人を陥れることを楽しむ女の姿はなかった。セレネはその姿を楽しみながら、言葉が続ける。「動物もどきの変身は意識を保てるようですが、変身術——それも、ルーンを用いた変身術の場合、意識を保つことはできません。だって、無理やり肉体を再構成して、カエルに変えてしまうのですから」

そう、たとえるなら、針山にされたハリネズミが、ハリネズミであったことを忘れるように。

ヒキガエルにされた人間は、自分が人間だと思いつくこともなく、ヒキガエルとして一生を終えるのだ。

「そんな……!？」

「楽しそうですね、カエルになった貴方に蠅を食べさせてみるのは。蛇の餌にする

のでもいいかもしれません。蛇に食べられている最中にルーンが解けたら……きつと、見物でしょうね」

「馬鹿な。たった14歳の小娘に、そんな高度なルーンが使えるわけがない!! ありえるわけがないっ!! 絶対に服従なんてするものか!」

リータは悲鳴に近い叫びを上げる、

「ありえない?」

セレネは笑みを引つ込めた。かつ、かつとブーツの音を立てながら、今にも崩れ落ちそうなリータ・スキーターに近寄っていく。

「まさか……。ありえないことなんて、ありえない」

セレネが呟くのと、リータの左腕がぶくぶくと膨れだすのはほぼ同時だった。リータの左掌にみずがきができたかと思うと、みるみる間に肌は茶色に変色し、膨れ上がっていく。そう、それは、完全にヒキガエルの左腕だ。リータは甲高い悲鳴を上げた。

「あ、あたしの、手——ッ!!」

「服従すると誓いなさい。そうすれば、呪いが止まるわ」

「わ、分かりました。誓います。あんた、あなたさまの下僕になるから!!」

リータが泣き叫びながら宣言して、ようやく呪いが止まった。彼女の腕は、その半分がヒギエルのもものになってしまっている。呪いの進行が止まっても、元の腕に戻る気配はなかった。

「あ、あたしの、あたしの腕が——!!」

リータは絶叫する。

毎日欠かさず手入れをしていた爪も、ペンを握るための指も、ほどよく太った白い腕も、そのすべてが醜いカエルのモノになってしまっていた。

「最初から、ゴースト様に従っていればよかったんだよ」

ウルクハートが塵を見るかのように、リータを見下した。

「そうすれば、腕を失わずにすんだんだ」

「でも、片方だけですんで良かったですね」

フローラが口元を扇子で押さえながら言い捨てる。

「片方だけなら、もう片方で杖もペンも握れますから」

「ええ、姉様。この人の記者生命が絶たれずにすんでよかったですね」

ヘスティアもフローラに寄り添いながら、リータを一瞥する。ピュシーはリータに興味の欠片もないのだろう。何も言わずに、セレネが次に下す命令を待っていた。「まあ皆さん、リータ・スキーターの過ちを責めるのはそこまでです。本人も反省しているでしょうし」

セレネは軽く手を叩いた。そして、そのまま杖を軽く一振りする。杖先から溢れ出た金色の粉が、リータの腕に降り注いでいた。

「これから一時間、その腕が他人からは普通の腕に見えるようになります。その魔法が解ける前までに、ホグズミード村を出て行ってくださいね」

「は、はい」

「もちろん、この呪いのことを誰かに伝えるのも駄目です。どのような手段であっても伝えた瞬間、呪いの進行が再開されます。」

これからも、私の不利になることはせず、有利になるように動きなさい。いいですね、下僕？」

セレネはリータの青白くなった頬に杖で触れながら、そっと耳元で問いかける。そして、じっと黙り込んだリータを杖先で軽く叩き、言葉を促した。

「……はい、了解したぞんす」

リータは下を向きながら、苦しそうに言った。

「それでは、さようなら。節度のある行動を心がけなさい」

セレネは杖をしまった。そのまま制服のスカートを翻すと、リータに背を向けて歩き出した。フローラたち親衛隊幹部もその後続く。

セレネたちはリータよりも先に階段を降りていく。セレネは最後尾のピュシーがティーセット一式を持っていることを目で確認すると、彼らに声をかけた。

「ありがとうございます、みなさん。でも……ごめんなさいね、野暮用につきあわせてしまつて。せつかくの休日なのに」

「いいえ、むしろ光栄ですわ！」

ヘスティアが真っ先に口を開いた。彼女に続けとばかりに、残りの隊員も話し始める。

「ゴースト先輩から頼られることなんて、滅多にないですから」

「隊長ではなく、僕たちにリータ・スキーターへの制裁を手伝わせてくれるなんて、思ってもいませんでした」

「これから何か問題があった時は、オレ、喜んで力になります！」

四人とも目をギラギラと輝かせていた。

「それにしても、やりましたね、ゴースト先輩！」

「最後のリータの顔見ましたか？」

「いい気味だったよな、本当に」

そして、手近なテーブルに着くとはしゃぎ始めた。

セレネは四人に向かって

「それでは、私はこれで。行く場所があるので」

そう言って、三本の箒から抜け出した。

湖に潜るため、水着を買いに行かなければならない。

途中、ハリーたち三人組とすれ違った。ふと、ハリーが第一の課題について教えてくれたことが脳裏を横切る。あのとき、すでにセレネは第一の課題について知っていた。なので、ハリーの行動は意味のないものになってしまったわけだが、表面上は知らなかったことになっている。つまり、ハリーに借りがある状態だ。

ならば、いま——第二の課題について教えてあげた方がいいのではないだろうか。

セレネはハリーに声をかけようとして、口を閉じた。

ハリーは現在、1位だ。

もし、課題の内容を教えて、また1位になるようなことがあれば、第三の課題で引きずり下ろすのは至難の業だろう。教えない方が、ハリーが1位を獲得する可能性を消すことができるかもしれない。

セレネはもう二度と、誰にも負けたくなかった。当然、ハリーにもである。しかし、普段演じている優等生の自分なら、絶対に余裕をもって教えていることだろう。セレネは悩んでしまった。

そして、この一瞬の躊躇の間にも、彼らの姿は人並みの向こうへ消えて行ってしまう。

「……嫌な女」

セレネは自分に向かって呟くと、ハリーの歩いて行った方向に背を向けた。

52 話 第二の課題

最近、セレネはあまり図書室に行かない。

秘密の部屋でだいたい事足りてしまうからだが、一応、秘密の部屋は閉鎖されたことになっている。おおっぴらに行くわけにはいけないので、時折は図書室を利用して勉強していた。

課題は、いよいよ明日に迫った。今回使用予定の魔法は、すべて習得し終えている。通常の予習復習はとうに終わっていたので、セレネは明日に備えて脳を休めるため、軽い読み物を探しに来ていた。

『新説アーサー王と円卓の騎士』『フランケンシュタイン』『狂えるオルランド』これ、全部マグルの図書館にもありそうね」

セレネは本棚の間を歩きながら、興味の引く本を取り出していく。

魔法界の文化の中にマグルの文化とのつながりを見出すとき、いつも興味が沸き上がってくる。いまでこそ魔法界とマグル界はほぼ完全に遮断されているが、このように痕跡は少しずつ残っている。魔法界の物語がマグルにも流れたのか、それと

も、逆なのか。はたまた、それらは重なり合って共存していたのか。

「ゴースト、そんなところで何してるんだ？」

後ろから声をかけられる。

振り返ると、そこにはセオドル・ノットの姿があった。彼は『ニガヨモギの効能と特製』という本を抱えている。おそらく、魔法薬学のレポートで使うのだろう。彼はセレネの借りる本を一瞥すると、興味深そうに眉を上げた。

「意外だな、アーサー王伝説を読むのか？」

「読み物として面白いですよ。マグル界で知られる伝説との差異も感じられますから。この本を読んで、私は初めてアーサー王が女だったと知りました」

「いや、それは絶対に違う。魔法界でもありえない」

ノットは即座に否定してきた。

「アーサー王が女だったら、どうしたらモードレッドが産まれるんだよ？」

「この本によると、モルガンの魔法らしいですよ」

「ますますありえないだろ……」

小声で話しながら歩いていると、図書室の隅でハリーたちが大量の本を読み耽っ

てる姿が目に入った。疲れ切った顔で本を読み漁っている。ハリーはセレネが見ていることに気づいだろう。

「セレネ！」

ハリーは『トリック好きのためのおいしいトリック』に突っ伏していた頭を上げると、縋りつくようにこちらを見てきた。完全に疲れ切った目をしている。セレネは小さく息を吐いた。

「ハリー、明日に備えて寝た方がいいのでは？ 目の下にくまができていますよ」
「うん、そうしたいんだけど……も、もしかして、セレネも課題の本を探しに来たの？」

「いいえ、私はただの読書です。……まさかとは思いますが、まだ課題が分からないのですか!？」

セレネはぎょっとした。

課題開始まで、とくに24時間を切っている。いまから『泡頭呪文』を習得するのは至難の業だし、変身術で水生生物にしても、上手くやらなければ記憶をすべて失ってしまい、元に戻れなくなってしまう。そうなったら課題の解決もあったも

のではない。

「ハリー、卵を水につけてみましたか？」

「それはやったよ。でも、思いつかないんだ」

ハリーはぐったりとした声で言った。

「湖の中で一時間、息をしているなんて……僕、あの人から動物もどきになる方法を習っておけばよかった」

おそらく、彼の脳裏にはシリウス・ブラックの姿があるのだろう。彼は無登録の動物もどきで、大きい犬に変身できた。

「セレネはカエルに変身できるの？」

「カエルに変身させる方法は知っていますけど……そんな期待に満ちた目で見ないでください。カエルになったが最後、課題のこともすべて忘れてしまいますから」

「……そっか……」

ハリーはまた本の上に頭を落とした。

ロン・ウィーズリーはこんなときだというのに、セレネたちを警戒しているように睨んでくる。ハーマイオニーは『奇妙な魔法のジレンマとその解決法』という本

をぱたんと閉じた。

「ねえ、セレネはどうやって課題を解決するの？」

「ハーマイオニー、君は正気？ 相手はスリザリンだぞ!？」

ウィーズリーが非難の声を上げるが、ハーマイオニーは彼を制した。

「いまはそんなことも言ってられないわ。ハリーは明日の課題を乗り越えないといけないもの。」

それで、セレネはどうするの？ まさか、鼻毛を伸ばして小さな浮き輪を作るわけじゃないわよね？」

「……ゴント、お前……そんなことをしようとしていたのか？」

「まさかっ！」

ノットまで神妙な面持ちでこちらを見てきたので、セレネは一蹴した。

「誰がそんな方法をしますか！」

「オレはやってもいいと思うぞ」

第三者の声が聞こえてきた。振り返ると、そこには赤毛の男——フレッド・ウィーズリーとジョージ・ウィーズリーがいた。その後ろには、同学年のスリザリン生ブ

レース・ザビニの姿もあった。完全に不釣り合いな二人である。

「ネタになる。笑い話にちょうどいいじゃないか」

「二人とも、こんなところで何をしてるんだ？」

ロン・ウィーズリーが尋ねると、フレッド・ウィーズリーが口を開いた。

「お前たちを探してたんだ。マクゴナガルが呼んでるぞ、ロン。ハーマイオニー、君もだ」

「どうして？」

ハーマイオニーは驚いた。

「知らん。少し深刻そうな顔をしていたけど」

「オレたちが二人をマクゴナガルの部屋に連れて行くことになっている」

フレッドとジョージ・ウィーズリーが交互に口を開いた。ハーマイオニーたちはひどく心配そうな顔でハリーを見ると、2人に連れられて去っていく。

セレネは残ったザビニ・ブレースに問いかけた。

「……それで、ブレースはどうしてここに？」

「それが、同じ理由なんだよ。マクゴナガルにセオドルを連れて来いって」

「オレを？」

ノットは困惑していた。彼もハーマイオニー同様、呼び出される心当たりがないらしい。彼はザビニに連れられ、少し不安そうな顔をしたまま去って行った。

図書館には、ハリーとセレネだけが残された。

「……このタイミングで、この3人を呼び出すなんて……」

セレネは考え込む。

ハーマイオニー・グレンジャー、ロン・ウィーズリー、セオドール・ノット。この3人に共通点があるとは思えなかった。しかし、課題前夜のタイミングで呼び出されるとは何か臭った。

ハーマイオニーとノットだけなら、なんとか共通点は見つかる。クリスマスのダンスパーティーで最初に踊った二人だ。ノットはセレネと、ハーマイオニーはビクトール・クラムと踊っている。だが、それを呼び出す意味が分からなかった。ましては、ロン・ウィーズリーはハリーと踊っていない。

だが、一応、セレネはハリーに確認してみることにした。

「ハリー、……あなた、ウィーズリーとダンスパーティーで踊りましたか？」

「まさか！」

ハリーは目を剥いた。

「僕がロンと？ 踊るわけじゃないか、男同士だよ!? ロンは友だちだから、パーティーの時はずっと一緒にいたけど」

「パートナーの子とは踊らなかったのですか？」

「うん、パーバティとは一曲だけ。あとは別行動だったんだよ」

「……なるほど」

セレネは腕を組んだ。

あのパーティーは、代表選手の「大切なもの」を探すためのイベントだったのだ。だから、わざわざ『代表選手はパートナーを連れてこなければならない』なんて規則がある。クラムの場合、それでハーマイオニーを見初め、めでたくそのまま「クラムの大切なもの」として選ばれた。

ハリーの場合は、パートナーは連れて来たが、彼女よりも友人を取った。だから、いつも仲の良い親友を「大切なもの」にした。

セレネの場合はどうなのだろう。セレネはセオドル・ノットとはそれなりの仲

だと思っているが、「大切なもの」かと言われると首を捻ってしまふ。ハリーのよ
うに、いつも一緒にいるわけでもないし、いる人もいない。

「……あいつ以外に候補がいなかったわけね」

たしかに、ノットがいなくなると困る。親衛隊の運営的な意味で。彼の後釜はお
そらく現状いないだろう。フローラたちに隊長が務まるとは思えなかった。

「セレネ、もしかして、君はロンたちが連れて行かれた意味が分かるのかい？」

「え？ ……ええ、おそらく彼らが代表選手の『大切なもの』に選ばれたのでしょ
うね。私がノットで、ハリーがウィーズリー、きっとハーマイオニーがクルムの大
切なものなのでしょう」

そうなってくると、もう一つ——習得する呪文が増えてしまう。やや複雑な魔法
なので、この時間から習得するのは少し困難かもしれないが、試してみる価値くら
いはある。このまま寮に帰らず、秘密の部屋へ行くことにしよう。

「それでは、ハリー。また明日」

「待って、セレネ。セレネはどうやって課題を解決するんだい？」

ハリーは藁にも縋るような顔で、セレネを見つめてくる。

セレネは悩んだ。いまここで、ハリーに助け舟を出すことは簡単だ。しかし、ハリーは1位である。1位の彼がこのまま課題を解くことができなかったら、あつというまに最下位だ。最後の課題で追い返すのは至難の業だろう。そのすきに、自分が1位になればいい。たとえ、惜しくも1位になれなかったとしても、自分より格下のハリーに負ける可能性は0だ。

「僕、絶対にロンを助けられないといけないんだ！ 友達なんだよ！」
このまま見捨ててしまえばいい。

課題の内容は教えることができて、その解決法まで教えることはできない。自分たちは代表選手で競い合うライバルなのだからと、言ってしまうばいいのだ。

だが――

「……私は、泡頭呪文を使って新鮮な空気を確保します」
セレネは口を開いていた。

「あぶく……あたま？」

「しかし、これは数時間で習得できる魔法ではありません。慣れずに使用し、湖の最奥で切れてしまったら最後、貴方の命はないでしょう」

真実薬を飲まれたわけでもないのに、セレネの口からは滑らかに答えが出ていた。

「なので、貴方には鰓昆布をおすすめします。これなら、食べるだけで1時間は水中で活動をすることができでしょう。たしか……『地中海の魔法水生植物』に書いてあったと——」

「その本、ネビルが持ってたよ！」

ハリーは目を輝かせると、勢いよく立ち上がった。

「ありがとう、セレネ！ 助かったよ！」

「あ、しかしですね。肝心の鰓昆布を手に入れるためには、スネイプ先生の研究室に忍び込む必要が——……って、行ってしまいましたか」

ハリーはセレネの最後の忠告を聞かずに、図書室を飛び出して行ってしまった。あまりの勢いで走って行ったので、司書のマダム・ピンスが怒る声が聞こえてくる。セレネは黙ってハリーが去って行った方向を見ていた。

「……馬鹿な私。せっかくの勝機を無駄にするなんて」

鰓昆布を使えば、身体が最も水中に適した姿になると言われている。水かきなしで泳ぐより、ずっと速く簡単に進めることだろう。迷わなければ、一番最初に「大切なもの」がある場所に辿りつけるかもしれない。

セレネがこの方法を取らなかったのは、鰓昆布の入手方法が難しいからだ。通常の方法では手に入れることができず、ホグズミードの薬問屋を訪ねてみたときも、影も形も見当たらなかった。おそらく、スネイプの研究室にはあるだろうが、スリザリン寮生に甘く、名付け親であることを加味しても、彼と交渉して手に入れるのは至難の業になるはずだ。

それだけ、鰓昆布は希少価値が高いのである。

そこまでの労力を考えるくらいなら、てっとり早く泡頭呪文を使った方がいい。

「……まあ、それでも勝つのは私よ」

セレネは本を抱えると、貸出カウンターへ急いだ。

時間は有限だ。それまでに、ある呪文を習得しなければならないのだ――。

※

第二の課題、当日。

審査員、代表選手、そして観客は湖に設置されたスタジアムに集まっていた。ハリーはネビルとひそひそと話している。セレネの位置から、ネビルからハリーへ灰緑色のぬるぬるした海藻の塊を手渡すのが見えた。

「よしよし、全員揃ったな」

バグマンが満足そうに代表選手を見渡した。

全員、水着を着用している。

ハリーたち男性陣は短パン型の水着とシャツ姿だった。特にクラムはシャツが風でひらめくたびに鍛え抜かれた肉体が見え隠れし、ファンの女子生徒たちが黄色い歓声を上げていた。

フラーは競泳水着だ。美しすぎるラインがくっきりと浮き彫りにされ、男子生徒たちの目を集めていた。セレネはその隣でタンクトップに短パン型の水着を纏っていた。ホグズミード村の「グラドラグス・魔法ファッション店」に唯一あった耐寒

性能が付与された水着である。しかも、ポケットがあるのでナイフをしまうことができた。

何人かの生徒が隣のフラーと自分を見比べ、あきらかに嘲笑する。それを見て、セレネは男子生徒たちを絞殺したい気分になった。……だが、よく見ると、彼らの背後にフロラたちの姿が見えた。セレネ自身が手を下さなくても、まもなく彼らには制裁が下されるだろう。

「あの……セレネさん。大丈夫ですか？」

気がつくのと、セレネの後ろにはアステリアの姿があつた。ダフネの腕を握りながら、こわごわ尋ねてくる。

「こんな寒い中、潜れるわけじゃないですよ」

「心配してくれてありがとう、アステリア。でも、魔法があるから大丈夫ですよ」
「ね、アステリア。言ったでしょ。セレネは大丈夫だって」

ダフネがアステリアを安心させるように微笑んだ。それでも、彼女はまだ心配なのか青白い顔をしていた。セレネは彼女の頭にぼんっと掌を乗せた。

「私は大丈夫です。ここで、ダフネと待っていてくださいね。……それよりも、ダ

フネ。ノットは？ 姿が見えませんが」

「え？ たしかに、そういえば見ないよね。昨日の夜から見てない気がする」

彼女の答えを聞き、セレネは確証を深めた。

正直、彼のことなどなんとも思っていないが、親衛隊の運営のためには生きていてもらわなければ困る。今も背後で過激派たちは、セレネを嗤った男子生徒たちを湖に突き落とそうとしていた。あの彼らを止められるほど実力があり、かつ良識人は、スリザリンには彼しくない。

「さて、全選手の準備が整いました！ 第二の課題は私のホイッスルの合図で始まります!!」

バグマンが陽気な声で話し始めた。魔法で拡大された彼の声は暗い水面を渡り、スタジアム全体に響き渡る。

「選手たちは一時間以内に、奪われた大切な物を取り返します。では、三つ数えます。いち……に……さん!!」

ホイッスルが冷たく静かな空気に鋭く鳴り響いた。

スタジアムは拍手と歓声でどよめいた。セレネは他の選手を見ずに、真っ先に念

のため「防寒魔法」をかけると湖に飛び込んだ。耐寒性の水着と呪文のおかげで、寒さは全く感じない。そのまま杖を振るって「泡頭呪文」で新鮮な空気を確保すると、セレネは最後の呪文を唱えた。

『ホメナム レベリオ―人現れよ！』

人が隠されているなら、それを探し出す呪文を唱えればいい。杖先から明るくて白っぽい銀色の物質が、液体のように流れ始めた。液体は細い道のように、湖の奥底へと続いていく。この道筋を辿って行けば、確実に最短距離で人質の元へ辿りつくことができる。

セレネは右手で杖を握ったまま、勢いよく水を蹴った。

もつれあった黒い水草が、左右にユラユラと揺れる森。泥の中に鈍い光を放つ石が点々と転がる平原。

小さな魚が、私の脇を銀の矢みたいに輝きながら、通り過ぎて行った。淡い緑色の水草が、目の届く限り先まで広がっている。1メートルにも満たない水草が生える様子は、まるで手入れの行き届いていない牧草地のようだった。このように水草が集まっているところには、近づかない方がいい。

水草に足を取られて溺れてしまうかもしれないし、何かが隠れているかもしれない。実際に、水草と水草の合間から、長い指のようなものが揺らめいているのを見た気がした。

「……スイミーとは大違いね」

昔読んだ絵本を思い出す。

あの本での水中は、美しいもので溢れていた。虹色のゼリーのようなクラゲ、ブルドーザーみたいな伊勢エビ、見えない糸で引っ張られている美しい魚たち——。

「……まあ、あれは海だし。違うのは当たり前か」

セレネは泳いだ。暗い湖の底に向かって。

そのうちに、水草の林の中を道筋が示していた。セレネは嘆息した。明らかに怪しい林を通らなければならないらしい。やはり、一筋縄ではいかない試験である。林の中を泳ぎ始めてすぐ、視界の端に水魔を捉えた。小さな角のある魔物で、草の隙間からこちらに長い指を伸ばしている。セレネは杖先をまっすぐ水魔に向けた。

『ステューピファイ——麻痺せよ——！』

セレネを狙っていた水魔は赤い閃光に当てられ、白目をむいて流されていく。し

かし、水魔は一匹ではなかった。次から次へと現れる。一匹一匹相手をしていたのでは埒が明かない。

『イモビラス―動くな』

セレネは周囲すべてに向けて、円を描くように呪文を放った。

すると、数多の水魔は石になったかのように動きを止めた。固まったまま傍をふわふわと漂っている。セレネは水魔の頭を蹴りながら先に進んでいく。

水魔の林を抜けると、水草がゆらゆら揺れる以外に動くものは何もなかった。

「探しにおいで 声を頼りに

取り返すべし 大切なモノ

：時間は半分 ぐずぐずするな

求めるモノが 朽ち果てぬよう」

道筋の方向から、卵の歌が聞こえてくる。歌の細部が違った。おそらく、もう制限時間が30分過ぎてしまったということだろう。だが、いずれにしろ、道は合っ

ていた。セレネは口角を上げると、歌の聞こえてきた方へ思いつき水をかいた。黒い泥地を通り過ぎ、しばらく進むと、藻に覆われた石の住居が、薄暗がりの中から突然姿を現した。あちらこちらの暗い窓から覗いている顔、顔、顔。おそらく水中人だろう。彼らの肌は灰色味を帯び、眼は黄色く、首には丸石を繋げた首飾りを巻きつけていた。鎧をまとい槍を構えた威圧的な雰囲気醸し出している。

だが、彼らは襲ってこない。遠巻きにこちらを眺めながら、ひそひそと囁き合っている。

集落のような場所を抜けると、広場にたどり着いた。その真ん中で、水中人のコーラス隊が歌っている。コーラス隊の背後には、荒削りの大きな水中人のかたどった石像が立っていた。

「……あれね」

セレネは石像に向かって泳いだ。

石像の尾の部分に、人が5人ほど繋がれていた。

ハーマイオニー・グレンジャー、ロン・ウィーズリー、セドリックのパートナー、セオドル・ノット、そして銀髪の小さな女の子。

魔法で眠らされているのか、まったく動く様子がない。それぞれの口元には泡頭呪文がかけられていた。

誰の人質も解放された様子がないので、セレネは自分が一番かと思った。しかし、よく見ると石像の端にハリー・ポッターが浮かんでいる。彼はセレネからの情報で、自分の人質がロン・ウィーズリーであることを知っているはずだ。事実、よく見ればウィーズリーを縛るロープが切られている。あとは、彼を連れて地上に泳げばいい。

なのに、ハリーは何もしないで浮かんでいる。

せっかく1番になったのに、なぜぼんやりしているのだろう。セレネにはハリーの考えがまったく分からなかった。

「もたもたしていると、抜かされますよ」

セレネはハリーに向かって叫んだが、彼の口からはボコボコと泡が出るばかりで何を言っているのか分からない。だが、彼が何かの理由で動かないなら好都合である。

セレネは自分が一位になるために、セオドル・ノットのもとへ進んだ。

ポケットからナイフを取り出した。頑丈そうなロープは女の腕力では容易に切れそうにない。しかたないので、セレネは眼鏡を少しずらした。そして、浮かび上がってきた『死の線』に沿って切っていく。セレネの腕ほど太いロープも、直死の魔眼にかかれば脆いロープに過ぎなかった。

「せっかく課題に参加できたのに、最下位になるつもりですか？ 早く来なさい」セレネはハリーに向かって叫ぶと、彼に背を向けた。意識を失ったままのノットを抱えて湖面を目指す。水中で随分軽減されているとはいえ、男子生徒の全体重が自分に押し掛かってくるのだ。いくら水を蹴っても、なかなか上へ進まない。セレネの悪戦苦闘を楽しむように、水中人たちが周りを泳いでいた。彼らの持つ槍がちらちらと光っている。吹き矢を持っている者もいたが、やる気がないようにボンヤリ漂っていた。

「……もういい」

セレネは泳ぐことを諦めた。

これでは、きっと後から来る17歳の代表選手に追い越されてしまう。単純な力や体力では、他の代表選手に絶対に敵わないということは分かり切っていた。

セレネは上昇魔法を使おうと、杖を上に向ける。

これで確実に一位を目指すのだ。

「アセン——ッ痛！」

呪文を唱えきる直前、杖を握っていた腕に鋭い痛みが奔った。あまりに唐突な痛みに、セレネは右手を緩めてしまう。右手から杖が滑り落ち、くるくると回りながら湖底に落ちて行った。

「ここにきて妨害？」

周囲から濃厚な殺気を感じた。

水中人だ。先ほどまで敵意の欠片も感じられなかったのに、それぞれが槍や吹き矢を構えている。黄色の目を異様なまでに光らせて、セレネを狙っていた。

これは、自分を試すための最後の関門なのだろうか。

杖は湖底、左腕には障害物を抱え、右手は負傷している。直死の魔眼があったとしても、満足にナイフを振るえる状態じゃない。しかも、水中だ。動きがどうしても鈍ってしまう。

対する相手は水中人4人組だ。3人が槍を持っていて、1人が吹き矢である。

水の中が彼らのワールドだ。完全にこちらの分が悪すぎる。

「……いいわ、やってやろうじゃない」

セレネは挑むように笑った。眼鏡を捨て、直死の魔眼で水中人を睨みつける。その瞬間、放たれた吹き矢を避ける。間一髪だったようで頬にかすりそうになりながらも、矢は当たらずに湖底へと沈んでいった。

それを皮切りに、狂気の目をした水中人たちが襲いかかってくる。しかも、課題だというのに喉元を目がけて槍を伸ばしてくるのだ。セレネはナイフを手に取り、と、まっすぐ伸ばされた槍にまわりつく「死の線」を斬った。その途端、槍は形を保てなくなる。セレネの喉元に達する前に3人の槍は解体された。

「そう簡単に死ぬわけには、いかないのよ！」

槍使いの水中人が何が起きたのか理解する前に、セレネは吹き矢の水中人の頭を蹴り飛ばし、その反動で上昇する。だが次の瞬間、何とも言えないヌメリとした不快感が足に纏わりつく。3人の水中人が、セレネの足をつかんできたのだ。そのまま湖底へ引きずり降ろそうとしてくる。足に痕が残るのではないかと思われるくらい強い力で、そのまま湖底へ引き摺り下ろそうとしてくるのだ。

セレネは振り払おうと足をバタつかせるが、鋭いモノが脇腹を切り裂く。矢がすすった痛みを感じる前に、頬から深紅の液体が霞のように水中で広がっていく。吹き矢を啜えている水中人が悔しそうな表情を浮かべていた。そして、再び次の矢を装てんしようとする。

水中人に奔る「線」も見えた。

あれを切れば、水中人を簡単に殺せる。だが、それをしてはいけない。セレネのなかで何かがセーブをかけていた。水中人は人だ。セレネには聞き取れないが、言語を介する人である。殺したら最後、セレネの中で何か大切な物が失われる気がした。

「——ッ、めんどくさい！」

セレネはノットのポケットから杖を引き抜いた。

杖には忠誠心があると本で読んだことがあった。他人の杖は忠誠心を勝ち得てないので、自分の杖と同じ働きをすることはできないらしい。だから、他人の杖はあまり使いたくないのだが、いまはそうはいってられない。

「『アセンディオ——昇れ』……！」

セレネは上に向かって叫ぶと、水中人たちの腕力とは比べ物にならないくらいの力で、身体が一気に持ち上げられていく。急速に明るい湖面が近づいてくる。セレネがそのまま魔法に身を任せていると、頭が湖面を突き破るのを感じた。途端に「泡頭呪文」の効果で頭を覆っていた泡も音を立てて砕ける。冷たく澄んだ空気が、セレネの濡れた顔を刺した。すぐ隣で、ノットが咳き込む音が聞こえる。彼にかけられていた呪文も解け、目を覚ましたのだろう。

スタジアムの観衆が歓喜の声を上げるのが耳に入った。セレネは、そのままスタジアムの方へ泳ごうとした。

しかし――。

「うっ！」

「セレネっ!？」

セレネの身体が急に、湖に沈んだのだ。

呪文の効果が切れたことで、セレネの足をつかんでいた水中人たちが再び引きずり込もうとしてきたのである。人質を助け出し、課題をクリアしたのに、だ。

水中人は湖底の広場でヒントをコーラスしていた。おそらく大会側の生物であ

る。ドラゴンとは違い、完全に課題に協力していた。それなのに、課題のルールを破ってまで襲いかかってくるとは、セレネは考えもしなかったのだ。

セレネは足を動かし、下から来る強烈な力に逆らう。呪文を放ちたいが、泡頭呪文が弾けた今、セレネは水中で魔法が使えない。なんとか一瞬浮上すると、セレネは急いで狙いを定めた。

『レラシオ―放せ』！

赤い閃光が奔った。水中人に直撃し、そのうち2人は離れていく。しかし、杖の忠誠心と急いで狙いを定めたことが原因だろう。1人の水中人は相変わらずセレネの足をつかんでいた。セレネの身体は再び水中に沈んでしまう。もう、呪文は唱えられない。バタ足で振り切る体力も残っていない。セレネは最後の手段で、杖をナイフに持ち変えようと、水中人の腕に奔る「死の線」を斬った。これには、水中人も仰天したのだろう。身体から腕が切り離されたこととその痛みでのたうちまわり、セレネをつかんでいるどころではなくなった。

セレネはその隙に浮上する。

「げほっげほっ」

咳き込みながら、必死に酸素を取り入れようとした。

足が解放されたので、身体が動きやすくなるはずなのに、不思議と全身に鉛をつけているかのように辛かった。切り裂かれた脇腹も腕も痛い。血がどんどん流れ出ているからだろうか、猛烈に喉が重くセレネは眠ってしまいたくなった。

「おい、しっかりしろよ！」

セレネの耳元で、誰かが叫ぶ声が聞こえてきた。

「目を開けろって、この馬鹿！ 眠ったら死ぬぞ！」

うるさく叫ぶ声に、のろのろと眼をこじ開ける。だんだんかじかんでくる爪先と血が流れ出る感覚で意識が朦朧としていたが、それでも岸まで泳がなければならぬことを思い出した。

「……分かってますよ、うるさいわね」

セレネは最後の力を振り絞って水を掻きわけ、足を動かした。途中から自力で泳いでいるのか、誰かに引きずられるようにして泳いでいるのか分からなくなってきた。

「ゴースト先輩っ！」

審査員たちを押しのけ、フローラとヘステイアが駆け寄ってくる姿が見える。その後ろにはウルクハートたち他の幹部やダフネにアステリア、ミリセントの姿も見えた。皆、どうして蒼い顔をしているのか、セレネにはまったく分からなかった。ムーディはいつもの表情で岸に立っていたが、マクゴナガルとスネイプが青ざめている顔なんて見たことがない。

セレネは泳ぎながら、ぼんやりと全員を見た。

その全員をマダム・ポンフリーが追い越し、温かい毛布を広げる。それに倒れ込むようにして包み込まれた時、セレネは意識を手放した。

セレネ・ゴーンの第二の課題は、こうして幕を閉じた。

53 話 新たな魔法

「……う、ううん」

消毒液の匂いが鼻孔を刺す。

セレネが重たい瞼を開けると、そこはホグワーツの医務室だった。天井一面に「死の線」がこびりついている。死の線に犯された天井は、いまにも頭上に崩れ落ちてきそうだ。セレネは天井が崩れ落ちて、自分が下敷きになる姿を想像してしまい、ぞくりと背筋を震わせた。

セレネは頭痛を堪えながら、眼鏡を探す。眼鏡はベッドの脇に設置されたサイドテーブルの上にあった。眼鏡の隣には、自分の杖と鉄の水盆が置かれている。セレネはそっと眼鏡に手を伸ばそうとしたが、指先が水盆をかすめてしまった。

「いたっ」

静電気が奔る。

このぴりぴりした感じは、なかなか慣れるものではない。セレネは水盆に触れな

いように気をつけながら、眼鏡を手を取った。

「目が覚めたかのう、セレネ」

ベッドを覆う白いカーテンを開けて、ダンブルドアが入って来た。まるで、セレネが起きることが分かっていたかのような絶妙なタイミングである。ダンブルドアの後ろにはムーディの姿があった。

セレネは眼鏡をかけながら、ゆっくりと身体を起き上がらせた。

「校長先生？」

「君はあれから丸一日、熱を出して眠っていたのじゃよ」

「丸一日も、ですか」

セレネはそこでようやく第二の課題のことを思い出した。

難なく課題をクリアしようとした矢先、水中人が襲いかかってきたのだ。水中人は辛うじて倒すことに成功したが、体力がそこで切れ、おそらくノットの力を借りながら岸まで辿り着いたのだろう。最後の方の記憶はあまりなかった。

「私、あんな無様な最後でした。きっと最下位でしょうね」

セレネが自嘲気味に笑った。しかし、予想外なことに、ダンブルドアは優しく微

笑んでいる。

「いや、そうでもない。

君は上級生でも習得困難な「泡頭呪文」と「防寒呪文」を使いこなしておった。それに加え、序盤から「大切な物」が何か推理し、見事な「探索呪文」も披露してくれた。そのおかげで、君は素早く人質の元へ辿りつくことができた」

ダンブルドアが一つ一つ、セレネの動きを丁寧に解説してくれる。セレネは少し耳が赤くなるのを感じた。

「水中人が襲ってきたのは、完全に予想外のことじゃった。水中人は監査役として、代表選手を襲わない取り決めをしていたはずだったのじゃ。しかも、襲ってきた水中人は水中人の中でも歴戦の強者だったと聞く。それを傷を負い、最後の最後で意識は失ってしまったが、たった一人で追い払うなど14歳の魔女には到底無理な行いじゃよ。恥じずに、誇りに思うがよい。

君が披露してくれた数々の呪文、水中人との戦い、そして人質の元へ2番目に早く辿り着いたこと。これらの点から、セレネ——君の得点は46点。ハリーと同点一位じゃよ」

「ハリーと、ですか」

セレネは素直に1位になったことを喜べなかった。

「どうして、ハリー・ポッターが1位なのでしょう？ 私、彼より先に人質を助け出しましたが」

「ハリーは全部の人質を安全に戻らせようと決意したからこそ、あの場にとどまっておったのじゃ」

「なるほど、道徳的行いということですね」

セレネは俯いた。

ハリーが留まっていた理由は、自分にはまったく想像もつかないことであった。まさに、グリフィンドール生らしい騎士道精神の賜である。

「ハリー・ポッターも1位……」

セレネは拳を強く握りしめる。

無性に悔しい気持ち胸に広がっていく。

セドリックやクラム、フラーに負けるなら、まだこうも苛立ちが沸き上がってこなかっただろう。

しかし、相手はハリーだ。ハリーは自分と同じ年だ。しかも、セレネは自分の方が彼より呪文も知識もなにもかも優れている自信があった。それなのに、ハリーがまだ1位の座にいるのは納得がいかなかった。これで、2回も彼に負けている。1回目だけならまぐれだと一蹴することができただろうが、2回も続くと不愉快な気持ちになった。

そもそも、今回はセレネが教えなければ彼は脱落していた。彼は、自分の力で1位の座をつかんだわけではない。そのことをリークしてしまおうかと悪い考えが頭を横切ったが、セレネは首を横に振った。

まだ、第三の課題が残っている。

そこで、確実にハリーより上に行けばいいだけだ。今度は絶対に助けを求められなくても、自分は手を差し伸べてたまるものか。

ハリーはもちろん、クラムよりもフラーよりもセドリックよりも、セレネ・ゴントが優れている。参加する以上、セレネは誰にも負けてはいけないのだ。

自分が誰よりも優秀であることを示し続けなければならない。

優秀でない者、つまり敗者は死ぬ。

強烈な『』のイメージが脳裏にフラッシュバックした。

「次は絶対に負けるものか」

セレネは小さく決意を呟いた。

「意気込みは上々じゃ」

ダンブルドアが髭を触りながら呟いた。

「しかしじゃ、セレネ。最近の君の行動は、いささかどうかう？」

「最近？ 私は普通に学生生活を送っていますが」

セレネは一瞬、リータ・スキーターを脅したことを思い出した。秘密の部屋でバジリスクを飼いながら、「死の線」を消すために賢者の石の研究をしていることも想起する。実に平凡な学生生活とは、とても言い難い生活だ。

しかし、そのことをダンブルドアに悟られるわけにはいかない。特に、リータの件は規則を軽く30は破る行動だからだ。セレネは口の堅く、特に忠誠心の高い親衛隊幹部にのみ作戦を話し、誰にも知られぬように実行に移した。親衛隊隊長のセオドル・ノットでさえ、詳しい作戦内容を知らない。

そこまで徹底して秘密裏に進めた計画だった。寮監はもちろん、ダンブルドアに

露見するはずがないのだ。

しかし、なぜだろうか。

セレネには、ダンブルドアがすべて知っているような気がしてならなかった。

「そうじゃといいのじゃが。」

カロー姉妹、ウルクハート、ピュシー。彼らは友人かのう?」

「ええ、友人ですよ。先日と一緒に遊びに行きましたし、仲良くお茶会もします」

「ノット、グリーン格拉斯にブルストロードもかの?」

「もちろん、友人です。特にダフネ・グリーングラスは親友だと思っています。私はホグワーツで、本当に良い仲間に巡り合えました」

セレネは滑らかに答えた。

嘘ではない。いま挙げられた人物の中で、ダフネ・グリーングラスが一番親しい。一緒にいると、とても心地が良い。一番親しい人間を親友だというなら、彼女が該当するだろう。

おそらく、ダフネもセレネが親友だと思っているはずだ。

「しかしのう、セレネ。こういうのは失礼かもしれんが、君が彼女たちを対等な関

係と思っているのか、そこが気になるのじゃよ」

「……もちろんですよ、先生」

セレネは嘘をついた。

一番親しいダフネでさえ、自分と対等とは思っていなかった。たしかに、限りなく対等に近い関係だろうが、完全に同格とは思えない。

誰も、心の底から友人とは呼べない。

友情など感じたことがない。

親衛隊幹部はもちろん、ミリセントもダフネもジャスティンも、皆が打算の関係である。

ダフネとジャスティンがどうして近づいてきたのか分からない。しかし、ジャスティンの場合はセドリックが代表選手に選ばれたことを境に、セレネから距離を取り始めた。おそらく、それは友人ではない。きっと、ダフネもちょっとしたキッカケで自分から離れていくだろう。

だが、セレネは別に寂しくはない。

セレネだって、打算で動いている。ミリセントを仲間に取りこぼしたのは、計

算づくの行動だった。親衛隊だってそうだ。いまは従っているが、セレネに価値や魅力がなくなつた途端、蜘蛛の子を散らすように去っていくことだろう。

なので、セレネは強くあり続けなければならなかった。

優等生であり続けなければ、すぐに敗者となつて転げ落ちてしまう。功績を積み上げるのは大変だが、それを壊すのは非常に簡単なのだから――。

「……かつて、君と似たような人物がおつた」

ダンブルドアの青い瞳に郷愁の色が混じつた。

「その人物は、友ではなく数多の手下を作り、巨大な軍隊を作り上げた男じゃよ。自らの野望に燃えながら、独善的な闇の魔術に深く探求していった者じゃ」

「……それは、ヴォルデモートのことでしょいか？」

セレネは、ダンブルドアを軽く睨んでしまった。

ホグワーツ入学前、あの病室で目覚めたとき、ダンブルドアはセレネに向かって確かにこう言ったのだ。『君は一步間違えれば、より深い闇へと堕ちていく可能性が他の誰よりも強い』のだと。あの時は意味が分からなかったが、ヴォルデモート

との関係性を考えれば説明がつく。

だからこそ、いまの言葉には余計に腹が立った。

「私がヴォルデモートのようになっていくと？ それは、私がゴーストの家系だからですか？」

セレネは齒を食いしぼる。

おそらく、父親がゴーストに連なるものだったのだろう。推察に過ぎないが、モーフインかメローピーの隠し子だ。さもなければ、ヴォルデモートの子である。最後の考えだけは事実でも断固拒否するが、いずれにしろ自分はヴォルデモートの親戚である。だからといって、ヴォルデモートのように見られるのは気持ちが悪く、ざわざわっと鳥肌が立った。

「私、血のつながりなんて興味ありませんし、絶対に信じません」

セレネは強い口調で宣言した。

「ヴォルデモートと同じなんて偏見もいいところです」

「それは分かっておる。君はトムとは違い、愛を知っておる。実感はしておらんかもしれないが、それに気づく日が来ると願っておる。」

……わしは、かつて確かに出生をふまえ、君がトム・リドルと同じ道を歩む可能性があると聞いた。それは認めよう。しかし、君は奴を忌避している。あのようになるまいと意識づけている。おそらく、君はヴォルデモートになることはないだろう」

「なら——！」

「君の思想が、グリンデルバルドと似てきていることを危惧しているのじゃ」
ダンブルドアは真剣な目でこちらを見ってくる。

セレネは予想外の名前に、思わずきょとんとしてしまった。

「グリンデルバルド？」

セレネは名前を復唱する。

「そうじゃ。常に知恵を求める君のことじゃ。彼が何をしたのか知っておるじゃろう」

「ええ、なんとなくですけど。たしか……第二次世界大戦の時代の闇の魔法使いですよね？ 校長先生と戦って敗北し、収監されたと本に書いてありました。彼はまだアズカバンにいるのですか？」

「だいたい正解じゃ。ただ、アズカバンではなく、ヌルメンガードの牢獄に収監されておる。

さて、セレネ。君はグリンデルバルドがどのような思想の持ち主だったか知っておるかの？」

ダンブルドアは尋ねてくる。

「マグルを嫌い、魔法使いのみの世界を作ろうとしたとは聞いていますが……すみません、詳しくは知りません」

セレネは正直に首を横に振りながら、静かに答える。授業で関連ある知識や自分の興味を惹く題材、そして賢者の石関係の本は進んで調べたが、過去の闇の魔法使いなど気にしたこともなかったのである。

「半分正解じゃよ。」

彼はヴォルデモートと同じく、魔法族に特権的な力があると信じておった。しかし、決定的に違う点は、マグルを一概に軽蔑していなかったことじゃ。ヴォルデモートは魔法族のみが世界に君臨することを夢見ていた。マグル殺しを活発に行い、マグルを消し去ることを望んでおった。

しかし、グリンデルバルトは強力な魔法族が世界を支配することを望んでいたが、そこにマグルがいることも認めておった。マグルを完全には嫌っておらんかったのじゃよ。彼はマグルの有効活用を模索しておったのじゃ」

「……」

セレネの背中に嫌な汗が伝った。

これは、熱による汗とは違うと直感する。

「先学期、妙な噂を耳にしてのう。マルフォイ家のクリスマスパーティーで、マルフォイ少年を説き伏せていたとか。なんでも、マグルの素晴らしさを説き伏せ、仲間に組み入れようとしていたとか」

「説き伏せていたとは、人聞きの悪い。食事中の楽しい会話ですよ。……しかし、私がマルフォイ家に招待されていたと、よくご存じでしたね？」

「長年生きておると、思いがけないところに知人がおるものじゃよ」

ダンブルドアの目が光った。

これは、ぬかった！ と、セレネは猛烈に反省する。悔しさのあまり、頭を掻きむしりたくなった。あれは、いずれフリントの後を継ぐであろうドラコ・マルフォ

イたちをあわよくば自陣に引き入れるため、そして動きをけん制するために放った言葉だった。セレネたちの会話を耳に挟む大人もいることも考慮していたが、その多くは世間を知らぬ子どもの与太話と考えるだろう。万が一、セレネの考えに賛同してくれたら、それは良いことだ。その繋がりをいざというときに利用すればいい。ただ、まさかダンブルドアにまで伝わっているとは思ひもしなかったのである。「まさかとは思うが、セレネ。君は……友人たちにも同じ考えを強要していかないの？ 確かに、スリザリン寮はマグルを蔑視する傾向がある。純血主義の寛容化は昨今の課題じゃ。じゃが、マグルも人じゃよ。チェスの駒のように扱ってよいものではない」

「……強要なんてしていません。たしかに、ミリセント・ブルストロードのように純血主義の寛容化に賛同してくれる友だちはいますが、チェスの駒とは酷い言い分ですね」

セレネは平然を装っていたが、震えそうになる身体を堪えるのに必死だった。

この男はどこまで自分のことを分かっているのだろう。どこまで見通しているのだろう。まさか、自分の行動が常に見張られているのではないだろうかという恐怖

が込み上げてくる。

「私の育て親はマグルですよ？　しかも、人格者です。それを駒扱いするなんて、ありえませんか」

セレネはダンブルドアの口元辺りを睨みつけながら、はっきりと宣言する。あの青い瞳だけは視ることはできなかった。やはり、あの青い瞳を覗き込むと、心を読まれているような気がするのだ。

「もちろん、それは分かっている。じゃが、周囲がどのように解釈するかが問題なのじゃよ」

ダンブルドアは長い髭を触りながら静かに呟いた。

「若い頃、グリンデルバルド本人に自覚はなかったが、敵対者を痛めつけることを楽しむ傾向があったことは確かじゃ。じゃがしかし、進んで殺しはしなかった。むしろ、殺人を悪だととらえておった。ところが、信奉者たちはそれを理解せず、はたまた、自分の手を汚すことが嫌だったのかもしれないが、いずれにせよ他者が殺人を行っていた」

「……つまり、私の友だちが、よかれと思って悪をなすと？」

「善意のためとは、まことに危険な言葉じゃのう」

ダンブルドアはセレネの髪を優しく撫でた。

「話はここで終わりじゃ。セレネ、次の課題も幸運を祈っておるよ」

ダンブルドアは一瞬、セレネを見つめると、こちらに背を向けて去って行ってしまった。

「善意のため、か」

セレネは言葉を噛みしめるように呟いた。

考えられる危険性である。最近、親衛隊に入ったアステリア・グリーングラスは大丈夫だろうが、過激なカラー姉妹たちが怪しい。ウルクハートやプリチャードも危険だ。

『ゴイント先輩。ハリー・ポッターを殺害してきました、よかれと思って』

なんて、非常にありえる話である。もつとも、彼女たちに人を殺せるだけの度胸も能力もないが、こちらの意図とは異なる危害を加える可能性はある。

ノットに親衛隊の規律を強化するように、伝えるべきだろうか。

セレネが考え込んでいると、かつん、かつんと音を立てながら、ムーディが近づ

いてきた。

「……それで、ムーディ先生はどのようなご用件でしょうか？」

寮監でもない彼が用事もなく、見舞いに来るはずがない。

セレネはダンブルドアとの話し合いで、すっかり気が疲れていたが、なんとか自分を引き締めた。

「なんだ、見舞いに来てはいけないのか？」

「そういうわけではありませんが……」

絶対に裏がある。

セレネが彼の迷惑を考えていると、ムーディは愉快そうに笑った。

「いいぞ、そうやって疑ってかかるのは良いことだ。嘆かわしいことに、それができない奴がなんと多いことか」

そう言いながら、ムーディは近くの椅子に腰を下ろした。木製の義足を伸ばし、低い声で呻く。

「……わしが来たのは、忠告だ」

「忠告？」

セレネが首を傾げると、ムーディは真剣な表情で見つめてきた。

「第一の課題、ドラゴンの足元で目くらましの呪文が解けた。そして、第二の課題では大会運営側の水中人の猛者が襲いかかって来た。これは服従の呪文だろう。何者かが水中人に呪いをかけたのだ。お前を殺すためにな。

……誰の仕業かわかるか？」

「……ゴブレットに名前を入れた誰かですよね」

セレネが答えると、ムーディがにやりと笑った。

「100点の解答だ、ゴースト。しかし、お前は二度も生き延びた。おそらく、次の第三の課題では熾烈な試練が襲いかかってくるだろう」

セレネは唇を噛んだ。

第一の課題でも第二の課題でも死にかけた。第三の課題が何かはまだ分からないが、先の二つより苛烈を極めるなら、正直——あまり乗り気がしない。無論、第三の課題を颯爽とクリアして、優勝杯を手にするつもりだが。

「その戦いでカギを握るのは、お前の『直死の魔眼』だ」

「えっ!？」

セレネは跳びはねそうになった。目を見開き、まじまじとムーディを見る。まさか、彼が眼のことを知っていたとは思わなかったのだ。ムーディは乾いた笑い声をあげた。

「わしほどの魔法使いになれば、しっかり行動を見ておけば想像がつくわい。眼鏡——「魔眼殺し」か？　それで、普段は力を覆い隠しているな。」

だが、お前が眼鏡を外した途端、蒼く輝く瞳、そしてドラゴンの炎や水中人の槍を斬るようにして防いだこと。これは、直死の魔眼しか考えられない。

わしもずいぶんと色々な魔法使いと知り合ってきたが、直死の魔眼は初めて見た。実に興味深い」

ムーディはセレネをじっと見据えた。魔法の目がほとんど動かない。
「いいか、お前の直死の魔眼は浄眼が臨死体験を経て変質したものだ」

「浄眼？」

「魔法使いなら誰でも持っている眼だ、だいたいは質が低いがな。この眼があるから、ゴーストや一部の魔法生物を視認することができる。」

だが、他の魔眼を持っている者は稀有だ。古くはマーリンの千里眼やメデューサの石化の魔眼、近年では——そうだな、ダンブルドアの話にも出ていた、グリンドルバルドの未来視か。ぱっと思いつくのは、そのくらいだろう。異質な魔眼とは、滅多にお目にかかれるものではないのだ。

……まあ、そんなことはどうでもいい。

お前は魔眼の効果で『死の線』というものが見えるのだろうか？」

「はい」

セレネは眼鏡に手をかける。

「この眼鏡を外すと見えます」

「そうだな。眼鏡を掛けなければ、死の線が見え続けてしまう。死の線が見えるということとは、脳に過大な負担をかけているということだ。当然だ、本来は視えないものを視ようとしているのだからな」

ムーディは頭をこんこんと叩いた。

「つまり、直死の魔眼を使い続けると脳が焼き切れる可能性がある。これまでの二つの課題では、直死の魔眼がお前の命を救ったのだろうが、今後、直死の魔眼を使

うことは勧められない。

魔眼を使えば今後も課題を解決できるだろうが、その引き換えに命を落とす危険がある。

しかも、遠くの星を見つめ続ければ視力が良くなるように、魔眼を使えば使うほど、その威力は強力になる可能性もある。いずれ、その眼鏡で抑えきれなくなるぞ」ムーディの言葉は重くセレネに押し掛かった。

あまり自分の目の特異性を公にしたくはなかった。だが、使わなければ死んでいた。ドラゴンの炎は盾の呪文で防げるレベルではなかったし、水中人との戦いでは杖そのものが失われてしまっていた。

しかし、ムーディの言ったことが本当なら、直死の魔眼を使い続けるのは賢明な判断ではない。セレネ自身、思い返してみれば、一年時より今の方がずっと魔眼の力が強くなっている気がした。眼鏡を外すたびに頭が痛くなるのは変わらないが、視える線の数が確実に増えている。しかも、線と線の合間辺りに、黒々とした点まで視え始めていた。

セレネの想像に過ぎないが、おそらくあの点を突けば、線を斬るよりも容易く殺

すことができるのだろう。

直死の魔眼は、どんどん強くなっていく。

もしかしたら、この眼鏡で魔眼の力を抑えることができなくなる日も来るかもしれない。

うすうす感じていたことだが、指摘されると恐怖が込み上げてきた。

「つまり、お前は早急に新たな攻撃手段を持つべきだ」

そう言うとき、ムーディは杖を一振りした。ムーディの後ろから、ふわふわと数冊の本が近づいてくる。それらの本はセレネの前で、ぴたりと動きを止めた。

『『実践的防衛術と闇の魔術に対するその使用方法』『闇の魔術の裏をかく』『もっとも邪悪なる魔法』？

とても嬉しいのですが、最後の一冊……これは禁書では？」

「入院中は退屈だろう。その本も読め。敵と立ち向かうためには、敵を知らねばならん。……ただし、ダンブルドアには内緒だ。お前には、まだ早い本だと考えているからな」

ムーディの青い目が、セレネを眺めまわしながら、微かにふふふと揺れた。

「これらの書物に記載された魔法は、『闇払い』であっても習得に手こずるものばかりだ。無論、14歳の小娘が完全にマスターできるとは思えない。しかも、第三の課題までという期限付きだ。まず不可能だろう。

だが、ここに掲載された呪文のどれか一つでもいい。自分の新たな武器になる魔法を選び、それを死ぬ気で習得するのだ。敵は待つてはくれんぞ、油断大敵!!」

それだけ言い終えると、ムーディは携帯用酒瓶を取り出した。飲食厳禁の医務室だというのに、気にすることなく、ぐびぐびとおおっている。あまり美味しくないのか、顔がぶるりと震えた。

「……わしの話は以上だ。質問はあるか？」

「いいえ、ありません。習得したいと思います」

セレネが朗らかに笑う。すると、ムーディはセレネを応援するかのように背中を叩いてきた。そして、ゆっくりと立ち上がりながら、思い出したように口を開いた。

「そうだ。もう一人、見舞いに来た者がいる。お前は起きて早々、疲れてるかもしれないが、すぐに呼んでくるとしよう。あまり長時間、待たせるわけにはいかん」
ムーディは面白そうに笑うと、乱暴に杖を突きながらカーテンの向こうに消えて

行った。

セレネは身体を倒すと、大きく息を吐いた。

ダンブルドア、ムーディ。

続けざまに神経をすり減らすような会話をしたのだ。向こうはどうか分からないが、少なくとも、セレネ側からすれば剣で打ち合っているような話であった。どちらも自分の道を左右する大事な話だったが、優等生の仮面をかぶったままやり過ぎには、非常に骨の折れる時間であった。

セレネは正直、また眠りたかった。

第二の課題の結果は聞けたのだ。それだけで良しとするべきだ。しっかり休み万全な態勢で、ムーディに教えてもらった新たな魔法習得に励みたい。

どうせ、見舞いに来るのはスリザリン生だ。

ダフネ・グリーン格拉斯、ミリセント・ブルストロード、それかもしくは、親衛隊幹部だろう。

だがしかし、これから来る彼女たちに弱っている姿を見せるのは、沽券にかかわってくる。

セレネは足音が聞こえると、再び体を起こした。

来訪者を笑って迎えて健全であることをアピールし、適当に話をして帰ってもらうでしょう。

そして、カーテンを押して入ってきた人物を見て——セレネの表情が固まった。「嘘でしょ？」

あまりの衝撃に、セレネは開いた口が塞がらなくなってしまった。

ぼさぼさで手入もされていない白髪。

苦悩をまったく感じさせない穏やかな皺。

高齢過ぎるがゆえに、小枝のように細く脆い手足。

そんな老人は、セレネの驚きようを見て満足そうに頷いている。

「まさか、どうして？ だって、ずいぶんと距離があるのに？」

「最後の弟子が、栄えある三校対抗試合に出場しているのじゃ。見物に来るに決

まっておろうが」

ニコラス・フラメルは弟子の慌てる姿を見て、子どものように悪戯っぽく笑った。

ファンタジック・ビースト2を観てきました。

控えめに言って最高。とくに、グリンデルバルトが素晴らしすぎる。

もちろん、他の登場人物や魔法生物も負けず劣らず良い味してるぜ！

今後の展開もとても楽しみ！ 早く次作来い！

……ただ一点、とても不安なこと。

それは、超可愛すぎて天使なボウトラックルが、今後どこかであっさりと死ぬかもしれないということ。

そう、ヘドウィグのように……。

54話 来訪者

ニコラス・フラメル¹の来校により、ホグワーツでは特別講義が開催された。

第三の課題が終わるまで、基本毎週土曜日の午前中、合計17回の錬金術特別講座である。これは、ホグワーツ生でなくても参加が許されており、ダームストラングやボーバトンの生徒も受講が許可されていた。

セレネはもちろん参加した。見知った顔では、ハーマイオニー・グレンジャーやダフネの彼氏アンソニー・ゴールドスタイン、ジャステイン・フィンチャーフレッチリーらの姿が確認できたが、意外にもボーバトンの生徒が多いことに驚いた。もしかしたら、開催校のホグワーツ生よりも多かったかもしれない。この疑問をフラメル本人にぶつけてみると、にやにや笑いながら

「それは、わしがボーバトン出身だからじゃろうよ」と教えてくれた。

「わしの名前は、ボーバトンではかなり知れ渡っておつての。7年に一度、ボー

バトンで特別講義を実施しているのじゃ。1年生から7年生まで、全員が一度は受けることができるように」

「ボーバトンが羨ましいですね」

セレネは少し目を見開くと、フラメルのためにお茶を入れる。

特別講座が終わり、疲れた彼にお茶を淹れるのが、いつのまにかセレネの仕事になっていた。実に解せぬ。だが、弟子なので文句を言うことはできない。

それに、このあとは茶飲みついでに個別の授業を行ってくれる。賢者の石研究に行き詰まりを感じていた身としては、嬉しい限りであった。

「そういえば、私の母もボーバトン出身だったそうですよ」

「そうか。名前は？」

「メアリー・スタインだと聞いています」

「あー……ああ、ああ。よく覚えておる。茶色の豊かな髪が特徴的な子じゃった。目は緑色で八重歯が特徴的で、そうそう、それから胸の発育がよくての、15歳だというのにメロンのように豊かで、マシュマロみたいに——おっと勘違いするのではない、わしは決して下心で見ていたわけではないのじゃぞ。だから、その茶に塩

をいれるのではないわい」

「……すみません、手が滑りそうだったものでして」

セレネは塩をテーブルに置くと、ちゃんと紅茶に砂糖を入れた。自分の母が下品な目で見られていることは、我慢ができず、つい手が出そうになってしまっていた。セレネは少し息を吐いて自分を落ち着かせる。

「うむ、ありがとう」

フラメルはセレネから茶を受け取ると、懐かしそうに話し始めた。

「特別講義が終わった後、あれやこれや様々な質問をしてきての。しかも、面白いところを突いてくるのじゃ。ヘルメスの鳥についてとか、カリオストロの指輪について……とても錬金術に熱心で、何回か出張の個別授業もした。そうか、セレネの母親じゃったか。……見た目は彼女と似ておらんが、錬金術に熱心なところは似ておるの」

「そ、そうですか」

セレネは頬がほんのりと熱を帯びている気がした。

いままで、あの悪夢以外に母との関係性を見いだせたことがなかった。しかし、

ここにきて、ようやく自分と母との血の繋がりらしきものを教えてもらったのだ。聞く限りだと見た目はまったく似ていないらしいが、そんなこと気にならないくらい嬉しくなった。セレネは少し嬉しくなった。

セレネも自分のカップに紅茶を注ぐと、彼の前に腰を下ろした。

「母も、その……私と同じ分野を研究していたのですか？」

「賢者の石か？ いいや、違う。ホムンクルス……つまり人造人間じゃ」

「ホムンクルスとは、たしか……魔法を使える人形のことですよね」

「うむ、一つだけ誤りがある。セレネ、ホムンクルスは人形のようなだが人形にあらず。創り出された生命体じゃ。」

ホムンクルスは鑄造された時点で、完成されておる。老いることも成長することもなく、術師によってあらかじめ定められた期間が過ぎると停止する——錬金術師に造られた生命体じゃよ」

フラメルが杖を振ると、一冊の本が近づいてきた。セレネは本を丁寧に取り取ると、その題名を覗き込む。

「フランケンシュタイン？」

「そうじゃ、読んだことはあるかの？」

「ええ、マグル版も魔法界版も」

セレネは3年生の時、この本を図書室で見つけたときの衝撃を思い出した。

「マグル版での怪物は男ですけど、魔法界版だと女だなんて……初めて読んだときは、目を疑ってしまいました」

セレネが苦笑いをしながら答える。セレネは似たような話——アーサー王女説をノットにしたとき、彼が心底呆れていたことを思い出す。もしかしたら、フラメルにも馬鹿にされてしまうかもしれない。自分がたまたま手に取った話は、異端の説だったかもしれないのだ。

ところが、フラメルは満足そうに微笑んだ。

「広まっている噂が、事実とは限らないということじゃ」

「では、本当に怪物は女だったと？」

「いかにも」

フラメルは頷くと語り始める。

「ヴィクター・フランケンシュタインは錬金術師じゃった。彼は賢く、美しい理

想の人間『完全な乙女』——すなわち、イヴを創り出そうとしたのじゃ。その結果は——君の読んだ通り、ホムンクルスは失敗作じゃった。イヴにはなれなかったのじゃよ。死体を繋ぎあわせ、生まれてきたのは涙を流さず、血を美しいと感じる怪物じゃったのじゃ。ヴィクターは逃げ出し、北極海に辿りついたとき力尽きた。……哀れな怪物ものう」

「……可哀そうな話ですよね」

セレネは自分のカップに注がれた紅茶を揺した。

「怪物は勝手に生み出されたのに、産みの親からは虐待されて。喜ぶと思って持っていた物を拒絶され、初めて乞うた願いも無下にされる。復讐のため追いかけて行ったら、すでにその相手は死んでいた。……救われませんでしたよ」

「実にその通りじゃ。しかも、死体を繋ぎあわせて、ホムンクルスを作るなど言語道断。死者を冒とくした末路ともいえる。

……さて、どうして、わしがこの話をしたのか。実はの……メアリー・スタインの先祖の話なのじゃ。つまり、君の先祖の話でもあるのじゃよ」

「え……?」

セレネは手を止めた。まじまじとフラメルを見つめたが、彼の笑みは崩れない。

「御冗談でしょ？」

「いや、冗談ではない。

ヴィクター・フランケンシュタインの息子は生きておったのじゃよ。息子は怪物から逃げるようにイギリスへ渡り、しばらくたってから家名をスタインに変えたらしい。

嘘だと思ふなら、パリの魔法省へ行くがよい。あそこには、シュタイン家の家系図が保管されておる。君の母の名前も刻まれおるはずじゃ」

セレネは心の中で、夏の旅行先を決めた。

義父に強請って連れて行ってもらおうとしよう。家計や都合上無理だった時は、フラメルに頼み込むしかない。最悪、親衛隊の力を借りるとしよう。

セレネは、どのような手を使っても、パリへ行きたくなくなってしまった。

「……だから、母は錬金術師だったのですね」

せっかく見つけた母との魔法に関する繋がりなのだ。そう簡単に途切れさせたくはない。母の生い立ちが分かれば、必然的に父の正体もつかめるかもしれない。

た。セレネ本人としては、そこを気にしていた。父がヴォルデモートではないという事実を明らかにしたかったのである。

「もしかして、母は祖先の名誉挽回のために錬金術を——……」

セレネはフラメルに質問しようと口を開いたが、フラメルはうつらうつらと舟をこいでいた。セレネがじっと見つめていると、フラメルはぶるつと顔を震わせる。「う、うむ、いかん。最近、眠りが近くての。そろそろ、お迎えかもしれん」

「先生には、まだ生きていて欲しいです。そのようなことを言わないでください」セレネは頭を切り替えた。

彼には生きていてもらわねば困る。賢者の石の解明のために。

すると、フラメルは朗らかに微笑んだ。それと同時に、12時を指す鐘になる。今日はこれで終わり。タイムリミットだ。錬金術の授業ではなく、雑談で終わってしまったが、それはそれでよしとすることにした。ぬるくなった紅茶を飲み干すと、さっさと立ち上がる。

「今日は急いでおるが、なにかあるのかの？」

「ええ、ホグズミード村で友だちとご飯を食べる約束をしていました」

「……彼氏かの？」

「違います」

セレネはきっぱりと言い放つ。セレネは鞆の中に荷物をしまいながら、杖を振りした。テーブルの上のカップはひとりでに宙に浮くと、洗い場にゆっくりと着地する。勝手に出てきた水で洗われ、ピカピカの状態で乾燥棚に置かれた。

「それでは、今日はありがとうございました。とても有意義な話が聞けました」

「いやいや、わたしも驚きじゃったよ。母に恥じぬように、これからも生きるがよい」
「ええ、もちろんですよ」

セレネはフラメルに背を向けると、ホグズミード村へ急いだ。

校庭を淡い白色の太陽が照らしている。

前回のホグズミード村行きの際はあいにくの雨模様だったが、今回はこれまでになく穏やかな天気で心地が良い。ホグズミードに着く頃には、セレネはマントを軽く畳み、手に提げていた。

「おそーい！」

ホグズミードについたセレネを待ち受けていたのは、ミリセント・ブルストロッドだった。その隣で、ダフネ・グリーングラスが曖昧な笑みを浮かべている。セレネは時計を確認する。

「待ち合わせ時間、まだ過ぎていませんけど」

「5分前でしょ！ 私だって5分前に来ているんだから、あんたは10分前なの！」

「さすがにそれは横暴ですよ。……というより、あなたもいま来たのでは？」

よくみると、ミリセントの肩は揺れていた。

額からは汗が滲んでいる。おそらく、走って来たのだろう。頬にはクッキーの食べかすがついていて、そのことを指摘すると、彼女は瞬く間に赤くなった。すぐにハンカチで口元を拭うと、きりっとした目付きでセレネを睨みつける。

「もう、あんたは！ いちいち細かいわね!!」

「そういうあなたは、少しばかり感情的になりがちでは？」

「まあまあ、2人とも。落ち着いて、落ち着いて」

どうどうとダフネは2人の間に割って入った。

「2人とも、本当にごめんね。今日は忙しいのに、私のために時間を割かせちゃっ

てごめんね」

そう言いながらも、ダフネはいつになく嬉しそうに笑っていた。

セレネとミリセントは顔を見合わせる。そして、互いに息を吐いた。

「いえ、ダフネ。こちらこそ、ごめんなさい」

「あたしもごめんね、ダフネ」

「もう、2人ともなに謝ってるの。さあ、行こうよ！」

ダフネはスキップをしながら先に進む。そのあとをセレネと仏頂面のミリセントが後を追った。

今日は、セレネとミリセントがダフネに昼食を奢る日なのである。

なぜ、そうなったのか。

理由は3年生の時に交わした約束に遡る。クリスマス休暇が終わった少し後、ミリセント・ブルストロードはセレネたちの前で宣言した。

『私たちのうち誰かが、来年のバレンタインまでに彼氏を作ること！ 勝った方

が負けた方になんでも1つ言うことを聞かせられるっていうのはどう?』と。

セレネは承諾した。だが、バレンタインまでに彼氏を作らなかった。作れなかったのではない。作らなかったのである。セレネとしては、ここを強調したい。

代表選手としての課題を解決するための魔法習得、賢者の石の研究、最近ではムーディからもらった本に記載された魔法の習得――、それに加えてマグルの勉強もしないといけないので、やることが山積みだ。

とてもではないが、恋など楽しんでいる場合ではない。

ミリセント・ブルストロードも彼氏ができなかった。

ただ、彼女はセレネとは違い、クリスマスから彼氏作りに燃えていた。

彼女はクリスマス・ダンスパーティーで、マクラーゲンに誘われた。だが、彼は会場に入る前に言い争いをし、別れてしまったらしい。その直後に出会った、ザカリアス・スミスとは話が合ったらしいが、彼と目玉焼きの焼き加減の話で意見が分かれ、喧嘩別れしたようだ。

ミリセントは負けじと彼氏作りに励み、次にレイブンクロウのマークス・ベル

ヴィと仲良くなり始めた。ところが、これもシュークリームを皿で食べるか、直接手で食べるかという話で破局。

結局、彼女は彼氏がいないまま、バレンタインを越し、いまに至る。

「うう、いいこと。セレネ。目玉焼きは——」

「半熟か固めか気にするような男とは付き合うな、ですよ。それ5回目です。ちなみに、シュークリームを手で食べる楽しさを認めない心の狭い男とも付き合うな、という文句は8回目になります」

「うぐぐ……私が勝つ予定だったのに!! セレネをぎゃふんと言わせたかったのに!!」

ミリセントは嘆いた。

さて、セレネもミリセントも彼氏ができなかった。

よって、この試合は引き分けかに思われた。

だが、この約束に巻き込まれていた者がもう一人、あの場にいたのだ。

ダフネ・グリーングラスである。

おそらく、発起人はダフネが彼氏を作るなど想像もしなかったのだろう。普段から大人しく、あまり目立つことのない女の子だ。積極的に彼氏を作りに行くことなどできなかっただろうし、クリスマス・ダンスパーティーさえなければ、セレネたちのように独り身だったはずだ。

しかし、クリスマスが彼女を変えた。

レイブンクローのアンソニー・ゴールドスタインに見初められたのである。二人は鳥の夫婦が寄り合うように仲睦まじく、落ち着いたカップルだ。

きつと、滅多なことがない限り、このカップルは破局しないだろう。

『ねえ、ミリセント。セレネも聞いて欲しいんだけど、あの約束って、もしかして、もしかしてだけど……私の勝ち、なのかな？』

バレンタイン後、ダフネからそう切り出された時、セレネとミリセントは何も言いませんでした。

そして、ダフネが敗者に下した命令で今日、セレネたちはホグズミードにいる。その命令が、『ダフネに昼食を奢ること』なのであった。

「……私が、負けるなんて」

セレネは胃が落ち込む気持ちを堪えながら、三本の筭に入る。

賑やかな店内とは反対に、セレネの気持ちは今にも沈みそうだった。なにしろ、今までほとんど負けたことがない。たかだか彼氏を作るといふ非常にくだらない決だったが、負けた事実をあまり認めたくなかった。

「……もう少し、本気で乗り出していれば……こんなことには……」

「いやー、考えてみなさいよ。あんたが彼氏を作ったが最後、下手すれば親衛隊が暴動を起こすわよ」

ミリセントがヤル気のなさそうな声で言いながら、テーブルに着いた。

「フローラたちを筆頭にですか？」

「隊長殿を筆頭によ。あいつ、暴れまわるわよーきつと」

「彼はありませんよ」

セレネはダフネの背中を目で追いかけていると言った。

ダフネはセレネたちの財布を手に、カウンターへ走っている。公正なるじゃんけんの結果、食べ物代がミリセント、飲み物代がセレネということになっている。

「彼、好きな人がいるみたいですし」

「ふーん、それ誰よ」

「さあ。部下のプライベートに立ち入る必要はありませんから」

「……部下って、ねえ」

ミリセントが疲れたように笑うと、そのまま机に突っ伏した。

「あー、もう！ セレネのわからずやが！」

「わからずやって……なんのことです？」

「そこよ！ そういうところよ!! なによ、ダフネにゴールドスタインがいて、パンジーにはドラコがいて、セレネはわからずや！ あーもう！ 私の魅力に気づく優しい男はいないのかしら!？」

「きつというよ」

テーブルに戻って来たダフネが明るい声色で言った。

彼女は、数種のスコーンが載ったお盆を持っていた。その後ろには、バタービールが3本浮かんでいる。

「スコーンだけでいいのですか？」

セレネはダフネに話しかける。

「ミリセントの財布を気遣わなくていいですよ」

「……あんたが言わなくていいわよ」

すぐにミリセントが噛みついてくる。その様子を見て、ダフネはくすくすと笑った。

「いいの。だって、私、三人でゆっくりおしゃべりしたかったんだ」

ダフネは椅子に腰を下ろすと、ここ最近のことを口にした。

「セレネはいつも以上に忙しそうにしてるし、ミリセントもぴりぴりしているし……命令は口実。ちょっとお昼を安くあげたかったのは事実だけど……こうして、ゆっくりおしゃべりしたかったんだ」

「……ごめんなさい」

セレネとミリセントの声が重なった。

「いいのいいの。ほら、バタービールが冷めちゃうよ」

ダフネは幸せそうに笑った。悪意の欠片もない純粹な笑顔に、セレネは苦笑いを返す。ダフネの笑顔を見ていたら、やり返そうという気とか負けた悔しさも薄まっ

てしまった。

それから三人は、スコーンとバタービールを片手に、とりとめのないおしゃべりをした。

ハニーデュークスの新発売されたヌガーの素晴らしさのこと、グランドラクス魔法ファッション店の流行服について、管理人のフィルチと司書のマダム・ビンスは付き合っている説、クラップとゴイルではどちらがマシか——。

セレネはほとんど聞き役であり、内容も政治や勉強とは関係のないものばかりだったが、時がたつのを忘れてしまったくらい楽しい一時だった。

たまには、勉強もしない日もあっていいのかもしれない、と思える程に。

「もう、喋りつかれて顎が痛いじゃないの」

三本の箒を出るとき、ミリセントは笑いながらダフネの腹を小突いた。

「でも、楽しかったでしょ？」

「まあね。それで、次はどこに行く？　まさか、これで終わりってわけじゃないわよね？」

ダフネとミリセントが楽しそうに話している。その後ろを追いながら、ふと——

セレネの視界の端に、黒い動物が映った。黒い犬だ。前足に銀色の義手をつけているが、馴染んでいないのだろう。ひどく歩きにくそうに、よたよたと進んでいる。

「あの犬……」

「どうしたの、セレネ？」

ダフネが振り返って尋ねてくる。

片足を失くした犬は、ちょうど猪の絵がぶら下がったパブに消えて行った。

「いいえ、なんでもありません」

あの犬が、シリウス・ブラックだと言っても信じてもらえないだろう。

マグル大量殺人事件の真犯人は吸魂鬼に魂を奪われ、なにも話せなくなってしまうので、いまだにブラックは容疑者だ。彼は逃亡生活を送っている。しかし、まさか、ホグズミードに戻ってきているとは知らなかった。

セレネの応援にフラメルが駆けつけたのと同じように、シリウス・ブラックもハリーのために戻って来たのだろうか。

「……ま、なにもしてこないならいいけどね」

セレネは小さく呟くと、もうかなり先に進んでしまった二人を追いかけるのだっ

た。

月は流れていく。

イースター休暇が終わる頃、第三の課題の内容が発表された。

代表選手は、クイディッチ競技場にできた巨大迷路に入り、その中心に置かれる優勝杯を手に入れる課題だ。もちろん、ただの迷路ではなく、ハグリッドが放した魔法生物や罠や呪いがいたるところに障害物として設置されているらしい。

説明役のバグマンが『ハグリッドの魔法生物』と口にしたとき、セレネはハリーと目を合わせてしまった。

これは、十中八九——あの「尻尾爆発スクリュート」も出てくる。この珍生物は今やそこらの呪いを通さぬ殻で覆われている。踏み潰せばいいのだが、哀しいことに全長は2メートルに匹敵してしまっていた。しかも、こいつは殺しあい有趣

味なのである。

もはや、この課題のために生まれてきた生物なのでは？とさえ疑いたくなくなってしまう素晴らしさだ。セレネは、こいつと絶対に遭遇したくない。

なお、スタートする順番は順位順だ。

すなわち、1位のセレネとハリーが最初に入り、次に2位のセドリック、3位のクラム、4位のフラーと続いていく。

無論、先に迷路に侵入したセレネたちが一番有利なのだろうが、待ち受ける障害物によっては逆転されることも考えらえる。道にだって迷うかもしれない。つまり、誰にでも——最後に入るフラー・デラクルにも、優勝のチャンスはある。

うかうかはしてられない。

セレネは「秘密の部屋」へ行く回数を増やし、呪文の習得に励んだ。

単純な攻撃系の魔法数種と「幻影魔法」など相手を躲すことのできる魔法を中心に練習していく。

……ちなみに、ムーディから渡された「もつとも邪悪なる魔法」は、非常に興味

深い闇の魔術が詰まっていたが、第三の課題を考えると使えないものばかりだった。若返りの魔法は今のセレネに必要なし、殺人によって魂を分け、殺されないようにする「分霊箱」なんて犯罪だ。即、アズカバン行きである。すべてを燃やし尽す「悪霊の炎」は魅力的だったが、止め方が非常に複雑で、いまの自分には難しそうだった。前者はともかく、後者は使えて損はないので理論のみ習得しておく。賢者の石もフラメルのおかげで、方向性は異なるが、ついに試作品が完成した。フラメル版の永遠の命をもたらしものではなく、どちらかといえば、パラケルスス版の魔法吸収タイプになってしまったので、厳密に言うくと失敗だが、なにかに使えるかもしれない。セレネはいつも胸ポケットに入れておくことにした。

新たな魔法の習得、賢者の石研究——これらに励んでいる間にも季節は進んで行く。

つい先日まで若々しい黄緑色だった木々が、すっかり深緑色に染まり、勢いよく空に向かって枝を伸ばしている。もうすぐ来る夏を謳歌しようと、元気澁瀬とした木々とは反対に、セレネの心は少し沈んでいた。

なぜなら、最後の課題当日だからである。

朝食時、いつもなら焦げ目のついたトーストにバターを載せて食べるのだが、今日はなかなか食べ進めることができない。バターはすっかり溶けて、ぼたぼたと皿に黄色の染みを作り始めていた。

「セレネ、大丈夫？」

ダフネが魔法史の本から顔を上げ、心配そうに尋ねてきた。

「ええ、大丈夫です。ダフネこそ試験の方は大丈夫ですか？」

「全然。ゴブリンの反乱の首謀者の名前が、まったく覚えられない」

ダフネはお手上げだと両手を挙げる。代表選手は期末試験を免除されていたが、一般生徒はそうでもない。今日は期末試験最終日——誰もが、最後の追い込みにかかっているのである。

「語呂で覚えればいいですよ。だいたい、薄汚いウルグとかですよ」

「やってるけど、忘れちゃうんだよ……。そのまま本番でいいかな」

「諦めずにやってみたらどうでしょう？ 道が開けるかもしれませんよ？」

セレネはそう言いながらダフネを励ましていたが、内心では自分が一番逃げ出したかった。少なくとも、尻尾爆発スクリュート級の魔法生物と対峙した時、対抗できる手札が少ししかないのだ。あらゆる作戦を立案してあるが、それがスクリュートに決まるとも限らない。

最悪、「直死の魔眼」がある。だが、これは——ムーディの忠告を受け、いままで以上に使いたくないものになっていた。

「ゴースト」

そのとき、マクゴナガルがセレネに近づいてきた。

「代表選手は、朝食後に大広間の脇の小部屋に集合です」

「課題は今夜でしたよね？」

セレネは、少し眉間に皺を寄せて答える。

「それは分かっています。いいですか、代表選手の家族が招待されて、最終課題の観戦に来ています。みなさんにご挨拶する機会だというだけです」

「私の義父は、マグルなのですけど……そこは、大丈夫なのでしょうか？」

「問題ありません。過去にも、ホグワーツにマグルが足を踏み入れたことがあります」

す」

マクゴナガルが立ち去り、セレネは少し啞然としていた。

そして、内心——少し不味いな、と思った。

なにしろ、セレネは義父に代表選手になったとは一言も伝えていない。こうなるならば、クリスマスの時にされたノットの忠告通り、伝えておけば丸く収まったかもしれない。だが、あの心優しい義父のことだ。そのあたりの事情も分かってくれるだろう。

セレネはそう判断すると、ダフネと別れて大広間を横切った。

そのまま、小部屋のドアを開いた。小部屋のすぐ内側にはセドリックが両親と話している。彼の父親は『人生最高の瞬間』と言いたそうな晴れ晴れとした笑顔を浮かべているが、母親の方は、喜びの中に少し心配だという色が見え隠れしていた。その隣には、クラムに似た男と、スレンダーな女が座っている。おそらく、まだ部屋に入ってきていないクラムの両親だろう。その反対側で、フラーが彼女の母親とフランス語と思われる言語で楽しそうに話していた。フラーの母親は、第二の課題の時に湖の中で目撃した小さな女の子の手をしっかり握っている。

そして、その向こう側——暖炉の前で、義父のクイール・ホワイトは赤毛のぼちやりとした女性と耳に牙のイヤリングをつけた長髪の青年と楽し気に言葉を交わしていた。

「義父さん」

セレネが呼びかけるよりも先に、クイールはこちらに気付いた。ぱっと表情が華やいたが、それは一瞬だけだった。無言で立ち上がり、こちらに近づいてくる。彼は感情のすべてを押し殺したような表情をしていた。

そして——ぱしん、とセレネの頬を叩いた。

「どうして、僕に言わなかったんだ！ こんな危険な課題に参加させられているって！」

予想通り、クイールから叱りの言葉が降ってくる。

しかし、その声は怒りというよりも、今にも泣きそうな鼻声で、セレネは戸惑ってしまった。怒られるのは予想の範囲内だ。叩かれるのも最悪ありえると考えていた。ところが、まさか泣かれるとは思っていなかったのである。

なぜ、彼は泣くのだろう。

自分のことではないのに。実の娘でもないのに。

「聞いたよ、何度も死にかけたって。ドラゴンや水中人に襲われたって!!

セレネに万が一のことがあったら……僕は、君のお母さんに何て言えばいいんだ？

……教えてくれたっていいじゃないか。魔法の使えない僕は、たしかに何もできない。君の助けになれない。僕が課題の内容を知ったら、きっと心配すると思って、今回のことを一切も話さなかったことも理解できる」

クイールの手がセレネの肩に置かれる。彼の顔は涙で歪んでいた。

「でも、僕たち家族じゃないか」

「かぞく？」

「嬉しいことも、辛いことも、悲しいことも、分かち合うことができる。辛いとき、互いに支え合うのが家族なんだよ。……ホグワーツでは習わなかったかい？」

セレネは何も答えられなくなってしまった。

ただ、もう彼の泣き顔は見えていられない。少し俯くと杖を取り出した。

「……『テルジオ―拭え』」

杖を操り、クイールの涙を拭きとる。

「ごめんなさい、お義父さん」

セレネは囁くような声で謝った。

彼に謝ったのは、いつ以来だろう。そもそも、彼に怒られた記憶がない。彼の前では、いつも気を張りながら優等生を演じ続けてきていた。わがままは言わず、率先して家事を手伝っていた。

だから、きつと初めてだ。彼に迷惑をかけ、強い心配をかけさせてしまった。セレネの心の中に、少しずつ罪悪感が広がっていく。

「……セレネ、謝らなくていいんだよ」

だが、その広がり、待ったをかけたのもクイールだった。彼はぽんとセレネの頭を撫でる。セレネが視線を上げてみると、そこにはいつも通りの微笑みを浮かべた義父の姿があった。その顔を見ると、罪悪感や課題に対する不安感や緊張まで溶けていく。セレネは自分の表情が緩んだのを感じた。

「だけど、次からは一言言って欲しいな。」

はい、説教はここまで。反省の代わりにというのはなんだけど、この学校を案内してくれないかな？ 実は、うずうずしていてね」

クイールは子どもっぽく笑うと、セレネの手を引いて歩き始めた。

大広間に戻ると、もう大半の生徒は試験へ向かっていた。クイールは天井を見上げると、組み分け前の1年生のようにはしゃいでいる。

「凄いな。食堂の上に、空が広がっている！」

「空じゃなくて天井ですよ。魔法で投影しているだけです」

「魔法版プラネタリウムか。凄いな、セレネ。夏に帰ったら、家の天井にあの魔法をかけてくれないかな？」

「すみません、夏休みは魔法を使えません。卒業したらは、どうでしょう？」

「うん、いいな。楽しみだな……あれ、あれはハリーじゃないか」

クイールはハリーの方に近づいていった。

彼は緊張しているのか、はたまた家族に会うのが嫌なのか、複雑な表情でベークンとにらみ合っていた。ハリーはクイールに気付くと、少しだけ表情を明るくした。彼は、ハリーの担任だった時代があるのだ。

「先生！ セレネの観戦に来たんですね」

「そうだよ。もちろん、君のことも応援している。まさか、教え子と娘が魔法使用で、一緒に戦うなんて——物語になりそうだ。くれぐれも、結末はハッピーエンドで頼むよ」

「もちろんです」

セレネはきっぱりと言った。

「私が勝利して、ハッピーエンドです。せいぜい健闘してくださいね、ハリー・ポッター」

「こら、セレネ。友だちに対しての口の利き方じゃないぞ」

「……お互い頑張りましょう、ハリー。」

ところで、小部屋へ行かないのですか？ 赤毛の婦人が待っていましたけど」
「えっ！！？ ダーズリーじゃなくて!?」

ハリーは驚きのあまり跳びあがると、急いでベーコンを口に押し込んだ。そして、尻に火がついたような速度で小部屋に向かう。

よほど、ダーズリーが来ることが嫌だったに違いない。

学校内を案内してもよかったが、他の生徒たちがテスト中なので、校庭を案内することにする。

陽光が降り注ぐ校庭をクイールと歩き、ボーバトンの馬車やダームストラングの船を見せたりした。特にボーバトンの馬車をひく天馬に興味を持ったらしく、太陽の日差して普段より一層輝く黄金の鬘に、クイールの眼は、しばらく奪われていた。他にも、近づくものに攻撃する『暴れ柳』を、遠くから眺めた時には、どうしてもこの危険極まりない植物が植えられたのかと、クイールは考えを巡らせていた。これには、セレネも解答することができなかった。

どうしても、あの危険極まりない植物が植わっているのだろうか。絶対に自然保護のためでないことは確かである。後日、調べてみることにしよう。

初夏の陽光の下、心地よい風を感じながら二人で歩く。

遠くに、クイディッチ競技場が見えた。城からでも巨大な生垣がうごめいているのが見える。

「義父さん、私——絶対に、帰ってきますね」

自分のために、優勝しようと思っていた。それは、今でも変わらない。

だけど、たとえ——最悪な結果になったとしても、彼のために生きて戻ってくる。もう、彼の泣き顔を見たくなかった。あの顔を思い出すと心がずきずき痛む。そんな気持ち、いままで感じたことがなかった。

「優勝したら、今年の夏は海外旅行に行きませんか？」

「おっ、セレネから提案するなんて珍しいね。どこに行きたいんだい？」

「パリ。フランスです」

「フランスか……僕は日本に行きたかったけど、まあいいか。優勝したらフランスに行こう」

クイールが朗らかに微笑み、セレネの肩を叩く。

「絶対に戻っておいで、セレネ」

「はいっ！」

遠くで12時の鐘が鳴る。

あと、課題まで4時間。それまで、セレネは義父と寄り添って過ごした。

心地の良い、最後の至福を――。

セレネの祖先が明らかになりました。

ちよつと無理やりだったかもしれませんが。でもいいんだ。だって、FGOではイギリスにヴィクターの孫いるもんね！

いよいよ第三の課題です。次回もお楽しみに！

55 話 第三の課題

大広間での夕食が終わると、代表選手たちは一足先にクイディッチ競技場に集められた。

六メートルほどの高さの生け垣が周囲を囲み、正面に隙間が空いている。あれが、巨大迷路の入り口だろう。覗き込んでみると中の通路は薄暗く、とても気味が悪かった。

セレネは軽くストレッチをしながら、その時を待つ。

持ち込みが許されているのは、杖のみだ。ナイフは持っていないが、いざというときのために偽賢者の石はポケットに入れていた。だが、おそらく使うことはないだろう。迷路内部での対人戦——すなわち、代表選手同士の戦いは推奨されていなかった。理由は簡単。敗れた代表選手の救助に時間がかかるからである。教師でさえ、取り除くのに苦勞する障害物が配置されているのだ。教師が戸惑っている間

に、尻尾爆発スクリュートのえじきになったら、たまったものではない。

「私たちが迷路の外側を巡回しています」

マクゴナガルが言った。傍には、ハグリッドとムーディ、フリットウィックの姿がある。

「なにか危険に巻き込まれ、助けを求めたいときは空中に赤い火花を上げなさい」
代表選手たちが頷くと、バグマンが声を張り上げた。

「よし、では持ち場について！」

代表選手がそれぞれ別の方向へ散っていく。セレネとハリーは1番なので正面からの入場だ。セレネは少しがっかりした。皆、同じところからエントリーするのであれば、入口の所に落とし穴を設置したのに——その算段がくるってしまった。

「まあ、仕方ないですね」

正攻法で課題をクリアしよう。

セレネはスタンドを埋め始めた人ごみを見渡した。グリフィンドールのライオンが踊る場所の反対側——そこで銀色の蛇の旗が踊っている。小さく義父の姿が見えた。彼の周りには、カロー姉妹やら親衛隊の生徒たちが守護するように囲んでい

る。義父はノットと話し込んでいた。ノットは嫌そうな顔をしているが、なにやらクイールはぐいぐいと怒ったように攻めている。そのたびに、ノットは身体を縮こまらせながら、クイールから距離を取ろうとしていた。これは、意外な二人組である。ぜひ、あそこの会話を聞いてみたいものだ。なにをもって、ノットがクイールを怒らせたのか非常に興味がある。

課題を華々しく解決した暁には、尋ねてみることにしよう。

「紳士、淑女の皆さん、お待たせいたしました!! 第三の課題、そして最後の課題が始まります!!」

ここで、現在の点数を確認しましょう。

第一位、ハリー・ポッター君、セレネ・ゴント嬢、両名ともホグワーツ!!」
大歓声と拍手に驚き、禁じられた森の鳥たちが暮れかかった空に飛び去って行く。

「第二位 セドリック・ディゴリー君、ホグワーツ校!

第三位 ビクトール・クラム君、ダームストラング校!

そして、第四位はフラー・デラクール嬢、ボーバトン校。以上の結果になってお

ります。

さて、このまま一位の二人が独走するのか！ それとも逆転優勝もありえるのか!? 危険溢れる迷路から優勝杯を手に入れるのは、いったい誰になるのか!!」

バグマンが手を広げると、ひとときわ高い歓声が沸き起こる。

「では、ホイッスルが鳴ったらハリーとセレネ！ いち……に……さん」

バグマンが笛を鳴らした。

セレネは地面を蹴ると、ハリーより先に迷路へ侵入する。危険を確かめるために、ハリーを囷に使う作戦もあったが、なによりも時間が惜しい。

後ろで声を上げるハリーを無視して、セレネは迷路を奥へ奥へと進んで行った。

「『ファントムフラム―幻影の炎よ』！」

セレネは歩きながら、杖を軽く一振りする。

すると、杖先から青白い炎が煌々と燃え上がり、セレネの周囲を守護するように包んだ。呪文の通り、幻の炎である。しかしながら、たいていの動物は火を嫌う。これは、魔法生物も同じことだ。火を焚いているだけで、たいていの魔法生物は近づいてこない。余計な戦いを避けることができるだろう。

これでも近づいてくるのは、よほどの馬鹿生物か——火をも恐れない凶悪な魔法生物だけだ。

だから、セレネはすっかり油断していた。

まさか、角を曲がった途端、いきなり——セレネの前に火を恐れない凶悪魔法生物「尻尾爆発スクリュート」が現れるとは思っていなかったのである。

「……この炎、こいつには役に立たないじゃない」

セレネは、スクリュートを睨みつけた。

こいつにこそ役に立ってほしかった呪文なのに、とセレネは少し愚痴る。

なにを隠そう、とにかくでかい。長さだけで三メートルはある。巨大なサソリのように、はさみをかちかちと鳴らしていた。長い棘を背中の方に丸め込み、セレネが幻影の炎で照らし出すと、その光で分厚い甲殻がざらりと光った。

『『ステューピファイ——麻痺せよ』』

駄目もとでスクリュートを攻撃する。だが、それなりの魔力を込めたはずにも関わらず、失神呪文は殻に当たって跳ね返った。セレネは間一髪、盾の呪文で防いだ

が、スクリュートは攻撃準備を始めていた。身体を曲げて、尻尾から火を噴き上げている。そして、セレネめがけて飛びかかって来た。

『インカーセラス 縛れ！』

セレネは杖を鞭のように振るい、杖先から飛び出した分厚い縄でスクリュートに巻いていく。スクリュートの勢いは少し抑えられた。セレネはそのままスクリュートではなく縄に目がけて、ありったけの魔法を込めて攻撃する。

『『エクスパルソ―爆破せよ』!!』

身体を満遍なく覆われた縄が、突如至近距離で爆破されたのだ。これには、怪物もたまったものではない。音と衝撃、そして爆発の光で目を回したのか、スクリュートはことりと倒れて動かなくなった。

「……まだ生きてるの、これ？」

セレネはスクリュートの身体が呼吸しているように上下している様子を見て、ぞっとした。これでは、いつまで失神しているかも分からない。セレネは急いで無力化したスクリュートの脇を通り過ぎると、迷路の奥へと急いだ。

他の代表選手は、きっともう迷路に入っている。

自分がリードしているとは思わないことだ、とセレネは自分に言い聞かせながら先を進んだ。

すると、今度はトロールのそのそとやって来る。セレネが1年生の時に対峙した奴より一回りは大きい、セレネは怖くなかった。

「あのときは、棍棒の線を斬ったっけ」

セレネはくすりと微笑んだ。

トロール程度、いまは魔眼を使わなくても倒せる。トロールの脅威は巨大な身体から生み出させる腕力、そして、棍棒だ。弱い失神呪文程度では倒すことができない強靱な皮膚も、トロールの持ち味だろう。

無論、トロールを昏倒させる程度の失神呪文を放つことは可能である。だが、こんな序盤に大幅な魔力を使うことは避けたかった。

「『デIFOディオ 掘れ』」

トロールの足元に杖を向けると、そこには大きな穴が掘られた。トロール1人くらい、すっぽり入ってしまう穴である。さすがのトロールも「進むと落ちる」ということは理解していたようで、ぶもーと唸りながら躊躇していた。

「……その程度は理解できるのね。でも、残念。『ディセンド―落ちろ』」

トロールの足元に閃光が当たり、そのまま足を崩したように地面に落ちていく。セレネはトロールが肩ほどまで埋まったところで軽く杖を振った。

『レバロー―直れ』

この状態で穴に修復呪文をかける。

穴はトロールを残して、再び埋められた。アホ面のトロールだけが地面に顔を出している。トロールは何が起こったのか分からないのか、ぼんやりと唸りながら周囲を見渡していた。

「大人しくしていなさいね」

セレネはトロールに振り返ることなく、先へと進んだ。

迷路は右に行くとクリアできる。そんなことを教えてくれたのは、いったい誰だったのだろうか。セレネは道を曲がりながら、ふとそんなことを思い出した。

「な、なにをするのでーすか？」

ふと、近くからフラー・デラクルの声が聞こえてきた。怯えるような声に、思わず足が止まる。

「代表選手同士の戦いは、いま必要ではありーません」

「『クルーシオ―苦しめ』」

それに対し、低い声が聞こえてきた。それと同時にフラーの悲鳴が響き渡る。セレネは急いで角を曲がった。すると、そこには『磔の呪い』をかけられて息絶え絶えのフラーと、そんな彼女を黙って見下すビクトール・クラムの姿があった。彼の杖はフラーの喉元に向けられ、いまにもトドメを刺しそうな勢いであった。

「ビクトール・クラム。人に対する磔呪文は、アズカバンに収監されます。貴方のお国では違いますか？」

「『クルーシオ―！』」

クラムはセレネに向けて呪文を放ってくる。

「『プロテゴ―守れ』」

セレネは盾の呪文を展開し、呪いを避けることにした。おかえしとばかりに、歩み寄りながら失神呪文を無言で放つ。詠唱をしていないので、本来の効果よりも半減しているが、クラムを後退させるくらいには役に立った。セレネはフラーとクラムの合間に割って入ると、彼女を背で守るように立った。

「残念です。世界的有名なクイディッチ選手がこの程度の器とは――」

セレネが話している間にも、クラムは遠慮なく「磔の呪い」をかけてくる。セレネは盾の呪文を持続し続けた。魔力削減のために、幻影の炎は消しているが、それにしてもかなりの魔力消費量だ。磔の呪いに一撃当たる度に、盾が軋むのが分かった。

「……あまり、長くは持ちませんね」

迷路では、人の心も惑わされるといふ。

クラムの心も惑わされたのかと思ったが、それにしては行動が異常だ。十中八九、服従の呪文だろう。しかし、いつかけられたのだろうか。彼はいつもカルカロフやファンたちに見られている。一人になる機会などそうないだろうし、カルカロフは闇の魔術の専門家だ。大事な大事な代表選手が服従の呪文にかけられていたら、すぐに見抜く程度のことはできそうだ。

しかし、それができなかった。

そうになると、彼は迷路に入ってから服従の呪文をかけられたということになる。では、誰がかけたのか。

フラ―は白だ。今もセレネの背後で本当に虫の息だ。傷つき、白い顔で細い息をしている。もし、彼女が服従の呪文をかけたとしたら、ここまでボコボコにされる意味が分からない。それでは、ただのマゾヒズムだ。

では、ハリー・ポッターかセドリック・ディゴリーとなる。

しかし、ハリーにここまで高度な魔法が使えるわけがないし、公正なセドリック・ディゴリーが法律をわざわざ破ってまで勝ちに来るだろうか。

となると、外部の人間の仕業になる。

しかし、まだ赤い火花が打ちあがっていない以上、警備しているマクゴナガルたちが入ってくることは不可能だ。つまり、この迷路内部には代表選手しかない。外から中の様子が的確に分かり、魔法をかけることができるなら話は変わってくるが――と、ここまで考えたとき、セレネにはある仮説が浮かんだ。

「……まさか、あの人が？」

『『クルーシオ』!!!!』

相変わらず、クラムが磔の呪いをかけてくるので、セレネの思考が途切れた。セレネは大っぴらに舌打ちをした。

「っ、しつこいですよ。そのようでは、ハーマイオニー・グレンジャーも愛想をつかしますね」

「——ッう」

一人の少女の名前を出すと、クラムの顔が痛そうに歪んだ。

その隙を逃すわけがない。セレネは盾の呪文を解除すると、まっすぐクラムに杖を向けた。

『『エクスペリアームス——武器よ去れ』！』

クラムの杖がセレネの手の中に納まる。クラムが憤慨したように歯を剥いたが、セレネは気にすることなく彼に杖を向け続けていた。

『『ステューピファイ——麻痺せよ』』

軽く魔力を込めて、失神呪文を放つ。クラムの胸に直撃し、そのまま電池が切れたように倒れ込んだ。

『『インカセーラス——縛れ』』

クラムを拘束し、フラーの隣に安置する。

この分だと、フラーもクラムも課題に復帰するのは困難だろう。セレネはクラム

の杖で赤い花火を上げた。ご丁寧に、救助はマクゴナガルに頼むというメッセージを添えて。その作業が終われば、もう彼らに用はない。ただ、また復活して襲ってこられては困るので、杖だけは取り上げたままにすることにした。セレネは自分のローブの中にクラムの杖をしまうと、先を急いだ。

「……もし、あの人がスパイなら……」

いままでのことが納得がいく。

しかし、いくつか腑に落ちないこともあった。

どうして、自分を助けるようなことを言ったのだろうか。先生という役に徹していたとしても、意味が分からなかった。

「……あっ！」

角を曲がると、遠くで青白い光が輝くのを見つけた。優勝杯だ。セレネは地面を蹴ったが、前方に誰かが走っていることに気づく。

セドリック・デイゴリーだ。彼も優勝杯を目指して、一心不乱に走っている。体格でも体力でも、セレネが17歳の男子生徒に敵うわけがない。セレネは走りながら、セドリックに狙いを定めた。

『イモビラス―動くな』！』

杖から走る閃光がセドリックに直撃した。途端、セドリックは動きが徐々に動きが止まり、スロー映像のように緩慢になった。それで十分だった。セレネは軽々と彼を追い越し、そのまま優勝杯に向かって一步を踏み出そうとしたとき――

自分の左側で、八つの目が怪しげに輝いている。

巨大蜘蛛だ。カミソリのような歯をかちかちと鳴らしながら、こちらへ近づいてくる。セレネはこのまま無視して走れば問題ない。しかし、問題はセドリック・ディゴリーだ。呪文の影響のせいで、彼は思うように動けない。セレネは悩んだ末に歩みを止め、蜘蛛に狙いを定めた。

『アラ―ニア・エグズメイ―蜘蛛よ、去れ』！』

杖先から閃光が奔る。蜘蛛が嫌がるように顔を背けた。蜘蛛除去魔法は通常サイズの蜘蛛には効果的だが、自分の身体より三倍は巨大な蜘蛛には効きが弱い。セレネは次の呪文を思案していると、別の方向から閃光が奔った。

『エクスペリアームス―武器よ去れ』！』

ハリ―だった。彼の武装解除の呪文のおかげで蜘蛛のはさみが飛ばされる。その

とき、蜘蛛の下腹部が無防備にさらされた。

『フリペンド―撃て』『ステューピファイ―麻痺せよ！』

セレネは蜘蛛の下腹部目がけて二つの魔法を打ち込んだ。蜘蛛がぐらりと揺れて二三步、こちらへ近づいてきたが目を回したように生垣を押し倒した。そして、そのまま動かなくなった。

「……やった」

びくりとも動かない蜘蛛の足を睨みつけながら、ハリーたちが近づいてくるのを待った。セドリックは終了呪文「フィニート」を使い、地力で魔法を解いたらしい。こきこきと肩を鳴らしながら、ゆっくりとセレネに近づいてきた。

「さてと、これで障害はなくなったね。……行きなよ、2人とも」

セドリックは静かに言った。

「僕に取る資格はない。そもそも、僕は第一の課題で脱落していた人間なんだ。ハリーがいなければね」

「それ、正気ですってます？」

セレネは愕然とした。セドリックは優勝杯が欲しそうに睨みつけている。しか

し、彼は動く気配を見せなかった。

「優勝杯を取らないと？」

「……ああ。セレネが僕の行動を遅くしてくれなかったら、そのまま蜘蛛の餌食になっていた。僕は負けていたよ、君にね」

「いや、私はそういうつもりで遅くしたのでは——」

「あの、だったら僕も駄目だ。僕も優勝杯を取れないよ」

ハリーが戸惑うように口を開いた。彼は杖をいじりながら、ゆっくりと口を開く。

「第二の課題は、セドリックとセレネが助けてくれなかったら……きつと、0点だった。あの蜘蛛だって、僕一人だと倒せなかったんだ。だから、僕に取る資格はない」

「……待ってください、ちょっと待ってくださいよ」

セレネは左手で頭を押さえた。

ハリーもセドリックも優勝杯が欲しくてたまらないのに、妙な意地を張って所有権を放棄している。

この場で明確な意思を示していないのはただ一人——セレネだけだ。

セレネは欲しい。しかも、彼らに対する負い目など皆無だ。第一の課題も第二の課題も自力で解決した。先ほどの蜘蛛のみ、ハリーと共同戦線だ。それ以外、ここまですべて一人で成し遂げてきたのである。このまま二人の好意を受け取り、堂々と優勝杯を取ればいい。

だがしかし、この後味の悪さは何だろう。

「……あの……とても、取りづらいのですが」

セレネが言うのと、また二人が互いに譲り始める。優勝杯の青白い光が二人の横顔を照らし出している。二人とも優勝杯を欲しいと表情が語っていた。だが、妙な意地の張り合いをしている。セレネには理解できないことだったが、このまま二人の言い合いを横目で見ながら「では、お先に」と優勝杯を取れるほど、セレネは空気が読めない人間ではなかった。

セレネは優勝したい。

ハリーに勝ち、すべてに勝ち、一人優勝台上に上がりたい。栄光などには興味はないが、とにかく勝ったことを証明したい。この思いが心の奥から湧きあがって来る。セレネは大きく息を吐いた。

「……はあ、分かりました。分かりましたよ。三人同時はどうです？」

セレネが投げやりな声で提案すると、セドリックは虚を突かれたような表情になり、ハリーは名案だと顔を輝かせた。

「そうだよ、さすがセレネ！ 三人一緒にとればいいんだ。ホグワーツの優勝には変わりない。それは……一位は僕とセレネの引き分けだけど、ホグワーツが三人同時に優勝するんだ。一位、二位、三位、表彰台に上がるのは、みんなホグワーツだよ！」

「だけど——君たちはそれでいいのかい？」

「しかたないですよ。二人が意地を張るから」

「僕は良いよ。それに、僕たちは助け合ってここに來たんだ。三人とも辿り着いたから、一緒に取ろう」

ハリーが手を広げて言うのと、セドリックは一瞬、耳を疑うような顔をした。それから、にっこりと笑った。

「分かった、そうしようか」

三人は優勝杯の傍に近づいた。青白い光を放ちながら、三人の代表選手に灯りを浴びせている。三人は優勝杯の輝く取っ手にそれぞれ片手を伸ばした。

「三つ数えてね」

ハリーが囁くように言った。

「一、二……三！」

セレネとハリーとセドリックは同時に取っ手をつかんだ。

途端、セレネはへその裏側辺りが引っ張られるように感じた。両足が地面から離れ、風が唸る。優勝杯の取ってから手が離れない。色の渦の中を、優勝杯はセレネたちを引っ張っていく。

「これってっ!!」

移動キーだと思い至ったときには、すでに遅い。

セレネは地面に投げ出された時、受け身を取りながら立ち上がった。

「優勝杯が移動キーだなんて……知ってましたか？」

セレネは、一番近くにいたセドリックに尋ねる。周囲は迷路の内部ではなく、見知らぬ墓地だった。右手に櫟の大きな木があり、その向こうに小さな教会の黒い輪郭が

見える。セドリックは首を横に振った。

「いいや、知らない。これも課題の続きなのか？」

「まさか、ありません。こんな不気味なところに連れてくるなんて……」

「そうだよな。一応、杖の準備はした方がいいだろうな」

セドリックは不安そうな声を出すと、杖を握りしめた。セレネは少し感心した。誰も言わなければ、自分が杖の提案をしようと思っていた。それだけ、彼は危機管理意識が高い。親衛隊に勧誘しようか、と今さらながら考える。

そして、周囲をぐるりと見わたしたとき——セレネは見覚えのある建物に気付いた。

「あれは……リドルの館！」

「リドルって、もしかして、ヴォルデモートのこと!!？」

セドリックは分からないようだが、ハリーにはすぐに誰のことか伝わったらしい。

「ええ、あれはリドルの——つまり、ヴォルデモートの父親が暮らしていた屋敷です」

「『例のあの人』の父親？　ちょっと待って、意味が分からない。どうして、僕た

ちはここに連れてこられたんだ?」

セドリックが困惑しているが、セレネは直感した。

間違いなく、これはヴォルデモート絡みの一件に巻き込まれた。この移動キーを使い、ヴォルデモートはハリーとセレネを招待したのだ。何をするのかは分からないが、少なくとも、セドリック・ディゴリーはお呼びではない。セレネは少し悩んだ末に、セドリックに偽賢者の石を投げて渡した。

「いざというときは、これを使ってください。魔法を吸収します……限度はありますけど」

「どういうこと?」

「説明は後です。急いで駅へ行きましょう。誰かが来る前に、逃げないと。……こちらです」

「待って、セレネ。移動キーを使えばいいんだよ」

セレネが歩きだそうとすると、ハリーが制した。

「ハリー、移動キーは使用済みです。二回目は……」

「二回目も使えるよ。行きと帰りの分があるんだ、知らなかった?」

「それを早く言ってください！」

ここにきて、セレネの知識の抜けが仇になった。

まさか、移動キーは何度も使えるものだとは知らなかったのである。本にも、そのことは記載されていなかった。

「なら、もう一度、移動キーを！」

「そう——あ、痛ッ——!!」

ハリーは額を抑えて倒れ込んだ。頭を掻きむしりながら、のたうち回っている。セドリックは駆け寄り、ハリーの名前を叫ぶ。セレネも近づこうとしたが、前方から来る影を見て足を止めた。小太りな影が二つ、こちらに近づいてくる。セレネはハリーを庇うように前に出ると、杖をまっすぐ向けた。

タイムオーバー。ヴォルデモートの関係者が来てしまった。こうなったが最後、戦うしかない。

「それ以上、近づかないでください。容赦はしません」

セレネは低い声で言い放った。

セレネの隣で、セドリックも杖を構えている。二対二だが、相手は赤子のような

ものを抱えている。その赤子が冷たい声で叫んだ。

「よけいなやつは殺せ」

「はい、ご主人様。『アバダ ケダブラ』！」

緑色の閃光が光る。セドリックは盾の呪文を構築しようとしたが、間に合わない。だが、セレネが渡した偽の賢者の石が胸元で光輝いた。賢者の石は緑の閃光を吸収していく。そして——破裂した。

「うわっ！」

セドリックは石の鋭い破片を額に受け、そのまま地面に倒れ込んだ。見方を変えれば、それは「死の呪文」を受けて死んだように見えたかもしれない。少なくとも、敵はそう思ったようだ。嬉しそうにガッツポーズなんてしている。

これで、戦える人材はセレネだけになってしまった。

『『ステューピファイ——麻痺せよ』！』

セレネはまっすぐ敵の一人に失神呪文を放つ。セドリックに死の呪いをかけた敵は、すっかり油断していたのだろう。あっさりセレネの失神呪文を受け、飛ばされてしまった。

「アレクト!!」

「アレクト?」

聞いたことのある名前である。セレネが少し考えるために気を逸らした、その瞬間だった。セレネは背後から近づいていた大蛇に気付かなかったのである。大蛇はセレネを締めあげていく。さすがに、バジリスクのアルケミーほど巨大ではないが、今まで見た蛇の中ではかなり巨大な分類に入る。胴体だけでも、セレネの腰回りほどの太さがあった。

『やめ、ろ』

なんとか蛇語で話しかけてみるが、無視されてしまう。

肺が酸素を求めているのが分かる。息ができなくて苦しい。あまりの苦しさに手足の感覚がなくなってしまった。辛うじて杖だけは握りしめているが、いまにも落ちそうである。そして、ついに力尽きて杖が指の先から零れ落ちてしまったとき、冷たい声が聞こえた。

「よし、いまだ」

声と同時に、セレネの身体は解放された。しかしその代わりに、縄で身体を巻か

れてしまう。セレネは抵抗できなかった。酸素を求めるので背一杯だったのだ。横目で見ると、ハリーは墓地の石像にくくりつけられていた。セドリックは死んだものとみなされているのか、地面に転がったままである。ぴくりとも動かない。

「……アレクトは失神したか。なさない。アミカス、先に進めろ」

「は、はい。ご主人様っ！」

アミカスと呼ばれた人が忙しなく動き始める。

大鍋に火をつける。何か水のような液体が、なみなみと満たされていた。ピシャピシャと液体が跳ねる音が聞こえる。液体の表面が、すぐにマグマみたいにゴボゴボと沸騰し始めた。紫色の湯気が空に昇っていく。

「準備ができました、ご主人様」

アミカスはそう言うのと、持っていた包みを丁寧に開いた。赤子でも入っているのかと思ったが、それよりも惨い者が包まれている。醜いべつとりとしたものだった。縮こまった人間の子どものようにも見えるが、その数百倍は醜い。髪の毛はなく、鱗でおおわれたようなどす黒いものだ。のっぺりと蛇のような顔で、赤い目がぎらぎら力強く輝いていた。

アミカスは、それを容赦なく鍋に落とした。

あれが溺れてしまえばいいのに、と祈ったが、そうならないだろうと冷静な部分
が言っていた。

ハリーの悲鳴はますます強まり、額の稲妻型の傷が赤く染まっている。セドリッ
クはまだ起きない。

「父親の骨、知らぬ間に与えられん」

ハリーの足元の墓の表面がぱっくりと割れた。アミカスの命ずるままに、細かい
塵芥が空を飛び、静かに鍋の中に降り注ぐのを見つめる。セレネには、見つめるこ
としかできなかった。

「しもべの、肉。よ、よ、喜んで、差し出されん!!」

アミカスは右手を前に出した。そして、震える口で呟くと、思いつきナイフで
切り落とす。その途端、夜を切り裂くような悲鳴が墓地に木霊した。アミカスは苦
しみ嘆きながら、魔法で止血をする。そして、ゆらゆらと呻きながら、ハリーへ近
づいていった。

「敵の、血。力づくで、奪われん！」

アミカスは、無抵抗のハリーに銀に短剣を突き立てた。しかし、殺すつもりはないのだろう。右腕を表層だけ貫き、そこから滲み出た鮮血を塗りたくった。アミカスは鮮血のついた短剣を大鍋に持ち帰ると、その上に掲げる。

「闇の帝王よ、生きて舞い戻れ、再び、この世界に」

そう言いながら、一滴、二滴と血を落としていく。

鍋の液体はたちまち目も眩むような白に変わった。任務を終えたアミカスは、がっくりと鍋の傍に膝をつき、手首を切り落とされて血を流している腕を抱えて地面に転がった。彼女は、すすり泣きをしている。

その間にも、大鍋はぐつぐつと煮え立っていた。

四方八方にダイヤモンドのような閃光を放っている。その目も眩むような明るさに、周りのものすべてが真っ黒なビロードで覆われてしまったように見えた。

「なにも、起こるなよ」

セレネは呟く。

しかし、その祈りとは虚しく、大鍋から出ていた火花が消えた。白い蒸気がうね

りながら立ち昇っていく。濃い蒸気がセレネの目の前のものをすべて隠し、それが一気に大鍋に集約されていく。そう、まるで——人の形を作るように。

「ローブを着せろ、アミカス」

アミカスが泣きながら立ち上がると、黒いローブを着せた。

痩せた男は、こちらをじっと見つめながら大鍋を跨いだ。

13年前より昔の新聞を賑わせていた顔だ。骸骨よりも白い顔、細長い真っ赤で不気味な両眼、蛇のように平らな鼻、そして切れ込みを入れたような鼻の穴——。

ヴォルデモート卿は、復活した。

オリジナル魔法

○ファントム・フレム

幻影の炎を出す魔法。他にもファントム○○といった亜種魔法がある。

……もっとオリジナル魔法を出したかったのですが、今回はこれだけです。あまり便利になり過ぎるような魔法は出しませんが、たまには出していききたいです。ヴォルデモート卿復活。次回はお辞儀のターンです。

56話 赤い現実と帝王

文字数が過去最高。

後悔はしていない。

ヴォルデモートは肉体を得ると、まっさきに自分の身体を調べ始めた。青白い長い指で自分の胸を、腕を、顔を愛おしむように撫でる。暗闇でさらに明るく光る赤い目の瞳孔が――否、顔全体が勝ち誇ったような喜びを表していた。きっと、再び肉体が得られたことが嬉しくてたまらないのだろう。

セレネはその様子を睨みつけながら、ようやく回り始めた頭で脱出方法を考える。自分の杖は地面に転がっていて取れないが、クラムから奪った杖が袖の下に隠されている。縄抜け魔法を使えば、簡単に脱出することができるだろう。

しかし、そのあとはどうする？

ハリーは、いまだ痛みで唸っている。セドリックは気絶している。

自分一人なら簡単だ。あちらが油断している今、縄抜けをして優勝杯を呼び寄せれば万事解決である。

しかし、他の2人を見捨てて逃げるわけにはいかない。助けたいのはやまやまだが、縄から脱した時点で、ヴォルデモートの注意を向けられること間違いなしだ。あの伝説的なサイコパスと手下の相手をしながら、戦闘能力が低下している2人を救出するのは不可能に近い。

思考を凝らしている間に、ヴォルデモートは身体の確認を終えたらしい。彼は手下のアミカスに向かい合った。

「……腕をよこせ、アレクト」

アレクトは半分泣きながら右腕を差し出した。ヴォルデモートが乱雑に服の袖をまくり上げる。セレネはぎょっとした。アレクトの腕には髑髏を象った刺青が彫られていた。黒々とした髑髏の口からは、ちろちろと蛇の舌が動いている。

「戻っているな。全員が、これに気づいたはずだ。そして、いまこそ、わかるのだ……今こそハッキリする！」

ヴォルデモートは長く蒼白い人差し指を、アミカスの腕の印に押し当てた。アミカスは絶叫した。それと同時に、なぜかハリーも悲鳴に近い叫び声をあげる。彼の額の傷が怪しげに光っているように見えた。もしかしたら、なにかと連動して額の傷が相当痛むのかもしれない。

「ポッター、お前は知っているか？ お前は、俺様の父の遺骸の上にいる。マグルの愚か者だった。あの屑は、俺様の家族に相応しくない。思い出すだけで反吐が出る。まあ、使い道はあったわけだが」

ヴォルデモートは満足そうな笑みを浮かべて、アミカスの手を放した。すすり泣くアミカスを一瞥することなく、夜空を見渡した。深紅の目をギラつかせて、星を見据えながら、何かを待っている。

「ああ、来たぞ。俺様の真の家族だ!!」

ヴォルデモートは歓喜に近い声を夜空に響かせる。空から黒い煙の尾を引いて、

長いマントを着込んだ人が何人も現れた。全員がフードを深くかぶり、銀の仮面をつけている。性別も表情も判別できない。ただ、慎重に、そして我が目を疑うように、ゆっくりとヴォルデモートを囲んだ。

だが、輪には所々に切れ目があった。まるで、そこに誰かが現れるのを待っているかのように空いている。ところが、ヴォルデモートは、これ以上誰かが来るとは思っていないみたいだ。彼は仮面をかぶった集団を、ぐるりと見渡す。ヴォルデモートに見られると、集団に震えが奔った。

「よう来た『死喰い人』達よ。13年経った。あれから13年。だが、お前たちは、それが昨日のことにのように、俺様の呼びかけに応えた。つまり、俺様たちはこの『闇の印』の下に結ばれている。それに違いないか？」

ヴォルデモートは憤怒の表情で、死喰い人達を見渡す。空気が更に張りつめたものに変化した。死喰い人達の中に再度、震えが奔った。誰もがヴォルデモートから後ずさりしたそうだったのに、その場に根が生えてしまったかのように後ずさりする者はいない。

「お前たち全員が、無傷で健やかだ。魔力も失われていない。お前たちは、この魔

法使いの一団は、御主人様に永遠の忠誠を誓ったのに、何故その御主人様を助けに来なかった!？」

誰も口を開かない。死喰い人達の中には、まだ微かに震えている人がいた。

「お前たちは、俺様が敗れたと信じたに違いない。だから、俺様の敵の間にスリリと入り込み、無罪を、無知を、そして呪縛されていたことを申し立てたのであろう」ヴォルデモートは全員に向かって囁くように言った。

今なら、逃げられる。彼の関心は黒マントの集団に向けられている。だが、セレネも動くことができない。まるで、静止魔法をかけられたかのように、指先一つ動かすことができないのである。セレネが悪戦苦闘している間にも、ヴォルデモートの話は続いた。

「何故俺様が再び立つとは思わなかったのか？ 俺様がとつくの昔に、死から身を守る手段を講じていたと知っているお前たちが何故!？」生ける魔法使いの誰よりも、俺様の力が強かったとき、その絶大なる力の証を見てきたお前たちが何故!？俺様は失望した。……ああ、失望させられたと告白する。

そうだろう、ええ、マクネア!!」

ヴォルデモートは近くにいた魔法使いの仮面を奪い取る。仮面を取られた魔法使い、マクネアはふらふらとその場に倒れ込んだ。マクネアを皮切りに、ヴォルデモートは次々に手近な死喰い人の仮面をはぎ取っていく。

「もっとましな働きはできなかったのか、クラップ、ゴイル!! なぜ、俺様を探さなかったのだ、エイブリー、ノット! ……お前もだ、ルシウス!」

他の死喰い人たちは仮面を取られると、後悔するように地面に跪く。しかし、ルシウス・マルフォイだけは別だった。彼だけは直立不動の体勢のまま動かない。

「我が君、もし、ちらりとでも噂を聞いていれば——」

「聞いていただろうが。お前は魔法省とのつながりも強い。間違はなく、聞いていただろう。クイディッチワールドカップの時は楽しい同窓会を開いたと聞いたぞ? その力を何故、俺様の搜索に当てなかったのだ」

「我が君、我が君が力を失ってから13年間、世間に見せていたこの顔こそが——偽りの顔だったのです」

ルシウス・マルフォイが絞り出すように声を出す。

辺りが静まり返った。そして、おそろおそろアレクトが声を上げた。

「あの、私はおそぼに——」

「それは恐怖からだ。忠誠心からではない」

ヴォルデモートが即答する。

「ああ、だがしかし、お前たちはよくやってくれた。ワームテールの臆病者が捕らえられたときは焦ったが、代わりにお前の兄が俺様を発見してくれた。俺様が復活できたのは、お前たち兄妹のおかげだ」

ヴォルデモートは慈しむような声色で言いながら、杖を一振りした。するとアレクトの腕の切り口から銀色の腕が出現する。

その様子を見ながら、セレネは唇を噛んだ。

思い出したのだ。アミカスとは、アミカス・カロー。

リドルの館にカロー姉妹を迎えに来た従兄だ。彼はリドルの館を探検し終えた後、様子がおかしかった。きっと、その時にヴォルデモートに対面したのだ。

自分はヴォルデモート復活の一端を担ってしまった。そう思うと、悔しくて悔しくてたまらなかった。

「ここには、六人の死喰い人が欠けている。そのうちの一人、最も忠実なる下僕で

あり続けた者はすでに任務についている。その忠実な下僕はホグワーツにあり、その者の尽力によって、今夜——俺様の復活パーティーに若き友人たちを招待した。もっとも、一名……余計な者もいるが、すでに死体だ。別に構わん」

死喰い人たちの目が、ヴォルデモートからセレネとハリーに向けられる。

「まずはハリー・ポッター。当然、ここに集った誰もが知っておるだろうな、俺様から逃れ、破滅に追い込んだ『生き残った男の子』だ」

ヴォルデモートは語り始めた。

ハリーに「アバダケダブラ」を使ったが、彼の母がかけた「古の護り」のせいで呪いが弾き返され、塵にも等しい状態まで落ちぶれたこと。潜伏していた森に迷い込んだクィレルを使い、賢者の石を手に入れようとしたこと。しかし、それもハリーとセレネによって阻止されてしまったこと。再びアルバニアの森に戻り、つい1年前——ピーター・ペティグリューが助けに現れたということ。前半はピーター、そして後半はカロー兄妹の力を借りて、身体を取り戻すことができた——。

ヴォルデモートは復活までの道のりを懐かしそうに語った。

だが、その眼は油断を許さない。セレネの指がびくりとでも動いたら、磔呪いで

も飛ばしそうな緊迫感があった。

「生き残った男の子。俺様と対峙し、2度も生き残った男の子だ。だが、その伝説もここで終わる。」

『クルーシオ―苦しめ』！

ヴォルデモートは楽しむようにハリーへ呪いをかけた。

ハリーの絶叫が夜の墓地に木霊する。夜空を貫くような悲鳴で、墓地の向こう側に止まっていた鴉が驚いて飛び去るのが見えた。死喰い人たちは何が楽しいのか、忍び笑いをしている。人の苦しむ姿を見て笑うなど、セレネはしない。

もっとも、リータ・スキーターは例外だが。

「見ろ、なんともみっともない悲鳴だ！ この小僧がただの一度でも俺様より強かったなどと考えるのは、なんと愚かしいことだったか。」

はつきり言っておこう。このポッターが我が手を逃れたのは、たんなる幸運だ。いまここで、全員の前でこやつを殺すことで俺様の力を示すでしょう。

生き残ってしまった男の子、ハリー・ポッター。もう助けてくれるママはいないぞ？ それとも、またその女の子に助けてもらうか？」

ヴォルデモートは杖先をセレネに向けた。

「さて、ポッターを殺すのはいつでもできる。次の招待客の話をしましょう。セレネ・ゴント。由緒正しきゴント家の末裔を名乗る者だ」

ヴォルデモートは愉快そうに語った。

「聞いたぞ、蛇語を操ると。そして、直死の魔眼——実に素晴らしい。だが、ゴントの生き残り、つまり、サラザール・スリザリンの最後の末裔は、確かにこの俺様だけだ。マールヴォロは死に、その息子はゴントの名を名乗る資格もない粗野な男だった。娘の方は、この俺様を産んで死んだ。

……当然、お前はそのことを調べていたはずだ。すると、残された可能性は一つ。……お前は自身を俺様の娘だと思ったか？」

「まさか！ ありえません！」

セレネはあからさまに嫌な顔をした。それを見て、ヴォルデモートも頷いた。

「うむ、俺様も現時点で子を作るのは賢明ではないと考えている。無論、若かりし頃に遊ばなかったわけではなかったが、そのときに殺し忘れた赤子だとしても年齢が合わない。

クイレルが殺され、アルバニアの森に戻った時——唯一良かったことは、考える時間が手に入ったことだ。

なぜ、ゴントを名乗る娘がホグワーツにいるのか。そして、思い出した。忘れもしない17年前だ。我が偉大なる祖先が眠る墓地が荒らされたと知らせが入った」
ヴォルデモートは語る。

ハリーも死喰い人も、当事者であるセレネも話に聞き入っていた。

「純血の魔法使いの墓地ともなれば、警備の魔法も厳しく張られている。だが、哀しいことにゴントは没落した一族だった。最後に埋葬されたマールヴォロ・ゴントの墓など、ろくに守護の魔法をかけられていなかった。俺様が見たのは、盗掘されたあとだった。我が祖父、マールヴォロの頭蓋骨が失われていた。

マールヴォロの墓を暴こうなど、俺様に対する挑戦以外の何物でもない。俺様は盗人を探し出した。そして、見つけ出した。

メアリー・スタイン。お前の母親となっている錬金術師だな？」

セレネは心臓を鷲掴みにされた感覚に陥った。

そして、クイールから以前——9月に学校に戻る前、教えてもらったことが蘇

る。

メアリーから赤子を託され、その数時間後に家を訪ねたら鍵がかかってなく、外傷のない男の遺体と母の姿があったと――。

「覚えておるぞ、11月の寂しい夜だ。俺様はお前の家を訪ねたのだ。何体かホームクルスが警備にあたっていたが、俺様の手を煩わせるほどでもない。すべてのホームクルスを殺し、メアリー・スタインを尋問した。磔呪いを幾度か使えば、簡単に口を割ったぞ」

ヴォルデモートの口元が愉悦に歪む。セレネは耳を覆いたなくなった。この話を聞いてはいけない、と頭が警報を鳴らしている。しかし、身体は動かない。力を入れようとしても、指先一つも動かなかった。

「マールヴォロの骨を使って、アダムを創り出そうとした。先祖のヴィクター・フランケンシュタインはイヴから作り出そうとして失敗したので、アダムを創り出そうとしたと。」

ああ、確かに、マールヴォロから創り出された『アダム』は強かった。あくまで、他の雑魚どもに比べたらだが――俺様の前では一撃よ。

だが、あの女はアダムを創り出した後、さらなる完璧な人間を創り出そうとした。アダムでは飽き足らず、ホムンクルスの限界を越えようとしていた」

「ホムンクルスの限界？」

セレネの口から言葉が零れていた。

「ホムンクルスは完璧な人造人間。産み出された時点で完成されている。ありえないです」

「だが、あの女はそれをしようとしたのだ」

ヴォルデモートが笑いだした。

「サラザール・スリザリンの血を引くアダムに相応しい女を探した。スリザリンは東洋の血を引いている。彼女は力量のある東洋人の遺伝子を探し求めた。

そして、日本で見つけた……シキ・リョウギという女だ。ところが、そいつはまだ赤子だった。警備も厳しく、メアリーはリョウギの髪の毛を一本手に入れることで精いっぱいだった。仕方なしに、手に入れた髪の毛から卵子を創り出した。製法は知らん、俺様は造られた生命体になど興味がない。

さあ、ここまで言えば——あとは、分かるだろう？」

セレネは呆然とした。

遺伝子を変質させて卵子を創り出すのは、理論上は可能である。無論、現在のマグルの技術ではできない。だが、この世界には魔法がある。しかも、彼女はホムンクルス鑄造に長けた錬金術師だ。髪の毛から遺伝子情報を読み取り、それを卵子に錬成することくらい可能であろう。

「マールヴォロから創られたホムンクルスの精と東洋の女から創り出された卵子。そう、セレネ・ゴースト。お前はホムンクルスと人間から生み出されたのだ」

「……ありません」

セレネは小さな声で反論する。声を必死で絞り出しながら、ヴォルデモートの解答の抜け道を探そうとする。

「ホムンクルスは……成長しません。ですが、私は成長しています」

「ああそうだ。言い方を変えよう。お前は人間だ。ホムンクルスと人間から生まれた実に奇跡のような存在だ——が、俺様からすれば、ゴーストの名を騙る者よ。

しかし、そいつをどこに隠したのか尋問する直前、アルバス・ダンブルドアが現れた。俺様は撤退を余儀なくされた」

「そんな……」

自分の母親だと思っていた人物は、母ではなかった。

父親はそもそも人造人間であり、母となった人物もセレネのことを知らない。

「俺様は、お前の性能をテストしていたのだ。第一の課題、第二の課題も生き残るようであれば、この墓地に連れてくるように誘導せよとな。いくらゴーストを騙る者とはいえ、お前はスリザリンの末裔として必須の蛇語を完璧に使いこなす。17歳の魔法使いたちと対等以上に戦う魔女だ。」

俺様の元へ来い、セレネ・ゴースト。俺様なら、その魔眼を抑える方法を教えてやれる」

ヴォルデモートが優しく尋ねてきた。否、尋ねてくるという言葉では生易しい。彼は、セレネに命令してくる。自分の配下になれ、と。

セレネは少し揺らいだ。魔眼の力を消すために、賢者の石を創り出そうとした。結果、現時点で生み出されたのはパラケルスス版の魔法の吸収メインの賢者の石だ。フラメルを作り出した完璧なものとは程遠い。この調子では、魔眼殺しが直死を抑えきれなくなったとしても、石は完成しないだろう。

そうなる、ヴォルデモートの提案は非常に魅力的だ。

——セレネはまっすぐ、ヴォルデモートを見上げた。

「お断りします。私、自力で探したいから。」

それに……お前の下に付くなんて、死んでもごめんです」

「……そうか、俺様の提案を断るのか」

ヴォルデモートの顔が不快そうに歪んだ。だが、次の瞬間、再び愉悅の表情を浮かべる。嫌な予感しかない。セレネは身を硬くした。

「偽りの母のように磔呪いをかければ、強情な舌も緩むか？ いや、お前はそんな程度では屈しないだろうよ。

では、こうするとしよう」

ヴォルデモートは杖でリズムを取るように、手のひらを叩き始めた。

「俺様はお前の母を殺し損ねた。だが、お前の母はお前を愛していたか？」

「……なんのことでしょう」

「そのポッターとの違いだ。俺様の母は俺様より父を愛していた。だが、父は母を見捨てた。セレネ・ゴント、お前の両親の間にも愛はない。メアリーから愛は

受けなかっただろう？ あれは、お前のことを作品として見ていた」

「そんなこと、分らないですよ」

「お前と俺様は、そこだけは似ている。忘れているようなら、思い出させてやろう。
『レジリメンス——開心せよ！』」

ヴォルデモートの杖から放たれた閃光が、セレネの胸を直撃した。途端、目の前に広がっていた墓地がぐらぐらと回り、消えていく。切れ切れの映画のように、次々に画面が心を決っていく。

心を見られている。

セレネがそのことに思い至ると、すぐに閉ざそうとした。

普段のセレネであれば——それこそ「闇の魔術に対する防衛術」で服従の呪文に抗ったときのセレネならば、冷静に心を締め出し、侵入者を撃退する呪いを構築することができたはずだ。

しかし、セレネは疲れていた。

蛇のせいで呼吸困難に陥り、縄で強く縛られ、ヴォルデモートの復活劇を目の当

たりにし、いきなり認めたくないような事実を突きつけられたのだ。

自分は純粹な人間ではないと突きつけられ、平静を保てる女の子がいるだろうか？

「いや……やめて!!」

セレネは絶叫する。

セレネの前に風景が広がっていく。

意図的に忘れていた、見ないふりをしてきた記憶が次々と明るみに出てくる。

三歳の時——クイールに連れられて初めて病院に行った。

母が好きだという花——リコリスをプレゼントした。でも、こちらを見てくれな
い。

母はセレネを見ずに、さまざまな人形を並べて話していた。クイールとは何か話
していたが、セレネを認識してくれなかった。

四歳の時、状況は変わらない。

セレネに見向きもせず、人形たちに向かって話している。

『この中で一番優秀な子は誰なのかな？ やっぱり、アダムかしら？ フランも素敵ね。こらこらチャールズ、嫉妬しては駄目よ』

そのとき、セレネは気づいた。

母親は優秀な子を求めている。自分も優秀であることを証明すれば、こちらを見てくれるかもしれない。

「いや、見ないで！ これ以上、見ないで!!」

セレネは叫んだ。

渾身の力で針刺し呪いを放つ。しかし、ヴォルデモートは杖を一振りしただけだった。杖も使わず、詠唱すらもない魔法がヴォルデモートに届くはずもない。ヴォルデモートはセレネの心の奥に突き進んでいく。

5歳の時、初等教育学校に入學した。

誰よりも勉強し、すぐに学年で1位を取った。母に報告に言ったが、その程度

では聞く耳すら持ってくれなかった。人形たちに向かって「きらきら星」を歌っていた。

6歳の時、いつも1位を取っていた。だが、友だちはできなかった。皆からいつも遠巻きにされ、ひそひそと噂話を立てられていた。交友関係を義父が心配し始めていたので、取り巻きを作ることにした。手始めに喧嘩を売ってきた者を返り討ちにし、支配していった。

7歳の時、自分の周りにはたくさん友だちができた。成績は学校で1番良く、イギリスの全国テストでも上位に食い込むようになっていた。

そのことを母に伝えたが、一瞬たりとも自分を見てくれなかった。

「やめてー！！！！」

もちろん、ヴォルデモートは止めてくれない。

そして——あの最悪な記憶がセレネ一杯に広がった。

『ママ、見てよ！ 私、イギリスで1番になったのよ！』

セレネはテストの結果を握りしめ、母の病院へ向かった。

これなら、やっと母は自分を見てくれる。やっと、認めてもらえる。セレネは家に帰らず、まっすぐ病院へ走ったのだ。

ところが、ここで事件が起きた。

白い病院が燃え始めている。

医師たちが患者を逃がしている。誰も、ちっぴけな小娘に構う者などいない。

『火元はどこ!? 調理場?』

『いや、3階だよ。あそこの患者たちの誰かが起こしたんだと思うが、どうやってんだ!? マッチもライターも持たせていないんだぞ!』

『僕たちでは、3階の患者は助けられない。消防を待とう』

3階——それは、メアリーの病室がある階だった。

セレネは震えあがったが、すぐに走り出した。母親は優秀な子を望んでいる。火事から母を助け出せば、きっとイギリスで1位になったことと合わせて、自分を見てくれる。絶対に認めてくれる。

セレネは医師たちの合間を縫い、口をハンカチで塞ぐと走り出した。

煙で目が痛くなった。

視界も悪い。暑くてたまらない。だけど、母を助けるために通い慣れた道を走る。

『ママ、逃げよう！ 火がね、そこまで来てるの！』

しかし、彼女は全く動こうとしない。

いつの日にか渡した赤いリコリスを、赤い世界で眺めている。セレネは母の袖を思いつきり引いた。

「ねえ、ママ。死んじゃうから、逃げようよ!! 私が助けに来たんだから!」

「死んじゃう?」

ここで初めて、母親がセレネを見た。彼女は、薄く微笑んでいた。そのここではない——もっと遠くのどこかを観る様な狂気を帯びた視線に、セレネは震えあがってしまった。咄嗟に、彼女から手を放そうとするが、逆につかまれてしまう。

『じゃあ、一緒に死にましょう——可愛い御嬢さん』

『——っ!!』

セレネは、声にならない悲鳴を上げる。腕を放そうとするが、予想以上に強い力でつかまれていた。むしろ、つかむ力は益々強くなっていった。恐怖に比例する様

に、身体が熱くなっていく。

熱くて、熱くて、死んでしまいそうだ。

セレネは身をよじりながら、母親に懇願した。

誰よりも大事で、誰よりも大切で、誰よりも——自分を見て欲しい人に。

『やめてよ——まだ、まだ、死にたくないよ。一緒に生きようよ——ママ!!』

しかし、返って来た言葉は残酷な現実だった。

『ママって誰？ 早くしないと、例のあの人が私の研究結果を手に入れようとして来る。だから燃やしたのに。死のうとしてしているのに。』

私の邪魔をするなら、ここで貴方も死になさい』

細い指がセレネの首を握りつかむ。

セレネは息ができなかった。もがいても、もがいても指が食い込んでくる。セレネの意識が遠ざかりかけたとき、消防隊員たちがドアを突き破って入って来た。セレネは彼らの手によって救出されたが、母は違った。狂ったように高笑いを上げながら、ここにはいない誰かに叫ぶ。

何を言っているのか分からなかったが、呪詛の類に聞こえた。

彼女は高笑いをしながら業火に包まれ、セレネの目の前で——焼死した。

彼女は一度も、セレネを認めず、愛することもなかった。

「……汚された」

開心術は既に解かれていた。

視界も記憶ではなく、墓地に戻ってきている。

「私の心が……土足で踏みにじられた……」

セレネは半分泣きながら呟いた。

死喰い人たちが笑っている。ヴォルデモートも愉快そうに口角を上げていた。ハリーはこちらを憐れむように見てくる。セドリックの表情は視えなかった。

「哀れな娘、愛されなかった娘よ。我が傘下に入れ。自分を愛さなかった世界に復

讐するのだ」

セレネは何も答えなかった。

ただ、黙ってクラムの杖を取った。そして、自分に向かって呟く。

『『エマンシパレー―解け』』

縄が解けていく。

セレネの身体はずいぶん楽になった。クラムの杖をしまい、足元に転がっていた自分の杖を拾う。

「手始めに、そこにいるポッターを攻撃しろ。お前はポッターのことが憎いのだろう？」

ヴォルデモートが甘く囁いてくる。

セレネは、ハリーが嫌いだ。

自分より格下なのに、ここぞというときは必ず彼が上にいる。

一年生の時に獲得した点数も、秘密の部屋の事件を解決したときに注目を浴びたのも、シリウス・ブラックが無実だと見破ったことも、そして、炎のゴブレットに選出され、代表選手として課題を解決した時も。必ず、セレネの上にはハリーの存

在があつた。

常に上へ行くハリーが憎い。優勝杯の所有権を放棄しようとしたときのハリーが苦手。いまでも、自分を憐れむような目で見てくるハリーが嫌い。支配する関係ではなく、友だちとしてみんなと仲良くしているハリーが羨ましい。

自分にはない物を持っている、ハリー・ポッターが大嫌いだ!!

セレネは杖を掲げた。

「『ステューピファイ―麻痺せよ』!!」

そして、迷うことなく杖先をヴォルデモートに向ける。

しかし、その赤い光線が彼に届くことはなかった。彼は杖を一振りさせると、盾の呪文を構築する。セレネは呪いを畳みかけた。

「『フリペンド―撃て』『ペトリフィカス・トタルス―右になれ』『ステューピファイ―麻痺せよ』!!」

「……決闘の作法がなっていないな、セレネ・ゴースト」
ヴォルデモートが口を開いた。

「決闘とは、まずはお辞儀をするものだ。ダンブルドアは教えなかったか？」

「そんなことを気にするなんて、考えたこともなかったわ」

セレネは微笑みもせず言い放った。

魔眼殺しをしているというのに、墓地内のそこらじゅうに線が奔っている。怒りと悲しみで魔眼の力が一時的に能力が向上しているのかもしれない。

「ええ、確かにハリーは私にない物を持っている。とても、羨ましい！」

杖を振るいながら、ヴォルデモートが放ってくる死の呪いを避けた。

「でも、人の心を土足で踏み荒らす大量殺人鬼の方が、百倍嫌いなんだから!!——

『ヴェンタス——突風よ!!』

セレネは大声で叫ぶと、ヴォルデモートに加勢をしようとしてきた死喰い人を吹き飛ばした。それを皮切りに死喰い人たちが襲いかかってくる。だが、彼らの呪いがセレネに届くことはなかった。

『「プロテゴ・トタラム——万全の護りよ」!』

セドリック・ディゴリーがセレネに防御の魔法をかけたからだ。ハリーはセドリックによって助け出されていた。ハリーは少し痛みが残っているのか足元が若干

ふらついている。

「セドリック・ディゴリー！」

「君の石のおかげだよ、ありがとうセレネ」

セドリックは少しだけ微笑むと、すぐに真剣な顔に戻った。

「まさか、あの人が復活するなんて……信じられない」

「ですが、これは現実です」

「そうだよ、だったら僕も戦わなくちゃ。……正直、怖いけどね」

セドリックは杖を振るった。すると、墓石がラブラドルレトリバーに変身する。ラブラドルレトリバーは死喰い人たちに襲いかかって行った。死喰い人たちは襲い来る犬を失神させようとしたが、呪文が命中するたびに分裂していく。ラブラドルがクラブやゴイルの父と思われる死喰い人たちの尻やズボンに群がり、噛みつき始めていた。

「魔法生物のマタゴを知っているかい？ その特性を変身術に取り入れたのさ、試したのは初めてだけど上手く行って良かった」

セドリックは得意げに笑った。セレネは感心する。さすが、本来の代表選手だ。

セレネは眼鏡を外した。ヴォルデモートに線は見えなかったが、他の死喰い人たちは見える。この原因を思考する暇はない。守りをすり抜けてたどり着いた呪いを切り捨てながら、セレネも負けじと杖を振った。

『サーペンソーティア―蛇よ出ろ！』『あいつらの急所を狙え！』

杖先から生み出された蛇たちに蛇語で指示を飛ばす。死喰い人たちはヴォルデモートと異なり、蛇語を理解しない。蛇が何を命令されたのか分からず、一瞬だけ緊張感が奔る。その隙に蛇たちは死喰い人に襲いかかり、彼らの喉元を狙った。セレネとセドリックの共闘により、死喰い人たちは着実に数を減らしている。あとは、親玉を退治すればなんとかなるだろう。

その親玉――ヴォルデモートの関心は、すでにセレネになかった。彼の視線は、拘束を解かれたハリー・ポッターに向けられている。

ヴォルデモートは激高しながら、ハリー目がけて死の呪いを打ち続けていた。ハリーは墓石の後ろに隠れている。機会を見て救出しようと思ったが、そちらの方へ足を向ければ巨大な蛇が近づいてくる。

「ポッター！ 逃げ隠れするな！！ お前の目から光が消えていく様を見たい、この臆病者が！！」

ヴォルデモートはハリーを挑発する。

すると、ハリーは覚悟を決めたような表情で姿を現した。

『『エクスペリアームズ―武器よ去れ』！』

『『アバダケダブラ』！』

ハリーの杖から出された赤い閃光とヴォルデモートの杖から噴出された緑の閃光がぶつかり合う。

当然、歴戦の闇の魔法使いの方が復活したばかりとはいえ力量が上だ。武装解除の呪文は押し負け始め、じりじりと緑の閃光がハリーに近づいていく。

死喰い人たちも一度、戦いの手を緩めた。

セドリックも死喰い人たちににらみを利かせながら、加勢のタイミングを狙っている。無論、セレネもだ。言葉が通じない巨大な蛇を警戒しながら、ハリーとヴォルデモートの戦いを見守る。偽の賢者の石はもうない。だから、死の閃光がハリーに届く直前に前へ躍り出て、閃光に奔る線を斬るのだ。そうすれば、生き残った男

の子は助かる。

そんなことを考えていると、不思議なことが起きた。

宙でぶつかりあっている閃光が変わったのだ。緑色でもなければ、赤色でもない。濃い金色の糸のように2つの杖を結んでいた。杖同士を繋いだまま、光が1000本あまりに分かれ、ハリーとヴォルデモートの上に高々と弧を描き、2人の周りを縦横に交差している。やがて2人は、金色のドーム型の光の籠ですっぽりと覆われていた。その外側で、死喰い人達が慌てふためいている。ハリーもヴォルデモートも、何が起こったのか分からないらしく、ドーム内部で目を見開いていた。「セレネ、あのドームはなにか知っているかい？」

セドリックが小声で聞いてきた。セレネは黙って首を横に振る。

「いいえ。それより、あのドームが崩れたら——ハリーを救出しましょう。私は、この場からの離脱を提案します」

このまま戦っても勝ち目は薄い。

そもそも「死の呪い」は大量の魔力を必要とする。例えば、ゴイルがセレネに向けて死の呪いを放ったところで痛くもかゆくもないだろう。よくて、せいぜい体調

が少し悪くなる程度だ。

そんな死の呪いを何発も打つことができる。その時点で、ヴォルデモートの強さが計り知れないものであることを物語っていた。一度くらいなら閃光を斬ることができるだろう。しかし、何度も打たれたら——おそらく、さばききれずに死ぬ。

それだけは避けたかった。

「そうだね。まずは撤退し、ダンブルドアに報告することが大切だ」

セドリックも頷いた。

「これは、僕たちだけでどうできる問題ではない。でも、どうやって逃げる？」

「呼び寄せ呪文で優勝杯を持ってきます」

「でも、ここからは距離があるよ。呼び寄せている間に妨害されて終わりだ」

「それは大丈夫です。優勝杯を呼び寄せる作戦があります。私が前を担当するので、あなたは後方の守りをお願いできますか？」

セレネが尋ねると、セドリックは微笑んだ。彼は、セレネの左腕をつかむと小さな声で答えてくれた。

「大丈夫。任せておいて」

不思議な金の籠内部では、なにが起きているのか。

彼らには何かが見えているのか、一点を見つめて愕然としている。いったい、それから何分経ったことだろう。突如、金の光が弾けてヴォルデモートに襲いかかった。ハリーは彼に背を向けて、こちらへ走ってくる。

「ハリー、手を!!」

ハリーの指先が触れる。その瞬間、セレネは彼の手をつかむと走り出した。無論、死喰い人たちがそうはさせまいと前に立ち塞がって来る。セドリックが背後に向かって呪いを飛ばしている声が聞こえてきた。セレネは前だけを見つめる。

まだ優勝杯との距離があった。セレネは前に向かって呪文を飛ばした。

「『ヴェンタス マキシマー突風よ、吹き飛ばせ!』」

風が巻き起こり、死喰い人たちを退ける。セレネは突風は道を作った。

死喰い人たちを蹴散らしながら放たれた突風は、背後に真空状態を発現させる。

そこは、いわば疾風の特異点だ。セレネはハリーの手を握りしめたまま逆巻く突風の中へ躊躇うことなく足を踏み入れ、勢いよく風を蹴った。

「ハリー! 呼び寄せ呪文を!!」

優勝杯への最短距離を走る。だが、それだけでは間に合わない。

風の道走りながら、ハリー・ポッターは叫んだ。

「『アクシオー来い』!!」

優勝杯が浮きあがり、風の道を飛んでくる。青白く輝く取っ手に、ハリーが手を伸ばした。

ヴォルデモートの怒りの声が聞こえてくる。それと同時にセレネはへその裏側辺りが引つ張られていくのを感じた。

突風と色の渦の中を、移動キーはセレネたちを連れ去っていく。

墓地からも、ヴォルデモートからも、遠く——ホグワーツへ。

三人は帰っていく。

地面に足がつく。

セレネは崩れ落ちるように倒れ込んだ。横目で確認すれば、セドリックも、ハ

リーも倒れている。眼鏡をはずしているせいだろう。あちらこちらに奔る線が頭痛を生じさせていた。

頭が痛い。苦しい。気持ちが悪い。

セレネは疲労で動けなかった。本当にホグワーツに戻って来たなら、あの人物が敵だということを言わなければならない。ヴォルデモートが復活したこともだが、それより先に身の内に敵を飼っている状態を伝えなければならなかった。

しかし、ありとあらゆる音が大洪水のように襲いかかってきて気分が悪くなった。船酔いをしたときのように、世界が揺れている感じもする。

「セレネ！ セレネ!!」

二本の腕を感じた。

力強く、抱き寄せてくる。

「ああ、良かった。無事で良かった！」

それは、義父の泣き声だった。

セレネを抱き寄せながら、人目をはばかることなく泣いている。

「迷路から優勝杯と一緒に消えたときは、心配したよ。傷だらけじゃないか、顔色

も悪い！ ああ、でも無事で良かった。君は、僕の大事な娘なんだから……僕より先に死なないでくれ」

「だいじな、むすめ？」

「そうだよ、セレネ。よく頑張ったね、おかえり。優勝、おめでとう」

セレネは義父に力強く抱かれながら、呆然と——敵のことを伝えようという危機感とは別の感情が溢れ出てきた。その感情が何なのか、いままでセレネが感じたことのないものだった。一度だけ、似たような気持ちになったことがあった。まるで何年も前のような気もするが、実際のところたった数時間前——クイールに叩かれたときの気持ちと似ている。

「ねえ、おとうさん。私のこと、愛してる？」

「当たり前じゃないか。何を今さら……さあ、医務室へ。校医の先生はどこかな？」

セレネは、人目をはばかることなく泣きじゃくりたくなった。

だけど、泣く前にすることがある。セレネの視界の端に、ハリーがムーディに連れられて城へと戻っていく姿が飛び込んできたのだ。

「ダンブルドア先生。マクゴナガル先生、スネイプ先生」

セレネは掠れた声で、しかしできるだけハッキリと三人に向かって話しかける。

「ムーディ先生は敵です。あの人、魔法の目で迷路を透視し、クラムに服従の呪文を――」

「なんですって、アラスターが!？」

マクゴナガルは驚いたように声を上げた。

「時間がない。ミネルバ、セブルス、一緒に来てもらえるかの。

ポピー、セドリックとセレネを医務室へ。ポモーナ、会場の生徒たちに説明を」
ダンブルドアは素早く指示を飛ばすと、マクゴナガルたちを連れて一足先に城へ戻ってしまった。セレネとセドリックは校医のマダム・ポンフリーに連れられて医務室へと移った。セドリックも魔力切れで動くのがつらいのか、彼の父親の腕を借りながら歩いている。

「お父さん、あの人を見たんだ。復活したんだよ、墓地で」

セドリックが消え入りそうな声で父親に語っている。父親は完全に当惑していた。

「あの人？ 例のあの人が!? まさか、そんなことは……お前は混乱しているんだ。すぐにダンブルドアに説明を求めないと」

「違う、本当なんだよ……お父さん」

「セレネ、あの人って誰だい？」

クイールが心配そうに尋ねてきた。

セレネは空を見上げながら、その問いに答えなかった。

「お父さん、私——オーストリアに行きたい」

問いの代わりに、他の言葉を投げかける。

「パリもいいけど、やっぱり本場でモーツァルトを聞きたいの。きらきら星が、好きだから」

「ああ、かまわないよ。僕も大好きだ」

クイールが泣きながら笑っている。

セレネは遠くを見つめた。

ヴォルデモートが復活した。

きつと、また戦いを挑んでくる。そのときは、こんな簡単に逃げられるわけがな

い。

そのときまでに、手の内を増やさなければ――。

どこまでも、どこまでも澄み切った夜空を見上げながら、セレネは来るべき戦いに思いを馳せる。

これにて、第四章完結です。

ムーディの思惑は、次話の最初に書く予定です。

とある人物の運命は断ち切られました。

彼らも今後、参戦してくることでしょう。

第四章完結に当たって、活動報告を更新したいと思います。

細かい設定などは、そちらの方へ書くつもりです。

第五章は、みんな大好きガマガエル先生の登場です。

これから、「スリザリンの継承者魔眼の担い手」をお楽しみに!!

不死鳥の騎士団編

57話 14歳の夏

第五章「不死鳥の騎士団」編、スタートです。

オーストリア ウィーン。

音楽が溢れ、芸術と伝統を重んじる街だ。ずっしりと地に根を下ろしたような建物や教会、オペラ座が存在感を示していた。通りにはオープンカフェが至る所に立ち並び、可愛らしいショコラやケーキがウィンドーを彩っている。

夏休み——セレネは義父との約束通り、ウィーンの地を訪れていた。

「オペラが見れなくて残念だったね」

義父のクイールが残念そうに口を開いた。

「まさか、7月は公演がないって……はあ」

「でも、ウィーン・モーツァルト・オーケストラのチケットは手に入りましたよ。それだけで十分です」

セレネは落ち込む義父を励ますように言った。

セレネは義父の前で敬語を止めたいと思っていたが、長年の癖が沁みついてしまったのだろう。なかなか敬語を外すことができず、いまでもこうして余所余所しく話してしまう。

だが、心は少し縮まった気がした。歩く時の距離感も、心なしか近くなった気がする。

「それにしても、凄すぎますね。この宮殿、まるで魔法みたいです！」

セレネは、目の前に広がる宮殿に感嘆の声を漏らした。

オーストリアのハプスブルグ家が誇るシェーンブルン宮殿——さすがユネスコの世界遺産というだけあり、歴史を感じさせる重厚な存在感に圧倒される。ロココ調の室内に、ボヘミアンクリスタルのシャンデリアや金箔を惜しみなく使った装飾品、

亡き夫を惜しむただけに造られた漆の部屋、そして、天井一杯に広がる壮大なフレスコ画——しかし、ここまで贅を尽くしているというのに、どれもこれも嫌味の一つも感じさせない上品な物ばかりだ。眺めているだけで、ため息が出てくる。

「ここで、マリーアントワネットが幼少期を過ごし、モーツァルトが演奏したなんて……」

きつと、その時は2人とも自分の未来を知らなかった。

モーツァルトは名声を勝ち得るも、病と借金で弱りはて、共同墓地に埋葬される。マリーは民を愛していたが、フランス革命に巻き込まれて、最後はギロチンだ。

2人は時折、この美しい宮殿での出来事を思い出したのだろうか。それとも——遙か夢の彼方の出来事として、忘れ去ってしまったのだろうか。

セレネはなんだか悲しい気持ちになって来た。それを見計らったのか、クイールはセレネの肩を叩いた。

「とても歴史を感じるね。……セレネ、外も散策してみようか」

夏の日差しは暑く、緑色の芝生を眩しく照らしていた。

広大な庭園の向こうには、小高い丘があった。ホグワーツにかかる橋の一部のよ

うな建物が、宮殿を見下ろしている。

「あれは、グロリエッテ。ハプスブルグ家のために死んでいった兵士たちを弔うための建物らしいよ」

クイールは観光ガイドを見ながら説明してくれた。

「死んでいった兵士、か」

セレネが建物を見上げながら呟いたときだった。建物の上空に小さな点が浮かび上がった。小さな点はだんだんとこちらに近づいてくる。近くまで近づいてきたとき、それが点ではなくフクロウであることに気づいた。フクロウはセレネの手元に一通の手紙を落とすと、そのまま飛び去ってしまった。一般的な観光客たちはこれを何かの見世物だと思ったのだろう。ざわざわと雑談をしながら、遠巻きながら興味津々にこちらを見ってくる。

当然だ。フクロウが手紙を運んでくるなんて、絶対にありえない。

……魔法界でなければ。

「セレネ、手紙かい？」

「ええ、私宛です。……友だちからですね」

封筒の裏に書かれた名前を一瞥すると、セレネは歩きながら封を切った。そして、そこに書かれた内容に素早く目を通す。

「……友だちが、ウィーンに来ているそうです。会いたいって」

「セレネの友だちがかい？」

義父は目を見開いた。そして、小さな声で囁いてくる。

「その……魔法使いの友だち？」

「ええ。魔法使いというか、魔女ですけど。会ってきていいですか？ オーケス

トラ鑑賞の時間には戻りますから」

義父は少し考え込んでいた。だが、ニッコリ笑って許してくれた。

「いいよ。ゆっくりしてきなさい。僕はその間……そうだな、クリムトの絵でも観に行ってくるよ。セレネはあの絵、少し苦手だろ？」

「ありがとう！」

セレネは義父に抱きつこうとしたが、手を広げたところで気恥ずかしくなった。そのまま思いつき手を振ると、彼に背を向けて走りだした。

普通の家族がどうするのか、セレネにはまだ分からない。

いままでやってこなかった分を取り戻したいと思うのだが、なかなかうまくいかないものである。

セレネは顔を赤らめながら、待ち合わせの場所に急いだ。

オペラ座の外観を横目で見ながら、小走りで目的地のカフェに入る。赤い内装のカフェに入ると、一人だけおかしな人がいた。夏にもかかわらず分厚いコートを纏った女性が、美味しそうにザッハトルテを食べている。女性はとても幸せそうにザッハトルテを賞味していたが、セレネに気付くと物凄く嫌そうな顔になった。まるで、特大なゴキブリでも見つけたような顔だ。もつとも、その反応は想定していた。セレネは気にすることなく彼女の前に座ると、にっこり微笑みかけた。

「お久しぶりですね、リータ・スキーター。元気でしたか？」

「ふん、あんたのせいで散々ざんす!!」

リータは不機嫌な表情のまま、生クリームが乗ったコーヒーを飲み干した。

「あんた、あのグレンジャーと図ったざんすね！」

「それは貴方のへまです。私は何も彼女に言っていないませんよ」

リータ・スキーターは懲りずに学校に潜入しようとしたのだが、ハーマイオニー・グレンジャーに動物もどきであることが露見してしまったのである。

ハーマイオニーと「これから一年間、記事を發表しないこと」という約束を交わしたらしい。彼女もリータ・スキーターの記事の被害者だ。ハーマイオニーは、リータのせいで一部の心無い人たちから「ハリーやクラムといった大物狙いのビッチ」だと思われていた。完全に中傷である。これは、慰謝料を請求していいレベルだ。

「第一、ハーマイオニーとの約束を私たちは破ろうとしているのですから」

ただし、これは口約束だ。

セレネとリータの契約ほど強い拘束力はない。

「大丈夫ですよ？ このせいで、あたしがアズカバンに入れられたら——」

「それはありません。単純なことです。貴方は、これからする表向きインタビューを——そうですね、一年半後あたりに発表すればいいだけです。そうすれば、ハーマイオニーとの約束には引っかかりません。

そもそも、失業中の貴方に旅行費を出したのは……この私ですよ？ その分は

働いてもらわないと困ります」

セレネはリータの目を睨みつける。リータは言葉を詰まらせた。

三校対抗試合の賞金——その大半は、ハリー、セドリック、セレネの同意の元、フレッドとジョージ・ウィズリーの悪戯専門店開業資金として提供された。

しかし、セレネはその際、100ガリオンだけ自分の手元に残して貰えないか交渉したのだ。ハリーたちは快く同意してくれた。金にがめついと思われたかもしれないが、今後の資金のためである。

今回のリータの旅行費は、そこから捻出したものだった。

「さて、そろそろ連れて行ってくれますよね？」

「……分かってるさんすよ」

リータは苦い顔のままザッハトルテを食べ終え、会計を済ませると外に出た。

「そのカメラを掲げておくさんす。顔は——見えづらくした方がいいから、この帽子を被るさんしょ」

リータは路地に入ると、年代もののカメラと古びたベレー帽を押し付けてきた。セレネは帽子を深く被ると、下手したらマグルの博物館に展示されてそうな大きな

カメラを持った。リータはそれを確認すると、セレネの手をつかんできた。カエルの方の手でつかんできたのは、リータなりの嫌がらせに違いない。

「行くぞんすよ。舌を噛まないように注意するぞんしょ！」

移動キーと似た感覚がセレネを襲った。お腹が内側から引っ張られたと思った途端、周囲の風景が回転され、急速に消えていく。次にセレネの足が地面に着いたとき、目の前には黒い要塞がそびえたっていた。周囲の風景は、チロル地方らしい雄大な山々と深い緑で覆われている。見上げるばかりの黒い要塞だけが異質だった。

「……本当に行くぞんす？」

「あら、リータ。まさか、貴方が怯えているのですか？ 歴戦の新聞記者なんですよ。それも、人を破滅に追い込んだ最低の記者。それが、たかだか一介の殺人鬼に怯えているなんて」

セレネがくすりと笑うと、リータのプライドに火がついたのだろう。表情を引き締めると、すたすたと要塞に向かって歩き始めた。要塞の入り口には、守衛と思われる魔法使いが二人立っている。

「止まれ、何の用だ」

一人の魔法使いが、厳しい口調で叫んだ。

「あたしは、記者のリータ・スキーター。これは、あたしの専属カメラマン見習いさんす。」

面会の予約をしてあるはずさんすけど」

「面会だと?」

「ええ、アルバス・ダンブルドアの人生を一冊の本にまとめようと考えていまして、その一環で……ここに収監されている人物にインタビューを申し込んださんす。敗れた男から見た、ダンブルドアを知りたくて。監獄長の許可は下りているはずさんすけど」

「……少し待て、確認する」

魔法使いは、要塞——改め、ヌルメンガードの監獄に入って行った。しばらくすると、魔法使いは戻ってきて厳かな顔で告げた。

「確認が取れたが、お前たちが面会する囚人は、いまでもこそ模範囚だが危険極まりない人物だ。内部に入ったら独房に着くまで目隠しさせてもらう。それでもかまわないか?」

「それは……か、かまわないぞんす！」

リータがセレネを伺うように横目で見てきたので、靴を踏んでやった。

主人が見習いカメラマンの機嫌を伺うなんて、絶対にありえないことだ。セレネは少しだけ足取りが震えているリータの後に続いて、監獄の中に足を踏み入れた。監獄の入り口には三角形と丸が重なり合った印と「より大きな善のために」という文字が刻まれている。その文字を見ていると、看守がこちらに杖を向けてきた。

『オブスキューロ―目隠し』

看守はセレネたちの目を塞ぐ。彼らに手を引かれるまま右に行ったり左に行ったり、上へ登ったりと監獄内を動き回る。セレネは最初こそ覚えていたが、次第に自分はどこを歩いているのか分からなくなってしまった。

目隠しを外された時、セレネたちは寂れた独房の前に立っていた。

人の気配は――正直なところまるでしない。

だが、この中に――セレネが今、求めている人物がいる。

そう思うと、セレネの背中に緊張が走った。

「……ここの独房だ。見張りとして私も入る。面会時間は15分だ」

「あら、この囚人は模範囚さんすよね？ あんたがいなくても、問題ないさんす」

「しかしだな——」

「それに、そんな怖い顔の看守が傍にいたのでは、囚人の舌も緩まないさんすよ」
リータは看守の手を握った。ガリオン金貨が10枚、握らされている。看守はにこりとも笑わずに、リータを厳しい表情で睨みつけた。

「15分だけだ。魔法は一切使うな。感知され、記録されるぞ」

看守はそれだけ言うのと、独房を開けた。

リータに続き、セレネが入ると、黙って扉を閉める。

買収成功だ。セレネは細く笑みを浮かべながら、独房を眺めた。窓はあったが黒い石に切れ目が入っているだけで、とてもではないが人一人通れる大きさではない。だが、コガネムシ状態のリータなら出入りすることができるだろう。独房は夏にもかかわらず冷たく、囚人は毛布に包まっていた。骸骨のような姿で、落ちくぼんだ大きな目をこちらに向けてくる。

「話は聞いてるさんすか？ あたしは、リータ・スキーター。ダンブルドアの本を書くため、決闘で負けたあんたにインタビューを——」

「嘘だ」

囚人はリータの説明を遮ると、にたりと笑った。歯がほとんどない。セレネはリータの後ろにいたが、彼女の背中が今にも帰りがついているのを強く感じた。気丈に背筋を伸ばしているが、わずかに足が震えている。

「いや、半分は本当か。だが、本来の目的はそれではないな」

囚人はこちらを見据えたまま、静かに推理をしてくる。

「そうだ、お前ではない。後ろの可愛らしいフロイラインだ。お前が私に用件があるのだろう？ 名前は……ああ、知ってるぞ。お前は、セレネ・ゴーントだ」

「貴方に名前を知られているなんて光栄です」

セレネはリータの前へ進み出た。

「ですが、どうして名前まで？ 未来視が使えると聞いていましたが、名前まで分かるのですか？」

「お前は三校対抗試合の五人目の代表選手だ。日刊預言者新聞に出ていたぞ。その女が書いた記事だ」

囚人は歯のない口で笑いながら、部屋の隅を指さした。

隅には新聞が丁寧に畳まれている。一番上に乗せられた記事の日付は一週間前だった。

「模範囚になると、少しくらいの我儘が許される。私の場合、新聞だ。そうだな……察するところ、お前はヴォルデモートのことで来たな？」

囚人は指を回しながら言い当ててくる。セレネは本心から驚いてしまった。

「さすがですね。あなたは、シャーロック・ホームズですか？」

「ホームズは知らんが、少しばかり推理しただけのことよ。新聞に書いてあることを繋ぎあわせるだけで、ヴォルデモートが復活したことは分かる」

セレネと囚人が微笑みながら話し合っていると、後ろでリータが噴き出す音がした。セレネは、少し振り返ると顔をしかめた。

「どうしましたか、リータ。私の要件は、ヴォルデモートのことだと言っていましたね」

セレネが軽い口調で言ったが、リータはヴォルデモートの名前を聞いただけで跳びあがってしまった。

「まさか……『名前が言ってはいけないあの人』が戻って来たと、本気で言ってい

るさんすか？」

「ええ。私、復活したところを見ましたから。でも、驚きました。新聞には——あー……一度も、その類の話が載っていないと思ったのですけど」

セレネは囚人に語りかける。

日刊預言者新聞は、ヴォルデモートの復活を認めていない。すべては、ダンブルドアが皆に触れ回っている戯言だと。ダンブルドアがついに耄碌したのだと書いてある。そして、ハリー・ポッターも目立ちたがり屋でダンブルドアに賛同して触れ回っている嘘つき少年だと。

セレネとセドリックの名前が載らないのは、単に有名ではないからだ。このときほど、セレネは自分が無名で良かったと思ったことはない。

「アルバス・ダンブルドアが簡単に耄碌するものか」

囚人は静かに答えた。

「イギリス魔法省が、必死にヴォルデモートの復活を隠している。奴らは認めたくないのだろうよ、なにしろ、あやつは今世紀最悪の魔法使いだ。そいつを相手にするのは骨が折れる。これまでの13年間の平和が、すべて消し飛ぶのだからな。」

ましては、魔法省大臣は平和になってから就任した小男だ。ヴォルデモートと戦う決意より、自分の権力にしがみつく男なのだろうよ」

「でしようね。私も同意見です」

セレネは一步、囚人に近づいた。

こんな弱り切った男が、いまから50年ほど前にダンブルドアと決戦を繰り広げた当時最悪の魔法使いだとは思えなかった。だが、彼の語り口と頭脳は健在だ。セレネは床に膝をつくとき、囚人と視線を合わせた。

彼の目の奥には、まだ光が見える。

まだ、死んでいない。見た目より、ずっと健在だ。

「単刀直入に言います。ゲラート・グリンドエルバルド」

セレネは心から彼に微笑みかける。

イギリスを除く欧州を恐怖に陥れた、最悪な魔法使いの成れの果てに向かって。

「私と契約して、助言者になってくれませんか？」

「……お嬢さん、何を言ったか分かっているのか？」

グリンドエルバルドの口元は笑っていたが、目は笑っていない。

「私と契約すると？ 助言者として？ それは、アルバス・ダンブルドアの指示か？」

「いいえ、私の独断です」

セレネは鞆から一枚の用紙を取り出した。

「私、ヴォルデモートが嫌いです。大嫌いです。大量殺人鬼のサイコパス。人の心にずかずかと土足で踏み込んできて、自分の最も嫌な過去を嘲笑う。反吐が出る。マグルだって殺す。たぶん、私の大切な人も……そんなこと、絶対に許さない。これ以上、あいつに髪の毛一本たりとも許してたまるものか。」

私は、この手で——あのサイコパスを懲らしめたい」

「……それで？」

「ですが、私——あまり闇の魔術に明るくありません。正直、あのヴォルデモートのすることやしたいことについて想像を膨らませるだけで反吐が出ますし、それが果たして正解しているかどうか、自分で判断することができません。」

そこで、私は考えました。『敵と対峙するためには、まずは敵を知る』

偽ムーディが闇の魔術に関する本を渡したとき、教えてくれた言葉だった。

偽ムーディの魂胆としては、「直死の魔眼は敵に回すと大変危険だから、使わせないうようにする」という名目で魔眼を使い続ける危険性を教えてくれたが、それと同じに、いくつか面白い本を紹介してくれた。彼としては「いまから下手に新しい難易度の高い魔法に手を出して、使えないまま自滅すればいい」という気持ちもあったらしいが、いまになっては真相は闇のままだ。

なにせ、彼は吸魂鬼に魂を抜かれ、いまは何も語ることができないのだから。

「ヴォルデモートと対峙するためには、闇の魔法使いについて知らなければなりません。ですが、その知識があまりにも少ない。特に、ホグワーツの図書室からは……おそらく、ダンブルドアが意図的に闇の魔術に関する本を抜いている。

そのうえ、相手は50年以上も闇の魔術の研究に明け暮れた男。そんな相手に、たった数年身に着けた程度の知識で立ち向かうなんて——控えめに言っても無謀です。

だから、私は最悪の魔法使いと恐れられた貴方を助言者にしたい。

欧州に悲劇をもたらし、いまだに一部からは恐れられている貴方を。……私が、

ヴォルデモートを倒すために！」

セレネはグリンデルバルドの目の前に用紙を掲げた。すでに、自分の名前はサインしてある。

「契約書です。

やることは簡単。貴方は、私に助言をする。命の限り、私を助ける。私の命令に背かない。それだけです」

「……それは、お前のメリットだ。私のメリットは……ああ、これか」

グリンデルバルドは用紙を読み込んだ。

リータが忙しなく時計を気にしている。彼女はセレネの耳元で「あと5分ぞんすよ」と囁いた。早くこの時間が終わって欲しいような口調である。グリンデルバルドは少し顔を上げ、リータを見据えた。

「私は過去、ダンブルドアと兄弟のように過ごした」

「それ、本当ぞんすっ!？」

その瞬間、リータの目付きが変わった。まるで、骸骨のように老いた男を巨大なダイヤモンドのように見つめている。

「いつざんすか!? そのあたり、詳しく聞きたいざんす!!」

「それは、次の面会でだ」

「……ということは、受け入れてくださると?」

セレネが静かに聞くと、グリンデルバルドの目が光った。

「この契約、破るとどうなる?」

「ご安心を。この紙には呪いが染み込ませてあります。原初のルーンの効果で、破った者はカエルになります。その効果は……こちらの女が身をもって証明していますよ」

セレネはリータのコートの下に隠されたカエルの腕を一瞥した。グリンデルバルドもその腕を横目で見ると、再びセレネと視線を合わせた。

「フロイライン、若き娘よ。お前は、ホグワーツどころか魔法界の掟を破ることになるが……怖気づいて引き返すなら、今のうちだぞ?」

「覚悟の上です。それに——知らなければならないだけの話ですから」

セレネがまっすぐ答えると、グリンデルバルドは面白そうに笑った。

「……いい目だ。新聞よりもいい目をしている。おい、その記者。ペンを貸して

くれ。私は老体だが、この酔狂な娘に付き合おう」

グリンデルバルドは契約書にサインをした。

最後の一文字を書き終えると、契約書が青白く光り輝く。互いに何かで縛られたような感覚がしたが、それもすぐに解かれ、契約書は一枚の紙になっていた。

「契約は受理しました。よろしくお願いします、助言者」

セレネはグリンデルバルドに手を差し伸べる。グリンデルバルドも骨だけの手で握り返してくる。その力はほとんどなかった。おそらく、持ってあと数年の命だろう。

「それで、今か？　今、そこに書いてあることをするのか？」

「いえ、準備が整っていません。私が学校に戻ってから——この女を使って、やりとりしましょう。いいですよ、リータ」

「ええ、いいですよ！　そんなことより、ダンブルドアとの関係を——っ！」

「時間だ、15分経ったぞ」

看守が扉を開けてくる。

セレネはグリンデルバルドから少し距離を置いた。リータがとても悔しそうに顔

を歪めている。

「リータ先輩、出ましよう。時間ですから」

セレネは見習いカメラマンの仮面をかぶると、グリンデルバルドに背を向けようとする。

「小娘、この夏の間にはポッターと会え」

グリンデルバルドが小さな声で、最初の助言をする。セレネは振り返って、彼の目を見た。改めてみると、彼がオッドアイだということに気づく。片方の目が黒、もう片方の目は青白く光っている。

「……ハリーにですか？」

「鬱々としているはずだ。ここで恩を売れば、あとあとになって返って来る。ポッターに会って何をするかは……まあ、お前なら分かるはずだ。ポッターとはそれなりに近しいのだろうか？」

その後は言葉を交わすことができなかった。看守が外に出るように急ぎ立てたからだ。

リータは名残惜しそうに、セレネも後ろ髪を引かれる思いで独房から出た。

「……さてと、手紙を書かなくちゃ」

セレネが頼むと、リータは苦虫を噛み潰したような顔をした。だが、やがて観念したように息を吐く。

「ハリーにざんすか？」

「さあ、誰にでしょう。とりあえず、リータ。あなたはしばらく連絡係をお願いしますね」

セレネが頼むと、リータは苦虫を噛み潰しような顔をした。だが、やがて観念したように息を吐く。

「まあ、仕方ないざんす。あたしもいろいろ調べたいことができたし」

「その本、完成したら一番に読ませてくださいね」

「難癖をつけるつもりざんすか？」

「まさか。個人的な興味です」

セレネはリータほどではないが、グリンデルバルドがダンブルドアと兄弟のように過ごした事実には驚いていた。片や世紀の大悪人、もう片方は清廉潔白の大賢者

だ。まったく正反対で接点もなさそうな二人組である。

この二人がどうして兄弟のように暮らしていたのか、そして、どこで道を違えてしまったのか。セレネにも興味があつた。

「題名は『アルバス・ダンブルドアの真っ赤な人生』はどうです？」

「いいざんすね。でも、『真っ白な人生と真っ赤な嘘』の方がもっと良さそうざんす」

「確かに。その方が、手に取る人も多そうですね」

セレネとリータは、いつになく会話に華を咲かせながら監獄——ヌルメンガードを後にした。

※

数日後。

プリベット通りに一羽のフクロウが舞い降りた。

ダーズリー家の庭の茂みに隠れ、マグルのニュースに耳を傍立てている少年——

ハリー・ポッターの元にだ。フクロウはこっそり隠れるハリーの頭の上に手紙を落とし、そのまま空高くへ飛び去って行く。

ハリーは歓喜した。

なにしろ、夏休みになってから3週間——誰もろくに魔法界の情報をくれなかったのだ。

ヴォルデモートが復活したというのに、日刊預言者新聞ではそのことを一切報じない。

マグルのニュースでも、ヴォルデモートの仕業と思われる謎の失踪やら殺人事件は一切流れていなかった。

親友のロン・ウィーズリーとハーマイオニー・グレンジャーは夏が始まってから一緒に過ごしているというのに、ハリーには『もうすぐ迎えに行けるわ。私たち、なにも話せないけど忙しくしているの』という手紙一通だけだ。いつ迎えに来るかも書いておらず、おそらく二人して忙しいながらも楽しく過ごしているのだろう。そう思うと、ダーズリーの家に縛り付けられた自分が惨めで、無性に腹が立っていた。

唯一、名付け親のシリウス・ブラックだけが『いろいろ不安だと思うが、無茶するなよ』という短い手紙をくれた。下手に希望を持たせず、ハリーを励ます一行の手紙。アズカバンから脱獄し、またも捕まるもヒップグリフにまたがって逃走した男が「無茶するな」と言われるなんて……それが一番マシな手紙だということも、ハリーの心を複雑にさせた。

そんな時だったのだ。

日刊預言者新聞でもなく、ホグワーツのフクロウでもない。

ハリーは期待に心が躍った。

おそらく、ロンから「隠れ穴に逃げてこい」という誘いの手紙だ。ようやく来たのだ、と思いながら封筒を裏返したとき、ハリーは少しだけ落胆した。

差出人は、ロン・ウィーズリーではなかった。

セレネ・ゴースト——ヴォルデモートの復活を見届け、一緒に逃げて帰って来た少女からだ。彼女からの手紙など、いままで一度もなかった。ハリーは首をひねりながら、こっそり庭を抜け出すと、自分の部屋に戻った。

どのような内容であったとしても、手紙をダーズリーに奪われて捨てられること

だけは避けたい。

「セレネが僕に何の用だろう？」

ハリーは封筒を開けると、数枚の金銭が出てきた。

ガリオンやクヌートといった魔法界の通貨ではなく、マグルの紙幣が数枚入っている。セレネはいったい何を考えているのだろうかとうと頭を悩ませていると、折り畳まれた紙幣の間に白い紙が二枚挟まっていることに気づいた。

一枚はロンドンの地下鉄の地図、そしてもう一枚は手紙だった。

『いま、貴方は辛いと思う。いろいろ話したいことがあります。お土産も渡したいです。』

8月2日10時。駅前のホームズ像の前で待っています。持ち金がなかったら、同封した紙幣を使ってください。それでは、当日を楽しみにしています』

たったそれだけだった。

だが、ハリーの心は夏休みに入ってから一番晴れやかだった。

今の状況を同情してくれただけでも心が救われたが、話ができるという文字を読み、思わずガッツポーズをしてしまった。この際、セレネでも構わない。魔

法界と通じる人間から、現在の状況を共有したかった。新聞にはろくなことが書いていない。マグルのニュースもインコが水上スキーを成功させたとかくだらないものばかり。

セレネとなら、少しは自分の知らない情報を教えてくれるだろう。

ロンたちが忙しくて教えてくれない情報を。

「でも、ホームズ像って……どこだろう？」

ハリーは考え込んだ。

シャーロック・ホームズがイギリスを代表する有名小説だということは知っている。だが、その像が立っている場所を知っているほどマニアではない。もし、マグルの学校に通っていれば教科書やなかで読んで知ったかもしれない。だが、ハリーは11歳からほとんど魔法界で暮らしているのだ。ホームズシリーズやナルニア国物語など名前こそ知っている小説はあったが、その内容まで詳しく読む前に魔法界で暮らし始めていたのである。

「そんなこと知ってるのは、ハーマイオニーかセレネくらいだよ。セレネって、意地悪だな……ん？」

よく目を凝らしてみると、紙の一番下に小さく文字が書いてあった。

『『ホームズ像があるのは、ホームズが住んでいた通り』って、それも分からないよ！』

ハリーは身体をベッドに投げ出した。

どうして、セレネはこんななぞなぞめいた待ち合わせの仕方をするのだろう。もつとストリートに「キングクロス駅の前」とか「大英博物館の入り口」とか指定してくれたらいいのに。それとも、セレネなりに分かりやすく伝えたつもりなのだろうか。

「だいたい、僕はホームズなんて一度も……いや、待てよ」

ハリーは跳び起きると、急いでトランクを漁った。バーノン叔父さんお下りの靴下たちの下をかき分けていくと、その下から一冊の本が出てくる。

シャーロック・ホームズシリーズの長編作品「バスカヴィル家の犬」だ。

3年生の時だ。ハリーがクイディッチの試合中に吸魂鬼に襲われ入院した際、セレネは見舞いに来てくれたのである。彼女はハリーが死神犬グリムを怖がっていることを知ると、どこか呆れ気味に「入院中は暇だから読みなさい。なにごとに、

トリックはある」とこの本を渡してくれたのだ。

事実、バスカヴィル家に現れた巨大な黒い犬が近所に住まう男のトリックだったように、ハリーが死神犬だと思っていた犬はシリウスの変身した姿だったというトリックがあった。

だが、それ以降は本を読み返すこともなく、ましてはセレネに本を返すことすら忘れ、ずっとトランクに入れっぱなしになっていた。

「この本に、ホームズが住んでいる場所が書いてあったかも」

ハリーは久しぶりに本をめくり始めた。

すべては8月2日に、新しい情報を手に入れるために――。

58話 オックスフォード・ストリート

オックスフォード・ストリート。

ヨーロッパで最も人通りの多い繁華街には、もちろんアメリカ合衆国発の赤地に黄色のアルファベットが特徴的なファーストフード店も存在している。

セレネとハリーは、世界で最も有名なファーストフード店の席についていた。

夏休みということもあり、周囲はセレネたちのような学生同士や親子連れ、外国人などが談笑している。セレネは周りの客を横目で見ながらシェイクを飲んだ。

「その、セレネ。ごめんね、僕——マグルのお金がなくて」

セレネの前に腰を下ろしている少年——ハリー・ポッターが申し訳なさそうに口を開く。

「このハンバーガーも、切符代も。それに、この服だって……」

「別に気にしていません。そもそも、あんな服装の人と一緒に歩きたくありませんから」

セレネは、ベイカーストリート駅に現れたハリーの服装を思い出した。

一応、セレネはそれなりに服装を整えてきた。白いシャツに薄手の赤いジャケット、短パンスタイルのジーンズに夏らしいサンダル。——大都会ロンドンで友だちと遊ぶには素っ気なく、おそらくミリセント・ブルストロードがいたら『あんた、平均点ギリギリよ!』と叫ばれてしまうかもしれない服装だが、それでもハリーに比べたら遥かにマシだった。

朝10時、セレネがヘッドフォンで音楽を聴きながらホームズ像の前で待っていると、非常にみすばらしい姿のハリーが近づいてきたのである。汚いボロボロのジーンズ、だぶだぶで色褪せたシャツ、おまけに底が剥がれかけたスニーカー。

これには、さすがに頭を抱えた。自分が平均点なら、ハリーは確実に赤点である。そして、ハリーが

『セレネ、もっと分かりやすい場所を指定してよ!』

と怒り出す前に、セレネは彼の手をつかみ

『まず、服を買いに行きましょう。話はその後です』

と、強引に地下鉄の駅内に戻った。そのままオックスフォード・ストリートに移動すると、やや大衆向けの衣料品店に入り、ハリーの服を見繕ったのである。少し

痛い出費だが、あんな格好の人と歩きたくない。なにより、あまりにも場違いな服装は人の目を集めてしまう。

セレネはハリーにありふれたシャツとズボン、靴も適当なものを試着させ、そのまま会計した。安物とはいえ、それなりの出費である。義父からお小遣いをもらっているとはいえ、今後の計画のためには切り詰めていかねばならないのに――。

セレネは表面上は平然を装っていたが、内心は少しだけ落ち込んでいた。

「……それに、誘ったのは私ですし」

シェイクを置き、ポテトをつまみながら答える。

「まあ、どちらにせよ、あの場所を移動しないといけませんでしたから。服を買いに行くのは、いい口実でした」

「どうして？ ベイカー街は駄目だったなら、最初からここを指定してくれれば良かったのに」

「ハリー……」

セレネはもう一度、眼鏡をずらして周囲の状態を確認すると、少し声を潜めて囁いた。

「あなた、つけられてましたよ」

「えっ!？」

ハリーはポテトに伸ばしかけていた手を引っ込め、目を丸くさせた。

「僕が？ いつから？」

「最初からです。ホームズ像の前に現れたときから。たぶん……あれは、透明マントですね。線がなにもないはずの空間に集中していましたし、時折ちらりと足元が見えましたから」

「線？」

「気にしないでください。それに、尾行のことは想定範囲内です」

セレネはポテトで手についた塩を手拭きで拭きながら言った。

「ふくろうが傍受される可能性も考えて、あんな回りくどい書き方をしました。普通の魔法使いは、ホームズを知りませんから」

ダフネもセレネが薦める前で知らなかったし、あのグリンデルバルドですらホームズを知らなかった。

ハリーも知らないかもしれないと思ったが、彼には3年生の時に「バスカヴィ

ル家の犬」を渡している。たとえ読んでいなかったとしても、あの本を頼りにベイカーストリートまで辿り着けるはずだと考えていた。

「でも、誰がつけていたんだろう？ 死喰い人？」

「可能性としてはありえますね。考えられる3パターンの内の1つです」

セレネは指を三本立てた。

「1つ目は、あなたの言った通り、死喰い人。つまり、貴方の命を狙った者でしょう。」

2つ目は、ダンブルドアの配下。これは、死喰い人から貴方を守るために派遣されていたのでしょうか。

そして、3つ目は魔法省」

「魔法省？」

ハリーは少し眉間に皺を寄せる。

「どうして、魔法省が僕の後をつけるの？」

「……貴方を陥れるためですね。でも、安心してください。どの勢力にせよ、すでに撒きましたから。人を隠すなら人の中です」

セレネたちは溢れる人ごみの流れに乗り、姿を消すように衣料品店に入った。そもそも、この通りで透明マントを着て歩くことなど困難だし、かといって尾行している以上、きらびやかなローブに帽子といった魔法使い丸出しの服装を晒すわけにはいかない。一発でこちらに正体が露見してしまう。

衣料品店を出た後、セレネは周囲に注意しながらファーストフード店に入ったが、透明マントの尾行者は見当たらなかった。

「いや、撒けたのは良かったけど、そうじゃなくて！ 僕が聞きたいのは、どうして魔法省が陥れようとしてくるのかってことだよ。だって、魔法省は味方じゃないか？」

「ハリー、理由は簡単です。大臣がヴォルデモートの復活を認めたくないからですよ」

セレネがそう言うと、ハリーはこちらに少し身を乗り出してきた。

「ありえない。だって、もうヴォルデモートは復活しているんだ！ 僕たち、見たじゃないか！」

「ええ、そうですね。しかし、大臣自身は見えていません」

「ダンブルドアは信じてるのに？ ファッジはダンブルドアの意見を聞きながら政治をしているって、僕は聞いたことがあるよ」

「その時代は終わったのです」

セレネは鞆の中から最新の預言者新聞を出した。

「これ、読みましたか？」

「読んでるよ。でも、ヴォルデモートが復活したことがどこにも書いていない。だって、あいつが復活したら一面だろう？」

ハリーはちょっと怒ったような口調で言った。セレネはその態度で納得する。おそらく、彼は一面しか読んでいない。それも、ざっと目を通しただけで内容まで咀嚼していないのだろう。セレネは新聞をめくり、適当な三面記事を広げて見せた。ドラゴン使いがノルウェー・リッジバッグの輸送中に怪我をしたという記事だ。当然、ヴォルデモートとは全く関係がない。

「この記事の最後、読んでくださいね。『この人の額に傷が残らないように願いたいものだ。そうしないと、次に我々はこの人を拝めと言われかねない』」

「ちょっと待って。額に傷って、僕のこと!? 僕、誰にも拝んで欲しくない!!」

ハリーが熱くなって喋り始めた。

「だいたい、この傷は好きで付けたわけじゃない！ 頼んでつけてもらったわけじゃない！ ヴォルデモートが、僕の父さんと母さんを殺したんだ！ そのせいで出来た傷なのに——!!」

「ハリー、落ち着いてください」

セレネはハリーを手で制した。彼の声が大きくなり始め、周りに座る数人がこちらを横目で見ている。カプルの痴話喧嘩か何かと思われるかもしれない。隣の席に座っているご婦人なんて、完全に固まってこちらに耳を傍立てている。ソフトクリームが垂れていることにも気づいていないようだ。彼女の服装は普通の婦人服だ。最近出回り始めた携帯電話を持っていることから察するに、完全に噂好きのマグルだろう。

だが、セレネは念のために少しだけ声を潜めた。

「それは分かっています。貴方が本当のことを言っていることも。貴方の意見が正論ですし、この新聞が狂っています。」

政府の圧力で、新聞はハリーが思い込みの激しい目立ちたがり屋だという中傷記

事を書いているのです。同じく、蛇男の復活も『ダンプルドアの妄言』と書かれています。

大臣は、サイコパスの復活を頑なに認めたくないのですよ」

「でも——」

「大臣は、歴史に名前を残すのが嫌なんです。『あの人の復活を止められなかった無能な大臣』とね。マグルの歴史にもありますよね？ 『戦争を止められなかった愚かな総理大臣』とか『泥沼の戦争を押し進めた政府』とか。

14年間、この世界は平和でした。それを一気に崩す大事件に、大臣は正面から取り組む覚悟がないのでしょう」

「それは、そうかもしれないけど……」

ハリーは不満を溜め込んだような顔になった。

まだいまいち、納得しきれていないのだろう。

「だからといって、おかしいよ。だって、ヴォルデモートは復活しているじゃないか」

「そうですね、問題の先送りです」

「その間にも、ヴォルデモートは悪さをしているのに？　そもそも、いまヴォルデモートは何をしているんだ？」

ハリーが怒りながらも、どこか期待に満ちた目でこちらを見つめてくる。

セレネは小さく肩をすくめた。

「ハリー、私は万能ではありません。私の目は未来視や千里眼ではないのです。……まあ、ある程度のことは予想できますけど」

セレネは、新聞を鞆にしまいながら言葉を続けた。もう隣の婦人の興味はとっくに逸れたのか、同行者とおしゃべりに華を咲かせていた。内容は、ハロッズに最近オーブンした一流ブランドのブティックについて。確かに、魔法使いの会話ではない。セレネは安心して、続きを話し始めた。

「ヴォルデモートが表立って活動していない理由、それは2つあると考えられます。」

まず、1つ目は今の状況を長く維持したいから。魔法省大臣たちの注意がハリーやダンブルドアに向けられている間、ヴォルデモートはこっそり活動しやすくなります。その間に裏で勢力を拡大し、魔法省を乗っ取る算段を模索しているのです。

う。

そして、2 つ目は——あくまで推測ですけど、私たちのせいです」

「僕たちのせい？」

「正確に言えば、私とハリー、それからセドリック・ディゴリーですね。あいつは、ハリーを殺しにかかっていました。つまり、復活の証人を作りたくなかった。それが、私たちを生きて帰してしまった。そして、自分の復活が最も知られたくない人物——アルバス・ダンブルドアの元にも届いてしまった」

「もしかして……」

ハリーは息をひそめるような小さな声で言った。

「ヴォルデモートはダンブルドアを恐れているから、活動できない？」

「そういうことです」

セレネは再びシェイクに口をつける。甘いバニラ味が口の中一杯に広がっていった。

「ただ、大っぴらに活動できないというだけで、もちろん裏で活動はしていることでしょう。死喰い人を集めたり、巨人を味方に付けたりといったところですね。……」

ヴォルデモートの件については、とりあえず以上です。

ほら、食べないと冷めちゃいますよ」

セレネはハリーのハンバーガーに視線を向けた。ハリーはぎこちなく笑った。

「……ありがとう、セレネだけだよ。魔法界の情報をくれたのは」

「私だけ？ ハーマイオニーやウィーズリーと連絡は取っていないのですか？」

「それが、なにもくれないんだ。2人は、一緒にいるのに！」

ハリーはハンバーガーを乱暴に齧りついた。まるで、怒りをぶつけるような食べ方である。

「ヴォルデモートのことについて、僕には何も教えてくれないんだよ。2人とも、たぶん今もロンの家にいるのに。そこで、忙しくしてるって……僕の方が、2人よりずっと対処能力があるのにさ。ずっと、ダーズリーの家に居させられて」

ハリーの声はだんだん萎んでいき最後の方の言葉は、まるで呟くようだった。

「ヴォルデモートの復活を目にしたのは、僕なのに。ヴォルデモートと対決したのは、僕なのに」

「自分のしたことを、皆が忘れてしまったような気がするのですね」

「……セレネは分かってくれるんだね」

「立場的には同じですから、私たち」

セレネは、ハリーに対して同情するように言葉をかけた。

「私のもあくまで推測です。手元にある情報を頼りに、導き出しただけにすぎません。魔法省が一貫して否認している以上、誰もこの件に関して教えてくれませんから」

「……セレネの友だちも、手紙をくれないの？」

「ダフネとミリセントからはサマーカードが届きましたけど、あとはさっぱり。まあ、私の友だちの大半は親族に死喰い人がいますからね。いろいろと悩んでいるのでしょう」

セレネが素っ気なく言うと、ハリーは気まずそうな顔になった。

「そうだよね……ごめん。スリザリンはマルフォイみたいに、死喰い人の息子も多いし、セレネの彼氏だってヴォルデモート側だよね」

「ハリー、最後だけ違います。彼氏ではありません」

セレネは即座に否定した。多大なる誤解である。

しかし、ハリーは驚いたように瞬きをした。

「だって、ダンスと一緒に踊っていたし、第二の課題の時も『大切なもの』だったじゃないか」

「他に人がいなかっただけです。あなたとパーバティ・パチルが踊ったことと大差ありませんよ」

セレネは、ストローで残り少なくなったシェイクを掻き混ぜながら呟いた。

正直なところ、あまり親衛隊絡みの話はしたくなかった。ハリーの言う通り、親衛隊はカロー姉妹やノットを始めとして、死喰い人の関係者が中核を担っている。もしかしたら、保護者を通じて自分の出生が彼らに知れ渡ってしまっているかもしれない。そのとき、彼らはどうするのか。親に従い、マルフォイ率いる純血至上主義派閥に移動するのか、それとも、このまま現状を維持するのか。

少なくとも、今後のためにも親衛隊の離散だけは避けたい。そのための策を講じる必要があったが、まだ一手を決めかねている。下手に言葉に表して、今の状況を形にしたくなかった。

「……友だちの話ついでに一つ、シリウス・ブラックは元気ですか？」

セレネは新たな話を振ってみることにした。

「あー、うん。元気だったよ。少なくとも、去年よりずっといい。最後に会ったときは、ホグズミード村にいたよ。どこかは言えないけど洞穴で暮らしていて、たまに協力者のいる酒場から新聞を貰うんだって」

ハリーは少し明るい口調で教えてくれた。やはり、春先に見かけた黒い犬はシリウス・ブラックで間違いなかったらしい。

「私のこと、恨んでましたか？」

「あー……どうだろう」

セレネが尋ねると、ハリーは腕を組んで唸り始めた。

「半分かな。ワームテール……ピーター・ペティグリューの逮捕に貢献したことは感謝しているみたいだったけど。やっぱり、自分で捕まえたかったって言うってし、スリザリン生のセレネを警戒しろって言ってきたし、その——腕のことでは、ちょっと、うーん……」

「腕の件はやり過ぎました。もし、彼と会う機会があれば、代わりに謝ってくれると助かります」

ハリーが言葉を濁していた。きっと、シリウス・ブラックは腕を奪われたことについて、かなり怒っているのだろう。失われた骨を戻すような薬や義手を生やす魔法もあるが、直死の魔眼で切られた場所は死んでしまう。つまり、どんな方法をとっても元通りにすることはできないのだ。

だから、犬状態のシリウス・ブラックは、マグル風の外付け義手をつけていたに違いない。

「ブラックから、かなり恨まれているようですね」

「あー、うん、ちょっとね。でも、シリウスは良い人だよ。僕の父さんの親友だし、僕のことをロンやハーマイオニーより、ずっと分かってくれるし……ヴォルデモートの情報をくれないのは、哀しいけど」

ハリーは肩をすくめると、ハンバーガーの最後の一口を食べきった。

「クイール先生……セレネのお義父さんは元気？」

「元気ですよ。私と一緒にロックを聞いたり、オーストリアに旅行したり、元気に過ごしていますね」

セレネが答えると、ハリーは意外そうに目を丸くした。

「ロック？ セレネが!？」

「……失礼な、ロックくらい聴きますよ」

セレネは少しむすっとした表情で答える。

義父から認められていると知ってから、セレネは彼に歩み寄る努力を重ねてきた。いままで知ろうともしなかった彼の趣味に興味を持ったり、仕事を少しだけ手伝ったりしている。ロックはその一つだった。

「セレネのことだから、『クラシック音楽以外は認めない』って言いそうだって」
「確かに、ワグナーやモーツァルトも好きですけどね。ちょっと古いですけど、最近はいーんを聴きますよ。力強い歌声は素晴らしいですし、ギターもかっこいいです」

セレネは最後のポテトをつまむと、小さく息を吐いた。

「ハリー、あなたはもう少しマグルに興味を持ちなさい。マグルにも、素晴らしい文化があるのですから」

そう言いながら、彼がプライベート通りに戻れるだけの金銭とオーストリア土産のチョコレートを置いた。

「次は、ホグワーツ特急で会いましょう。それでは、ここで失礼します」

「セレネ、ちょっと待って！」

ハリーは立ち上がりかけた自分を呼び止めてきた。

「僕、今日はセレネにいろいろしてもらったけど、なにも返せていないよ！」

「確かにそうですね……」

セレネは少し悩んだふりをしてみせる。まさか、その言葉を待っていたとは思わせないように。セレネは小首を傾げながら指を口元に持ってきた。

「では、こうしましょう。情報の共有です。私が新しいヴォルデモートの情報を手に入れたらハリーに、ハリーが手に入れたら私に伝える。どうでしょう？」

「もちろんだよ、セレネ。でも……それだけでいいの？ 全然、釣り合っていないよ。僕、セレネに教えてもらってばかりだった」

ハリーはまだ戸惑っている。だから、セレネは彼に微笑んでみせた。

「ハリー、『人生という無色の糸には、殺人という緋色の糸が混じっている』」

「え？」

「『探偵の仕事とは、これを解きほぐして、1インチ残さず日の光の下に曝け出す

ことである』。……ホームズの名言です。もちろん、私は探偵ではありません。ですが、いまはヴォルデモートの復活を明るみに出すため、証拠を集める探偵のようなものですね」

とつくに食べ終えたバーガーの紙を丁寧に畳みながら、セレネは言葉を紡いだ。「ハリー、わずかな情報から真実を見つけ出すこと。そして、ヴォルデモートに対応できるための力を身に着けること。それが今後の課題になってきます。

だからこそ、新たな情報の共有は大切なのです」

おそらく、ダンブルドアはセレネに新しい情報をくれない。

闇の魔法使いに似てきている娘に、ダンブルドアがヴォルデモートの情報を開示するとは思えなかった。

しかし、ハリーは違う。ダンブルドアのお気に入りです。ヴォルデモートを三度退けた「生き残った男の子」だ。ダンブルドアが直接情報を開示しなくても、その周りから漏れてくる話があるに違いない。たとえば、シリウス・ブラックあたりから。無論、セレネも自分でヴォルデモートの痕跡を探そうと努力はしている。リータ・スキーターに裏で情報を集めてくるようにと指示も出しているが、さすがは

ヴォルデモート。自分の痕跡をほとんど残していない。

だからこそ、ハリーからの情報提供は非常に貴重なのだ。

魔法界におけるシャーロック・ホームズ——ありとあらゆる事象を見通す頭腦の持ち主、アルバス・ダンブルドアから漏れてくる情報が。

「でも、誰も僕に情報をくれないんだ……」

「今はですよ。きっと、すぐにくれるはずですよ。どんなに遅くても、9月1日までには必ず」

セレネはハリーを励ますように肩を叩いた。

「それとも、貴方とウィーズリー、そしてハーマイオニーの絆はこの程度で壊れてしまうものなのですか？」

「そんなことないよ！」

ハリーは大きな声で言い返す。その直後、目が点になる。きっと、自分が彼らのことを深く信用していたのだと改めて気づいたに違いない。

「それなら、大丈夫ですね。2人とも貴方を除け者にするなんてないに決まっていますよ。それでも、除け者にするようなら——私のところに来なさい。いつでも待つ

てますから」

セレネはそれだけ言うと、彼の返事も待たずにトレイを持って立ち上がる。

伝えることは伝えた。

そして、ハリーから情報提供を受ける約束まで漕ぎついた。いまだに、彼から本を返してもらっていないことから考えるに、その約束も破られてしまう可能性は考えられたが、今回は交通費だけでなく服や食費まで賄ったのだ。一度くらいは見返りを期待してもいいだろう。

「でも、本当にどうしよう」

セレネは店を出ると小さく呟いた。

「……友だち関係って難しいな」

親衛隊のことが頭を横切る。

いまでこそ、親衛隊はスリザリンで一番の派閥だ。二番目のマルフォイたち純血至上主義より数で勝っている。だが、それがひっくり返ってしまったら――

義父が自分を認めてくれている以上、優等生であることにこだわら続ける意味はない。彼は、セレネが優等生でなくても認めてくれるはずだ。

しかし、ここまで来たのだから、最後までこのキャラで通そうという思いはあった。

そうなってくると、この順位の逆転を防ぐことが課題になってくる。

「まあ、なんとかするしかないか」

セレネは覚悟を決めると、オックスフォード・ストリートを歩き始める。

少なくとも、ハリー・ポッターを味方につけることには成功した。あとの話は、ホグワーツ特急ですればいい。

5年生になると、各寮から男女1人ずつ監督生が選出されるのだ。スリザリンの女子は自分に決まっているし、グリフィンドールはハリーとハーマイオニーで間違いない。その時に、続きの話をすればいいだけのことだ。

とりあえず、それだけで今は良い。セレネは帰り道にCDショップに行こうか考えながら、帰路に就くのであった。

だから、セレネは驚いた。

ホグワーツ特急の一番前の特別車両——通称「監督生専用車両」。

グリフィンドールの新しい監督生が、ハリー・ポッターではなく、ロン・ウィー
ズリーだったことに。

次回更新は明日
12月10日になります。

59 話 それは、人間らしく

5年生になると、各寮から男女1人ずつ監督生が選ばれる。

監督生の仕事は、寮の規律を監督すること、1年生が学校に慣れるまで手助けすること、そして、ホグワーツ特急の見回り。だいたいこのくらいだ。

セレネは緑に銀字で「P」と刻まれた監督生バッジを身に着けると、監督生が集められる車両——1番前の特別車両に向かった。

トランクの類は、すでにダフネ・グリーングラスのコンパートメントに置かせてもらっている。

こういうとき、友人がいると実に便利である。

「セレネ、やっぱりバッジを貰ったのね」

車両に入ると、ハーマイオニーが少し嬉しそうな声で迎えてくれた。彼女の胸にもグリフィンドールカラー、つまり赤と金のバッジが輝いている。

「スリザリンでそのバッジを貰うのは、貴方しかないと思っていたのよ」

「大袈裟ですよ、ハーマイオニー」

セレネは謙遜したが、実のところ彼女と同じ考えであった。

学年随一の成績、表向きの生活態度、三校対抗試合に出場し勝ち進んだこと、そのすべてをを考えても、自分以外の誰かが監督生に選出されるなど考えたこともなかった。

まかり間違って、例えばパンジー・パーキンソンが監督生に選出されていようものなら、ダンブルドアと寮監に抗議のフクロウを送っていたことだろう。

「それで、ハリー・ポッターはどこですか？」

「あー……うん、ハリーはね」

「おい、お前。ハリーに何を吹き込んだん!?」

ハーマイオニーが答える前に、怒鳴り声が横から飛んできた。ロン・ウィーズリーだ。彼は赤い髪の毛と同じくらい顔を真っ赤にさせて、こちらを睨んできている。

「ハリーは、お前のことばかり話すんだ。お前の方が僕たちよりずっと気持ちを分かってくれているとか、あの人のことをいろいろ教えてくれたとか!!」

「……そうですか、ハリーがそんなことを……」

そう言いながら、どうしてロン・ウィーズリーが特別車両にいるのか考える。

だが——ここにいる以上、答えは明白だ。彼の胸にもハーマイオニーと同じ新品のバッジが光っている。

つまり、ハリー・ポッターは監督生になれなかった。

これは意外である。ハリーの方がウィーズリーより優れている印象があった。確かにハリーは学校の規則を遵守しているとはいえず、模範生ではなかったが、ウィーズリーも同じである。ではどうして、ウィーズリーが選ばれたのか。正直、ウィーズリーを選出するくらいなら、成績はほとんどで問題を起こしていないディーン・トーマスを選ぶのが筋である。

セレネはダンブルドアの意図が分からなかった。

ただ、ここでのいさかいを起こすのは賢明ではない。セレネは素直に頭を下げた。「申し訳ありません。ですが、心当たりがあまりなくて……確かに、ハリーとは休暇中に会いましたが、ちょっとおしゃべりしただけです。」

もし、ウィーズリーが私とハリーが話すことを嫌うのであれば、もう彼とは話し

ませんけど……」

「ああ、そうして——」

「違うわ、セレネ！ ロンはそこまで言っていないの」

ハーマイオニーがロンの口を塞ぎながら早口で話しかけてくる。

「ただ、自分よりセレネを信用しているみたいだったから拗ねているだけなの。だから、気にしないでいいわ」

「——!? ——!!」

ハーマイオニーは抵抗するロンを連れて、グリフィンドール生が集まる席に進んで行った。

セレネもスリザリン生が集まる席に移動することにした。

途中、レイブンクローの新監督生 パドマ・パチルとアンソニー・ゴールドスタインとすれ違う。アンソニーとは軽く会釈をした。彼はダフネ・グリーングラスの彼氏なのだ。その関係もあり、たまにすれ違って話す程度には仲が良かった。パドマ・パチルも会釈をする。

次にすれ違ったのは、ハッフルパフの新監督生。ハンナ・アボットとアーニー・

マクミランだ。アーニーはセレネのことをいまだに良く思っていないらしい。セレネが近づくと、あからさまに身体を反らした。

「ごめんなさい、ゴントさん」

それに対し、ハンナ・アボットは申し訳なさそうに肩を落とした。

「アーニーは貴方が卑怯な手を使わないと分かっているのだけど、なかなか認められないの」

「ハンナ、それは違う」

こほんと、マクミランが咳払いをした。

「僕は彼女がジャスティンに対し、彼の気持ちを弄ぶようなことを——」

「はいはい、分かったから。ともかく、そういうことなの。大目に見てもらえると嬉しいわ」

「ええ、分かりました」

「ありがとう」

ハンナは嬉しそうに微笑むと、少しだけ耳元に顔を近づけてきた。

「だから、ジャスティンと少し話してあげて。彼、とっても反省しているから」

ハンナ・アボットは口早に言う、マクミランの元に戻って行った。セレネは彼らが話しているのを横目で見ながら、スリザリン生の集まる席に向かう。

「やあ、セレネ」

そこには、ドラコ・マルフォイがいた。

これは、ウィーズリーより理解できる人選である。男子の監督生は、彼かセオドル・ノットだと思っていた。クラブやゴイルが選ばれる事態は天地がひっくり返ってもありえないし、ザビニ・ブレーズは可もなく不可もなくといった成績だ。それに、彼のスリザリン内に対する影響力は、マルフォイやノットの足元にも及ばない。

「僕が選ばれることは当然として、君もポッターのように選ばれないかと思ったよ」
「予想が外れて残念でしたね」

セレネは、彼の隣しか空いていなかったのそこに座る。

ちょうどセレネが席に着いたとき、主席が監督生としての心構えを説明を始めた。それを聞いているふりをしながら、頭の中でこれからすべきことに思いを馳せた。そのうちに、長い話が終わった。監督生はそれぞれ、列車の見回りのために立ち

去っていく。

「そうだ、セレネ。父上から伝言を預かつてる」

セレネも立ち上がりかけたとき、マルフォイが嘲笑うように口を開いた。

『傘下に加わることを、いつでも歓迎する』とね。まったく、半人間の君に何を望んでいるのか分からないよ」

マルフォイは最後のところを強調した。やはり、父親からセレネの出生について聞かされていたのだ。だが、この程度で心を荒げるほど子どもではない。

だから、セレネはにっこりと笑いながら答えた。

「では、お父さまにお伝えくださいね。『私は毛根の死滅した蛇男よりも、ずっと人間だ』と」

その言葉を聞くと、マルフォイの顔がさあっと蒼くなった。

そんなマルフォイを鼻で笑うと、彼を残して見回りに出た。

いまのは、完全にヴォルデモートを敵に回す言い方だが、別に後悔なんてない。そもそも、あいつは敵である。いずれ、この手で滅する相手だ。

もちろん、ヴォルデモートがセレネの大切な人——つまり、義父のクイールを狙

う可能性も考えた。彼を人質にとり、セレネに言うことを聞かせるとか実にありえそうな話である。一応、セレネは護衛としてリータを家に下宿させることにした。

クイールの手前、リータは「罨に嵌められて失業し、家と財産を火事で失い、友人すべてに見捨てられ、セレネのところに転がり込んできた」という設定になっている。後半はほぼ嘘だが、失業したことは本当だ。優しい義父は娘の頼みと必死に懇願してくる魔女を断ることができず、下宿することを許可した。彼女は最低最悪の新聞記者だが、人の本質を見極めることに長けている。万が一、クイールが「服従の呪文」や「錯乱呪文」にかけられていたら真っ先に気付くはずだ。

だから家に居させたのだが——これは早計だったかもしれない。

魔法使いならハッフルパフに組み分けされそうなほど誠実な義父、人を陥れることに情熱を燃やすリータ。正反対の二人が仲良くなれるわけがない。

いつか大喧嘩が勃発するのは、目に見えている。

「他の護衛を探さないと……でも、心当たりはないし」

セレネが呟きながら見回りをしているときだ。

前の車両から一人の少年が歩いてきた。彼はセレネに気付くと立ち止まり、ひど

く難しい表情になる。セレネはそんな彼の挙動を気にすることなく、いつも通り声をかけた。

「こんなにちは、ノット。いい夏休みでしたか？」

「あー……まあまあだ」

ノットは気まずそうに言った。

もしかしたら、彼も父親から自分の出生を聞いているのかもしれない。ついでに言うなら、ヴォルデモートと敵対していることも。

「その、だな。ゴースト、オレは、お前が——」

「親衛隊隊長として、今年最初の仕事を命じます」

彼が何か言おうとしたのを遮り、セレネははっきりと宣言した。

「宴会が終わった後、談話室で初の全体集会を開きます。……もちろん、参加は自由です。貴方も参加しなくても構いません。ただ、呼びかけだけはお願います。そのくらいなら——ヴォルデモートも貴方のお父様もお怒りにならないでしょう」

セレネがヴォルデモートの名を口にする、と、ノットは衝撃を受けたような顔になった。自分の父親が信奉する親玉なのに、その名前に恐怖心を抱いているらし

い。セレネは肩をすくめた。

「話は以上です。活動に参加しなくても構いませんが、この仕事だけは——いままでの縁でお願いしますね」

ノットは何も答えなかった。

しかし、彼はこの仕事を全うしてくれる気がする。父親から真実を聞かされ、内心、セレネのことをどう思っているにしろ、彼は意外と義理堅いところがある。そこを信じての頼みだった。

セレネは彼の隣を通り過ぎ、次の車両に移動する。

ここからが正念場だ。いままで優等生を演じ続けてきた。これから、さらにそこに一味加えなければならぬ。セレネは見回りが終わるまで一切気が抜けなかった。

なにしろ、初めての集会だ。

リータを通じてグリンデルバルドからヒントを貰ったが、彼は詳しく教えてくれなかった。彼曰く「わずかなヒントをもとに、自分で内容を構築してこそ、自分だけの演説になる」らしい。

とてつもなく意地が悪い助言者である。

途中、ハリーたちがいるコンパートメントも通り過ぎたが、恐ろしいまでの悪臭が漂っていたので挨拶は控えることにする。

ハリーと話す機会など、ホグワーツに戻ってしまえばどうにでもなる。

いざとなれば、魔法薬学の時間にスネイプの目を盗んで会話すればいい。もっとも、ハリーは先生に異様なほど目をつけられているので、少し難しいかもしれないが。

「あ、ゴント様っ!!」

セレネがある車両を通り過ぎるとき、嬉しそうな声をかけられた。

親衛隊幹部のウルクハートだ。ラグビー選手のような身体つきからは考えられないほど、朗らかな笑顔を向けてくる。

「監督生に選ばれたんですね。さすがです。おい、ベイジー言った通りだっただろ？」

コンパートメントを覗き込むと、そこには同じく親衛隊幹部のベイジーの姿があった。ウルクハートとは異なり、ベイジーは少し気まずそうに身体を揺らしてい

た。

「ゴースト様、ベイジ―は分かっているんですよ。ゴースト様が言ってるんだから、例のあの人の復活は本当なんだってことが」

「……なるほど、そういうことですか」

おそらく、ベイジ―は迷っている。セレネがヴォルデモートの復活を見たことは、昨年度ホグワーツに在籍していた者なら誰でも知っていた。そして、ヴォルデモートの復活を高らかに語るダンブルドアとハリーが狂人扱いされているということも――。それに、少しでも死喰い人と関わりのある人なら、忠誠心が揺れても不思議ではない。分かっていたことだが、こうして実際に目になると、少し心が寒々とした気持ちになった。

ただ、少なくとも一人――ウルクハートの忠誠心は変わらないようだ。

セレネは彼に微笑みかけると、静かに歩み寄った。

「ウルクハート、貴方に頼みごとがあります」

腰に提げていた巾着袋からとあるものを取り出すと、壊れないように丁寧に手渡しをした。

「これは、貴方にしか頼めない仕事なのです」

※

ノーマン・ウォルパートは不安にさいなまれていた。
彼は、今年からの新入生である。

1 学年上に兄——ナイジェル・ウォルパートがいたが、彼は意地悪をして組み分けの仕方を教えてくれない。学校の怖い話——悪戯好きのポルターガイストは1年生に水をかけることを生きがいに行っていると、怪物や巨大蜘蛛がうようよしているとか——。しまいには『僕はグリフィンドールだったけど、お前はスリザリンドだ』などと悪口を言ってくる。

スリザリンと言えば、良い評判を聞かない。

闇の魔法使いを多く輩出し、純血至上主義の高慢な人たちが集まる寮だ。両親ともに魔法使いだが、両方とも途中でマグル生まれやマグルの血が混じっている。そんな自分には、絶対に向かない。その点、兄が所属するグリフィンドールは騎士道精神にあふれる素晴らしい所である。兄のナイジェルは

『僕はハリー・ポッターの親友と仲が良いから、彼と話したこともあるんだ』と自慢していた。

ハリー・ポッターと言えば、あの人から『生き残った男の子』で代表選手。カッコいい経歴の持ち主である。

そんなハリー・ポッターはダンブルドア校長と一緒に最近、新聞で叩かれている

らしい。母はノーマンが入学することにやや反対していたが、父と兄が「ハリーは狂っていない」と宣言。母はプラットホームで大泣きしながら、ナイジェルとノーマンを見送った。

「僕、スリザリンだったらどうしよう」

ホグワーツ特急が停車した時、同じく新入生の少年にこっそり相談した。

「スリザリンが嫌なの？」

「だって、僕の兄さんはグリフィンドールだし。僕、グリフィンドールに入りたい。だって、ハリー・ポッターがいるから。それに――」

と、ノーマンがここまで言いかけたときだ。

「ほら、だけよ。なに道を塞いでいるんだ？」

後ろから思いっきり押され、ノーマンたちは地面に転がり落ちた。腕は擦り剥けて血が滲んでいる。ノーマンが痛みをこらえて上を向くと、そこには、滑らかなブラチナブロンドの髪と尖った顎をした少年がいた。後ろには大岩みたいな少年二人とパグみたいな顔の少女を引きつれている。

「僕は監督生だ。監督生の道を塞ぐなんて……これは、処罰の対象かもな」

「も、もうしわけありません!!」

ノーマンと新入生は急いで謝った。

初日から処罰になったのでは、たまったものではない。しかし、監督生を名乗った少年はそれで満足しなかった。

「そもそも、いかれたポッターを信じているようじゃ、頭の出来が知れているな。お前なんて、組み分けする以前に退学だよ」

監督生が言うのと、同調するように背後の取り巻きたちも嘲笑う。ノーマンの目は熱くなってきた。ホグワーツはきつと楽しい所だと思っていたのに、こんな意地悪な監督生がいるなんて最悪だ。こんな場所、来なければ良かった。手が震えて、涙が零れ落ちそうになったとき――

「マルフォイ、なにをしているのですか!」

監督生の前に一人の少女が現れた。

黒く艶やかな髪に白い肌が特徴的な少女は、眼鏡越しに監督生を睨みつける。

「見ていましたよ、1年生を蹴り飛ばすなんて……監督生にあるまじき行為です」
身体は小柄だが、凜とした背筋や仕草のせい形容しがたい迫力――東洋の神秘、

雅な印象を受けた。監督生からも威圧的な空気は出ていたが、それが道端の小石に思えてくるほどの存在感を醸し出している。事実、監督生は少女の登場にたじろいでいた。

「お、おいおい、ゴースト。この僕に意見をする気か？ 僕に逆らうと父上が黙っていないぞ？ 父上に言いつけて、お前もポッターみたいにしてやろうか？」

「……親の権力に頼るなんて、他に言い負かす手段は思いつかないのですか。それとも、力の差を理解できないのでしたら……いいでしょう。宴会の後、2分……いえ、1分だけ時間を取ります。その時に決闘をしましょうか。どちらが、より優れているのか、はっきりするでしょう」

少女が杖をちらつかせると、監督生は喉に物が詰まったような声を上げる。そして、「今回は見逃してやる」という震えた捨て台詞を残すと、取り巻き立と一緒に早足で立ち去って行った。

「……まったく、弱い者いじめをするなんて、スリザリンの風上にも置けないわね。あなたたちは、大丈夫ですか？……怪我をしていますね、『エピスキー―癒えよ』」

少女は華麗に杖を振りした。すると、たちまち怪我が治っていく。ノーマンと新入生は消えていく痛みに驚き、目を見合わせた。

「ああいった悪質な監督生はごく一部です。基本的に皆、優しいですよ」

ノーマンは顔を上げ、少女の顔を見つめた。

中性的な顔だった。美少年とも美少女ともとれる非常に整った顔立ちをしている。小さな白い顔に大きな黒い瞳はとても美しく、眼鏡をかけていなければ完璧なのに——と子どもながらに思う。

「初日から泣かないでください。ここは、素晴らしい所ですから。

……それでも、もし嫌なことがあれば、普通の監督生か寮監に言いなさい。きつと、守ってくれるはずですよ」

少女は微笑み、ノーマンと新入生の頭を軽く撫でた。そして彼女はローブを翻すと、友だちの場所へと走り出す。その時、彼女の胸元にスリザリンの寮章が刻まれているのが見えた。

「いい人だったね」

「……うん、かっこいい人だった」

ノーマンたちは互いに頷きながら、城へと渡る船に乗った。

あの人がいるなら、スリザリンも捨てたものではないのかもしれない——と思うながら。

結局、ノーマンは「スリザリン」に配属された。

兄のナイジェルと寮が分かれただけでなく、よりにもよってスリザリンだったが、先程の少女が行儀正しく拍手してくれるのを見つけ、考えを改める。

「あの人、誰？」

宴の途中、近くの先輩に話を振ってみる。

すると、その先輩はぶるりと震えた。

「あの方はセレネ・ゴースト様だ。間違っても指をさすな、粛清されるぞ」

「粛清？」

ノーマンは物騒な単語に、ぽかんと口を開けた。

さつきまで、あの少女は慈母のように優しくかった。彼女に粛清など似合わない。

そう思っていると、先輩はあたりを警戒するように見わたし、小声で囁いてきた。「取り巻きがヤバいんだ。いいか、崇拜するのは自由だが、手を出すのはご法度だぞ」

それだけ言うと、先輩は口を閉ざしてしまった。

結局、彼女について分かったのは、名前と取り巻きがヤバいことだけだった。友だちと談笑しながら食べる姿は絵画になるほど美しく、見惚れるほど綺麗な食べ方をしている。

ずっと見つめていると、セレネ・ゴントと目が合った。セレネはこちらを見返した後、小匙一杯分ほどの口元に微笑を向けてくれる。それだけで十分だった。かっこいい憧れの先輩と目が合い、自分に微笑んでくれた。つい一時間ほど前の気持ちは最低ラインを突破していたが、今では上昇し続けている。

スリザリンに選ばれた自分、万歳だ！

どうして、兄のナイジェルは彼女のことを一言も教えてくれなかったのだろうか。

その後は、ガマガエルのような新任教師のよく分からない話——魔法省がホグ

ワーツをよく思っていないとか、そのような話が挟まったが、それ以後は特に意味が分からないこともなく、宴会はお開きになった。

「1年生、こっちに來い。この僕が直々に寮への道案内をしてやる」

まっさきに口を開いたのは、先程の意地悪な監督生だった。監督生バッジを見せつけるように胸を張りながら立ち上がっている。

「光榮に思うんだな。さあ、こっちだ」

「少し早いですよ、マルフォイ」

しかし、そんな彼に待ったをかける人物がいた。セレネ・ゴーストである。

「まだ立ち上がっていない1年生もいます。全員の準備が整ってから出発する。それは常識です。……もっとも、1年生がこちらの言うことを聞かずに遊び惚けていたなら、話は変わってきますが」

「わ、分かってる。うるさいな、本当に」

監督生は黙り込むと、1年生全員の準備が終わるのを待った。セレネの命令を嫌々ながらも聞き入れていることから考えるに、彼女は意地悪な監督生よりも立場が上なのだろう。

意地悪な監督生とセレネが先頭になり、ノーマンたち1年生を引き連れて進んで行く。大広間を出ると、監督生たちは薄暗い地下に向かって歩き始めていた。周囲には蝋燭の灯りしかなく、正直——足元が見えにくい。

『ルーモス——光よ』。この呪文は覚えておいた方がいいですよ」

セレネは杖を一振りすると、杖先が明るくなった。込められた魔力が多いのか、篝火のように辺り一帯を照らしている。

「このように、暗い地下道を照らす灯りになりますから」

「そんなことまで教えるのか、セレネ」

「あたりまえです。1年生が学校に慣れるようにサポートするのが、私たち監督生の仕事なのですから。」

それに、正直、私も最初はこの道を歩くのが不安でしたし」

セレネは優しく言った。意地悪監督生は驚いたように、あんぐりと口を開けている。ノーマンには分からなかった。優しく可愛らしい先輩なのに、どうして驚くのだろうか。

「……ふ、ふーん。完璧なセレネ様にも、怖いモノがあったんだな」

「マルフォイだって、がくがく震えながら通っていたではありませんか。半分泣いてたことを覚えていますよ」

意地悪監督生は黙り込んだ。

完全に、セレネの方が圧倒している。ホグワーツ特急での態度の違いに、ノーマンはくすりと笑ってしまった。

「ここが僕たち、スリザリンの談話室だ。合言葉は『バジリスク』！」

意地悪監督生がドアに向かって呟くと、鍵が外れる音がした。意地悪監督生はドアを押し開けると、軋むような音が聞こえた。そして、さっさと寮に入って行ってしまう。

「合言葉を忘れると入れなくなってしまうので、気をつけてくださいね」

セレネはドアをくぐる前に立ち止まり、1年生に向かって説明してくれた。

そして、1年生を率いて寮に入っていく。その瞬間だ。世界が割れんばかりの拍手が巻き起こった。寮の談話室を埋め尽くすほどの生徒がいたのだ。最初、ノーマンたち1年生を歓迎しての拍手かと思ったが、違うことにすぐ気づく。彼らの視線は、ノーマンたちではなく、セレネ・ゴーストに向けられていた。

セレネが制するように手を挙げると、拍手はだんだんと小さくなり、消えた。代わりに、不思議な曲が流れていることに気づく。今まで聞いたことのないサウンドだ。歌劇のような曲かと思えば、すぐに転調し、力強いギターがカッコよく鳴り響く。よく見ると、テーブルの上に蓄音機が置かれ、レコードが回っていた。

「まさか、こんなに大勢が集まってくれるとは思いませんでした。まず、そのことに感謝を。」

あと1分、待ってくださいね。まだ、監督生としての仕事が残っていますから」セレネは皆に向かって話すと、くるりと反転し、ノーマンたちと向き合った。

「ごめんなさいね、驚いたと思います。実はこれから集会を開くのですが、もし参加したければどうぞ。でも、疲れて眠い人も多いと思います。その場合、貴方たちのベッドはあちら——右手が女子、左手が男子となっています。そちらへ上がって結構です。」

これは、自由参加なのですから」

セレネは静かに言った。だが、ノーマンの意志は決まっている。

いくら自由参加とはいえ、こんなにたくさん生徒が集まっているのだ。確かに

疲れはあるが、聞かないで後悔したくない。それに、あの素晴らしい監督生が開催する集会なのだ。参加しない方がおかしいとさえ思えた。

ノーマン以外の 1 年生も同じ気持ちだったのか、誰もベッドに上がる子はおらず、最前列に座った。

「おい、セレネ。集会ってなんだ？ 聞いてないぞ!？」

意地悪監督生が声を荒げると、セレネに詰め寄っていく。

「親衛隊の集会です。貴方も参加したければどうぞ」

セレネは意地悪監督生を見ずに言った。意地悪監督生は何か言い返したそうだったが、周りに集った生徒たちの圧に負け、すぐごとベッドの方へ上って行った。「ウルクハート、レコードの準備ありがとう。もう止めていいですよ」

セレネが蓄音機の傍に立つスリザリン生に向かって言った。彼の方が上級生に見えるのに、セレネに対し、顔を赤らめながら嬉しそうに従っている。

いま、この場では——セレネ・ゴーンントが最も頂点に立っていた。

「さて、いまの曲を聞いたことがある人はいいますか？」

誰も手が上がらない。ノーマンも聞いたことのない曲だった。だけど、とにかく

カッコいい曲だった。重厚なサウンドもギターの唸るような音も、力強い歌声も

——そのすべてがカッコいい。

セレネは手が上がることを期待していないように見えた。やっぱりか、と周囲を見渡している。

「では、これがいい曲だと思った人？」

すると、かなりの人数が手を挙げる。ノーマンも他の1年生たちも挙げていた。あれは妖女シスターズには出せないサウンドだ。セレネは、どこからこの名曲を見つけてきたのだろう。

「ありがとう。手を下ろしてください。」

この曲、皆さんが知らなくて当然です。だって、マグルの曲ですから」

ざわめきが群衆に広がった。ノーマンも目をぱちくりさせる。

今のがマグルの曲だったのかという驚きもあるし、純血主義で知られるスリザリオン生がマグルの曲を聞いていたことにも驚いた。

「貴方たちのなかには、やはりマグルとは相いれないという人がいると思います。まあ……それでもかまいません。ある意味、マグルは私たちと同じ人間ですけど、

ちょっと違う人間なのですから」

セレネは集まった人たちに向かって語りかける。

先ほど、ノーマンたちに優しく語りかけたように。

「私たちは魔法族。魔法に目覚めた人間、そしてマグルは目覚めなかった大多数の人間です。もしかしたら、マグルも脳や遺伝子をいじくれば魔法に目覚めるかもしれません……それは別の話なので脇に置いておきましょう」

ここまで聞いた時、ノーマンは少し気持ちが冷めかかった。

要は、セレネも他のスリザリンたちと同じ——マグルやマグル生まれを蔑視するのだと。だが、それにしては、どうしてマグルの歌を聞いていたのか。ノーマンには理解できなかった。

「さて、マグルと魔法族の違いは他になにがあるでしょう？ ああ、先に言っておきますけど、ダンブルドアのように『マグルも魔法族と変わらぬ人間なのだから、仲良くしなさい』と言うつもりはありません。これには、明確な答えがあります」
誰も答えない。

セレネの解答を待つように、辺りはしんと静まり返る。

「マグルは常に進化し続ける。知性と悪意に好奇心、そして向上心が、どこまでもマグルを進化させていくのです」

セレネは静かに、しかしはっきりと断言する。

「マグルには、便利な魔法がありません。マグルが必死に生きようともがいた結果、便利な道具や技術が生まれます。たとえば、このグラス」

セレネの手には、いつの間にか透明なウィンググラスが握られていた。

向こうまで見通せるほど綺麗なグラスだ。ゴブリン製なのだと思ったが、すぐにノーマンは否定した。

この話の流れで見せられたグラス。その作り主は、当然――

「マグル製です。魔法では、一度作ってしまえば複製呪文で何個も同じものを創り出せます。もっとも、時間が立てば消えてしまいますが。」

しかし、マグルはこれを1日に1000個製造します。まったく同じ品質、同じ大きさのグラスを。もちろん、魔法で作り出した物ではないので、永遠に消えることはありません」

セレネはグラスを見せつけるように掲げると、近くのテーブルに置いた。

「ただのグラス一つとっても、技術力や熱意の差が分かったと思います。

そして、マグルとは愚かにも自分に近しい種族を認めぬ生き物です。3年生以上の方は中世の魔女狩りについて習いましたね？ とても怖がりで、すぐに牙を剥けてきます。いま、もし私たちの存在が明るみに出れば——きつと、火あぶりではすまされません。

手作りだったグラスが産業革命を経て、安く大量生産できるようになったのと同じように——武器の歴史も進化しています」

セレネは眼鏡をくいと上げた。天井のシャンデリアの光が反射し、眼鏡を光らせた。彼女の表情は視えない。

「例のあの人——ええ、皆さんは誰のことか分かっているでしょう。先学期末、リトル・ハングルトン村の墓地で復活した大量殺人鬼です。ああ、ミリセント。貴方の悲鳴は分かります。悪に落ちた男の復活を信じたくないのは重々承知です。

ですが、現実から目を背けるような愚か者は、ここにいないと——私は信じています」

ノーマンは隣の子と顔を見合わせた。

今、セレネは新聞で散々「狂っている」と騒がれているハリー・ポッターやダンブルドアと同じことを主張している。それなのに、どうしてこんなすんなり耳に入ってくるのだろうか。

ノーマンはそこが不思議で、ますます真剣に彼女の話に耳を傾けた。

「復活したサイコパスは、いまは息を潜めて裏で活動しています。だから、誰も気づきません。おそらく、一般的な魔法使いがその存在に気付くのは、彼が魔法省を陥落させてからでしょう。その時に、きっとあの毛根なし男はこんな法案を作ります。

『マグル生まれ排除法』。それから『マグル排斥法案』。言い方は大げさですが、内容は皆さんも想像できますね。なにしろ、あいつは純血主義でマグルを憎んでいます。マグル生まれも、マグルの存在も」

セレネは優雅に語りかけてくる。時折、「例のあの人」のことを辛辣に表現しているのは、よほど気に入らないのだろう。

「マグルをすべて殺し尽すまで、あの蛇男は安らげないでしょう。ですが、マグルも馬鹿じゃない。

なにしろ、イギリスにおけるマグルの人口は6千万人。半数も殺す前に、自分たちを脅かす敵の存在に気付きます。そして、自分たちの知恵を振り絞った最大の敵意を向けてくる」

セレネは語った。

空から鉄の鳥に乗って攻めてくることを。

一発で都市を壊滅させる爆弾のことを。

「たぶん、あれは盾の呪文で防ぎきれない。仮に防いだとしても、放射能……目に見えない閃光が身体を蝕み、殺されてしまいます」

セレネは再び全体を見渡した。

「マグルの恐ろしさ、サイコパスの浅はかさが理解できたでしょうか？ ええ、ウルクハート。さすがです。貴方の言う通り、『やられる前にやりかえせばいい』とは、もっともな言葉です。

ですが、それは果たして——本当に良いのでしょうか？」

セレネは一人一人に問いかけてくる。

「マグルの世界には、ここにはない素晴らしいもので溢れています。この曇りのな

いグラスも、ロックも、そして、他にも——」

セレネは杖を一振りした。すると、テーブルの上に置かれていた箱が開かれ、中から美味しそうな細長いチョコレートが姿を現した。

「今年、私はオーストリアに行きました。そこで購入した、王室御用達のチョコレート。極上のチョコレートはうっとりするほど美味しいです。マグルの職人が作った最高の逸品だと思います。」

さて、やられる前にやり返す。確かにできなくはないでしょう。マグルの素晴らしいものがあるなら、それだけを残して後は滅ぼせばいい。なるほど、一理はあります。ただ——そうして、魔法族のために強制的に作られた物が、はたして同じ品質を保っているでしょうか」

セレネは目を伏せる。

「断言しましょう。それは否です。彼らはしもべ妖精ではない。マグルが己の尊厳を捨て、私たちの奴隷に成り果てたとき、その価値は失われる。なぜなら、もうそこには知性も、好奇心も、悪意も、向上心の欠片も存在しないから。」

だから、私たちは姿を隠す。ただ、科学技術の発展により、そろそろそれも難し

くなってきたいることも事実。いずれ、マグルに歩み寄り、怯えさせないように注意しながら、互いに共存していく道を探さねばなりません。

一方的に滅ぼすのではなく」

セレネの声が談話室に木霊する。

それを聞いた時、ノーマンは気づいた。

マグルが新たな技術を開発し、どんどん発展していく。それは、魔法が使えないが故に考えるからだ。

好奇心や向上心を知性や時に悪意を使いながら、脳を振り絞って考える。

それができる魔法族は、きつと——限りなく少ない。

だって、すべて魔法で済んでしまうから。

「最後に、一つ——ここににいる何人かは知っているかもしれませんが、私の出生について話しましょう」

「おい、待て！ ゴーント！」

群衆をかき分けるように、誰かが飛び出してきた。

痩せすぎの少年だ。肩で息をしながら、怒ったようにセレネを睨み付けている。

「お前、それだけはやめろ！ それを口にしたら——!!」

「どうせ、ヴォルデモートが復活したことが知られれば、私の出生もばまかれる。その時になってからでは、たぶん遅い。だから、先に私から開示します。もっとも、あまり広めて欲しくありませんけどね。」

だから、その気持ちだけは受け取っておきます。ありがとうございます、ノット」

セレネは寂しそうに微笑むと、彼の腕を軽く叩く。本当は肩を叩きたかったのかもしれないが、単純に背が足りなかったのかもしれない。ノットと呼ばれた痩せ気味の生徒は、呆然と突っ立っていた。

「父はマールヴォロ・ゴーンの遺骨から創られたホムンクルス。母は東洋人の髪の毛から創られた卵子。」

つまり、ホムンクルスと人間の子、スリザリンの継承者——それが、私です」

ノットは崩れ落ちる。拳を思いつき床に叩きつけているのが見えた。途端、ハチの巣をついたように周囲が騒がしくなった。ノーマンも啞然とする。確かに、人間離れた美しい人だが、まさか人造人間の血が入っているとは思わなかったのだ。

「ですが!!」

セレネは叫んだ。その声で再び静まり返る。ノーマンはちらっと周囲を見渡した。どの顔も不安と驚愕で彩られている。きっと、自分の顔も同じなのだろう。

「私は人間です」

セレネは宣言した。静かに、しかしハッキリと、談話室に透き通った声が響き渡る。

「人間は意志がある生き物、常に進化をし続ける生き物です。」

ホムンクルスのように完璧に創られた存在ではなく、私は成長し続けます。私は、ヴォルデモートのように1つの思想にしがみつき、そのまま停滞しない。今まであった喜びも屈辱も忘れず、すべてを糧にし進み続ける！」

だから人間だ！

セレネは力強く叫ぶ。まるで、自分に言い聞かせるように。いつのまにか、眼鏡の奥の瞳が黒から鮮やかな青へと変わっていた。

「……貴方たちはどうですか？」

セレネは問いかける。

「ヴォルデモートや死喰い人のように、過去の思想に凝り固まり、緩やかに停滞し

ていきますか？

それとも、すべて考えることを止めて、木偶人形のように魔法省や上からの指示に従いますか？」

ノーマンは思った。

どちらを選んでも、それは人間とは呼べない。マグルであれ、魔法族であれ、ホムンクルスと人間の間から生まれた者であれ、自分で常に考えて行動する者こそが人間である。

「私の目的は打倒ヴォルデモート。いまはそれだけです。マグルを考えなしに殺し、マグル生まれも殺し、人の嫌がることばかりしてくる悪辣非道なサイコパスを野放しにできません。もう、あれは人間ではない。思考を止めた、ただの化け物なのです。」

ただ、魔法省はそれを認知していない。だから、とても難しいですけど、彼らの眼を盗んで剣を磨かねばなりません。来るべき戦いに備えるために。

人間として、己の正義のために」

セレネは言葉を紡ぐ。魔法のように聞き入ってしまう言葉を――。

「社会が正しいとは限らない。大衆の意見がすべて正しいとも限らない。

だからこそ、貴方たちは自分が正しいという道を考えなければならない。自分の正義を信じなければいけない。

迷うのは大いに結構。目で見て、耳で聞いて、十分に考え、十分に悩みなさい。そうして生まれた結論が、人間らしい答えです」

そこで、初めて——セレネは笑った。

先ほどまで、ノーマンたち1年生に見せていたような微笑みとは違う。心の底から浮かび上がってきたような笑顔だ。ノーマンは自分の耳が赤くなるのを感じた。「もし、貴方たちの正義が私の考えに賛同するなら——このチョコレートを食べなさい。もちろん、意見が違うのであれば、食べなくても構いません。どうぞ、そのままベッドに向かってください。止めることはしません。それが、貴方たちの結論なのですから」

セレネの声が談話室に消えていく。

誰も動かない。ベッドに向かう者も、誰もいない。

だから、ノーマンは最初に動いた。

たとえ、生まれが半人間で作られた生命体であっても人間と主張する監督生。

とても優しく、自分がいじめられていた時は助けてくれた。スリザリンを少し好きにさせてくれた。

彼女は間違いなく人間だ。いままで、あまり考えずに生きてきた自分よりずっと。たぶん、グリフィンドールの兄よりも。

感謝と畏敬の念を込めて、ノーマンはチョコレートを食べる。

「……ノーマン・ウォルパートね。歓迎します、これからよろしく」

セレネは口元に微笑を浮かべ、迎え入れてくれた。

ノーマンが動いたのを皮切りに、生徒たちが動き出す。ベッドに直行する生徒は少なかった。悩んでいる生徒は、ほばいない。誰もが、決意を固めた顔でチョコレートを頬張る。とある姉妹は泣きながらチョコレートを食べていた。

セレネはチョコレートを食べた人の名前を呼び、迎え入れるように背中を叩く。一人一人、間違えることなく。ノーマンは感心してしまった。

セレネ・ゴースト。

スリザリンの継承者。ノーマンは、きっと、これから1年——否、彼女が卒業するまでずっと、自分の世界は彼女を中心に回るのだと直感する。

これは、考えるのを止めた結果ではない。

考えた末、彼女についていくことを選んだのだ。感謝の念も、畏怖もあるが、彼女の考える未来を見てみたいという気持ちが強かった。

化け物ヴォルデモートを、セレネ・ゴーストと名乗る人間が打ち倒す場面を見てみたい。

なにしろ、どんな化け物も最後には人間によって倒される。

もし、セレネの杖によってヴォルデモートが倒されるのだとすれば——それは、とても人間らしい未来なのだ。

その未来を、いつか見てみたい。

願わくば、セレネの隣で。

そんな強い思いを胸に抱き、ノーマン・ウォルパートはベッドに向かった。

「さて、貴方はどうしますか？」

それぞれ覚悟を決め、己の信念をもとに談話室を去って行ったあと、セレネは一人残った者に話しかける。彼は崩れ落ちたままの姿で固まっていた。

視線は合わない。セレネは彼を見下したまま、小さな声で呟いた。

「……どちらでも構いません。お父様のこともあると思いますし」

「……父上は関係ないだろ。これは、オレが決めることだ」

ここでようやく、一人だけ残った親衛隊隊長——セオドル・ノットが立ち上がる。だが、チョコレートに手を伸ばす気配はない。黙ったまま、寝室の方へ歩き始める。セレネは息を吐いた。

どうやら、彼はヴォルデモート側を選んだらしい。胸に穴が開いたように寂しいが、それも彼の選んだ結論なら仕方ない。

セレネは、わずかに目を伏せた。

「……そうですか。いままでお勤め、ご苦労様でした」

「なに言っただ、この馬鹿」

セレネは顔を上げる。すると、不満そうな顔をした少年がこちらを振り向いていた。

「言っただろ、3年生の時に。一蓮托生だってな」

セレネは予想外の言葉に、思わず目を見開いた。

「勘違いするなよ。思考の停滞とかなんたらじゃない。このオレが決めたことだ。一度決めたことは守るのが、オレの信条なんだよ。」

だから、そんな菓子を食わなくても、最後まで付き合っただけでやる」

それだけ言っていると、ノットは姿を消した。

談話室には、セレネだけが残される。セレネは足元が揺れるのを感じた。倒れる前に、近くのソファァーに座り込む。

「……私って最低ね」

ソファァーに沈みながら、ぽつりと呟いた。

確実に腹心の部下を作り、自分好みに育てるため、いつになく1年生に優しくして回った。

心のどこかで、カロ姉妹やノットたちが自分の傘下に残ると信じていた。カロ姉妹はまだいい。敵対するのは従兄妹だ。しかし、ノットは違う。彼は、たった一人の父親を裏切ろうとしている。セレネは義理堅い彼の性格を逆手に取り、彼に親子喧嘩をしろと焚きつけている。

そして、それを喜んでいる。

彼らが自分のところに残ってくれたことを、深層心理で喜んでいる。

ああ、なんて最低な女なのだろうか。

セレネは今日の行いを胸に刻みながら、クッションを強く抱きしめた。

○ノーマン・ウォルパート

本作オリジナルキャラクター

グリフィン・ドールのナイジェル・ウォルパート（映画のオリジナル）の弟。
スリザリンに組み分けされる。

……不死鳥の騎士団作中に、スリザリンに組み分けされた子が誰も出てこなくて
悲しい。

60 話 ガマガエルと深夜の密会

初の集会から一夜明け、セレネはミリセントやダフネと一緒に朝食をとっていた。彼女たちも集会に参加していたので、自分の出生や思想についても知っている。だが、それに一言も触れることなく、いつも通り接してくれるのが何よりも嬉しく思えた。

「うー、この時間割。嫌だな」

ダフネは時間割を眺めながら、大きく肩を落とした。

「朝一番から『闇の魔術に対する防衛術』。その後は『魔法薬学』で『変身術』。最後が『数占い』だもの。全然気が抜けないよ……」

「あら、最初はお手並み拝見ってところじゃないの？」

ミリセントがオートミールを食べながら、彼女の時間割を覗き込む。

「あの新任教師がどんな授業するか、ちょっと気にならない？　ねえ、セレネもそうでしょ？」

「まあ……ロックハート以下にはならないと思いますけど」

セレネはベীগルを齧りながら苦笑いを浮かべた。

昨年度の偽ムーディ、一昨年のルーピンが良かっただけに、今年の授業は期待薄だということがなんとなく読めてしまう。まず、ヴォルデモートの復活を認めない魔法省から出向して来たという時点で、どんな授業をするか随分怪しい。

そのうえ、教科書が「防衛術の理論」である。

夏休み中に読んでみたが、控えめに言って最低である。この本には防衛術を使用することについて何も書かれていない。防衛術について100ページ以上に渡り説明をしているだけである。

当然、この本を下地に実践訓練があるに違いない。まさか、この本を読むだけなんて授業はありえないし、成り立つわけがない。ましては、今年は大事なOWL試験がある年なのだから。

だから、ロックハートの自著を読み解く授業よりかは良いだろう。

「なにしろ、今年はOWL試験ですから。その対策をしっかりと教えてくれるといいですよね」

「……でも、セレネは対策しなくても合格できそうだね。あーもう、頭が痛い。試験なんて嫌だよ」

ダフネはそう言いながら机に伏した。

5年生になると、普通魔法レベル試験、通称「OWL試験」が実施される。7年生のめっちゃめっちゃ疲れる魔法テスト『NEWT試験』より難易度は低いけど、イギリスのマグルにおける義務教育修了試験に該当する。もっとも、義務教育修了試験は16歳になったら受ける試験だ。今年度受けるOWL試験と時期が被っていない。セレネはそれに少しだけ安堵していた。一応、マグルの世界でも生きていけるように、この試験だけは受けようと勉強を重ねてきた。ヴォルデモート対策をする傍ら、この二大試験が同時にやって来たら、さすがの自分でも辛くて根を上げそうだ。

実技は完ぺきにこなせる自信はあるが、筆記は少し苦手である。

1年生の時から、実技教科は常に学年1位の座を誰にも譲っていないが、筆記試験——たとえば、魔法史や天文学の星座図などは、ハーマイオニーに後れを取っているのだ。それでも、2位の座から陥落したことはないが、悔しいことには変わりがない。

「でもさ、アンブリッジって魔法省の高官だった人でしょ？」

ミリセントが声を潜めて言ってきた。

「だからさ、OWL試験の試験製作者とも親しかったりして、合格に有利な情報をくれたりするんじゃない？」

「ミリセント、それは不正ですよ。発覚したが最後、どこにも就職できなくなりま
す」

セレネが呆れた声を出すと、ミリセントは少し拗ねたようにぶいっと横を向いた。
「分かってるってば。冗談よ、冗談。でも、もしもってこと。だったらいいな—っ
ていう期待願望ってやつ」

それから三人はOWL試験の話をしながら、闇の魔術に対する防衛術の授業に向
かう。

教室に入ると、もうアンブリッジは教壇の奥に座っていた。

昨夜のふわふわしたピンクのカーディガンを着て、頭のとっぺんに黒いビロード
のリボンを結んでいる。昨夜も思ったが、まるで体型も顔もガマガエルだ。可愛す
ぎるピンクの服をまとった醜惡なガマガエル。

セレネたちを見ると、彼女はにまっと笑った。にかつとではない。にまっとした口を横に広げるような笑い方である。

「さて、みなさん。杖をしまつて羽ペンと教科書。それから、羊皮紙を出してくださいね」

アンブリッジはスリザリン生が全員揃い、席に着いたところで話し始めた。

まるで、幼児に対するように甘く優しい口調だ。聞いているだけで胸糞が悪くなってくるが——嫌な予感が現実になりそうだ。

杖をしまっているのに、どうやって防衛術をするのか。

それとも、今日はガイダンスだけで終わりにするつもりなのだろうか。

「いいですか、この学科の授業は先生が毎年変わってバラバラでしたね？ しかも、悲しいことに魔法省指導要領に従っていなかったようです。なので、貴方たちの実力はOWLをはるかに下回ってます。

ですが、ご安心を。これからは慎重に魔法省が構築した理論中心の指導要領通りに学んでいきます。基礎の基礎からしっかりとね。さあ、これを書き写した子から、教科書の5ページ。第一章を読みましようね」

アンブリッジは嬉しそうに言うと、黒板を叩いた。

すると、白いチョークで書いたような文字が浮かび上がってくる。

『1。防衛術の基礎となる原理を理解すること。』

2。防衛術が合法的に行使される状況を認識すること

3。防衛術の行使を、実践的な枠組みに当てはめること』

セレネは目が点になった。

最初の2つは良い。一応は——それも、最低限であるが、この教科書から学ぶことができる。

しかし、最後の一行。これだけは理解できなかった。

この教科書、防衛術を行使することについて一言も書いていないのに、どうやって実践的な枠組みに当てはめるのだろうか。

そのことについての説明があると思ったが、5分経っても何も言わない。

ただ、椅子に座り、教科書を眠たそうに読む生徒たちを満足そうに見渡している。なので、セレネは手を挙げた。

すると、アンブリッジは少し眉を吊り上がらせる。だが、すぐに元の不気味な笑

顔に戻った。

「この章について、分からないことがあったの？」

「この章というよりも、授業の目的について質問があります」

アンブリッジとスリザリン生たちの視線が一斉に集まるのを感じながら、セレネははっきりと質問した。

「貴方のお名前は？」

「セレネ・ゴントです、アンブリッジ先生」

「そう、セレネ・ゴントね。あなたが、セレネ・ゴント」

アンブリッジはにっこりと微笑みながら何度も頷いた。そして、わざとらしい甘ったるい声で言うてくる。

「でもね、ミス・ゴント。ちゃんと全部読めば、授業の目的は分かると思いますよ。ほら、読まないと時間がなくなっちゃいますよ」

「1つ目と2つ目は理解できます。」

ですが、問題は3つ目です。この教科書には防衛術を行使することについて、一切書かれていません。

つまり、今後は教科書を読む座学と実践を繰り返しながら学んでいくということでしょうか？」

瞬間、沈黙が訪れる。セレネはアンブリッジの目を見つめ続けた。彼女の目の奥に面倒くさそうな色が見え隠れしている。

「防衛術を行使する？ ミス・ゴント、貴方はこの教室で襲われるとも思っているのですか？ この教室で防衛術を使う場面が来ると？」

いいですか、ミス・ゴント。貴方はね、臆病になってしまっているのです」

「はい？」

セレネは思わず素で驚いてしまった。

アンブリッジは5歳児に語り掛けるように、甘く優しく語りかけてくる。

「前任者は狂っていましたよね？そして、その前は狼人間。あなたはね、びくびくと怯えているのです。いつ襲われるのではないかという恐怖に。可哀そうに、とっても怖かったでしょうねえ。でも、安心してくださいね。私が来たからには、防衛術を使うような怖いことは、一切ありませんから」

「……先生、しかし、それでは3つ目の目的が達成できません。それに、試験で

は実技が——」

「質問には拳手を、ですよ」

アンブリッジの醜惡な笑みを見たとき、もう何を言っても駄目だと悟る。

今年一年、防衛術の実践を学ぶことはない。

セレネは質問せずに、大人しく教科書を読み耽っているふりをした。

頭の上で、アンブリッジが「理論さえわかってれば、試験で呪文は使えるから大丈夫だ」と言っていたが、嘘八百だ。そんなこと、無理に決まっている。事実、隣に座るダフネなんて、絶望的な顔をしていた。彼女は実技が上手くないのだ。練習なしに臨んだ緊張する試験で初めて魔法を使うなんて、彼女にとって地獄だろう。だが、それならこの状況を十分に利用させていざとしよう。

長く退屈過ぎる授業が終わった時、セレネは荷物をまとめるとアンブリッジに近づいていった。

「アンブリッジ先生。先程は……その、やや的外れな質問をしてしまい申し訳ありませんでした」

セレネは申し訳なさそうに肩をすくめる。

すると、アンブリッジは満足したらしい。彼女は偉そうに胸を張りながら、ぞっとするような甘ったるい声を出した。

「構わないのよ。間違いは誰にだってあるのだから」

「すみませんでした。この機会に魔法省が提示する新しい教育課程を知りたいと思います。でも、どうすれば魔法省が発行した新しい学習指導要領が手に入るのか分からなくて……」

最後の方を尻すばみ気味に言えば、アンブリッジの笑みが更に深くなった。

「あら、それなら私の予備を渡しますわ。しっかりと読んで、新しい教育課程に沿った学習を積み重ねてくださいね」

アンブリッジが杖を振ると、奥から分厚い冊子が飛んできた。

セレネは嬉しそうに微笑むと、指導要領を大切そうに抱え込んだ。

「ありがとうございます、アンブリッジ先生!! 私、しっかり勉強します!」

にこやかに微笑むと醜悪なガマガエルに背を向け、教室の出口で待っている二人の元へ走った。

「ちょっと! どうしたのよ、セレネ?」

教室を出た瞬間、ミリセントが信じられないような声を出してきた。

「あんたらしくないわよ、今のアレ！　なによ、その本！」

「いいでしょ、ミリセント」

セレネは怪しく微笑んでみせる。そして、通路を曲がり、アンブリッジが絶対に聞こえないところで杖を取り出した。

「『レベリオ―現れよ』」

杖で軽く指導要領を叩いた。

しかし、特に変化は起きない。つまり、特別な魔術——たとえば、持ち主の動きを監視するとか盗聴するとか——はかかっていない、ただの冊子だということが分かった。セレネは、丁重に扱っていた冊子を乱雑に鞆の中へ放り込む。

「なんにでも抜け道はありますよね。きっと、この本を隅から隅まで読めば、まともなOWL試験対策ができる突破口があるはずです」

セレネが言うと、ダフネの顔から不安の色がぬぐい取られた。

「良かったー。あんな授業を1年間もされたら、それこそ時間の無駄だよ」

「まあ、否定はしないわ」

ミリセントも腕を組みながら頷いた。

「正直、あたしも試験が不安になったもの。っていうか、OWLの年にありえないんだけど。それとも、あんな授業でも受かるほど簡単ってこと？」

「ミリセント、それはありませんよ」

セレネはそう言いながら、ふと——一抹の不安を覚える。

セレネが自分の名前を言ったとき、アンブリッジの表情が歪んだ。まさかとは思うが、自分も魔法省に敵認定されているのだろうか。たしかに、セレネも三校対抗試合でハリーと一緒に墓地から生還した者だ。ヴォルデモートが復活したなんて、魔法省にとっての法螺話を触れ回ってもおかしくない。

その後の魔法薬学の授業では、いつも通りの授業だった。

スネイプがOWL試験で最も優秀な成績を取った者しか、6年生で受講するこ
とができないと宣言した後、試験に出る可能性がある薬「安らぎの水薬」を調合す
ることになった。

先生はあまり説明してくれない。ただ黒板に調合方法が書いてあるだけである。

セレネが必要な材料などを葉棚からとり、だいたいの調合が終わった頃のことだ。スネイプはハリーの水薬だけねちねちと叱り、0点の評価を下した。

つまり、いつも通りである。

クラッブなんて水薬がコンクリートの塊に成り果てていたのに、こちらはお咎めなしだった。

スネイプお得意のハリーいじめだ。セレネは完璧に調合できた水薬を提出すると、ハリーの横を通って外に出ようとする。一人提出できないハリーは悔しそうに拳を握りしめていたが、セレネが近づいてくることに気づくと少しだけ明るい表情になった。

「セレネ、あれの話だけ——」

「あとにしてくれませんか。私、次の変身術に行かないといけないので」

セレネは素っ気なく言いながら、ハリーにわざと肩をぶつけた。その隙に、ハリーのポケットへ用紙を滑り込ませる。彼は夏休みにした約束を守り、新たに手に入れた情報を共有しようとしてくれているのだろう。だが、こんな場所で大っぴらに話していたのでは怪しまれる。

特に、スネイプは元・死喰い人だ。無論、ダンブルドアが雇っているのもヴォルデモートとは縁を切っているのだろうし、なにより自分の名付け親だ。ただ、それを抜きにしても、近くにはまだドラコ・マルフォイたちがいる。あまり油断はできない。

だから、セレネはこっそり時間と場所を指定した。

生徒はもちろん、先生にも絶対にバレない場所だ。

もっとも、すべてお見通しのダンブルドアは別かもしれないが。

魔法薬学同様、次の変身術でも試験対策に向けた授業だった。

全員が席に着くなり、マクゴナガルは厳めしい顔で口を開いた。

「OWLに落ちたくなければ刻苦勉励、学び練習に励むことです。きちんと勉強すれば、このクラス全員がOWL合格点が取れないわけではありません。

それでは、今日は消失呪文を始めましょう。これは、OWLで出題される呪文の中では、一番難しい魔法の一つです」

マクゴナガルの言う通り、苦戦している生徒が多かった。

ダフネは完全にカタツムリを消し去ることができず、ミリセントは輪郭がぼやけているとごまかしていた。

セレネでさえ、カタツムリを完全に消失させるまでに二回もかかってしまった。必要な魔力量の調節と理論の構築が複雑で難しい。

「見事です。スリザリンに10点さしあげましょう。

この消失呪文は明日も行います。消失できなかった皆さんは、夜のうちに練習しておくように」

マクゴナガルのその言葉でお開きになった。

セレネはミリセントたちに先に数占いへ行つて構わないと伝え、マクゴナガルの前まで進んだ。

「先生、一つ質問があります」

先ほどのアンブリッジに向けた偽りの姿ではなく、そこそこ真剣な態度でマクゴナガルに向き合った。

「いかがしました、ミス・ゴースト」

「いえ、消失呪文をしたときに気付いたことなのですが、先生が『動物もどき』で猫に変身する際、杖や衣類も消えていることに思い出しまして……あれは、いったいどこへ消えてしまっているのでしょうか？」

セレネは、慎重に言葉を選びながら質問する。

「動物もどき」に関する質問は、リータ・スキーターに聞いても答えてくれるかもしれない。だが、確実なメカニズムを知るためには、教師であるマクゴナガルに聞くのが一番だと考えたのである。

「杖や服もすべて変身の理論に組み込まれているのでしょうか？ それとも、消失呪文のように消えて、出現呪文で一から元に戻しているのか気になりました」

マクゴナガルは考えるように、じっとセレネを見つめた。

「ゴースト、検知不可能拡大呪文はご存知ですか？」

「はい。空間を拡大する魔法ですよ」

「ええ。有名なところで言うと、ニュート・スキヤマンダーのトランクでしょう。外見は旅行トランクですが、検知不可能拡大呪文の効果で内部は魔法生物の研究施設になっていると聞きます。」

動物もどきの変身は、それと少し似ています」

そう言いながら、マクゴナガルは目の前で変身してみせた。

魔法も前触れもなく、マクゴナガルはアメリカンショートヘア種の猫へと姿を変え、ぴょんと教卓に飛び乗って見せた。セレネが拍手をすると、音もたてずに床へ飛び下り、元の姿へと戻る。

「ご覧の通り、いまの変身では装飾品の類は消えていましたね？」

「ええ、身体に溶けていくように消えていきました」

「ですが、これは変身の理論に組み込まれていません。検知不可能拡大呪文のように空間に作用し、一時的に保管しているのです」

だから、マクゴナガルが猫に変身しても、そこに服だけが残されるという事態にはならない。

「完全に消失しているわけではないのですね？」

セレネは質問を重ねた。

「たとえば、先生がニース・スキヤマンダーのトランクを持って変身しても、トランクの内部にいる魔法生物は生きているということですか？」

「理論上ではそうなりますね」

マクゴナガルはそう言いながら、少し探るような目で見てきた。

なぜ、セレネがこんな質問をしてきたのか考えているのかもしれない。セレネはマクゴナガルに心から微笑みを返した。

「ありがとうございます。マクゴナガル先生はいつも丁寧に解説してくださり、ものすごく嬉しいです。」

今後もし指導、よろしくお願いします」

セレネは彼女に背を向けると、変身術の教室を出ようとした。

「お待ちなさい、ゴント」

しかし、その前にマクゴナガルから呼び止められてしまう。

セレネはどきっとした。まさか、マクゴナガルが質問の真意に辿りついてしまったのだろうかと不安になる。

「どうしましたか、先生？」

「ゴント、あなたはドローレス・アンブリッジの授業を受けましたか？」

マクゴナガルは普段よりわずかに声を潜めて聞いてきた。

「はい。1時間目に」

セレネはそう答えながら、少しだけ安堵する。それと同時に、どうして彼女がそんなことを聞くのか意図が分からず、必死に頭を働かせた。

「あなたは、いつも通り受講しましたか？」

「そうですね、1点疑問がありました……納得のいく回答が貰えませんでした」
セレネが正直に答えると、マクゴナガルは更に声を潜めて、低く心配そうな人間味のある声を出した。

「いいですか。貴方のことですから分かっていると思います。ドローレス・アンブリッジの授業では余計な質問や詮索はせず、大人しく受けるのですよ。下手に策を講じることも避けた方がいいでしょう。さもないと、罰則だけではすみません。貴方の今後の立場が悪くなる恐れがあります」

「……意外です。まさか、先生が心配してくれるとは思いませんでした」

セレネは少しだけ目を見開いた。

「当たり前です。あなたは大事な教え子ですから」

たとえば、セレネがグリフィンドールと敵対するスリザリンの生徒であっても、マ

クゴナガルにとっては大事な教え子なのだろう。

それでこそ、教師なのだ。

役人上がりのガマガエルとは違う。

「ありがとうございます。用心して授業を受けます」

そうして教室を出かった後、セレネは思い出したように立ち止まり、振り返った。

「私、何でも丁寧に真剣に教えてくれるマクゴナガル先生が大好きです。教師のかみですよね」

「お世辞を言っても何も出ませんよ。ゴースト、早く次の授業へ向かいなさい」
マクゴナガルは素っ気なく言いながらも、嬉しそうに微笑んでいた。セレネも微笑み返すと、ようやく変身術の教室を出る。

その足取りは、防衛術の教室を出たときよりも遥かに軽かった。

新たな情報を手に入れたときも嬉しいが、疑問を解決できた時の方が嬉しいに決まっている。

だから、ちょっと胸が痛んだのは、きっと気のせいなのだ。

「……と、まあ、私はだいたいそんな感じですね」

セレネは一部の情報を隠しながら、かいつまんで説明した。

普通のカップに紅茶を注ぎながら、あつあつのカップを目の前の少年に差し出す。

「貴方の一週間はどうでしたか、ハリー？」

「ひどい一週間だったよ」

ハリーは左手でカップを手を取った。

彼は右利きだったはずだと、セレネが右手に視線を奔らせれば「僕は嘘をついてはいけない」と刻まれていた。

「その手は？」

「……気にしないで」

ハリーはすぐに右手を隠した。そして、話題を変えるように部屋を見渡す。

「それにしても、セレネはよくこんな部屋を知っていたね」

「噂話はガリオン金貨より高しです」

セレネは微かに口角を上げると、紅茶を一口飲んだ。

そろそろ日付が変わって土曜日になる頃だろうか。

こんな時間から茶会など不健康極まりないが、他に時間が取れないのだから仕方あるまい。

ハリーとセレネの密会は、あまり知られなくなかった。本来なら蛇語を使う者しか入れない場所「秘密の部屋」あたりを待ち合わせ場所に指定すればよかったのかもしれないが、あれはセレネにとっての憩いの場所だ。知られたくないもので溢れている。特に今調合している薬の存在が、ハリーに露見したら目も当てられない。まだ、セレネは記憶を操作する魔法が使えなかった。

そこで、代替案として、ここ「必要の部屋」が選ばれたのだ。

八階の大きな壁かけタペストリーの向かい側にある石壁の前で「いま、必要なこと」を強く願いながら三回行ったり来たりすると、出現する謎の部屋だ。

今回は「自分とハリーにしか見つからず、2人だけの茶会ができる部屋」になっている。

その結果か分らないが、部屋には古今東西の茶器で溢れていた。ティーポットだけでも数十種類が棚に並び、日本の抹茶を立てる道具まで一式がそろっている。ここはここで、居心地がいい空間だ。蓄音機があれば最高だ、と思えば部屋の端

に年代物の蓄音機が現れる。セレネはそれを見て「次は絶対にレコードを持って来よう」と心に決めた。

なお、この部屋の情報提供者は、学生時代から人のゴシップや学校の秘密を探るのに熱を燃やしていたコガネムシ女なので、ハリーに真実を伝えることができない。だから、セレネは少し言葉を濁すことにした。

「噂を辿ったら、この部屋に辿りついたというわけです。必要なものに応じて姿を変える、不思議な部屋に」

「……もし、本当にトイレが必要な時は、この部屋がおまるでいっばいになるってことかな」

「たぶん、そうですね。」

それよりも、貴方の手です。自分で刻んだのでしょうか？」

「まさか！」

ハリーは首を横に振った。そして、少し迷いながら

「実は、アンブリッジの罰則なんだ」

と、渋々教えてくれた。

「あいつ特製の羽ペンは自分の血を使って文字を書くんだよ」

「それ、思いつきり体罰ですよ」

文字通り、自分の身に沁み込むように書き取りをしていくなんて最低な行いだ。初日からハリーがアンブリッジに向かって怒鳴り、彼が罰則を喰らったという噂は耳にしていたが、まさかここまで酷い罰則を受けていたとは想定外だった。セレネが彼に右手を見つめると、まだ血が赤く光っている。

「……もしかして、今日も？」

「……実はそうなんだ。今夜も罰則で。でも、今日でおしまいだから」

「マクゴナガル先生には言ったほうがいいのでは？ きつと、すぐに対処してくれると思いますよ」

「それは嫌だ」

ハリーは即座に言った。

「僕を降参させたなんて、あの女が満足するのはまっぴらだ」

「あー……そういうことですか」

セレネは少し目を閉じる。

彼はプライドが邪魔をして、教師に頼ることができないのだ。そのプライドをへし折ってマクゴナガルの元へ行かせるのは簡単だが、別に急いである必要もない。セレネはメモ帳を取り出すと、羽ペンで走り書きをした。

「マートラップの触手を裏ごししたエクスには、癒しの力があります。グランプリ・プランク先生に頼めば、きっと深い事情は聴かずに用意してくれるはずです。その傷に効くはずですよ」

セレネはメモ用紙を千切ると、ハリーに手渡した。彼はカップを置くと、左手で受け取った。

「ありがとう。少し試してみるよ」

だが、ハリーが試すとは思えなかった。

彼は意外と意地を張るところがある。最後の最後、我慢の限界が来るまで試さないに違いない。もっとも、その前にハーマイオニーあたりが用意してくれるような気もした。

「……それで、セレネに相談があるんだ」

ハリーは誰にも聞かれないというのに声を潜める。

「実は、今日の夜、アンブリッジが僕の腕に触った時、傷跡が痛んだんだ」

「それだけ切り刻まれていたら、普通は痛みますよね」

「違うよ。この傷じゃなくて、こっちの傷」

ハリーはそう言いながら、額に刻まれた稲妻型の傷を指さした。

「この傷が痛むときは、ヴォルデモートが近くにいますときだったんだ」

「ガマガエルの後頭部にヴォルデモートがいると？」

セレネは冗談っぽく言ったが、目だけは真剣にハリーの額を睨み付けていた。

「……すみません。あいつは実体を得ている。憑りつくのは不可能ですよ。ちなみにですけど、他にもヴォルデモートが近くにいないのに痛んだことはありますか？」

「うん。その場合は、ヴォルデモートがその時に強く感じていることに関係しているらしいんだ。先学期、ダンブルドアが言ってた。でも、アンブリッジは邪悪な奴だ。きっと、ヴォルデモートと繋がりがあるんだよ」

「アンブリッジはヴォルデモートと無関係です」

セレネが断言すると、ハリーは少し怒ったような顔になった。

「どうして言い切れるんだ？ あんなに根性が曲がっているのに！」

「従兄妹が死喰い人の友だちに、教えてもらったので」

あっさりと言え、ハリーは呆けたように口を開けた。

「え？」

『アンブリッジはサイコパスの手先？』と聞いたら、すぐに『違う』と答えてくれました。

アンブリッジは、大臣の腹心らしいです。つまり、ホグワーツを、ダンブルドアを潰すために送り込まれた尖兵ですね。

……死喰い人たちは魔法省がダンブルドアを潰して欲しいみたいです。だから、あいつらは魔法省側にこっそりテコ入れているとも教えてくれました」

「その友だち、本当に大丈夫なの？」

ハリーが先ほどまでは打って変わり、心配そうな顔になった。

セレネは紅茶の香りを楽しみながら、にっこりと微笑み返す。

「大丈夫です。死喰い人の方が馬鹿みたいで、どんどん情報を話していたみたい

ので」

夏の間中、カロ姉妹は死喰い人の従兄妹からヴォルデモートの素晴らしさや魔法省のアホさ加減、この世界の住み心地を良くするためには老いばれダンブルドアを殺すこと——など教え込まれていたらしい。そして、こうも言われたそうだと。「セレネ・ゴントなんて半人間は裏切って、死喰い人の味方に付いた方が得策だ」と。

だが、彼女たちは自分の配下に戻って来た。

おかげで、夏の間中に聞いていた情報が一気に手に入り、セレネとしてはかなり満足である。

「まあ、彼女たちから貰った情報は、私がロンドンで話したときの予想と大差ありませんでした。ハリー、貴方の話を聞かせてください。貴方は、新しく手に入れた情報がありますか？」

「あー、うん。シリウスから聞いたんだけど、セレネの予想とほとんど同じだったよ。ただ一つだけ、ヴォルデモートはあるモノを探しているみたいなんだ」

「あるモノ？」

それは初耳である。セレネは紅茶カップを置いた。

「それは何ですか？」

「そこまでは教えてくれなかったんだ。だけど、極秘にしか手に入らないもので、14年前はなくて、いまはあるモノらしい。その——武器みたいな」

「武器、ですか？」

セレネは腕を組んで考え込む。

マグル世界の武器は、14年も経てば銃や戦闘機が進化している。だが、魔法族は総じて思考が停滞しがちだ。14年前と比べて、魔法はそこまで進化していない。比較的平和だったので、進化する必要がなかったともいえる。ましては、武器と呼ばれるような攻撃性の物は新たに生まれていなかったはずだ。

「……なにかの比喩かもしれませんね」

セレネは呟いた。

「ヴォルデモートを滅ぼす決定打。それが武器の正体でしょう」

「つまり、銃みたいな武器ではないってこと？ スクリュートみたいに狂暴な魔法生物でもなくて？」

「まあ、そんなところです」

しかし、推理するには情報が足りな過ぎる。

ぱっと考えつくのは、ハリー・ポッターが武器という説だ。ヴォルデモートを唯一退けた存在は、強力な武器と呼んでも不思議ではない。しかし、これを本人に伝えるには早すぎる。単純に根拠が薄いということもある。それに、彼は今でさえ、アンブリッジに対して敵意を燃やし、反抗心剥き出しだ。ここに、自分がヴォルデモートを倒せる特別な武器であるなんて吹き込もうものなら、セレネの予想を上回る突拍子もない行動に出かねない。

たとえば、最悪の場合、アンブリッジに決闘を挑みに行ったりとか、一人で学校を抜け出し、ヴォルデモートと対決しようとしたりとか。

「逆に、ヴォルデモートが無敵にするための武器ということも考えられます」

とにかく武器の件は、グリンデルバルドに聞いてみることにしよう。自分だけでは、答えを導き出すのが難しそうだ。

「それから、傷跡の件です。ちなみに、傷跡はどのように痛んだのですか？ もちろん、言いたくなければ構いませんが」

「うーん……実は、少しだけ。少しだけだよ、喜んでいたような……」

「喜んでいた？」

セレネが聞き返すと、ハリーは頷いた。

「遠くにいるあいつが、嬉しがっている。傷が痛いのに、幸福な感じがするって、ちよっと変な話だけど。」

それに、傷跡が痛んだのは他にもあって、僕がホグワーツに戻る前の晩にもあったんだ。その時は、やつが怒り狂っているのが伝わって来たんだ」

「ホグワーツに戻る前の晩に、怒り狂う？」

セレネは口元に指を持ってきた。

これは武器以上に情報が足りな過ぎる。単純にヴォルデモートが喜んだり怒ったりしていると考えればいいが、なぜそのような行動に出ているのが問題なのだ。新品のゲームを買ってもらって喜び、3面のボスがクリアできずに怒り狂っているのとは話が違う。

「ごめんなさい、今の私には分かりません」

「別に構わないよ。だって、セレネだけは僕にいろいろと教えてくれたし」

ハリーは少しもごもごと言った。

「本当は傷跡のことを含めて、シリウスに相談しようと思っていたんだ。でも、手紙がその——奪われたら困るし」

「賢明な判断ですね」

「セレネが教えてくれたんだよ。手紙が奪われるかもしれないってこと」

「きっと、私が言わなくても、他の誰かが教えてくれましたよ」

セレネはそう言いながら紅茶を飲み干した。

「ハリー、それでは今日はこれで失礼しますね。次の茶会は一か月後でいいでしょうか？」

「うん。それでいいよ」

セレネは立ち上がりかけ、ふと——思い出したように、ハリーの顔を見た。

「ハリー、アンブリッジに逆らうことは——」

「駄目だって話だろ？」

ハリーの顔に一気に不満の色が広がっていく。彼はうんざりしたように言った。「もう何度も聞かされたよ。アンブリッジに逆らうな、授業は真面目に受けろって。」

君も言うんだね」

「ちよつと違いますね。」

逆らうことは得策ではありませんが、信念は常に持つべきです」

セレネはグリフィンドール寮の特徴、そして、ハリーの性格を考えながら慎重に言葉を選んだ。

「アンブリッジの罰則、授業に反抗したくなる気持ちは分かります。大人しくしてないと、さらに状況が悪化することもあります。」

ですが、真実を唱え続けることも大切です」

セレネが言うと、ハリーは思いつきり目を見開いた。

反対されると思っていたのに、肯定されたので驚いたのだろう。

「辛い道でしょう。苦しいこともあるでしょう。でも、ハリー……貴方が諦めるところを想像できません。ずっと立ち向かい続けるその姿勢は、きっと誰かの胸を打つ日が来ると思えますよ。」

もっとも、やり過ぎには気をつけてくださいね」

セレネがそう言ったとき、ハリーの顔には不満の色など残っていなかった。暗い

表情は完全に拭い去られ、パンドラが禁断の箱から希望を見つけたときのように輝いている。

だが、ハリーは何も答えない。

セレネは一人、「必要の部屋」を出た。

『アルケミー』

『はい、ここに』

すぐ近くのトイレから、するすると大蛇が姿を現した。セレネは大蛇に誘導されるまま、パイプの中へ足を踏み入れる。歩くたびに、ぴしゃぴしゃと音がした。

「それで、どう感じましたか？」

誰もいない空間に向けて、セレネは蛇語ではなく、いつもの言語で語りかけた。

「あれが、ハリー・ポッターです。あなたの思い描いた通りの少年でしたか？」

『ああ、ダンブルドアが好きそうな少年だ』

セレネの問いに対し、ポケットの中から声が響いた。セレネがポケットに手を入れ、小さな鏡を取り出す。その鏡を覗き込むと、映し出されているのは己の顔ではなく、骸骨のように衰えた老人の顔だった。

『アルバス・ダンブルドアにはない性質を持っている。ああ、繊細な少年だ。実に操りやすい』

老人——グリンドルバルドは、鏡の向こうで笑った。

61話 弱点

両面鏡。

遠く離れていても、対をなす鏡に映った者と話をすることができる道具だ。例えるなら、マグルのテレビ電話が一番近いかもしれない。

この鏡をセレネとグリンデルバルドは持っている。リータがフクロウのようにイギリスとオーストリアを何度も往復するには金がかかってしょうがないし、すぐに質問することもできない。だから、秘密の部屋で埃をかぶっていたこの魔法道具を使うことに決めたのである。あの牢獄内で魔法を使えば瞬時に看守へ伝わってしまうらしいが、魔法道具は別らしい。

そのあたりの警備が、若干ぬるい気がする。

「ハリーに対して、あのような接し方で良かったのでしょうか？」

セレネはパイプを伝って秘密の部屋まで移動をすると、ふうっと大きく息を吐いた。

「いつもと大して変わりませんけど」

『まったく問題はない。あのように繊細な少年は、肯定されることを望んでいる』
「……まるで、ハリーみたいな少年を知っているような口ぶりですね」

セレネが指摘すると、グリンデルバルドは鏡の向こうで懐かしそうに微笑んだ。
『100年も生きていると、いろいろな人間と出会うものだ。』

常に抑圧されている少年は、たとえ、相手が自分を見ていなかったとしても、望んだ言葉を囁きかければ簡単に踊る』

「……趣味が悪いですね」

『それを実践したお前もだ』

セレネの眉がピクリと動いた。

確かにその通りだ。自分はハリーに甘い言葉をかけ、ダンブルドアの配下から零れてきた情報を手に入れようとしている。ハリーみたいに騎士道精神の強い者であれば、絶対にやらない方法だ。

だが、現状はそれしか方法がない。服従の呪文をかけたり暴力を振るったり、はたまた、リータにしたように真実葉を使ったりと方法がなくはないが、どれもこれも自分に合わない。一番、自分に合う方法が、たまたま手八丁口八丁でハリーを騙

す方法だったただけだ。

セレネは頭を振ると、再びグリンデルバルドに向き合った。

「ハリーの言っていた武器とは何でしょう？」

『それを推理するには、私も情報が足りない。推察はできるが……もう少し確定してから話すでしょう』

グリンデルバルドは指を組み始めた。

セレネはその話し方を聞いて、なんとなくホームズを思い出した。だが、彼は決して名探偵ではない。むしろ、ホームズはダンブルドアだ。どちらかといえば、彼はモリアーティ教授である。彼は椅子に座り、自ら動かない。さまざまな情報をもとに思考し、配下の者に作戦を与える。

そこが、快樂殺人鬼である蛇男との大きな違いだ。蛇男は死喰い人に任せることもあるが、自分から進んで殺しを行うことが多い。

『1点だけ確かなことがある。おそらく——ヴォルデモートが一喜一憂していたのは、その武器に関することだろう。その日前後の新聞を読み直した方がいい。なにかヒントが転がっているかもしれない』

「嘘っぱちな預言者新聞に？」

『嘘の中にも真実の欠片が混じっている。新聞記者は関係ないことだと思って載せた記事が、実は関係していたということもありえるのだ』

「……確かにその通りですね。分かりました。新聞を注意して読んでみます」

『そうするといい。……それよりも、報酬の件はどうなっている？ そろそろ準備ができそうか？』

闇の魔法使いの目が怪しげに光った。

セレネは彼の目をまっすぐ見ると、ゆっくり口を開いた。

「あと1月はかかります。魔法薬はそろそろ完成するのですが、肝心の魔法の構築を解明するのに手間取ってしまっていました」

『はやくしてくれ。私が死んでしまうぞ。最近、体調が悪い』

彼は、わざとらしく咳き込んだ。鏡越しにも分かるくらい肌艶は悪いが、無理して話している様子もなければ鼻水もたらししていない。おそらく、ただの冗談だ。この意地悪い老人は、自分が焦り慌てふためく姿を楽しみたいのかもしれない。セレネは平然とした表情のまま、鏡を見下した。

「そうですか、お大事になさってくださいね」

『年寄りを労わないのか？』

「私は貴方を年寄りと思ったことはありませんよ」

『嘘はいけないぞ、嘘は』

「もちろんです。それでは、おやすみなさい。体調が悪いのでしょうか？ 夜更かしは健康に悪いですよ」

セレネはそう言うのと、両面鏡を秘密の部屋の机にしまった。

本音を言えば持ち歩きたいが、まだグリーンデルバルドを完全に信用しているわけではない。余分な情報——たとえば、ダフネやミリセントとの友人関係などを与えるつもりはなかった。

それに、ここに置いておくのが一番安全だ。

『アルケミー、留守をお願いね』

セレネは魔法薬の出来栄を確認すると、いつもの施錠魔法をかけながら話しかける。バジリスクはするすると近寄りながら、不安そうに話しかけてきた。

『主、あのような者を信用していいのですか？』

『それしか手がないの。貴方の前の主人に勝つためには、方法は選べない』

自分には、ハリーと違い、ダンブルドアもシリウス・ブラックもない。

グリンドルバルドはその代わりだ。契約で結ばれた関係で、いずれ報酬を支払わなければならない。だが、それでヴォルデモートを打ち負かすことができるなら本望だ。

『そういえば、主。例の試験勉強の話ですが、上手くいきそうですか？』

『ええ、法律の隙間を縫っていけそうよ』

セレネは悪戯っぽく笑った。

『その方法はね——』

「試験対策クラブ？」

ミリセントとダフネの声が談話室に響き渡る。

セレネは昨夜、考えたばかりの計画書を二人に手渡した。

「ええ。魔法省指導要領を読む限り、授業での実践は推奨されていませんが、基礎を応用する力を身に着けることは求められています」

「……でも、アンブリッジの授業では絶対に基礎を学べないよ」

ダフネが困ったように首を傾げる。

「その通り。ですが、あれが無理やり基礎であると定義します。では、どこで試験に必要な応用力を身に着けるのか。それは、もう自習しかないでしょう」

「だから、課外活動で学ぶってことね？」

ミリセントが計画書をめくりながら聞いてくる。

「ええ。名目は『試験の対策をするために、応用力を磨くこと』。ですので、カモフラージュとして変身術と呪文学の実技魔法も組み込んであります」

「あつ、だから消失呪文や呼び寄せ呪文があるんだ」

「でもさ、セレネ。これって、アンブリッジが許可してくれるの？ あのカマカエル、なんとか尋問官っていうのに就任したんでしょ？」

「高等尋問官ですね」

セレネはテーブルの上に置かれた新聞を横目で見た。

一面には、アンブリッジの嬉しそうな写真が載せられている。彼女は同僚である教師の授業を視察し、しかるべき基準に達していないようなら停職させる権限が与えられたのだ。

だが、彼女に停職させられるような先生は、セレネの知る限り一人しか思いつか

ない。魔法生物飼育学のハグリッドくらいだ。そのハグリッドも、どういうわけか今学期始まってから一度も姿を見せていない。なので、おそらく彼女が先生たちの授業を査察して終わるだけだろう。

もちろん、高等尋問官殿の権限は、それだけでは終わらないと思うが。

「これは、魔法省指導要領に則った課外活動です。あの女が否定して来たら、それは魔法省を否定していることと同じになってしまいます」

「そっか！ だけど、セレネ。それならOWL対策でも良かったんじゃない？」

「これには、NEWT試験も入ってるからです」

セレネは鞆の中からもう一つ、計画書を取り出した。

「聞けば、あの女……他の学年でも同じ授業をしているそうです。もちろん、教科書は違いますが、内容はほぼ同じでした」

「うわぁ……ワリントン先輩たちは可哀そうだね」

ダフネは7年生の先輩たちを憂いた。

あんな授業だけではOWLでも合格が難しくなってくるというのに、倍以上難しい最終学年で受ける試験、通称「NEWT試験」は悲惨どころではない。この間、

セドリック・ディゴリーと廊下ですれ違ったときに、防衛術の授業の様子を聞いたところ、「みんな目が死んでるよ」と疲れたように笑いながら教えてくれた。

「先日、7年生のエイドリアン・ピュシーに『試験を合格できるように手伝って欲しい』と泣きつかれてしまいました。そこで、どうせなら一緒にやってしまおうと『試験対策クラブ』と命名しました」

「あれ？　ということとは、これってセレネが全部教えてくれるんだよね？　大丈夫？」

「防衛術なら大丈夫です。それで、2人とも参加してくれますか？」

セレネが二人の方を見つめる。すると、ダフネは間髪入れずに頷いた。

「もちろん！　良かったー、セレネが教えてくれるなら安心だよ」

ダフネは手放して喜んでいるが、ミリセントは慎重だった。彼女は、うーんと唸りながら腕を組む。

「まあ、用意周到なあんたのことだから大丈夫だとは思うけど……本当に、アンブリッジの処罰の対象にならないわよね？」

「用心のため、まずはスリザリン生だけでやりたいと思います。アンブリッジは純

血のスリザリン生に甘いですから。たとえ処罰するにしても、一度くらいは警告をしてくれるでしょう。

そこで、問題がなければ、他寮の生徒を入れても構いません」

「……たしかに。それは言えてるかも」

ミリセントはにやりと笑うと、セレネの手を握った。

「その話、乗ったわ！」

「ありがとうございます、ミリセント。それから、ダフネも。これで、メンバーは5人ですね」

「5人？」

ミリセントは眉間に皺を寄せると、指を折り始める。

「私でしょ、セレネでしょ、ダフネでしょ。それから、ピュシー先輩で4人じゃないの？」

「ああ、そのことですか。ノットにも入ってもらっています」

「ちょ、ちょっと待て。今の話、初耳だぞ？」

少し離れたところで、ブレーズ・ザビニと話し込んでいた少年が慌てて駆け寄っ

て来た。熱心に話すふりをしながらも、こちらの話にしっかりと聞き耳を立てていたようだ。

「あら、一蓮托生ではなかったのですか？」

「それとこれとは話が別だ！」

ノットは、ちょっと怒ったような顔で見下してくる。

「だいたい、いままで聞いてないぞ。なんで、オレも入ってるんだ!？」

「では、いま言いました。貴方は、アンブリッジの授業だけで試験に合格できると思っていますか？」

「いや……それは、ありえないけどよ……」

「なら、入部しますね。はい、決まりです」

セレネがてきぱきと言うと、彼は「オレに拒否権はないのか」と項垂れている。その後ろから、ブレーズ・ザビニがお腹を抱えて笑いながら近寄って来た。

「セオドール。お前さ、ゴーンの尻に敷かれてるじゃないか。しかも、一蓮托生ってなんだよ。お前、そんなこと言ってたのか？」

「黙れ、ブレーズ」

「黙るかよ、こんな面白いのに。あー、ゴースト。そのクラブ、オレも追加で。構わないよな？」

「……ええ、問題ありません」

そう言いながら、セレネはザビニをじっと観察する。

これまで5年間、同じ寮で生活してきたが、あまり彼と話したことはない。金持ちの母親と一緒に暮らしていることと、高慢、やや女たらしであることくらいしか情報がなかった。親衛隊の集会に参加してないが、かといって、マルフォイ派でもない。適度に中立を保ちながら、互いの派閥争いを笑って見物しているような男だ。

正直、あまり信用できない。

しかし、彼もスリザリン生だ。それなりに家柄もいい。アンブリッジに目をつけられない生徒の一人である。彼を拒む理由はなかった。

「ねえ、ドラコたちも誘うの？」

ダフネが尋ねてくる。セレネは少し考えるふりをした。

「そうですね。声はかけてみますが……彼ら次第ですね」

マルフォイとパーキンソンたち純血派閥が、セレネ主催のクラブに入るとは到底思えなかった。いくらアンブリッジの授業では試験に合格できないと分かっていたとしても、参加は絶対にしないだろう。

「じゃあ、私から伝えておくよ。とりあえず、パンジーに聞いてみるね」

ダフネはそう言うのと立ち上がり、女子寮の方へ去って行った。ミリセントも立ち上がり、その後を追いかける。セレネはしばらくソファアに座っていたが、ぐうつと伸びをすると、「秘密の部屋」へ出かけるために立ち上がろうとした。

「おい、ゴースト」

セレネが談話室を去りかけたとき、ノットが呼び止めてきた。彼の手には、さきほどダフネに渡した計画書が握られている。

「これ、本当に試験対策なのか？」

「ええ、もちろん」

セレネは彼の目を見て話した。彼はしばらく探るようにこちらを見てきたが、やがて諦めたように首を横に振った。

「分かった。オレも参加してやる。お前が危険なことをしないように、見張るため

にな」

「ずいぶんと信用されていないのですね」

「当たり前だ、この腹黒女」

彼は吐き捨てるように言うと、ザビニの方へ歩いて行った。

さすがは、親衛隊隊長だ。セレネは少しだけ感心した。彼は、これが単に善意のための企画でないことを見破っている。

セレネは廊下を歩きながら、この企画の真意について思いを馳せる。

もちろん、ダフネたちのために試験の対策をしようと考えたのは本当だ。自分は今、この瞬間に試験が来ても合格できる自信がある。だが、おそらく彼女たちは不可能だ。このままずるずるとアンブリッジの授業のみで防衛術を学び、自分一人だけ合格するのは、なんとなく気が引けた。

それが、表向きの理由。

本当の理由は、彼女たちの防衛能力を実践的に高めるためだ。

自分と仲良くしている以上、彼女たちもヴォルデモートに狙われる可能性がある。せっかく自分が半人間と知りながらも、今までと同じく慕い続けてくれる人た

ちだ。セレネとしては彼女たちをヴォルデモートの魔の手から守りたいが、いかにせん数が多すぎる。セレネが一人一人を直接守れるわけではない。

つまり、最終的に彼女たちを守るためには、個々の防衛能力を向上させる必要があった。

これは試験対策と称して、実践的に多種多様な呪文を身に付けさせる絶好の機会だ。

しかも、試験対策として何の試験か限定していない。きっと、頭のいいカロー姉妹あたりはすぐに気づくだろう。おそらく、明日辺りには聞いてきそうだ。

『ゴント先輩。このクラブは、期末試験も含まれるのでしょうか？』と。

カロー姉妹を受け入れれば、きっと他の親衛隊隊員たちもこぞって参加してくる。あつという間に親衛隊全員が参加する巨大クラブになるだろう。隊員の誰もが試験のために、そして、セレネから直接魔法を学びたいがために入部する。

そして、多種多様な呪文を練習する。

闇の魔法使いたちと渡り合うための防衛呪文を。

さながら、一個の軍隊のように。

無論、アンブリッジからしてみれば看過できない問題だ。

なにしろ、魔法省大臣はダンブルドアが怪しい動き——魔法省を潰すために、生徒たちで私設の軍隊を作っているのではないかと考えている。だから、実践的な防衛術を排した教育カリキュラムを実践しようとしているのに、その真逆のクラブが誕生するのだ。

ところが、そのクラブの所属員はすべてスリザリン生。しかも、ダフネたち「聖28族」に名を連ねる純血一族が数多く所属している。クラブ自体が法律違反になるようなことでもなく、むしろ、指導要領に則った活動だ。無理やり処罰することはできない。

やっている内容も本当に試験対策だ。事前に作成した試験対策のカリキュラム通りに活動を進めていく。たまに時間が余り、「おまけ」と称して、敵に対抗するための戦闘方法や魔法を教えるかもしれないが、それはアンブリッジたちの目がない時にやればいいだけだ。

懸念事項があるとすれば、セレネが三校対抗試合でヴォルデモートを目撃してい

ることに目をつけて

『セレネ・ゴーントが、純血の末裔をたぶらかしているのだ！』

と言われる可能性があることだろう。それを回避するためには、最年長のエイドリアン・ピュシーを書面上のリーダーにすれば問題ない。セレネ・ゴーントはあくまで一介の所属員だ。少なくとも、表向きは。そうすると、もうアンブリッジが付け入る隙は無い。

万が一、ピュシーがリーダーを嫌がれば、そのときは仕方あるまい。他の人選を考えよう。最悪の場合は、親衛隊隊長にリーダーの座を押し付けければいい。余計、アンブリッジはクラブを解散させにくくなるに違いない。

セレネがそんなことを考えながら、3階の廊下の角を曲がった時だった。

「せ、セレネ!!」

廊下を貫くような声をかけられる。

セレネが振り返ると、そこにはジャスティン・フィンチーフレッチリーが恥ずかしそうに俯きながら立っていた。こうして、直接対面するのは久しぶりだ。ほとんど1年ぶりである。

だから、セレネは驚いてしまった。

ジャスティンは記憶にあるより一回り痩せていた。否、痩せているというより、やつれている。ふつくらと健康的だった頬がこけ、肌艶も良くない。そのくせ、見ているこちらが心配になってくるほど肌が赤く染まっている。

「あの、ジャスティン——」

「ごめんなさい!!」

セレネが体調を尋ねる前に、ジャスティンは勢いよく頭を下げた。

「セレネが卑怯な真似をしてまで、ゴブレットに名前を入れるわけないって、僕は知っていたのに。あんな、あんな最低ないじめに加担してしまって……本当にごめんなさい!!」

「え……?」

「ゆ、許してもらえるなんて、思っていないです。そんな都合のいいこと、あるわけがないって分かっています。だ、だけど、僕——もう一度だけ、チャンスが欲しいんです!」

ジャスティンの目には涙が滲んでいた。頬をほろほろと大粒の涙が流れ落ちてい

く。セレネは驚きを通り越し、唾然としてしまった。まさか、彼がそこまで気にしているとは思っていなかったのである。確かに、あのとき——ジャスティンがセレネアンチのバッジをつけていた時、ショックを受けたことは事実だ。それなりに仲良くしていた相手からの不意打ちは、セレネを少しだけ惨めな気持ちにさせていた。だが、それだけだ。

もうあれから1年近くが経とうとしている。あの時以降、ジャスティンがバッジをつけている姿を観なかったし、ハンナ・アボットからは「ジャスティンが反省している」という言葉を聞いていた。それで、もう十分だった。

セレネはあの一件以後、ジャスティンのことをそこまで気に留めていなかった。第一、ジャスティンと仲良くしていたのは、彼がマグルの富豪出身だからだ。魔法界だけでは得られないコネクションを手に入れようと利用していた面が多い。クリスマスパークティーなんて、その最たるものだ。

だから、セレネは彼がここまで思い詰めていたとは思えもしていなかった。

「ジャスティン、私は……」

「僕、もっと貴方と一緒にいたいんです！」

ジャスティンはセレネの言葉を遮るように、宣言した。

「セレネと仲良くしていたいんです！」

だから、本当にごめんなさい!! 許してくれるなら、僕、なんでもします。セレネの気持ちだが、それで晴れるなら」

「……なんでも、ですか」

セレネの脳裏に、いくつか考えが浮かび上がる。

ヴォルデモートが復活した以上、マグルの財界と繋がることは重要になる。なにしろ、魔法界の物価はマグル世界より遥かに安い。なにしろ、1ガリオンがたったの5ポンドしかない。1ポンドあれば、ハンバーガーが1つ買える。裏を返せば、1枚の金貨で、マグルのハンバーガーが5個しか買えないのだ。ホグズミード村などで売っているハンバーガーが銀貨1枚で購入できる事実を考えれば、物価の違いが良く分かるだろう。

つまり、魔法界の財界を味方につけるより、マグルの財界を味方に付けた方が、ヴォルデモートに対抗するための豊富な資金源になる。

マグル世界の金銭を大量に魔法界に持ち込み、換金すれば潤沢な資金を調達でき

るのだ。

他にもマグルの政治家や官僚と繋がれば、上手く魔法界を隠蔽し続けるための協力を得ることができるかもしれない。

また、ヴォルデモートがマグルに対し悪事を働いたとき、預言者新聞より早く正確に情報を手に入れることだってできる。ヴォルデモートがハリーに敗れる以前の預言者新聞に目を通したことはあったが、マグルが襲われたことに對する情報が少なすぎた。セレネの命と同じくらい大事な義父がマグルであり、ヴォルデモートの標的になる可能性がある以上、あの快樂殺人鬼がどうやってマグルを殺すのか、その情報を少しでも集めたい。

ジャスティンに頼みたいことは、いくらでもある。

脳の冷静な部分が素早く演算し、最適解を編み出そうとしていた。

「1つ、条件があります」

セレネが静かに口を開くと、ジャスティンは少しだけ顔を上げた。視線は若干俯き気味だが、こちらへ向けられた。彼の瞳の奥には、不安と期待が入り混じっている。どちらかといえば、期待で目を輝かせている。天国から地獄に落ちてきた糸を

見つけたかのように、死んだようだった目が光を帯び始めていた。

セレネは彼の瞳を見たとき、ジャスティンが許して貰えるなら、本当に何だっ
する気なのだと悟った。

いま自分が考えている作戦も聞き入れてくれるだろうし、死ねと言えば死にそう
な勢いを感じる。

「セレネ、なんでも言うてください。こんな僕を許してくれるなら、本当に何でも
します！」

ジャスティンの澄んだ声が廊下を貫いた。

セレネは少し悩んでから、やがてゆっくりと口を開いた。

「……また、前みたいに話しかけてください」

セレネは小さな声で、しかしはっきりと彼に要望を告げる。

ジャスティンは口を半分開けて、呆けたようにセレネを見つめていた。

「それだけで、いいのですか？」

「ええ」

「僕のことを気が済むまで叩いたり、魔法の練習台にしたりしてもかまいませんよ

？」

「そんなことしませんよ」

彼に頼みたいことは山のようにある。

だが、彼の真っ直ぐな謝罪に付け込み、策を講じるなど、今の自分にはできそうになかった。

「もちろん、あの時は少し悲しかったですけど……もう過去のことです。また、以前のような友だちに戻れるなら、それで構いません。それに……」

セレネは少しだけジャスティンから目を逸らした。

「私だって、貴方に謝ることがあります。」

ダンスパーティーでは貴方から貰ったドレスを着ていたのに、貴方と一度も踊らずに終わってしまいました」

セレネは内心、申し訳なく思っていたことを白状する。

ジャスティンの母から3年生の時に貰ったドレスは、あのミリセントが夢中になるほど素晴らしい品だった。マグルでも有数の高級ブランドである。本来なら、絶対に手が出せない代物だ。それをジャスティンからタダで貰っていたのに、肝心

の彼とは一度も踊らずに終わってしまった。これは、かなり薄情な仕打ちである。

「せめて、一声かけるべきでした。ごめんなさい」

「い、いいえ。それは気にしていません。いや、気にしていないといえは嘘ですけど……その、しかたないこと、でしたし、うん」

ジャスティンの顔がますます赤く染まっていく。顔から湯気が出て、ヤカンのように音が出そうだ。彼の視線はあちらこちらに泳ぎ、あたふたと言葉を探している。「むしろ、僕が謝りに行かなかったのが駄目なのであって、セレネは悪くありません。あの時の僕は、君の誘いを受けるにふさわしくない男でしたし……。

だから、その……お詫びとしては、あれかもしれないですけど、次の休日、一緒にホグズミードでお昼を食べませんか？ 僕、全部奢りますから」

ジャスティンは声を上ずらせながら提案して来た。

「も、もちろん、セレネが誰かと約束しているなら、僕は構わないです。セレネも都合があると思いますから」

「いいえ、特に予定はありません」

病気や借金以外なら、貰えるものは貰っておく。

次の休日は1つだけ予定は入っていたが、それは一瞬で終わる予定だ。特に問題ないだろう。

「ですが、大丈夫なのですか？ 貴方、体調が悪そうですね？」

顔を赤くしているのは、きつと恥ずかしいからだ。熱ではないことくらい分かる。だが、それ以外は酷い有様だ。肌の艶、げっそりと痩せた頬、落ち窪んだ瞳は、食事に人を誘うだけの余裕があるのかと不安になってしまう。

「あー、うん。問題ありません。ちょっと、その、痩せた方がカッコいいかなーなんて思っただけでして」

「無理な減量は身体を壊しますよ」

セレネの身近にも、ひょろりと痩せている人物はいるが、あれは生来持った体質だ。ジャスティンのように、無理な減量で痩せているわけではない。セレネは呆れたように息を吐いた。

「自分の健康を第一にするべきです。いくら女性が群がる身体つきになっても、体調を崩して命を落としたら意味がありませんよ」

「……そうですね」

ジャスティンは照れくさそうに頭を掻いた。

「セレネは前と同じですね。ちょっと安心しました」

「私は私ですよ。ジャスティン、貴方が貴方であるように」

「……そう言うところ、変わらないですね」

ジャスティンが嬉しそうに微笑む。他に話すことはなさそうだ。さっさと秘密の部屋へ向かうことにしよう。

「それでは、次のホグズミード。楽しみにしていますね」

セレネは彼に別れを告げると、秘密の部屋へと急いだ。

ただ、心なしか歩調が軽くなっている気がした。

ジャスティンとの一件は今までたいして気にも留めていなかったが、どこか重く感じていたのかもしれない。そのわだかまりが解消でき、心がすっきりしている。相手に誠心誠意謝ってもらい、自分も謝ることができた。以前のように話すことだってできた。

「……そっか。仲直りって、こういうことなんだ」

セレネは口の中で小さく呟いた。

距離があるときは悲しくなるが、胸のつかえがとれる感覚は心地よい。だから、こんなにも身体が軽く感じるのだろう。

だが、この気持ちを細部まで味わうのは後回しだ。

なぜなら、今日は気持ちを引き締めてやるべきことがある。

グリンデルバルドと結んだ契約のために、するべきことが――。

休日の残り、そのすべてを秘密の部屋で過ごした。

すべての神経を集中させ、あるモノを作り上げる。自分が今まで培ってきた錬金術や変身術の理論を総動員させて行った大規模魔法、その結果——月曜日、セレネは猛烈な眠気に襲われていた。

魔法薬学の時間、つい転寝をしてしまい、薬を焦がしかけるほどに。

ダフネが肩を揺らしてくれなければ、あやうく不合格になるところだった。

その後の古代ルーン文字学の授業でも、間違えて錬金術のノートを開いていた。しかも、そのことに気づいたのは、ハーマイオニー・グレンジャーに指摘されてからだった。

『『水35リットル、アンモニア4リットル、炭素20キログラム——』……これ、何のノート？ マグルの化学？』

「え……はっ、す、すみません。これは錬金術のノートです」

セレネは文字の羅列を隠すようにノートを閉じると、急いで古代ルーン文字学の

ノートを取り出した。

「セレネ、大丈夫？ 物凄く眠そうよ？」

「あー、はい。ちょっと、昨日は眠れなくて。面白そうな魔法を見つけて、その実践をしていたら、つい……夜更かしをしてしまった」

セレネは重い瞼と戦いながら、ハーマイオニーに説明をした。

魔法を実践したことは、嘘ではない。それが原因で眠いことも嘘ではなかった。セレネは欠伸を噛み殺すと、眠い目をこすった。

「あのね、眠い時にごめんなさい。実は、セレネに頼みたいことがあるの」

ハーマイオニーは周囲を軽く見渡すと、声を潜めて「ある提案」を持ち掛けてきた。

「私、自主的に闇の魔術に対する防衛術を学ぼうと考えているの」

「……それは、自習ですか？ 試験に備えての」

セレネの眠気が少し薄くなった。

まさか、ハーマイオニー・グレンジャーも自分と同じ結論に達していたとは思わなかった。しかし、ハーマイオニーは首を小さく横に振った。

「自習と言うより、自分を鍛えるためね。つまり、外の世界で待ち受けている存在に対しての準備よ」

「……快樂殺人鬼に対しての？」

「ええ、あの人と直面するということが、どういうことなのか。それに対する真の防衛術を身に着ける必要があると思うの。でもね、肝心な教師役をしてくれる人がなくて」

ハーマイオニーは囁き声だったが、顔は迸る情熱で輝いていた。

セレネはなんとなく嫌な予感がした。

「教師役ですか……先生に頼んでは？ マクゴナガル先生が適任かと」

セレネは口を開いた。

今のハーマイオニーのような純粋な熱を当てられるのが、正直苦手である。なにしろ、断ることが難しい。これが殺人とか負の面に傾いた熱だと断固拒否できるのだが、まっすぐ自分に向けられた好意的な熱は否定したり、利用したりすることが難しい。

セレネはその事実を自覚し始めていた。

「アンブリッジの目から逃れるのは難しいわ。それに、この活動に先生たちが了承してくれるとは思えないの」

そうになると、教師役は必然的に学生になってくる。

ハーマイオニーたちが外部講師を頼めるとは思えないし、外部講師に頼んだところで、生徒たちが外出できる時間はかなり限られている。防衛術とは、そのような短い時間で容易く身に着けられるものではない。

そうになると、学生で魔法の使い方が上手く、ヴォルデモートと対面した人物は、セレネの知る限り3人しかない。

セレネは逃げ道を探すように、一人の人物の名前を挙げた。

「そうになると、教師はセドリック・ディゴリーですね。人望もありますし、第三の課題でサイコパスの復活を目撃しています。なによりも、魔法の運用法が上手です」

「そうね。私も同意見よ。これから、セドリックにも声をかけるつもり。だけど、教師は多い方がいいと思うの。それに、セドリックは1度しか『あの人』と顔を合わせていないわ」

「では、ハリーもいいですね。ハリーとディゴリーなら、2人とも教師に相応し

いと思います。特に、ハリーは3度も蛇男を退けています。

これで、問題はありませんね」

セレネは話はおしまいとばかりに切り上げようとしたが、ハーマイオニーはそれを許さなかった。

「私はね、セレネにも教師役をやって欲しいの」

「ハリーたちで十分でしょう。それに、貴方の親友は私が入ることを認めないので？」

セレネは、ハーマイオニーの言葉を交わすように問い返す。

正直、試験対策クラブとの掛け持ちは難しい。

むしろ、試験対策クラブの方へ比重を置きたい。これから、クラブには自分を募う者が多く在籍するであろう。それに対し、ハーマイオニーが企画する課外活動は、おそらくその多くがアンブリッジに嫌われているグリフィンドール生が所属している。

ハーマイオニーの企画する自習に参加してしまったが最後、完全にアンブリッジに目をつけられてしまう。

セレネはクラブが潰れる原因になりかねない活動に参加しなかった。

「たしかに、ロンは反対するでしょうね。でも、私は貴方にも引き受けて欲しいの」
しかし、ハーマイオニーは話を進めてくる。

「セレネだって、3度も『あの人』と対峙しているわ」

「直接、あれと戦ったのは、ハリーです」

「でも、セレネもその場に居合わせた。しかも、貴方は『あの人』に敵愾心を持っているって聞いたわ。魔法の腕だって上級生と渡り合えるほどだし、『あの人』に抵抗するための先生としては、ぴったりじゃない？」

「確かに、あの蛇男のことは大嫌いですけど……」

「なら、決まりね。詳しい場所と日程は決まり次第知らせるわ」

ハーマイオニーはてきぱきと言い放つ。セレネは反論したかったが、ちょうどバスシバ・バブリング教授が入ってきてしまった。ルーン文字学の授業が始まり、抗議することができなくなってしまう。

「……私に拒否権はないのですか？」

セレネはバブリングの目を盗み、ハーマイオニーに囁きかける。

「もちろん、断ってもいいけど……貴方が断る姿が思いつかないの」

彼女は黒板に浮かび上がった文字を写しながら、セレネの問いに答えた。

「ハリーが、いつも言ってるもの。セレネは『あの人』を強く憎んでいて、戦う術を常に考えているって」

「ハリー……」

セレネは少し項垂れた。

ハリーの気持ちがかなり自分に向いていることは認知している。会話をすれば分かることだし、そうなるように仕向けている。これは、その弊害だろう。

ここで、この申し出を断れば、ハリーは自分に対する態度との違いに違和感を覚えるはずだ。

セレネはしかめ面のまま、ハーマイオニーに言葉を返した。

「……第一回だけです。あとは、その時の様子を見て考えます」

「ありがとう、セレネ」

ハーマイオニーは少し嬉しそうに言うのと、やりかけのルーン文字の模写に戻った。

第一回目の活動に出れば、その後はどのような活動なのか推測がつく。

集まる生徒たちや習得する防衛術にも興味があつた。その活動に集まった人たちは、基本的にヴォルデモートやアンブリッジに対して悪い印象を持っている者たちだろう。つまり、自分とは敵対しない者たちだ。その人たちを、ぜひとも把握しておきたい。セレネはスリザリン内の人間関係には詳しくかったが、他寮の人間関係について、ほとんどと表現していいほど無知だった。

いざというとき、今回集うメンバーが他寮の協力者として役に立つかもしれない。だから、少しだけ——セレネは会合を楽しむことに決めた。

第一回目の場所が、ホグズミード村の寂れたパブ「ホッグズ・ヘッド」だと知るまでは。

62話 ホッグズ・ヘッドと防衛術

「え？ ホッグズ・ヘッドについて知りたい？」

朝食の席でセレネが尋ねると、ミリセントはきょとんとした。あまりに驚いたせいだろう。目が点になり、匙からぼたぼたとスクランブルエッグが零れ落ちていることにも気づいていない。

「どんな風の吹き回しよ、あんな寂れたパブに」

「寂れたパブ？」

「そうよ。ホグズミードの裏通りにあって、なんというか、とっても胡散臭い所。危ない連中が集まってるって聞いたことがあるけど……ま、まさか、セレネ。あんな、そこに行くんじゃないでしょうね!？」

ミリセントは匙を放り投げると、セレネに額をつきあわせてきた。非常に焦りと怒りが入り混じった顔をしている。

「あ、あんな。あんな危険な場所、一人で行く気!! まさか、なにか企んでいるんじゃないでしょうね!？」

「顔が近いですよ」

セレネは淡々と言葉を返した。

「私は何も企んでいません」

「……それ、本当？」

「本当ですよ。私、監督生です。規則違反は犯していませんよ、なにもね」
ミリセントがじとっと湿った視線を向けてくる。

「……私、前回のクラブであんたに殺されなかったんだけど」

「失神するだけです。胸に5本くらい受けなければ、死にはしませんよ」
セレネは受け流すと、クロワッサンに手を伸ばした。

セレネが企画した試験対策クラブは、予想通り——親衛隊の大半が所属する一大クラブになっていた。

下級生たちのカリキュラムは教科書「防衛術の基礎」から一部の記述を拡大解釈をして——たとえば「相手を武装解除させる前に、対話を試みるべきである」という記述から、武装解除の呪文などを練習している。

特に、武装解除の呪文は非常に効果的だ。

先学期、同級生のザカリアス・スミスや上級生のコーマック・マクラーゲンですら、この呪文を成功させることができなかった。習得難易度が低そうに見えて、実は意外と難しくセンスが問われる呪文だ。2年生のグラハム・プリチャードなんて顔を真っ赤にさせるまで奮闘してもできなかったが、反対に、1年生のノーマン・ウォルパートは一発でアステリア・グリーングラスの杖を奪い取っていた。

さて、しかしながら、上級生は、武装解除程度の呪文で終わらせるわけにはいかない。

第一回目のクラブで、なんとか全員が武装解除の呪文をクリアさせた後、すぐに失神呪文と盾の呪文に移った。ペアを作り、片方がしかける失神呪文を盾の呪文で防ぐ……やや荒っぽいやり方だったが、誰もが失神したくない一心で努力する。

ダフネは一発で盾の呪文を成功させたが、反対に失神呪文がいつまで経っても放つことができず、ペアのミリセントは待ちぼうけしていた。そこで、ダフネが失神呪文をマスターするまで、セレネがミリセントとペアになっていたのである。

その結果——ミリセントが何度気絶してしまったのか、その回数は両手の指では

数えきれない。

「だからといって、すぐに『エネルギー』で復活させなくてもいいでしょ？」

あたし、ずいぶん頭がくらくらしたんだけど」

「あなたは、ピュシーのいい練習台になってましたよ。復活呪文はNEWT試験頻出呪文ですから。でも、あんなに失神呪文ができない人が多いとは初めて知りました。ノットは辛うじて形になっていましたが、本来の威力とはほど遠いですし、ダフネやザビニに至っては放つこともままならないなんて……。

次の課題は盾の呪文より失神呪文ですね」

「いや、盾の呪文の方が頻出問題でしょ。誰を試験で失神させるのよ。試験官？それとも、アンブリッジ？

って、そんな話は後！ どうして、ホッグズ・ヘッドのことなんて聞いてくるのよ？ まさか、誰かと行くとか!？」

「……」

セレネはクロワッサンを口の中に押し込むと、もぐもぐと噛みながら返答を思案した。

まさか、ハーマイオニーに誘われて、防衛術の自習の会合へ出席するとは言にくい。セレネが企画した内容と根本的には同じだが、彼女の企画はそれを表面に出してしまっている。アンブリッジに目をつけられる可能性が高い企画だ。

話したら最後、ミリセントは絶対に反対してくるだろう。

「そういえば、セレネ。あんた、今日はフレッチリーとホグズミードに行くって言ったわよね」

セレネが黙っていると、ミリセントは勝手に解釈を膨らませていく。顔が青ざめ、恐ろしいものを見るような眼差しを向けてくる。

「セレネ、あんた騙されてるわ！ フレッチリーに、絶対騙されている！ 今からでも遅くないわ、断ってくるのよ！ 一人が無理なら、あたしが言ってきたあげる！ ほら、ダフネも一緒に行くわよ！……ダフネ？」

ここで初めて、セレネたちはダフネ・グリーングラスが気配を消すように縮こまっていることに気づいた。どこかそっぽを向きながら、キドニーパイを食べるのに必死なふりをしている。

「……ダフネ、まさか……あんたも行くんじゃないでしょうね？」

「あー、うん」

ダフネはパイを食べる手を止めると、ばつの悪そうな顔になる。

「あのね……私も……アンソニーに誘われたの。デートの途中でホッグズ・ヘッドに行こうって」

「なんで!? あんたの彼氏はレイブクロウの監督生でしょうが!! どうして、ホッグズ・ヘッドになんて危ないパブに行くのよ!？」

「うーん……その……ハリー・ポッターから第三の課題について直接、真実の話が聞けるからって……彼、とっても気になって……」

「……あんたね……その話なら、隣に座ってる監督生も知ってるじゃない。当事者なんだから」

ミリセントは呆れたようにセレネを指さしてきた。

「うん。私はセレネから話を聞いてるし、真実だって知ってるけど、アンソニーは直接自分の耳で聞きたいんだって。でも、セレネは……アンソニーに頼まれても話さないでしょ?」

「はい。もちろん、状況にもよりますが」

セレネが即答すると、ダフネは「ほらね」という顔をした。

一方のミリセントは頭を抱えていた。仲の良い友人が、そろって怪しげなパブへ行こうとしている。彼女はぶつぶつと「あたしも行った方がいいかしら」と自問自答していた。

「それでは、ミリセントとダフネ。私は先に行きますね」

セレネは2人を置いて、先に朝食の席を立った。

一応、これでホッグズ・ヘッドに関する情報は手に入った。

それと同時に、ハーマイオニーの意図を測りかねていた。

人気の少ないところなんて、密談に不向き過ぎる。

せめて個室で話すなら機密性が高まるが、外から盗み聞きされる可能性もある。

セレネは以前、ハリーと会ったときも話が聞かれにくいファーストフード店を選んだ。ハリーがその時のことを覚えていればよかったのだが、考えてみれば食事場所選びの真意まで伝えていなかったのを思い出す。ハリーにそこまで察しろというのは無謀である。

「……仕方ない。あまり使いたくなかったけど……」

ジャスティンとの待ち合わせは昼前だ。まだまだ時間がある。だから、セレネは一度——秘密の部屋へ行き、身支度を整える。その時、とある薬を一瓶、ポケットの中へ滑り込ませた。

セレネは他に秘密の部屋に異常がないか調べ、昨日のうちに用意しておいた巾着袋の中身を確認する。

「さてと、これでひとまず完了ね」

セレネは巾着袋を袖口に忍び込ませると、ホグズミード村へ向かった。

城の出口では、フィルチがホグズミード村行きが許されている生徒の長いリストと照らし合わせている。その列に並び、ホグズミード村に着く頃には、太陽はすっかり頂点まで昇っていた。

「あ、こっちです。セレネ、こっち！」

ジャスティンは村の入り口で待っていた。

セレネを見つけると、息を弾ませながら近づいてきた。やや食生活を気にするようになったのか、頬が膨らみ始めていた。

「こんにちは、ジャスティン。以前よりも調子が良くなったようで安心しました」

「そ、そうですか」

「ええ、健康的でいいと思います。前よりずっといいです」

「あ、ありがとうございます……」

ジャスティンは照れくさそうに頬を掻いた。

「三本の箒でいいですよ」

「え……あ、はい。構いませんよ」

セレネが言うと、ジャスティンはやや間を空けてから了承する。その様子に、セレネは少し首を傾げた。

「どうかしましたか？」

「いや、ハンナから『女性を誘うときは、マダム・パディフットの店だ』と聞いたのですが……うん、セレネはたぶん苦手な店だと思うので、三本の箒で構いません」

「……その店でも構いませんけど？」

「いいえ、今日はセレネに詫びる日ですから。セレネの好きな店に行きましょう」

ジャスティンはそう言うと、にこやかに微笑んだ。

セレネは彼と一緒に大通りを歩き始め、ふと首の後ろに視線を感じる。一度だけ

足を止めて振り返る。だが、そこはいつもと同じホグワーツ生で賑わう大通りだ。特に変わりはない。また透明マントだろうかと眼鏡をずらしかけたとき、ジャステインが不思議そうに言葉をかけてきた。

「どうしましたか？」

「……いいえ、なにも」

セレネはもう一度、視線を感じた方を睨みつけたが、怪しい人影はどこにもない。もっとも、今日はやましいことなど——あまりしない予定だ。一般人が見れば、ただジャステインと仲良く普通のおしゃべりを楽しみ、ホグワーツへと帰るだけである。

セレネは視線を無視することに決めた。ジャステインと三本の箒に入ると、バタビールとシェパードパイを注文する。ジャステインもしっかり食べるか不安だったが、彼はしっかりローストビーフを頼んでいた。見た目からも分かるが、ちゃんと食べるようになったようで安心である。

「あ、僕が持ちますよ」

ジャステインがセレネから皿を受け取ると、先に席を探しに歩き始めた。

「それにしても、いつ来ても混んでますよね」

セレネも彼の後について歩くと、何人ものホグワーツ生とすれ違った。もちろん、ホグワーツ生以外の魔法使いもたくさん集っている。今も前からすらりと背が高く、しっかりコートを着込み、深く帽子を被った魔女が近づいてくる。その魔女がすれ違いざま、ぶつかって来た。セレネはややよろめいて転んでしまう。ジャステインに皿を持ってもらわなければ、ちょっとした惨事になっていたことだろう。

「セレネ!？」

「大丈夫さん、ですか？」

魔女がこちらに右手を差し出してくる。

これは、また嫌がらせのつもりだろうか。セレネは魔女を一瞬だけ軽く睨みつけると、差し出された右手を握りしめて立ち上がる。ややぬめりのある右手に、先程の中着袋を握り込ませるように。

「ええ、問題ありません。私も前を見ていなくてすみませんでした。あなたこそ、お怪我はありませんでしたか？」

「いいえ」

それだけ言うと、魔女は去って行ってしまった。

「大丈夫ですか、セレネ？」

ジャスティンは何も気づいていない。これだけ近くに居ながらも、いま起きた出来事には気づいていなかった。

「ええ、問題ありません」

セレネは晴れやかな笑顔で立ち上がると、近くの席に腰を下ろした。

「ただ、最近ちょっと寝不足でして。OWL試験対策やマグルの勉強が忙しくて」
「……やっぱり、セレネは凄いですね。もしかして、マグルの義務教育修了試験を受けるつもりですか？」

ジャスティンも前に腰を下ろすと、話に乗って来た。

「ええ。受けておいて損はないはずですから」

「実は僕も両親に勧められているのですが、なかなか両立が難しくて……でも、セレネ。夜更かしはいけませんよ。身体に悪いです」

「それ、貴方に言われたくありません」

「はは、そうですね」

それからしばらく、マグル世界の話で盛り上がった。

義務教育修了試験から始まり、現在のマグル首相の政治についてなど堅い話題から、ロックや流行しているゲームについてなど多岐にわたる。

スリザリンにはマグルの話ができる人がいないので、ジャスティンのような存在は貴重だ。特に、音楽の話題に明るい。彼の母親が無名のミュージシャンを応援するのが趣味だったらしく、セレネの比にならないくらい音楽について詳しくかった。セレネが好きなバンド名を言えば、その話題に合わせてくれ、他にも興味を惹きそうなバンドをいくつか紹介してくれた。

こういう会話は今までしたことがなかったので、かなり新鮮だ。

だから、ジャスティンが時計を見て、申し訳なさそうな顔になった時、少しだけ惜しい気がした。

「すみません、セレネ。実は、その……この後、用事が入っていました。あ、でも、もしよければ、セレネも一緒に行きませんか？」

ジャスティンがおおずとおおずと尋ねてくる。

「どこに行くのですか？」

「アーニーに誘われて、その、ホッグズ・ヘッドに」

「あー……」

セレネは腕を組んだ。

ハーマイオニーはここにも声をかけていたらしい。だが、考えられる人選だ。アーニー・マクミランは監督生だ。同じ監督生つながりで、比較的話しやすい相手である。無論、セレネとはいまだに口をきいてくれないが。

ジャステインは、マクミランと同じ寮の友人だ。彼から誘われていても不思議ではない。

だが、行き場所はホッグズ・ヘッドである。

「ごめんなさい。私、このあと予定がありました……」

セレネは、少しだけ肩を落とすと申し訳なさそうに答える。

「でも、もし、どうしてもというのでしたら」

「い、いいえ。いいんです。セレネにも予定がありますし、なにしろ、ホッグズ・ヘッドですからね。女性には、ちょっとハードルが高いパプですよね」

ジャステインが慌てて口を開いた。彼は首を横に振りながら、セレネの申し出を

断る。セレネはバタービールを飲み干すと、にっこりと口の端を上げた。

「ごちそうさま。今日は、とても楽しかったです。それでは、またホグワーツで」
「あ、うん。じゃあ、その、またね」

ジャステインが、またどこかぎこちない調子で手を振ってくる。

セレネは彼に手を振り返すと、そのまま出口に向かわず、トイレへ向かった。店内が賑わっているだけあり、女子トイレもそれなりに混んでいた。だが、個室が空いていないわけではない。セレネは適当な個室に入ると、例の小瓶を取り出した。

小瓶の中の液体は、黒っぽい泥のようだ。

その液体に、試験対策クラブ中に手に入れたヘスティア・カロの髪の毛を投入する。すると、液体の色は瞬く間に薄い水色へと変化した。

これは、飲んでから1時間、変身したい人になることができる薬——ポリジュース葉だ。

ある目的のため調合したのだが、まさか自分で使うことになるとは思わなかった。なにしろ、本には「ゴブリンの小便と同じ味がする」と書いてある。そんなもの、好んで飲みたくない。

だが、セレネ・ゴントとして会合に参加したくなかった。なにしろ、監督生であり学年随一の優等生としての体面がある。この会合のためだけに、それを崩すのはもったいない。

「……よし」

セレネは目を瞑って菓を飲み干した。

途端、身体が震えあがる。全身がねじれて溶けそうになる感覚が、味と同じくらい気持ちが悪い。ちょうどここがトイレで助かったとさえ思えてしまうほど、胸の奥から酸っぱい味が込み上げてくる。少なくとも、食事の後に飲む菓では断じてない。

……だが、奇跡的に抑え込むことができた。

変身術の手間を惜しんでポリジューズ菓を飲んだが、もう絶対に使うものかと誓う。

荒い息をしながら、自分の身体を見下してみる。身長が一回り伸び、白い足がすらりとしてスカートから伸びていた。心なしか、胸の辺りが苦しい気がする。個室から出て、鏡を確認すれば、ヘスティア・カロの端正な顔が見返していた。

つまり、成功である。

セレネは監督生バッジと眼鏡を外した。眼鏡を外すと、死の線が周囲を覆いつくした。変身しても、魔眼だけは変わってくれないらしい。セレネは小さなため息を吐くと、ヘスティアの身体でトイレを出る。店内には、すでにジャステインの姿はなかった。

そのまま外に出て、セレネもホッグズ・ヘッドに向かう。

一瞬、視線を感じたが、後ろを振り返っても不審な人物は誰もいない。歩き始めてみると、もう視線を感じることもなかった。気のせいだったのかもしれない。

セレネは何食わぬ顔で大通りを歩き、裏路地の方に入っていくと、ボロボロの看板がかかっている店があった。猪の首の絵が描いてある。たしか、セレネの記憶が正しければ、昨年度、シリウス・ブラックが犬の状態で行った店だ。シリウスをかくまっていた店なら、危ないのは見た目だけで、本当は特に問題ない店なのかもしれないも思った。

しかし、店に入ってみてから後悔する。

そこは、三本の筭とはまるで違っていた。小さくてみすばらしく、ひどく汚らし

い。なぜか、山羊のような臭いがする。床も日本の土間のように土を固めた床なのかと思ったが、ただ埃が積み重なっているだけだった。出窓はべっとりすすけて、太陽の光がほとんど差し込まない。

ハリーたちの周りにホグワーツ生が多く集まっていたが、それ以外は包帯をぐるぐる巻きにしている男やいかにも怪しげな魔女、怪しげな取引に夢中の黒ずくめの魔法使い——いかにも胡散臭い。完全にアウトである。無論、二人っきりの密談程度ならなんとかなるかもしれないが、こんな大多数の会合など、「魔法省に知らせてください」と主張しているようなものだ。

セレネは心の中でヘスティアに謝った。

きつと、彼女なら身体を借りても怒らないだろう。だが、下手したら、ポッターの会合に参加したと保護者に伝わり、保護者から死喰い人の従兄に伝わってしまうかもしれない。

セレネは「やっぱり、アステリアの髪にすればよかった」と思いながら、一番端っこの席に座る。だが、集まった人の中にダフネ・グリーングラスの姿を見つけて、やっぱりヘスティアで良かったと思ひ直す。ここに、2年生でホグズミード行き

が許されていない妹が現れたら、必ずダフネは混乱するに違いない。

やがて、ハーマイオニーが皆の前に立った。

「えっと——それでは——」

「ちょっと待て、ハーマイオニー。スリザリン生がいるぞ！ 大丈夫なのか!？」

ハーマイオニーが話し始める前に、ロン・ウィーズリーが声を荒げた。

「アンブリッジに告げ口するんじゃないだろうな？」

「彼女は大丈夫だ。僕が保証する」

アンソニー・ゴールドスタインがすっと立ち上がり、ダフネを庇うように前に立つ。ゴールドスタインは普段から氷のように冷ややかな表情をしているが、眼鏡の奥の目が更に細くなり、ウィーズリーを睨み付けていた。ダフネの顔が後ろからでも赤く染まっていることが分かった。

「彼女が裏切るような行為をしたときは、僕も一緒に罰を受けよう」

「……そうかい」

ウィーズリーは苦い物でも嚙んだような顔になると、次にセレネへ視線を移した。セレネはつんとヘスティアらしくすました顔のまま、考えておいた台詞を口

にする。

「偉大なる騎士王を導いたマーリンは、我がスリザリン出身です。スリザリンだからといって敵扱いされたのでは、たまったものではありません」

一説では夢魔とされるマーリンが、なぜホグワーツに入学できたのか疑問なのだが、公式な記録で残っている。その事実に疑う余地はない。

「それとも、ここはスリザリン差別主義者の会合なのしょうか？ それでしたら、私は邪魔ですね。帰らせていただきます。グリーン格拉斯先輩、一緒に帰りましょう」

「あつ、待って。そんなつもりじゃないのよ」

ハーマイオニーが呼び止めてくる。

「貴方が来たのは、アンブリッジの授業だけでは防衛術を学べないと思っているからでしょ？ ここに集まった人たちも、みんながそう思っているはずよ」

ウィーズリーが何か言いたそうな顔をしていたが、ハーマイオニーが睨みつけると黙り込んだ。

「では、この会合の目的だけど——」

そのまま、しばらくハーマイオニーが会合の趣旨を説明する時間が続いた。

その間に、セレネは集まったメンバーを目で把握する。小さなパブに20人ほど集まっていたが、ほとんどが5年生だった。少なくとも、スリザリン以外の監督生がそれぞれ友だちを連れて全員参加している。グリフィンドールなんて、クイディッチチームメンバーが全員参加していた。

それ以外の上級生は、セドリック・ディゴリーとその彼女と友だちしかいない。彼女のチョウ・チャンはうっとりとしてディゴリーを見つめていたが、その友だちは嫌々な顔をしていた。

下級生はもっと少なく、グリフィンドールの4年生が2人、レイブンクロウの4年生が1人だ。2年生のグリフィンドール生が2人紛れ込んでいたが、なぜ彼らはホグズミード村にいるのだろうか。

「——と、いうことね。要するに、ハリーたちから習いたいということで、みんな賛成したのね？」

セレネが考え込んでいる間に、話は進んでいたらしい。

がやがやと同意を示す声が上がった。

「いいわ。それじゃあ、次に何回集まるかだけ——分かってるわ、アンジェリーナ。クイディッチの練習でしょ。被らないようにするわ。えっ、チャンも？ セドリックもスミスも？ わ、分かったわよ。ちゃんと都合の良い夜が見つかるようにするから」

ハーマイオニーはホッと胸を落としたのもつかの間、クイディッチチームに所属する者たちからの質問にイライラしながら言った。

「だけど、これは大切なことなのよ。アンブリッジが教えてくれない、ヴォ、ヴォルデモートの『死喰い人』から身を守ることを学ぶんですからね！

それじゃあ、どこか場所も探しておくから——帰る前に、全員が名前を書いて欲しいの。誰が来たのか、わかるように」

ハーマイオニーは鞆を探って、羊皮紙と羽ペンを取り出した。少し齒切れが悪いのは、なにかを躊躇っているようだ。だが、決意したような目で皆を見つめている。

「私たちのしていることを言いふらさないように、全員が約束するべきだわ。名前を書けば、私たちの考えていることをアンブリッジにも、誰にも知らせないと約束したことになります」

最初に羽ペンを手にしたのは、フレッド・ウィーズリーだった。嬉々として名前を書き、双子のジョージに渡す。しかし、何人かは乗り気ではない。特に、ジョージから羊皮紙を受け取ったザカリアス・スミスはしばし躊躇っていた。

「うーん……まあ、アーニーが、いつ集まるか教えてくれるはずだから」

「いや、僕は——僕たちは監督生だ」

スミスのろのろと名前を書いた後、アーニー・マクミランも渋っていた。

「このリストがバレたら、つまり、その、アンブリッジに見つかったら——」

「アーニー、私がこのリストをその辺に置きっぱなしにすると思ってるの？」

「いや、違う。もちろん、違うさ」

ハーマイオニーが苛立ちを隠せない声で言うと、アーニーは少し安心したように名前を書いた。

その後は、誰も特に異議を唱えなかった。チョウ・チャンの友人が名前を書くときに、少し恨みがましい顔を友人に向けていた。ダフネ・グリーングラスは少し悩んでいたが、ゴールドスタインから羽ペンを渡されると名前を書いていた。

「あのー、ミス・グレンジャー」

ジャスティンが名前を書く直前、思い出したように質問した。

「その、セドリックがいて、ハリーがいるのは分かったけど、どうしてセレネは来ていないんですか？」

「セレネにも声をかけたんだけど……今日は来れなかったみたいね」

ハーマイオニーが悲しそうに言った。それに反応したのがダフネだった。

「あれ？ フレッチリー。今日、セレネと一緒にじゃなかったの？」

「お昼だけだよ。その後は用事があるって……僕からも誘ったんだけど」

ジャスティンはそう言いながら名前を書く、マクミラン達と一緒にホッグズ・ヘッドを出て行った。

最後まで残っていたのは、ハリーたち3人組とヘスティアに変身したセレネだけだった。

「さあ、貴方も名前を書いて」

「……はあ」

セレネは羊皮紙を見下した。何の変哲もない羊皮紙だ。だが、羊皮紙を覆いつくす死の線の数尋常ではない。確実に、なにか魔法がかけられている。

このように密談に不向きな場所を選んだにしては、用心深い配慮だ。

「これ、どんな呪いをかけたんですか？」

「えっ、呪い？　な、なんのことかしら？」

ハーマイオニーの目が泳ぐ。どんぴしゃり、自分の考えが当たった。

「……変なところで用心深いんですね。大方、告げ口をしたメンバーが一発で分かる類の呪いなのでしょうけど」

そう言いながら、セレネは自分の本名を書き記した。そのすぐ下に、とあるルーンを書き刻んだ。ハーマイオニーはそれを覗き込み、ぎょっとした顔になる。

「これって、ソウエルのルーン？　いや、待って。ちよっと形が違う？　そもそも、この名前は——!？」

「何事にも用心ということですよ。分かっているとは思いますが、その羊皮紙をポケットに入れない方がいいですよ。」

それでは、また学校で」

セレネは唇の前で人差し指を立てると、そのまま外へ出た。新鮮な空気が肺一杯に広がり、生き返ったような心地になる。

必要最低限の処置は取った。あとは、今回参加したメンバーの誰かが秘密を告げ口しないか、それか、周りで見ていた客たちが魔法省に連絡しないかが懸念される。だが、これはもう手を打つこともできない。

案の定、3日後に新たな教育令が施行された。

『学生による組織、クラブ、チームなど3人以上が集う団体は、すべて解散とする。再結成の際には、高等尋問官の承認を必要とする』

「……こう来たか」

セレネは掲示板に張り出された教育令を見上げ、小さく息を吐いた。

「セレネ、どうしよう！」

朝食が終わる頃、ダフネ・グリーングラスが血相を変えて駆け寄って来た。

「対策クラブも解散されちゃうの!? 私、試験で必要な魔法が勉強できないよ！」

「……そうですね。残念ですが」

セレネはわざと湿っぽい声で言った。

「一応、この計画書と申請書は書いてみましたけど……アンブリッジの好むようなクラブではありませんし、あのガマガエルは防衛術の実践を嫌っています。いくら部員がスリザリン生だけだとしても、はたして許可されるかどうか……」

「せ、セレネ……」

セレネが顔を俯かせ、ため息を吐く。友人の暗い雰囲気、ダフネも対策クラブ解散の危機に恐怖を覚えたのだろう。彼女の顔は青ざめ、カタカタと震えていた。「私はこれから用事があるので、ミリセントと貴方で提出してきてもらえますか。……たぶん、許可はかなり難しいと思いますけど」

「……うん、わかった。駄目もとで出してくるよ……はあ」

ダフネは暗い顔のまま書類を受け取る。セレネは落ち込んだ表情のまま大広間を出ると、ミリセントを見つけた。

「あつ、セレネ！ 新しい教育令見た？」

ミリセントも不安そうな顔で近づいてくる。セレネはダフネに見せた顔とは正反対の明るい笑顔を向けた。

「ねえ、セレネ。あれって、試験対策クラブも解散ってこと？」

「ええ、見ました。ですが、大丈夫ですよ。問題ないです」

セレネは力強く断言する。そして、きわめて明るい口調で話しを続けた。

「最初にも言いましたよね。このクラブに法律違反は一つありません。指導要領に準じた活動内容もしっかり計画されています。なにより、構成員はスリザリン生だけです。しかも、魔法省への寄付金も多い28族が何人も参加しています。アンブリッジが許可しない理由はありませんよ」

「そうよね！ やっぱりそうよね！ あー、安心した！」

ミリセントの顔から不安の色はぬぐい取られ、嬉しそうに笑っていた。

「実はミリセント。私、これから用事がありまして……ダフネに申請書を渡してあるのですが、一緒に提出してきてもらえませんか？ 頼りにしますよ、ミリセント。私の代わりにお願います」

「ええ、いいわよ。セレネ、大船に乗ったつもりで待ってなさい！」

ミリセントは明るく了承すると、ちょうど鬱々とした表情で大広間から出てきたダフネの元へ駆け寄っていく。彼女たちの声は聞き取れない。しかし、ミリセントがいけいけどんどんとアンブリッジの執務室へ突き進むのに対し、それをダフネが

必死で引き留める姿を見ただけで、会話の内容が分かるというものだ。

「……あれ、どういう作戦だ？」

セレネが友だち二人のやり取りを遠目で見てみると、ノットが話しかけてきた。なにやら丸めた羊皮紙で自分の肩をとんと叩いている。

「グリーングラスとブルストロードに何をさせてるんだよ」

「試験対策クラブを受理させるための作戦ですよ」

セレネはミリセントたちが廊下の向こうへ消えて行ったことを見届けると、鍊金術の本を取り出した。

「私が申請書を出しに行ったのでは、怪しまれてしまうかもしれません。内容を見ずに却下されてしまう可能性もあります」

「まあ、お前もポッターやディゴリーと一緒に帝王の復活を目撃してるからな」
「だから、ダフネとミリセントに頼みました」

本のページに目を落としたまま、セレネは歩き続ける。

「ダフネは本気で許可されないと思いますし、ミリセントは完全にいけると信じています。」

想像してみてください。アンブリッジの目の前で、2人が意見の齟齬により混乱し、言い合いになっています。しかも、2人とも聖28族出身者です。しかも、これまで、特に目立った問題を起こしてこなかった2人です。

アンブリッジはどうすると思いますか？　ちなみに、そろそろ次の授業が差し迫っているものとします」

「……収集をつけるのが面倒になるだろうな」

ノットは、セレネの隣を歩きながら考え込む。

「とりあえず、その場を収めようと意見を飲むとか？」

「ええ。実際、ただの試験対策クラブですし、許可されない道理はありません。良く読めば、ちょっと実践的だということに気づくと思いますけど」

「本当、お前って腹黒だよな。……ほらよ」

ノットは呆れ果てた声で言いながら、丸めた羊皮紙をバトンみたいに手渡してきた。

「なんですか、これ」

「許可書だよ。お前の親衛隊の許可書。朝一番で申請を出して、許可してもらった」

「……え、許可されたんですか？」

セレネは親衛隊も解散させられていたことを、すっかり忘れていた。

確かに生徒の有志が集まる団体である。いつの間にか自然発生し、気が付いたらノットが取りまとめて、何か条もの規則が徹底された団体にまで成長していた。言われてみれば、セレネの親衛隊は、団体である。

「ドラコあたりが、挙げ足をとってくるかもしれないだろ。親衛隊は団体なのに、許可されていない非合法な集まりだとかなんとか。備えあれば憂いなしだ」

「いや、それはありがたいのですが、よくアンブリッジが認めましたね」

正直、試験対策クラブより申請が通るハードルがずっと高い。これが「アンブリッジ親衛隊」であれば、すんなり書類の確認もせずに通るだろうが、一介の生徒、しかも、セレネ・ゴントの親衛隊だ。ハリー・ポッター親衛隊よりは通る確率はあるだろうが、それにしても無謀である。

「馬鹿、そのまま出すわけないだろ。セレネ親衛隊の頭文字をとって『SG』。

それを『スリザリン寮の安全と秩序を守護する隊』に変えただけだ」

「……なるほど、スリザリンのSと守護のGね。かなり無理やりでは？」

「ああ、こじつけど。だがまあ、大して意味は変わらないだろ？ 暴走しないように秩序を守っているのには、変わりない」

「暴走するのは、グラハム達一部の生徒だけですけどね」

「まあな。それに、申請書を出しに行つたのは隊長のオレだ。これでも父上が魔法省に多額の資金援助をしている。たいして確認もせずに、許可してくれた」

「持つべきものは、やはり人脈ですか」

セレネはそう言いながら許可書を一瞥すると、鞆の中にしまった。

自分の考えている通りに進むなら、ほぼ100パーセント、試験対策クラブは受理されるはずだ。

しかし、ハリーやハーマイオニーが考えている防衛術の会合は違う。おそらく、あれはいくら密に計画書を立案したところで、アンブリッジが通すわけがない。提出しに行く人間が、レイブンクロウのアンソニー・ゴールドスタインやハッフルパフのアーニー・マクミラン辺りだったら、まだ通るかもしれない。しかし、それでも、スリザリン生が提出しに行くより厳しくチェックされるはずだし、下手すれば構成員にケチをつけて「ポッターとディゴリー抜きでやりなさい」など元も子もな

いことを言われそうだ。

「だけども、たかが防衛術の練習をするために手続きを踏まないといけないなんて……本当に面倒だよな。オレたちは、アンブリッジの御機嫌取りかっての」

「1つ、策がないわけではありませんけどね」

「……どうせ、ろくでもない案だろ」

「ええ、ろくでもない案です。だから実行しません」

アンブリッジの横暴を訴えようにも、イギリス魔法界に司法機関は存在しない。否、存在はするが、三権分立ができていないので無意味である。アンブリッジの意向は魔法省大臣の意向であり、イギリス魔法省に訴えたところで変わらない。

ならば、取るべき方法は簡単だ。

海外の魔法省へ働きかければいい。もちろん、イギリスのお国事情など他国にとってはどうでもいいことだ。なので、ここは世界で活躍している魔法使い——ビクトール・クラム辺りに働きかける。至極実直な彼のことだ。ハーマイオニーあたりが今の現状を訴えれば、防衛術を真面に習わせてくれないホグワーツの状況に心を痛めて、世界に発信してくれるだろう。

クラムは、普段は大人しいダフネまでも熱中するほど素晴らしいクイディッチ選手だ。イギリス魔法界の一般家庭にも、魔法省の不信感が強まるに違いない。そのまま延長戦で畳みかけ、アンブリッジを高等尋問官の座から引きずり落せなくもないだろう。

だが、あくまですべて希望的観測だ。

おそらく、クラムが発信した段階で、魔法省は彼に情報をリークした人物……ハーマイオニー・グレンジャーを槍玉に上げる。ただでさえ昨年度、彼女は週刊誌に「有名人狙いのあばずれグレンジャー」と叩かれていた。それを利用し、新聞は「あばずれ彼女の伝手で世界的有名選手を籠絡。ポッターはクラムをも利用して、さらに有名人になろうとしている」なんて書きそうだ。

これでは、策を講じた意味がない。

事態が余計悪化してしまう。だから、セレネはしばらく静観することにした。どうせ、アンブリッジが暴れまわるのは学校内だけだ。学校外ではなく、義父に危害が加えられるわけでもない。

セレネは錬金術の本から顔を上げると、ゆっくりと口を開いた。

「ですが、とりあえず、ありがとうございます。あなたのおかげで、今後も親衛隊が活動することができますね」

「別に仕事だからな。礼なんていらない」

ノットはそれだけ言うのと、さっさと数占いの教室に入ってしまった。顔はいつもの不機嫌そうな表情だったが、耳だけ異様に赤く染まっている。きっと、礼を言われて嬉しいに違いない。セレネはくすりと微笑んだ。

試験対策クラブも親衛隊も、アンブリッジの許可が通った。

つまり、残すのはハリーたちが企画している防衛術の訓練だけだ。その動向がいささか気にはなったが、早晩にハリーとの茶会もとい情報共有の場がある。そこで今後の展望について話し合えばいい。

「まあ、なんとかなるわ」

セレネは緩んだ表情を引き締めると、ノットの後を追うように数占いの教室へと入って行った。

63話 ガマガエルとお茶を

ハロウィンが終われば、冬の足音が聞こえてくる。

例年、ハロウィンは何かしらの事件が起きるので警戒していたが、今年はごく普通に終わることができた。そのことを喜ぶべきなのか、例年との差異に危機感を募らせるべきなのか。セレネは少し頭を悩ませていた。

「……」

だが、そのことに意識を割いている余裕はない。

セレネはスリザリン生たちが2人一組になり、呪文の練習をしている様子に視線を移した。セレネの策通り、試験対策クラブは存続が許可された。最初の数回こそ、アンブリッジが突然視察に来てても良いように、事前の計画書通り進めていたわけだが、その気配がまったく良いことに、やる内容こそカリキュラム通りだが、それに色を加え始めていた。

今回の課題は、妨害呪文。

相手が呪いを放つ直前に妨害呪文を放ち、動きを妨害する訓練である。

妨害する呪文を、それぞれの好きな呪文と限定したからだろう。

盾の呪文を練習させたときとは異なり、呪いを待ちぼうけする生徒が少ない。ミリセントの放つ退去の呪文を受け、ダフネが飛んで行ってしまったり、アステリアの放つたくすぐり呪いのせいでグラハムが笑い続けていたりしている。前者の場合は教室の壁をクッション呪文で柔らかくしているので問題ない。後者の場合は、セレネや気づいた周囲のスリザリン生が終了呪文を放つまで笑い続ける羽目になるが、あまり問題ないだろう。

とはいえ、妨害呪文ができるようになってるのは、まだまだ全体の2割弱とたったところだ。

あまりにも数が少ない。

「さてと……そろそろ始めますか」

セレネは杖で手を叩きながら、生徒たちの合間を歩き始める。

何気なく歩きながら、もうこのレベルの魔法をクリアしてそうなペアを探す。そのペアはすぐに見つかった。セオドル・ノットだ。彼はブレース・ザビニが呪文を詠唱する前に妨害呪文を放ち、ザビニを壁まで吹き飛ばしていた。実に呪文をか

けやすく、正真正銘予告なしの罪悪感が薄い相手である。セレネはノットがザビニを笑っている姿を一瞥すると、こっさり狙いを定めた。

『タラントアレグラ―踊れ』

杖から放たれた閃光が、まっすぐ対象の背中に奔る。

「――ッ、『プロテゴ』!!」

だが、非常に惜しかった。間一髪のところまで振りかえり、慌てて盾の呪文を展開させた。セレネの放った呪文は丁度、彼の鼻に当たる直前で弾かれてしまう。セレネは小さく舌打ちをした。

「……さすがですね」

「い、いきなり何するんだ!？」

「油断大敵。敵は待ってくださいません」

セレネはそう言いながら、図書室の隅で眠っていた寄贈本『油断大敵―暗黒期における闇払い育成理論と実践―』のページを開いた。

『ペアでの練習は非常に効果がある。しかし、敵は正面から攻撃してくるとは限らない。突如、後ろから割り込んでくる可能性もある。ゆえに巡回しながら時折、

前触れもなく訓練生に呪いをかけるようにする。すると、個々の緊張感も高まり、どのような事態においても冷静かつ瞬時に対応できるようになる』と、この本に書いてありました」

「これは試験対策だよな？ お前、そうだって言っただよな!? オレは聞払いになるつもりはない！」

ノットは額に筋を浮き立たせながら詰め寄って来る。他の生徒たちも、セレネたちのやりとりに気付いたのだろう。誰もが一度手を止め、こちらに注視していた。セレネは一度、周囲を見渡した後、ゆっくり息を吐いた。

「テストでは何が出題されるか事前に教えてくれません。どのような緊迫した状況で問題が出題されても、素早く対応できる力が必要になってくるはずですよ。ほら、この記載と変わらないではありませんか」

「違う。絶対に違う。だいたいな——」

「それに、私だって呪文をかける相手は選びます。妨害呪文がおおむね習得できている人しか狙いません」

セレネは彼の話を遮ると、ぱたんと本を閉じた。

「習得できているからこそ、笑っている場合ではありませんよ。油断大敵です。

それに、今までで1番、ムーディの授業が実践的で分かりやすかったでしょ？

参考にするのは悪くないかと。もちろん、私は許されざる呪文だけは使いません。そこは約束します」

「……去年は偽者だろ」

「ダンブルドアを騙すほどムーディ本人に成りきった偽者です。たとえ、本人が受け持っていても、似たような授業展開だったと推察できます」

ノットはまだ何か言いたそうな顔をしていた。だが、彼が口を開く前に、アステリアの質問が部屋を貫いた。

「つまり、この妨害呪文を習得できれば、セレネさんから直々にご指導いただけるということですか？」

アステリアは目をキラキラと輝かせている。

「ええ、まあ、そんなところです」

セレネが答えると、周囲の目が変わった。なにしろ、ここに集ったスリザリン生
の大半は親衛隊に所属している。

今までは全体指導が多く、個別指導も行っていたが、どうしてもセレネは習得し悩んでいる人のところに多く付いてしまっていた。ヘスティアたち上級者や平均レベルのスリザリン生には、なかなか直接指導することができなかったのである。しかし、今回は違う。

習得に困難を抱える人のところにも行くが、妨害呪文を使いこなせる人のところにもいく。これは、普段、セレネに直接指導してもらえない者たちの熱意を上げた。事実、それまで成功者は2割弱だったのが、終わりの時間になる頃には半数以上が妨害呪いを習得していた。セレネは大忙しだったわけだが、嬉しい結果である。セレネは、今後もこの本の指導法を取り入れていくことを心に誓った。

「あの……ゴント先輩、お伝えしたいことがあります」

セレネが壁にかけたクッションの呪文を解除していると、フローラが話しかけてきた。

「今日、アンブリッジにお茶を誘われまして……その時に妙なことを聞かれました」「お茶会？ アンブリッジに」

セレネは少し浮足立っていた気持ちを引き締め、フローラを真剣に見つめた。

「ええ。闇の魔術に対する防衛術が終わった時、私だけ呼ばれました。その質問が『先日、ホグズミード村で何をしていたか』というものでして」

「それ、本当？」

セレネは聞き返した。

おそらく、ヘステシアの姿を借りてホグズ・ヘッドにいたことが、アンブリッジの耳に入ってしまったのだろう。無論、セレネがポリジューズ薬を使っていることなど知るはずもないので、ヘステシア——もしくは、瓜二つの双子であるフローラが疑われると分かっていたが、尋問された時の対処法をまだ伝えていなかった。すぐに対処するべきだったのに、セレネは後回しにした自分を悔いる。

「……はい」

フローラは少し恥ずかしそうに俯きながら、小さな声でこう答えた。

2 人が当日、なにをしていたのか知らないが、どちらもホグズ・ヘッドにいるはずがない。そのことが、アンブリッジに知られてしまったとき、彼女はいったい誰を疑うのか。報告者を疑うのか、それとも——ヘステシアに変身していた何者かを疑うのか。

セレネであれば、後者だ。

ヘスティアに変身できるほど、彼女に親しい人物——その中でも、特にハリー・ポッターの集会に参加しそうな人を探す。そうなってくると、必然的にセレネ・ゴントの名前は上がってくるはずだ。

これでは、不味い薬を飲んでまで変身した意味がない。

やはり、ダフネにだけ事情を話し、アステリアに変身するべきだった。もしくは、リータに頼み、ホグワーツに無関係なマグルの少女の髪を手に入れてもらえばよかった。

これは、手っ取り早くすませようとした自分の落ち度である。

「……すんだことは仕方ないわ。それで、どう答えたの？」

セレネは自分に言い聞かせるように、フローラに先を促した。

「私、正直に話すつもりはなかったのに、なぜか口が勝手に動いてしまって……その……『ゴント先輩を尾行していた』と答えてしまったのです」

「…………え？」

セレネは目が点になった。

「私を、尾行？」

「ええ。ヘスティアと二手に分かれて、こっそり尾行していたことを話してしまつたのです。ジャスティン・フィンチ・フレッチリーが先輩にふしだらな行為を行わないか、見張るためにと」

「……あー……あの視線、貴方たちだったのね」

セレネは、ホグズミードにいる間、たびたび感じていた視線を思い出した。そう呟くと、フローラは両手で真っ赤になった顔を覆った。

「その後、ガマガエル女から『ゴーントは、おかしな動きをしなかったか？』と聞かれて、私、正直に話してしまつたんです。口を止めようとしたんですけど、その……先輩が、なかなかトイレから出てこなかったことを！ きつと、先輩がフレッチリーに何か盛られて、トイレで苦しんでいたということを！」

「……フローラ」

セレネは何とも言えない気持ちになった。

「一つ聞いわ。もしかして、トイレからヘスティアが出てきた？」

「え、ええ。きつと、彼女が先輩の容体を確かめに行つたのだと思いました」

「……そう」

セレネは安堵の息を吐いた。

彼女たちが二手に分かれて尾行してくれて、本当に助かった。きっと、ヘスティアの方もフローラがトイレを確認しに行ったと思ったに違いない。念には念を入れて、ホッグズ・ヘッドの会合が終わった後、三本の箒に戻り、変身が解けるまでトイレでじっとしていたことが幸いした。

「ちなみに、ヘスティアの方はお茶に誘われなかったのね？」

「はい。アンブリッジは最後、どこか呆れたように『……同じことをしていたのだから、聞くのは片方でいいわね。もういいわ、帰って』と。それで、終わりです」

「……なるほどね」

これで、セレネにはアリバイができた。

代わりに別の誰かが疑われることになるが、自分が容疑者から外れたことは大きい。……引き換えに、フローラたちとアンブリッジに大きな誤解を生んでしまったが、疑われるよりずっといい。

「申し訳ありません！ アンブリッジに先輩の事情を話してしまうなんて……私、

幹部失格です！ 罰は受けます！ どうか、許してください！」

「ええ、別に構いませんよ。ただ、次から気をつけて。……でも、ちょっと変ですね」

セレネは口元に指を添えて考え込む。

「話したくないことが、口から出てしまったのですね？」

「はい、紅茶を飲んでからです。……たぶん、真実薬だと思います」

「……ええ、きつとそうでしょうね」

フローラのおかげで、大切な事実が判明した。

アンブリッジは尋問に真実薬を使ってくる。以前、リータ・スキーターで試したことがあるので、その効果は非常に良く知っている。これは、非常に厄介なことだ。今回はたまたま上手くいったが、下手したら知られたくない情報を引きだされてしまうかもしれない。

「このことをすぐに隊長に報告しなさい。それから、親衛隊全員に『アンブリッジとの茶会は断ること。真実薬入りの飲み物で、なにか情報を抜き取ろうとしてくる』を周知するように頼んできて」

「は、はい！ 分かりました！」

フローラは顔を朱に染めたまま、とっくに部屋を出たノットを追いかけた。まるで、突風魔法を使ったかのような勢いである。話を聞いていなかったヘスティアは事態が理解できず、困惑した表情で姉を追いかけて行った。

「セレネ、フローラさんは何の話をしてたの？」

セレネも出口に向かうと、ダフネが不思議そうに聞いてきた。

「アンブリッジが尋問に真実薬を使う件についてです」

「……え？ それって、違法でしょ？」

ダフネが目を見開いている。

「だって、スネイプ先生が先学期、教えてくれたよ？」

『ホグワーツでは、この薬を生徒指導に使うことを禁じている』って。このこと、スネイプ先生に報告した方がいいんじゃない？」

「……そうですね。でも、彼女は今や高等尋問官。下手に訴えたが最後、教育令で『高等尋問官は、真実薬を使うことを許可されている』と出してくるでしょう。そうになったら、もうどうすることもできない」

訴えるためにも、タイミングが重要である。

セレネはそのことを伝えると、寮へ続く階段のところで彼女と別れた。

今日は、月に一度、ハリーと情報を交換する夜である。

この時ばかりは、セレネ一人で手に入れた情報を整理するのが難しいので、一度、秘密の部屋に寄り「両面鏡」を取りに行かなければならない。セレネは両面鏡をポケットにしまうと、すぐに8階の必要の部屋へと急ぐ。

あと1階、登れば8階に辿りつく。

そんなときだった。

「あら、ミス・ゴント。そんなところで、なにをしているのです？」

背後から、砂糖を砂糖水で煮込んだような甘ったるい声が聞こえてきた。

「……こんばんは、アンブリッジ先生」

セレネは、いやいや後ろを振り返る。6階の扉の脇に、ピンクのガウンを着こんだガマガエルが立っていた。足元には、管理人フィルチの猫が座っている。アンブリッジに懐いているのか、ごろごろ甘えたような声を出していた。

「こんな時間に、いったい何をしているの？　そろそろ、就寝時間でしょ？」

「天文学の勉強をするためです」

セレネは用意しておいた言い訳を口にした。

10階には天文学の教室がある。

「私、天文学は少し苦手です……OWL試験対策で星座表を見返していたのですが、どうしても不安になってきたので、実際に確認をしに行こうとしていました」
変身術や呪文学に比べると、天文学は苦手だ。その点数は、ハーマイオニーに抜かされている。過去の試験の結果を高等尋問官の権限で調べれば、すぐにわかることである。

だから、なにも不思議ではない。

「でも、そろそろ霧が出てくるはずよ。夜空は見えないわ」

「そうですか？　良い星読みができると思いますけど」

セレネは窓に視線を向ける。実際、霧が出てくる気配など皆無だ。窓から見える範囲だけでも、雲は一つも浮かんでいない。星がちらちら瞬いている。すると、アンブリッジは短い杖を取り出した。

『ネビュラス―霧よ』

アンブリッジが窓に向かつて杖を振ると、瞬く間に深い霧がホグワーツ城を包み込む。これでは、星の光など見ることは到底不可能だ。

「さて、これで貴方の用事はなくなったわね。だから、少し付き合って。私、お茶を飲みたいと思ってたの」

「……お茶、ですか」

セレネは背中に汗が伝うのを感じた。

先ほど、フローラから真実薬の話聞いたばかりだ。そうでなくても、こんな時間からアンブリッジと茶会など御免である。そろそろ、ハリーとの約束の時間も迫っていた。

「アンブリッジ先生、お茶にはカフェインが含まれています」

セレネは、困ったように微笑みながらガマガエルに話しかけた。

「カフェインのせいで眠りが浅くなってしまうですよ。睡眠の質を下げることは美容に良くないです」

目の前のガマガエルは、かなり容姿を気にしている。こんな時間だというのに、

髪の毛先まで、きっちりカールしている。化粧だってばっちりだ。目元にアイシャドー、唇にはルーージュが引いてある。

だから、美容の話題を出せば引き下がらせる事ができると踏んだ。しかし、アンブリッジもそう簡単に諦めない。彼女は少し驚いたように眉を上げた後、にまっとした笑みを広げた。

「大丈夫よ、ハーブティーを飲めばいいわ。カフェインが入っていないもの」

「……詳しいですね」

「美容については、貴方よりずっと詳しいのよ。」

実はね、ずっと前から貴方と話したかったの。でも、貴方、すぐに教室を出て行ってしまふでしょ？ なかなか話す機会がなくて、本当にちょうど良かったわ」アンブリッジは逃げ道を塞いでいく。彼女の笑みには自信が満ち溢れていた。事実、こうなってしまうえば断る口実がない。「唐突に眠くなってきたから寮に戻る」なんて言い訳が通じる相手でもなかった。

セレネは観念して、実にありがたくない申し出を受け入れることに決めた。

「分かりました。高等尋問官である先生が直々にお話したいなんて、とても光栄

です。ですが、本当に少しだけ身だしなみを整えてきてもいいですか？　せっかく、アンブリッジ先生とお茶が飲めるのに、ちょっと気になってしまつて……」

セレネは黒髪を触りながら、申し訳なさそうに口にした。

事実、秘密の部屋の入口——嘆きのマートルが住まう2階のトイレから7階まで、かなり急いで駆け上がって来た。髪が多少乱れていてもおかしくない。案の定、身なりの厳しいアンブリッジは少し思案した後、許可を出してくれた。セレネは嬉しそうに礼を言々と、近くのトイレへ駆け込んだ。そして、すぐにトイレの入り口に向かって小声で呪文を唱える。

『『マフリアートー耳塞ぎ』。大変です、アンブリッジ先生!!』

音漏れ防止呪文が上手く聞いているかどうか確かめるため、セレネは大声を出してアンブリッジを呼ぶ。しかし、トイレの外にいる彼女は何も反応しない。どうやら、上手く魔法をかけることができたらしい。セレネは素早くポケットから両面鏡を取り出した。

「聞こえてますか？」

『……ああ、小僧のカウンセリングの時間か?』

セレネが呼びかけると、骸骨のような顔が映し出される。この時間を楽しみにしていたのか、いつもより目が生き生きとしている。そんな彼に、セレネは残念な知らせを告げた。

「その前に、ガマガエルの楽しいお茶会に行くことになりました。しかも、真実薬入りの特製ハーブティーを御馳走してくれるみたいです」

『それは、実に刺激的だ』

「ええ。なので、少し遅くなってしまうかもしれませんが、もう少し、待ってくださいませんか？」

セレネはアンブリッジの手前、身だしなみを整えながらグリーンデルバルドに語りかける。彼は齒のない口で笑いながら、セレネの申し出を了承してくれた。

『分かった。』

いい機会だから、その役人を観察しろ』

「観察？ ガマガエルを？」

正直、アンブリッジを観察する気はない。

ただの権力欲の強い役人である。その事実だけで十分だ。しかし、グリーンデルバ

ルドはそう思わなかったらしい。

『しっかり観察し、生い立ちや背景を推理するといい。そうすれば、女の弱点も見えてくる。弱点さえ見破ることができれば、いざというとき、それは重要なカードになる。』

それに、どうせ相手はお前のことを観察してくるのだ。気にすることはない』

「……そういうものでしょうか」

「まだですよ、ミス・ゴースト？」

トイレの向こうから、ガマガエルの声が聞こえてくる。

『あとで答え合わせをするでしょう。それでは、フロイライン。健闘を祈るぞ』

「……ぬかりなくいきますよ」

セレネはグリンデルバルドと繋がったままの両面鏡をポケットに滑り込ませる。そして、杖を右袖にしまうと足早にトイレから出た。

「遅くなってしまう、申し訳ありません」

「いいえ、いいのよ。身なりを整えることは、女性として当然のことですものね。どこかの栗毛のグリフィンドール生とは大違い」

アンブリッジは、さりげなく誰かのことを馬鹿にした。そこまで、身だしなみを気にしていない栗毛のグリフィン・ドール生とは一人しか思い浮かばない。おそらく、ハーマイオニー・グレンジャーのことだろう。クラムと踊った時の彼女はストレートパーマの美少女だったが、普段は天然パーマのせいで美貌が隠れてしまっている。彼女は身だしなみより、もっと別のことを優先しているのだ。

セレネは知り合いが馬鹿にされ、少し不機嫌になった。しかし、それを顔に出すことなく、静々とアンブリッジに続いた。ガマガエルはセレネの反応を確かめようと、こちらを横目で監視している。嫌な女に捕まってしまったと、内心ため息を吐いた。

「さあどうぞ、入って」

「……失礼します」

セレネは以前はムーディが使っていた部屋に入る。

前任者の面影は皆無だった。

なにしろ、壁紙までアンブリッジ好みのピンク色に変わっている。しかも、ご丁寧に壁や机はゆったりとした純白レースのカバーや布で覆われていた。ドライフラ

ワーをたっぷり生けた花瓶が、棚の上に置かれている。その横には、魔法省大臣の写真が大切そうに飾ってあった。なにより印象的なのは、一方の壁を覆いつくす飾り皿のコレクションだ。しかも、すべての皿の中心に色鮮やかな子猫が描かれている。魔法界らしく、子猫は愛おしく動いていたが、あまりセレネには可愛いと思えなかった。なにより、ここまでたくさん目があると見張られているような気分になる。

正直、セレネの趣味とは正反対である。

鏡の向こうのグリンデルバルドにも見せてあげたい。きっと、彼の趣味とも合わないと言言できる。

「座りなさい、ゴースト」

アンブリッジはハート形の椅子を指さした。セレネは素直に座ることにする。

「さてと。私はハーブティーを飲むとして、貴方はどうします？　貴方もハーブティー？　それとも、紅茶？　コーヒー？　何でも構わないわよ？」

アンブリッジは美味そうな蠅を飲み込もうとするガマガエルのような顔をしていた。飲み物の名前を言うたびに、杖を振りながら机の上にカップやグラスが現れ

る。

「なんでもですか？」

「ええ、なんでも。かぼちゃジュースだってあるわ」

「では、コーラを」

「ええ、コーラね。……え？」

アンブリッジは一瞬、虚を突かれたように瞬きをする。

魔法界には、マグルの世界的飲料水であるコーラは存在しない。さすがのアンブリッジも用意していないのだろう。セレネの発言に、少し戸惑っている。

「ありませんか？」

「……ちよつとないわね」

「残念です……それでは、紅茶をお願いします」

アンブリッジは立ち上がるとセレネに背中を向け、大げさな身振りで準備をし始めた。

その後姿を見ながら、先ほどまでのやり取りを思い返す。

アンブリッジはセレネが「コーラ」を頼んだとき、一瞬、それを受け入れるよう

な反応を示していた。つまり、コーラが飲み物であると知っている。魔法界の人間はマグルの事情に疎い。普通であれば、そもそもコーラが何であるかすら分からないはずだ。

カフェインに関する知識と合わせて、彼女は意外とマグルの情報を知っている。これは意外な発見だ。なにしろ、現魔法省大臣は純血主義者である。その側近ともなれば、ほぼ確実に純血主義者だ。事実、今までの露骨な28族鼯鼠からして、アンブリッジは純血主義者である。

しかし、彼女はマグルの知識を持っている。マルフォイのように、生粋の純血生まれの純血主義者なら知らない情報だ。

つまり、彼女はマグル生まれ、もしくは、半純血ということになる。そんな彼女が、純血主義に走った理由は――

「さあ、どうぞ。熱いうちに召し上がれ」

アンブリッジは不吉に甘い微笑をたたえ、カップを持ってせかせかとやって来た。お茶会と言ったくせに、自分のハーブティーは入れていない。こちらを完全に舐めている。

「アンブリッジ先生の分がありませんよ？ 私だけが飲むなんて、申し訳ないです」

「いいのよ。貴方の分が先にできたのだから。さあさあ、飲みなさい。寝る前に、ちよっとおしゃべりしましょう」

「……では、お言葉に甘えて」

セレネは左手でカップをつかんだ。わざと軽く息を吹きかけ冷ますような素振りをしたあと、一口、飲むふりをする。もちろん、唇は固く結んだままだ。カップを傾けながら、純白のテールブルかけの下で右手を動かす。正確に表現するなら、右手の袖に隠し持った杖をカップに向ける。そして、自分が飲んだと見せかける分だけ、無言の消失呪文で消した。

これなら、飲んでいないとバレない。

「……なかなか素敵な味ですね」

セレネは飲んでもないのに、感想を述べた。

「アッサムに近い味でしたけど……あたりでしょうか？」

「ええ、そうよ。貴方、紅茶に造詣が深いの？」

「実は、あてずっぽうです」

セレネは本当のことを口にする。紅茶の種類など、アッサムとダージンしか知らない。ただ、この時、セレネは不思議そうに小首を傾げてみせた。

以前、リータ・スキーターに真実薬を入れた紅茶を飲ませたとき、彼女は真実の感想を口にしてしまったことに疑問を持った素振りをしていた。実際に服用した人の真似をすることで、真実味が増すに違いない。事実、アンブリッジはすっかりセレネが紅茶を飲んだと信じ込んでいる。彼女の嫌らしい口元が、ますます横に広がった。

「それじゃあ……貴方、ハリー・ポッターとどういう関係なのかしら？」

「ハリー・ポッターですか？」

なるほど、とセレネは考える。

どうやら、アンブリッジはセレネがハリーたちダンブルドア側なのか、それとも、魔法省側なのか決めかけているらしい。確かに、セレネはダフネたち28族と仲が良い。表面上はグリフィンドール生と接する機会が少なく、少なくとも、アンブリッジの见ている範囲内でハリーと話したことはない。

だが、セレネはヴォルデモートの復活を目にした三人の一人である。

声高に復活を掲げないだけで、ダンブルドアの仲間になっている可能性も捨てきれないと疑っているのだろう。現実には、ダンブルドアとの繋がりはなく、その代わりにグリンデルバルドと繋がり、ハリーを利用して蛇男を打倒しようとしている一生徒である。

セレネは紅茶に目を落としながら、あたりさわりのないことを静かに答えた。

「生き残った男の子。代表選手として互いに戦った相手。それくらいですね」

「そう、他にはないの？」

「ええ、ありません。それ以上も、それ以下も。……アンブリッジ先生は、ポッターのことをどのようなようにお考えなのですか？」

紅茶から視線を上げ、今度はアンブリッジに話題を振ってみる。

「初日から先生に罰則を受けたと聞きました」

「……そうね。手のかかる生徒だと思ってるわ。なかなか本当のことを言ってくれない、可哀そうな子」

アンブリッジはそう口になっているが、顔は醜く歪んでいる。本心から言っている

のではないことが、こちらにも丸わかりである。

「意外です。先生は、ポッターが嫌いなのかと思っていました」

「……まさか、嫌いな生徒などいませんわ。あなたはどうか、ゴースト？　ポッターが嫌い？」

「嫌いではありませんね」

「では、好きなの？」

「さあ、そうとも言い切れません」

セレネは本当のことを答えた。

ハリーのことは嫌いではない。かといって、好きなわけでもない。羨ましいと妬んでいた頃もあったが、優等生に固執しなくなった現在、正直なところどうでもいい。

どちらかといえば好感の持てる人間である。正確に表現するなら、監督・脚本セレネ・ゴースト、脚本協力ゲラード・グリンデルバルドの掌で素直に踊る可愛らしい演者だ。

もちろん、そのままのことは答えられない。

「オスカー・ワイルドの格言をご存知ですか？ 人間とは魅力があるか、さもなくば退屈か。そのどちらかだそうです」

「……それで、ポッターはどっちだと思うの？」

セレネが断言を避けたせいか、アンブリッジの口調に苛立ちが混ざってきているのを感じる。

「私は前者だと。少なくとも、彼の言動は私を退屈させません。力がないのに権力に歯向かう姿勢は、思春期ならではの奇行なのか、それとも彼本来の気質なのか。実に興味深い」

セレネは、また紅茶を飲むふりをした。少しぬるくなってきたので、今度は半分くらい紅茶の量を減らす。

「もっとも、おそらく思春期ならではの行動でしょう。きっと、彼は権力に反発することをカッコいいと思い込んでいるのでしょうね」

「つまり、ポッターは思春期が過ぎたら普通になると思っているの？」

「思春期を引きずる可能性もありますけど……そうやってしまったら、現実を直視できない退屈な人になりますね」

セレネは少しだけ微笑んだ。

ちなみに、セレネはアンブリッジに魅力も、かといって退屈も感じない。なにしろ、目の前のピンクの塊はガマガエルだ。人の形をしているが、内面はゲゴゲコ鳴いているだけである。それでも、どちらかに定義しろと言われれば、おそらく退屈だ。こうして話しているうちに、だんだんとアンブリッジの底が見えてきたような気がする。

「……そう。では、次の質問ね。私かポッター、あなたはどっちにつくの？」

「またまた難しい問題ですね」

セレネは苦笑いを浮かべた。

きつと、アンブリッジはセレネが真実薬をかなり飲み干したのを見て、かなり切り込んだ質問をしてきた。セレネは少しだけ悩むふりをした。

「正直、ポッターの仲間にはなりたくありません。いろいろと気苦労が多そうですから」

「では、私側ね。貴方は頭がいいもの。きつと、こっちを選んでもくれると思っています。魔法省に就職してからも、私が面倒を見てあげるから安心なさい」

「あー、先生。私は魔法省に就職するつもりはありません」

セレネが正直に答えると、アンブリッジは驚いたように目を丸くした。数度瞬きをして、ようやくセレネが何を言ったのか理解したらしい。

「あら、どうして？ 貴方は成績もいいし、ポッターと違って犯罪歴もない。問題ないと思うわよ？」

「先生、私に政治が向いているかどうか分かりません。」

それに、私の生い立ちがふさわしいものではありません」

「馬鹿なことを言わない！」

アンブリッジはきびきびと言った。

「貴方の生い立ちは、すでに調べてあります。母親はメアリー・スタイン。由緒正しきフランケンシュタイン一族の末裔ですわ」

「しかし、おそらく……私の父は……。それに、私はマグルに育てられました」

セレネは少し目を伏せた。寂しそうな表情で、残った紅茶を見下す。

「いまは優しい友だちのおかげで、楽しく学校生活を送ることができています。後輩たちも慕ってくれて、先輩方にも恵まれて……。でも、私生児であること、そし

て、成育歴は変えられません。きつと、いまは大丈夫でも、純血育ちを尊ぶ魔法省では……私なんて……」

「今から弱気になっていたのでは駄目よ、セレネ・ゴント!!」

アンブリッジは強い口調で言ってきた。セレネがこわごわ目を上げると、アンブリッジの顔から嫌らしい笑みが消えていた。いつになく真剣かつ真面目な表情を向けられている。

「マグルの血がなに？ 成育歴がなに？ 貧富の差がなに？ そんなものは、ねじ伏せればいいの！」

アンブリッジは授業では見せたことがないほど、熱意溢れる目をしていた。だが、ふと我に返ったのだろう。アンブリッジは少し身を乗り出していたことに気づき、慌てて椅子に座り直した。その様子を見て、セレネは柔らかな微笑みを浮かべた。「ありがとうございます。なんだか……先生には本音で話しやすいです。私、これから頑張ります」

セレネは紅茶を最後の一滴まで飲み干すふりをすると、元気よく立ち上がった。「お茶、美味しかったです。ありがとうございます！ 先生のおかげで、少し

気持ちがすっきりしました」

「え……ええ、良かったわ」

アンブリッジは少し戸惑っている。だが、すぐに普段の調子を取り戻し、嫌らしいガマガエルにふさわしい笑顔を張り付けていた。

「また何か不安なことがあれば来なさい。相談に乗ってあげるから」

「ありがとうございます、それでは失礼しました」

セレネは一礼すると、にこやかに退室した。

しばらく地下に続く道を歩いていたが、猫一匹も後をつけていないことを確認すると、近くの通路に飛び込んだ。もうこれ以上、誰かに見つかるわけにはいかない。再び、アンブリッジに見つかるなどもつてのほかだ。セレネは目くらましの呪文を自らにかけた。そして、8階に一番近い道を駆け上がる。

『最後のアレは演技だろ?』

「もちろんです」

ポケットから響く声に、小さく答えた。

「トップが変わらない限り、就職はありません」

『あのガマガエルの見立てはどうだ？　少しは評価が変わったか？』

「いいえ」

セレネはきっぱりと言い放つ。だが、ちょうど目の前をグリフィンドール付きのゴースト首無しニックが通り過ぎていく。セレネは足を止めると、さらに声を潜めた。

「スリザリン寮出身のマグル生まれか半純血。少なくとも、両親のどちらかはマグルですね。ただ、コーラやカフエインは知っていてもオスカー・ワイルドは知らず、貧しい生活を強いられ生きてきた。大方、生い立ちはそんなところでしょ」

『付け足すなら、マグルの生活は完全に切り捨てている。家族の付き合いは皆無だ。部屋に家族の写真は一枚もなかっただろ？』

「……あまり内装を思い出たくありませんが、そうですね。魔法省大臣の写真はありませんけど、他の写真は一つもありませんでした」

『家族とのつながりは完全に断ち切り、権力のある男を崇拜しているふりをしながら、自分が少しでも頂点に立とうと企んでいる。ただの野心家だ』

首無しニックの姿が完全に消えたのを見計らって、セレネは階段を駆け上がった。

た。

『あれは、お前に自分を重ねてたぞ。自分の生い立ちをな。』

底は見えた、実に退屈だ』

「私も同感です」

『ああいう女は、気をつけろ。平然と部下の手柄は上司のもの、上司の失敗は部下の責任にしてくる。もし、お前があの子の下について手柄を上げたとしても、それはすべて彼女のモノになる。』

……まあ、あの女に仕える気などないと思うが』

「当然です。ガマガエルの御機嫌取りなんて反吐が出ます。それだけに、権力とは恐ろしいと思いますね」

人間的にも退屈過ぎるガマガエルに仕えるつもりはない。

だが、彼女には権力がある。

策を練らなければクラブを続けられないほど、権力の力とは面倒なものだ。体罰に近い罰則を行っているのに、権力を盾に辞めさせることはできない。権力さえあれば、生徒の面談に真実薬を使わせることだって合法にできる。

ガマガエルの顔をうかがいながら、策を考え、行動をする。非常に面倒である。
「ガマガエルや小心者ではなく、もっと人間的に魅力的な人が権力を握って欲しいです」

『だったら、お前が権力を握ればいい』

グリンデルバルドの言葉に、セレネは一瞬、足を止めた。

「……私が？」

グリンデルバルドの声は非常に愉快そうだった。その声は、蛇のように心の隙間に入ってこようにする。

『権力はいいぞ。蜜の味がする。すべてが自分の思い通りに動く。誰の顔も気にすることなく、思い通りに駒を動かすことができる』

「その分、失敗はすべて自分の責任になる」

『部下に押し付ければいい』

「ガマガエルと同じ思考はごめんです。話はここまでです。もう着きますので」

セレネはグリンデルバルドの提案を一蹴すると、ようやく8階に辿りついた。

必要の部屋の前に立つと、するするとただの壁から扉が現れた。きっと、ハリー

がもう中にいるに違いない。

セレネは重たい扉を押し開けた。

「セレネ、遅いよ」

案の定、怒った顔のハリー・ポッターが待っていた。茶の準備は一人でしたのだろう。テーブルの上には2人分の茶菓子と紅茶がセッティングされていた。

「ごめんなさい、アンブリッジにつかまっていたので……」

「もしかして、罰則？」

ハリーの視線がセレネの手の甲に向けられる。セレネは問題ないと手を振りながら、ハリーの前の席に腰を下ろした。

「茶会に誘われただけです。お茶に真実薬が入ってましたけど……まさか、これには入ってませんよね？」

「入っているわけないよ！ だいたい、作り方なんて知らない。君は、僕の魔法薬学の成績を知ってるだろ？」

「あれはスネイプ先生の影響だと思いますよ。先生が変われば、もう少し成績が上がるかと」

セレネはそう言いながら、ハリーの淹れた紅茶を飲んだ。もとより、ハリーが真実薬を盛るとは思っていない。

「……美味しい」

セレネは思わず、本音を呟いてしまった。茶葉の質もあるだろうが、セレネが自分で淹れるよりも美味しい。セレネが少し目を見開いているのを見て、ハリーは少し照れた顔で話し始めた。

「ダーズリー家で特訓されたんだ。ペチュニアおばさんがお茶の淹れ方にうるさくて」

「なるほど、理解しました」

「でも、真実薬を生徒に使うのは違法だって……セレネは大丈夫だった？」

「もちろんです。対策はありますし、素直に飲んでいたら……それこそ、今頃は罰則を受けていますよ」

セレネが悪戯っぽく笑った。

「ところで、前回の傷痕が痛んだ件ですけど……」

セレネは鞆から折り畳んだ新聞を取り出した。

「これが、8月31日に傷が痛んだ原因として考えられる事件です」

セレネはとある三面記事を指さした。8月31日の午前1時、魔法省にスタージス・ポドモアという魔女が侵入したという記事だ。しかも、最高機密の部屋に侵入しようとしたらしい。

「この魔女は、弁明を拒んでいます。普通なら弁明の一つくらいするはずなのに、容認も否認もしていません。これって、おかしいと思いませんか？

きつと、この魔女はヴォルデモートの配下で最高機密の部屋から何かを盗み出そうとした。しかし、それが失敗に終わって、ヴォルデモートが怒り狂った。それが起因し、あなたの傷痕が痛んだのだと推察できます」

「うん、僕もこの事件は知ってるよ。でも、スタージスはヴォルデモートの配下じゃない」

セレネの説明を受け、ハリーは断言した。

「だって、スタージスは騎士団員だ」

「騎士団？」

「あ、セレネには言っていなかったっけ……ごめん」

ハリーの顔に罰の悪そうな色が一瞬過る。

「騎士団は、ダンブルドアがヴォルデモートに対抗するレジスタンスのことだよ。『不死鳥の騎士団』って言うんだ。スタージスは騎士団の一人で、前回の戦いから参加している。絶対にヴォルデモート側ではないよ」

「……つまり、彼女はヴォルデモートに操られ、最高機密を盗み出そうとしたということになりますね」

セレネは指を口元に添えながら、頭の中で今手に入ったばかりの情報を整理した。「きつと、服従の呪文でしょう。だから、彼女は正気に戻った時、なんのことだか分からず、容認も否認もできなかった」

「うん、その方が僕もしっくりくると思う。」

ハーマイオニーやロンは、スタージスが魔法省に嵌められたって思っているんだ。スタージスを捕まえるために、でっちあげたって」

「……グリフィンドール生は、魔法省に敵愾心を持ちすぎですね。その気持ちは理解しますけど」

セレネは再び紅茶を口に運んだ。ハリーも疑問が解けて安心したのだろう。先ほ

どよりやわらかい表情で紅茶を飲み、茶菓子に手を伸ばしていた。

「でも、セレネ。この最高機密ってなんだろう？」

「……それが、武器なのかもしれませんね」

セレネはカップを置くと、テーブルに肘をついた。

「ヴォルデモートが手に入らずに怒り狂うほどのものです。可能性としては考えられます。」

スタージスは騎士団員として、その最高機密を守ろうとしたが、逆に服従の呪文をかけられてしまったと」

「それはおかしいよ、セレネ」

ハリーもカップを置いた。

「だって、魔法省に武器があるなら、なにもスタージスに服従の呪文をかける必要はないよ。魔法省に務めている死喰い人だっているし、ルシウス・マルフォイなんて自由に動き回っている。尋問の日、あいつを魔法省で見た」

「尋問？」

「あ……これも言ってなかったっけ。僕、夏休みに尋問を受けたんだ」

ハリーはすまなそうに教えてくれた。

ハリーは夏休みに吸魂鬼に襲われ、従兄を助けるために守護霊の呪文を使ったせいで退学処分になりかけたらしい。マグルの前で魔法を使ったため、魔法省の大法廷で尋問にかけられたそうだ。ダンブルドアが弁護に入ってくれたおかげで、無罪を勝ち取ったらしい。

「……未成年の魔法使用で大法廷……」

セレネは呆れ果てしまった。

きつと、グリンデルバルドも同じ気持ちだろう。守護霊の呪文はマグルに効果がなく、人を傷つける類の魔法でもない。その程度、ちょっと説教されるくらいで十分だ。大法廷で重罪人のように裁かれる問題ではない。それだけ、魔法省大臣はヴォルデモートの復活を認めたくないのだろう。

「愚か者が権力を持つと、本当にめんどくさい」

セレネは、ハリーに聞こえないくらい小さな声で呟いた。

「セレネ、何か言った？」

「いいえ、なにも。ところで、ルシウス・マルフォイは魔法省で何をしていたんで

すか？」

「ファッジと話してたよ。ファッジに寄付をしに来たんだって。でも、ウィーズリーおじさんは『きつと、こつそり大法廷に入り込もうとしていたんだろう』って言ってたよ」

「ちなみに、その場所は？ ファッジの執務室の前ですか？」

「違う。えっと、どこだっけ……」

セレネが問いかけると、ハリーは腕を組んで考え始める。

「あー、たしか神秘部の前。大法廷のある階までエレベーターはないから、神秘部の横の階段から降りていくんだ」

「神秘部ですか」

セレネは魔法省の役職について、詳しく知らなかった。

ただ、字面をみれば何をする場所かだいたい予想がつく。たとえば『魔法事故惨事部』なら、魔法の事故を処理したり、マグルの記憶を操作したりする部署に違いない。だが、神秘部は別だ。何をするところなのか、さっぱり想像がつかない。

「私は魔法省の部署について詳しくないので分かりませんが、神秘部とは何をする

ところでしょう？」

「僕も知らない。無言者が務めてて、なにか研究しているって、ウィーズリーおじさんが教えてくれた」

「なにかを研究している部署、ですか」

セレネは言葉を繰り返しながら、ルシウス・マルフォイがそこにいた理由を考え込む。

第一、ダンブルドアが弁護に立っている時点で、ハリーの無罪は決まったも同然だ。愚か者大臣と賢者が互いに競い合ったとき、どう考えても前者が負ける結果しか見えない。それをルシウス・マルフォイが見物しに来ると思えなかった。

そうなると、神秘部に用があったと考えるのが妥当だ。

神秘部で研究している何かが武器であり、それをマルフォイは見ようとした。しかし、自分で取り出すには危険過ぎる。そこで、スタージス・ポドモアに服従の呪文をかけて代わりに取りに行かせようとした。

その仮説は、十分にありえる。

だが、ただファッジに寄付をしに来たというだけの可能性も捨てきれない。

セレネはそのことをハリーに話すと、彼は納得したように頷いていた。

「きつと、それだよ。神秘部に武器があるんだ。」

「そうだ、たしかトックス……えつと、騎士団員の闇払いが尋問の日に言ってたんだ。『ダンブルドアに言わなくちゃ、夜勤はできない』って。それを聞いたウィーズリーおじさんは『私が代わってあげよう。どうせ報告書を仕上げないといけない』って言った。」

他にも、なにかを護衛する任務があるらしい。僕の見張りかと思ったけど、もしかしたら、神秘部にある武器の見張り？」

最後の方の言葉は声を潜めるようにして話してきた。セレネは静かにうなずいた。

「十分にありえる話です。闇払いや魔法省職員なら、神秘部を見張りやすいでしょうから。」

もっとも、これは仮説です。根拠も薄く、妄想に近いかもしれません」

「妄想は大きだよ。……でも、武器は何だろう？　神秘部で何を研究しているんだ？」

「さあ……私にはなんとも。」

それよりも、騎士団には他に誰が所属しているのでしょう？」

セレネは話題を切り替えた。現時点でダンブルドアに味方している魔法使いを知りたかった。

「えっと、シリウスおじさんにルーピン先生。ムーディ先生も騎士団員で、あとはウィーズリーおじさんとおばさん。ホグワーツでは、マクゴナガルやハグリッド、それからスネイプも騎士団員。セレネが知っている人では、そんな感じかな」

「なるほど、そうですか」

セレネは紅茶を飲みながら思考を深めていく。

「ハグリッドの姿を今学期、一度も見えていないのは騎士団の任務ですか？」

「たぶん……そうだと思う。詳しく知らないけど」

あまり頭が良いとはいえないハグリッドに数か月もかかる任務をさせるとは、ダンブルドアも大胆なことを考えるものだ。それとも、ハグリッドでないとできない任務だったのだろうか。たとえば、狂暴な魔法生物を手懐けて自陣に引き入れるとか。

「そういえば、防衛術の自習の話はどうなりましたか？」

セレネが新しく話を振ると、ハリーは少し嬉しそうな表情になった。

「うん、実は――」

64話 もつとも邪悪なる闇の魔術

結果的に、ハリーたちの防衛術の自習は『必要の部屋』で行われることになった。参加者は毎週1、2回のペースで集い、ハリーの計画したカリキュラムで防衛術を学んでいく。ザカリアス・スミス以外は文句を言うことなく、誰もが真剣に防衛術を実践している。

セレネの仕事は、セドリックと一緒にハリーのサポートをすることだ。

第一回目の会合こそヘスティアの姿を借りて参加したが、必要の部屋だと無関係な人物に見られる心配はない。だから、セレネは自分の姿のまま参加する。

ハリーたちが訓練をしやすいように場を整え、戸惑っている参加者にアドバイスをする。やることはそれだけだが、試験対策クラブとの違いを実感する。両者ともに参加者が必死になって呪文の練習をすることには変わらないが、そこに流れる空気が違う。

こちらの方が緩やかで、セレネの方が緊張感がある。

きつと、これがハリーと自分の違いなのだろう。

「……なんかさ、セレネ。試験対策クラブの時と態度が違うような気がするよ」

ダフネ・グリーングラスが疲れたような笑みを浮かべながら囁いてきた。

「対策クラブだと、もっと厳しくない？　ぴりぴりしているというか、油断大敵
というか」

「当然、これとあれとでは目的が違いますので」

セレネはジニー・ウィーズリーが粉碎した練習用人形を修復しながら答えた。

「これは、ハリー・ポッター主催の防衛術の訓練です。ホストの意向に従う必要があります」

ハリー主催なので、セレネはカリキュラム及び指導方針に口を挟んでいない。

故に、ときどき「これでは甘すぎる」と感じることもある。だが、リーダーはハリーである。下手に口を挟み、ハリーとの関係を悪化させた場合、最悪——ダンブルドアや不死鳥の騎士団に関する情報を搾り取ることができなくなってしまう。

現状、それだけは避けなくてはならない。

だから、組織の名称が「ダンブルドア軍団」、略してDAに決まった時も反対しない気持ちを抑えた。ハーマイオニーでさえ、この名称の危険性に気付いていない。

嬉々として先日の名簿の上に名称を書き込んでいる。

万が一、どこから活動が漏れたとき、ハリーたちはどのように責任をとるのだろうか。

この活動は、ダンブルドアが主催しているわけではない。しかし、名称に名前があるだけで、ダンブルドアが主催する活動かと疑われてしまうかもしれないのだ。

「せめて、ホグワーツ遊撃隊にすればいいのに」

「セレネ？」

「いえ、独り言です。今日は先に上がりますね、ちょっと用事がありました」

セレネは一足先に「必要の部屋」を出た。

念のため、「ダンブルドア軍団」の名簿にはルーンを刻んである。ハーマイオニーが事前にかけて魔法が発動した場合、羊皮紙が炎上して証拠隠滅を図るためのルーンド。密告者が余計なことを語らない限り、セレネが参加していた証拠はつかめないし、ダンブルドアまで責任が及ぶことはない。

ヴォルデモートが暗躍している現段階で、ダンブルドアの影響力がこれ以上下がるような事態になることは避けたかった。

「……なんだか、私も暗躍しているみたい」

セレネは口の中で呟いた。

先日の茶会以来、アンブリッジは何やら馴れ馴れしく接してくる。

おそらく、セレネに不遇な学生時代の自分を重ねているのだろうが、それは大きな勘違いだ。アンブリッジが思うほど、セレネはマグルの暮らしを嫌っていないかつたし、権力に対する執着心も薄い。だが、これも現時点でアンブリッジに嫌われると色々と面倒になるので、素直に受け入れるふりをしながら躲けている。

こちらの顔色、あちらの顔色を窺いながら策を練っていく。

正直、非常に面倒くさい。もとより人間関係なんて最小限で構わない。ずっと大好きな義父の傍で音楽を聴きながら本を読んでいたのに、それを許してくれない世界が少しだけ憎く感じた。

これも全部、ヴォルデモートが悪い。

『お疲れのようですね、主』

秘密の部屋に着くと、アルケミーが心配そうに話しかけてきた。

『主のために、私が茶を淹れることができればよいのですが』

『いいのよ、ありがとう。気持ちだけ受け取るわ』

セレネは微笑み返しながら、両面鏡を取り出した。

「助言者。いまは大丈夫ですか？」

『——ッ、ゴホッゴホッ。大丈夫なものか。調子が凄く悪い』

セレネが話しかけると、グリンデルバルドが咳き込みながら返事をする。

『もう天の国が近いかもしれん』

「大丈夫です。貴方が落ちるのは、きっと地獄ですよ」

『違う』

グリンデルバルドは笑おうとし、また咳き込んだ。背中を丸めるようにしながら

咳をする姿は、本当に苦しそうに見える。セレネはその姿を淡々と見下していた。

「それで、なにか思いついたことはありませんか？」

『君は年寄りを労わらないのか？』

「質問に答えてください」

『……ヴォルデモートの不死の秘密についてだ』

グリンデルバルドは静かに答えた。

『フロイライン。君は自慢の目で彼を視たことがあるか？』

「……ええ。ですが、死の線は見えませんでした」

セレネは軽く眼鏡に触れた。直死の魔眼を通して物を見れば、なにであっても必ず禍々しい死の線が奔っている。壁も、床も、呪文にも、セレネ自身の身体にも――。しかし、ヴォルデモートの身体だけは例外だ。彼の身体だけは、いくら注視しても線は欠片も視えなかった。

『不死になる方法は、いくつか考えられる。たとえば、吸血鬼になれば寿命の縛りから解放される。しかし、吸血鬼は制約が多い。十字架やニンニクはおろか、流水を渡ることすらできなくなる。』

……おそらく、ヴォルデモートが選んだ方法は分霊箱だ』

「分霊箱？」

『「もっとも邪悪なる闇の魔術」を読んだことあるか？ そこに記載されている方法だ。魂を分かち、道具の中に閉じ込める。たとえば、片方の魂が殺されても、もう片方の魂は健在だ。だから、死ぬことはない』

「もっとも邪悪なる闇の魔術……ちょっと待ってください。『アクシオ―来い!』」
セレネは杖を振った。すると、鞆の中から一冊の本が飛び出してくる。第二の課題後、偽ムーディから貰った禁書だ。おぞましい闇の魔術の粋が詰めこまれた本書をあまり読み返したくはないが、いま文句を口にしてゐる暇はない。

「……これですか」

分霊箱のページは、一際悍ましい方法が記載されていた。

呪文もさることながら、その方法は健全な精神の持ち主ならば絶対にやらないものだ。

「……殺人によって、魂を分ける?」

『そうだ。確信したのは、つい先日だよ。』

確認しようか、フロイライン。君は2年生の時、若き日のヴォルデモートを目撃したのは確かか?」

「ええ、日記に宿っていた過去のヴォルデモートですけど……まさか……」

「そう、そのまさかだ」

セレネがはっとすると、グリンデルバルドは満足そうに呟いた。小枝のような指

を組み、にやっと齒のない口に愉悅の色を浮かべる。

『分霊箱だよ。その日記はヴォルデモートの魂の欠片が封じ込まれた分霊箱だったのだ。それから、お前の破壊した指輪もそうだ。破壊した時、ヴォルデモートの誘惑を耳にしたと言っていただろ?』

「……ええ。てっきり、なにかの罠かと思いました」

『まあ、罠だろうよ。相手を罠に嵌めようと思かし、相手に合わせて誘導しようとするなど通常の録音魔法では不可能だ。魂が封じ込められていたのだろうよ』

セレネはグリンデルバルドの言葉を聞きながら、テーブルの上に置かれた指輪に視線を向ける。

「ですが、2つ破壊しても蛇男の身体に死の線は見えませんでした。ということは、あいつは他にも分霊箱を作っているということでしょうか?」

「ほぼ確実に」

グリンデルバルドの答えを聞き、セレネの背筋が震えた。

少なくとも、ヴォルデモートは自分が不老不死になるために、三人以上の人間を殺した。自分と敵対するから、邪魔をするから殺したわけではない。彼は自分を不

死にする利己的な理由で殺している。セレネには到底、考えられない理由だった。

「では、10も20も作っている可能性があると？」

『さすがに、そこまで魂を分けることは難しい。たとえるなら殺人というナイフで、リングを切り分けるイメージだ。切り分ければ分けるほど、本来のリングの体積は少なくなっていく。切り分けにも限度がある。少なくとも、10以上は作れまい。だが、裏を返せば、10回程度までなら切り分けができ、分霊箱の作成が可能になる』

「……つまり、最大でも残り8つの分霊箱があるということですね」

『元から魂の宿っている本体を入れて、残り7つだ。だが、残りが7つかどうかは——げほ、げほっげほっ』

グリンデルバルドは激しくせき込み始める。

セレネは彼が落ち着くのを黙って待ってから、ゆっくり話しかけた。

「私やハリーが予期せず破壊したように、誰かが破壊している可能性がありますよね。もしかしたら、ダンブルドアがとくに気づいて、破壊して回っているかもしれません」

『それはない』

グリンデルバルドは断言する。

『あいつが自分から動くことはない。なにせ、臆病者だ』

「臆病？ ダンブルドアが？」

セレネは少し目を見開いた。

「臆病者なら、貴方と世紀の決闘をしたり、レジスタンスを率いたりしないはずで
すけど」

『あいつは賢者を演じているだけに過ぎない。善人であろうと固執するあまり、自
らの安息の地に閉じこもり、動くことのできない臆病者だ』

「……ずいぶんと辛辣な評価ですね」

セレネは音を立てるように本を閉じる。

彼はダンブルドアと決闘し、その結果、敗北して寂しい独房に収監された。自分
を打倒したダンブルドアを憎悪していても不思議ではないが、もう少しポジティブ
な評価だと考えただけあり、グリンデルバルドの返答は意外なものであった。

「あなたは、ダンブルドアがいたからイギリスで悪事を働かなかったと聞きました。
だから、てっきり彼のことを一定以上評価しているものだ」と

『……ああ、評価はしているとも。

あの男は、過去の過ちを償うために善人であろうとしている。たとえるなら……そうだ。君は、アーサー王伝説を知っているだろ？ ダンブルドアは最初、自分がアーサー王になろうとしていた。魔法界とマグル世界を平定する王にな。ああ、あのまま進んでいれば、きっと立派な騎士王になっていただろう』

グリンデルバルドの瞳に郷愁の色が宿った。過去の栄光を懐かしむように、目元を緩ませている。

「ですが、ダンブルドアは王になっていません」

『ああ、そうだ。とある事件が起きて、あいつは王になることを諦めた。それ以降、懺悔と償いのため、王ではなくマーリンになろうとした。正義の王を導くための賢者だ。この場合、私やヴォルデモートを倒すための王だろう。

だがな、ダンブルドアはここぞという場面で冷徹になれない。悔恨が邪魔して、善人であろうとするからだ』

賢者に甘さはいらない。

王や世の在り様が正しい道を進めるように、機械的かつ客観的でなければならな

い。

『こんなたとえ話を知っているか？ 片方の船に300人、もう片方の船に200人、この二艘の船に致命的な穴が開き、3分もしないうちに、船は沈んでしまおうだろう。修復できる魔法使いはダンブルドアしかない。さて、ダンブルドアが真の賢者ならどうすると思う？』

「……300人の方を直します」

『そうだな。より多くの人が助かる方から修復する。』

しかし、ここで200人の方の船が「こちらを先に直せ」と要求してきた。……
ああ、ここで真の賢者ならどうするだろう？』

「……無視する？」

『もしくは、邪魔でうるさい200人を殺す。300人の船さえ生き残れば、あとは沈んでしまっても諦めるしかない。多数を救うべきだ。少数の犠牲は仕方ない。真の賢者なら心を痛めることはないだろう。だが、あいつは嘆いてしまう。あいつはたとえ心が痛むのは一瞬だけだと思いつくとしても、結局は行動に移すことができず、2つの船を沈めてしまう。』

これが、偉大なるダンブルドアの欠点だ』

グリンデルバルドは静かに言い放った。

『あいつは常に悩んでいる。自己の選択が本当に賢者として、善人としてふさわしい道なのか。しかし、善人と賢者を同時に演じることとはできない。だから結果的に自分自身は手を下せず、城に引きこもって成り行きを見守ることしかできなくなる』

「……今まで考えたこともありませんでした」

セレネは鏡を見下ろした。

だが、少し考えれば分かることだったのだ。いくらホグワーツから離れられないとはいえ、わずか十数年前まで生徒たちの過ごすイギリス魔法界は危険な状態に陥っていた。ヴォルデモートの脅威がすぐ隣にある生活など、安息などできるはずがない。

『ダンブルドアが自ら出ていけば、きっとヴォルデモートなど早くに消滅させることもできただろうよ。だが、あいつはそれをしなかった。』

その選択をとるのが怖かったのか、あるいはヴォルデモートが愛に目覚めると希望的観測を抱いていたのか……まあ、いまはどうでもいいことだ』

ここで、またグリンデルバルドは咳き込んだ。

『ダンブルドアの話はここまでだ。他に聞きたいことは？』

「……ありません」

『それで、例の報酬は？』

「もう準備はできています。明後日が予定日ですね。私がホグズミードに行ける日ですから」

『早くしてくれ。正直、私は長く持たん』

「ご謙遜を」

グリンデルバルドは咳き込んでいるが、目の奥の光は消えていない。セレネは普段通り、たいして心配する素振りを見せずに鏡をしまい込んだ。

これが、ヌルメンガードに収監された男との最後の通信になった。

次の日、セレネは日刊預言者新聞に目を通して息を零した。

一面記事——魔法省大臣が魔法使いの老人ホームを慰問した記事など興味がない

い。問題は二面記事の一番端っこ、わずか数行で片づけられた記事だ。

『最悪の魔法使い　ゲラード・グリンデルバルド、獄中死』

「『今朝方、息絶えている姿を看守が発見した。かねてより体調を崩しており、風邪が悪化して息絶えたと推察されている。なお、遺族は遺体の引き取りを拒否。火葬したのち、ヌルメンガード近辺の山中に散骨することが決まっている』……か。寂しい終わりね、グリンデルバルド」

セレネは新聞を畳みながら、教師用の席へ目を移す。

真ん中の校長席は、ぽっかりと空いていた。ダンブルドアが朝食に参加しないことは珍しい。少し鼻をすすっていても、朝食の席には参加していた。出張なのかとも思ったが、そうでないことは、すぐに判明した。

アンブリッジが胸を張り、どこか偉そうな態度でマクゴナガルに話しかけていた。「校長先生の姿が見えませんが、どこかお出かけになられているのでしょうか？」「いいえ、校長室に。今日は一日、誰とも会わないと言っていました」マクゴナガルはひどく事務的な口調で答えていた。

彼女の言葉の通り、ダンブルドアは夕食になっても姿を見せなかった。

次の日、ダンブルドアは朝食の席に姿を見せた。マクゴナガルが心配そうに何か話しかけていたが、微笑みながら冗談を言っている。しかし、誰が見ても、ダンブルドアの目元は赤くはれていた。

まるで、ずっと泣き腫らしていたかのように――。

「……ダンブルドア、どうしたんだろう？」

ダフネがこっそり尋ねてきた。

「さあ。恋人でも死んだものではありませんか？」

セレネが素っ気なく返すと、ダフネは少し怒ったような顔になった。

「セレネ、真面目に答えてよ」

「真面目ですよ。それより、今日は一緒にクリスマスショッピングをするんですよね？」

セレネはマフラーを巻きなおしながら、ゆっくりと朝食の席を立った。ダフネも慌ててオートミールを頬に詰め込む。

「でも、私と一緒にいいのですか？ ゴールドスタインと一緒にではなく？」

「えっと、アンソニーのクリスマスプレゼントを買いたくて。私、手編みのマフラーとか苦手で……」

ダフネは照れたように頬を赤らめながら、指をもじもじと組み合わせようとしている。

「だから、今年は……その、既製品をプレゼントにしようって……」

「あんだね、その程度の覚悟だとすぐに別れるわよ」

ミリセント・ブルストロードが横から口を挟んできた。いつにも増してメイクをばっちり決め、長い髪を幾重にもウェーブさせている。その立ち振る舞いは、自信に満ち溢れていた。

「せいぜい、指をくわえながら私のカップル成立を見ていなさい」

ミリセントは長い髪に指を通し、ふんと鼻で笑う。セレネとダフネは彼女の仕草にじとっと湿った視線を送った。

「その台詞、何度も言っていて恥ずかしくないのですか？」

「ミリセント、いつでも慰めてあげるからね」

「あんたたち、ひどくない!？」

ミリセントは不満げに口を尖らせていたが、事実その通りになった。

セレネとダフネがグラドラグス魔法ファクション店でマフラーを見ていたとき、怒り狂ったミリセントが入ってきたのである。予想通りの展開に、セレネとダフネは顔を見合わせて互いに苦笑いをした。

「どうしたの、ミリセント。彼氏は？」

「あいつ、私よりロスメルタの方ばかり見てるの。信じられない!!」

ミリセントの口からは、マシンガンのように彼氏だった男の悪口が飛び出し始める。

「もうやってられない！　ダフネ、セレネ、ちょっとストレス発散に付き合っ
てよ！」

「ごめんなさい。私、用事があるから無理です」

セレネは申し訳なさそうに言った。

「なによー。まさか、フレッチリーと楽しくお食事？」

「あれは一度だけです。女友だちと会う約束をしているんです」

「……意外ね。あたしたち以外に友だちがいるとは思わなかったわ」

「辛辣ですね」

セレネは苦笑いをする、不機嫌なミリセントをダフネに押し付けた。そのまま店を出ると、冷たい空気が肌を突き刺してくる。セレネはマフラーで半分顔を覆うと、雪が積もったホグズミード村を歩き始めた。

村のはずれまでくれば、足跡も少なくなってくる。セレネは杖を取り出すと、自分の足にクッションの呪文をかける。すると、足が軽くなり、雪の上を歩いても足跡がつかなくなった。

目指すは、ホグズミード村の最奥——「叫びの屋敷」だ。

昔は一月に1度、世にも恐ろしい叫び声や唸り声が聞こえてきたらしい。だから、誰も近づかないホラースポットだ。セレネは固く閉ざされた扉に杖を向けた。

『アロホモラー——開け』

門が外れる音と共に、ゆっくりと屋敷の扉が開かれる。

セレネは中に入ると、もう一度杖を振った。

『コロポータス——閉じよ』

扉は自動的に閉まり、幾重にも門がかかっていく。その様子を横目で見ながら、

再び杖を振った。無言呪文で杖先から蛇を創り出す。

『誰か入ってきたら教えなさい』

『了解しました』

蛇はとぐろを巻きながら主人の言葉を受け入れる。セレネは蛇が玄関の傍に収まったのを確認すると、屋敷の奥へと進んで行く。しばらく進むと、わずかに扉の隙間から蝋燭の灯りが漏れる部屋を見つけた。セレネは杖を構えたまま、そっと扉に近づき、部屋を覗き込む。

「遅いぞんすよ、セレネ・ゴント」

そこには、リータ・スキーターが佇んでいた。

腰に手を当てて、むすっとした表情をしている。その顔色は、先程のミリセント・ブルストロードと非常に似ていた。

「いつもご苦勞様です。どうですか、義父の調子は？」

「なんぞんすか、あの男は！」

リータは顔を赤らめたまま、ずいずいとセレネに詰め寄って来る。

「面白くないのにニコニコ笑っているし、ちょっとセンスがダサイし、あっしが

作った雑料理も美味いと残さず食べるし……人畜無害過ぎるさんす！ どこをどうすれば、あの男からあんたが産まれてくるさんすか!？」

「直接的な血の繋がりはありませんよ。それで、父の周辺に死喰い人の影はありませんね」

「……今のところはないさんす」

「そう、それなら良かったです。引き続き、よろしく願います」

セレネはリータに微笑みかけると、ゆっくり室内に足を踏み入れる。

暖炉に緑の炎が燃えている。薪がないのに燃えているところから考えるに、あれは魔法の炎なのだろう。それ以外は変哲のない廃墟だった。テーブルは傾いているし、シャンデリアには蜘蛛の巣が張っている。部屋の隅には、ところどころ灰色の埃が固まっていた。

「……それで、あなたは元気ですか？」

セレネはこの部屋にいるもう一人の人物に声をかける。

「ずいぶんと咳き込んでいましたが？」

「ああ、問題ない」

虫食いだらけのソファ―に座っていた男は、偉そうに長い足を組んでいる。

「なにより、あれはすべて芝居だ。迫真の演技だっただろ？」

「そうでしたか？ 私には遊んでいるようにしか見えませんでしたけど」

「手厳しいフロイラインだ」

男はゆっくりとソファ―から立ち上がる。

ゲラート・グリンデルバルドだ。何事もなかったかのように、彼はセレネの前で笑っていた。

「まさか、誰も思うまい。ホグワーツの一生徒が私の脱獄に協力していたとは」

「そして、あなたが脱獄しているとは、誰も思っていないでしょうね。ダンブルドアでさえ、あなたの死を受けて泣きはらしていましたよ」

「それは嬉しい限りだ」

グリンデルバルドは嬉しそうに笑った。

「実に精巧な死体人形だった。私でさえ、本物と見間違えるほどだ。ヌルメンガーの看守は気づかなかっただろうよ」

「お褒めいただき、光栄です」

セレネは軽く一礼する。

セレネがやったことは2つだけだ。

1つはグリンデルバルドの死体を作ったこと。鍊金術の禁忌として人体鍊成がある。鍊金術を使い、ホムンクルスを創り出す要領で死んだ人間を生き返らせる業だ。セレネはこの禁忌を真似、グリンデルバルドそっくりな人形を創り出した。最後に意志を宿らせる術式だけを省略し、瓜二つの死体人形を創り出す。

制作者であっても、よく見なければ分からないほど精巧な出来だと自負している。そして、2つ目が移動手段の確保だ。

真夜中、コガネムシに変身したリータがグリンデルバルドの独房に忍び込む。

他の動物もどきなら侵入できなかっただろうが、リータが変身するのは小さなコガネムシだ。窓の隙間から入り込むなど造作もない。

潜入後、リータはセレネの作った死体人形を床に置く。本物のグリンデルバルドは、検知不可能拡大呪文のかかった巾着袋の中に入り込むだけでいい。あとは、リータが巾着袋を持ったままコガネムシに戻り、独房から脱出すれば解決である。「何はともあれ、無事で良かったです。」

動物もどきの変身下においても、検知不可能拡大呪文は問題なく発動していることは変身術の先生に確認してありました……本当にうまくいくのかは、少し不安でしたから」

「だが、本当に難しいのはこの後なのではないか？」

グリンデルバルドの目が光る。

セレネはぐくりとつばを飲み込んだ。彼の言う通り、ここからが本番だ。セレネは「もっとも邪悪なる闇の魔術」の本を左手に載せ、右手に杖を構えた。

「リータ。水銀は用意してありますね」

「もちろんぞんす」

リータは面倒くさそうにバケツを持ち上げる。たっぷり淵まで水銀が詰まっている。セレネは杖を動かすと、水銀が滑らかな糸のように宙へ上った。そのまま慎重に——呪文書に記された通りの魔法陣を描いていく。

杖の登場により、魔法陣など古臭い技術は使われなくなった。

古くは、魔法陣に魔法理論と発動媒介の術式を書き込み、それに詠唱と自身の魔力を乗せ、魔法を発動していた。現在では単純な詠唱と脳内で演算された魔法理

論、そして、発動を媒介してくれる杖がある。

だが、今から行うような古く複雑で難しい魔法を執り行うときは、魔法陣が必要不可欠になってくるのだ。なにしろ、魔法理論の演算は脳内だけでは足りない。

「助言者、魔法陣の中央へ」

「ああ、分かっている。ところで、フロイライン。この術に失敗したら、君はヒキガエルだ。分かっているな？」

グリンデルバルドと助言者の契約——彼側のメリットは2つだ。

1つはヌルメンガードからの脱獄。

そして、もう1つを今果たそうとしている。これを果たして、ようやく——グリンデルバルドが正式に助言者になるのだ。

「……ええ、でもご心配なく。失敗はしないので」

セレネが真顔で答えると、グリンデルバルドは満足そうに頷いた。そして、ゆっくりと魔法陣の中央へ歩みを進ませる。彼は中央に立つと「いつでも始めたまえ」とでも言うように両手を広げた。

セレネは大きく息を吐くと、グリンデルバルドの胸元に狙いを定めた。

「……『時よ、巻き戻れ。お前は美しい』」

セレネは、魔法理論を構築しながら呪文書に記された詠唱を唱え始める。深い緑色の閃光が奔り、グリンデルバルドの胸元に当たる。閃光は心臓に直撃し、そのまま波紋が広がるように閃光が身体を包み込み始めた。

「『汚いは綺麗 綺麗は汚い さあ巻き戻れ 賢者の時よ』」

セレネは詠唱するたびに、自らの身体まで引き裂かれるような痛みを感じる。体中の血液が暴れまわり、いたるところの血管を破り始めているような感覚だ。口元からは、うっすらと鉄の味が滲んできている。

だが、詠唱をここでやめるわけにはいかない。セレネは歯を食いしばり、その隙間から言葉を放つ。

「『霧の中、汚れた空をかくぐり あの頃へと舞い戻らん』」

セレネが最後の一言を刻み終えると、閃光が止まった。

だが、グリンデルバルドの身体は深緑色に包み込まれたままだ。眩いばかりの光のせいで詳しく見えないが、わずかな肉が剥がれ落ち、骨だけになっている。その骨に肉付けするように、光が新たな肉になり、ゆっくりと形になり始めていた。

——グリンデルバルドと結んだ契約の2つ目。

それは、彼を若返らせること。

「……中年期の姿ですが、それでもいいですか？」

「ああ、問題ない」

深緑の光のうちから、一人の男が現れる。

先程までの骸骨男はどこにもいない。豊かな白髪を逆立て、互いに色の異なる瞳を持つ美丈夫だ。リータに差し出された杖を握りしめ、静かに指の感覚を確かめている。

「あまり若く戻り過ぎるより、このくらいがちょうどよいものだ」

若返った最悪の魔法使いは、セレネに歯を見せるように微笑みかけてきた。

若返りの呪文と魔法陣は、本作オリジナルです。
スペルを考えるの難しすぎる……。

65話 未来視

「——ッうわ」

セレネは肩で荒く息を繰り返しながら、汚れた床に崩れ落ちた。

胸の奥が電流が奔っていたかのように痺れ、呼吸をするたびに内側から壊すような痛みが奔る。セレネは右手を床に押し当てながら、荒い呼吸をゆっくり整える。いつのまにか額から滲んでいた汗が、ぼたぼたと床を濡らしていた。

「……若返りの魔法は禁忌だ」

上から低い声が降って来る。

セレネは視線だけ上に向けた。壮年ながらも凛々しい顔が、こちらをしげしげと見下してきていた。

「術者の魂を削り、代わりに対象の肉体を若返らせる魔法だ。これで、君の魂は2割ほど減らされてしまっただろう」

「……ですが、どこぞの分霊箱と違い、魂の在りかはここだけです」

セレネは左手で心臓に拳を当てる。

「殺人によって、無理やり切り落としたわけではありません。その、一部削っただけです」

呼吸を整えながら、ここに至るまでに調べ尽した内容を復唱する。

「健全なる魂は、健全なる肉体に宿ります。健全な肉体を、維持し続けば……削られた魂も、いずれ元に戻るでしょう」

「確かにその通りだ。それでも、完全な形には戻るまい。

……欲を張って17歳まで時を戻さなくて良かったな。この程度の若返りなら、半年ほどで魂の修復は完了するだろうよ」

グリンデルバルドは淡々と見立てを口にする、再び虫食いだらけのソファーに腰を下ろした。相変わらず長い足を優雅に組み、考え込むように両手の指を這わせている。

「さて、これで契約が完全なものとなった。フロイライン、君は私に何を望む？」
「前にも言ったでしょ。ヴォルデモートを打倒するための助言者になりなさい」
ようやく呼吸が落ち着いてきたので、ゆっくりと立ち上がる。

まだ少し足元と視界が揺れていたが、グリンデルバルドと同じ視線に立つことが

できている。セレネは彼を睨みつけるように見つめた。

「アンブリッジよりヴォルデモートか？」

「ガマガエルはどうでもいいです」

「……了解した。では、そろそろ身を隠すでしょう」

グリンデルバルドはゆっくりと立ち上がった。

「潜伏場所は決めているのですか？」

セレネは立ち去ろうとする男に声をかける。

「ホテルの手配くらいでしたら、すぐにできますけど」

「いや、必要ない」

グリンデルバルドは杖を軽く振ってみせる。

なにしろ、リータ・スキータは優れたマスコミである。調べることに関しては超一流だ。そうして調べた事柄を色眼鏡を通して見るという悪癖があるが、彼女は見事、グリンデルバルドの杖が隠されていた場所を探り当てていた。

新しい杖を用意しなくて済んで、本当に手間が省けた。

だが、その杖を使って余計な悪事を働こうとしているなら話は変わってくる。

「まさか、適当なマグルを殺して、その家を奪うつもりではありませんよね」

セレネは怒ったような視線をぶつける。

「殺人行為は避けていただきたい」

「もちろんだ、フロイライン。余計な魔法は一切使わず、安全な場所に潜伏することを約束しよう」

グリンデルバルドはおどけたように両手を広げる。実に胡散臭い仕草に、セレネは警戒を強めた。せっかく足がつかないように注意して脱獄させたのに、人殺しを行うなど非道徳行為が許されるわけがない。余計な被害を増やすために、彼を味方につけたわけでもなかった。

セレネが疑いの眼差しを向け続けていると、グリンデルバルドはやれやれと首を横に振る。

「適当なマグルの家に潜伏するつもりだ。休暇出張で長期間家を空けている家なら、特に問題ないだろ？」

「本当ですね」

「ああ、私は君に嘘をつかないと約束しよう」

グリンデルバルドはゆっくりと部屋の出口に向かって歩く。

恐ろしき闇の魔法使いグリンデルバルド。ヴォルデモートに対抗するため、闇の魔法への対抗策を知るために彼を解放した。だが、深淵を覗くとき、また深淵もこちらを覗いているという言葉もある。彼を解放することが、はたして最善手だったのだろうか。セレネは今さらになって、少し悩んでしまう。

「さらばだ、フロイライン。連絡は今まで通り、両面鏡で」

「分かりました。ですが、どうして私をフロイラインと呼ぶのでしょうか？ 私には、セレネ・ゴーストという名前があります」

セレネが去り行く背中に言葉をかけると、彼は僅かに横顔を見せて笑った。

「いや、お前に相応しい呼称だ。可愛らしく、まだまだ甘いお嬢さん」

「私が？ 甘い？」

「ああ、そうだ。最後に1つだけ忠告するでしょう」

グリンデルバルドはセレネが不機嫌極まりない顔で睨んでいるのを意に介さず、一本だけ指を掲げてみせた。片方の目が一瞬だけ、異様に輝いたような気がする。グリンデルバルドはどこか愉快気に忠告を口にした。

「長身の男子生徒には気をつけることだ。いずれ、泣く羽目になるぞ」

彼はそれだけ言い残すと、弾けるような音と共に姿を消した。

薄汚れた部屋には、セレネとリータだけが残される。

「……男子生徒なんて、みんな私より背が高いわよ」

セレネはグリンデルバルドが立っていた場所を一瞥すると、ポケットに手を突っ込んだ。

セレネは同学年の誰よりも小柄だ。そんな自分より背の低い男子生徒など、下級生のグラハム・プリチャードやノーマン・ウォルパートくらいしか思いつかない。逆に言えば、それ以外の男子生徒はハリー・ポッターを始め、みんな自分より背が高いのだ。

忠告してくれるのはありがたいが、もう少し詳しく教えて欲しい。

「今の忠告は、未来視によるものですね？」

「さあね。それよりも、リータ。引き続き、義父の護衛をお願いします」

セレネも出口に歩みながら、リータに命令を下した。

「了解してごんす。……そういえば、お嬢ちゃん。あんたに伝言を預かってるぞ

んすよ」

セレネがリータの脇を通り過ぎるとき、彼女は面倒くさそうに口を開いた。

「私に伝言？ 義父が？」

「ええ。『冬休みは予定を入れないでくれ』と。フクロウで伝えて欲しいと頼まれたんですけど、直接会って話した方が分かりやすいじゃない？」

「……ありがとうございます。ちょっと待ってくださいね」

セレネは鞆から羊皮紙を取り出すと、義父宛てに簡単な手紙を書き始めた。

「では、これを届けてくださいね」

最初から今年の冬休みは、たいして予定を入れるつもりがなかった。

昨年度は城に残らないといけなかったが、今年はそのような制約もなく、まだジャスティンからクリスマスパーティーに誘われていなかった。

特に問題はないが、いったいどうしてなのだろうか？

その疑問は、セレネがクリスマス休暇でロンドンに到着した時、すぐに判明した。

「おかえり、セレネ！ さっそくだけど、いまから空港に行くよ！」

義父が完璧な旅装を整え、眩いばかりの笑顔で待っていたのである。

セレネはトランクを引きずったまま、予想外の事態に口を呆けたように開けてしまった。

「さあ、行こう。そろそろ電車が着く時間だ」

「お、お父さん、ちょっと待ってください。どうして空港に？」

ずいずいと進んで行く義父の半歩後ろを追いかけながら尋ねる。すると、義父は恥ずかしそうな顔で答えてくれた。

「いやー、教え子たちに夏のオーストリア旅行のことを話したらさ、『娘さんとの距離を縮めるためにも、もっと出かけるべきだ』ってアドバイスを貰ったんだよ」

「それで、クリスマス休暇に旅行を？」

「うん。いいアイディアだろ？ ああ、僕たちが留守の間、リータが家を管理し

てくれるって。いい人だね、あの女性」

「……いい人、でしょうか？」

「うん、いい人だよ。なにより、料理が上手だ」

セレネは少し引きつった顔で笑った。

これは非常に危険な状態だ。命よりも大切な義父が、リータ・スキータに毒されている。早急に何かしらの手を打たなければならないが、他に護衛が務まる人物がない。グリンデルバルドに義父を任せたら最後、想像の範囲を超えた出来事が起きそうな気がした。

「……それで、どこへ旅行に？」

セレネはマグルの電車に乗ると、大変機嫌のよい義父に囁きかけた。

「フランスですか？ それとも、アメリカ？」

「いや、日本だよ」

義父はマフラーを緩めながら、照れくさそうに鼻を赤らめた。

「日本？ どうして極東の島国へ？」

「いろいろと理由はあるけど、1番はアニメかな。」

この間、トロルをモデルにしたアニメを観てね、とても素晴らしかったんだよ。どうやら、そのアニメ制作会社が作った最新作のVHSが年明けに発売されるらしいんだ。でも、イギリスでの発売日が未定で……だったら、本場まで行って買った方がいいかなって」

「……トロルってトロールのことですよね」

セレネは苦笑いを浮かべた。

脳裏には、1年生の時——女子トイレに入り込もうとしてきた醜惡な巨体が蘇る。あれをモチーフにしたアニメ作品なんて、セレネは観る気がしなかった。もともと、アニメを作るようなマグルはトロールの真の姿を知らないはずだ。トロールを中心に繰り広げるほのぼのアニメーションは十分にありえる話だ。

「ごめん、嫌だった？　もちろん、ビデオはおまけ扱いで、ちゃんと観光地を巡る計画だよ」

「いいえ、大丈夫です。私は、お父さんと一緒にいるだけで満足ですから」

セレネは自分で言いながら、少し気恥ずかしくなってマフラーを口元まで持ち上げる。

義父の感激したような視線から目を背けるように、セレネは窓の外に視線を向け続ける。

クイールは知らないが、セレネにとって日本とは特別な存在だった。

なにしろ、日本には本当の母親がいる。

シキ・リヨウギ。

当時は赤子だったことから考えるに、自分より年齢は1つ上。つまり、まだ16歳の少女だ。当然、相手は自分の存在を知らない。だが、少しだけ——セレネとしては彼女に会ってみたいという気持ちがあった。

リヨウギには、クイールから向けられるような愛情を求めている。ただ、会ってみたい。嫌われても構わないが、とにかく会って話してみたい。それだけだった。しかし、彼女がどこにいるか知らない。

メアリー・スタインの渡航記録を遡れば見つけることができるだろうが、そこまでして知らなくてもいいと思っていた。別にやるが多かったとはいえ、このようなことになるなら調べておいた方が良かったと後悔する。

日本は小さな島国だが、人口は億を超えている。

その中から一人の少女を探すことなんて、サハラ砂漠に落とした宝石を探すより難しい。だが、探してみる価値はある。

ただ指をくわえて出会うのを待っているより、自分で歩き始めた方がずっと出会う可能性が上がるというものだ。

だが、案の定というべきか。

シキ・リヨウギは見つからない。

そして、東京を後にする日——事件が起きた。

新幹線で京都へ向かおうとしたのだが、乗車する前に人身事故があり、復旧のめどが立たなくなってしまったのである。仕方なしに、適当なホテルに泊まることにした。ところが、日本も年末だ。大都会東京とはいえ、なかなか空いているホテルが見つからない。

結局、東京郊外にあるホテルに滞在することになった。

「いやー、まさか新幹線が止まっちゃうなんてね」

クイールがテレビをつけて、苦笑いをしている。

テレビではちょうど、ロボットアニメが放送されていた。クイールの解説によると、ウィルスが侵入しているシステムを直すため、女性の研究者が逆にハッキングをかけようとしているらしい。ロボットアニメなのに、ロボット要素皆無である。彼は日本語ができるのでアニメに集中しているが、セレネは少し退屈だった。義父の影響で日本語は多少できたが、流暢に聞き取りや会話ができるわけではなかった。

「……下の通りにあった店まで、出かけてきます」

セレネはお気に入りの赤いジャンパーを羽織る。

「そうかい？　すぐに帰ってくるんだよ？」

「分かってます」

義父の言葉を背中に受けながら、セレネは夜の街へと繰り出した。

コンビニという店は、24時間も営業している。日本人は働き過ぎると聞いていたが、24時間営業は異常である。大変便利であることには変わりないが、営業する方も、利用する方も慌ただしい感じがする。

「……ま、別にどうでもいいけど」

セレネはジャンパーのポケットに手を入れながら、小さく呟いた。

肌を突き刺すような寒空の下だというのに、繁華街には人が溢れている。クリスマスも過ぎたというのに、すっかりスーツを纏ったサラリーマンが歩いているのだから、本当に日本人は働き過ぎだ。

そんなことを考えながら、目当ての店に向かって歩いていった時だった。

『いらっしやい。そこのお嬢ちゃん、どうだい？ 寄ってくかい？』
はた、と足を止める。

声の方向に視線を向ければ、薄暗い路地の奥に小さな人影が見えた。セレネはポケットに杖が入っていることを確認すると、ゆっくりと近づいていく。そこにいたのは、黒いヴェールを被った恰幅の良い女性だった。彼女の前には水晶玉が置かれている。

それだけで、彼女が何者なのかを悟った。

『……占い師？ いくら？』

『女の子はタダさ、誰でもね』

占い師は怪しげな笑みを浮かべる。

占い師の服装というのは、どうやら極東の島国でも同じだったようだ。ホグワーツにも、シビル・トレローニーが占い学で水晶玉を使うらしい。彼女は本物の占い師だ。なにしろ、ハリーにヴォルデモートの復活を予言した。しかし、それ以外はぱっとした予言はしないらしく、その証拠にアンブリッジの査察では酷い結果だったらしい。停職になるのも時間の問題だと噂されている。

『……よろしく』

せっかくなので、セレネは占ってもらうことにする。

本物の占い師でさえ、当たる確率は少ないのだ。彼女もきっと、つまらない当たりさわりのないことしか言わないだろう。しかし、タダという言葉は魅力的だ。

セレネが占い師の前に立つと、彼女は水晶玉を覗き込んだ。否、覗き込むふりをするが、水晶玉越しにセレネを見てくる。そして、彼女はほうっと息を吐いた。「悪いことは言わないよ。あんた、森には近づかない方がいい」

占い師は英語で言葉を返してくる。

これには、セレネも少し驚いた。なにしろ、自分の容姿は東洋人そのものである。彼女に会ってから、一度も英語を使っていない。なのに、この一瞬で外国人だと

看破されてしまったのだ。驚くなど言う方が無理である。

「私が外国人だと良く見抜きましたね」

「そりゃ、私は占い師さ。そのくらい、見ればわかる」

「……それで、どうして森には近づかない方がいいのでしょうか？」

セレネは返答次第では、杖を使うつもりだった。すでにポケットの中で右手は、愛用の杖を握りしめている。

そもそも、声をかけてきたのは向こうからだ。これまで、ずっとつけられていた可能性もある。この街に来てから、まだ1時間も経っていない。しかし、日本に来てから、あるいは日本に来る前からつけていれば、十分にセレネを観察することができただろう。

彼女はヴォルデモートの手先か、それとも、新たな勢力か。

「おやおや、私を疑っているのかい？　馬鹿を言うんじゃないよ」

セレネがそんなことを考えていると、占い師は少し気を悪くしたような口調で話し始める。

「私は見えたことを教えるだけさ。あんたのことをつけるほど暇じゃない。あたし

は、ただ不幸な未来を回避させるだけだよ。

それとも、もっと別のことを教えた方がいいかい？ たとえば、あんたが1番気を許している男の子について、あることないこと教えてやろうじゃないか」

占い師のたるんだ頬が、不快な笑みを形作る。セレネは思いっきり占い師を睨みつけた。邪険に扱われてはいるが、不思議と嫌悪を抱かせない老婆だ。セレネは少しむしゃくしゃしたが、長く息を吐くと、ポケットから手を出した。杖はポケットにしまったまま、両手は寒々とした夜風にさらされて縮こまりそうだ。

「……もう一度、聞きます。どうして、森には近づかない方がいいのでしょうか？」
「おや、案外優しいんだね。これは、見込み違いか……まあいい。

森に近づかない方がいい理由？ 襲ってくるのさ、ケンタウロスに巨人、エトセトラ。とにかく、その先はいろいろと面倒なことになるよ。まあ、あの程度であんたは死なないと思うけど」

「……森」

巨人がいるかどうかは知らないが、ケンタウロスがいるのは「禁じられた森」だ。自ら好んで入る場所ではない。そもそも、生徒の立ち入りは禁じられている。

「私、森になんて入らないと思いますけど」

「いや、入らないといけない状況になる。私が言えるのはここまで。そこから先の未来を決めるのは、あんた次第さ」

不幸な未来を回避する占い師は、セレネの瞳をまっすぐ見つめていた。

セレネは少し表情を緩めると、彼女に背を向けた。

「ありがとう、占い師さん。あなたも長生きしてくださいね。でも……夜の路地裏は物騒ですから、お年寄りには向いていないと思いますよ」

自分の思ったままの言葉を口にしながら、セレネは表通りに向かって歩き出す。ただ、なんとなく、そのままコンビニに立ち寄り、ホテルに戻るのが惜しくなった。

しばらく一人で考え込みたい。セレネはぼんやり別の路地から路地へと歩きながら、本物の未来視が告げた運命を咀嚼した。

そっと空を見上げる。東京の夜空は狭い。周りにビルも何も建てられていないホグワーツの空に慣れ親しんだせいか、薄暗く、星の輝きすら滅多に見つからない空は息苦しく感じた。

「森に近づく状況か……」

どうして、そのような状況になるのか。

セレネが思案しようとしたとき、前方に何かが見えた。

「……あっ」

ぴたり、と足が止まった。

自分の意志ではない。セレネ・ゴントの意識は、この瞬間だけ凍結してしまっていた。

数メートル先に、赤いジャンパーの人影が見えた。枯れ葉色の着物の上に真っ赤な革ジャンを羽織った人が、鼻歌を歌いながら歩いている。

否、ただの人ではない。

自分と同じ黒い髪で、自分と同じ顔で、自分と同じ背丈で、自分と同じ——空気を纏っている。

違うのは、あの人の髪は肩に届くか届かないかのところで乱雑に切りそろえられている。自分は肩よりも少し長い。それから、眼鏡の有無だ。あの人は眼鏡をかけておらず、どこか遠くを見るような黒い瞳をしている。

『ん？』

あの人もこちらに氣付いたのだろう。足を止めて、珍しいものを見つけたかのよう
に目を見開いていた。

「おかあ、さん？」

セレネの唇が震えた。それを聞くと、相手は虚を突かれたような顔をした後、ぷつ
と噴き出した。

『ママってなんだよ？ オレも式も腹を痛めて赤子を産んだ覚えはないぜ？』

あー、でもそうか。確か親父が言ってたっけ。髪の毛が奪われたとか何とか。お
前、オレのクローンか？』

『……あなたが、シキ・リョウギ？』

『ああ、いかにも。オレが両儀織だ』

シキは嬉しそうに口の端を吊り上げる。

『しかし、オレのクローンにしては……なんだ、その眼。面白そうじゃないか』
そう言いながら、彼女の右手がポケットにしまわれる。

否、ただ入れたのではない。何かを握りしめている。それが何かは問うまでもな

かった。なぜなら、彼女からは濃厚なまでの殺気が立ち上っている。直死の魔眼で視止められているわけではないのに、彼女の視線からは死が滲み出ていた。計り知れないほど膨大な死が、自分の前に立っている。

『あんたもその気だろ？ それとも、場所を移す？』

「……」

セレネは黙っていた。

ただ、髪の毛一本一本が逆立った気がする。身体を構築する細胞が震えあがり、自分の内側からは得体のしれない感情が込み上げてきた。セレネは何も言わず、再び右手をポケットにしまった。指先で杖を探り当て、そっと握り込む。

『さて、じゃあ——』

「——いきますか」

シキがナイフを取り出すのと、セレネが杖を引き抜くのはほぼ同時だった。シキは勢いよく地面を蹴り、セレネは杖で狙いを定める。

そして——

『やっぱり、式じゃないか』

この場には不釣り合いすぎる穏やかな声が、シキの歩みを止める。セレネも少し驚いて、杖をわずかに下げた。路地の入口には、人畜無害そうな眼鏡の少年が立っていた。黒ぶち眼鏡は、どこことなくハリー・ポッターを連想させるが、彼よりもずっと空気が落ち着いている。

『コクトー、いいところで水をさすなよ』

シキはむっとした表情で少年を睨みつける。怒っているようだが、不思議なことに、あれほどまでに凶悪な殺気はもう欠片も纏っていないかった。

『あれ、ごめん。式じゃなくて織の方だったんだね。こんな夜中に何をしてたの？』

』

『ただの散歩。コクトーこそ何してんだ、こんな夜に』

『僕は両親のおつかいの帰り道。君を見かけてから、追いかけたんだけど……織にも妹がいたんだね。知らなかったよ』

『妹というか……まあいいか。今日は白けた。お前のことはひとまず見逃しておいてやる』

シキは顔を曇らせたものの、ナイフを仕舞い込み表通りに向かって歩き始める。彼女は、二度と振り返らなかった。それを見て、セレネも杖をしまう。

『えっと……君は、妹さんなのかな？』

『私は……』

セレネは少し考えてみたが、日本語で答えるのは難しい。少し悩んだ末、小さな声で答える。

『……娘』

『え、えええ!?!』

『違う。家族ではない。血のつながってる、間？ えっと……』

『血の繋がっている関係？ もしかして、親戚？ 姪かな？』

『そう、それ』

少年は少し考えながら、こちらの意図することを言い当ててくれる。

『へー、式の親戚か。物凄く似てるね』

『ありがとう』

セレネはそれだけ言うと、自分も表通りに向かって歩き始める。

だが、途中で足を止めて振り返る。

『あなた、名前は？』

『僕かい？ 僕は黒桐幹也』

「……コクトー。詩人みたいな名前ね」

最後だけ、英語で呟いてしまう。

背後で少年の驚く気配が伝わってくるが、セレネはそれに答えることなく歩き続けた。

本当の母親に出会った。

安っぽいホームドラマのように、再会したとき互いに感極まり、ハグをするような展開は最初から期待していなかった。

認知なんてされなくて構わない。むしろ、自分と同じ顔が唐突に現れたら、ドッペルゲンガーを疑うだろうし、まず気持ち悪がられるだろう。そのあたりを想定していた。

まさか、いきなり正面から殺気をぶつけられるとは思わなかった。

そして、その殺氣を向けられて、自分は――

「駄目よ、私」

その時の感情を思い出し、セレネは頬を軽く叩いた。

どうせ、自分はホムンクルスとシキの卵子が創り出した人工生命体である。

いくら人間だと叫んでも、フラスコの中で生まれた事実に変わりない。実の親からクローンと言われ、殺氣を当てられても全くもっておかしくはないのだ。

そこまで考えたとき、ふと――義父の顔が頭に浮かんだ。

彼は、セレネがメアリー・スタインの子ではないことを知らない。

そもそも、彼がセレネを引き取ったのは、メアリーに頼まれたからだ。彼女のことを深く愛していたから、その形見として15年間も育てきている。

その形見が、ただの人工生命体だったら？

これまで通り、惜しみない愛を注いでくれるのだろうか。

セレネは怖くて震えあがった。思わず、自分の身体を抱きしめてしまう。

「セレネ、遅いじゃないか」

ホテルのエントランスに足を踏み入れると、クイールが待っていた。セレネを見

ると、ほんと胸をなでおろしている。

「良かった……セレネがなかなか帰ってこないから心配したよ。……セレネ？」
気が付くと、セレネは義父に抱き着いていた。

少し細い身体にぎゅっと抱きつき、胸に顔を押し当てる。彼の表情は見えない。
だが、セレネを安心させるように、ぽんぽんと優しく背中を叩いてくれた。

「……なにか、怖いことでもあったのかい？」

「お父さんは……私のことを愛してる？」

「ああ、もちろんだよ」

「私が、どんな私でも？」

「もちろんだ。どんなセレネでも、僕の大事な娘だからね。……そのことで、誰かに意地悪でも言われたのかな？」

セレネは首を横に振る。

すると、彼はセレネの髪を撫で始めた。

「……もしかして、ヴォルなんとかが関係してるのかい？」

「えっ？」

セレネは弾かれたように顔を上げた。

クイールの表情は慈母のような温かさで満ちている。遅くまで遊んで帰ってきた子供を迎え入れるような、そんな優しく温かい顔だ。

「黙っててごめんね。実は先学期、セレネが寝ている間に、ダンブルドア校長先生からいろいろ魔法界の事情を聞いてたんだ。

ヴォルなんとかっていう最悪の魔法使いが復活して、そこにセレネが居合わせてしまったってことをね」

「……どこまで、知ってるの？」

「それだけだよ。ヴォルなんとかの所業と今後の魔法界の展望だけ。でも、それを聞いた時に思ったんだ。勇敢なセレネのことだから、ヴォルなんとかを倒そうとするんじゃないかって」

セレネは何も答えることができなかった。

本当は彼の顔から目を逸らしたいのに、義父の瞳に目が釘付けになってしまっていた。

「いいかい、セレネ」

彼の瞳は、今までに見たことがないくらい真剣な色をしていた。

「人はね、一人しか殺せないんだ。天寿を全うして死ぬときに、自分自身の肉体を殺して天の国に行く。」

つまりね、セレネ。たとえば、相手が殺人鬼でも、人を殺したが最後、天国へはいけないんだ」

「ヴォルデモートは、化け物です」

「でも、彼だって人だろ？　どんな理由があろうとも、殺人は悪なんだよ」
彼はセレネのことを見通している。

きつと、愛しているから。セレネが思っている以上に、セレネのことを分かっているから、ヴォルデモートを殺すために動いていることを知っている。

「セレネがするのは、彼を逮捕するところまでで構わないんだ」

「てつきり、関わるなと言われるのかと思いました」

「止めたところで、セレネは追いかけるだろう？　でも、人殺しだけはよくない。それだけは覚えておいてくれ」

クイールは最後の言葉を言い残すと、そっとセレネの腕を離れた。

「さて、夕食にしよう。セレネは何が食べたい？」

彼は話題を切り替えるように、いつもの明るい口調で言い放つ。

セレネはしばし呆けたような顔をしていた。やがて、肩をすくめると、くすりと微笑み返す。

「私、ガイドマップに載っていたラーメンを食べたいです」

「よし、美味しいラーメン屋さんを探そう。早くしないと店が閉まっちゃうかもしれないからね」

義父は元気よくホテルから出て行く。

セレネも元気よくその背中を追いかける。

きつとクイールが思っている以上に、セレネにとって彼の話は言葉にできないくらい深い意味を持つものだった。

本当の母親のことやヴォルデモートのことなど、今はどうでもよかった。

先ほどまで感じていた身体の芯から凍るような寂しさも、すっかり薄らいでいる。

ただ、いまは義父と一緒に過ごすることができる。

楽しく穏やかな一時を過ごすことができる。

いまは、それでいい。

東京の狭い空の下。

セレネは少し踊るような歩調で、義父の隣を歩いて行った。

ご都合主義過ぎる展開かもしれない。

そんな都合よく彼が通りかかるわけないし、間一髪のところで幹也が来るはずもない。だが、後悔はしていない。

「95年12月なら、まだいける！ 昏睡状態になってない！」と踏んでの展開でした。

なお、次回からは再び舞台がホグワーツに戻りますのでご安心ください。

次話は「玄関ホール大爆破、アンブリッジ医務室へ、心変わり」の三本でお送りする予定です。

今年もよろしくお願いします！

66 話 蛇と獅子

土曜日の早朝、セレネ・ゴーストはベッドを抜け出す。

授業がない日だけあり、ダフネ以下他の寮生たちは夢の中だ。まだ太陽すら顔を出しきっていない。普段なら廊下もゴーストや悪戯好きのピーブスが泳いでいるものだが、この時間帯は城全体が深海に沈んでいるように静まり返っている。

セレネは東の空が朝焼けに染まる様子を横目で見ながら、監督生専用浴場の扉をくぐった。

朝のシャワーが心地よいように、朝の風呂というものは心身ともに爽やかな気持ちになれる。特にこの時間は滅多に人が訪れない。自分一人、談話室よりも広く輝く浴場を使うという贅沢な気持ちにも浸ることができる。

「ふはあ……」

セレネは湯船につかりながら、ぐっと両腕を伸ばした。

平日は授業があるのでのんびりできないが、土日は別だ。

思う存分、ゆっくりと朝の風呂を楽しむことができる。身体の芯まで癒され、策

略など巡らせなくても良い絶好の息抜きだった。湯気が立ち上り、天井まで白く染め上げていく様子を眺めながら、セレネはゆっくりと湯船に沈む。

気持ちもゆったりと落ち着き、気が付くと先日、義父が日本で購入したアニメの主題歌を口ずさんでいた。主題歌自体は日本語だったが、元は過去にイギリスで流した歌だった。非常に歌いやすく、どこことなく馴染みやすい。アニメの内容も、どこか興味深いものだった。自分と同じ年ごろの少女が、進路や恋愛に悩む物語である。

「……進路、か」

恋愛に関しては良く分らない。興味もたいしてない。

だが、進路は別だ。そもそも、自分はホムンクルスと人間との間に生まれた奇跡のような存在だ。遺伝子操作された生き物は、あまり長く生きられない。だから、自分も長生きできない。その短い人生の中で、ヴォルデモートを倒し、余生は義父とゆっくり本でも読みながら過ごせればそれでいいのだ。

ただ、きつと義父はセレネがまっとうな仕事に就いていないと心配するだろう。そのためにも、それなりの職に就きたいとは考えていたが、マグルの職にするのか、

それとも、魔法界で職を探すのか、正直なところ、まだ決めかねていた。

「でも、普通の職に就いたら、あの蛇男を倒す時間を確保できるかどうか……ん？」
ひたひたと近づいてくる音が聞こえてくる。セレネは口を閉ざすと、後ろを振り返った。白い湯気で人影がぼんやりとしか見えない。

「……誰ですか？」

「その声は……もしかして、セレネ？」

凜とした声が返って来る。セレネは背筋を伸ばした。

「……おはようございます、ハーマイオニー」

「おはよう、セレネ」

セレネの隣に、ハーマイオニーが入って来た。長い栗毛を濡らさないように纏め上げている。

「セレネは風呂場でも眼鏡なのね。防水呪文をかけてるの？」

「ええ。これがないと、生きにくいので。……それよりも、どうして貴方がここに？」

「早く目が覚めちゃったの。OWLの勉強や帽子を編もうかと思ったけど、せっか

く監督生になったのに、あまりここに来てなかったから」

「帽子？」

セレネは少し首を傾げる。

「誰かへのプレゼントですか？」

考えてみれば、もうすぐバレンタインデーが近い。

ダフネとパーキンソンは編み物魔法を習得しようと悪戦苦闘している。両者とも、バレンタインデーに誰かへプレゼントをする気らしい。ハーマイオニーもそうなのだろうか、と思っていると、彼女は誇らしげに微笑んだ。

「しもべ妖精解放運動よ。自由を求めている彼らが、本当の気持ちに素直になれるように。」

そういえば、セレネにはまだ話してなかったわね」

ハーマイオニーの目がきらりと輝いた。セレネの胸に嫌な予感が横切る。

「SPEW！ 私はね、先学期に屋敷しもべ妖精福祉振興協会を立ち上げたの！セレネはベッドのシーツや城の掃除、いつも食べている料理を誰が作っているか知ってる？」

「……しもべ妖精ですか？」

「そうなの！ でも、彼らはろくな服も着れずに年中無休で賃金も貰わず、ただで働かされているの！ 彼らはホグワーツ城内でも『姿くらまし』を使えるくらい、素晴らしい魔法を秘めた存在なのに！」

これは、奴隷労働だと思わない!？」

「……それは、どうでしょう？」

セレネは言葉を濁した。

しもべ妖精は１度だけ見たことがある。マルフォイ家の妖精だ。彼らは、セレネがクリスマスパーティーへ行くときに送迎してくれたり、パーティーで食事や飲み物を運んだりしていた。みすばらしい服装だと感じたが、それを指摘すると、彼らは侮辱されたように怒ったことを思い出す。

「本人たちが満足しているなら、それで構わないと思います」

「セレネ。それは洗脳されているからよ。最初から、彼らは自由を知らないの。実際に、１人——自由を知り、楽しく生きている妖精がいるわ」

彼女の言葉には熱がこもっていた。

セレネは小さく息を吐いた。彼女は素晴らしい魔女だ。魔法に関する知識が豊富で、それを実践する実力もある。策謀力は密談場所にホッグスヘッドを指定していることから、まだまだ発展途上だが、闇の魔術に対する防衛術の自習が必要と判断する力も行動力もある。

どうやら、今回はその行動力が裏目に出てしまっているらしい。

「ねえ、セレネも入会しない？」

「様子見では駄目ですか？」

「これは、早急な問題よ！ 奴隷なんて、絶対に許されないことだもの」

「……実際に、しもべ妖精たちの労働環境を見ないことには、判断しかねますね」
セレネは問題を先延ばしにすることに決めた。

しもべ妖精たちは好きで働いている。それで満足しているのだ。もちろん、劣悪な労働環境であるなら話は変わってくるのだが、おそらくホグワーツの場合は違うだろう。それをいきなり部外者が乗り込み「もっと自由になりなさい」と押し付けることは、ある種の文化の破壊に近い。よけいなお節介という奴だ。

だが、それをハーマイオニーに伝えたところで、彼女が納得するとは思えなかつ

た。彼女の反論に、また反論するのも面倒である。風呂に疲れを取りに来た意味がなくなってしまう。

「ちなみに、ホグワーツのしもべ妖精はどこにいるのですか？」

「普段は厨房ね。大広間を出て右側の扉から地下に進むと、果物の絵があるの。その中の梨をくすぐると、厨房に行けるわ。絶対に行ってみてね」

ハーマイオニーが自信気に言い放つ。たぶん、セレネが自分から厨房に行くことはないだろう。

「ええ、時間があるときに行ってみます」

セレネはそれだけ言うと、湯船から上がることにした。

今日はこれ以上、のんびりすることは難しそうである。

「あ、そうだ。セレネは今日のDAに来るわよね？」

セレネが傍に置いてあったタオルで頭を拭いていると、後ろからハーマイオニーの声が追いかけてきた。

「ええ。時間が合えば行きますよ」

「お願いね。あなたがいないと、ハリーが寂しがるのよ」

「ハリーが？」

セレネは少しだけ目を丸くし、すぐに納得する。

不死鳥の騎士団関係の情報を手に入れるため、ハリーを肯定するように接している。皆が反発する中、自分を肯定してくれる存在に懐いても不思議ではない。むしろ、そうなるように仕向けている。

いまのハリー・ポッターは、すっかりセレネの掌で踊る駒だ。

「分かりました。なるべく行きます」

セレネはそれだけ答えると、身支度を整えて大広間へと向かった。

太陽は昇り、鳥の声が聞こえてくる。ちょうど、朝食の時間だろう。今日は朝食を食べたらDAまで秘密の部屋にこもる予定だった。昼食のパンを包んで帰ろうか、なんて考えながら階段を降りていると、玄関ホールが騒がしいことに気づいた。玄関ホールまで降りたくても、階段はレイブンクロー生やグリフィンドール生で埋まってしまっていて前が見えない。セレネが困っていると、レイブンクローの監督生でありDAのメンバー、パドマ・パチルが手招きをしてくれた。

「どうしたのですか、これは？」

「玄関ホールで喧嘩ね。こっちから良く見えるわ」

セレネはパドマと一緒に階段の端から身体を乗り出してみる。

そして、セレネは目を丸くしてしまった。

「絶対に、ハリーのほうが強い！」

「いや、セレネのほうが強い!!」

大広間の前で、喧嘩が勃発していた。

グリフィンドールのナイジェル・ウォルパートとスリザリンのノーマン・ウォルパートの兄弟による口喧嘩である。互いに額を突き合わせ、一歩も譲れぬ形相で言い合いをしていた。

「いいか、ノーマン。ハリーは4度も『あの人』と対決して、生き残ってるんだ！ それだけでも、普通の人よりずっと強いことがわかるだろ？ それに、14歳で代表選手に選ばれて優勝しているんだ」

「それなら、セレネだって同じだよ。3度も『あの人』と対決して、生き残ってる！ 14歳で代表選手だし、その時使った魔法はハリーよりずっと高度だったって教えてもらったよ！」

「ふん、ノーマンはハリーの杖捌きを見たことないだろ？ 6年生のチョウ・チャンよりずっと素早く動くんだぜ!」

「セレネだって凄いよ。7年生も使えない呪文を簡単に使いこなしてるんだ!」
次第に、彼らは言い争っても意味がないと判断したらしい。どちらもほぼ同時に杖を引き抜き、呪文を叫んだ。

「見損なったぞ、ノーマン! 『レビコーパス—身体浮遊』!」

「兄さんの分からず屋! 『デンソージオ—歯呪い』!」

二人の放った呪文は激突し、空中で跳ね返ってくる。ノーマンは盾の呪文を展開し、ナイジェルは横に跳ぶことで躲した。盾の呪文を維持するノーマンより、ナイジェルのほうが素早く体勢を立て直す。玄関ホールの床を転がりながら、ノーマンに向けて呪文を放った。

「『ファーンキュラス—鼻呪い』!」

しかし、まだ2年生。狙いが甘く、ノーマンに当たらなかった。ノーマンは盾の呪文を消すと、ナイジェルに狙いを定める。

「『リクタスセンブラー—笑い続けよ』!」

ノーマンの放った銀色の閃光はナイジェルに向かって奔る。だが、ナイジェルは間一髪のところまで石像の後ろに隠れ、呪文を防いだ。ナイジェルは粉々に割れた石像の後ろから顔をだすと、少し怒った顔で杖を振る。ノーマンも自慢の呪文を兄に防がれたことに苛立ちを覚えたのか、顔から不機嫌さが滲み出ていた。

だが、玄関ホールでこんな決闘騒ぎが起きて、教師が気づかないわけない。

「エヘン、エヘン」

独特な咳払いと共に、アンブリッジが姿を現した。

「貴方たち、何事なの？」

アンブリッジは少女っぽい甘ったるい作り声で、ウォルパート兄弟に語りかける。ガマガエルのように飛び出した目が二人を交互に見渡している。

しかし、すっかり頭に血が上った彼らには届かない。アンブリッジの登場にすら気づいていないのだろう。二人とも互いに呪文をかけあっている。完全に無視されたアンブリッジは少し怒ったような顔になると、杖を取り出した。

「おやめなさい。さもないと、罰則ですわ——ぎゃあっ！」

二人とも、ここでようやく邪魔者ガエルの存在に気付いたのだろう。血走った目

でアンブリッジを睨みつけると、なにか呪文を唱えながら杖を振った。爆発のような衝撃と共に、互いの杖から閃光が奔る。

「わ、わたくし、は、高等、じんもん、かん——」

二人の呪文を浴びたアンブリッジは、白目をむいて倒れ込んだ。

顔のいたるところから、くらげの足が伸びてうようようごめいている。

「あれ、なに？」

パドマがセレネの耳元に囁いてくる。セレネは口早に

「『くらげ足呪い』と『できもの呪い』が当たったのでしょーうね」

と答えた。

ガマガエルが起き上がる気配はなかった。誰も助けに入らなかった。むしろ、グリフィンドール生を始めとする生徒たちは歓声を送っている。セレネが見る限り、地下室から登って来たスリザリン生の一部——主に親衛隊の幹部陣が密かにガッツポーズをしているのが見えた。

ウォルパート兄弟の決闘は激しさを増している。

時折、兄弟の流れ呪文が壁を破壊したり、再びアンブリッジに当たったりして、

被害を増やしていった。

『『レデュシオ―縮め』!』

『『エンゴージオ―肥大せよ』!』

「そこまです!」

2人の声を遮るように、マクゴナガルの凜と通る声が玄関ホールに響き渡った。宙を走る2本の閃光は消滅し、ナイジェルたちの手から杖が飛び上がる。木の棒はくるくると回りながら、マクゴナガルの手に収まった。

「グリフィンドールとスリザリンから20点ずつ減点! まったく、こんな朝から玄関ホールで決闘とは……いったい、何があったというのです?」

ナイジェルとノーマンは互いにばつの悪そうな顔をした。

ここにきて、二人とも自分たちの喧嘩が大多数の生徒たちから注目されていたことに気付いたらしい。ナイジェルは群衆の中にハリーの姿を見て、ノーマンはセレネの姿を見つけ、申し訳なさそうに縮こまった。

「えっと……僕は、ホグワーツの生徒で1番強いのはハリー・ポッターだと言ったんです」

「でも、その……僕は、セレネ・ゴーストの方が強いって……」

「……それが喧嘩の理由ですか」

マクゴナガルは頭が痛そうに額に手を置いた。

「先輩に憧れるのは結構です。しかし、まずは周囲の迷惑を考えなさい。ほら、この皆さんは突っ立っていないで、朝食を食べなさい。時間は有限ですよ」

マクゴナガルはそれだけ言うと、ローブを翻して戻って行った。

床に伸びたままのアンブリッジを放置したまま。結局、ガマガエルはフィルチによつて医務室に運ばれて行ったらしい。

「まったく、ノーマンは……」

セレネは頭が痛くなった。

彼は試験対策クラブでも成績が良く、セレネへの崇拜度合いはカロー姉妹に匹敵する。時折、セレネ自ら上級生向けの魔法を紹介し、教えるほど気に入っていた。それをすぐに理解し、実践できるのは素晴らしいが、こんな兄弟喧嘩に使うために教えたのではない。そのことをしっかり伝えないといけないと考えながら階段を降りていると、パドマが話しかけてきた。

「でも、ゴースト。私は彼らの喧嘩の理由、少し理解できるかもしれないわ」

「どこがですか？」

「だって、私もポッターとゴースト。どちらが強いのか気になるもの」

「馬鹿なことを考えないでください」

セレネは一蹴したが、パドマの考えはDAに参加する生徒ほとんどが抱いているものだった。

ハリー・ポッターとセレネ・ゴースト。

はたして、どちらが強いのか。

二人ともヴォルデモートと何度も対峙し、生き残っている。

アンブリッジ以外の「闇の魔術に対する防衛術」の成績もよく、14歳ながら他の代表選手に匹敵、もしくは圧倒する实力を見せていた。

しかし、いままでDAでは、ハリーが主に魔法を使い、先生として振る舞っている。セレネはあくまでサポート役だ。

これだけ見れば、ハリーの方が強いのだろうと感じても不思議ではない。だが、セレネが使うサポート魔法は7年生でも苦戦するようなレベルのものが多かった。部屋の壁全体をクッション魔法で柔らかくするなど、NEWT試験レベルの魔法である。それを長時間維持し続けながら、顔色一つ変えないとなれば、NEWT試験レベルを遥かに凌駕していることがわかるはずだ。

だからだろう。

その日の夜に「必要の部屋」でDAのメンバーが全員集まった時、ハッフルパフのザカリアス・スミスが、こんなことを聞いてきたのだ。

「ポッターとゴイント、どっちが強いんだ？」
と。

ハリーは困ったような顔をした。

「えっと……それは……」

「朝、ウォルパート兄弟の喧嘩を見ただろ？ みんな気になるんじゃないか？」

「スミス、DAは誰が強いのか決める会じゃ——」

「……そうね、いい機会かもしれないわ」

ハリーの言葉を遮るように、ハーマイオニーが呟いた。

ハリーもロンも、提案したミス自体、驚いたように彼女に視線を向ける。

「今日のDAは、ハリーとセレネの決闘を見て学ぶのはどうかしら？」

「正気か、ハーマイオニー!？」

まっさきに反対したのは、ロン・ウィーズリーだった。

「相手はゴーストだぞ？ なにをしかけてくるか、分かったものじゃない！」

「ロン、セレネは味方よ。いい加減、色眼鏡をつけて見るのを止めて。」

それに、実践を目にすることで、呪文の使い方や戦術、動き方を学ぶことができ
ると思うわ。どう、ハリー？ セレネ？」

ハーマイオニーが問いかけてくる。ハリーは依然として困ったような顔をしてい
た。セレネはその姿を横目で確認し、呆れたように肩を落とす。

「私は別に構いません。ですが、1つだけ。ハリー。これはどうします？」

セレネは眼鏡に左手を添えた。ハーマイオニーを含むほぼすべての生徒たちは、
何を言っているのか分からないという顔をしている。だが、ハリーだけは考え込む
ように腕を組んだ。

「眼鏡はありでやろう。だって、セレネは眼鏡がないと、その、具合が悪くなるんだよね？」

「……へえ、私の心配ですか」

セレネはハリーの発言に、口の端を上げた。

彼は「直死の魔眼」について知っているのだろう。なにしろ、ヴォルデモートが墓場で暴露していたのだ。ハリーのことだから、あとでダンブルドアあたりに魔眼について質問していたとしても不思議ではない。

だが、彼は「魔眼には敵わないから」ではなく「セレネの体調が心配」という理由で「魔眼なし」の戦闘を選んだ。

「では、眼鏡はありでいきましょうか」

セレネはそう言うのと、杖を取り出した。

棚の上に置いてあったチョークを浮遊させ、白い円を描いていく。

「相手をこの円から出す、もしくは、戦闘不能の状態にさせる。それが勝利条件でいかがでしょうか？」

セレネはそう言いながら、ハーマイオニーに視線を向ける。

「ええ。それがいいと思うわ」

必要の部屋に集まった生徒たちは、白い円の外側に出て行く。

「やっちまえ、ハリー！」

「セレネ、頑張って!!」

声援が聞こえてくる。

セレネとハリーは円の中心に立った。

そして、ほぼ同時に杖を顔の前で掲げ、軽く一礼する。

後ろに三步歩き、互いに向き合った。

「僕が三つ数えたら始めるよ」

セドリック・ディゴリーが告げた。

セレネはここに集った皆の視線を感じながら、呼吸を整える。

ハリー・ポッターとの直接戦闘で敗北するなど、万に一つもありえない。だが、

彼は幸運の持ち主だ。油断大敵である。セレネは油断なく杖を構えたまま、セド

リックの声を待った。

「三……二……一、開始!!」

「『エクスペリアームズ―武器よ去れ』！」

ハリーの武装解除の呪文が宙を奔る。セレネは呪文が身体に当たる前に、身体を半歩動かした。威力はそこそこにあり、速度もそれなりに出ている。だが、まだ見切れる。セレネはにやりと笑いかけた。

「ハリー・ポッター、あなたの呪文はこの程度ですか？」

「まさか！ 『エクスペリアームズ』！」

「『ステューピファイ―麻痺せよ』」

今度はセレネも杖を振るう。意味合いの異なる赤い閃光が宙で激突し、四散していった。セレネは閃光同士が激突した瞬間を見る前に、新たな呪文を唱える。

「『エイビス―鳥よ』」

セレネの杖先から、数羽の青い小鳥が出現する。蛇でも良かったが、蛇語で逆に制御されてしまう恐れがある。セレネの作り出した鳥は、忙しそうに羽ばたきながら頭上まで昇っていく。

ハリーはまだ、鳥の出現に気づいていない。

「『オパグノー襲え』！」

セレネは貫くように呪文を唱える。途端、鳥たちは弾丸のようにハリーに襲いかかる。

「『プロテゴ―守れ』!!」

ハリーは瞬時に杖を振った。彼の前に現れた盾が鳥たちの追撃を阻む。もとより、鳥たちには大した魔力を込めていなかったこともあり、盾に激突した瞬間に羽を散らしながら消えて行った。しかし、ハリーの出した盾が守るのは前面だけだ。つまり、背後ががら空きになる。

「『ペトリフィカス・トタルス―石になれ』」

セレネはハリーの背後に回り込むと、凍結呪文を放つ。これで、チェックメイトだ。そう思っていたが、これまた運の良いことに、ハリーは床に転がるようにして閃光を避ける。

「『エクスペリアームズ』!」

ハリーは床に這いつくばる姿勢のまま、三度目の赤い閃光を放った。セレネは無言で盾を展開する。そして、盾を展開したまま、セレネは突き刺すように魔法を放った。

『インカーセラス―縛れ！』

杖先から放たれた縄は蛇のようにうねりながら、ハリーの身体を締めあげる。これで、もう彼は身動きが取れない。セレネは軽く杖を振った。

『アクシオ―来い』

ハリーの手の中から杖が飛びだし、セレネの手の内に収まる。これで、ハリーは四肢の動きを封じられ、杖もない。

「勝負あったかな。勝者はセレネ・ゴント」

セドリック・ディゴリーの声が響き渡った。勝負を観戦していた生徒たちから拍手や歓声、そして、悔しがる声が必要の部屋に響き渡る。視界の端では、ダフネとジャスティンが嬉しそうに拍手をしている姿や、レイブンクロー生たちが今の試合を分析している様子が見えた。

「……甘すぎますよ、ハリー」

セレネは呆れたように呟いた。

外野のグリフィンドール生たちの悔しがる声を小耳に挟みながら、ゆっくりとハリーに歩み寄っていく。

「あなた、どうして武装解除の呪文しか使わなかったのですか？」

セレネは消失呪文でハリーを縛る縄を消しながら、静かに問いたです。

「失神呪文や妨害呪文は使えるはずですよ。攻撃系の呪文だって他にも知っているはずでしょうに」

ハリーが使ったのは、武装解除と盾の呪文だけだ。

せめて、失神呪文や衝撃呪文を組み合わせれば、傷を負わせることだってできたはずである。失神呪文を連発してくれば、セレネだって真面目に盾の呪文を構築する必要がある。戦略の幅が狭まり、もう少し楽しい決闘ができた筈だ。

「それは……」

ハリーは気まずそうに顔を逸らす。

セレネは腰に手を当てると、もう片方の手で杖を差し出した。

「敵は縄で縛った程度で見逃してくれませんかよ」

「……セレネは敵じゃないよ」

ハリーは杖を受け取ると、消え入りそうな声で呟いた。

負けたことが悔しいのか、一向に視線が合わない。

「セレネに攻撃なんて、できるわけないよ」

「どうしてですか？」

セレネはたいして気に留めてないように聞き返す。

どうせ、ハリー・ポッターのことだ。「友だちだから」とか「仲間だから」という一般論を提示してくるのだろう。だが、いまの戦いは決闘だ。友だちだろうが何だろうが、相手を倒す必要がある。なによりも、DAの授業の一環だ。本気でやり合わなければ意味がない。

その意味では、ハリーは最初の時点で——セレネに「魔眼の使用禁止」というハズレを与えた時点で、本気もなにもあった決闘ではなかったのである。

「これは決闘です。本気でやらなければ意味がありません。いまの貴方は、いったい何割の力で——」

「君を攻撃できるわけないよ!!」

ハリーは大声で叫ぶと、セレネの手を握ってきた。

「だって、僕は……君のことが好きなんだ!」

「……へ？」

セレネは固まった。

バットで頭を殴られたような衝撃だ。

「す、き？」

セレネは彼が放った言葉の意味が分からず、ぽかんと聞き返した。

ここで初めて、ハリーと目が合う。アーモンド形の緑色の瞳が、こちらをまっすぐ見据えていた。

「セレネだけだったんだ。僕のことを認めてくれたのは、セレネだけだったんだよ。セレネと一緒にいると心地がいいし、励ましてくれて嬉しかった。気が付くと、いつもセレネのことばかり考えているんだ」

ハリーは堰を斬ったように、恥ずかしい言葉を連射してくる。セレネは自分の顔に熱が集まってくるのを感じる。止めないといけない。ハリーの口を消す呪文を唱えなければならぬ。そう思っているのに、身体が凍結呪文にかけられたように動いてくれない。

「君の遠くを見ているような黒い瞳も素敵だし、あの時——あの墓場で、ヴォルデモートからあんな仕打ちを受けていたのに、立ち上がって戦う姿も可憐だった」

「え、えっと……」

「でも、僕は君の笑顔が一番好きなんだ！

ロックを聞いているの嬉しそうな顔や、ちょっとした時に見せる微笑みが大好きだ！」

ハリーの方も、話せば話すほど顔が熱したように赤くなっていく。

握りしめられた手にも汗が滲んでいる。

「だから、その……返事を聞かせて欲しい」

ハリーが自分の言っていることに戸惑うように、最後の言葉は小さく萎んでいく。セレネは答えることができなかった。まず、ハリーが何を言っているのか理解できない。脳がフル回転しているのに、まるで頭に入っていないのだ。体中が高熱を出しているかのように熱く、オーバーヒート寸前である。

ただ、外野の音だけがひどく鮮明に聞こえてくる。

フレッドとジョージ・ウィーズリーが口笛を吹く音、女子生徒たちのくすぐったそうな笑い声。そう、女子生徒の中には、チョウ・チャンも含まれている。

ハリーは、チョウ・チャンのことが好きだったはずだ。それがどうして、どこを

どうしたら自分になってしまったのか。否、確かにハリーの関心が自分に向くように誘導したが、ここまでは望んでいない。

「あ、あ、あなたは……」

そうだ、言ってしまうばいい。

あなたのことは、ただの駒だとは思えない。ダンブルドアや不死鳥の騎士団の情報を引き出すための駒だと。しかし、その簡単な一言が口に出せない。

まっすぐ向けられた純粹な好意を足蹴りすることなんて、できるはずがない。

「……少し、考えさせてください」

なんとかそれだけ言うと、セレネはハリーの手を振りほどき、逃げるように走り去った。

「……ミス・ゴント、いま私が話したところを読んでくださいな」

アンブリッジの声で、セレネは我に返る。

月曜日の一時間目「闇の魔術に対する防衛術」の時間だ。

アンブリッジの顔はウォルパート兄弟の呪いのせいで、ますますガマガエルに似てきている。随分とマシになったが、吹き出物がいたるところに残っていた。

「ゴント？」

「すみません、聞いていませんでした」

セレネが素直に謝ると、アンブリッジは小さく頷いた。

「ゴースト、今の時間は何をする時間ですか？」

「闇の魔術に対する防衛術の時間です、アンブリッジ先生」

「そうよね。でも、あなたの開いている教科書は違うみたいよ」

「え？」

ここで初めて、セレネは呪文学の教科書を広げていることに気づいた。

慌てて「防衛術の理論」を取り出すと、アンブリッジは呆れたように頭を振った。

「では、ゴーストの代わりに、ミスター・マルフォイ。お願いね」

「はい、アンブリッジ先生」

マルフォイが意気揚々と教科書を読み始める。

セレネはその声を聞きながら、再び思考の海に沈んでいく。

「ちよつと、セレネ。あんた、大丈夫？」

授業が終わると、ミリセントが心配そうに声をかけてきた。

「昨日からずっと上の空じゃない。なにかあったの？」

「……別に、なにもありませんよ。それより、次の時間は何でしたっけ？」

「えっと、その……魔法薬学だよ」

ダフネが遠慮がちに教えてくれた。

この言葉もセレネの頭の中で通り過ぎかけ、ふと——立ち止まる。

「魔法薬学……？」

魔法薬学は、スリザリンとグリフィンドールの合同授業だ。

つまり、ハリーと顔を合わせないといけない。そのことに気づいた途端、顔が急激に熱くなり始めた。

「ごめんなさい、ミリセントとダフネ。今日、ちょっと休みます！」

「えっ、たしかに顔が熱っぽいけど……って、セレネ!!」

セレネは早口で二人に伝えると、急いで逆方向に歩き始めた。

ハリーの感情や関心を操作したのは、まぎれもなく自分自身だ。ある意味、ハリーが感じている気持ちは作られた偽物である。

しかし、当人にとっては本物だ。なにせ、作られた感情だという自覚がない。本物だと思っている気持ちは壊すのは、非常に簡単だ。

だが、それをしてしまったが最後、もうハリーとは絶縁関係になってしまいかねない。ここで、貴重な情報源を失うわけにはいかない。

だからといって、ハリーの真剣な気持ちを打算で受け止めていいのだろうか。

「こんなときこそ、役に立ってよ」

セレネは噛みしめるように、言葉を口にする。

グリンデルバルドに事情を説明し、解決策を考えてもらおうという手もある。それが一番手っ取り早いのだが、あの策謀を巡らす闇の魔法使いのことだ。きっと、真顔で『打算で付き合え。もっともっと夢中にさせ、溺れさせるのだ。完全なる駒にしてしまえばいい』と教えてくれるはずである。

それでは、何の意味もない。

セレネが歩みを止め、壁に寄りかかって頂垂れている時だった。

「お前さ、本当にどうしたんだよ？」

予想以上の近くから聞こえてきた声に、少しだけ驚く。セレネの斜め後ろには、背の高い少年が息を切らして立っていた。

「……魔法薬学はどうしたのですか、セオドル・ノット？」

「一回くらい大丈夫だろ。それより、どうしたんだよ？　話しくらいなら聞いてやるから」

ノットはポケットに手を突っ込み、無愛想な態度で聞いてくる。

セレネは彼の提案を受け、少しだけ考え込んだ。

彼は現状、セレネが一番に信頼を置いている男子生徒だ。相談するに、最もふさわしい人物かもしれない。

「……誰にも言いませんね」

「当たり前だ。ここだと不安なら、ふくろう小屋まで移動するか？　この時間なら、あそこに誰も近づかないだろ」

「そうですね。そこで、話を聞いてくれると嬉しいです」

願わくば、これからの会話で解決策が見つかりますように。

セレネは心で祈りながら、ふくろう小屋へ向かうのだった。

衆人環視の元、ハリーの決死の告白が炸裂。

ハリーの訴えは、セレネの心を貫くのか!?

次回「ハリー玉砕、男の花道」。お楽しみに！

67話 幸福な記憶

「は、はあ!?! ポッターに告白された!?!」

ノットの叫び声が、ふくろう小屋に響き渡った。

数羽のふくろうが驚いたように羽を逆立てたが、事前にかけた防聴呪文のおかげだろう。ほかに目立って反応を示すものはない。

セレネは階段に腰を下ろすと、こくと小さく頷いた。

「本当にポッターなのか!?! ハッフルパフのフレッチリーじゃなくて?」

「どうして、ジャスティンが出てくるのですか?」

「いや、だってよ……まあいい。そうか、ポッターか。ポッターが来たか……盲点だった」

ノットは顔の筋肉を引きつらせたまま、おもむろに天井を見上げた。

「盲点?」

「いや、なんでもない。それで、お前は何に悩んでるんだよ。嫌なら断ればいいだろう?」

「それは、そうですね」

セレネは足を抱えこむと、少しだけ項垂れる。

「私、いままで彼のことを駒としてしか見ていませんでした。優しくしたのも、アドバイスをしたのも、すべては彼から不死鳥の騎士団がつかんだ蛇男の情報を手に入れるためです。正直、ハリーを異性として意識したことなど皆無でした」

「それ、そのまま伝えてみたらどうだ？」

「バカなことを言わないでください！」

投げやりな返答を受け、セレネは軽く睨み上げた。

「想像してみてくださいよ。あなたが好きな子に告白したら、相手から『あなたのことを道具だとは思っていません。だから付き合えないけど、これからも情報だけは渡してください』なんて、返されたらどう思いますか？ 失恋の痛手どころか、二度と話を聞いてくれませんよ！」

「……オレなら、そういうところも含めて好きになると思うけど」

彼はそう言うのと面倒くさそうに頭を掻いた。自分でも恥ずかしいことを言っている自覚があるのか、鼻のあたりが赤く染まっている。そんな彼の態度に、セレネは

少しだけ目を見開いた後、呆れたように呟いた。

「あなた、意外と思考がメルヘンですね」

「べ、別にいいだろ。まあ……オレはともかく、ポッターは立ち直れないだろうな」

「……そうですよね」

セレネは床の一点を見つめ、今まで感じていた思いを吐露した。

「一番いいのは、付き合うことだと分かっています。これまで通り、ハリーを騙し続ける。彼女として騎士団の情報を手に入れることが、蛇男を倒す上で一番の近道です。」

しかし、彼は本気でした。あんな、あんな真っ直ぐな告白を無下に扱っていいはずがありません。騙して付き合うなんて、私には、とても——」

「お前、妙なところで誠実だよな」

ノットはしばらく黙っていたが、セレネの隣に腰を下ろすと長く息を吐いた。彼は澄み切った冬の青空を見つめながら、静かに口を開く。

「お前はどうしたいんだよ、ゴースト」

「だから、私は——」

「駒とか『あの人』のこととか、そういう難しい話は置いておいてだ。お前自身はどう思ってるんだ？ ポッターに告白されて、どう感じた？」

「私、は……」

セレネは言葉を詰まらせた。

そして、考える。あの場でハリーに手をつかまれ、唐突に告白された時、自分はどうのように感じていたのか。それは、特別に考えるまでもない。

「……嬉しかった」

セレネの唇が、小さな声で言葉を呟いた。

「ハリーは、私が半人間だって知っているのに、この眼のことも知っているのに、私のことを好きだって言ってくれました。それは、とても嬉しかったです」

自分の頬が熱を持ち始めたのが分かった。

親衛隊の皆もセレネの生い立ちを知った上でなお、自分を慕い、従ってくれる。それに匹敵するくらい嬉しかった。

誰も好き好んで、半人間やおぞましい魔眼持ちと一緒にいたくない。セレネは二つとも持っている。それを気にせず慕ってくれる人など、滅多にいるわけがない。

あの時、ハリーのことは駒にしか見えていなかった。しかし、彼はセレネの事情を知った上で、まっすぐ好意をぶつけてくれた。だから、言葉を失ってしまうほど嬉しかったのだ。

「……嬉しい、か」

ノットは消え入りそうな声で呟いた。

「伝えてこいよ。そのままの気持ちをさ。それが一番いい選択だと思うぜ」

ノットの大きな手がセレネの小さな背中を叩く。

セレネはその手に勇気づけられたように立ち上がり、数歩階段を降りた。しかし、彼も降りてくる気配はない。振り返ってみると、彼はいまだに座ったままだった。微笑んでいるのに、どこか寂しげで、今にも泣きだしそうな雰囲気を感じている。

「……ノット？」

「頑張れよ、ゴースト」

彼はふらふらと手を振っている。セレネは肩を落とすと、彼の手首を捕まえて歩き出した。

「お、おい！」

「あなたが『伝えてこい』と言ったのですよ。それなら、しっかり結末まで見届けなさい」

セレネは答えながら、階段を下っていく。

「死んでもごめんだ！ オレはここに残る！」

「あら。あなたは自分が嫌がるようなことを勧めたのですか？」

「そういうわけじゃねえよ！ もっと、ムードとかなんというか、その、オレがいたら邪魔だろ!？」

後ろから抗議の聲が飛んでくる。本気で嫌がっているのを背中を感じたが、こちらとしても手を離すつもりはない。

「気になりません。それに……ちょっと一人では心細くて」

「……あーもう分かった！ 分かったから手を放せ！ 自分で歩けるっての!!」
彼はセレネの手を振り払うと、いつも以上にむすとした不機嫌な顔でついてくる。ハリーがいるのは魔法薬学の教室だ。セレネはまっすぐ下の階に向かう。だが、ちょうど魔法薬学が終わったばかりなのだろう。セレネが玄関ホールまで下りた時、ちょうどハリーたちが地下から出てきたところだった。

「あ……」

すぐに、セレネはハリーと目が合った。ハリーの頬が少しだけ赤くなっている。セレネは深呼吸をすると、彼に歩み寄っていった。

「ハリー・ポッター。少しいいですか？」

「おい、お前！ ハリーにいったい何をしたんだ!？」

ハリーが答える前に、ロン・ウィーズリーが番犬のように吠えた。ウィーズリーは怒りで耳まで真っ赤に染めながら、杖を取り出した。今にも呪いをかけられそうな状況だったが、すぐにハーマイオニーが飛び出した。

「ロン！ 馬鹿なことをしないで！」

「ハーマイオニー！ 君は正気か!? なにもなく、ハリーがこんな蛇女を好きになるわけが——!」

「ごめんね、セレネ。いますぐに私たちは消えるから」

「いいえ、別に結構です。隠すことでもないでしょうし」

セレネはきっぱり言い放つと、ハリーに向き合った。昨日の今日で、こうして相対すると恥ずかしさがこみあげてくる。セレネは少し呼吸を整えると、熱くなって

きた頬を気にしないように努めながら口を開いた。

「昨日の申し出の件についてですが――」

ハリーの身体が緊張して固くなっているのが、見ているこちら側からでもよく分かった。

玄関ホールに人気は少ない。誰もが次の授業へ急いでいる。こんな片隅に集った数人の男女を気にかける生徒などいなかった。

セレネがハリーの目を見ると、彼もしっかり見つめ返してくる。深い緑色の瞳の中に、がらにもなく硬くなった自分の姿が映っているのが分かった。

ハリー・ポッターは誠意をもって気持ちを伝えてくれた。

だから、自分も誠意をもって気持ちを伝えよう。

「ありがとう、ハリー。私、こんな気持ちになったのは初めてです。心臓が高鳴るほど嬉しくて、逃げ出したくなるほど恥ずかしくて……。

でも、ごめんなさい。この申し出を受け入れることはできません」

セレネが正直な言葉を伝える。

すると、ハリーの顔が歪んだ。まるで、ロンドンが壊滅したかのような表情をし

ている。彼の衝撃と悲しみであふれた顔を見てみると、セレネの胸が締め付けられるように苦しくなった。だから、口早に続きの言葉を伝える。

「あのサイコパスは、敵の親しい人を利用すると聞いたことがあります。その人を殺したり、服従の呪文で人質にとったりしてくるそうです」

「僕、そんなこと気にしないよ」

ハリーはどこか激しい口調で反論してきた。

「セレネがヴォルデモートの敵だって言うなら、とつくの昔から僕だって敵だ！

気にしないよ、そんなこと」

「そうですね。だけど、もし私と——その、そういう仲になった時、私は自分の愛している人を死力を尽くして守りたい。全力を尽くせずに最悪な結末を迎えたら、必ず後悔するので」

セレネは少しだけ目を伏せる。

事実、最愛の義父の守護に手を尽くしている。どんな自分であっても愛してくれ、心優しい義父には、悲しいまでに戦闘能力が皆無だ。戦いとは無縁で、平凡極まりない男である。だからこそ、ヴォルデモートの魔の手から守らなければならない。

「ですが、今の私には義父の守護で精いっぱいです」

護衛の手配、守護魔法、蛇男に対抗するための助言者——勉強の傍らにやるには、正直これが手いっぱいだ。

ヴォルデモートが存在する限り守り続ける手間とハリーに感じている好意。これを天秤にかけると、手間の方に天秤が傾いてしまう。

「お父さんを感じている以上の好意を、貴方に感じることはできません」

クイールに向ける愛情ほど、彼へ好意を抱けない。

そのような相手を、恋人に選ぶことなどできない。

「だから、ごめんなさい。今の私は、誰とも恋仲になれません」

セレネは言葉を選びながら、婉曲に伝えた。言葉を重ねるごとに、ハリーは少し虚ろな視線になっていくのが、少しだけ申し訳なく感じる。

「あの、これからも立ち向かうための同志として、よろしくお願いします」

セレネは最後の言葉を小さく、しかしはっきりと伝える。

ハリーは何も答えなかった。ハーマイオニーもノットも、ウィーズリーでさえ身動き一つせず、黙ったままだ。

やがて、ハリーは苦しそうに口を開いた。

「……セレネは、お義父さんのことを愛してるの？」

ハリーの深緑色の瞳は、セレネの目をまっすぐ見つめてくる。それを聞いた時、セレネはきょとんと固まり、すぐに嘔き出した。

「愛しているというより、大事な家族ですから」

セレネは微笑みながら答える。

「私は強い人が好きです。義父は弱い人ですけど、私を愛してくれるたった一人の家族です。蛇男の手から命を懸けて守り抜くのは、当然のことかと」

ハリーの赤らめていた顔色は、いまやすっかり青ざめている。拳は固く握りしめられ、ふるふると震えていた。

なにか言いたそうに口をぱくぱく動かしていたが、言葉が出てこない。その後ろに佇むハーマイオニーとウィーズリーは、どこか居心地悪そうに動いていた。

「セレネ、分かったよ」

しばらくしてから、ハリーは答えた。

「でも、僕は諦めないから」

ハリーは覚悟を決めたような顔になると、セレネに背を向けて去って行った。その後ろを、ハーマイオニーたちが追いかけていく。玄関ホールには、セレネとノットだけが残された。

セレネは近くの壁に寄りかかると、大きく息を吐いた。

「……馬鹿な人。他に良い人を探せばいいのに」

セレネは小さな声で呟く。

ハリーはそれなりに顔立ちが良い。あの地味な丸眼鏡を外せば、道行く数人が振り返るくらいの顔だちになるのではないだろうか。それに、魔法省の誹謗中傷がなくなれば、ハリー・ポッターはヴォルデモートに立ち向かう英雄であり、旗印となる。今の差別から一転して、女子生徒たちの注目の的になること間違いないだ。

きっと、彼には半人間の自分よりもふさわしい人がいるに決まっている。

「ありがとうございます、付き合ってください」

セレネは、ノットに視線を向ける。彼はヨーロップが全部沈没してしまったかのような仏頂面をしていた。ポケットに手を入れて、ひどく難しい表情をこちらに向けてきている。よほど、自分にくだらない時間を取られたのが嫌だったのか。それ

とも、他人の失恋場面を見せられて気分を害したのか。セレネは彼に対しても、少し申し訳ない気持ちになった。

「ごめんなさい、煩わせてしまつて。あなたが傍にいてくれて、心強かったです。正直に話すのって、けっこう勇気がいりますね」

「……ポッターが『あの人』を倒す駒で同志なら、オレはなんだ？」

それは、唐突な質問だった。セレネは数度瞬きをした後、考え込むように人差し指を唇に沿える。あれは、ハリーがあまりにも落ち込んでいたので、咄嗟に放った言葉であつた。特別に深い意味はない。

「オレはお前にとつてのなんだ？ 飼犬か？」

「まさか！ そうですね……片腕でしょうか」

セレネは少し悩んだ末に答える。

「それなりに強いですし、事務能力にも長けています。先ほどのアドバイスも的確でしたし、一緒にいると心強いです。」

なによりも、あなたがいないと親衛隊の運営が滞ります。私に必要不可欠な存在です」

もつとも、彼の父親は死喰い人だ。

いつまでこの関係が続くのか分からないし、どこかの機会で裏切られても不思議はない。だが、いまのところは裏切りの兆候は見られず、親衛隊に尽くしてくれている。

「だから、これからもよろしくお願いします」

その時期が来るまでの短い間でも構わない。

セレネは柔らかい微笑みを浮かべると、そっと右手を差し出した。

彼は差し出された右手を見ると、驚くように眉を上げた。そして、ゆっくりと珍しく口元を緩める。

「馬鹿。当たり前だろ」

セレネの右手を力強く握り返された。瞳の奥に悲しそうな色が見えたような気がしたが、今は安堵したような落ち着いた目をしている。薄暗い雲が晴れていくように、明るい表情に変わっていった。

「お前、どこか危なっかしいからな。オレが片腕として見張ってないと、妙なことに手を出しかねない」

「危なっかしいとは酷いですね」

「事実だろうが。ほら、『変身術』の授業に行くぞ。マクゴナガルは出欠に厳しいからな。最後の10分でも出ないよりマシだろ」

その表情のまま、セオドル・ノットは歩き出した。

セレネも彼の背中を追いかけるように歩き始める。その歩調は、ここ数日で一番軽く感じた。

それ以外は、特に変わったことなく日常が流れていく。

だが、それも唐突に終わりを告げた。

アズカバンで集団脱獄があったのだ。

脱獄したのは、もちろんヴォルデモートの配下である。アズカバンに収監されている死喰い人たちは、ルシウス・マルフォイのように「ヴォルデモートに服従の呪文で操られていた」と言い逃れをした連中とは違う。ヴォルデモートへの忠誠心が

一際高く、裏切らなかつた者たちだ。

それなのに、まだ魔法省はヴォルデモートの復活から目を背けている。いまだに「シリウス・ブラックの仕業」と叫んでいる。彼が脱獄できたのは、動物もどきだったからだ。変身して動物にでもならなければ、看守の吸魂鬼の目をすり抜けることはできない。吸魂鬼は、十数人の脱獄を許すほど軟な生き物ではないのだ。

これは、確実にヴォルデモートの仕業である。

ヴォルデモートが吸魂鬼を配下に加え、脱獄の手助けをさせたのだ。

事実、シリウス・ブラック脱獄時にはホグズミード村を吸魂鬼が巡回していたというのに、影も形も見当たらない。この時点で、魔法省は吸魂鬼をコントロールできていないということになる。

忠誠心の高い死喰い人たちと吸魂鬼。

ヴォルデモートの手札は増えるばかりだ。

だから、セレネは試験対策クラブの予定を組み替えることにした。

「今日は、守護霊の呪文をやります」

セレネが言うと、少しだけ場が色めき立った。自分の守護霊が一体何なのか、誰

しも一度は夢に見ることだ。

もちろん、どうして予定と違うのか首を傾げる生徒たちも多かったので、すぐに説明を付け足す。

「たまには息抜きもいいでしょう。それに、これは非常に高度な呪文ですし、ボーナス点がもらえるかもしれませんよ」

もともと、それは建前だ。

吸魂鬼が敵陣営に加わってしまった現状、それに対抗する術を早急に習得しなければならぬ。

「まず、自分が1番幸福なことを思い浮かべます。それから呪文を唱えます。

『エクスペクトパトロナム―守護霊よ来たれ！』」

セレネは義父と一緒にストーブの前でぬくぬくと本を読みながら、紅茶を飲む様子を思い浮かべながら杖を振る。すると、杖先からは銀色の大蛇が飛び出してきた。大蛇は神秘的に光り輝きながら空にとぐろを巻いている。ほとんどの親衛隊員は守護霊を目にすると、感嘆の声を漏らした。

「熟練すれば、これに声を乗せることもできます。さあ、やってみましょうか」

セレネが手を叩くと一斉に呪文を唱える声が部屋に木霊する。

だが、もちろん最初から守護霊を出せた者はいなかった。一人二人、ぼやっと霧のような無形守護霊が出せた者がいただけである。

しかし、いままで鍛えてきた成果もあるのだろう。

時間が終わりに近づく頃には、何人かの生徒が数秒ほど形のある守護霊を創り出すことに成功し始めていた。

「……ちよっと、可愛い」

アステリア・グリーングラスが自分の作り出した鳩の守護霊を見つめながら、うつとりと呟いた。杖先から現れた鳩はパタパタと羽ばたき、宙へ溶けるように消えていった。

「アステリア、見惚れていては困りますよ。これは、吸魂鬼から身を護るための魔法なのですから」

「セレネ、怖いこと言わないでよ」

その隣でダフネ・グリーングラスが怒ったように言った。

「私、上手くできないんだから！」

ダフネの杖先からは銀色の靄こそ出ていたが、形を作る前に消失してしまっていた。妹に負けて姉としての沽券があるのだろうか。顔を真っ赤にしながら呪文を呟いている。

「焦りは禁物です。まずは、幸福な記憶を選んで——」

「『エクスペクトパトロナム』！」

背後から声が聞こえたのと同時に、頭の上を何かが凄い勢いで通り過ぎて行った。セレネが目線を上げると、ちょうど銀色の狐が頭の上を飛び越していくところだった。狐はぴょんぴょんと跳ねながら、静かに消えていく。

「どうだ、ゴースト。驚いたか？」

ノットが意地悪そうな顔をしていた。だが、必死でこの呪文を唱えていたのは目に見えている。なぜなら、彼の顔は汗で少し光っていた。

「ええ、少し。ですが、少し顔が見苦しいですよ」

セレネはすました顔で言いながら、ハンカチを渡した。すると、意地悪そうな顔が消え、見る見るうちに顔が赤くなっていく。彼は小さな声で何か呟くと、こちらに背を向けて去ってしまった。近くにいたブレーズ・ザビニが苦しそうに笑ってい

る。どういうわけか、なんとなく腹が立ってくる笑い方だった。

「さあ、ノーマン。やってみましょうか」

セレネはノーマンの指導に頭を切り替えた。

1年生の中では、彼がもっとも呪文の使い方が上手い。自分への崇拜度も高いので、このままいけば来年度には幹部の仲間入りを果たせるかもしれない。

親衛隊の幹部陣は、やはりそもそも実力があるのだろう。他の生徒たちとは異なり、有体守護霊を生み出していた。カロ姉妹たちは獵犬のような犬を競争させるように飛び出させ、ウルクハートは自分の作り出した狼を満足気に眺めている。ピュシーは豚の守護霊が不満なのか、むすっとした表情をしていた。

セレネがその様子を眺めていると、部屋の窓枠に一羽のフクロウが降り立った。郵便の時間ではないのにフクロウが来るとは珍しい。グラハムがまっさきにフクロウに気付き、足元に付いた手紙を巻き取る。

「先輩！ 先輩への手紙です！」

「私ですか？」

セレネは少し首を傾げながら、手紙のあて名を確認する。

「ああ、この人ね。大丈夫、気にしないで練習を続けてください」

セレネは手紙をポケットにしまった。

ダフネが何か期待を込めて見返してきたので、セレネは肩を落とした。彼女はDAに所属している。ハリーの一世一代の告白を目にしているのだ。変な勘違いをしていても仕方あるまい。クラブ活動後、セレネは彼女に手紙のあて名を見せた。

「リータ・スキーター!?　なんでセレネに手紙を!？」

「いま、私の家の一室に住んでいるんですよ。大方、その愚痴でしょう」

事実、手紙の内容はクイールに対する愚痴であった。

なにもかもが地味だとか、面白いことを一つも言わないとか、テレビの仕組みが理解できないとか、録画予約なんて意味不明なことを任されても無理に決まっているとか、だいたいそんなところだ。特に変わった内容のことは一つも書いていない。

「……ひどい言われ様だね、セレネのお義父さん」

「ま、この程度で良かったです」

セレネはそう言うと、ベッドに入った。

ダフネとミリセントが何やら話し込んでいたが、しばらくすると寝入ったのだろ

う。寝息の音が聞こえ始める。セレネはそっと起き上がると、談話室に降りた。ペンケースからペン型のブラックライトを取り出すと、そっと紫色の光で手紙をかざしてみる。すると、ぼんやり文字が浮き出てきた。

「『グレンジャーに二本の箒へ来るよう脅された。何かの記事を書かされるが、受けていいか?』……ね。いったい、どういう心づもりなのかしら? まあいいわ」セレネは軽く杖を振り、守護霊を創り出すとリータ宛に飛ばした。

「本当、あのマスゴミ女も守護霊が使えればいいのに」手紙は傍受される危険が高い。念のため、本当に伝えることにはブラックライトを使った小細工をしているが、「レベリオ―正体を現せ」を使われたら終わりである。

セレネからは守護霊でリータに指示を送っているが、彼女は守護霊をマスターしきれていない。無論、彼女には練習するように催促しているが、練習しているのか、それとも練習してもできないのか、いまだに手紙でお伺いを立ててくるのである。

「はあ、『エクスペクトパトロナム』」

セレネは大蛇に「よほどのことでなければ受けなさい」と吹き込むと、そのまま

夜の空へと送り出す。

リータが何を引き受けたのか、すぐに判明した。

ザ・クイブラーという雑誌に、ハリー・ポッターのインタビュー記事が掲載されたのである。

アンブリッジが朝から腹を立てて、すぐに新しい教育令を出したのである。「ザ・クイブラー」を読むな」という実に意味不明な教育令だ。ザ・クイブラーはミステリー系の雑誌で、健全なる青少年の育成を妨げるものではない。それにもかかわらず、このような教育令が出されたのでは、誰もが気になって逆に読んでしまう。

セレネもミリセントが手に入れた雑誌を読ませてもらった。

腐ったマスゴミ女のリータ・スキーターだが、インタビュアーとしての能力は一流だ。

あの墓場で起きた出来事について、ハリーからとても鮮明に聞き出している。ただ、セレネの出生の秘密に関する部分だけが書いていない。あまりにもプライバシートな話なので、ハリーが遠慮したのか、それとも、リータがセレネの報復を恐れた

のか。

ただ、この記事のせいで、周囲の目ががらりと変わった。

スリザリン生はいつも通りに接してくるのだが、他の寮生たちがちらちらと視線を向けてくる。ダフネの話によると、たまたま入ったトイレでレイブンクロー生に質問攻めにされたらしい。

ダフネは

「セレネと仲がいいから、あの話は本当か知っているって思ったんだって」

と困惑気味の顔で教えてくれた。

セレネに向けられる視線のほとんどは好奇の色が強かったが、カロー姉妹やノット、それにマルフォイたちには嫌悪と恐れ of 視線が集まっていた。彼らの父親や親族が死喰い人だと名指しされているのだ。いままでハリー・ポッターに向けられていたような悪意のある視線を向けられ、しかし、かといって「ザ・クイブラーを読んだ生徒は退学処分にする」という教育令が出ているので、反論することができない。

フローラもヘスティアも「従兄妹たちのことなど塵芥にしか思っていないませんか

ら」と口では言っていたが、だんだんと苛立ちが募っているのが分かった。試験対策クラブでその鬱憤を晴らすように、呪文の練習に明け暮れている。

ひどいのはマルフォイだ。

監督生の特権を乱用して、腹いせとばかりに他寮の下級生に罰則を言いつけている。それだけにとどまらず、アンブリッジの組織した「高等尋問官親衛隊」にも入隊した。これは、アンブリッジ選りすぐりの生徒たちで構成される部隊であり、監督生ですら減点することができる権限を持っている。

「やあ、ゴースト」

夕食のキドニーパイを食べていると、マルフォイが偉そうな口調で話しかけてきた。胸元には監督生のHのバッジの上に、尋問官親衛隊を表すIのバッジが輝いている。むしろ、胸のバッジを見せつけるように立っている。

「こんばんは、マルフォイ。なにか御用ですか？」

「奇妙な噂を聞いたんでね。いや、君が違法な集会を主催しているとか。なんでも多くのスリザリン生を集めて、魔法の練習をしているそうじゃないか。もし、本当なら減点して、アンブリッジ先生に報告しないと――」

「ええ、試験対策クラブのことですか。それでしたら、許可は貰っていますよ」

セレネはナプキンで口元を拭きながら答える。

「それに、主催者は私ではなく、7年生のエイドリアン・ピュシーです。まだ疑っているなら、彼に許可証を見せてもらったかどうか。高等尋問官親衛隊さん」
すんなり答えると、マルフォイは悔しそうな顔をした。だが、すぐに意地悪そうな笑顔に戻る。

「だけど、君の親衛隊はどうかかな？」

どうやら、彼はセレネを困らせたらしい。いまやスリザリン寮でのトップはセレネだ。本来、その座に就くはずだったマルフォイは悔しくてたまらなかったのだろう。引きずり降ろしたくて必死な様子が伝わってきたので、セレネは淡々と事実を答えることにした。

「さあ、何のことでしょう。そのことについては詳しく知りませんが、ノットを隊長とする隊のことでしたら、彼が教育令施行日に許可を貰ったと聞いていますよ」

「え、ええ!？」

「それでは、私は図書室に行くので」

愕然と佇む尋問官親衛隊員をしり目に、セレネは席を立った。

今日はDAの活動日である。

少し図書室で時間を潰してから、必要の部屋に行くことにしようとした。その矢先だった。

「ゴースト。ちょっとお話があるの」

玄関ホールを出たところで、ピンクのガマガエルが待ち構えていたのである。

ずっと見ていると目が痛くなりそうなほどショッキングピンクのセーターを着ている。スカートもタイツもパンプスも同じ色だ。ここまで来ると、よくそこまで単色で揃えることができたと褒めたくなってしまう。

もっとも、真似だけは絶対にしたくない。

「ここではちよつとね。私の執務室に行きましょう」

セレネが答える間も与えず、せかせかと歩き始めてしまった。

仕方ないので、セレネも笑顔の仮面を貼り付けると、その後を追いかける。アンブリッジの部屋は前回と何も変わっていない。しいて変化を挙げるとすれば、ドライフラワーの種類が変わったことくらいである。

「さっそくだけど——」

彼女は、前回ののように紅茶を淹れてくる。また真実葉でも盛られるのかと思ったが、今回はこちらが紅茶を飲む前に話を進めてくる。

「あなたに尋問官親衛隊に入ってもらいたいのに」

「私に、ですか？」

セレネは驚いたように目を見開いた。

「ええ。スリザリンでもトップの成績でしょ？ 純血ではないのが惜しいけど、それでも片方は由緒ある家系だわ。それに、尋問官親衛隊に入れば、卒業後の進路も安泰よ」

とびっきりのお菓子を用意したかのように、アンブリッジは語りかけてくる。もちろん、答えは否一択だ。

昨年度までの自分であれば、成績や外聞のために所属していたことだろう。だが、今の自分は少し違う。優等生を演じ続けてはいるが、そこまで身を堕としたくはない。

ただ、ここで正直に否と答えたら最後、今までのイメージとの差異が生じてしま

う。

ここは、慎重に言葉を選ぶ必要がある。

「さあ、どうするの？」

甘い声で答えを急かしてくる。

時間はない。セレネは急いで答えを引きずり出そうと足掻いている——そんな時だった。

「失礼します、アンブリッジ先生。今はよろしいでしょうか？」

扉を遠慮気味に叩く音が聞こえてくる。

アンブリッジは椅子に仰け反ったまま入室を許可すると、現れたのはレイブンクロー生のマリエッタ・エッジコムだった。セドリック・デイゴリーの彼女、チョウ・チャンの友人で、DAに所属している女子生徒だ。彼女はセレネを見ると、小さく悲鳴を上げた。

「ミス・エッジコムね。どうしたのかしら？」

「えっと、その……」

エッジコムはちらちらと不安そうにこちらを見てきたので、セレネは逃げる機会

に利用させてもらうことにした。

「どうやら、私がいると話しにくい事柄のようですね。アンブリッジ先生、すみません。この話は一旦、持ち帰らせてください」

セレネはアンブリッジの話を聞かずに部屋の外に出た。

ただ、エッジコムが何を話すのが気になる。セレネは自分に「目くらましの呪文」をかけると、そっと扉に耳を近づけた。

『八階の必要の部屋に行けば、何か都合の良いものが見つかる？ 私に？ どういうことなのか、もう少し詳しく教えて？』

アンブリッジの嬉しそうな声に、セレネは背中が冷えていくのを感じる。

『なにを黙ってるの？ そうね……もし、あなたがこのまま黙っていたら、お母さんも呼んで三人でお話をした方がいいかもしれませんね。そうすれば、話しやすくなるかもしれません』

『そんな!!』

『煙突飛行ネットワーク室のエッジコム夫人とは、私はそれなりにおしゃべりをする仲だもの。きっと、私が呼べばすぐにやって来るわ』

アンブリッジは母親を脅しの対象として使っている。エッジコムの戸惑い唸る声が扉越しにも聞こえてきた。

『どうする、ミス・エッジコム？』

『か、会合が行われるんです。名前はダンブルドア軍団と言って——きゃあ!!』
エッジコムの悲鳴が聞こえてくる。

それと共に、満面の笑みのアンブリッジが部屋を飛び出してきた。セレネは危うくぶつかりかけたので一歩後ろに下がる。

「んふふ、これでこの学校は私の物! 『エクスペクトパトローナム!』」

アンブリッジの短すぎる杖から白銀の猫が飛び出した。猫は一度跳ねると、すぐに教室を抜けて地下へと消えていく。状況から察するに、マルフォイたち尋問官親衛隊を呼び出したに違いない。

そのまま、アンブリッジは鼻歌交じりのスキップをしながら部屋を出て行った。姿を消したまま、そっと開けっぱなしの部屋を覗いてみる。すると、エッジコムがすすんと泣いていた。腕で顔を覆うように泣いているが、顔の隙間からきつい紫色のニキビが配列をなしている。

『密告者』と。

「急がないと」

セレネは廊下に出ると、素早く杖を振った。セレネの杖先から大蛇が飛び出し、そのまま8階へと昇っていく。エッジコムのニキビは、ハーマイオニーが羊皮紙に掛けた呪いだ。それなら、セレネが刻んだ炎のルーンが作動し、いまごろ名簿が燃えているはずである。ハーマイオニーあたりが気づいてくれると助かるが、いずれにしろ守護霊の警告で逃げてくれるはずである。

セレネは目くらましの呪文をかけたまま、少し早足で寮に戻った。

のろのろ残っていて、高等尋問官によるDA狩りには巻き込まれたくない。

しかし、組織名がダンブルドア軍団とバレてしまったことは不味い。

責任の所在がダンブルドアに向いてしまう。アンブリッジは鬼の首を取ったように、そこを追撃してくることだろう。

そして、セレネの予感は大当たってしまった。

次の日、掲示板にこんな魔法省令が施行されたのだ。

「高等尋問官がダンブルドアの代わりに校長に就任する」と。

守護霊のバーゲンセール

本作オリジナル設定の守護霊

セオドール・ノット…キツネ

フローラ、ヘスティア・カロ…猫犬

ウルクハート…犬

エイドリアン・ピュシー…豚

アステリア・グリーングラス..
鳩
もう少し増えるかも……

68話 選択の自由

アンブリッジが校長に就任した。

しかし、その悪い知らせよりも、ホグワーツ生たちの関心は「ダンブルドアが魔法省大臣、アンブリッジ、大臣付きの下級補佐官、闇払い2人を一撃で倒して、颯爽と姿をくらました」という噂に向けられていた。

朝食の席では、アンブリッジの手前、あまり大きな声でこの話題をすることができなかったが、グリーン格拉斯姉妹は、額を寄せ合ってひそひそと話し合っている。アステリアは姉に向かって

「あのね、グラハムから聞いた話なのだけど、大臣はダンブルドアに頭をカボチャにさせられて、病院に入院しているんだって」

と、まことしやかに話していた。

さすがに、ダンブルドアはそこまでしていないだろう。

ちなみに、スリザリン寮付きゴースト「血みどろ男爵」曰く、アンブリッジは校

長室に入れず、相当癩癩を起こしていたらしい。

その証拠に、今日のアンブリッジは朝からどこか不機嫌だった。

せっかく念願の校長に就任したにもかかわらず、スリザリン生以外の近づく生徒に、とにかく当たり散らし、理不尽な罰則を与えている。やれ、シャツがはみ出しているだの、男女の距離が近いだの、そんな具合だ。

生徒たちにとっては面白く、アンブリッジにとっては最悪な事件はまだまだ続く。

双子のウィーズリー兄弟が巨大な魔法花火を爆発させ、学校中に花火ドラゴンやネズミの花火を徘徊させ始めたのである。この花火は興味深いことに、失神呪文を撃つと大爆発を起こし、消失呪文をかけると魔法生物マタゴのように二つに分かれる。アンブリッジを狙うようにインプットしてあったのか、巨大なドラゴン花火は、全力で逃げるアンブリッジを追いかけてまわっていた。本当に、愉快かつ素晴らしい魔法花火だ。ぜひ、どうやって開発したのか聞いてみたい。

ちなみに、首謀者の二人は罰則を受ける前に箒で逃走。ダイアゴン横丁で「悪戯専門店」を開店するという宣伝までして、楽しそうに去って行った。

しかし残念ながら、この程度でアンブリッジがへこたれるわけではない。

双子の自由への逃走の翌日には、まるで自分が女王のように踏ん反り返っていた。「音楽は禁止、ジョーク製品は禁止、手紙はすべて検閲を受けなければいけない。これらをすべて教育令として発令している魔法省の気がしませんよ」

セレネは秘密の部屋にこもると、両面鏡に向かって愚痴を零す。教育令のせいで、談話室はおろか、自室でさえレコードをかけることすら禁じられてしまった。これが他の寮であれば、こっそり聞けたのだろうが、スリザリンは高等尋問官親衛隊が多く所属している。同室のパンジー・パーキンソンなんて、アンブリッジのお気に入りだ。下手にレコードをトランクから出そうものなら、鬼の首を取ったように喜んで減点してくるだろう。

いまでは、秘密の部屋でしかレコードは聴けなくなってしまった。

「保護者からのクレームが来ますよ。ホグワーツはいつから監獄になったのか、とね？」

『反論は握りつぶしているのだろうよ』

鏡の向こうのグリンデルバルドが静かに答えた。

両面鏡は、テーブルに固定しているのだろう。グリンデルバルドの全体像が映るようにセッティングされている。彼はゆったりと肘掛椅子に腰を下ろし、手の中で小さなものを弄繰り回していた。

『手紙が検閲を受けている時点で、内部の不利益な情報は外に伝わらない。伝わったところで、魔法省大臣が新校長の後ろ盾になっている。魔法省に反旗を翻したとみなされ、アズカバンに放り込まれるのが関の山だ。』

それよりも、ダンブルドアの行方はつかめたか？』

「いいえ」

セレネはレコードの奏でるギターの音に耳を傾きながら、首を横に振った。

「ハリー曰く、不死鳥の騎士団の本部にはいないそうですよ」

先日の一件はあったが、何事もなかったかのように「必要の部屋」で月の一度の茶会は開かれた。

ハリーの話によると、セレネの放った守護霊のおかげで早く、自分以外の皆を逃がすことができたらしい。ハリーは校長室に連行され、ダンブルドアが魔法省大

臣以下4人を一撃で倒して、不死鳥と一緒に逃げるところを目撃したそうだと。

「身を隠すわけではないと言ったそうです」

『なるほど、身を隠すわけではないか』

グリンデルバルドは面白そうに口の端を歪めた。

『ダンブルドアは滅多にホグワーツから離れることができない。だが、あいつを縛る鎖は解かれた。きっと、いまごろ分霊箱の痕跡を探すための旅をしていることだろう』

「分霊箱ですか」

セレネはテーブルに頬杖をついた。

最大10個は存在するとされる分霊箱、その2つしかまだ破壊していない。セレネは試験勉強やら何やらで手いっぱい、まったく分霊箱の調査に手を付けていなかった。

「あの蛇男は物凄くプライドが高いので、きっと珍しいものに魂を封じ込めておくはずですよね」

『そうだ。珍しいものだ』

セレネの発言を受け、グリンデルバルドはゆっくりと頷いた。

『君は、私がこの数か月間、なにもしないでいたと思うか？ この老体に鞭を打って、あることを調査していた』

「もう老体ではありませんよね」

『精神的には、十分老体だ』

グリンデルバルドは胸ポケットから手帳を取り出した。表紙こそ新しいものだったが、何度も書き込みを重ねたのだろう。鏡越しにもページの端が破れていたり、よれよれになっていたりしているのが分かった。

『相手の趣味嗜好、思考パターンを詳しく知るためには、その人物について詳しく知らなければならない。』

特に幼少期の成育環境が、その後の人物形成に大きくかわってくる。私はこの数か月間、ヴォルデモートがトム・リドルであった頃を調べていた』

そう言いながら、彼は白い指先で手帳のページを丁寧にくめくっていく。

「ありがとうございます。ですが、あの蛇男がトム・リドルだった頃は50年以上も昔ですよね？」

セレネはつい口を挟んでしまう。

2年生の時に一度、トム・リドルの姿を見たことがある。背も高く、鼻筋の通った美少年だった。現在のホグワーツ随一の美少年セドリック・ディゴリーに匹敵するか、それ以上だ。そんな完璧な美少年と毛根のない蛇男は、どうひっくり返したところで同一人物に見えない。ヴォルデモートとトム・リドルを結びつける人は少ないと思った。

たとえ、同一人物だと知っている人がいたとしても、ヴォルデモートの名前を口にするだけでも震え上がるような世界だ。よほどのことがない限り、口を割らないだろう。

「たった数か月で調べられるわけが——」

『君は私を過小評価しているぞ、フロイライン』

グリンデルバルドは、にたりと笑った。そして、わずかに手帳に目を落とす。

『リドルの出身はロンドンのウール孤児院だ。いまは別の建物が立っていた。もしかしたら、あいつが成長してから直接、負の歴史』として消し去ったのかもしれない。だが、手がかりをすべて消せるわけでもない。

孤児院時代のリドルは、同じ孤児たちに大層嫌われていたらしい。大切な物を力づくで奪い取り、取り返そうとしたら不可思議な現象が起きる。たとえば、吹き出物だらけにされたりとか、ペットのウサギが首をつって自殺していたりとか、そんな具合だ。他にも断崖絶壁に連れ出され、死に瀕した者もいたらしい』

グリンデルバルドは淡々と読み上げると、ぱたんと手帳を閉じた。

『以上のことから、君は何を推測する？』

「推測と言いましても……」

セレネは口元に指を添えると、少しだけ考え込んだ。

「信じがたいことですけど、蛇男はホグワーツ入学前から魔法を使いこなしていた？」

セレネはゆっくり答える。

自分の場合は、ホグワーツ入学前まで魔法を使えるなんて考えたこともなかった。少なくとも、魔法らしき徴候はなかったように記憶している。せいぜい、自分が不機嫌な時に風が強くなったり、雷が鳴り響いたりする程度であった。だが、あれは自分がやりたくて天候を支配していたわけではない。たまたま、自分の感情に

呼応して、天氣を魔法で操ってしまっただけである。

しかし、トム・リドルは違う。

かなり意図的に、自分と敵対する相手に魔法で意地悪をしていた。言葉にすれば簡単なことだが、そんな上手くいくものではない。

成人の魔法使いでも、杖を使わず正確に魔法を操ることは難しい。その証拠に、ホグワーツの7年生になっても杖なしの魔法など扱わない。

孤児院時代のヴォルデモートが杖など手にしているはずもない。つまり、彼は杖もなく、的確に魔法を行使していたとなる。それだけ、魔法の才能に恵まれた人物と言うことだ。

セレネは改めて、敵の強さを実感した。

『そうだ。他には？』

「えっと……人の嫌がることを率先して行っていた？」

『20点だ』

グリンデルバルドは再び先ほどの小さな何かを触り始めた。

『嫌がらせに生きがいを感じていたのは事実かもしれないが、それだけが真実ではない。』

ヴォルデモートは収集癖があった。おそらく、人が大切にしている物を奪い、所有することに優越感を抱いていたのだろうよ』

「優勝トロフィーみたいにですか？」

『まさに、その通りだ。だが、それは孤児院時代のこと。これは推測だが、自分の出生の秘密が分かるにしたがって、ただ他人の宝物程度では飽き足らず、強力な魔法の歴史を持つ物の収集を好んだ可能性が高い。』

事実、フロイライン——君が破壊した指輪は非常に価値のあるものだ』

「ああ、あの指輪ですか」

セレネは机の端に転がる指輪に視線を向けた。

黒い石のはまった指輪は、死の線で切り刻まれている。不思議なことに、黒い石の部分だけ線が視えない。このことだけ不思議だが、リングの部分には線が奔っている。なによりも、この指輪に宿っていたヴォルデモートの魂は欠片も残っていない。

かった。

「友人が、ペベレルの紋章が刻まれていると教えてくれました」

『……やはりな。』

ゴントといえば、あのカドマス・ペベレルの末裔だ。いかにも、あいつが欲しがりそうな遺物だろうよ』

グリンデルバルドは納得したように目を瞑り、静かに何度か頷いている。

「つまり、単に珍しいものではなく、魔法界における高名な遺物を分霊箱にしていると？ たえば、魔術王の指輪とかマーリンの杖のような遺物でしょうか？」

『それよりも、一番考えられるのはホグワーツ関係の品だ。創始者——とくに、サラザール・スリザリンゆかりの品を探したと考えていい』

「スリザリンゆかりの品ですか」

セレネは腕を組んで考え込む。

だが、ホグワーツに在籍して5年にもなるが、創設者のゆかりの品など聞いたことがない。例外としてグリフィンドールの剣なら校長室にあると噂を耳にしたことがあるが、他の創設者にまつわる品は一切耳にしたことがなかった。

『そのあたりを、君の方でも調べてもらえないだろうか』

「了解しました。ところで、先程から気になっているのですが、あなたが手にしている物は何ですか？」

『ああ、これか。飴だよ』

グリンデルバルドはオレンジ色の鮮やかな飴を掲げる。

『ダイアゴン横丁で売っていてね。なんでも、食べた相手を吐かせ続けるらしい』
「それ、ウィーズリーのいたずら専門店の品では？」

『実に気のいい若者が経営していたよ。私の注文に可能な限り応えようとしてくれる』

「……何を注文したのですか？　そもそも、ダイアゴン横丁に行って大丈夫なのですか？」

セレネが呆れたように話しかけると、グリンデルバルドは愉快そうに笑った。

『安心したまえ。ポリジュース薬なしでも変装術は得意だね。魔法省大臣の片腕に変身して1か月以上、皆を騙し通したこともある。』

それに、注文もたいしたことは言っていない。せいぜい『被るだけで呪文が跳ね

返る帽子が欲しい』と注文を付けたくらいだ。それをわずか三日で完成させただけでなく、失神呪文レベルまで反射できるようにするとは、誠に素晴らしい才能だ』

「……通っていませんよね？」

『君のためだ。マグルの義父のために、盾の帽子は便利だろ？』

グリンデルバルドはおどけたような声で言ってみせたが、セレネは湿った視線を向け続けていた。おそらく、半分はセレネのために行動していたのだろうが、残りの半分は個人的な興味に違いない。

「正体が露見しないように、注意してくださいね」

『もちろんだ。双子の前では“気のいいパーシバルおじさん”で通ってるよ』

「……本当に気をつけてくださいね」

セレネは疲れたように息を吐くと、鏡の通信を切った。

グリンデルバルドがウィーズリーのいたずら専門店に通い始めたことも気になるが、まずは創設者ゆかりの品探しである。

自分が耳にしたこともない品物を下級生はもちろん、上級生が知っていると考えるににくい。そもそもヴォルデモートが在学中に盗み出して、分霊箱にしてしまっ

いた場合、それは50年も昔の話になってしまふ。おそろく、先生方も知らないだろう。

「『血みどろ男爵』にでも聞いてみようかな」

セレネは寮付きのゴーストを思い浮かべた。

どろどろした血にまみれ、重たい鎖を引きずる怪しげなゴーストである。彼がいつからホグワーツにいるのか知らないが、少なくとも先生より昔のことに詳しいに決まっている。上手くいけば、創設者ゆかりの品について教えてもらえるかもしれない。

セレネは前向きに考えると、血みどろ男爵を探しに出かけた。

だが、そこまで簡単に物事は進まない。

セレネが血みどろ男爵を捕まえるところまでは上手くいったのだが、世間話の延長で創設者の話題を切り出したときだ。

「そういえば、グリフィンドールの剣が校長室にあると聞いたことがありますけ

ど、スリザリンやレイブンクローとか他のゆかりの品は聞いたことがあります。
ご存じないでしょうか？」

と、最後まで言い切る前に、男爵は頭に血が上ったような怒り顔で

「そんなものは知らん！　くだらん失われた宝を探す暇があるなら、学生らしく
試験勉強をしたらどうだ!?　進路指導も近いのだろう？」

と叫び出し、分厚い壁の向こうに消えて行ってしまったのである。

しつこく食い下がることもできないはないだろうが、あの男爵には逆効果だ。よ
ほど良いカードを切らない限り、ますます頑なになって口を閉ざしてしまうのがオ
チだ。セレネは少し項垂れた。

「でも……進路指導か」

セレネは掲示板に張り出された個人面談表を見て、少しため息をついた。

来週から一週間、それぞれ30分ずつ寮監と進路について話し合う時間が設けら
れている。気が付けばOWL試験も差し迫り、セレネがホグワーツに在籍できる期
間は実質2年しかない。掲示板の下には、様々な職種のパンフレットやチラシが
見せつけるように置いてある。

セレネが退屈そうにチラシを手にしていると、ふらりとダフネとミリセントが姿を見せた。

「進路指導か。なんだか、卒業が近いって言われているみたいだね」

ダフネはパンフレットを一瞥すると、苦笑いを浮かべた。そして、そのまま個人面談の時間を手帳にメモすると談話室のソファアールへ向かってしまう。

「ダフネ、あなたはパンフレットを見ないのでですか？」

セレネは少し驚いてしまった。

少し楽観主義なミリセントならともかく、慎重派のダフネが将来に関わるパンフレットを手に取りもしないとは考えにくかった。セレネが驚いている横で、ミリセントは呆れたように息を吐いた。

「あんた、馬鹿？　ダフネはグリーングラス家の長子よ？　家業を継ぐに決まってるじゃない。ま、あたしもだけどさ」

ミリセントは気楽そうに伸びをしながら、勢いよくソファアールに腰を下ろす。セレネはいくつかパンフレットを手に取ると、彼女たちの横に座った。

「ブルストロード家の家業は、魔法使い専用高級農場の経営よ。ダフネのところは

葉関係だっけ？」

「うん、新薬の開発。だから、魔法薬学のOWLは絶対にパスしなくちゃ！」

「2人とも、もう将来が決まっているのですね」

「私たちだけじゃないわ」

セレネが感心したように呟くと、ミリセントはクッションを抱きしめながら指を折り始めた。

「パンジーも長子だし、ドラコやセオドルたちも家業を継ぐはずよ。将来について考えないといけないのは、セレネとブレーズくらいじゃない？」

「なん、ですと？」

セレネは改めて、同級生に聖28族や高名な家柄が多いことを自覚する。

いままであまり気に留めたことがなかったが、彼女たちはマグル世界というところの貴族であり上流階級だ。本来なら住む世界がまるで違う。

一応、「自分も聖28族の末裔だ」と主張することも可能だが、したところで相続できるのは壊れかけた薄気味悪い小屋だけだ。考えるまでもなく、資産は皆無だ。「お言葉だが、ミリセント。俺もそこまで真剣に考えるつもりはないね」

気が付くと、ブレーズ・ザビニがソファアの上から覗き込んできていた。背もたれに腕を乗せ、面白そうに笑っている。

「あら、なによ。あんたもアテがあるの？」

「父上がニンバス箒会社の取締役でね。今からポストを用意してくれている」

「それ、コネ入社じゃない！」

「持つべきものは人脈ってこと。というわけで、これが必要なのは、君だけだ」

ザビニは軽く杖を振り、残ったパンフレットをすべてセレネの膝の上へ乗せた。セレネはパンフレットの重みで気持ちも沈みかける。グリーンゴッツ魔法銀行から始まり病院に魔法省——さまざまな冊子が進路の決定を急かしているようで、あまり良い気持ちがいなかった。

「でもさ、セレネはいいなって少し思うよ」

ダフネがぼつりと呟いた。セレネが顔を向けると、彼女は少し俯いていた。

「セレネの成績なら、どんな職業も選び放題だよ。……人生を自由に選ぶことができて、ちよっぴり羨ましい、かな」

「ダフネ……」

「あ、でもね！ 私には家業が嫌いじゃないよ！ これも、グリーングラス家の務めだから！」

ダフネは取り繕ったように笑うと、部屋へ駆けて行ってしまった。

家業を継ぐということは、生まれた時から将来のルールが決まっているということだ。そこから外れることは許されない。ミリセントやパーキンソンのように気ままに生きているように見えても、彼女たちにかかっている親の期待や重圧はかなりのものなのだろう。

「あの子の言ったこと、気にしないで」

ミリセントは素っ気なく言うのと、数枚のパンフレットを手を取った。

「ダフネがこの生き方に後悔しているなら、とっくに逃げ出してるはずだから。ブラック家のシリウスって知ってるでしょ？ あの大量殺人犯。あいつは、ブラック家を継ぐのを嫌がって弟に押し付けたのよ。ま、弟も死んだらしいから、ブラック家はもう駄目ね。没落よ——って、セレネ！ これなんか面白そうじゃない!!」

呪い破り！」

ミリセントが冊子をセレネの前で掲げる。王家の谷のような場所を背景に、探検

家風の魔法使いが金銀財宝を手に行っている絵だった。

「すごく楽しそう！ 悩んでいるなら、これにしなさいって！」

「ありがとう。考えておきますね」

セレネは大量のパンフレットを手にながら、ゆっくりと微笑み返した。

魔法省関係は、少なくとも大臣が変わらない限り就職したくない。

グリンゴツや病院関係も勤務内容を読む限り、かなりブラックだ。なにしろ、勤務時間はおろか、定時すら記載されていない。呪い破りは魅力的かもしれないが、ロンドンを長期間離れなければならなかった。

ほかにも簿会社や薬会社なども探してみたが、魔法使いの平均寿命は総じてマグルより長い。そのため、退職時期が定まっておらず、なかなか卒に空きが出ないのだ。空いている職は、よっぽど運よく年寄りの退職者が出た部署か、ブラック極まる部署しかない。

自営業という選択もあるが、自分に経営ができるとは思えないし、そもそも売りに出せるものを作り出せるとも思えなかった。

自分の最優先事項はヴォルデモートの排除と義父の安全確保である。

そのことを考えると、勤務時間が定まっっていて、残業もなく、自宅から通える範囲の職場がいい。

しかし、そんな仕事都合よく見つかるわけではない。

そもそも、自分にどのような仕事に向いているか見当もつかない。

一瞬、自分の適性を診断して将来を決めてくれるシステムがあったらいいのに、と考えてしまったが、そんなことをしたら最後、職業選択の自由がなくなってしまう。きっと、適性なしと判断されてしまう人だっているだろう。それに、いくら適性があったとしてもやりがいを見いだせない職業に就きたくはない。

進路を自分で決めることができるのは、とても幸せなことなのだ。

その分、「自己責任」という言葉が重くのしかかってくるわけだが――。

そうこうしている間にも、月日はすぐに流れてしまう。

気が付くと、個人面談の当日になってしまっていた。

「……はあ、ついにこの日が来てしまった」

セレネは小さく肩を落とすと、スネイプの執務室に足を向ける。

「入りましたえ」

セレネが扉をノックすると、いつにも増して不機嫌極まりない声が返ってきた。よほど前の面談者——ビンセント・ゴイルが酷かったのかと思いながら扉を開け、すぐに納得した。扉のすぐ脇に、ピンク色のガマガエルがどっしり腰を下ろしている。まだ、セレネは入室したばかりだというのに、ガマガエルはクリップボードに何か書いていた。

「座れ」

スネイプは短く告げた。セレネはアンブリッジに背を向けるように座った。

「この面談は卒業後の進路について話すための時間だ。ホグワーツ卒業後、どのような職種に就くか考えているか、ミス・ゴースト？」

「そうですね、教師には憧れます」

「教師？」

スネイプが聞き返してくる。少し意外だったのか、彼はわずかに右の眉を上げていた。

「ええ、ホグワーツの教師になりたいです」

セレネは静かにうなずいた。

「その……アンブリッジ先生も校長先生になられたわけですし、闇の魔術に対する防衛術の枠が空きそうだと思います。あ、もちろん、スネイプ先生がその職に就いて、私が魔法薬学の職に就いてもかまいません。

闇の魔術に対する防衛術でも、魔法薬学でも、指導科目は何でも構いません。どうしても、ホグワーツの教師になりたいです！」

セレネは取り繕うように言葉を足すと、少しだけ眉を緩めた。

「一度は、魔法省も考えました。

ですが、私はこれまでマクゴナガル先生やスネイプ先生、そして、アンブリッジ先生など様々な先生方からアドバイスをいただいてきました。まっすぐ自分の信念を曲げず、指導してくださっている先生方の姿が印象に残っています。その姿に、

少し懂れていました。

それに――、下級生や友達に勉強を教えるとき、彼らが『分かった！』と喜ぶ姿を見ると、心がぽかぽかします。とても嬉しいですし、教えることが楽しいです」どこか懐かしむような口調で最後まで言い切る。

当然のように、アンブリッジのくだりは嘘だ。

さらにいえば、志望理由も半分は嘘だ。

ホグワーツには、ダンブルドアがいる。

イギリスで最も安全な場所だ。ヴォルデモートも恐れて進行してこない。この安全地帯でヴォルデモートを破滅に迫りやる方法を模索するのが一番いい。それに、ブラック企業より働きやすそうだ。最悪、義父の身に危険が迫ったとしても、素早くホグワーツに匿うことだってできるかもしれない。

「……なるほど、教師か」

スネイプはしばらく、訝しむような目でこちらを見てくる。

万が一、開心術を使われていると困るので、開心術で心を隔てるように壁を立て

る。4年生の時はヴォルデモートにまんまと土足で踏みにじられた心だが、今はあの時のように弱っていない。ゆえに、平静に心を閉ざすことができる。

「……しかし、そう簡単に杵が開くわけではない。ホグワーツの教員になるのは狭き道程だ。それに――」

「エヘン、エヘン」

アンブリッジが独特な咳払いをする。かなり大きな咳払いで、話の腰が折られてしまう。スネイプは訝しむようにアンブリッジへ視線を向けた。

「いかながなさいましたか、校長先生？」

「ごめんなさいね、セブルス。ちょっと話させてもらってもいいかしら？」

アンブリッジは身体を揺らしながら、スネイプとの間に割り込んでくる。セレネは少しだけ椅子を引いた。

「ホグワーツの教師の杵は、そこまで空かないわ。もちろん、あと数年のうちに教師の大半に辞めていただくことになるでしょうけど」

「トレローニー先生のようにですか？」

アンブリッジが高等尋問官の権限でトレローニーを辞めさせ、城から追い出そう

とした事件を思い出す。あのときは、ダンブルドアが去る前だった。そのため、ダンブルドアは新たにケンタウロスを「占い学」の教授に任命した。トレローニーは職を失ったが、城に引き続き住み続けることができるように手配され、いまでも北の塔に彼女はひっそりと暮らしている。

なぜ、ダンブルドアがトレローニーを留まらせたのか。魔法省による自分の大事な部下に対する不当な仕打ちに怒りを感じたのか、別の理由があるのか。その真意は分からない。

だが、いまとなってはダンブルドアが消え、アンブリッジがホグワーツの人事権を握っている。彼女がケンタウロスもろとも追い出されるのは、きっと時間の問題だろう。

「ええ。いまの私は高等尋問官であり、ホグワーツの学校長ですから。教師に対する人事権は、すべて私に一括されています。魔法省と教育令に従わない一部の教師は、悲しい話ですが辞めていただくことになります」

「……では、私が卒業するところには枠が空きますね」

「でも、あなたは18歳でしょ？ さすがに、教師として雇うには若過ぎるわ」

アンブリッジが残念そうに肩をすくめた。だが、口元に歪んだ笑みを浮かべている。

「それに新しい教師は、きちんとした魔法省の人間が任命されることになるの。もうまもなく、大臣の承認を得て、新しい教育令として施行されるわ。だから、卒業してすぐに教師になることは不可能なの」

よほど、アンブリッジは古い学の新教師がケンタウロスであることが嫌だったに違いない。

セレネは少し目を瞑った。

ケンタウロスとトレローニーを追い出し、きっとマクゴナガルやスプラウトたちのようにダンブルドアを慕う教師も追い出し、自分の意に適う魔法省の人間だけで周囲を固めていく。

教師たちは辞めさせられないように、必死でアンブリッジを称える。

教師たちは彼女の覚えをよくするため、そしていつかは自分も権威を手に入れるために、アンブリッジを崇めたてる。

そして、彼女自身は女王のように校長の座に君臨する。

女王は権力を暴力のように振りかざし、自己満足に浸るのだ。

ああ、それはなんて——醜い夢なのだろう。

それは偽の王国だ。偽りの忠誠心と恐怖に塗られたガマガエル王国である。教師がアンブリッジの顔ばかり見て、ごまをすっているような環境で、よりよい教育活動が行われるわけがない。

ホグワーツはこの女がいる限り、必ず腐敗の一途をたどる。

セレネは心の底から軽蔑した。

自分も大した理由で教職を望んでいるわけではないが、この女の理想よりマシである。

「だからね、あなたは魔法省に入りなさい。それが夢をかなえる一歩ですし、それに——」

「お断りします」

セレネは、考えるより先に否定の言葉が口から跳び出していた。そっと瞼を空け

れば、アンブリッジの強張った顔が見える。

「え——っ？」

「先生、以前も言いましたよね。私は政治に興味がありません」

政治と権力。

それはたしかに魅力的だ。

扱う者によって、良い方にも悪い方にも転がることができる。権力があれば、世界を自由自在に操ることだってできるかもしれない。たとえば、権力の使い方次第では、イギリス魔法世界のすべてを対ヴォルデモートに気持ちいが向かうように一致団結させることだって可能だろう。

しかし、それは望んでない。

権力などを手にしたら、きつと忙しくなってしまう。権力を手にした座から見る景色は、きつと自分が欲しい幸せから程遠いものだ。

だから、セレネはゆっくり首を横に振る。

「興味があるのは学問です。教壇に立つことです。もし、それが無理なのであれば——私、少し進路を考え直したいと思います」

セレネはそれだけ言うと、アンブリッジの横からスネイプに視線を向けた。

「ちなみに、現時点でホグワーツの教師になるならば、OWLでどのような成績をとる必要がありますか？」

「……大いに優秀のO、もしくは期待以上のEが求められる。担当したい科目によって変わってくるがな」

「ありがとうございます。それでは、失礼します」

セレネは立ち上がると、静かに一礼をする。

「それから、親衛隊入隊の件ですけど、少し考えさせてください。私、いまはOWLに集中したいので」

立ち去る間際、アンブリッジに営業用の微笑みを向ける。

彼女の醜悪な顔からは何も読み取れない。予想外の反撃に愕然としているように見えるし、セレネの判断を嘲笑っているようにも見えた。

だが、そんなことは気にしない。

なにしろ、ダンブルドアにアンブリッジ程度が勝てるわけではない。きっと、あと数か月以内に戻って来るはずである。

それは、同時に魔法省がダンブルドアの意見に賛成——つまり、ヴォルデモートの復活を認めるという事態が訪れるということだ。きっと、魔法省大臣は事実から目を背け、隠蔽していた事実を糾弾されることだろう。

魔法省大臣さえ失脚してしまえば、子飼いのアンブリッジなど怖くはない。

大臣と一緒に、仲良く坂を転がり落ちていくに違いなかった。

ホグワーツ城の庭は、ペンキを塗ったばかりのように日差しを浴びて輝いている。艶やかな緑の芝生は優しいそよ風にさざ波を立てていた。実に美しい風景だが、それを見惚れる5年生はいない。

進路指導も終わると、あつという間に6月に突入していた。

つまり、とうとうOWL試験がやって来たのである。

この頃になると、先生たちは宿題を出さず、代わりに試験に最も出題されそうな予想問題の練習に時間を費やすようになっていた。

談話室には必ず遅くまで5年生が勢ぞろいし、必死に勉強をしている。極度の緊張感のせいで、誰もが苛立ちを募らせていた。マルフォイなんて、下級生が近くを横切ただけで理由をつけて罰則を言いつけている。もっとも、彼の場合は誰よりもイラついているのは無理がなかった。なにしろ、あのクラブとゴイルが試験に通るように勉強を付きっ切りで教えているのだ。不機嫌になって当然であるし、よく匙を投げないものだと感心する。

だんだんと口数が少なくなっていく、おしゃべりなミリセント・ブルストロードですら試験前日の夕食時には一言も話さなかった。

そして、重い朝食の時間が終わると、最初の試験——「呪文学」の筆記試験が始まる。

いったん、玄関ホールに出されてから試験会場の大広間に入る。四つの寮のテーブルは片づけられ、代わりに個人用の小さな机がたくさん並んでいた。

椅子を引く音と着席していく音が、異様なまで大きく響いているように感じた。全員が着席し、あたりがしんと静まり返ると、試験官が開始の合図を口にする。その途端、ほぼ同時に試験用紙をめくる紙の音が会場を支配する。

セレネも羽ペンにインクを浸すと、素早く羊皮紙をめくった。

- 1 a. 物体を飛ばすための必要な呪文を述べよ。
- b. そのための杖の動きを記述せよ。
- 2 a. 鍵のかかった扉を開ける呪文を答えよ。
- b. また鍵をかけるための反対呪文を答えよ。

セレネは少しだけ心が軽くなるのを感じる。

これは1年生の問題だ。焦ることなく、慎重に問題を解いていく。ひっかけ問題もあったが、冷静に考えれば間違えることはない。周りの羽ペンを奔らす音を気にすることなく、丁寧に解いていく――。

1時間の試験が終われば、次は実技試験だ。

数人ごとに呼ばれて、試験会場に入っていく。セレネの班はゴイル、ハーマイオニー、そしてダフネと一緒にだった。だいたいは筆記試験で出た呪文が出題される。試験会場を出ると、傷心中のダフネよりも先にハーマイオニーが話しかけてきた。「セレネ、どうだった？ 思ったより簡単じゃない？ あれで、本当に良かったのかしら？」

「そうですね。まさか、浮遊呪文が出るとは思いませんでした。あれ、1年生で習った基本呪文ですよ。サービス問題でしょうか？」

「きつとそうよ。でも、サービスだらけだったわね。私はてっきり、成長呪文や元気爆発呪文が出ると思ってたわ」

「私もです。驚きですよ、本当に」

しばらく二人で今の試験に付いて話していたが、ダフネが傍で聞いていたらしい。ハーマイオニーと別れた後、彼女は疲れ切った顔で「セレネってさ、やっぱり呪文の才能があるよね。羨ましいよ」と言われ、少しだけバツの悪い気持ちになった。呪文学を皮切りに、怒涛の試験ラッシュが幕を開ける。

翌日の変身術に始まり、薬草学、闇の魔術に対する防衛術、古代ルーン文字学、魔法薬学、魔法生物飼育学、数占い、天文学、そして最後が魔法史と続いていく。特に自信があったのは、変身術だ。取り換え呪文でウサギの耳を自分の耳と取り換えたり、ケナガイタチの色をきらきらと輝く虹色に変えたり、フクロウをゴブレットに変身させたり、イグアナを丸ごと一匹消失させたりした。試験会場を出るとき、扉の脇で見守っていたマクゴナガルと目が合った。彼女の口元は嬉しそうに少し緩んでいる。

なんとなく、これは確実にO——大いに優秀が取れた気がした。

もちろん、他の教科も自信がある。

闇の魔術に対する防衛術は杖の振り方、反射速度、魔法の威力の調節まで完璧にこなし、最後の課題——「まね妖怪」をくるくる回る道化に変身させると、試験官

のマーチバンクス教授は目を大きく見開きながら

「いい杖捌きだね。NEW T試験のダンブルドアを思い出すよ。さすがに、あそこまではないが、いい腕してる」

と感心したように呟いていた。

きつと、これも満点を取れているはずだ

ルーン文字学、魔法薬学、数占いも問題ない。

魔法生物飼育学の実技で火蜥蜴に服の袖が焦がされそうになってしまったが、それ以外は順調に試験が過ぎていく。

一番苦手な天文学の実技は夜遅く——1番高い塔で行われた。

もともと、あまり星を見るのが好きではない。ずっと見ていると、こちらに落ちてきそうな不安を感じる。それに、よく見ようと目を凝らせば、線まで見えてしまいそうで怖い。

とはいえ、試験なので天文学は確実にパスしたい。セレネは星を見ながら星座表に書き込んでいると、とても重大な事件が起きた。

突如、ばんつと響く音が聞こえたのである。

セレネは凄く気になったが、今は試験中だ。ぐっと堪えて星座表を睨みつけるが、まともに試験を続けたのは数名だったらしい。ほとんどの受験生は、音の在りかに視線をやり、一部始終を目撃していた。

どうやら、アンブリッジが手下を率いてハグリッドを襲ったらしい。

ハグリッドは逃走し、止めに入ったマクゴナガルの胸に4本も失神呪文が突き刺さったようだ。可哀そうな先生は、いまだに意識が戻らないらしい。

マクゴナガルは好きな先生だった。

寮が違って、どのような生徒にもまっすぐ向き合ってくれた。質問に対して、的確に答えてくれた。彼女のおかげで、リータ・スキーターを手駒にすることができたし、グリンデルバルドを脱獄させることだってできた。

それに、ただ止めに入っただけの先生に対し、敵のように失神呪文を放つなんて極悪非道である。

セレネは試験が全部終わったら必ず見舞いに訪れ、本格的にアンブリッジへの報復を検討することにしようとい心に決めた。

ところが、マクゴナガルを見舞いには行けずじまいだった。

試験最終日——それは突如として起きた。

魔法史の試験が終わりかけた頃、ハリーが突然、悲鳴を上げて椅子から転落したのである。

試験官がすぐに駆け付け、ハリーは医務室へ行くために退出した。その様子を横目で見たが、顔からは血の気が引き、この世の絶望を飲み干したような姿になっている。

その答えは、すぐに判明した。セレネが試験会場から出た途端、ハリーは待ち構えていたように駆け寄ってきたのだ。

「ロン、ハーマイオニー、話があるんだ!! セレネも来て、すぐに!!」

ハリーは困惑するセレネの手を取ると、そのまま玄関ホールを走り切り、空き教

室まで連れ出した。彼の膝は震え、声も酷く震えていた。まるで、深刻な病気のようだ。ハーマイオニーもウィーズリーも心底心配そうに彼を見つめているが、セレネも心配になった。

だが、3人が心配して口を開く前に、ハリーは急き込んで話し始めた。

「落ち着いて聞いて。シリウスが、ヴォルデモートに捕まったんだ!!
どうやったら、すぐに魔法省に行けるのか方法を教えてくれ!」

69話 禁じられた森

ハリーは早口で話し始めた。

試験中に居眠りをしたとき、ヴォルデモートが神秘部でシリウスを拷問し、なにかを——おそらく、武器を取らせようとしていたと。

「最後には、シリウスのことを殺すって……僕、僕は助けに行かなくちゃ!! ど
うやったら、そこに行けるか教えてくれ?」

「ハリー、それは罠よ!」

ハーマイオニーが真っ先に口を開いた。だが、ハリーに鋭く睨み付けられ、一瞬縮こまる。けれど、勇気を振り絞ったような声で、彼女は先の言葉を続けた。

「あのね、ハリー。私、不思議なの。その、どうやってヴォルデモートが神秘部に入ったのかしら?」

「僕が知るわけないだろ!」

ハリーが声を荒げる。

「僕たちが、どうやってそこに入るかが問題なんだ!」

「でも、ハリー……」

「きつと、あいつのことだ。透明マントが目くらましの呪文が使えるんだろ。それに、僕が神秘部に行くときは、いつも空っぽだ」

「あなたは一度も神秘部に行っていないわ」

ハーマイオニーが怯えながら、静かに言った。

「その夢を見た。それだけよ」

「普通の夢とは違うんだよ!! ロンのパパのことはどうなんだ!？」

ハリーは怒りで赤くなつた顔でハーマイオニーに詰め寄り、真正面から怒鳴った。

「僕が見た夢で、おじさんの身に起きた出来事が分かつたじゃないか！」

「……それは言えてるな」

ウィーズリーがハーマイオニーを見ながら静かに言った。

「僕のパパが助かつたのは、ハリーの夢のおかげだよ」

「でも、今度は——あまりにも、ありえないわ！」

ハーマイオニーが、ほとんど捨て鉢な態度で言い放つ。

「だって、シリウスは騎士団の本部にいるのに、どうやって捕まえたの？」

「きつと、シリウスが神経が参っちゃって、ちょっと気分転換に出かけたんじゃないか？ 随分前から、あそこを出たくてしょうがなかったから——」

「でもなんで、ヴォルデモートがシリウスを捕まえたの!? シリウスに何をさせたいの!？」

「知るもんか！ いま大事なのは、シリウスが捕まって、助けに行かないといけないってことだよ！」

だって、僕のただ一人の家族なんだ!!」

ハリーが吠えるように叫んだ。ハーマイオニーもすっかり黙り込んでしまった。だが、まだ不満や疑問がたまっているのだろう。口こそ閉ざしているが、頭の中でハリーを説得するための材料を高速で探しているように見えた。

「セレネ、君はどうなんだ？」

ハリーの顔がセレネに向けられる。

セレネは腕を組むと、静かに答えた。

「……いったん整理しましょう」

近くのテーブルに軽く腰をかけながら、できる限り冷静になって考察していく。

「整理している時間はないよ！　こうしている間にも、シリウスが——!!」

「大事なことからこそ、適切な判断が求められます。現時点でヴォルデモートの不死性を壊せない以上、無策のまま突入したら敵の思う壺です」

今の段階でヴォルデモートと戦うのは、絶対適切ではない。

そもそも、まだ時刻は5時にもなっていない。ハーマイオニーの言う通り、魔法省は普通に勤務している魔法使いが大勢いるはずである。もしかしたら、魔法省大臣だっているかもしれない。

そのような中、ヴォルデモートが変身することなく侵入し、魔法省の最奥でシリウス・ブラックを拷問などするわけがない。

だが、ハリーが夢の中で目撃している。

しかも、セレネは詳しく知らなかったが、ウィーズリーの反応からして、ハリーは夢を通して他の場所に起きた現実の出来事を目撃した前例があるらしい。

「シリウスが捕まっているのは事実かもしれませんが。ですが、あなたを誘き寄せるための罠だという可能性も捨てきれません。

シリウス・ブラックと連絡を取る手段はないのですか？」

「ないよ！ 騎士団員のマクゴナガルは医務室にいない。聖マンゴに移送されたんだ！」

「スネイプ先生は？ 彼も騎士団員だと教えてくれましたよね？」

「あつ——！」

「そうよ、スネイプよ！ スネイプに聞けばいいんだわ！」

ハーマイオニーの顔が急に輝いた。

「ハーマイオニー、君は正気か？ スネイプは——」

「スネイプのことは、ダンブルドアが信用しています！ ハリー、まずはスネイプのところへ行きましょう。シリウスが本当に捕まったなら報告しないと！」

ハーマイオニーが全ての言葉を言い終える前に、ハリーが走り出した。彼に続くように、ウィーズリーとハーマイオニーが走り出す。セレネも成り行きを見届けるため、その後を追いかけた。

スネイプの執務室は地下にある。

途中、数人のスリザリン生とすれ違った。彼らはどうしてグリフィンドールのハリー・ポッターが周囲の人を突き飛ばしかねない勢いで地下へ急いでいるのか、不

思議そうに横目で見ている。

「開けてください！ 緊急なんです!!」

ハリーが乱暴にスネイプの執務室のドアを叩いた。

すると、ややあってから扉が開いた。スネイプが気難しそうな顔でハリーを見下す。

「ポッター、試験終了早々やかましいぞ」

「シリウスが捕まったんです！ ヴォルデモートに、あの場所で！」

ハリーが早口でまくし立てると、スネイプはまじまじと彼を見つめた。

「……4人とも入りましたえ」

ハリーを先頭に、セレネたちは部屋の中に入った。セレネが入ると、何もしていないのに扉が自動的に閉まる。

「ここで待ってろ」

スネイプは部屋の奥へと消えてしまう。

もしかしたら、たった数分だったかもしれない。だが、再びスネイプが現れるまで、随分と長い時間が経過したように思えた。ハリーは途轍もなくイライラし、今

にもその辺の机やら椅子を蹴り飛ばしそうな勢いがあつた。ウィーズリーとハーマイオニーはそわそわとしている。

セレネとしては、ハリーの気持ちも分からないわけではない。

もし、義父がヴォルデモートに襲われていると知らされたら、すぐに安否を確かめなくなる。ただ確かめるのではなく、現地に直行して助け出したいという気持ちも強くなるに違いない。こうして、待っている時間すら惜しく感じるだろう。

「ブラックは無事だ、ポッター」

スネイプは不機嫌そうな顔のまま、奥の部屋から戻って来た。

「嘘だ！　だって、僕は——！」

「騎士団員は、君の夢よりも信頼できる連絡方法を持っている。さあ、帰りたまえ。それとも、せっかくの試験終了当日に罰則を受けたいというなら話は変わってくるが」

スネイプに押し出されるように、セレネたちは部屋から出た。

ハリーは少し消沈したような顔で、ハーマイオニーは少し勝ち誇ったような顔で、ウィーズリーはどっちつかずの顔をしている。

セレネは少し息を吐いた。

「ブラックが無事だとすれば、その夢は罠です。

それなら、これから私たちがするべき行動は明確です。策に失敗した蛇男の間抜け面を笑い、試験終了を祝って夕食を楽しみましょう。それでは、ハリー。私はこれで」

セレネはハリーたちを残し、少し早めの夕食をとるために大広間へと向かった。数日前までの緊迫感が嘘のように、どの寮の5年生も浮足立っている。途中の廊下で、アーニー・マクミランとジャスティン・フィンチーフレッチリーとすれ違った。彼らも浮足立っているようで、いつになく陽気な調子で話しかけてきた。

以前のアーニー・マクミランはセレネに対して険悪な態度を崩さなかったのだが、DAで活動をしていくうちにだんだんと態度が軟化していき、ハリーの告白を機に、普通に接してくれるようになった。同寮の監督生ハンナ・アボット曰く「ハリー・ポッターが見初めた人物なら、確実に信用が置ける」ということらしい。

そんな彼らは、どうやら夕食後にハッフルパフの談話室で朝まで試験終了のお祝いをするそうだ。

「ザカリアスの伝手で、バタービールだけではなく、ファイアー・ウイスキーまで仕入れることができるそうなんだ。まあ、僕のように監督生としては見過ごせない事実な訳だが――……今日くらいは、どの寮も羽目を外していいはずだ。スリザリ
ン寮だって同じだろう？」

アーニーは少し胸を張りながら聞いてきた。だが、心のどこかでは規則を破ることが不安なのだろう。バタービールはともかく、未成年者がファイアー・ウイスキーを飲むことは禁止されている。

「さあ。私はそのような企画を担当しないので。ですが、誰かが企画しているかもしれないですね」

「そうだろう、そうだろう」

「グリフィンドールのディーンたちもお祝いするって、僕は聞きましたよ。レイブンクローも同じみたいです」

「まあ、今日は無礼講ということだ。……こほん、ところで、明日はホグズミード村に行く日な訳だが、セレネ。君には、予定があるのかい？」

アーニーは咳払いをすると、話題を変えてきた。

「特にありませんね」

「それなら、ジャスティンと行くといい。僕と行く約束をしていたのだが、生憎と用事が入ってしまったてね。彼は独りぼっちになってしまったわけなのだよ」

「別に構いませんよ」

セレネが特に悩むことなく了承すると、2人は嬉しそうに去って行った。

まだ、ファイアー・ウィスキーを飲んでいないというのに、まるで酔っぱらっているような足取りである。正直、明日会うのが心配になって来るレベルだ。

セレネは苦笑いをしながら、大広間に入るや否や、ミリセントが元氣爆發薬でも飲んだような勢いで駆け寄って来た。

「セレネー！ 今夜のお疲れ様会、あんたも参加するよね！ もちろんするわよね!？」

彼女はセレネの肩に手を回しながら、嬉しそうにはしゃいでいる。

「OWL試験終了祝いのパーティーよ！ ずっと前からブレーズと計画してたんだから！ あんたが好きな魔女の大鍋ケーキも用意したのよ！ 試験のことなんて忘れて、ばあつと騒ぎましょう！」

「もうミリセントったら。セレネ、びっくりしてるよ」

ダフネはくすくす笑っている。

「そういえば、試験終了してから姿見なかったけど、どこに行ってたの？ 図書室？」

「ちよつと野暮用です」

セレネはミリセントのはしゃぎっぷりを横目で見ながら、そつといつもの席に着いた。

確かに勉強に次ぐ勉強、その合間に様々な策を練りで、いささか疲れていたところだ。ここ辺りで少し、羽目を外して休んでもいいかもしれない。

「でも、パーティーは楽しそうですね。私、参加します」

「そうこなくっちゃ!!」

ミリセントが楽しそうに背中を叩いた。

セレネは少し笑いながらミリセントを叩き返し、ふと——教職員のテーブルに目を向ける。そして、違和感に気付いてしまった。前列に並んだ教師用のテーブル、その中央の校長席が空いている。いつもなら、夕食の初めから終わりまで、アンブ

リッジは嬉しそうに威張り腐った態度で座っている。それが、今日はいない。それから、マルフォイを始めとする尋問官親衛隊に所属しているスリザリン生の姿も見当たらなかった。

「……ミリセント、どうしてアンブリッジがいなかったのでしょうか？」

「そんなこと、どうでもいいでしょ？ どうせ、執務室にいるんじゃないの？」

「うーん、それは違うと思うよ」

ミリセントが投げやりな態度で答えたが、それをダフネが否定する。

「だって、アンブリッジの部屋がある階には『首絞めガス』が撒かれているって聞いたよ」

ダフネは糖蜜パイを幸せそうに頬張りながら教えてくれた。

「首絞めガス……？」

「うん。ジニー・ウィーズリーとルーナ・ラグブッドが見張りで立ってたよ」

「……そうですか」

少し浮き始めていた思考が、冷や水を浴びせられたように落ち着き始める。

グリフィンドールのテーブルに視線を向けてみれば、ハリー・ポッターたち三人

組の姿が見当たらない。

「もしかして」

セレネは立ち上がると、急ぎ足でグリフィンドールのテーブルに向かった。

本当は一番話しやすそうなネビル・ロングボトムに聞きたかったところだが、彼の姿も見えない。仕方なしに、DAに所属していたディーン・トーマスに話しかける。

「すみませんが、ハーマイオニーたちを知りませんか？」

「知らないよ」

トーマスは首を横に振る。

「でも、ハリーならさつき談話室から出て行ったよ。それも凄い速さで」

「あー、確かにそうだった。なんか、マントみたいなもの持ってたよな」

トーマスの言葉に付け加えるように、シェーマス・フィネガンが口を開いた。

セレネはお礼の言葉もそこそこに大広間を飛び出す。

「あの馬鹿！」

セレネは誰もいない玄関ホールで立ちどまった。

きつと、ハリーは寮に透明マントを取りに戻ったのだ。彼はスネイプの言った内容を信用せず、シリウス・ブラックがまだ神秘部にいると考えている。助けに行くため、アンブリッジの部屋の暖炉から魔法省に向かおうと考えたに違いない。ホグワーツの暖炉はすべて見張られていると聞いたことがあるが、アンブリッジの暖炉だけは別だという噂もある。

首絞めガスを流したという嘘を広め、アンブリッジの部屋から皆を遠ざけて、こっそり透明マントで忍び込むつもりに違いない。

だが、アンブリッジも尋問官親衛隊も大広間にいないとなると、たくらみが露見して捕まっている可能性がある。

ここは、アンブリッジの部屋に乗り込んで救出するべきか。

それとも、見捨てるべきか。

はたまた、自分の考え過ぎなのか。

「ゴースト、どうしたんだ？」

セレネが悶々と悩んでいると、セオドル・ノットが大広間から出てきた。

「さっきはポッターに拉致されてたし、また何かあったのか？」

「あったといえば、そうですけど」

セレネは彼に話していい内容なのか、少し悩んでしまった。

まず第一に、説明が面倒くさい。事の成り行きを話すには、シリウス・ブラックとハリー・ポッターの関係を説明するところから始まる。

ある意味で一分一秒が惜しいこの時に、あまり長々と話すのは賢明な判断ではない。

ところが、セレネが悩んでいる間に、その本人が姿を見せた。

ハーマイオニーを先頭に、階段を降りてくる。

彼女の半歩後ろをハリーが歩き、その後ろをアンブリッジが悦にひたったような顔で歩いていた。アンブリッジの杖は、まっすぐハリーたちの背中に向けられている。

あれは、校長の生徒に対する態度ではない。看守が囚人を連行するときの態度だ。

「アンブリッジ先生、その二人はどうしたのですか？」

セレネは一步前に出た。ノットが制する囁き声が聞こえたような気がしたが、きっぱりと無視する。

「ええ、彼らは私の部屋に忍び込んで、悪事を働こうとしていたのよ」

「そんなっ？」

セレネが驚いたように目を見開くと、ハリーたちはばつの悪そうな顔になった。
「それで……その二人をどうするのですか？」

「どうやら、ダンブルドアが魔法省に歯向かうための武器を、禁じられた森に用意していたみたいなの。いまから、案内してもらおうところなのよ」

「では、私が護衛します」

セレネはすっと杖を構えた。

「ポッターとは三校対抗試合で戦った間柄です。彼の技の癖はすべて知っています。それに、こっちの彼も——」

セレネは一瞬、後ろの少年に目を向けた。

「私に匹敵する腕前です。先生のお役に立てるか」と

本当なら自分一人でついていけばいいかもしれないが、進路指導の一件以後、アンブリッジからの評価は若干下がっている。確実にハリーの動向を辿るためには、アンブリッジの覚えが良い純血の子息を巻き込む必要があった。

「……護衛ね」

アンブリッジは少し考えていたようだったが、しばらくすると首を縦に振った。「ええ、そうね。ミス・ゴント、それから、後ろのミスター・ノット。2人に私を護衛する榮譽を与えるわ。ポッターたちが攻撃してきそうになったら、私を守りなさい」

そう言うのと、アンブリッジはハーマイオニーたちに先を急ぐように命令する。

セレネはアンブリッジの少し前を歩いた。

「……お前のせいで巻き込まれたじゃないか」

隣を歩くノットが苛立ちを隠せない様子で囁いてくる。

「一蓮托生でしょ」

「だから、それとこれとは話が違うっての。ったく、あとで説明してもらえないかな」
「もちろんです」

セレネは杖を取り出すと、ハリーたちの背中に向けた。

ハーマイオニーの考えが、あまり理解できない。

シリウス・ブラックを救出するために、アンブリッジの部屋の暖炉を使おうと考えたところまでは分かる。きっと、アンブリッジの部屋から出るための手段として、ダンブルドアの武器の話をでっち上げたのだろう。

だが、どうして「禁じられた森」へ向かおうとしているのか。その一点だけが、あまり推理できない。

まさかとは思うが、2人して森でアンブリッジを無力化し、何かしらの方法で魔法省に乗り組む算段ではないだろうか。

そうになったら最後、確実にハリー・ポッターは死ぬ。

ここで、ヴォルデモート対抗の旗印になるかもしれない少年を失うのは惜しい。むしろ、ハリー・ポッターの死はヴォルデモートの動きをさらに活性化させる恐れがある。

ヴォルデモートの魔の手から生き残り、一度は倒した男の子が、あっけなくヴォルデモート自身の手によって死んだ。

それはきつと、復活の事実を知っている抵抗者たちを絶望に陥らせるに違いない。

セレネとしては、まずはハリーたちの無謀すぎるブラック救出作戦を止める必要があった。

「もうすぐなの？」

アンブリッジがハーマイオニーに尋ねる。

アンブリッジは禁じられた森の茨のせいで、ショッキングピンクのローブが破れ始めていた。

「ええ、そうです」

ハーマイオニーは確かな足取りで森の奥へ、奥へと進んで行く。

アンブリッジが倒れた若木に躓いて転んだが、誰も助け起こそうとしなかった。

「あの、ハーマイオニー。道はこれで間違いないかい？」

ハリーがはっきりと指摘するような聞き方をする。

「ええ、大丈夫」

しかし、ハーマイオニーは不自然なほど大きな音を立てて下草を踏みつけながら、冷たく硬い声で答えた。

ハリーの話し方から考えるに、この計画はハーマイオニーが咄嗟に機転を利かせたものなのだろう。

次第に密生する林冠で一切の光がさえぎられていく。どことなく、見えない何者かの目がじっと注がれているような気がしてきた。ふと——以前、日本で聞いた言葉が蘇る。

あのベールを被った占い師が「森には入らない方がいい」と言っていたような気がした。今の自分は、森に足を踏み入れてしまっている。

「……ハーマイオニー・グレンジャー。あなたは、この森のことをよく知っているのですか？」

気が付くと、セレネは前を歩く彼女に言葉をかけていた。

「ええ、あなたよりずっとね」

ハーマイオニーは再び冷たい声で答える。

だが、やがて——足を止める。彼女の視線の先には、無理やり千切られたような太い縄が転がっている。これ以上、ハーマイオニーが進むような気配はなかった。

「……騙したのね、貴方たち」

アンブリッジの声が怒りで震えている。

誰も何も答えない。アンブリッジは再び杖を取り出し、ハーマイオニーたちに先を向けた。

「だから、子どもって嫌いよ」

アンブリッジの唇は、今まさにハリーたちへ「磔呪い」をかけそうな勢いがあつた。

セレネはそれとなく前に出て、彼らを守ろうか考え始めた矢先——空を切って一本の矢が飛んできた。それはドスッと恐ろしい気な音を立てて、自分の頭上の大木に突き刺さる。あたりの空気が蹄の音で満ち、森の底が揺れているように感じた。

アンブリッジは小さく悲鳴を上げると、セレネの後ろに隠れた。

「あれって……」

「ケンタウルス、か？」

ノットも予測していなかった事態に怯えているのか、隣でわずかに杖を握る手が震えるのが見える。

四方八方から五十頭あまりのケンタウルスが、セレネたちを囲んでいる。矢をつがえ、弓を構え、セレネたち全員を狙っている。

5人は誰が示し合わせることもなく、じりじりと平地の中央に後ずさりした。アンブリッジは恐怖で小さく奇妙な声を上げている——が、周囲に自分の盾になる子どもが4人もいるからだろう。彼女は杖をまっすぐ一頭のケンタウルスに向けると、どこか威圧的な声色を出した。

「私はドローレス・アンブリッジ！ 魔法大臣上級次官、ホグワーツ校長、ならびにホグワーツ高等尋問官よ！」

私に矢を向けることは、魔法省に矢を向けたことと同じであり——」

「魔法省の者だ?!」

「ええ、そうです！」

ケンタウルスが落ち着かない様子でざわついているのに対し、アンブリッジはますます高圧的な声で言葉を続けた。話しているうちに自信が出てきたのか、少しだ

け前に歩み出てくる。

「いいこと!? 魔法生物規制管理部の法令により、おまえたちのような半獣がヒトに攻撃すれば——ひいっ!」

一本の矢がアンブリッジの頭すれすれに飛んできて、くすんだ茶色の髪に当たって抜けた。アンブリッジは耳をつんざく悲鳴を上げ、両手でぱっと顔を覆った。ケンタウルの忍び笑う声が森に木霊する。気のせいではなく、ハリー、ハーマイオニー、それからノットも声を出さずに笑っていた。

「なんという! お前たちは、魔法省がある一定の区画に住むことを許しているというのに!! このけだもの! 汚らしい半獣め!!」

「黙って!」

ハーマイオニーが叫んだが、それは遅すぎた。

アンブリッジは一頭のケンタウルスに向けて、金切り声で唱えた。

『『インカーセラス—縛れ!』』

縄が太い蛇のように空中に飛び出してケンタウルの胴体をきつく巻き付き、弓を持つ両腕を捉えた。ケンタウルスは激怒して叫びながら、地面に転がる。

「やめて！」

ハーマイオニーがケンタウルスを庇うように前に飛び出した。ハリーも続けて駆け寄る。ついでに、セレネもさりげなくハリーたちの方に付いた。アンブリッジの方には、ほぼ100%ケンタウルスに狙われてしまう。急いでノットに目配せすると、彼も同じことを考えていたのだろう。そっと隣に寄って来た。

だが、アンブリッジはそのことに気づいていない。

「お願い！ 彼らは悪くないの！」

「黙りなさい、穢れた血！」

ハーマイオニーの叫びも気にしていない。

アンブリッジの怯えた目は、ケンタウルスたちに向けられていた。

「私の命令は、絶対です!!——ひゃあっ！」

アンブリッジが情けない声を上げると、急に空へ持ち上げられる。

セレネは啞然とした。そこにいたのは、余裕に3m以上もある巨人だったのだ。巨人はアンブリッジを目線まで持ち上げると、ハグリッドの小屋が丸々入りそうな口を開いた。

「ハガー!? ハガー、どこ!？」

巨人は何かを問いかける。だが、アンブリッジの声からは悲鳴しか出てこない。

「た、助けなさい!! ゴーント!! 護衛でしょ!!!?」

「ごめんなさい、先生」

セレネは巨人を見上げながら、小さく首を横に振る。

「先生から受けた命令は、ポッターから先生を護ることだけです。巨人から護るのは、契約外になります」

アンブリッジの質問に普段通りの調子で答えながらも、セレネはかなり混乱していた。

ケンタウルスが禁じられた森に生息していると聞いたことはある。事実、古い学の新教師は禁じられた森に住んでいたケンタウルスだ。

だが、巨人は別だ。

なにせ、イギリスの巨人は絶滅したと本に書いてあった。それがどうして、子どもの学び舎に隣接する森で生き残っているのか。まったくもって意味が分からない

い。

第一、彼が発する「ハガー」の意味すら分らない。もしかして、Hungryのことなのだろうか。巨人は、アンブリッジをガマガエルか巨大な豚だと間違えて、喰おうとしているのだろうか。

「この、裏切り者！」

アンブリッジは怒りと恐怖で震えながらも、こちらに杖を向けてきた。

「『インペリオ―服従せよ』！」

杖先から閃光が炸裂する。さすがは、魔法省の上級次官まで上り詰めた魔女だ。足場もなく不安定な状況下でも狙いだけは外さない。セレネが半歩横によけても、閃光が捻じれるように曲がり、背中を狙ってくる。なんとか身体を逸らしたが、顔すれすれのところを横切っていく。

「『インペリオ』！『インペリオ』！『インペリオ』！！」

続いて三本の閃光が、残りのホグワーツ生に向かって奔り出す。

セレネは舌打ちをすると、頭上に半円を描くように杖を振るった。

「『プロテゴ・トタラム―万全の護りよ』！」

大量の魔力を練り込み、自分にできる限りの盾の呪文を自分たちの周囲に展開する。さすがに、服従の呪文でも盾は貫けなかった。四本の閃光は透明な盾に激突し、あっさりと四散する。

「服従の呪文をかけるなんて、人として失格ですよ。やっぱり、ガマガエルですね。『エクスペリアームズ―武器よ去れ』！」

赤い閃光がアンブリッジの手を直撃する。

短い杖はあっさりと抜け落ち、巨人の足元に落ちた。巨人は小枝以下のサイズの杖に当然気付くことなく、そのまま踏み潰してしまう。アンブリッジは悲鳴を上げながら見下していた。

一方、ケンタウルスも動き始めていた。

「立ち去れ、巨人よ!!」

ケンタウルスたちが弓を引き絞り、矢を放ち始める。巨人目がけて、五十本もの矢がセレネたちの頭上を飛ぶ。数本の矢はセレネの顔を掠めるように地面に落ちたが、幾本もの矢が見事巨人の身体に突き刺さり、血飛沫が飛び散った。

巨人は唐突な痛みに怒り狂った。手にしたアンブリッジをぶんぶん振り回しながら

ら、巨大な足を踏み鳴らし、ケンタウルス目がけて走り出す。

もちろん、その進行上にはセレネたちがいる。

「避ける!!」

ハリーが叫んだ。

無論、彼に言われるまでもない。巨人の足に踏み潰される前に、間一髪、転がるように避けた。誰もが巨人の小石ほどもある血飛沫を頭から被ってしまったが、そのことを気にする余裕はない。まずは木の陰に隠れようと全速力で走る。巨人は闇雲にケンタウルスを捕まえようとしていた。アンブリッジは、あまりにも振り回しすぎたのだろう。途中で指から抜け、地面に落ちていた。自慢の整った髪の毛はぐしゃぐしゃになり、眼もくらくら回っているようだった。

しばらく、ケンタウルスは巨人に応戦していたが、勝ち目が薄いことを悟ったのかもしれない。

こぞって退却し始める。だが、さすがは森の賢者と呼ばれるだけある。賢い彼らは、地面に座り込む不屈きガマガエルが存在を忘れていなかったようだ。十頭あまりのケンタウルスがアンブリッジに走り寄り、つかみ上げてくる。アンブリッジの

顔が再び恐怖に染まった。

「ポッター!! ポッター!!」

アンブリッジは一番近くにいたハリーに手を伸ばす。

「助けて! 私は、悪者じゃないと言って!!」

「すみません、先生。……僕は嘘をついてはいけない」

アンブリッジの顔が絶望に染まる。

ケンタウルスはアンブリッジを担ぎ上げると、蹄を鳴らして木立の奥へと疾駆していた。

「わ、私の命令を聞きなさいー! わた、わたくしは、ドローレス・アンブリッジ、上級次官ですよ——! 離しなさい——ッ!!」

アンブリッジの声が蹄の音と共に遠ざかっていく。巨人もケンタウルスの群れを追いかけて行った。

「こ、怖かった……」

ハーマイオニーは激しい震えで膝が抜けてしまっていた。

「グロウプは皆殺しにしてしまうかも」

「正直言って、そんなことは気にしないな」

ハリーが苦々しく答える。セレネは目が点になった。

「あのグロウプって……ハリーは、あの巨人と知り合いだったのですか？」

「あれは、ハグリッドの弟だよ。それで、これからどうするんだ？」

「私たち、お城に帰らなくちゃ」

ハーマイオニーが座り込んだまま、消え入るような声で言った。

「そのころには、シリウスはきつと死んでるよ！」

ハリーは癪癪を起して、近くの大木を蹴り飛ばした。セレネはため息を吐いた。

「ハリー、彼は捕まっていなくて分かったではありませんか。あなたが試験中に見たのは、ただの夢であり罠です」

「違うんだ！ スネイプは嘘をついていたんだよ！」

ハリーはセレネに詰め寄って来た。

「あの後、やっぱり不安で、僕たちはアンブリッジの暖炉から騎士団の本部を確認したんだ。そしたら、クリーチャーが……シリウスの屋敷しもべ妖精が『ヴォルデモートが押し入って来て、シリウスを連れ去った』って!!」

「……その後、アンブリッジに見つかって、こんな事態になっていたのですね」

セレネは肩を落とす。

嫌な予感的中してしまっていた。やはり、ハリーはスネイプを信用することができなかったのだ。唯一の救いは、そのまま魔法省に無策のまま突撃しなかったことくらいだ。

「止めないでくれ、セレネ。止めるなら、君だって容赦しない」

「……杖もないのに、ずいぶんと強気ですね」

セレネは力なく両手を挙げた。

こうなったが最後、彼を止めることはできそうにない。

「私も——たった一人の家族が拉致されたら、死に物狂いで救出に行きます。止めませんよ」

ただ、真偽は限りなく怪しい。

スネイプとしても妖精、どちらが嘘をついているのか、セレネには判断しかねた。「ただこれだけは約束してください。ヴォルデモートとともに戦っても勝ち目はゼロです。」

シリウス・ブラックを救出する、もしくは罾だと気づいたら、すぐに撤退すること。武器には目もくれず、すみやかに撤退です。それだけ約束してくれるのなら、私は協力します」

「ありがとう、セレネ。それで、どうやってロンドンに行けばいいと思う？」

「まずは、森から出ることが先決かと」

「だから、その頃には、きっとシリウスは殺されてるよ！」

ハリーが声を荒げる。

「ロンドンへの足の確保も最優先ですが、まずは、彼らを森から出す必要があります。彼らの安全を確保してから、私たちはロンドンへ行きましょう。そのくらいの時間はあるはずです」

セレネは、呆然と突っ立っているノットと未だに座り込んでいるハーマイオニーに視線を奔らせた。

「ば、馬鹿言うな、ゴント！」

ノットが一瞬、我に返ったような顔になると、すぐに怒ったように口を開いた。「ここまで巻き込まれたんだ。最後までついていくに決まってるだろ！」

「あなたは駄目です。あなた、お父様と戦う可能性もあるのですよ!？」

「親父は関係ないだろ!!」

ノットが額の筋を引きつらせながら、こちらに詰め寄って来る。だが、セレネもここで簡単に引き下がるわけにはいかなかった。

ここまで巻き込んでおいて虫の良い話かもしれないが、これ以上巻き込むわけにいかない。なによりも、彼が家族と敵対するようなことをさせてはいけないと本能が叫んでいた。

「お父様はたった一人の家族ですよ。絶対に戦っては駄目です!」

「それはお前の考えだろ! それに、お前は放っておいたら、いつも傷だらけで帰って来るじゃないか! 第二の課題も、第三の課題だって!!」

「私の心配より自分の心配を——!」

「二人とも黙って!」

ハーマイオニーが立ち上がり、口元に指を持ってきた。

「誰かが近づいてくる」

背後の木立が揺れ、下草を踏みつける音が聞こえてくる。

セレネとノットは杖を構え、木立に狙いを定めた。そして、姿を見せたのは――

「おい、ハリー。どうして、その二人もいるんだ!？」

ロン・ウィーズリーだった。

彼の後に続くように、ジニー・ウィーズリー、ネビル・ロングボトム、ルーナ・ラグブッドが姿を見せる。彼らの服は多少汚れていたが、身体に傷は負っていない。彼らを見ると、ハリーの顔が一瞬綻ぶように輝いた。

「君たちこそ、どうしてここに!? それよりも、どうやって、マルフォイたちから逃げ出したんだ?」

「簡単だったよ」

ロンはハリーとハーマイオニーに杖を投げ渡しながら、得意げに笑った。

「ゲーゲートローチさ。」

お菓子食べていい? って取り出したら、あいつら横取りして食べたんだ。きっと、まだゲーゲーやってるはずだぜ。

君たちが森に向かうのが窓から見えたから、後を追いかけたのさ」

「……あなた、冴えてるわね」

ハーマイオニーは杖を受け取りながら、まじまじと彼を見つめ返した。

「それで、その二人はどうして？ アンブリッジは？」

「セレネたちは途中でいろいろあってね。アンブリッジはケンタウルスの群れに連れて行かれたよ。」

それよりも、今はどうやってロンドンに行くかが問題だ」

しん、と黙り込む。

ハリーの言う通り、ここからロンドンまで行ける方法がない。

未成年の姿くらましは禁止されている。また、アンブリッジの暖炉に戻るには時間がかかり過ぎた。しもべ妖精に付き添い姿くらましを頼むという手もあるが、ハーマイオニーが了承しないだろうし、彼らが承諾してくれるとも限らない。

「もちろん、飛ぶんだよ」

ルーナがまっすぐ冷静な声で言った。

「オーケー」

ハリーはかなり焦っているのだろう。いらいらして、ルーナに食ってかかっていった。

「まず言うておくけど、自分のことも含めて言っているつもりなら『全員』が何かするわけじゃないんだ。」

第二に没収されていない箒は、ロンのだけだ。僕のは、随分前にアンブリッジに盗られてしまったし、城の箒だと速度が——」

「私も箒を持ってるわ！」

ジニーが口を開いた。彼女の兄は、顔を髪の色と同じくらい真っ赤にして怒り始める。

「ああ、でも、お前は来ないんだ！」

「お言葉ですけど、私もシリウスのことを心配しているのよ！」

それから、私はハリーたちが『賢者の石』のことで『例のあの人』と戦った歳より3歳も年上よ！」

「それに、僕たちはDAで一緒だったよ」

ネビルが静かに言った。

「何もかも、『例のあの人』と戦うためじゃなかったの？ 僕たちも手伝いたい！」

「そうよ。私も手伝いたい」

ルーナも嬉しそうに微笑んだ。

「それに、箒で飛ぶんじゃないよ。彼らの力を借りるんだよ」

ルーナは木立を指さした。

二本の木の間で、白い目が気味悪く光っている。ホグワーツの馬車を運ぶ馬——セストラルだ。死を目撃した人にしか見えない馬は、爬虫類のような頭を振りながら近寄って来る。セレネに近寄ると、セストラルは短い舌を出して、ちろちろとローブに付いた血を舐め始めた。

「確かに。セストラルは、乗り手の探している場所を見つけるのが上手いと聞いたことがあります。

グリンデルバルドもアメリカからヨーロッパに逃亡する際、セストラルを奪ったと……」

「名案だ！……それで、どこにいるんだ？」

セレネが呟くと、ハリーは嬉しそうに笑った。

「今いるのは、一頭だけですわね」

「二頭だ」

ノットが腕を組みながら、木立の間を睨みつける。

「それなら、あと二頭必要ね」

ハーマイオニーは覚悟を決めたように言った。それに対し、ジニーがしかめっ面をした。

「あと三頭よ、ハーマイオニー」

「ほんとは、全部で七人分いると思うよ」

ルーナが数えながら平然と言った。

「馬鹿なことを言うなよ。全員は行けない！」

ハリーは再び怒り始めた。

「特に君たち四人は、関係ないんだ！」

四人が一斉に、また激しく抗議してくる。

もつとも、そのうち一名はセレネに対してだが。ハリーも諦めたのだろう。ハリーは痛そうに額の傷を抑えると、どこかぶっきらぼうに言った。

「オーケー、いいよ。勝手にしてくれ。」

「だけど、セストラルがもっと見つからないと、君たちは行くことができ——」

「それは問題ないぞ、ポッター」

ノットが自信たっぷりに言った。

「オレたちは血だらけだ。セストラルは生肉で誘き寄せることができる。きっと、こいつらもそれで来たんだ。それに、もう数はそろってる」

事実、次々に木立の奥からセストラルが現れ始めている。

ハリーは気づいていないが、小さいセストラルが彼の血の付いたローブをしきりに舐めていた。

「だけど、ハリー。ゴーストはともかく、そいつも連れて行くのか？」

ロンが訝し気に口を開いた。

「そいつの父親は死喰い人だぞ？」

「大丈夫ですよ、ウィーズリー」

セレネは近くのセストラルにまたがりながら、努めて静かな声色で言い放った。

「彼が裏切る素振りを見せたら、私が倒しますから」

セレネ個人としては、彼の力量を信用している。

ここまで頑なに同行すると言っているのだから、無下にする理由がない。だが、

彼が実際に父親と敵対した時——どんな反応を示すのか、想像できなかった。

もし、彼が父親に付いたら、少し心が痛むが敵として倒すしかない。

もし、彼が父親と敵対したら、代わりに自分が倒せばいい。

どちらの選択もできれば取りたくないが、セオドル・ノットがついてくる意志は確固としたものだ。ここで振り払い、失神させたところで、意識が戻り次第、追いかけてくる可能性が大である。

ならば、目の届くところに置いておいた方が都合が良い。

「部下の不始末は上司の責任です。彼のせいで、みなさんが危険に陥るような事態にだけは決してさせません」

「……セレネ、彼とは友達じゃないの」

ハーマイオニーがルーナの手を借りながらセストラルに乗ると、不安そうに尋ねてくる。

「友だちというより……心強い右腕ですね」

セレネがノットを横目で見ると、彼は「まあ、そんなところだろう」とでも言いたそうな顔をしていた。

「よし、みんな乗ったか」

ハリーがセストラルの鬘を握りしめ、全員を見渡した。

6人の目がハリーに集まる。ハリーはそれを確認すると、ロンドンと思われる方向に目を向ける。セレネ以外の皆の視線が、ハリーの背中に注目していた。

セレネは全員の目を盗むように、こっそり杖を取り出すと呪文を唱える。

『『エクスペクトパトローナム——守護霊よ来たれ』』

杖先から現れた銀色の大蛇は、木立の中へと消えていった。

ここに集まったのは、セレネを含めて16歳以下の子どもたちだ。ヴォルデモートが万が一、まだ神秘部にとどまっていた場合、そして、敵対する場合、このまま突貫しても全員の命は保証できない。

万が一に備え、助言者を召喚する手は打っておく。

彼が魔法省まで来るか、来ないかは別として。

「えっと、ロンドンの魔法省入り口。そこに、連れて行って欲しいん、んだけど」
ハリーはどこか半信半疑で言った。

すると、セストラルは落馬しそうになるほど素早い動きで両翼をさっと伸ばす。馬はゆっくりと屈みこみ、それからロケットのように急上昇した。

あまりの速さで急角度に昇ったので、セレネは骨ばった馬の尻から滑り落ちないように、両腕両足でがっちりと胴体にしがみついた。

セストラルは高い木々の梢を突き抜け、血のように赤い夕焼けに向かって飛翔する。

広い翼は殆ど羽ばたかず、涼しい空気が顔を心地よい具合で打ち付けた。

ホグワーツの校庭を越え、ホグズミードも通り過ぎる。

眼下に広がる山々や峡谷が見えた。日がかげり始めると、街の灯りがチラつき始めた。車がテールランプをつけ、高速道路で渋滞している様子も見える。

太陽はすっかり落ち、街の灯りが眼下に見え始める。

耳元で唸るごうごうたる風の音で、なにも聞こえない。会話は疎か、呟きさえ拾うことができない。

どれだけ長時間、乗っていたことだろう。

セレネは、ロンドンの時計塔の灯りに気付いた。

目を凝らすと、ビックベンの針は10時を指している。

きっと、今頃はミリセントとダフネ、それからザビニが、セレネたちが戻ってこないことを気にしながら、宴会をしているかもしれない。

そんなことを考えていると、セレネの胃袋がぐらつとした。

セストラルの頭が急に地上を向き、着陸態勢に移行したのである。

セレネは馬の首に強く腕を巻き付けると、着陸の衝撃に目を閉じた。

Q。セレネが守護霊でシリウスの安否を確かめればいいじゃん。

A。シリウスは、蛇寮かつ自身の利き腕を奪ったセレネのことを（完全には）信用していない。故にシリウスの元にセレネの守護霊が来たら、逆に罠を疑い返事を出さない可能性が高く、ハリーに「返事が来ないから、つかまっているんだ！」と誤解されてしまうため。

なにはともあれ、次回は魔法省突入です。

不死鳥の騎士団編は、あと多くて3話で終わりになります。

リメイク前とは遥かに異なる結末です。ぜひ、楽しみに待っていてくださると嬉しいです。

70 話 神秘部の戦い

魔法省は異様に静まり返っていた。

夜勤や残業している職員も、清掃員も、巡回の警備員どころか守衛の姿さえなかった。

「……これは、異常ですよね」

空っぽの守衛室を横目で見ながら、セレネはハーマイオニーに囁きかける。

彼女も強張った顔をしながら微かに頷いた。そのまま、彼女はジニー・ウィーズリーに言葉をかける。

「まったく人がいないなんて、ありえないわ。たとえ業務時間外だとしても、せめて施錠はするはずよ。まがりなりにも政府なのだから、いくつも機密情報があるでしょうし……そんなことをするのは、マグルだけ？」

「ううん。魔法省はガードマンが24時間、交代で巡回警備しているはずよ。それに、いくら魔法使いでも、家を留守にする時には鍵をかけるわ」

ジニーもハーマイオニーの意見に同意する。

もつとも、それをハリーに伝えたところで、彼は足を止めない。むしろ、シリウス・ブラックが捕縛されている確証を深めるだけだろう。

「こっちだ！ このエレベーターに乗るんだ」

ハリーが金色の門をくぐりながら言う声が聞こえてくる。

「……覚悟を決めるしかないわね」

セレネは小さく呟くと、杖を手の中で回した。

いざというときのために、いつでも眼鏡を取る心づもりだけはしておく。

全員がエレベーターに乗り込むと、扉は音を立てて閉まり、鎖が重なり合うような音と共に下がっていく。100年ほど前の骨董品のようだと思った。

どれだけ地下に潜っていったのだろうか。

やがて、エレベーターが停まると、落ち着き払った女性の声がエレベーター内に響いた。

「神秘部です」

扉が横に開く。

廊下に出ると、ここも何の気配もなかった。ただ、松明だけが均等な間隔で燃え

ている。

ハリーが先頭になって歩く。

彼は取っ手のない黒い扉に向かって、まっすぐ歩いた。黒い扉を押し開けると、そこは大きな円形の部屋だった。床も天井も、何もかもが黒かった。何の印もなく、まったく同一の取っ手のない扉が黒い壁一面に間隔を置いて並んでいる。壁のところどころに蠟燭立てがあり、青い炎が冷たく燃えている。その炎が光る大理石の床に映し出される様子は、まるで足元に暗い湖が広がっているようだった。

「ハリー、閉めた方がいいよね」

一番後ろのネビルがそう言いながら、そっと扉を閉める。

その途端、ゴロゴロと大きな音がして、蠟燭が横に動き始めた。円形の部屋が回し始めたのだ。ハーマイオニーが小さく悲鳴を上げる声が聞こえてくる。数秒間だけ、壁だけが急速に回転した。やがて、回転を始めたときと同じように突然、音が止まり、すべてが再び動かなくなった。

「ごめんね、ハリー」

ネビルがすまなそうに言う声が聞こえてくる。

「出口、分からなくなっちゃった」

「いいよ、ネビル。どうせ、僕が閉めてと頼むつもりだった」

ハリーはそう言いながらも、戸惑ったように周りを囲む同じ形の扉を見渡した。

「……12の扉ですか」

セレネは腕を組むと、扉を一つずつ睨み付けた。

『ヘラクレスの12の試練』にかけた仕掛けだと、少し厄介ですね」

「ゴースト、それはないだろ」

ノットがすぐさま否定する。

「扉分の試練を乗り越えないと、次に進めないなんて、ありえないだろうが」

「たぶん、たんに侵入者がどの扉から入ったか分からなくするためだと思うわ」

ジニーが声を潜めて続けて答える。

「とりあえず、前に進みましょう」

「でも、それじゃあ、ハリー、どっちに行くんだ？」

ロンが聞くと、ハリーは正面の扉へまっすぐ進んだ。

「きらきら光っていた部屋だったんだ。正しい方向かどうかは、見ればわかる」それから、いくつかの扉を開いていた。扉を閉じる前に印をつければ、たとえば壁が回っても確かめた部屋が分かるので問題ない。

「神秘部」という名の通り、扉の向こうに広がる部屋には摩訶不思議な現象が詰まっていた。

水槽に脳みそがいっぱい詰まった部屋、小声で囁く声が聞こえるアーチがある部屋、太陽系の惑星が浮かんでいる部屋、開錠呪文でも万能ナイフでも開かない扉、そして次の扉を開いた瞬間、ハリーが叫んだ。

「ここだ！ この部屋だよ！」

そこは確かにきらきら輝いていた。

壁いっぱい照明が踊り、砂時計が所狭しと並んでいる。砂時計の下には、それぞれ「年」や「月」、「時間」そして「分」と刻まれている。セレネは目を丸くして、そっと「年」と刻まれた砂時計を手にとった。

「ハーマイオニー。もしかして、これは逆転時計ではありませんか？」

「ええそうよ。引っ繰り返すと、その下に刻まれた時間単位の分だけ巻き戻すこと

ができるらしいわ」

セレネはハーマイオニーの返答を聞き、少しだけ気分が高揚した。そして、こっそりポケットに滑り込ませようとする。しかし、待ったの声をかけられてしまった。

「あんた、盗みは良くないよ」

ルーナ・ラグブッドが夢を見ているような声で指摘して来た。

「アズカバンに送られちゃうもん」

「……分かってますよ。冗談です」

セレネは洩々、逆転時計を棚に戻す。ロン・ウィーズリーが「なにを企んでいるんだ」とでも言いたげな顔で睨んできたので、セレネは肩をすくめた。

「義父と一緒に、ライブエイドを観に行きたかったんです」

「ライブエイドって、チャリティコンサートのこと？」

ロンたちは顔をしかめていたが、この中で唯一、セレネと同じくマグルで生まれ育ったハーマイオニーだけが反応を返してくれた。

「ええ。義父はロックが好きなんですけど、ライブエイドが開催されたのは私が幼い頃でしたから、チケットを買いに並ぶことができません——」

「二人とも立ち止まらなくてくれ！ 時間がない！」

ハリーが苛立ちを隠せない早口で言ってくる。

「……ハリー、分かっていますよ」

セレネは名残惜しそうに逆転時計に視線を向けると、誘惑を振り切るように歩き始めた。

いまの自分は魔法が使える。あと数年も経てば、成人になり、自由に魔法が使えるようになるのだ。そうしたら、逆転時計で過去に戻り、こっそり魔法を使ってライブ会場に入り、豪華なロックスターたちの夢の祭典に浸ることだってできる。なにせ、ビデオで見るのとライブ会場で見るのでは迫力が違う。

セレネは義父のために、そして自分のためにタイムトラベルをして、世紀のライブを楽しみたかった。

もっとも、それは逆転時計さえあれば、いつでも叶えられる夢だ。

そして、逆転時計を手に入れる機会は、きっと他にもあるに違いない。

ハリーが先頭を歩く。

部屋の奥には、重々しい扉があった。

「これだ。これを通るんだ。この奥に、シリウスがいる」

ハリーは振り向いて全員を見渡した。

セレネは杖を持ち直した。本当にシリウス・ブラックがいるにしろ、罠にしろ、多少の戦闘は避けられないだろう。ここから先は、今まで以上に用心が必要になる。ライブエイドのことなんて、考える余裕はない。セレネは少し唾をのんだ。

そこは教会のように高く、ぎっしりそびえたつ柵以外に何もない静かな空間だった。

柵には小さな埃っぽいガラスの玉がびっしりと置かれている。柵の間に間隔を置いて取り付けられた燭台の灯りで、ガラス玉は鈍い光を放っていた。

「97列目の柵なんだ。97……97……」

ハリーが囁きながら、早足で進んで行く。

だが、自分たちの息遣いと足音以外、誰かがいる気配はない。

少なくとも、何者かが拷問を受けているような音や気配はなかった。いかにも壊

れそうなガラス玉が多く鎮座している空間だというのに、争って壊れたような形跡はどこにも見当たらない。

ハリーには悪いが、セレネはほぼ確実に罠だと確信していた。

延々と伸びる柵の通路を忍び足で歩きながら、セレネは1番冷静に事態を対処できそうなハーマイオニーに囁きかけた。

「これは罠です。争った痕跡ありませんし」

「……そうね。とりあえず、一か所に固まっていた方がいいわよね。……ネビル、こっちょ」

ハーマイオニーは囁き返しながら、別の通路に迷い込みそうだったネビルを呼び戻す。ハリー・ポッターが見るからに焦り、ロン・ウィーズリーとジニー・ウィーズリーは不安そうな顔で、ネビル・ロングボトムは少し震え、セオドール・ノットは無表情で、そして、ルーナ・ラグブッドは夢見心地な様子で歩いている。

このメンバーで果たして、この後待ち受けるであろうヴォルデモートたちと戦うことができるのか。

セレネも不安になった。特に、ルーナ・ラグブッドは事態の深刻さを認識してい

るかどうか疑わしい。

これは、かなり早い段階で、眼鏡を外す事態が訪れるかもしれない。セレネは少し呼吸を整えると、覚悟を決めた。

「95…………96…………97…………ここだ」

ハリーは眩きながら、目的の場所に到着する。

もちろん、そこには誰もいない。争ったガラスの破片すらなかった。ハリーは呆然と突っ立ってしまった。

「……ハリー、これ。君の名前が書いてある」

ロン・ウィーズリーが、一つのガラスの玉を指さして言った。

ハリーは訝しそうな顔をしながら、それを手に取る。セレネが少し爪先立ちをし、ハリーの肩越しに覗いてみる。ハリーが手にした埃っぽいガラス玉には、黄色み帯びたラベルが張り付けられていた。およそ16年前の日付が細長い蜘蛛の足のような字で書いてあり、その下にはこう書いてある。

「『S・P・TからA・P・W・B・Dへ」

闇の帝王、そして(?)ハリー・ポッター』……なんででしょうか?」

「分からない。僕に関係するものだってことは分かるけど」

ハリーがそう言った瞬間だった。すぐ後ろから、気取った声がした。

「よくやった、ポッター。さあ、それを私に渡すのだ」

ルシウス・マルフォイだった。

彼の言葉を皮切りに、どこからともなく黒い人影が周囲に現れ始める。右手も左手も、自分たちの進路を断つように死喰い人たちが立ちふさがった。フードの裂け目から目をぎらつかせ、十数本の杖先がまっすぐこちらの心臓を狙っている。

セレネはそれを見た瞬間、反射的に杖を振るった。

『『プロテゴ』！』

セレネは弧を描くように、自分たちの周囲に盾の壁を構築する。

死喰い人たちが発するあまりにも濃厚な殺気に、こちらの肌に電気が奔ったような震えを感じる。だが、不思議なことに、誰も呪文を放ってこなかった。

「警戒することはない。おとなしく、それを渡せばな」

ルシウス・マルフォイはハリーに片手を突き出し、掌を見せる。ハリーはじりつと後退しながら、必死にマルフォイを睨みつけた。

「シリウスはどこだ？　どこにいるんだ！」

「夢と現実の区別がつかない赤ん坊なこと」

マルフォイの左奥から、ゆったりと残忍な笑いを口元に浮かべた女が現れた。

「小っちゃくて、おバカなベイビー・ポッター。こわーい夢が本物だと思ってちまいました」

魔女は、ぞっとするような赤ちゃん声で笑う。魔女の骸骨のような顔が見えた瞬間、セレネの左隣に立っていたネビルが一步前に出た。

「ベラトリックス・レストレンジ！」

その声は、普段の穏やかな口調からは想像もできないほど怒りに満ち溢れていた。レストレンジと呼ばれた魔女はネビルを一瞥すると、馬鹿にしたような嘲り声をあげた。

「おやおや、お前はロングボトム！　両親は元氣？」

「お前のせいで、僕のパパとママは——ッ!!」

「ネビル、待って」

ハリーが待ったをかけるのと、マルフォイがレストレンジを黙って制するのは同

時だった。

もし、両者のどちらかが遅ければ、呪文が宙を奔っていたかもしれない。

「我々は君たちを傷つけるつもりはない。ポッターが予言を渡せば、誰も苦しまない」

「嘘ですね」

セレネはルシウス・マルフォイに杖を向けたまま、静かに呟いた。

「それを渡した瞬間、私たちを死の呪文で皆殺しにするつもりですよ。苦しむ暇を与えずに」

「それは誤解だ。高潔なる魔法族を傷つけることは、我が君の意志に反する」

「……つまり、ハーマイオニーは殺すってことだろ」

ハリーが言った。

おそらく、ハーマイオニーだけでない。半人間のセレネや純血主義と仲の悪いウィーズリー兄妹も殺される。生き残る望みがあるのは、高貴なる家柄である28族のネビルとノットくらいだ。むしろ、あの発言は同族のノットを救済するための措置だと考えていいだろう。

「なら、僕は渡せない。それに、僕たちの誰かを襲えば、これを壊すことになるぞ！」

ハリーはガラス玉を掲げると、強い口調で言い放つ。

それを聞きながら、セレネは高速でこの窮地を脱する方法を考える。この場合は、ルシウス・マルフォイが仕切っている。つまり、彼がこの現場における最高責任者だ。どこかでヴォルデモートが見ている可能性は捨てきれないが、少なくとも、あのサイコパスは直接指揮ができる場所にいない。

この状況に於いて、それだけが救いだ。

ならば、策を講じれば逃げ出す算段ができるかもしれない。

「これは、何の予言なんだ？」

「冗談だろ、ハリー・ポッター」

「あいつが欲しがるくらいだろ？ そんな重要な物には見えない」

「ダンブルドアから聞いていないのか？ お前が額に傷痕を持つ理由が、神秘部の奥の予言に隠されていると——」

ハリーとマルフォイが話している。

セレネは杖を構えたまま、さっと周りに視線を奔らせた。周囲には死喰い人。いつ攻撃に転ずるかは分からない。家具はなく、予言と呼ばれるガラス玉が延々と置かれた棚しかない空間だ。ガラス玉は、ホグワーツの大広間の天井並みの高さまで置かれている。少し振動を加えただけで、あっという間に崩れてしまいそうだ。

セレネはそれを一瞥すると、右隣のノットに小声で話しかけた。

「棚を壊します。私が『いまです』と合図を出したら。……隣に伝えてください」
「……分かった」

セレネはそう言うのと、もう片方のネビルに伝える。

ハリーは自分の背後で何か囁く声が聞こえたのかもしれない。一瞬だけ口の動きを止めたが、こちらに関心がいかないようにするためだろうか。さらに注目を集めるくらい大きな声で、マルフォイに質問を返していた。

「それじゃあ、あいつは僕が予言を取りに行くのを望んでいたわけだ。でも、どうしてだ？」

「どうしてだと？」

マルフォイは信じがたいとばかりに喜びの声を上げた。

「なぜなら、神秘部から予言を取り出すことを許されるのは、予言に関わる者だけだからだ」

「なら、あいつが直接来ればいいだろ？」

「我が君が魔法省に!？」

レストレンジが高笑いをした。その声は空気を震わせ、ガラス玉が微かに震えた。
「我が君の復活を認めない馬鹿な魔法省へ、わざわざ出向くと!？」ポッター、お前は我が君を馬鹿にしているのか？」

「そうか。だから、あいつはお前たちに汚い仕事をやらせているわけだ。スタージスを使って盗ませようとしたり、僕を使ったり——」

「セレネ、伝わったよ」

ネビルが囁いてくる。

セレネは少し足を伸ばし、ハリーの足を軽くつついた。それだけで、ハリーも理解したらしい。彼は微かに頷いた。

「そこまでして、欲しい予言なのか？」

「ポッター、お前は知りたくないのか？」

マルフォイがゆったりした口調で聞いてくる。

「16年前、なにがあったのか。お前を苦しめ、両親を死に至らしめた予言が、いったいどのようなものなのか。気になるだろう？」

「……僕は、16年も待った。……だから、もう少しくらい待てる！——セレネ!!」
「いまです！」

ハリーが叫ぶ。それに呼応し、セレネも声を上げた。

自分を含め、6人の叫びが一斉に予言の間に響き渡る。

『『レダクトー粉々』!!』

6本の粉碎呪文が6つの方向に放たれ、狙われた棚が爆発した。

そびえたつような棚がぐらりと揺れ、ガラス玉が滝のように死喰い人に降り注ぐ。途中、完全に破壊された何百もの玉からは真珠色のゴーストみたいな姿が空中に立ち昇り、煙幕のように宙に浮かび上がる。粉碎されたガラスが雨のように降って来る中、久遠の昔からの予言の声が鳴り響いていた。

「走れ！」

辛うじて、ハリーの叫ぶ声が聞こえた。

セレネたちはいっせいに地面を蹴った。予言者たちの姿が煙幕になり、声が足音を紛らわしてくれる。これを嬉しい誤算とでも言ったらいいのかもしれないが、もたもた逃げるわけにはいかない。

なにしろ、自分たちにもガラス玉が降ってきている。いつ棚の下敷きになってもおかしくないのだ。セレネは懸命に足を動かし、ハリーの背中を追いかける。

だが、簡単に彼を追わせてくれない。

予言者の煙幕を突き破り、黒い煙が脇を疾走するのが見えた。その煙の中に、死喰い人特有の銀の仮面が出現する。セレネは走りながら杖先を向けた。

「『フリペンドー撃て』！」

素早く放った呪文は死喰い人に命中し、回転しながらはるか後方へ飛ばされていくのが視界の端に映った。

一瞬、死喰い人に時間を割いてしまったせいで、ハリーとの距離が少し開いてしまっていた。ハリーの背中が50列目の棚を曲がる。セレネも全速力で通路を駆け抜け、急いで角を曲がった。ところが、そこにはハリーの姿が見当たらない。待ち構えていたのは死喰い人だった。

「アバダー」

『ペトリフィカス・トタルス―石になれ』！」

死喰い人が呪文を唱え終わる前に、セレネの石化の呪いが炸裂する。死喰い人は直立不動の姿勢になると、そのまま後ろ向きに倒れた。

「邪魔です！」

セレネは固まった死喰い人を軽々跳び越え、ハリーを追いかける。

遠くに来るとき通った扉が半開きになってるのが見える。ハリーが弾丸のように扉に駆け込み、続いてハーマイオニーとネビルが転がり込む。ところが、ここで彼らも逃げることに精一杯で、自分のことしか考えられなくなってしまっていたのだろう。ネビルが転がり込んだ途端、ハーマイオニーがろくに確認せず、杖を振るって扉を閉めてしまったのだ。

「嘘でしょ!？」

セレネが扉に付いたときには、もう取っ手がまったく回らない。完全に鍵が閉められてしまっていた。セレネは開錠呪文を唱えようと、杖先を取っ手に向けた――その時だった。

「この馬鹿、止まるな！」

部屋を貫くような声と共に、ノットが自分の腕をつかんで走り出す。顔の横を緑色の閃光が奔っていった。彼が手をつかまなければ、きっと閃光に当たり絶命していたことだろう。セレネは足を動かしながら後ろを振り返り、杖を迫りくる死喰い人に突きつけた。

『ブラキアム・エンメンドー―骨よ、なくなれ』

セレネの放った閃光は死喰い人に直撃し、まるで軟体生物のように崩れ落ちた。立つことはもちろんのこと、手の骨も失われたらしく、杖を握る手がだらんと垂れて狙いを定めることすらできない。

そのまま無言呪文で、その後ろにいた死喰い人ごと後ろへ吹き飛ばした。けれど、これ以上、後ろを気にする余裕はない。ノットと自分の歩幅が違うせいで、走れば走るほど足がもつれそうになる。しばらく走ることだけに神経を割き、開いていた扉に転がり込んだ。

『コロポータス―扉よ、くっつけ』！

セレネは息も絶え絶えに唱えると、半開きだった扉は奇妙な音と共に密閉され

た。そのまま二人して、倒れ込むように座り込む。中央に不思議なアーチのある部屋だった。まるで円形劇場のように、周囲は崖で囲まれている。唯一、上に繋がる階段の先には、出口と思われる扉があった。中央には、石の台座が置かれ、その上には石のアーチが立っている。遠目から見ても相当古く、ひびが入りボロボロだ。アーチの内部には、白いボールのようなものがひらめいている。

たったそれだけの部屋なのに、どこか薄気味悪く、鳥肌が立ってくる。少なくとも、予言が鎮座した棚に押し潰される心配はない。それだけは、先程よりマシだった。

「はあ……はあ……死ぬかと思った……」

ノットが荒い呼吸をしながら、閉まったばかりの扉を睨みつけている。ここに逃げる途中、どこかで予言の破片が当たったのだろう。額が裂け、血が流れだしていた。セレネは肩で息をしながら、彼の額に杖を向ける。

「止血しましょうか？」

「いや、大丈夫だ。こんなもの、すぐに治る」

扉の向こうからは、足音や怒鳴り声が響いてきていた。セレネは息を潜めると、

その声に神経を尖らせた。

「ゴイルは放っておけ。放っておけと言っている!! 闇の帝王にしてみれば、ゴイルの怪我など、どうでもいいことだ。

いいか、忘れるな。予言を手に入れるまでは、ポッターに手荒な真似をするな。他の奴らは、必要なら殺せ。ホムンクルスの頭部も傷つけるな。帝王はあれの魔眼に興味がありだ。——黙れ、ノット。闇の帝王にとっては、お前の倅より予言を失うことの方が問題だ。二人組になって探すぞ! ベラトリックスとロドルファスは——」

「……ぐずぐずしてられねえな。早く脱出しないと」

ノットは微かに震えた声で言う、素早く立ち上がった。

「ええ、そうですね」

セレネも、ふらつきながら立ち上がる。一瞬、アーチの内側からひそひそと話し声が聞こえてきた気がしたが、人の気配はない。それに、死喰い人が隠れている様子もない。セレネはアーチを無視すると、腕まくりをした。

「ここに入って来る敵は、ここで叩きましょう。幸い、どこから入ってくるのかは

分かっているのですから」

セレネは閉めたばかりの扉に杖先を向ける。

「なに言ってるんだ、ゴースト。逆の扉から逃げた方がいいだろ」

「敵の方が数が多いです。それに、向こうの方が実戦経験も豊富。まともにやり合っても勝ち目どころか、逃げ目すらありません」

「……なるほどな。だから、わざわざ二人一組で来てくれている内に数を減らそうっていうのか」

ノットは口の端を上げると、扉に杖先を向ける。

「いいぜ、乗った」

「そう来ると思っていましたよ。……でも、あなたは逃げてもいいのですよ?」

「ルシウスさんの声を聞いただろ。逃げたところで、オレも殺害リストの仲間入りしているらしいからな。逃げて死ぬのと、お前と戦って死ぬのなら、絶対的に後者だろ」

セレネは横目で軽く自分より高い背の少年を見上げる。

わずかに震えてはいるが、眼は据わっていた。覚悟を決めたように、まっすぐ扉

を睨み付けている。

「ノット。少し間違っていますよ」

セレネは、視線を扉に戻した。呪文で封じたばかりの扉に、なにか大きなものが衝突する音が聞こえる。死喰い人たちが入ろうとしているのだろう。この空間には壁となる障害物が一つもない。扉が開いた直後から、いきなり戦闘状態に突入だ。セレネは軽く唇を舐めた。

「あなたは死にません。私が敵を倒し尽すのですから」

それに対する彼の返事は聞き取れなかった。

荒々しい「アロホモーラ」の呪文と共に、扉が一気に開いたからだ。

「『ステューピファイ―麻痺せよ』!!」

セレネたちの杖先から赤い閃光が、死喰い人の心臓を狙って宙を奔る。片方の死喰い人は真面に喰らい、そのまま仰け反り床に倒れ込む。しかし、もう一人の死喰い人は辛うじて避けることに成功した。仮面越しにも分かるほどの殺気を飛ばしてくる。セレネは素早く杖を振るった。

「『サーペンソーティア―蛇よ』!」

『インカーセラス―縛れ』!!」

セレネの作り出した蛇を死喰い人は杖を軽く一振りしただけで弾き返し、杖先から太い荒縄を出した。縄は蛇のように唸りながら、セレネに迫る。セレネは無言で盾の呪文を構築しようとしたが、当たる直前で進路を変える。縄はまっすぐノットに向かって行った。

『プロテゴ―守れ』!」

けれど、ノットも簡単にはやられない。

素早く盾の呪文を展開し、縄を弾き返した。少し得意げな笑みを浮かべている姿を、セレネは横目で確認する。そのままノットは貫くような動作で杖を振るった。

『ステュービファイ』!」

『ブラキアビンド―腕縛り』」

死喰い人は彼の放った失神呪文を退けると、杖を鞭のように振った。床に落ちていた太い縄が蛇のように動くと、ノットの胴体にきつく巻き付き、両腕を捉えた。「つくそ!」

ノットが縄を振りほどこうともがいているが、かなり頑丈に縛り付けられている

のだろう。まったくビクともしない。

「再教育が必要のようだな、セオドール」

死喰い人がしわがれ声で言うのと、ノットは驚愕したように目を見開いて動きを止める。

「半人間ごときに騙されおって。高貴なる純血の恥さらしが！」

死喰い人は声を荒げながら、邪魔そうに仮面とフードをかなぐり捨てた。若干頬がこけ、皺が目立つ顔——ノットの父親だった。以前、リドルの館で出会ったときのような優しそうな雰囲気は全くない。怒りで血走った両眼をセレネにまっすぐ向けていた。

「『クルーシオ——苦しめ』!!」

今まで見た中でも一位二位を争うほどの速度で、磔の閃光が宙を奔った。盾の呪文を構築する暇もない。セレネは眼鏡を投げ捨てると、そのまま横に転がるように飛び退いた。セレネは、体勢を立て直すのもそこそこに呪文を叫ぶ。

「『エクスペリアームズ——武器よ去れ』！」

「効かん！」

ノットの父は軽々と盾の呪文を構築する。武装解除の呪文はあっけなく弾き返されてしまった。

『『クルーシオ』!!』

磔呪いの閃光が弾丸のような速さで迫って来る。セレネは呪文を注視すると、そこに奔る禍々しい線を切り裂いた。

杖の使い方一つで、彼がそこらの死喰い人とは一線を画く実力者だと分かる。しかも、彼はセレネに明確な殺意と怒りを向けて来ていた。魔眼なしで勝てる相手ではない。セレネは小さく舌打ちをした。眼鏡を外したことで、案の定、ずきずきと眼の奥から脳が軋むように痛み始めている。以前より線はハッキリと見えるようになっていたが、その分、不快感も倍増だ。

「それ、人に使ってはいけない呪文ですよ」

セレネは不敵に笑いながらも、焦りを感じていた。

いつか魔眼を使わなければならないと感じていたが、こんなにも早くに使う羽目になるとは思ってもいなかったのである。

「お前は人ではない。『クルーシオ』！」

三度、磔呪いが襲ってくる。そこには迷いの色など毛頭ない。セレネは呪いを注視し、見定めた線を杖先で切り捨てる。だが、彼が放ったのは磔呪いだけではなかった。磔呪いの閃光に隠すように、合わせて無言呪文も放っていたのだ。セレネは避けることもできず、閃光に当たってしまう。途端、腕が見えない縄で縛られたように括り付けられてしまった。

「腕を封じれば、厄介な魔眼も使えまい」

ノットの父親は鼻で笑った。そのまま杖を軽く振ると、セレネの腕は意思に関係なく持ち上げられる。足も少し宙に浮き、逃げることにすら敵わない。

「さて、大事な倅を誑かした罰を受けてもらおうか。『クルーシオ―苦しめ』!!」
それは、想像を絶する痛みだった。

胸の内側から無理やり引き裂かれるような、正気のままナイフで肉を剥ぎ取られていくようだ。痛みのあまり息すらできず、眼を見開いてしまう。その痛みは、闇の魔術でグリンデルバルドを若返らせたときの痛みに匹敵する。

だが、逆に言えばその程度だ。

セレネは苦悶に顔を歪めながらも、なんとか悲鳴だけは無理やり飲み込んだ。呼

吸することすら敵わず、したら最後、際限なく悲鳴が口から零れてしまう。セレネは苦痛にひくひくと身体を引きつらせながらも奥歯を噛み砕く勢いで食いしぱり、ひたすら拷問の痛みに耐える。少しでも痛みを紛らわせるように、わずかながら前後に両足を揺らした。

「セレネッ！ くそ、この縄め!!」

「お前はそこで黙ってみていろ！ そして、よく見ておけ。お前が真に忠義を向けるのは闇の帝王だ。この程度の痛みに屈する半人間ではない!!」

ノットの苦しそうな声が遠くで聞こえた気がする。しかし、それを遮るように父親が叫んだ。

「殺しはしない。帝王はこいつの魔眼に興味を抱いている。だが、この半人間の在り方に価値を見出していない。ならば、その器が壊れても問題あるまい。いや、むしろ壊してしまおう。純血を、スリザリンを冒とくした罪を味わうがいい! 『クルーシオ』!!」

閃光が煌めいた。

セレネは激痛を堪えながら、思いつき宇宙を蹴り上げた。逆上がりをする時のよ

うに、勢いよく足を振り上げる。そして、そのまま閃光が胸に当たる直前で、死の線を切り落とすように呪文に足を振り落ろした。

死の線は、切れば死に至る過程を無視して死を与える線だ。

ナイフでも切れるし、杖先でも、指でもなぞれば切ることができる。要は触れればいい。ならば、足で蹴っても同じことだ。

その予想は的中した。磔の呪いは、対象を目前にして四散する。

「なんと!？」

彼は驚愕で目を見開く。そこに、わずかな隙ができた。これを逃したら、もう勝機はない。セレネは声を張り上げて叫んだ。

『襲え!』

全霊を込める勢いで蛇語を叫ぶ。

すると、先ほど創り出し、弾かれてしまった蛇が鎌首を上げた。金色の目を輝かせながら、背後からノットの父親に襲いかかる。彼にとつて、それは想定外の奇襲だったのだろう。対応することができず、思いつきり首元を噛まれてしまった。彼は激高とも悲鳴とも取れる声を上げる。蛇がそのまま身体を縛り上げると、枝のよ

うに節のある指から杖が零れ落ちたのが見えた。

セレネは胸の奥にまだ残る痛みを感じながら、数度、呼吸をしながら気持ちを整える。

『「エマンシパレ—解け」』

自分自身に向かって告げると、拘束が解かれてそのまま床に落下する。そのまま地面に崩れ落ちそうになるところを辛うじて持ち直し、杖を掲げた。

『「ステュービファイ—麻痺せよ」』

セレネはノットの父親に失神呪文をかける。蛇に襲われた男は、そのまま白目をむいて意識を失った。

『「ありがとう。もういいですよ」』

蛇はするするとノットの父親から離れる。セレネは彼の杖を二つに折ると、血を流して倒れる男に杖を向ける。

『「インカーセラス」、『エピスキー—癒えよ」』

縄で縛り、軽く止血する。

それを見届けると、床に転がった息子の方に杖を向けた。

『『エマンシパレ』。縄抜けの呪文は、習得しておいた方がいいですよ』

「……なんで、殺さなかったんだ？」

ノットは呆然と立ち上がりながら尋ねてくる。

「お前、殺されかけてたじゃないか」

「……人は一生に一人しか殺せないんです」

セレネは床に落ちた眼鏡を拾いながら、義父の言葉を告げる。

「それ以前に、敵対した人物を片っ端から殺していたら、蛇男と同じになってしまうではありませんか。」

「……この男の杖は折りました。無力化すれば、もう襲ってきません」

そう言いながらも、セレネの心には少し気まずい思いが残った。

彼の父親は、はっきりとセレネを敵視していた。大事な息子を弄んでいる非人間だと。事実、その通りだ。セオドル・ノットの意外と義理堅い性格に付け込み、これまで色々と無理をさせてきている。その結果が、この始末だ。見事、親子の関係にヒビを入れてしまった。

そんな考えが、表情に出てしまっていたのだろうか。ノットはセレネの肩を軽く

叩くと、白目をむいている父を一瞥した。

「……オレのことは気にするな。だいたい、最初は父上が『ゴーストの末裔に忠義を尽くせ』とか言ってきたんだ。お前の出生を知った途端、ころっと手を返した父上が悪い。」

それより、少し休んだ方がいいんじゃないか？」

「このくらい平気です。それより、そろそろハリーを探さないと……」

「いや、平気じゃない。休むのが嫌なら、肩くらいかすぜ。腕の方がいいか？」

「平気と言っているでしょ」

「だからな、お前は磔呪いを——ッ!？」

彼が何か言いかけたのと同時に、扉が開いた。セレネたちはすぐに杖を向けるが、現れたのはハリーとネビルだった。二人とも血だらけで傷がない場所がない。ネビルに至っては、鼻から絶えず血を流している。

「セレネ、ぞれがら、ぎみも無事だったんだね」

「……ごめんなさい、ネビル。聞き取りにくいです。『エプスキー——癒えよ』」

セレネがネビルに杖を向けると、ネビルの鼻血が止まった。

「ありがとう、セレネ」

「礼は後です。それよりも、予言はどうしましたか？」

「ここにある」

ハリーの右手には、しっかりとガラス玉が握られていた。まだ割れていない。セレネは、ほっと一息ついた。

「いいですか、ハリー。これは絶対に渡してはいけません」

「分かってるよ、セレネ」

「果たしてそうかな、ポッター」

頭上から声が降って来る。

階段の上の扉が開き、10人を超す死喰い人が飛び込んできた。黒い煙のように襲いかかってくる。

『『プロテゴ』！』

セレネが前に杖を突き出し、透明な盾を出した。

煙が晴れるとき、自分の隣には、ハリーしかいなかった。

「ここまでだ、お前たちはよくやった」

ルシウス・マルフォイがせせら笑う。

部屋を取り囲むように、死喰い人たちが並んでいた。ノットとネビルは捕らえられていた。否、彼らだけではない。意識を失ったハーマイオニーとルーナ、踵から血を流しているジニー、なにやら不可解な笑みを浮かべて遠くを見ているロンを腕で押さえ、頭に杖を突きつけていた。

「さあ、予言を渡せ。そうすれば、みんな助けてやろう。お前たちの死闘に免じてな」

「ハリー、渡しちゃだめだ!!」

ネビルが叫ぶが、すぐに彼を取り押さええている死喰い人が首に杖を突きつける。

「ハリー、その通りです」

セレネはハリーに囁きかけた。

「これは騎士団の言っていた武器です。絶対に渡してはいけません」

「だけど、どうすればいい？」

「そこそ話し合う時間はないぞ」

ルシウス・マルフォイはジニー・ウィーズリーに杖を向けた。

「お前たちには選ぶ権利はない」

セレネは唇を噛みしめる。

この予言こそ、武器だ。それは間違いない。このガラス玉に、ヴォルデモートを打ち負かす手段が吹き込まれている可能性が高い。その逆だってありえる。

だから、絶対に渡してはいけない。それに、渡した瞬間、こちらが持っている唯一、敵に対して有効な切り札が失われてしまう。

「不安なら『破れぬ誓い』を結ぼうか？ 絶対に違えることができない魔法契約だ」

「……駄目、それはしません」

ハリーが何か言う前に、セレネが口を開いた。

死喰い人たちは契約の隙間をついて、殺しにかかって来る。たとえば、「予言と引き換えに、全員を見逃す」という契約を結ばせ、予言を渡した直後、実際に契約を結んでいないベラトリックス・レストレンジがアバダケダブラを放つてくるとか、非常に現実味のある話だ。

「3つ数える」

ルシウス・マルフォイが優雅な仕草で杖をこちらに向けてくる。

「その間に、答えを出せ」

ハリーはじりじりと後退する。

「3——」

「どうしよう、セレネ」

ハリーの戸惑いの眼差しを感じる。

セレネも必死で策を考えるが、良い案が一つも思い浮かばない。

「——2——」

いっそのこと、予言を壊してしまおうか。

しかし、それは最悪手だ。こちらに唯一残された切り札を失うだけでなく、敵を激昂させてしまう。無論、予言を壊された動揺に付け込み、自分とハリーは逃げ出すことができるだろう。他にあと二三人は助け出せるかもしれない。でも、そこまでだ。半数はその場で殺される。少なくとも、氣を失っているハーマイオニーとルーナを助けることができない。

「——1——」

ルシウス・マルフォイの口が愉快気に曲がる。

ベラトリックスたち死喰い人の低い笑い声がやけに大きく聞こえた気がする。ここは、もう、予言を捨てて、逃げるしかない。

「『アクションー来い』！」

「ハリー!!」

セレネの叫びもむなしく、ハリーの手から予言が飛び上がる。ルシウスは勝利の笑みを浮かべた。

ところが、それは一瞬だった。

優美な眉が不可解に歪む。ルシウスは確かに呼び寄せ呪文を使った。事実、呼び寄せ呪文で予言はハリーの手から離れた。だがしかし、予言はルシウスの手に行かず、そのまま向きを不自然に変えて階段の方へと昇っていく。

「まったく、世話が焼ける」

ぱしっと音を立て、予言は階段上に佇む少年の手に収まった。

どこにでもいそうな金髪の少年だった。よれよれになったホグワーツの制服に身を纏っているが、すれ違っても忘れてしまいそうなほど平凡な顔立ちをしている。髪の色以外、他に特徴がない。

「満身創痍だな、フロイライン」

だが、セレネは新しく現れた少年が誰だか分かった気がした。セレネは悪びれもなく立っている少年を思いつき睨みつけた。

「救援を頼んでから、どれだけの時間がたったと思っているのですか」

「支度が必要なのだ。それとも、わざと私が遅れたと？ ひょっとしたら来ないのかと勘繰ったか？」

「……まさか」

セレネが吐き捨てるように言うと、新参者は不敵な笑みを浮かべた。

「さて、ハリー・ポッター。これは私が預かるとしよう。なに、安心したまえ。A・P・W・B・D……つまり、アルバス・ダンブルドアが聞いた予言だ。ダンブルドアに聞けば全容を知ることができるだろう」

「予言をよこせ、小僧！」

ルシウス・マルフォイの杖が新参者の少年に向けられる。

彼はふっと口元を緩めると、指揮棒を振るように軽々杖を動かす。すると、死喰い人たちの杖が向きを変え、それぞれの首を脅すようにつついた。ルシウスとベラトリックスだけが、まだ杖を握っている。

少年はやれやれと頭を横に振った。

「抗えたのは2人だけか」

「貴様……何者だ!？」

「さて、フロイライン。どうすればいいか、分かるな」

彼はベラトリックスの質問を無視し、セレネに話しかける。まるで、変身術の問題の解き方を説明しろと問うているような聞き方だった。この緊迫した状況下で、彼はセレネを試そうとしている。セレネはむすつとした表情のまま、流れるような杖運びで呪文を唱えた。

「『エバネスコー消えろ』」

死喰い人たちの杖が火花を立てながら消失していく。

彼らは恐怖と驚きの声を上げる。自分の杖が制御を失い、消失したのだ。もは

や、未成年の魔法使いを捕まえておくことに氣を向けてはいられない。

ノットとネビルがまず抜け出した。ノットは近くにいたルーナとジニーを担ぎ、ネビルはハーマイオニーを抱え、ロンを引きずりながら駆け寄ってくる。

「この——ッ、よくも!!」

ベラトリックスが金切り声を上げ、新参者に緑の閃光を放ってきた。もちろん、彼には届かない。軽く杖を振るっただけで、部屋の隅にいた蛇を大蛇に成長させ、死の呪いの盾にする。呪いを全身で浴びた蛇は、力なく階段を転がり落ちた。

「ベラトリックス・レストレンジ、ルシウス・マルフォイ。それに他の死喰い人たちよ、私は君たちと敵対するつもりはない。むしろ、君たちには敬意すら覚える」
彼は死喰い人たちを迎え入れるように両腕を広げた。

「各々が抱く誇りのために、主人のために闘い抜こうとする意志——ああ、それは蔑まれるものではない。むしろ、尊ばれるものなのだ」

セレネはジニー・ウィーズリーの踵に応急処置の呪文を施しながら、自分の助言者を見上げる。

「だが、君たちの尊ぶべき忠義を向ける相手は、果たして本当にその人物か？」

欧州を恐怖に陥れた闇の魔法使い——グリンデルバルドは長年の友に語り掛けるように話し始めた。

呪文解説

『ブラキアム・エンメンドー骨よ、なくなれ（骨よ、治れ）』…原作ではギルデロイ・ロックハートがハリーの腕を治そうとして、骨を消し去ってしまった呪文。誤った呪文例として、セレネは記憶していた。

久しぶりに活躍した直死の魔眼。

ごめんよ、不死鳥の騎士団前半は戦闘が少ないんだ……。次章では、前半部でも

活躍させるから許してください。

そして、グリーンデルバルド（ポリジューズ葉で変身中）が参戦。

現在、彼らしい戦い方を書くのに苦戦中です。グリーンデルバルドの資料がファンタビ1、2くらいしかないのが辛い……早く3の公開してくれー!!

なお、今のポッター陣営は以下の通りです。

○ハリー（負傷。だが、まだまだ動ける）

○セレネ（磔呪いと魔眼の副作用で速度低下中）

○ネビル（負傷。鼻血は止まったが、杖がない）

○ノット（一番軽症。しかし、心はズタズタ）

○ロン（原作通り、謎の呪文で正気を失ってる）

○ジニー（負傷。踵を碎かれ、戦闘どころか歩行も不可能）

○ハーマイオニー、ルーナ（気絶中）

○グリーンデルバルド（少年に変身した助言者。きっと、扉の前でスタンバってたに違いない）

次回もお楽しみに！

71話 闇の魔法使い

「当たり前だ！」

ベラトリックスが迷うことなく吠えた。

「闇の帝王は、我らが忠義を捧げるにふさわしい御方だ!!」

彼女はグリンデルバルドを睨み付け、まっすぐ杖先を向けている。その瞳の奥には、主人を侮辱された怒りの炎が燃えていた。まるで、視線だけで見るものを燃やし尽くそうな勢いを感じる。傍から見えているセレネでさえ、少し身体を強張らせてしまうというのに、その視線を一身に受けている人物——グリンデルバルドは表情を崩さない。

「侮辱したつもりはない」

グリンデルバルドは優しい口調のまま、ベラトリックスの熱い視線を受け止める。

「私は、君たちの主について話がしたいだけだ」

そう言いながら、グリンデルバルドは本当に杖をポケットにしまい込んでしまった。

セレネは目を丸くした。彼の握るものは、鈍く輝く予言だけだ。階段の一番上に立っており、身を隠す場所もない。

「1つだけ、謎解きしよう。君たちの――」

と、ここでグリンデルバルドの視線はベラトリックスから外れ、セレネたちに向けられた。

「誰もが疑問に思ったはずだ。なぜ、魔法省に人がいないのか」

「……あなたは、知ってるの？」

ジニー・ウィーズリーが踵を抑えながら声を上げる。突然現れた謎の少年に警戒しながらも、その声色は好奇の色が強く滲み出ている。グリンデルバルドは小さく頷いた。

「逆に聞こう、赤毛の娘よ。君はどう思った？」

「えっと……人払いの呪文をかけた？」

ジニーは眉間に皺を寄せながら質問に答えた。その答えに対し、グリンデルバルドは小さく頷く。

「そうだ、人払いをしたのだ。ただし、呪文ではない。人払いの呪文を本格的にか

けようものなら、誘き寄せるはずのポッターも魔法省に近づけなくなってしまう。それでは、計画が破綻する。それ以前に、闇払いが勘づくだろう。

では、どうやったのか。フロイライン、答えられるかな」

「……すべての職員を外に出すため、口実を用意した？」

セレネはむすっとした表情のまま答える。どうして、このタイミングで問答を始めるのか。セレネには理解できなかった。何かの準備が完了するまでの、時間稼ぎのつもりなのだろうか。

「たとえば、イベントとかでしょうか？」

「そうだ、イベントだ。実は先ほど、上の階のデスクを拝見した時、こんなものを見つけた」

グリンデルバルドの手がローブの中に伸びる。ルシウス・マルフォイたちが緊張したのが分かったが、彼が取り出したのは武器ではなく、一枚のチラシだった。

「魔法省大臣就任 6 周年記念、魔法省職員慰労パーティーだ。魔法省の職員全員が参加することになっている。

これを行うように誘導したのは、ルシウス・マルフォイ——君だな」

ルシウス・マルフォイは否定も肯定もしなかった。ただ、呆氣にとられたような目でグリンデルバルドを見上げている。

「魔法省には8つの部署の他にも、さまざまな局があるのだ。そのすべての人員を集められる場所、彼らを満足させるための料理、余興——金はいくらあっても足りん。ファッジのポケットマネーでは、確実に不可能な企画だ。

マルフォイ家を始めた君たちの家々が企画、出資し、当日は『これは、魔法省の職員を労う会でもあるので、我々が参加するのは不適切だ』とでも言って、謙虚に参加を断ったのだろう」

「だが、それだと——」

ノットが額から流れる血を袖で拭いながら、挑戦するような声を出した。

「全職員がいない理由にはならない。さすがに、守衛は残すだろ？」

「いい質問だ、少年」

グリンデルバルドが微笑んだ。

「その先は『服従の呪文』の出番だ。

守衛、ガードマンなどわずかに残った者は『服従の呪文』で大人しくさせれば問

題ない。残業をしていた職員にもかけたかもしれん。もっとも、参加していないことが発覚し、ファッジに睨まれるのを恐れ、ほとんどの職員は残業せずにパーティーへ赴いているだろうよ。

さて、人がいなくなれば、あとはポッターの到着を待つだけだ。ポッターに予言を盗らせ、君たちが奪い取り、ご主人様へと献上する」

これが、魔法省に誰もいない理由。

ルシウス・マルフォイが普段から魔法省大臣からの覚えがよく、付き合いもあるからこそ、可能だった作戦だ。ルシウスたちの尽力により、今の魔法省には残業している魔法使いも守衛もおらず、ハリー・ポッターを待ち受けるためだけの場所と化した。

「実に見事だ。見事で、非常に手間がかかっている。……ポッターが夢を信じなければ、完全に破綻していた。

ポッターに夢を信じさせるために、前例となる事案を起こさせ、夢を通して現実を見ていると錯覚させる——これをやったのは、君たちの主人だな？

だが、それ以外の計画には、闇の帝王は携わっていない。すべては、優秀な君た

ちがポッターを呼び寄せるために仕組んだことだ。君たちの苦勞がなければ、ここにポッターはいなかった。

ああ、君たちは本当に素晴らしい魔法使いだ。

……しかし、君たちの主人は、どこまで君たちの価値を信頼しているかな？」

「惑わされるな!!」

ベラトリックスがたちまち激昂した。青白かった顔色が、見る見るうちに顔が赤くなっている。

「我が君は、私たちのことを信じてくださる！」

特に私のことは、もっとも忠実で、もっとも信頼できる者とお呼びになるのだ!!

「

それは事実かもしれない。しかし、それは彼の物差しでの話だ。

では、逆に聞こう。ベラトリックス・レストレンジ。闇の帝王は、君の死を悼むだろうか？」

グリンデルバルドが静かに聞くと、ベラトリックスは一瞬だけ口を真一文字に結んだ。わずかに視線を泳がせた後、唸るように口を開く。

「……当然だ」

「君はどうかね、ルシウス。彼は君の死を悼むだろうか？ 君の息子が彼に仕える立場になり、不慮の事故で死んでしまったとき——帝王は、君の息子の死を嘆くと思うか？」

相変わらず、ルシウスは何も答えない。ただ、強張った表情がわずかながら陰った。

セレネの想像に過ぎないが、ドラコ・マルフォイがヴォルデモートに仕え、死んでしまったところで、あの蛇男は死を悲しまない。せいぜい、駒が一つ消えた程度にしか思わないだろう。

ルシウス・マルフォイは、きつと薄々そのことを察している。だから、顔が曇ったのだ。その姿を見て、グリンデルバルドは大仰に頷いた。

「今日だってそうだ。なぜ、帝王は自ら取りに來ない。」

ポリジュース薬、透明マント、めくらましの術——方法はいくらでもある。彼ほど才能あふれる魔法使いならば、姿を隠したまま邪魔されることなく神秘部まで到達し、予言を入手することだって可能なのだ。

彼がすれば 1 時間もかからないことを、わざわざポッターに盗らせるために数か月前から計画し、多額の金とコネを使う必要があった。

さて——君たち全員に問おう。

ポッターに夢を現実を起こっていることだと信じさせる。それが上手くいったとして、ポッターがアンブリッジなど他の教職員や生徒に邪魔されず、ホグワーツ城を抜け出し、姿くらまし以外の方法で数時間以内にロンドンの魔法省までやって来て、予言の存在に気付いて取り出してくれる作戦。

それと、帝王が自ら予言を取りに来る作戦。

どちらの方が手っ取り早い？」

当然、答えは後者だ。

ハリーが夢を現実だと信じさせる手間はもちろんだが、マクゴナガルやスネイプ、アンブリッジなどに捕まることなく、城を出てロンドンに——それも人払いをしている数時間以内に来訪させることが難しい。

今回は運よくセストラルを見つけられたから良かったが、箒では数時間で到着できるか分からないし、飛行しているうちに方向を見失ってしまうかもしれない。

そもそも、ハリーたちは最初、アンブリッジの暖炉で魔法省に突入しようとしたが、アンブリッジに捕まってしまっていた。ハーマイオニーが機転を利かせなければ、あの時点でルシウス・マルフォイたちの計画は破綻していた。

魔法省に到着してからも、ハリーが人気の少なさに異変を感じ、ホグワーツに戻ってしまうかもしれない。

たとえば、予言の間に辿りついたところで、予言自体に気付かずに「シリウスがないから、これは罠だ。すぐに帰ろう」と引き返していた可能性だってあるのだ。いくらでも、この計画には穴がある。

すべては、ハリー・ポッターの「英雄気取り」になる癖と運のおかげで成り立った計画だったのだ。

正直なところ、ヴォルデモート自ら取りに来た方が、遥かに確実性が高い。

「悲しいことだが、言うしかあるまい」

グリンデルバルドは申し訳なさそうに目を伏せた。

「闇の帝王は、君たちのことを便利な使い捨ての駒としか見ていない」

「違うッ!!」

反論したのは、ベラトリックス・レストレンジだけだった。

「我が君は慎重なのだ!」

ベラトリックスが必死になって叫ぶが、ルシウス・マルフォイを始めとした死喰い人たちは黙って俯いている。まるで石になってしまったかのように、固まったまま動かない。

「だが、私なら——優秀な君たちを正当な評価で迎え入れよう。使い捨ての駒扱いなどせず、君たちの理想を叶える手伝いをしたい」

グリンデルバルドは、こちらにむかって手を差し伸べる。

セレネは彼を思いっきり睨みつけた。死喰い人の戦力を削ぐために言っているのかもしれないが、助言者としてやり過ぎである。だが、グリンデルバルドはこちらを向かない。薄ら笑みを浮かべたまま、ルシウスたちに手を差し伸べている。

「……あなたは——何者だ?」

やっと、ルシウスが力なく口を開いた。

「Mと名乗っておこう。……時間だ、また会おう」

グリンデルバルドは最後の言葉を告げた瞬間、扉が勢いよく開かれた。5人の魔法使いが駆け込んだのだ。シリウス・ブラック、リーマス・ルーピン、アラスター・ムーディ、そしてセレネの知らない年の若い魔女と黒人の魔法使いだ。おそらく、不死鳥の騎士団のメンバーだろう。

グリンデルバルドはこちらに背を向けると、悠々と出口に向かって歩き始める。シリウスたちは、グリンデルバルドに目を向けなかった。なぜなら、今の彼はポリジューズ薬で少年に変身している。ましてや、ホグワーツの制服まで纏っているのだ。ハリーの仲間だと勘違いしても不思議ではない。

「待てッ、小僧!!」

ベラトリックスがすぐに追いかけようとするが、シリウス・ブラックが彼女めがけて呪文を放った。

「ハリー！ みんなも無事か？」

リーマス・ルーピンがセレネたちのところに駆け寄ってくると、口早に叫んだ。

「大丈夫だ。安心しなさい。すぐに決着がつく」

ルーピンの言う通り、戦局は一方的だった。

すでに大半の死喰い人の杖を消失させておいたおかげで、彼らは戦いたくても戦えない。騎士団の魔法使いたちは、逃げ惑う死喰い人たちを丁寧に関一人一人失神させたり、縄で縛ったりしている。

ルシウス・マルフォイは杖を持っていたが、グリンデルバルドの言葉が脳内を回っているのだろうか。あきらかに呪文にキレがなく、黒人の魔法使い相手に防戦一方だった。

なので、実質的に戦っているのは、ベラトリックス・レストレンジだけだ。

彼女はグリンデルバルドの後を追おうと、怒りに燃えながら階段を登ろうとしている。シリウス・ブラックと年の若い魔女が行く手を塞ごうと、階段の上から呪いを雨のように降らせていた。

「君たちはここで大人しく固まってなさい」

「いやだ、僕も戦う！」

ハリーが口を開いたが、ルーピンは首を横に振った。

「君たちはここまでよく頑張った。あとは、我々大人の仕事だ」

ルーピンが優しく言った、その時だった。

階段の上から女性の悲鳴が上がった。騎士団の若い魔女がベラトリックスの呪文で吹き飛ばされたのだ。同じく、シリウス・ブラックも彼女の放った赤い閃光が直撃し、苦悶に呻きながら階段を転げ落ちていく。

「シリウス!!」

ハリーがルーピンの制止を待たずに走り出した。ハリーは転げ落ちるシリウス・ブラックを受け止めると、彼の肩を抱えた。

「シリウス! シリウス、起きて! シリウス!!」

しかし、シリウスの返事はなかった。ハリーに抱えられ、だらんと力なく両手を垂らしている。それを見て、ベラトリックス・レストレンジは階段の最上段から嘲笑う声を上げた。

「つくく、死んだ、死んだ! シリウス・ブラックは死んだぞ!」

ベラトリックスは極めて愉快そうに笑うと、すぐに扉の向こうへ消えていった。

「この——よくも、シリウスを!!」

ハリーは素早く石段を駆け上がる。

「ハリー! 待つんだ!!」

ルーピンが声を張り上げるが、彼の声は届かない。ハリーの姿は瞬く間に扉の向こうへ消えていってしまふ。

「先生、私は彼を追いかけます」

セレネは口早にそれだけ言うのと、彼の後を追いかけた。背後で呼ぶ声が聞こえたが、セレネは気にしなかった。シリウス・ブラックの生死はどうであれ、あのままハリーがベラトリックスに勝負を挑んだところで、勝利している光景が思い浮かばなかった。

ここで、予言にも何かしら関わっているような重要人物 ハリー・ポッターを殺されるわけにはいかない。

セレネは一気に最上段まで駆け上がると、開けっ放しの扉を越えた。ハリーたちがどこの扉へ消えたのか、探すまでもない。なぜなら、反対側の扉が開けっぱなしになっている。その向こうに、小さくハリーの姿とベラトリックスの姿が見える。ベラトリックスはエレベーターに乗り、上へと昇っていくところだった。

今まさに、ハリーも隣のエレベーターで昇ろうとしている。

「待ってください、ハリー！」

セレネは廊下を疾走し、エレベーターに滑り込んだ。セレネのすぐ後ろで扉が閉まる重たい音が聞こえる。

「なんで来たんだ、セレネ！ これは、僕の問題なんだ!!」

「一人で勝てる相手ではありませんよ」

セレネは制服を整えながら、呆れたように息を吐いた。

「焦ると周囲が見えなくなるのが、あなたの悪い所です」

そう言いながら、ハリーの背中を軽く叩いた。

ハリーはしばらく怒りに震えていたが、だんだんと眼が据わってきた。幾分か、冷静になったのかもしれない。

「分かった。セレネ、援護して欲しい。でも、君は危なくなったら、すぐに逃げて」

「ええ、もちろん」

セレネとしても、ここでハリーを失うのは惜しい。

それに、ベラトリックス・レストレンジといえば、ヴォルデモートの腹心の部下だ。彼女をここで無力化するに越したことはない。

エレベーターの格子戸が開くと、魔法省のホールには2人の人影が対峙してい

た。

こちらに背を向けて立つのは、ベラトリックス・レストレンジ。

彼女に相對しているのは、グリンデルバルドだ。まだポリジュース菓の効果が続いており、少年の姿をしている。

セレネはハリーの袖を引くと、近くの噴水の陰に隠れて、一度様子を見守ることにした。

「はやく予言をよこせ、小僧!!」

「それは残念ながらできない相談だ」

グリンデルバルドは申し訳なさそうに肩を落とした。

「一歩遅かったな。予言は壊してしまった。実に興味深い内容だったよ」

「嘘だ!!」

ベラトリックスが甲高く叫んだ。

しかし、その怒りの裏に怯えや恐怖の色が聞き取れる。

「お前は予言を隠し持っているんだ!!」

「嘘ではない。ほら、この通りだ」

グリンデルバルドは余裕たっぷりの声で言うと、ガラスの破片を投げ渡す。セレネの位置から見えないが、ガラスの破片を受け取った瞬間、ベラトリックスの身体がびくっと震えたのが分かった。

「違う!! 嘘だ、これは嘘だ!! ご主人様!! 私は努力しました!! 努力いたしました!! だから、どうぞ私を罰しないでください!!」

ベラトリックスが悲鳴を上げる。

セレネはその様子を陰から見ていたが、ふと——隣に座っているハリーの異変に気付いた。彼は額に手を当て、低く唸り声をあげている。

「ハリー?」

「痛いんだ。傷が、これまでにないくらい——激しく痛いんだ」

ハリーはそう言いながら目を閉じ、顔中をしかめた。

「ハリー……ッ!?!」

セレネはハリーを心配そうに見たが、すぐにそれどころではなくなった。

人間の身体を始めとして、この世に存在する物には、なぞればそれだけで、その個所を停止させ、殺してしまう線がある。それが生命の綻びなのか、分子の結合点

の弱い部分なのかまで、セレネは知らない。

今まで、分霊箱を作った蛇男以外の人間には「死の線」があった。

なのに、ハリー・ポッターは、その線があまりに微弱だった。今までにないくらい注視すれば視えるかもしれないが、それをしたら最後、脳内が白く弾け飛んでしまう予感がする。できれば、今ここでは取りたくない方法だ。

「ハリー、あなた、もしかして——」

「そうか、予言は壊されたのだな」

甲高く冷たい声が、魔法省のホールに木霊する。

セレネが視線を上げると、そこには背の高い痩せた姿が靴も履かず、黒いローブ姿で立っている。恐ろしい蛇のような顔は蒼白で落ちくぼみ、縦に裂いたような瞳孔の真っ赤な両眼がグリンデルバルドを睨んでいた。

「俺様の予言を壊したのだな？」

「いかにもその通りだ」

グリンデルバルドが口の端を上げると、ヴォルデモートは杖を向けた。

「お前は誰だ？」

「Mと名乗っておこうか、トム・リドル」

闇の魔法使いは、それぞれ互いに杖を向けている。

「Mだと？」

「マーチン・ヒューイットでも構わない」

「馬鹿にしているのか？」

「ほう、すぐに意味が分かるとは思わなかった」

和やかに会話をしているようだが、緊張感と肌を刺すような殺気で満ち溢れていた。

セレネは内心「お前は探偵のマーチンではなく、犯罪者のモリアーティだ」と突っ込みながら、事の成り行きを見守った。

「なるほど、ホグワーツ入学前に読んだということか。私は最近読み始めたが、これが実に面白い」

「……俺様はマグルの小説について語るつもりはない」

ヴォルデモートの殺気が膨れ上がる。

「貴様は俺様の予言を壊した。予言を手に入れるため、何か月もの準備、何か月も

の苦勞——それらをすべて無にしたのだ。

……貴様は俺様を苛立たせた。それだけで、死に値する」

「ああ、お前はそういう奴なのだな」

ヴォルデモートの殺気が高まっていくのと対照的に、グリンデルバルドの纏う空気は冷ややかなものへと変わっていく。彼はヴォルデモートに対し、道端に打ち捨てられた小石を見るような眼差しを向けていた。

「お前の在り方は、酷く退屈だ。期待外れもこの上ない」

「……言いたいことは、それだけだな。では、死ね」

ヴォルデモートが杖を上げると、緑の閃光がグリンデルバルドに襲いかかる。グリンデルバルドは何もしなかった。杖を構えることすらしていない。だが、彼に「死の呪い」が当たることはなかった。

彼に「死の呪い」が当たる直前、金色のケンタウルスの像が盾になるように動き出したのである。ケンタウルスの胸の部分に緑の閃光が当たり、軽い音を立てて跳ね返った。

「……わしの学校の生徒に手荒な真似はよして貰おうかの、トム」

わずかに怒りが籠ったような声が聞こえる。

振り返ると、ダンブルドアが今まさに暖炉の中から現れたところだった。

「なんと、ダンブルドアか！」

ヴォルデモートがダンブルドアに目を凝らす。ダンブルドアは一見すると平然とした様子に見えるが、その顔は怒りに白熱しているようにも見えた。

「今夜、ここに現れたのは愚かじやったな、トム」

ダンブルドアが静かに言った。

「闇払いたちが、もう間もなくやって来よう」

「その前に、俺様はいなくなる。そして、貴様は——」

ヴォルデモートは吐き捨てるように言うとおどけた指揮者のようなポーズをとった。

「死んでおるわ」

その言葉を放つのと同時に、ヴォルデモートは緑の閃光を飛ばした。ダンブルドアも杖を軽々振り、赤い閃光で対抗する。両者の閃光は拮抗し、火花を散らしている。

グリンデルバルドはダンブルドアの決闘に目を向けながら、セレネたちの方に歩み寄って来た。

「……さて、フロイライン。私はここで去るとしよう」

「最後まで見届けないのですか？」

「正直、あまりダンブルドアと会いたくないのでね」

グリンデルバルドは肩をすくめた。

その時だった。

「逃がすものか!!」

ベラトリックス・レストレンジの杖から、グリンデルバルドめがけて緑の閃光が奔った。グリンデルバルドは軽く杖を振ると、死の呪いは微かに方向を変えた。ベラトリックスの一撃は、グリンデルバルドの顔の横を通り抜けて壁に激突する。

「この——ッ！」

「まったく、君も聞き分けのないお嬢さんだ。だが——」

グリンデルバルドは命を狙われているというにもかかわらず、平然と佇んでいる。

「君はいずれ、私の元に来るだろう」

彼は出来の悪い教え子を見るような眼差しをベラトリックスに向けると、二撃目の死の呪いが当たる直前に「姿くらまし」をした。ベラトリックスは行き場のなくなった怒りに震え、狂気の視線を残った人物——つまり、セレネに向けてきた。

「つく、小娘!! ふざけた小僧とどういう関係だ!!」

「残念ですが、お答えすることはできません」

「ならば、無理やり吐かせてやる!!」

ベラトリックスは叫び声と共に、赤い閃光を放ってきた。さすがに、ヴォルデモートの右腕と言われるだけあり、その速度は避ける時間がない。セレネは呪文の「線」を杖先で切り裂くと、素早く呪文を唱えた。

『『オブスキューロ―目隠し』!』

セレネの杖から黒い布が飛び出し、ベラトリックスの頭に巻き付こうとした。もちろん、歴戦の死喰い人に目隠しができるわけがない。彼女は杖一振りで払いのける——が、それでも、数秒は視界から自分の姿を隠すことに成功する。

セレネはベラトリックスの視界が悪くなった隙に、床を力の限り蹴り上げた。一

瞬、磔呪いを受けた場所が痛んだが、それに構う余裕などない。セレネは宙を跳びながら、セレネは眼下のベラトリックスに狙いを定める。

「上かつ!!」

ベラトリックスもセレネが頭上にいることに気づき、杖をこちらに向けてきた。

「クルー——」

『『ラングロック——舌縛り』!』

セレネの方が、わずかに呪文を唱えるのが早かった。

ベラトリックスの舌は口蓋に張り付けられ、呪文を唱えることができなくなってしまう。だが、もちろん彼女はそれだけで狼狽えない。すぐに無言呪文に切り替え、閃光を放ってきた。

ところが、その呪文もセレネに届かない。

『『プロテゴ——守れ』!』

ハリーがセレネの眼前に盾の呪文を構築した。セレネを狙った磔呪いは、ハリーの生み出した盾を前に四散する。ベラトリックスは杖を上突き上げたまま、忌々しそうにハリーの方へ顔を向けた。

それだけで十分だった。

セレネは跳び上がった以上、当然落下する。

ベラトリックス・レストレンジめがけて落下する。

セレネは右腕を大きく引いた。そして、ベラトリックスの杖を左手でつかむと、そのまま自分の杖を握りしめた右拳で彼女の顔面を殴り飛ばした。

「——ッ!!」

ベラトリックスは口から血を吐くと、そのまま倒れ込んだ。

セレネは彼女の腹に足を乗せると、彼女の杖を二つに折った。

『インカーセラス——縛れ』

ベラトリックスの頬は赤く腫れあがっていた。彼女の目は怒りで充血し、歯ぎしりをしていたが、杖がないため抵抗できない。ベラトリックスは、セレネになされるがまま縄で縛られていた。

「これで、完了ですね」

セレネは安堵の息をついた。

あとは、ダンブルドア対ヴォルデモートの決闘を観戦するだけだ。セレネはそう

思い、ダンブルドアたちの方へ目を向ける。

その時だった。

『フリペンド―撃て』

側面から強い衝撃が、セレネの身体に直撃する。

セレネは何が起きたのか分からないまま、吹き飛ばされた。壁に激突する直前、金色の像がセレネを受け止め、衝撃を緩和してくれる。だが、それでも強烈な痛みが胸の内側から響いている。磔呪いよりかはマシだが、血を吐くような痛みであることには変わらない。

セレネは誰が呪文を放ったのか薄目を開き、愕然とした。

ハリー・ポッターが残忍な笑みを浮かべながら、セレネに杖を向けていたのである。

「そん、な……?」

「お前の判断が遅いせいで、大事な生徒が傷ついたぞ」

ハリーは濃厚な殺気を醸し出しながら、ダンブルドアに笑いかける。

「いますぐに俺様を殺せ、ダンブルドア。でないと、大事な生徒が死ぬぞ?」

セレネは激しく痛む胸を押さえながら、目を細めてハリー・ポッターを睨みつける。

口調、仕草、そして雰囲気はハリーのものではない。完全にヴォルデモートのものだ。セレネは「ハリーは、蛇男に乗っ取られたのだ」と頭の隅で考えながら、世紀の大賢者がどのように行動するか見守るしかなかった。

「死がなにものでもないなら、ダンブルドア……この子を殺せ。愛の前では、なにもかもが許されるのだろうか？」

ダンブルドアは何も答えず、ヴォルデモートに身体を乗っ取られたハリーを見つめている。

「俺様を殺せ……この弱い小僧と一緒に、殺すがいい」

「……ハリーや」

ダンブルドアは少し弱弱しい声で語りかける。

「大事なものは、どこが同じなのかではない。

どこが、違うのかじゃ」

ダンブルドアの囁きを受け、ハリーは嘲笑うような表情を浮かべたが、すぐに苦悶の色へと変わる。

「――」

ハリーの何か呟く声が聞こえる。

それと共に、彼の身体は震え、床に崩れ落ちた。中からヴォルデモートが飛び出した。ダンブルドアと激闘を繰り広げていただろうに、その身体は傷一つ負っていない。裸足に黒いローブ姿のまま、ハリー・ポッターを見下している。

ヴォルデモートの口元が動いた。

ダンブルドアは動かない。

ヴォルデモートがハリーの胸に杖を突き付け、なにか口を動かそうとした――その時だった。

ホールに設置された暖炉から、何人もの魔法使いが姿を現し始めたのである。ヴォルデモートはいきなり群衆が現れたことに舌打ちをすると、縄で縛られたままのベラトリックスを引っ張り「姿くらまし」をした。

「大臣！ 『あの人』です！ 『例のあの人』が、そこにいました!!」

「わかっておる、ウィリアムソン。私も『あの人』を見た。……『あの人』が、まさか、この魔法省に!？」

パジャマ姿の魔法省大臣は、しどろもどろだった。

目の前の現実が受け入れられないらしい。

ダンブルドアは魔法省大臣に近づき、なにかを語りかけた。大臣は虚を突かれたような表情をしていたが、近くの闇払いに指示を出し、神秘部に向かわせる。

「さて。まずは、ハリーとセレネを学校に戻さないとの。

ハリー、君は校長室で待つてなさい。セレネ、君にはまず治療と休息が必要じゃ。落ち着いてから、少し話をするとうしようかの」

セレネはどこか遠くでその声を聞いていた。

ダンブルドアは、ヴォルデモートとの戦闘で破壊された金の像の一部に魔法をかける。どうやらそれは物質を「移動キー」にする魔法だったらしい。魔法省大臣が「私の許可なく作るのは違法だ!」と喚いていたが、ダンブルドアに毅然とした態度で睨みつけられると、黙り込んでしまった。

「さあ、右がハリーで、左がセレネじゃ。では、また後程会おう」

ダンブルドアに差し出された移動キーを触ると、へその内側から引つ張られる感じがした。魔法省のホールも大臣もハリーも、ダンブルドアも消え、セレネの身体は、不可思議な色彩と音の渦の中を前へ前へと回転していく――。

※

それから、二日後。

セレネは医務室のベッドから起き上がると、身支度を整えた。

肋骨が数本折れてしまい入院していたが、マダム・ポンフリーに治せない怪我ではない。彼女お手製の魔法薬は吐き出しそうなほど苦かったが、そのおかげでメキメキと回復し、めでたく退院することになったのである。

「治ってよかったね、セレネ」

セレネが身支度を整えていると、ハーマイオニーが話しかけてきた。

彼女は死喰い人に厄介な呪いをかけられたらしく、まだ当分、退院できないらしい。同じく、精神を操作する魔法をかけられたロン・ウィーズリーも不機嫌そうな顔でベッドに横たわっていた。

神秘部の一件で、奇跡的に死者は出なかった。

ハリーはシリウス・ブラックが死んだのだと思ったらしいが、彼は階段から落ちた際に頭を強打し、気を失っていただけだった。ただ、首の骨を痛めてしまったらしく、しばらく聖マンガに入院することになったらしい。

「ええ、本当に。ハーマイオニーも早く良くなるといいですね」

「ありがとう。」

……ねえ、セレネ。私、ずっと疑問に思っていたんだけど……その……」

ハーマイオニーはセレネを見つめ、なにか言い淀んでいる。

「どうかしましたか？」

「その……セレネは魔眼持ちなの？」

セレネが言葉を促すと、ハーマイオニーはどこか躊躇いがちに尋ねてくる。セレネは眼鏡のつるに手を置いた。

「ええ、そうですよ。普段は眼鏡で抑えていますけど」

「そう……それから、もう一つだけ。」

セレネは、ホムンクルスなの？」

ハーマイオニーは、意を決したような表情をしていた。きっと、神秘部のどこかで死喰い人が呟いた言葉を拾ったのだろう。セレネはどこか顔の筋肉が緊張しているのを感じながら、それでも、なんとか微笑を浮かべて答えた。

「私は人間ですよ、ハーマイオニー」

それだけ答えると、彼女に背を向けて歩き出す。

ハーマイオニーはもう何も聞いてこなかった。

医務室を出ると、セレネは大きく伸びをした。

考えてみれば、今日は日曜日だ。

それにしては、城の中は静かすぎる。廊下には誰もいない。みんな試験も終わり、宿題から解放されて、誰もが夏の日差しに照らされた校庭や湖で遊んでいるに違いない。

セレネは「秘密の部屋にでも行こうか」と考えながら、廊下の曲がり角に差しかった時だった。

「おっ、もう退院したのか」

ばったり、ノットと出会った。

彼は神秘部の戦いで額に傷を負った以外、特に目立った外傷はなかった。そのため、入院せずに済んだのである。

「お前、朝食まだだろ？」

彼はそう言いながら、ナプキンに包んだサンドイッチを持ち上げてみせた。サンドイッチを見て、ようやく朝食を食べていないことを思い出す。音こそ立てなかったが、胃が食べ物を催促するように縮んだように思えた。

「その辺で、一緒に食わないか？」

「そうですね、かまいませんよ」

彼の申し出は、セレネにとってありがたかった。

正直、いまから大広間に行くのは面倒に思っていたところだ。きっと、いま行つたところで、テーブルにはパセリのような添え物くらいしか残されていないだろう。開け放たれている正面玄関から外に出ると、日差しが痛いほど照り付けてきた。多くの生徒がクイディッチ競技場の上を箒で飛んだり、湖で大イカと泳いだりしている様子が目に入ってくる。セレネたちは楽しそうな彼らを横目で見ながら、城に寄りかかるように腰を下ろした。

「日刊預言者新聞を読んだか？」

「一通りは。ようやく、大臣は蛇男の復活を認めたようですね」

セレネはサンドイッチを受け取ると、頬張りながら答えた。

「まさに、掌返しですよ。ハリーやダンブルドアのことを狂人扱いしていたのに、それに対する謝罪もなく、英雄扱いです」

「ま、メディアなんてそんなものだろ」

ノットは退屈そうに言う、頭の後ろで手を組んだ。

「お前のことも詳しく書かれてたぞ。『ベラトリックス・レストレンジを倒した勇敢な少女』だど。おかげで、他寮からも親衛隊への入隊希望が届く始末だ」

「……はあ、本当にメディアは怖いですね」

セレネは最後の一口を小さな口に詰め込み、ふと——隣に座る少年に視線を向ける。

日刊預言者新聞には、神秘部で起きた出来事が事細かに記載されていた。

ハリーやセレネたちの活躍はもちろん、死喰い人の誰が捕まったのかまで書かれている。そのなかには、ルシウス・マルフォイを始め、ノットの父親の名前も書いてあった。

きつと、マルフォイやゴイル、クラブは白い目で見られているに違いない。おそらくは、ノットも。彼の場合は一緒に神秘部で戦ったが、特に目立った戦績もないので、非常に影が薄い。

ハリーと一緒に死喰い人に立ち向かったという話よりも、今回逮捕された死喰い人の親を持つ生徒として、周囲から見られているだろう。

いまはいつもと変わらない仏頂面だが、きつと、彼は針の筵に座っているような

居心地の悪さを感じているに違いなかった。

「ん……なんだよ」

あまりにも、じろじろ横顔を見続けてしまったせいだろう。ノットの顔がこちらに向けられる。不愉快なのか、眉間の皺が更に深く刻まれていた。

「いえ……あれ？」

セレネは申し訳なくなり、顔を背けようとしたとき、ふと——彼の額に傷が残っていることに気づいた。

「その傷……マダム・ポンフリーに消して貰えなかったのですか？」

セレネはそっと彼の額に指先を伸ばし、傷痕に触れる。ガラスの破片が刺さった痕は、眉の上あたりに薄い線を引いている。セレネは優しく傷をなぞりながら、言葉が続けた。

「すみません。あの玄関ホールで、私があなただけを無理やり付き合わせなければ……安心してください。私なら、この程度の傷は消せ——」

「気やすく触るな!!」

最後まで言葉を言い終わる前に、ノットはセレネの手を荒々しく跳ねのけた。顔

は燃えるように赤く染まっている。形の良い耳の先からは、湯気が昇っていそうだ。

「ごめんなさい……」

セレネはしゅんと項垂れた。

自分が彼の性格に付け込み、巻き込んだのだ。そのせいで、彼は命を狙われ、ただ一人の家族からは「恥さらし」と呼ばれた。怒るのは当然だろう。

ノットは肩を上下させながら、セレネを思いつきり睨みつけてきた。

「お前な！ まさか、他の連中の傷も触ってるんじゃない!?」

「え？」

だから、セレネはきょとんとした。

触り方で怒られるとは、まったくもって想像すらしていなかったからである。

「ポッターの傷とか、触ってないよな!? こんな触り方、してないだろうな!？」

「ハリーの？ ありえませんか。あなたの傷だけです」

「……ならいいけど。あまりべたべた触るなよ」

ノットは怒ったように言くと、右掌で傷跡を隠した。

「この傷は残しておいてくれて頼んだんだ。だから、気にするな」

「そう、なのですか？」

「ああ。別に傷なんて気にしていない。何度も言っているけど、オレはオレの意志でお前に付いていったんだ。だから、お前に謝られるのは、その——筋違いなんだよ」

最後の方の声は尻すぼみになっていった。

「というか、お前さ。なんで、オレだけ苗字呼びなんだよ」

ノットはセレネから顔を背けると、どこか投げやりな口調で話題を変える。

「グリーングラス、ブルストロード、カロー、ウォルパート、フレッチリー、グレンジャー、ポッター、それから、ロングボトムも！ みんな、ファーストネームじゃないか！」

「確かにそうですね」

セレネは指摘され、初めて気が付いた。

基本的に、付き合いが長い相手は、ファーストネームで呼んでいる。ウルクハートやピュシーといった例外はあるが、ファーストネームで呼んだ際「畏れ多いので止めてください！」と懇願されて以降、ずっと名字で呼んでいる。

ところが、ノットはずっとノットだ。セオドルと呼んだことは一度もない。

「あなたの苗字。とても言いやすいので、つい」

「……だからってな」

ノットは不服そうな顔をしていた。

セレネは、少し考え込むように指先を唇に添える。言われてみれば、どこか妙な話である。

「ま、別にいいけどさ。」

ほら、食べ終わったなら次行くぞ」

ノットはそう言いながら立ち上がった。

「行くなって、どこにです？」

「厨房。ブルストロードが『試験終了記念パーティー』をやり直すらしい。んで、オレたちは食料調達係だよ」

「……試験終了パーティー……」

セレネは、ミリセントが大広間ではしゃいでいた姿を思い出す。

たった三日前のことなのに、遙か昔のことのように懐かしく思えた。

「了解しました」

セレネも立ち上がると、大きく伸びをする。

分厚い雲の隙間から、太陽の暖かな日差しが差し込んできたような気持ちになった。

城の外には、ヴォルデモートがいる。

魔法省に復活を知られた以上、その存在を隠す必要はない。あの蛇男は、今この瞬間にも死喰い人を引きつれ、イギリス魔法世界を恐怖に陥れている。その魔の手は、命より大事な義父に伸ばされるかもしれない。

グリンデルバルドに真意を問いただす必要があるし、リータ・スキーターとも話し合う必要がある。分霊箱を探す必要があるし、いずれダンブルドアと話すときまでに言い訳を考えなければならない。

やることは山積みで、正直なところ「試験終了記念パーティー」に参加する余裕はなかった。

ただ——ずっと張り詰め過ぎていたのでは、自分が壊れてしまう。

だから、ここで一度、羽を伸ばしておこう。

「厨房に行きましようか」

セレネは数歩歩きだすと、後ろを振り返った。

「楽しいパーティーにしましうね、セオドル」

セレネが言うと、ノットは呆けたように口を半開きにした。

「どうしました、セオドル？」

「……いや、なんでもない。楽しみだよな」

ノットはしばらく固まっていたが、少しずつ綻び、幼子のように無邪気に輝く笑顔に向けてきた。その笑顔を見ていると、セレネも自身の強張っていた口元が緩むのを感じた。

「ええ、行きましよう！」

たとえ、この先、誰かを裏切ることになったとしても。

きつと、グリンデルバルドの手を取った自分の行く道が、晴れることのない闇に覆われていたとしても。

いま、自分が歩いている場所は正しい道である。

セレネは城へと続く真夏の太陽に照らされた道を、力強く踏みしめながら歩いた。

第五章「不死鳥の騎士団」、これにて完結です。

次回は番外編を挟んで、第六章「謎のプリンス」に突入します。

五章は、原作との相違点も多く出てきた章でした。

特に大きな相違点を、簡単に解説します。

○グリンデルバルドの脱獄

一番の相違点。

死喰い人の大半を無力化し、ヴォルデモートを怒らせ、ベラトリックスに意味深な発言をして去っていった闇の魔法使い。しかも、壮年期まで若返っています。

彼は、セレネとの契約があるので、「セレネの助言者」としての立ち位置を崩しません。最近では、セレネに進められて、マグルの推理小説を読みふけています。

そんな彼が、死喰い人たちを勧誘するような言い方をする真意とは——今後、明らかにあります。

○ベラトリックスとルシウスの忠誠心

グリンデルバルドの演説を聞き、お辞儀様への忠誠心が変化。

その結果、どう変わってくるのかは六章を楽しみにしててください！

というか、この時期ってベラトリックスのお腹にデルフィニーはいるのかな？

○シリウス・ブラックの生存

本作ですでに片腕のシリウス。

今回はベラトリックスに敗れ、階段を転落。首を強打したことで神経をやられ、半身不随になりました。生存したただけ原作より良いかもしれませんが、それでも、今後の展開で彼が戦場に出るのは絶望的。

ただし、六章では少し活躍する予定です。

○ハリーの恋愛対象が、チョウ・チャンからセレネに変更

みんなから否定されているのに、自分を肯定されたら好きになるのは当然。

ふられました、まだ想い続けています。

なお、ハリーはヴォルデモートに憑かれて、セレネを攻撃しています。もちろん絶賛、後悔中。

恋路の行方は……

他にもありますが、この辺りで。

次章もよろしくお願いします!!

IF 番外編 プリズマ☆セレネ爆誕！

復刻版プリズマ☆コース、完走できそうにない……悔しい。

でも、大丈夫。前回のイベントでクロだけはゲットしてる。問題は、クロの再臨素材がない……。またいつか、復刻してくれるかなー。

それはさておき、番外編です。

神秘部の戦いで、ハリー（inヴォルデモート）に衝撃呪文を放たれたところから始まります。

細かいところに目を瞑り、楽しんで読んでくださると嬉しいです。

セレネの身体は吹き飛ばされ、壁に激突した。

受け身を取ることもできず、強烈な痛みに襲われる。呼吸をするたびに、胸の内側から壊れるような痛みが奔った。

「——ッ、う」

薄れゆく意識の中、ハリー・ポッターが彼らしくない残忍な笑みを浮かべ、こちらに杖を向けている姿が目に入ってきた。ヴォルデモートに身体を乗っ取られたのかもしれない。

（悔しいな）

セレネは、ふと思った。

ベラトリックス・レストレンジを無力化したことで、すっかり油断していた。

一瞬の油断が命取りになることは、歴史を紐解いても物語でもよくある話だ。勝利の瞬間こそ気をつけなければならぬのに、ここで負けてしまうことが悔しくてたまらなかった。

優等生に固執していた頃、敗北は死と同異議だと思っていた。

今はそこまで固執していない。だが、やっぱり負けるのは嫌いだ。今いる足元

が、がらがらと音を立てて崩れ落ちていくような恐怖を感じる。

セレネは氣力を振り絞った。

壁の瓦礫に当たって、手は血まみれで、怪我のない所の方が少ない。だが、まだ戦える。自分は負けていない。セレネは指先に力を入れ、頑張って立とうとしたとき――ふと、杖ではない細い棒のような物が手に当たった。

「――採血、完了」

ふと、不穏な声が出た。

誰も自分の周囲にいないはずなのに、可愛い女の子の音がする。それも、先程指先が触れた何かの辺りから聞こえてきた。セレネは、そっと声の方に視線を向けた。

「……なに、これ？」

「まあ！ なにとは失礼ですね!!」

それは、憤慨したような声を出す。

セレネの指先が握りしめていたのは、杖でも棒でもない。ピンク色のステッキだった。てっぺんに星と羽をあしらった可愛いステッキだ。一瞬、日本の制服

を着た少女たちが悪と戦うアニメに登場したステッキを連想した。

そんな女の子が好みそうなアニメっぽいステッキが、もによもによと動いている。

「こほん。はじめまして！ 私は愛と正義のマジカルステッキ『マジカルルビー』ちゃんです！

貴女は次なる魔法少女候補に選ばれました。さあ私を手にとって下さい！力を合わせて（わたしにとっての）悪と戦うのです!!」

「……」

セレネは何も答えなかった。

あまりにも突然の誘い。魔法少女という謎の言葉。何もかもが唐突で、分からないことだらけだったが、一つだけ——セレネにも分かることがあった。

こいつ、うさんくさい。

「あ、いま『うさんくさい』って思いましたね？ ひどーい！ ショックです！
ルビーちゃん、ショックを受けましたー!!

嘆かわしいです。現代では、魔法少女に憧れる（都合の良い）少女は絶滅してしまったのでしょーか!!」

マジカルビーなるステッキは、大仰に嘆いている。

セレネはステッキから目を背け、ハリーたちの方に視線を向けた。ハリーは今までにヴォルデモートに支配されているらしく、ダンブルドアに杖を向けながら、高笑いをしていた。

セレネはもう片方の手で痛む胸を抑えながら、淡々とステッキに話しかける。

「私は契約なんてしないから、さっさとどこか行きなさい。

下の階に行けば、もっと魔法少女にふさわしい子がいるはずよ」

たとえば、ジニー・ウィーズリーやルーナ・ラグブット。

彼女たちの方が、このステッキにふさわしいかもしれない。むしろ、そっちに押し付けたい。そういう念を込めて言ったのだが、ステッキは動こうとしなかった。

「えー、人に譲っていいんですかー？」

魔法少女って素晴らしいですよー。いまのあなたは、ただの魔法を使える女の子ですけど、魔法少女になれば、あーんなことや、こーんなことができるんですよー」

ステッキは、無性に腹の立つ声で話しかてくる。

それを無視し続けていると、ステッキがずっとセレネの耳元まで近づいてきた。不可思議なことに、右手がステッキから離れてくれない。

「これ、離す方法ないのですか？」

「私と契約すれば外れますよ☆」

「それ以外で」

「魔法少女はいいですよー、空も飛べますし、可愛い衣装だって着れますし、恋愛だって思うがままです！」

セレネは甘言を一切無視する。

空は箒やセストラルで十分飛べる。

可愛い衣装には興味がない。

恋愛は——今の自分には、必要ないワードだ。

「えー、でもいいんですかー。意中の相手が他の女の子と一緒になくてもー」

「意中の相手などいませんので」

「またまた、そんなこと言っちゃって。想像してみてくださいよー。仲の良い男の

子が自分ではない女の子と仲良く手を繋いで歩いちゃったり、しまいにはキスをしちゃったりするところを見ても、あなたは何も感じないんですかー？」

「それは……」

ステッキにそそのかされ、セレネは少しだけ想像する。

一番仲の良い彼が、自分の知らない可愛らしい女の子と一緒に歩いている姿を――。

自分には向けないような笑顔を浮かべ、仲睦まじそうにホグズミード村を歩いている様子を――。

「別に」

セレネは吐き捨てるように言った。

別に恋仲でもないし、ただ彼とは仲が良いだけである。だが、セレネは胸の中がモヤモヤする気がした。いままであまり知らなかった感情の正体を考える前に、ステッキの怪しげな声が耳元から響いてきた。

「ふふふ、甘いですね。ルビーちゃんの手にかかったら、こんなの朝飯前です！」

ステッキは、楽しそうに呟いている。

しまった、なんだかよく分からないが嵌められた。このままでは、何か非常にま
ずいことが起こる。

セレネは、そう直感すると、すぐさまステッキを遠くに投げ飛ばそうとする。だ
が、相変わらず指先からステッキが離れてくれない。

それどころか、身体すら動かない。

先ほどまでは痛みや疲労で動かすのが難しかったが、それとは違う。

まるで、強大な力で押さえつけられているように動かないのだ。

「ふふふ、ちよろかったですね。

血液によるマスター承認、接触による使用の契約、そして起動のキーとなる乙女
のラブパワー！　すべて滞りなく頂戴いたしました!!

さあ……最後の仕上げといきましょうか。貴女の名前を教えてくださいまし」

ステッキの腹立つようなはしゃぎ声に、セレネは歯を食いしばる。

絶対にこいつに名前など教えるものか、と抵抗した。教えたら最後、絶対に不味いことになる。確実に最低なことが起きて、面倒なことに巻き込まれる。

いつそのこと、ステッキを破壊しようとした。だが、悲しいことにステッキの「死の線」が視えない。そうこうしているうちに、これもステッキの効果なのだろうか。セレネの口が、勝手に動き始めたのである。

「セレネ……セレネ・ゴントです!!」

「マスター登録完了!!……まあ、ぶっちゃけ本当はロリがいいんですけど、この際（私が楽しめれば）どうでもいいですー!」

瞬間、セレネの身体が赤い光に包まれた。今まで纏っていたホグワーツの制服が、溶けるように赤い光の中へと消えて行く。その代り、新たな衣装が弾ける様に現れた。

「コンパクト フルオープン! 境界回廊 最大展開!」

セレネの口は、勝手に言葉を紡ぐ。

そして、これも自分の意思とは関係なく、ステッキをクルクル手の中で華麗に回し、そのまま決めポーズをビシッととっていた。

「正義と平和の使者、『魔法少女プリズマ☆セレネ』爆誕!!」

ここで、ようやく身体を自由に動かせるようになった。

自分の意思とは全く関係ない、されど自分がした一連の動作、そして自分の服装を見る。

セレネはこれまでにない勢いで赤面した。

「は、早く戻しなさい！」

セレネはステッキを思いっきり床に叩きつける。

「え〜どうしてですか？ イイ感じに決まっていますよ！ 和風テイストの魔法少女って感じで」

「どうしてもこうもない!!」

セレネは今の服装が恥ずかしくてたまらなかった。

緑色の和服っぽい上着は、まだ百歩譲って許せる。だが、ひらひらした赤いスカートの丈は短く、すうすうとしていて気恥ずかしい。しかも、ふわふわした羽ま

で生えている。靴も緑のリボンが特徴的なアイドルが履くようなもので、まったく機能的ではない。

こんな服装で、平然と立っていられるわけがないし、物凄く恥ずかしいことを呟いた気がする。

「ツインテール、とても似合ってますよー」

「髪までいじくったんですか!? 私、全く了承していません! それに、正義と平和の使者ってなんですか!?!」

「では、愛と正義の使者にします?」

「却下です。というか、早く元に戻してください」

「うん、いいですねー。愛と正義! とても独善的で素晴らしい響きですー!」

「私の話を聞きなさい——ッは!?!」

セレネは叫びかけ、ふと——今の状況を思い出す。

ここは、魔法省。

ヴォルデモートとダンブルドアが現れ、決戦を繰り広げていたはずだ。

セレネはおそろおそろ、ハリーたちの方へ視線を向ける。ハリー（おそらく、中

身はヴォルデモートも、ダンブルドアも、縛られているベラトリックス・レストレンジも、こちらを見ている。

セレネは、自分の顔が茹で上がったように熱を持つのを感じた。

「つぷ、ぷははは!! 最高じゃないか、小娘!!」

ベラトリックスが馬鹿にしたような高笑いをした。まるで死んでしまいそうになるほど、お腹を抱えて笑っている。

「なんだい、そのふざけた服装は! しかも、プリズマ☆セレネって……つくつくく」

「半人間風情が。まさか、俺様を誘惑するつもりではあるまいな? そのような服装をしても、痛いだけだぞ?」

ベラトリックスだけでなく、ハリーに乗り移ったヴォルデモートからも嘲笑される。

ダンブルドアは何も語らなかったが、視線に哀れみの色を強く感じた。

セレネは、穴があったら入りたくなった。

すごく、オブリビエイトしたい。

自分の記憶も周囲の記憶も、みんなまとめてオブリビエイトしたい。

「セレネさん、そういうときは、あの眼鏡に向けて『このやろー』って、ステッキを振ってみてください」

ステッキが「やれやれ」とでも言いたそうな声で囁いてくる。

セレネとしては、正直なところ、このステッキの言いなりになどなりたくない。だが、セレネとしては早くステッキから解放されたい。だから、もうなりふり構ってられない。

セレネは、このステッキの要望を叶えることにした。

「このやろー!」

セレネは、ハリー・ポッターめがけて、ステッキを振り下ろした。

すると、ステッキからは光り輝く閃光弾が放射される。閃光弾が直撃し、ハリー・ポッターは為す術もなく黒焦げになった。

「セレネさんの返答はこうです。『お前みたいな蛇男なんて、こっちから願い下げだ。100年後に出直して来な!!』だそうです」

「……そこまで思っていますよ」

セレネがステッキの威力に驚いていると、黒こげのハリーから煙が立ち上り、ヴォルデモートが姿を現した。相当な痛みを感じたらしく、眉間に皺をよせ、額には筋が浮き立っていた。

「貴様ッ!!」

ヴォルデモートは死の呪いを放ってくる。

その速度、避ける暇がない。だが、死の呪いが直撃したというのに、自分は無傷だった。セレネは自分が生きていることに驚き、目を見開いていると、ステッキが得意そうな声を出した。

「変身中はAランクの魔術障壁・物理保護・治癒促進・身体能力強化などが常にかかっています。今や英霊にも等しい力を持ったセレネさんに、人間ごときがかなうわけありません!!」

「つく、ならば焼き殺してやる!!」

ヴォルデモートは杖の先から青白い炎を出した。炎はたちまち大蛇の姿になり、セレネを噛み砕こうとしてくる。これは、さすがにマジカルな姿になっても火で焼かれる苦しみを感じそうだ。

セレネは眼を凝らし、ステッキで線を切り裂き、大蛇を四散させた。

「ちよっと、セレネさん！ ルビーちゃん、怖かったんですけど!!」

「それは良かったです。あなたにも怖いって感情があったのですね」

これからもステッキで線を斬っていくことを、セレネは強く誓った。

「直死の魔眼か、厄介な」

ヴォルデモートが歯ざしりする声が聞こえてくる。

セレネは再び、ヴォルデモートを直視した。分霊箱の効果だろうか、相変わらず「死の線」が視えない。ところが、いまの自分は不本意ながら謎の力を手にしている。もしかしたら、ヴォルデモートを滅せなくても、物凄く苦しめることくらいはできるのではないだろうか。

「マジカルルビー」

「気軽に、ルビーちゃんでもいいですよー」

「では、ルビー。あなたの力で、あのサイコパスを苦しめる方法はありませんか？」
セレネが囁きかければ、ステッキがきらんと光った気がした。

「お安い御用ですよ、セレネさん。あなたの足元に落ちているカードを拾ってくだ

さい」

セレネが足元に視線を向けると、そこにはいつのまにか一枚のタロットカードが落ちていた。カードの表面には、槍を持った男の人が描かれている。

「それを夢幻召喚すればいいんです。そのカードの必殺技を使えば、あの鼻なし男は死に匹敵する苦しみを味わい続けるはずですよー☆」

「ありがとう、ルビー！」

やり方は尋ねなくても問題なかった。

セレネの身体は変身した時のように、動き出していた。

「夢幻召喚——クラスカード、ランサー、インストール！」

セレネがカードをステッキに当て、力の限り叫ぶ。

再び自分の身体が光に包まれる。ただ、先程と違うのは、なにか強い意思のようなものが身体を包み込んでいく気がした。例えるなら、いくつもの戦場を駆け抜けた英雄が自分に寄り添い、力を貸してくれているような——そんな不思議な感覚だ。

「さあ、行きますよ。サイコパス！」

いつの間にか、ステッキが赤い槍に変わっている。

セレネは槍をくるくる手の中で回すと、思いつきり地面を蹴った。ヴォルデモートが一瞬遅れて、こちらに杖を向けてくる。だが、時はすでに遅い。

「その心臓、もらい受ける！」

すでに、狙いは定まった。

セレネの内側から魔力が溢れ出てくる。濃厚なまでの魔力は赤い魔槍に吸い上げられて、渦を巻いている。

「なんと、宝具か」

ダンブルドアが小さく呟くのが聞こえた。

セレネは赤槍を思いつきり引く。槍の先端は下段に向けられている。これで当たるわけがない、とヴォルデモートも思っているのだろう。セレネ自身、これは下策だと思ったが、身体はそうのように動いている。なにしろ、この槍の力を貸してくれている誰かが「これでいい」と自信を持って教えてくれている。

ならば、この槍に従い、身体を動かすまでだ。

「『刺し穿つ死棘の槍―ゲイ・ボルグ―』……!」

足元めがけて放出した槍は、唐突に軌道を変え、ヴォルデモートの心臓を狙って

奔っていた。

「な——ッ、ぐあ」

ヴォルデモートの身体が浮いた。

セレネの手から離れた赤い槍は、ヴォルデモートの心臓を貫いていた。

「ご主人様ッ——!!」

ベラトリックスの悲痛に満ちた叫びが聞こえる。

セレネが手を伸ばすと、赤い槍は引き抜かれ、ステッキの状態になって戻ってきた。

「いやー、やりましたね！ セレネさんの大勝利ですーっ！」

「そ、そうでしょうか」

ヴォルデモートは死んだ。

肉体が崩れ落ち、風と共に消えていく。

もちろん、まだ分霊箱をすべて破壊していない。

よって、まだ完全に滅ぼしたわけではないのだが、本体は殺せた。これで、またつかの間の平和が訪れる。その間に、分霊箱を一つずつ潰し、復活の手段を消して

いけがいい。

「……まあ、ありがとう」

「いえいえー、ルビーちゃんの手にかかれば、ざっとこんなものですよ☆」
セレネは減らず口のステッキを見て、困ったように微笑んだ。

「あ、あの人が……復活したと思ったら、死んだ？」

いつの間にか、ギャラリーも増えている。

パジャマ姿の魔法省大臣は目を白黒させていたが、セレネの方にゆっくり近づいてきた。

「い、いやー、君のおかげだよ！ きみのおかげで、復活した『あの人』を殺すことができた。君の働きは、マーリン勲章勲一等レベルだよ！」

「あ、ありがとうございます」

大臣はセレネの手を握り、ぽんぽんと背中を叩いてきた。

セレネは少し気恥しくなる。自分だけの力ではない、と言おうとしたとき――

「……ゴーント、その服装……」

聞き慣れた声が後ろから聞こえてくる。

振り返ると、ノットの姿があった。かすり傷の彼は、セレネが飛び出すのを見て、追いかけてきたのだろう。そんな彼は、セレネの姿を凝視している。

目を丸く見開き、口がわなわなと動いている。何故か顔が茹でたタコみたいに赤く染まっていた。

「お、おまえ！ な、なんて服装してるんだよ!? は、は、はしたないだろ!!」
「服装？」

セレネはきょとんと首を傾げ、下を向き——見事に固まった。

先ほどまでの魔法少女の服装、ではない。

例えるなら、全身青タイツ。

しかも、おなかの部分と股からふくらはぎにかけて部分は、肌色が剥き出しだ。背中の辺りも涼しい感じがするので、きつとそこも布がないのだろう。

自分は、こんな破廉恥な姿で戦っていたのだ。

ダンブルドアや、魔法省大臣や、その他、魔法省職員の見ている目の前で。

セレネは自分の頭に一気に血が上るのを感じた。

「元に戻しなさい！！！」

「了解ですー☆」

ステッキは楽しそうに了承すると、元のホグワーツの制服——ではなく、魔法少女のコスチュームに戻した。

セレネはぷちん、と切れた。

このステッキが役に立つかもーと思いかけていたが、前言撤回だ。こんな人を辱めるステッキは、捨てるに限る。

「捨てるなんてひどいですね。もう、ルビーちゃんとあーんなことや、こーんなことをした仲ではありませんか」

「誤解されるような言い方をしないでください!!」

「……セレネ、君にはそういう趣味があったんだ」

黒こげ状態から立ち直ったハリー・ポッターが、ゆっくりと起き上がる。

「でも、大丈夫。セレネがどんな趣味でも、僕は君のことを受け入れるよ」

「ありがとう。でも、誤解です。すぐに、記憶をオブリビエイトしてください」

「おお、『あの人』を倒した二人は、恋人同士だったのか！」

魔法省大臣があらぬ勘違いをしてくる。

大臣はセレネとハリーの肩を抱きかかえると、カメラマンを呼んだ。

「二人の英雄だ！ 世紀の瞬間でもあるな。さあ、カメラに向かって笑って、笑って！」

「わ、笑えません!!」

セレネは魔法省大臣の腕から無理やり逃げ出すと、ステッキに向かって叫んだ。
「ほら、あなたの遊びに付き合いましたから、さっさと契約を解除してください！」
「えー、セレネさんのサイコパス退治に付き合ったのに、その言い方はあんまりですよー。」

さあ、それでは、私の用事に付き合ってもらいますよー☆」

「用事？ あなたの用事なんて——きやっ！」

セレネが文句を言う前に、ステッキが勝手に直進し始めた。手を離したいのに、セレネの指はステッキにくっついて離れてくれない。

気が付くと、セレネはステッキのせいで魔法省の出口めがけて一直線で駆けつけた。

「さあ、行きますよ『プリズマ☆セレネ』！ 正義と平和を守るために——!!」
「だからって、私を巻き込まないでください!!」

セレネの嘆きが魔法省に木霊する。

だが、止める者はいない。止められる者もない。

青い瞳の少女はステッキに連行され、イギリスの正義と平和のために戦うことになるのであった——。

「……レネ、セレネ！」

肩をゆすられ、セレネは飛び起きた。

目の前には、ダフネの心配そうな顔があった。隣には、アステリア・グリーンダラスの姿もある。

「大丈夫、セレネ。うなされていたけど」

「その、セレネさんは苦しみながら、うわごとで『性悪ステッキ』とか言ってたよ？」

セレネはボンヤリとする頭で、2人の顔を見て、それから自分の服装を見た。

今の自分は、見慣れたホグワーツの制服を纏っている。あのふざけた全身青タイツでもないし、可愛い魔法少女の正装でもない。

今いる場所も魔法省ではなく、ホグワーツ特急の中だった。

「……夢？」

「まったく。うなされるなんて、なにやってるのよ」

隣に座るミリセントが、おおげさにため息をついてきた。

「……よかった……」

セレネは一息ついた。

心の底から「夢で良かった」と実感する。

いくら蛇男を殺したいからといっても、あんなステッキの世話になりたくない。恥ずかしい服装、不可思議な台詞、謎の決めポーズ——思い出すだけで寒気がしてくる。

「なによ、そんな酷い夢だったの?」

「いえ、魔法少女にはなりたくないなと」

「なに言ってるのよ。あんた、魔法少女じゃない」

ミリセントは、きょとんとした顔になった。

「だって、魔法が使える少女でしょ? 馬鹿なことを言っていないで、ほら。百味

ビーンズでも食べなって」

ミリセントはそう言いながら、道化の描かれた箱を渡してきた。

「……そうですね、ありがとうございます」

セレネは苦笑いを浮かべると、ピンク色のビーンズを手を取った。

これは、ありえたかもしれない平行世界の物語。

次回、「謎のプリンス編」に突入します。

カレイドルビーは出てきません。カレイドサファイアも出てきません。大師父ももちろん登場しません。

謎のプリンス編

72話 霧のロンドン

新章「謎のプリンス」編、はじまります。

ロンドン　トラファルガー広場。

「いやね、今日も霧が濃いわ」

「天気予報では晴天だって言ってたのにねえ」

「最近、外れるわよねー」

どこかのご婦人たちが囁き合う声が、耳に入ってきた。

セレネは立ち止まり、頭上に立ち込める霧を一瞥する。せつかくの夏だというの

に、薄気味悪く肌寒い霧が立ち込めていた。見ていてだけで、嫌な気持ちになる不快な霧である。

「……ふん」

セレネは霧から目を背けると、手近なファーストフード店に足を踏み入れる。

レジ待ちをしている学生たちは「まるで、18世紀末に戻ったみたい」と文句を口にしていた。

もちろん、夏場に立ち込める季節外れの霧は、産業革命のときに充満した酸の霧ではない。

アズカバンを放棄し、いまもはるか上空を漂っているであろう吸魂鬼が創り出す霧だ。いまも少しずつ、人々から生気を吸い上げているのだろう。

「本当、最低な生き物ね」

セレネは吐き捨てるように呟くと、注文したハンバーガーに齧り付いた。

『守護霊の呪文』で全てを払いのけてやりたいが、未成年者の魔法の使用は緊急時以外禁じられている。それに、ロンドンを覆いつくすほどの吸魂鬼を全滅させるほどの守護霊を創り出せる自信もなかった。少なくとも、自分一人では不可能である。

だから、こうして苦い思いをしながら、見過ごすしかできない。

いまは、まだ。

「相席、いいかの？」

セレネがハンバーガーに苛立ちをぶつけていると、前から声をかけられる。それと共に、椅子を引く音も聞こえてきた。

「ええ、かまいません——」

ここまで言いかけ、セレネは眼が点になった。

長く蓄えた白い髭、半月形の眼鏡の奥には青い瞳、床を掃きそうな長いローブ——アップルパイの包みを開けていたのは、アルバス・ダンブルドアその人だったのだ。

「この店に入るのは、初めてでう。なかなか美味しそうなパイじゃ。君も頼んだかのう、セレネ？」

「い、いえ、私はハンバーガーのセットだけで……」

セレネは困惑しながら、さっと周囲に目を走らせる。

いかにも魔法使い然とした服装の老人など、周囲の注目的になる。たとえば、指

輪物語のコスプレだと思われても、確実に目を引くこと間違いなしだ。

ところが、誰もダンブルドアを気にしていない。

外の霧を不快そうに見つめながら、おしゃべりに花を咲かせている。

「……認識を阻害する魔法ですね」

「左様。実は君と話したかったのじゃよ、セレネ。何分、学期中は時間が取れなかったのこのう」

「……ダンブルドア先生、質問をしていいですか？」

魔法省から学校に私を送り届けてくれた時、どのような手段を使ったのか、教えてください」

セレネはダンブルドアの瞳をまっすぐ見つめ、毅然とした態度で尋ねる。

すると、ダンブルドアは優しいような笑みを浮かべた。

「移動キーじゃよ。ハリーが右で、君が左じゃ。」

わしは本物じゃよ、セレネ。しかし、しっかり確認しようとした点は見事じゃ」

「ありがとうございます。それで、話とは何でしょう？ 私、この後に予定が入っていますので」

セレネはダンブルドアの目元を見ながら、しっかり答える。

嘘ではない。この後、ジャスティンとダイアゴン横丁で買い物の約束をしている。学期末、彼とホグズミード村に行く約束をしていたのだが、当日、セレネは神祕部の戦いで負った怪我で入院していた。その埋め合わせとして、一緒にダイアゴン横丁に行くことになったのである。

「ほう、予定？」

「ええ、ジャスティン・フィンチーフレッチリーと買い物の約束を。先日、OWL試験の結果も届きましたし、新しい教科書も買わないといけません」

「君は全ての試験に合格していたのう。実に素晴らしい成績じゃった、おめでとう」
「ありがとうございます、先生」

正確に言えば、10科目中優秀が8科目、期待以上が魔法生物飼育学、平均が天文学だった。なかなか満足のいく出来栄で、試験結果が届いた日は、義父と一緒に祝いをしたものだ。

「この成績なら、どこも引く手数多じゃ。進路は決めたかのう？」

「実は、まだ悩んでいます。選択肢が多いのは非常に幸せですが、少し困りもので

すね」

セレネはにこやかな微笑みを作ると、ハンバーガーの包み紙を折り畳み始めた。

「……そろそろ、本題に入られたらどうです？」

「うむ、そうじゃのう」

ダンブルドアはアップルパイをテーブルに置くと、じっとこちらを見据えてくる。

「Mと名乗った少年のことじゃ」

「ああ、彼のことですか」

セレネは手元に目を移す。

いつか聞かれるだろうと、予想していた話題だった。

「私も詳しいことは知りませんよ？」

「知っていることだけで構わん」

「……リータ・スキーターに紹介された人物です」

セレネはコーラをストローで掻きまわしながら答えた。

「ダンブルドア先生のことです。私が蛇男を倒したがつていること、ご存知ですよ
ね？」

私があこのサイコパスを倒す方法を探している時、リータが紹介してくれたのです。『あんたの協力者になりたがっている少年がいる』とね」

「ふむ、リータ・スキーターの紹介でいう？」

ダンブルドアの訝し気な視線を感じる。だが、それを逸らすように、セレネは話を続けた。まさか、あの少年の正体がグリンデルバルドだと知られるわけにはいかない。ただ、そうでないとなると、どうやって知り合ったのか不明瞭になってしまふ。

なので、ここはリータ・スキーターを言い訳に使うことにした。あの腐った新聞記者はそれなりの人脈を持っている。たとえ、彼女がダンブルドアに糾弾されたとしても、なんとか躲すことくらいできるだろう。むしろ、躲してくれないと困る。「ええ。ただ、彼女自身も少年のことを詳しく知らないみたいでした。

私の前でも『マーチン・ヒューイット』と名乗っていましたが、きっと偽名でしょう。注意して接しないといけないと思っています」

「ほう、なぜ偽名と？」

「マーチン・ヒューイットといえば、推理小説の主人公ですよ。ホームズが一度、

完結した時に連載されていた作品でして、たしか……変装によって、ありとあらゆる人物と仲良くなれる探偵です。もし、お読みになりたいのであれば、お貸ししますか……」

それを聞いて、ダンブルドアはしばし考え込んでいるようだった。

セレネもこの肌を刺すような沈黙の中、自分の返答が間違っていないかどうかを考える。

グリンデルバルドは変装を得意としていた。

今回はポリジュース薬を使ったようだが、アメリカの魔法省に潜入した時など通常の変身術で大臣までも欺いていたと聞いたことがある。

ダンブルドアがそのことを感づく可能性はあったが、彼が偽名に用いた人物はマグル小説の主人公だ。どちらかといえば、反マグル主義だったグリンデルバルドが探偵小説など読むわけない。

今でこそ、探偵小説を好んで読んでいるらしいが、投獄される前に嗜むわけがなかった。

そもそも、グリンデルバルドは公式に死んでいる。

普通に考えれば、そのつながりを疑われるわけではない。

「ところで、先生。シリウス・ブラックのことですが――」

だがしかし、用心に越したわけではあるまい。

セレネはダンブルドアの思考を遮るように、声をかけた。

「彼はその後、どうなったのでしょうか？」

「生きておるよ。じゃが、戦線に戻るかどうかというところ難しい所じゃ」

ダンブルドアは静かに答える。セレネは首を傾げた。

「首の骨が折れてしまっておる。もちろん、骨は治せるが神経の治療となると、現代療術では極めて困難じゃ。」

それでも、戦線に戻れなくはないが――以前のように戦うのは不可能じゃろうよ。しばらくは、入院生活じゃ」

「そうですか……悲しいですね」

「話が変わるが、セレネや。わしも君にもう一つ、聞きたいことがあってのう。君はゴイントの家を訪ねたことがあるかの？」

最後の一言を耳にしたとき、セレネのストローを掻き混ぜる手が止まった。

「……ええ。一昨年の夏に」

「その時、なにか不思議なものを見つけなかったかの？」

セレネは問いかけの返答に悩んだ。

なんとなく、あの指輪のことを聞かれているのだと分かった。分霊箱だった指輪は、今もセレネの鞆の奥底に眠っている。だが——別に廃屋に行ったことは危険な行為だったかもしれないが、分霊箱を壊す際には、魔法も使わず、直死の魔眼で片付けた。校則や法律に違反しているわけではない。

「はい。指輪を一つ見つけました。不思議な魔法がかけられていたので、魔眼を使って壊しました」

だから、セレネは正直に答えた。

問題はその後、ダンブルドアがどう切り返してくるかだ。

「その指輪を見せてもらえないかの？」

「……はい、どうぞ」

セレネは鞆から指輪を取り出すと、ダンブルドアの手に乗せる。彼の青い瞳が指輪に嵌められた石を見ると、興味深そうに光った。

「この指輪、しばし預かってもいいかの？」

「……理由をお聞きしても構いませんか？」

セレネが聞き返すと、ダンブルドアは指輪の石に目を向けたまま口を開いた。

「この指輪には、ヴォルデモートが闇の魔法をかけておった。他にもかけていないか、調べる必要があるのでは」

確かに、ダンブルドアの言う通り、この指輪にかけられた呪いをすべて壊したわけではない。

なにしろ、この指輪を心構えも何もなく魔眼で視ると、吐き気がするほど多種多様な魔法が込められていた。もっとも際立って邪悪な存在は切り殺したが、他の魔法まで殺すとなると気が遠くなる作業である。

それに、すべての魔法が悪い魔法とも限らない。セレネの魔眼が映し出す「死の線」は、良い魔法も悪い魔法も区別なく現れる。だから、分別がつきたいのだ。

それでも、今まで持ち歩いていたのは、指輪の中央——ペペレル家の紋章が刻まれた黒い石に「死の線」が奔っていないからだ。万物の死を表すはずの線が奔っていない存在は、極めて珍しく興味深い。

いずれ、機会があつた時に解明したいと思い、持ち歩いているが——別に今すぐ解明できるわけではない。

「分かりました。ですが、いずれ返してくださいね」

セレネがすんなり了承すると、ダンブルドアは嬉しそうに微笑んだ。彼は指輪を大事そうにつまむと、ローブのポケットの中に滑り込ませた。

「さて、セレネ。君にはあと2、3ほど伝えなければならぬことがある。これ以上、君の友人を待たせるわけにはいかないのう」

ダンブルドアはそう言いながら、ちらりと窓の外へ目を走らせた。セレネもそちらに視線を向けると、ジャステインがうろうろしている姿が見えた。そわそわと通りを行ったり来たりしている。

「君は、すでに自分の出生の真実を知っているのう？」

「……はい」

セレネは頷いた。

あまり聞かれないことではないし、進んで話したいことでもない。

「私は人間ですよ」

「左様。君の在り方は、間違ひなく人間じゃ。だが、怒らないで聞いて欲しい。これが、寿命の問題になると、心持ちではどうにもならない」

「……そう、ですよね」

セレネは少しだけ俯いた。

稼働期間が定められたホームンクルスの精と人間の卵子。そこから生まれた存在が、そう長く生きられるはずがない。第一、人造的に生み出された動物は、総じて寿命が短く、なにかしらの欠陥を抱えていることが多いと聞く。頭のどこかで覚悟していたことだが、実際に指摘されると心苦しくなった。

「それで、ダンブルドア先生の見立てだと、私の寿命はどれくらいなのでしょう？」
セレネは少し明るく、おどけたような聞き方をする。ダンブルドアの顔は、酷く悲しそうな色をしていた。

「現代療術でも寿命を図ることはできませんが、おそらく60年は生きられるじやろう」
「60年、ですか……………って、は？」

セレネは一瞬、きょとんとした。

「60年？」

「左様。残念ながら、君の母体は魔女ではない。マグルの女性じゃからのう。マグルの平均寿命分は生きることが出来るじやろうが、その先は蓋を開けてみなければ分からない話じゃ」

「……いや、その、もっと短いかと思っていました」

むしろ、魔法使いが長生き過ぎるのだ。

ダンブルドアにしろ、グリンデルバルドにしろ、100歳越えても現役の人物がいる時点でおかしい。

あと60年もあれば、それこそ、就職して、いずれ結婚して、義父に孫の顔を見せることだってできる。少なくとも、普通に生きてさえいれば、最愛の義父より先に死ぬことはないだろう。

もっとも、いまだにセレネは死が怖い。

できるだけ先延ばしにしたい事象だが、想像していたよりも遥かに先のことで、恐怖より驚きの方が勝っていた。

「うむ。普通に生きるには十分にある。何分、君は生まれるにあたって大して調整

は受けていないようじゃからのう。

だからの、セレネ。君は生き急がなくていいのじゃよ」

ダンブルドアは立ち上がると、セレネの頭を軽くポンと叩いた。

「君は生き急ぎ過ぎておる。

ヴォルデモートのことも、義父君のことも——。君が一人で抱え込む必要はないのじゃよ」

「先生、なにを——？」

「困った時は、周りの大人に頼ればいいのじゃ。君が義父君を守りたいなら、わたしは喜んで手を貸そう」

ダンブルドアは問いかけてくる。

彼の言い分は、確かに正しい。

グリンデルバルドやリータ・スキーターといった怪しげな大人に頼るのではなく、もっと身近で信頼できる大人を頼りにすればいい。その方が、ずっと楽だし、きっと効果的だ。

「そうですね、ありがとうございます」

セレネは、ダンブルドアの手を退けながら立ち上がる。

「必要な時が来たら、お願いします」

だが、いまはいい。

それに、ダンブルドアが義父を守護する方法は予想できる。騎士団のメンバーを護衛に付かせるくらいならいいが、おそらくは「忠誠の術」の方だろう。

この魔法は、生きた人間に秘密を封じ『秘密の守人』とすることにより、秘密を持つ当人か、守人が漏らさない限り、封じた秘密が外部に漏れることはない。つまり、守人が秘密を洩らさない限り、ヴォルデモートが義父の目と鼻の先にいたとしても、存在を感知することすらできないのだ。

実に素晴らしい最高の守護呪文だろう。

ところが——これをする、と、義父は仕事を辞めなければならなくなってしまう。仕事だけではない。友だち付き合いや近所を出歩くことすらできなくなってしまうのだ。

セレネとしては、最愛の彼を守りたい。だが、彼の自由を剥奪するのは違う気がした。

おこがましいことかもしれないが、彼には何も知らせず、感づかせず、いままで通りの日常を送ってもらいたいのだ。

そのなかで一番いいのは自分が傍に居続けることなのであるが、ホグワーツに在籍している現状、不可能である。それこそ、不死鳥の騎士団に義父の護衛を要請してもいいのかもしれないが、悲しいことに、マグル生活に馴染め、溶け込める魔法使いは滅多にいない。そう考えると、いまからマグルに不慣れな騎士団に頼むより、1年以上もマグルの生活を続けたリータ・スキーターの方が、義父は違和感を持つことなく、日常を送ることができるだろう。

「それでは、先生。学校で会いましょう」

「……そうじゃの。何かあったら、すぐに来るとよい。だから、自分一人でヴォルデモートを倒そうと考えるでないぞ?」

「まさか!」

セレネは最後にとびっきりの笑みをダンブルドアに向けた。

「一人で立ち向かうなんて、さすがに無謀ですよ。私、まだ死にたくないのもっとも、グリーンデルバルドの手を借りて立ち向かうつもりだが。」

セレネはダンブルドアの眼差しを背中に感じながら、出口へ歩みを向けた。

「あつ、セレネ!!」

店の外に出ると、ジャスティンが嬉しそうに近寄ってきた。とても小綺麗な服装をしている。彼の羽織っている上着だけでも、義父のシャツとズボンを合わせた以上の金額がする気がした。もしかしたら、ホグワーツの制服より高いかもしれない。それだけ、質のよさそうな服装をしていた。

セレネは、ありふれたシャツにスカート姿で来たことを少し後悔する。今の服装で彼の隣で歩くと、ややみすばらしく感じるだろう。

「どうしました?　なんだか、表情が暗いですけど……?」

「いえ、この天気が嫌なだけです。」

ダイアゴン横丁に行くというのに、この天気はないですよね」

セレネは嘘をつきながら、空を嫌そうに見上げた。

「大方、吸魂鬼のせいだと思いますが」

「そうですね。この気候は、僕も嫌な感じがします」

ジャスティンも納得したように答えてくれた。

正直、ダンブルドアとの問答より彼と話していた方が気楽だ。彼の考えていることなど、だいたいが手に取るように分かるし、思考を誘導することなど容易である。そのやり過ぎは、ハリー・ポッターのような結果を生み出すわけだが、ジャスティンに限ってそれはないだろう。

セレネたちはトラファルガー広場を出て、チャリング・クロス通りへ向かう。

その間、セレネたちはマグルのバンドが出した新曲の話とか、ホグワーツに在る間に話題になっていた最新の怪獣映画についてなど、他愛のない話で盛り上がった。セレネは頭上の吸魂鬼のことなど、すっかり忘れて話し込んでしまう。

「復活のシーンは『さすが！』と思いました。まさか、放射能を吸収して復活するなんて！」

「私も同意見です。設定が活きていますよね。今回の敵も強かったですよね。能力もそうですけど、進化したり分裂したり飛翔したりと、本当にしぶとくて——」

——しかし、それは「漏れ鍋」の扉を開けるまでだった。

セレネは扉を開けながら「見入ってしまった」と続けようとして、言葉を止める。いつもは魔法使いの活気で溢れているパプが、しんと静まり返っているのだ。バーテンの老人だけが、寂しそうに背中を丸めて座っている。

バーテンはセレネたちが入ってくると、期待顔で見てきた。

「坊ちゃん、嬢ちゃん、なにか頼みますか？」

「えっと……セレネ、どうします？ 何か食べますか？」

ジャスティンが困った顔で見てきたので、セレネは申し訳なさそうな顔をした。
「まず、買い物をしてからにしましょう。その後、時間があれば……」

セレネが答えると、バーテンは陰気に頷き、グラスを磨き始めた。

そのままパプを通り抜けて、肌寒い裏庭に出る。セレネは杖を取り出すと、壁の煉瓦の一つを軽く叩いた。すると、たちまち壁がアーチ型に開き、その向こうに曲がりくねった石畳の道が延びていた。

「……漏れ鍋、様子がおかしかったですね」

ジャスティンが後ろを振り返りながら、怪訝そうに呟いた。セレネは小さく息を

吐いた。

「大方、あいつの復活が認知されたからでしょう」

ダイアゴン横丁も様変わりしていた。

きらきらと色鮮やかに飾りつけされていたショーウィンドウの、呪文の本も魔法薬の材料も大鍋も、その上に張り付けられた魔法省の陰気なポスターに覆われて見えない。ポスターのほとんどは魔法省が配布している保安上の注意事項を拡大したものだが、まだ捕まっていない「死喰い人」の手配写真もあった。

「……酷い有様」

セレネはアイスクリーム・パーラーに板が打ち付けられている様子を一瞥した。ヴォルデモートの復活が知れたというだけで、ここまで横丁が陰気に落ちぶれてしまうのだ。これでは、経済効果も何もあったものではない。

ヴォルデモートは自分が魔法界の頂点に立った後、経済がどうやって回っていくのか、考えたことがあるのだろうか。おそらく、そこまで頭が回らないのだろう。なにしろ、ホグワーツで経営・経済学は教えてくれない。

「……オリバンダーもいなくなったのですね」

閑散とした老舗杖メーカーの前を通り過ぎるとき、ジャスティンが悲しそうに呟いた。

「新聞では、拉致されたと書いてありましたよね」

「杖職人を拉致なんて、ぞっとしますね。死喰い人たちの杖が壊されても、また製造されてしまいますから」

セレネの脳裏に、ベラトリックス・レストレンジの顔が浮かんだ。

彼女を捕らえた際、確かに硬い杖を二つに裂いた。あれでしばらくは無力化できると思っていたが、ヴォルデモート側がオリバンダーを手中に収めた以上、ベラトリックスも再び杖を手に入れている可能性が高い。

「とりあえず、さっさと買い物を済ませましょうか」

この通りを歩いても、暗い気持ちになるばかりである。

通りだけでなく、薬問屋もマダム・マルキンの洋裁店も店内には暗い空気が漂っている。書店ですら普段とは異なる陰鬱な空気で、ジャスティンが早く出ようと促してくる始末だ。

「……これなら、マグルの店を回った方が、楽しいかもしれませんね」

セレネが購入した本を抱えて書店から出ると、彼は寂しそうに笑っていた。

「暗すぎますよ。ノクターン横丁みたいです」

ジャスティンはそう言いながら、冴えない店頭を見渡した。

おまけに閉店した店の前では、いかにも怪しげな露天商が齒のない口で笑っている。彼の言う通り、いまやダイアゴン横丁は、健全な青少年が来る場所ではなくなってしまうていた。

「ジャスティン。帰る前に、双子のウィーズリーの悪戯専門店に寄ってもいいですか？」

セレネは口を開いた。

「この辺りにあると聞いているので」

「ええ、かまいませんよ。ちよっぴり、僕も興味があります——って、うわっ!!」
ジャスティンが道の真ん中で立ち止まった。

この陰鬱極まる横丁に於いて、フレッドとジョージの悪戯専門店だけが異彩を放っている。巨大なピエロ人形がマジックを繰り出していたり、ウィンドウに張り出された広告一つ一つが花火大会のような華やかさを放っていたりしている。ウィ

ンドウに陳列された何かが、常に跳んだり光ったり弾んだり叫んだりして、見ているだけで目がちかちかしてくる。

「ここ、凄いですね」

セレネとジャスティンは引き込まれるように、店の中に入った。

この場所だけが、以前のダイアゴン横丁の活気に近い。否、それ以上の賑わいを見せていた。お客は満員で、誰もが目を光らせて商品棚に群がっている。

マルフォイたち尋問官親衛隊を苦しめた「ゲーゲートローチ」など大人気らしく、空箱が押し潰されていた。ぽんっと音を立てながら姿を変える「だまし杖」、自動綴り修正機能付きの特殊羽ペンや食べると吐き気がする「闇の印キャンディー」など、興味深い悪戯グッズで溢れている。

「お嬢さん、我が特製の『ワンダーウィッチ』はご覧になったかな？」
セレネの背後で声がした。

振り返ると、フレッド・ウィーズリーが、ニッコリ笑って立っていた。赤紫色のローブが、燃えるような赤毛と見事に反発しあっている。

「セレネ、ジャスティン、元気か？」

「ええ。とても繁盛していますね。ところで、ワンダーウィッチとは？」

「ああ、あれのことさ」

フレッドは窓の傍を指さした。

その一角は思いつきりピンク色の商品が並べてあり、女の子たちがくすくすと笑い合っている。

「どこにもない最高峰の『惚れ薬』さ。

もつとも、君には必要ないかもしれないがね」

フレッドはそう言いながら、ジャスティンを愉快そうに一瞥した。彼は惚れ薬のパッケージと同じくらい頬をピンク色に染まっている。セレネは少し怒ったような口調で聞き返した。

「……何を言っているのか分かりませんが、これって本当に効くんですか？ 下手したら、騒動の元になりますよ？」

「もちろん効くさ。一回で最大四十八時間——」

「——投薬する相手の体重にもよるがな」

フレッドの声にかぶせるように、人を落ち着かせるような男性の声が降って来る。

セレネとジャスティンが顔を上げると、そこには優雅な服をまとった壮年の男性が立っていた。黒々とした髪をオールバックにした彼は、ひどく面白そうに微笑んでいた。

「ああ、この旦那が葉の調合を手伝ってくれたんだ」

「八割方の調合は、君たち兄弟がやったものだろう？ 私、その仕上げを担当しただけだ」

「いやいや、謙遜するなって。旦那のおかげで効能が延びたじゃないか。

紹介するぜ、セレネ、ジャスティン。この人は、パーシバル・グレイブス。俺たち悪戯仕掛人の支援者だ」

「……パーシバル……」

セレネは男性に訝しむような眼差しを向ける。

何故だか、非常に嫌な予感がする。だが、自分が思い描く人物ならば、間違っても惚れ薬を作る手助けなどするわけがない。というか、イメージ的にして欲しくない。

そんな思いを込めて睨んでいると、パーシバルと紹介された男性はふっと笑った。

「君のように才能あふれた若者を支援するのは、年長者として当然のことだ。それに、私としても勉強になる部分も多い」

「……惚れ薬の調査がですか？」

「いままで関わったことのない分野に挑戦するのも、最近の楽しみの一つだね。もつとも——」

パーシバル・グレイブスは瓶を手にとると、急に声を潜めた。少し身をかがめ、セレネとジャステインにしか聞こえないくらいの声で話し始める。

「——この薬で手に入る愛は、偽りの愛だ。最初から愛のない相手に投薬するよりは、最後の最後で踏み切れない相手に投薬することをお勧めする。

今なら、わずか5ガリオンだ。購入するかね、フロイライン？　そこにいる彼氏のために使うか？」

「友達です」

セレネは、きっぱり否定した。

そして、パーシバルの袖を力強くつかむ。

「すみません、ジャステイン。私、ちょっとこの人と話があるので」

そのまま、セレネはジャスティンの返事も待たず、パーシバルの袖を引っ張りながら店の端っこに来る。本当なら外に出て話をしたいところだが、今のダイアゴン横丁で内緒話をするのは、ホッグスヘッドで秘密の会議を開くのも同じくらい危険極まりない。

それをするくらいなら、まだ賑やかな店内で話し合う方がマシだ。

「……どういふつもりですか？」

ジャスティンたちから随分離れた場所まで来ると、セレネは腰に手を当てて問いただした。

「双子のウィーズリー兄弟の手助けをするなんて……何を企んでいるのですか？」

「半分は君のためだ、フロイライン」

そう言いながら、彼は柵に陳列された黒い球体を手にした。足が生えており、いそいそと彼の手の中から逃げようとしている。

「おとり爆弾だ。どこかへ潜入するときに役に立つ。この爆弾の作成を依頼したのは、この私だ。あちらの柵にあるペルー産のインスタント煙幕もそうだ。あれも死喰い人との戦闘で役に立つだろう」

「分かりました。それで、もう半分は？」

「私の趣味だ」

パーシバル・グレイブス——もとい、グリンデルバルドは悪びれることなく、きっぱりと言いつけた。

「第二の人生を歩む、私の趣味だよ。」

それに、先程も話したが、才能あふれる若者を支援するのは、年長者としての務めだ。あの若者たちがどこまで成長するのか……実に興味深い」

彼は楽しそうに言いながら、おとり爆弾を柵に戻した。爆弾は柵の暗がりに向かって、いそいそと走り去っていく。

「……本当に、それだけですか？」

セレネが疑ってかかると、グリンデルバルドは心外そうに首を縦に振った。

「君を騙すわけないだろう、フロイライン。契約のありなしにかかわらず、私は嘘はつかない」

「言葉で紛らわすことはありますよね？」

セレネはまっすぐ彼を睨み付けた。

「たとえば、あの双子たちを助長させて、破滅させるつもりとか？」

「ああ、フロイライン。君は勘違いをしている」

今度は、ゆっくりと首を横に振った。

「君がマスターで、私はサーヴァント——つまり従者だ。マスターの意に沿わないことはしないさ。表でも、裏でもね」

そう言いながら、彼はセレネの手の中に羊皮紙を握らせた。

「これは……？」

「そこに書いてある時間は空けておくように。君を迎えに行こう」

グリンデルバルドは長い足を動かし、セレネの横に立った。少し背を屈め、そつとセレネの耳元で囁く。

「分霊箱が隠された場所が見つかった。私では破壊できない、君の力が必要だ。……では、フロイライン」

それだけ言うと、グリンデルバルドは立ち去っていった。

セレネは慌てて振り返り、後を追いかけようとするが、すでに姿をくらませている。店内のどこを見渡しても、育ちのよさそうな紳士の姿は見当たらなかった。

「……本当に読めない人」

セレネは呟くと、羊皮紙に目を落とす。

《7月28日 19時。裏手の森》

「……いつのまに、住所を調べたのよ」

しかも、指定された日時は今夜だ。

今日、会えなければどうするつもりだったのだろうか。それとも、彼の未来視で今日の光景を予見していたのだろうか。

「ま、どっちでもいいけど」

セレネは紙を丸めると、ポケットの中に押し込んだ。

出口の方に目を向ければ、ジャスティンが何やらそわそわとしている。フレッドもこちらの様子が気になるのか、ジャスティンと話しながら、ちらちら視線を向けてきていた。早く戻って、彼らを安心させた方がよさそうだ。

セレネは肩をすくめると、おとり爆弾やインスタント煙幕を数個抱え、彼らの元へと歩き出した。

分霊箱がどこに隠されているにしろ、万が一に備えて戦闘の準備は整えた方がいい。

セレネは帰宅すると、双子の店で買ったばかりの品を検知不可能拡大呪文をかけたウエストポーチに詰め込んだ。すぐに動きやすい服装に着替え、愛用の杖をポケットに差し込む。

幸いなことに、義父は飲み会で出かけている。リータが護衛で付いていつているので、特に外出を誤魔化す必要はない。しかも、行く先は自宅の裏手にある森だ。セレネが庭の柵を乗り越え、森の奥へと進むと、遠くから青白い灯りが近づいてくるのが分かった。「ルーモス」の呪文が作り出す灯りである。セレネは杖を握りしめ、近づいてくる人影を睨みつけた。

「……それで、どこに行くのですか？」

「ヴォルデモートが子供の頃、訪れた海岸だ」

静かに告げた彼は、いつも両面鏡越しに見る彼本来の姿だった。淡いブロンドの髪を逆立たせ、白くて薄い口髭を蓄えている。

「私の手を握るといい、フロイライン。私が君を導こう」

彼は、そつと右手を差し出してくる。

セレネは小さく息を吐くと、彼の手を軽く握った。

途端、セレネは回転した。

身体が圧縮されるような気持ち悪さを感じる。ただの「付き添い姿くらまし」だとは分かっていたが、吐きたくなくなるような不快感であることには変わらない。セレネは思わず目を瞑った。

「さあ、ここだ」

グリンデルバルドの声が聞こえる。

セレネがそつと瞼を開けると、冷たい暗闇の中に立ち、胸いっぱいには新鮮な潮風を吸い込んでいた。

―注意事項―

原作でも暗い描写の多い章ですが、本作でも一部暗く、きわめて鬱っぽい展開が入ってきます。お読みになって、嫌な気持ちになられる方もいるかもしれません。ですが、本作はハッピーエンド予定の作品です。

本作はもちろん、この章も最後まで読んだとき、どこか暖かな気持ちになることができるよう描いていきます。

それでは、「謎のプリンス編」をよろしくお願いします!!

73話 3つ目の分霊箱

潮の香りと打ち寄せる波の音がした。

眼前には、月灯りに照らされた海と星を散りばめた空が広がっている。言葉で表現すれば非常にロマンティックな光景になるのだが、現実には荒々しい風が周囲に巻き起こっていた。

そのうえ、背後には見上げるような崖がそびえたっている。のっぺりとした大岩が、いくつも荒く波打った海から突き出ている。セレネとグリンデルバルドは、そうした岩の一つの上に立っていた。

「ここは？」

セレネは周囲を一瞥する。海にも岩にも、岩壁の上にも、厳しさを和らげる草や木も、砂地さえもない。荒涼としたうら寂しく、どこことなく怖くなるような場所だった。

「幼少期、トム・リドルが孤児院時代に訪れた記録が残っている」

「それは……とても前衛的な遠足ですね」

「もちろん、本当に孤児院で訪れた場所はここではない。この近くの村に滞在していたらしいが、ある日——彼が数名の孤児を連れて、ここを訪れたという記録がある」

グリンデルバルドは淡々と述べた。

普通ならば、大人でもこの場所に近寄ることができないだろう。だが、ヴォルデモートは魔法使いだ。魔法を使って、登山家のように怯える孤児たちを連れて来た光景が瞼の裏に浮かんた。

「サイコパスにゆかりのある場所ということは分かりましたが、あいつはどこに分靈箱を？」

どこかの岩にですか？ それとも、あの荒波の下でしょうか？」

「どちらも不正解だ、フロイライン」

グリンデルバルドは静かに言う、杖先に明かりを灯した。

そして、半分海に沈んでいるような危なっかしい大岩を足場に、先へ、先へと進んで行く。セレネは彼の背中を追いかけた。下の方の岩は海水で滑りやすく、冷

たい波しぶきが顔を打つのを感じる。こんなところに連れてこられた孤児たちは、きつと怖かっただろうと、頭のどこかで遠い昔の出来事に思いを馳せた。

「さて、ここが入口だ」

グリンデルバルドは崖に一番近い大岩に近づくと、杖先から放出した金色の玉を放り込む。それは照明弾のように黒い岩壁を照らし出した。崖の割れ目に、黒い海水が渦を巻きながら流れ込んでいくのが見える。

「洞窟？」

「左様。さて、ここから二つ選択肢がある。船で行くか、それとも泳いで進むか」

「前者以外、選びませんよ」

セレネは苦笑いを浮かべた。

今も顔に打ち付ける海水は氷のように冷たい。それに、セレネは水着を持っていなかった。マグルの学校で着衣泳をやったことはあったが、水を吸い込んだ服が鍾のように体に巻き付き、なかなか思うように泳げなかったことを覚えている。

「普通はそうだ。だが、例えば、ダンブルドアなら用心を重ねて後者を選択するだろう。船除けの魔法がかかっていないか、警戒するあまりな」

グリンデルバルドは面白そうに言う、ポケットから玩具の船を取り出した。

「しかし、あいつのことだ。その手の魔法は、この場所にはかかっていない。『エンゴージオ―肥大せよ』」

玩具の船はあつという間に膨らみ始め、ちょうど二人ほどが乗れる大きさになった。

「船除けの魔法があるならば、『近寄って欲しくない物』があると公言していることと大差ない。そのような馬鹿をしないさ」

グリンデルバルドはそう言いながら、岩から船に躊躇うことなく飛び降りた。器用に杖を操り、落下速度軽減の魔法とクッション魔法を並列して使っている。おかげで、彼は5メートルほど落下したにもかかわらず、髪の毛先ひとつ乱すことなく、優雅に船へと降り立った。セレネは軽く目を細め、グリンデルバルドを見下ろした。

「私、未成年だから、今は魔法を使えないんですよ」

セレネは吐き捨てるように呟くと、眼下の船を一瞥する。

グリンデルバルドが「とべ」とでも言うように、両手を広げて合図をしているが、

目測でも5メートルはある。2階から飛び降りるのと大差ない。だが、もたもたしている時間はない。グリンデルバルドは手の先を動かし、跳ぶように促している。セレネは足に力を籠めると、川に飛び込むときのように、思いっきり岩を蹴って宙に跳び出した。

風が耳元で鋭く過ぎる音が聞こえる。歯を食いしばり、衝撃を覚悟する。だが、思ったよりあっけなく、すっぽりと自分の体はグリンデルバルドの腕の中に収まっていた。

「さて、では出港だ」

グリンデルバルドはセレネを降ろすと、船を動かした。船は音もたてず、洞窟の奥へと進んで行く。波も激しく、船はぐらぐらと揺れている。道もかなり狭まっていたが、船自身が道に合うように形を変化させながら進んでいた。

「でも、この短時間で、よくこの場所が分かりましたね」

セレネは酔わないようになるべく遠くを見つめながら、同行者に話しかけた。

「ヴォルデモートも細心の注意を払って、隠し場所を決めたのだと思いますけど」
「私を誰だと思っているのかね、フロイライン？」

グリンデルバルドは杖で船を操りながら、口の端を上げた。

「ヴォルデモートがしそうなことなぞ、手に取るようにわかる。きっと、ダンブルドアも思いついているだろうよ。もっとも、あいつは石橋を叩き過ぎて壊す男だ。まだ、ここに足すら運んでいないだろう。」

——ほら、見てみる。ヴォルデモートの華々しいメモリアルだ」

グリンデルバルドが皮肉っぽく言うと、杖灯りが洞窟の岩を照らし出した。そこには、たしかに『トム・リドル 1938。8』と記されている。まるで、観光地に訪れた記念に落書きしているみたいである。事実、これは「自分はここまでやってきたぞ!」という記念に彫ったものに違いない。

「1938年といったら……蛇男がホグワーツに入学する前ですね」

これが、もしホグワーツ入学後であれば、「トム・リドル」が「ヴォルデモート卿」になっていたかもしれない。若気の至りなのか、それとも、今もこの時の精神状態と大差ないのか。セレネには判断しかねた。

「ですが、ここで行き止まりですよ?」

洞窟はここで行き止まり。

三方はごつごつした岩壁で覆われている。グリンデルバルドは船から降りると、ダイアゴン横丁の入り口に通じる煉瓦に触れるように、こつこつ杖で岩を叩き始めた。

「ここは入り口だ。どこかに入り込む場所がある——ああ、ここだった」

グリンデルバルドは杖でこんこんと岩壁を叩いた。

すると、アーチ形の輪郭線が現れ、隙間の向こうに強烈な光があるかのように、一瞬、白く光り輝いた。ところが、その輝きはすぐに収まり、何の変哲もない岩へと戻ってしまう。

セレネとしては、その輝きよりも、同行者が口にした言葉に引っかかりを覚えた。「……ここだった？」

セレネはじろりと彼を見上げた。

まるで、一度ここに来たことがあるかのような口ぶりである。

「うむ、言い忘れていたが、私は一度、ここに来ている」

グリンデルバルドは悪びれもなく言った。銀の小刀を懷から取り出しながら、平然とした様子で壁を見上げている。

「私は君の助言者であり、従者だ。主人を危険な場所に連れて行くわけにはいかない。

ところが、私一人では分霊箱の護りを破ることが難しそうでね。君が必要だったというわけだ」

「……つまり、私にこの入り口を破って欲しいと？」

セレネは眼鏡に手を添える。

直死の魔眼を使えば、この岩壁にかけられた魔法など簡単に壊せるだろう。しかし、グリンデルバルドは首を横に振った。

「こんな幼稚な仕掛けなら、私でも突破できる。君の順番は——」

グリンデルバルドはナイフで自分の腕を切りつける。真っ赤な色が迸り、岩の表面に黒く光る血が点々と飛び散った。

「まだ先だ」

彼は自分で腕に付けた傷を杖先でなぞりながら言った。杖でなぞると、傷はすっかり癒えていった。

「血を通行料として支払う必要がある。それだけの仕掛けだ」

再び、岩肌に銀色のアーチが現れる。今度は消えず、輪郭の中の血痕のついた岩がさっと消え、そこから先は底なしの闇が続いていた。

「水に、足を入れないように注意した方がいい。では、行くとしよう」

グリンデルバルドは歩き始める。

セレネも船を降りると、彼の背中を追いかけた。

洞窟の奥には、この世のものとは思えない光景が広がっていた。

そこには、巨大な黒い湖があったのだ。向こうの岸が見えず、洞穴も天井が見えないほど高い。遠く湖の真ん中と思しきあたりに、緑色に霞んだ光が見える。なんとなく、死の呪いの光と似ている気がして、嫌な気持ちちが沸き上がってきた。

「あの光の場所に、分霊箱があるのでしょいか？」

セレネは不快な光を睨みつけながら尋ねる。

「無論、そうだろう」

「では、先程の船を——」

「あれでは駄目だ。ルール違反になる」

グリンデルバルドは首を横に振ると、足元に転がっていた手頃な石を手にとった。

「ルール違反？」

「番人の怒りを買うということだ」

彼は静かに答えると、思いつき腕を引き、石を遠くへ放り投げた。もちろん、緑色の光のところまで届くはずがなかったが、静かな湖面に落ちる直前、爆発音のような音と共に、なにか大きくて青白いものが水の中から噴き出した。セレネが見定める間もなく、それは恐ろしい水音を上げ、鏡のような湖面に大きな波紋を残して、再び水の中に消えていった。

「あれは……!？」

セレネの脳内に、ありとあらゆる水中生物が渦巻いていた。

ケルピー、大イカ、大海蛇、水中人、水魔、河童……。だがしかし、先程現れたあれは、いずれにも該当しない。

「亡者だろうな。死者の軍隊が、湖の下にうごめいている。悪趣味なことだ。自分の魂の入れ物を亡者に守らせるとは」

グリンデルバルドは不快そうに言い放つ。

「さて、セレネ。君がヴォルデモート卿ならどうする？ 亡者に襲われることな

く、大切な分霊箱の様子を確かめるなら、なにをすればいい？」

「私でしたら……」

セレネは口元に指を添え、考え込む。

サイコパスの思考になどなりたくないが、今はそうこう言っている場合ではない。普通に考えれば、呼び寄せ呪文で分霊箱を持ってくる——のだが、おそらく、それを妨害する呪文がかかっていそう。それを外す手間、またかけ直す手間を考えれば、その方法はとらない。

そうなると、自分から分霊箱の元まで出向くしかない。

ただし、湖には亡者なる輩がうごめいている。セレネは亡者に関する知識が薄い。が、グリンデルバルドの反応からして、亡者に対して賢い命令はできないのだろう。きつと、あの死人たちは敵も味方も見境なく、自分たちの領分を刺激された時点で襲いかかってくるのだろう。

そうなると、亡者を刺激せず、分霊箱の元まで行く手段を確保しなければならぬ。い。

分霊箱の元まで行く手段を一つに限定し、亡者たちにそれ以外の方法で分霊箱を

盗ろうとする輩を襲うように命令しておく——それが、妥当なところだろう。

では、その方法は？

「……特殊な筈。もしくは、専用の小舟でしょうか？」

「そうだ。そして、答えは後者だ」

グリンデルバルドが杖を湖に向け、釣りでもするように掲げ上げる。すると、湖面から鎖が伸びあがってきた。グリンデルバルドは片方の手で軽々と鎖をつかむと、軽く鎖を叩いた。鎖はじゃらじゃらと音を立てながら、蛇のように滑り出した。鎖はひとりでに岩の上にとぐろを巻き、黒い水の深みから小舟を引きずり出した。

「分霊箱の主が渡るために用意された船だよ。さあ、乗り給え」

「……大丈夫ですか、本当に？」

セレネは訝しむように小舟を見る。

本当に小さな船で、2人乗ると沈むのではないかと思ってしまうほど狭そうだとすると、グリンデルバルドは高らかに笑った。

「そこがあいつの愚かなところよ。」

言っただろう、これはヴォルデモートが渡るためだけに用意された船だ。つま

り、この船には1度に1人の魔法使いしか乗れないように魔法をかけられている」

「では――」

「だが、お前は数に入らない。なぜなら、まだ未成年だからだ。

ヴォルデモートは、まさか成人前の魔法使いが乗るとは思っていないだろう」

その言葉の通り、セレネが乗っても船は沈まず、ゆっくりと湖面を滑るように移動し始めた。

2人乗ると随分窮屈で、ゆったり座ることなど夢のまた夢だった。舳先が水を割る音以外は、なにも聞こえない。セレネはできる限り、湖の中は見ないようにした。

「ところで、フロイライン。君は箒には乗らないのかね？」

ふと、グリンデルバルドが話しかけてくる。

こんなときに何を聞いてくるのだろうか。セレネは小さく肩をすくめた。

「乗りません。もちろん、飛行訓練で習った程度には乗れますが」

「ふむ、それは何故かね」

「別に、乗る意味がないからです」

セレネは正直に答えた。

「私は、クイディッチの選手ではありませんから」

「だが、箒を使うメリットは本当にそれだけか？ スポーツのためだけに箒は使

うのか？」

「……それは……」

セレネは彼から顔を背ける。

以前、セストラルで空を飛んだとき、思っていたような恐怖はなかった。きっと、箒で空を飛んでも、1年時に感じたような押し潰されそうな恐怖は感じないだろう。

「そろそろ、箒を使うメリットを考え直した方がいい。

——そろそろ着くぞ」

かたん、と何かに当たって船が停止する。

グリンデルバルドの杖灯りに照らされたのは、滑らかな岩でできた小島だった。小島はせいぜい、スネイプの執務室ほどの大きさしかない。平らな黒い石の上に立っているのは、あの緑がかった光の源だけだった。近くで見るとずっとずっと明

るくて、怪しげに輝いている。セレネが目を細めて見ると、最初はランプの灯りかと思ったが、光はむしろ石造りの水盆から発していた。水盆は台座の上に置かれている。

「ああ、これこそが君の役目だ」

グリンデルバルドが台座に近づき、水盆を覗き込む。

セレネも覗き込むと、中には燐光を発するエメラルド色の液体で満たされていた。

「この液体は……？」

「最も分かりやすい言葉で表すなら、苦しみしか与えない麻薬だ」

グリンデルバルドはにやりと笑うと、傍に置かれたクリスタルのゴブレットをつかんだ。

「この液体を飲み干さなければ、水盆の底にあるモノを見ることも取ることもできない」

グリンデルバルドは水盆から液体をすくった。

「ですが、それでしたら、ヴォルデモートもこの危険な液体を飲まなければならないのでは？」

「液体を飲み干す必要に迫られたら、解毒薬を事前に飲めばいいだけの話だ。だが、我々には解毒薬を用意することはできない。一度試してみたが、この液体は——」

グリンデルバルドが話している間にも、ゴブレットに注がれた液体は減ってきていた。反対に、水盆の液体の量が増え始めている。ゴブレットの液体が全てなくなる頃には、すっかり液体の量は元に戻ってしまっていた。

「このように、長くとどめておくことができない。これでは、成分を解析することすら敵わない。もつとも、どのような液体か、効能から推測することはできる」

「……まさか、飲んだのですか？」

「一滴で地獄に叩き落とされる快感があった」

グリンデルバルドは断言する。

数々の死線を潜り抜けてきた最悪の魔法使いに、ここまで言わせる劇薬だ。セレネはつばを飲み込むと、再び液体に視線を戻した。

「似たような薬を作るとは可能だ。だが、あくまで似た薬だ。これと同じものを作るのは難しく、当然解毒薬も作れない」

「……つまり、飲むしかない」

水盆の大きさから、軽く見積もっただけで十杯分。

一滴で地獄に落とされるような劇薬を、十杯飲み干さなければならない。

そして、セレネは――

「では、その毒の成分を殺せばいいんですね」

にやりと笑った。

眼鏡を外し、青々と輝く魔眼を開く。エメラルド色の水盆を見下せば、想像を絶するほどの線が複雑に絡み合っている。正直、見ていっただけで劇薬の不快さを感じ取れるような気持ち悪さが込み上げてきた。

「どうだ、フロイライン？ 殺れるか？」

「当然ですよ」

グリンデルバルドから銀のナイフを受け取ると、セレネは液体にその切っ先を落とす。

水面で揺れる線を捉えるのは至難の業だったが、集中すればできなくはない。自分の喉元を貫き破らない程度に、ナイフを突き立て続けるのと大差ないくらい簡単だ。

セレネは額から汗を滲ませながら、液体を解体していく。額から滲む汗が眉を伝い、液体に落ちて消えていく。このような複雑な解体は、ゴーンの家にあった指輪の入った箱を解体した時以来だ。

さすが、ヴォルデモートの魔法だ。非常に憎たらしく、素晴らしいほどに複雑極まる。けれど、これがヴォルデモートの魔法でそれを打ち壊しているのだと思うと、心が踊り、口元が笑うのが抑えられない。

「これで、終わりです！」

セレネが最後の一本を殺し終わった時、しんと辺りは静まり返った。

これで、ただの水である。毒成分の欠片も存在していない、純粋な水だ。

「味見をしてもよろしいかな、フロイライン？」

「ええ、どうぞ」

セレネがその場に座り込みながら答えると、グリンデルバルドは躊躇うことなく水盆から水をすくった。

「では、遠慮なく」

グリンデルバルドはゴブレットを飲み干した。セレネは肩で息をしながら、その

様子を見守った。

「なるほど。確かにただの水だ。これなら、全部飲み干すことができるだろう」

グリンデルバルドは愉快そうに微笑んだ。

「君はそこで休んでいるといい。あとは私の役目だ」

愉快そうな口元を崩すことなく、グリンデルバルドは液体を飲みきった。

もちろん、水なので体調を崩すことも、苦しむこともない。やがて、彼は水盆の奥底から何か取り出した。

「ロケットだ」

そう言いながら、彼はセレネの掌に乗せた。

いかにも高価そうなロケットだ。金の鎖に黒々と輝く宝石が一つ、大きくついている。セレネが中を開けると、肖像画が入っているはずの場所に、羊皮紙の切れ端が押し込んであった。

「これは……」

セレネは慎重に取り出し、広げてみる。

羊皮紙には何の魔力も感じられなかった。ただ、短く、走り書きがしてある。セ

レネは立ち上がると、グリンデルバルドの杖灯りに照らして、それを読んだ。

「『闇の帝王へ。これを読むころには、私はもう死んでいるでしょう。』

本当の分霊箱は、私が盗みました。できるだけ早く破壊するつもりです。

死に直面する私が望むのは、あなたが手ごわい相手に見えたその時に、もう一度、死ぬべき存在になることです。

……R・A・B』。

つまり、これは……偽物？」

「傑作だな」

グリンデルバルドも羊皮紙を一瞥すると、怪訝そうな顔になった。

「知ってますか、この人物？」

「いや、分らない。だが、それ相応の財力の持ち主だ。そのロケットだけでも、かなり価値あるものだ。」

だが、まずは、ここから出よう。もう、この場所には用がない」

グリンデルバルドはきっぱり言い放つと、空になった水盆に杖を向けた。そして、再びエメラルドの液体で満たし始める。

「あの劇薬は調合できないのでは？」

「似たような劇薬だ。つまるところ、ただの嫌がらせだ」

「……なるほど、理解しました」

セレネもにたりと笑った。

もし、ヴォルデモートがこの場所を訪れ、分霊箱を確かめようとしたとき——
せっかく解毒薬を飲んだのにもかかわらず効果がなく、悶え苦しむことになるだろう。

「それで、このロケットはどうします？」

「君が持つといい。何かの役に立つかもしれない。では、帰還するでしょう」
グリンデルバルドは再び船に乗り込んだ。セレネもその後が続く。

暗い水面を滑りながら、セレネはR・A・Bに付いて考え込んだ。

一人だけ、思い当たる人物がいる。

ルドビッチ・バグマン。

通称、ルード・バグマン。

元有名クイディッチ選手の魔法省の役人で、三校対抗試合の審査員であり司会者だ。

陽気にゲームの進行をしていたが、やけにセレネやハリーに肩入れしたが、不正を働こうとしていた。その意図は当時分からなかったが、新聞によれば、賭け事をやり過ぎて借金が重なり、魔法省を逃げ出したとのことだ。

だが、バグマンが命がけでヴォルデモートに齒向かう理由が分からない。

「R・A・B……一体、誰なのでしょう？」

セレネはロケットをポケットに滑り込ませながら、そっと呟いた。

ヴォルデモートに関わりがあり、分霊箱の存在を知るほどの知識があり、そして、このような代わりのロケットを用意できるほどの財力がある人物——そんな人間、あまりいない。少なくとも、かなり絞られてくる。

だから、すぐに見つけられるはずだ。

ところが、やはりというべきか。

R・A・B 探しには、あまり進展がなかった。

手持ちの文献、書類を探ってみたが、まったく該当者が見当たらない。

グリンデルバルドはグリンデルバルドで、次の分霊箱の在りかを探している、らしい。彼はそこまで偽物ロケットの所有者を気にしていないそうだ。

「はあ……完全に手詰まりね」

セレネはテーブルの上に両手を投げ出すと、リモコンのボタンを押す。

リビングのテレビは軽い音を立てた後、ニュースの画面を映し出した。英国の首相がどこぞの教育施設を訪問したらしい。セレネがぼんやり眺めていると、頭上からほうっと息を吐く声が聞こえてきた。

「どうしたのですか、リータ。あなたがマグルのニュースに興味を持つなんて」「持ってたんですけどいざんすよ」

リータ・スキーターは、憤慨したように呟いた。

「首相の後ろに闇払いの男がいたのが気になったぞんす」

「あー、なるほど」

確かに首相の背後には、魔法省で見た騎士団の魔法使いがいた。もちろん、完璧にスーツを着こなしている。彼が魔法使いだなんて、誰も夢にも思えない。

「それより、リータ。あなたは、まだ守護霊の呪文ができないのですか？」

セレネは椅子にもたれかかり、チャンネルを変えながら口にする。

「最も幸福なことを思い浮かべば、すぐにすみませう。ノーマン……昨年度1年生の男の子ですら、できた呪文ですよ？」

「それは、そいつが優秀なだけぞんす！」

リータも隣の席に座ると、うんざりしたように片肘をついた。

「そう簡単に上手くないものぞんすよ!? 特に大人はいろいろと事情が込み入っているぞんす！」

「でも、この連絡方法が上手くないかと、緊急時に困りますよ。本当をお願いしますね、最近は特に物騒なんですから」

日刊預言者新聞によれば、魔法執行部部長のアメリア・ボーンズと不死鳥の騎士団のエメリン・バンスがヴォルデモート自身の手によって殺害されたらしい。

他にも数件、死喰い人の手による殺人事件が相次いでいる。オリバンダーのように拉致事件も多発しているし、いつ最愛の義父の命が狙われてもおかしくない。だから、これまで同様かそれ以上に、リータにはしっかり護衛として働いて欲しかった。

「ご安心を！ あっしも本を書き上げるのに忙しくて、家を空けられないぞんすからね！」

「ダンブルドアの伝記でしたっけ？」

「新たな視点で切り込んだ伝記ぞんす。きっと、ベストセラーになるぞんしょ」
リータが含み笑いをしていると、リビングのドアが開いた。

「セレネ、そろそろ時間じゃないかい？」

義父が明るい笑顔で呼んでくれた。

今日は9月1日。

ホグワーツへ出発する日である。

「今行きます。それでは、リータ。後は頼みましたよ」

「リータさん、留守番お願いしますね。なにか食べたいものはあるかな？」

セレネの言葉に続くように、クイールがリータに話しかける。

リータはむすっとした表情になると、軽く手を振りながら

「別に。あんたの食べたいものなら、なんでも構わないぞんす」

とだけ言った。

セレネは思わず眉をひそめる。義父に対して、随分と失礼な態度である。そのことを注意しようと口を開きかけたとき、義父はとんとんとセレネの肩を軽く叩いた。

「わかったよ。じゃあ、君の好きなエールパイを買って帰るよ」

「だから、あんたの食べたい物を買ってくるぞんすよ!!」

リータが少し怒ったように言い返していたが、義父は笑顔で手を振りながら扉を閉める。

「お父さん、あの人に甘くしないでいいですよ」

セレネはトランクを車に詰め込みながら言った。

「居候なんですから」

「でも、セレネの友だちだろ？　それに、よく家事をしてくれるんだ。彼女、あ
あ見えて、意外とマメなんだよ」

義父は微笑みながら車に乗り込む。セレネも助手席に乗り込んだが、どうにも腑
に落ちない。けばけばしいマスゴミ女が家事をしている様子なんて、全く思い浮か
ばなかった。いや、一応、セレネが夏休みで帰ってきている間は、こまめに掃除や
食事の支度をやっていたが、主人がいない間もやっているとは思えない。もしかし
たら、リータは義父に錯乱呪文をかけているのではないだろうか？

念のため、服従の縛りを多くしておいた方がいいかもしれない。

「でも、セレネとまたクリスマスまで会えないなんて、寂しいよ」

義父はハンドルを回しながら話しかけてきた。

「セレネは今年のクリスマス、どこに行きたい？　去年は日本だったよね？」

「そうですね……フランスに行きたいかもしれません」

フランスにまで、ヴォルデモートの手は及んでいない。

いざとなったら、ニコラス・フラメルの家へ逃げ込めば、安全を確保することが
できる。

「フランスか……いいね、ノートルダム大聖堂とか行ってみたいな」

「モンサンミッシェルとかもいいですよね」

セレネは父に合わせ、フランスの名所をいくつか挙げる。

「いつか、本場でワインも飲んでみたいです」

「そういえば、セレネは11月で17歳か。魔法使いの成人年齢なんだよね？」

「浮かれてはいられませんよ。今年は、義務教育修了試験がありますから」

セレネは苦笑いを浮かべた。

義務教育修了試験はマグルのO.W.L.試験だ。義父のためにもマグル界で働くことも念頭に入れている以上、絶対にパスしたい試験である。いくら魔法使いの成人年齢になるとはいえ、浮かれてはいられない。

「それでも、ちゃんと成人のお祝いをしないとね。誕生日のパーティーはクリスマス休暇で帰って来てからやるとして、成人のプレゼントは何が欲しい？」

「おおげさですよ、お父さん」

セレネは恥ずかしそうに頬を赤らめると、少し身を縮めた。

「その、こっちでの成人は来年ですから」

「ははは、確かにそうだね。じゃあ、来年に鍵型のネックレスをプレゼントするよ」
義父は楽しそうに笑った。

魔法界ではどうか知らないが、イギリスのマグルは成人——すなわち18歳の誕生日を迎えると、親から鍵型のカードやアクセサリーが贈られる。鍵には「これから、門限はない。いつ帰ってきてもいいし、どこへ行ってもいい。あなたの人生だ」という意味合いが込められているらしい。

「セレネには、あまり派手なアクセサリーは似合わないね。シンプルなものをおダーするとして……」

「だから、今から考えなくていいですよ。来年の話ですから」

「ごめんね。でもさ、嬉しくて。あんなに小っちゃかったセレネが、もうすぐ成人だなんて……本当、メアリーにも見せてやりたかったよ」

義父の顔に悲し気な影が、一瞬横切った。

セレネも少し顔を俯かせる。

メアリー・スタインはセレネが成人しても、きっと喜ばない。実の子ではないし、せいぜい貴重なサンプルデータ程度にしか思わないだろう。だが、そのような

こと、義父に言えるわけがなかった。

「いつか、成人して、就職して、結婚して……はあ、嫌だな。いつか、セレネが見知らぬ男のところに嫁ぐ日が来るなんて」

義父は大げさに項垂れてみせる。セレネは少し話題が逸れたことに安堵しながら、これまた大げさに肩を落としてみせた。

「私、簡単に嫁ぎませんからご安心を。第一、私を彼女にしたいなんて、そんな稀有なことを考える人は……そうそういませんよ」

「いやいや、セレネ。君は可愛いんだから、もっと用心しないと！ 何度も言っているけど、男は狼だから気をつけないといけないんだぞ!? きつと、すぐ近くに、セレネを狙っている奴が潜んでいても不思議じゃないんだ！」

「だから、大丈夫ですよ。お父さんは気にしすぎです。」

それに結婚なんて、ずっと未来の話ですよ」

セレネは呆れたような口調で断言した。

いずれ、義父には孫の顔を見せたいと思っているが、いまはそのようなこと考えられない。そもそも、ヴォルデモートを処理して、平和な世の中になってからでな

いと、彼氏を作ることすら考えられそうになかった。

「……そう、ずっと先のことです」

セレネはそう言いながら、窓の外に目を向けた。

空を見上げて、青空なんて欠片も視えない。どこまでも濃い霧が頭上を支配している。それは、ロンドンに入ってからも続いていた。

キングズ・クロス駅に着くと、セレネは9と4分の3番線を目指した。

ちらほら、フクロウをカートに乗せた一家とすれ違う。マグルの服装に身を包んでいる者もいれば、派手なローブに身を包んでいる一家も見かけた。

だが、どの一家もセレネたちとすれ違ったとき、ひそひそと額を寄せ合っていた。興味深そうにこちらを見てくる。中には、うっとりとした憧れを越した視線を送ってくる者もいた。

「……セレネ、どうしたんだい？ 君は学校で何かしたのかな？」

これには、義父も異変に気づいたらしい。

目付きが陰しくなり、セレネを庇うように歩き始める。セレネは明後日の方向を見ながら、渋々答えることにした。

「えっと、おそらくですけど、昨年度の末に悪い魔女を倒しまして、そのことが新聞に載ったのです」

ヴォルデモートの片腕 ベラトリックス・レストレンジを倒した少女。

記事としては、ヴォルデモート復活のことやハリー・ポッターが「選ばれし者」などという眉唾物の噂の方が大きく取り上げられていたが、セレネのことも「ベラトリックスを打ち破った勇敢な少女」として、それなりに派手に取り上げられていた。

「セレネ、悪い魔女を倒したなんて……君はなんて危ないことを!!」

もちろん、義父に行動が褒められるわけではない。

案の定、悪い魔女に立ち向かうなんて危ないことをしてはいけません、というお説教が始まった。この説教はセレネたちが4分の3番線の壁を通り抜け、紅色のホグワーツ特急の前に付くまで続いた。

「セレネ! こっち、こっち!!」

ダフネ・グリーングラスが車窓から顔を出している。

セレネは一旦、義父と別れると、トランクを彼女のいるコンパートメントまで運

んだ。

コンパートメントには、ダフネの他に妹のアステリアやセオドル・ノットの姿があった。

「久しぶり、セレネ！ 元気だった？」

「ええ、おかげさまで。……ミリセントの姿が見当たりませんか？」

セレネが言うと、ダフネの顔色が少し曇った。

「うーん……それが、ちょっと色々あってね……」

「詳しい話は後だ」

ダフネが言葉を言い淀んでいると、セオドルが口を挟んできた。

「それより、お前は監督生だろ？ 先頭車両に行った方がいいんじゃないか？」

「そうですね。すみませんが、荷物をお願いします」

セレネはトランクを荷台に押し込むと、コンパートメントを出た。

監督生は先頭の特別車両に集まらなければならないのだ。だが、そこに行く前に、セレネは義父の元へいったん戻った。時計を見ると、発車時刻まで2分を切っている。汽笛がいつ鳴っても不思議ではない。

「セレネ、友だちと会えたかい？」

義父はセレネを見つけると、嬉しそうに微笑んだ。

セレネは義父のところに駆け寄り、彼の手が届く手前で足を止めた。周囲を見渡せば、別れのハグをしている家族が多い。見れば、義父も少し手を広げているように見える。けれど、自分は本当に彼の腕に飛び込んでいいのか。セレネは少し悩んでしまった。

義父は困ったように笑うと、一步、こちらに近寄って来る。

「セレネ」

義父は優しくセレネを抱きしめてくれた。

「気をつけてね。クリスマスには必ず帰って来るんだよ、待ってるから」

「……はい」

セレネが答えると、彼は優しく背中を叩いた。

ちょうどその時、汽笛が鳴った。ぱっと腕が離れ、セレネも汽車に飛び乗った。ドアを閉め、窓越しに義父を見つめる。

「いってきます、お父さん」

セレネが思いっきり手を振ると、義父も手を振り返してくれた。

汽車が速度を増し、角を曲がる。セレネは義父が見えなくなるまで、ずっと手を振っていた。

「さてと、行きますか」

セレネは特別車両に向けて歩き始める。

道中、じろじろとすれ違いざまに見てくる生徒が多くいたが、完全に無視することにした。特別車両に入ると、監督生は殆ど集まっているらしく、監督生の仕事の説明が始まっていた。

セレネはスリザリン生が多く集まっている場所に近づく、親衛隊の監督生たちが席を空けてくれた。セレネは彼らに軽く会釈をしながら腰を下ろし、ふと——もう一人の監督生、ドラコ・マルフォイの姿がないことに気づいた。

マルフォイの姿が見えないなんて、これは珍しい。権力を振りかざすことが好きな男子学生は、結局——解散の時間になるまで、一度も姿を見せなかった。

これは、どういうことなのだろう？

セレネは疑問を抱きながら、車両の見回りを始める。

「やあ、久しぶりだね」

セレネが監督生車両を出て、数歩歩き始めた直後だった。前から気取った声で話しかけられる。そこにいたのは、ハッフルパフのザカリアス・スミスだった。

正直、この男子学生のことにはあまり好きになれない。

DAで一緒だったが、それ以前に、クリスマスダンスパーティーに申し込まれた時の態度が最悪だった。あの時の悪印象をいまだに引きずっている。

「久しぶりですね。それでは、私は車両の見回りがありますので」

セレネは冷たく言うのと、立ち止まりもせずに歩き続けた。

「おいおい、待てよ。待てたら、セレネ」

ところが、ザカリアス・スミスは後ろから追いかけてくる。

「セレネはさ、ベラトリックス・レストレンジを倒したって本当なのか？ 例のあの人を間近で見たとか、他にも多くの死喰い人と戦ったとか？」

「すみません、いま私は監督生の仕事中ですので」

セレネは振り返らずに答える。

つまるところ、彼は単なる野次馬だ。新聞以上の情報が知りたいと、当事者から

聞き出そうとしているだけに過ぎない。正直、あまり彼と長く語り合いたくなかったし、一緒の空間にいたくなかった。だから、無視こそしていなかったが、歩みは止めることなく、最低限の発言だけを返すことにする。

「なあ、いいだろ？　僕たちは友達じゃないか」

「友達になった覚えはありません」

「DAの仲間だろ？　なあ、神秘部で何があったんだよ？　魔法省にどうやって侵入したんだ？　おい、僕の方を見ろよ、見ろったら!!」

『アクシオ―眼鏡よ来い』!!」

ザカリアス・スミスは杖を取り出すと、呼び寄せ呪文を唱えた。

セレネの魔眼殺しが空に浮き、スミスの手の中に収まる。そこで、セレネはようやく足を止めた。振り返ると、スミスが得意そうな顔をしている。

「ほら、どうだ！　眼鏡を返してほしかったら、話を……」

しかしながら、スミスの得意げな表情はセレネの顔を見ると氷のように固まった。

「な、なんだよ、その眼！」

「眼鏡、返してくれます？」

セレネが声に威圧感を込めながら、スミスの右手にある眼鏡を指差した。

スミスは震えあがると、なにやら口ごもりながらセレネに眼鏡を押し付け、逃げ去っていった。

「まったく……」

セレネは眼鏡を軽く拭くと、再び眼鏡をかける。

スミスのせいで、何の心づもりもなく魔眼を通した世界——すなわち、死の線で溢れている世界を見てしまった。きっと、振り返った時、スミスが見た自分の表情は、かなり険しい物だったに違いない。

そんなことを考えていると、ふと——誰かが自分に視線を向けていることに気づいた。

セレネが視線の方へ目を向けると、そこには小太りの老人が立っていた。てかてかとした禿げ頭と銀色の口髭が特徴的で、服のボタン一つ一つが金色で輝いている。

「君……いやはや、驚いた。もしかして、その眼鏡は魔眼殺しかい？」

老人は感心したようにセレネを見つめてきた。

「ええ、まあ」

「驚いたわい。ちなみに、どのような魔眼を持っているのか教えてもらえないか？千里眼か？それとも、魅了の魔眼……はないな。あの少年の態度からして、それはない。ならば、感情視の魔眼か、それとも、遷延の魔眼か？」

老人はセレネを観察するかのように、のっそり、のっそりと近寄って来る。セレネは警戒心を強め、眼鏡越しに軽く睨んだ。

この車内で大人を見かけたことは、車掌と車内販売の魔女、その他は新任教師だったリーマス・ルーピンしかない。つまり、この老人こそ「闇の魔術に対する防衛術」の新しい教師になるのだが、この学科の教師は変わり者が多い。むしろ、変わり者しかない。

1年生の時は、後頭部にヴォルデモートを寄生させた男。

2年生の時は、ナルシストの詐欺師。

3年生の時は、唯一の人格者だが狼人間。

4年生の時は、狂った最高峰の元闇払い……の変装をした死喰い人。

そして、5年生の時は、魔法省のガマガエルだ。

このセイウチのような老人も、どこか変わり癖があるに違いない。

セレネが身体を強張らせていると、老人はおかしそうにくすくすと笑った。

「そう警戒するな、怪しい者ではないよ。まあ、魔眼が狙われていると警戒するの
も無理はない。魔眼殺しを必要とするとなれば、さぞ珍しく強力な魔眼なのだろう
からな」

老人はそう言うと、セレネに右手を伸ばしてきた。

ビロードに覆われた腹をせり出しながら、嬉しそうに微笑んでいる。

「私はホラス・スラグホーン。この度、復帰することになった魔法薬学の教師だよ。
君さえ良ければ、私の開催する昼食会に参加してもらえれば、大変嬉しいのだが
——どうかね？」

R・A・Bの正体とか、初見で分かった人がいたのでしょうか。

私は絶対にバグマンだと思っていました。4巻で死喰い人の裁判にかけられていましたし、博打に金を費やしているのではなく、分霊箱の偽物を買うために金を集めていたのだと思っていました。

……まあ、当時中学生の私は、完全に筋違いの解釈をしていたわけですが。

74 話 ホラス・スラグホーン

「魔法薬学？」

セレネは、訝し気に聞き返してしまった。

魔法薬学といえば、スリザリン寮の寮監 セブルス・スネイプが教えていた科目である。

不死鳥の騎士団員であり元死喰い人と言う立場もあり、いろいろと複雑な立場もあるだろうが、日刊預言者新聞を読む限り、彼が死んだとか行方不明になったという記事は掲載されていない。

では、彼はどうなってしまったのだろうか？

セレネが少し悩んでいると、スラグホーンはくすくすと笑った。

「ああ、セブルスのことを気にしているのだね？ いや、なに心配は無用だ。

彼は『闇の魔術に対する防衛術』の教授に着任した。彼も私の教え子でね、眼をかけていた生徒の一人だよ」

「そう、ですか。安心しました」

セレネは安堵した様子を見せる。そして、ゆっくりと口元に微笑を浮かべた。

「お誘い、ありがとうございます。ただ、まだ見回りがありますので、その後にお伺いしますね」

断ることはできなかった。

むしろ、断る理由が見当たらない。

ダフネたちと昼食をとることができないのは残念だが、魔眼のせいで教授から目を付けられてしまっている。誘いを断って、悪感情を抱かれたり、逆に余計な興味を抱かれても困る。

6年生の学校生活に余計な波風を立てぬためにも、ここは誘いに乗るしかなかった。

「それは何よりだ。ところで、名前を聞いてもいいかね？」

「セレネ・ゴーストです、先生」

「ああ！ 君がああ『ベラトリックス・レストレンジ』を倒した生徒か！ それにしても、ゴースト……もしや、聖28族の——……いや、あの家は廃れたはず……」

「あー……実は、父親のことは詳しく知りません。物心ついた頃から、マグルの義

父の下で育ちましたから」

まさか父親は、マールヴォロの骨から創り出されたホムンクルスだと口が裂けても言えない。

しかし、まかり間違つて、ヴォルデモートと血縁関係があると思われるのも癪だ。もちろん、ゴイント家とヴォルデモートとの繋がりを知っている者は少ないだろうが、念のためである。

セレネは恥ずかしそうに頬を掻きながら、そつと言葉を続けた。

「ですが、母は魔女です。メアリー・スタインという名前です——」

「ほっほう！ スタイン家の御令嬢か！」

スラグホーンは愉快そうに微笑みながら、口ひげを擦った。

「かの錬金術師、ヴィクター・フランケンシュタインの末裔ではないか！ 歓迎するよ、セレネ。では、昼食の席で会おう」

スラグホーンは、大変満足そうな顔をして去っていった。

そのでっぷりとした後姿を微笑みながら見送り、彼の姿が後ろの車両へと完全に消えたとき、顔から微笑みを消した。

「……さてと、どういふことかしら」

セレネは車両の見回りを続けながら、少し考え込む。

『闇の魔術に対する防衛術』の教師は変わり者が多いが、それ以上に呪われた教科とも噂されている。

この教科の教授は、一年より長く続かないのだ。死、記憶喪失、秘密の暴露——多種多様な理由で辞職している。無論、スネイプは長年「闇の魔術に対する防衛術」の職を希望していたという話は聞いていたが、彼とてこの呪いについて無知な訳あるまい。

では、何故、このタイミングで彼は防衛術の教授に就任したのだろうか。

ダンブルドアの意図はどこにあるのか。

スネイプに対する「辞職しろ」という通告なのだろうか。

結局、考えはまとまらなかった。

車両の見回りを終え、コンパートメントに戻る。

スラグホーンの昼食会に招待されたことを話すと、ダフネとアステリアは少し寂

しそうな顔をしていた。セオドールは不機嫌そうな顔で頼杖をついたまま、何も言わなかった。

セレネは三人に向けて

「なるべく、すぐに戻ります」

とだけ言うと、スラグホーンのコンパートメントに向かった。

昼時が近いこともあり、先程よりも多くの生徒がランチカートを待つために通路に出ていた。多くの生徒がセレネをよく見ようと、すれ違いざまにじろじろ視線を向けてくる。

セレネは沸々と沸き上がって来る苛立ちを隠しながら、静かにコンパートメントの扉を叩いた。

「おお、セレネ。来てくれたか」

スラグホーンが立ち上がった。

ビロードで覆われた腹が、コンパートメントの空間を全て埋め尽くしているように見える。

「よく来てくれた。さあ、ブレイズの隣に。彼は知っているかね？」

「ええ、まあ」

セレネはそう言うのと、背が高い黒人の少年の横に腰を下ろした。

いま、このコンパートメントにいるのは、セレネとブレース・ザビニ、そして、ジニー・ウィーズリーだ。ザビニが悠然と腰を下ろしているのに対し、ジニーは居心地悪そうに縮こまっていた。

「まあ、とは酷いな」

セレネがジニーの方を見てみると、ザビニが気取った感じで口を開いた。彼は身振りを付けながら、大げさに項垂れてみせる。

「6年間、同じ寮じゃないか」

「ほほう、つまりセレネ。君もスリザリンなのだね？」

スラグホーンの眼が光った。

彼は口ひげを擦りながら、実に嬉しそうに話し始める。

「いやなに、私は昔、スリザリンの寮監だったのだよ。鼻肩するわけではないが、スリザリンのOBには知り合いが多くてね。そうだな、たとえば、ロジエールやノットにエイブリー……そうだ、ノットという名に聞き覚えはないかね？ 聖28族の

一家だよ。私の教え子でも互いのクリスマスパーティーに招待するほどの仲だったのだが、最近はとんと連絡がなくてね。彼の息子が、ホグワーツに在籍していると思うのだが……」

「ああ、セオドールの父親ですか。確か先日、魔法省で逮捕されましたよ」

ザビニが答えると、スラグホーンの顔から笑みが拭い取られた。途端、スラグホーンはばつの悪そうな顔になり、視線をザビニから逸らす。

「う、うむ。そうか。まあ、そういうこともあるだろう。まあ、他にも卒業生に知っている人はたくさんいてね——」

「ザビニ、意地が悪いですよ」

セレネは気が付くと、スラグホーンの言葉を遮り、ザビニを軽く睨んでいた。

彼の軽薄な発言のせいで、スラグホーンの顔色が変わったのは明白だ。そもそもヴォルデモートが暴れまわっているこの時世、スラグホーンはダンブルドアの下で働くことを決めた——その時点で、ヴォルデモートや死喰い人に忌避感を持っていることは確実である。

セレネも死喰い人に対して悪感情しか持てないが、だからといって、その血縁者

まで死喰い人と同類ではない。

ましてや、今話題に上がっていたのは自分の右腕である。セレネとしては、右腕に悪印象を抱かれる瞬間を見過ごせなかった。

「父親はともかく、彼自身は死喰い人と関わりがありません。

むしろ、魔法省の一件では肩を並べて、命がけで戦いました」

「なんと、セレネ。詳しく教えてくれないかね？」

スラグホーンの表情に少しだけ驚きの色が奔った。好奇心を隠せない視線に少し嫌気がさしたが、ここは長年被り慣れた笑顔を張り付ける。

「ええ。セオドールは、迫りくる死喰い人をつかんでは投げ、つかんでは投げ、近づく敵は片っ端から失神させ、敵の中に飛び込むと、迷うことなく爆発呪文を放つ活躍を見せました。

ベラトリックス・レストレンジを倒せたのも、そのおかげです。

それから、私にアバダケダブラが当たりそうになったとき、助けてくれました」セレネは、スラグホーンの眼をまっすぐ見つめて言い切った。

最後のところ以外は真っ赤な嘘であるが、せっかくの機会だ。事実を多少着色

し、彼に花を持たせておこう。

序盤戦、セオドールの活躍はセレネ以外見ていないし、たとえ本人が「事実ではない」と否定したところで、スラグホーンからは「謙遜している」と勘違いされるはずだ。

それに、この噂が上手く広まれば、自分に向けられている過剰なほどの好奇心溢れる視線が彼へと逸れることになる。そうすれば、さしたる理念や覚悟もなく、他寮から軽々しく親衛隊へ入隊する者も減るだろう。

「いやはや、知らなかった！ それは、本当かね？」

「本当です。すごく本当です」

スラグホーンは、すっかり感心しきった顔をしている。

ジニーからは疑いの眼差しを、ザビニからは何やら含み笑いを向けられているが、セレネは気にしないことにした。

「そうか！ そうなのか！ それならば、彼も——」

「失礼します、スラグホーン教授」

スラグホーンが何か言いかけたとき、コンパートメントの扉が開いた。

がたいのいいグリフィンドールの七年生と、その陰に隠れるように、神経質そうなレイブンクロー生が立っていた。

「招待にあずかりました、コーマック・マクラーゲンです。ちょうど、マーカス・ベルビィと会ったので、一緒に来ました」

マクラーゲンがやけに丁寧な礼をし、ベルビィが無理やり微笑みを浮かべる。

「ああ、君たちか！ さあ入りなさい」

スラグホーンは新たな客人を歓迎する。

それからしばらくは、スラグホーンの関心がマクラーゲン達に逸れた。セレネの記憶が正しければ、マクラーゲンもベルビィもミリセント・ブルストロードが付き合おうとしていた人物である。もっとも二人とも、紆余曲折あり、実際に付き合うことにはならなかったわけだが、彼女が目をつけたからには、それなりの家柄出身だ。

事実、スラグホーンの話によると、マクラーゲンは政府高官と付き合いがあり、ベルビィの叔父は魔法薬の開発に貢献したらしい。

「ほっほう、マクラーゲン。君はルーファスとも知り合いなのか！」

「はい。もちろん、あの人が大臣になる前でしたが、一緒にノグテイル狩りに出かけました」

スラグホーンとマクラーゲンが楽し気に会話をしている様子を、セレネは冷やかに観察する。

どうやら、ここに招かれた客人は、有名人か有力者とのつながりがある人物らしい——自分とジニーを除いて、全員がそうである。

その推測を裏付けするように、ハリーとネビルが来室した。

ネビルは聖28族のロングボトム家出身で、しかも両親ともに優秀な闇払いだった。

当然、ハリーはこの中でも飛びぬけて有名人だ。魔法世界において、彼のことを知らない者など存在しない。

「そうか、そうか。君は、クイディッチにも興味があるんだね。ああ、ハリーとジニーもそうか。では、君たちはグウェノグ・ジョーンズを知っているかい？ ホリヘッド・ハーピーズのキャプテンだよ。彼女は私が頼まなくても、特別席のチケットを無料でくれる。それから——……」

いつの間にか、スラグホーンは過去の生徒に関する自慢話を語り始めた。

セレネは真剣に耳を傾けているふりをしながら、自分の推測を確信に深めていく。つまるところ、この老教授は人材の蒐集家だ。

こうやって生徒を——それも、自分で選んだお気に入り of 生徒を集め、囲うことに快適さを求めているのだろう。彼らが巣立つ時に有力な人脈を紹介し、成功した暁には報酬を——例えば、彼の好物や欲するもの、役職を推薦する機会などを送る。そのの繰り返しだ。

ギブ&テイクの関係だと割り切ればいいのかもしれない。

しかしながら、はたして教師として利益を期待するのはどうなのだろうか。

スラグホーンは、自分の教えた著名な魔法使いたちの逸話を語り続ける。

彼の教え子たちは、全員が喜んでスラグホーン主催の「スラグ・クラブ」に属したらしい。新教授の性格をだいたい見極めることができたので、セレネはその場を離れたくなってきたが、なかなか失礼にならずに出る方法が思いつかない。その間

にも列車が何度目かの長い霧の中を通り過ぎ、真つ赤な西日が見え始めた頃、スラグホーンはやっと薄明りの中で瞬きをし、周囲を見渡した。

「なんと、もう暗くなってきた！ ランプが灯ったのに気付かなかった！ みんな、もう帰って制服に着替えた方がいい。コーマック、そのうちノグテイルに関する本を借りに来なさい。ハリー、ブレーズ、セレネ、いつでもおいで。ミス、あなたもどうぞ」

スラグホーンはジニーに向かって、にこやかに目をきらめかせる。

「さあ、お帰り、お帰り」

セレネは暗い通路に出た。すっかり人通りはなく、天井のランプが汽車に合わせるように揺れていた。

「そうだ、セレネ。ちょっと話したいことがあるんだ」

セレネがコンパートメントに戻ろうとしたとき、ハリーが肩を軽く叩いてきた。

先学期末、彼はヴォルデモートに身体の主導権を奪われ、セレネに攻撃をしたことがある。もちろん、回復後に謝ってくれたのだが、負い目があったのだろう。廊下ですれ違って、話しかけてこなかった。

そんな彼が、どこか切羽詰まった表情で自分を見てくる。

「ハリー、どうしたのですか？」

「あのさ、セレネはマルフォイがどこにいるか知ってる？」

「いえ、知りませんけど……マルフォイを探しているのですか？」

ハリーが小声で尋ねてきたので、セレネも囁き返す。

「うん、実はマルフォイの奴が死喰い人になったんだ。それで……ッ、詳しくは学校で話すから、また必要の部屋で会おう！」

ハリーはザビニの後頭部を睨みつけると、セレネが止める間もなく追いかけte行ってしまった。

「マルフォイが死喰い人？」

セレネは腕を組みながら、自分のコンパートメントへ歩き始めた。

ハリーは断言していたが、ヴォルデモートが16歳の少年を死喰い人にさせるだろうか。闇の魔術に傾倒していて実力も抜群にあるならともかく、マルフォイといえど平均より少しできる程度で、プライドは人一倍高く、少し臆病な気質のある少年だ。決闘したら、セレネはもちろん、親衛隊幹部なら楽に倒すことができるに違

いない。

普通に考えれば、死喰い人に迎え入れるわけではない。

だがしかし、ハリーは随分と言い切っていた。

きつと、確証があるのだろう。ならば、セレネとしてもマルフォイの動きを注意する必要がある。彼の父は逮捕され、アズカバンにいるのだ。マルフォイが死喰い人になっていなくても、心が荒れて突拍子もない行動に出る可能性もある。

「はあ……やることは多いわ」

セレネは軽く伸びをすると、コンパートメントの扉を開いた。

セオドールは既に着替えていたが、ダフネとアステリアは着替えを待っていてくれたらしい。

「おかえり、セレネ。どうだった、スラグホーン先生は？」

「有名人や有力者と繋がろうとしているみたいでした」

セレネはセオドールの隣に腰を下ろすと、やっと肩の力を抜いた。

「ずっと教え子の自慢話です。正直、食事も喉を通りませんでした。夕食の宴が楽しみです。」

ところで……」

セレネはもう一度、コンパートメントを見渡した。

むすっとした表情で文庫本を読んでいるセオドル、昼食会の様子を聞きたそうにうずうずしているグリーングラス姉妹……このコンパートメントには、やはり三人しかない。

「ミリセントはどうしたのです？　もしかして、ザビニやマルフォイのところですか？」

「あー……うん。実は彼女、今年は学校に来ないの」

セレネが不思議そうに尋ねると、ダフネは寂しそうに言った。

「来ない？　何故です？」

ミリセント・ブルストロードは確かに成績が良いとは言えない。かといって、OWL試験全科目落第するほど馬鹿ではない。少なくとも、セレネは彼女にも試験対策クラブで「闇の魔術に対する防衛術」の基礎基本は叩き込み、OWL試験で最高——とまでは言えないが、余裕を持ってパスできるレベルにまで育て上げたはずだ。せめて、その一科目でも合格できているはずである。

「うーんとね、彼女の御両親がホグワーツに戻させたくないって言っているらしいの。家から一步も出させてくれないんだって」

「まさか！ ホグワーツは家より安全ですよ？ 安全対策だって追加されたと聞きますし、ダンブルドアだっています」

「そのダンブルドアは、かなりの年齢だろ」

セレネが反論すると、セオドールが音を立てながら本を閉じた。

「いつぽっくり逝ったって、おかしくない」

「ダンブルドアは、まだまだ若いですよ」

セレネは、老人時代のグリンデルバルドを脳裏に思い浮かべながら言った。

「若いつて何歳だよ？」

「そうですね……200歳くらいですか？」

セレネが冗談っぽく言うと、セオドールは軽く笑いながら席を立った。

「お前たち、さっさと着替えろよ。もうじき、駅に到着するぜ」

セオドールの言う通り、汽車は十分も経たないうちに速度を落とす、懐かしのホグズミード駅に到着した。

ロンドン中どこかイギリスの大部分を覆いつくしていた霧も、ホグワーツ周辺にはまったく感じられなかった。吸魂鬼が入ってこれないように、安全対策の保護魔法を施しているのかもしれない。

そこから先は、例年通りつつがなく進んだ。

セストラルが引く馬車も、板石が敷き詰められた広大な玄関ホールも、夜空を模した天井が広がる大広間も、すべていつも通りだ。セレネはいつもの席に座った時、「ああ、帰ってきた」と感慨に浸る。

「お久しぶりです、ゴーント様」

親衛隊幹部のウルクハートが話しかけてきた。

彼の胸元には、真新しいバッジが輝いている。

「クイディッチのキャプテンに選ばれたのですね、おめでとうございます」

「あ、ありがとうございます！ 今年こそ、スリザリンを優勝に導けるよう、粉砕身の覚悟で挑みたいと思います！」

ウルクハートはびしっと背筋を伸ばし敬礼する。

ここ数年、クイディッチのチームの入れ替えも激しい。セレネが入学当初は純血至上主義者の集まりだったが、今では大多数を親衛隊のメンバーが占めている。得点王のベイジーなんて、ウルクハートと同じく親衛隊の幹部だ。

「無茶しない程度にお願いしますね」

「はいっ！ ちなみに、今年は新しいチェイサー1人、ビーター2人、そして、シーカーを募集しています。ゴント様も挑戦されてみてはいかがですか？」

「いや、私は遠慮……シーカー？」

セレネは眉間に皺を寄せる。

「シーカーはマルフォイでは？」

2年生の時、マルフォイが最新鋭の箒をチーム人数分寄付する代わりに、自分をシーカーにさせたという話は有名だ。セレネの記憶が正しければ、ビーターはマルフォイの腰巾着のクラッブとゴイルだったはずである。

マルフォイはわざわざ高価な箒を貢いでまで、シーカーになりたいと願ったはずだった。それなのに、なぜクイディッチのシーカーを降りてしまうのだろうか。

「見たところ……彼は怪我などしてないようですし」

「そこは、オレも不思議なんですよね」

ウルクハートも首をひねりながら言った。

「ホグワーツ特急でマルフォイに会ったとき、『今年こそ優勝杯を手に入れるから、明日の早朝から訓練を始めるぞ』と言ったのですが、あいつは『僕には、優勝杯を取るより大切な役目があるんでね。参加しないでおくよ。まあ、僕は練習に参加しなくても、試合当日はいいプレイをしてみせるから安心しろ』と、小馬鹿にしたように笑いながら言ったんですよ。本当、むかつきますよね!!」

あんな態度の奴、試合当日も無断欠席します！

だから、今年度は年功序列や派閥やチーム歴を問わず、公平に実力のあるメンバーを決めたいと思ひまして、オレとベイジー以外のメンバーを新たに選抜し直そうと考えたのです」

「そう、ですか」

セレネもマルフォイに視線を向けた。

すっかり数を減らした純血派の生徒たちの中央で、なにやら鼻に関わるパフォーマンスをしている。パンジーからはうっとりとした視線を向けられ、まさにご満悦

な様子だ。

「……私、クイディッチについては詳しくないのですが、マルフォイの実力はどの程度なのですか？」

ウルクハートにこっそり尋ねると、彼はいい顔をしなかった。

「中の下、といったところですね。」

グリフィンドールのポッターにはもちろん、レイブンクローのチャンの足元にも及びません。ハッフルパフの新シーカーが誰になるのか分かりませんが……マルフォイより下はないでしょう」

「つまり、シーカーから落とされるかもしれない事態、ということですか」

セレネは楽しそうなマルフォイを見続ける。

クイディッチ生命の危機的状況だというのに、彼は気にも留めていない。それは、いったいどうしてなのだろうか。

まさか、ハリーが言っていた通り、本当に死喰い人になり、ヴォルデモートから「大いなる使命」を与えられ、はしゃいでいるのだろうか。

「……いや、それはないか」

「ゴースト様？」

「選抜、私も見に行くわ。スリザリンが優勝するため、技量のある人を選びなさい」
セレネはそう言うのと、好物の大鍋ケーキに齧り付いた。

ちょうどその時、教職員テーブルのダンブルドアが立ち上がった。大広間に響いていた話声や笑い声が、あっという間に消えた。

「すばらしい夜じゃ!!」

ダンブルドアがニッコリ笑い、大広間の全員を抱きしめるかのように両手を広げた。

「ねえ、セレネ。あの手……!」

ダフネが息をのんだ。

セレネも目を見開いた。ダンブルドアの右手は、死んだように黒い手だった。囁き声が広間中を駆け巡った。ダンブルドアはその反応を正確に受け止めたが、単に微笑んだだけで、詳しい説明もなしに紫色の袖を振り下ろして傷を覆った。

「さて、新入生よ。歓迎いたしますぞ。上級生はお帰りなさいじゃ。今年もまた、魔法教育がびっしり皆を待ち受けておる——……」

「どうしたのかしら、あの手？」

ダフネが不安そうに囁いてくる。

セレネも小さく頷いた。

「夏休みは、ああではありませんでした」

「えっ、セレネ。夏休みに会ったの？ ダンブルドアと？」

「ロンドンでハンバーガーを食べていたら、相席することになりました」

セレネはダフネの問いに答えながら、黒くなった右手の理由を考える。

魔法事故の傷なのか、それとも、なにかの呪いか——……

「……まさか、あの指輪が……？」

セレネはそこまで考えたとき、あの金の指輪が脳裏に横切る。

あれには、まだ幾重にも呪いが掛けられていた。もしかして、あの指輪の呪いのせいだろうか。いささか考えが飛躍しすぎかもしれないが、時期的には合っている。

「指輪？」

「……何でもありません。きつと思ひ過ぎです」

セレネは首を横に振る。

自分はしっかり「これには呪いがかかっている」と説明した。ダンブルドアも承知で指輪を受け取ったはずだ。何も対策しないで嵌めるなど、愚かな行為をするはずがない。

ところで、あの指輪はいつ返してもらえるのだろうか。

※

結局のところ、ダンブルドアは、右手に関して何も語らなかった。

何事もなかったかのように歓迎会は終わり、次の日になった。

6年生からは、将来にかかわる科目だけ続けることができる。

セレネは「天文学」と「魔法生物飼育学」以外の科目を続けることに決めた。魔法生物飼育学辺りは続けてもいいかと思ったが、教師はあのハグリッドだ。人としては好人だが、正直、尻尾爆発スクリュートを育てる授業はこりごりである。

「魔法生物飼育学は、続ける人がいなそうだよね」

ダフネがセレネの時間割を覗き込むと、疲れ切った声で言った。

「もふもふな魔法生物と触れ合えるなら、まだ続けてもいいけど……うん、たぶんなさそうだし」

「そうですよね……」

セレネも乾いた笑いを浮かべた。

下手したら、罪悪感の欠片もない笑顔で「一大プロジェクトだ！ 巨人の弟に靴紐の結びせ方を教えるぞ!!」とか言い出しそうである。

セレネたちは歩きながら、今年最初の授業——魔法薬学の教室に向かった。

教室の前に進んで見回すと、この学科を履修できる生徒はわずか13人しかいなかった。クラブとгойルが合格点を取れなかったのは確実として、スリザリンはセレネを含めて5人、レイブンクローからは4人、グリフィンドールはハリーたち3人組、そして、ハッフルパフはアーニー・マクミランただ一人だけだった。

「やあやあ、そろったね。どうぞ、入りなさい」

スラグホーンが腹を先にして教室から出てきた。

生徒たちが列をなして教室に入るのを迎え入れながら、スラグホーンはニッコリと笑い、巨大なセイウチ髭もそのうえでニッコリの形になっていた。そのうえで、彼はセレネとハリー、ザビニ、そして、セオドールに対しては特別に熱い挨拶をした。

「ほっほう、君がセオドールか。セレネから聞いているよ。魔法省の戦いでは、素晴らしい奮闘を見せたそうではないか！」

「い、いえ。オレは特に何も……」

「謙虚だね。実にいい。あとでたっぷり、話を聞かせておくれ」

スラグホーンから解放された彼が、なにやら文句を言いたそうな目を向けてくる。セレネは素知らぬ顔をすることにした。

それに、セレネは彼の恨みがましい視線より、地下牢の空気が変わったことに注意を奪われていた。

四つの大鍋がぐつぐつと煮えている。そのうち、金色の大鍋の傍を横切った時、いままで嗅いだ中でも最も蠱惑的な香りの一つを発散している。なぜか、その香りは大鍋ケーキや淹れたばかりの紅茶、図書館の匂いなどを同時に思い起こさせた。

香りを嗅いでいるだけで、自宅のリビングにいるような気持ち広がっていく。

「その鍋、いい香りだね」

ダフネが蕩けたような顔で囁いてきた。

「ミントやシトラスかな。なんだか、とっても素敵」

「ミント？」

セレネは一瞬、首を傾げたが、すぐに目の前の魔法薬の特性を理解した。

「さて、さて、さてーと！」

スラグホーンが鍋の前に立った。

「みんなに見せようと思って、いくつか魔法薬を煎じておいた。この学科を終えた後には、こういうものを煎じることができるようになっているはずだ。さて、まだ煎じたことがなくても、名前ぐらいは聞いたことがあるはずだ。これがなんだか、分かるものはおるかね？」

スラグホーンはセレネたちのテーブルに一番近い大鍋を出した。

単純に湯が沸いているように見える。セレネは内心笑いながら、すっと手を挙げた。これは調合してあるし、いまでもセレネの鞆の奥底に瓶が残っている。

セレネが挙手するのとほぼ同時に、ハーマイオニーの手が天を突く。

スラグホーンは少し迷ったようだが、セレネを指名した。

「真実薬です。無色無臭で飲んだ者に無理やり真実を吐かせます」

「うむ、大変よろしい。さて、それでは——これは、どうかね？」

次はわずかにハーマイオニーの方が早かった。

二番目の大鍋でゆっくりとぐつぐつ煮えている。泥のような液体が何であるのか、セレネには分かっていたし、きつとハリーたちも分かっていることだろう。ハーマイオニーは自信あふれる声で正解を口にする。

「はい、先生。ポリジューズ薬です。変身したい者の一部を入れて飲むことで、一定時間、変身することができます」

「よろしい、よろしい！ では、次の薬だが——おやおや！」

ハーマイオニーの手がまた天を突いたので、スラグホーンはちょっと面を喰らったような顔をした。

「魅惑万能薬です。世界一強力な愛の妙薬です。湯気が独特の螺旋を描いていますし、何に惹かれるかによって、一人一人、違った匂いがします。私には、刈ったば

かりの芝生や新しい羊皮紙や……」

しかし、ハーマイオニーはちょっと頬を染め、最後まで言わなかった。

「うむうむ。見事だ。」

さて、魅惑万能薬はもちろん、実際に愛を創り出すわけではない。愛を創ったり模倣したりすることは不可能だ。この薬は単に強烈な執着心、または強迫観念を引き起こす。この教室にある魔法薬の中では、おそらく一番危険で強力な薬だろう。

——ああ、そうだろうとも」

スラグホーンは、小ばかにしたようにせせら笑っているマルフォイとセオドールに向かって重々しく頷いた。

「わたしぐらい長い人生を見てくれば、妄執的な愛の恐ろしさを侮らないものだ。さて、最後の薬だが——……これが、なんだか、分かるかね？」

スラグホーンはハーマイオニーに笑いかける。

「幸運の液体です。人に幸運をもたらします!!」

最後の小さな黒い鍋は、楽し気にぴちゃぴちゃ跳ねていた。金を溶かしたような

色で、表面からトビウオが跳ねるように飛沫が撥ねているのに、一滴も零れていなかった。

「これを一滴飲めば、十二時間——何をやっても幸運にめぐまれる。

私も一度、飲んだことがあるが……ああ、あれは素晴らしい一日だった」

スラグホーンの顔がとろんと蕩ける。

たとえ、夢を見るように遠くを見つめる演技をしているにしても、効果は抜群だった。すべての眼が、馬鹿にしたようなマルフォイですら、スラグホーンに視線を集中させていた。

「さて、この小瓶を今回の授業の褒美として提供する。

『上級魔法薬』の十ページ。時間内に『生ける屍の水薬』を調合する。完璧に調合することは望んでいないが、一番よくできた者が、この愛すべきフェリックスを獲得する!! さあ、はじめ!!」

それぞれが大鍋を手元に引き寄せる音がして、はかりに錘を載せる音が聞こえる。誰も口を利かなかった。部屋中が固く集中する気配は、手で触れるかと思うほどであった。

セレネとしても、幸運の瓶は欲しい。

是が非でも欲しい。ヴォルデモートとの対決に挑む日に、義父が命を狙われたその時に、幸運を招き寄せる薬を飲むことができれば、ああそれはなんて良いことなのだろうか。

しかしながら、「生ける屍の水薬」はさすがに複雑かつ難しい魔法薬だった。

理想的な中間段階「滑らかなクロスグリの液体」にまでは煎じることができたのだが、その後のライラック色になかなかならない。催眠豆の汁が足りなかったのかもしれないが、いくら切っても萎びた豆から適量の汁が出てこない。

セレネはひたすら催眠豆を刻み続けた。そしてやっと、ライラック色になるまで催眠豆の汁を入れることができたとき、もう残り時間は5分と残されていなかった。

とはいえ、同じテーブルの他の生徒たちに比べたら、自分は出来ている方である。ダフネの大鍋は水薬ではなく、濃紺のスライムになっていたし、セオドルとザビニは焦げた石みたいになっていたし、マルフォイはタール状の物質になっていた。

まともな液体は、セレネだけであった。

スラグホーンの止めの合図があった後、セレネの水薬は結局——ライラック色のままで薄い水色にはなっていないかったが、かなり上位の成績になった自覚があった。上位争いの好敵手であるハーマイオニーの出来栄次第で、自分が幸運の小瓶を手に入れることができるかもしれない。

事実、スラグホーンはセレネの鍋を覗き込んだとき、よしよしと満足そうに頷いてくれた。

ところが、である。

「まぎれもない勝利者だ!!」

スラグホーンがハリーの鍋を覗き込んだときだ。

信じられないという喜びの表情が、スラグホーンの顔に広がった。

「すばらしい!! すばらしい!! 君は明らかに母親の才能を受け継いでいる!

彼女は魔法薬の名人だった。あのリリーは!! さあさあさあ、これを!! 約束の小瓶だよ。上手に使いなさい!!」

スラグホーンは紺色の液体が入った小瓶をハリーに手渡した。

セレネは啞然としてハリーを見つめた。

ハリーは魔法薬の授業に残れるだけの成績がある。

だが、それにしても、ハーマイオニーや自分より調合が上手かった試しがない。スネイプという意地悪い脅威が近くにあったとしても、ありえない話だ。

「ラッキーだったんだろ」

ハリーは周りの友だちに言っていたが、絶対にたんなる幸運で調合できるはずがない。

新たな教授、スラグホーン。

防衛術の教授に就任した、セブルス・スネイプ。

死喰い人のような不穏な行動をする、ドラコ・マルフォイ。

いきなり魔法薬の達人になり、自分やハーマイオニーを抜いたハリー・ポッター。

そして、ダンブルドアの死んだように黒い右手。

「新学期早々、事件の匂いか」

セレネはポケットに入れた偽物のロケットを握りしめながら、小さな声で呟いた。

「事件？」

ダフネが鞆を抱えながら、不思議そうに尋ねてくる。セレネは苦笑いを浮かべると、ふと——思い出したようにポケットからロケットを取り出した。

「いいえ、なんでも。……そういえば、ダフネ。このロケットに見覚えはありませんか？」

「ロケット？……ううん、ごめんね。私は分からないや」

ダフネはロケットを見ると、申し訳なさそうに首を横に振った。

かなり高価なロケットなので、純血の名家出身の彼女なら分かるかもしれないと思ったが、なかなかうまくいかないものだ。だいたい、こういう時こそ、純血の名家で宝飾関係に興味があるミリセント・ブルストロードの力が必要なのに、どうしても今年に限っていないのだろうか。

「そうですか」

とはいえ、いない者に怒りをぶつけても仕方あるまい。

セレネは肩を落とすと、再びロケットをポケットに沈めた。

「次、なんでしたっけ？」

「闇の魔術に対する防衛術だよ。スネイプ先生がどんな授業をするか、楽しみだね！」

「……そうですね」

セレネたちは他愛もない話に花を咲かせながら、次の授業へ足を進めるのだった。

「……あのロケットは……」

柱の陰から、何者かがロケットを凝視する。

その視線に、セレネはまだ気が付いていなかった。

愛は求める心、そして恋は夢見る心。

恋は現実の前に折れ、現実は愛の前に歪み、愛は恋の前では無力になる。

……CCC復刻イベント、終わらない……

キアラを期間内に倒せるか不安だし、それ以前にBB再臨素材が集めきれるか超心配。

せめて、あと一週間あれば……!!

75 話 秘宝

空を飛ぶことは、マグルにとって甘美でもあり、呪われた夢でもある。

飛行機は人々を世界各国、未知の場所へと連れ出す手段にもなったが、殺戮と破壊の道具にもなった。戦闘機の登場で戦は激変し、それなしの戦争など考えられなくなってしまうている。

では、魔法界はどうだろう？

「……なるほどね」

セレネは箒にまたがりながら、静かに考察を深めていく。

もちろん、自前の箒ではない。ウルクハートからの借りものだ。今日のスリザリン・クイディッチチーム選拔が始まる前に、少し借りているのである。セレネは箒の黒い柄を握りしめながら、すうっと競技場を一周した。

「……バランスはとれる。クッション魔法のおかげで、お尻も痛くない」

「ゴースト先輩っ！」

セレネが上空で浮かんでいると、下から誰かが上昇して来た。ウルクハートと同

じく親衛隊幹部であり、クイディッチチームの得点王 ベイジーである。

「どうです、箒の乗り心地は」

「まずまずといったところかしら」

バランスを取るのが少し難しいが、なかなか悪くない。

少し願っただけで箒は想いをくみ取り、その方向へ進む。だが、これも正確に念じなければ意味がない。速度、方向、そのすべてを頭と体に叩き込み、操縦する――。ある意味、ハンドルを握って、アクセルを踏めば動く自動車の運転の方が百倍楽そうだ。もっとも、あちらはあちらでアクセルの踏み具合など気をつける点は山ほどあるが。

「ねえ、ベイジー。ここからそうね……あれ、狙える？」

セレネは競技場の門戸を指さした。

「杖ですか？」

「壊さない程度に。そうね、あっちからそっちに飛びながら。どう、できる？」

「任せてくださいっ！」

ベイジーはセレネの命じた通り、右から左へと目にもとまらぬ速さで飛びながら、

門へ衝撃呪文を放つ。ベイジの杖から放出された魔法は門へと向かったように見えたが、途中で狙いがそれてしまったのだろう。門から少し離れた壁に激突し、飛散した。

「どこ狙ってんだよ、ベイジ」

下で観戦中のウルクハートが笑い声をあげる。ベイジは怒って何やら言いかけ、ウルクハートに呪文を放った。今度は止まった状態で放たれた魔法は、ウルクハートに向かってまっすぐ突き進む。彼が盾の魔法を展開しなければ、正面から呪いと激突していたことだろう。

「このーっ、やりやがったな！ この、『エクスペリアムス―武器よ去れ』！」
ウルクハートも負けじと魔法を放ってくるが、宙に向かって普通の魔法が届くわけがない。

「……まるで、戦闘機に銃で対抗するようなものね」

「せんとうき、とは？」

「いや、気にしないでください。ですが——……」

セレネも杖を取り出したが、飛びながら狙いを定めるのが難しい。

バランスの維持をしていたとしても、微妙に揺れている。足場が悪い岩場で魔法を使った方が、まだ命中率が高くなるだろう。これでさらに飛びながら的に当てるとなれば、もっと難易度が増すに違いない。

「まあ、箒で飛ぶということは理解できました」

セレネはふわりと降下すると、下草に足を付けた。

やはり、足が地面についていると落ち着く。そのまま、セレネは微笑を浮かべ、ウルクハートに箒を渡した。

「ウルクハート、ベイジー、協力ありがとう」

「い、いえ。ゴント先輩たつての頼みですから!!」

「でも、ゴント様の飛びっぷりも良かったですよ！ チームに入ってもらいたいくらいです」

「大袈裟よ。それでは、選抜。応援していますね」

セレネは敬礼する二人に手を振ると、クイディッチの観客席へ向かった。

競技場には、もうかなりの人数が集まっている。皆、自分の箒を手にして神経を統一させているように見えた。会場全体に、肌を刺すような緊張感が漂っている。

ただ、不思議なことに、その中にドラコ・マルフォイの姿は見当たらなかった。ぎりぎりに来るつもりなのだろうか、と考えながら歩いていると、その中に特別見知った顔があることに気づいた。

「ノーマン？ それに、アステリアも」

「せ、セレネ先輩っ!!」

「いつからそこにいらしたのですか？」

ノーマンとアステリアはびくりと震えあがる。

2人とも、よほど緊張しているのか、顔の表情はもちろん、肩も足も手もすべてがカチコチに固まっている。

「先輩も受けるのですか？」

「いや、私は観戦だけです。二人はどのポジションを受けるの？」

「わたしは、チェイサーです。ノーマンは……」

「えっとですね。そのお……シーカーを、希望してます」

ノーマンは恥ずかしそうに口にする。

セレネは、ほうつと片方の眉を上げた。シーカーは一番倍率が高い。クイディッ

チの詳しいルールを知らないが、花形であり、エースでないとできないことくらいは知っている。ある意味、非常に勇気のある決断だ。だが、小柄で小回りの利く彼は、図体ばかりでかい純血派のハーパーよりずっと合っているかもしれない。

セレネはすれ違いざま、2人の肩を軽く叩いた。

「ベストを尽くしなさい」

「は、はいっ!!」

「ぜ、全力で頑張ります!」

ノーマンもアステリアもは顔を輝かせると、それぞれの集合場所に向かって行った。

セレネはその後姿を見送ると、観客席に腰を下ろす。まだ時間にならないので、セレネは鞆から一冊の本を取り出した。分霊箱のありかを探すため、さまざまな魔法界における伝説級の宝物を探しているのだが、これもなかなかうまくいかない。すべてグリンデルバルドに放り投げればいいのかもしれないが、あの男にすべてを任せきりにするのは大変危険な気がするのだ。

「なに読んでるんだよ」

ページをめくっていると、横から少年の声が聞こえてきた

「聖剣伝説です。エクスカリバーのことを調べたくて」

セレネは本から顔を上げずに答えた。

「やはり、魔法界のエクスカリバーは興味深いですね。

手にした者は光の翼を纏って瞬間移動すら可能にし、一振りですら空間も切り裂くそうです。しかも、英国産の最高級海苔巻きをつかった帽子を被り、朝はコーヒーを

——……」

「違う、それは絶対に違う!!」

セレネの隣に座った少年——セオドールはそう叫んだ。

「絶対に偽書だ。エクスカリバーが帽子を被るわけない!」

「突っ込むところはそこですか」

セレネはぼんっと音を立てながら本を閉じた。

「まあ、私も読み始めて『これは違うな』って思いました」

無性に腹の底から「うざい」気持ち湧き上がって来る本であった。まるで退屈極まる五時間の朗読会に参加したような気分である。

きつと、もう二度と読み返すことはないだろう。

「で、どういふつもりなんだよ。聖剣を調べるなんて。マーリンにでもなるつもりか？」

「あら、アーサー王ではないのですね」

「お前は騎士王って柄じゃないだろ」

「確かに、その通りですね」

セレネは深く息を吐いた。

選抜は始まったのか、数人の生徒が箒にまたがり空を飛び始めていた。

「魔法界における価値のある宝物を調べているだけです。たいしたことではありませんよ」

「魔法界の宝、か……」

セオドールもスリザリン生たちが空を飛ぶ様子を眺めながら、小さく呟き返してきた。ちょうど、調子に乗ったグラハム・プリチャードがコメント260号で宙がえりをしようとし、競技場の柱に激突していた。

「エクスカリバーも宝だが、聖杯の方が宝物っぽくないか？」

あとは、メディアの金羊皮紙とか、ニワトコの杖とか、エメラルドの板とか……」セオドールが幾つかの宝物を例に挙げていく。セレネはそうした宝物を聞き流しながら、ヴォルデモートがいったいどのような秘宝を集めたのかに思いを馳せていった。

「お前、宝探しでもするつもりか？ 七つの財宝を探しに冒険の旅へ、つて？」
「別にトレジャーハンターになるつもりではありませんよ。……七つ？ なぜ、七つのですか？」

セレネは少し頭に引かかった。今まさにゴールを決める瞬間のアステリアから、隣に座る少年へ視線を移す。彼はたいして考えずに言ったのだろう。セレネが問うと、少し肩をすくめながら口を開いた。

「適当に言っただけだ。でも、七つてよく使われるだろ？ 七つの大罪とか、七大天使とか、第七の災いとか……それに、七は一番強い魔法数字だって、数占いで習ったじゃないか」

セオドールは取って付けたような説明をする。

セレネは少し考え込むように、人差し指を口元に添える。

「そうね、七は最も強い魔法数字……最も、強い……」

ふと、嫌な予感が脳裏を横切った。

セレネは勢いよく立ち上がると、観客席を駆け下りていた。

「お、おい！ どこに行くんだよ!？」

「ごめん、用事ができましたので、私はこれで!!」

セレネは城に向かって奔り出していた。

ノーマンやアステリアがクイディッチチームに入れるのか、少し気になったが、今はそれよりも大事なことがある。随分と飛躍した考えかもしれないし、誤った思考かもしれない。だが、確かめる価値だけはあると思った。

ホグワーツの城内に入ると、セレネは一旦、足を止めた。

ちょうど運が良いことに、マクゴナガルが歩いていたのだ。新品の本の束を抱えながら、廊下をいそいそと歩いている。

「先生、お手伝いします」

セレネは笑顔の仮面をかぶると、マクゴナガルに近づいた。

「ええ、ミス・ゴント。ありがとうございます」

マクゴナガルはセレネに本を渡してきた。

ずっしりと重たい本の表紙には「現代変身術 8 — 変身術の栄枯盛衰 —」と書かれている。

「面白そうな本ですね」

「軽い読書にと買った本です。先ほど届きましてね……あなたも読みますか？」
「ありがとうございます、嬉しいです！」

セレネはにっこり微笑んだ。

マクゴナガルも満足そうに微笑む。セレネは彼女の後に続き、マクゴナガルの執務室へ足を踏み入れた。内装はアンブリッジの執務室とは正反対だ。全体的に落ち着いた空間で、目につくような派手なものはない。壁一面に本が並び、無駄な物など一切置かれていなかった。ただ数個、古びた写真が立てかけてある。

「そこに置いてください」

「はい、先生」

セレネはシックなテーブルの上に、本を置いた。

マクゴナガルはローブを翻すと、セレネに微笑みかけてくる。

「ありがとうございました。スリザリンに5点あげましょう」

「いえ、点数が欲しいから手伝ったわけではありません」

セレネは気恥しそうに言いながら、これはチャンスなのでは？と思った。

「あの……先生。ひとつ、質問をしてもいいですか？」

「かまいませんよ。遠慮なく聞きなさい」

マクゴナガルは仕事を始めるつもりだったのだろう。

綺麗に磨き抜かれたオークの机の前に書類を乗せ、羽ペンにインクを浸していた。セレネは少し息を整えると、できるかぎり静かに口を開いた。

「その、先生。ご存知でしょうか……ホークラックスのことですか」

最後の単語を口にしたとき、マクゴナガルの手が止まった。羽ペンをテーブルの脇に置き、じっとセレネを見つめている。

「……『闇の魔術に対する防衛術』の課題ですか？　それでしたら、スネイプ先生に尋ねなさい」

マクゴナガルはそう言いながらも、学校の課題ではないことを百も承知なのだろう。猫のような瞳はまっすぐ、セレネに向けられ続いていた。

「いえ、そういうことではなくて……図書室で本を読んでいて、見つけた言葉だったのですが、完全には理解できませんでした。本当に、一行しか書かれていない……」

「私としては、貴方が何故、その単語を見つけたのか気になりますね。ホグワーツでホークラックスの詳細を書いた本を見つけるのは骨ですよ。おそろしい、闇の魔術です」

「ですが、先生はすべてご存じなのですよね？」

その、先生ほどの魔法使いでしたら——……すみません。先生が教えてくださらないなら、他に聞ける先生がいらっしゃらなくて……先生は、いつも真摯に質問に向き合ってくださいましたから——……ごめんなさい。無理なら構いません。ですが、とにかく伺ってみようと、思いました——……」

セレネは徐々に声を潜めながら、マクゴナガルから少し顔を背ける。

マクゴナガルはじっと何か考え込んでいるようだった。

「まあ、その言葉を理解するため、だけでしたら——……かまわないでしょう」
マクゴナガルは机の上に置いてあった眼鏡をかけながら、静かに言った。

「ホークラックスとは、人がその魂の一部を隠すために用いられる言葉です。分霊箱とも呼ばれています」

「でも、先生。魂を隠すだなんて……どうやってやるんですか？」

セレネはとうに知っていたが、その先の言葉を引き出すために、無知の振りをした。

「魂を分断するのです。そして、なにか物の中に隠します。そうすることで、体が攻撃されたり、破滅したりしても、死ぬことはありません。」

もっとも、その状態では生きているとは、とても言えないと思いますが」
マクゴナガルは激しく顔をしかめた。

セレネも彼女と同意見だ。霞のような状態での生存など、生きているとは言えない。

「どうやって魂を分断するのでしょうか？」

「健全なる魂は健全なる精神と肉体に宿ることを知っていますね？ それを無理やり分断することは暴力行為であり、自然の摂理に反する行いです。」

つまり、殺人ですよ。自分の生存のためだけに、人の命を無理やり奪うのです」

マクゴナガルは自分でも口にして恐ろしくなったのだろう。瞬間的に、彼女が微かに震えたのが分かった。セレネも少し顔をしかめた。

「……おそろいですね」

「あなたがそう感じる生徒で良かったと思いますよ」

「ありがとうございます」

セレネは言った。

「ですが、私が分からないのは——……もちろん、ほんの好奇心ですが、一個だけの分霊箱で役に立つのでしょうか？ 苦勞して作っても破壊されたらそれまでですし、魂は一回しか分断できないのでしょうか？

たとえば、七という数字は最も強い魔法数字ですよ？ 七の場合は——……」

「七個ッ!？」

マクゴナガルが甲高く叫んだ。

「人を一人殺すだけでも、おそろしい悪行です!! それを七回もするなんて——ッ!？」

マクゴナガルは困り果てた顔で、それまで一度もセレネをはっきりと見たことが

ないような目で、じっとこちらを見つめてくる。もしかしたら、マクゴナガルは、こんな話を始めたこと自体を後悔しているのかもしれない。

「もちろん、仮定の話です。学術的な理論の話です。先生は私が人殺しをしたいと思いますか？」

「……そう、ですよね」

マクゴナガルは深く深呼吸をした。

「……ええ、机上の話では、そうなると思います。

ですが、それも同時に七分割しなければ意味がありません。魂は分割するたびに、小さくなっていくのですから」

「小さくなっていく？」

セレネは本当に首を傾げた。

マクゴナガルの言っている意味が、いまいち理解できなかった。マクゴナガルは羊皮紙を一枚呼び寄せると、その上に羽ペンで円を描いた。

「単純な分数です。最初の分断で半分に分かれた魂を、またここで分断したら、本来の魂の四分の一になってしまいます。三分の一ではありませんよね？」

「つまり、一気に七分割せず、その時々に応じて七分割したら最後に残る魂は……百二十八分の一？」

「ええ。ただ一度分割するだけでも、魂はかなり不安定になります。その魂がそこまで切り裂かれたら——……不安定どころか奇跡です。正気を保つことすら難しくなるでしょう」

「そう、ですよね」

セレネは自分の考えの甘さに気付き、少し顔を暗くする。

マクゴナガルに礼を言い退室しながら、セレネは大きく息を吐いた。

セレネは「魔法数字で最も強いのは七」ということから、ヴォルデモートが分霊箱を七つ作ったのではないかと考えた。だが、それは考えすぎだったのかもしれない。

一度に七分割したのならともかく、何度かに分けて七分割すれば、マクゴナガルが言った通り、復活して猛威を振るっているヴォルデモートは当初の百二十八分の一に過ぎないことになってしまう。まさか、いくらヴォルデモートでもそのような

凡ミスをするとは考えにくい。

グリンデルバルドは、ヴォルデモートが分霊箱を複数作っている可能性を論じていたが、実際のところは7つより少ないのではないだろうか。

「日記帳、ロケット、それから、指輪。これで3つ。あいつの魂は当初の八分の一……うん、これ以上はない。うん、絶対にない」

下手したら、これで分霊箱は打ち止めだ。

あとは、本物のロケットの在りかを探すだけだ。そう思うと、セレネの目の前は一気に明るくなった気がした。心なしか、足取りも軽やかにスキップなんてしてしまっている。

「あっ、セレネ！」

だから、ハリーに声をかけられたときも、まったく悪い気はしなかった。

最近、魔法薬の授業でハリーが常にトップの成績を収めている。優等生に固執はしていないが、ハリーがハーマイオニーや自分を楽々と抜かして魔法薬の名手になるなんて、正直なところ絶対にありえない。確実に裏があり、ズルをしているはずだ。

なので現状、セレネのハリーに対する好感度が駄々下がりなのだが、今はそのような些事は気にならないくらい上機嫌だった。

「ちょっと話、いいかな？」

「ええ、かまいませんよ。必要の部屋を使いますか？」

「うーん……いや、空き教室でいいよ」

ハリーはセレネを近くの教室に連れ込むと、杖を取り出した。

『『マフリアート―耳塞ぎ』！』

ハリーは教室の入り口に向かって呪文を放つ。

「うん、これで僕たちの話は外に聞かれないようになったよ」

「便利な呪文ですね。教科書に載っていましたっけ？」

「ううん、実は——……って、それよりも、マルフォイのことを聞きたいんだ」

ハリーは切羽詰まった様子で尋ねてくる。

「マルフォイの不審な行動、見かけなかった？」

「少なくとも校則を破る行動はしていませんね」

セレネはハリーが言っていた「マルフォイ死喰い人説」をようやく思い出した。

「もったも、今日のスリザリンチームの選抜には来ていませんでした。遅れてくるのかもしれませんが……」

「マルフォイが選抜に来ない!？」

ハリーは仰天している。眼鏡の奥の瞳がこれ以上なくらい丸くなっていた。

「ええ、ですので、クィディッチがどうでもよくなったのかと」

「ありえない! どういうわけだ……?」

ハリーは腕を組むと、その場を回るように歩き始めた。

「ちなみに、マルフォイは死喰い人になったと仮定して、サイコパスから何を任されていると思いますか？」

セレネは近くの椅子に軽く腰を掛けた。

「マルフォイにしかできない仕事です。それは、为什么呢?」

「ホグワーツのスパイ?」

「そうですね、それが妥当です。ですが、何故?」

セレネは、マルフォイを死喰い人にするメリットが何も思いつかなかった。

せいぜい、あったとしても、魔法省で失態を犯したマルフォイ家に対する嫌がら

せか罰だ。むしろ、そっちの意味合いが強いに違いない。それなのに、マルフォイはいまだにスリザリン寮で踏ん返り返っている。純血派のリーダーとして、少人数の純血派に囲まれて鼻を高くしている。

「それは、僕にも分からない。だから、セレネにお願いがあるんだ。君にマルフォイを見張って欲しい」

ハリーが頼んできた。

「ここ最近の行動、いかにも怪しいだろ？」

「……分かりました。できる範囲で」

死喰い人かはともかく、マルフォイが昨年までと違った行動をとっていることは変わりない。

セレネが小さく頷くと、ハリーは嬉しそうに表情を崩した。

「ありがとう、セレネ！　じゃあ、僕はこれで。ダンブルドアに呼ばれているんだ」「ええ、って、待ってください。ダンブルドアに何故呼ばれているんですか？」

ハリーがセレネに背を向けて駆け出した。セレネが慌てて呼び止めると、彼は走りながら答えてくれた。

「今年から、ダンブルドアが個人授業をしてくれることになったんだ。なにを習ったのかは、あとで教えるよ！」

ハリーの背中は瞬く間に小さくなり、ドアの向こうに消えてしまった。

「ダンブルドアの個人授業？」

セレネは再び指を口元に添えて考え込む。

本格的な闇の魔術に対する防衛術を習うのか、それとも、ヴォルデモートの倒し方について学ぶのだろうか。

これは、グリンデルバルドに報告した方がいいことかもしれない。

セレネがそんなことを考えていた時だった。

「セレネ・ゴースト様」

足元の方から声が聞こえる。

セレネが目を落とすと、そこには皺くちゃなしもべ妖精が佇んでいた。腰に汚らしいタオルを巻いたしもべ妖精は、めらめらと燃えるような目でセレネを見上げて

いた。

なんとか魔性菩薩を期間内に倒せた……と、思った矢先にイベント延長。

おのれ、F G O。せっせと林檎を食べながら、ひたすらクエスト消化に励んだのに……!! まあ、延長のおかげで、BBの宝具M a xできそうなんですけどね。

次回は「ロケット、飛行、誕生日」の三点でお送りします。

イギリス人の誕生日の数え方って分かりにくい……。

76話 1クヌートと誕生日

「あなたは、屋敷しもべ妖精？」

セレネが尋ねると、しもべ妖精は黙って頷いた。

「クリーチャーでございます、ゴーント様」

クリーチャーと名乗った妖精は、静々とお辞儀をする。

屋敷しもべ妖精を見るのは、これが2度目だった。

マルフォイ家のクリスマスパーティーの時に見て以来だったが、このしもべ妖精はそれに比べても随分と汚らしくみすばらしい。皺だらけの顔からして、たぶん高齢なのだろうと思われたが、それにしても、薄汚く、吹けば飛ばされそうなくらい細かった。

「どうして、私の名前を知っているのですか？」

「クリーチャーはホグワーツで働かされています。ホグワーツの噂は、だいたい耳に入ってくるのです。名門ゴーント家とフランケンシュタイン家の血を継ぐ娘様」
クリーチャーはしゃがれ声で答えた。

「意地悪な旦那様が入院している間、ホグワーツで働けだなんて……ああ、可哀そうな奥様。クリーチャーが御屋敷から引きはがされ、穢れた血が蔓延る学校で働いていることをお知りになったら、どれだけお嘆きになられることか……」

「えっと、クリーチャーさん？」

セレネはクリーチャーが唐突に独り言を呟き始めたので、少し驚いてしまった。そっと声をかけると、独り言をぱたりとやめて、セレネに向き直った。

「クリーチャーでかまいません、ゴースト様」

「なら、クリーチャー。どうして、私のところに現れたのですか？」

セレネの知る限り、しもべ妖精は人前に姿を見せない。

ハーマイオニーが以前教えてくれたが、掃除の時以外は地下の厨房から出ることはないそうだ。それなのに、どうして自分の前に現れたのか。実に興味をそそられた。

「……ロケットをお持ちですね。レギュラス様のロケットを」

「ロケット……？ ……ああ、これのことですか？」

セレネはポケットの中から、あの洞窟で手に入れたロケットを取り出した。する

と、クリーチャーは老いた瞳を輝かせた。

「ゴーント様、それをどこで手に入れたのですか？ レギュラス様のロケットを、いったいどこで？」

「レギュラス様、ね」

セレネは判断に迷った。

本当のことを話してもいいのか、それとも、これはある種の罠なのか。それを見定める必要がある。セレネは少し悩んだ末に、口を開いた。

「それを答える前に、その、レギュラス様のファミリーネームを教えてくださいませんか？」

「ブラックです、ゴーント様。レギュラス・アークタルス・ブラックでございます」

「……なるほど、だから、RABなのね」

セレネは小さく呟いた。

このロケットの持ち主が、RAB……つまり、レギュラス・ブラックだった可能性が浮上する。ブラック家といえば、魔法界有数の純血の名家だ。これほどまでに立派なロケットを持っていたとしても、不思議ではない。

「……ある洞窟で、手に入れました。

クリーチャー、あなたがこれがレギュラス・ブラックさんのロケットだと分かったということは、これがあるロケットの偽物として用意されたことも知っているのではありませんか？」

一瞬、沈黙の間があった。

クリーチャーは背筋を伸ばして、しっかりとセレネを見つめてくる。

「はい。クリーチャーは、それがすり替えられたロケットだと知っております」

「では、本物はどこにありますか？」

クリーチャーは次の言葉にセレネがどう反応するのか、見るに堪えないというように目を瞑った。

「……なくなりました」

「え？」

「マンダングス・フレッチャーが、全部盗みました。ミス・ベラやミス・シーシーの写真も、奥様の手袋も、勲一等マーリン勲章も家紋入りのゴブレットも、レギュラス様のロケットも!!

ああ、クリーチャーはご主人様の命令を果たせませんでしたッ!!」

クリーチャーは息を吸おうと喘いでいた。

当時のことを思い出したのか、こちらが見ていて心配するほどの身震いをし、苦しそうにしている。最後の方の言葉なんて、血も凍るような叫び声だった。そして、すぐに近くの床に頭をぶつけ始める。セレネは慌ててクリーチャーの細い身体を抱えると、床から遠ざけた。

「ど、どうしたのですか!？」

「クリーチャーは悪いしもべ妖精です。ご主人様の命令を守れなかった、悪いしもべ妖精です!!」

「いや、だからって床に頭をぶつける必要はないですよ!? ほら、血が出ているではありませんか」

セレネの言う通り、クリーチャーの皺だらけの額からは血が流れ出ていた。

「まずは、落ち着いてください。

そのロケットについて話を聞きたいんです。どうしても、自分を罰したいなら、話が全部終わってからにしてください。お願いします」

セレネがなるべく優しい声色で言う、クリーチャーは幾分か落ち着いたようだった。

少なくともセレネの腕から逃れようと、暴れるのは止めた。そっと床に降ろせば、まだびくびくと痙攣していたが、頭をぶつける奇行に走ることはなくなった。しかし、まだ命令を果たせなかったことが悔しいのか、たるんだ両目からぼろぼろと涙を零していた。

「レギュラスさんのロケットは……」

ここからが肝心なところだ。

セレネは言葉を選びながら、慎重に問いかけた。

「すり替えられたロケットは——つまり、どうして、レギュラスさんはあの洞窟に本来あったロケットとすり替えたのでしょうか？」

「レギュラス様の考えは、クリーチャーには分かりません」

クリーチャーは皺だらけの顔を涙で濡らしたまま、静かに言った。

「ですが、あの日のレギュラス坊ちゃまは正気を失っているように見えました。

闇の帝王がクリーチャーを連れて行った洞窟に、案内するように言われました。

洞窟の中央にあった小島に着くと、坊ちゃまは……坊ちゃまは……ゴースト様が持っているロケットを取り出し、水盆が空になったら取り換えろと」

クリーチャーはさめざめと泣き始めた。

「それから、坊ちゃまは命令されました。一人で去れ、と。家に帰れ、と。奥様には決して、自分のしたことを言うな、と。そして、最初のロケットを——破壊しろ、と」

「……そして、レギュラス・ブラックはあの水を飲んだ」

セレネが呟くと、クリーチャーはますます啜り泣いた。

ハリーがかけた呪文がまだ効いているか、不安になり、セレネがもう一度、入り口に向かって「マフリアート——耳塞ぎ——」をかけ直す。これで、もうしばらくは、誰にも邪魔されずに話すことができるだろう。

「それで、あなたはロケットを破壊しようとしたのですね」

「クリーチャーが何をして、傷一つつけられませんでした」

クリーチャーは全部やってみました。でも、どれもこれも、上手くいきませんでした。外側のケースには強力な呪文があまりにもたくさんかかっていて、クリー

チャーは破壊する方法は中に入ることには違いなと思いました、どうしても開きません。なにをやっても、開かないのです!!

……クリーチャーは罰しました。開けようとしてはまた罰し、罰してはまた開けようしました。

でも、それなのに、まだクリーチャーは坊ちゃまの命令をこなしていないのに、あのコソ泥マンダングス・フレッチャーが——ッ!!」

すすり泣きが激しくなり、言葉を聞き取ることも難しくなっていた。

分霊箱を破壊する手段は、さほど多くない。セレネは「直死の魔眼」があるので、これまで容易く破壊してこれたが、（おそらく）ごく普通の屋敷しもべ妖精に過ぎないクリーチャーが破壊できるわけがない。クリーチャーはとても苦しんだのだらう。いまこの瞬間も、おいおいと泣き喚いているクリーチャーを見ているだけで、その悲痛さが伝わってくる。

セレネは一瞬、目を伏せた。

「……ねえ、クリーチャー」

セレネはクリーチャーの位置までしゃがみこんだ。

「私なら、たぶんロケットを破壊できる。だから、マンダングス・フレッチャーを探し出す協力をしてくれませんか？」

「ゴースト様なら、あのロケットを？」

クリーチャーはおずおずとセレネを見上げる。

「でも、私はフレッチャーの居場所を知りません。それどころか、そいつの顔すら知りません。だから、あなたに探し出して欲しいんです。

もちろん、ただでとは言いません」

正当な仕事には正当な報酬を。

それが世の常だろう。

もちろん、しもべ妖精が主人のために働くにあたり、報酬を望まないと知っていた。だが、自分はクリーチャーの主人ではない。だから、こちらの気持ちとして、報酬を提示する。断られてしまえば、無理に押し付ける必要はない。

「このロケットを差し上げます。あなたの主人のロケットだったので、あなたが持つべきです」

セレネがロケットを掲げると、クリーチャーは衝撃と悲しみで大声を上げ、また

も床に突っ伏した。

また額を打ち付けるのでは？と警戒したが、そのようなことはせず、わんわんと泣き叫ぶ。セレネがクリーチャーを宥めるのに、かるく30分はかかった。最初は「物で釣るなんて、しもべ妖精を馬鹿にするな」という怒りの涙だったのかと思っただ、どうやら、クリーチャーはブラック家の家宝を自分の物として譲渡されるときに感激に打ちのめされていたらしい。

「ありがとうございます、ゴーント様。それでは、コソ泥マンダングスを連れてまいります」

クリーチャーは「クリーチャーが戻ってくるまで、ロケットを紛失しないこと」を約束させると、うやうやしくお辞儀をして、ぽんっと姿を消した。

「——と、いうことがありました」

セレネは両面鏡に向かって話しかけた。

本当は秘密の部屋で話したいが、あの場所にクリーチャーが現れるのは避けたい。仕方ないので、セレネは「必要の部屋」で話すことにした。両面鏡を日夜持ち歩く——つまり、グリンデルバルドに交友関係が知られてしまうというリスクを負う羽目になったが、クリーチャーがマندانガスを捉えるまで、数日の辛抱だ。

「……なるほど。ブラック家の子息が持っていたとはな」

鏡の向こうのグリンデルバルドは悠々と肘掛椅子に座っていた。長い足を優雅に

組み、左手にはコーヒーカップを手をしている。

「その男が売り払っていないことを祈るとしよう」

「盗まれたのは、夏の初めだそうです。開かないロケットだそうですし、まだ売れていませんよ」

セレネも自分の淹れた紅茶を飲みながら、ゆっくり答えた。

「それで、そちらの進展はどうです？」

「まずまずといったところだ」

グリンドルバルドはコーヒーを啜ると、カップを小綺麗なテーブルの上に置いた。

「実は長旅に出ようと思っている」

「長旅ですか？」

「分霊箱の隠し場所かもしれない場所に見当がついた。アルバニアに行こうと考えている」

「アルバニアって……」

セレネは国名を口にし、はたと気が付いた。

アルバニアといえば、長らくヴォルデモートが潜伏していたとされる国名だ。詳

しい情勢は知らないが、近年まで鎖国をしていたことはマグルの本で読んだ。ネズミ講が蔓延り、国民の三分の一が破産しているとかしてはいないとか、そんな話をマグルのニュースで耳にしたことがある。

「危険では？」

「私を誰だと思っているのだ、フロイライン？　今のイギリスで1番か2番目に危険な男だ」

グリンデルバルドは口ひげを上げるように笑った。

それは否定しない。鏡の向こうで笑っている男は、下手したらヴォルデモートより危険な男である。

「ヴォルデモートが何故数ある国の中から、アルバニアに潜伏していたのか興味があつてね。

おそらく、そこに分霊箱かそれに繋がるヒントが隠されているのだろう。

……もともと、準備はある。出立は12月になりそうだ。年明けには戻ってくる」
「しかし……」

「君が渡航するより、はるかに安全だ。少なくとも、君の父親が許してくれると思

うかい?」

「……思いませんね」

義父を連れて行くなら、もう少し治安のよい国へ連れて行きたい。

自分の都合で無理やりアルバニアに連れて行くのは、絶対に違う気がする。

「では、よろしくお願いします。……ちなみに、魔法使いが海外へ旅行するときは、箒を使うのですか? 以前、ダンブルドアがフラメルのところへ連れて行ってくれた時は『姿くらまし』でしたけど……」

「基本は移動キード。長距離の『姿くらまし』は危険が伴う。もっとも、今回は飛行機で行くつもりだ。仕組みやフライトに興味があってね」

そう言いながら、グリンデルバルドは胸ポケットから航空券を取り出した。両面鏡越しなので見えにくいだが、目を凝らしてみると、ビジネスクラスの券である。セレネは一瞬、むっとした。エコノミーしか乗ったことがない身としては、羨ましい限りである。

「……随分と羽振りがよろしいようで」

「安心したまえ。牢獄に入れられる前に、いろいろな場所に隠しておいた活動資金

から捻出してゐる。向こう20年は遊んで暮らせるほどあるので、心配しないでいい」

「どれだけ蓄えているんですか」

セレネが言うと、グリンデルバルドは愉快そうに微笑みながら航空券をしまった。

「飛行といえば、君の方はどうだ？ 空は飛んでみたかね？」

「……ええ、友人から箒を借りて」

セレネは紅茶に目を落としながら答える。

「やはり、空からの攻撃は有効かと。ただ、バランスを取ることを考えると、箒なしで飛べた方がいいと思いました」

魔法史を紐解くと、魔法戦は基本的に地上で行われている。

セレネが調べた限り、箒に乗った魔法使いが地上に爆発物を落下させたり、空から狙い撃ちをしたりすることは滅多になかった。箒の上から何かをするというバランスの悪さもあると思うが、なによりも箒が高価であり乗る練習をしたことがない、ということが一番だろう。

きつと、ヴォルデモートも急な空からの攻撃には対応できないはずだ。

戦っている相手がいきなり上昇して、空から攻撃をしかけてきたら、おそらく防戦一方になるに違いない。

「筭なしで飛べる方法を模索中ですけど……なかなか上手くいきそうにありません。

魔力を足に集中させ、放出するように飛べいいのかもしれませんが」

「習得難易度はAランクの魔法だ。私もできない。……もっとも、試したことがないとも言いがね」

グリンデルバルドは爽やかな表情のまま答える。

本当に、腹の立つ言い回しをする老人である。セレネが苦勞して成し遂げたことも、この男なら息をするように樂々とこなしそうな氣がする。

「ところで、1つ相談があるのだが……」

グリンデルバルドが何か言おうとした、その瞬間だった。

指を鳴らすような音が「必要の部屋」に響き渡る。自分の座っている椅子の脇に、なにか小さい影が見えた。セレネが急いで立ち上がると、塊から身を解いたクリーチャーが深々とお辞儀をし、しゃがれ声で言った。

「ゴースト様、クリーチャーが盗人のマンダンガス・フレッチャーを連れて戻りました」

その後ろで、あたふたと立ち上がった小男が杖を抜いた。セレネも反射的に杖を引き抜くと、まっすぐ小男に狙いを定める。

「『エクスペリアームズ―武器よ去れ』！」

小男の杖は宙に飛び上がり、弧を描きながらセレネの手に収まった。

「『インカーセラス―縛れ』」

そのまま逃げようとする小男を縄で縛りあげる。杖さえあれば逃れることができなかもしれないが、武器もない小男が縄抜けなどできるわけがない。

「何だよう。おまえさん、誰だ？」

小男――マンダンガスは身を振りながら叫んだ。

「俺が何したって言うんだ？ 屋敷しもべ野郎をけしかけやがってよう！」

「そうね、貴方は私には何もされていませんね」

セレネは小男を見下した。

セレネが見たことある男性の中で、一番小汚い男だった。

酸っぱい汗の臭いと煙草の臭いをプンプンさせ、髪はぐしゃぐしゃにもつれ、ロブは薄汚れている。説明されるまでもなく「ならず者」だった。

「……なるほど。そいつがマンダガスだったわけか」

グリンデルバルドが鏡の向こうから興味深そうな声を上げる。

すると、ぴたりと小男の動きが止まった。

「マンダガス……だから、 Dank. なるほど、君なら盗みも犯すだろう」

「げっ、グレイブスの旦那っ！　なんでそこに!？」

「……知り合いですか」

セレネがグリンデルバルドに横目を向けると、彼はゆっくり頷いた。

「亡者のふりをして、私の隠れ家に押し込み強盗をしようとしていた。もっとも、未遂で終わったがね。そのあと非常に有意義なおしゃべりをした。それだけの関係だ」

グリンデルバルドは平然と言ったが、小男はますます小さくなっていく。

彼の言う「有意義なおしゃべり」は、きっと碌なものではないのだろう。セレネはそう確信したが、詳しく問いただす気にはなれなかったので、さっそく本題に切

り込むことにする。

「あなたはクリーチャーが仕える家から、開かないロケットを盗み出しましたか？」

「あ、ああ。でもよう、盗み出したっていうには誤解があるぜ？ シリウスの野郎はあの宝の山をガラクタだって——……このしもべ野郎、なにすんだ!？」

マندانガスがすべて言い切る前に、クリーチャーが手頃の椅子を持ち上げ、マندانガスを叩き潰そうとした。

「クリーチャー、落ち着いてください」

「しかしですね、ゴースト様。由緒正しきブラック家の財産を侮辱されたのです。クリーチャーとしては許すことができません」

「……まだ有意義な話し合いの途中です。叩くなら、すべてが終わってからにしてくださいませんか？」

セレネが頼むと、クリーチャーは渋々椅子を置いた。だが、その眼は忌々しそうにマندانガスを睨み付けている。許しが出れば、すぐにでも殺しにかかりそうな勢いがあった。

「では、問い方を変えましょう。開かないロケットはまだ持っていますか？ 持っているのであれば、見せてください」

「わ、わかった。いま、取り出すからよう、縄を解いてくれ！」

「……分かりました」

怪しげな動きをすれば、また縄で縛りつけばいいだけの話である。

セレネは軽く杖を振ると、マンダンガスを縛っていた縄はするすると解けた。マンダンガスはトランクに飛びつくと、いそいそと開いた。トランクには、ありとあらゆるガラクタや高価なものがぎっしりと詰まっていた。彼はその中から一際大きいロケットを取り出した。

「これだ、これ。このロケットだ！」

金色のロケットは、見るからに値打ちものであると主張している。

中央には「S」という文字が刻まれていた。心なしか、蛇のようにうねっているように見える。セレネがクリーチャーに目を向けると、重々しく頷いている。

これが、本当の3つ目の分霊箱だ。

「……そう。その代金、これくらいでどうかしら？」

一応、盗品とはいえ売り物だ。

セレネは財布から金を取り出すと、マンダンガスに弾き飛ばす。

「1クヌート!? 銅貨一枚だなんて、そりゃないですぜ、お嬢ちゃん!」

「あら。それは盗品でしょ? たとえ、それに2万ガリオンの価値があっても、内側に潜む悪霊の駆除代で消えるわ。むしろ、1クヌート貰えるだけでも良いと思いなさい」

セレネがにっこり微笑むと、マンダンガスはいいやロケットを投げてよこした。

「クリーチャー、ありがとうございます。これから、レギュラスさんの代わりに、悪霊を祓いますから」

「ありがとうございます、ゴーント様」

クリーチャーは恭しくお辞儀をした。

セレネはそつと眼鏡を外す。途端、死の線が蔓延る世界が視界を覆いながら広がっていく。

クリーチャーは「破壊するためには、開かなければいけない」と言っていた。クリーチャーの言う通り、ロケットには数えきれないほどの呪いと思われる線がびっ

しり張り巡らされていたが、この眼があれば開けずとも解体することができる。

セレネはポケットからナイフを取り出すと、ロケットに向き合った。

「さてと、しっかり殺しますか」

セレネがナイフを構えると、ロケットは触ってもいないのにカタカタ震え出した。実に勘のよろしいロケットである。セレネは口の端を上げると、一番表層の線を切った。そして、その次の線、さらに絡み合った線と、爆発物を解体するように切り裂いていく。その都度、ロケットが悲鳴を上げるような音を発したが、別に気にならない。マンダングスは椅子の向こうに身体を隠していたが、クリーチャーは瞳の奥にめらめらと炎を燃やしながら解体作業を眺めている。

「な、なんでえ。あの女の目は、なんだよお」

マンダングスの震える声が聞こえた。その頃、ようやく残りの線は一、二本まで減っていた。最後の線は特に邪悪で殊更禍々しい空気を惜しみなく放っている。セレネがそれに狙いを定めると、唐突にロケットの蓋が開いた。ロケットの内側には、生きた目が一つ瞬いている。細い瞳孔が縦に刻まれた、ハンサムにも思える黒い瞳だ。

十中八九、若かりし頃のヴォルデモートの瞳に違いない。

『おまえは平穩に暮らしたいのだろう、ゴースト。俺様なら、すぐにその手伝いを

——…』

「ありがとう。でも、命乞いするような人に助けてもらわなくて結構です」

セレネはぴしゃりと笑顔で断ると、リドルの瞳に走る線めがけてナイフを振り下ろした。

鋭い金属音と長々しい叫び声が、必要の部屋に木霊する。ロケットはひときわ大きく震えると、ぴたりと動きを止めた。もはや、ロケットの中にリドルの瞳はない。リドルの目があつた場所には、シミのついた絹の裏地が微かに煙を上げていた。

セレネが静かにロケットを見下していると、どこからともなく拍手が聞こえてきた。

「3つ目の分霊箱の破壊、おめでとう」

鏡の向こうのグリンデルバルドだ。

嬉しそうに微笑を浮かべながら、セレネに拍手を送っている。

「では、私はこれで失礼するでしょう。 Dank、またいつか会おう」

グリンデルバルドはそう言うのと、両面鏡の通信を切った。もう住み心地のよさそうな部屋もグリンデルバルドの悠々とした姿も映し出していない。セレネは肩を落とすと、ナイフをしまった。

「ありがとうございます、ゴーント様。クリーチャーはなんとお礼を言ったらいいか」

「お礼はいいわ。それよりも、はいどうぞ」

セレネは鞆からレギュラスのロケットを取り出すと、クリーチャーに握らせた。クリーチャーは感極まった目でそれを受け取ると、大事そうに胸に抱える。

「ちえ、なんでえ。オレには銅貨一枚で、しもべ野郎には高値そうなロケットとは、どういうつもりだ!？」

「マンダンガス・フレッチャー、でしたっけ？」

マンダンガスは不満そうな顔をしていたが、セレネがにこつと微笑みかけると、不気味そうに縮こまる。

「今日、ここで見たことを秘密にして欲しいんです」

セレネはそう言いながら、バインダーを取り出した。バインダーには事前につ

て置いた契約用紙が挟まっている。

「万が一のこともありますし、念のため、サインください」

「……ちえ、嫌な女だ」

マンダンガスはぶつくさ言いながら、用紙を目を皿にして読み通す。

さすが裏社会で生きてきた人間。契約の抜けがないか、不利なことが書いていなか、抜け目なく読み通していた。バインダーで挟まっているにもかかわらず、わざわざ裏面まで確認している。もちろん、表面には大したことは書いていない。

1。今日のできごと、ロケットに関することを口外しないことを誓う。

2。これを破った場合、自ら吸魂鬼にキスを求めに行く。

この二項目だ。

吸魂鬼のキスは、魂を取られる——すなわち、ほとんど死刑同然だ。そのような行いを自ら求めに行くような真似をするくらいなら、絶対に話さないだろう。

「これでどうだ」

マンダンガスは最後まで読み終えると、羽ペンで名前を書いた。

セレネは嬉しそうに笑いながら、バインダーごと契約用紙を受け取った。

「ありがとうございます。では、これからよろしくお願いしますね、フレッチャー」
「ああん？ これからよろしくとは、どういうことだ？」

セレネはブラックライトを取り出した。

バインダーから契約用紙を外し、何も書かれていないように見えた裏面を照らし出す。すると、文字が浮かび上がってきた。

「『この用紙にサインした人間は、セレネ・マールヴォラ・ゴーストに絶対服従する』」

これに違反した場合、ヒキガエルに変身することになるので、ご注意ください」

「き、汚ねえぞ!!」

「でも、命を失うよりはマシでしょ？ 最初の命令は、今日起きたことに関する私のことを口外することを禁止します」

セレネはにこにこしながら、契約用紙を鞆にしまった。

マンダンガスは非常に悔しそうにこちらを見ってくる。

このまま、彼にはクリーチャーと共に元々いた場所へ退席してもらった。

必要の部屋は、静寂を取り戻す。セレネは椅子に勢いよく座ると、足をふらつか

せながら指を折り始めた。

「リータ・スキーター、ゲラード・グリーンデルバルド、マンダングス・フレッチャー……増えたとはいえ、ろくな大人がいないわね」

マスゴミ、世紀の犯罪者、コソ泥……闇払いなんて贅沢は言わないので、もう少しまともな大人を協力者にしたいものである。

もっとも、まともな大人ほど16、7歳の娘がヴォルデモートに立ち向かうことを反対し、協力してくれないのだと思うが。

セレネはそんなことを想いながら、冷めきった紅茶を飲み干すのだった。

季節は少しずつ過ぎていく。

11月になると、クイディッチのシーズンが始まった。

スリザリンのチームは一新され、シーカーもノーマン・ウォルパートに決まった。選抜の日、結局、マルフォイは姿を見せなかったのである。本人曰く

「僕には大きな使命があるんだ！」

と純血派の友人たちに言いふらしていたが、その使命に関しては誰にも明かそうとしていなかった。

「マルフォイの使命について、本当に知らないの？」

ハリーは会うたびに、こっそり聞いてくる。

ハリーは今日もスラグホーン主催、スラグ・クラブ終了後に尋ねてきた。

スラグホーン主催のパーティーは、正直に言えば退屈極まる会だ。スラグホーンの自慢話に耳を傾けるのだ。たまに、スラグホーンが優秀な教え子を紹介してくれる。日刊預言者新聞の編集長とか、クイディッチチームのキャプテンとか。

その意味では、人脈作りには最適である。

怪しげな協力者しかない現状を打破するに、退屈さを我慢してでも出席する価値はある。今日も妖女シスターズのバンドマンを紹介してもらい、魔法界におけるロックの価値観やマグルのバンドについて語り合うこともできた。彼らはヴォルデモート打倒に関係ない人脈だが、魔法界における娯楽の発展には重要な人物である。とても大切な人脈だ。

「ねえ、セレネ。聞いてる？」

「え、ええ。ごめんなさい」

セレネはハリーに顔を向けると、正直に首を横に振った。

「マルフォイが死喰い人かもしれないのは同意します。ですが、彼になにかできるとは思いません。あれは、おそらく見せしめであり、失態を重ねたマルフォイ家に対する生贄なのでしょう」

「だけど、あいつのやり口は酷すぎる。

ケイティの事件、知ってるだろ？ 何者かに『呪いの首飾り』が送られて、それに触れた瞬間、死に瀕する呪いにかかったって」

ハリーは例として、昨日のホグズミードで起きた事件について挙げた。

たしかに痛ましい事件である。だが――

「ハリー、確固とした証拠がありません。あの日、マルフォイはパンジー・パークインソンとマダム・パティフットの喫茶店にいたという証言があります。ケイティに近づいていません」

セレネは親衛隊の子が手に入れた情報を公開する。

「ですので、考えられるとしたら、外部の協力者がいたのでしょうか」

「それは誰？」

「そこまでは……ケイティがいた三本の箒は広いですし、賑やかですから」

それこそ、場末のホグスヘッド辺りをうろついてもらえていれば、簡単に協力者を逆探知できた。三本の箒を選んだ辺り、ある意味、その人物はハーマイオニーより冴えた人物ということになる。

「ハリー、セレネ。何を話しているの？」

ハーマイオニーが追い付いてきた。彼女もスラグ・クラブの一員である。

ハリーが早口に

「マルフォイのこと」

と言うと、ハーマイオニーはあからさまにウンザリした顔になった。きっと、いつも一緒にいる彼女は何十回となく同じ話を聞かされているのだろう。

「ハリー、何度も言っているでしょ。たしかに、マルフォイは怪しいけど、死喰い人なんてありえないわ。」

それよりも、セレネにプリンスの話はしたの？」

「プリンス？ 王室のことでしょうか？」

魔法界では聞き覚えのない言葉である。セレネが首を傾げると、ハリーはバツの悪そうな顔になり、ハーマイオニーは鬼の首を取ったような顔になった。

「それは、セレネと関係ないことだろ？」

「ねえ、セレネ。最近、ハリーは異常に魔法薬の成績が上がったでしょ？」

ハーマイオニーはハリーの抗議を聞かず、セレネに向かって話し始めた。

「実は、ハリーが上級魔法薬の古本にあった書き込み通りにやった結果なの。半純血のプリンスの書き込みに従ってね」

「……まあ、ある種のカンニングはしていると思いました。それで、なにか問題でも？」

セレネが言うと、ハーマイオニーは愕然とした。

「問題でもですって!? 本人の実力じゃないのにやるのはいけないことでしょ!?!」
「試験本番では教科書を持ち込めませんよね。そこで化けの皮が剥がれるので、心配する必要はないかと」

それに、スラグホーンだって馬鹿ではない。

いや、確かに、ハリーを鼻屑する癖はあるが、普段の様子と試験の様子が明らかに違ったら、何かおかしいと気づくだろう。まさか「試験の緊張のせいで、思った通りに動けない」とは思うまい。

このままカンニングばかり続けて、肝心の試験を落として、スラグホーンの信頼を失えば、それは自業自得だ。プリンスとやらの書き込みに甘えて、自己の努力を忘れた罰である。

「そうかもしれないけど……」

ハーマイオニーは、まだ納得いかないのか、むすつとしている。

「でもね、セレネ。他にもその本にはプリンスが作った魔法が書いてあるの。レビコーパスとかラングロックとか」

「舌縛りの魔法なら、私も使いますよ」

セレネが言うと、ますますハーマイオニーの機嫌が悪くなったようだ。彼女は「もういいわ!」と言うと、すたすた先へ歩いて行ってしまった。ハリーが嬉しそうに、にやっとこちらに笑いかけてくる。

「ありがとう、セレネ」

「いやいや、まったく庇っていませんけど。それよりも、あなたは試験でも実力を発揮できるよう、ことさら勉強しないと。このままでは、確実に怪しまれますよ? それに……プリンスのことですが、魔法の開発は、そう簡単にいきません」

セレネも実際、独力で空を飛ぶ魔法を開発中だが、これもなかなか上手くいかな
い。

それを、ぼんぼんっと今も使われている便利な魔法を創り出すのは、至難の業で

ある。

「プリンスという人物について調べる必要がありますね。ハーマイオニーの言う通り、危険な人物かもしれません。もしかしたら、マッドドサイエンティストも目を剥く危険極まる魔法があるかもしれません」

「おおげさだよ、セレネ。気にしすぎ」

「はあ……これとマルフォイのことの温度差が激しすぎますよ」

セレネが疲れたように額に手を置くと、ハリーはすまなそうに笑った。

「あー……ところで、セレネは明日だっけ？ 17歳の誕生日」

「ええ、まあ……そうですね」

セレネは苦々しい思いになった。

誕生日の日付など気にも留めていなかったが、自分がフランケンシュタインの末裔に製造されたのだと考えれば、少し話は変わって来る。

フランケンシュタインが生み出されたのは、11月の物悲しい夜だ。

それと重ね合わせるように、自分を創り出したのだろう。そう考えると、ひどく人為的な誕生日にあまり良い思いはしない。

「おめでとう、セレネ」

「ありがとう」

セレネが返事をしたが、ハリーはまだ何か言いたそうにしていた。もうすぐ分かれ道である。もうかなり夜が更け、そろそろ管理人のフィルチに見つかったら処罰の対象になる頃合いだ。寮に戻る前に話したいことがあるなら、はっきり言って欲しかった。

「ハリー？」

「あのさ、そのー……スラグホーンが帰り際、言っていたこと覚えてる？」

「えっと……クリスマスパーティーのことですか？ スラグホーン主催のスラグ・クラブ・クリスマスパーティー」

「そう、それ。スラグホーンが皆にぜひ参加して欲しいって言ってたよね。そのことなんだけど——……」

分かれ道のところで、ハリーは立ち止まる。

セレネとしては早く帰りたいので、はっきり言いたいことがあるなら口に出して欲しい。何か気恥しいのか、口をもごもごさせている。

セレネが自分の腰に手を当て「さっさと欲して欲しい」と言おうとした。その直後だった。

「おい、そろそろ消灯だぞ」

前からセオドールがこちらに歩いてくるのが見えた。

彼もスラグ・クラブに（半ば強引に）加入しているのだが、あまり面白くないのだろう。いつも終わると、すぐに帰ってしまう。今日もその例にもれず、帰ってしまっていたのだが、どういうわけか引き返して来たらしい。

「お前さ、いくら何でも帰って来るのが遅すぎだろ。……なんだ、ポッターと大事な話でもしてたのか？」

セオドールがハリーを横目で見る。ハリーの緑色の瞳に戸惑いの色が一瞬、浮かび上がる。

「……いや、なんでもない。またね、セレネ」

ハリーはそれだけ言うと、さっさと階段を上がって行ってしまった。

セレネは小首を傾げると、セオドールと一緒に寮へと階段を下っていった。

「ポッターと何の話をしてたんだ？ あー、言いたくないなら構わないけどよ」

「大した話ではありませんよ。マルフォイが死喰い人か否かという話です」

「……いや、論じるまでもないだろ、それ」

「あと、それからプリンスなる人物の話です。あなたは知ってますか、プリンス？」

セレネが問いかけると、セオドールは首を横に振った。

「魔法使いに王家はない」

「そうですね……では、ただの呼称ですか」

「なんだ、お前。継承者じゃなくて、プリンスって呼ばれたいのか？ やめとけ、

やめとけ。プリンスやプリンセスはお前の柄じゃない」

「それ、どういうことですか？」

セレネが軽く睨むと、セオドールは笑ってごまかした。

次の日の朝、セレネが目を覚ますと、自分のベッドの前に小さな山を発見した。
何のことはない、誕生日のプレゼントである。

制服に着替え、さっそくプレゼントの山に取りかかる。

親衛隊規則「継承者自身が望まぬ限り、貢物は可能な限り控えるべし」により、親衛隊隊員個人からのプレゼントはない。ただし、「親衛隊全体から」という名目で、少し大きな箱が届いている。重さから考えるに、バタービールの瓶一ダースあたりだろう。見当をつけて開けてみれば、どんぴしゃり。予想外だったことといえば、その中にファイアーウィスキーが一瓶交ざっていたことくらいだろう。ミリセントからは「学校に行けなくて、つまらない!!」という怒りの手紙付きの大鍋チョコレートのセット。

手紙が長文過ぎて、チョコレートが主役なのか手紙が主役なのか、分からなくなってしまうている。だが、きつと、それだけ鬱憤がたまっているのだろう。

「ジャスティンからは……去年発売されたオリジナルアルバム！ これ、聴きたかったのよ。しかも、映画のビデオテープまで……大盤振る舞いじゃない」

さすがは、金持ちの坊ちゃんである。

プレゼントのセレクトが豪華かつ、セレネの欲しい物だ。こちらの趣味を完全に理解し、かつ、セレネが持っていないものを攻めてきている。これは、来年の彼の誕生日に返すプレゼント選びが大変そうだ。セレネは苦笑いを浮かべながら、CDア

ルバムとビデオテープをトランクの中へ大切にしまった。

「さてと、他は……リータから羽ペン。これは無難ね。……これは……あとで開けよう」

セレネは包みの中に、グリンデルバルドからと思われる包みを発見し、そっと別のところへ置き直す。

安全を期すため、これだけは最後に、それも秘密の部屋あたりで開けた方が良さだろう。

「あつ、おはよう、セレネ！」

セレネがリータから届いた孔雀かなにかの羽ペンを指の先で回していると、隣のベッドから声をかけられる。ダフネ・グリーングラスだ。まだネグリジェ姿の彼女だったが、包みを大切そうに持っている。

「これ、誕生日おめでとう」

「ありがとう、ダフネ。開けてみますね」

セレネが包みを解く様子を、ダフネはにこにこ嬉しそうに微笑みながら見守っている。

箱を開けてみると、そこにはティーカップが入っていた。白磁のティーカップだが、持ち手のところが品のよさそうな銀と深緑で彩られている。

「セレネ、紅茶が好きだから」

「……使うとカエルになる呪いはかけられていませんよね？」

「そんなのかけないよ!」

ダフネが心外そうに目を見開いていたので、セレネはすぐ「冗談です」と謝った。
「ありがとうございます。大切に使用させていただきますね」

「え、えへへ……気に入ってもらえてよかった」

ダフネは照れくさそうに頬を掻くと、着替えに戻っていった。

セレネはティーポットを割れないようにしまい直し、残ったプレゼントに視線を向ける。

「……あれ、これ……？」

小綺麗な箱が出てきた。

手のひらサイズで、リボンの間に手紙が挟み込まれている。セレネは手紙を広げ、あつと息をのんだ。

それは、最愛の義父からの手紙だったのだ。

『セレネへ。』

17歳の誕生日、おめでとう。

そして、魔女としての成人おめでとう。

リータに“魔法使いが成人すると贈るもの？”を聞いたよ。時計を贈るのがならわしなんだって。それも懐中時計！　なんだか、クラシックでかっこいい習慣だよ。

それじゃあ、クリスマス休暇で会おう。

今年も旅行を計画しているから、楽しみにしていてね！　クイールより
手紙を脇に置き、そっと手のひらサイズの箱を開けてみる。

純銀製の懐中時計が入っていた。

蓋の表面は、深い森を閉じ込めたようなガラスが嵌められている。その周りを銀細工が蔦のように囲んでいる。時々、思い出したようにルビーが散りばめられてい

た。

蓋を開けると、シンプルな時計で大変見やすい。

底には、スイス製であることと、そして『1996.11 QからSへ』と刻まれている。

しきたりとはいえ、大盤振る舞いにもほどがある。

この調子なら、来年の本当の成人のプレゼントが思いやられた。

「……魔女の成人祝いはいらないって言ったのに」

気が付くと、セレネは口の端を上げていた。

そして、蓋をそつと撫でると貰ったばかりの懐中時計を胸ポケットに滑り込ませる。

「ダフネ、朝食に行きますよ」

「えっ、待ってセレネ。あと3分！」

支度が終わらない友人を見つめながら、セレネはクリスマス休暇に思いを馳せる。

直前にスラグホーンのクリスマスパーティーなどという面倒極まる行事があるが、それを取り切れば、待ちに待った休暇に突入だ。

今年、義父は自分をどこに連れて行くつもりだろう。

また日本だろうか。それとも、フランスか、ドイツか。はたまた、アメリカか。少なくとも、アルバニア以外であることには間違いない。

今回は3月17日 0時に投稿します。

これで、分霊箱が3つ破壊されました。

そして、次回はいよいよスラグホーンのクリスマスパーティーです。

「謎のプリンス編」前半の山場にさしかかるので、気を引き締めて執筆していきます

す。

77話 クリスマス前夜

ついに、話数がラッキーセブン！

気付いたら、お気に入り登録件数も5000件突破。

ここまで書くことができたのも、読者の皆様のおかげです。ありがとうございます！

これからも、楽しみながら自分のできる範囲で執筆していきたいです。

今後ともよろしく願います!!

凍りついた窓の向こうで、雪が踊り狂っている。

セレネの誕生日が終われば、すぐにクリスマスだ。

ホグワーツの城は、すっかりクリスマス仕様に様変わりしていた。すでに例年通

り大広間用のクリスマスツリー12本は、ハグリッドが一人で運び終えている。

柵と銀細工の花飾りが階段の手すりに巻き付けられ、鎧兜の中には永久に燃える蝋燭が輝いていた。まことに美しい装飾が施されているのだが、しいて欠点をあげるのであれば、廊下には一定間隔でヤドリギの塊が吊り下げられていることだろう。ヤドリギの下には、女子に人気な男子生徒——特に、ハリー・ポッターが通るたびに大勢の女の子が集まってくるので、しばし廊下は大渋滞となった。

「ポッターが、英雄色を好むじゃなくてよかったよね」

ダフネがヤドリギを見上げながら話しかけてきた。

「ヤドリギの下で女の子たち、一人一人にキスしてたら、渋滞がいつまで経っても収まらないもの」

「それは、確かにそうですね」

セレネはダフネに同意した。

もし、ハリーがフェルグス・マック・ロイみたいな色男だった場合、群がる女の子たちを拒むことなく、すべて受け入れていただろう。しかし幸か不幸か、ハリーは謙虚だった。ヤドリギが設置されて数日は渋滞が起きていたが、ハリー自身がヤ

ドリギなしの裏道を通るように心がけているのだろう。渋滞の頻度は減り、ヤドリギの傍でハリーが通るのを今か今かと待ち望む女の子たちしか見られなくなっていた。

「そういうえば、セレネは今夜のスラグホーンのクリスマスパーティーに招待されているんだよね？」

「ええ、今晚ですよ。……あまり乗り気はしませんが」

今晚を乗り切れば、明日はクリスマス本番だ。

つまり、朝が来ればようやく家に帰ることができる。荷支度は既に終わっているし、帰宅の準備は万全だ。

セレネの心はスラグホーンのパーティーで人脈作りに励むよりも、明日の帰宅の方へ向けられていた。

だからだろう。

「ねえ、セレネ。やっぱり、セレネはセオドールと行くの？」

「えっ？」

セレネはダフネから不意打ちの質問に、すぐ対応することができなかった。セレ

ネは少し驚いて言葉を失くし、まじまじとダフネを見てしまう。

「えっ、じゃなくて、スラグホーンのパーティーにセオドールと行くの？」

「……なぜ、私がセオドールと？」

「え、違うの？」

ダフネも驚いたらしい。目をぱちくりさせ、信じられないものでも見たような顔をしている。

「ダンスパーティーは彼と行ってたよね？」

「彼が立场上、他に行く人がいないと言ったからです」

それなりに楽しく過ごすことができたが、ある種の仕事の延長線だ。

二度も強要するわけにはいかないし、あれから親衛隊も個々の意志を尊重する組織へと改革されている。彼が好きな人と一緒にパーティーへ行っても、誰も文句を言わないだろう。

セレネがそう伝えると、ダフネは少し考え込むような仕草をする。

「うーん……じゃあさ、セレネ」

ダフネは意地悪そうな笑みを浮かべると、セレネの顔を覗き込んできた。

「彼がさ、『好きな女の子として、一緒に行って欲しい』って頼んで来たら、どうするの？」

「っぷ、あはははは」

セレネはダフネの言葉を耳にした瞬間、おなかを抱えて笑い出していた。

「ありえないですよ。あの人が私のことを好きだなんて……」

セオドールとは、互いに良い面も悪い面も知り尽くした仲である。

いまでこそ、相棒のような関係を築いているが、最初なんて脅しからのスタートだった。脅し上等、策謀大好き、打倒蛇男を掲げた直死の魔眼持ちの半人間——……セレネが彼だったら、こんな悪いセールスポイント満載の女を好きになるはずがない。

「でも、セレネ。ポッターはセレネのこと好きだって言ってたじゃん。セオドールだって」

「ハリーは私の良い面しか知りませんから。本性を知ったら、確実に離れていきますよ」

「本性って……セレネ、大げさな」

ダフネが呆れたような顔をしていると、上から声が降ってきた。

「セレネ！」

顔を上げてみると、階段の上から話題の人物が身を乗り出ししている。変身術の後なのか、片方の眉が黄色に染められていた。

「ハーマイオニー、見なかった？」

「いいえ、見ませんでしたけど……」

セレネとダフネは顔を見合わせると、再びハリーに目を向ける。

ハリーは自分の鞆だけではなく、もう一つパンパンに膨らんだ鞆を抱えていた。記憶が正しければ、ハーマイオニー・グレンジャーの愛用する鞆である。

「どうかしたのですか？」

「実は変身術でいろいろあって……悪いけど、セレネ。女子トイレの中を見て来てくれないかな？ 僕、入れないから」

「かまいませんよ」

「じゃあ、セレネ。私、そろそろ古い学が始まっちゃうから、またあとでね」
セレネはダフネと別れると、変身術の教室から一番近い女子トイレに入った。

トイレに入ると、まるで「嘆きのマートル」がいるような押し殺したようなすすり泣きが響いている。

「そっか。そんなことがあったんだ」

その泣き声に寄り添うように、ふわふわとした声が重なっている。

「ルーナ・ラグブッド？」

トイレの洗面台のところに、ルーナ・ラグブッドと目を腫らしたハーマイオニーの姿があった。

「ああ、セレネ。こんにちは」

「こんにちは。ハーマイオニー、ハリーがあなたを探してましたよ？ トイレの入り口で待ってます」

「あ、ありがとう」

ハーマイオニーは声を詰まらせながら頷くと、目を拭っていたハンカチをしまった。そして、いそいそとトイレから出て行く。トイレの外で待っていたハリーが何か言いながら、ハーマイオニーに鞆を渡していた。

「ちよっと落ち込んでいるみたいだね」

セレネが二人の様子を見てみると、ルーナが言った。

「最初は『嘆きのマートル』がいるのかとおもったんだけど、ハーマイオニーだったんだもん。ロン・ウィーズリーのことをなんだか言ってた」

「あの二人、よく喧嘩しますよね」

セレネが呟くと、トイレの外のハーマイオニーは急ぎ足で去っていくところだった。

「ありがとう、セレネ。ルーナも」

「別に構わないよ。ロンと喧嘩したの？」

「まあ……そうだね。いろいろ喧嘩したんだよ」

「ロンって、ときどき酷いところがあるな。あたし、去年気がついたもん」

ルーナが言いにくそうなことをオブラートに包まず、ずばりと言いつつ。

ハリーもあいまいな顔で同意していた。

ロン・ウィーズリーは、けっして悪い人ではない。だが、やや偏見があったり、相手の気持ちも考えずにずばずば言葉を切り込む悪い癖がある。深くは聞かないが、きつと今回もその癖が悪い方へと転じてしまったのだろう。

「そういえば、ハリー。あんた、眉が片方黄色になってるよ？」

「あ……そうだね、忘れてた」

「直しましょうか？」

「あー……お願いできる、セレネ？」

セレネは杖を取り出すと、ハリーの眉をとんとんと軽く叩いた。眉から黄色が吸い取られ、たちまち元の黒色へと戻っていく。

「じゃあね、ハリー、セレネ。DAが再開するときは教えてね」

ルーナはそう言うのと、首にかけられたコルクを触りながら去っていった。

「ルーナには悪いですけど、2人が仲直りしない限り、DAの再開はなさそうですね」「再開も何も、アンブリッジがいらないんだからやる意味ないだろう？」

「……まあ、それもそうですね」

DAはやっていないが、セレネが昨年度始めた試験対策クラブは継続中だ。活動回数こそ減らしたが、親衛隊の力量底上げは継続中である。すでに幹部クラスは、死喰い人とやり合えるだけの力を身に付けていた。あとは、その力を悪用したり私利私欲のために使わせたりしないように教育するだけである。

「私はDAが好きでしたよ。スリザリン寮は閉鎖的なので、他寮の人と知り合えたのは嬉しかったです。」

それから――」

「ねえ、セレネ。僕と一緒にスラグホーンのパーティーに行かないかい？」

セレネの言葉をぶった切り、ハリーが誘いの言葉を突いてくる。セレネは足を止め、少し驚いたようにハリーを見た。

昨年、いろいろあってハリーが自分に好意を抱いていることは知っている。

けれど、それを正面からお断りしたのも覚えている。ハリーもそれを受け入れ、それ以後は普通の友だち同士として付き合ってきたつもりだった。

ハリーは、まだ自分と友だち以上の関係になりたいのだろうか。

「それは……今晚のことですか？」

「うん。ほら、パートナーを連れて行くことになってるだろ？ その、君さえ良ければ――……ほら、友だちとして！ 友だちとしてだよ！

それに、他に誘えそうな女友だちが、その、いなくて……」

ハリーの顔が真っ赤になっている。

セレネは少しだけ迷った。

この申し出を断る理由はない。

友だちとしてなら、なおのことである。

それに、ハリーと一緒にいることで、スラグホーンが彼に紹介したい重要人物たちと間接的に知り合うことができる。もしかしたら、そこから打倒サイコパスの協力者に繋がる人脈の確保ができるかもしれない。これは、十分においしい話だ。断る理由どころか、喜んで受けたい提案だ。

しかし、自分は何を躊躇っているのだろう。

「あー……もちろん、セレネの気が進まないなら……別に、かまわないけど……」
「えっ、いえ、別に気が進まないわけでは……」

セレネは一瞬、脳裏に横切った何かをかき消すと、いつもの笑顔を浮かべた。

「友達としてですね。ハリー、よろこんで受けさせていただきます」

「ありがとう！ それじゃあ、八時に玄関ホールで——……」

「ハッハーン!!」

頭上で甲高い声がして、2人は跳び上がった。

セレネたちは気が付かなかったが、ポルターガイストのピーブズがシャンデリアから逆さまにぶら下がって、意地悪いにやにやした笑みを浮かべていたのである。

「ポッティがゴーストをパーティーに誘った!! ポッティはゴーストが好きー!!」
ピーブズは変な抑揚をつけて甲高く叫びながら、高笑いと共に消えていった。

「えっと……誰にも言わないで貰えると嬉しいな。それじゃあ、またあとで」

ハリーは苦笑いをしたまま去っていったが、おそらくセレネが言わなくても広まってしまっただろう。なにしろ、歩く拡声器ことピーブズに話を知られてしまった。案の定、あつという間に学校中にハリー・ポッターがセレネ・ゴーストをスラグホーンのパーティーに連れて行くことが知れ渡ったようだ。

夕食の時、大広間に入った瞬間、数多の女子の強烈な視線を感じる。

セレネが歩くたびに悔しそうな声があちらこちらから聞こえてきた。

「ポッターの誘いを受けたのね」

「ええ、友だちとして誘われたので。断る理由ありませんでしたから」

セレネはダフネの問いかけに対して、正直に答えながらパンを手を取った。

「なんだ、ゴースト。ポッターと行くのか？」

セレネがパンを口に運んでいると、ザビニが気取った調子で話しかけてきた。彼の隣ではセオドールがいつにも増して不機嫌面を下げている。

セレネはすっと目を伏せた。

「ええ。友だちとして誘われましたので。

たしか、あなたたちも今日のパーティーに行くんですね？」

「いや、僕だけだ。レイブンクロウのパドマ・パチルと知り合ってる。彼女と行くのさ」

「え、あなたは行かないのですか？」

セレネは顔を上げると、少しだけ目を丸くする。セオドールは何も答えない。ただむすっとした顔のまま、キドニーパイに取りかかっている。どこことなく、拗ねているようにも見えた。あまり彼らしくない。

「あー、こいつはいろいろとあってね。行きたくないんだと」

ザビニがやれやれと肩をすくめると、代わりに答えてくれた。

「誘いたい人を誘えなかったとか、そういうことですか？」

「ま、そんな感じ。犬が争っている間に、狼が羊を食っちゃったところさ」

「つまり、セオドルが誘いたかった女性は……パドマ・パチル？」

セレネは最後のパンを口に放り込むと、ザビニの方に額を寄せて尋ねてみる。

セオドル・ノットとブレース・ザビニは友人関係だ。その友人に自分の想い人を取られたら、それはあまり良い気持ちがないに決まっている。パーティーに行きたくなるのも当然だろう。

ところが、それを聞いたザビニはよほど驚いたのだろう。食べていたタルトを喉に詰まらせ、咳き込みながら何度か胸を叩き始めた。

「ごほっ、ごほっ……いやいや、ゴーント。君は、なんでそうなるんだ」

「違うのですか？」

「当たり前。ま、ともかくこいつは落ち込んでるわけよ。好いた女子の気持ちが分からないってね」

「……」

きつと、セオドルは人気のある女子生徒に誘いをかけようとしていたのだろう。

その過程で他の男子生徒と争っている間に、ひょいっと取られてしまったのだ。

「私には、分かりませんね」

セレネはゴブレットに水を注ぎながら小さく呟いた。

「好きなら好きって、さっさと言えればいいのに」

「分かってないな、ゴースト。それが言えないのが、男心ってもんなんだよ」

「そうですか。ちなみに、誰を誘おうとしていたのか教えて——……」

「おい、ゴースト！」

ここでようやく、セオドールが口を開いた。

けれど、不思議と視線は合わない。不思議なくらい熱心にパイの切り口を見下ろしていた。

「スラグホーンのところに行くなら、着替えた方がいいんじゃないのか？」

「あ……それもそうですね。ありがとうございます」

待ち合わせの時間まで、あと1時間と少ししかない。

セレネは急いで荷物をまとめると、大広間から出て行った。

とはいえ、そこまで支度到手間取る必要はない。

自分のドレスを身に纏い、肩まで伸びた黒髪少し編み込みを入れていく。それをシニヨンみたいに軽く結びあげ、薄桃色の花飾りをつけた。

「……うーん……」

ドレスアップした自分の姿を見て、セレネは少しだけ嘆息する。

ダンスパーティーの時にも着た落ち着いた青色のドレス姿だ。相変わらず、真紅のボレロも我ながらに良く似合っている。だが、ダンスパーティーと言えば2年前だ。しかも、このドレスを貰ったのは3年前。それだというのに、胸の辺りが少しも苦しくならない。せいぜい、丈がほんのわずか短くなっただけくらいである。

「これ以上、成長しないのかな」

セレネは肩を落としながら、腰のリボンに杖を差した。

時間は八時になろうとしている。

靴を丈の低いヒールに履きかえると、セレネは玄関ホールに向かった。

玄関ホールは尋常でない数の女子生徒がうろうろしていた。その視線は、ほとんどすべてセレネに向けられている。ようは嫉妬だ。ハリーと行けなかったことが、よほど悔しいのだろう。

しかし、陰口をたたかないところからするに、そこまで強気には出られないらしい。

「ごめん、セレネ。待った？」

八時ちょうどにハリーが姿を見せた。

彼はダンスパーティーの時に来ていたローブかと思ったが、よく見ると襟のところにぴしりと糊がかかっている。どうやら自分とは違い、卸したてのドレスローブらしい。

「いえ、いま来たところです。それでは行きましょうか？」

「うん、行こう。スラグホーンの部屋でやるんだよね」

セレネとハリーは嫉妬の視線をいっぱいに浴びながら、大理石の階段を登り始めた。

「吸血鬼が来る予定だって、聞いてる？」

「吸血鬼ですか。にんにくと十字架を用意した方が良かったですか？」

「さあ、どうなんだろう。僕、見たことないから」

「私もですよ、ハリー。本で読んだだけです」

セレネは階段の手すりを触りながら、本で得た知識を思い返した。

「魔法界には、血が飲めない吸血鬼もいるそうですよ。代わりに、カレーを浴びるほど食べているらしいです」

「そんな吸血鬼がいるの!? 僕、知らなかった。セレネは物知りだね!」

「……まあ、たぶん、本当にいるわけないと思いますけど」

セレネは最後の言葉を小さく付け加えた。

スラグホーンの部屋に近づくにつれ、賑やかな笑い声や音楽が一足ごとにだんだんと大きくなっていった。

スラグホーンの部屋は魔法で拡張され、天井と壁はエメラルド色、紅、そして金色の垂れ幕の飾りで優雅に覆われ、全員が大きなテントの中にいるような感じがした。中は込み合っており、熱気が凄い。

「あー、ハリー! こっちだ、こっち!」

ハリーが一步、中に入るや否や、スラグホーンの太い声が響いた。

「セレネもいるんだね。2人ともこんばんは。さっそくだが、ハリー。君に引き合わせたい人物が大勢いるんだ!」

スラグホーンはがっちりハリーの腕をつかむと、パーティの真ただ中へ導き始める。セレネは放置されるのかと思ったが、ハリーがセレネの手をつかみ、一緒に引っ張っていかれた。

「ハリー、こちらは——……」

スラグホーンは著名人を紹介していく。

時に写真と一緒に撮り、ご満悦の様子だ。噂の吸血鬼は少しやつれ、とてもつまらなそうに立っていた。彼のことを「血兄弟」と呼び、本にまで仕立て上げた作家は吸血鬼には目もくれず、ハリーに「君の半生を伝記にしたい！」と商談を持ちかけている。まるで、吸血鬼をファッション犬のように連れ歩いている感じだ。リータ・スキーターもいけすかない書き手だが、この人物はこの人物で好きにない。商魂は人一倍強そうだが、人間としては最低の分類に属する可能性がある。セレネがバタービールを片手に様子を眺めていると、ハリーはこの場から逃げ出す方法を見つけたらしい。

「すみません。僕、まったく興味がありません。それに、友だちを見かけたので失礼します」

ハリーは口早に言うのと、再びセレネの手をつかんで歩き始める。

「ハーマイオニー!!」

彼が目指した先にいたのは、ハーマイオニーだった。

長く豊かな栗色の髪は、まるで「悪魔の罠」の茂みと格闘して逃れてきたばかりのように乱れている。

「ああ、ハリー。ここにいたのね。セレネもこんばんは」

「こんばんは、ハーマイオニー。その……何かあったのですか？」

「ええ、逃げてきたところなの。つまり、コーマックを置いてきたばかりなのよ。……ヤドリギの下に」

ハーマイオニーはげっそりと疲れた顔をしていた。

「コーマック？」

セレネは眉間に皺を寄せてしまう。聞き間違えかと思った。

コーマック・マクラーゲンといえば、4年生の時にダンスパーティーに誘われ、断ったら逆切れされたグリフィンドール生だ。その後、ミリセントのパートナーになったが、大広間入場前の時点で破局していたことは懐かしい思い出である。

つまるところ、あまり好印象を持てる人物ではない。そんな人と、どうしてハーマイオニーが一緒に行くことになったのか、セレネにはまったく理解できなかった。

「あのコーマック・マクラージェン？」

「あいつと来た罰だ」

ハリーが厳しい口調で言う。それに対し、ハーマイオニーは冷静に口を開いた。
「ロンが一番嫌がると思ったの。ほら、あの人。コーマックとキーパーを争ったときから嫌いだし……でも、やめておけばよかったわ。まだ、ザカリアス・スミスにしておけばよかった」

「つまり、ウィーズリーへの当てつけですか」

セレネは小首を傾げた。

恋愛とは分からないものだ。昼間は随分とウィーズリーに酷いことを言われたらしいのに、それでも好きで、彼への当てつけまで考えるなんて、本当にどうかしている。

「やあ、ハリー、ハーマイオニー、セレネ」

セレネが理解に苦しんでいると、白い服を着たボーイに話しかけられた。

否、ボーイではない。ネビル・ロングボトムだ。彼の手にした銀の盆には、丸くて得体のしれない料理が並んでいる。これでは、完全に使用人の装いだ。セレネたちが目を丸くしていると、ネビルは苦笑いをした。

「僕はホールの給仕役なんだ。ちなみに、ベルビィはトイレのタオル役。これどう、ドラゴンのタルタルだよ」

「美味しいの？」

「うん、美味しいけど、とっても臭いんだ」

「食べておくわ。コーマック避けに」

ハーマイオニーがネビルから盆を奪い取ると、いそいそと口運び始めた。よほど、マクラーゲンが嫌だったのだろう。無理もない。セレネも彼は嫌いだ。

ネビルは「僕、他の料理も持ってくるね」と言って去っていった。

「ずいぶんとマクラーゲンは嫌われていますね」

セレネが言うと、ハーマイオニーは切羽詰まった顔をしていた。

「だって、コーマックは私のことを一度も聞かなかったのよ？ ただの一度もよ？ 私がお聞かせいただいたのは、『コーマック・マクラーゲンのすばらしいセー

『ブ百選』連続ノンストップ。ずっーとよ？　気が滅入るといふか——あ、いや、嫌だわ。こっちに来る！　じゃあね！」

ハーマイオニーはハリーに盆を押し付けると、まるで「姿くらまし」をしたかのように素早く去っていった。ずいぶん遠くにいるバカ騒ぎしている魔女の合間に消えたのを最後に、彼女の栗色の髪は見えなくなってしまった。

「ハーマイオニーを見なかったか？」

1分後、マクラーゲンが人ごみをかき分けるようにしてやって来た。

「いいや」

「……まあいいさ。やんちゃな子ネズミほど可愛いものはない」

マクラーゲンはキザったらしく言いながら、ドラゴンのタルタルを一つ盛大に頬張った。だが、食べたことのない味だったのだろう。少し顔をしかめ、ハリーに目を向けた。

「これ、なんだ？」

「ドラゴンのタマタマ」

ハリーが意地悪そうに笑いながら言った。マクラーゲンは気分を害したのだろ

う。その場で下に顔を向けて、口から吐きだしてしまう。それも、運の悪いことに自分の足元ではなく、少し前——ちょうど、目の前に現れたセブルス・スネイプのローブめがけて放出してしまった。マクラーゲンは顔を上げた瞬間、さっと青ざめる。

「一か月の罰則」

スネイプが冷ややかに言うと、マクラーゲンはその場に崩れ落ちた。

狙っていた女の子に逃げられ、おぞましいものを食べてしまい、みっともなく吐き出した先は、ホグワーツで最も機嫌の悪い教授のローブ。おまけに一か月の罰則付きともなれば、彼の人生で最低な日を更新してもおかしくないだろう。

ハリーはくぐもったように笑いながら、セレネを連れてその場を去ろうとする。

——ところが、その目論見は上手くいかなかった。

「待ちたまえ、ポッター。話がある、来たまえ」

スネイプに呼ばれ、ハリーはすごすごとついてしまった。

「ダンブルドアは今夜から留守にしている。クリスマス休暇明けまで帰ってこない

——……」

スネイプが事務連絡のように、なにかをハリーに伝えている。きっと、ダンブルドアとの個人授業の話だろう。セレネもハリーの後に続こうとしたが、一步踏み出す前に声をかけられた。

「セレネ先輩」

「こんばんは、良い夜ですね」

同じくスラグ・クラブに所属している親衛隊幹部——フローラ・カローとヘスティア・カローだ。

二人ともシンプルな深緑色のドレスを纏い、月の雫を集めたような金色の髪を背まで伸ばしている。いつも美人な双子姉妹だと思っていたが、今日はますます磨きがかかり、高級な人形のようなだった。

「こんばんは、フローラとヘスティア。あなたたちのパートナーは？」

「いませんわ。別に気になりませんもの」

フローラがきっぱり答えた。

ヘスティアも隣でこくこくと頷いている。

「それよりも、先輩。あちらで一緒に歓談しませんか？」

「お料理も飲み物もそろっていましたわ。ポッターも手が離せないみたいですし」
ヘスティアがちらりとハリーが去っていった方向へ視線を向ける。

見れば、ハリーはスネイプだけでなく、真っ赤な顔をしたスラグホーンにも捕まっていた。スラグホーンはハリーの手をがっちりつかんでいる。あれでは、当然逃げ出すことはできないだろう。

「魔女の大鍋ケーキはありましたか？」

「もちろんです。そうですね、ヘスティア？」

「ええ、姉様。糖蜜パイやバタービールもありましたわ」

「そうですね、それでは——……」

と、セレネがそこまで口にした瞬間だった。

なにか小さなものが閉ざされた窓を突き破って迫ってきたのである。咄嗟に杖を抜き盾の呪文を展開しようとしたが、セレネに当たる目前でそれは止まった。ちっぽけな銀色の虫だった。セレネもカロー姉妹も、この虫の侵入に気付いた周囲の客人たちも、目を点にして虫を見つめる。

虫の小さな小さな口が開き、その矮小さからは考えられないようなくらい大きな

声で話し出した。

「あの人が来た。逃げられない」

女性の声だった。短い伝言を言い終えると、虫は霞のように消え去った。

いまの話を聞いていたカロー姉妹を含むほとんどの客は事情が呑み込めず、なにかおかしいことが起きたと気づき始めたばかりだった。

セレネも何が起こったのか分からず、頭が真っ白になっていた。

「うそ、でしょ」

数歩、後ろに下がる。

今の声は、間違いなくリータ・スキーターの声だった。

そして確実に『あの人が来た』と言っていた。『逃げられない』とも言っていた。

つまり——……

「お父さん！」

考える前に、足が動いていた。

セレネは弾かれたように回れ右をすると、人ごみを押しのけるように走り出した。

後ろからカロー姉妹たちの声が聞こえたが、振り返る余裕はないし、追いつくまで待つ暇もない。談笑している間を無理やり抜けたり、誰かの背中にぶつかってしまい、悪態をつかれたが気にするゆとりなんてない。

ついに、おそれていた事態が起きてしまった。

幸いなことに、リータが守護霊を飛ばしてくれて事態を知ることができたが、悲しいことに自宅まで急行する手段がない。魔法使いの家なら暖炉ネットワークとやらでいけたのだろうが、一般マグルの家庭には暖炉など旧式な暖房装置はない。箒やセストラルでは遅すぎる。姿くらましはそもそも、学校内で使えないし、試したことがなかった。人間は、どのような場所でもぽんっと姿をくらませたりあらわせたりできる屋敷しもべ妖精とは違うのだ。

と、ここまで考えたとき、セレネの脳裏に一人のしもべ妖精の姿が浮かんだ。

「そうよ、クリーチャーだ！」

あのしもべ妖精なら、頼み込めば、家まで「姿くらまし」をしてくれるかもしれ

ない。

そうと決まれば、向かう先は決まっている。

セレネは廊下にとび出ると、厨房を目指して駆けだした。ヒールはバランスがとりにくくて走りにくいので、さっさと脱ぎ棄てる。

『「アクシオ―靴よ来い！」』

杖を軽く一振りする。

これで、厨房に辿りつく頃には自室から愛用の靴が飛んでくるはずだ。

本当ならこのドレスも脱ぎ捨て、気慣れた私服か制服に着替えたいところだが、そこまでの時間的余裕はない。やっとのことでセレネは厨房の前に着いたが、扉はなく、巨大な果物の絵画が掛けられている。ずっと昔、ハーマイオニーに教えてもらった通り、扉に描かれた梨の絵をくすぐった。すると、梨はくすぐす笑いながら身を過り、大きな緑色のドアの取っ手になる。

セレネはドアを開けると、滑り込むように内側へ入り、できるかぎり大きな声を出した。

「突然、すみません！ クリーチャーはいますか!？」

しもべ妖精たちは、突然の来客に驚いたようだった。

百をも越すしもべ妖精たちは、皆がホグワーツの紋章が入ったキッチンタオルをトーガ風に巻き付けて結んでいる。その中の一人が、おずおずと前に出てきた。

「お嬢様、クリーチャーはここにはございません」

「いない？ どうして？」

セレネが尋ねると、そのしもべ妖精は申し訳なさそうに首を横に振った。

「クリーチャーの本当のご主人様が聖マングを退院なされ、お屋敷に戻られたそうです。ですので、クリーチャーはこちらの職を辞めて、本来のお屋敷へと戻っていったのでございます」

「お嬢様、クリーチャーでなければならぬ仕事なのでしょうか？」

しもべ妖精たちの目が、セレネに向けられる。

確かに、クリーチャーでなくても屋敷しもべ妖精なら誰にでもできる仕事である。ただ運べばいいだけだ。もっといえば、運んで戻してもらえと助かる。

しかし、この申し出を受け入れてくれるだろうか。セレネは少し迷ったが、時間がない。こうしている間にもリータがヴォルデモートに屈し、その魔の手が義父へ

と及んでしまうかもしれない。

セレネは一度目を伏せると、覚悟を決めた。

「……誰でも構いません。私を今すぐ家に送り届けてください。義父の命が危ないんです」

「お嬢様。それは危篤、ということですか？」

「ヴォルデモートが、私の家を襲っているんです」

その名前を口に出した途端、しもべ妖精たちの顔色が変わった。

どちらかといえば好意的だった表情が一変して、誰もが青ざめぶるぶる震えている。

「お嬢様、それは罠でございます」

「ダンブルドア校長先生様に頼めばいいのです。お嬢様は、ここで大人しくしていればいいのです。危ないでございます」

しもべ妖精たちはキーキー声で止めにかかって来る。

ああ、確かに罠かもしれない。

義父は餌で、自分を誘き寄せるための罠かもしれない。

以前、ハリーが「シリウスが拷問されている夢」を現実ではないかと疑って、今の自分のように飛び出していったときのことを思い出した。

あのときは、不自然な点が多すぎた。夢というにわかには信じがたい媒体、夕方の5時だというのに魔法省にヴォルデモートがいること、隠れ家にいるはずのシリウスが捕まっていること――……数えだしたらきりが無い。

しかし、今回の情報源はリータ・スキーターの守護霊だ。

彼女は契約上、セレネに嘘をつくことができない。だから、確実に本当の出来事だ。

リータ・スキーターは『命がけで義父を守れ』と命令してある。その言葉通り、おそらく命がけで戦ってくれるだろうが、ただのマスコミ女だ。百戦錬磨のヴォルデモートに勝てるわけがない。しかも、義父はタダのマグルである。シリウス・ブラックとは違って、ヴォルデモートどころか魔法使いと戦える術を持っていない。もし、グリンデルバルドがいれば、彼を助けに向かわせることがきただろう。ところが、悲しいことに、彼がいるのはアルバニアだ。守護霊で緊急連絡をとばしたところで、イギリスまですぐに戻ってこれる保証はない。

もう一人の協力者、マندانガス・フレッチャーはたんなるコソ泥だ。ヴォルデモートの攻撃をしのぐ盾にしかない。

「ダンブルドアは……いま、ホグワーツにいません」

セレネは声を絞り出すように口にする。

ダンブルドアがいない。スネイプやマクゴナガルは騎士団員だが、助けを求めに行く時間すら惜しい。

すぐに愛する義父を助けられるのは、自分しかない。

「お願いします。一秒でも早く、行かないといけません」

セレネが頭を下げると、しもべ妖精たちの間にどよめきが広がった。

誰もがセレネの近くに寄り添い、「行ってはいけない」「ダンブルドアに任せればいい」と慰めるように言ってくる。その中で、一人だけ――

「わたくしが、連れていきます」

ブラウスにスカート姿のしもべ妖精が声を上げてくれた。

ブラウスの前はスーパの染みだらけで、スカートには焼け焦げがあった。

「ウィンキーでございます、お嬢さま」

大きな茶色の目が、まっすぐセレネを貫いていた。

周りのしもべ妖精たちは待ったをかけているが、彼女の覚悟も堅い。周囲の言葉は一切聞き入れず、セレネに細い手を差し出した。

ちょうど、愛用の靴も厨房まで届いた。

セレネのくるぶしあたりに浮かびながら、履かれるのを待っている。セレネは靴を素早く履くと、ウィンキーに手を伸ばした。

「ありがとう、ウィンキーさん」

「お嬢様、ご自宅の住所をお言いください」

セレネは早口で住所を伝えると、ウィンキーの手を取った。

途端、ぱちんつという音と共にお腹が引っ張られるような感覚が身体を走る。そのまま身体が圧縮されて、小さなパイプの中を通るような締め付けられる感覚の後

セレネの両足は厨房の堅い地面から離れたかと思ううちに、懐かしのリビングに打った。

※

セレネが厨房で「姿くらまし」をする数分前のことだ。

リータ・スキーターは最後の一行を書き終えると、大きく伸びをした。

ぐっと後ろに下がったので、使い慣れ始めた椅子がかたんと音を鳴らす。

「リータさん、終わったの？」

リータが執筆を終えた脱力感に浸っていると、ふわっとした声が降ってきた。

「ええ、終わったでざんす」

「そうか、お疲れ様」

そう言うのと、クイールはにっこり微笑みながらコーヒーを淹れてくれた。

リビングはコーヒーの良い香りが充満している。

この男は実に準備が良い。彼は、リータが執筆がひと段落ついたところでコーヒーを飲むことをよく覚えていた。お湯の量、豆の種類、ミルクの入れ具合も完璧だ。文句の付け所がない。

「例の校長先生の伝記だっけ？」

クイールはそう言いながら、リータの前に座った。

「セレネの通う学校だから、興味があるな。読んでもいい？」

「駄目です。これは、魔法界の本ですから」

リータはさっと原稿用紙を鞆にしまった。

「……そうか、なら仕方ないね。でも、いつか君の書いた本が読みたいな」

「ご安心を。あなたにだけは、絶対に見せないですよ」

リータがつんつと突っぱねると、クイールは残念そうに微笑みながらコーヒーを啜った。

不当な契約を結ばされた娘の方はもちろんだが、義理とはいえ父親の方も苦手

だった。

娘の方は完全なる恐怖支配だ。

可愛らしい顔の裏側には、残忍かつ自己中心的な本性を隠している。

ヴォルデモートを倒し、義理の父親と安らかに暮らすただけに、グリンデルバルドの脱獄に手を貸して協力者に仕立て上げるまでしてのけた。

そんな彼女の父親は、どこまでも穏やかで優しい男だった。

きつと裏の顔があるはずだと探ってみるが、裏の顔なんてなかった。どこまでも平凡で平均的で、誰に対しても優しくして詐欺に引っかかりそうな危うい人——それが、セレネ・ゴントの愛する義父だった。

「……ま、分かる気がするぞんす」

静かにコーヒーを飲む姿を見つめながら、リータは口の中で呟いた。

確かに、この男は一緒にいて心地が良い。疲れないし、そっと寄り添いたくなる温かさがある。

どこまでも害がなくて、まったく面白みの欠片もない男なのに——……

リータが自分らしくもない感傷に浸っているときだった。

かたんと、玄関の開く音が聞こえてきた。リータは固まった。玄関の鍵は当然、閉めてある。クイールは知らないが、普通の鍵の上から魔法で特別な錠前をかけてあるのだ。普通の押し入りは絶対に入らないし、平凡な魔法使いなら破ることのできない魔法だ。

それを打ち破られた。

それが意味することは、間違いなく自分より力量のある魔法使いが押し入ったということだ。絶対に良い意味ではない。リータは椅子を倒す勢いで立ち上がると、クイールに手を伸ばした。

「つかまるぞんすっ！」

「えっ？」

「いいから、逃げるぞんすよ!!」

リータはクイールの手を無理やりつかみ「姿くらまし」をしようとした。

しかし、する直前で身体が押さえつけられたような感覚が奔り、その場でくるり

と回っただけに終わってしまった。

「つく、姿くらまし防止呪文ぞんすか!？」

リータは憎々しく叫ぶと、杖を取り出した。

コーヒーマグに乗っていることなど構うことなく、机と椅子を無理やり浮かせ、リビングの扉に押し付ける。最低限のバリケードでしかない。

「あんたは裏から逃げるさんすっ!」

リータはぼかんとしているクイールに向かって叫ぶと、ぎゅっと目をつぶった。神経を集中させ、いま最も幸せだと思うこと——……つい先ほどまで味わっていた幸福な風景に意識を集中させながら杖を振った。

「『エクスペクト・パトロナム―守護霊よ、来たれ』!!」

杖の先から、銀色の小虫が二匹とび出てきた。

二匹とも、リータの頭の上を旋回すると、締めきった窓を通り抜けて夜の闇へ消えていく。初めて成功したので、伝言が上手く乗せられているか分らないが、セレネにもグリンデルバルドにも緊急性は伝わるだろう。だが、成功に安心する時間的余裕はない。

「なに、ぼけっとしてるざんしょ!? ほら、早く逃げないと、あの人がやって来るぞんすよ!」

「ご名答、リータ・スキーター」

リビングの扉が吹っ飛び、鼻のない男が姿を見せる。

リータは咄嗟にクイールを庇うように前にとび出ながら、足が震えているのを感じた。

「れ、例の、あの人!」

「あれが……」

リータ・スキーターは、ヴォルデモートがこの世で最も怖かった。

新人記者としてデビューした当時の仕事で、ヴォルデモート失墜後に逮捕された死喰い人の尋問の報道だったからかもしれない。死喰い人たちは皆、誰しもが狂っているように見えた。特に、ヴォルデモートを探そうとした死喰い人たちは、ヴォルデモートの正当性を唱え、いつか復活することを嬉々として訴えていた。彼らの狂信ぶりが心底怖く、また、それらをすべて束ねる親玉——ヴォルデモートはどれだけ狂っているのか、想像することもできないくらい恐ろしかった。

「彼が……ヴォルなんとか卿？」

クイールも彼から目が離せないようだ。

マグルであっても、目の前の男の異様さには気づいたらしい。いつもより顔が青ざめて見える。

「正しくは、ヴォルデモート卿だ。冥土の土産に覚えておくがいい」

ヴォルデモートは残忍な笑みを浮かべると、すっと杖をこちらに向けてきた。

リータはクイールを背中に隠すように前に出る。

「リータさん!？」

「だから、早く逃げるざんしょ!! あたしが時間を稼ぐから——……」

「マスコミ風情が俺様相手に時間を稼ぐだと？」

ヴォルデモートが静かに嗤う。

「いいか、俺様が欲しいのは、そのマグルの命だ。お前ではない。むしろ、お前の才能は評価している。

お前のおかげで、去年は随分と楽に行動することができた」

「——ッ！」

ハリー・ポッターを目立ちたがり屋の嘔吐き少年と書き立てたことだ。

リータはすぐにピンときた。別に本人としては悪いことをした自覚はない。マスコミの仕事とは、『大衆が望んだ記事』を書くことであり、『大衆の声を代表して声に出して伝える』ことである。恥じることはないし、評価されて喜ぶべきだ。

「後ろのマグルを渡せば、命だけは見逃してやろう」

リータは鼻のない男を見上げた。

杖がわずかに降ろしそうになる。

そう、助かる。

後ろのマグルを見捨てれば、自分は助かっていつも通りに仕事をすることができるのだ。

契約でヒキガエルになるから？ 関係ない。契約に縛られない程度に見捨てればいいだけだ。

いつだって、そうやってきた。

自分に言い訳をして、皆が好みそうな狡賢いゴシップ記事を書いてきた。

だけど、そのくせ攻撃されるのが怖くて、記事の元ネタになる者たちは反論できない弱い人や優しい人ばかり選んだ。ディペットの伝記を書いたときも、ダンブルドアの伝記を書くときも、彼らならどんな酷い暴露本を書いても、自分を攻撃しないと考えたうえのことだった。

人の善意を踏みにじり、事実にも人の興味を引きそうな悪意で塗り固められたスパイスをかけて記事や本を書いてきた。

だから、自分の著作物を、自分の知りうる最も善良な人にだけは見せたくなかった。

その人にだけは、自分の本当の姿——ちっぽけで金にたかる虫のような女であることを知られたくなかった。

その人は、自分の背中で震えている。

否、自分より前に出ようとしている。きっと、彼が男だからだ。男だから、女に

弱いところを見せるわけにいかないなんて前時代的な慣習に突き動かされている。それとも、自分が死ねばリータは助かると知っての行動かもしれない。むしろ、こちらの意味合いの方が強い気がした。

「馬鹿な人、ざんしょ」

リータは左手で後ろの男を抑えた。

「この人を渡すことだけは、お断りぞんす!! ——ヴォ、ヴォルデモート!!」

リータは杖を前に強く突き出した。

失神呪文の赤い閃光がヴォルデモートに走る。ヴォルデモートはつまらないもので見えるような顔をする、杖をの一振りで閃光を弾いた。リータが次の攻撃に移る前に、再びヴォルデモートは面倒くさそうに杖を振る。すると、リータの杖は自分の手から抜け落ちて、ヴォルデモートの足元に転がった。

これで、戦う術はない。

「そうか。なら死ぬがよい——『アバダケダブラ』!」

緑の閃光が奔る。

その向こうに、二つの影が降り立ったのが見えた。

黒髪の少女としも妖精だ。眼鏡の奥の瞳は、爛々と青く輝いている。

ああ、よかった。間に合った。

ルージュを塗りたくった唇がゆっくり弧を描いたとき、緑色の閃光が自分の胸に直撃した。

78 話 雲泥の差

セレネがリビングに足を降ろして、最初に目撃した人物はリータ・スキーターだった。

どこか嬉しそうに微笑んだ彼女が緑の閃光に包まれ、後ろへ仰け反るように倒れていく。彼女の後ろには、恐怖で目を見開いた義父の姿があった。

リータ・スキーターが死の直前に何を思ったのか、セレネには推測することができない。

だが、自分の命令通り、命を賭して義父を守ってくれたのだ。

それは嬉しくもあり、彼女の命を散らしてしまったことに対しての罪悪感が込み上げてくる。

ただ、彼女の死を悼む暇はない。

ヴォルデモートが、怯える義父めがけて再び杖を振ろうとする。

どの呪文が来るかは、考える前でもない。セレネは自分のポケットに入っていた賢者の石を取り出すと、ヴォルデモートが呪文を唱える前に投げ飛ばした。

「『アバダケダブラ』」

案の定、ヴォルデモートが放ったものは『死の呪い』だった。

緑色の閃光が、固まる義父の心臓めがけて奔り出す。

しかし、間一髪。セレネの投げた賢者の石が緑色の閃光に衝突した。パラケルス版の賢者の石は死の呪いを吸収すると、ぱんつと軽やかな音を立てながら弾け消えた。

「こっちですよ、サイコパス!!」

セレネは杖を引き抜くと、ヴォルデモートの背中に狙いを定めた。

ここでようやく、サイコパスもセレネが到着したことに気付いたらしい。鼻のないう顔はこちらを振り返ると、にたりと嬉しそうに笑っていた。

「ようやく御到着か」

「こんばんは、蛇男さん。ドアベルは鳴らしましたか？ まさか、ずかずかと了承もなしに侵入したものではありませんよね？」

セレネは平然とした口調で話しかけていたが、内心はかなり焦っていた。

魔眼殺しを外し、直死の魔眼でヴォルデモートを見るが、死の線を視ることがで

きない。つまり、まだ全ての分霊箱を破壊しきれていないということだ。

破壊した分霊箱は三個。

三個も破壊したのに、殺し足りていないと目の前の身体が言っている。

「それでは、まるで薄汚い押し入り強盗殺人ではありませんか」

だから、殺せない。

まだまだ、ヴォルデモートを殺すことができない。

ここは、義父を連れて逃げるしかない。そのためには——……と、脱出の頼みの綱、ウィンキーにそっと目を配らせようとして、はたと気づいた。

屋敷しもべ妖精の姿が、どこにも見当たらない。

「よくしゃべるではないか」

サイコパスは口が裂けそうなくらい笑みを浮かべている。

そのヴォルデモートの背後には、義父の姿が見える。真っ青に顔を青ざめながら、リータの頭を抱きかかえている。セレネとしては、今すぐにも義父のところへ駆け寄りたい。だが、その目前にヴォルデモートがいる。ヴォルデモートは、セレネが通り抜けることを許すはずがない。

「ここに来たのは愚かだったな。俺様にみすみす魔眼を渡しに来ようとは」

どうにかして、隙を作らなければならない。

「それはこちらの台詞ですよ、ヴォルデモート」

セレネは杖を構えたまま、ヴォルデモートに話しかけ続けた。

「クリスマス・イヴに私の義父を狙うなんて……パーティーには誘われなかったのですか？ それとも、誘われなかったから人様のパーティーにお邪魔しようとしたのでしょうか？」

「貴様こそパーティーに興じていればよかったのではないかと。血の繋がりのない汚らしいマグルを助けるなど、愚の骨頂ではないか」

二人とも同じタイミングで笑った。

そして、次の瞬間、互いの表情が真顔になり、ほぼ同時に杖から呪文が放たれる。赤い閃光と緑の閃光は中間点で激突し、四散した。

「お父さんを侮辱するな、トム・リドル」

「人間もどき風情が粹がるなよ、セレネ・ゴースト」

ヴォルデモートの杖からは再び緑の閃光が奔る。セレネも渾身の魔力を込めた失

神呪文を放った。赤と緑の閃光は激突し、今度は四散せずに空中でせめぎ合っている。今までに経験したことがないくらいの圧力だった。何キロもある像に腕が押し潰されるような程の圧を感じる。それを懸命に押し返してはいたが、押し負けるのは時間の問題だ。押し負けたが最後——どうなるかは想像するまでもない。パラケルスス版賢者の石があれば話は変わってきただろうが、スラグホーンのパーティーに参加するつもり of 服装だったので、1つしか持っていなかった。その1つも先ほど砕けたばかりである。

つまり、死の呪文を防ぐためには、避けるか、直死の魔眼に頼るしかない。

「——ッう」

緑の閃光が、少しずつ自分に近づいてきているのが分かる。

もうそろそろ限界だ。閃光を断ち切れ、横に跳ね跳んで躲すか、それとも——。と、セレネが考えを巡らせていた時だ。ヴォルデモートの背後に何か光った。包丁だ。しもべ妖精のウィンキーが包丁を握りしめて、ヴォルデモートのうなじあたりを狙っている。

「旦那様と、奥様と、坊ちゃまの仇!!」

ところが、あと一步で首筋を断ち切るといったところで、邪魔が入った。

ヴォルデモートの飼った蛇であるナギニがどこからともなく現れ、しもべ妖精に噛みついたのである。ウィンキーの悲鳴を聞いて、ヴォルデモートは呪文を消すと、後ろを振り向いた。

「しもべ妖精ごときが、俺様を殺せるとでも？」

セレネはヴォルデモートの視線が自分から逸れた隙に、義父へと駆け寄る。

「セレネ……君は、いつたい、どうして？」

「リータから連絡を受けました。早く逃げましょう」

どうにかして、ホグワーツまで逃げればこっちのものだ。

距離的にはロンドンの魔法省でも良いかもしれないが、あちらには死喰い人が潜り込んでいる可能性が高い。ダンブルドアの庇護下にあるホグワーツが一番安全だ。いま、ダンブルドアは留守にしているみたいだが、頼りになる教授陣が大勢いる。そこまでは、ヴォルデモートも追って来ることはないだろう。

「おまえが、いなければ……おまえが、いなければ、だんなさまも、おくさまも、ぼっちゃんも……」

「ああ、老いぼれクラウチのところのしもべ妖精か」

ヴォルデモートは蛇に噛まれながら血を流すしもべ妖精に夢中だ。

こちらに意識はさほど向いていない。セレネは義父の手を取ると外へ行こうとした。

「動くな、ゴースト」

セレネの足元で失神呪文が爆ぜる。

ヴォルデモートはしもべ妖精の頭を足蹴りすると、こちらに視線を向けた。

「俺様はお前に用があるのだ。そのマグルはお前をおびき寄せるための餌にすぎん」

「……残念ですが、私の方は貴方に用がないんですよ」

セレネは、義父を庇うようにヴォルデモートと向かい合った。

「それとも、ここで殺してほしいですか？」

「俺様は死なない。その眼で視えているのだろうか？ 俺様は死なないと」

「さあ、どうでしょう？ この眼は規格外ですから」

セレネは強がってみせたが、おそらくハッターだとバレている。ヴォルデモート

は余裕ぶった態度を崩さない。裸足の足元に蛇を侍らせ、優越感に浸ったような笑みを浮かべている。

実力の差は明白。

敵は、史上最低最悪の闇の魔法使いと大蛇。

それに引き換え、こちらは学生とマグルの一般人。

まさに、戦績も実力も雲泥の差だ。しかし、こちらが泥ならば泥らしく、精一杯足掻いて生き残ってやる。セレネは覚悟を強く抱いた時、耳元で義父の声が聞こえた。

「……セレネ」

横目で見ると、義父はまっすぐセレネを見ている。怯えの色は強く残っていたが、それを隠そうと努力しているようにも見えた。

「殺しは駄目だよ」

「今、ここで言うことですか!？」

セレネは驚き、ヴォルデモートから目を離してしまう。

まじまじと義父を見そうになったが、一瞬の隙が命取りだ。すぐにヴォルデモートに視線を戻す。

「お父さんの目は節穴ですか。あいつは私たちを殺そうとしているのですよ？
見ましたよね、あいつが何をしでかしたのか」

「うん、見たよ。全部見た。そのうえで、殺すのはいけないよ」

義父はしっかりと口調で言い放つ。

それをヴォルデモートも耳にしたのだろう。小馬鹿にしたように笑い始めた。

「滑稽だ。殺すのはよくない、だと？ ダンブルドアならいざ知らず、マグル風情がこの状況で口にするとは、人死にを目にした恐怖で頭がいかれたか？」

「いや、僕の信念さ」

ヴォルデモートの見るものを恐怖させる赤い瞳に睨みつけられているにも関わらず、義父の声色はやや強張っていたが、恐怖で震えてはいなかった。

「君は暴力でしか己を支えられないのだろう？ ならば、これから、よりよく生きるために努力することができる。」

もちろん、殺人は悪だ。罪には罰を受けなければならない。魔法の世界にも法は

あるのだろうか？」

これには、皆が黙り込んだ。

しん、と部屋が静まり返っている。蛇のナギニですら舌を出すのをやめ、馬鹿な物でも見るような目で義父を見ていた。

「貴様は……つまり、俺様に生き方を見直せと言いたのか？」

「もちろんだよ。だって、どんな理由があっても人を殺すのは駄目だよ？」

義父は酷く真面目に言っている。

否、違う。確かに真面目に言っているが、それは今言うべきことではない。むしろ、格下の者からの正論は、相手を逆上させる恐れがある。それは義父にだって分かっているはずだ。それにもかかわらず、ヴォルデモートを読き伏せるように語り続ける理由は、きっと時間を作るためだ。

「悩みごとを暴力で解決するのは紳士的ではないって、小学校で習わなかったかな」
おそらく、セレネ・ゴントを逃がすための時間を作るため。

ヴォルデモートは「セレネに用がある」と明言している。だから、愛娘を逃がすために語り続けている。その証拠に、自分の方がセレネより前に出ようと歩み始め

ていた。

「人殺しを禁ずることが法律で定められているから、殺してはいけないって言う人もいるよ。それは当然のことだ。だって、法律とはみんなで守ろうと決めた約束事なんだ。約束を破ったらいけないってことも、きつと習ったと思うよ。

それとも……君たちの世界では、そんな初歩的なことも学ばないのかな？」

「随分なご高説だ」

ヴォルデモートの額に筋が浮き上がってくるのが見える。ひくひくと口元が動いている。裸足ゆえに足の指に力が入る様子がよく見えた。

セレネは無言であるモノを呼び寄せる。かちやかちかと音を立てながら、ドアの向こうで呼び寄せたものが近づいてくるのを感じながら、ヴォルデモートを睨み付けた。

「しかしながら、マグルの凡人。その法律とやらはマグル同士、もしくは魔法使い同士の間でのみ生じる約定だ」

ヴォルデモートは怒りを押さえつけるように息を吐くと、嘲笑うように口を開いた。

「マグルよ、お前が大事に大事に守ろうとしている小娘にそれは当てはまらない」

「——ッ!!」

セレネは反射的に呪文を放っていた。

ヴォルデモートは杖の一振りで金縛り呪いを吹き飛ばす。ますます愉快そうに、笑みが深まっていくのが気に入らない。

「行儀が悪いぞ、小娘。凶星だからといって、相手の口を塞ごうとするなど——……」

『ペトリフィカス・トタルス——右になれ』!」

ヴォルデモートの言葉を遮り、セレネははっきり詠唱し、杖から鋭い閃光を放つ。今度こそ届くかと思ったが、ヴォルデモートに当たる直前にナギニが庇うように身を挺する。確実に金縛り呪いはナギニに命中した。けれども、ナギニは何事もなかったかのように平然と舌を出し入れしていた。この予想外の事態に、セレネの動きが止まった。

「嘘でしょ? 呪文が効かない!？」

「まったく理解が悪い小娘だ、いや……ホムンクルス」

「……ホムンクルス?」

義父がヴォルデモートの言葉を呟き返す。

セレネは自分が金縛りの呪いにかかったような気がした。それを見たヴォルデモートは意地悪そうな笑みを浮かべたまま、蛇のような舌で真実を語り始める。

「そうだ。お前が十数年育てた奴はヒトではない」

「違う」

「メアリー・スタインによって作り上げられたホムンクルスだ」

「違う！」

「貴様を守る価値すらない、人もどきだ」

「私は人間だ！」

セレネは叫びながら杖を振るおうとする。

ところが、ヴォルデモートが杖を振ると口が縫い付けられたように閉じてしまう。『シレンシオ―黙れ』を無言で放ったのだと頭で理解できていたが、無言で終了呪文を念じても解ける気配がない。セレネが呪文を解こうと悪戦苦闘している間にも、ヴォルデモートはねっとりとした言い方で真実を紡いでいく。

「メアリーの実子どころか、人造人間だ。」

マールヴォロの骨から生まれたホムンクルスと、どこぞのマグルの卵子から生まれた『フラスコの中の小人』だ。そいつは、お前を17年間騙し続けて来ていたのだ。しかも、そいつの眼を見ただろ？ その眼は『直死の魔眼』といってな、人の死が見える恐るべき魔眼だ」

「……」

義父のクイールは何も答えない。

セレネはヴォルデモートを睨み付けることしかできなかった。真実を知った義父がどうするか分からなくて、怖くて彼の顔を見れなかったとも言える。

「さて、マグルよ。俺様は齒向かう者は殺すが、無駄な殺しはしない。

その詐欺師を俺様に渡せば、殺しはしないと約束しよう」

ヴォルデモートは明らかにセレネを精神的に痛めつけようとしている。

もちろん、反マグルのヴォルデモートがクイールを生かすわけがない。自分は手を下さず、ナギニ辺りに処理させるのだろう。

「ヴォルデモート卿は嘘は言わない。そのホムンクルスと違ってな」

「……そうか、セレネはホムンクルスだったのか……」

でも、今の自分が義父に何を言っても意味がない気がした。

義父は真実を知った。

セレネ・ゴントにまつわる真実を知ってしまった。

その彼が何を選択するのか、自分には口を挟むことができない。無論、セレネとしては最後まで彼を守るつもりだ。たとえ――……義父に捨てられたとしても、彼が今まで注いでくれた愛情には変わらない。むしろ、それに報いるために彼を守り切り、彼から罰を受けよう。

「だから、ずっと悩んでいたんだね」

ところが、かけられた言葉は予想よりずっと優しい物だった。

ぽんっとセレネの頭に温かな掌が乗る。セレネは目を見開いてしまった。おそろおそろ義父の顔を覗き込むと、目じりを和らげて微笑んでいる。

「たとえば、君がメアリーの子ではなくても、ホームンクルスであっても、きっと、僕とメアリーとのつながりが偽りの記憶だったとしても、セレネが17年間育ててきた自慢の娘であることには変わらないよ。

愛する娘を、君に差し出すわけにはいかない」

「……お父さん……」

気が付くと、自分の口元が緩んでいた。

目元が急に熱くなってくる。わなわなと自分が震え始めるのを感じる。

「捨てるわけないだろ、セレネ。大事な子どもを捨てる親がいるわけないだろ？」

「……そうか、それが答えか!!」

ヴォルデモートの赤い瞳は、怒りで燃え上がっているように見えた。濃厚な殺気という剣を、一気に鞘から抜き払ったかのようなうだ。肌でぴりぴりと刺すような威圧を感じる。

どうやら、泣くのは早いらしい。セレネは鳴咽を無理やりねじ伏せると、杖を構えなおした。

「ならば二人まとめて死ね!!」

ヴォルデモートが呪文を放つ。緑色の死の閃光を、セレネは杖先で切り裂いた。死の閃光は、存在自体が死だ。他の魔法よりも、少し触れただけで殺すことができる——が、後ろに大切な義父を守りながらでは、防ぐのも数度が限界だろう。

「お父さん」

セレネは義父にあることを耳打ちをすると、彼の返事も待たずにヴォルデモートに杖先の照準を定めた。

「リドル、あまり怒り過ぎると血管が切れますよ！ 『グレイシアス―氷河になれ』!!」

セレネは杖から氷河のような氷が濁流のように流れだし、ヴォルデモートに襲いかかる。

無論、ヴォルデモートがただで受けるわけがない。怒り狂った様子で杖を振り、すべて水へと変換させる。ヴォルデモートの身体は氷ではなく水に濡れ、しっかりと磨かれた床まで水浸しだ。ヴォルデモートは水をびしりと踏みしめると、自分の体を乾かさずに、唸るように杖を振るった。黒い縄が幾本も出現し、蛇のように宙を動きながらセレネの腕を捕まえようとする。

セレネは直死の魔眼で、縄の死を視た。

杖の先で死の線を切り刻んでいく。黒い縄は二つに裂かれ、次々と地面に落ちていった。だが、そのうちの一组が、まるで意思を持ったように足元から迫ってくる。

「しまった!!」

セレネの両手は縛られてしまった。ヴォルデモートが楽しそうに嗤っている。

「あつけない幕切れだな、ホムンクルス。そこで、マグルが死ぬのを見届けるがいい」

「そう、簡単に殺されるのですか!」

セレネが叫ぶのと同時に、窓ガラスを破ってあるモノが飛び込んでくる。

先ほど、呼び寄せておいたものだ。いまの自分にはつかみ取れないが、代わりにクイールが受け取ってくれる。クイールは飛び込んできたものをキャッチすると、すぐにプラグをコンセントに差した。

「いけ——ッ!!」

クイールはソレの電源を入れると、ヴォルデモートめがけて投げる。

おそらく、ヴォルデモートはソレの正体を知らなかったが、武器の類を警戒したのだろう。手で払うように、クイールの投げた物を打ち落とす。

クイールの投げた物——ドライヤーは熱気を出しながら、ぱしゃんと水浸しの床に落ちた。

水は電気をよく通す。

そして、電気が人体を通ったとき、電流の大きさ次第では障害を負ったり死に至ったりする場合もある。人を感電死させるには、約50 mAあれば事足りるらしい。

さて、いま床はヴォルデモートを中心に水たまりが広がっている。

しかも、ヴォルデモートは先程の水河を水に変えたときに、水で身体が濡れている。もっといえば、素足だ。彼の素足はドライヤーが落ちた水に浸かっている。

「水に落ちたドライヤーは漏電。かくして、240ボルト以上の電圧が襲いかかるというわけです」

セレネが縄抜け呪文で脱出したとき、ヴォルデモートは感電し、両足が碎けたように座り込むところだった。そのせいで、さらに電気の奔る水に両手が触れ、ますます電流が蛇男の身体を苛んでいく。きっと、ヴォルデモートにとって感電は未知の痛みだったのだろう。そのまま水の中へ倒れ込んでしまう。その行動が、さらに自分を苦しめることになるとは気づきもせずに――。

だがしかし、ここで勝利の余韻に浸る時間はない。

セレネは義父の手を取ると。外に向かって走り始めた。

「ねえ、本当にあれで死なないの？」

「死にません。あいつは、あの程度で死にません！」

本当なら玄関から表通りに出たいが、そちらへ逃げたくても水浸しで自分たちも感電してしまう。

裏口から外に出て、小さな森を抜けた向こうの通りに出るしかない。だが、分厚い雲が夜空を覆い、森の中は当然、電灯などありはしない。下手に「ルーモス」など唱えるものなら、追跡してくる敵の目印になってしまう。

わざわざ、それをするくらいなら——……

「『アクシオ―箒よ来い！』」

セレネはリータ・スキーターの箒を呼びよせる。

裏口を蹴り破るように外へ出ると、ちょうどリータ・スキーターの箒「コメット260号」が膝当たりで浮かんで待っていた。

「乗ってください、早く！」

セレネは箒にまたがった。後ろに義父が乗り、ぎこちなくセレネの腰に腕を回し

たことを確認すると、空高くを目指して急上昇した。あつという間に自分の家は小さくなり、ミニチュアか何かのように見えた。さらに高く昇れば、夜の闇も相まって、どの家がそれなのか見分けがつかなくなっていた。まるで地面と夜空が逆転して、自分の足元に星空が広がっているようだった。

「このまま『姿くらまし防止呪文』がかけられていない範囲まで飛びます！」
とりあえず、灯りのない森の方へと飛び始める。

森さえ越えれば、なんとかなるように思えた。そこまで広範囲に「防止呪文」がかけられているとは思えない。少なくとも、この森を越えてしまえば、あとはどうにかなる。未成年の「姿くらまし」は禁じられているが、理論は知っているし、いまは緊急事態だ。難しそうであれば、最悪、このままホグワーツまで飛んでいけばいい。

「大丈夫、追いつかれないかな!？」

セレネが森の上を飛んでいると、クイールが話しかけてきた。セレネは前だけ見つめ、吹き付ける風に負けないように叫んだ。

「問題ありません！ ああ男は箒を持っていますでしたし、いずれにしろ、空

にいる者を地上から狙うのは困難です！」

暗い森を灯りという格好の目印を携えて逃げるより、夜空を飛んだ方がずっと逃げ切れる自信があった。

「確かに、この高低差だと戦闘機を銃で撃ち落とそうとするようなこともね！」
セレネは義父の声を背中に感じながら、ぐんぐんと速度を上げていく。ぶつかる風は一段と強くなり、箒の房が雨に打たているような音を立て始めた。

あと数秒で森を越えることができる、という瞬間だった。

「右に避けてッ!!」

義父の叫びが耳を貫いた。

セレネが慌てて右に身体を背けると、数センチ向こう側を緑の閃光が奔っていくのが見えた。

「まさかっ!?!」

セレネは後ろを振り返る。

ヴォルデモートが風に乗った煙のように飛んでくる。箒にも、セストラルにも乗らずに飛んでくる。蛇のような顔が真っ暗な中で微光を発し、白い指が杖を上げる

のが見えた。

「最、悪ッ!!」

完全に算段が狂った。

セレネはジグザグに飛びながら「死の呪い」を躲し続ける。この状況では、森の上空を抜けても「姿くらまし」の理論に集中することなんてできるわけがない。

そもそも、自分は単純に飛ぶことしかできない。クイディッチの選手ほど箒の扱いに熟練していない。飛ぶことに集中していれば、魔法の方が疎かになってしまう。たとえ、ホグワーツまで飛び続けようとしても、途中で二人とも落とされてしまう可能性の方が高い。

それならば——……

「お父さん、手を!!」

「うんっ!」

セレネは後ろに左手を伸ばす。義父の冷たい指先が硬く握りしめられたことを確認すると、ゆっくり呼吸をする。今この瞬間にも、敵は自分たちに死の照準を定めている。迷っている時間はない。

セレネは覚悟を決めた。

「『ヴォラート——飛べ』!!」

思い切って箒から飛び降り、開発中の飛行呪文を唱える。

自分で組み立てた魔法理論を頭で構築し、足元に魔力を固めるイメージを強めた。ふわりとスカートが持ち上がったのは一瞬で、その直後、ジェットコースターみたいに急速に落下する——が、急ブレーキをかけたように身体がぐんと止まった。随分と乱暴な停止の仕方だったが、その場に留まることができた。

何度も練習し、開発に励んだおかげである。

下手に一発本番の危険な呪文を試すより、同じ危険度でも何度も練習した呪文の方が遥かに安全だ。

「せ、セレネ。これ、大丈夫なのかい!？」

「……お父さん、必ず迎えに行きますから、待っててください」

セレネは義父の手を振り払った。

魔法で浮いている自身はともかく、彼は魔法を使うことすらできない。

「セレネッ!？」

『モリアーレ―緩めよ』『アレスト・モメンタム―動きよ、止まれ』『プロテゴ・マキシマ』!!」

目を見開いたまま落下していく義父に、セレネは落下速度軽減の魔法とクッション呪文、そして万が一のための守りの呪文をかける。義父の姿は豆のように小さくなり、暗い森の闇へと消えていった。

「マグルを逃がしたか、愚かなホムンクルス」

ヴォルデモートの狙いは自分だ。

ならば、義父は一旦逃がし、再度ヴォルデモートを無力化する方法を考えた方がいい。殺すことは不可能だが、一時的に動きを止める程度のことはできる——かもしれない。

セレネはバランスを保ちながら、ヴォルデモートを強く睨み付けた。

「まさか単独で飛ぶことができるとはな。その才能、やはり潰すには惜しい」

「あら、見逃してくれるのですか?」

「ヴォルデモート卿は正当に評価する。俺様の手下になれば——……」

「それは断ります」

セレネはきっぱり断る。

ここまではつきり敵対しているのだ。どうせ、直死の魔眼を摘出され、殺されるのがオチだろう。さもなくば、服従の呪文を使って死ぬまで文字通り人形扱いされるかだ。

それは、自分の理想とは程遠い。

痛いのは苦手だ。苦しいのも嫌だ。

もちろん死にたくない。『に満ち溢れた死の世界に落ちるのは、怖すぎてまっぴらごめんだ。

だけど、ヴォルデモートの言いなりになって生き延びたくもない。

セレネは、大好きな義父と一緒に生きていきたい。自分のことをメアリーの実子どころかホムンクルスだと知った上で、愛してくれる世界でたった一人の大切な人と一緒に、これから幸せな時を過ごしていきたいのだ

その理想を叶えるためには、ヴォルデモートと敵対し、なおかつ、生き延びねばならない。多少、苦しい思いも覚悟の上だ。

「そろそろ白黒つけましょうか、サイコパス！」

セレネは一気に高度を上げた。いつの間にか、髪留めが解けていたのだろう。冷たい夜風が、黒髪を吹き抜けていくのを感じた。

安定感はないが、速度だけはヴォルデモートより自分の方が上だ。

否、ヴォルデモートが面白がつて様子見している可能性もなくはない。だとしても、今のところは、自分の方が速く動き回れている。もっとも、この呪文はまだ未完成だ。飛んでいるだけで息が上がるし、どんどん魔力が身体から失われていくのが分かる。

義父を助けに戻る時間を考えると、あまり猶予は残されていない。

セレネは眼下のヴォルデモートに狙いを定めた。

『フルガーリ―閃光』!!』

眩いばかりの光が眼前に炸裂する。

さすがのヴォルデモートも瞬間的に目が潰れること間違いなしだ。その隙に、セレネは次の魔法を準備する。

『エイビス―鳥よ』

何匹かのカラスが杖先から飛び立っていく。

セレネはカラスを従えたまま、ヴォルデモートがいる場所に急降下した。もちろん、ヴォルデモートもすぐに対応してきた。いまだ閃光が収まっていないというのに、幾本もの赤い閃光がこちらに襲いかかってくる。セレネはカラスたちとそれを避けながら、ヴォルデモートめがけて突貫した。

風が巻き起こり、重圧で身体がひび割れそうになる。無論、その程度で速度を落とすわけにはいかない。

そして、ヴォルデモートの丁度頭の上に差しかった時、セレネは夜空に響き渡るような大声で叫んだ。

「『エクスパルソ―爆破』!!」

カラスの一团がヴォルデモートの頭、耳元、目の前で爆発する。

ヴォルデモートは盾の呪文を展開したのだろうが、あまりにも目の前過ぎて間に合わなかった。当然、セレネも爆風に巻き込まれる。安定性のない飛行呪文は爆風を受けて留まることができない。セレネの小さな身体は、風に吹き飛ばされ落下した。

「『フルーマー―羽になれ』」

最後の力を振り絞り、自分に変身呪文をかける。

セレネの身体は爆風にあおられながら、一枚の黒い羽根になった。周囲の羽と同化すれば、さすがのヴォルデモートも追うことはできないだろうし、運が良ければ義父を守るために自爆したように見える。

セレネはカラスの羽になり、小さくて、軽くて、風に乗って前後に揺れながら、他の羽と一緒に、ふわりふわりと地面へ落ちていく。

空一面に花火のような爆発が見えた。

煙の合間から何か白い物が抜け出し、悪態をついているのが見える。いらつきながら辺りを見渡し、なにかを探しているようだった。

カラスの羽には脳がない。

セレネは自分がちっぽけになって、すぐに考えることすらあやふやになっていった。

あの白いものは、なんなのか。

自分は誰のために戦っていたのか。

自分は どうしてここに いるのか。

そもそも、自分は 誰なのか。

セレネは 小さく、小さく なって いく 思考を 手放さ ない よう 必死に なり ながら、ふわりふわりと 暗い 森へ と 落ちて いく。

幸運な ことに、途中で 魔力が 尽きた。

木々の 合間に 落ち、空が 見え なくな った 頃、思考の 有無 とは 関係なしに 元の 姿に 戻ること が できた。

最初に 両手が 徐々に 現れ、肩から 腕が 延び、足や 顔が 飛び 出し、しまいには 落下の 寒さに 凍り 付いた 体が 現れた。

おかげで、消え かけて いた 意識が 少し ずつ はっきり して きた。

ところが、不幸な ことに、羽から 元に戻 った せいで、落下の 速度は 増した。

風の 音なのか、それとも、耳鳴り なの だろう か。よく 分 からない 轟音が 聞こえる。さらに、羽の 時は 感じ なかった 息苦しい までの 重圧が、セレネに 襲い かけて いた。セレネは 杖を 振る おう にも、もう 力 尽きて 指 一本 たり とも 動か せ ない し、魔法を

咄くことすらできない。通り過ぎていく木の枝を捕まえようと、指を伸ばすことすらできない。

おまけに、視界に広がるのは、薄気味悪い死の線ばかりときた。

（まったく、こんな時に限って役に立たない魔眼ね）

セレネは心の中で悪態をつきながら、数秒後に迫る衝撃を想い、目を瞑った。

「——ッ!!」

誰かの鋭い声が聞こえる。

セレネが驚いて目を開けると、そのまま熱い腕の中に飛び込んでいた。セレネは横抱きにされながら、力なく笑った。

そこにいたのは、到底信じたがい人物だったのだ。

「……まさか、あなたに、助けられる、なんて」

「私も君を助けるなんて、思っていなかった」

ぼさぼさの黒い髪を犬のように振るわせながら、その人物——シリウス・ブラッ

クはにやりと笑った。

シリウス・ブラック、戦線復帰。

そして、リータ・スキーターとウィンキーが退場。
長い長いクリスマスイブは、次話で決着します。

以下、本作オリジナル魔法です。

『ヴォラートー飛べ』

セレネが作った飛行呪文。

大量の魔力を使う割には、飛行時間が5分程度。今後、セレネの努力次第で改善されるかもしれない。

『フルーマー―羽になれ』

羽に変身させる呪文。

基本的には物質を変身させるための呪文だが、今回はセレネ自身に使用した。習得難易度的には、ホグワーツでは2年生程度で可能。

79話 もう何も怖くない

平凡なホグワーツ生だったはずの私、セレネ・ゴーストに訪れた突然の事態。手に入れたのはピンク色に輝く魔法のステッキ、そして新たな魔法の力。ステッキが導く出会いは、運命なのか、偶然なのか――……。それは、いまはまだ分からないけど……。ルビーの力を借りて、絆を繋いだ仲間と一緒に、分霊箱を破壊する旅は続いていくのだと信じて……

魔法少女プリズマ☆セレネ、始めます！

「始まりません！ エイプリルフルです！ ルビー、取り消しなさい」
「セレネさん、いいじゃないですかー。ルビーちゃんは大歓迎ですよ？ 夢と希望溢れる冒険ラブコメ魔法少女もの！」

「私は反対ですし、設定盛り過ぎです」

「では、セレネさん！ 行きますよ！」

魔法少女プリズマ☆セレネ 第3話！『もう何も怖くない』！」

「勝手に進めない！」

スリザリンの継承者―魔眼の担い手―第79話『もう何も怖くない』、始まります

！」

「えー、題名同じならいいじゃないですかあー」

「ちっとも良くない!!」

見間違えるはずもない。

いま自分を支えているのは、明らかにシリウス・ブラックだった。

「どうして、あなたが？ 私のこと、嫌いなの？」

セレネは唇を動かして、なんとかそれだけ尋ねる。

なぜ、ここにシリウス・ブラックがいるのか、まったく理解できなかった。しかも、自分の記憶が正しければ、シリウスは首の骨を折り、戦線に復帰するのは難しい状態だったはずである。

けれど、いま自分を支えている男は、身体能力に問題を抱えていないように見える。少なくとも、セレネが切り落とした腕がない以外は、ごくごく普通の魔法使いと変わらないように感じた。

「ん、嫌いに決まってるだろ？　でもよ——……」

「シリウス、先走り過ぎだ」

ぬうつと草の影から人が現れる。

武骨な杖をつき、ぎょろぎょろ怪しげに動く青い義眼を持った男——、アラスター・ムーディが不機嫌そうな顔で立っていた。

「ムーディ、先生？」

「先生と呼ばれる資格があるかは、分からん。お前が、セレネ・ゴントだな？」
ムーディの青い義眼、魔法の眼がセレネを見据える。セレネは僅かに頷いた。

「わしらはスネイプからの要請で、お前の救援に来た」

「スネイプ先生が？」

「詳しい話は後だ。いそげ、奴に見つかる前に森を抜けるぞ」

ムーディは短く言うのと、すぐに背を向けて歩き始める。

「ま、待ってください。まだ……お父さんが……」

セレネはその後姿に向かつて、声を絞り出した。

落下してから、義父の安否をまだ確かめていない。そうでなくても、ヴォルデモートが今も上空を旋回しているというのに、こんな森に残して行くわけにはいかなかった。

「まだ、この森のどこかに——……」

セレネがそこまで言った時だった。

森を貫くような悲鳴が轟いた。セレネは弾かれたように悲鳴の方向を見る。その悲鳴は、聞き間違えるはずなどない。セレネはシリウスの腕から逃れると、悲鳴が聞こえてきた方角へ走り出そうとする。だが、足が地面に着いた途端、視界が揺れた。足がゴムになったみたい、まったく力が入らず、前から倒れ込んでしまった。

「シリウス」

「了解！」

ムーディが鋭く言うと、シリウスが獣のように悲鳴の方へ走り出した。シリウスの後ろ姿は、すぐに夜の闇へ消えていく。ムーディはそれを見届けると、コートの内側から小瓶を取り出した。

「ゴースト、これを飲め。これを飲んだら、まっすぐ森を抜ける。わしらは、お前の義父を助けに行く」

それだけ言って小瓶を押し付けると、シリウスの後を追いかけていく。

夜の森には、セレネだけが残された。暗いくらい森の中に、凍えるような風が吹き渡る。

「……ちくしょう……」

セレネは地面を搔くように拳を握りしめると、小瓶に入った薬を一気に飲み干した。吐き出しそうなくらいの苦みと喉が焼けるような痛みが一気に押し寄せてくる。そのくせ、鼻から抜けるような涼やかさもあるのだから、たまったものではない。不快感の塊である。戻したい気持ちを堪え、無理やりすべて飲み込むと、体の内側が燃えるように熱くなってきた。

「……なるほど、魔法界のエナジードリンク、ね……」

枯渇していた体力が、徐々に湧き上がって来る。

否、身体に残存していた最後の力を一か所に集め、一時的に増加させているだけに過ぎない。この薬が切れた瞬間、明日の分までの体力を使い果たし、本当に動けなくなってしまう。

だから、ムーディは「森を抜けろ」と撤退を命令したのだ。

戦っている途中で薬効が尽きたり、森を再度抜ける過程で倒れるわけにはいかない。文字通り、何もできないセレネはお荷物になってしまう。

しかし――

「見捨てられるわけ、ないじゃない」

セレネは齒を食いしぼると、地面を思いっきり蹴った。

目指すは当然、義父の苦しい悲鳴が聞こえた方角だ。もう声なんて、全く聞こえない。その代わり、呪文が飛び交うような火花に近い音が聞こえてくる。

セレネは速度を上げた。足がもつれるように、走り続ける。

体力が尽きて、お荷物になっても構わない。

死ぬのは途方もなく怖い。あの『』に落ちるのは絶対に嫌だ。だから、賢者の石造りに励んだし、死なないように魔法も勉強も頑張ってきた。

だけど、今は違う。

セレネは義父と一緒にいたい。ずっと、傍にいてほしい。

それでも、義父が助かるのであれば、最悪……自分が死んでも構わない。

だから、走る。

夜の闇に目を凝らし、木々や下草、いたるところに死の線が張り巡らされた世界を走り続ける。

「――、シリウス！ 間接的に無力化しろ！」

「ああ、分かってる!!」

必死な声が聞こえる。

セレネは木々の合間から飛び出すように、少し開けた空間に出た。その中央で、シリウスとナギニが戦闘を繰り返している。呪文の通じない蛇に向かって、縄を出したり炎を出したりと間接的に傷つけようとしているが、なかなか上手くない

らしい。

そこから少し離れたところに、ムーディが座り込んでいた。足元に倒れる何かに
むかって、呪文をぶつぶつ呟き続けている。その何かは——……

「おとう、さん……？」

セレネは目が釘付けになった。

蒼白な顔をした男性が首から大量の血を流し、ぐったりと倒れ込んでいる。額に
も噛み痕が見られ、とくとくと血を流し続けている。胸元が微かに動いているので
生きていることは分かるが、辛うじてに過ぎない。

ムーディが治療魔法を使っているが、効果はあまりみられなかった。

セレネは、さあっと血の気が引いていくのを感じた。

義父の肌の白さが、母の尋常離れた肌の白さと重なり、くらりと視界が揺れた。
自分の足元が微かに震えている。

空で義父の手を離れたとき、クッション呪文、落下速度軽減の魔法、そして盾の
呪文を施していた。おそらく、義父は無事に着陸できたのだろう。しかし、そこに
待ち構えていたのは、ヴォルデモートの蛇だ。魔法の効かない蛇相手に、盾の呪文

がどれくらい役に立ったのだろうか。

答えは明白だ。語るまでもない。

「よくも……！」

セレネは齒を食いしばった。

最善を尽くしたつもりだったが、こんな結末になるとは思わなかった。あまりにも満身の力を込めて食いしばったせいだろうか。ぎしり、と奥歯にひびが入る音が耳の奥から聞こえてくる。自分の髪が逆立つのを感じながら、セレネはナギニを睨み付けた。

「よくも……お父さんを!!」

セレネは駆けだした。

魔眼は、ナギニだけを捉えていた。魔法の効かない蛇だが、所詮は蛇だ。寿命からは逃れられない。その証拠に薄らだが禍々しい死の線が視えた。

『ホムンクルスか……来い！ 私たちを殺せるなら、殺してみろ！』

ナギニが大きな口を開けて、毒牙を剥き出しにし、襲いかかってきた。セレネの前腕あたりを狙った一撃を、セレネは辛うじて躲した。けれど、蛇の尾がセレネの

腹を強打する。空気が腹から押し出されるような感覚と猛烈な痛み、セレネは唸り声をあげた。息が止まり、倒れ込みそうになるが、ぐっと足に力を込めて堪える。

『どうした、この程度か？』

ナギニの嘲笑うような声が聞こえた気がする。

セレネは左手で腹を抑えながら、ナギニを強く凝視した。

『まさか！』

口の中に鉄の味がした。

こんなところで、負けを認めるものか。絶対に、義父を傷つけた報いは受けてもらう。必ず、あの蛇だけは殺す。恩情もなにも一切無用で、絶対に殺してやる。

『絶対に、あんただけは殺してやる！』

『いや、私たちは殺せない。絶対に、私たちを殺すことはできない』

蛇は高らかに叫びながら、セレネを押し潰そうと足元から絡みついてくる。

遠くの方で、シリウス・ブラックが『レラシオ―放せ』と叫ぶ声が聞こえてきた。気もするが、ナギニに効果は見当たらない。セレネの身体を重くてぬめぬめした蛇が滑りながら、締め付けてくる。シューシューと唸る熱い吐息が、頭の方へと近づ

いてくる。

『いえ、あんたは私に敵わないわ』

セレネは口元を歪めると、足元から絡みついてくる不快な蛇に向かって杖を降ろした。

『あんたの利点は、呪文が効かない程度のことでしょう？』

否、正確に言えば、蛇に絡みついている死の線を杖先で絶つ。

『生きているなら、なんだって殺せるもの』

胴体に巻き付こうとしていた蛇は、その言葉を聞き遂げたのか。それは分からな
い。なにしろ、セレネに線を絶たれ、痛みで悶絶していた。ナギニが足元を締め付
けていた力が緩んだので、セレネは蛇について線を蹴り切り、脱出する。

『私は……私たちは、こんな、ところで……』

蛇は仰け反ると、金色の瞳を空に向ける。

普通ならもう死んでいそうなものだが、なにしろ、蛇に張り巡らされた線は多
すぎた。まるで、一つの生物に複数の生き物が混在しているかのように、多重に張り
巡らされている。

セレネは中でも最も線が密集した場所を、一気に杖先で切り裂いた。そのまま、蛇の首に走った線をなぞり切る。蛇の頭と胴体は切り離され、ぽとんと地面に落ちた。

『……トム……クリーデンス……私……は……』

ナギニの口元が微かに動いたが、その言葉を最後まで呟くことなく、目から完全に光が消えた。

「――、おい、スリザリンの小娘！ 早く走れ！」

シリウスの焦ったような声が聞こえてきた。

ムーディがぐったりとした義父を担いで走り出している。

そこで、気づいた。

ヴォルデモートが大切にしている蛇は死んだ。正確には殺された。

もし、セレネにとつての義父が殺されたら、死に物狂いで敵を見つけ出して殺す。

つまり、ヴォルデモートが大切にしている蛇が殺されたら、死に物狂いで殺した相手を殺しに来る。

「分かってます！」

ヴォルデモートが蛇の死体を見つけるまで、どれくらいかかるだろうか。

それを考えている時間も体力の温存も、気にしている余裕なんてない。いまはこの森から抜け出し、ヴォルデモートの魔の手から逃れ、義父を病院へ連れていくことが先決だ。

セレネは、生き残るために全力で走り出した。

「……はあ……はあ……」

ところが、自分の想いとは裏腹に、速度が低下していくのが分かる。

一時的に増強された体力は、すでに枯渇し始めていた。背後から迫ってくるであろうヴォルデモートを考えれば、これ以上、速度を落とすわけにはいかないというのに、足が言うことを聞いてくれない。

「おい、早く走れ！」

前を駆けるシリウス・ブラックの声が聞こえてきた。

指摘されなくても分かっている。分かっているが、これ以上早くは走れないのだ。ここで足を止めてしまえば、激昂したヴォルデモートに追いつかれてしまうのは時間の問題だ。ヴォルデモートは蛇みたいに殺せない。生きているのに、分霊箱が

残っているせいで殺せない。

つまり、勝ち目はゼロだ。

立ち止まれば、間違はなく殺される。

「——つく、仕方ない！ 私が運ぶ！」

「え？」

セレネに驚いている暇はなかった。

シリウスは有無言わずセレネを抱え上げると、再び走り出した。抱える、というよりも、担ぐに近い。セレネの腹の辺りがシリウスの固い腕に当たり、少しだけ痛みを感じる。

「な——な、んで!？」

「ハリーの友だちを置いて逃げられるか！」

シリウスは森を駆ける。

足場が不確かで乱立する木々の合間を、シリウスは唯一残された片腕を塞がれたまま走り出す。わずかに速度は落としてしまっているのだろうが、大して問題にならないほど速かった。いつ地面に足をとられてもおかしくない中を、まるで風に

なつたみたいに走り抜ける。

この速度なら、なんとかなるかもしれない。

少し希望の光が見えた、その時だった。

「——ッ!!」

背後から咆哮が貫いてくる。

それと共に、後ろから巨大なダンプカーが襲い掛かってくるような強大な威圧を感じた。

ヴォルデモートだ。

ヴォルデモートが、最愛の蛇の死に気付いたのだ。それが誰の仕業なのかは、推測するまでもない。

「ヴォルデモートめ、もう気づいたか！」

シリウスが憎々しそうに呟く。

少し先に、街灯の灯りが見え始めていた。森の出口が近い。アスファルトの地面が見え始めている。先を走っていたムーディが黄色の灯りに照らされたアスファルトの地面に足を踏み入れ、くるっと回転して消えるのが見えた。

目測、残り50 m。

10 秒もあれば、街灯の下へたどり着ける。

それなのに、その10 秒が果てしなく遠い。

振り向いた瞬間、黒い影がいつぱいに広がっているような恐怖がある。肌を貫き殺すような激しい怒りが、すぐ後ろに迫って来ていた。シリウスが足を緩めた途端、死の鎌が襲い掛かってくる。

「シリウス・ブラック！」

残り5メートル。

セレネが呼びかけるが、彼は何も答えない。

その代わり、さらにスピードが上がった。彼もこの危機的状況を理解しているのだろう。何も言わず、全身全霊を込めて奔ることに専念しているようだった。

背中を押しかかるような不安と恐怖から目を背けるように、セレネは前だけを見つめた。

「——ッ、はあ、はあ——ッ!!」

残り4メートル。

シリウスの息が上がる音が、とても近くに聞こえる。激しい呼吸音で、彼が精いっぱい走っていることが強く分かった。

「——ッ！！！」

残り3メートル。

すぐ背後から煩い怒鳴り声が聞こえてくる。誰の大声なのか、考えたくもない。

「がんばれ、シリウス！」

残り、わずか2メートル。

怒鳴り声をかき消すように、セレネは叫んだ。

無論、返事は帰ってこない。その代わり、ぐんつと速度が一段階上がった気がした。一步、一步を跳びはねるように駆け進み、ムーディが消えた街灯の下に滑り込む。

黄色の暖かな光の下、くるとシリウスは回転した。

緑色の呪文が耳元を奔る。目の前でヴォルデモートの白い顔が怒りで歪んでいるのが最後に見える。そして——……

「——!? ——!!」

「——!!——!」

気が付くと、セレネは白い空間に立っていた。

辺りは騒がしく、悲鳴に近い叫び声に満ちている。

一難去って、また一難なのだろうか。

セレネが身構えたとき、ライム色のローブを着た魔女が駆け寄ってきた。

「さあ、あなたはこちらへ。すぐに治療をします」

「……へ？」

セレネは素っ頓狂な声を出してしまった。

シリウスから床に降ろされ、セレネの身体は倒れ込むように魔女の胸へと落ちる。

「これを飲みなさい。いまのあなたは生命維持に関わるほど、体力も魔力も不足しています。まずは、休息が必要です」

ライム色のローブの魔女は、澄んだ水のような液体の入った瓶を口に押し付けてきた。薄ら漂う花のような匂いから、「眠りの薬」であることは明白だ。セレネは最後の力を振り絞るように、瓶を押しつけ、口を開いた。

「お父さんは……？　ここは、いったい？」

「ここは聖マンゴ魔法疾患傷害病院だ。安心しろ、お前の父親は緊急治療室に運ばれて行った」

コツ、コツという杖の音と共に、ムーディが誰かが近づいてくる。

「だから、その薬を飲んで休め」

「でも——……うぐ」

セレネが反論する前に、瓶が口に押し付けられる。無理やり薬が喉を通り、とろんと視界が歪み始めたのが分かった。鉛のように重い瞼が落ちてくる。

「お父さんは……無事、ですか……？」

「まだ生きています。今治療中です。あなたは、しばらく眠りなさい——……」
その言葉を最後に、セレネの視界は幕が下りるように暗くなっていった。

「……まだ、って……」

まるで、もう死にそうみたいだ。

途轍もない不安の波に襲われながらも、魔法の眠りには勝てない。

暗い闇に包まれる視界。意識までもが深い闇に落ちて、落ちて、落ちて——……

「起きたかのう、セレネ」

気が付くと、目の前に白い髭の老人がいた。

「ダンブルドア、先生？」

眼鏡をかけてもらっているのか、おぞましい線は全く視えない。重たい身体を持ち上げ、身体を半分起き上がらせる。薬品の臭いと清潔なシーツ。見間違えるはずもない、ホグワーツの医務室だった。

「私は……」

「今まで眠っておった。途中、聖マンゴからこちらへ移送されたかのう。いまの君にとって、こちらの方が安全じゃ」

「聖マンゴ……移送？」

セレネは寝起きの頭を働かせようとした。

異様なまでにぼんやりした思考は、なかなか答えを導き出してくれない。セレネが困っているのを見ると、ダンブルドアは静かに口を開いた。

「ヴォルデモート卿と体力が擦り切れるまで戦ったのじゃ。無理はせんで良い」

「ヴォルデモート……？ あっ!!」

その単語を呟いた瞬間、記憶が洪水のように押し寄せてきた。

ヴォルデモートが義父を襲い、命からがら逃げ延びたかに思ったのに、ナギニに最愛の義父が襲われて——……ここまで思い出したとき、セレネは身体が強張り、凍るような寒気に襲われた。

「先生、義父は……クイール・ホワイトは無事ですか!？」

「もちろん、生きておる」

ダンブルドアの言葉に、セレネは両手で顔を覆った。

安心で力が抜けていくのが分かる。心の底からの安堵で、もう一度眠りにつきそうになった。

「アラスター・ムーディ曰く、セレネ……君が蛇を倒したおかげで、早急にその場

を脱することができたそうじゃ。

素晴らしい闇払いになる素質があると、褒めておった。

じゃが——……」

ダンブルドアの言葉に辛そうな色があることに気付き、セレネは両手を下げた。
ダンブルドアの青い瞳は悲しみに染まっていた。

「あの蛇の毒は、マグルである御父上にとって残酷に働いた」

「……なにか、後遺症があるのでしょうか？」

「うむ。実はあれから丸二日経過しているが、いまだに目が覚める見込みがない。
魔法使いならば、持ち直すことができたじやろうが、悲しいことに、わしら魔法
使いとマグルとでは体のつくりが違う。

癒者の見立てでは、もしかすると、このまま目が覚まさないかもしれないし、目が
覚めたところで脳へのダメージも酷く、記憶を失っている恐れもあるそうじゃ」

「……そんな……」

セレネは自分の心が、空白になった気がした。

「今は聖マンガに入院しておる。落ち着いたら、お見舞いに行きなさい」

「……」

セレネは何も答えることができなかった。

「……辛いじゃろう、まずは心を落ち着けることが先決じゃ」

ダンブルドアが杖を振ると、たつぷり水の入ったゴブレットが現れた。ダンブルドアに押し付けられた水を、セレネは促されるまま黙って口に含んだ。レモン水なのだろうか、少しだけさっぱりした感覚が鼻を抜けていく。

「セレネ、少し落ち着いたかの？」

「……まだよくわかりません」

「そうじゃろうのう……辛いことじゃ。今の君には酷じゃろうが、君に1つだけ聞きたいことがある。ヴォルデモートに関する事で、最も大事なことじゃ。

アラスター・ムーディから君がヴォルデモートの蛇、ナギニを倒したと聞いた。君とナギニが何か話しているようだったと言っておったのじゃが、なにを話していたのか教えてくれないかの？」

「……たいしたことを話していませんよ」

セレネは静かに答えた。

「あの蛇が義父を傷つけたので、私が倒すことを宣言しただけです。

蛇は『私たちは絶対に殺されない』と言っていました」

「私たち？」

「ええ、蛇は一匹なのに不思議ですよ」

セレネは何も考えず、ダンブルドアに請われるまま話した。

「他には……ああ、そうだ。死の直前、何か名前を呟いていました」

「名前？」

「ええ。トムと……たしか、クリーデンスという名前を。トムはトム・リドルのことでしょうが、クリーデンスとはいったい誰なのか、私には分かりません」

「間違いなく『クリーデンス』と言っておったのじゃない？」

「はい」

セレネが答えると、ダンブルドアは考え込むように目を伏せた。随分と長いこと目を瞑っていたので、眠ってしまったのかと思ったが、セレネが声をかける前に、ダンブルドアは顔を上げた。

「セレネ、教えてくれてありがとう。」

いまの君は、家へ帰るより、ここにいた方が安全じゃ。今年の冬は、ホグワーツに残りなさい。御父上もいまは聖マンガにいるから安全じゃ。新学期が始まるまで、ここで傷を癒し、ゆっくりすることじゃ」

ダンブルドアはそれだけ言うと、長いローブをはためかせ去ろうとした。

だが、ふっと思い出したように足を止め、セレネに優しくそんな眼差しを向けてきた。

「フローラとヘスティア・カロー嬢が、スネイプ先生に素早く君がパーティを抜け出したことを話してくれたおかげで、騎士団が動くことができた。二人とも君のことを酷く心配しておった。休暇が明けたら、お礼を言っておきなさい」

ダンブルドアはそれだけ伝えたと、医務室を立ち去ってしまった。

あたりは、しんと静まり返る。生徒たちの賑やかな声も、ゴーストの囁き声も聞こえない。ただ窓の外には、しんと音も立てずに雪が降り続いている。

セレネは後ろに倒れ、枕に自分の頭をうずめた。

不思議と、涙は出なかった。

ただただ、心の中に空虚さだけが広がっていく。

以前にも、この気持ちを感じたことがある気がした。

メアリーを本当の母だと信じていた時だ。

灰色の空の下、くすんだ色の墓前に佇んでいた時、今のようない気持ちだった。今思い返せば、クイールは自分の手を優しく温かく握りしめながら、静かに涙を流していた。きつと、あれは義父の優しさだった。

だけど、あの時はそんな当たり前のことに気づかなかった。

あれからクイールから与えられる惜しみない愛に気づくまで、セレネの世界はずっと灰色だった。

母親だと思っていた女は自分を見捨て、あまつさえ殺そうとしてきた。

結局、一度たりとも母に認めてもらえず、心にぽっかり空いた空虚のあまり涙さえ出なかった。

そして、今も——……世界は再び灰色に染まっている。

それから、クリスマス休暇が明けるまで、何事もなく過ぎていった。

ほとんどの生徒は、家へ帰ってしまっているのだろう。退院しても、スリザリンス寮には人っ子一人、見当たらなかった。

誰もいない談話室で、マグルのロックを流しても、いつもより心に響かない。

マグルの試験対策の勉強をするには絶好の静けさだったが、まったくもって身が入らず、数日経っても問題集は白いままだった。

数度、両面鏡越しにグリンデルバルドと話した。

だが、なにを話したのか、あまり耳に入ってこなかった。

分かったことは、アルバニアの森には何かを隠してあった痕跡はあったが、なにかは既になかったこと。

そして、ナギニは分霊箱だったのではないか、ということだけだった。

『私たち、というところが肝だ』

鏡の向こうのグリンデルバルドは旅装に身を包んだまま、静かに考察を述べる。

『私だけではない何かが肉体に共存している、ということになる。そして、普通の

魔法が一切通用しない……そうになると、もう分霊箱以外考えられない。喜びたまえ、フロイライン。君がナギニを殺したことで、分霊箱がまた一つ破壊された』

「……そうですね」

『暗くなることはない。』

それから、ナギニが最後に呟いていた人名だが、これも気にすることではない。クリーデンスについては、語ってもいいが……今はその時ではない』

「……」

セレネが黙っていると、グリンデルバルドがわずかに眉を顰めた。

『君は義父を守れなかったことを後悔しているな』

「……当たり前です」

セレネは右手で左腕を強くつかんだ。ぎゅっと爪の後がつくくらい強く握りしめる。

「私がつと策を講じれば、もっともつと力があれば……それに、もう、義父は……植物人間状態です。これは、助けられなかったことと同じです」

『君は諦めず、最後までベストを尽くした。嫌悪することではないし、むしろ、誇

りに思うことだ。それでもなお後悔があるなら、どうすればいい？』

「……失敗を反省して、次に活かします」

『その意気だ。このまま励みたまえ、フロイライン』

グリンデルバルドはそれだけ言うと、通信を切った。

それ以来、特に話したいこともなく、通信をこちらから入れることはしなかった。

他に特別なことは起きなかった。

しいてあげるのであれば、マクゴナガルが茶会に誘ってくれたことくらいだろう。葉草学のスプラウトやマグル学のチャリティー・バーベッジと一緒に紅茶を飲んだ。

このチャリティー・バーベッジ教授には、大変世話になった気がする。

なにしろ、義父の見通しのつかない長期入院に伴う休職の手続きを手伝ってくれた。彼女は大変マグルの社会の仕組みにも精通していて、『私の祖先は、マグル界で有名な数学者なの』と誇らしげに語っていたが、それも頭のどこかを通り過ぎていった。

そうこう過ごしているうちに、いつの間にか年が明けて、ぞろぞろと生徒たちが戻ってきた。

どうやら、セレネがヴォルデモートに襲われ、マグルの義父を救い出し、愛蛇を倒したことは預言者新聞によって世間に知れ渡っていたらしい。これで、ヴォルデモートの魔の手から逃れたのは幾度目になるだろうか。セレネは廊下を歩くと、尊敬の眼差しや崇拜の眼差しを感じた。

あまり良い心地とは言えないので、教室を行き来するときは裏道を使い、授業以外大半を時間を「秘密の部屋」で過ごした。

誰もがヴォルデモートを退けたことを第一に褒め、第三くらいに義父の様子について尋ねてきた。あの、ダフネ・グリーングラスでさえ、その法則に当てはまっていた。

当然である。預言者新聞のどこにも、義父が植物状態で入院しているなんて書いていなかったのだから。

一向に義父が回復した知らせは入ってこず、秘密の部屋にいても何もする気にな

れない。

賢者の石の研究はもちろん、分霊箱の調査も、試験の勉強も、呪文の開発も、何もする気になれなかった。

「セレネ！」

魔法薬学が終わり、そのまま秘密の部屋に籠ろうとした時だった。

ハリーが袖をつかみ、ハーマイオニーと一緒に「ちょっと話があるんだ」と人気がない中庭に連れ出した。

「実は、昨夜、ダンブルドアの個人講義で——……」

ハリー曰く、ダンブルドアからの宿題で、スラグホーンからトム・リドルにまつわる記憶を提供してもらうように言われたらしい。

「ヴォルデモートは、スラグホーンから『ホークラックス』っていうことについて聞き出そうとしていたんだ。

ホークラックスって知っている？」

「ホークラックス……ホークラックス……聞いたこともないわ」

ハーマイオニーが低い声で言うと、ハリーはあからさまに落胆した。そのまま、

期待を込めた視線をセレネに向けてくる。セレネは柱に背を預けながら、静かに答えた。

「分霊箱のことですよ」

「ぶん……なにそれ？」

「闇の魔術の一種です。ある種の延命魔法というべきでしょうか。……まあ、そんなところですよ。あの男が知りたがっても、不思議はありませんね」

話はそれだけらしいので、すぐにその場を立ち去ろうとする。しかし、今度はハーマイオニーに呼び止められてしまった。

「セレネ、大丈夫？ とても顔色が悪いわ」

「ありがとうございます、ハーマイオニー。ですが、心配無用です」

セレネは微笑みを作ると、足早にその場を立ち去ろうとした。

「セレネ。なにかあったら、僕たちに相談していいんだよ？」

ハリーの心配そうな声を背中で受ける。

「僕たちは友だちだし、ヴォルデモートを倒す仲間じゃないか」

「……仲間、ですか」

セレネは振り返ることはしなかったが、一度だけ立ち止まった。

「私には、もう、ヴォルデモートを倒す理由が……」

「え!?」でも、セレネはヴォルデモートを強く憎んでいるんでしょ？ だから、これまでも戦い続けてきたんじゃないの!？」

ハリーの声が遠くから聞こえる。

確かに、その通りである。リトル・ハングルトン村の墓場で、ヴォルデモートが自分の心を土足で踏み荒らしたとき、激しい怒りを感じたのは確かだ。

あの身を焦がすような怒りすら、遠い昔の出来事のように感じる。

ただ——……

「……そうですね。ヴォルデモートは嫌いです」

義父が植物状態になり、記憶すら失われているかもしれない。

そうなってしまった原因は、自分が完璧な保護対策を施していなかったからだ。もっと自分がしっかりやっていれば、義父は今も笑い、自分の名前を呼んでくれたかもしれない。

「正直、憎いです」

空虚だった心に、一筋の炎が点火される。

義父が植物状態になってしまった、根本の原因はヴォルデモートだ。

ヴォルデモートさえいなければ、義父はああいう状態に陥らなかった。

もつとも、ヴォルデモートがいなければ義父と出会うことがなかったかもしれないのも事実だが、やはりヴォルデモートが憎い。忌々しいまでに自分が悔しくて、それと同じくらいヴォルデモートのことが憎しみの炎が煮えたぎり、喉元を焦がすほど嫌いだ。

この手で息の根を止めたいほど、大っ嫌いである。

ヴォルデモートは、きつとナギニを殺した自分を許さない。

身動きの取れない義父を攫って、盾にするかもしれないし、そのまま殺されてしまいかもしれない。

「ありがとう、ハリー・ポッター」

セレネは前だけを見つめ、拳を血が滲むくらい強く握りしめる。

「私の進むべき道が見えました」

グリンデルバルドにも言ったではないか。

失敗を反省して、次に活かす。このまま空虚に沈んでいても、何も始まらない。無理やりでも顔を上げて、歯を食いしばって、義父のために進まないといけない。セレネは唇を噛みしめて、ハリーたちの視線を背中で感じながら城の中へと進んで行く。

覚悟は決めた。するべきことも思い描いている。ヴォルデモートへの恐怖も、いまはこの心に燃える憎悪の前では無力だ。もう、何も怖くない。

「今度こそ、絶対にしくじらない」

セレネは自分に言い聞かせるように、灰色の世界で静かに呟いた。

80 話 非暴力的で合法的な会談

二月になり、学校の周りの雪が溶けだし始めた。

どんよりとした灰紫色の雲が城の上に低く立ち込め、間断なく降る冷たい雨で、芝生は滑りやすくなっていった。

そのため、6年生の第一回「姿現し」の練習は、校庭ではなく大広間で行われることになった。

「姿現し」は試験に合格しなければ使うことができず、しかも、17歳にならないと試験を受けることができない。

今日の練習は、試験に合格するための講習——マグル風に言えば、車の免許取得の講習みたいなものだ。

土曜日の朝食が終わった後、大広間の机と椅子は綺麗に片づけられ、中心には輪っかが描かれていた。セレネはダフネと一緒に談話室に入り、魔法省から派遣された「姿現し」の指導教官の話を聞いていた。

「私はウィルキー・トワイクロスです。これから十二週間、魔法省『姿現し』指導

教官を務めます。

これから十二週間で、みなさんを試験に合格できるように訓練するつもりです」トワイクロス指導教官は一陣の風にも吹き飛ばされてしまいそうなくらい、実在感のない雰囲気だった。まるで、何度も何度も姿を消すうちに、自分の姿まで消えかかっているような儚い体型である。

「ホグワーツ内では通常、『姿現し』も『姿くらまし』もできません。ですが、校長先生がこの大広間に限って一時間だけ呪縛を解きました。

いいですか、これから皆さんには、輪っかの中へ『姿現し』をしてもらいます。必要なことは、『どこへ』『どうしても』『どういう意図で』を強く意識することです」

本に書いてあった理論を読み上げるように、トワイクロス指導教官は強い口調で語った。

セレネは輪っかの中に集中しようとしたが、どうしても『どうしても』だけが強く意識することができない。なぜ、あの輪っかにいかなければならないのか、強く念じることが難しかった。

「さあ、いち、に、さんの号令に合わせていきますよ！ いち、に、さん!!」
案の定、セレネはその場で回転しただけで、輪っかの中へ行くことができなかった。

とはいえ、セレネだけではなかった。大広間はたちまち集団よろけ状態になっていた。ダフネは仰向けに引っ繰り返っていたし、ザビニは二、三步、おかしなステップを踏んでいるようだった。

二回目も一回目よりましとはいえず、三回目で悲鳴が上がった。

ハッフルパフのシーズン・ボーンズが、一・五メートル離れた出発点に左足を残したまま、輪っかの中でぐらぐら揺れていた。

すぐさま控えていた寮監たちがボーンズを包囲し、激しい音と紫の煙が上がり、それが消えた後には、ボーンズが左足と再び合体し、怯え切った顔で泣きじゃくっていた。

「ああ、これは『ばらけ』ですな」

トワイクロスが平然とした顔で言った。

「体のあちこちが分離することにして、心が十分に『どうしても』と決意していな

いときに起こります」

「う……痛そう……怖いな」

セレネの隣で、ダフネが震えあがっていた。

セレネはトワイクロスの説明を聞きながら、小さく息を吐いた。

「……やっぱり、やらなくて正解ね」

ヴォルデモートに空中で襲われた時、『姿くらまし』をしなくて正解だったと改めて強く感じた。

こんな安全な場所で数回繰り返しても駄目な呪文を、あんな危険極まる場所ですらなくて正解である。自分はもちろん、義父までさらに危機的状況に陥らせていた可能性が高い。

「セレネ？ 正解って？」

「いえ、独り言です」

結論から言えば、第一回目の講習で『姿現し』は不可能であった。

一回、できそうな感じがしたときもあったが、次の瞬間、右腕が『ぼらけ』そうになったので、無理やり呪文の発動をキャンセルした。その場で前に倒れ込んでし

まったが、ばらけるよりマシである。

今後の活動のためにも絶対に習得しなければならない呪文だけに、習得できないことで苛立ちが募る。

ちなみに、グリンデルバルドに『姿現し』のコツを聞くと、彼は当たり前のように

『コツも何も、『あの場所へ行きたい』と念じればいいだけだ。それで問題はない』と教えてくれた。それができないから苦労しているのに、その気持ちがまったく分かってもらえない。

セレネは、がっくりと肩を落とした。

「聞く人を間違えました」

『ふむ、適切なアドバイスだと思ったのだがね』

『どこが適切ですか……まあいいです。それで、あなたに任せた仕事は上手く進んでいますか？』

セレネが本題に切り込むと、グリンデルバルドは小さく頷いた。

『もちろん、順調だ。無事、手続きは済んだ』

グリンデルバルドは鏡の前に一枚の羊皮紙を掲げる。

鏡越しなので、少し歪んでいて読み取りにくいだが、間違いなく『転院手続き』と書かれてあった。それを読み、セレネは納得したように頷いた。

「これで、ひとまず安心か……では、最後の護衛までお願いします」

『心得た。転院先の病室にも守護の魔法をかけておくとしよう』

「すべて、ぬかりなくお願いしますね」

セレネはグリンデルバルドに礼を言った。

ハリーの助言を受け、覚悟を決めたあの日——最初にしたことは「義父の転院」だった。

聖マングでも適切な処置を受けられるが、いかんせん、イギリス国内である。またヴォルデモートに命を狙われたり、盾や人質にされたりするかもしれない。まずは、その危険性を減らすため、『よりよい処置を受けるため』という名目で、国外の病院へ転院することに決めたのである。

今回、その転院手続き及び、義父の移送の護衛をグリンデルバルドに頼んだのだ。

グリンデルバルドなら、完璧にすべてをこなして貰えると踏んでのことだ。事実、報告を聞く限り、彼は手筈通りすべて完璧にこなしている。この調子なら、数日以内に義父は国外へ脱出し、ヴォルデモートの魔の手から逃れることができるだろう。

セレネは机に肘をついた。

『それで、君の方は、これから決行するのだろうか？』

「ええ。あなたのアドバイス通りに」

セレネは、自分の背後でこぼこぼと薬を煎じる音を聞きながら答えた。

「正直、あまりやりたくない方法ですが、仕方ありません」

『ああ、すべてはトム・リドルを破滅させるためだ』

グリンデルバルドは羊皮紙をローブの内ポケットにしまうと、空っぽのグラスにワインを注いだ。

『君の成功を祈って』

彼はそう言いながら、セレネの方に軽くグラスを向けた。セレネはその仕草をじっと見つめていた。

『恐れることはない。相手は君より格下なのだろう?』

「ええ、それはもちろん。まったくもって、負ける気はしません」

『ならば、問題はない。少なくとも、私のアドバイス通りに行動すれば、つつがなく終わるはずだ』

「……そうですね」

セレネは立ち上がりかけ、ふと、あることについて聞き忘れたことを思い出した。
「そういえば、以前、私のことを未来視していましたよね?」

『ああ、そうだな』

「誰が私を泣かすのか、もう一度だけ詳しく教えてもらえませんか?」

セレネが問いかけると、グリンデルバルドは意外そうに片方の眉を持ち上げた。

『君は未来視などにこだわらないと思ったが?』

「ええ、でも状況が変わりました」

セレネの脳裏には、日本を訪れたときに出会った占い師が浮かんでいた。

あの占い師はセレネに『森に近づく方がいい』と言っていた。てっきり、5年生の末に「禁じられた森」で繰り広げられた戦いについて言っているのかと思っ

たが、もしかしたら、先日の森での死闘について言っていたのかもしれない。なにしろ、彼女は『巨人、ケンタウルス、エトセトラ』と言っていた。そう、巨人とケンタウルス以外にも襲われることを予見していたのだ。

あの予言をもう少し考えていれば、もっとましな方向へ事態が進んだかもしれないかった。

そうになると、未来の予言というのは馬鹿にはできない。

「私を泣かす不届き者が誰なのか、詳しく知りたいのです」

『……言っただろう。背の高い男だと』

「皆、私より背が高いですけど」

あの予知から1年、年下のノーマンやグラハムですらセレネの身長を抜いている。

これでは対象者の絞り込みができない。セレネが少しむっとした表情をしていると、グリンデルバルドは愉快そうに指を組み始めた。

『顔までは見えない。それに、他人に関する未来の予知は断片的だ。時間帯は夜、ホグワーツの制服を着ている。ここまでしか分かん』

「……ますます分からなくなっただけですけど」

『まあ、あの未来は気にするな。たいしたことではない』

「……泣くというのは、たいしたことであると思いますけどね」

セレネが嫌味っぽく言うと、グリンデルバルドは小さく笑いながら通信を切った。笑いごとではないのに、事態が分かっている老人である。セレネは小瓶を取り出すと、鍋から薬を掬い取った。

『アルケミー、寮まで送ってくれる？』

『もちろんです』

小瓶をローブの中にしまい込み、バジリスクのアルケミーを呼んだ。セレネは蛇の頭に飛び乗り、そのまま寮の傍まで運んでもらう。そろそろ時刻は夜8時。消灯時間も近い。

だが、談話室に入ると、まだ生徒たちが宿題に取り組んだり、暖炉の前で会話に花を咲かせていたりと寝る気配は全く感じられなかった。

つまり、いつも通りの光景だ。

「先輩」

セレネが談話室に入ると、ノーマン・ウォルパートが駆け寄ってきた。

「ノーマン、どうしたの？」

「い、いえ。先輩に頼まれて、ずっと談話室の入り口を見張っていましたが、あの人はまだ来ていません」

「……そう。じゃあ、これから戻ってくるのね。ありがとう、ノーマン」

セレネは談話室の入り口に一瞬目を向けた後、ノーマンの肩のあたりを軽く叩いた。ノーマンは嬉しそうに頬を赤く染めている。背の高さこそ抜かされたが、こういうところはまだ可愛らしさを感じられた。

「せっかくだから、一緒に待ちましょうか」

「えっ、い、いいんですか!？」

「いいのよ。それに、貴方にはまだ任せたい仕事があるから」

「あ、ありがとうございます！」

ノーマンは誇らしげに敬礼をした。

彼は昨年度から目まぐるしい成長を見せ、2年生ながら親衛隊幹部入りを果たしている。一学年上のグラハム辺りからは嫉妬されているが、ノーマンは先日のス

リザリンVSハッフルパフ戦ではシーカーとして金のスニッチをつかみ、チームを勝利に導いていた。初戦のグリフィン・ドール戦では、ハリー・ポッターに惜しくも負けてしまったが、その敗北を覆すほどの得点を稼ぎ、寮対抗試合ではグリフィン・ドールに次いで2位に躍り出ている。

この結果、ノーマンの幹部入りを疑問視する声は確実に減り、こうして幹部としてセレネの手足となり行動することが増えたのである。

ただ――……

「もう、先輩。ノーマンばかりズルいですわ」

「姉様の言う通り、私たちにも仕事を回してくださいませ」

と、この通り、一部の親衛隊幹部が不満を漏らすことも増えているので、均等に仕事を頼もうと意識していた。

「ありがとう、フローラとヘスティア。そうね、ヘスティア。せっかくだから、ウルクハートとベイジールも呼んできてくれないかしら？」

「かしこまりました！」

ヘスティアは鋭く返事をする、守護霊の呪文を唱えた。ヘスティアの先から飛

び出した獵犬は、まっすぐ男子寮へと消えていく。男子寮へと続いた銀色の筋が消えかけた頃、談話室の扉が開いた。セレネは現れた人物を見て、目を細めた。

「さて、行きますか」

セレネは口の中で呟くと、現れた人物——ドラコ・マルフォイに向かって歩き始めた。

こうして近くで見ると、マルフォイは病気のように見えた。いつも完璧に整えられていたプラチナブロンドは乱れ、端正な顔は青白い。背後に控えるゴイルの恰幅と顔色の良さと対比すれば、具合の悪さは一目瞭然だった。

「こんばんは、マルフォイ。少しいいかしら？」

「……なんだ。僕は今、とても疲れてるんだ」

マルフォイはセレネを面倒くさそうに見下した。

普段なら嫌味の一つや二つ、言いそうなもののなのに、本当に具合が悪いのだろう。だが、ここで手を緩めるわけにはいかない。

「いえ、実は会談をしたいと思ひまして」

「会談だと？」

「スリザリンの党首会談、といえいいかしら？ 来年は私たちも卒業ですし、今後のスリザリン寮の在り方についてトップ同士、軽く話し合いませんか？」

マルフォイ率いる純血派は随分と勢力は弱まっているが、いまだスリザリンの第二派閥だ。

それに、どちらの派閥も欠点がある。

純血派はマルフォイの後釜が育っていない。一方のセレネの方は、ノーマンやアステリアたち下級生を育てているが、肝心の旗印がいなくなったあと、彼らがどうなるのかは予想することができない。

「私たちが卒業後、互いの派閥が争い合って、陰悪な寮になってしまうのは後味が悪いですし」

「……別に、僕が卒業した後のことなんて、知ったことではないね」

「あら。それなら、今ここで純血派を飲み込んでしまいませんか？」

セレネはゆるりと口角を上げた。

ちょうど、ウルクハートとベイジーも到着し、セレネの後ろに控えている。

セレネが試験対策クラブを通して直々に鍛え上げ、先学期の「ダンブルドア軍団」

ですら苦戦するであろう面子が勢ぞろいしていた。

「ですが、私、暴力は好きじゃないの。まだ、話し合いの方が平和だと思います？」

「……」

いまここで、力で純血派を完膚なきまで倒すのは、赤子の手をひねるより簡単だ。筆頭のマルフォイは自分が手を下さなくても、カロー姉妹たちの手にかかれば楽勝だし、クラップやゴイルは幹部の中で最弱なノーマンですら倒せる。そのことは、きっとマルフォイだって理解している。

マルフォイが何を企んでいるにせよ、貴重な戦力を失いたくないのは確かだ。それに、彼は意外と仲間思いのところがある。

数は減らしたが、純血派の仲間が力で傷つき、落ちぶれていくのを黙って許すはずがない。

その思惑通り、マルフォイは小さく頷いた。

「分かった。会談に臨もう」

「では、明日の10時に8階の……そうですね、『馬鹿のバーナバス』の絵の前で落

ち合いましたか。護衛は、互いに2人まで。どうでしょう？」

「ああ」

マルフォイは苦々しい表情のまま、男子寮へと登っていった。

とりあえず、これに約束には漕ぎつけた。

「さて、では私の護衛ですが——……」

「〔私（オレ）がやります!!〕」

案の定、幹部陣が率先して名乗りを上げた。

いつの間にか、幹部たちの後ろで、うずうずしている佇んでいるグラハムやアステリアたち一般隊員も護衛として同行したがついているように見える。

セレネは少し力を抜いた笑みを浮かべた。

「分かりました、それでは——……」

「一人はオレが行く。これは決定事項だ」

セレネが最後まで言い終える前に、誰かが口を挟んできた。セレネは小さく息を吐くと、彼の方を見ないで尋ねた。

「あなたを指名した覚えはありませんが」

「オレはお前の親衛隊の隊長だぞ？ それに、右腕だったんじゃないのか？」

そう言いながら、セオドールはセレネに近づいてくる。そして、セレネの耳元で、他の隊員に聞こえないくらい小さな声で囁きかけてきた。

「お前がオレに黙って動くときは、ろくなことじゃないだろ？」

「……はあ、分かりました。ただし、会談の内容は他言無用で」

「当然だ」

セレネは渋々、彼の要望を受け入れた。

本来なら、確実に信用が置けるフローラとヘスティアで両脇を固めようと思っていたのに、これは大きな誤算である。とはいえ、セオドールも自分の右腕として使えるのは事実だ。彼なら、多少の文句は言うだろうが、従ってくれる確信がある。

結局、次の日。

『馬鹿のバーナバス』の絵の前には、セレネとセオドール、そして紅茶セットを手にしたフローラがマルフォイを待っていた。

マルフォイは時間丁度に来た。

予想通りというべきか、後ろにはクラブとゴイルを従えている。

「時間、ぴったりですね」

セレネは手にした懐中時計をぱたと閉じると、マルフォイに微笑みかけた。マルフォイはやはりこの会談に乗り気ではないのだろう。彼はにこりともしていなかった。

「では、はじめましょうか。立ち話もなんですから、あの部屋でやりましょう」
セレネが先導して歩き始めた。

絵の前を通り過ぎ、のっぺりとした石壁に向かって歩き始める。

ただの石壁に向かって歩いているのに、マルフォイが疑問の声を上げないところを見ると、その石壁の向こうに隠された部屋——『必要の部屋』の存在を熟知しているのだろう。

逆に、『必要の部屋』を知らないセオドルたちが、不思議そうな顔をしていた。
セレネは壁に近づく

『先生や他の生徒たちには誰にも知られずに、マルフォイと会談できる場所が欲しい』

と強く念じながら、壁の前を三度、通り過ぎた。

すると、扉が石壁から生えるように姿を現した。フローラが小さく息をのむ声が聞こえてくる。

「こちらへどうぞ、マルフォイ」

セレネが部屋に入ると、長い机が用意されていた。椅子は二つだけだ。無論、誰のための椅子なのかは言うまでもない。セレネが適当に座ると、マルフォイは対する椅子に腰を下ろす。

「さてと——……フローラ、お茶の準備を」

「かしこまりました」

フローラが慣れた手つきで紅茶を淹れる。

その間、セレネは両肘をつき、マルフォイの表情を観察していた。目元にげっすりとしたクマができ、頬もこけている。先学期までの威張り腐った態度は見る影もなかった。それを成長というのか、はたまた余裕がないというべきか。おそらくは後者だろう。

「どうぞ」

フローラが紅茶を差し出してくる。

セレネは礼を言々と、茶を一口飲んだ。しかし、マルフォイは手を付けない。

「毒は入っていませんよ？」

「……」

マルフォイは何も答えなかった。

賢明な判断だ。確かに、毒は入っていない。代わりに、マルフォイの紅茶にだけ真実薬が入っている。すぐに飲み干さないと、さすかは昨年度、アンブリッジの親衛隊に属していただけある。あのガマガエルが尋問に真実薬を使うことについて、学期終盤頃になるとかなりの生徒が知っていた。マルフォイはガマガエルが真実薬をためらいなく盛る姿を間近で見てきたのだから、警戒するのも当然かもしれない。

「……残念です」

セレネは心の底から呟いた。

「早く始めないか？ 僕だって忙しいんだ」

「ええ、私も忙しいの。だから、とっとと本題に切り込みますね」

セレネは紅茶を一口飲み、カップを音を立てずに置く。そして、マルフォイに優しく微笑みかけた。

「あなた、ヴォルデモートに何を命令されているのですか？」

「——ッ!？」

マルフォイの顔色が一気に強張った。

サイコパスの名を口にしたからだろう。セレネの後ろで、フローラとセオドールが固まる気配が伝わってきた。クラッブとゴイルなんて、棍棒で叩かれたような顔をしている。

「僕が『例のあの人』に命令されている？ そんなこと、どうでも——……」

「どうでもよくありませんね」

セレネはすくっと立ち上がった。マルフォイは顔を引きつらせながら、右手が杖に伸びるのが見えた。クラッブとゴイルに至っては、威嚇するように拳を鳴らし始めている。

概ね、予想通りの反応である。セレネ自身は杖を取ることなく、そのままゆっくりと歩き出した。静まり返る『必要の部屋』に、セレネの足音だけが異様に響き

渡っていた。

正直、親衛隊と純血派の行く末なんて、どうでもいい。

セレネにとって、今一番大切なことは、いかにしてヴォルデモートを破滅させるかである。

「今学期に入ってからの不審かつ不可解な行動、この私が勘づいていないと思っていたのですか？」

どうせ、ヴォルデモートがマルフォイに対して命じた仕事は『ルシウス・マルフォイの度重なる失態に関する嫌がらせ』に過ぎないはずだ。ヴォルデモートはマルフォイが任務に苦悩する姿を楽しみ、失敗した暁には、心おきなくドラコ・マルフォイに対して処罰を下すのだろう。それが、ルシウス・マルフォイやその妻にとっての罰になると重々承知のうえで。

だから、どのような任務を与えられているにせよ、ドラコ・マルフォイがヴォルデモートの命令を完遂できるはずがない。そう考え、今までマルフォイの一件は放置してきた。だが、ヴォルデモートの息の根を確実に止めるためだ。なので、どのような些細なことでもヴォルデモートに関する情報を搾り取りたい。

それに、ヴォルデモートと通じているかもしれない時点で、マルフォイには利用価値がある。

「私、おかしい話をよく聞きましてね。ホグワーツ特急で、ウルクハートにこんなことを言ったとか」

セレネはマルフォイの後ろに回り込みながら、彼の後ろでぴたりと止まった。

「たしか、『優勝杯を取るより大切な役目がある』と。ぜひ、その大切な役目について教えてもらいたいものですね」

「——ッ！」

マルフォイが杖を手にとったので、セレネは素早く己の杖を引き抜き、マルフォイの右肩に乗せて動きを封じた。彼は杖を引き抜いたままの恰好で、ぴたりと固まった。

「ああ、それとも……」

そう言いながら、セレネは嘲笑気味な笑みをクラブとゴイルに向けた。

「愚鈍で間抜けなお仲間さんには知られたくない、とっても大切な任務とか？」

「この、半人間め!! 言わせておけば!!」

挑発に乗ったクラブとゴイルが拳を振り上げる。彼らは愚鈍で間抜けで、どうしてOWLをパスできたのか分らない頭のつくりをしているというのに、力だけは一・倍ある。握り拳なんて、セレネの頭と同じくらいあった。けれども、セレネは避ける必要がなかった。

『『ステューピファイ―麻痺せよ』!!』

クラブたちの拳がセレネの頭を直撃する前に、フローラの失神呪文が牙をむいたからだ。赤い閃光は二人の眉間を見事射抜き、そのまま音を立てながら後ろに倒れ込んだ。セレネはフローラに軽く微笑みかけると、再びマルフォイに視線を戻す。「……さて、お仲間はどうすり眠っていますよ。これで思う存分、お話できるのでは？」

「つく、誰が言うか!!」

マルフォイが椅子を倒す勢いで立ち上がると、セレネに杖を向けようとしてくる。なので、セレネは無言で武装解呪の呪文を放った。もともと、彼の首元に杖があったので、杖を奪うのは造作もないことだった。セレネはマルフォイの杖をつかみ取ると、そのままセオドルへ投げ渡した。

「貴方は杖がない。自分を守る手段もない。それでも、口を閉ざしたままですか？」

「——ッ、ああ、確かに僕は『例のあの人』から任務を受けているさ！　だが、言わないぞ!!　絶対に!!」

マルフォイは、ほとんど泣きそうになりながら叫んでいた。

先学期までの肩を張って歩いていたような姿は見ると影もない。セレネは呆れたように肩を落とすと、やれやれと首を横に振った。

「そうですか。残念です。自分の意志で言ってくださらないのでしたら……私も許されざる手段を考えなければなりません」

「おい、ゴースト！」

セレネがマルフォイに向かって優しく囁きかけたとき、セオドールの声が部屋を貫いた。

「お前、まさか『服従の呪文』を使う気じゃないだろうな？　あれは——……」

「忘却呪文をかければ問題ないでしょう」

セレネは当然のように言うと、マルフォイが石のように固まった。マルフォイだ

けでない。セレネの視界に入らない向こう側で、セオドルも固まる気配が伝わってきた。

「それに、ヴォルデモートに屈した臆病者を、人間と呼びたくありません」

「な——……おまえ、正気か!？」

「正気も正気です。その証拠に、彼らが攻撃態勢に移るまで、私は何もしていない。フローラがゴイルたちを倒したのも、死喰い人もどきから杖を取り上げたのも、私たちの身が危険にさらされていたからです。」

これは、正当防衛にすぎません。私は、ただ穏やかに会談を進めただけなのに」

セレネは頬を緩ませながら、どことなく明るい口調で答えた。

「この死喰い人見習いは、穏やかな話し合いを拒否し、杖を先にとりました。それならば、止むをえません。」

合法的な強度の尋問をするしか選択肢がなくなります。それでも、口が緩まないのですたら……『服従の呪文』に頼るしかありませんね」

あくまで、「服従の呪文」は最終手段だ。

セレネとしても、マルフォイごときのために法律を破りたくはない。けれど、も

し、彼がこれからする尋問にも屈しないとあれば、その選択を取るしかないだろう。

「最初に攻撃態勢へ移行したのは、マルフォイ……貴方なのですから」

口調は明るく、表情も穏やかで、しかし視線だけは冷徹なものをマルフォイに向ける。マルフォイは縮こまった。きっと、彼は気づいてしまったのだ。

セレネの言う尋問は、果てしなく拷問に近い尋問だ、ということに。

「ぼ、僕を傷つけてみる。母上が黙って——……」

「私たち、魔法使いですよ？ 傷なんて、すぐに治せるではありませんか。ために、そうですね……」

セレネはマルフォイの喉元から肩にかけて、すうっと杖先でなぞった。

「この辺りに針刺し呪いでもかけてみますか？」

それとも、『タラントアレグラ―踊れ』でもいいですね。真っ赤に焼いた鉄の靴を履いてもらって、白雪姫の継母みたいに踊ってもらうのも素敵です。踊り疲れた頃、呪文で癒して、また踊ってもらうのも一興かもしれません」

「ひいっ!？」

「本当に、残念でした。あの紅茶を飲んでくれた方が、ずっと穏便に済んだのに」

マルフォイの顔が更に青ざめる。

セレネの本気を悟ったのだろう。口元がわなわな動き始めた。

「これが最後通告です。あなたが、ヴォルデモートに何を命じられたのか、教えてくださいますか？」

マルフォイは床に崩れ落ちるように座り込む。セレネは彼の目線まで屈みこみ、微かに震える首元を杖先で叩いた。彼の言葉を促すように、とん、とん、と。

「こ……校長を……殺せて」

薄紫色の震える唇が、か細い言葉を呟いた。

「し、死喰い人を、ホグワーツの中に、招き入れろって。で、でも、ダンブルドアを、殺すのは、僕がやれって」

「なるほど。かなり難しい命令ですね」

さすがに、校長を殺すように命じられたとは思いつかなかったし、まさか死喰い人の手引きまで任されているとも考えつかなかった。

「辛い役目ですね。騎士団や闇払いの目をかいくぐって手引きしろ、だなんて。それで、失敗したら……殺すと脅されたのですか？」

セレネは目尻を和らげると、マルフォイの首元から杖を離した。代わりに、自分の手で震える背中をさすってやる。

「ぼ、僕だけじゃない！ は、母上も一緒に、こ、こ、殺すって!!」

それは悲痛な叫びだった。マルフォイの青い瞳から、ぼろぼろと大粒の涙が零れ落ちる。そこにいたのは、強引に死喰い人見習いにさせられた、強がっていただけの臆病で気の弱い少年だった。

「……酷い話ですね。苦しかったでしょう？」

セレネは同情するように、彼の背中を撫で続ける。

「打ち明けてくれて、ありがとうございます。ちなみに、どうやって招き入れるつもりだったのですか？」

「姿をくりますキャビネットだよ！」

マルフォイはどこかやけになったように言い放った。

「必要の部屋で、直していたんだ！ ノクターン横丁のボージンの店に会った『姿をくりますキャビネット』と対になっているキャビネットがホグワーツにある！

それを、直して、ベラトリックス叔母上たちを……でも……!!」

「修復は難しかったのですね。それに、誰かの手を借りることも難しかった」

マルフォイは嗚咽を上げながら、激しく頷いた。

マルフォイは純血派を率いていると言っても、直接命令を下せる手下はクラブとゴイルしかない。パンジー・パーキンソンたちに助けを請えるはずもないし、クラブたちがキャビネットの修復なんて高度な技術を持っているわけがなかった。

「……大変でしたね。魔法の道具を直すなんて、とても難しいですよ。ここ数か月、頑張っていたのですね」

セレネが甘い言葉を呟きながら背中を擦ると、マルフォイはさらにしゃくり上げる。

「私が、手伝ってあげましょうか？」

「えっ?」

「はあっ!!?」

セオドールが息をのむ声が聞こえたが、セレネは今はマルフォイだけに意識を割いていた。マルフォイは泣き腫らした目で、セレネを見上げている。まるで、信じ

られないものでもみたかのような形相だ。

「キャビネットの修復、手伝ってあげます。一人では大変でしょ？」

「で、でも、君は……あの人が、き、嫌いなんじゃ……」

「ええ、嫌いですよ。大っ嫌いです」

セレネは心に蓋をし、努めて暖かい眼差しをマルフォイに向けながら告げた。

「だから、交換条件。あなたは、ベラトリックス・レストレンジに一言、尋ねてほしいの。」

『ヴォルデモートから預かっている大切な物はあるのか』、と

「お、叔母上に？ 大切な物？」

「ベラトリックスはヴォルデモートの信が厚い第一の部下と言っても過言ではありません。ヴォルデモートから特別に大切な物を託されていてもおかしくないですから。」

私は……その事実と隠し場所が知りたいのです」

マルフォイの耳に口を近づけ、言葉を吐きかける。

「それさえ聞き出してくれたら、キャビネットの修復は手伝いましょう。さすがに、

ダンブルドアを殺すことまでは手を貸せませんが」

ヴォルデモートは以前、分霊箱の日記帳をルシウス・マルフォイに預けていたと聞く。

ならば、同じくヴォルデモートの腹心の部下、ベラトリックス・レストレンジにも同様に分霊箱を預けている可能性が高い。その見解は、セレネとグリンデルバルドで一致していた。

ベラトリックスに預けた分霊箱を見つけられるなら、キャビネットの修復など容易いものだ。

「嘘だ。僕の言ったこと、全部、ダンブルドアやポッターに伝えるんだろ!？」

「まさか、伝えませんよ。ここにいる四人だけの秘密です。ご心配なら、契約書を用意しますけど?」

マルフォイは、まじまじとセレネを見つめた。セレネの言葉を信じていいのか、推し量っているようだった。

「それとも、破れぬ誓いがいいですか?」

「……本当に、誰にも言わないのか?」

マルフォイは縫りつくような声を出した。

「ベラトリックス叔母上に、そのことを聞くだけで、キャビネットの修復を手伝ってくれる？」

「ええ、修復だけは手伝います。キャビネットのことや貴方がダンブルドアを狙っていることも黙っています」

「叔母上たちを招き入れようとしていることも？」

「もちろんです。ダンブルドアにも騎士団にも、ポッターやダンブルドア軍団の者たちにも黙っていきましょう」

セレネは羊皮紙を取り出した。

マルフォイの前で、たった今言った誓約事項を書き記していく。自分の名前も署名し、フローラたちに目配せをした。フローラはすぐにセレネに従い、セオドールはやや迷った末に名前を書いた。

「さあ、あとは貴方の名前だけです。これで、契約のゲッシュは発動します」

マルフォイは書き上げられたばかりの誓約書を食いつくように読み始めた。

マルフォイも古代ルーン文字学を学んでいたので、ここに記された契約のルーン

は理解できるはずである。契約を破った者に死を及ぼす、最上級のルーンだ。

「もつとも、あなたがこの契約のことを漏らしてしまったら、うっかり……私、この羊皮紙をダンブルドアやマクゴナガルの前で落としてしまうかもしれません」
セレネは、自分が手伝ったことを漏らさないように釘を刺した。

彼は一瞬、震えあがったが、様々なリスクを天秤にかけ、覚悟を決めたのだろう。
「……分かった」

彼は震えながら羽ペンを取り出すと、名前を署名した。最後の一字を書き終えると、羊皮紙全体が緑色に輝き、契約が締結されたことが分かった。セレネは羊皮紙を丸めると、大事そうにローブの内側にしまった。

「これで問題ありませんね。では、明日から早速、手伝わせてもらいます」

「あ、ああ……ぼ、僕も、イースター休暇に叔母上に、聞いてみる」
セレネとマルフォイは手を繋いだ。

互いに契約を果たすことを約束すると、セレネは未だに立ち上がれないマルフォイを残し、必要の部屋を去った。あとから、フローラとセオドルが追いかけてくる。

「先輩、よろしいのですか？」

フローラが不安そうに尋ねてくる。

「マルフォイの企みが分かったのは良かったですけど……手伝いをするなんて……」

「お前らしくないだろ。『あの人』の手助けをするようなものだぞ？」

セオドールも声を潜めて聞いてくる。セレネはしばらく黙っていた。必要の部屋から随分遠ざかり、滅多に人が来ない抜け道に入った時、ようやく足を止め、2人を振り返る。

「手助け？ まさか！」

セレネはマルフォイに見せた偽りの笑みとは異なる、心からの笑みを浮かべた。

「これで、ヴォルデモートの手駒を確実に潰せるではありませんか!!」

「え……？」

「キャビネットが修復したら、あいつは死喰い人たちを招き入れますよね？ キャ

ビネットは必要の部屋にあるのですから、いつ、どこから侵入するのか、どこで待

ち伏せすれば効率よく倒せるのか、一目瞭然ですよ！」

キャビネットを修復すれば、死喰い人侵入の目途が分かる。

死喰い人の侵入経路が分かっているのだから、それを潰すことができる。

ましては、ダンブルドアを殺すために用意された死喰い人なのだから、きつと、ヴォルデモートの部下の中でも最上位の死喰い人が派遣されてくるはずだ。その連中を一人残さず殺す事ができれば、ヴォルデモートにとって相当な痛手だ。

キャビネットを修復するだけで、死喰い人を確実に潰せる機会と分霊箱の在りかの両方が分かる。

まさに、一石二鳥だ。これほど旨い話はそうそうない。

「私はダンブルドア殺害には手を貸しませんが、死喰い人を見逃すとは言っていない」

「つまり、一網打尽にするってことですね！ さすが、セレネ先輩!!」

フローラは心酔したようにセレネを見つめた。

「皆から会談の内容を聞かれたら、『有効な話し合いに終わった』と伝えなさい。内容は決して、漏らさないように」

「はい、分かりました」

フローラは軽い足取りで先に談話室へと戻っていった。

セレネもその後が続こうとしたが、一步踏み出す前に後ろから手をつかまれる。そんなことをする人物は、一人しかいない。セレネは振り返らずに、淡々と尋ねた。

「……なにか、文句でも？」

「お前……いいのかよ、これで」

セオドールが咎めるように言ってきた。

「侵入して来た死喰い人に、殺されるかもしれないだろ」

「セオドール、私が殺されるとでも？」

「可能性はあるだろ」

「なら、何も問題ありませんね。私、殺されませんから」

セレネは彼の手を振り払って歩き始めた。

「おい、死喰い人に立ち向かうときは絶対に知らせろよな！」

セオドールの怒ったような声が、背中を追いかけてくる。セレネは一度、足を止めると小さくため息をついた。

「なぜ、貴方に？」

「いつも言ってるだろ。お前だけじゃ不安だからだ」

「……ありがとうございます」

セレネは理解した、と背を向けたまま手を振って見せる。

当然だが、彼に知らせるつもりはない。

ヴォルデモートを破滅させるために、その使える手駒を殺すのは自分の仕事だ。大切な強い死喰い人を殺し尽し、分霊箱を壊し、あの蛇男を完全に破滅させてやる。そのための貴重な一時を、邪魔されるような真似はさせない。

「ゴースト……お前、やっぱり性格悪いな」

セオドールの吐き捨てるような言葉を背中では受けると、セレネは暗い通路の向こうへ姿を消した。

セレネが手助けすることにより、マルフォイの精神的な負担が減る。

おかげで、マルフォイがトイレで泣くことはなくなり、ハリーの「上級魔法薬学」

の教科書は隠す必要がなくなる……なのですが、それはまた別の話。
次回投稿予定は、4月10日0時です。

謎のプリンス編もそろそろ終盤。最後までお付き合いください。

81話 約束と嘘

サブタイトルを「スリザリンの継承者」にしようとしたら、とっくの昔に使っていました。……おのれ、過去の私。お前のせいで、私の目論見が破壊されてしまったではないか！

……というわけで、文字数が過去最高記録更新した81話をお読みください。

『姿をくらますキャビネット棚』の修復は、マルフォイの言う通り難しかった。

例えば、林檎をキャビネット棚に入れ、扉を閉じ、開いたときには林檎が姿を消していたとしても、再び開いたとき、がつつり欠けた林檎が戻ってきている。

姿を消すことはできても、体の一部を持っていかれては大惨事だ。

セレネとしては、死喰い人の一部が削がれるのは、この上なく愉快なことだ。け

れど、約束してしまった以上、完璧に修復しなければならない。

名前の通り、この棚はタダの棚ではなかった。

単純な修復呪文だけでなく、棚自身に『姿くらまし』の理論が複雑に絡み合っている。

『姿現し』と『姿くらまし』の理論を完璧に理解し、実践できるレベルまでなっていないければ、修復は不可能だということが発覚した。トワイクロス指導教官の練習が五回を超えても、マルフォイは『姿くらまし』ができない。これでは、修復が難航する訳である。

セレネはそんなことを考えながら、修復に臨んでいた。

ちなみに、セレネ自身は三回目の練習で完璧な『姿くらまし』をすることができた。イースター休暇明けの試験にも合格し、無事に『姿くらまし』の認定免許を取得している。

グリンデルバルドの言う通り、コツは『行きたい場所を強く念ずるだけ』だったのは、少し癪であった。

「……と、まあ、姿くらましの理論を繋ぎあわせれば、修復も可能というわけです。

あとは、テストを数度行い、安全に魔法が発現するのか確かめる必要がありますけど……ま、それは後日で構わないでしょうね」

セレネは柵にルーンを含んだ魔法陣を書き足しながら、後ろで見守っている男——ドラコ・マルフォイに言った。

「ところで、ベラトリックスから聞きましたか？」

「あ、ああ。叔母上に聞いた。確かに、あの人から特別に預かった物があるらしい」
マルフォイはセレネの顔色を窺うように教えてくれた。セレネは作業の手を止め、マルフォイをしっかり見据える。

「それはどこに？」

「レストレンジ家の金庫に保管されているそうだ。なんでも、ハッフルパフゆかりのカップらしい。それ以上は教えてくれなかった」

「レストレンジの金庫、カップ」

セレネは噛みしめるように呟いた：

ハッフルパフのゆかりの品という時点で、ヴォルデモートの分霊箱になっている可能性が高い。ホグワーツ創設者のゆかりの品という時点で、貴重価値が高く、

ヴォルデモートが好みそうなものである。十中八九、それが分霊箱だ。とはいえ、レストレンジ家の金庫に保管されているとなれば、イギリス魔法界唯一の銀行にしてホグワーツの次に安全だと言われる場所、グリーンゴッツを破らないといけなくなる。

これは、かなり危険な橋を渡る必要が出てくる。

わざわざグリーンゴッツに忍び込んで、レストレンジ家の金庫を狙い撃ちしたことが発覚した段階で、ヴォルデモートはセレネが分霊箱を破壊して回っていることに気付いてしまう。分霊箱が幾つあるのか定かではない段階で、蛇男に感づかれるのは不味い。

とはいえ、ハッフルパフのカップが分霊箱だと分かったおかげで、最低でも5つ作られたことが分かった。

さすがに、わざわざ魂を薄めるのを承知で、これ以上——……たとえば、7つも作る馬鹿な真似はしないだろうと考えていたが、その愚かな予想が当たってしまったかもしれない。

ひとまず、分霊箱の数はつきりするまで、カップ破壊の件は保留することに決

めた。

「そうですか。ありがとうございます」

「契約だから……でも、なんでそんなことを聞くんだい？」

「さあ、気になっただけです」

セレネは最後のルーンを刻み終わると、キャビネット棚から離れた。

「ちなみに、何人の死喰い人を呼ぶつもりですか？」

「それは……二、三人だ。ベラトリックス叔母上とほんの数人」

マルフォイは素っ気なく答える。セレネは少し目を細めた。おそらく、嘘だ。ダンブルドアを殺すのに、たった二、三人程度の死喰い人を派遣するわけがない。

ただ、これ以上、脅して人数を聞くまでもなからう。いくら死喰い人がいたとしても、すべて殺し尽せばいいだけの話だ。

「でも、マルフォイ。一つ忠告しておきますね」

必要の部屋の出口に向かって歩き出しながら、セレネは思いついたことを口にする。

「ヴォルデモートの支配は、長く続きませんよ。たとえば、ダンブルドアが死んでも」

「それは……風潮がどうたらって話か？」

「クリスマスの時の話、覚えていましたか」

セレネは少しだけ驚いたように言った。

3年生の時に、ちらっとした話を彼がいまだに覚えていたとは、思いもしなかった。

「ダンブルドア鼻肩が世間の風潮だってことだろ？ だけど——……」

マルフォイの惘然とした声が聞こえる。

「いま、ダンブルドアが死ねば、確実に『あの人』の優勢さ。ポッターあたりが抵抗するかもしれないけど」

「まあ正直、ハリーは上手くいかないでしょうね」

セレネはマルフォイの意見に同意すると、後ろで驚く気配を感じた。少しだけ振り返ってみれば、マルフォイはぽかんと口を開け、まじまじとセレネを見ていた。

「少し考えればわかりますよ。蛇男のことですから、ダンブルドアが死んだら、魔法省と新聞社を手中に収めて、アンチ・ポッター運動をするでしょうね。それだけで、随分とハリーは動きにくくなりますから」

「なら、なんで『あの人』の支配が長く続かないって言えるんだ？」

「あの人、政治は苦手そうだからです」

セレネはきっぱりと言った。

「政治？」

「小規模のグループを治めることはしていますが、国レベルになると話は変わってきます」

死喰い人だけ所属しているお山の大将なら、ヴォルデモートでも務めることができた。

だが、もっと範囲を広げて、イギリス全体を支配するとなると話は変わって来る。「おそらく、自分は裏方に居座り、魔法省大臣に難しい業務は任せるのでしょーうけどね。あの蛇男は物凄く自分本位な性格ですから、きっと長くは続きませんよ。必ず、どこかでボロが出ます。」

だいたい、あの男がイギリス全土を手中に収めた程度で喜ぶと思いますか？」

「……たぶん、それはない？」

マルフォイは少し考えた後、ゆっくり首を横に振った。

「イギリスのマグル界を支配するのは不可能なので、おそらくは最初に世界的な魔法界の支配を目論むはずです。」

まずは手始めに、海を渡ったフランスやドイツ辺りの魔法界に服従を迫るかもしれません。

……さて、ここで問題です。あなたがドイツやフランスの立場で、イギリスから『この俺様に完全服従しろ』と迫られたら、どうします？」

「もちろん、それは断る。それで、戦争になるんじゃないのか？」

「ですよね。その時点で、アウトです」

セレネは目を伏せた。

「そもそも、ヴォルデモートは戦争を知りません」

「……え？ 今、まさにしているじゃないか！」

「いいえ、戦争ではありません」

セレネはきっぱり言い放った。

「今しているのは、内乱にすぎません。」

そもそも戦争とは、政治的な案件です。外交の手段でしかありません」

「外交……?」

政治にしろ外交にしろ、ホグワーツでは耳慣れない言葉だ。

ホグワーツにはマグルでいう政治・経済に相当する勉強がまったくない。魔法省に進んだ一部の魔法使いが、仕事を通じて初めて身に付ける分野である。つまり、ヴォルデモートや魔法省に就職していない大半の死喰い人は、政治を知らない。無論、ヴォルデモートはトム・リドル時代に多少、基礎基本は学んでいるだろうが、初等教育で学ぶ程度の政治経済の知識で、世界の魔法省と対等に渡り合うのは不可能である。

「戦争とは無駄が大きすぎます。喜ぶのは軍事産業だけ。とはいえ、魔法界には軍事産業がないに等しいので、誰も得をしません。」

でも、力による恐怖支配が得意な蛇男のことです。外交を通じた駆け引きなんてせずに、戦争へと突き進むことでしょう」

「……その先にあるのは、地獄ということか」

「マグルの歴史を紐解けば、暴力と恐怖を振りかざし、他国への侵略をつづけた国の末路は、だいたい決まっています。周辺諸国が手を取り、一つの敵に立ち向かう

のです」

セレネは自嘲めいた笑みを浮かべると、マルフォイは少し悩むような顔をしていった。

彼はアンブリッジを傍で見ていた。アンブリッジが力で押さえつけようとするほど、学生たちは反発して立ち向かってきた。アンブリッジの場合は背後に政府という大きな勢力があり、学生たちは小規模な反乱に過ぎなかったが、もし、その立場が逆転してしまっていたら——……きっと、アンブリッジや尋問官親衛隊は悠然と構えていることができなかったはずだ。

「ま、ヴォルデモートが頭を使って、戦争を回避しながら他国を支配するというのなら、すべて覆りますけどね。」

もっとも、外交を知らない時点で、上手く勝つ方法すら知らなそうですけど」
セレネは軽く伸びをしながら、マルフォイに語り続けた。

おそらく、ヴォルデモートがそんな手腕を発揮するとは思えない。ただでさえ、元の魂の数十分の一に薄められた現在では、そこまで正気な状態で駆け引きに挑むことはできないだろう。

「そんな崖に突っ込む暴走列車みたいな『スリザリンの継承者』と、目の前にいる『スリザリンの継承者』では、どちらを選びますか？」

「それは……は？」

「私と手を組むというなら、いつでも大歓迎で迎え入れます。条件次第では、あなたの家族もまとめて、庇護してもいいと考えていますので」

セレネはマルフォイの返事を待たずに、颯爽と必要の部屋を去った。

ドラコ・マルフォイは純血の名家中の名家だ。しかも、ヴォルデモートの直臣として、蛇男にまつわる情報をたくさん持っている。

マルフォイ一家の庇護を約束するだけで味方に寝返ってくれるなら、こちらとしても大歓迎だ。正直、大人の協力者が少ない分、物凄く心強い。

「姿をくまますキャビネット棚」の最終性能テストは、期末試験の後に決まった。先生方が試験の採点で手いっぱいになる隙について、性能テストをすることに

なったのだ。そうと決まれば、あとは自分の魔法の精度を上げる訓練とパラケルス版の賢者の石の作成に励むのみである。

そんな、6月のある日のことだった。

「セレネ！」

夕食が終わり、大広間を出たところで、ジャスティンが声をかけてきた。何か後ろに隠すように、背中にも手を回している。セレネは足を止めて、ジャスティンが近づいてくるのを待った。

「どうかしましたか？」

「えっと、こっちに来ていただけませんか！」

ジャスティンは玄関ホールの端へとセレネを連れてくる。

夕日はとうに沈み、蝋燭の灯りくらいしかないのに、彼の頬は赤く染まっている。

「あの……ほら、変身術の期末試験、出現呪文が出るって話でしたよね？」

「ええ。水を出したり、花を咲かせたりするらしいですね」

「その、それで、ちょっと練習してしまして……」

ジャスティンは後ろに隠していた物を取り出した。

柔らかいオレンジ色をしたカーネーションの花束だった。アクセントを添えるように、いくつもの四つ葉のクローバーが差し込まれている。

「上手くできたので、セレネにあげようと思ったんです」

「そうですか」

セレネは花束を受け取った。

「四葉のクローバーも創り出したのですか？」

「えっと、実は僕だけだと難しくて、アーニーやスーザンに手伝ってもらいました」
ジャスティンは頬を掻きながら、照れくさそうに言った。

現実世界で四つ葉を探すのが難しいように、魔法でクローバーを創り出すときも神経を集中させないと四つ葉を創り出すことはできない。

ハッフルパフでも特に優秀なアーニー・マクミランとスーザン・ボーンズなら、四つ葉を創り出せても不思議ではない。セレネは納得すると、ジャスティンに向き直った。

「ありがとうございます。大切にしますね」

「よ、喜んでもらえて嬉しいです」

ここで、セレネは少し首を傾げた。

ジャスティンは喜んでいようだが、少しがっかりしたようにも見える。はて、それは何故なのだろう。一瞬気になったが、別に尋ねるまでのことではないと判断した。

第一、セレネが理由を尋ねるだけの時間はなかった。

「セレネ!! ちょうど良かった!!」

ハリーが階段を駆け下りてきたのである。

その必死な形相に、セレネは身を引き締めた。

「どうしたのですか、ハリー?」

「時間がないんだ。僕、ダンブルドアと分霊——……いや、理由は上手く言えないけど——……」

ここで、ハリーは一瞬、悩むようにジャスティンを見たが、すぐに首を横に振った。

「ジャスティンにも聞いて欲しい。

とにかく、いろいろとあつて、ダンブルドアは今夜いないんだ！ だから、マルフォイが何を企んでいるにせよ、邪魔が入らないチャンスなんだ。いいから、黙って聞いてくれ！」

ジャスティンが口を挟みたくてたまらなそうな顔をしていたが、ハリーは噛みつくように言い放った。

「トレローニーが聞いたんだ！ マルフォイが『必要の部屋』で歓声を上げてたつて！」

だから、マルフォイとスネイプを見張らないといけないんだ。特にスネイプだ！ ダンブルドアが学校に追加的保護策を施したっていうけど、スネイプが絡んでいるなら、きっと意味がない」

「ハリー……」

「今は議論している時間はないんだ！」

セレネが口を開こうとしたが、ハリーは焦ったように言葉を遮った。

「ハーマイオニーとロンには、もう話してある。いまから一時間後、ダンブルドア

軍団のメンバーをできる限り集めて、グリフィンドールの談話室の前に集合する手はずになっているんだ。君たちにも参加してほしい」

ジャスティンはハリーの気迫に圧倒された様子だったが、こくこくと頷いていた。「僕、アーニーたちを呼んできます。きっと、ハリーの力になりたいはずですから」「ありがとう、ジャスティン！ セレネも頼んだよ！ 僕も必ず、戻って来るから！」

それだけ言うと、ハリーは正面玄関の向こう側へと消えていった。

静まりかえった玄関ホールには、セレネとジャスティンだけが残された。

「なんだか、大変な事態になってきましたね」

「……みたいです」

セレネは平然とした顔で言いながらも、内心は舌打ちをしていた。

おそらく、マルフォイはセレネを警戒して、こちらに知らせずに「キャビネット棚」の最終テストをしていたのだろう。

「では、私は支度をしに戻りますね。ジャスティン、グリフィンドールの談話室の前で会いましょう」

「またあとで！」

セレネは談話室に戻ると、ベッドの上に花束を放り投げる。そのまますぐに鞆を開け、戦闘の支度を始めた。パラケルスス版の賢者の石をネックレスのように首から下げ、残り数個はポケットの中にしまい込む。杖は袖の内側に隠し、いつでも取り出しやすいようにセットした。

セレネの準備が整ったとき、ダフネが部屋に戻ってきた。彼女は目を丸くして、カーネーションの花束を見つめている。

「ちょ、ちょっと、セレネ!? その花束、誰から——……」

「ちょっと、出かけて来ます！」

ダフネの話を遮り、セレネは部屋を飛び出した。

ちらりと、頭の片隅に彼女も「ダンブルドア軍団」に参加していたことが横切ったが、言わないことに決めた。盾呪文や魔法薬学を得意としているが、それ以外の実技魔法は、妹のアステリアに負けている。セレネの見立てでも、ダフネの実力は死喰い人と戦うレベルにまで至っていないかった。

知らせない方が、彼女のためだろう。

「待て、ゴースト」

セレネは談話室を飛び出したが、その先には障害が待ち構えていた。

セオドール・ノットが入口の脇の壁に背を預けて立っていたのである。

「そろそろ消灯なのに、どこへ行くんだ？」

「別に、どこでもいいではありませんか」

「はあ……大方、一人でマルフォイをどうにかしに行こうとしていたんだろ？」

この時間なのに、マルフォイの奴はまだ帰ってきていないしな」

セオドールは呆れ果てたような口調で話し始める。

「約束、忘れたとは言わせないぞ」

「……」

セレネは何も答えなかった。

彼は「ダンブルドア軍団」の一員ではないが、戦力として申し分ない。ただ、彼の父親は死喰い人だ。死喰い人たちから決裂しているとはいえ、純血の裏切り者として、狙い撃ちされるかもしれない。一対一なら死喰い人ともやり合えるだろうが、幾人も束になって来たら難しいだろう。

セレネが渋い顔をしていると、彼は少し怒ったような顔になった。

「約束！」

「……分かりました」

結局、セレネは折れた。

セオドールの有無言わさぬ雰囲気を感じ取ったのもあるが、約束は約束である。それに、どうせ死喰い人は自分が全員倒すのだ。彼がいたって問題ないだろう。セレネはため息をつきながら歩き始めた。

「危険だと思ったら、すぐに撤退してくださいね」

「それ、お前もな」

セレネたちは歩き始めた。

「実は、ハリーに召集をかけられていまして……」

セレネは先ほど、ハリーから聞いた話を伝える。すると、セオドールは考え込むように眉間に皺を寄せた。

「マルフォイの件はともかくだ。ダンブルドアがいなくなるって、どうしてポッターは知っていたんだ？」

「さあ。もしかしたら、ダンブルドアと出かけるのかもしれませんがね。話し終えた後、すぐに正面玄関から出て行きましたから」

セレネも話しながら、ハリーがダンブルドアと出かける理由に思いをはせた。

ハリーは先ほど、確かに何か理由を言おうとしていた。おそらく、ジャスティンが隣にいたので言い淀んだのだろう。だが、彼は確かに「分霊——……」と口にしていった。明らかに、ダンブルドアと分霊箱を破壊しに行ったのだ。ダンブルドアに宿題として『スラグホーンがトム・リドルと交わした分霊箱に関する話について聞き出せ』と出ていたことから考えても、あながち間違いではないだろう。

セレネの知らない分霊箱を破壊してくれるなら、これほど助かることはない。

「ですが……」

もし、行き先が例の海岸だったら、少し不味いことになる。

ダンブルドアならグリンデルバルド製の毒薬を無効化できるかもしれないが、万が一、あれを飲み干すなんて決断をしてしまったが最後、とんでもない悲劇かつ無駄足になってしまう。下手したら、ダンブルドアかハリーのどちらかが死んでしまうかもしれない。

「……ま、それはないでしょう」

「何を勝手に納得しているんだ？」

「気にしないでください」

セレネたちがグリフィンドールの談話室の前に着くと、すでにハーマイオニーたちが待っていた。

とはいえ、さすがに「ダンブルドア軍団」の全員が集まったわけではなかった。グリフィンドール生は、ハーマイオニー、ロンとジニー・ウィーズリー、そして、ネビル・ロングボトムだけだったし、ハッフルパフ生はジャスティンとアーニー・マクミラン、スーザン・ボーンズ、レイブンクロー生に至っては、ルーナ・ラブグッドだけだった。

「……時間ね」

ハーマイオニーは時計から目を上げると、全員を見渡した。

「今夜、ダンブルドアとハリーが……ちよつと、ある理由で城を留守にしています。その間、マルフォイとスネイプが何か不審な行動を起こすかもしれません。だから、皆に見張ってもらいたくて、ダンブルドア軍団を召集したわ」

「グレンジャーさん、ごめんなさい。私、どうしても信じられないの」

スーザン・ボーンズが疑問の声を上げた。

「マルフォイが何かできるとは思えないし、スネイプ先生はホグワーツの教授よ？
その、先生の過去はともかく、今は不死鳥の騎士団のメンバーだって聞いたことがあるわ」

スーザンが言うのと、ハーマイオニーも言葉に詰まった。おそらく、彼女も半信半疑なのだろう。

セレネもスネイプが裏切るとは思えない。自分の寮監ということもあるが、ダンブルドアがスネイプの裏切りを見逃しているとは、到底思えなかった。彼が裏切り者なら、ダンブルドアは絶対に雇うことはしないだろう。

……もっとも、クィレルや偽ムーディという例外はあったが。

だがしかし、ハーマイオニーが答える前に、アーニーが咳ばらいをした。

「スーザン。さっきも言ったろ？ きつと、ハリーは皆に伝えていないだけ、確固たる証拠があったんだ」

彼はもったいぶった口調で言った。

「彼が僕たちを頼り、召集をかけたという時点で、大きな意味がある。そもそも、僕たち『ダンブルドア軍団』はOWL試験だけでなく、来るべき『例のあの人』の脅威に備え、そして、立ち向かうために、自主的に闇の魔術に対する防衛術を学んできた。

マルフォイが死喰い人に屈し、なにか良からぬことをしようとして企んでいるのなら、僕たちは阻止するために戦う必要がある！

それに、ホグワーツの教授が闇の力に屈したことなら、以前もあつたはずだ。にわかには信じがたいが、スネイプも堕ちたという可能性もありえなくはない」

アーニーは演説を終えると、どうだと言わんばかりに周囲を見渡した。だが、その眼がセレネの隣に立つセオドルを視止めたとき、明らかに不快そうに歪んだ。「だけど、僕は……どうして、ダンブルドア軍団に参加していない人がいるのか、ちょっと分らない」

「彼は問題ありませんよ」

セレネが代わりに答えた。

「魔法省での戦いにも参加していました。そうですよね、ハーマイオニー？」

「ええそうね。彼は私たちの仲間よ。そうよね、ロン」

「え……あ……うん。まあ、そうだな」

ハーマイオニーに睨まれ、ロンは口ごもりながらも認めた。それを聞いて、アーニーは納得したらしい。小さい声で「君たちも認めているなら、問題はない」と答え、ハーマイオニーの言葉を待った。ハーマイオニーは自分を落ち着かせるように深呼吸をすると、冷静な目で皆を見渡した。

「二つのグループに分けようと思うの。マルフォイを見張る側と、スネイプを見張る側。」

私たちは、10人いるから……5人と5人に分けたらいいんじゃないかしら？」
「それなら、まずは男女で分けたらどうですか？」

ジャスティンがおずおずと提案すると、アーニーが「文句なし！」と頷いた。
「女性陣と男子一人がスネイプを見張り、残りの男性陣がマルフォイを見張るのはどうだ？」

「異議あり」

それに対し、セレネがすぐさま異議を唱える。

このままでは、マルフォイが引き連れてくる死喰い人を潰す計画が台無しである。けれど、そのまま理由を言うわけにはいかない。

セレネは腕を組みながら、努めて静かな口調で話し始めた。

「もしかしたら、戦闘が起きるかもしれないですよ？ それならば、戦闘経験の有無を考慮したうえで、グループを分けるのがよろしいかと」

「戦うことを考えるなら、なおさら女性陣がスネイプを見張るべきだ！」

セレネが言うと、ロン・ウィーズリーが噛みつくように声を上げた。

「マルフォイの方が、何するか分からないだろ？ マルフォイの方が戦う危険性は高いから、安全そうなスネイプの方を女性陣が——……」

「ロン！ 私が頼りないって言うの？」

ロンが反論しかけたとき、ジニーがぴしゃりと言いつつ放った。

「言っておきますけど、魔法省の戦いで、私は誰かさんと違って最後まで正気だったわ！」

「踵を碎かれて動けなかった人に言われたくないね！」

「はいはい、兄妹喧嘩はあとにして！」

スーザンが陰悪な空気になり始めたウィーズリー兄妹の間に入る。そのまま二人を宥めるように見ながら、聞きやすい声で話し始めた。

「私も戦闘経験の有無は大切だと思うわ。その、私たちハッフルパフ生にとっては、初陣なわけだし……。」

まずは、魔法省に突入したメンバーを二つに分けて、その後、私たちを分けるの
がいいんじゃないかしら？」

スーザンの意見に反対する者は誰もいなかった。

その後、魔法省での戦いを踏まえたうえで、マルフォイグループが、ロン、ジニー、セレネ、セオドル、ジャステイン。スネイプグループがハーマイオニー、ルーナ、ネビル、アーニー、スーザンに決定した。

「最後になるけど、いいかしら」

決行寸前、ハーマイオニーは小瓶を取り出した。

忘れもしない、スラグホーンが最初の授業でハリーに渡した「幸運薬」だ。わずかに減ってはいるが、まだ十分入っている。

「幸運薬のフェリックス・フェリシスよ。ハリーのだけど、彼が作戦に参加する皆

に一口ずつ飲んで欲しいって」

ハーマイオニーが言うと、まずロンに渡した。

それから、皆が順番に一口ずつ飲んでいった。セレネもハーマイオニーから受け取り、一滴、口を含む。すると、次のルーナに小瓶を手渡しするころには、無限大の可能性が広がるような気分が、ゆっくりと身体中に染み渡っていくのを感じた。これからする死喰い人討伐が全て上手くいくような気がしてくる。

最後のジニーが飲み終わった頃には、皆の顔に不安の色は一欠けらも残っていなかった。

「では、作戦開始ね」

ハーマイオニーの合図で、まずスネイプチームが持ち場へと歩き始めた。

「さて、僕たちもマルフォイを探すぞ」

ロンはそう言いながら、古びた地図を取り出した。

「これは特別な地図なんだ。これを使えば、誰がどこにいるのか分かる……んだけど、どこにもいないな」

「マルフォイは、城の外に出たってこと？」

「いや、必要の部屋だ。あそこにいると、地図に名前が載らない」

ロンは力強く言うのと、皆で8階の「馬鹿のバーバナス」の絵がある廊下まで急いだ。やはりというべきか、マルフォイは「必要の部屋」にいるらしい。きっと、死喰い人の手引きの真っ最中なのだろう。

「必要の部屋」の前に到着すると、廊下の突き当りは単なる石壁が広がっていた。どうやら、マルフォイは扉を消しているらしい。

「よし、ここで待つぞ」

ロンが自分自身に言い聞かせるように言うと、石壁の前に座った。セレネも石壁の前で待とうとしたが、急にこのまま待っているのは危険だということを感じ取った。

「ウィーズリー。私、ここでも二手に分かれた方がいいと思います」

なにもない石壁の前で、セレネは提案をする。ロン・ウィーズリーは訝し気にセレネを見た。

「どうしてだい？」

「マルフォイが何か対策をしているかもしれませんが。彼は、自分の実力がそこまで高くないことを分かっているはずなので、なるべく戦いは避けるつもりだと思いま

す。たとえば、待ち伏せしていることが分かった瞬間、インスタント煙幕をまき散らすとか」

セレネとしては、その可能性は非常に低いと思った。

あのマルフォイが、そこまで考えているとは思えない。第一、フレッドとジョージ・ウィーズリー兄弟がマルフォイにインスタント煙幕やおとり爆弾などを売るとは考えにくかった。

ところが、セレネの中の幸運葉が、妨害の可能性を訴えている。セレネは幸運葉に従うことにした。

「もちろん、あくまで可能性です。ここで見張るのが3人、向こうの廊下で待機している人が2人でどうでしょう?」

セレネはそこまで言い切ると、ウィーズリーを見つめた。普段のロン・ウィーズリーならセレネの意見を受け入れなかったかもしれない。だが、嬉しいことに、しばし考えてから頷いてくれた。これも、幸運葉の効果かもしれない。

「分かった。その代わり、君が向こうの廊下で待機していてくれ。言い出したのは、ゴイントだからな。あと一人は——……」

「オレが行く。オレなら連携も取れるからな」

セオドールはそれだけ言うと、先に廊下を歩き始めていた。セレネも彼を追いかけるように「必要の部屋」の前から離れる。

「足手まといには、ならないでくださいね」

セレネはセオドールに言うと、壁に背を持たせかけた。

ここからでは「必要の部屋」の様子は分からないが、なにかあれば物音で気づくはずだ。

「……なんだ、オレよりフレッチリーの方が良かったか？」

「誰でも同じですよ。私が死喰い人を倒すだけですから。……ただ、まあ……」

セレネは一呼吸置いた後、窓の向こうの景色を見つめた。

『あなたが傍にいた方がいいかも』

背後の壁に寄りかかりながら、セレネは小さな声で呟いた。

幸運葉の効果もあるだろうが、全く負ける気がしなかった。

そもそも、この城にいる限り、セレネは死喰い人程度に負ける確率は極めて低い
のだから——……。

窓から差し込む月明かりが、静かに廊下を照らしている。

ホグワーツ城は、音もなく静まり返っていた。時折、フクロウの鳴く声だけが遠くから聞こえてくる。セレネはクイールから貰った時計を取り出し、何度か時間を確認した。時計の針は、淡々と時を刻んでいる。銀色の時計を握りしめっていると、これからすることへの覚悟が深まり、ヴォルデモートへの怒りが胸の内で静かに燃え上がるのを強く感じた。

事態が急変したのは、見張り始めて1時間ほど経過した時だった。

「必要の部屋」へと続く廊下から、黒い煙が噴き出してきたのである。幸運にも、セレネたちが隠れている廊下まで煙は来ていない。

「セオドール！」

「分かってる！」

セレネとセオドールは廊下の曲がり角に隠れるように立つと、煙に向かって杖を構えた。

セレネたちが構えていると、黒い煙の中からマルフォイが現れた。不気味に光る

萎びた手を持ち、もう片方の手で誰かの手を握りしめているのが見えた。

マルフォイが曲がり角を曲がった途端、セレネは鋭く杖を振るった。

『『ステューピファイ―麻痺せよ』』

赤い閃光がマルフォイに当たるか否かのところで、盾の呪文が展開される。ベラトリックス・レストレンジだ。彼女がマルフォイを守ったのである。ベラトリックスはセレネを睨み付けると、狂ったように笑い声をあげた。

「あああああ！ 例のお人形ちゃんじゃないか!!」

『『ステューピファイ』!』

セレネはベラトリックスを無視して、その後ろから現れた死喰い人に失神呪文を撃ちこむ。強敵を屠るのも大切だが、まずは雑魚どもを減らすべきだ。敵は多数であり、連携されたら面倒である。失神呪文を撃ちこまれた死喰い人は豚のような悲鳴を上げて、冷たい床に倒れ込んだ。それを皮切りに、次々と死喰い人が黒い煙の内側から飛び出してくる。

「貴様っ、この私を無視したな!!」

ベラトリックスがセレネに向かって閃光を放った。セレネは盾の呪文を無言で展

開すると、他の死喰い人に向かって呼び寄せ呪文を唱えた。

『『アクシオ―来い！』』

とある死喰い人の手から杖が飛び上がり、セレネの手に収まる。セレネは眼鏡を外すと、今まさに杖を失くしたばかりの死喰い人に向かって走り出した。普段から魔法ばかり頼っている死喰い人は、杖を失った異常事態に対応することがすぐできない。セレネは目に見えて狼狽する死喰い人の前に飛び込むと、そのまま両腕に奔る「死の線」を切り裂いた。

「アミカス！」

痛みで倒れ込む死喰い人の後ろにいた女性が、怒りの声を上げた。そのままセレネに杖を向けてきたので、アミカスと呼ばれた死喰い人の腹を蹴飛ばして、思いつきり女性にぶつける。アミカスの重みで女性死喰い人がふらついた隙に、セレネは彼女の両腕も奪った。ついでに動けないように、2人の足も奪っておく。豚のようには耳障りな悲鳴が廊下に木霊したが、それを上回る声で、ベラトリックスが叫んでいた。

「ドラコ、走れ！ ギボン、ヤックスリー、ロウル、ドラコを援護しろ！ 他の

者たちも、こいつらに構うな！　ここは、私一人で十分だ！」

セレネが横目で見ると、マルフォイを先頭に、三人の死喰い人が天文塔の方へ走っていくのが確認できた。だが、その次は続かない。大柄の死喰い人が、セオドールの放った失神呪文で倒れ込むが見える。セオドールは、すぐに、その後ろを走っていた痩せた死喰い人にも呪文を放っていた。

「よう、お嬢ちゃん！」

彼の戦いに一瞬、気を取られたせいだろう。背後から迫る獣に気付くのが遅くなった。

吼え声を上げながら、もつれた灰色の髪の毛が襲い掛かってくる。全体的に薄汚く、獰猛な獣みたいな牙のある口を開き、セレネに噛みつきようとしていた。

『フリペンド―撃て！』

だがしかし、その牙がセレネに届くことはなかった。

何者かの放った衝撃呪文が、薄汚い大男を吹き飛ばしたのである。

「に、逃げてください、セレネ！」

ちようど煙の中から這い出てきた、ジャスティンだった。恐怖に怯えたように震

えながらも、まっすぐ薄汚い男に狙いを定めている。

「セレネ！ そいつは、グレイバック！ 狼男です!!」

「おやおや、坊ちゃん。物知りなこつて」

ただ、ジャステインの放った呪文の効果は、浅かったのだろう。グレイバックは狼狽えることなく体勢を立て直し、にまにまと嫌らしい笑みを浮かべていた。

「だけど、坊ちゃんはあとだ。俺は、今まで食べたことのない肉に興味があるんでね」

「グレイバック！ ホムンクルスは私の獲物だ！」

グレイバックが黄色い爪で前歯をほじっていると、ベラトリックスが怒りの声を上げた。

「あの小娘は、魔法省での借りがある！ 早くドラコを追え！」

「しかしですね——……」

「御託は良い！ ドラコに続くのだ!!」

ベラトリックスはグレイバックの足元に呪文を撃ちこむ。グレイバックは、さすがに味方に殺されたくはなかったのだろう。悔しそうにセレネを一瞥すると、ドラ

コたちの去っていった方へ走り出した。

「さて、小娘。魔法省での続きと行こうか」

ベラトリックスがセレネの前に立ち塞がった。

「ゴースト、加勢する」

セレネの脇にセオドールが立った。軽く周囲を見渡せば、両腕と足を失って床で呻いている二人の他、二人の死喰い人が倒れていた。セオドールがやったのだろうか、ご丁寧に縄で縛られていた。

つまり、ドラコ・マルフォイを追いかけた者を除けば、ベラトリックスの他に戦える死喰い人はいない。

幸運にも、ロン・ウィーズリーたちが黒い煙をかき分けて廊下に出てきたところだった。

これで、5対1だ。

数で圧せば、ベラトリックスも簡単に倒せるかもしれない。

しかし——……

「いいえ、この女は私一人で十分です。皆さんは、マルフォイを追ってください。

天文塔の方へ行きました」

「だけど……」

「行ってください！　すぐに追いつきます!!」

「ああ、私が興味があるのは、その人形だけだ……今のところはね」

ベラトリックスは不気味に笑いながら、セレネだけを見据えていた。

「分かった。ダンブルドア軍団、行くぞ!!」

ロン・ウィーズリーの声を皮切りに、何人もの足音がセレネの脇を通り過ぎていく。傍にいた気配も消えていた。

セレネは遠ざかる足音を聞きながら、しばらく向かい合っていた。その距離は、目測で5メートル。少し駆け出せば、数秒で到達できる程度の距離しかない。

「あああ!!　この日を夢にまで見た」

ヴォルデモート最強の副官、ベラトリックス・レストレンジの黒い目の奥は、怒りの炎が燃えていた。

「私から杖を奪い、愚弄した罪はきっちり払ってもらおうか!」

セレネは何も答えなかった。

頭にあるのは、単語は一つだけだ。この女を殺す。ヴォルデモートの右腕たる女を確実に殺せば、かなりの大打撃になるはずだ。セレネは口の端を上げると、ベラトリックス・レストレンジに笑いかける。

『クルーシオ―苦しめ』

最初に動いたのは、ベラトリックスだった。

彼女の杖から放たれた磔呪いが、まっすぐセレネに向かって宙を奔る。セレネは駆け出した。ベラトリックスの胸元めがけて疾走するが、彼女は油断の欠片もなかった。セレネが避けたのを見届ける前に、すぐさま無言で次の呪いを撃つてくる。わずか数秒で詰められる距離だったが、セレネは真横に跳び退けるしかなかった。弾けるように横に跳んだが、ベラトリックスは止めることなく呪いを撃ち続けている。

「――ッち」

セレネはベラトリックスの視界から逃れるように、彼女を中心に円を描くように疾走した。

おそらく、前回のような目くらましは通用しない。セレネが磔呪いから逃れ続け

ていると、ベラトリックスの馬鹿にしたような甲高い笑い声が廊下に木霊した。

「あはははっ!! どうしたんだい、ホムンクルス! もしかして、怖氣ついたんでちゅか!？」

「まさか!」

セレネは口元に笑みを携えたまま、無言で失神呪文を連射する。接近することが難しいなら、遠距離からの魔法攻撃だと判断したのだが、さすがはヴォルデモートの副官 ベラトリックス・レストレンジだ。セレネが高速で駆け、前後左右から目まぐるしい攻撃呪文をしかけても、悠然と一步も動かずに全てはじき返していた。このままでは、もう埒が明かない。

セレネの息が切れた瞬間、勝負は決するだろう。セレネの速度が落ちて、攻撃呪文が途切れたとき、ベラトリックスは攻勢に転じる。魔眼の力があるとはいえ、永遠に防ぎきれぬ自信はなかった。

ならば――……

セレネは走りながら神経を研ぎ澄まさせた。

一步間違えれば、確実に自分は死ぬ。義父の仇も、ヴォルデモートへの復讐も遂

げることができないまま、無残に死ぬ。それだけは、あってはいけない。

「……よし!!」

セレネは覚悟を決めると、足を動かし続けたまま進行方向を変えた。

床を踏み込み、ベラトリックス・レストレンジめがけて跳躍する。セレネが放ち続けた失神呪文の猛攻が途切れたことにより、ベラトリックスは攻勢に移行した。底意地の悪い笑みを浮かべながら、赤い閃光を走らせる。前回の戦いでは、ハリーが「盾」を展開してくれたが、自分で防ぐ手間が惜しい。セレネは磔呪いを正面から受け止めた。

「——ぐっ、うあ」

身体を内側からチェーンソーで切り刻まれているような感覚。名状しがたい激痛が、瞬く間に全身へと広がっていく。心臓が悲鳴を上げながら軋み、身体の内側へと圧縮された肺が喘ぐように酸素を求めている。

だが、それだけだ。

心臓を杭で刺される痛み程度、安いものだ。

「——ッ、はあ!!」

一步、力強く踏み込んだ。

速度を落とすことなく、ベラトリックスめがけて奔る。

さすがのベラトリックスも、これには驚いたのだろう。わずかに眉を上げ、目を見開いていた。もちろん、それは一瞬だけ。次の瞬間には、第二撃を放つために魔力を高めている。

けれど、セレネの方が速い。

一瞬だけ動きを止めた最狂の魔女よりも、足を止めなかった自分の方が速い。

セレネは走りながら杖を持ち直すと、槍のようにベラトリックスの胸元に叩き込んだ。

「こ、この、小娘が あああ!!」

だが、負けた。

ベラトリックスは微かに身体を逸らし、心臓ではなく右胸の辺りを杖先が貫通する。右肺は殺せたが、肝心の心臓は無傷のまだ。ベラトリックスは口から血を流しながら、セレネの右腕をつかむと、胸から引き抜いた。そのまま、セレネの小さな身体を廊下の端まで投げ飛ばす。

「——ッ」

気が付くと、体が宙を浮いていた。

セレネは飛んでいる。まるで、槍投げの槍になったみたいだ。

強い風を感じる。今さらながら、磔呪いの激痛が後を引いて襲ってきた。あまりの痛みに我を失いそうになりながらも、必死で自我を保ち続ける。心臓が悲鳴を上げるほどの激痛のおかげで、むしろ自分の存在を自覚する。強烈な痛みが、自分はまだ生きていることを訴えていた。足からも腕からも指先からも痛みを感じる。痛いけど、五体満足で生きている。小枝みたいな杖も右手が握っている。

だから、まだまだ戦えるのを叫んでいる。

それに、打つ手は——……最終手段は残っている。

『『サーペンソーティア——蛇よ、出よ』』

セレネは、背後に大蛇を出現させる。果てしないほど飛ばされそうだった自分を大蛇にぶつからせることで、無理やり停止させた。

「うぐっ……」

背骨を棍棒で叩かれたような痛みだった。

口の中に鉄の味が広がり、口端から液体が伝っているのを感じる。セレネは口元を袖で乱暴に拭うと、残忍な高笑いをするベラトリックスに向かって呪文を放った。

『インセンディオ―燃えろ！』

『アグアメンティ―水よ』

セレネの杖先は燃え盛る炎を奔らせる。ベラトリックスは高笑いをしたまま、セレネが押し潰されるような水流で圧倒した。廊下の床一面が水に浸される。当然、セレネもびしょぬれになっていた。

「我が君相手に、マグルの小細工をしたらしいが……これなら、それも無駄だろう？ お前も濡れているからな！ ええ、ホムンクルスの小娘！」

「……」

ベラトリックスは嗤っている。右胸に空いた穴から絶えず赤い血を流し続け、黒いスカートを吸魂鬼のようにたなびかせながら嗤っていた。

「どうだい、降参かい？ 降参するなら今の内だよ？ 今なら特別に、痛みも感じる間もなく死なせてあげようか？ あははははは!!」

「あなたこそ、降参するなら今のうちですよ」

セレネは背後の大蛇に寄りかかりながら、ゆっくりと立ち上がった。

「ここはホグワーツ。私はサラザール・スリザリンの継承者。この城にいる限り、あなたは私に勝てない」

「この状況が分からないのかい？　それとも、怖すぎて、錯乱しちまいまちたか？」

ベラトリックスはぴしゃりぴしゃりと水たまりを歩きながら、赤ん坊に対するような口調で話しかけてくる。

「それに、スリザリンの継承者は我が君以外の誰でもない。ホムンクルス風情が名乗っていい称号ではないんでしょー？　分かりまちたか？」

「……そうね、そうかもしれない」

セレネはベラトリックスを見つめた。

「だけど、それは誰が判断するの？」

それだけ言うと、セレネは目を伏せる。

『襲え！』

鋭く叫んだ蛇語を合図に、創り出したばかりの蛇がベラトリックスに飛びかかる

気配を感じた。無論、ただの蛇の攻撃がベラトリックス・レストレンジに通じるわけがない。ほどなくして、蛇が悲鳴を上げて水たまりに落ちる音が聞こえてきた。ベラトリックスは馬鹿にしたように笑う声が、廊下に響き渡っていた。

「なんだ、小娘!? 蛇を仕掛けることが継承者の証だと言いたいのか!? この――……」

しかし、その先の言葉は聞こえなかった。

唐突に電池が切れたおしゃべりオウムのように、言葉が途切れる。ひたひたと感じる音を耳にしながら、セレネはゆっくりと顔を上げた。

『終わりましたよ、主』

蛇の王者、バジリスクのアルケミーがベラトリックス・レストレンジの後ろで、とぐろを巻いていた。ベラトリックスは固まったまま、微塵たりとも動かない。セレネは小さく息を吐いた。

「……水たまりに映った魔眼を見て、石になったというわけですか。いつしかのミセス・ノリスと同じ結末ですね」

どうせなら、バジリスクの魔眼を直接視れば良かったのに。ベラトリックスは、

悪運の強い女である。

『ありがとう、アルケミー』

『ホグワーツ城にいる限り、主の危機とあれば、どこへでも馳せ参じます』

アルケミーは、シューシューと満足そうに唸りながら、嬉しそうに頭を下げた。必要の部屋を見張り始めた一時間前、アルケミーを呼び出しておいて正解である。あの眩きが本当にアルケミーまで届いていたのか分からなかったが、これも幸運葉の力なのかもしれない。

「さて、と」

セレネはよろめきそうになりながら、石になったベラトリックス・レストレンジに近づいた。

『アルケミー、パイプの内側まで下がっていなさい。必要な時、また呼ぶから』
『了解しました。いつでもお申し付けください』

水を踏みしめながら、ベラトリックスの前に立つ。

手が届く距離にいるのに、凶悪な笑みを浮かべた魔女は杖先一つも動かさない。血液までもが石になったのだろう。ぽっかり空いた胸の穴からは、血が一滴も流れ

落ちていなかった。

「……哀れな最期ね、ヴォルデモートの副官さん。二度もやられる気持ちはいかがかしら？」

セレネが話しかけるが、当然、反応は見当たらない。

戦闘で燃え上がっていた心が、異様なまでに冷えていくのを感じる。

「今度こそ、しっかり殺すわ。あの世で、ご主人さまを大人しく待ちなさい」

セレネは静かな口調で語りかけると、杖を手の中で回した。

直死の魔眼の力で、改めて「死の線」を視る。残された箇所は、足に二つ。腕の一つずつ。そして、胸の中心より少し左側に複雑に密集した線が一つ。どれを切れば確実に死ぬかは、考えるでもない。

「さようなら、ベラトリックス・レストレンジ」

セレネはベラトリックスの胸元に狙いを定める。

あつという間に終わることだ。躊躇う必要も皆無である。

『セレネ、いいかい——……』

誰かの優しい言葉が、耳の奥で蘇る。

冬の木漏れ日のように、暖かい人の言葉だった気がする。でも、それがどうしたというのだろうか。

セレネは右腕を思いつき引き、そして――……

「――ッ、セレネ!!」

誰かが、水を蹴る音が聞こえる。

聞き覚えのある声に、セレネの動きが止まった。誰かが自分の腕を力強くつかみ、死の線を切り刻むのを止めさせようとしている。

「どういふつもりですか？」

セレネは咎めるように言う、腕をつかんでいる人物を睨み付けた。

82話 初恋

そこにいたのは、セオドル・ノットだった。

彼は、よほど急いで来たのだろう。肩を上下させながら、荒い息を繰り返している。

「嫌な予感がしたから、戻って来てみたら……お前、本気かよ？」

「これが、冗談に見えますか？」

セレネは思いつき睨み付けると、無理やりベラトリックスの胸を貫こうとする。しかし、セオドルがセレネの腕を引き留めていた。それ以上先に進ませないように、セレネの力に反するように力強く引っ張っている。

まるで、ベラトリックスを殺したくないと訴えるようだ。セレネは、瞬間、胸の内が空白になった。ずっと信じていた副官から裏切られたような気持ちである。だが、ここで呆けている暇はない。味方が敵に落ちたなら、容赦なく攻勢に転じなければならぬのだ。

セレネは瞬時に気を引き締めると、静かに問いただした。

「……あなた、もしかして、ベラトリックス・レストレンジを殺されたくない理由でもあるのですか？」

「こいつが死のうが生きようが、オレにはどっちでもいい」

ところが、セオドールはあっけなく言い放つ。

嘘をついている気配は感じなかった。

「なら——……」

『人は、一生に一人しか殺せない』って言ってなかったか？』

「それは……」

セレネはわずかに目を逸らした。

決して、忘れたわけではない。

確かに、最愛の義父が再三口にしていた言葉だ。彼はヴォルデモートを前にした危機的状况の中でも信条を忘れず、セレネに殺しだけは避けるように訴えていた。

人を殺すときは、人生の最後、自分の死を看取るため。

一人殺した時点で、それはヒトではない。人間として、死ねなくなってしまう。それは、寒い冬の木漏れ日のように、暖かくて甘美な言葉。ずっと、守りたかつ

たはずの言葉だ。だが——……セレネは一度、瞼を閉ざすと、今までにないほどの勢いでセオドール・ノットを睨み付けた。

「今は状況が違います」

「状況はあまり変わってないだろう？　ここまでやっただけでも、『あの人』にとって十分な打撃だ」

「そんな悠長なことを言っていては、ヴォルデモートを破滅させることはできません」

「自分の言葉を裏切るのか？」

「うるさい!!」

酷く耳障りな言葉だった。

セレネは力強く叫ぶと、自由な左手が動いていた。まっすぐ、セオドールの懷を殴っていた。彼は抵抗をしなかった。そのまま後ろ向きに倒れた相手の身体を押さえつけるように、セレネは馬乗りになる。そのまま迷うことなく、彼の喉元に杖を突き付けた。

「それ以上言うなら、あなたを先に殺します！」

「それは困る」

こちらの本気は伝わっているはずなのに、眼下の男に怯えの色は見えない。

むしろ、青い瞳の奥にあるのは憐れみだった。そのことが無性に腹正しく、奥歯を噛みしめる。

「オレは、まだ死ねない。それに、お前に人殺しをさせたくない」

「だから、1年前と状況が違いますって言ってますよね！」

セレネは半ば叫ぶように言い放っていた。

「ヴォルデモートの脅威を確実に絶つていくためには、杖を壊す程度では駄目です！ 確実に息の根を止めないと、また復活します。

それに、私は……私はホムンクルスです！ 人ではないので、別に、敵を何回殺しても——……」

「人間だろ？」

「違い、ます」

セレネは言葉を絞り出すように答えた。

目を細めると、死の世界が余計くつきり視えた。床はもちろん、彼の顔にも、肩

にも、ちょうど、杖を突き付けている喉元にも、黒い線が密集した塊がある。眼鏡をかけていない間は、ずっと見慣れてきた恐ろしい線だ。なぞるだけで簡単に物が死んでしまう線。自分の見ている世界の天井が落ちて、足元から崩れ壊れてしまいそうな、恐ろしくて気味の悪い視界——……。

「知っていますよね……この眼が、普通じゃないってこと。いまだって、杖先を少しずらせば、貴方の首なんて切れるんですよ？ ナイフで切り落とすより、ずっと簡単に」

セレネの口は淡々と事実を紡ぎ始める。

「そもそも、私は……フラスコの中で産まれて、お母さんからは見向きもされなくて、本当の父親はそもそも人じゃなくて、本当の母親にも殺意を向けられて……」
そんな化け物を「人間」として愛してくれた唯一の人は、もう二度と目覚めない身体になってしまった。

目覚めたとしても、自分のことを愛してくれるとは思えない。人を殺せる魔眼持ちのホムンクルスを人間として認識するなんて、正気の沙汰ではない。

だから、もう自分は化け物なのだ。誰からも見向きもされない、帰る場所のない

バケモノなのだから、いくら人を殺しても問題ない。たとえ辛くても、自分の身の安全を特別考えず、復讐心に駆られるがまま、ヴォルデモートを破滅させる計画を進めることができる。

「そんな人間じゃない。いくら自分で決める意志があつたとしても、人間じゃない。

……今の私なら、死喰い人だって、ヴォルデモートだって殺せるんです」
つまるところ、元の自分に戻っただけだ。

4年生までの……記憶の表層をなぞり、優等生を演じようとしていた機械人形に戻っただけ。

あの頃は優等生を演じていたが、今回は義父を苦しめたヴォルデモートを倒すためだけに動く機械同然の人形だ。それが本来のセレネ・ゴントであり、あるべき姿だったのだ。自分は、ホームクルスに過ぎない。だから、目的を達成したら、義父を助けられなかった自分の不甲斐なさを抱いて、自分の電源を落とせばいい。

自分を見てくれる奇異な人なんて、世界のどこにもいるはずがないのだから。

「だから、あなただって殺せます。これ以上、私の邪魔をするなら」

「……お前は人間だよ、ゴースト」

それでも、目の前の男は静かに反論する。

こちらの言い分をしつかり聞いていたのかと疑うまでに、真剣で冷静な声色だった。

「だから、私は——……!!」

「知っているか？ 涙を流せるのは、人間だけなんだぜ？」

「なにを——……」

「泣いてるじゃないか、お前」

指摘されて、初めて気が付いた。

視界が歪んでいた。頬を冷たい感覚が伝っている。おそろおそろ、左手を頬に当ててみる。すると、確かに冷たい液体が指先に触れていた。

「……え？」

セレネ・ゴーストは、涙を流していた。

「なーにが、人を殺せるだ。泣き出すくらい苦しんでいる人間にできるわけないだろ」

セレネが呆然としていると、セオドルは半身を起き上がらせようとした。セレネは弾かれたように立ち上がり、数歩、後ろに下がる。右手の杖は未だに彼の喉元に向けられていたが、拳三つ分以上も離れていた。それも、次第に力なく下がっていく。

「だって……こうするしか、私……お父さんの仇、とれないもの……」

セレネは、みつともないくらい言葉が震えているのが分かった。

「これ以上、最善な方法が思いつかない」

セレネは、どうしたらいいのか分からなくて、泣いていた。そうしたら、そのことが余計に悲しくなり、さらに涙が頬を伝っている。

「……馬鹿だな、お前」

優しい言葉共に、セレネの背中に手が回される。その腕は、ひどく頼りなかった。強く抱き寄せられたわけでもない。ひどくぎこちない抱き方なのに、とても暖かく感じる。

「一人で背負い過ぎだ。オレが半分、背負ってやる。だから、もう泣くな」
その言葉を刻みつけるように、抱きしめる腕に力が入る。

セレネは心なしか、肩の力が抜けていくのを感じた。

「でも……あなた、私が嫌いなものでは……？」

セレネはやっとの思いで言葉を出す。

最初は脅して配下にした。それ以後、彼の意外と義理堅い性格が起因して、ここまで付いてきてくれているのだと思っていた。

今回もその性格のせいで巻き込んでしまったのではないかと、不安と懺悔の念が胸の内を渦巻き始める。

「さんざん、私のことを性格悪いとか、腹黒とか言っていたではありませんか？

親衛隊の隊長も、嫌々だって……」

「はあ……お前さ、本当勘違いしてるな。まったく分かってない」

耳元で、大きいため息をつく音がする。

その言葉に、少しむっとする。だが、そのことを口にする前に、セオドールは諦観に近い口調で話し始めた。

「確かに、親衛隊の隊長なんて面倒この上ないさ。辞められるものなら辞めたい。それに、お前が腹黒で性悪なのも事実だろ。」

「だけどな、オレはゴースト……お前自身のことを『嫌い』と言った記憶はないぞ？」

「……え？」

セレネは目を見開いた。

記憶を紐解いていくが、確かに一度も『お前が嫌い』とは言われていない。親衛隊長の仕事が嫌だ、というのはあったが、面と向かって嫌いと呼ばれた記憶はなかった。

「好きだ、セレネ。オレは、お前を幸せにしたい」

セレネは言葉を失った。

相手の顔は視えないのに、不思議と微笑んでいるような気がする。

純粹で飾り気のない言葉だった。余計な装飾がない分、不意打ちに近い攻撃を防御する術はない。

文字通り、彼の言葉は攻撃だった。こんな自分を好きだと宣言するメルヘンな人が、叶わない幸せな幻想を見せつけてくる。

「駄目ですよ、そんな……」

この申し出は、断らないといけない。

「私と一緒にいたら、今度こそ殺されてしまうかもしれないのに」

最愛を失うのは、義父だけで十分だ。

あれだけ盛大にヴォルデモートと敵対しているのだから、今度はもっと手を緩めずに襲ってくる。これ以上、最愛の人を増やしたくない。自分のせいで、好まれる奇特な人を苦しませたくないし、傷つけたくない。死に追いやるなんて、以ての外だ。

だからもう、愛する人を増やしてはいけない。そう心に決めていたのに、セレネは腕を振りほくことができなかった。杖を握る右手は力なく床に垂れ、彼の肩に顔をうずめる。涙だけがほろほろと流れ落ち、セレネは小さく呟いた。

「……あーあ、あいつの言った通りになった」

グリンデルバルトの未来視が視止めた男とは、きっと彼のことだったのだろう。いや、聞いたときから、薄々勘づいてはいた。きっと、自分の背中に手を回している男が、あの老人の眼に映った人なのだろうと。

「あいつって？」

「……さあ。機会があれば紹介します」

だから、今はこのままでいて欲しい。

遠くで、呪文を撃ちあう音が聞こえてくる。

すぐに戦線に戻らないといけないのは知っていたが、もうしばらくは大丈夫だと頭の片隅で何かが告げている。きっと、彼も同じなのだろう。

セレネは力強い腕を感じながら、そっと目を閉じた。

時計を見ると、たった数分の出来事だった。

セレネは何時間も経過した気もするが、わずかの時しか経っていないことに驚きながら立ち上がる。

「さてと、そろそろ次に行かないと」

涙を袖で拭い、まっすぐ前を向く。

耳をすませば、上の方の階から呪文が飛び交う音が聞こえてくる。しかし、階段

を駆け下りる音も聞こえてきた。ずっと大階段に目を向ければ、ちょうどハリー・ポッターが駆けおりていく途中だった。

セレネは「良かった。ダンブルドアと向かったのは例の洞窟ではなかったのだ」と安心したが、走り去る彼の横顔が鬼の形相だったことに一抹の不安を覚える。

「……私、ハリーを追いかけます。いいですか？」

「別に、止めはしないさ」

セレネはいつも通りの彼に微笑みかけると、大階段を見下した。

もう、ハリーの姿はどこにも見当たらない。セレネはポケットから紙を取り出すと、飛行機の形に折ってみる。そのまま勢いよく飛ばすと、その紙飛行機に杖を向けた。

『「アヴァンジギウム・ハリー・ポッター——ハリー・ポッターを追跡せよ！」』

紙飛行機の先端はくると向きを変え、階段の下へ向かって飛び始める。

セレネたちはそれを追いかけた。本来は物質が元あった場所へ追跡する魔法だが、そこに人名を加えて強く念ずると、その人物を追跡することもできる。もっとも、町を超えるみたいに長い距離は不可能だが、ホグワーツ内であればできなくは

ない。

紙飛行機はハリーを追いかけ階段を飛び降りると、そのまま開け放たれた正面玄関から外に出た——ところで、力尽きてしまい、草原に落下する。

「この辺りに、いるはずですけど……」

周囲をくると見渡すと、天文塔がある塔の下にガウンやパジャマ姿の生徒が集まっているのが見えた。そこにむかって、大きな影——ハグリッドとハリーが近づいていくのが見える。

「ハリー！」

セレネは駆け出した。

もうハリーは怒り狂った様子ではなかったが、酷く憔悴しているように見える。

「大丈夫ですか？ それから、例のアレは——……？」

分霊箱を見つけたかどうか聞こうとすると、ハリーは静かに首を横に振った。

「例のアレ？ なんのことだ？」

後ろからセオドルが尋ねる声が聞こえてくる。

そういえば、彼は分霊箱の存在を知らなかった。セレネが明かすべきかどうか悩

んでいると、ハグリッドが口を開いた。

「みんな、あそこで何を見ちよるんだ？ 塔の真下だが……あれは、塔の上に浮

かんでいるのは、闇の印か？」

ハグリッドは、人の集団に気付いたのだろう。頭上に浮かぶ闇の印を見て、ぶるりと震えあがるのが見えた。

「お前さんたち、知ってるか？」

ハグリッドがセレネたちを見るので、正直に首を横に振った。すると、ハリーが消えそうな声で呟いたのだ。

「ダンブルドアだ」

「ハリー？」

「スネイプに殺されたんだ。ダンブルドアが死んだ」

「馬鹿なことを言うな！」

ハグリッドが声を荒げる。

「そんなことあるはずがねえ。ほら、確認しに行くぞ。そんなこと、ありえるはずがねえんだ」

ハグリッドは自分に言い聞かすように話しながら、のそのそと人ごみの方へと近づいて行く。

何か灰色の物が倒れ込み、それを皆がこわごわと囲んでいる。間違はなくそれは、アルバス・ダンブルドアだった。半月型の眼鏡は歪み、骨は折れ、大の字になって横になっている。

ハグリッドは愕然と立ちすくみ、ハリーはダンブルドアの真横に座り込み、項垂れながら涙を流していた。

「……ダンブルドアが死んだ……」

セレネは悲しみより先に、ヴォルデモートの勢いが増す危険性のことが頭に横切った。素直に悲しむことができない自分に気付き、やはり薄情なのだと自嘲気味に笑ってしまう。

「ハリー、行きましょう」

ここにいても、何も始まらない。

ダンブルドアの死を悼むより先に、次の行動を考えなければならないのだ。

セレネはハリーに語り掛けてみるが、ハリーは何も答えなかった。ただ、首を横

に振った。

「僕、ここにいます」

「……ここにいて言うて言うてるんだ。行くぞ、ゴースト」

セオドルがセレネの手をつかみ、人ごみから抜け出した。

代わりに、ジニー・ウィーズリーがハリーの方へ近づいて行くのが見える。暗闇の中で、彼女の赤毛は松明のように輝いて見えた。

「……ダンブルドアが死んだ、か」

玄関ホールまでつくと、彼は改めて事実を確かめるように呟いた。

「あの爺さん、あと100年は生きそうだったのに。まさか、スネイプにやられるなんて……」

「……本当に、スネイプ先生が殺したのでしょうか？」

その事実が、セレネには信じられなかった。

ハリーに対して随分と厳しすぎたように思えたが、授業は分かりやすく、守護霊の呪文を教えてくれたこともあった。もちろん、偽ムーディのように自分を偽っていたのかもしれないが、だとしたら、もっと早くにダンブルドアを殺すことができ

たのではないだろうか。

「ポッターの言っていることが本当なら、スネイプに殺されたのは事実だ。変えようがない」

「そうですけど……あ……？」

セレネは立ち止まると、耳を澄ませた。

鳥の鳴く声が聞こえる。ただの鳴き声ではなく、歌のようだった。恐ろしいまでに美しく、打ちひしがれた寂しい旋律を奏でる「嘆きの歌」だった。外から聞こえてくるのに内側から感じるような不思議な調べで、まるで失って戻らない者を追悼しているような歌である。

「これは……？」

魔法界特有の何かなのか？ 隣の彼に視線を向けるが、黙って首を横に振る。

「聞いたことない調べだ」

「不死鳥の詩です」

いつの間にか、後ろにマクゴナガル先生が立っていた。先生も上の階で戦いに参加していたのかもしれない。帽子は曲がり、ローブは少し切れた跡が見える。少し

顔に疲れた色も浮かんでいた。

「フオークス……ダンブルドアが飼っている不死鳥の調べでしょう。しかし、どうして……？」

「……もしかしたら、ダンブルドア先生がお亡くなりになったからでしょうか？」
セレネがぼつりと答えた。

「ダンブルドア先生を、悼んでいるのではないのでしょうか？」
「アルバスが？」

マクゴナガル先生の眼が点になるのを初めて見た。

呆然と、セレネを初めて見るように、まじまじと見つめ返す。

「そんなはずは……ダンブルドアが、死んだなんて……」

マクゴナガル先生は隣にいるセオドルが否定してくれるのを望むかのように、視線を移動させる。しかし、彼も否定しないことが分かると、強く目を瞑った。

「……貴方たちも戦いに参加していたと、ウィーズリーから聞きました。一度、マダム・ポンフリーに診てもらいなさい」

それだけ言うと、確認のためだろうか。マクゴナガル先生は玄関ホールから出て

行ってしまった。

死んだ人は、戻らない。

ダンブルドアの死は、ホグワーツどころかイギリス中を震撼させた。

その証拠に次の日になると、続々と生徒たちが親に引き取られ、姿を消していった。双子のパチル姉妹は朝食の前にいなくなっていたし、ハッフルパフのザカリアス・スミスは気位の高そうな父親に護衛されて去っていった。シェーマス・フィネガンの母親も息子を連れて帰ろうとしたが、玄関ホールで怒鳴り合いの大喧嘩をし、翌日に行われるダンブルドアの葬儀の後、学校を去ることが決まった。そのた

め、彼の母親は葬儀が終わるまでホグズミード村に宿を取ろうとしたらしいが、ダ
ンブルドアに最後のお別れを告げようと、魔法使いや魔女たちがホグズミード村に
押し寄せたため、随分と宿をとるのに苦労したらしい。

それは、スリザリン生も同じだった。

ノーマンは兄と一緒に去り、ウルクハートやベイジーも姿を消していた。そして

……

「……私も、昼食が終わったら、ママと門のところで待ち合わせしているの」

ダフネ・グリーングラスはパイを食べながら、寂しそうに別れを告げた。

「セレネ、この後……どうなっちゃうのかな？」

「私には分かりません」

セレネは正直に話した。

「ただ、ずっと学校を閉鎖させるとは思いませんか、来年度、マクゴナガル体制
で開校されるのでは？」

イギリスには、他に魔法学校がありませんから」

「……そうだね、そうなるといいね」

セレネが答えると、ダフネは少しだけ嬉しそうに微笑んだ。

「それなら、早く来年度になって欲しいな。そうしたら、またセレネと一緒に過ごせるもの」

「そうですね。その時は、ミリセント・ブルストロードもいるといいですね。まあ、NEW T 試験がありますけど」

「……うわ……それだけは延期にして欲しいかも……あ、そうだ。あの花束、誰からのだったの？」

ダフネは思い出したように尋ねてくる。たった二日前のことなのに、随分と昔のことのように思えた。

「ジャスティンからですよ。それが何か？」

「オレンジ色のカーネーションだったよね？ あれの花言葉って——……」

「ゴースト、花束が欲しいのか？」

ダフネが楽しそうに微笑みながら何か言いかけたが、それを遮るようにセオドルが言葉をかぶせてくる。

「欲しいなら出してやるぞ？」

「いません。それより、貴方は早く飛行呪文を習得してください」

セレネがきっぱり断ると、彼は少しムツとしたようだった。

「あんな複雑な魔法、すぐにできるわけないだろ!？」

「私の覚悟を半分、背負ってくれるんですよ。それでしたら、その程度の魔法はできるようにしてください。まあ、難しいなら……少しは練習に付き合ってください」

「一人で十分だ!」

彼は拗ねたように腕を組む。セレネはそんな彼を横目で見ながら、ふと、思い出したことがあった。

「そういえば、セオドールはどうして私のことを名前で呼ばないのですか？」

「は？」

「ずっと、ゴーストですよ。いや、過去に呼ばれたような気がしますけど」

必要の部屋の前でも数度、名前で呼んでくれたが、思い起こせば過去にも二度ほど呼ばれていた。第二の試験後の意識が朦朧としているとき、そして、魔法省での戦いのときの二回だ。

「私は、別にゴーストでも構いませんけど……行きましょう、ダフネ。送ります」
セレネは少年の返事を待たずに、立ち上がるとダフネの手を取り歩き出した。その後ろを妹のアステリア・グリーングラスがぴよこぴよこと付いてくる。

「なんというか、セレネ。セオドルとの距離、近くなってない？ 何かあったの？」

「そうですね……いえ、特に何も」

セレネは急に気恥ずかしくなり嘘をつく。

「顔、赤いよ？」

「気のせいです」

「あの……セレネさん」

ダフネと話していると、後ろから遠慮がちに声をかけられた。アステリアが大きなトランクを手に持ちながら、恥ずかしそうに頬を赤らめている。

「えっと、また会えますか？」

「……ええ、もちろんです」

セレネはアステリアの頭を軽く撫でながら、小さな少女に微笑みかける。

「休校措置は一時的なものです。また、今までみたいに仲良く過ごせますよ。

それから、アステリア。あなたには来年度の親衛隊幹部を任せたいと思っているのです」

「え、わ、私がですか!？」

アステリアは仰天して目を丸くしている。

「ウルクハートも卒業して、一枠空きますから。ノーマンと一緒によろしくお願いしますね」

「は、はい！ わ、私、家でも魔法の練習を頑張ります!!」

「その意気ですよ。では、2人とも。私はここで」

校門のところに、魔女が立っているのが見えた。

あれが、彼女たちの母親だろう。アステリアは頬を上気させたまま、何度も頷くと母親の方へ走っていった。

「……じゃあね、セレネ」

「また来年、会いましょう」

セレネとダフネは握手をする。ダフネは目尻に涙をいっぱい溜めると、その涙が

こぼれる前に奔り出した。何度も何度も振り返り、セレネに向かって手を振って行く。セレネも彼女たちが『姿くらまし』で消えていくまで、ずっと手を振り返していた。

そのまま城に戻ろうとした、その時だった。

「もしかして、セレネー!？」

ある人物に引き留められたのである。

セレネは、その人物を見て、目を丸くしてしまった。ここにいるとは到底思えない人物だったのである。

「あなたは確か……なぜホグワーツに……？」

ダンブルドアの葬儀が始まったのは、翌日の昼だった。

昼食が終わると、マクゴナガル先生が立ち上がり、よくとおる声で話し始めた。「まもなく、時間です。」

みなさんはそれぞれの寮監に従って、校庭に出てください」

全員がほとんど無言で、各寮監を先頭に列をなして歩き出す。

スリザリンは寮監が不在なので、スラグホーン先生が寮監の代わりを務めていた。銀色の刺繍を施した豪華なエメラルド色の長いローブを纏っている。

他の先生方もそれぞれ普段からは考えられないほど、こざっぱりしていた。ハッフルパフの寮監であり薬草学のスプラウト先生は帽子につぎはぎが一つもなく、いつもついている泥も綺麗さっぱり洗い流してある。司書のマダム・ピンスは膝まで届く黒い分厚い――ベールを被り、古臭い背広姿のフィルチの隣を歩いていた。

校庭には、何百という椅子が並んでいた。

その半数が参列者で埋まっている。質素な身なりから格式ある服装まで老若男女、ありとあらゆる種類の追悼者が着席していた。

見覚えのある人たちも何人かいた。

アラストー・ムーディやシリウス・ブラック、リーマス・ルーピンといった「不死鳥の騎士団」のメンバーを始め、黒いドラゴンの革の上着を纏ったウィーズリー兄弟、その隣には、フラー・デラクルが黒いワンピース姿で傷跡のついた赤毛の男に寄り添うように座っている。

他にも、魔法省大臣や、マダム・マクシーム、漏れ鍋の店主のトム、ホッグスヘッドのバーテン。他にもニュート・スキヤマンダーやバチルダ・バグショットといった本の背表紙でしか見たことない著名人までが参列している。

なぜか、アンブリッジもいたが、彼女は何故参列しているのだろう。ダンブルドアにケンタウルの群れから助けてもらったことに対する礼か？ それとも、ただ単に「ダンブルドアの葬儀に参加している私、素晴らしい」と見せつけるためか？ 正直、あまり良い気分はしなかった。

「……ん？」

セレネはその時、バチルダ・バグショットと目が合った。

バチルダはセレネと目が合うと、にたりと笑いながら皺だらけの唇を動かす。セレネはその唇の動きを黙って真似、意味が分かると硬く口を結んだ。バチルダの皮

を被った誰かさんから目を逸らし、前だけを見つめる。

いつも通り、パーシバル・グレイブスの姿で参列すればいいのに、わざわざ著名人に変装して来るなんて、本当に理解しがたい男である。

その後、葬儀はつつがなく進行した。

ハグリッドがおいおい泣きながら、ダンブルドアの遺体を棺まで運び、葬儀が始まる。ハグリッドは、ここに集った誰よりも心から悲しんでいるように見えた。役目を終わると巨人の弟、グロウプの隣に座り、泣き続けていた。

途中、水中人が別れの歌を奏でたり、ケンタウルスが矢を放ち死者への哀悼の意を示すといったこともあったが、エルファイス・ドージと名乗ったダンブルドアの親友が弔辞を読んだ。

そして、ダンブルドアは杖を握りしめたまま、白い棺の中に埋葬される。

最後、棺の周りに白い炎が燃え上がった。何人もの魔法使いが悲鳴を上げていたので、きっと本来の葬儀にないアクシデントだったのだろう。炎はだんだんと高くなり、白い煙が渦を巻いて立ち昇った。煙は不思議な形を描いた。本当に一瞬だ

け、青空に楽し気に舞う不死鳥の姿が見えたような気がする。だが、それも幻想と消え、白い大理石の墓だけが残されていた。

所用時間、わずか一時間にも満たない。

とても静かで、人間以外からも哀悼された葬儀だった。

参列者は、ぼつぼつと立ち上がり始める。

セレネはバチルダを目で追いかけた。バチルダの皮を被った「あの人」は杖をつきながら、ハリー・ポッターの方へ近づいてくる。セレネは嫌な予感がしたので、彼女に声をかけることにした。

「大丈夫ですか、おばあさん」

セレネは駆け寄り、よたよた歩く背中を支える。すると、バチルダはにまりと笑った。

「大丈夫だよ。ありがとうね、フロイライン」

「……どうして参列したのですか？」

「アルバス・ダンブルドアは、古い友人であり好敵手だ。その葬儀に、私が出席するのは当然のことだ。もつとも、私がヌルメンガードに収監されていなければの話だがね」

「いつもの皮は？ 参列するのは、グレイブスでも良かったのでは？」

フレッドとジョージという知り合いに会うのが嫌だったのだろうか。

セレネが聞くと、グリンデルバルドは首を横に振った。

「ああ、それはちょっと問題があつてね」

グリンデルバルドは参列者の方に視線を向ける。彼の視線を辿れば、もさもさの白い髪が特徴的な男性——ニュート・スクァマンダーがいた。奥さんと思われる女性の手を借りながら、悲しみに沈んだ表情を浮かべている。

「彼と彼の奥方は、本物のパーシバル・グレイブスを知っている。彼に変装するのは、少し不味い。」

……それより、私はあの青年と話がしたい」

「ハリーですね。呼んできます」

セレネはハリーを呼び止めた。

ハリーは何か考え込んでいたようだったが、セレネが呼ぶところを向いた。

「どうしたの、セレネ？」

「この方が、貴方と話したいと」

「バチルダ・バグショットです、よろしく」

「バチルダ……魔法史の？」

ハリーは少しだけ目を丸くした。

さすがに、魔法史の教科書は5年生まで毎年買わされていた。その著作者の名前は覚えていたらしい。

「アルバス・ダンブルドアとは古い馴染みでねえ……同じ、ゴドリックの谷に住んでいたものさ」

「ゴドリックの谷って、ダンブルドアがそこに住んでいた？」

「そうさ。隣の家だった。母親のケンドラとはよくおしゃべりしたもんだし、アルバスはよく遊びに来た。呪文の実験だと言って、天井を破壊しかけたこともあったわい。」

ああ、本当に……懐かしい……」

グリンデルバルドは語りながらも、目じりを緩ませていた。どこか遠くを見ているような瞳には、本当に郷愁の色が浮かんでいる。

「そうですか……あ、あの、ゴドリックの谷ということは、僕の両親も御存じですか？」

「もちろん知っているさ。ああ、とっても心地の良い人たちで、食事を一緒にしたこともあった。旦那は冗談で場を和ませるのが得意で、奥さんが微笑みながらたしなめていたのを、つい昨日のここのように覚えてるよ。

ああ、そうそう。あんたが産まれたばかりの時は、あたしが抱っこしてやったこともあるんだ」

グリンデルバルドはさも自分が体験したかのように話し始める。

彼がポッター一家とバチルダとの関係なんて知っているはずもないのに、よくも嘘八百が言えたものだ。もし、ハリーが本物のバチルダから話を聞く機会があったとき、どう弁明する気なのだろうか。セレネは呆れてものが言えなかった。

「そうですか……僕、知らなかった」

「まあ、知らなくて当然だね。あんたは、ほんの赤ん坊だったんだから。……あた

しは悲しくて胸がはち切れそうだわい。あんたの両親しかり、アルバスしかり、みんなあたしより先に逝ってしまう。

悲しいことだ、本当に……悲しいことだ」

「……」

「……アルバスの最期を看取ったのが、あんただって聞いてね。それは……本当かい？ もちろん、嫌なら言わなくていいが……」

グリンデルバルドは静かに尋ねる。すると、ハリーは少し悩んだ後、淡々と話し始めた。

「僕は……看取ったというよりも、最期を見ただけです。

スネイプが、ダンブルドアを殺した瞬間を……」

「そうかい、セブルス・スネイプがアルバスを……アルバスは、最期に何か言っていないかったかい？」

「確か……『頼む』と」

ハリーの拳が震えていた。

きつと、悲しみを耐えているのだろう。セレネは目を伏せ、その光景を思い浮か

べる。

ダンブルドアが絶体絶命の危機に陥ったとき、セブルス・スネイプが現れる。

そして、『(助けてくれ)頼む』と懇願したのだ。それを、スネイプは聞き入れることなく、死の呪いを放った。

とても、哀れな最期である。

「頼む、か……」

グリンデルバルドは悼むように目を瞑っていた。

「アルバスの杖捌きは、あたしが一番よく知っている。

きつと、スネイプを信じ切っているあまり、油断して杖を使うことができなかったのだろうよ……アルバスの悪い癖が出たんだね」

「あー……いいえ。ダンブルドアは杖を持っていなかったんです」

ハリーは言いづらそうに、真実を口にする。

「ダンブルドアの杖はスネイプが来る直前、マルフォイに盗られていたんです。そうでなければ、ダンブルドアがスネイプなんかに……ミス・バグショット？」

ハリーが悲しそうに事実を告げると、グリンデルバルドは目を見開いていた。ま

るで、天地が逆転したような表情に、ハリーだけでなくセレネも驚いてしまう。

「……頼んだが、先に奪われた？　なら……まさか……」

グリンデルバルドはぶつぶつと呟き始めた。

いつも「すべてが我の掌の上よ」と不敵に笑っている男が、これほどまでに驚いているのは初めて見た。

「ミス・バグショット？　大丈夫ですか？」

「……マルフォイ少年は、あいつの杖を『アクシオ』で取ったのか？　それとも『エクスペリアームズ』で取ったのか？」

「え？」

「答えろ、ハリー・ポッター」

その口調はバチルダの物ではなく、グリンデルバルドの物に変わっていたが、本人はそれに気づいていないらしい。必死の形相でハリーに詰め寄り、答えを求めている。

「ぶ、武装解除の呪文です、ミス・バグショット」

ハリーは混乱しながらも答えてくれた。

「武装、解除……だと」

グリンデルバルドは衝撃を受けたように、よたよたと数歩後退する。

そして、悩みこむように頭に掌を乗せ、唸り声を上げ始めた。

「あの、ミス・バグショット？」

「……悲しいことだ。まことに悲しいことだ、アルバスよ……最期にして最大の失敗だ……お前は最期まで、失敗だらけの人生だよ」

「ミス・バグショット？　大丈夫ですか？　失敗って……それに、顔色も悪いですけど……」

「ありがとう、ハリー。辛い話をしてくれて、感謝するよ」

グリンデルバルドはそのまま立ち去ろうとする。セレネが追いかけようとする
「また今度、フロイライン」と呟いたつきり去ってしまった。

「随分と変な人だったけど……セレネは……バチルダと知り合いだったの？」

「まあ、知り合いというか……そうですね、あれとは知り合いです。

それよりも、分霊箱はどうでしたか？　見つかりました？」

セレネが尋ねると、ハリーの表情が一段階暗くなる。

それだけで、彼らの失敗を悟った。分霊箱は見つからなかったのだ

「洞窟に行ったんだ。でも、何もなかった。……劇薬と空っぽの水盆があっただけで……ダンブルドアは、劇薬を飲んで、さらに弱ったんだ」

「……そうですか……」

セレネはハリーたちに対し、少し申し訳なくなった。

ハリーが正面玄関から出て行くとき、一声かければよかったのだ。そうすれば、すでに何もない洞窟に行かなくても良かったかもしれない。もつとも、なぜ洞窟に行っていないのか説明するのが至極面倒になった気はするが。

結果として、ダンブルドアが劇薬を飲んで、命を縮めることになった。

今回の旅で、ハリーが得たものは何もない。ダンブルドアの喪失だけだ。セレネは、せめて分霊箱を奪ったというメッセージカードだけでも置いておくべきだったと後悔する。

「僕……もう行かなくちゃ。じゃあね、セレネ」

ハリーはそう言うと、歩き始めた。彼の視線の先には、ジニー・ウィーズリーがいた。

セレネもハリーに背を向けて歩き始める。少し歩くと、櫟の木の下でセオドールが待っていた。

「何話してたんだ？」

「ハリーが同行した、ダンブルドアの最期の旅についてです。悲しいことに、成果はなかったそうです」

「そうか……」

しばらく並んで歩いた。

すすり泣く声や、ひそひそと話す声が風に乗って聞こえてくる。青すぎる空は遠く、澄み切った風が髪をなびかせている。

「そういえば、昨日の昼。ダフネを送った帰りに、フラー・デラクールと会いました」

セレネはぼつりと、思い出したように言った。

「デラクールって……確か、ボーバトンの代表選手だろ？　なんで、ホグワーツに来てるんだ？　そこまでダンブルドアと親しかったように見えないが……」

セオドールは困惑している。セレネも最初、困惑した。

グリーンガラス姉妹を見送った帰り、彼女に会ったときは少し混乱したものだ。

「ビル・ウィーズリーの婚約者だそうですね」

「あのウィーズリーの親戚か？」

「兄弟だそうです。一番上の兄で、あの夜、騎士団の一員として戦い、グレイバックに噛みつかれたらしいです」

「それって……大丈夫なのか？」

セオドールが少し不安そうな顔をしている。

グレイバックと言え、狼人間だ。狼人間に噛みつかれた者の待つ運命は、死か同類に成り果てるかだ。

「満月が出ていなかったの、大丈夫だったらしいですよ。変わったことと言えば、ステーキのレアを食べたがることくらいだそうです」

セレネがフラーに尋ねたときも、彼女は嬉しそうに「イギリス人、お肉焼きー過ぎます。フランスでは、あそーこまで焼きまーせーん！」と語ってくれた。

「後遺症がそれだけです、本当に良かったな」

「まったくですよ。だから、つつがなく、今年の夏に結婚式を行うんですって。そ

れで……」

セレネはここで一度、言葉を切った。言おうか言うまいか悩んだが、首を横に振って覚悟を決める。

「代表選手仲間として、私に来てほしいと」

「いいじゃないか。行って来いよ」

「……同伴者を1人までなら誘っても良いということですね。ええ、もちろん、死喰い人やそれに付随する人を除く、という前提はありますけど」

結婚式に親族や友人だけでなく、その友人や親族まで誘っても良いとは随分と開放的なパーティだ。フラー曰く、ウィーズリー側から反対されたいが、「死喰い人を誘う人なんて、いるはずありませーん！　もし、そのような不屈き者がいても、私やハズバンドが倒します！」とのことである。

確かに、ウィーズリーの結婚式となれば、不死鳥の騎士団のメンバーや凄腕の魔法使いが参加しそうだ。いくら死喰い人でも、二の足を踏むことだろう。

「私は、貴方を誘おうと思ってるんですけど……」

セレネはちらりと背の高い男を横目で見た。

彼はぽかんと呆けたように口を開けていた。セレネは立ち止まると腕を後ろで組み、少し睨みつけるように見上げる。

「来ますか？」

「行く！」

彼は、はにかみながら即答した。耳まで紅潮させながら、恥ずかしそうに笑っている。その姿を見て、セレネも口元を綻ばせた。

「では、それまでに安全のため、飛行呪文と縄抜け呪文、それから盾の呪文の強化版も習得してくださいね」

「おい、呪文増えてるぞ？」

「気のせいです」

「気のせいじゃない」

セオドルが不満そうに言ったが、口元が笑っている。

不満なのは口だけで、実際のところは違うらしい。セレネはどこか嬉しい気持ちで見ながら、城に向かって歩き出した。

ハグリッドの吠えるような哀切の声が、まだ遠くから聞こえる。

ダンブルドアは死んだ。

そのせいで、きっとヴォルデモートの行動は活性化するだろう。

自分のやるべきことは山ほどあるし、ますます残りの分霊箱を探さなければなら
ない危機感が募っていく。

自分たちの身の安全を確保するためにも、分霊箱を全て破壊し、ヴォルデモート
を破滅させなければならぬ。

辛いこともある。

義父の容体も気になるし、考えると胸が詰まりそうになるほど苦しい。いまだ、
世界が灰色なのだと感じるときもある。

だけど、それを忘れるときもあってもいいのかもしれない。

少なくとも、今年の夏に楽しみができた。

いまは、それだけで十分である。

セレネは少しだけ、心が浮き立つのを感じた。

「謎のプリンス」編、これにて終了です。

……肝心の「プリンス」は絡んできませんでした。これにて終了です。

今話は、セレネの初恋、ノットの初恋、ハリーの初恋の行方とジニーの初恋、そして、ダンブルドアは初恋の相手に見送られる……と、初恋だらけの回でした。

作者としては、ちょっとやり過ぎた感があります。

ひとまず、今章における原作との大きな相違点を上げます。

○シリウス・ブラックの復活

シリウスが戦線に復帰しました。片腕がなく、時間制限付きですが、そのあたりは次章で明かします。

○ナギニ死亡

ヴォルデモート最愛の蛇であり、ファンタビに登場していたマレディクタス。予定より早く死亡しました。ネビルの出番が減ってしまいましたが、どこかで埋め合わせをしたいと思います。

○リータ・スキーターの死亡

予想以上に反響のあった人。

ダンブルドアの伝記は「スキーターの遺作」として発売される模様。なお、その印税の振込先は……

○ロケットの破壊

ハリーより先に破壊しました。そのとぼちりがダンブルドアたちに……

なお、これによりクリーチャーの好感度が変化しています。

○ペラトリックスの石化

肺も潰されているので、かなり弱体化。

きっと石化から戻っても、まともに戦えないでしょう。ちなみに、既に出産しているので、ご安心を（何がだ

○ヴォルデモートの怒り

ナギニを殺されただけでなく、ベラトリックスを二回も倒され、手勢が一気に減ったヴォルデモート。ただいま、かなりお怒り中。その怒りが彼にどんな影響を及ぼすのかは、こうご期待ください。

今章にまつわる詳しい話は、活動報告を更新しましたので、気になる方は目を通してくださると嬉しいです。

以下、活動報告のURLです。

<https://syosetu.org/?mode=kappa;view&kid=212715&uid=57094>

次回からは「死の秘宝」編が開始されます。

正直、上手くまとめられるか不安ですが、最後までセレネの進む道を楽しみなが

ら描いていくつもりですので、今後とも応援よろしくお願いします。

死の秘宝編

83話 闇の魔法使い、動く

ついに、「死の秘宝」編が始まります。

最後までお楽しみください。

7月某日。

マルフォイ家の洒落た邸宅に、続々と集まる人影があった。

ドラコ・マルフォイの誕生日パーティーではない。ある種の闇の会合である。

訪問者が玄関に近づく、自動的に扉が内側から開いた。

灯りを絞った広い玄関ホールは贅沢に飾り立てられ、豪華なカーペットが石の床をほぼ全面にわたって覆っている。そのホールに続く部屋のがっしりとした木の扉

を潜り抜けると、美しい客間が広がっていた。

ところが、客間に置かれている豪華な家具は無造作に壁際に押しやられている。代わりに、細やかな装飾を凝らした長いテーブルが中央に置かれ、黙りこくった人々で埋められていた。

それだけなら、まだ普通の会談に見えたが、テーブルの中央に浮かんでいる女性があった。どうやら気を失っているらしく、見えないロープで吊り下げられているかのように、ゆっくりと回転する。その姿が暖炉の上の鏡と磨き抜かれたテーブルに映っていた。

「さて……始めるとしよう」

テーブルの一番奥に鎮座する男——ヴォルデモートは、全員揃ったことを確認すると口を開いた。赤い目が部屋の扉の周辺からこの場集った全員を見渡すと、スネイプに視線を向けた。

「セブルス？」

「我が君、不死鳥の騎士団は来る土曜日の日暮れ、ハリー・ポッターを現在の安全な場所から移動させる計画だそうです」

ヴォルデモートの右隣に腰を下ろしている人物、セブルス・スネイプは淡々と話した。ポッターの名前が出た途端、テーブルの周辺がにわかに色めき立った。こそと隣同士で話しながら、全員の視線がヴォルデモートとスネイプに向けられている。

「我が君、私の得た情報と違います！」

しかし、それに異を唱える者もいた。

「ヤックスリーか。言ってみろ」

「はい、我が君。闇払いのドーリッシュの話が漏らした話によると、ポッターは誕生日……すなわち、7月の末まで移動しないと……」

「偽の情報ですな」

スネイプが素早く言った。

「不死鳥の騎士団は魔法省を信じていない」

ヤックスリーはスネイプの言葉に苛立ちを覚えたらしいが、ヴォルデモートの笑っている顔を見て黙り込む。

「どうかね、パイアス。お前の見解は？」

ヴォルデモートは神経質そうな男に話を振った。パイアス・シックネスは強張った表情でヴォルデモートを見つめると、固い声で話し始める。

「様々な情報がありますので、真偽の判断が難しいです」

「実に魔法省の政治家らしい答弁だ。お前が我が陣営に参加してくれたおかげで、魔法省を墮とすのが早まりそうだ」

「光榮至極にございます」

「……さて、土曜日の日暮れ、ポッターが移動するのは間違いなさそうだな」

ヴォルデモートはにたりと笑った。

「我が君、ポッターを殺すのは私に任せてください」

テーブルの中程にいた女性が身を乗り出すと、感極まったような声を上げた。

「私めが役に立ってご覧に入れましょう。小僧を葬り、首を貴方様に捧げます」

「そうかそうか、ベラトリックスよ」

ヴォルデモートは気分よさげに笑うと、ベラトリックスを吟味するようにわずかに首を傾けた。

「お前の口からそのような言葉が聞けるとは、殊勝なことだ」

ヴォルデモートが言うと、ベラトリックスは嬉しように頬を赤らめ、喜びに目を潤ませた。

「ホームクルスの小娘に二回も破れるような愚か者に、これ以上の責務を任せるのは重かるう」

一座から嘲笑が湧き起こった。ベラトリックスの上氣していた顔は、すぐさま赤い斑点が浮き上がった醜い顔へと変わっていた。

「あれは小娘の運が良かっただけのこと！」

ベラトリックスはぽっかり空いた右胸を強く押さえながら叫んだ。

「小娘もポッターも、必ずや私が——……」

「殺されては困るのだ、ベラトリックスよ」

ヴォルデモートの声は静かだったが、嘲笑や野次の声を突き抜けてはつきりと通った。笑い声は止み、しんと静まり返った。

「小娘には、利用価値ができた。そうだな、トラバース？」

トラバースは、何故呼ばれたのか分からず、非常に困惑した顔をしていた。

「怯えることはない。お前がわざわざ日本まで出向き、調査してきた結果、あれの

利用価値に気付いたまでのこと。

俺様は、愛するナギニの命を奪った小娘に、ふさわしい天罰を下さなければなら
ない」

ヴォルデモートの声は依然として静かだったが、言葉が終わりに近づくにつれ、
赤い双眸が燃えるようにちらちら光っていた。

「あれが最も嫌がる罰を与えてやる。だから、殺すな。生け捕りにしろ。ポッター
も同じだ。あれは、俺様の獲物だ。誰も殺してはならん。

しかしだ、俺様の杖では小僧を殺すことができない」

ヴォルデモートが言うと、部下たちの顔色に緊張の色が芽生えた。

「悔しいことに、俺様の杖とポッターの杖は兄弟杖の関係らしい。つまり、誰かの
杖を借りねばならん」

途端、全員が衝撃を受けた顔になった。まるで、腕を一本差し出せと宣言された
かのようなだった。

「さあ、進んで差し出す者は？」

ヴォルデモートは立ち上がると、ひたひたと歩き始める。

「お前はどうか、ルシウス？」

ヴォルデモートは、ルシウス・マルフォイの後ろで止まった。

「もう杖を持っている必要はなからう？」

ルシウスが顔を上げた。暖炉の灯りに照らし出された顔は、皮膚が黄ばんで蠟のように血の気がなかった。

「ルシウス、お前の杖だ」

「私は……」

ルシウスはしわがれ声で答えると、横目で妻を見た。夫と同じく青白い顔をした妻は、長いブロンドの髪を背中に流し、まっすぐ前を見つめたままだったが、テールブルの下では夫の手首を握りしめていた。その隣に座る息子、ドラコ・マルフォイは不安そうな顔をしながら、青い瞳を父親に向けている。

「我が君……」

ルシウスは杖を引き抜くと、ヴォルデモートに手渡した。ヴォルデモートはそれを目の前にかざし、赤い目が丹念に杖を調べた。

「ものと芯はなんだ、ルシウス？」

「我が君、楡です。芯はドラゴンの……ドラゴンの心臓の琴線です」

「ふむ……使い勝手のよさそうな杖だ」

ヴォルデモートは杖を軽く指で回すと、ルシウスの後ろを去った。そのまま自分の席に戻ったが、席にはつかない。

「せっかくだ。この杖の使い心地を調べるとしよう」

再び部下たちの顔に緊張が奔る。ベラトリックス・レストレンジさえ、顔が強張っていた。

ヴォルデモートの杖の使い心地の調べ方など、ろくなものではない。おそらく、痛みを伴う何かだろう。ドラコに至っては、目立たないように身体を縮ませていた。

「『レベリオ―正体を現せ』！」

ルシウス・マルフォイの杖から閃光が迸った。閃光は死喰い人たちの席を超え、客間の扉まで貫こうとした。しかし、その閃光は入り口の扉に当たる直前で四散する。

「……さすがだな、ヴォルデモート」

盾の呪文で防いだが、すでに分かっているのであれば、姿を隠す必要はないだろう。

う。

どうせ、目くらましを解いても本来の自分の姿ではない。訪問者はそう判断すると、自ら「目くらまし」の呪文を解いた。

「いつから気づいていた？」

瞬間、死喰い人たちがどよめいた。ある者は啞然とし、ある者は立ち上がり杖を取った。だが、それらをヴォルデモートが手で制する。

「お前が客間に入って来た時からだ、侵入者よ」

「なるほど。一瞬視線を感じたが、気のせいではなかったということか」

招かれざる訪問者、すなわち、グリンデルバルドは、納得したように頷いた。

「お前は何者だ？」

「パーシバル・グレイブスとでも名乗っておこうか。いや、マーチン・ヒューイットの方が聞き覚えがあるかな？」

グリンデルバルドは静かに答えた。

無論、本来の名前を口にするつもりはない。

「そうか、あの小僧の正体か」

どうやら、ヴォルデモートはパーシバル・グレイブスが本名だと思い込んだよう
だ。

無理もない。パーシバル・グレイブスがアメリカ合衆国魔法議会の闇払いだった
のは、いまから70年以上昔の話だ。ヴォルデモートが赤子の頃に活躍していた異
国の魔法使いなど知る由もない。

「会合をやると風の噂で聞いてね、どのようなものと見に来たわけだが……少々
趣味が悪いようだ」

グリンデルバルドは一瞬、頭上に浮く女性に目を向ける。

「マグル学の教授だとお見受けしたが？」

「いかにも」

グリンデルバルドはヴォルデモートに再び視線を戻した。

「先週の新聞が気に食わなかったのかね？」

「お前はどうかんだ？ 気に入ったのか、気に入らなかったのか？」

『『マグルやマグル生まれは魔法族とたいして違わない。もっと受け入れるべきだ』』
グリンデルバルドは一週間前に載った記事をそらんじてみせた。

「今の私からしたら、どうでも良いことだ」

それは、事実だった。

以前の自身なら、嫌悪した記事だっただろう。マグルの恐ろしさやマグルの汚さを知らない愚かな魔女の妄言だと、一蹴していたこと間違いなしである。

だがしかし、今はどうでも良い。第二の人生を歩む身には、マグルやマグル生まれも関係ないことだった。

「なら、貴様是我々の知識や魔法を盗む奴らを受け入れろと？」

ヴォルデモートの声には、まぎれもなく怒りと軽蔑が込められていた。

「我々全員をマグルと交わらせることに賛成すると？」

「拡大解釈だな。もつとも、その気持ちこそ理解はする。私も若かりし頃、お前と似た思いを抱いていた」

「理解してなお、俺様達と敵対すると？ 貴様、もしかや騎士団の一員か？」

「まさか！」

グリンデルバルドは笑ってみせた。ヴォルデモートの怒りの視線を受けてもお、余裕たっぷりに笑って返してみせる。

「ダンブルドアを奉ずる一団とは縁がない。私が来た理由は、その魔女を回収しに来ただけだ」

グリンデルバルドの口は真実を紡いだ。

自分の主たる少女が新聞を読み、「チャリテイ・バーベッジ先生が辞職するなんて変だ。随分と世話になったから、彼女の様子を確かめて欲しい」と命を受けての行動である。それ以上の行動を起こすつもりはない。

とはいえ一応、使役される身だ。

彼女の進む道の露払い程度はするつもりであつた。

「彼女を渡してほしいのだが、どうかね？」

「ただで渡すと？」

「それが一番いい。なにしろ、お前では私を殺せない」

ヴォルデモートの眉間に筋が立つのが見えた。

周囲の死喰い人に緊張の色が奔る。死喰い人たちは杖こそ握りしめているが、おそらく感づいているのだろう。たかが死喰い人風情とグリンデルバルドでは格の違いがあり過ぎ、まったく勝ち目がないことに。

「俺様が、お前を殺せないと？ お前が俺様を殺せないではなく？」

「ふむ……訂正しよう。私程度の実力では、お前を殺すことはできない。しかし、今のお前では私を倒せない。ああ、お前が理解していないことが、なんと多いことか——……」

グリンデルバルドが言い終える前に、ルシウス・マルフォイの杖が緑色の閃光を放った。案の定の展開である。グリンデルバルドは、すぐさまパイアス・シックネスの後ろに隠れた。シックネスはどうしたらいいのか分からず、椅子に張り付けられたように座ったまま動けない。

「……確かに、今は殺せないな」

ヴォルデモートが忌々しく呟く。

ここには、死喰い人が集まり過ぎている。下手に死の光線を放ち、自分の配下に当てるわけにはいかない。その程度の理性は残っているらしい。

「逃げられないぞ、この場所には『姿くらまし禁止呪文』がかけられているからな。

……生け捕りにしろ。俺様自らが尋問する。やれ！」

ヴォルデモートが鋭く叫ぶと、死喰い人たちは我に返ったようだった。すぐさま

立ち上がり、杖を引き抜いた。グリンデルバルドはシックネスを蹴るように立ち上がると、テーブルの上に飛び乗った。全方位から同時に赤い閃光が飛び交っている。巻き起こる呪文の嵐、その中心をグリンデルバルドは悠々と歩いた。杖を指揮棒のように振り、盾の呪文で防いだり、逆に失神呪文で弾き返していく。

「貴様は——!?」

ヴォルデモートの眼の奥に、戸惑いの色が確認できる。

前後左右から時間差ではなく、ほぼ同時に失神呪文が放たれているというのに、焦りの表情はもちろん、傷一つ付けることができない。おそらく、ヴォルデモートの記憶において、このような戦いができる人物が一人しか該当しないから驚愕しているのだろう。

「私はダンブルドアではないぞ？ アルバス・ダンブルドアは死んだ。セブルス・スネイプの手によってな」

グリンデルバルドは、にたりと口角を上げた。そして、狙いを定める。

「『エクスぺリアームズ——武器よ去れ』」

おっかなびっくり杖を構えていた青年、ドラコ・マルフォイの杖を取り上げる。

ついでに、カモフラージュのために目についた死喰い人たちの杖も取り上げておいた。

これで、今回の裏の目的を達成した。

「さて、私は帰るとしよう」

グリンデルバルドは頭上に浮いていた女性を引き寄せ、そっと抱きかかえる。

「さらばだ、小僧」

グリンデルバルドは吐き捨てるように呟くと、女性を抱えて回転した。『姿くままし』である。消える直前、ヴォルデモートの激昂が聞こえてきたが、もう関係ないことだった。

『……と、このようにチャリティ・バーベッジ教授を保護した。フロイライン、君の命令通りに』

鏡の向こうの男は、傷一つない顔で微笑みかけてくる。

セレネはベッドに腰を下ろし『両面鏡』を睨みつけながら、いろいろツツコミたい気持ちで溢れていた。だが、いきなりマシンガンのように質問を連射するわけにもいかない。セレネは数度深呼吸をすると、頭の中で疑問を精選した。

「ありがとうございます。ですが、なぜ『姿くらまし』ができたのですか？ 『姿くらまし禁止呪文』がかけられていたのでは？」

『呪文が解かれていたのさ』

彼は当たり前のように言葉を返してくる。

『私がこの2年間、何もしてこなかったとでも？ 私の活動に横やりを入れてきた死喰い人たちに、なにもしてこなかったと？』

「……いたんですか、横やりを入れてきた死喰い人？」

『もちろん。中には、私から探し求めた者もいた。そのような死喰い人たちと楽しい話し合いをしたあと、ヴォルデモートから私の配下に鞍替えしてもらっただけだ』

「鞍替えって……つまり、貴方の配下になった死喰い人が、こっそり『禁止呪文』を解除していたと？」

セレネが聞くと、グリンデルバルドは頷いた。セレネは疲れたように肩を落とした。本当にこの男のやることは、自分の理解の範疇を超えている。セレネは、この男の使い道に十分に注意する必要があると再確認した。

「まあ、バーベッジ先生が無事ならそれで構わないです。先生の体調の方は大丈夫ですか？」

『シヨックを受けているが、命に別状はない。ただ、襲われた理由が理由だ。現状、ホグワーツの教師として復帰はできないだろうよ』

「そうですか」

セレネは少し目を伏せる。

バーベッジ先生はセレネが最底辺まで落ち込んでいた時、義父に関するマグルの法手続きと一緒にしてもらったことがある。セレネのことを優しく慰めながら、ほ

とんど手続きを代わってくれていた。おかげで、義父は仕事を辞職ではなく、病氣休養中ということにして貰えたのだ。あの時は世界が灰色で何も感じなかったが、今になって思えば感謝の念が尽きない。

その感謝を返せていないのに、いきなりの辞職には驚いた。絶対に後ろにヴォルデモートがいると睨み、グリンデルバルドに奪還を頼んだのである。寿退職や身上の都合なら良いと思ったが、悪い予想が当たってしまい、やや寂しい気持ちもした。

「しばらく、先生を預かってもらえませんか？　ですが——……」

『安心したまえ、彼女を邪険に扱う真似はしないと約束しよう』

「余計なことも吹き込まないでくださいね」

『心外だな。私がそのような大人に見えるか？』

セレネは大きく頷いた。

余計なことを吹き込み、事態を掻きまわしそうな大人である。だいたい、自分の知らない間に、マンダングラス・フレッチャーのような小悪党や死喰い人と繋がっていた時点で、勝手に暗躍する気に満ち溢れているように見えた。

「しかも、死喰い人たちの杖を奪ったなんて……その杖、どうするつもりですか？」

『欲しいなら上げよう。私には無用だ』

「結構です。杖は間に合っています」

『ふむ、君は私を過小評価し過ぎだ。なにせ、現在、私はこの世界で一番強い魔法使いなのだ』

「それはそうかもしれませんが。あなたのライバルは亡くなりましたから」

グリンデルバルドの好敵手であり親友が、スネイプに殺されたのは記憶に新しい。

ダンブルドアの人の良さが裏目に出た死に方だった。あのような間の抜けた死に方だけはしないように、自分も身を引き締めなければならない。

『ところで、君は「ニワトコの杖」に興味はないのかね？』

「ニワトコの杖？」

セレネは聞き返した。

どこかで聞いたことのある名称の気がする。だが、なかなか思い出すことができない。まるで、喉に魚の骨が刺さっているような不快感である。セレネが悩んでい

ると、グリンデルバルドが助け舟を出すように口を開いた。

『「三兄弟の物語」を知っているか？ それに出てくる最強の杖だ』

「……三兄弟の物語……たしか、ペベレルの物語、でしたっけ？」

ゴーストの指輪に刻まれていた家紋を思い出す。

あの家紋を見たとき、カロー姉妹が教えてくれたのだ。一応、その後、気になって「三兄弟の物語」に目を通して見たが、ごく普通の御伽噺だった。むしろ、強欲は身を滅ぼす教訓話のように感じたものだ。

「御伽噺ですよね？」

『いいや、きわめて実話に近いだろう。ニワトコの杖とは、あの物語に出てきたアンチオク・ペベレルの創り出した「最強の杖」だ。君は魔法史で極悪人エグバードや悪人エメリックの話は習っただろう？ その決闘で賭けられていた最強の杖こそ、ニワトコの杖だ』

「……確かに、習いました。だいたい闇の魔法使いが持つ杖で、持ち主が杖の自慢をしているうちに倒されて、闇へと消えていく杖……まあ、杖の力はそれを使う魔法使いの力次第ですから、自分の杖が他のより強いと自慢したがる人がただけだ

と書いていましたが……」

セレネは疑わしそうにグリンデルバルドを見つめた。

この男は、本当にあるとは思えない杖を實在すると信じているらしい。

「たとえば、その杖が實在してもいいかもしれません。私、この杖で満足していますので」
沙羅の木から創られた杖は、いつも期待通りかそれ以上の働きを見せてくれる。

セレネがきっぱり断ると、グリンデルバルドは面白そうに目を細めた。どこことなく嬉しそうに微笑んでいる。正直、この男が嬉しそうにしているのを見ると、無性に嫌な予感がしてくるのだ。

「……なんででしょう？」

『なに、君の顔色が良くなったと思ってね。一時期よりだいぶマシだ。義父を失った苦痛を乗り越えたのかね？ それとも、恋人からキスをしてもらったのか？』
「されていません！ 用件がないなら、これで失礼します！」

セレネは一方的に両面鏡の通信を切った。

苛立ちに任せるように切ったが、その直後、自分の発言を後悔する。「されてい

ない」では、まるでそのような間柄の友人がいると宣言しているものではないか。セレネは膝に顔をうずめ、頬から熱が引いていくのを待った。

「……私は大丈夫。問題ない」

最後、自分に活を入れるように頬を叩いた。

時計を見ると、午後の三時を差していた。セレネは自分のティーセット——もちろん、尋問・拷問用ではなく、趣味で紅茶を飲む用の——を取り出すと、自分に与えられた部屋を出る。

セレネは今現在、義父と過ごした家にはいない。

マクゴナガル先生の家に居候していた。なにしろ、自宅がヴォルデモートに知られてしまっている。そこに帰っている間に、命を狙われてもおかしくはない。安全を期するため、ホグズミード村に住むマクゴナガル先生が身元を引き受けてくれたのである。

もっとも、ホグワーツに在籍している間、という枕詞はつくが。

居候の身なので、マクゴナガル先生の好意に甘えて、ぐーたら過ごすわけにはい

かない。

食事の準備や片付け、洗濯の手伝いなどを率先して行っていた。杖を振れば簡単にできてしまう行いなので、あまり役に立てているか分からないが、何もしないよりはマシである。

それに、マクゴナガル先生は、ホグワーツ関係の仕事で副校長兼校長代理だ。生徒たちがいなくても、仕事が忙しく、留守を守ったり彼女の手の回らない家事を行うのは、セレネの仕事になっていた。

「……よし、できた」

セレネは紅茶を淹れ終わると、マクゴナガル先生の部屋の扉を叩いた。

「先生、お茶が入りました」

「もうそのような時間ですか？　ありがとうございます」

マクゴナガル先生は少し驚いたような声を上げると、なにかを書く音が止まった。それからややあって、マクゴナガル先生が出てくる。いつもの深緑色のローブにフチなしの眼鏡をかけている。

2人してリビングに降りると、ちょうど茶葉が開き、良い頃合いになっていた。

先生の家のリビングは、ゆったりとした作りになっている。タータンチェック柄のクロスがかけられたソファーにオーク製のテーブル。壁には一面の本棚が広がり、変身術から呪文学、魔法薬学まで多種多様な本が勢ぞろいしていた。これだけの本があるのに、占い学関係の本がまったく見当たらないのは、きっと彼女がオカルト話を信じていないからに違いない。

「良い香りですね」

「ありがとうございます。マグルの店で買った茶葉がお気に召すかどうか不安でしたので、良かったです」

「マグルも魔法族も関係ありませんよ。そうですね、せっかくですから菓子も用意しましょうか」

マクゴナガル先生が杖を振ると、棚からクッキーの缶が出てきた。赤や黄色のジャムやアーモンド、チョコレートなどが薄橙の生地に上品に乘せられており、可愛らしいロシアケーキだった。

「ところで、あなたは卒業後の進路をどのように考えているのですか？」

マクゴナガル先生は紅茶を嗜みながら尋ねてくる。

「教師に憧れていた時期はありました」

セレネはクッキーをつまみながら、正直に答えることにした。

教職は確かに憧れる。義父の職業だったこともあるが、ノーマンたちに魔法を教えるのは楽しかったし、彼らが上達していく様子を見るのも嬉しかった。

だが、当時志望した一番は、「義父の傍を離れなくてすむ」という裏の理由があったからだ。正直、以前ほどの魅力は感じない。

「今は魔法について研究をしてみたいです。そうすると、神秘部に就職するのが一番かもしれません。魔法省に就職するのは気が進まないのです……正直、迷っています」

神秘部は魔法省の一部署だ。

魔法省にヴォルデモートの力が根を張り始めている現状、そこに就職するのは得策ではない気がした。

「おや、研究職について寮監から聞いていないのですか？」
マクゴナガル先生は少し意外そうな顔をする。

「神秘部に直接就職することはできません。就職するためには、カレッジに進み、

専門性を高める必要があります」

「カレッジ……って、イギリスに魔法族の通える大学があるのですか!？」

セレネは目を丸くした。そのような情報、誰からも聞いたことがない。イギリスにある学校はホグワーツだけだと思い込んでいただけに、マクゴナガル先生の話は衝撃的だった。だが、マクゴナガル先生も驚いていた。セレネが大学の話を知らなかったとは考えていなかったらしい。先生は驚きのあまり立ち上がりかけていた。「こほん、あなたは『ヨーロッパにおける魔法教育の一考察』を読んでいませんか?」

マクゴナガル先生は椅子に座り直すと、杖を軽く振った。無言で、呼び寄せ呪文を唱えたのだろう。本棚が開き、中から黒い装丁の本が飛び出してきた。本はセレネの前で止まると、読んで欲しそうに膝の上に落ちる。セレネはイギリスの欄を調べ、すぐに広げてみる。大きく「ホグワーツ魔法魔術学校」の紹介がされたあと、その横にもう一つの学校の名前が記されていた。

「時計塔?」

「ホグワーツで優れた成績を収めた者の中で、さらに魔法の研究を専門的に深めた

い者が進学する教育機関です。ロンドンの大英博物館の地下にあります。神秘部は、そこを卒業した者だけを採用するのです」

マクゴナガル先生の説明を聞いて、確かに思い当たる節があった。

5年生の時、魔法省庁のパンフレットを眺めたことはあったが、神秘部だけ見当たらなかった。あのときは、空気がないのだと判断していたが、どうやら違ったらしい。

「ですが……まあ、知らなくても仕方ないかもしれませんね」

マクゴナガル先生は眼鏡のツルを押し上げる。

「カレッジは閉鎖的ですから。魔法史にもほとんど出てきません。

イギリスの魔法族の中には、カレッジに入学するまで家庭学習を行い、入学後は家族に代々受け継がれている魔法理論の研究を重ね、残りの人生を時計塔の研究室で過ごす者も多くなります。

ただ、研究のすべてが秘匿されているわけではなく、『変身現代』のような機関誌に、カレッジで研究された理論が発表されることも少なくありません」

セレネからしてみれば、目からウロコの情報だった。

今までいくつかの論文を読んできたが、気にしていたのは著者名だけで、所属機関は「神秘部だろう」とスルーしてきていた。もしかしたら、時計塔発の論文があったかもしれない。

「もちろん、神秘部に就職しない者もいます。スプラウト先生は時計塔の植物科を卒業後、ホグワーツの薬草学の教授になりました」

「なるほど……」

つまり、魔法省の神秘部とは国立の研究機関。

時計塔とは、ケンブリッジやオックスフォードのような大学機関。

時計塔卒業後は、そのまま大学に残って研究者の道に進んでもいいし、神秘部に就職してイギリス魔法族のための研究に専念しても良い。

マグル社会に置き換えてみると、思ったよりわかりやすい進路であった。

「もっとも、カレッジの入学金は高いです。ホグワーツの倍以上あります。ただ、貴方がこのままの成績を維持できれば、特待生として奨学金が出るかもしれません」

「奨学金ですか」

セレネの心は動き始めていた。

卒業後の進路が少し明白になり始めている。セレネは、時計塔ではどのような専門性を高めることができるのか、もっとよく知りたかった。

ところが、その話はそのまま流れてしまう。

なぜなら、セレネが質問する直前、玄関の呼び鈴が鳴ったからだ。マクゴナガル先生が立ち上がりかけたが、セレネが先に立ち上がり、玄関の様子を確かめに行く。右手で杖を握りしめ、左手で玄関の取っ手を回した。

「どちらさまで——……」

「俺だ！ マンダングスだ!! 嬢ちゃん、助けてくれ!!」

玄関に転がり込んできたのは、髪の毛の汚らしい小男だった。首から金のネックレスを下げ、薄汚れたジャケットを羽織っている。死喰い人ではなくて安心したが、あまり好ましい人物ではない。

「マンダングス・フレッチャーですか。助けてくれとは？」

「俺を殺そうとしている奴がいるんだ！」

「誰ですか？」

セレネは周囲に警戒するが、死喰い人が隠れている気配はなかった。

「ムーディに殺されるんだ!!」

「なにか悪さをやらかしたんですね。諦めて殺されなさい」

ヴォルデモートならともかく、ムーディは騎士団のメンバーだ。マンダングスが合法的な行動をしている限りは殺されない。逆に、彼に殺される事態になっているということは、とんでもない失態をやらかしたことに他ならない。

ムーディとやり合いたくないし、マンダングス絡みの面倒そうなことに巻き込まれたくなかった。

「酷いこと言わずに、助けてくれよお」

「いったい何の騒ぎです?」

玄関の騒ぎを聞きつけたのだろう。

マクゴナガル先生が不安そうな顔で現れた——が、マンダングスを見ると、一変して不快な物でも見るような表情に変わる。

「ミネルバ、あんたなら分かってくれるはずだ。助けてくれ、ムーディの旦那に殺されそうなんだ!」

「アラスターは余計な殺人をしません。あなたが問題を起こしたのでしょう」

「やらかしてねえよお！ 頼む、ミネルバと嬢ちゃん。助けてくれ！」

「……どうします、先生？」

セレネはマクゴナガルに視線を戻す。マクゴナガルは厳しい眼差しで小悪党を見ているが、これ以上、軒先で騒がれるのが嫌だったのだろう。観念したように肩を落とした。

「とりあえず、上がりなさい。詳しい話はそこで聞きます」

「愛してるぜ、ミネルバ！」

「そうだな、上がらせてもらおう」

ぱんつと銃が破裂するような音と共に、マندانガスの後ろに巨体の男が姿を現した。青い「魔法の眼」が奇妙に回転している男は、アラスター・ムーディ。たいたいま、話題に出ていた人物である。マندانガスはムーディを見るや否や跳び上がり、セレネの後ろに隠れた。

「嬢ちゃん、この男だ。この男が、俺に死ねって言うてくるんだ」

「誰も死ねとは言っとらん。すまん、ミネルバ。だが、あんたに話して貰えば、こやつも踏ん切りがつくかもしれん」

アラスター・ムーディはそう言うと、杖を突きながらリビングへ入っていった。マndanガスは、よほどムーディが怖いのだろう。リビングに向かうときも、セレネの後ろに隠れたままだった。

「それで、なにがあったのです？」

セレネが新しく人数分の茶を淹れ終わると、ミネルバ・マクゴナガルは口火を切った。

最初、ムーディはセレネがいることに渋い顔をしていたのだが、マクゴナガル先生が「この子は、『あの人』に幾度となく殺されかけているのですよ。騎士団の情報漏らすことはありません」と言ってくれたおかげで、同席することを許可された。

「そうだな」

ムーディの眼は周囲を調べるように回転し、やがて、異常なしと判断したのだろう。うむ、と頷いてから話し始めた。

「例のポッター作戦についてだ」

「概要は聞いています。今月末に決行されるとか」

「ミネルバ、それは欺瞞情報だ。本当は今週の土曜日に決行される」

ムーディは声を潜めるように言いながらも、欠けた歯を見せながら笑っていた。マクゴナガルは少し驚いたように目を開いたが、すぐに元の表情に戻ると口を開いた。

「なるほど。それは分かりました。つまり、ダンクに護衛任務に就けと命じたのですね」

「護衛ならまだマシだよお！」

マンダンガスは唸った。

「俺をポッターに変身させるっていうんだ！ まだ、護衛役の方が——……」
『『例のあの人』は自分の手で、ポッターを始末したがっている。護衛の方こそ、むしろ心配すべきなのだ』

ムーディが言ったが、マンダンガスは納得したように見えなかった。そもそも、作戦に参加すること自体が不満らしく、全身で「行きたくない」と訴えているように見える。マクゴナガル先生は呆れたように息を吐いた。

「なぜ、この男を作戦に参加させることになったのです？」

「計画の発案者なのだ」

ムーディはそう言いながら携帯用酒瓶を取り出し、グイッと飲み干した。偽ムーディの時はぶろりと顔が震えていたが、本物なのでそのようなことはない。普通に一口飲むと、平然とした顔で酒瓶をしまった。

「ポッターの姿をしたものが8人、別々のポイントまで飛ぶ。ポッター1人につき、護衛は1人だ」

「なんとまあ、この男が考えそうな作戦ですこと」

「この作戦を提案したのは、ああ、俺さ！ だけどう、発案者が作戦に参加しなくてもいいだろう？」

「発案者だからだ。敵に狙われた時、漏らさぬよう、わしが見張る必要がある」

「でもよ、こんなところで命を張りたくねえよ」

マndanガスは喚きながら、マクゴナガル先生を見た。マクゴナガル先生は彼を見て一言

「腹をくくりなさい」

とだけ告げた。マndanガスは次にセレネを見上げた。血走って垂れ下がった目

が、セレネの身体を突き刺している。

「嬢ちゃん、こいつに言ってくれよう。俺が死喰い人と戦えるように見えるか？勝てると思うか？」

セレネは瞼を閉じた。

先ほど、グリンドルバルドがもたらした知らせを想起する。

確か、スネイプが「ポッターは今週の土曜日に移動する」と主人に教えていたらしい。8人のポッターが飛ぶことはバレていないが、移動すること自体は露見している。おそらく、ヴォルデモートも夜空で待機しているに違いない。

さて、そこに8人のポッターが現れた。

ヴォルデモートは、どのポッターを襲うのか。適当に目についたポッターを追うか、否、それは違う。

本物のハリーならば、最強の護衛がついて当然だ。数々の死線を潜り抜けた熟練の闇払い——つまり、ムーディと一緒に飛ぶポッターが本物だと考えるだろう。想像してみよう。

肝が小さい小悪党が嫌々空を飛び始めた途端、ヴォルデモートが一直線に襲いか

かってくる。

結果、気が動転して「姿くらまし」で逃げる。この時点で、陽動作戦は失敗だ。ヴォルデモートは別の闇払いに狙いを変えるだろう。

「陽動作戦は成功させたいですよね……できる限り、ムーディ先生にひきつけ、他のメンバーからは注意を逸らしたい」

「……」

「それでしたら、私が代わってもいいですよ？」

セレネが静かに目を開けると、マンドングスの空気ががらりと変わった。途端、機嫌のよさそうな顔になり、にたにたと嬉しそうに手を握ろうとしてくる。指輪がじゃらじゃらついた手が触れる直前、セレネはぱっと躲し、小男を見下した。

「大きな貸しですよ、マンドングス」

「ありがとう、嬢ちゃん!! さすが、嬢ちゃんだぜ!!」

「駄目だ。この小悪党を見張らなくては……!!」

「決行直前まで、先生が見張っていればよいのでは？」

セレネはムーディを正面から見つめた。

「この男が死喰い人にリークしたところでハリーたちは空の上。すぐに追跡することは困難でしょう。それに、こんな嫌々参加する男がいたら作戦自体の士気にもかかわるのでは？」

「……」

「さらにいえば、欺瞞情報があるとはいえ、蛇男のことです。念のため、死喰い人が2、3人、ポッターの家上空を飛んでいても不思議ではありません。8人のポッターが飛べば、真っ先に狙われるのは、当然、ムーディ先生です。」

この肝の小さい男が、死喰い人と戦えると思います？ 絶対に逃げ出しますよ。それなら、その役目を私が代わった方がマシでは？」

ムーディは反論をすぐにしてこない。一理あると考えたのだろう。だが、おそらくは騎士団ではない部外者が関わることは是非を判断しかねているのだ。表情では悩んでいるように見えなかったが、内心はかなり考え込んでいることだろう。

ムーディはセレネの実力を知っている。なにしろ、あのナギニを目の前で倒してみせたのだ。「闇払い」に向いていると言われたことは、はっきりと耳の奥に残っている。実力的に見ても、セレネの方がマンドングスより数段上だ。

セレネは軽く笑ってみせた。

「ヴォルデモートが真っ先に狙ってこない限り、しっかり役目を果たしますのでご安心を」

現実には、真っ先に狙われること確定しているわけだが、そのことを言えるはずがない。情報源を問われても、グリンデルバルドとの繋がりを明かすわけにはいかないのだ。

もちろん、ヴォルデモートとの空中戦は怖い。あの時味わった感情は、未だ肌に刻まれている。だからこそ、対応できる。一度は経験しているのだ。ヴォルデモート初体験の騎士団員に比べれば、多少の心構えは出来ている。

いざとなれば、「直死の魔眼」や「飛行呪文」を使って応戦すればいい。その時点で、ハリーではないと露見してしまうが、ヴォルデモートのことだ。ハリー殺害の方がセレネ捕獲より優先度が高いので、きっと標的を変えてくれる、はずである。「それとも、私が漏らすと疑っていますか？ ご安心を。決行日まで、私はこの家を出ないように約束します」

外に出る用事は、概ね終わっている。

フラーの結婚式に出るための衣装を買いたいが、それは来週以降に回しても問題ない。

ムーディは黙ってセレネを見つめていたが、観念したように息を吐いた。

「では、ダンクの代わりに頼もうとしよう」

「ひゃっほう！ 愛してるぜ、嬢ちゃん!!」

「では、こいつを連れていく。すまなかったな、ミネルバ」

「いいえ、ですが、アラスター。貴方も作戦は気を付けてくださいね。アルバスに次いで、貴方までも失うわけにはいきませんから」

「当然だ。行くぞ、ダンク」

ムーディは義足を引きずりながら、玄関の方へ歩き始める。

「見送ります」

セレネも立ち上がり、マンダンガスと一緒に歩き始めた。マンダンガスはよほど嬉しかったのだろう。手を揉みながら、にたにたと笑っていた。

「へへっ、ありがとうよお、嬢ちゃん！」

「ですが、貸しは大きいですよ。頼み事も大きくなります」

セレネは更に声を低くして、マndanガスにだけ聞こえるように話し始める。

「たとえば、グリンゴッツのレストレンジ家の金庫から黄金のカップを盗み出してくるとか」

「……嬢ちゃん、それは無理だぜ。不可能ってものだ」

「では妥協点で、ホグワーツ創始者に関わる品を探し出してくること。何か神秘的に近い品が隠されていそうな場所を探し出してくること。もちろん、偽物は許しませんよ」

どうせ、この小悪党がグリンゴッツの最奥部に忍び込めるはずがない。

ならば、ホグワーツ創始者に関わる品を探し出した方がまだ見込みがある。本物の分霊箱は嚴重に隠されているかもしれないが、ロケットのように盗掘され、市場に出回る場合もあるかもしれない。限りなく0に近い可能性だが、試してもいいだろう。

「もしくは、グリンゴッツに盗みに入る安全な方法を探してくること」

「全部難しいぜ……あ、ああ。分かった、分かったよお!!」

ムーディが睨んでいることに気付いたのだろう。Mandanガスは慌てながら言う

と、ムーディのところへ走り出した。2人が「姿くらまし」で消えていくのを見ながら、セレネは肩を落とした。

「……はあ、厄介ごとを背負い込んだじゃった」

マndanガスに貸しを作って働かせるのはいいが、二回目のヴォルデモートとの空中戦が確定してしまった。

けれど、前回と比べて心構えの準備はできる。魔眼の使用は制限されているが、それでも、対抗策を立てることはできるのだ。

それに、戦う場所は空と固定されている。

しかも、戦法を考える時間が7日もあるのだ。

「さてと、頑張りますか！」

セレネは大きく伸びをしながら、リビングへと戻っていった。

○本作における時計塔の扱い

ホグワーツ卒業後の大学機関。なお、進学率は甚だしく悪い。

ハリポタ世界と型月世界をクロスオーバーさせた結果、このようになりました。ですので、本作では「魔術師」も「魔法使い」と表現していきます。もっとも、型月世界の魔法使い（魔術師）が本筋に絡んでくることは9割ありません。ご了承ください。

○ニワトコの杖の所有者

現在、一周回って元の主。

○8人のポッター作戦

誤字ではありません。8人のポッターが飛びます。

84話 8人のポッター作戦

ファンタビ2のBluerayが届いて狂喜乱舞。

何度も見直して、グリンデルバルドの研究をしなくては……

ついに作戦決行の時間が刻一刻と迫っていた。

セレネはポケットの中身を再度確認すると、杖の握り心地を確かめた。

「ミス・ゴント」

下の階から、マクゴナガル先生の呼ぶ声が聞こえてくる。

セレネは返事をする、最後にもう一度、一月ほど使った部屋を見渡した。今作戦後、絶対にここに戻ってくるつもりだ。だが、いつでも移動できるように荷物だけはまとめてある。

ダンブルドアが死んだ今、ヴォルデモート勢力の拡大速度が二段階は上がった。魔法省は必死の抵抗を続けているが、いつ陥落しても不思議ではない。

常に逃走できる状態にしておくのが得策だろう。備えあれば患いなし。それに、備えておけば現実には起きないというまじないの意味もある。

「まあ、ポッター役がポッターらしくない鞄を持っていたら、怪しみますよね」

セレネは残念そうに荷物を一瞥すると、リータ・スキーターが残した箒を片手に部屋を出た。

「気を付けるですよ」

「ありがとうございます、先生」

マクゴナガル先生は少し不安そうな顔をしていた。

「心配しなくても、大丈夫です。絶対に帰ってきますから」

セレネは先生に微笑みかけると、「姿くらまし」をした。

プリベット通りは沈みかけた夕陽に照らされ、真っ赤に染まっていた。

「セレネ！」

ハーマイオニーが駆け寄ってきた。

セレネは少し目が点になった。

「ハーマイオニー？ どうして、あなたが？」

「私も今回の作戦のメンバーなの」

セレネはメンバーに視線を向け、愕然とした。

ハーマイオニーを筆頭に、ロン・ウィーズリー、フレッドとジョージ・ウィーズリー、フラー・デラクル、そして、セドリック・ディゴリー。知っている人が6人もいる。成人とはいえ、20歳かそれ以下の魔法使いが自分を含め、7人もいるのだ。

「……騎士団って、これほどまでに人材不足なのですか？」

もちろん、年配者も8人いる。

ムーディ先生やルーピン先生、ウィーズリーの父とセドリックの父、女性と黒人の闇払い、そして、ハグリッドだ。いくら（ヴォルデモートが襲ってこないこと前提で考えると）ポッター役が狙われにくいとはいえ、残りの半数が若過ぎる。もっと歴戦の適任がいなかったのかと、驚きを通りこして呆れてしまった。

しかも、護衛役の8人目がハグリッドの時点で、団員の少なさに目を覆ってしま

いそうだ。セレネの記憶では、ハグリッドが頼りになった覚えがない。尻尾爆発スクリュートの飼育を途中で止めてくれたのは助かったが、あの危険極まる生物の飼育を『一大プロジェクト』として触れ合うきっかけを作ったのは、彼自身だった。

「あー……でも、セレネ。1人1人の質は高いわ」

ハーマイオニーがどこか苦し紛れな返答をする。

「やあ、セレネ。久しぶり」

セレネがハーマイオニーと話していると、セドリックが近づいてきた。

「久しぶりですね、魔法省に就職されたと聞きました」

「ああ、その通り。しかも、息子は闇払いなんだ！」

セドリックではなく、その後ろにいた彼の父親、エイモス・ディゴリーが得意げな顔で答えた。エイモスは自慢の息子の肩を叩きながら、明るい口調で話し始める。

「なにしろ、4年ぶりの新人闇払いだ！ しかも、あの厳しい試験を一発でパスしたのは、10年ぶりときた！ 闇払い期待のルーキーが息子だなんて、私は鼻が高い！ この分だと将来は魔法執行部の部長かもしれない！」

「エイモス、世間話はあとだ。任務に集中しろ」

ムーディが鋭く言うと、エイモスは口を閉ざした。けれど、まだ自慢し足りないのか、もごもご口元が動いている。

ムーディを先頭に、ハリーの家へと歩き始めた。セレネのように箒を持っている者もいれば、傍にセストラルを侍らせている者もいる。

ムーディがハリーの家の玄関を開けた途端、ハーマイオニーが中へ駆け込んでいった。

「ハリー!!」

ハーマイオニーがハリーに抱き着いた。ロンはハリーの背中を軽く叩いている。その後ろからのっそり現れたハグリッドがコガネムシのような目を優し気に細め、「大丈夫か? 準備はええか?」

と尋ねていた。

ハリーは元気よく頷いた。本当に準備は万端らしく、リュックサックを背負い、右手には箒を、左手にはフクロウが入った籠を持っている。

「計画は変更だ! パイアス・シックネスが裏切って、この家で『姿くらまし』をすることを禁じ、煙突飛行ネットワークにつなげることも禁止した。」

よって、今晚は箒、セストラルなど空を飛ぶ乗り物で移動することになった」
ムーディが膨れ上がった大きな袋を二つ持ちながら、リビングの方へと歩き始める。

カウンターキッチンスタイルのリビングは、掃除されつくしたようにピカピカで、それなりに広かったが、16人もの人数が詰め込まれると、やや手狭に感じた。
「ねえ、ハリー、これなーんだ！」

若い女性の闇払いが洗濯機に腰を掛けながら、左手を振って見せている。左手の薬指は、真新しい指輪が光っていた。

「私とリーマス、結婚したの!! それでね……」

「近況報告はあとにしろ。無事に移動した後なら、十分時間はある!!」

ムーディが大声を出すと、あたりは静まり返った。ムーディは袋を足元に落とすと、ハリーを両眼で見つめた。

「いいか。お前を隠しそうな十二軒の家に保護呪文をかけた。騎士団と何かしらの関係がある場所ばかりだ。つまり、わしの家、キングズリーのところ、ディゴリーの邸宅、モリーの叔母のミュリエルの家……分かるな？」

「でも……大丈夫ですか？」

ここで、ハリーの顔に不安の色が見え始める。まるで、計画に空いた落とし穴に気付いたかのような表情だった。

「おまえは、トンクスの実家に向かう。いったん、我々がそこに仕掛けておいた保護呪文の境界内に入れば、『隠れ穴』に向かう移動キーが使える。質問は？」

「あ——…騎士団の本部『グリーンモールド・プレイス』に行くんじゃないんですか？」

「そこはスネイプに知られてしまっている。危険すぎる。他には？」

「その、えっと、16人もトンクスの家に向かって飛んだら、ちょっと目立ちすぎませんか？」

ハリーが不安そうに言うと、ムーディは泥のようなものが入ったフラスコを取り出した。

「今夜、8人のハリー・ポッターが空を移動する。1人ずつに護衛がつき、それぞれの組が別々の安全な家に向かう」

「ポリジューズ葉を使うの!? それは駄目だ!!」

ハリーの大声がキッチン中に響き渡った。

騎士道精神にあふれるハリーなら、言いだしそうなことである。

「僕に変身するなんて、危険すぎるよ！」

「ハリー、好き好んでそうしているわけじゃないぜ？」

フレッド・ウィーズリーが大真面目な顔で言った。

「考えてみろよ。失敗すれば俺たち、永久に冴えない眼鏡君だ」

ジョージ・ウィーズリーが茶化したのが、ハリーは笑わなかった。

「僕、絶対に協力しない。髪の毛一本たりとも渡すものか！」

「ハリー、大人しくして」

ハーマイオニーが彼に歩み寄ると、勢いよく髪の毛数本を引き抜いた。ハリーは痛さと悔しさで顔をしかめていたが、ハーマイオニーは無言で髪の毛をムーディに渡した。

これで、ハリーの意思とは関係なく、計画が実行される。

「さあ、これで準備は整った」

ムーディはフラスコの中に髪の毛を投入する。すると、液体は髪の毛が触れるや

否や泡立ち、煙を上げて、一気に明るい黄色の液体へと変化した。

「一人、一口ずつだ。言っておくが、ゴブリンの小便みたいな味だ。吐き出すなよ」

セレネは心の中で、激しく同意した。以前、ヘスティア・カローに変身した時の形容しがたい気持ち悪さを思い出す。今回、覚悟してから一口飲んだが、やはり、胃から酸っぱさが込み上げてくるほど不味かった。つい、食洗器に置いてあったコップを手に取り、水を一気に飲み干したほどである。そうでもしなければ、この不味さに付き合っていられない。

「わおっ、俺たちそっくりだぜ!!」

フレッドとジョージが互いに顔を見合わせ、同時に叫んでいる。双子以上のそっくりな人間が、この狭い空間に自分を含め8人もハリーがいるのは奇妙で、頭が混乱しそうだった。おまけに眼鏡を取ってみれば、ポリジュース菓を飲んで変身してなお、死の線は視えている。

「ムーディ先生、ハリーと同じ型の眼鏡でなければダメですか？」

「駄目だ」

セレネの懇願は、あっけなく却下されてしまった。

ハリーの容姿はもちろん服装まで同じになれば、この計画の意味がない。なので、眼鏡も複製呪文で作り出した物をかけなければならない。理屈は分かっているが、セレネは小さくため息をついた。自分本来の服装と一緒に魔眼殺しの眼鏡をハリーと同じリュックサックに入れ、代わりにハリーの眼鏡をかける。当然、魔眼殺しではないので、死の線はくっきり視えた。

代わりに、パラケルスス版の賢者の石を嵌めたネックレスを下げる。服の上から見えないので、問題ない。きっと、万が一の助けになるだろう。

「全員、準備はできたな!!」

セレネは外に出ると、ムーディの隣で箒にまたがった。

これから本当に死の危険が待ち受けている。セレネは全員を見渡した。緊張で顔が強張っている者から、どことなくリラックスした表情の者まで表情は多種多様だ。ここに集った騎士団のメンバーは、誰もそのことに気付いていない。だが、死の危機が迫り恐怖を覚えるだろうが、誰も逃げ出す者はいない気がした。

「全員、一時間後に『隠れ穴』集合だ」

ムーディが叫んだ。

ハリーの籠から、ヘドウィグが飛び立つ。白いシルエットが空高く上っていくのがよく見えた。ムーディは人数分の白いフクロウまで用意することはできなかったらしい。

「三つ数えたらだ。一、二……三!!」

合図とともに、セレネの箒はぐんっと飛び上がった。一気に星の瞬く夜空へと上昇し、街の灯りが星のように眼下で輝いているのが見える。セレネは眼下の街並みを見下しながら、こっそり胸元をなぞるように「勇氣」のルーンを刻んだ。

その時だ。どこからともなく降って湧いたような黒い人影が周囲を包囲し始めたのである。その中から黒い煙が飛び出し、まっすぐムーディとセレネを追いかけくる。誰なのか、想像するまでもない。

「アバダケダブラ!!」

緑色の閃光が、セレネに向かってまっすぐ奔った。予想通りの攻撃に、慌てず横へ箒を旋回させる。

「ポッター! わしを見失うな!」

ムーディの怒声が聞こえる。ヴォルデモートに襲われている状況でも任務のこと

を忘れていない。さすがは、歴戦の闇払いである。

「分かりました、先生！」

セレネもポッターに成りきって叫びかえした。

どうやら、死喰い人たちがムーディを狙い、ヴォルデモート単体のみが自分を狙っている。ヴォルデモートの心理状態が分かりやすいといふべきか、蛇男の放つ魔法はすべて死の呪いだった。いつもの自分なら、死の呪いを魔眼で切り伏せることが出来るが、今回ばかりはそうもいかない。アバダケダブラに盾の呪文が効かない以上、避けるしか選択肢はなかった。

「ま、それでも空中戦は少し練習したからね」

セレネは自分に言い聞かせるように、小さく呟いた。

前回のヴォルデモートとの戦い以後、空中戦の方法についても研究した。ウルクハートやノーマンから箒の扱い方を教わったり、飛行魔法で空を飛んだりしてきた。もちろん、寮のクイディッチ選手である彼らには敵わないが、素人ながらそこそこ出来るようになったとは自負している。

それに、この7日間、「作戦では箒に乗るから」という理由で、マクゴナガル先

生に監督してもらいながら、箒の練習も積んできた。

マクゴナガル先生は在学中、グリフィンドールのクイディッチ選手だったらしく、素晴らしい飛行技術を持っていたのは嬉しい誤算だった。先生は厳しいコーチとして、セレネに飛行技術を教えてくれた。箒の修行中、

『私がこのまま箒の扱いに慣れたら、来年度のクイディッチ選手になるかもしれないね』

と冗談交じりに言ったところ、先生は真顔で

『大丈夫です。グリフィンドールのクイディッチチームは全員が強いですから』と答えられた。

それでは、スリザリンチームが弱いみたいではないか。さすがにウルクハートらは卒業するが、得点王のベイジールはいるし、ノーマンの飛びっぷりだって悪くないのに。

閑話休題。

とにかく、少しは飛ぶ技術が上がっている。ただ真っ直ぐ飛ぶだけで精いっぱい

から、空中で曲芸をやったのけるまで成長した。

それに、今の自分には「勇氣」のルーンが刻んである。いまなら少し怖くても、何でもやってのけられる勇氣が身体の奥から湧いてきていた。

「——ッ」

ただ、現実には上手くないかない。

耳の横すれすれを「死の呪い」が通り過ぎる。

まさに、血の凍るような思いだ。あと一步、避けるのが遅ければ当たっていた。セレネはムーディの位置を目を凝らしながら視認する。夜の空は暗く、前が見えにくい。敵が放つ呪文の光のおかげで周囲が見えているとは、皮肉な話である。

セレネは大きく右旋回で急上昇しながら、死の呪いを躲し、ヴォルデモートとの距離を置く。前から吹き付ける豪風を肌で感じながら、次に打つ手を考える。やはり、逃げてばかりでは悔しい。とはいえ、下手に戦いに打って出ると、自分の色が強く出過ぎてしまう。

「本当、面倒くさい！」

セレネは齒を噛みしめた。

「死ね、ポッター!! 動くな!!」

悲しいことに、蛇男はまだ自分のことをハリーと勘違いしているようだ。

動くな、と言われて止まるほど、自分は優しくない。止まった瞬間、殺されるならなおのことである。一方の眼で後方のヴォルデモートの位置を確認しながら、もう一方の眼でムーディの位置を確認するように、せわしなく眼球を動かし続ける。右に旋回し、左に旋回し、次は右と見せかけて左に避ける。ちょこまかとタイミングや向きを変えながら、狙いを定めにくいように飛んでいた。だが、それでも限度がある。今この瞬間にも、緑の閃光が二発、すぐ脇を逸れていく。

こんなことを十分近く続けているうちに、ヴォルデモートが苛立ち始めたのが伝わってきた。

「さっさと死ね!」

白い顔が怒りで歪み、緑の閃光の数が増え続けている。さらにいえば、ヴォルデモートが追いかけているという圧迫感が次第に強まって来ていた。前回はダンブカーに追われているような恐怖を感じたが、今回は空の要塞に襲われている気分だ。敵機に追われている戦闘機乗りたちは、このような思いを抱いていたのかもしれない。

れない。吹き付ける風と自分の冷や汗で体が冷えて仕方がなかった。

せめて、ムーディが護衛らしく自分の援護に入ってくれば助かるのだが、彼は彼で10人の死喰い人に追われていた。そんな相手に、助けを求めるのは極めて困難である。

「アバダケダブラ!!」

「——ッ、そう何発も連射して良い呪文ではありませんよ!」

セレネは覚悟を決めた。

身体を反らすように、急上昇する。そして、一気に宙返りをした。もちろん、ヴォルデモートも易々と後をつけてくる。自分を押し潰そうとしてくる重力に耐える、そのままだと一度、宙返りをするために急上昇した——が、今度は一捻り加える。少し斜め気味に急上昇し、頂点で箒を滑らせるようにした。そのまま横滑りしたまま高度を下げずに回る。強烈な重力に骨が軋み、箒も苦しうに弾くような音を立てる。速度も遅くなってしまうが、小さな旋回をしたおかげで、高度を保っていられた。

しかし、ヴォルデモートは違う。

先ほどのように通常の宙返りを行ったがために、前のめりになり、セレネより前に飛び出してしまふ。そのおかげで、セレネはヴォルデモートの後下につくことができた。

おかげで、ヴォルデモートは一瞬、標的を見失った。ずっと追いかけていた敵が突然、まるで「姿くらまし」をしたかのように視界から消えたのである。ヴォルデモートの飛行速度が明らかに低下し、混乱しているの分かった。

この好機を逃すわけにはいかない。

『『ステューピファイ―麻痺せよ！』』

全力以上の魔力を込めた失神呪文をヴォルデモートめがけて放つ。

ハッフルパフのカップを破壊できていない現状、ヴォルデモートを殺すことはできないが、失神させることはできる。

案の定、ヴォルデモートは突然の背後からの攻撃に対応できなかった。

赤い閃光を真面に浴びて、螺旋を描くように急降下していった。黒いマントがひらひらとひらめきながら、落ちていくのが見える。

「……………」

セレネは落下していく蛇男を視認しながら、勝利の喜びより、安堵の方が勝っていた。

ただ飛行してただけなのに、1000mを延々と走り切ったような疲労感だった。

ムーディの傍についていた死喰い人たちは、親玉がやられたことを受けて、全員が慌てふためいたように急降下し始める。ここで「よくも、我らが頭領を！」と怒りに燃えて突撃してくれば大したものであるが、全員が親玉の安否を気にするあたり、それも、忠義心というよりも恐怖からの安否確認だというあたり、死喰い人たちの底が知れたような気がする。

「気を休めるな！ 油断大敵！」

「え？……うわっと!？」

ムーディの声で、緩んでいた心を引き締め直される。真下から緑の閃光が飛んできたのだ。突然の攻撃に、セレネは避けることがかなわず、つい「死の線」を切ってしまった。緑の閃光は四散したが、これで正体が露見してしまう。

上昇してきたヴォルデモートは忌々しそうにセレネを一瞥すると、暗闇に溶け込

むように姿を消した。

代わりに、降下していた死喰い人たちが急上昇し、下から失神呪文や妨害呪文、武装解除の呪文などが襲い掛かってくる。

だがしかし、正体が露見してしまったということは、これからは「魔眼」の力に頼ってもいいということ。

セレネは悩むことなく線を切りながら飛び続けた。

飛んで、飛んで、飛び続けた。

どこまで飛び続けだろうか。何度目かになる赤い閃光を断ち切った時、ふっと死喰い人たちが一斉に姿を消した。目の前には小高い丘と一軒家が見える。他には何もなく、くるぶしまで伸びた雑草や小さな花だけが夜風に吹かれて揺れていた。

「よくやった、ゴースト！　そこに着地しろ」

ムーディの指示を聞きながら、家の前に着地した。地面に足が着いたとき、今までにないほど生きていることを実感する。思わず、その場に崩れ落ちそうになった。

「やはり、お前は闇払いの素質があるかもしれんな」

「……こんな思い、もう勘弁してください」

自分の得意技が全て封じられての戦闘など、本当に金輪際やりたくない。

セレネは、心の底から疲れていた。

「だが、どこかで情報が漏れていたな。……なら、誰が漏らしたかだ。『あの人』や死喰い人たちの様子を見る限り、少なくとも前日には決行がバレていたことになる。ところが、おそらく8人のポッター作戦までは知らないときた。ダंकが漏らしたなら、肝心なところも伝えるだろう。

では、いったい誰が……？」

ムーディがその場をぐるぐる回りながら考え込んでいる。

セレネは気が付くと、随分と袖が長くなっていることに気付いた。ズボンもぶかぶかで、今にもズレ落ちそうだ。どうやら、変身の効果が切れ始めたらしい。

「あの、ムーディ先生？」

「む、そうだ！ あと1分で移動キーが作動する。こっちに来い！」

着替えたいと言う前に、ムーディは叫んだ。

セレネは片手でズボンを持ち上げながら、ゆるゆるの靴で駆け寄った。そのせいで、少し転びそうになる。移動キーは齒の欠けた櫛だった。人差し指で移動キーに

触れると、見えない釣り糸に引っ張られるように、おなかの裏側をぐいっと前に引っ張られ、くるくると無抵抗に回転しながら、ムーディの自宅を急速に離れていった。

数秒後、両足が固い地面を打ち、どこかの裏庭に両手両ひざをついて落ちた。

「ここが、『隠れ穴』だ」

ムーディが杖をつきながら歩き始めると、前方から黒人の闇払いが駆け寄ってくるのが見えた。その後ろには、ハリーとハーマイオニーの姿が見える。黒人の闇払いは、ムーディにまっすぐ杖を突きつけると鋭い声で質問する。

「アルバス・ダンブルドアが、我々に最後に残した言葉は？」

「ハリーこそ我々最大の希望だ。彼を信じよ」

ムーディが答えると、次にセレネに杖を向けたが、ムーディが止めた。

「こやつはホムンクルスだ。ポリジュース薬はヒトへの変身に限定されている。

それより、問題は誰が裏切ったかだ。現状、帰ってきたのは何人いる？」

「私たちの他、ハグリッドとハリー、そしてリーマスとジョージだ。ジョージが負傷している。スネイプにやられたようだ」

闇払いとムーディはその場で話し始めたので、セレネはハリーたちの方へ歩き始める。

「どう思う？」

ハーマイオニーが口火を切った。

「どうして、死喰い人は今夜のことを知っていたのかしら？」

「騎士団の誰かが裏切っているわけないよ」

ハリーが断言する。

「ヴォルデモートは最後の方になって、僕に追いついたんだ。最初は誰が誰なのか、あいつは知らなかった。計画を知っていたなら、僕がハグリッドと一緒にだと始めからわかっていたはずだ」

「確かに、一理ありますね」

セレネは力なく笑った。

「あなたもよく無事でしたね。参考までに、どうやって逃れたのか教えてもらえますか？」

セレネが尋ねると、ハリーはかいつまんで説明してくれた。

危ういところを、ヘドウィグが盾になって守ってくれたこと。しかし、その結果、本物のハリーだと気づかれてしまったこと。ヴォルデモートを呼び出したに違いないこと。そして、ハリーとハグリッドが安全地帯のトンクスの実家に到着する直前に、ヴォルデモートが現れたことなどだ。

「ハーマイオニーは途中からヴォルデモートに襲われたって言っていた。つまり、順番的には、セレネ、ハーマイオニー、そして僕だってことだ。でも、分からないんだ。僕、杖が勝手に動いて、ヴォルデモートのアバダケダブラを押し返したんだよ」

「杖が勝手に動く？ そんなこと聞いたこともありません」

「ありえるんだよ！ 実際に、僕の杖は勝手に動いたんだ」

「落ち着いて、ハリー。原因を考えている最中です」

「僕はあんなことしたことはないし、できるわけないんだ」

「火事場の馬鹿力か。もしくは、ハリーの杖が特別なのか」

「特別じゃないよ？ オリバンダーのところで買ったものだ。君も一緒にいたじゃないか」

セレネとハリーが討論している間、ハーマイオニーは不安そうに夜空の彼方を見上げていた。

その後、アーサーとフレッド・ウィーズリーのペアが帰ってきた。次にディゴリー親子、ロンとトンクス。最後にビル・ウィーズリーとフラー・デラクルのペアがセストラルにまたがって裏庭に降り立った。

負傷者はいたが、死者はいない。

ヴォルデモートが本腰を入れて追っていたことを考えれば、まさに奇跡のような結果だった。

「ハリー」

『隠れ穴』と思われる趣のある建物から、ジニー・ウィーズリーが駆け寄ってきた。

「計画の成功を祝って、ささやかなパーティーをするの。入って」

「ありがとう、ジニー」

ハリーはジニーの手を握る。ハリーは少し気まずそうにこちらを見てきたが、セレネは素知らぬ顔で歩き始めた。ハリーの恋愛模様など興味がない。むしろ、自分ではなく他に良い人を見つけたなら、それは喜ぶべきことである。それよりも、

さっさと着替えたかったので、トイレを借りたかった。

「さあさあ、貴方どうぞぞ」

「隠れ穴」の入り口に近づく、小太りの女性が笑顔で迎え入れてくれた。

「どうもすみません。あの……着替えをしたいので、トイレを貸してくれるとありがたいのですが」

「まあ、トイレなんてとんでもない。ジニーの部屋を使ってちょうだい。ジニー、案内して」

「はい、ママ」

セレネはジニー・ウィーズリーに案内される間、一言も話さなかった。

彼女の部屋は狭かったが、明るい雰囲気だった。壁一面に女性クイディッチ選手のポスターが貼ってあり、小物も可愛らしい。

「ゴントさんは、ハリーのことをどう思っているの？」

セレネが着替えをしていると、彼女が淡々と尋ねてきた。ジニーはこちらを見ずに、暗い窓の外を見ている。

「友達ですよ。それ以上でもそれ以下でもありません」

セレネはジャケットを羽織りながら、正直に答える。

「ハリーは貴方と付き合っているんですね。それなら、何も問題はありませんよ」

「……」

「私は彼のことを友達以上には見えませんし、ハリーは私にない魅力を貴方から感じた。それだけです」

セレネは嘘偽りなく言ったが、ジニーはこちらを振り返ると疑心に満ちた視線を向けてくる。

無理もない。もし彼女と逆の立場なら、同じ心配をした気もする。セレネは無実だというように両手を上げてみせる。

「そこまで心配なら、本人に尋ねてみては？」

セレネはそう言うのと、部屋から出た。ジニーはあとに続かなかった。

居間に戻ると、皆が計画成功の祝いにファイアー・ウィスキーを飲んでいた。ところが、ハリーの姿だけが見当たらない。ハーマイオニーに尋ねると、いらいらした表情で今しがた庭へ飛び出して行ったそうだった。

「私、呼び戻してくるわ」

ハーマイオニーが不安そうな顔で追いかけた数分後、彼女の表情は一変して、怒っているように見えた。疲れ切ったようなハリーが彼女の後ろにいたが、この数分の間に何があったのだろうか。

セレネがこっそり小声で尋ねてみると、ハーマイオニーは腕を組みながら教えてくれた。

「ハリーがまた『あの人』の心の中をのぞいたのよ。ヴォルデモートのとつながらを利用しないように、ダンブルドアが『閉心術』を望んでいたのに」

「……そういえば、過去にありましたね。シリウス・ブラックが監禁されている映像を見たとか」

5年生のOWL試験で起こった出来事を思い出す。

ハリーはヴォルデモートの見せた夢に惑わされ、魔法省まで出向いてしまった。

「それは、確かに問題ですね」

「でしょ！ ほら、ハリー。セレネも危険だって言ってるわ」

ハーマイオニーはハリーを捕まえると、得意げな表情で言い放った。ハリーは心底うんざりした顔で彼女を見つめる。

「僕だって見たくないよ。あいつの感情が高まると、勝手に見えるんだ」

「だから、それはあつてはいけないことよ。心を閉ざす訓練を再開させなくちゃ！」

「

「大丈夫だよ、ハーマイオニー」

二人が口論をし始めたところで、セレネはそつと場を離脱した。

「それでは、私はこれで失礼します」

セレネはムーディに頭を下げる。すると、ウィーズリー兄妹の母親が口を開いた。

「もう少しゆっくりしていったら？ 泊まってもいいのよ？」

「ありがとうございます。ですが、マクゴナガル先生が心配しますので」

セレネは軽く一礼をすると、庭へ出た。

夏なのに薄寒い空気が肌を刺している。右手に死線を潜り抜けた筈を握りしめたまま、ひっそりと「姿くらまし」をする。

ホグズミード村は暗く、ほとんどの家の灯りが消えていた。しんと寝静まった家々が立ち並んでいたが、一軒だけ軒先に暖かな光が灯っている。マクゴナガル先生が玄関に立ち、杖灯りをもっていたのだ。

「おかえりなさい、ミス・ゴースト」

「ありがとうございます、先生。待っていても良かったのに」

セレネが言うと、マクゴナガル先生は小匙一杯分ほどの笑みを浮かべた。

「さあ、中に入りなさい。疲れたでしょう」

「……ええ、とっても疲れました」

セレネは本当に疲れて肩を落とした。

もう追われて飛ぶのは懲り懲りである。同じ夜空を飛ぶにしても、次は箒の前にラジオでも付け、自分の気の向くまま飛びたい。

セレネは着替えずに、ベッドに倒れ込んだ。

それから、特に代わり映えのしない平穏な日々が続いた。

「グラドラグス魔法ファッション店」で新しいイブニングドレスを購入したくらいだ。昨年まで使っていたドレスはヴォルデモートと戦ったせいで汚れ、ところどころ

ろ切れてしまっていた。

蛇男のせいで、無駄な出費である。失神呪文で一時的に落下させた程度では、気が済まない。これまで奴がやらかしてきた精神的な苦痛と飼う蛇の義父に対する仕打ちを含めて、多大なる慰謝料を請求したい。

そして、7月31日。

ちようど日が傾き始めた頃、来客があつた。

なんと、魔法省大臣のルーファス・スクリムジョールが訪ねてきたのである。しかも都合よく、マクゴナガル先生が学校の仕事で留守にしている時に来た。まるで、セレネが一人になる時間を狙っていたようだった。

「私がここに来たのは他でもない」

白髪交じりの蠶のような髪型の男性は、ソファアに座ると話し始めた。

「ダンブルドアの遺言についてだ」

予想外の言葉に、セレネは事態を飲み込むまで瞬き2回分の時間を要した。

「遺言？ 私にですか？」

「知らなかったのかね？」

「ええ、先生とは……まあ、目をかけてもらっていた方だとは思いますが、遺言だなんて」

1年に1度ほど、ダンブルドアと顔を合わせて話したことはある。

一度も面と向かって話したことのない生徒が多い中、そう考えると他の生徒よりもダンブルドアと近しかったのは事実だ。

しかし、彼のアドバイスが役に立った試しが、今まであっただろうか。

それに、セレネよりハリーたちの方がダンブルドアと親しい関係だった。セレネが困惑していると、スクリムジョールは目を光らせた。

「ダンブルドアが遺言を残したのは、君を含めて4人しかない。ポッター、ウィーズリー、グレンジャーの三人だ。私物の大半はホグワーツに寄付され、個人的な遺贈品は君たち4人しかない」

「と、言われまして」

セレネがダンブルドアの意思を図りかねていると、スクリムジョールはマントの内側に手を入れ、遺言書と袋を取り出した。

『セレネ・マールヴォラ・ゴイントに、私の杖を遺贈する。この半世紀、大事に使いつけてきた一本である。私を思い出す大切なきっかけとして、大事に保管して欲しい』

そして、袋の中から節の多い杖を取り出した。

セレネは杖を受け取ったが、ダンブルドアの考えをさっぱり理解できなかった。
「杖について、なにか話していたかね？」

「いえ、まったく」

そもそも、杖は自分の杖で十分満足している。

これ以上、杖を貰っても無意味だ。たとえば、この杖がグリンドバルドの言っていた「最強の杖」だったとしても同じである。ダンブルドアに言われるまでもなく、使わず保管するのは当然の運びだった。

「杖は魔法族にとって、騎士の剣と同じだ。魔法省はダンブルドアが君に何かしらの意思を託したと考えている」

「私には何も。ハリー・ポッターに聞いてください。彼の方が託されていると思います」

セレネがきっぱり答えた。

ハリーには「分霊箱探し」を始めとした命令が与えられていたかもしれないが、自分には直接与えられていない。分霊箱の探索は、自分が勝手にやっていることである。

スクリムジョールとしばらく睨み合っていたが、向こうが折れる方が先だった。マントを翻しながら、足早に立ち去っていった。

遺贈の話は、これでおしまい。

マクゴナガル先生が帰ってきたとき、杖を見てもらったが、間違いなくアルバス・ダンブルドアのものだということが判明した。

「杖なんて2本もありませんよ」

セレネはベッドに腰を掛けると、興味本位でダンブルドアの杖を振るってみた。

「『エイビス―小鳥よ』」

杖先から青色の小鳥が二羽飛び出すと、ちゅちゅちと鳴きながら開けっ放しの窓から外へと消えていった。

「……私の杖なら一度に十羽は出せるのに」

完全に興味を失くしたので、そのまま遺贈された杖をトランクに放り込むと、自分の杖を使って窓を閉める。セレネはそのままベッドに後ろ向きに倒れ込んだ。少し黄ばんだ天井を見上げながら、杖を託された真意について考えを巡らせたが、一向に正解が見えてこない。

ただ、1つだけハッキリしていることがあった。

「私の指輪、返ってこなかった」

ダンブルドアに貸したままのペペレルの指輪を思い出す。

黒い石が挟まった金の指輪を貸したままである。遺贈と聞いて一瞬、あれが戻って来るのではと期待したが、指輪の話は一切出てこなかった。

ダンブルドアが遺品のほとんどをホグワーツに寄贈したらしいので、その中に紛れ込んでしまったのか。それとも、何らかの理由で壊れてしまい、そのことを隠しているのか。はたまた、危険なものだと判断され、闇から闇へと勝手に葬られてしまったのか。

ダンブルドアが死んだ今となっては、真相は闇の中である。

箒の空中戦、書くの大変だった……。

原作との変更点は以下の通りです。

○セドリックの参戦

セドリックが死亡しなかったので、ここで再登場。

ヴォルデモートの復活を目撃し、死喰い人が暴れまくる現状を許せず、順当に闇払いになったハンサムイケメン。どうすればいいんだ、呪いの子編！

なお、彼が不死鳥の騎士団に所属したので、エイモス父さんも騎士団入り。

エイモスの息子自慢は止まない模様。

○ダンブルドアの杖を遺贈

ダンブルドアには未来視がないのに、どこまで想定しているのか。

次回投稿は 4 月 29 日の 0 時を予定しています。

GW はできるかぎり、更新していきたいです。

85話 結婚式

翌日。

つまり、ビル・ウィーズリーとフラー・デラクルの結婚式当日。

セレネは眉間に皺をよせ、目の前の青年を睨み付けた。

「……なんですか、その荷物」

セレネの視線は、青年が片手に持った大きなトランクに向けられていた。

セレネは結婚式に招待されたので、同伴者の彼、セオドル・ノットと待ち合わせをしたはずである。

待ち合わせ場所が分かりやすいように、ホグズミード村の入り口と指定した。そして、時間の10分前に来てみれば、もう彼がいた。それは別に構わない。

セレネが真新しい深緑色のイブニングドレスを着ているように、彼も黒いローブを纏っていた。それも気にならない。

だが、問題はトランクである。

まるで、これからホグワーツ特急に乗るような大きなトランクを持参していた。

世間一般的に考えても、大荷物過ぎる。パーティーにふさわしい荷物ではない。

「あー、その、なんだ」

セオドールも頭を掻きながら、気まずそうに笑っていた。

『漏れ鍋』に泊まっているんだが、最近、ダイアゴン横丁の治安が悪くてな。荷物を置きっぱなしにしたくなかったというか……」

「そもそも、どうして『漏れ鍋』に泊まっているんですか？」

「……簡単に言うと、親父と大喧嘩した」

「え？」

セレネは少し眉を上げた。

セオドール・ノットの父親は、魔法省の戦いの後、アズカバンに収監されたはずである。しかし、グリンデルバルドの話を思い返せば、同時に収監されたはずのルシウス・マルフォイが普通に登場していた。ニュースにこそなっていないが、ルシウスと一緒にアズカバンを脱獄していても不思議ではない。

「脱獄……いえ、家に帰っていたのですね」

「まあ、早い話、新聞沙汰にはなっていないが、脱獄だな。家に帰ったら親父がいて

な、その、なんだ。いろいろと喧嘩して、飛び出してきたってわけだ」

セオドールは少し視線を右上に逸らした。

それだけで、喧嘩の内容が想像できた気がした。誇大妄想かもしれないが、十中八九、自分に関係している気がする。魔法省の戦いでも、彼の父親は息子がセレネと行動を共にしていることに物凄く批判的だった。具体的に言えば、セレネに磔呪いを問答無用で放ってくるくらい嫌われている。

「そう、ですか……」

「まあ、気にするな。ゴーストは何も悪くないし、親父の頭が固いことが悪い」
セオドールは笑って言っていたが、セレネの罪悪感が消えない。

つまるところ、責任の一端は自分にもあるわけだ。

もし、自分がいない世界線があったならば、彼が父親と喧嘩する理由がない。そうでなくても、自分と仲が良くなければ喧嘩せずにすんだわけだ。

セレネはため息をつくとき、人差し指で頬を掻きながら、左手に持ったパーティバッグを差し出した。

「とりあえず、ここに入れたらどうです？」

「いや、入るわけないだろ？」

「検知不可能魔法をかけているので、問題ありません」

実際、横幅30センチほどの鞆の中には、セレネのトランクも入っている。

マクゴナガル先生の家に置きっぱなしでもいいが、自分の荷物は自分で持っていたかった。

なにより、セレネのトランクは「第二の秘密の部屋」と呼んでも良いくらい完成されている。トランクの中には、項目別に本が積んであり、ありとあらゆる魔法薬が種類別に並んでいるのだ。

マクゴナガル先生のことだから中を確認しないと思うが、あまり見られて嬉しい物ではない。

積み上げられた本の大半は、閲覧禁止や禁書と呼ばれる類であるのだ。正直、詮索されたくない。

「さてと」

セレネは鞆の口からトランクを押し込み始めた。どう見てもそんな小さな鞆に納まるはずがないのに、他の色々なものと同様、トランクはあつという間に鞆の广大

な懷に消えていった。

「これで行けますね」

セレネは一瞬、セオドルを見上げる。

彼の青い瞳の中に自分が映っているのが分かった。セレネは数秒彼を見上げていたが、不思議そうに見返してくるだけで何も言っていない。言いたいことが喉まで上ってきたが、結局、心の中にしまっておくことにした。自分より大きな掌を握り、ぱちんつと「姿くらまし」をする。

結婚式が行われる場所は「隠れ穴」だ。

先日、訪れたばかりの裏庭は、すっかり様変わりしていた。巨大な白いテントが張られており、白いローブを着たウェイターや金色の上着を着たバンドマンたちが見えた。雑草は一本残らず抜き取られ、同じ高さに揃えられた芝生が広がっている。二人の式はつつがなく進行し、あっという間にパーティーの時間になっていた。ビルとフラーを中心に参列者が踊ったり、テーブルの周りで歓談したりしている。ダンスをしている人の中には、ハーマイオニーとロンのペアの姿も見えた。赤

いドレスのハーマイオニーは薔薇のように美しく、近くにいたジニーは身に纏っている金色のドレスと同じくらい輝いていた。彼女と踊っているルーナ・ラグブッドは髪に向日葵を飾り、まるで御伽噺から飛び出した妖精のように可愛らしい。

どの子も、それぞれの気質を現すようなドレスを纏っている。

「おい、どこ見てるんだ？」

セオドールの不機嫌そうな声で、セレネは現実に戻された。

「いえ、特に何も」

セレネはそう言うと、ウェイターからバタービールを貰った。

「ダンスでもするか？」

「……ええ、それもいいけど……ここで少し休憩しましょう」

セレネはグラスを回しながら答える。特に何も言わず、ベージュ色の液体から炭酸の泡が浮かんで消えていく様子を見つめていた。自分らしくない、と思いながら、バタービールを飲むこともせず、泡だけを見下ろしている。

「セレネ！」

ふと、後ろから声をかけられる。振り返ってみると、そこには見覚えのない赤毛

の少年がいた。

「僕だよ、ハリー・ポッター」

「……なるほど、安全のため変身しているということですか」

確かに、ここには騎士団以外のメンバーも多く出席している。

念のため、姿を変えるのは賢い選択かもしれない。

「そういうわけなんだ。セレネのドレス、似合ってるよ。すごく綺麗だね」

「ありがとうございます」

セレネはハリーに微笑み返した。

自分の着ている深緑色のドレスはオフショルダーで、丈も床に着くほど長くはない。肩と足元のあたりが少し涼しく、どことなく恥ずかしさが込み上げてくる。けれど、全体的にふわっとした薄布を花卉のように重ね合わせたイブニングドレスは気に入っていた。淵も銀色で彩られているので、スリザリンらしくて好きだ。

だがしかし、好きなドレスと似合っているかどうかは別だ。

初めて自分で選び、購入したドレスだったので、正直、他人目線で似合っているかどうか不安だったのである。

「それで、少し話があるんだけど……君、セレネを借りてもいいかな？」

「駄目だ、オレも行く」

セオドールはむすつとした表情で言いかえすと、セレネの左手を握ってきた。絶対に逃がさないとでも言うように、少し強めに握ってくる。セレネは少し気恥ずかしくなり、バタービールを飲むふりをした。

ハリーはセレネが何も言わないことを見ると、悩むように腕を組んでいた。

「うーん……まあ、仕方ないか」

しかし、結局は折れてくれた。

三人でテントの端の方に歩きながら、ハリーが小声で話し始める。

「昨日、魔法省大臣が来て、ダンブルドアの遺言の品を僕とロンとハーマイオニーに渡したんだ」

ハリー曰く、ダンブルドアの遺言で、ロンにダンブルドア自作の「灯消しライター」、ハーマイオニーに「吟遊詩人ビートル」という御伽噺集、そして、ハリーに「一番最初に手に入れたスニッチ」を渡したらしい。

「ダンブルドアのことだから、なにか考えがあつての品だと思うんだ。セレネ、分

かる？」

どうやら、ハリーはセレネに謎解きを期待しているらしい。セレネは唸ってしまった。推理したくても情報が少なすぎる。灯消しライターは実物を見ないと判断しかねるし、御伽噺も当たり障りのない程度に知っている程度だ。スニッチに至っては、クイディッチは専門外なので想像ができない。

ただ――……

「スニッチは、物を隠すのに最適だと聞いたことがあります。真ん中がエッグチョコみたいに、ぱかりと開くとか」

「そうなんだ。僕も開けようとしたんだよ。ハーマイオニーが教えてくれたけど、スニッチには肉の記憶があるんだ。ゲームで誰が最初に触ったのか分かるようにね。だから、僕が最初にこれに触った時……つまり、口に当ててみたんだよ。そして、『わたしは終わるときに開く』って言葉が浮かび上がってきたんだ」

「終わるとき？」

セレネは首を傾げた。

「私が、ではないんだな？」

セオドールと一緒に考えてくれる。

「スニッチが壊れるときじゃなくて、他の何かが終わるときや死ぬときに開くんじゃないか？」

「そもそも無理やり開けるのは駄目なのでしょうか？ 爆破呪文や切断呪文で？」

「いや、セレネ。無理やりは不味いんじゃないかな？ でも、なにかが終わるときか……」

三人で額を合わせて考え込むが、これ以上の案は浮かんでこなかった。

「ダンブルドアも意地悪いですね。これは、こういう理由だからと説明してくれれば良かったのに」

「そこがダンブルドアらしいけど……あつ、大臣はセレネにも何か残してくれたって話してたよ。何を貰ったの？」

「そうなのか、ゴースト？」

二人の視線が自分に向けられる。

セレネは小さく息を吐くと、鞆から節の多い杖を取り出した。

「ダンブルドアの杖を貰いました」

「はあ!？」

「ダンブルドアの!？」

二人とも目を丸くしている。鏡かと思うくらい、そっくりな反応に噴き出してしまいそうになる。セレネは自分には長い杖を指で回しながら話し始めた。

「ですが、杖は間に合っています。威力も低いです。正直、いりません」

「でも、どうして、セレネにダンブルドアは杖を渡したんだろう?」

「私が聞きたいくらいですよ。まあ『保管しておいてくれ』というのですから、ホグワーツに置いておくのは不安だったのかもしれないですね。それか、自分の墓に入れたくない理由でもあったのか」

セレネはそれだけ言うと、杖を鞆の中に入れ込んだ。

本当に、ダンブルドアが何故自分に杖を託したのか理解しかねる。明日辺り、グリンデルバルドに意見を聞こうと考えていた。

「あれ? でも、ダンブルドアが埋葬されたとき、杖も一緒に埋葬されなかったっけ?」

「さあ、掘り起こしたのでは?」

セレネが答えると、ハリーは不愉快そうな顔をした。

ハリーからしてみれば、ダンブルドアは恩師だ。掘り起こすなんて真似は想像し
たくないのだろう。

「セレネ。そういえば、杖で思い出したけど、グレゴロビッチって知っている？」
ハリーが話題を変えてきたので、セレネは空いたグラスをウェイターに渡しなが
ら答えた。

「知ってますよ。杖職人で、確か……ビクトール・クラムの杖を作った人ですよ
ね？」

そのまま同じ代表選手仲間として招待されている青年がいた方に視線をスライド
させる。クラムは有名クイディッチ選手だが、威張り散らすこともなく、とても無
口で静かな男だ。ところが、結婚式に似つかわしくない剣幕で、黄金色のローブを
着た男に詰め寄っている。

「……どうしたのでしょうか、クラム？」

「あー……グリンデルバルドの印だよ」

ハリーは苦笑いをしながら答えてくれた。

「印？ グリンドバルドの？」

「クラムの祖父がグリンドバルドに殺されたらしくて、そのグリンドバルドの印をゼノフィリウス……ルーナのお父さんが提げてたから気に食わないらしいんだ。まあ、ルーナの父親のことだから、その印をスノーカックの頭の断面図か何かだと思っていると——……セレネ？」

ハリーが不安そうに顔を覗き込んでくる。そこで初めて、セレネは自分が不機嫌極まる顔をしていたことに気付いた。

「そうですか。グリンドバルドの印ですか」

すぐにセレネは表情を戻し、ハリーに微笑みかけた。

「グリンドバルドが印を持っていたとは、聞いていませんでした」

グリンドバルドは他国において、ヴォルデモート並みに恨まれていることを再確認した。彼の復活を知られてはならないと、改めて心に刻み込む。

それにしても、彼が印を持っていると聞いたことがなかった。セレネは目を細め、ゼノフィリウスの首から下げられている形——正三角形の中に縦線と円が組み合わさった印を頭に刻み込む。今夜、結婚式が終わったら、絶対にすぐ聞いてみよう。

きつと、その印とやらは、ヴォルデモートが「トム・リドル」のアナグラムを称号にしたという恥ずかしい設定に匹敵する黒歴史に違いない。絶対に、グリーンデルバルドの封印されし青春の思い出だ。このことがセレネにバレたと知った暁には、きつとヴォルデモートのことを笑えなくなるに違いない。

「……ゴント、なに笑っているんだ？」

「いえ、あの男が蛇男みたいに痛々しい一面を隠していたとは思いませんかったので」

「まるで、本人を知っているような言い方だな」

セオドルが疑わしい視線を向けてきたので、セレネは話題を切り替えようとした。しかし、そんなことはすぐにどうでもよくなった。瞬間、なにか大きくて銀色の動物がダンスフロアの天蓋を突き破って落ちてきたのだ。

「守護霊？」

セレネが呟いたとき、守護霊の大きな口が開き、深い声がテント中に聞こえ渡るほど大きな声で話し出した。

「魔法省は陥落した。スクリムジョールは死んだ。連中がそっちに向かって来てい

る」

守護霊はそれだけ伝えると霧散する。

あれだけ騒がしかったのに、瞬間的に静まり返る。セレネは考えるより先にセオドールの手を握り返し、「姿くらまし」をしていた。結婚式会場に、死喰い人が迫っていることは明白だった。自分一人なら死喰い人との戦いを選んだかもしれないが、戦うことで特別なメリットがないし、誰かに恩を売れるわけでもない。なによりも、いま自分の隣にはセオドールがいる。

いくら覚悟の半分を背負ってくれる人とはいえ、可能な限り命の危険にさらしたくなかった。

ぱちんつという音と共に、地面に足が着く。

「ここは、どこだ？」

セオドールが尋ねてくる。

夜になっても人通りが多く、いきなり現れた二人組に気付いていない。せいぜい、すれ違いざま、セレネたちの場違いな服装を見てくすくす笑う程度だった。セレネは状況が呑み込めていない彼の手を握りしめたまま、人波に乗るように歩き始

めた。

「ロンドンのオックスフォードストリートです」

「どうしてここに？」

「最初に思いついたマグルの街です」

つい数年前のことなのに、グリンデルバルドの助言を受け、ハリーと一緒に話したことが遠い昔のように思えた。

「とにかく、まずはマグルの世界にいた方が安全だと思いました」

セレネはヒールを鳴らしながら通りを歩くと、目についた適当な小路に入り込んだ。

「それに、魔法省が陥落したなら、ハリーのいそうな場所を狙って襲ってくるのは当然。結婚式会場も襲われたことでしょう」

「お前のことだから戦うかと思ってた」

「まさか！」

セレネは鞆に手を突っ込みながら、セオドールを軽く睨み付ける。

「メリットもないのに、危険な橋を渡るわけにはいきませんよ。とくに、貴方がい

るならなおさらです。ああ、これです」

セレネは鏡を取り出した。

本当はこんなことしたくないが、今はこれに頼るしかあるまい。結果として、セオドールを危険に巻き込むことになるかもしれないが、結婚式会場にとどまってい
るよりも生存率は高いはずである。

「私の家は敵に知られています。マクゴナガル先生のところに戻るのも考えま
したが、ホグズミードは魔法族だけの村です。魔法省が陥落した今、戻るのは危険で
しょう。あなたの家も入れませんし、漏れ鍋で部屋の予約は以ての外です」

「それなら、どこへ行くんだ？」

「……私の助言者のところです。……あとで、事情はすべて話しますので黙って
てくださいね」

セレネは彼を見上げた。セオドールは非常に何か言いたそうな顔をしていたが、
ゆっくり頷いた。

「どうせ、オレが断ったところで試すんだろ？」

「これが、いま考えられる中で一番安全です。だけど……私に幻滅しないでくださ

いね」

セレネはそう言ってみたが、これが原因で嫌われてしまうかもしれない。そう思うと、少し怖い気持ちちが沸々と浮かび上がってくる。その一方で、自分の中の何かが囁きかけてきている。この程度で嫌われるなら、自分のことを好いてくれるはずがない、と。

セレネは「良い方向に運びますように。どんなに悪くても現状維持が続きますように」と祈りながら、両面鏡の通信を入れた。

「緊急事態です。住所を教えてください」

『……どうした、フロイライン？ 今日はいーズリーの結婚式ではなかったのかね？』

鏡の向こうに、グリンデルバルドが現れる。セオドールが息をのむ音が聞こえてきたが、セレネは気にせず口早に話しかけ続けた。

「端的に言いますと、魔法省が陥落しました」

『なるほど、匿ってもらいたいということか。よろしい、来たまえ』
グリンデルバルドが住所を伝える。

ロンドンの郊外の住所だった。聞き覚えのない街の名前だが、かえって安全かもしれない。セレネは彼の方を見ずに、手を握りしめたまま「姿くらまし」をした。

「なあ、ゴースト……さっきの男って、魔法史の教科書で見た気が……」

「隠していてごめんなさい。ただ、魔法契約で縛ってあるので、私の意に反することとはできないはずです。ですが——……」

セレネはヒールを鳴らしながら、言われた住所まで歩いた。

「絶対に悪人ですので、会話には十分注意してください」

グリンドルバルドはヴォルデモートに比べると、知名度も恐怖度も弱い。

しかしながら、彼はヴォルデモートよりも言葉に長けている。その技を使い、ありとあらゆる魔法使いを欺き、配下に加えていったのだ。

古ぼけているが石造りの家の前で、セレネは足を止めた。

白くて小さな花が咲き誇った前庭に、チャリティ・バーベッジ教授が立っていたのだ。

「久しぶりね、ミス・ゴースト」

「先生、体調は大丈夫なのですか？」

「安心して、彼のおかげで元気よ。さあ、中にどうぞ。貴方もどうぞ、入りなさい」
バーベッジ先生は少し頬がこけていたが、それ以外は健康そうだった。

先頭に立ち、セレネたちを家の中に案内する。屋内も綺麗に掃除されつくしてあった。玄関にはドライフラワーが置かれていたり、小洒落た鏡が鎮座していたりしている。

「お連れしましたわ」

「ああ、ご苦労」

リビングに入ると居心地のよさそうなソファに腰を掛けた壮年の男性がいた。

ゆったりと長い足を組み、にこやかに微笑んでいる様子を見れば、好感の持てる成功した教授に見えた。だが、その姿に油断してはいけない。セレネはセオドールを背中に隠すように立つと、男に話しかけた。

「こうして直接会うのは久しぶりですね、グリンデルバルド」

「この姿で会うのは1年半ぶりだな、フロイライン。実に随分と素敵な服装をしている。似合っているぞ」

「ありがとうございます」

セレネが固い口調で返事をする、グリンデルバルドは白い髭を生やした口元を緩めた。

「君が後ろに隠している青年は、ボーイフレンドかな？」

「あなたには関係ありません。ひとまず、今日はここに滞在したいのですが、部屋は空いていますか？」

「ちょうど2つ部屋が空いている。もっとも——……」

「2部屋空いていれば十分です。バーベッジ先生、案内してもらえると嬉しいのですが」

セレネはきっぱり言うと、バーベッジ先生に視線を向けた。先生は快諾すると、セレネたちを2階に案内するため先導してくれる。

しかし、セレネが二階に上がる直前だった。

「なるほど、そういうことか」

グリンデルバルドの声が追いかけてくる。セレネは一瞬、足を止め、横目で彼を見た。グリンデルバルドのオッドアイは静かにセレネたちを見据えていた。

「君は悩んでいるな。このままでいいのか、と」

否、セレネではない。セオドールを見据えている。

嫌な予感しかない。セレネは彼の背を押すように、グリンデルバルドの視線から逸らさせた。

「聞いてはいけません。あの男の言葉は」

「……分かってる」

セオドールは硬い口調で答えた。

二階に上がると、意外と扉が多くあることが分かった。この家の持ち主は、ちよつと小金持ちなのだろう。

「手前の部屋がゲラートの部屋。その隣が私。貴方たちは空いている方を自由に使って」

「ありがとうございます」

セレネたちが頭を下げると、バーベッジは己の部屋に姿を消した。

「さてと、貴方の荷物を返しますね」

セレネはセオドールのトランクを取り出した。こうなつては、2人分のトラン

クを鞆に入れておいて良かったと心底感じた。

「その、もちろん漏れ鍋に戻っても構いませんよ？」

「……ここまで来て移動する気になれるか。それよりもだな」

セオドールはトランクを受け取ることなく、セレネに迫ってきた。そこまで広い廊下ではないので、セレネはそのまま壁に押し付けられてしまう。横に避けようとしたが、彼の両手がセレネの頭を挟むように壁についたため、逃げられなくなってしまった。

セレネは少し不機嫌そうに眉間の皺を寄せると、セオドールを睨み付けた。彼の顔とセレネの顔は拳二つ分ほどしか離れていない。

「何の真似です？」

「お前なあ、自分のしたことが分かってるのか？」

セオドールの口調には、咎めるような色が混ざっていた。

「グリンデルバルドを仲間に加えるなんて正気の沙汰じゃない。まさか、お前、脱獄に手を貸したんじゃないだろうな？」

「……貸したといえ、どうするんですか？ 魔法執行部に通報します？」

セレネは少し挑戦的に見上げた。彼の青い瞳は非難的な眼差しをセレネに向けている。

「ポッターの話も聞いただろ？ クラムの祖父があいつに殺されたって。他にも何百人と殺してるんだ。あいつは『あの人』に負けず劣らず極悪人だ」

「そうですね」

「そうですね、じゃない！ お前、なにかに利用されているかもしれないんだぞ？ 気が付かないうちに、あいつの悪事の片棒を担がされているかもしれないんだ」

「では、手を切れと？」

冗談ではない。

自分でもグリンデルバルドを助言者として扱っていることは、やや無謀で向こう見ずかもしれないと思うときはある。だが、毒を以て毒を制すという言葉があるように、ヴォルデモートと同等に渡り合うためには、同等かそれ以上の知識と腕前を持つ者を助言者として迎え入れる必要があった。

ここ数年で、自分ではかなりの魔女になったと思う。だが、それでも、ヴォルデモートには届かない。本気のベラトリックス・レストレンジをバジリスクのアルケ

ミーなしでは倒せなかったように、たとえ分霊箱をすべて壊せたとしても、本気のヴォルデモートにどれだけ自分の技が通じるか分からない。

「私は、蛇男が嫌いです。大っ嫌いです」

自分を馬鹿にしたから。義父を植物人間に追い込んだから。義父や目の前の彼と安らかに過ごしたいのに、それをさせてくれないから。

ヴォルデモートを破滅させたい理由は、両手の指では足りないほどだ。

「蛇男は、70年先を走っています。私は、その70年を一跨ぎしなければなりません」

さながら、ギリシャ神話に登場する俊足のアキレウスのように。

「だから私は、あいつを手放すわけにはいかない。たとえば、私自身がグリンデルバルドの企む計画に利用されていたとしても、サイコパスを破滅させるためなら、こちらでも最大限利用し返してやります」

「……お前、やっぱり最低だな」

セオドールは言葉を零すと、両手を離れた。距離感が変わらず、いまだに鼻がつきそうな距離間だったが、少し周囲の空間が自由になった気がする。

「でもまあ、ゴーントラしいや」

彼は髪を掻きながら、片方の手でトランクを受け取った。口調には諦めの色が強く滲んでいたが、これ以上、とやかく言うつもりではないらしい。

「じゃあ、オレはもう寝る。また明日な」

彼はそう言いながら、扉を開けようとする。

セレネは半ば見送りかけ、ふと、あることを思い出した。廊下の端まで視線を走らせ、誰も見ていないことを確認すると、そっと彼の袖をつまむ。

『マフリアート―耳塞ぎ』

セレネは小声で防音の呪文を唱える。セオドールは不思議そうに振り返った。

「なんだよ？ 何か言いたいことがあるのか？」

「……」

セレネは彼の袖を指の先でつかんだまま、ずっと悩んでいた言葉を口にしようとする。だが、その言葉を口にするのは何より自分らしくない。だからといって、このまま悩んでいるのも、同じくらい自分らしくない。

セレネは小さく息を吐くと、思い切って彼を見上げた。

「似合ってます」

「は？」

「ドレスローブが豪華過ぎず質素過ぎず良い感じに似合っています。マルフォイやハリーよりも少しカッコいいです」

セレネは呼吸を置かずに、一気に言い切った。あまりに覚悟と勢い込めて睨み付けるように言ったものだから、眼鏡をかけているにもかかわらず、視界に死の線がちらほら映り込んでいた。

「……」

沈黙。

セレネは沈黙の間、ずっと青年を睨み付けていた。

さあ、自分は言った。いつまで待っても相手が言いださないから、自分から言っ
てやった。今度はお前の番だ、と目で訴えてやる。ハリーとグリンデルバルドか
ら言われたが、まだ肝心な人からの感想を貰えていなかった。最愛の義父ならば、
きつと最初に言ってくれただろうに、と不満そうに相手を見上げる。

「……その、あれだな」

セオドールの顔が赤く火照り、上気している。セレネの視線から逃げるように顔を逸らし、頬の照りを紛らわすように髪を掻いている。

「あれ、とは？」

セレネは彼を見上げたまま、少し強い口調で問いたです。やはり、視線が合わない。けれど、この問いの答えを逃すわけにはいかない。辛抱強く、彼の言葉の続きを待ち続ける。

「あー……あれだ。うん、その……馬子にも衣裳」

「もういい！」

セレネは短く言うのと、近くの部屋の扉を開けた。

「い、いや。ちょっと待て！」

彼が耳まで赤らめながら止めてきたが、鼻先で扉を閉めてやる。そのまま「アロホモーラ」でも開けられないように、魔法で嚴重に鍵をかけると、どこか不貞腐れた気持ちを抱えたまま、着替えもせずにベッドに沈んだ。

次の日。

セレネは着替えると、階段を降りて行った。

居候の身なので、朝食の手伝い位しようと思ったのだ。案の定、キッチンではチャリティ・バーベツジ先生が朝食の支度をしていた。セオドールの姿はなく、グリンデルバルドがリビングで新聞を広げている。

「おはよう、フロイライン。こちらに來たまえ」

グリンデルバルドがやけに愉快そうに笑っていた。この男が面白そうな笑みを浮かべている時は、ろくな試しがない。

「まあ、読むといい」

日刊預言者新聞を渡してくる。

セレネは訝し気に一面を見下した。『アルバス・ダンブルドアの死にまつわる疑惑。尋問のため指名手配中』という文字が大きく記されている。そして、その記事のすぐ下、一面のほとんどもを占めていた写真を見下した瞬間、街中に響き渡りそうなくらい叫んでしまった。

「な、なんですか、これ!？」

ハリー・ポッターの写真と、あろうことか、セレネ・ゴースト自身の写真が載っ

ていたのである。

「『ダンブルドアの死の疑惑を調べるため、当時、不審な動きをしていたホグワーツ生二名を指名手配することにした』……なんて……」

セレネは唸るように、記事の一分を読んだ。

ご丁寧に、写真の下には「ALIVE ONLY」と書かれている。

ヴォルデモートが魔法省を乗っ取ったのだから、新聞社を手中に収めるのは時間の問題だと思っていた。グリーンデルバルドがヴォルデモートの会合で手に入れた情報からして、ヴォルデモート自身が自分を狙っていることも知っていた。

だからって、ここまであからさまな手段に出るとは思っていなかった。

「嘘でしょ、これ」

セレネは、へなへなとその場に崩れ落ちた。

これで、今学期はホグワーツに戻ることが不可能だと断定。それどころか、外も変装なしで歩き回れない。分霊箱探しにも支障が出てくる。

「フロイライン、同情する」

グリーンデルバルドが背中を軽く叩いた。

セレネは、乾いた笑いを浮かべることしかできなかった。

※

同時刻。

ハリー・ポッターも同じ思いを抱いていた。

結婚式会場が死喰い人に襲撃されて以降、ハリーはロンとハーマイオニーと一緒に、元騎士団の基地にして、シリウス・ブラックの家——グリモールド・プレイス十二番地に隠れていた。

もっとも、その途中で、トテナム・コート通りに逃げ込んだわけだが、どういうわけか死喰い人に嗅ぎつけられてしまった。そのため、自分たちが考えられる中で最も安全な場所に逃げ込んだわけであった。

「ハリー、同情する」

新聞を読んだシリウスが、ハリーの背中を叩いた。

ハリーは嗤然とし、ハーマイオニーはかんかんになって新聞の文句を言い、ロンはその後の記事に書かれていた「マグル生まれ登録制度実施」に氣をとられていた。マグル生まれ登録制度が実施されると、マグル生まれの魔法使いは杖を取り上げられ、アズカバンに投獄されるらしい。

「……とりあえず、食事の準備をしよう。クリーチャー!!」

シリウスは車椅子に乗ったまま、屋敷しもべ妖精を呼んだ。年老いたしもべ妖精は文句を言いながら台所に立った。そのとき、ハリーは気づいた。クリーチャーの胸に大きなロケットが提げられていることを。

「シリウス、クリーチャーにロケットをあげたの?」

「ん? いいや。だが、別に構わないさ。衣服ではない。どうせ、あの開けられなかったロケットを提げてるだけだろ」

シリウスは素っ気なく言った。

高貴なるブラック家には、マンダンガス曰く『宝の山』が眠っていた——……が、シリウスからしてみれば、ゴミの山でしかない。クリーチャーがそこから何を拾い、何を身に着けているかなんて、氣も留めていないのだろう。

ハリーはロケットをじっと見た。

「開けられなかったロケット……」

2年前、ハリーもブラック家の大掃除に駆り出された。

その時、戸棚に誰にも開けられなかったロケットがあった。それは事実だ。だが、あのロケットより一回り小さい。誰も開けられなかったロケットは大きくて、Sの字が書かれており、それはまるで……

「スリザリンのロケット!!」

ハリーは大声を上げた。

シリウスはもちろん、クリーチャーまでもが驚いて跳ね上がる。

「ハリー?」

「スリザリンのロケットだ! ああ、思い出した! あの開けられなかったロケットが、スリザリンのロケットだったんだ!!」

ロケットを見た途端、記憶が鮮明に戻ってきた。

数年前、屋敷の戸棚に眠っていたロケットは、間違いなく分霊箱で、スリザリンのロケットだったのだ。それと共に、一瞬、煉瓦が胸から胃に滑り落ちたような喪

失感を感じる。あのロケットは結局、ごみ箱に捨てられた。

けれど、もしかしたら、クリーチャーが掠め取っていたかもしれない。

ハーマイオニーとロンが顔を見合わせ、シリウスが事態について行けず口を開けている中、ハリーは立ち上がるとクリーチャーに詰め寄った。

「クリーチャー！ ここに誰にも開けられなかったロケットがあつたはずだ。それを掠め取ったか？」

「……」

クリーチャーは何も答えない。

ただ、まじまじとハリーを見上げている。

「クリーチャーは、ポッター小僧のしもべではありません」

「クリーチャー、命令だ」

クリーチャーがそっぽを向いた途端、シリウスが鋭く言った。

「ハリーの質問にすべてに、嘘偽りなく正確に答えろ」

ハリーは驚いたように、シリウスを見返した。シリウスはハリーに向かって片眼を閉じてみせる。

「どういう理由か分からないが、それは大事なことなのだろう？」

「ありがとう、シリウス！」

ハリーはシリウスに礼を言おうと、もう一度、クリーチャーに同じ質問をした。クリーチャーは不満そうにもごもごしていたが、やがて口を開いた。

「はい、取り戻しました」

それを聞いた瞬間、ハリーは小躍りしたい気持ちになった。

「それは、いまどこにある？」

「……なくなりました」

「なくなっただって、どういう意味？」

しもべ妖精は黙ったまま身震いをしている。それを見て、シリウスが厳しい声で言った。

「命令だ、クリーチャー。答えろ」

「……マンダングス・フレッチャー。マンダングス・フレッチャーが盗みました。旦那様が、入院されている間に忍び込まれ、盗まれました」

クリーチャーは目を閉じた。それ以上、何も言わないと硬く決めているようだっ

た。

「つまり、ロケットはマンダンガスが持っているのね」

ハリーの後ろで、ハーマイオニーが呟いた。

「でも、マンダンガスは今、どこにいるのかしら？」

「マンダンガスの居場所を調べるには、簡単な手がある」

シリウスが頷くと、クリーチャーに向き直った。

「クリーチャー、マンダンガスを手繋いでこい。2日以内に、だ」

「……かしこまりました、旦那様」

クリーチャーは悔しそうに呟くと、弾かれたような音と共に姿を消した。ハリーは車椅子のシリウスに向き直った。

「ありがとう、シリウス」

「今の私にはこれくらいしか出来ない。マンダンガスは多くの隠れ家を持っている。クリーチャーを使っても、そう簡単に居場所を割り出せない」

シリウスは無念そうに言った。魔法省の戦いで首の骨を痛めてから、彼の動きは随分と制限されていた。

「戦場に出たくても、最大で30分程度しか持たないからね」

「素朴な疑問だけど、どうして30分も戦えるんだい？」

ロンがふと思い出したように尋ねてくる。すると、ハーマイオニーが素早く答えた。

「魔法糸よ」

「魔法糸？」

「ふむ、ロン。君はマリオネットを知っているかい？」

シリウスが例えを出してくれた。ロンが頷くと、シリウスはゆっくり語り出す。

「魔力で糸を作り、マリオネットみたいに身体を動かす魔法だ。自分の魔力が尽きない限り、たとえば、四肢が満足に動かなくても自分の体を自由自在に操ることができる。本来ならリハビリを含め3年はかかるが、私はこう見えて、それなりに魔法が得意なものでね。半年でもものにしたということだ」

シリウスは少し得意げな顔をしていた。

「おっどろき！ そんな魔法があるんだ！」

「魔力が尽きればおしまいだ。だからこうして、普段は車椅子で最小限の力で生活

している」

「ロン、そういうことよ」

ハーマイオニーはそう言うのと、台所に入り、クリーチャーの代わりに料理を始めた。

「ところで、ハリー」

シリウスはハリーに話を振ってきた。

「君がロケツトを探し求めるのは、ダンブルドアに託された使命と関係あるのかな？ 打ち明けてもらえれば、もう少し力になれると思うのだが」

ハリーはじつとシリウスを見返した。

アズカバンから脱獄して来たよりも、随分と健康そうな肌色をしている。ダンブルドアを除けば最大限信頼でき、物凄く頼りになる名付け親にすべてを明かしたい気持ちになった。

だから、ハリーは別な答えができたらしいのに、と心底思う。

「シリウス、ごめんなさい。ダンブルドアがあなたに話していないなら、僕からは話せない」

「そう言うと思った」

シリウスは少し失望したようだった。

「まあ仕方あるまい。ダンブルドアが駄目だというなら、駄目なのだろう。

だが、ハリー。手伝えることがあるなら遠慮せずに言ってくれ。もっとも、今の私は己の知識と隠れ家、それから、老いぼれクリーチャーを貸すくらいしかできないけどな」

シリウスは寂しそうに笑った。

ハーマイオニーが「食事の支度ができたわよ」と呼ぶ声が聞こえる。シリウスは車椅子を魔法で動かしながら、テーブルの方へと移動し始めた。その後姿を見ながら、ハリーはシリウスに対して、深い自責の念が湧き起こるのを感じた。

そのちょうど2日後だった。

クリーチャーがマンダングス・フレッチャーを捕まえて、グリモールド・プレイスに現れたのは。

次回投稿予定はクリーチャーが戻って来る2日後。

つまり、5月1日0時予定です。

平成最後の話はいかがだったでしょうか。

令和になっても、本作をよろしく願います！

86話 魔眼と御伽噺

「旦那様、盗人を連れてまいりました」

クリーチャーはマンダングス・フレッツチャーを解放すると深々とお辞儀をした。

「ええ、旦那様には逆らえないからです。たった2日で探してくるなんて、無謀にもほどがありました。ああ、可哀そうな奥様。クリーチャーが奥様の気持ちを裏切った男のために仕えないといけないと知ったら——……」

クリーチャーがぶつぶつ何か言っていたが、その間にマンダングスはあたふたと立ち上がっていた。そして、そのまま杖を抜いたが、ハーマイオニーの速さには敵わなかった。

『『エクスペリアームス——武器よ去れ』！』

マンダングスの杖が宙を飛び、ハーマイオニーがそれを捕らえた。マンダングスは杖を失うと、狂ったように目をギョロつかせ、階段へとダッシュしていったが、ロンがタックルをかまし、鈍い音を立てながら床に倒れ込んだ。その隙に、ロンはマンダングスをがっちりつかみこみ、床に押し付ける。

「何だよ！」

マンダンガスはロンの手から逃れようと、激しく身を振りながら叫んだ。

「シリウスの旦那、オレが何をしたって言うんだ！」

「すまないな、 Dank。だが、ハリーが用事があるというのでね」

シリウスが静かに言うと、マンダンガスの怒りの眼差しがハリーに向けられた。

「なんだよう？」

「マンダンガス、少し君に聞きたいことがあるんだ」

「俺が何かしたって言うのか？ いや、おめえさんには何もしてないぜ？ そりゃ、

あの作戦には参加したくねえってごねたけどよう、直接関係してねえってもんだ」

「作戦のことじゃなくて、ロケットのことだ」

「ロケット」という単語が出た途端、ぴたりとマンダンガスの動きが止まった。

「ロケットを盗んだのは君だろ？」

「まあ、盗んだというか、なんというか」

マンダンガスは額に汗をかきながら顔を逸らした。

「まだ持ってるのよ！」

ハーマイオニーは期待を込めて晴れやかな顔で言ったが、ロンはそれを否定する。
「いや、もう売り飛ばしたんだろ？」

ロンが問いただと、ややあってからマンダンガスは固く閉ざした口を開いた。
「契約で言えねえよ！ 破った瞬間、俺はアズカバンに行つて魂を差し出さなくちゃいけなくなるんだ！ 聞きたいなら、そのしもべから聞けよお!!」

「クリーチャー」

「……クリーチャーはポッターの小僧の命令を聞きません」

「クリーチャー、ロケットとマンダンガスに関することを始めから最後まで、嘘偽りなく全て話せ」

シリウスが言葉を選びながら問いただすと、クリーチャーは苦虫を潰したような顔になった。もごもごとこねるように口元を動かしていたが、やがて、シリウスが睨みつけると、観念したように話し出した。

クリーチャーがヴォルデモートに連れられ、小島に行ったこと。

そこで毒薬を飲まされたこと。そして、命からがら帰ってきたこと。

今度はレギュラス・ブラックと一緒に小島に行って、レギュラスに毒薬を飲ませ、ロケットを掏り替えてきたこと。

その後、どうやってもロケットを破壊するどころか開けることすらできず、何も出来ないまま、マndanガスに盗まれてしまったこと。

「……ですが、その後、クリーチャーは見つけたのです。ホグワーツで、レギュラス様のロケットを」

「どこで見つけたんだ？」

ハリーが疑問を口にする前に、シリウスが察して尋ねた。

クリーチャーは答えたくないのだろうが、主人の命令には従わなければならない。静かに震えながら話し続ける。

「スリザリン寮の掃除をしていた時でした。……とある学生が、レギュラス様が洞窟に置いてきたロケットを眺めていたのです。クリーチャーはその人と話して、マndanガスを探し出し、盗まれたロケットを渡しました。代わりに、クリーチャーはこのロケットを貰ったのです」

クリーチャーはしわがれた声で言いながら、以前はレギュラス・ブラックの物

だったロケットを指でいじっていた。

「それで、その後、盗まれたロケットはどうしたの？」

「穢れた血の質問には——……」

「クリーチャー、話せ」

「……………壊しました、ロケットを」

「壊した？」

ハリーたち三人組は互いに目を見合わせた。

シリウスは知らないが、分霊箱になったロケットは壊せない。バジリスクの毒のように、一人でに回復できないほど強い破壊力のあるものでなければならないのだ。そう簡単に壊せるわけではない。

「どうやって壊したんだ？」

「……………ホグワーツの学生が、壊したのです。杖先で切りながら」

その時、ハリーの脳裏に一人の女子生徒の姿が浮かび上がってきた。

「セレネだ！」

「ハリー？」

「セレネの直死の魔眼だよ。だから、セレネはロケットを壊せたんだ。そうか、ナギニを殺せたのも魔眼の力だったんだ！」

4年生の時、ダンブルドアから直死の魔眼について教えてもらったことを思い出す。

すべての死を視る魔眼は、シリウス・ブラックから永久に腕を失わせたように、分霊箱でも再生できないほどの破壊力があるのだろう。

「嘘でしょ!？」 セレネの魔眼って『直死の魔眼』だったの？ 薄々思っていたけど、本当だったなんて！」

ハーマイオニーが口を押えながら言った。反対に、ロンはぼかんと不思議そうな顔をしている。

「なんだい、その直死の魔眼って？」

「バロールの魔眼みたいに、一睨みしただけで死を確定させる魔眼よ。もったも、セレネの様子からして、視ただけで万物の死の綻びを見定めるだけなのかもしれないけど」

「おっどろき！ あの子、そんな気味悪い眼を持ってたんだ。僕は魔眼持ちじゃ

なくてよかった」

「……ロン、あなただって魔眼持ちじゃない」

ハーマイオニーが呆れたように呟いた。これには、ハリーも驚いてしまう。

ロンが魔眼持ちだなんて、考えたこともなかったのだ。ロン自身、少し虚を突かれたような顔をしている。

ハーマイオニーは二人の姿を交互に見ると、眉根に皺を寄せた。

「貴方たち、少しは本を読んだらどうなの？」

「だって、君が本を読んでいるから、僕たちは読まなくても大丈夫だろう？」

ロンが当然のように答えたので、ハーマイオニーは呆れたように肩を落とした。代わりに、シリウスが苦笑いをしながら答えてくれる。

「ホグワーツでゴーストが見えるだろう？ あれは、この世にあらざるモノを視る

『浄眼』があるからだ。少数派だが、ホグワーツ生の中にもゴーストが視えない者もいるだろうよ。ゴーストが視えないからといって、特別不都合はない。せいぜい、ピーブズの被害を避けられないくらいだ」

「特に、イギリスの魔法使いは異国の魔法使いと比べて、『浄眼』持ちが多いの。イ

ギリスに残る神秘や伝承が多いからだと思うけど……もちろん、ランクは雲泥の差で、私やハリーなんてランクが低いからゴーストを視るのがやっとよ。

だけど、ロン、貴方の浄眼はかなり高ランク。妖精はもちろん、精霊やこの世の神秘も視えるかもしれないわ」

「僕が？」

「瞳の色が青に近づくほど、浄眼のランクは高くなるの。特に魔法使いの血を重ねた純血の家系では、高ランクの浄眼持ちが出やすくなるわ」

ハーマイオニーの話を聞いて、ハリーは今まで出会った人物を思い出して、目の前のロンはもちろん、純血を誇るドラコ・マルフォイは薄青色の眼をしていたし、アーニー・マクミランやセオドル・ノットも青い瞳だった。ダンブルドアの瞳も明るい青色で、シリウスの瞳は灰色が強いが、光の加減で青く見えなくもない。

ムーディの持つ全てを見通す義眼「魔法の眼」だって、考えてみれば青色だった。あれも浄眼のレプリカなのかもしれない。

「すげー、僕、知らなかった」

「大事にした方がいいわよ。世界的に見たら、浄眼を持っていない魔法使いも多いんだから。」

ともかく、セレネがアレを破壊して回っていることがつかめて良かったわ」

ハーマイオニーが脱線していた魔眼の話を切り上げ、分霊箱の話へと切り替える。
「セレネと繋がっているなら、マndanガスからもう少し情報を引き出せるかもしれないわ」

「お、俺は何も知らねえよ!!」

マndanガスは勢いよく首を横に振った。

「ハーマイオニー、開心術はできる?」

「ええ、理論は知っているわ」

ハーマイオニーがマndanガスの鼻の頭に杖を突きつけた。

「セレネが漏らしていなかった? なにか、例えばそうね……ホグワーツ創始者の宝物についてとか」

「そ、そんなこと……い、言えるわけねえだろ!?! 契約で話せねえんだ」
マndanガスは目を泳がせながら叫んだ。

ハリーとハーマイオニーたちは目配せをする。

彼の慌てっぷりからするに、情報を持っているのは確実である。ハーマイオニーはマンダンガスに杖を突きつけたまま一度、神経を集中させるように目を瞑り、そして、鋭く呪文を唱えた。

『『レジリメンス―開心せよ』!』

ハーマイオニーは数秒間、そのまま動かなかった。

マンダンガスもあれだけ逃げ出したがっていたにもかかわらず、床に縫い付けられたように微動だにしない。

その時間、わずか1分にも満たなかっただろう。

唐突に二人ともが息を吹き返したように揺れた。ハーマイオニーもマンダンガスも肩で息をしながら、互いににらみ合っている。だが、マンダンガスの方は悔しそうな色が強く出ているに対し、ハーマイオニーはどこか勝ち誇ったような微笑を浮かべていた。

「大丈夫、情報は手に入れたわ」

「くぬう……こ、これでいいんだろ!? 俺は明かしてないが、お前さんたちが勝

手に俺から情報を盗んで行ったんだ！　だから、俺をさっさと解放しやがれ!!」

マندانガスが呻きだした。

ハリーたちは彼を解放すると、3人だけで上の階に上がった。

『マフリアートー耳塞ぎ』

以前、ヒップグリフのバックビークが使っていた小部屋に入ると、ハーマイオニーが扉に向かって防音呪文を放った。

「シリウスには申し訳ないけど、これ以上、分霊箱に関する話を聞かれるわけにはいかないもの」

ハーマイオニーは自身に言い聞かせるように呟くと、本題を切り出した。

「ハッフルパフのカップがレストレンジ家の金庫にあるらしいの。セレネはマندانガスに盗み出してくるように頼んだんだけど、断られたみたい」

「ハッフルパフのカップ！」

ハリーとロンは顔を見合わせた。

ダンブルドアが予想していた分霊箱の1つだ。

「ホグワーツ入学前に、ハグリッドが教えてくれた。グリンゴッツは何かを安全に

しまっておくには1番安全な場所だって」

「ええ、その通りよ。しかも、ベラトリックス・レストレンジはヴォルデモートの腹心の部下。彼女になら大切な分霊箱を預ける可能性も高いし、レストレンジ家の金庫なら隠しておいても安全だわ。」

「よーし！ これで、分霊箱の在りが1つ分かった」

「セレネが分霊箱を破壊して回っているってこともね。これで、残すところ2つだ」

ヴォルデモートの創り出した分霊箱は6つ。

リドルの日記は破壊した。

ロケットと蛇はセレネが破壊した。

マールヴォロの指輪は先学期、ダンブルドアが破壊した物を持っていた。

「グリフィンドールかレイブンクローゆかりの品は分らないけど、ハッフルパフのカップはレストレンジ家の金庫にある」

「でも、どうやって金庫破りをするの？」

ハーマイオニーが不安そうに尋ねてきた。

グリンゴッツの金庫は、ゴブリンだけが開錠する方法を知っている。透明マントを使ってこっそり忍び込んだところで、金庫がどこにあるか探すこと自体が難しいし、そもそも開錠することもできない。グリンゴッツの大事な宝を隠してある最深部は、ドラゴンが守っているという噂もある。

「グリンゴッツのゴブリンに知り合いなんていないし、私たちはお尋ね者よ？ 正面から入れないわ。」

それに、セレネと違って、私たちには破壊する方法もない」

「セレネに守護霊を飛ばすことはできないかな？ ほら、あの話す守護霊。セレネに事情を話せば、壊して貰えるかもしれない」

「冗談だろ？」

ロンが口を挟んできた。

「スリザリン生だぜ？ そりゃ、幾度か共闘したけどさ、完全に信じられるかどうか」

「ロン、セレネもお尋ね者よ？ ハリーの隣に大きく出たでしょ？ 私たちと同じ境遇だし、絶対に味方だわ。……でも、連絡を取るのは難しいかもしれないわ。」

セレネが国外に逃げている可能性だってありえるもの」

「それはない」

ハリーは断言した。

「セレネは逃げないよ。分霊箱探しを途中で放り出して、逃げるような人じゃない」

「だけど、どこにいるか分からないわ」

「1つだけ分かる方法があるぜ」

ロンが言う。2人の眼がロンに向けられた。

「あいつがカップを手に入れるために、グリーンゴッツを破れば新聞の一面さ。それでどこにいるか分かる」

「ははは、ね」

ハーマイオニーが力なく笑った。

グリーンゴッツが破られた知らせは、まだ耳にしていない。ということは、セレネもまだ攻め込んでいないということだ。

「ロン、君のお兄さんがグリーンゴッツに勤めていたよね？」

「ビルか……うーん、助けてくれるかな？」

「新婚生活はあまり邪魔したくないわよね。結婚式を潰された後だし」

三人は額を合わせて考え込んだが、なかなか良い案は思いつかなかった。

※

一方、セレネも分霊箱探しに行き詰まりを感じていた。

あれから数か月経過したが、特に何も成果が上がらない。

グリーンゴツの金庫破りなどしたが最後、ヴォルデモートに発覚してしまう。か
といて、他の分霊箱の在りかは謎のままだ。

「この数か月で分かったことと言えば、蛇男の名前を出したが最後、人さらいが
やってくるってことくらい」

セレネは紅茶を一口飲むと、はあっと息を吐いた。

この情報は自分で手に入れたものではなく、グリーンデルバルドの配下となった死
喰い人がもたらした情報だった。他にも、ヴォルデモートがなぜか外国へ行ってい

るといふ情報も同じ出所からである。外国と言っても、義父を転院させたアジアではなく、ヨーロッパを回っているらしいので一安心だ。

「素朴な疑問だが、どうして『あの人』が外国へ行くんだ？」

セオドールが本を読みながら尋ねてくる。

彼にも分霊箱に関する情報を明かしたが、特にためになる話は出てこなかった。

「バカンスでないことは確かですね」

セレネはもう一口、紅茶を飲んだ。

「ハリーが、外国の杖職人グレゴロビッチについて話していました。もしかしたら、彼を探し求めているのかもしれませんが」

ハリーはヴォルデモートの考えていることを垣間見ることが出来る。

グレゴロビッチの名前も、そこで見たのだろう。そうでもないかと、魔法史はもちろん、杖職人自体に興味がない青年の口から、グレゴロビッチの名前が出てくるわけがない。

「きっと、杖に関する情報を得るためですけど……あのサイコパスが『最強の杖』なんて眉唾物を探し求めているとは思えません。ですが……」

8人のポッター作戦の後、ハリーが零していた言葉を思い出す。

「ハリーの杖が何故かサイコパスの杖を打ち負かしたらしいです。だから、ハリーの杖に対抗するため、最強の杖を探し求めているのかも」

「可能性としては考えられるな。ところで、だ」

セオドールは本を閉じ、セレネの前に広がるテーブルに目を向けた。テーブルの上には、ダンブルドアの杖が置かれていた。

「そっちの杖を託された意味は分かったのか？」

「全然」

セレネは空になったカップをテーブルに置くと、ため息をついた。

グリンデルバルドに相談してみたが、彼は詳細を述べず、目を輝かせながら「その杖は、特別な杖だ。私の方が使いこなせる。預かってもいいが？」と言われたので、丁重に断った。

ダンブルドアから「保管しておいてくれ」と託された品物を世紀の大悪党に譲渡するわけにはいかない。

「ただ、グリンデルバルドが見せた執着からして、噂の『ニワトコの杖』かもしれ

ません」

「御伽噺に出てくる最強の杖か？」

セオドールが訝し気に眉間に皺を寄せる。

「三兄弟の物語の？」

セレネは頷いた。

「死を滅ぼす杖。だからこそ、なおさら、私に託した理由が分かりません」

セレネの記憶が正しければ、ダンブルドアは「死を恐れてはいけない、避けようとしてはいけない」と口酸っぱく言われた気がする。おそらく、セレネが2年間も「」に浸り続け、直死の魔眼を開眼してしまったことをダンブルドアは気にかけていたのだろう。

故に、どうして「死を滅ぼす杖」を渡されたのか理解に苦しむ。

正直、今だって死が怖い。魔眼で視えてしまう世界も、現実に出て来るであろう死も背筋が震えるほど怖い。いずれ、あの「」に落ちる未来を避けられるなら避けたい気持ちは大いにあった。

「ダンブルドアは、私に何を言いたかったのでしょうか？」

「本当に生前、何も言われてないのか？」

「いくら考えても何も……はあ、ピースの見つからないパズルをしている気分。というか、独力なら杖の正体すら絶対に辿りつけませんでしたよ」

正直、グリンデルバルドがいなければ正解に辿りつくことはできなかっただろう。そう考えると、少し心がむかむかしてきた。

「だいたい、御伽噺の杖を実在すると信じ、受け入れる方が難しいです。

長靴をはいた猫やラプンツェルが実在するなんて考えられません。いや、グリム童話には、青髭みたいに実在の人物をモデルにした話はいくつかありますけど」

「あら、グリム童話？」

セレネが今は亡きダンブルドアに文句を言っていると、チャリティ・バーベッジ先生がクッキーの缶を持ってきた。

「私、グリム童話は好きよ。マグル文化の中に根付く魔法の痕跡はとても興味深いわ」

バーベッジ先生の眼が光った。

彼女はマグル学の教師だった。もちろん、過去形である。現在のマグル学の先生

は死喰い人のルックウッドが就任したらしい。ホグワーツのマグル学はマグル協調路線ではなく、死喰い人によるマグル蔑視な教育が行われていることは確実である。

なお、校長は死喰い人のスネイプ先生らしい。

だが、セレネからしてみれば、もうどうでも良いことだった。お尋ね者になってしまったので、ホグワーツ特急に乗ることもかなわず、中途退学という形になってしまっている。セオドルもセレネに付き合っただけでホグワーツ特急に乗らなかったため、同じく中途退学だ。申し訳なさでいっぱいになるので、普段はあまり考えないようにしている。

その他で唯一、ホグワーツに関する事で気になるのは、親衛隊の隊員たちのことだ。

願わくば、大っぴらにスネイプ政権に対する反対運動をしていないことを祈る。カロー姉妹達過激派が「ゴント先輩をお尋ね者にした死喰い人たち許すまじ！」と暴走しているかもしれないが、下手に反対運動をして処罰を受けて欲しくない。そのことに関して守護霊を送ろうと考えたが、万が一、見つかって騒ぎになっても悪いので我慢する。

セレネがそんなことを考えている間、バーベツジ先生は楽しそうにグリム童話について語っていた。

「シンデレラを変身させた魔女は実在したかもしれないし、長靴を履いた猫は『動物もどき』だったかもだし、ラプンツェルは髪を変身術で長くしていたのかもしれないわ。小人の靴屋がマグルに仕える屋敷しもべ妖精だったら面白いわよね」

バーベツジ先生は心から楽しそうに話している。セレネは目尻を緩めると、先生に微笑みかけた。

「先生は、本当にマグルが好きですね」

「当然よ。私にはマグルの血が流れているの。有名なマグルでね、たしか、チャールズ・バーベツジというんだけど……ご存じかしら？」

「解析機関のですか!？」

セレネは驚きのあまり、立ち上がりかけてしまった。確かに名前が似ていると思ったが、まさか血の繋がりはあるとは思ひもなかったのだ。

「コンピューターの父の？」

「有名なのか？」

「有名ですよ！」

セレネはセオドールに向き直ると、チャールズ・バベッジの凄さについて語った。「天才数学者です。高度な計算をするための演算装置を創ろうとした人ですね。実際、機械式演算機を創ったり、世界初のプリンターも創り出した人です。

この間、マグルの本屋で立ち読みした雑誌によると、地球人ではなく、宇宙人で新円卓の一員だったとか」

「……よく分からないが、最後の説だけは違うな」

「私の先祖は凄い人なのよ」

バーベッジ先生はどこまで理解できたのか分からないが、幸せそうに頬を緩めていた。

「それがきっかけで、私はマグルについて深く調べていたの。ホグワーツで教鞭をとれたのは、ここ7年だったけど幸せだったわ。マグル生まれの子ともたくさん知り合えたし……」

あ、でも、今も幸せよ。あの人の傍で働けるのだから」

「あー……そうですか」

セレネは目を逸らした。

バーベツジ先生はグリンデルバルドを白馬の王子様と勘違いしているのだ。もちろん、実名も知った上でこの様である。先生はグリンデルバルドの世話を甲斐甲斐しく焼き、家事も進んで行っている。相手が闇の魔法使いとはいえ、紳士的で顔立ちの良い男性に、命の危機を鮮やかな手口で助けられたら惚れてしまうかもしれないが、いささかメルヘンな思考だと思った。

もつとも、この部屋にはもう一人、メルヘン脳の人物がいる。

「……おい、なんか良くない想像をしただろ」

メルヘン脳の男が咎めるように言ってくる。意外と勘のいい人物だ。セレネは素知らぬ顔でダンブルドアの杖を鞆に戻すと、ルーンに関する本を呼び寄せる。

分霊箱探しが上手くない現状、セレネに出来ることは魔法の練習くらいだった。

グリンデルバルドに教えを請い「悪霊の火」など闇の魔術の手ほどきを受けたり、ルーン文字の研究に励んだり、賢者の石の研究を再開したりしている。

特に最近、セレネの興味を引いているのは、ルーン文字だった。

以前から使ってきた文字だが、調べれば調べるほど奥が深い。何より、杖なしで発動できるところが面白い。たまに、セオドールも一緒に学んでいるが、彼はルーン文字との相性が悪いらしく、セレネほどの効果を発揮しなかった。

「ああ、お戻りになったわ!!」

セレネが本を読んでいると、バーベッジ先生の声が浮足立った。

それだけで、誰が帰ってきたのか分かる。セレネは少し視線を上げ、その人物を見つめた。最初はパーシバル・グレイブスの恰好だったが、部屋に入るにつれて変身術が解け、いつものソファアに座る頃には、すっかりグリンデルバルドに戻っていた。

「フロイライン、暇そうだな」

「魔法の勉強中です」

セレネがツンツンと言いかえす。気が付くと、セオドールが隣に座っていた。最初の頃よりはグリンデルバルドに対する警戒心が薄まったが、まだまだ拒否感を抱いている。セレネとグリンデルバルドが同じ空間にいるとき、セオドールは必ず隣に陣どっていた。

「そうか。実は、面白い物を手に入れてきた」

グリンデルバルドは一通の封書を掲げてみせた。グリンデルバルドが杖を一振りすると、ふわりと封書が浮かび上がり、セレネの膝の上に落ちた。セレネは本を閉じると、封書を受け取った。セオドールも興味があるのか、覗き込んでくる。

「……招待状、ですか？」

「懇意の死喰い人が、運よく手に入れた招待状だ」

セレネが一見するだけでも、ただの招待状とは異なり、かなり古式なものだと推察できた。

水晶のような紙片に真紅の封蝋が押されている。この封蝋が薄気味悪く、車輪と眼球を連想させる印章だった。宛名も差出人の名前もない。

内側を開け、入っていた書状は思った通りの内容だった。つまり、「自分たちの宴に万障の巡り合わせで参加していただきたい」といった内容のことが、達筆な筆記体で書かれている。

そして、最後にはこんな署名が記されていた。

「『魔眼蒐集列車、支配人代行』……?」

あまりにも不吉な名称である。セレネが不快そうに呟くと、隣でセオドールが驚く気配が伝わってきた。

「知らないのか？ 魔法の列車だ！」

セレネが視線を向けると、彼はどこか弾んだ声で教えてくれた。もしかしたら、セレネの知らないことを知っていたことが嬉しいのかもしれない。

「母上から寝物語で聞いたことがある。北欧の霧の森を走る魔眼のオークション専用の列車だ。薔薇を司る吸血鬼が支配人で、夜な夜な自らの魔眼コレクションを自慢しているらしい」

「半分正解だ、少年」

グリンデルバルドが言う。少年、と呼ばれるのが不快なのか、セオドールは一変して不機嫌な表情に変わった。

「数年前にトラブルがあつたらしくてね。なんでも、日本人の魔女と使い魔が大暴れたとか……その結果、支配人は手を引き、支配人代行がオークションを続投している。いまは北欧だけでなく、欧州全体を走っているそうだ。

今回はイギリスで開催されることになったらしい」

「それで、そのチケットが手に入ったということですね」

セレネは書状を封書に戻すと、グリンデルバルドへ返した。

「私の魔眼をオークションに出せと？」

セレネは眉間に皺をよせ、全力で嫌だと訴える。直死の魔眼は大切な武器だ。もちろん、死の世界が見えてしまうのは嫌いだし、頭痛がする。不快この上ないが、それを差し引いても失いたくない魔眼である。

「だいたい、ダンブルドアが言っていました。この眼を潰したところで、視えてしまうものは視えてしまうと。」

つまり、この眼を摘出したところで、移植した相手に同じ効果が発揮されるとは限らないのでは？」

「ほう、ダンブルドアがそんなことを言ってたのか」

グリンデルバルドは口ひげを上げた。

セレネは小さく頷いた。

まだホグワーツに入学する前、自分が魔眼に怯えて両目を潰そうとしたとき、ダンブルドアが止めてくれたのである。両目を潰さないようにするための作り話なの

かもしれないが、今では本当の話なのではないかと思えていた。

「ダンブルドアの言う通りだろうな。脳髓まで摘出しなければ意味がない。いや、脳髓を移植したところで、直死の力が発揮できるか疑問だがね。

もつとも、それでも売りたいなら話は別だ。直死の魔眼ともなれば、値段は付けられない。恐ろしいほど高値で売れるだろう」

「だから、お断りします。私、絶対に売りませんから」

そもそも眼球を摘出するなんて、震えあがりそうになるほど恐ろしい。

下手にヴォルデモートとやり合うより、ずっと恐怖を覚えた。

「そもそも、オークションをやるほど人が集まるのですか?」

「集まるさ。魔眼は貴重だ」

グリンデルバルドは手を広げた。

「イギリスの魔法使いは価値に気付いていないが、魔法使い全般で見れば浄眼を持つていない者も多い」

「つまり、ランクの低い浄眼ですら欲しがるといえることですか」

セレネは腕を組んで招待状を見下した。

列車の旅は浪漫があるが、魔眼を摘出し、それを欲しがるなんて薄気味悪い集団のように思えた。ないものはない、あるもので努力することはできないのだろうかと考えてしまう。

もつとも、自分もない物ねだりをしていることがあるので、あまり一概に悪いとは言えない。

「この列車では移植まで完璧に行える。魔眼の移植は危険が伴うが、魔眼蒐集列車は違う。ここでは安全に完璧なる摘出と移植ができるのだ。だから、人が集まる」

「……では、貴方の未来視を売ると？」

セレネはグリンデルバルドをじっと見つめた。

彼の片目は未来が視える。それを若かりし頃は悪用して魔法界の平定を推し進めた。もしかしたら、彼が牢獄にいた最後の夏、セレネが面会に来ることも視ていたかもしれない。

「まさか。私は魔眼を売らない。これには、利用価値があるからな」

「では、何故？」

「気分転換さ。ここで考えあぐねても脳が茹で上がるばかりで、何も解決できない」

グリンデルバルドは少し楽しそうに言ってくる。まるで、ピクニックを計画する子どものように明るい口調だ。だからこそ、警戒心が強くなる。この男がタダで楽しい行事を提案して来るとは思えない。何か裏があつて、この封書を手に入れて来たに違いない。

「本当に、私の魔眼を売るつもりではないと？ 行ってから『実は売り飛ばすつもりでした』はなしですよ？」

「もちろんだ。魔眼のオークションとは実に興味深い。一度参加してみたかったものだ。」

君もどうかね、フロイライン？ 参加者1人につき、2人までなら同行できる」
「……いいんじゃないか？」

セレネは嗤然とした。その声は隣の青年から聞こえてきたのだ。

普段からグリンデルバルドに警戒心を抱く彼が、よもや賛成するとは思ひもしなかったのだ。セレネが意外そうに見上げていると、彼は心外そうに呟いた。

『『あの人』に関係しているとは思えないし、これを逃したら、もう二度と機会がないかもしれない。悔しいが、あいつの言う通り、家に閉じこもっているより生産

的だ。

それに、御伽噺に出てくる列車に乗れるんだ。ちょっとわくわくしないか？」

「それは、そうかもしれないませんが……」

「彼の言う通り、オークションを見ているだけでも勉強になるのではないかね？」

しかも、列車には売り手も乗ってる。もしかすると、他の魔眼の持ち主と知り合うことで、魔眼の新たな使い方が学べるかもしれない」

一理ある。

すべて正論だ。納得のいくもので、断る理由がなくなる。

それに、ヴォルデモートの配下が気になるなら、変身術で姿を変えればいい。髪の毛の色を変えるだけで、意外にも別人のように見えるのだ。さらに、フードか何かで顔を隠してしまえば、よもお尋ね者魔女とは思われまい。

ここ数週間、滅多に外に出かけることはない。いささか気分が晴れていないのは事実。丁度良い気分転換になるだろうし、魔眼の新たな運用方法についても学べるかもしれない。なにより、オークションはともかく、汽車の旅自体は魅力的である。

「……そうですね」

だが、なにかがおかしい。

喉の奥に魚の小骨が刺さっているかのような違和感を覚える。

なによりも、グリンデルバルドの優美な微笑が引つかかる。怪しい。とてつもなく怪しい。あの男が「気分転換に」なんて理由で、このような怪しい列車に乗せるか？ 常識的に考えれば否である。

分霊箱として、グリフィンドールカレイブンクローの魔眼でも出品されるなら話は変わって来るが、彼らが特別な魔眼持ちだったとは聞いたことがない。それに、さすがのヴォルデモートでも魔眼を分霊箱にはしないだろう。いや、蛇のように生き物を分霊箱にしていたから、ありえる、のか？

「行きたくないなら構わない。私一人で行く」

「いえ、あなた一人では行かせられません」

セレネは反射的に答えていた。

いかにも胡散臭いグリンデルバルド一人で怪しげな列車に乗せる？ そのようなこと、見逃すわけにはいかない。絶対、列車内で怪しげな取引をしてくるに決まっている。ただでさえ、彼の手綱を握れているのか不安になるときがあるのだ。

これ以上、妙な真似をさせるわけにはいかない。

「フロイライン、つまり同行するのだな？」

「もちろんです」

「オレも行くぞ。お前が妙なことに巻き込まれないか、見張らないといけないからな」

「……まあ、そうなるでしょうね」

セレネは疲れたように肩を落とした。

セオドールが、セレネとグリンデルバルドの二人旅を許すはずがない。

「まあ、とても楽しそうなこと」

バーベツジ先生は、ころころと鈴の鳴るような声で笑っていた。

それから三日後。

いつもより霧が濃い夜、セレネたち三人はロンドン郊外の古い駅を訪れていた。駅と言っても、とくに放棄されている。当然、構内も閉鎖されており、人っ子

一人いない。ペンキが剥げ、十数年前に流行った化粧品の色褪せたポスターが物悲しく風に揺れている。もちろん、入り口も閉ざされていたが、グリンデルバルドは特に気にする様子もなく、柵を乗り越え、中へと踏み込んでいく。

「ところで」

セレネも柵を乗り越えながら、グリンデルバルドを見上げた。

「何故、眼鏡を？」

グリンデルバルドはパーシバル・グレイブスの恰好をしていたが、不思議なことに眼鏡をかけていた。彼は「よくぞ聞いてくれた」と言わんばかりに微笑むと、眼鏡のつるを持ち上げた。

「魔眼殺しだ。魔眼の中には、一方的に契約を結んでくるものもある。それ避けだ。用心に越したことはない」

「それなら、彼にもつけさせるべきでは？」

セレネは後ろから柵を乗り越えてくる青年を指さした。

自分は既に魔眼殺しをかけているから良いとして、何の対策もしていない一般人が後ろにいるのだ。いまの話は聞き流せない。

「彼は大丈夫だろ。いいかね、フロイライン。この三人組の中で、誰が代表に見える？」

「……悔しいけど、貴方ですね」

実質的には、セレネがリーダーだが、外面だけ見ると立派な成人男性であるグリンデルバルドが代表だ。実際、彼の同伴者として自分たちは連れてこられている。「このような場合、使い捨てにできる従者よりも、代表を狙うのが常だ。だから問題ない」

「そうですか」

「もっとも、魔眼殺しが1人分しか用意できなかったということもあるがね」
グリンデルバルドはそう言いながら、駅構内へと進んで行く。

不思議なことに、廃棄された駅にもかかわらずガス灯がひとつ、ふたつと光を投げかけている。おぼろげな光を覆うように霧が立ち込め、石造りのアーチが並ぶ中、薄い霧の奥に大小の人影が佇んでいた。その風情自体が、まるで百年も昔の光景のようであり、絵画の世界に迷い込んだようだった。

薄暗いホームにはセレネたちを除けば、あの2人しかない。

死喰い人かもしれない、とセレネは警戒した。グリンデルバルドの死喰い人情報では、死喰い人は魔眼蒐集列車に一切関わりを持たない、とのことだったが、本当かどうか分からない。

一応、セレネは変身術で髪を明るい茶色に染めていた。背中まで伸びていた髪も肩辺りで切った。それでも、ばれたら面倒なのでフードを目深にかぶっている。ポリジューズ薬で変身した方が楽だったかもしれないが、何日分も同じ人の髪を用意できるはずもない。

バーベツジ先生に頼めば、三日分の髪の毛くらい提供してくれたかもしれないが、悲しいことに、先生も死喰い人から追われる身だった。

「あら、貴方たちも列車待ちですこと？」

霧の向こうから、凜とした声が聞こえてきた。

つかつかと小さな影と大きな影が近づいてくる。現れたのは、10歳前後の少女と2メートル近くある大男だった。一瞬、森番のハグリッドを連想したが、あそこまで毛むくじゃらではない。モヒカンとサングラスが印象的で、マフィア映画にでも出てきそうな男だ。

けれど、この男が主人ではない。間違いなく従者だ。

一目でそう判断できるほど、10歳前後の少女は優美さと威厳を感じさせた。目の覚めるような青いドレスはサファイアを思わせ、同じ色のリボンで金髪の縦ロールをまとめている。なによりも、同性の自分でさえ眼を惹く美貌。

たった10歳程度にもかかわらず、少女の在り方は鮮烈だった。

「駅にいるのだから、列車待ちというのは当然だろう」

グリンデルバルドは平然と余裕を持った態度で、彼女の問いにに答えた。

「同じ列車だとお見受けするが」

「わざわざこのような貧しい田舎駅まで足を運んでいるのですから、当然、同じ列車でしょう」

後ろの大男ではなく、少女が華やかな声で受け答えをしている。少女の手には、グリンデルバルドの持っているのと同じ招待状が握られていた。

「私はパーシバル・グレイブス。アメリカ出身です。以後お見知りおきを、レディ」
グリンデルバルドは胸に右手を当てると、静かに偽の名前を口にした。

「あら、アメリカの方ですね。アメリカ人は少々雑な方が多いと聞いていました

が、噂とは違い、随分と紳士的ですこと」

「それは光栄」

たがいに微笑を交わし合っていた。

否、そのように見えるだけだ。実際は、罅迫り合いのような張り詰めた雰囲気を漂わせている。お互いに格を見定め合っているような緊張感だ。

「自己紹介が遅れました」

少女は軽く咳ばらいをすると、上品な狩人のような面持ちでグリンデルバルドを見つめた。

「私はエーデルフェルト家次期当主、ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルト。フィ
ンランド出身ですわ」

○魔眼について

言及するのは、53話以来。

浄眼の説明をするうえで、原作や映画で色々な人物の瞳の色を確認してみたところ、本当に純血魔法使いに青い瞳が多くてびっくり。

それとも、単にイギリス人に青眼が多いだけ？

○魔眼蒐集列車

2018年秋、本作の執筆再開にあたって、新たに構築し直したプロットに組み入れたストーリー。

ロード・エルメロイ二世の事件簿の文庫化、FGOコラボイベント、おめでとうございます。

でも、イベントの周回が辛い。林檎エ……

○ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルト

北欧における純血一族の跡継ぎ。97年なので、年齢は10歳前後。

このタイミングで登場させれば、触媒的な何かが働いて、我がカルデアにルヴィアやライネスが召喚できると思い、投稿時にガチャを回したが、聖晶石が爆死した

だけだった。

彼女の登場は、例えるなら映画版や外伝にのみ登場するゲストキャラ。

物語本筋に絡んでこないし、暗躍もしてないし、純粋なオークションの買い手。投稿が反映されたら、また懲りずにガチャを回す予定。

令和最初の更新、いかがでしたでしょうか。

令和の目標は、誤字を限りなく減らすことです。

次回以降も楽しみながら書きたいと思います。今後もしろしくお願いします。

87話 魔眼蒐集列車【前編】

「ほう」

ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトは優雅に名前を告げると、グリンデルバルドは片眉を上げた。セオドルを横目で確認すると、彼も少し驚いたように目を見開いていた。

「あれが、あのエーデルフェルト家の次期当主か」

彼はよほど驚いたのか、小さな声で感想を漏らしている。セレネは「誰それ」と言いたげに彼の横腹を小突くと、ルヴィアゼリッタに聞こえない程度の声で囁き返してくれた。

「北欧の有名な純血一族だよ。世界中の争いごとに好き好んで介入して、魔法の神秘や技術を掠め取る。だから、地上で最も優美なハイエナって呼ばれている一族だ」
「あら、ハイエナとは失礼ですこと」

ルヴィアゼリッタに話し声が聞こえていたらしい。こちらに、ちらっとだけ視線を向けてくる。

「私、ハイエナより狩人の方が好みの響きですの。フランス語のル・シャスールでもよいですわね」

どこか高慢な台詞だったが、まるでかんに障らない。これがドラコ・マルフォイあたりが言っていたら、苛立ちを感じるかもしれないが、むしろ当然と頷いてしまうほどの威厳が少女に宿っている。

彼女の言葉には、純血の貴族にふさわしい威厳が伴っていた。

セレネとセオドールが口を閉ざすと、グリンデルバルドがゆっくり話し始めた。「だが、見たところ魔眼は必要ないと見受けられるが……いや、貴重な魔眼を狩りに来たのかな？」

グリンデルバルドが目を光らせながら尋ねると、少女は口元を優美に綻ばせた。「ご想像にお任せしますわ。ですが、そうですね。実は、当代から『狩人としての目を養ってこい』と言われておりますの」

つまるところ、次期当主にふさわしいことを示すために、上物の魔眼を狩りに来たということなのだろう。後ろの大きな従者はお目付け役であり、当代に彼女の立ち振る舞いを報告するための監視役でもあるわけだ。

年齢で判断してはいけませんが「はじめてのお使い」に近いのかもしれない。

無論、お使いにしては買物物が少々高過ぎるが、あながち的外れではないのだろう。よくよく耳を傾けていれば、貴族らしい口調の端々に緊張の色が混ざっているのが聞き取れた。本当に小匙一杯にも満たないほどだが、声色が固い。

「グレイブスさん。それは魔眼殺しとお見受けしましたが、もしかして売り手ですの？ それとも、そちらのお弟子さんの方かしら？」

「それはご想像にお任せする。さて、レディ。そろそろ列車が到着するようだ。準備した方がよいのではないかね？」

グリンデルバルドの言葉と共に、霧が一段階濃くなった。

絹のように白い霧が駅を包み込むように広がり、遠くから汽笛の音が響いてくる。否、ただの汽笛ではない。まるで歌劇のコーラスのように骨まで深く振動させるような音だ。

やがて、光が霧を割った。

黒々とした車輪が先頭に現れ、その後からもくもくと黒い煙を吐き出す機関部が続き、ついに汽車の全貌が現れた。瞬間、ホグワーツ特急を幻視する。車体の色こ

それビーを思わす紅色ではないが、ホグワーツ特急と同じかそれ以上に積み重なった歴史が重厚感と共に滲み出ている。あれはホグワーツ特急同様、時代錯誤で荒唐無稽な保存鉄道。だが、あの列車同様、今も生きていることを肌で感じた。

ただ博物館に展示された古びた汽車でなく、ボランティア団体が維持し続ける記念列車とも異なり、今も現在もなお現役で働き続けている。

「これが、魔眼蒐集列車」

セレネは汽車を見上げ、気が付くとその名を呟いていた。

徐々に速度を緩め、汽笛を鳴らしながらゆっくりと車輪が止まり、一人でに洒落た細工の施された扉が開いた。その扉のひとつにも、汽車の主人の美意識が徹底されているのだろうか。扉が開く様子は、まるで並んだ騎士が一礼するかのようだった。

「さて、乗車するのでしょうか」

グリンデルバルドは動じることなく足を踏み出し、セレネとセオドルが後に続いた。ちらっと横目で後ろを確認すると、ルヴィアゼリッタと従者も躊躇いなく乗り込んでくるのが見える。

「あ……」

ふと、異国の匂いがした。

イギリスに似つかわしくない香辛料の匂いが車内一杯に広がっている。車両の中央には大きなテーブルが置かれ、大きな男の人がスパイスの香りが強いカレーを味わっていた。

「あら」

男の人が振り返る。

白髪の間刈りで、同じ色をしたカイゼル髭を生やしている。顔立ちは細身で肌の色も透き通るくらい白いのに、身体つきはがっちりとした筋肉質だ。B級映画でルヴィアゼリッタのモヒカン従者と怪しげな取引をしたり、埠頭で銃撃戦をしそうな男だと思った。

「新しい乗客さん？」

男は立ち上がると、こちらに数歩、近づいてきた。

セレネはさりげなく、グリンデルバルドの背に身体を隠す。目の前の男が死喰い人かそれに類する人間かもしれない。こうした見極めは、歴戦の魔法使いに任せる

のが一番だ。セレネはグリンデルバルドの目利きを信じながら、彼の言葉を待った。
「ふむ……君は列車のスタッフではないな。いや、スタッフどころか……吸血鬼、か？」

グリンデルバルドは訝し気に尋ねると、男は驚いたように目を見開きながら頷いた。

「まあ！ 初見で見破られたのは、久方ぶりよ。どうして分かったのかしら？ 白い肌？」

「異常なまでに白い肌もそうだが、君が口を開けたときに牙が見えた。八重歯にしては大きい牙がね。それに、歩き方が人間の物と微かに異なる」

「凄いわね！ 私、歩き方は気にしたことがなかったわ！ ご察しの通り、私は吸血鬼。血は吸わないけどね」

吸血鬼だと見破られた男に戸惑いの色はなかった。むしろ、見破られたことに歓喜しているような態度で接してくる。しかも、口調が女言葉ときた。初見でもキラが濃い気がしたが、さらに濃さが増していく。ホグワーツにも濃い人物はいたが、彼？ 彼女？ に匹敵する人物はそうそういない。

「あたしのことはカリールとお呼びくださいな、ミスター」

「カリール……？」

セレネは頭を抱える。

カレーを食べているからカリールとは、安易すぎる偽名だ。せめて、同じ食べ物でもペペロンチーノとかでも良い気がする。そもそも、カレーを食べる吸血鬼なんて、どこかの雑誌に書いてあった与太話のようだ。

セレネが何とも言えない顔をしている一方、さすがはグリンデルバルドだ。欧州を恐怖の渦に落とした闇の魔法使いは、全く動じず、微笑を絶やすことなくカリールと向き合っている。

「それで、そちらは？」

グリンデルバルドはカリールの向こう側に座った男性に目を向ける。眼帯が特徴的な男性は、慣れ合うつもりはないのだろう。名を尋ねられても答えることなく、ザ・クイブラー誌に目を落としている。クイブラーの表紙には『例のあの人から身を護る10の方法』と一緒に、ヴォルデモートと思われる下手な似顔絵が書かれてあった。

「ああ、彼ね。彼は名前を名乗らないの。でも、苗字は教えてくれたわ。あのレーマン一族の当主ですって！ ほら、あの魔眼の大家。この列車の常連客らしいわ」

眼帯の男性の代わりに、カリィが快く教えてくれた。眼帯の男性、レーマン氏は否定もせず肯定もしない。ただ何も言わずにクイブラーを読み続けている。

「それで、ミスター。あなたの名前は？」

「グレイブスだ。この二人は私の弟子。奥にいるのは——……」

「ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトですわ」

ルヴィアゼリッタは吸血鬼を不愉快そうに一瞥した。貴族としては、吸血鬼が汚らわしく思えるのかもしれない。男性なのに女性のように振る舞っては、なおのことだ。

「ご歓談中、失礼いたします」

ふと、カリィの後ろから声が聞こえた。

視線を向けると、どこか痩せぎすの車掌が佇んでいる。彼の言葉を皮切りに、自分たちの後ろで扉が閉まった。汽笛と共に、蒸気機関がけたたましく鳴り響く。

最初はゆっくりと、徐々に勢いを増しながら列車は走り出した。

「当車の車掌、ロダンでございます。当車は三泊四日で霧の国を一周し、ロンドンに戻って来る予定です。」

その間、皆様にはごゆっくり魔眼のコレクションをご覧いただき、三日目の夜にお待ちかねのオークションを行います。落札された魔眼はすぐに移植されても、お手元で保管いただいてもかまいません。

移植にはたいして時間は頂きませんので、ご安心ください。また、逆に魔眼を出品される方は、明後日、つまり三日目の昼過ぎまでに私どもの元までおいでください。夕刻には摘出させていただきます。声をかけていただくのだけは、私、ロダンでもかまいませんし——……」

「あたし、オークションナーをつとめさせていただく、レアンドラでもかまいませんのよ」

隣に現れた毛皮のコートを着た女が一礼した。

毛皮のコートもインパクトがあるが、それ以上に眼を皮で覆っているのが気になる。視界はゼロのはずなのに、動作に不自由は見いだせなかった。

「今から皆さまを客室に案内したく思います。どうぞ、こちらへ」

ロダンと名乗った車掌が、こちらに会釈をしてきた。

客室は思ったより広々としていた。

少なくとも、ホグワーツ特急のコンパートメントとは比べ物にならないくらい広い。もっとも、あちらは半日の旅用で、こちらは三泊四日の旅用といえ、広さに違いが出るのは当然かもしれない。

しかも、贅沢なことに1つの車両につき3つしか客室をつくらないときた。もちろん、車両自体の横幅に限度はあるものの、縦幅は可能な限り広く、シンブルな調度品の配置も狭苦しさを感じさせなかった。セレネ、セオドル、そしてグリーンデルバルドと3人分のベッドが詰めているのに、ちょっとした決闘ができそうなくらいのスペースがあった。

「おそらく、これで乗客は全員だ」

グリーンデルバルドはグレイブスの恰好のまま、高級そうなソファアに座った。

「死喰い人らしき人物も繋がっていそうな者もない」

「この人数でオークションをやると？」

セレネは反対側にゆっくり腰を下ろしながら尋ねてみる。

北欧の魔女 ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトとその従者。

血を吸わない吸血鬼 カリー。

そして、魔眼の大家なるレーマン氏。

物見遊山な自分たちを含めないと、参加者はわずか4人しかない。オークションの開催自体が危ぶまれるのではないかと疑問を抱いていると、グリンデルバルドはやれやれと首を横に振った。

「君は占い学を受講していないのかな？」

「……数占いでしたら学びました」

「NEWT試験レベルになるが、占い学で遠見の魔法を学ぶことが出来る。使い魔の目で見たことを水晶玉に投影する魔法だ。誰でもできるわけではなく、ある種の適性が必要になって来るが……魔眼オークションに来るような連中は身に付けている。」

三日目の夜、フクロウやカラスの使い魔を放ち、自らは遠くから悠々と参加する

のだろう。注意すべきは、そこくらいだ」

もっとも、死喰い人が魔眼を欲しがるとは思えない、とグリンデルバルドは言葉を続けた。

セレネも同感だった。死喰い人やヴォルデモートが魔眼を欲しがっているなんて話を聞いたことがない。例外として、セレネの魔眼を摘出するつもりらしい話には耳にしたことがあるが、わざわざオークションに参加するほど魔眼に飢えているわけではないだろう。

「……」

窓の外を見つめる。

ミルクよりも濃い霧に満たされ、何も見えない。時折、街の灯りかと思われる光が遠く滲み、現れては流され、消えていく。ホグワーツ特急よりも振動が少なく、蒸気機関のたくましい音が心地よく響いていた。

あまりにもホグワーツ特急と比較しすぎたせいだろう。

ホグワーツのことを思い出した。ダフネやアステリアとの約束を守れずじまいになった申し訳なさ、カロー姉妹を筆頭に親衛隊が過激に行動していないかという不

安感が渦巻いてくる。それから、マグル生まれのジャスティンは、無事に逃げられただろうか。彼のことだから、親に頼んで海外へ高飛びできそうなものだが、実際のところ、どうしているのかは定かではない。

そして、ハリー・ポッター。

ハリーは自分と同じく「お尋ね者」なので、ホグワーツに行っているわけがない。きっと、マグル生まれのハーマイオニーと一緒に隠れているのだろう。

もしかしたら、分霊箱の在りかを探し求めながら、旅をしているかもしれない。

「遠見の魔法、といえば」

セレネはぼつり、と呟いた。

「ハリーはどうして、蛇男の考えが読めるのでしょうか」

ハリーは蛇男の考えに潜入し、「蛇男がグレゴロビッチを探している」という情報盗み取っていた。

それ以前にも、ヴォルデモートの現在の様子を盗み見たり、逆にそれを利用されて欺瞞映像を見せられたりしていた。

グリンデルバルドは水晶玉を通して、使い魔の視ている光景を見ることは可能だ

と述べていた。

だが、ハリーは水晶玉を通さずに見ている。それどころか、ヴォルデモートはハリーの使い魔ではない。無論、逆も同じである。

「なぜか蛇語も使えますし……呪いの傷による後遺症なのでしょうか。ヴォル……蛇男と互いに使い魔の契約を結んだようになってしまったとか？」

「アバダケダブラを受けて、生還した者は彼しかない」

セレネの問いに、グリンデルバルドは静かに答えた。

「前例がないので確証はない。だが……1つだけ、思い当たる節はある。推測に過ぎないが」

「かまいません」

「……そもそも、ハリー・ポッターは何故、死の呪いを受けて生きていたのか」
グリンデルバルドは杖を振るうと、ファイアーウィスキーのボトルとグラスを取り出した。二人分のグラスしか取り出さなかったのは、セレネが酒を嗜まないことを知っていたのだろう。グリンデルバルドはもう一つのグラスをセオドルに向けて、彼は首を横に振った。

「それは、母親の愛の魔法、だったかと」

セレネが答える。

4年生の時、復活したヴォルデモートが解説していた。ハリーの母親が残した「愛の魔法」が盾になり、ハリーを救ったのだとか。

「そうだ、愛の魔法……古の守護魔法だ。失われつつある魔法であり、相当の力量の魔法使いでないと使うことができない。しかも、リドルに襲われるという非現実的かつ一刻を争う状況下で使うとなると、ほとんど不可能だろう。それだけ、リリー・ポッターの素質が高く、ハリー・ポッターは運が良かった」

「つまり、その常識的に考えて不可能な呪文の副作用？」

セレネは口にしてから、自分の考えの甘さに気付いた。

愛の守護魔法の副作用が、敵の脳内を視るなんてありえない。

「フロイライン、リドルは復活の時、何を取り込んだ？」

「父親の骨、しもべの肉、そして、敵であるハリーの血です」

「そうだ。そこがポイントだ」

グリンデルバルドは片方のグラスをファイアウイスキーで、もう片方のグラスを

水で満たした。列車のかすかな振動に合わせるように、琥珀色の波紋が浮かんでハラスの淵にぶつかって消えていた。

「あいつはハリーの血を取り込んだ。ハリー・ポッターの体内に宿る母親の守護の血を——……」

数滴分のウィスキーが空に浮かび上がる。そして、そのままシャボンのように宙を漂いながら、水で満たされたグラスの真上で静止した。

「このように取り入れた」

グリンデルバルドの言葉と共に、ウィスキーの滴はとぷんと水の中に落ちた。水の上に波紋を創ると、ゆっくりと水中に琥珀色の煙のようにウィスキーが広がっていく。そして、元からあった水に溶け込むように消えていく。一見するとただの水だが、これでウィスキーの成分を含んだ水になった。

「分かったぞ！」

セオドールが指を鳴らした。

「その水みたいに、『あの人』の中にはポッターの血……つまり、ポッターにかけられていた守護の呪文が流れているんだ！ そのつながりで、ポッターは『あ

人』の考えが読めるってことだろ」

「それ、違いますよ」

しかし、セレネは口元に指を添えながら、セオドールの考えを否定した。

「たぶん、繋がりを深めただけです。ハリーはその前から蛇男と繋がっています。ほら、2年生の時には既に蛇語を使っていたではありませんか？」

「それはポッターが蛇語を使える家系……いや、それはないな。スリザリンの血筋でもなければ、蛇語は使えない」

セオドールはセレネの隣に深く座り込むと、考え込むように腕を組んだ。

「ポッター家がスリザリンの血を引いているわけがない」

「スリザリンの血縁者でないなら、やはり、ハリーはサイコパスとの繋がりで蛇語を使えるのだと思います。つまりは、復活する前から……あいつとハリーは繋がっていた？」

「いい線だ、フロイライン」

グリンデルバルドはグラスを煽った。いつの間にか入っていた氷が、からからと涼やかな音を立てる。

「あくまで推測に過ぎない。話半分に聞くといい。

リドルはポッターにアバダケダブラを撃った。しかし、それは愛の守護魔法によって防がれた。だが、防がれただけでは、リドルは敗北しない。呪いは守護魔法に当たり、跳ね返ったのだ」

「アバダケダブラが術者に跳ね返ったから、術者である蛇男は塵以下の存在になった？」

「そこが肝だ」

グリンドバルドはグラスを置いた。ウィスキーは半分ほど残っていた。

「通常、アバダケダブラを受けた人間は間違いなく死ぬ。ところが、奴には分霊箱がある。塵以下の存在になったが、分霊箱の効果で生き残ることができた。

ただ、考えてみて欲しい。奴の魂がどんな状態なのか」

セレネが知っている時点で、ヴォルデモートは自分の魂を5回分けている。5分割ではない。5回だ。すなわち、5回分けた時点でヴォルデモートの魂は本来の0・03125。3／100しかない。もし、魔法数字で最も強い数、7回も分けるなんて愚かな行為に出していたら、もう目も当てられない。

ヴォルデモート自身に宿る本来の魂はボロボロだ。

「いいかね、アバダケダブラは禁じられた魔法だ。なにしろ、自然の摂理に逆らい、一撃で相手を殺すのだ。剣で心臓を一刺しするより呆気なく殺すことができる。さて、そのような呪文がボロボロの魂に跳ね返って来たら、本当に魂が塵になってもおかしくない。塵となり空中に飛散し、バラバラになる。一番大きな塵にのみ意志が残り、あとは静かに消えていく……だが、もし……」

グリンデルバルドは杖でグラスの淵をとんと叩いた。すると、みるみる間にウィスキーは蒸発し、空気中にアルコールの香りが漂い始める。

「気体と化したアルコールが他者の体内に吸収されて行くように、塵の一部が生き残った魂に付着したら？」

「それって！」

セレネは愕然とした。

物質、生き物に魂を宿す。それは、紛れもなく——……

「ハリーが、分霊箱？」

「あくまで推測だ。確証はないが、これで蛇語などリドルが使っていた才能の一部

が使える、元の魂であるリドルの考えが読めることへの説明がつく」

「バカバカしい」

セオドルが一蹴した。

「ポッターを殺さない限り、『あの人』は殺せないってことじゃないか。ダンブルドアはそれを見逃していたってことか？」

「少年よ、君はアルバス・ダンブルドアを分かっている」

グリンドルバルドは愉快そうに口元を歪めた。それが、セオドルには不愉快なのだろう。少し噛みつくような口調で話し始める。

「ダンブルドアはポッターがお気に入りだった。そのことは、ホグワーツの誰もが知っている。そのダンブルドアが分霊箱の入学を許可するか？ もし、分霊箱と

分かっているながら入学を許可し、育て上げてきたなら、それは、まるで……」

「屠殺されるべき豚を育てているようなものですよ」

「そうだな。だが、あいつはそう言う男なのだ」

グリンドルバルドはかつての親友を嘲笑うように口端を上げたまま、長い足を組み直した。

リータ・スキーターの遺作「ダンブルドアの白い人生と真っ赤な嘘」。

そこには、グリーンデルバルドとの関係も記載されていた。グリーンデルバルドが退学し、ゴドリックの谷に引越してきてからは、何をするにも一緒に行動していた。それは、ホグワーツと一緒に学んだ親友よりも親友に近く、同志であり、好敵手であり、兄弟以上に親密だった。

もちろん、それはダンブルドアの主観だ。しかも、ゴシップ大好きリータ・スキーターの色眼鏡を通したものである。

グリーンデルバルド自身がダンブルドアのことをどのようなように想っていたのかは定かではない。セレネが彼を利用しているように、彼がダンブルドアの心の隙について利用していたのかもしれないし、彼も同じ思いを抱いていたのかもしれない。

あえてそのことを尋ねてみたいとは思わないが、一つだけ確かなことがある。

「あなたは、実の兄弟以上にダンブルドアのことを知っているのかもしれないね」
グリーンデルバルドはセレネの問いに答えなかった。

グラスの奥にわずかに残ったファイアーウィスキーを揺らしながら、ただ優美に微笑んでいるだけだった。

次の日。

朝食をとるため、部屋を出る。

窓の外は代わり映えのしない霧で覆われていた。もしかしたら、汽車の蒸気が魔霧に変身させ、マグルたちの眼を誤魔化しているのかもしれない。

ロビーを通り過ぎ、食堂車に近づくと、トーストの良い香りが鼻孔をくすぐった。「グレイブスのお弟子ちゃん！ やっと来たわね」

食堂車の扉を開けると、カレーが駆け寄ってきた。こうして近くで見ると、服の上からでも健康的な肉付きの良さを感じさせる。吸血鬼と聞かなければ、プロレスラーかラグビー選手を連想していただろう。

「せっかくの食事時だから、女子会しようと思うのよ！ こちらにいらっしやい」
「えっと……」

「いいからいらっしやいな！ お借りするわよ、ミスター」

セレネの許可はもちろん、グレイブスの許可もとらずに、カリィはセレネの手を引きずって自分の席へと連行する。

そもそも、女子会をやるだけの人数が集まるのか微妙だ。

セレネは間違いなく女性だが、目の前の主催者はどう考えても男性である。もつとも、心の性別と肉体の性別が違うのはありえることなので、女子会には変わらないかもしれないが……

「さあさあ、これでみんな揃ったわ」

カリィに案内された席には、すでにルヴィアゼリッタが上品そうに腰を下ろしていた。厳ついモヒカン従者がいないところを見ると、カリィに「女子会に相応しくないから」とつまみ出されたのかもしれない。

だが、意外である。彼女のような純血貴族が吸血鬼主催の女子会に参加するとは到底思えなかった。列車でカリィを見たときの態度を思い返すと、なおのことである。

セレネが疑問に思っていると、ルヴィアゼリッタは疑問を見透かしたように答え

てくれた。

「食事会に誘われたのに断るなんて、淑女の行為ではなくってよ」

彼女は優雅に紅茶を飲み始める。その姿だけでも、絵画になりそうだった。ところが……

「あれは……？」

彼女の真横、すなわち、食堂車の中央に物騒な代物が鎮座していなければの話だ。透明な筒があり、その内側で溶液に浸された一对の眼球が浮いていたのだ。

「こちらがノウブルカラーの『静止の魔眼』でございます」

オークションナーの女性が筒の傍で説明し始めた。

「石化の魔眼の亜種にして、視界に入った対象の動きを静止させる魔眼でございます。状態も良く、質も上々でございます。詳細な情報や落札予想価格につきましては、お手元のカタログをご覧くださいませ」

セレネはテーブルを見下した。

焼き立てのトーストやジャムといった一般的な朝食と一緒に、硬質の冊子が載せられていた。つまり、ただの食事ではなく、本番の下見も兼ねているのだろう。た

だまあ、眼球を見ながらの食事というのは、いささか気分が悪い。セレネはできるだけ見ないようにしながら、トーストを手にとった。

「今回のオークションで出品される魔眼から本日は2点、明日も2点から4点ほどお披露目する予定となっております。」

続きましては、こちら。『掠取の魔眼』でございます」

新たな魔眼の登場に、少し周囲の空気がどよめいた。

セレネは気味悪い魔眼を見る気になれなかったので、説明を聞き流しながら食事に専念する。

「名の通り、視界に入った物の生命力を直接奪う魔眼です。クラスとしては『黄金』に位置します。いささか古い物ですが保存状態は申し分ありません。ですが、魔眼の性質上、宿主に牙をむく可能性があります。過去の移植者が瀕死に至り、当スタッフの手で摘出されておりますので、入札される方は契約書の責任制限条項を確認くださいませ」

オークションナーが説明を続ける声が通り過ぎていく。

「残り出品される4つの魔眼は、明日の朝食でお披露目させていただきます」

「……さすがは、魔眼蒐集列車なこと」

ルヴィアゼリッタが呟いた。狩人らしく、黄色の瞳が興味深そうに爛々と輝いている。

「黄金ランクの魔眼は珍しいのよ。なにしろ、先程のノウブルカラーよりもさらに上位のランクなもの」

カリィが解説してくれた。

「一つ間違えれば、時計塔の奥底でずっと保管されるレベルの魔眼よ」

「そうですか」

「ところで、よろしいかしら？」

ルヴィアゼリッタは唐突に声を上げると、オークショナーを挑戦的に一睨みする。

「虹の魔眼が出ると風の便りで聞きましたが？」

オークショナーは何も答えない。ルヴィアゼリッタはもう一度、同じ言葉を繰り返した。

訂正、さらに一文、言葉を追加させて繰り返した。

「伝説の『虹の魔眼』が出るとお聞きしましたの。なんでも、イギリスに現れた『直

死の魔眼』が出品されるとか」

最後の言葉を聞いた瞬間、セレネは背筋が凍る思いがした。

イギリスに現れた直死の魔眼。どう考えても自分しかありえない。こんな恐ろしい魔眼、自分以外にぼんぼん現れていたら、世界のパワーバランスが簡単に崩れてしまう。

「本日、この場ではお答えしかねます」

オークショナーは口にした。

ない、とは言わなかった。あくまで「本日この場では」だ。周囲の魔法使いたちは全員、一様にして硬直していた。否、全員ではない。グリンデルバルドとカリ―を除く全員だ。グリンデルバルドは素知らぬ顔でトーストにジャムを塗り、カリ―は紅茶に何かスパイスのようなものを振りかけている。

「そう……それなら、よくつてよ」

ルヴィアゼリッタはそれだけ言うのと、用件は済んだのだろう。バターを塗ったトーストを小さな口で食べ始める。

「エーデルフェルトさんは、直死の魔眼が欲しいのですか？」

セレネが下手に出て尋ねると、彼女は当然と胸を張った。

「一睨みで死を確定させる魔眼ですことよ。ぜひとも、我がコレクションの末端に加えたい宝ですわ」

「一睨みで死を確定、ですか」

セレネは力なく笑った。

確かに死を視ることができるが、視るだけだ。視た対象をアバダケダブラするわけではない。そこが伝説のパロールの魔眼と違う。

……なんて、解説をしようものなら、自身が直死の魔眼を持っていると露見しかない。ここはあくまで、無知の振りを通した。

「本当にありえるのでしょうか」

「お弟子ちゃんの言う通り。直死の魔眼は、伝説の魔眼よ。私も噂は聞いたことがあるけれど、実存が疑われる眉唾物なもの。真祖だって見たことがないんじゃないかしら？」

カリィはスパイス入りの紅茶を飲みながら言った。

「そういう吸血鬼は、どのような魔眼を欲していまして？」

ルヴィアゼリツタは優雅に細い腕を組んだ。

「吸血鬼らしく、魅了の魔眼かしら？」

「うーん、そうね。教えてあげてもいいわ」

カリーは紅茶のカップをことんと置いた。両肘をテーブルに着き、両手の上に顎を乗せる。その様は凄く威圧感があり、視線の先がルヴィアゼリツタに向けられているのに、セレネまで緊張してしまう。

「実はね、宝石ランクの魔眼が出るって聞いたのよ。

『視界に入った物の味を変える魔眼』がね！」

「……味？」

「そう、それがあれば、私の悲願が達成できる日が近づくかもしれないのよ」

カリーは鋭い二本の牙を見せつけるように笑った。この時、彼が人間ではなく、吸血鬼であることを再確認する。吸血鬼の野望といえば、あまり良い想像はできない。セレネは隣のルヴィアゼリツタが少し強張った気配を感じ取った。きっと、彼女も理由が気になっているのだろう。

セレネは、何も聞かない彼女の代わりに尋ねることにした。

「悲願、とは？」

「それは当然！ 血を美味しいカレー味に変えて、たくさん血を飲んで、強い吸血鬼になるという悲願よ!!」

セレネとルヴィアゼリツタは言葉を失くした。

おそらく、似たような思いを抱いているに違いない。セレネは代表して、今も子どものように目を輝かせている吸血鬼に質問することにした。

「えっと、普通に血を飲めばいいのでは？ というか、なぜ、カレー味？」

「あら、言っていないなかったかしら？ 私、血が飲めないの。血の味が大大嫌いのよ」

「それは聞きました。ですが、なぜ、カレーなのです？」

「私、カレーしか食べられないの」

セレネの脳裏に、ずっと昔——……といっても1年ほど前、ハリーとした会話が蘇ってくる。

カレーしか食べられない吸血鬼がいると。自分はそれを嘘だと思いながら、彼に話したところ、彼は真実だと受け取ってしまい、少しばかり焦った記憶がある。

そう、あれは嘘だと思っていた。

だが、違った。正しかったのだ。なにしろ、その吸血鬼本人が目の前にいる。

「それは、なにかの呪いでしょうか？」

「呪いではないわ。もっと、単純な話。

それはね……カレーの味を知ってしまったからよっ!!」

カリィは頬に手を当てながら、うっとりと言断言した。

カリィは背後に花を散らせる勢いで盛り上がっているが、セレネとルヴィアゼリッタの周囲の温度は絶賛、降下中だった。

「……えっと……」

「ええ、私は弱いわ。弱い吸血鬼。特技は触れた物の味を変えるだけ。このおかげで、一応は血をカレー味に変えられる。でもね、何度も何度も研究しても、まっずいカレーしかできないの。

だから、今回出品されるらしい魔眼を手に入れて、さらなるカレー研究に励むのよ!!」

セレネは話についていけなかった。

カレーは確かにうまい。セレネも嫌いではない。だが、そこまで情熱を向けるほどではなかった。

「あなたも美味しいカレーを食べてみなさい。インドに来たら、ぜひ案内してあげるわ！」

美味しいカレーはね、パスタなんて眼じゃなくなるほど美味しいの！」

「いや、パスタも美味しいかと」

「パスタは駄目よ！ カレーなの！ も・ち・ろ・ん、麺の上にカレーをかければ別だけど」

もはや何も言うまい。

セレネはトーストにバターを塗り、ぱくりと食べた。

「ところで、あなたの名前を聞いていなかったわね」

「私は……ダフネです。ダフネ・ウォルパート」

セレネ・ゴントと名乗るわけにはいかない。

だから、ダフネの名前とノーマンの家名を貸してもらった。

「ダフネちゃん、どうして部屋の中でもフードを被っているの？」

「……グレイブスの命令です。魔法の関係で、フードを被っていた方がいいと」

セレネは事前に考えておいた理由を説明する。

魔法、といえば詳しく突っ込んでこない。突っ込んで来たら「秘匿されている魔法だから」という言い訳で押し通すつもりだった。実際、カーリーはそれ以上、尋ねてこなかった。

ただ、一言。

「そのフードをとった方が、きっと可愛く見えるわよ」

とだけ。まるで助言のように口にする。

セレネは小さく礼を言った。

結局、女子会はカーリーによる「この素晴らしきカレー講話」で終わった。

カレーのスパイスについて、詳しくなった気がする。カーリーの持参した特製レトルトカレーは本当に美味しく、何杯でもお代わりできてしまいそうだった。確かに、パスタなんて眼に入らなくなる、かもしれない。

ただ、もう食事を取りながら魔眼を見るのは御免である。

もちろん、出品される魔眼の中で「直死の魔眼」がないか確かめたかったが、それを差し引いても、セレネは少し明日の朝食に行く気分が重くなった。

ところが、これは杞憂に終わる。

理由は、とても簡単。

セレネが二日目の朝食に行けなくなったからだった。

魔眼蒐集列車編は型月キャラが多く絡んでくるので、整合性をとるのが大変です。でも、書いていて楽しい！（特にカリ―）

列車が舞台になる話は今話含めて3話しかないので、遠足気分执筆していき
たいです。

次回更新予定は、5月10日金曜日の0時を予定しています。
今後もしよろしく願います！

○カリ

最弱吸血鬼。こんな死徒いねえよ（笑

本名キルシュタイン。通称カリ・ド・マルシェ。

今回、書いていて一番楽しかった人。もっと出したい！

なお、原作？では褐色の肌ですが、今回は吸血鬼らしく白い肌にさせていただきますました。

ところで、この人とペロンチーノって本当に同一人物なのでしょう？
インド異聞帯よ、早く来い！

○ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルト

直死の魔眼の噂を聞きつけて、コレクションの末端に加えようとした純血魔法使

い。

直死だけでなく、今回出品された魔眼を全部狩り尽す予定。

……なお、前話投稿反映後、ガチャを回したら5回目で来てくれました。
やったぜ！ あとは、ライネスちゃんだけだ!!

○レーマン氏

イヴェットの父。娘も物語に絡んでこない。

○ハリーⅡ分霊箱説

あくまで仮説。

実物を見るまでは確証がない。

88話 魔眼蒐集列車【後編】

一部、残酷描写かもしれない箇所があります。

ご注意ください。

「ゴースト、怒るなよ」

セレネが口を堅く結んだまま髪を梳かしていると、斜め上からセオドールの声が降ってきた。部屋に備え付けられた鏡越しに見る彼の顔は、少し困ったように笑っている。

「そのさ、こうなるとは思ってなかったんだって」

「言い訳の常套句ですね」

「いやいや、本当だって！」

セレネはブラシを握りしめたまま、苛立ちをぶつけるようにソファァーに座り込ん

だ。ソファは高級なだけあり、勢いよく座った分だけ、自分の身体が柔らかく沈み込む。セレネは杖を手に取ると、何も言わずに鞆から本を呼び寄せた。

「あー、その、悪かった。うん、オレもやり過ぎた」

「……」

セレネは唇を真一文字に閉ざしたまま、呼び寄せた本を開いた。だけど、文字など目に入ってこない。本を読んでいるふりである。頭の中では、まったく別のこと——……つまり、今も自分の目の前で謝ってくる相手のことを考えていた。

「そんなに怒ることはないだろ？ たかが、朝食に行けなかったくらい」

「……その原因を作ったのは、貴方でしょうが」

セレネは本に眼を落したまま、つい言い返してしまった。

「私、嫌だって言いましたよ」

「それは、そうだけどさ……」

視線を微かに上に向ければ、セオードルの口がもごもご動いているのが見えた。

どうやら彼は、結局、最後には申し出を受け入れたセレネが悪いと判断しているらしい。実に腹立つ言い分だが、ある意味、正論である。セレネ自身、非常に腹立

ちながらもその事實は認めている。確かに、無理やりされたのではなく、一応は合意の下でのことだった。

だが、まだ納得がいかない。セレネは頑なに本を読んでいるふりを続けた。

「……お前、本当に負けず嫌いな」

「当然、負けるのは嫌いですから」

1年生の頃みたい「負け＝死」とまで飛躍しないが、やはり「負け」というのは、あまり心地の良い響きではない。そう、負け。この単語を思い出すだけで、昨夜の記憶がフラッシュバックし、やはり腹の底から怒りが沸々と煮えたぎってくる。

「でも、昨日は負けてただろ？」

「あれは偶然です！」

セレネは本を勢い良く閉じた。

思い出すのは、昨夜の記憶。

列車の旅というのは最初こそ興味が湧いたが、窓の外に映る景色は濃い霧ばかり。夜になったら星どころか人家の灯りすら、ぼつ、ぼつと思い出したように霧の

向こうを通り過ぎるだけである。正直、車窓を楽しむことはできない。

このままでは、いくら手持ちの本を読んでも飽きが出てくるのは明白だ。ということ、セオドールが1つ暇つぶしの提案をしてきたのである。

魔法界のゲーム「ゴブストーン」。

空中に浮かんだビー玉を弾いて得点を稼ぐゲームだ。通常は失点するたびに玉が浮き上がり、悪臭のする液体を吹きかけてくる——…のだが、今回はその機能を封じ、勝者が失点の多かった敗者に1つだけ命令することが出来るという特殊ルールを追加してやろうと言うのだ。

このゲーム、ダフネが好きでミリセントとプレイしているところを眺めたことはあったが、セレネ自身は試したことがない。

だが、ルールは単純明快で分かりやすい。なによりも「1つ命令できる」というところが魅力的だ。

他にこれといってすることもなかったので、セレネは気安く二つ返事で答えてしまった。

その結果、偶然に偶然が重なり、敗北してしまったのである。

これは完全にぬかった。偶然と言い張ったが、負けは負けだ。よく考えてみれば、セレネが完全初心者なのに対し、彼は魔法界で生まれ育ち、このゲームにも親しみが深かった。同じ魔法界の室内ゲームでも、ルールがマグル界と同じチェスなら負けなかったのに、と悔やんだのも後の祭り。セオドールはいつになく快活な笑顔を浮かべると、自身のトランクからあるモノを取り出した。

『セレネ、まだ飲んだことないだろ？』

取り出したのは、オーク樽熟成蜂蜜酒。

それを見た瞬間、セレネは激しく拒否の意を示した。

酒類に興味がない、わけではない。

年齢は成人に達し、少なからず興味があった。ただ、酒を飲むと人格が変わってしまうという言葉がある。人前でそのような失態をしないよう、まずは一人の時に飲んでみたかったのだが、生憎、成人年齢に達してから一人で酒を飲める機会に恵まれず、ここまで来てしまった。正直、自分を保つことが出来るのか、それとも崩れてしまうのかは予想することすらできない。

そもそも、蜂蜜酒自体が危険信号だ。

蜂蜜酒という名前は素敵で、大層浪漫のあるモノだがいかんせん。付随する伝説がよろしくない。ケルト神話ではコナハトの女王メイヴの逸話は口に出すのも恥ずかしい伝説だし、ウェールズの「赤き竜と白き竜」の伝説では、ドラゴンを封印させるために蜂蜜酒を飲ませ、酔って眠っている隙に封印するといったように、度数の強い酒であることが強調されている。おまけに、現代マグルにおける蜂蜜酒は、蜜月に飲むものとされているのだ。

以上すべての理由で、話し合いの余地もなく飲酒は断固拒否である。

しかし悲しきかな。約束は約束、ルールはルールである。

『な、頼む！ セレネが酒を飲むところが見たいんだ！ 一口でいいから！』
彼は両手を合わせて頼み込んできた。

セレネは嘆息した。最初にルールを受け入れたのは、自分である。結局のところ、セレネが折れて、一口、蜂蜜酒を口に含んだ。森の香りと甘い蜜の味と一緒に、薄らと花のような匂いが口内から喉奥を満たしていく。どこかで嗅いだような花の匂いだ。酒自体は美味いか不味いかで言ったら、問答無用で美味い。極上の甘さである。ドラゴンが樽一杯一気に飲み干した、という伝説が理解できるくらい素晴らし

かった。つい、もう一口飲むと、蜂蜜酒が喉を焦がすように流れていった。

身体の内側からカイロで温めているような感覚が広がっていく以外は、特別変わった感じはしない。暴れたくなったり、涙もろくなったり、笑い上戸になったりするともなく、安心したのもつかの間、とろん、と視界が揺れ、瞼が重くなってきた。

あ、これは不味い。

セレネは意識が途切れる前に瓶を彼に押しつけ、そのままベッドに沈み込んだ。

そして、意識がはっきりした時には、次の日の昼過ぎになっていたのであった。これは大きな痛手である。セレネとしては、たとえ薄気味悪い魔眼紹介があったとしても、きっちり朝食には顔を出したかった。それなのに、くだらないゲームのせいで欠席することになってしまったのだ。このことが、実に腹立たしかった。

ルールとはいえ無理やり酒を飲まされたことに対する苛立ちと、自分の不甲斐なさの両方で、胸がむかむかしている。

「もう二度と飲みませんし、飲ませないでくださいね。たとえば、ゲームのルールで

あっても！」

「はいはい、もうしないって」

セレネは本から顔を上げて、彼をまっすぐ見上げる。

表情や態度こそ謝ってはいたが、どこまで本気なのか分からない。だが、わざわざ開心術を使ってまで確かめることではないだろう。セレネは疲れたように肩を落とした。

「……まあ、私も偶然とはいえ負けましたし、仕方ないかもしれませんが……でも、どのような魔眼が出品されるのかは確認したかったです」

「そこはぬかりなく確認してきた」

セレネが文句を言うと、セオドールが手帳を開いた。

「えっとだな……視界に入った物を燃やし尽くす『炎焼の魔眼』、相手の感情を読み取る『感情視の魔眼』、それから、相手の持ち物や壁の内側を視通す『透視の魔眼』とかだな。特に『透視の魔眼』とやらは『千里眼』に近いらしくて、遮蔽物や隠し持っている武器だけじゃなく、近い未来まで視通すことができるんだと。

あー、安心しろ。『直死の魔眼』は出品どころか、カタログにすら載ってなかつ

た」

セレネが尋ねる前に、セオドールは一番大事なところを教えてくれた。

それを聞いて、セレネも肩の荷が下りたような気がした。

もともと、朝食に出たかった理由は、出品される魔眼のなかに「直死の魔眼」が掲載されていないかどうかを調べるためでもあった。グリンデルバルドに再三重ねて念を押してきたが、あの常に怪しいことを企んでいそうな闇の魔法使いのことである。何かの理由をつけて勝手に売り払うために、こっそりカタログに掲載されていたら目も当てられない。

「今朝、紹介された魔眼以外は出品されないから、安心していいんじゃないか？」
「……それなら問題ないですけど」

やはり、なにかが引っかかる。

魚の小骨が喉の奥に残っているような、そんな違和感が残っている。

本当に、グリンデルバルドは息抜きのために誘ったのだろうか。

現状では、確かに息抜きにはなっている。しかしながら、あの男が本当にそれだけの理由で乗車を勧めるわけではない。

たんに疑い過ぎの杞憂だいいが、なにか見落としがある気がする。

「確かに、あいつは怪しさ満点だけだよ。今回ばかりは何も企んでないんじゃないか？ 少なくとも、暗躍している様子は見当たらない」

「それは、そうです」

セレネは唇に指をあて、思考の海に沈もうとした直後だった。ふと、列車の速度がだんだん落ち始めていることに気付く。速度を落とし始め、やがて、何もない場所ですぐ停車する。

紙袋をくしゃくしゃに丸めたような雑音の後、車内アナウンスが鳴り響いた。

『車掌のロダンでございます。当列車はこの地に2時間ほど停車した後、再び出発いたします。皆様におかれましては車内に滞在されるも、車外を探索されるのもご自由にお過ごしくださいませ』

この列車は、こうして定期的に止まる。

かといって、誰かが新たに乗車してくることもない。列車を走るための魔力や石炭といったエネルギー源を蓄えるためなのか、機関士の休憩のためなのか、はたまた、その両方が理由なのかもしれない。

「……せっかくですから、外に出てきます」

少し、考えすぎだったかもしれない。直死の魔眼が出品されないと分かった以上、少しくらい羽を伸ばしてもいいだろう。

セレネはフードを深く被り直すと、部屋の外に出て、タラップを降りた。

そこは到底、駅とは言えない場所だった。

周囲一面、線路が引かれているとは思えないほど針葉樹が鬱蒼と生い茂った森が広がっている。列車の前後のみ樹木が見られないのが奇跡なくらいだ。線路は赤錆びていて、ほとんど地面と同化している。

頬を涼やかな冬の風が撫でる。

清涼な空気が肺を満たし、少し気分が軽くなった。雪の上を歩いてみれば、くるぶしまで音を立てながら埋まる。鳥が飛んでいるのか、白い雪に影が映った。視線を少し上に向けたが、鳥は過ぎ去った後だったらしい。透き通るような青空をバックに、雪を載せた針葉樹の木々が風に吹かれ、はらはらと粉雪を落としながら揺れていた。

「炎焼の魔眼があれば、こんな雪をすべて溶かせるのかもな」

セオドールの声が追いかけてくる。彼は雪に足を盗られ、苦戦しながら歩いていた。

「一睨みするだけで、炎が雪を溶かすとかさ」

「目からビームですか。ロボットや怪獣ではあるまいし」

セレネは心底呆れ果てたような声で言う、杖を取り出し、彼の周囲を覆っていた雪を溶かした。

「これで十分でしょう。だいたい、炎焼の魔眼なんて……上手く制御が利かなくて、家が火事になったらどうするんですか」

「……確かに、そうかもしれないな」

セオドールはそう呟くと、腕を擦りながら身震いをした。

「やっぱり寒いな。戻らないか？」

「防寒呪文をかけたらどうです？」

「さっぱりというなよ。あれ、意外と難しいんだぜ？」

「では、私がかけましょうか？」

「……いい、別に平気だ」

彼はむすっとした表情で断わり、ポケットに手を突っ込んだ。列車に戻る様子はない。ただ相変わらず微かに震えている様子を見るに、どうやら、やせ我慢をしているらしい。セレネは小さく肩を落とすと、白い息を吐いた。

彼は親衛隊隊長に相応しい程に魔法の扱いが上手く、ホグワーツ生の中では死喰い人とやり合える方だった。だが、あくまでホグワーツ生の中では、という話だ。実際問題、ここ数か月でかなり魔法が上達したとはいえ、まだまだセレネの足元にも及ばない。しかも、実戦系の魔法を極めている一方、防寒呪文のように生活系の魔法の習得がおざなりになっている。

マフラーに顔を埋めながら微かに震える彼を見ると、やはり自分についてくるのを止めさせた方が良かったのではないかと思えてくる。無論、抵抗するだろうから、石化の魔法をかけてホグワーツに送り付ければ良かった。たとえ死喰い人の父親から反発していようと、間違いない純血なので、悪いようには扱われないだろう。むしろ、そっちの方が安全だったかもしれない。

「……ま、もしもの話ですけど」

セレネは小さく呟いた。

「戻りますか」

彼に風邪をひかれても困るので、セレネは魔眼蒐集列車の方に足を戻した。その時、ふと足元から草が蒸したような匂いが漂っていることに気付く。目を落とせば、群生したキノコが綺麗な輪を描いて傘を伸ばしていた。

「妖精の輪ですね」

魔法生物飼育学で——……ハグリッドではなく、代用教員のグランブリー・プランクが教えてくれたことを思い出す。

真夜中、妖精が踊っていた場所に複数のキノコが輪になって残るらしい。妖精は神秘や魔力の強い森に生息する。ここがそのように神秘が強い場所だから、魔法の列車が停車しても不思議ではないのかもしれない。

「……おい、ゴースト。あれを見ろよ」

妖精の輪を眺めていると、セオドルが声をかけてきた。彼の視線の先に目を向けると、霧の狭間に女性の影が見えた気がした。ゴーストかと思ったが、それとは違う。薄らとした白い女が何十という真紅の薔薇に囲まれ佇んでいたのだ。ルヴィアゼリッタを思わす金色の髪の上にも薔薇の冠を被った姿は、まるで薔薇の化身の

ようだった。

ところが、その女性は瞬きをする間に消えてしまった。まるで、風に浚われたかのように。

「あんな乗客いたか？」

「……地元の方でもないですよね」

女性が立っていた場所まで歩いてみたが、純白の雪が広がるばかりで獣の足跡すらなかった。

「幻覚、だったのでしょうか？ 薄らとぼやけてましたし」

「はあ？ はっきりいただろ、ここに！ 赤い薔薇の女が」

「それは、当車の支配人代行でございますね」

セレネたちが口論になる前に、意外なところから助け船がよこされた。振り返ると、そこには車掌のロダンが立っていた。

「支配人が立ち去られてから、魔眼蒐集列車を守っている御方でございます。車掌はしみじみと言うと、雪を踏みしめながら近づいてくる。」

「我々も滅多に出会える方ではないのですが、良い眼をお持ちのようですね」

「なるほど、そういうことですか」

セレネはもう一度、薔薇の女が立っていた場所に目を向ける。自分の眼は直死の魔眼だが、偽ムーディ曰く、実質的には淨眼が変質したものだ。ゴーストや妖精など「有りえないものを見る魔眼」、その中でもランクが高いからこそ、自分やセオドールは視えないはずの支配人代行が垣間見えてしまったのだろう。

「ところで、支配人が立ち去られたというのは、日本人と使い魔が絡んでいるという噂のことでしょうか？」

グリンドバルドから聞いた情報と照らし合わせて尋ねる。

「ええ、もともと当オークションは支配人の発案だったのですが、トラブルがありまして。それ以来、支配人は列車を離れて、代行に委ねられています。

そのトラブルとは、ご質問なされた内容のものでございます」

やはり、車掌にとってあまり良い思い出ではないのだろう。口調がやや硬いように思えた。

「ご安心ください。当然ですが、トウコ・アオザキと使い魔は魔眼蒐集列車を出禁になっておりますので、今後オークションはつつがなく進行されます。

それでは、発車時刻までごゆるりとお過ごしください」

車掌は騎士顔負けの完璧なる一礼をすると、列車の方へと戻っていった。おそらくは、トラブルの詳細について語りたくないのだろう。

セレネたちも後に続くように、駅の方へ足を戻した。

「……あれ？」

駅に戻してみると、カリィが柵にもたれかかっていた。

昨日までの快活さは微塵も見当たらず、げっそりと肉を剥ぎ落したような負の空気を漂わせている。

「そうか、ゴーストは知らないのか。あいつ、どうやら、お目当ての魔眼が出品されなかったんだと」

「あー……そうですか」

確かに、セオドールが教えてくれた出品される魔眼に「味を変える魔眼」はなかった。カリィは野望を叶えることが出来ず、落ち込んでいるのだろう。声をかけたくてもかけられる雰囲気ではない。カリィは涙をほろほろ流しながら、ハンカチで鼻をすすっていた。

「おや、フロイライン。ここにいたのか」

カリーから目を逸らすと、グリンデルバルドがちょうど降りてくるところだった。

「遅い目覚めだったな」

「起こしてくれば良かったのですが」

「眠れる少女を起こすのは、王子の役目だ。私では荷が重い」

グリンデルバルドは両手を広げながら、やや申し訳なさそうに言い放った。当然、それは言葉だけであり、オッドアイの瞳には申し訳なさの欠片も滲んでいなかった。セレネは呆れ果てたような口調で話し始めた。

「まったく、それは眠れる森の美女のことですか？ それとも、白雪姫？ 貴方がマグルの書籍を嗜み始めたことは知っていましたが、童話にまで目を通しているんですね」

「知識は多い方がいい。知識とさええば、1年前の事件について聞いたかね？」

彼は寂れた椅子に腰を掛けた。

「日本人の魔法使いが出禁になった話ですか？」

「いや、魔眼蒐集列車内において、頭部のみ損失した死体が幾つも発見された事件

だ」

「頭部の窃盗事件？」

「この列車では、5年に1度の割合であることらしい。もっとも、1度に数人の頭部が切断されるということは少ないらしいがね」

ぞっとする話である。

だが、この列車に限っては、分らない話でもなかった。

ここは魔眼蒐集列車。魔眼を取り扱う列車なのだから、魔眼持ちの乗客がいても不思議ではない。出品される魔眼が自分の資金で届かないことに気付けば、法律外の行動に出るのも考えられた。

例えば、オークションの競争相手を殺したり、魔眼の保管庫に侵入したり、魔眼ごと頭部を切断し持ち逃げしたり、すべて十分に想定のうちだ。

「ちなみに、犯人は？」

「魔法執行部が調査したらしいが、真相は謎のままだ」

「乗客全員にアリバイがあった、ということでしょうか？」

「フロイライン、君はいささか発想がマグルすぎるぞ？ マグルの中で育ったの

だから、無理もない、というべきかもしれないが」

グリンデルバルドはやや呆れたように頭を振った。

「我々は魔法使いだ。つまり、魔法が使える。魔法が使えるのであれば、アリバイなど意味を持たない」

魔法使いなら、鍵のかかった部屋にも入ることが出来る。

魔法使いなら、難しいトリックを構築しなくても、自殺に見せかけることが出来る。

魔法使いなら、犯行後即座に「姿くらまし」で逃走し、あたかもずっと人目に付く場所にいたかのように偽装することだって出来る。

「犯人が誰なのかでもなければ、トリックでもない。大切なのは、動機だよ。何故、その犯行に至ったのかだ。それが分かれば、犯人も必然と割り出せる」

「……それで、名探偵さんは、1年前の殺人事件の動機がつかめたのですか？」

セレネが皮肉交じりに尋ねると、グリンデルバルドは苦笑した。

「暇潰しに探索してみたが、何分、証拠がなさすぎる。当時の事件の調査官や関係者が乗車していれば割り出せたかもしれないがね。」

犯人はコレクションとして魔眼を欲していたのか、それとも、別の目的で魔眼を蒐集していたのか。事実は、闇の中だ」

彼はそう言いながら、パイプに火を灯した。白い煙が青い空へ円を描きながら昇っていく。

「君も気を付けたまえ、フロイライン。魔眼持ちだと思われたが最後、首を刎ねられるかもしれない」

「その言葉、そっくりそのまま返します」

セレネはタラップを跳ねるように上がり、静かな車内に戻った。

しばらくすると、物悲しく汽笛が鳴り響いた。

蒸気の音と共に、車輪がゆっくりと動き始める。車窓に目を向ければ、白い霧とそれはぐまで浮かぶ針葉樹の深い緑の影に埋め尽くされていた。

セレネの足は客室ではなく、セオドルと別れてロビーに向かっていた。革張りの椅子に腰を掛け、ウェイターに紅茶を頼む。ウェイターは紅茶のポットを高い位置まで上げると、そこから紅茶を注ぎだす。揺れている車内なのに、凄い技である。

「……美味しい」

ふいに、そんな言葉が零れてしまうほど味が良い。本当に良い茶葉を使っている。香りも普段飲んでいる安物と段違いだ。

『『アクシオ―来い』』

セレネは杖を振ると、適当な本を鞆から取り出す。

そして、鞆から飛び出してきた本の題名を見て、苦笑いした。

『『オリエント急行殺人事件』か』

グリンデルバルドの話聞いた後では、ぞっとする題名である。

もちろん、自分は12か所も刺されるほど恨まれる行為はしていないつもりだし、乗客のほとんどが真に赤の他人だ。

だがしかし、この列車はオリエント急行ではなく、魔眼蒐集列車。怨嗟で殺されることはないが、魔眼狩りのついでに殺されることはあるかもしれない。

「ま、どんな敵も返り討ちに出来るけど」

セレネは小さく呟くと、本のページをめくった。

次の日の朝は、もう魔眼の紹介はなかった。

よって、オークションの行われる夜まで暇である。

セレネは部屋のソファーに座ると、軽い読書を始めた。

グリンデルバルドは他の部屋に出かけており、セオドルはセレネの前で深い赤紫色のワインが入ったグラスを回していた。当然、一緒に飲むことはしなかった。酷く落ち着いた空間である。

時計が時を刻む音と、列車のリズミカルな振動と汽笛だけが聞こえてきた。あまりにも落ち着き過ぎて、どうやら緊張がほぐれて来たらしい。だんだんと瞼が重くなってきた。セレネはちらりと部屋の扉に目を向ける。1年前の事件の話を聞いているから、殊更、頑丈に鍵の魔法をかけるようにしていた。グリンデルバルドは部屋の外にいるが、彼ほどの実力者でない限り、あの扉を開けることはできないだろう。セレネはソファーに腰を下ろしたまま、しばし微睡みに身を委ねることにした。

セレネが目を覚ましたのは、膝の重みに気付いた時だ。

セレネは重みの正体を一瞥したあと、テーブルに視線を向ける。ワインボトルは、すっかり空になっていた。どうやら、重みの正体は酔っぱらっているらしい。

「邪魔です、起きてください」

セレネがとんと肩を揺すった。

しかし、目覚める気配はない。セオドールはセレネの腹部に顔をうずめたまま、まったく起き上がる気配がなかった。完全に枕扱いである。

セレネは肩を落とした。1年前までは考えられなかった光景である。実際、今までもこんなことはなかった。つまり、それだけ気の置けない間柄になったのかもしれないが、それにしても邪魔である。膝が少しずつ痺れてくるのが分かった。

「まったく、酔っ払いは苦手よ」

さて、強引に起こしてやろうか。

強硬論に出る自分がいる一方で、もう少しこのままでもいいのでは？なんて、甘ったれたことを考える自分もいる。

一体、どうするべきか。悩みながら部屋を見渡した時、ふと、空になったグラスが視界に入ってきた。

奇妙なことに、ワインによる渋がついていない。まるで、最初から何も入っていなかったような綺麗なグラスである。

「……まさか」

自分たちは魔法使いだ。

渋を杖でふき取ることくらい朝飯前だが、酔っぱらって寝ている男ができるだろうか？ その答えは簡単だ。

「起きなさい、この似非酔っ払い!!」

セレネは容赦なく頭に拳を落とした。

「痛ッー!」

セオドールは飛び起きる。その隙にセレネはソファから立ち上がると、空っぽのグラスを手にとって見せる。

「消失呪文ですね。あれでしたら、ワイン程度すべて消すことができますから。よく考えてみれば、貴方から酒の匂いなんてしませんでしたし」

「……バレたか」

「バレたか、ではありませんよ。まったく、油断も隙もあったものじゃない」

しかも、窓に映った自分の姿を見る限りでは、あの男はセレネに「終了呪文」を使っていたらしい。せっかく変身術で茶色に染めた髪が黒く戻っていた。

セレネはグラスを乱暴に置くと、部屋を出ようとした。髪の色なんて、杖一振りで変えられる。いまはこの男から距離を置きたかった。

「ゴーント、待ってって！ オレが調子に乗り過ぎた」

しかし、外に出ることは叶わなかった。

彼はセレネの腕を掴んできたのである。これで、掴まれるのは3回目。2度あることは3度あると言うが、あまり慣れたことではない。

「謝るから、こっちを見てくれないか？」

「……」

セレネは黙って振り返る。

ここで、この男の言うことを聞いてしまうくらい、自分は甘くなつたと痛感する。以前はこんなに弱くなかつたはずだ。もっとも、義父に同じことを言われてい

たら、言われた通りに動いただろう。義父がセレネの膝に頭を乗せていたら、たとえ酔っていなくても、多少の恥ずかしさくらい我慢できたかもしれないが、この男は別だ。

しつかり謝るまで、絶対許さない。

「悪かった、ゴースト」

「そうですか。では、さようなら」

「いやいや、待て」

セオドールの青い瞳はセレネをまっすぐ見下ろしている。

あまりに熱心に見られるものだから、先ほどまでの気恥すかしさと合わせて顔が熱を持ち始めたのが分かった。こうして間近で顔を見合わせるのは、いつ以来だろうか。下手したら、8月の初日、ウィーズリーの結婚式の後、グリーンデルバルドと手を結んだことを咎めてきたとき以来だ。つまり、3か月ぶりとなる。

「なんででしょうか？」

少し驚きながらも、平静に尋ねてみる。

「言いたいことがあるなら、はっきり言ったらどうです？」

セオドールは何も言わないで、いつもの不満そうな顔のまま見つめてくる。負けじとセレネも睨み返す。

すると、不満顔が解れ、綻ぶような笑みを浮かべた。

「やっぱり、セレネ。お前って可愛いな」

いつになく背筋が寒くなるような台詞だった。彼の青い瞳には、まったく濁りがない。嘘や世辞ではないだけ、質が悪い。

セレネは完全に赤らんだ頬を隠すため、視線を逸らした。

「用件はそれだけですか？ 分かりましたから、離してください」

「……ああ、そうだな」

その言葉は、少し寂しそうで。

何か、途轍もなく悪いことでもしたかのような気持ちになる。するりと手が解け、セレネは自由になった。

「これは、お前のためになるんだ」

「……え？」

セレネが疑問の声を発した時だった。

『刻限になりました』

突然、声がした。

いや、声ではない。頭に直接語り掛ける思念ですらない。まるで、概念そのものが突然、自分たちの脳に染み渡ったかのようなだった。

その言葉と共に、薔薇の女が姿を見せる。

白い女だった。ルヴィアゼリツタのように見事な金髪を美しく巻き、真紅の薔薇で飾りつけをしている。

あの針葉樹の森で垣間見た支配人代行だ。あの時は薔薇でかすんだ朧気な姿だったが、今度はくっきりと実体を持っている。セレネは杖を取り出すと、彼を守るように一歩足を前に出す。

「刻限とは？」

セレネは最初、理解できなかった。すると、再び概念のような声が脳を支配する。『スタッフよりお話があったはずです。オークシヨンの前に、魔眼を摘出させていただく』

オークションのための、魔眼摘出。

セレネは全身から血が引いていくのが分かった。

薔薇の女は、吸い寄せられるようにこちらに近づいてくる。

「まさ、か!？」

この瞬間、セレネがずっと感じていた違和感が弾かれたように解けた。

最初から、おかしいと思っていた。グリンデルバルドが「気分転換に」なんて理由で外出を進めるわけがないと。セオドルがグリンデルバルドの案に乘っかり賛成するわけがないと。

つまるところ、最初から二人はグルで騙していたのだ。

否、違う。

セレネに黙っていたのだ。

「取り消しなさい。魔眼の摘出はしません！」

セレネは薔薇の女に向かって叫んでいた。

乙女の表情は仮面をかぶったように見えない。魔眼の摘出が、当然の義務のよう

に動いている。

「やめなさい！」

口は動く。

だが、セレネは動けない。

魔眼殺しに手が伸びても、指がまったく動かない。杖を握りしめる指も、強力な接着剤で張り付けられたように動かない。足も床に縫い付けられたように、まったくビクともしない。動け、動けと必死に働きかけるのに、催眠術にでもかけられたように動けないのが、腸が煮えたぎるくらい悔しい。

思い返してみれば、すぐに気づくべきだった。

グリンデルバルドは『誰が代表に見えるか』といったが、自分が代表とは一言も口にしていない。

封書にあて名はなく、誰宛てなのか分からなかった。

グリンデルバルドは『セレネの魔眼を売り飛ばすわけでもない』とはっきり口にしていた。当然、未来視も売らないと言っていた。

セオドールは言っていた。2日目の朝で紹介された魔眼に「直死の魔眼」はな

かった、と。

ああ、それらはすべて正しい。

けれど、魔眼のすべてを明かしたわけではなかった。「とか」なんて誤魔化していた。

そう、2日目の朝、起きられなかった時点で気づくべきだった。

夜、セオドルがゴブストーンを使って蜂蜜酒を飲ませてきたときだ。あの時、確かに蜂蜜酒の中に甘い花の香りが漂っていた。初めて飲む酒のはずなのに、どこかで嗅いだことがあると思ったら、昨年度の今頃、聖マンゴ魔法疾患病院で無理やり飲まされた睡眠薬と同じ香りだった。おそらく、蜂蜜酒に睡眠薬が混ざっていたのだ。

そんなことをする理由は、1つしかない。

酒に酔いつぶれたと見せかけて寝坊させることで、セレネを朝食会場に行かせないためだ。つまり、出品される残りの魔眼を知らせない作戦である。

なぜなら、セレネが朝食会場でカタログを確認すれば、どの魔眼が出品されるのか一目瞭然で露見してしまうからだ。

イギリス魔法界有数の純血の末裔、セオドル・ノットの浄眼が出品されると知られないように。

支配人代行の白い指が、つぷりと彼の半顔に沈みこんだ。まるで、泥か何かに沈み込むような、異常なまでの自然さだった。血の一滴も零さないそれは、心霊手術と似た技術だったかもしれない。人差し指と中指、親指が第二関節まで眼球に潜り込み、ほんの数秒でずぶずぶと抜けた。それと同時に、意識も奪われたのか、彼の身体が倒れ込む。

「支配人代行」

いつの間になっていたのだろうか。

そつ、とオークションナーが溶液に満たされたガラスの筒を差し上げた。支配人代行たる女が手を振ると、筒の内側へ二つの眼球がとぷんと音を立てて落下したのである。

施術の間、セレネは視ているだけで、身じろぎさえできなかった。

「以上で、魔眼の摘出は終わりです」

オークションナーは神の御業でも見たかのごとく声を震わせた。

セレネも近い感覚を抱いた。あまりにも隔絶した何かを見た時、人は誰もがそうなるのかもしれない。ホグワーツの校医マダム・ポンフリーでも聖マンガ魔法疾患病院の癒者でも、きっと今日の前で見たような卓越した魔法施術は行えないという確信がある。

しかし、そんな気持ちよりも、まったく動けなかった自分への悔しさで奥歯が軋むくらい噛みしめる。

支配人代行は、再びすっかり消え失せていた。

「ゴーストだけでなく、魔力の気配や実体を見せる前の幻獣までも視認できる最上級の浄眼です。もちろん、視覚を通して相手に働きかけることはできないので、ノウブルカラーではありませんが、本質は浄眼というよりも妖精眼に近いかもしれませんね」

オークシヨナーがガラスの筒を撫でさすりながら解説をしている。

扉がいつの間にか開いており、生身の招待客たちが顔をのぞかせているのが横目で見えた。

セレネはオークシヨナーの言葉を遠くで聞いていた。胸の奥が締め付けられるよ

うに冷たく、息苦しさが込み上げてくる。

「……あんだ、わざと黙ってたでしょ」

セレネは自身を見下している男に語りかけた。

「答えなさい、助言者。なぜ、黙っていたの？」

「聞かれなかったからだ」

予想通りの言葉を返され、セレネは唇を噛みしめる。

「彼は君に見合った実力がないことを嘆いていた。だから、私はこのオークションを勧めた。滅多に使えない魔眼を売り、戦闘でも使える強い魔眼を買い求めればいいと、囁いただけだ」

「悪魔の囁きね」

血が滲みそうなほど、拳を握りしめた。

確かに、そうだった。彼の実力はセレネに遠く及ばない。だから、いざというときの為になる呪文の習得を勧めた。きっと、それが彼の劣等感に繋がったのかもしれない。セレネも逆の立場だったら、似たようなことを感じ、苦しんでいたかもしれない。

「それが君のためにもつながる。弱い者を抱えていては戦えまい。弱いなら弱いなりに利用し処分するか、無理やりにでも強くさせるかのどちらかだ」

「……ふざけるな！」

セレネはグリンデルバルドに詰め寄っていた。魔眼殺しをかけているのに、死の線が視界いっぱい広がっていく。この世非ざる線を視た代償とばかりに、いつも通り前頭葉の辺りが針で刺されたように痛み始める。だが、その程度の痛みなんて気にならない。

「私はヴォルデモートを殺すために、あんたを助言者にした。でも、ここまでしてくれとは言っていない！」

「そこが甘いのだよ、フロイライン」

グリンデルバルドは駄々をこねる子どもを憐れむような視線を向けてくる。

「君はどこまでも甘いお嬢さんだ。」

いいかね、君は非情になる必要がある。自分と格上の相手とやるときは、私情や良心を捨てるべきだ。

君はずっと私情に突き動かされていた。私を雇ったときから、ずっとだ。綺麗な

ままで強敵を倒すなど、夢見心地にもほどがある。

……君が義父を失ってからの数か月、あの頃が一番、リドルと戦うにふさわしい戦士の顔をしていた」

「……つくう」

「だが、君は人を殺したくないと言う。ならば、取り巻きの能力を底上げするしか方法はないだろう。

それが嫌だというのであれば、自ら手を汚す他、道はない」

セレネは何も言い返せなくなった。

グリンデルバルドの言う通りだ。自分よりはるかに格上の相手と戦うときには、私情を捨てる必要がある。良心だって捨てる必要がある。そうしないと、また敵が復活してしまう。分かり切っていることだ。だがしかし、その言葉には従えない。

「私は……誓いました。お父さんと彼に」

人は絶対に殺さない、と。

彼らには言わないが、その冠には「ただし、ヴォルデモートを除く」という言葉がついている。それでも、ヴォルデモート以外は殺さないと心に決めた。約束した

のだ。それを破るような真似は、もう二度としたくない。

だからといって、周りが傷つくのも見たくない。

甘くて結構。良心や私情もありありで戦場に挑む。その姿は確かに、兵士や戦士の風上にも置けないだろう。

「私は……人を殺せないけど、彼や貴方に負債を押し付けるような勝ち方もしたくない。……良いハンデではありませんか。ハンデありで勝利するために、最善の助言を下さい！ 私と組んだ以上は、私の方針に従ってもらいます！」

セレネは自身に言い聞かせるように、そして相手を組み伏せるように叫んだ。

……ああ、なんと子どもっぽい理屈なのだろう。これでは、空き地で暴れまわるガキ大将と大して変わらない。傲慢にもほどがあるし、どこまでも強欲だ。今の宣言を4年生までの自分が聞けば、きっと「なにを馬鹿げたことを」と冷ややかな目で一蹴していたはずだ。頂上までの楽な最短距離が提示されているのに、それに従わず、わざわざ岩が転がり荒れ果てた登りにくい遠回りをするなんて、正気の沙汰ではないと。

けれど、今は違う。

ヴォルデモートの脅威から守りたいと思う人が増えた。彼らを犠牲にしてまで、高みに昇らなくていい。そこに至るまでの道がどれほど辛く、何度も倒れ、絶望に満ちていたとしても、約束や信条を違えたくない。

だから、どこまでも心の底から誓いを叫ぶ。

「これは、貴方の戦いではありません。私の戦いです」

自分の声は、少し震えていた。

どんなに辛い遠回りであつても、どんなに「お前は弱くなった」と指摘されても、そこだけは譲れない。グリンデルバルドはしばしセレネを見下すと、ゆっくり口を開いた。

「もし、その結末が望み通りのものでなかったらどうする？」

グリンデルバルドは静かに問いただしてくる。

「リドルを倒すことが出来ず、君の望むすべてを失うことになったら？ 倒せたところで、多大なる代償を支払うことになったらどうする？」

「そんな未来にはさせません。そうはさせないために、貴方を助言者を選びました。……それでも、なにか代償を支払わないといけなくなったときは、私が一人です

べて背負います」

今世紀最悪の魔法使いを人の身で倒すのだ。

最初から、それ相応の代償を支払うのは最初から覚悟している。ただ、それを他人には絶対に背負わせてはいけない。

死喰い人やヴォルデモートを損傷させ倒した分、恨みを買った分の代償を背負おう。いずれ重荷に耐えきれず、死に果てることになったとしても、それは絶対、他人に委ねていいものではないのだ。

「だから、私の方針に従いなさい」

セレネが注視すると、グリンデルバルドの顔に死の線が奔った。彼の表情は堅く、黙したままセレネを見下している。彼が言い返して来たら、迎え撃つつもりだった。ところが、口から生まれたような闇の魔法使いは堅い表情を崩し、口元を綻ばせた。

「……承知した。次からは気を付けよう。」

ところでだ、フロイライン。君は、リドルの通称を口にしたことに気付いているかね？」

グリンデルバルドが呟いた瞬間、列車が急速に速度を落とした。

セレネは先ほど叫んだ言葉を思い返し、舌打ちをした。怒りに任せて、足元をすくわれたような失態を犯してしまった。

「……命令です。その彼を守ってください」

軋むような音を立て、魔眼蒐集列車が停止する。

なぜ運転が止まったのかは、考えるまでもない。

「君の護衛はいいのかね？」

「私が死喰い人や人攫い程度に後れを取るとでも？」

セレネは杖を右手で回しながら、扉の方へ歩き始めた。

「オークションが開始される程度に、私一人で暴れてやりますよ」

さて、行こう。

自分には守りたいものがある。

セレネは乗り込んでくる無粋な輩を考えながら、魔眼殺しを取り払った。

次回、人攫いVSセレネ。

魔眼蒐集列車編のクライマックス。

何故だろう、人攫いが負ける未来しか見えない。

更新は17日（金）0時を予定しています。

次回もよろしく願います。

89話 共闘

オークションは夜からだ。

オークションのために外部からやってくる魔法使いたちのため、列車を覆っていた神秘は薄まっている。

だから、こんなに早く死喰い人たちが勘づけ、押し寄せてきてしまったのだろう。「ちよつと、一人で大丈夫なの？」

セレネが廊下に出ると、カーリーが話しかけてきた。少し離れたところでは、ルヴィアゼリツタが腕を組みながら、厳しい表情でこちらの様子を確認している。

「ええ、私の不始末ですから」

腕を交差させるように組み、軽くストレッチをしながら廊下を進む。かつかつとブーツが鳴る音だけが廊下に響いていた。セレネはカーリーの脇を通り過ぎ、眼帯の魔法使いの傍を通り過ぎようとしたとき、彼は掠れたような声で話しかけてきた。

「列車が長く停車すると、オークションの開始が危ぶまれるかもしれん」

レーマンがひっそりと助言をする。

「手短に済ませてもらいたいものだ。1年に1度の大事な日なのでね」

「助言、感謝します」

レーマンは何も言わなかった。セレネもレーマンを一瞬たりとも見なかった。彼は死喰い人の襲来などどうでも良いのだろう。それよりも、魔眼のオークションが開催される方が大事なのだ。

セレネもその意見に同感である。

セオドールが両眼を失った今、魔眼オークションの開催は死活問題だ。オークションで彼にとってためになる魔眼を手でできなかった場合、浄眼を失っただけで終わってしまう。それだけは避けたい。

「さてと、やりますか」

セレネは扉を蹴り破るように外に出ると、今まさに扉の目の前にいた男に失神呪文を放った。

外は一面の雪が広がっていた。どうりで吐く息が白いわけである。ところが、明らかに寒いはずなのに、セレネは煮えくり返るほど暑かった。

「両手を挙げろ。10本の杖がお前を狙っているぞ」

セレネのいる場所を中心として、弧を描くように6人の男が並んでいた。

「おいおい、お前さん。例の嬢ちゃんじゃないか」

その中には、見知った顔も含まれていた。

フェンリール・グレイバック。ダンブルドアが死んだ日、襲ってきた狼人間だ。やはり、死喰い人の一団である。身なりが汚らしく、髪の毛を何日も洗ってなさそうな男が何人もいた。マndanガス・フレッチャーの方が、まだ清潔だと思えてしまうくらい汚らしい。

「それは本当か、グレイバック！ 噂のセレネ・ゴントか!? 捕まえたら、金貨を貰えるぜ」

「ああそうだな、スカビオール。二十万ガリオンだ！」

どうやら、あの10人の内、グレイバックとスカビオールという男がリーダー格らしい。

「正気ですか？ 私を捕まえられると？」

セレネが悠々と一步、前に踏み出した瞬間、10本の杖先から赤い閃光が迸った。赤い光がセレネの視界を奪おうとする。けれど、相手がなにをしてくるのか分かつ

ていた以上、対策するのは当然のこと。セレネは無言で盾の呪文を展開していた。失神呪文は盾に当たり、為す術もなく四散する。

『ウィンガーディウム・レヴィオーサー―浮遊せよ』

セレネはそのまま10本の杖めがけて、1年生の時に習った呪文を唱えた。

たかが浮遊呪文。されど浮遊呪文だ。10本の杖の内、4本が持ち主の手から浮かび上がる。グリンデルバルドなら全員の杖を取り上げることができたかもしれないが、まだまだ自分はこの程度だ。

『コンフリゴ―爆発せよ』

セレネは4本の杖を爆発させた。

これで、4人は真面な魔法戦はできない。

だが、グレイバックを含めた3人はまだ杖を持っている。油断はできない。しかしながら、杖を奪われたという事実は彼らに衝撃をもたらしたらしい。ほとんどの男の顔に動揺と恐怖の色が浮かんでいる。目の前で自分の杖を爆発させられた4人は、半ば戦意を消失しているように見えた。

「今なら見逃してあげます。去りなさい」

「……っく、上物を目の前にして、下がれるか!! あの子っこの小娘を捕まえるだけで二十万ガリオンだぞ!!」

グレイバックが叫ぶと、残りのメンバーにも火がついてしまったらしい。

説得失敗。

金に釣られて自分の命をさらけ出す愚か者の集まりらしい。セレネは雪が積もった地面に降り立つと、周囲の雪を溶かし始めた。なにしろ、足が雪に捉われ歩きにくい。多人数との戦闘では、機動力が深く関わって来る。雪のせいで負けました、なんて無様な真似は避けたい。

『『ステューピファイ―麻痺せよ』』

セレネめがけて、捻りもない赤い閃光が奔る。

今度は盾の呪文を展開しなかった。セレネは列車の先頭の方へと走りながら、後ろを追いかけてくる呪文を避けた。「8人のポッター作戦」がここにきて役に立った。後ろから迫って来る呪文を避けるのが上手くなっている。セレネは、目の前の雪を溶かしながら走った。

簡単な推測だ。

最初に倒した男を含め、11人の男たちが扉の前にいた。

だがしかし、足跡が11人分しかない。では、誰が列車を止めたのか。答えは簡単だ。列車の先頭部に、もう1人仲間がいる。おそらく、誰か1人が列車を止めている間、残りの11人の死喰い人が列車内に侵入。誰が「ヴォルデモート」の名を口にしたのか分からないので、とりあえず、11人で乗客全員捕まえる——……とまあ、こんな感じの大雑把な計画だったのだろう。

「おい、グレイバック。終わったのか？」

走ってくる音に気付いたのか、案の定、列車を先頭で止めていた男がひょいっと顔をのぞかせてくる。

「『ステューピファイ』！」

セレネの放った閃光が、先頭の男の鼻に直撃する。男は、ふらふらと線路の外に倒れ込んだ。これで残りは10人だ。

セレネは列車を傷つけないように、さらに前へ前へと走り出す。万が一、列車が戦闘の余波で破損し、オークションが取りやめになりました、なんて話にならない。数年前、日本人と使い魔が暴れまわってオークションを台無しにしたという話を

思い出しながら、セレネは雪を溶かしたばかりの剥き出しな地面を駆けた。

地面には、鳥のような影が映っていた。こんな緊迫した状況なのに、空を舞う鳥は呑気なことだと呆れてしまう。

「さて、やりますか」

しばらく行っただころで、セレネは反転した。

にたにた黄色い歯を出して笑う男たちがけて、迷うことなく失神呪文を放った。1人、2人と崩れていくが、やはり10人という数は多すぎる。セレネだけが魔法を放つわけではなく、相手だって反抗してくる。ましては、セレネのように良識ある魔法の使い方をしていない。赤い閃光は閃光だが、どうみても許されざる磔呪いにしか見えないものも交じっている。

もっとも、当たるような馬鹿な真似はしないが。

「あっ」

セレネはその時、あることに気付いた。

死喰い人たちの背後に近づいてくる影が見える。

「油断しているぜ、お嬢ちゃん！」

影に氣を盜られている隙に、グレイバックが群れから抜け出しセレネに爪を向け
てきた。

今宵は満月。おまけに夕暮れ時だ。グレイバックは狼人間に変身しかけていた。
セレネは盾の呪文で防御を固めるが、鋭い爪が音を立てながら盾も削りにかかって
来る。

『プロテゴ・マキシマー―万全な防御よ！』

「へへ、いくらやっても無駄だ!! ほら、今だ、スカビオール！」

グレイバックがセレネの関心を引き寄せている間に、スカビオールが走り出し
た。グレイバックとは少しずれた方向から、セレネの構築した盾の呪文の隙間を狙
うつもりなのだろう。セレネがスカビオールの方に注意を割いた瞬間、グレイバッ
クの攻勢が増していく。

どちらかに氣を取られ、両方の手が曖昧になることを狙っているのだ。

だがかし——……

「バックを取りましたわ」

彼らは、この場にいる第三の存在に氣付いていなかった。

愚かな人攫いたちは、先頭を走る賞金首に目を奪われ、誰一人として後ろを見ていなかったのだ。

「へう？」

スカビオールは背後に青いドレスを見に纏い、黄金そのものが溶け込んだような見事な髪を縦ロールにした美少女……ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトが立っていた。しかも、いつの間にか、青いドレスはノースリーブになっており、白く麗しい肌を見せつけている。

否、そのようなことはどうでもいい。

ルヴィアゼリッタはスカビオールを後ろから抱え込むと、そのまま自身の中心を支点とするように、大きく身体を反らせたのだ。

「え、いや、ま——ッ……!」

スカビオールは最後まで言葉を言い終えることができなかった。

彼の後頭部は、雪ではなく、石や土が剥き出しの硬い地面に容赦なく打ち付けられたのである。柔らかい木の板ならともかく、コンクリート並みに硬い地面なので、最悪、頭蓋骨にひびが入っても不思議ではない。

「な、バックドロップだど!？」

さすがのグレイバックも、突然参戦してきた新手の存在に気が取られる。

「ルヴィアゼリッタさん！」

「ミス・ルヴィアでよろしくつてよ」

ルヴィアは黄金の縦ロールを優雅に払いながら答えた。

「見事な技ですね」

「あら、この程度は淑女の嗜みですわ」

この世のどこを探しても、彼女のプロレス技は「淑女の嗜み」を超えているように思えた——が、ここで詮索するのは野暮な話だ。ルヴィアは黄色の双眸をわずかに細め、残りの死喰い人たちを睨み付けた。

「今回のオークションは私の初陣ですの。不届き者のせいで開催が危ぶまれるのは笑止千万」

ルヴィアは、すっかり伸びているスカビオール杖を踏み折った。

「エーデルフェルト家次期当主、ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトに手袋を投げつけたからには、容赦なく受けて立ちますわ！」

さあ、覚悟はできて？」

ルヴィアの参戦で、死喰い人たちは混乱した。

前方のセレネ、後方のルヴィア。

前からはホグワーツで1位2位を争う実力派魔女が攻め込み、後ろに下がればプロのレスラー顔負けの美少女が魔法と体術を組み合わせながら攻めてくる。ちらりと見えた範囲では、宝石を頭上に投げ飛ばし、そこに気を取られた相手にドロップキックをかましたりしていた。

セレネとしては、異国の魔法について詳しく見たいところだったが、そのような私情は捨て、目の前の死喰い人たちに集中した。

既に、列車の進行を足止めしていた死喰い人が消えたのだ。

これで、列車自体の運行を妨げる邪魔者はいない。

列車の横で起きている死喰い人騒ぎ、それに対抗するため下車した乗客の安否より先に、魔眼蒐集列車はオークションの開催を優先する。

セレネの少し後方から、蒸気機関の猛る音が腹の底に響き渡ってきたのだ。

時間はない。素早くけりをつけ、列車に戻る必要がある。それなのに——……

「ぐぬっ、この程度で二十万ガリオンを見過ごせるか!!」

グレイバックはしつこいくらい、セレネに襲いかかってきた。

ルヴィアが残りのほとんどといっていい死喰い人を投げ倒してくれているので、セレネとしても集中して狼人間との戦いに臨むことができる。

敵は最凶にして最狂の狼人間だ。しかも、半ば変身しかけていると来た。盾の呪文を削り取るほどの圧倒的な力と狼そのものを思わせる脚力。セレネが普通に失神呪文を放つても、跳びはねるように躲されてしまう。

「『ヴェンタス・マキシマー―突風よ、吹き飛ばせ!』」

グレイバックが地面を蹴り飛ばし、こちらへ跳ね跳んできた瞬間に、セレネは突風の呪文を発動させる。グレイバックは正面から強烈な風に吹きつけられ、速度を落とした。両足をしっかり地面について、踏みとどまっている。

「貰った!」

セレネには、突風の道が視えていた。

そのまま、セレネは勢いよく風の道を駆け抜ける。これが最初なら失敗を恐れたかもしれないが、4年生の時の墓地で試して以来の2度目だ。迷うことなく風に

乗り、グレイバックに急接近した。彼が恐ろしいのは、その爪と牙だ。

セレネの魔眼は狼人間の腕に奔る「死」を見定める。

「せいっ！」

セレネは掛け声とともに、彼の両腕を杖先で切り落とした。狼人間が悲鳴を上げるよりも先に、セレネは彼の心臓に杖を突きつける。

『『ステューピファイ』!!』

心臓の真上に強烈な一撃を喰らい、狼人間グレイバックは倒れ込んだ。セレネは白目をむいて気絶中のグレイバックを見下すと、歪んだ口元に狙いを定めた。

『『フリペンドー撃て』』

衝撃呪文がグレイバックの口に直撃する。おかげさまで、牙の半数が飛び散り、口元から鮮血を流していたが気にすることはない。セレネは不思議と、この男に強烈な忌避感がある。もう少し痛めつけても良いかもしれないが、これ以上は余計だ。本当に殺してしまうかもしれないし、牙と爪を失った狼人間は怖くない。

「これで、終わりです」

「私と同じリングに立つには、いささか早すぎましたわね」

ルヴィアの方もあらかた片づいたらしい。

彼女の足元には、眼を回した死喰い人たちの屍が積み上がっていた。

けれど、勝利の喜びを分かち合うのはまだ早い。

列車は既にゆっくり動き始めている。

セレネの真横で列車は蒸気を上げながら、今まさに機関室が通り過ぎようとしていた。

セレネより後ろにいたルヴィアは、開け放たれたままの扉をつかむと白鳥のように列車に降り立っていた。

「早く！」

カリーの声が響いている。

大きく開け放たれた扉の向こうから、カリーが手を伸ばしていた。セレネも列車の進行方向に逆らうように走りながら、カリーに向かって手を伸ばす。雪を溶かし尽したおかげで、随分と走りやすい。

「さあ、こっちに！」

あと数メートル。

セレネは大きな掌に向かって、必死に手を伸ばす。背後にはグリンデルバルドやルヴィアの姿も見えた。こちらに身を乗り出したカリィの姿が近づく。問題ない。これならカリィの手に届くことができる。

セレネはカリィの手に指が触れた、その刹那。足元を蛇のような巻き付く風が巻き起こり、セレネの身体は前のめる。指先はカリィから離れ、前に突き出された。「足すくい呪い!？」

セレネは愕然とする。

人攫いは全員、倒し尽したはずだ。

杖だって破壊したし、腕も斬り捨てた。ルヴィアが倒した者たちは、こんなすぐに復活できる状態ではない。

では、いったい誰が――？

「久しぶりだな、人間もどき」

背中を蛇が這いずり回るような悪寒がセレネを襲った。

忘れもしない悍ましい声だ。このままではまずい。あいつには勝てない。セレネが「姿くらまし」をしようとした直前、背中に強烈な失神呪文が打ち当たる。

「我が死喰い人のかすめ取ろうとしてくれたな、グレイブスとやら」

失神呪文の効果か、意識が朦朧としてくる。

セレネが辛うじて後ろを振り返ると、声の主は黒い煙と共に浮かんでいた。奴はグリンデルバルドを嘲笑っている。ヴォルデモートの白すぎる左手には、死喰い人の屍が握りしめられていた。おそらく、グリンデルバルドが配下に加え入れた死喰い人だろう。

「こいつが白状した。お前たちが魔眼蒐集列車に乗っている、とな。なら、待ち伏せするのも容易い。おまけに、面白い余興も見られた」

ちらちら輝く赤い双眸がグリンデルバルドたちを舐めまわすように見えている。思い起こせば、車外に出た際、時折、鳥の影が見えていた。

おそらく、あの鳥のような影は、鳥ではなく、この男だったのだ。

セレネは意識を繋ぎ止めるように、再度「姿くらまし」をしようとした。魔眼蒐集列車内は不味い。もっと別の、どこか遠くへ逃げて身を隠さなければならない。しかし、その兆候を闇の帝王が見逃すわけがなかった。セレネが姿くらましをする瞬間、磔呪いが襲い掛かってきた。

「ぐっ——ッ！」

まるで一度に4発受けたような失神呪文と磔呪い。

その威力は筆舌しがたい。心臓に熱した杭を同時に4、5本、打ち込まれたような痛みだ。事実、音を立てながら骨が折れる。

そのまま、セレネは気絶した。

いくら直死の魔眼を持ち、魔法に秀でてはいても、所詮は18歳前後の少女の脆い肉体に過ぎない。ただでさえ、失神呪文で意識が遠のきかけているのに、駄目押しで骨まで折れるほどの磔呪いを正面から受けたのだ。どちらか一方ならともかく、同時に襲ってきた痛みに耐えきれずがなかった。

「ようやく捕まえることができた」

魔眼蒐集列車は汽笛を上げながら遠のいていく。

ヴォルデモートは死喰い人の亡骸を雪の中に投げ捨てると、セレネの身体を拾い上げた。

「今年は楽しいクリスマスになりそうだな、ホムンクルス」

すでに気を失っている少女に語りかけながら、ヴォルデモートは「姿くらまし」

をした。

※

それから、数時間後のことだった。

「ゴーストが『あの人』に攫われた!？」

セオドール・ノットの叫び声が、魔眼蒐集列車を震わせていた。

無事にオークションが終わり、新たな魔眼を移植した青年は、グリンデルバルドに詰め寄っていた。

「あいつの声が聞こえないと思ったら、攫われたってどういうことだ!? お前、なにしているんだよ!？」

「君の傍にるように、彼女から命令された」

「ふざけるな!？」

セオドールはグリンデルバルドの襟元をつかみ上げる。

「お前なら『あの人』と戦えるだろ！」

「彼を怒らないであげて」

カリーがセオドールを止めようとした。

「彼があ場で立ち向かっていたら、私たちが皆、殺されていたかもしれないの。それに『あの人』が乗り込んできて列車の運行に支障が出たら……たとえ追いつくことができても、オークションが開催できなかったかもしれないのよ」

「それでも——!!」

「オークションの開催を妨げることを、彼女は望んでいなかった」

その理由は分かるだろう、といわんばかりの眼で、グリンデルバルドはセオドールを見据えていた。

セオドールは奥歯を軋むほど噛みしめながら、ゆっくりとグリンデルバルドを降ろしていく。

これでも、ずっと彼女の顔を見てきた。

親衛隊隊長になってからは、彼女の右腕として立ち振る舞い、今ではセレネの趣味嗜好から行動パターンに至るまで大体把握している。セレネなら、セオドールが

新たな魔眼を手に入れられるようにするため、是が非でも無事にオークションが開催されるように動いていたことだろう。

だから、彼女は死喰い人と戦ったのだ。

もし「姿くらまし」ができたとしても、ヴォルデモートを近づけさせないため、どこかもっと遠くへ逃げたような気がする。

しかし、実際にはIFなどない。

セレネはヴォルデモートに敗北し、攫われてしまった。

「……くそっ」

セオドールは苛立ちを壁にぶつけるように、拳を叩きつける。

鈍い音と共に、ひりひりとした痛みが伝わってきた。

肝心な時、いつも自分は無力である。

3年生の頃、ホグワーツへ向かう途中で吸魂鬼に襲われた時、自身は震えているだけで何もできなかった。

第二の試験のとき、彼女は予想外のハプニングに襲われていたのに、ろくに助けることができなかった。

同じく第三の試験では、心も体もぼろぼろになるまで戦った彼女を見守っていることしかできなかった。

魔法省の戦いでも、最後の最後で追いつけず、彼女は血を吐くような怪我をしていた。

昨年のクリスマスイブに至っては、彼女が死に物狂いの戦いをしているとは知らず、部屋で不貞寝をしていた。

そして、今回。

やはり、自分は何もできなかった。

オークションに参加している時も、視界が視えないせいで、彼女が自分のしたことに怒り、部屋から出てこないのだと勘違いしていた。

「ちくしょう、いつも、オレは……」

「嘆いていれば解決するのかね？」

火に油を注ぐような声が背中にかけられる。

セオドールは震えが止まらなかった。自分の無力さとグリーンデルバルドの淡々とした声に対する怒り、そして、これからするべきことに対する恐怖。そのすべてが

足を震わせていた。

「分かつてる、ああ、分かつてるさ！」

答えは単純明快だ。

一刻も早く、セレネの救出に向かうこと。だがそれはすなわち、ヴォルデモートと戦うということだ。セオドールは一度もヴォルデモートを見たことがない。声を聴いたことすらない。しかし、生まれた時からその恐ろしき所業は何度も何度も聞かされていた。

この魔眼を手に入れたところで、たった一人で今世紀最大の闇の魔法使いと争うことができるのか。セレネの足元にも及ばない自分が、闇の帝王を倒し、彼女を救出することができるのだろうか。

「ちくしょう」

駄目だ。何度思考しても、勝てる姿が思い浮かばない。

奥歯が砕けるくらい噛みしめても、何も事態は変わらない。むしろ、刻一刻と悪化している。闇の帝王がセレネをどうするつもりなのか分からないが、絶対に彼女にとって良いことではない。それだけは鮮明に分かっていた。

「助けに行くに、決まってるだろ」

口は動いた。心も動いている。

だが、正常な思考が停止を訴えている。

無謀すぎる。

身体に爆弾をつけて敵陣に飛び込んだのに、誰も殺すことも救うこともできませんでした、という未来が目に見えている。

それでも、彼女を助けられないなんて選択肢は最初から存在しない。

「7年、待ったんだ」

セオドールは目を瞑り、7年前のことを思い出す。

はじまりは、組み分けの儀式のときだった。

組み分け自体は予想通りのスリザリンに決まり、これから7年間も共に過ごす同級生を見渡してみると、ほとんどが純血の家系で顔見知り。新鮮味がないと思っただその瞬間、彼女の姿が目に入った。

小さな女の子だった。

ミリセント・ブルストロードの隣に、小柄な少女が座っている。大柄なミリセン

ト・ブルストロードの隣だけに、一際小さく見えた。丸くて黒い瞳がウサギのように可愛らしく、制服から覗かす細い手がどきりとするほど白い。

この場にいる誰よりも、少女に眼を奪われた。

組み分けの儀式が終わり、ダンブルドアが一言二言話した気もするが、あまり頭に入ってこなかった。

宴会が始まり、食事の時もちらちらと彼女を見る。

彼女は一口一口、料理を味わいながら丁寧に食事をしていた。その所作振る舞いは絵画のように見惚れるまで美しく、上級生よりも完成されていた。

だから、呟いてしまった。

『あの子は……』

『ん？ ああ、セレネ・ゴントだってさ』

ザビニ・ブレーズが呟きを拾い、答えてくれた。

『聖28族の家名っぽいけど、マグルで育ったらしいから、穢れた血なんじゃないか？』

『マグル生まれ、か』

少し、心にひびが入る。

分かったのは名前と育ちの違いだけ。普段の自分なら「穢れた血」など興味の欠片も持たず、そのような下賤な者に惚れかけた自分を叱責していただろう。しかし、この時は彼女がマグル生まれであることなんて、どうでも良く思えた。

マグル育ちであることが分かって、ずっと彼女に見惚れていた。

綺麗なものを綺麗だと認めるように、可愛い子を可愛いと思っただけが問題なのだ。あの宴の時、きつと彼女は自分のことに気付いていなかっただろう。自分が視界にすら入っていなかったかもしれない。

だけど、あの瞬間、心を奪われたのは間違いない、心の底から「スリザリンに選ばれてよかった」と感じたものだ。

以降、ずっと視線の端で彼女を追い続けていた。

ただ同じ寮で、同じ授業を受けて、同じテーブルで食事をしているのに、どうしても言葉を交わせない。偶然近くに座っても、心が固まったように一歩前に踏み出せなかった。

それでも、無理やり話題を作って、どうにか話しかけたら、脅されるように配下

にされ、非常に面倒極まる雑用を押し付けられてしまった。

セレネの見た目は相変わらず小動物のように可愛らしいのに、腹黒で意地が悪くて狂暴で人使いが荒く、その上、他人を捨て駒か何かのようにしか思っていないことが、非常に痛い程よく分かった。

ところが、自分は腹黒い女のため、彼女がより良い学園生活を送ることが出来るように裏から手を回したり、信奉者を統率したりしている。

結局のところ、どんなに彼女の悪い面を見ても手を焼いてしまうのは、きっと好んでいるからなのだろう。

だいたいセレネは小さな身体で支えきれないほどの重い荷物を背負い、薄氷の上に立っているような危うさがある。いつその氷が割れて、落ちて怪我をしたり、最悪死んでしまったりしてもおかしくない。彼女からは、そんな危うさが感じられた。そんな彼女を、どうしても放っておけない。彼女が傷つく姿を見たくないし、すぐ近くで守ってあげたい。

例えるなら、友人のザビニが露骨に笑いながら

『見てくれは良くて、あんな狂暴な女を好きになるなんて……お前さ、いかれて

るんじゃないのか?』

と言われ、すぐに反論できないくらい、惚れこんでいる。

彼女の傍に寄り添い、いつも頼りにされる存在になりたくて、ずっと死に物狂いで魔法の訓練をしてきた。けれど、努力をし続けるうちに、自身の才能の限界に気付いた。セレネの要求する魔法の習得に時間がかかり過ぎる。いまだに縄抜けの魔法の成功率は低いし、飛行呪文はてんで駄目だ。魔力も魔法のセンスも圧倒的に足りない。

セレネやハーマイオニー・グレンジャー、ハリー・ポッターのような天才たちに絶対手が届かない。セレネが目をかけている下級生、ノーマン・ウォルパートに自身が抜かされるのも時間の問題だと悟った。

そんな風に打ちひしがれていた時だった。グリンデルバルドが魔眼蒐集列車の話を持ってきたのは。

いつも傷ついて帰って来る彼女を助ける力を手に入れるためには、もう新たな魔眼を手に入れるしかない。だから、眼球が摘出される恐怖にも打ち勝つことが出来たのだ。

「あいつのこと、7年間、ずっと好きなんだ」

セオドールは想いを確かめるように、自分の言葉を噛みしめる。

セレネが好きなんだ。ずっと好きだったんだ。

7年かけて、ようやく胸に積もってきた想いを解禁したばかりだ。

「セレネを……あんな奴に奪われてたまるか」

7年かけて思いを伝えた大切な相手を、ぼっと出の闇の帝王に奪われてたまるか！

セオドールは活を入れるように頬を叩く。

ヴォルデモートがいそうな場所は、見当がついていた。

4年生の時に訪れた「リドルの館」。もしくは、死喰い人に加担する純血一族の屋敷だ。後者はおそらく、純血屈指の名家であるマルフォイ家が妥当だろう。

「無謀だぞ」

自分に魔眼を買うように囁いた男が、咎めるような声をかけてくる。

「無謀でも構うものか」

「自殺行為だ」

「それでも構わない」

セオドールは杖を両手で握りしめると、グリンデルバルドの喉元に向けた。

「オレは、セレネを助けたいんだ！」

「……そうか、それなら止めはしない」

そう言いながら、グリンデルバルドは杖を取り出した。セオドールは警戒し、杖を両手で握りしめながら、彼が妙な真似をしでかした瞬間、すぐに攻撃系の魔法を唱えることができるように睨み付ける。

ところが、グリンデルバルドが使ったのは、実に初歩的な呪文だった。

「『アクションー来い』」

グリンデルバルドが杖を振るうと、セレネの置いて行った鞆から一本の棒が飛び出してきた。

非常に節の多く、異様に長い杖……アルバス・ダンブルドアの杖だ。グリンデルバルドはその杖をキャッチすると、自身の杖と持ち替えた。まるで握り心地を確認するかのように、右手の指を幾度か開閉させていた。

「我々がトム・リドルに喧嘩を売りに行くには、それ相応の準備が必要だ」

「我々？」

「少年、私が怒っていないと思っているのかね？」

グリンデルバルドは杖を大事そうに撫でながら、片方の瞳を怪しく光らせた。

「私は負けず嫌いだね。やられた分の借りは倍にして返さないと気が済まない」

グリンデルバルドは自身の杖をセレネの鞆に放り投げると、代わりにダンプルドアの杖を自身のポケットにしまった。

「私は現在、魔法使い1000人分に匹敵する実力がある。つまり、私と君で1001人の軍隊だ」

セオドルは、グリンデルバルドの怪しげに光る瞳の奥に、めらめらと燃え上がる怒りの色が見え隠れしていることに気が付いた。

今世紀有数の闇の魔法使いは、セレネが攫われたことに対して、そして、ヴォルデモートに出し抜かれた事実に対して、静かな怒りを燃やしている。

「幸い、列車がロンドンに着くまで15分程度がある。作戦を話し合うとしようか、少年よ」

グリンデルバルドは手を差し伸べてくる。

一時だけの共同戦線。敵は闇の帝王。助け出すのは、セレネ・ゴースト。

魔王から姫様を救い出すのは物語の王道だが、そのために別の魔王と組むのは邪道だろう。セレネなら皮肉交じりにそんなことを言いだしそうなものだ。

「……ああ、ロンドンに着いたら出陣だ」

セオドールはそんなことを考えながら、心強いが要注意な人物の手を硬く握り返した。

ロンドン到着まで、あと15分。

セレネが無事であることを祈りつつ、セオドールは作戦会議に己の神経全てを注ぎ込んだ。

一方、同時刻。

とある山奥で、ハリー・ポッターとハーマイオニー・グレンジャーは悪態をついていた。

シリウスの実家に滞在していたのは、今は昔の話。

8月の末には分霊箱の秘密について、シリウスに隠し通すのが難しくなり、ハリーたち3人組はキャンプ道具一式を持って飛び出してきたのだ。

おかげで、グリーンゴッツに忍び込む方法や他の分霊箱の在りかについて、気兼ねなく相談することができるようになったのだ。

ところが、この選択は悪かったかもしれないと判明した。

食糧問題に直面したのである。

一泊二日のキャンプなら良かったかもしれないが、それが連日続くとなると、事前に持参した食料は底を尽きる。ハリーは問題分子で指名手配中、ハーマイオニーはマグル生まれの手配中、ロンは黒斑病で家にいる設定になっている。そうなる、買い出しも極めて困難だ。

だから、食料は隠れ住む山奥で調達するしかない。つまりは、あとは毒かもしれ

ぬ茸やベリー類に限られてくる。魚は釣れるが、調味料がないので灰色に焼くことしかできなかった。

そんな生活が、何週間も続いた。

まずロンがキレた。彼はいつも母親や屋敷しもべ妖精の作った温かな料理を三食、何の疑問もなく食べていたので、この不自由な生活に我慢ならなかったのだらう。

ロンは食糧事情と分霊箱探索が行き詰まっていることに文句を言い、かといって、自分から考えたり食料調達に向いたりせず、とにかく当たり散らした。

ハリーの耳の奥には、ロンが

『グリーンゴッツに忍び込むにしてもお手上げ。分霊箱を破壊する方法もない。おまけに、最後の1つは見当すらついてない。僕は数週間も経つのに、何も達成できてない！僕は、ハリーにちゃんとした分霊箱を破壊する計画があるって思ってたのに！』

このままいくら経っても、進展する可能性はまったくなーし!!』
と叫んだ声が、今でも残っている。

ロンはその後、怒りながら「姿くらまし」をして去ってしまった。

ロンが姿を消してから、ハリーはハーマイオニーと共にあちこちを転々した。ハーマイオニーはロンがいなくなって、毎晩すすり泣きをしていた。

3人が2人になったところで、グリングottsに侵入する方法が思いつかなかった。

適当なゴブリンに服従の呪文をかけ、強行突破したら最後、ヴォルデモートに分霊箱を探して回っていることが露見してしまうことは明白であった。他の分霊箱の場所が分からない以上、強行突破だけは避けたい。

そうになると、ますますグリングottsへの侵入作戦が絶望的になっていった。

ハリーたちは、わずかな食料を探し求めながら、数日おきに西から東へ、話し合う内容も堂々巡り。進展は何もなく、隠れて過ごす暗い日常だけが過ぎていった。

しかし数日前、この悪循環だった旅に、ようやく光明が差し込んだのだ。

ダンブルドアからハーマイオニーへ遺贈された「吟遊詩人ビードル」の本。その

ページの端に書かれていた印が『グリンデルバルドの印』だと判明したのである。「これは、グリンデルバルドの印だよ。僕、見たことある。ビルとフラーの結婚式だ。ルーナのパパが、この印を首からかけていたんだ！」

「もしかして、ルーナのお父さんに聞けば、なにか謎が解けるかもしれないわ！」しかも、ルーナの父親であるゼノフィリウス・ラグブッドは月刊誌「ザ・クイブラー」でハリーの味方であることを宣言している。ルーナ自身もハリーたちの友だちだということもあり、聞きに行くに値しうる人物だと判断したのである。

早速、ハリーたちは行動に移した。

まずは安全のため、「透明マント」に隠れてルーナたちの住まう場所に「姿くらまし」をした。しばらく歩けば、どの家がラグブッド宅なのかはすぐに分かった。低い丘陵地帯のてっぺんに、世にも不思議な縦に長い家がくっきり空にそびえていたのである。まるで巨大な塔のようだ。

ハリーとハーマイオニーは顔を見合わせた。

まさしく、どこか不思議な空気を醸し出し、やや常人離れた見解を持つ少女、ルーナ・ラグブッドが住んでいそうな家だ。

前庭も奇妙奇天烈で、ゆらゆら揺れる触手のような草やオレンジ色の蕪がたわわに実った木、萎びた切り株などで溢れている。

運が良いことに、ゼノフィリウスは在宅中だった。

彼は若干、挙動不審だったが、グリンデルバルドの印について説明してくれた。ハリーたちが「グリンデルバルドの印」と呼んでいた三角の模様は、「死の秘宝」の信奉者であることを表す印らしい。

「三兄弟の物語に出てきた『ニワトコの杖』『蘇りの石』、そして『透明マント』。この三つを合わせて死の秘宝だ！」

ゼノフィリウスは紙に書きながら説明する。

「死をも滅ぼす最強の杖、死者を復活させる石、そして、何年経とうとも全ての物から隠してくれる透明マント。もし、この3つが集まれば、死を制するものになれるだろう」

その後、ゼノフィリウスは三つの秘宝が実存する理由を説明し始めた。ニワトコの杖以外は根拠にかけるものだったが、すべて説明し終わった後、「ルーナを呼びに行ってくる」と言って退席した。

だがしかし、ゼノフィリウスが退席した理由は嘘だとすぐに判明した。

ゼノフィリウス退席後、ハリーたちはルーナの部屋を見に行ったが、何か月も帰ってきた形跡がなかったのだ。そのことを聞いたところ、ゼノフィリウスが大っぴらに雑誌で「ハリー・ポッター」を支持してたせいで、ルーナは人質として死喰い人に連れていかれたことが発覚したのである。

「わたしは、娘を取り戻さなければならぬ。君たちを、あいつらに引き渡さなければ、ルーナを救うことができない！」

ゼノフィリウスは戦おうとしたが、ハリーたちには敵わなかった。

死喰い人は今すぐにでもやって来る。だが、ここで戦うのは賢明ではない。

そう判断すると、ハリーとハーマイオニーは再び「姿くらまし」をした。

ラブグッド宅を離れた頃、空はすっかり暗くなっていた。

「まったく、とんでもない脱線だったわ」

ハーマイオニーは下草を踏みしめながら、周囲に人払いの魔法をかけ始める。

「ゼノフィリウスを訪ねようなんて、考えたことが間違だったのよ！」

「でも、ダンブルドアは、僕たちに死の秘宝を探してくれと言いたかったんじゃない

いかな？ 死の秘宝のマークが、君が貰った本のページの端に書き込んであったくらいだし」

ハリーはテントを張る準備をしながら、ハーマイオニーに語り掛ける。すると、ハーマイオニーは尖った声で否定した。

「ハリー、大事なものは分霊箱よ。死の秘宝ではないわ。そもそも、死の秘宝なんてありえないもの」

「だけどさ、僕の透明マントは？」

何代も受け継がれてきた透明マント。

まったく効力が失せず、完璧に自分たちを隠し続けてきた透明マント。

それは、明らかに『死の秘宝』と一致するように思えた。

「それに、ニワトコの杖も実在するんだろ？」

「ええ、でも杖は持ち主の技量によるところが多いわ。杖だけが強いなんて、信じられない」

「でもさ……杖？……そういえば」

ハリーの中で何かが繋がった。

「ダンブルドアだ！」

「なに？」

ハーマイオニーは「マグル避け」の呪文を駆け終わると、不思議そうに近づいてきた。

「ダンブルドアの杖が秘宝なんだ！ ほら、セレネに遺贈された杖！ 君の本、僕のスニッチ、ロンのライターと一緒に、セレネに遺贈された杖だよ！」

ハリーはこの数週間、何度かヴォルデモートの思考を見ることができた。

ヴォルデモートは海外にいる。杖作りのグレゴロビッチを探し求めていたが、彼はヴォルデモートの探している杖を持っていなかった。ヴォルデモートの探した杖は、金髪の若者に盗まれていたのである。ヴォルデモートの関心は金髪の若者に移ったが、ある日を境に、関心の対象がダンブルドアに変わり、その後、セレネへと変わったのである。

「あいつは、僕に勝てる最強の杖を探し求めているんだ。そして、その杖は、いまセレネが持っている」

「ハリー」

「あの金髪の人が誰なのか分からないけど、少なくとも、グレゴロビッチが持っていた杖をダンブルドアは持っていた。そこで、あいつはダンブルドアの杖を求めていたんだ。でも、ダンブルドアはセレネに杖を渡した後だった。遺贈の話は魔法省の記録に残っている。だから、あいつは遺贈主のセレネを探してるんだよ！」

「ハリー、杖は迷信よ」

ハーマイオニーは諭すように言った。テントの灯りを付けながら、どこまでも冷静な口調で話しかけてくる。

『『あの人』が迷信を信じるとは思えないわ。それに、その考えも『あの人』があなたにわざと見せているものかもしれない。

貴方がセレネに好意を持っていたことくらい、調べればわかるもの。『あの人』がセレネを追いかけていることを知れば、貴方が焦って連れ戻そうと——……」

「それなら、セレネじゃなくてジニーだ」

ハリーは断言する。

穏やかなセレネも好きだったが、今は快活で明るいジニーの方が好きだった。今でもジニーの燃えるような瞳や柔らかい唇の感触を夢に見る。そのくらい、ジニー

が好きだった。

「僕を誘い出したいのなら、シリウスの時みたいに、ジニーを拷問している様子を見せつけてくるはずだ」

「それは……そうかもしれないけど、でも、それならどうして、ダンブルドアはニワトコの杖をセレネに預けたの？」

ハーマイオニーが聞いただしてきた。

「死を滅ぼす杖なんて、セレネが欲しがるとは思えないわ」

「……僕に渡すためだった、とか？」

ハリーは呟いてみたが、それはかなり核心を突いている気がした。

「セレネなら僕に渡してくれる。セレネは杖に興味がないようだったから、僕に渡してくれる。僕がヴォルデモートを倒す『選ばれし者』だから！」

ダンブルドアは言いたかったんだ。最強の杖を使って、ヴォルデモートを倒せって」

ハリーは興奮しながら自分の説を主張するが、ハーマイオニーは真面目な顔のままだった。

「ハリー、聞いて。それなら、何故、最初からあなたに杖を渡さなかったの？
どうして、セレネに渡したのかしら？」

「それは……」

ハリーは答えられなかった。

ハーマイオニーはそれで満足したらしい。椅子に座りかけ、あつと声を上げた。
ハリーもそれで気づいた。テントの入り口に置いてある「かくれん防止器」が明るくなり、警戒するように回り始めていた。外の声がだんだん近づいてくる。荒っぽくて興奮した声だ。

「両手を挙げて出てこい！」

暗闇の向こうから、しゃがれた声が下。

「中にいることは分かってんだ！ 6本の杖がお前たちを狙ってるぞ!!」

ハリーは急いでハーマイオニーを振り返ったが、あろうことか、ハーマイオニーは杖を外ではなくハリーの顔に向けていたのだ。破裂するような音と共に白い光が炸裂したかと思うと、ハリーは激痛でがっくり膝を折った。何も見えず、両手で覆った顔が腫れあがっていくのが分かった。

同時に、重い足音がハリーたちを取り囲んでいた。

「立て、虫けらめ」

誰とも分からぬ男が、ハリーを荒々しく引っ張り上げた。

不死鳥の尾羽を使った杖を取り上げられ、為す術もなくなる。

ハリーたちを襲ったのは、人攫いだった。

ハーマイオニーはハリーの正体が露見しないようにハリーの顔を腫れあがせたのが分かったが、それもすぐに意味のないものになってしまう。

「ほら、嬢ちゃん。この顔、お嬢ちゃんにそっくりだ」

ハーマイオニーの方がバレてしまったのだ。

ハリー・ポッターと行動を共にしている、マグル生まれなのだと。

その流れで、ハリーも「問題分子ナンバーワン」ではないかと疑われてしまう。額の稲妻型の傷は引き延ばされていたが、額に傷があることには変わらない。

「ひっひひ、今日はラッキーだぜ」

「ああ、青いガキと人間もどきのせいで散々な目にあったが、こんなところで大物と巡り合えるなんてな」

「幸運の女神さまとやらに感謝しないとな、ええ？」

人攫いたちは高らかに笑う。

「よし、マルフォイ邸に行くぞ。あそこに行けば、ガリオン金貨たっぷりだ！」

「ああ、二十万ガリオンなんて眠じゃねえくらいの大金だ！」

人攫いたちはハリーとハーマイオニーを引っ張り上げると、下品な笑い声と共に「姿くらまし」をした。

「た、大変だ」

少し離れたところで隠れていた青年、ロン・ウィーズリーは震えあがった。

一度は喧嘩してしまったが、やはり、彼らのところに戻りたかったのである。

「とにかく、助けないと」

ロンは恋人と親友が消えた場所に立つと、固く目を瞑った。そして、そのまま

「マルフォイ邸」に姿くらしをする。ぱちん、という音の後、眼を開ければ見知らぬ邸宅の前に立っていた。人攫いたちは既に邸宅の中に入ったのか、どこにも見当たらない。

「だけど、どうやって侵入しよう」

正面突破がカッコいいが、「例のあの人」がいるかもしれない以上、策を練らないといけない。

だけど、こうして悩んでいる内にも、大親友のハリーや愛しのハーマイオニーが傷つき、苦しんでいるかもしれない。そう思うと、やはり正面突破しかないように思えた。

「よし、行くぞ！」

ロンは活を入れなおすと、マルフォイ邸の門に杖を向ける。

「『アロホ——……』」

「『アクシオ』！」

ロンの声にかぶせるように、鋭い声が聞こえた。途端、ロンは脇道の茂みに引っぱられてしまう。ロンの顔は蒼白になった。死喰い人に見つかってしまったのだと

思ったのだ。すぐに杖を握り直し、自分を引っ張ったであろう人物に杖を突きつける。

「動くな、僕は——……」

「いや、お前こそ動くな。静かにしろ」

ロンはそこに隠れていた人物を見て、息を飲んだ。

どうも、F G Oの鳴鳳荘でサラザールを名乗る男と遭遇した際、「スリザリン!?」と思った人です。宝具では蛇を召喚するのかな? (たぶん違う

死の秘宝編も中盤に差しかりました。

たぶん、順調にいけば夏前には終わる、のかな……? ?

○ルヴィア

ルヴィアといえば、淑女のフォークリフト！ 人さらいや死喰い人相手に、プロレス技が炸裂しました。

……決して、ハリポタ界における宝石魔術の位置づけが難しかったとか、そういう理由ではありません。

○ヴォルデモート

列車の上空でスタンバってました。力任せに乗り込めばよかったのでは？とか、そういうことは言っではいけない。

○ノット

魔眼ゲット。どの魔眼なのかは、近日公開。

なお、2章で彼が初めてセレネに話しかけたのは、セレネがジャスティンと仲良くしていたから。

今回、彼の独白を書くにあたり、1章5話はセレネがハリーの組み分けを見たあと、ヴォルデモートの名を口にしてしまい、ミリセントとドラコに怒られ、謝るシーンで終わっていましたが、新たに宴のシーンを追加しました。

ただいま時間を見つけて、2014年頃に書いていた3章以前の物語の内、内容や流れ、大事な箇所は変えず、表現や描写の一部を書き加えたり、書き直したりしています。

今後、前半部における物語の根幹にかかわる大規模な改訂&追記はしない予定ですが、万が一、行った場合には、最新話の後書きにてご報告させていただきます。

○ハリー、ハーマイオニー

グリフィンドールの剣がバジリスクの毒を吸っていないため、ハリーに遺贈されていません。その結果、ゴドリツクの谷ではなく、グリンデルバルドの印を知っていたゼノフィリウスのところへ。

結果、ハリーたちの捕まる時期が早まりました。

なにせ、この時期のハリーは「ヴォルデモート」が禁句だとは知らないのです……。

○ロン

原作通り、途中で仲たがいました。

そして、原作通り、アレを使って戻ってきました。アレは今後も活躍予定です。

本当、どうして、あんなロンとハーマイオニーが結婚したんだろう……。次回もよろしくお願いします！

90 話 マルフォイの館

ついに90話。

残り10話で100話。できれば100話で死の秘宝完結したいけど、上手いくか……ちよつと不安ですが、これから更新を頑張っていきたいと思います。

赤子の泣く声が聞こえる。

母親を求めるような、どこか切ない泣き声。

セレネは重たい瞼を開けた。

目の前には、クリスタルのシャンデリアが輝いている。

どこことなく見覚えのある広間であった。だけど、身体が自由が利くのは頭くら

い。両手首は鎖で繋がれ、身体は吊るされていた。両足こそ自由だったが、いくら伸ばしても床に届かないくらい宙に浮かんでいた。

幸運なことは、魔眼殺しをかけられていたおかげで、死の線が視えずに済んでいる。

不幸なことは、死の線を切って逃げ出すことができない、ということだ。

「……」

状況を把握するため、部屋全体を改めて見渡してみる。

部屋の中央には縦に長いテーブルが置かれている。他の調度品はすべて壁際に追いやられていた。遠目から見ても十分すぎるほど複雑な意匠を凝らした調度品なのに、なんだかもったいなく思える。大理石の床は自身の顔が映るくらい磨き抜かれており、暖炉までが見事な装飾の大理石だった。

二つの扉が見えた。一つの扉は頑丈そうだが小さな扉だ。人が一人通るのがやっとならう。

そして、もう一つは大きい扉だった。小柄な象が一頭通れそうなくらい巨大な扉だったが、その前に一人、見覚えのある青年が衛兵のように立っていた。プラチナ

ブロンドの髪に顎の尖った青白い顔——間違いなく、ドラコ・マルフォイだ。

その顔を見て、納得した。

「……分かりました、マルフォイ。ここは貴方の家ですね」

セレネは自分の出した答えを確かめるように呟いてみる。

家具の配置は異なるが、全体的な雰囲気は3年時のクリスマスに訪れたマルフォイ邸の内装によく似ていた。おまけに、ドラコ・マルフォイまでいるなら疑いようがない。

「見張りですか、マルフォイ？」

マルフォイは何も答えなかった。

彼の足は微かに震え、気の進まない表情で床を見つめている。

まだ、赤子のすすり泣く声が遠くから聞こえてくる。

「この屋敷には、赤子がいるのですね。貴方の弟か妹？」

セレネが尋ねてみるが、これまた返事は返ってこなかった。

会話をする意思を感じられない。むしろ、セレネの存在を怖がっているようにさえ思えた。マルフォイは、セレネがまるでヴォルデモートか何かのように感じてい

るのだろうか。

セレネは肩を落とした。

「……まるでスパイ映画みたい」

セレネは今の状況を自嘲気味に呟いてみる。

国民的人気なスパイ映画では、だいたい1度か2度、主人公が悪者に捕まる。悪者は主人公をその場で銃で一思いに殺せばいいものを、もったいぶって長々と話したり、意味もなく泳がせたり、わざわざワニやサメに食わせて殺そうとしたり、時間と手間暇をかけて殺そうとする。イギリスの秘密機関に所属する主人公は隙をつき、機転と超常的な武器で脱出し、悪者を倒すのだ。

セレネは「何故、捕まえてすぐに殺さないのか」と、テレビを見ていた時は思ったものだが、実際に同じ立場になってみると、非常にありがたく思えてくる。ヴォルデモートが自分を気絶させた後、「アバダケダブラ」をやっついていなくて良かった。どうして、自分を生かしているのかは謎だが、こうして考え、逃げ出す策を練ろうとする時間ができた。

ただ、スパイ映画と異なるのが、超常的な武器がないことだ。

セレネはため息をつきたくなった。自身の杖は手元にないので、縄抜けの魔法は使えない。眼鏡をかけているので、線を切って逃げ出すこともできない。両手を縛られていたので、眼鏡を外すこともできなかった。

逃げる手段として利用できそうなのは、マルフォイだけだ。

彼を籠絡させるに越したことはないが、どう考えてもマルフォイの中では、「ヴォルデモートの脅威>セレネ」である。杖もない状況で、これを覆すのは至難の業だ。はてさて、どうするべきだろうか。そんなことを考えているうちに、扉が乱暴に開かれる。

ルシウス・マルフォイだ。ルシウスが何か大きな塊を二つ蹴り飛ばしながら、部屋に入ってくる。

「ドラコ、我が君はまだ戻られないのか？」

ルシウス・マルフォイのやつれた顔は、幸せの絶頂のように輝いていた。反対に、息子の方は刻一刻と血の気が失せているように感じる。マルフォイは首を横に振ると、父親が蹴っていたモノにおそろおそろ目を向け、すぐさま塊から飛び退くように離れた。

「ああ、こんな素晴らしい日はない！　我が君が戻られた暁には、大層お喜びになられることだろう」

ルシウス・マルフォイは謳うように語ると、二本の杖をテーブルの上に投げ捨てた。

セレネは目を細め、二つの塊に目を向ける。縄で嚴重に縛られた塊は人だった。一人は黒髪顔の腫れた男、そして、もう一人は良く見知った女だった。くせ毛の強い茶髪の女性は、間違いなく、ハーマイオニー・グレンジャーだった。

「ドラコ、よく見てみる。この男は、ハリー・ポッターだろう!？」

「僕は……分からないよ」

「傷跡があるだろ？　見たことがないか？」

「分からない」

「でも、ドラコ。こちらの穢れた血は、間違いなくグレンジャーでしょう？」

ルシウス・マルフォイの後ろから白い顔をした美人な女性が鋭く告げる。マルフォイの母親は息子の肩に手を置き、再び問いかける。

「よく見なさい、ドラコ。この娘は、グレンジャーでしょう？」

「僕……そうかもしれない……ええ」

ドラコ・マルフォイは、ほとんどハーマイオニーの方を見ずに答えた。

「なんの騒ぎだ、シシー？ なにが起こったのだ？」

ベラトリックス・レストレンジがマルフォイの両親の後ろから姿を現した。整えていない黒髪と血走った眼は変わらないが、胸にぽっかり穴が空いていた。

「ベラ、穢れた血のグレンジャーよ」

「そう、そうだ！　そして、その横にいるのが、たぶんポッターだ！　ポッターと仲間がついに捕まった!!」

「ポッターが!？」

ベラトリックスが甲高く叫んで後ずさりし、ハリーをよく見ようとした。

「確かなのか!?　闇の帝王はこのことを!？」

「まだ存じておられない。地下牢から戻られていないのでな」

「あああああ！　なんたる素晴らしき日なのだ！　ポッターとその仲間、そして憎たらしい人間もどきを同時に捕まえたなんて!!」

ベラトリックスの顔は紅潮していた。今にもスキップしながら歌い出しそうな勢

いである。

「でも、ベラ。貴方はここにいていいの？ さっきから二階で——……」

「おや、目が覚めたのかい、ホムンクルス。よく眠れまちたかー？」

ベラトリックスはマルフォイの母親から何か話しかけられていたが、それを遮り、セレネに視線を向けた。小馬鹿にするような口調は相変わらずである。いつも敵を小馬鹿にする態度が原因で負けているのに、慢心することがベラトリックスの魂に刻み込まれているのだろうかと思えてくる。

「ああ、我が君。早くお戻りになられてください！」

その姿は、神に祈りを捧げる献身な教徒のようだった。

もちろん、彼女が祈りをささげるのはヴォルデモートであり、神ではない。

「しかし、こいつは本当にポッターなのか？」

ベラトリックスは少しだけ怪訝な表情になると、ハリーの顔を見下した。

「蜂刺し呪いで膨らんでいるのか、それとも……まあ、これは簡単な呪文で分かる。

光栄に思え、小僧。私自らがお前を治療してやろう……『エプスキー——癒えよ！』」

ハリーが痛みで呻く声が聞こえた、と思った瞬間、喝采のような声が広間に響

き渡った。ルシウス・マルフォイとベラトリックスが上げた歓喜の声は、耳を塞ぎたくなるような叫びであった。

「ポッターだ！ 間違いなく、ポッターだ!! 最高だ!! 素晴らしい!!」

ベラトリックスは全身で喜びながら、ハリーを思いつき蹴り飛ばした。丁度、ハリーの身体がセレネの足元辺りまで転がされる。ハリーと目が合った。彼の緑の瞳は絶望で彩られていた。

「た、助けて！」

ハリーが自身の胸元に向かって叫んだ。胸元にはモスグリーンの巾着が提げられている。

「僕たちは、マルフォイの屋敷にいます！ 助けて！」

「気でも狂ったか、ポッティちゃん？」

ベラトリックスが高笑いをした。

「助けなど来ない！ お前たちの未来は決まってるんだ！」

「どういふことかね、ベラ」

ベラトリックスが高らかに叫ぶと同時に、もう一つの扉が開かれる。

そこから現れたのは、赤い双眸を蛇のように輝かせた男、ヴォルデモートその人だった。

「騒がしい。何が……ああ、そうか。そういうことか」

ヴォルデモートは視線をハリーに向けると、にたりと笑った。ヴォルデモートが杖を二本、持っている。そのうちの一本をテーブルの上に投げ捨てた。杖はからんと音を立て、テーブルの上に転がり落ちた。

「我が君、いかがでしたか？」

「地下牢のオリバンダーから話を聞いてきたが、あの杖はホムンクルス自身の杖だ。俺様の探し求める杖ではない」

ヴォルデモートは冷たい口調で話し始める。

どうやら、あの小さな扉は地下牢に通じていたらしい。そこには、去年の夏に攫われたオリバンダーが捕らえられている。おそらく、他にも囚人がいるだろう。助けてあげたいのはやまやまだが、まずは自分がこの状況を乗り切ることが先決だ。「そうだ、俺様の探し求める杖ではない。……さて、目覚めたなら答えてもらおうか、ホムンクルスよ。あの杖はどこだ？」

「あの杖？」

どの杖のことだか察しはついたが、セレネはとぼけたふりをする。

「何のことかしら？」

「とぼけるな。ダンブルドアの杖だ。お前に遺贈されたことは分かっている。ダンブルドアの杖はどこにある？」

赤い双眸がまっすぐ睨んでくる。

あの杖は、魔眼蒐集列車に置いてきた鞆の中だ。オークションは終わっていると願いたい、万が一のことがある。列車の中に置いてきました、なんて答えたら、ヴォルデモートが魔眼蒐集列車に急行すること間違いなしだ。オークションをめちゃめちゃにされては敵わない。

セレネは、嘘八百を並べることにした。

「どこに置いてきたのか忘れしました。私には必要ない杖でしたが、何しろ、ダンブルドアから『隠せ』と命令されていたものでして」

「嘘はいかんぞ、人間もどきが。……だが、もう最強の杖など必要ない。何故なら、俺様の殺す相手は杖さえ持っていないのだからな」

ヴォルデモートは空気まで冷たくするような笑い声をあげた。

「……すぐには殺さん。少し趣向を凝らすとしよう」

ヴォルデモートは杖を一振りした。中央に残された唯一の家具であってテーブルが、窓際へと追いやられる。これで、マルフォイ邸の客間はダンスホールのように開けた場所になった。

「さて、ホムンクルスよ。何故、俺様がお前にとどめを刺さなかったのか分かるか？」

「ライヘンバッハの滝へ一緒に出かけるためですか？」

セレネは懸命に頭を働かせた。逃げ出すための策が思いつかない以上、なんとかして話を延ばす。時間が延びれば、策が思いつくかもしれない。

「それでしたら、喜んで一緒に行きますけど」

「ホームズ気取りか、ホムンクルス？　俺様と一緒に滝つぼに落ちて、生還する
と？」

「……意外ですね、ホームズを読んでいたとは」

「何事にも意外なことはあるものだ。俺様は死ぬつもりはないぞ、ホームズ。いや、

死ぬことはできない」

ヴォルデモートは冷ややかな笑みを浮かべていた。

ルシウス・マルフォイとベラトリックスたちは話についてこれないようで、少し困惑しているのが伝わってくる。

会話を引き延ばすために「ライヘンバッハの滝」を持ち出したのだが、まさかヴォルデモートがホームズを知っているとは思わなかった。しかし、これも冷静に考えればわかる話だ。ヴォルデモートは1945年の時点でホグワーツに在学している。ホームズは、それより40年近く昔のイギリス屈指の推理小説だ。ヴォルデモートが孤児院時代に読んでいないはずがなかった。

「ホームズは俺様の考えている高貴なる計画に気付いていないようだ。だから、俺様がヒントをやるでしょう。」

俺様は誰よりも不死に近い存在だ。俺様を殺すことは何人たりとも不可能だ」それは知っている。

彼は死から逃れるために、分霊箱を作った。死の呪いを浴びても生き残ることができる。分霊箱がある限り、ヴォルデモートは永遠に死なない。たとえば、肉体を滅

ぼされたとしても死ぬことはないのだ。

「そう、良かったですね」

セレネは冷たく言い放ちながら、ヴォルデモートの真意を見定めようと思考を巡らせた。そんなセレネを嘲笑うように、ヴォルデモートは話を続けた。

「俺様は死なない。誰よりも死を屈服させた存在なのだ。」

しかしだ、俺様にも1つだけ勝てないものがある。なんだか分かるかね、幼きホームズ？」

「ハリー・ポッターですか？」

「今のお前はワトソンだ。的外れな答えばかりする哀れな役回りよ。では、俺様が更にヒントを出そう。」

俺様は死を超越した。その小僧のせい一度は塵以下の存在に成り果てたが、ヴォルデモート卿は肉体を得て復活した。

……しかしだな、俺様も老いる」

ヴォルデモートは最後の言葉を軽蔑するように言い放った。

「永遠の命を手にしても、肉体は老いる。いずれは俺様の完璧なる肉体も朽ち

果て、塵となるのだろうか」

4年生の時、ヴォルデモートが墓地で使った呪文は、自身の肉体を再生させるための魔法だ。塵になった肉体を再生することはできない。

単なる若返りであれば、以前、セレネがグリンデルバルドに使った魔法を使えばよいのだが、実はあの魔法にはデメリットが存在する。

あれは、時を限定的に巻き戻す魔法だ。

肉体を構成する細胞の時を巻き戻し、若返らせている。だが二つだけ、巻き戻せないものがある。それは、脳と心臓だ。肉体の中心に位置する重要器官を若返らせることは、禁忌に足を踏み入れてもできない。心臓は絶えず脈を打ち続け、いずれは老化が極まり、止まる。だから、肉体を若返らせても、不死となることはできない。それを動かし続ける魔法は、マグルの現代医療はもちろん、優れた癒術や闇の魔術をもってしても不可能だ。

「……つまり、自身の肉体を捨てて、新たな肉体に乗り換えるത്？」
セレネは答えた。

まるで、SF映画の悪役みたいな考えである。実際、ヴォルデモートは悪だが。

「転生と言いたまえ、ホムンクルスよ」

「まるで、蛇ね」

セレネは軽蔑するように言い放った。

蛇が脱皮して、新たな肉体を得るように、ヴォルデモートは古い肉体を脱ぎ捨てて、まったく異なる新たな肉体を手に入れようとしているのだ。実現すれば、完全なる不老不死である。

しかしながら、この男が適当な肉体を転生体とするはずがない。

たとえば、純血主義の男だから、転生体も純血であることは間違いない。

また、スリザリンの末裔であることにも固執していることから考えるに、スリザリンの血を引く者を選ぶだろう。そこまで考えた時、足元から身体が冷えていくのが分かった。

「……まさか……」

セレネは1つの仮説に辿り着く。

下に転がるハリーはまだ困惑の表情を浮かべているが、ハーマイオニーはセレネと同じ仮説に辿り着いたらしい。顔からは血の気が失せ、茶色の瞳は恐怖の色で染

まっている。

「……ほう、まさかとは？」

ヴォルデモートの唇がにたりと弧を描く。

その先を言えとばかりに。

皆が静まり返った。遠くから、赤子の泣く声だけが聞こえてくる。胸を揺さぶるような切ない泣き声が、先程よりも大きく泣き響いている。

「誰の赤ん坊ですか？」

「誰の子だと思う？」

「……貴方の子ですか、ヴォルデモート？」

セレネの唇は静かに答えを紡いだ。

最初は自分に転生するのだとばかり思った。だが、自身はホムンクルスと人間の間の子だ。巨人や吸魂鬼を利用して、純血の魔法使い優位な世界を築こうとしている者が、人間とは言い難い存在に転生するなどありえない。

そう考えると、既に純血とスリザリンの血を引く者を創り出すほかあるまい。ホムンクルスではなく、人間を創り出す方法は、現時点で1つだけだ。

「スリザリンの血を引く純血の子を産み落とし、その子に転生するのですね」

先ほどから屋敷を震わせる泣き声こそ、その証拠だ。

しかし、まだ謎は残る。

その謎を口にする前に、ヴォルデモートがセレネの心を読み取ったように答えてくれた。

「察しの通り、この泣き声は俺様の子だ。俺様が転生するにふさわしい、スリザリンの血を引く純血だ。しかしだ、ゴーストよ。赤子に転生したところで、俺様は無力にすぎない。転生の魔法を使うにしても、最短で5年後になる。

ならば、なぜ……俺様はお前を生かしているのか？ 答えは簡単だ。

俺様は、お前の肉体に転生するのだ」

改めて場が静まり返る。

赤子の金切り声が屋敷を震わせていた。

このことは、マルフォイ一家も、腹心のベラトリックスでさえ聞いていなかったのだろう。ベラトリックスの目が点になり、間の抜けたように口を開けているところを、セレネは初めて見た。

「……べら、あの耳障りな声を黙らせて来い」

「しかし、我が君。私はここで——……」

「早く黙らせろ！」

「は、はい、我が君！　かしこまりました！」

ヴォルデモートが鞭を打つように鋭く言うと、ベラトリックスは風のように客間から立ち去った。数秒もしないうちに、赤子の声は止んだ。ヴォルデモートは満足そうに頷くと、セレネの足元に向かって歩き始めた。

「さて、どこまで話したか……ああ、そうだ。お前を転生体にするという話だ。本来であれば、スリザリンの血を引いたホムンクルスなど反吐が出るが、お前の身体には使い道がある」

「直死の魔眼ですか？」

セレネは吐き捨てるように言った。そして、思いっきり、ヴォルデモートのちらちら光る眼を睨みつけた。

「生憎と、この魔眼は曲者ですよ。あんた程度が使いこなせるとは思いません」
「いいや、ホムンクルス。俺様はその眼の成り立ちに気付いてしまったのだ。」

お前の眼は浄眼が変質した物だと聞かされているな？　いいや、そんな簡単な話ではない。問題は、何故、浄眼が変質したのかだ。

おかしいとは思わないか？　臨死体験を経て浄眼が直死の魔眼に変質するのだとしたら、もっと多くの魔法使いが魔眼に目覚めているはずだとは思わないか？」セレネは黙って聞いていた。

ヴォルデモートの問いかけに、否定も肯定もしなかった。だがもとより、ヴォルデモートはセレネの返答など気にしていなかったらしい。彼は杖を弄びながら、話を続けた。

「俺様はだな、死喰い人に命じてお前の母親について調査させた。その結果、お前の母親の一族は肉体を『』であることに特化した一族で、お前の母親は『』に繋がっていることが分かった。

なんと……嘆かわしいかな、ポッター。ポッターは『』について知らないという顔をしている。魔法使いにとって『』がどれほど重大なものなのか、知らないわけがなからう？」

ヴォルデモートの問いに、ハリーは何も答えなかった。しかし、ハーマイオニー

が答えた。身に沁みついた習慣で、ハーマイオニーは恐怖よりも質問に正しく答えるという衝動を抑えることができなかったのだろう。

「『は根源の渦です。万物の原因が渦巻いていて、すべてが用意されている場所とされています』」

「正解だ」

ヴォルデモートが言った。

「よく知っているな。貴様が穢れた血でなければ、喜んで我が陣営に迎え入れたものを……嘆かわしい。」

だが、まだ言い足りないような顔をしているな。俺様は寛大だ。続けて申してみろ」
ヴォルデモートが話すように勧めたが、ハーマイオニーは今度は恐怖の方が上回ったのだろう。口を真一文字に結んだままだった。

「申してみろ、と言っているのだ」

ヴォルデモートはハーマイオニーに向かって呪文を放った。当然、ハーマイオニーは身動きが取れないので正面から受けてしまう。ハーマイオニーはとろんとした目になると、ぼそぼそと話し始めた。

「……根源の渦は幻とされています。現実にはありえない仮定の話です。時計塔に所属する魔法使いたちの中には根源の渦に到達するため研究する者がおり、到達したと言われる者もいますが、到達した者はこの世から消えてなくなってしまうので、ますます信憑性がありません」

「現実主義のようだな、穢れた血の娘。褒美だ、縄を解いてやろう」

ヴォルデモートが杖を一振りしただけで、ハーマイオニーを縛っていた縄はすると解けた。ハーマイオニーはのっそりと立ち上がったが、何も語らず、その眼は遠くを見つめていた。セレネは唇を噛んだ。ヴォルデモートは間違いなく彼女に『服従の呪文』を使ったのだ。

「しかし、根源の渦は実在する。その証拠が、お前の眼だ。

お前は母親と同じく、肉体が『』と繋がっていた。ゆえに、浄眼が臨死を経て、根源の渦という世界の縮図を垣間見れる特別な眼へと変貌した。お前が垣間見ているのは死だ。だから、直死の魔眼と呼ばれている。

……ああ、ベラ。戻ったな」

ベラトリックス・レストレンジが部屋に入ってきた。

少し顔は俯きがちだったが、ヴォルデモートに話しかけられ顔を上げる。その表情は少し強張っていた。

「ちょうど良いタイミングだ、ベラトリックス。お前は俺様が最初の転生を行うのを見届けることができるのだからな」

ヴォルデモートは少しはしゃいでいるようだった。

「俺様の計画はこうだ、ホムンクルス。

まずは、お前の身体に転生する。そこで、俺様は根源の渦と接続し、新たな知識を手に入れる」

ヴォルデモートが話すにつれて、身体が徐々に地面に近づくのを感じた。鎖が音を立てながら、ゆっくりと床に近づいて行く。

「だが、接続するのは先の話だ。

安心しろ、ヴォルデモート卿は寛大だ。お前の意識を片隅に残しておいてやる。そうだな……最初は、その生き残った男の子を殺すことにしよう。その後は、忌々しい中年の魔法使いだ。ああそうだ、ノットの息子が嘆かわしくもお前に惚れこんでいると聞いたな。純血を減らすのは惜しいが、腐った枝は切り落とす。

最後に愛しの義父を殺したら、お前の意識を剥奪するのでしょうか」

「最低ね」

セレネは怒りで体中が内側から熱を帯び始めるのを感じる。

眼鏡をかけているのに、死の線がチラつき始めていた。

途方もない嫌がらせだ。

自分の身体をヴォルデモートが我が物顔で使い、自分の大切な人や友人たちを殺していく。まるで、それは終わらない悪夢を見せられているようなものに違いない。その悪夢が全て終わった時、小指の先程度に残された意識は消され、ヴォルデモートが自身のすべてを支配するのだろう。

「本当、最低！」

なんとも、ぞっとする話である。

心臓が激しく脈打つのをを感じる。まるで、脈打つたびに、これから待ち受ける絶望が波のように押し寄せてくるようだった。死よりも酷い絶望だ。

しかし、杖がない。

自身の杖はテーブルの上に投げ置かれている。悪趣味なヴォルデモートのこと

だ。セレネの肉体を手に入れたら、セレネの杖でハリー・ポッターを殺すのだろう。足だけが自由だった。視界にチラつく線を足蹴りで絶ち切れればいいのだが、悲しいことにヴォルデモートに線は見当たらない。

残された手は、転生の魔法が発動するタイミングに狙いを定め、足で蹴り切るしか他ない。転生魔法とはいえ、魔法だ。なにかしらの過程で、セレネに魔法の閃光が向けられること間違いなしである。そこに狙いを定めれば、相手の目論見を遮ることは可能だ。その隙に、逃げることもできるかもしれない。

「おっと、足だけは自由かとおもったか？ 愚かなホムンクルスめ」
しかし、ヴォルデモートはセレネの考えを先読みしていた。

セレネの足が地面に着いた瞬間、なにかが押し掛かり、四肢を押さえつけてきたのだ。

「この転生魔法は生贄が必要でな。せつかくだ、この穢れた血を生贄にするとしよう」

「ハーマイオニー、どいてくださいー！」

それは、服従の呪文で操られたハーマイオニー・グレンジャーだった。もはや茶

色の瞳に恐怖の色などない。恐怖の色どころか、自身の意思さえ垣間見られなかった。

「ハーマイオニー!!」

「無駄だ。俺様の服従の呪文が易々と解けるはずがなからう。

……さあ、時が来た。始めるとしよう……穢れた血、そのままホムンクルスを中央へ連れてくるのだ」

「かしこまりました、帝王様」

ハーマイオニーは淡々と答えると、まるで雑巾がけをするかのように、セレネを抑えつけたまま中央へ身体を進ませる。

「ハーマイオニー！ 服従の呪文なんかに負けちゃだめだ!!」

ハリーが必死に叫ぶ声が聞こえてきたが、ハーマイオニーは耳を貸さない。服従の呪文を破る方法は本人の強い意志、もしくは、術者が呪文を止めることだ。強力な終了呪文を使えば止めることはできるかもしれないが、ハリーもセレネも杖がない。思念だけで杖が飛んでくればいいのに、と思いつながら、今は隅に追いやられたテーブルを睨み付ける。が、その時に気付いた。

杖がない。テーブルに置かれていたはずの杖が、どこにも見当たらなかった。

「ハーマイオニー！」

ハリーの悲痛の叫びが聞こえる。

ハーマイオニーは動きを止めない。そろそろセレネの身体は部屋の中央に差しかかるうとしていたが、中央より二歩で前あたりで動きを止める。代わりに、部屋の中央にはヴォルデモートが立った。

「さあ、始めましょう」

セレネは弾かれたようにヴォルデモートに視線を戻す。ヴォルデモートの冷やかな笑みは最高潮に達していた。

『セットー起動せよ』

ヴォルデモートが鋭く呪文を唱える。

すると、周囲がにわかに青い光を帯び始めた。間違いなく、魔法陣だ。転生なんて前代未聞で複雑怪奇な魔法は杖一本程度で発動できるはずがない。ヴォルデモートはセレネを捕まえた時点で、この部屋に魔法陣を描いていたのだろう。魔法陣の中心には、ヴォルデモートが立っている。

魔法陣が起動し、ヴォルデモートを中心に風が巻き起こり始める。その旋風に呼応するかのように、青い光は輝きを赤へと変え、徐々に強さを増していった。

このままではまずい！

セレネは、何とか力を入れてハーマイオニーの拘束から逃れようとした。幸か不幸か、まだ眼鏡越しに「死の線」が視認できていた。ハーマイオニーには申し訳ないが、全力で腕を振って彼女の腕を斬り飛ばせば、この拘束を逃れることができるかもしれない。セレネはハーマイオニーの虚ろな目を見ると、申し訳なさを躊躇しかけたが、このまま互いにヴォルデモートの企みに乗せられるくらいなら、腕の一、二本くらい安い物だろう。

「うぐっ——ッ!？」

ところが、実行する矢先だった。床から黒い影のような布が生えてきて、ハーマイオニーごとセレネを縛り付けてきた。黒い布のせいで完全に身体は魔法陣に縫い付けられてしまっている。

躊躇した一秒が仇となった。

「この、嗜虐趣味のど変態が！」

セレネは最後の抵抗とばかりに、ヴォルデモートに唾を吐く。

「お前の殺気だけで火傷しそうだ。せいぜい泣け、喚け、あがけ、苦しめ！　これはナギニを殺したお前への罰だ」

しかし、ヴォルデモートは笑ったままだった。軽蔑の唾も憎悪の視線も、今のヴォルデモートには心地が良いのだろう。残酷な口元を歪ませながら、屋敷を震わせる冷たい笑い声を上げている。

「——ッ！」

駄目だ。動けない。指一本たりとも動けない。

ヴォルデモートの築き上げた魔法陣は部屋全体に影響を及ぼしている。マルフォイ一家も、ベラトリックスも人形のように固まったまま動かない。この部屋に集う人間すべてが、ヴォルデモートの威圧に支配されていた。

その中でただ一人。

「なにが罰だ！」

ハリー・ポッターだけが大声で叫んだ。

「僕の両親を殺しておいて、他にも多くの人を殺してきて、何が罰だ！　罰を受

けるべきなのは、トム・リドル。お前自身じゃないか!!」

「勝者こそがルールなのだ、愚かなポッター」

ヴォルデモートは最後に自身の宿敵を嘲笑うと、こちらに視線を戻した。

「『ウロボロスの福音を以て、我は命ずる——……』」

ヴォルデモートが高らかに詠唱を始める。セレネを抑えつけている布が火花を散らし始め、身体を侵食していく。セレネは歯を食いしばり、火花の浸食を押し返そうとするが、強烈な重力を受けているかのように身体の自由が完全に奪われている。

「『贄の命を糧に——……』」

トーストの上のバターを伸ばすように、意識が薄くなっていくのを感じる。

ここで意識を手放してはならない。セレネは奥歯を食いしばり、耐えようとする。

「『我が望みを聞き遂げ——……』」

ヴォルデモートが謳うように詠唱を続けていたが、その言葉が終わらないうちに、奇妙なことに削るような音が上から聞こえてきた。この場に集った全員が見上げると、クリスタルのシャンデリアが小刻みに震えていた。魔法陣の創り出した豪風による揺れではない。そして、軋む音や鈴という不吉な音と共に、シャンデリア

が落ち始めたのだ。

その真下にいたヴォルデモートは、面倒くさそうに杖でシャンデリアを粉碎しようとする、が、なぜか身体が固まったように動きを止めた。

ヴォルデモートは石像のように動かない。杖を上に向けたまま、呪文を呟くこともせず、落下するシャンデリアを見上げている。

そう、一瞬。その一瞬だけ、ヴォルデモートの意識が転生の術式及びセレネたちから逸らされた。

「いまだ」

「『アクシオ―来い』!!」

布の拘束が解かれ、ハーマイオニーと共に身体が宙を飛ぶ。赤い光を放つ魔法陣が眼下で通り過ぎ、いまだに縄で縛られたハリーの上空を通り越し、マルフォイ一家やベラトリックスを横目に通り過ぎ、扉に激突すると思った直前、痛いくらい力強く何かがセレネを引き寄せた。

『『エマンシペー―解け』』

セレネを引き寄せた人物が杖を振るうと、両手首の拘束が音を立てながら崩れ落

ちた。

「どうだ、ゴースト。助けられる気分は？」

セレネを見下す青年の顔は安心したように微笑んでいた。一瞬、瞳の色が赤くなっていたが、次の瞬間には黒い瞳でセレネを見下していた。余程、魔法と新たな魔眼の操作に集中したのか、額には薄ら汗が滲んでいる。

「……まったく、助けを呼んだ記憶はなかったんですね」

セレネは疲れたように口元を綻ばせると、とんとと床に降り立った。

「でも、おかげで助かりました。ありがとうございます」

おそらく、目くらましの呪文で姿を隠していたのだろう。

セオドールの後ろにはパーシバルの恰好をしたグリンデルバルド、その隣には、ハーマイオニーを抱きすくめるロン・ウィーズリーの姿があった。

「貴様は——ッ!？」

ヴォルデモートは憎悪の視線を向けてくる。ともにシャンデリアを受けたからだろう。クリスタルの欠片はヴォルデモートの頭や額、頬を傷つけていた。怒りの視線はセレネを通り越し、グリンデルバルドに向けられている。

「この俺様に、石化の魔法をかけたのか!？」

「魔法ではない。魔眼だ」

グリンデルバルドが静かに答えた。

「策が破れた時点で狼狽えるとは……まったくやってないぞ、リドル」

グリンデルバルドは口元を緩める。セレネは少し目を見開いた。グリンデルバルドの手には、アルバス・ダンブルドアの杖が握られている。

「嘆かわしい。それでも闇の帝王か？ 今のお前はモリアーティどころか、短編シリーズの犯人にすら劣る」

「貴様ッ!!」

ヴォルデモートを筆頭に、ルシウス、ドラコ、ドラコの母、そして、ベラトリックスの杖から赤い閃光がグリンデルバルドめがけて飛んだが、グリンデルバルドは杖を微かに揺らしただけで、そのすべてを弾き返す。ヴォルデモート、ルシウス、ドラコの母親は辛うじて避けることができたが、ドラコは真面に失神呪文を浴びた拍子で壁に激突し、倒れ込んだ。

ベラトリックスの放った失神光線のみ、彼女に跳ね返らず、代わりにハーマイオ

ニーに当たった。普段の彼女なら耐えることもできたかもしれないが、服従の呪文で意識が剥奪されている状態では耐えられるはずもない。ハーマイオニーは、ロンの腕の中でくたりと完全に停止した。

「さて、ウィーズリー。君は彼女を連れて下がるといい」

グリンドバルドはヴォルデモートを見つめたまま、ロン・ウィーズリーに命令を下す。ロンと言え、いつもは正義感が強く、ハーマイオニーを失神させようものなら激怒しそうな男だが、この時ばかりは苦々しい表情で承諾する。彼はハーマイオニーを抱えたまま扉のすぐ手前まで下がった。

おそらく、事前に示し合わせていたのだろう。

服従の呪文から自力で復活できる見込みがない以上、失神させるしか他に手はない。そのことは、ロンにも分かっているらしい。

「杖を捨てろ！」

ベラトリックスが押し殺したような声で言った。

彼女は未だ縛られているハリーの真横に立ち、彼の頭に杖を突きつけている。

「捨てろ！ ポッターがどうなってもいいのか！ 『ディフェンド——裂けよ！』」

ベラトリックスは同時に、切断呪文でハリーの頬を裂く。ハリーの頬から一閃、血が赤く滲み出した。グリンデルバルドは何も答えない。ただ静かにベラトリックスを見ている。

「ポッターが死んでもいいのか!? 5秒以内に杖を捨てなければ、小僧に『アバダケダブラ』をする! 5……4……」

「ベラトリックス、下がれ」

ベラトリックスが吠えていると、後ろからヴォルデモートが冷ややかな声で命令する。

「し、しかし……」

「ポッターを傷つけていいのは、俺様だけだ。それとも、俺様の言うことが聞けないのか?」

ベラトリックスが戸惑っていると、ヴォルデモートは杖を振り、彼女を無理やり押し退けた。ベラトリックスはそのまま打ちひしがれたように、地面に座り込んでしまう。そして、ヴォルデモートが彼女の代わりに、ポッターに杖を突きつけた。「さあ、どうする? ポッターの命は、俺様の手の中にある。選べ、杖を捨てる

か、ポッターを殺すか」

ヴォルデモートは冷ややかな笑みを浮かべていた。グリンデルバルドは

「……嘆かわしい」

と呟いた。

その瞳には強い憐みの色が浮かんでいた。

「リドルよ。お前の実力は十分だ。しかし、お前は人の気持ちが分からない」

「何を言っている？」

「だから、敗北する」

グリンデルバルドは杖を降ろした。

その態度は言葉とは裏腹で、まるで戦う意思などないように杖を下に向けている。

「敗北だと？ 俺様が？」

ヴォルデモートはその姿に疑念を抱いたのだろう。わずかに片方の眼を見開き、考え込んでいたようだった。

「この屋敷には『姿くらまし防止呪文』がかかけられている。

ホームクルスを捕まえてから、再度、俺様自身が張り直した。あの時のように逃

げられはしないぞ？ お前の味方は、成人したての未熟者やホムンクルスだけだ。

その程度の戦力で、この俺様を出し抜くつもりか？」

「それこそが、お前の驕りだ」

グリンデルバルドは、まだ杖を下に降ろしている。

「お前は俺様と言った。俺様達ではなく、俺様とお前は口にした。その時点で、お前は敗北しているのだ」

「杖を構えていない貴様こそが驕っているのだ！ 『アバダケダブラ』！」

ヴォルデモートの杖から緑の閃光が奔る。

グリンデルバルドはほとんど杖を振らなかった。最強の杖を手にした男は近くのテーブルを動かし、呪いの盾にする。呪いはテーブルに当たり、四散した。ヴォルデモートはこの結末を予知していたのだろう。すぐに次の攻撃に移った。杖先から蛇の形をした業火が飛び出し、焼き殺そうとしてきた。

「悪霊の火ごときで、私を殺せると？ 『フィニートー終われ』」

グリンデルバルドの杖はオレンジの閃光を放つ。終了呪文はあっけないくらい簡単に業火の蛇を飲み込むと、空中で霧散させた。そのままグリンデルバルドは指揮

棒を軽く振るように杖を動かし、先ほどまでセレネを縛っていた鎖を操り始めた。鎖は唸りながら宙を奔り、ヴォルデモートを縛ろうとする。ベラトリックス・レストレンジが青白い顔をしながら、ヴォルデモートの前に躍り出た。

「ここは、私が——ッ！」

「邪魔だ！ 退け！」

ヴォルデモートは手で払うようにベラトリックスを横に退けると、そのまま鎖を打ち落とす。ベラトリックスは倒れ込み、杖を床に落とした。杖がからんと床を転がっていく。だが、体勢を立て直すのは早かった。銀のナイフを取り出すと、ゆくりと立ち上がる。反対に、ルシウス・マルフォイは戦う気はないようだった。むしろ、戦いに参加しようにもできないと表現した方が正しいだろう。杖こそ構えていたが、おどおどと主人と敵を見比べている。

ヴォルデモートは、部下の様子を気にすら掛けていない。

「死ね！」

ヴォルデモートは自身のローブから幾本もの黒い縄を表出させると、グリンデルバルドを縛ろうとしてきた。グリンデルバルドは自分に迫りくる黒い縄を炎の鳥に

変化させると、逆にヴォルデモートを襲わせる。ヴォルデモートは嘲笑うように口角を歪めた。

「その程度は効かん」

ヴォルデモートの杖一振りで炎の鳥は水を浴びて床に落ちた。鳥を落とした水はそのまま蛇になり、グリンデルバルドを飲み込もうとする。グリンデルバルドは水蛇を宙で破裂させ、大理石の床全体に水が散らばった。

「リドルよ、果たしてそうかな？」

グリンデルバルドの口の端が上がる。

「お前では、私には勝てても、私たちに勝てない」

「まだ言うか。俺様には何人たりとも敵わない」

ヴォルデモートが叫んだ。

「そろそろ終わらせてやろう。さらばだ、小僧ども」

ヴォルデモートが冷ややかに笑うと、その声に呼応するかのように、ベラトリックスが隣に控えようとした。だが、そんな彼女をヴォルデモートは殺意を込めたままの眼で睨みつける。その赤い双眸は、「俺様の戦いに手を出したら殺す」と告げ

ているようだった。

ベラトリックスは硬い表情のまま数歩下がり、ヴォルデモートの背中に隠れるように控える。ベラトリックスはヴォルデモートの背に寄り添い、祈るように目を瞑った。そして――……

「……ばか、な？」

ヴォルデモートの口から言葉が零れる。

言葉と共に、口元から一筋の赤い血が流れ出た。

「……なぜ……？」

ヴォルデモートの眼に明らかな困惑の色が浮かび上がる。ヴォルデモートの胸元を銀のナイフが貫いていた。その柄を握りしめているのは、ヴォルデモートに背にいる女性――……

ベラトリックス・レストレンジだった。

号外！号外！

う！ ヴォルデモートがやられた！ 後ろからぐっさり！

まあ、この程度で闇の帝王が死ぬわけないでしょ。

でも、どうしてベラトリックスが裏切ったの？

次回「冬の星が輝くとき」

絶対運命黙示録。

1 週間以内に更新できるように努力します。

91話 冬の星が輝くとき

ことの発端は、数分前に遡る。

ベラトリックス・レストレンジは闇の帝王に命じられ、自身の赤子を静かにさせようと部屋を飛び出した。帝王に寄り添いたいという気持ちよりも、今は恐怖の方が打ち勝っている。先の部屋よりも開けたロビーから上の階へ向かおうと小走りで進み始め、ふと、違和感に気付いた。

窓が閉められているというのに、白いレースのカーテンが微かに揺れている。

「……誰だ、そこにいるのは？」

ベラトリックスは杖を引き抜くと、カーテンに向けた。

屋敷を震わせていた赤子の声は、いつの間にか止まっていた。ベラトリックスが赤子が眠る二階へ続く階段を一段たりとも上っていないのにも関わらず、泣き声が止まっている。ベラトリックスは周囲の警戒を強めた。

「何者だ！」

「さすがは、ベラトリックス・レストレンジ。高貴なる娘よ」

カーテンが崩れるように揺れ、一人の男が現れた。

パーシバル・グレイブスと名乗った男である。数か月前、たった一人で会議に乱入し、死喰い人たちを翻弄し、マグル学の教授を連れ去った男だった。その男の隣には赤毛の青年とノットの息子が控えている。おまけに、赤毛の青年の腕には、ベラトリックスの産んだ赤子がすやすやと眠っていた。

ベラトリックスは杖を構えたまま、侵入者を強く睨みつけた。

「……人質をとったつもりか？」

「そのつもりはない。赤子は宝だ。愛されるべき存在であり、傷つける存在ではない。君にすぐ返すでしょう。だが、その前に一つだけ、話をさせて欲しい」

男は静かに告げる。

ベラトリックスは殺気を込めた鋭い眼差しで男を睨み付けていた。杖先はまっすぐ男を狙い続けている。それにもかかわらず、男は平然と話し始めた。

「ベラトリックス・レストレンジ。魔法の腕もさることながら、格上の敵とも戦える勇氣。真に評価されるべきものだ。」

ホグワーツへ侵入した際、指揮官をしたそうではないか。一番強敵を自分に引き

つけ、それ以外の者たちをドラコ・マルフォイの護衛としてダンブルドアの元へ送り込む。戦闘能力だけではなく、瞬時の情報を判断する能力も指揮官として必要な才覚だろう」

「侮辱か？ 負けた者に対しての？」

「けなしてなどいない、褒めているのだ。ゆえに、優秀な君が傷つくところを見たくない」

ベラトリックスは微かに目を見張った。

彼女の動揺をよそに、パーシバルと名乗った男は赤毛の青年、ロン・ウィーズリーから赤子を受け取ると、優しく抱きかかえた。

「可愛い子だ。君の愛情を十分に受けているのだろう。その子に、父親も愛情を注いでいるのか？」

男は問いかけてくる。しかし、ベラトリックスが応じなくても、彼は答えを知っているのだろう。ベラトリックスは僅かに視線を逸らしたが、再び男に向き合った。

「……ッ！ 愛情が、なんだというのだ」

ベラトリックスは噛み殺すような声で言った。

「別に愛情など、どうでも良いだろう?」

ベラトリックスは、ハッキリ分かっていた。

ヴォルデモートが、この子を愛する日は来ない。この子が産まれたときから、帝王は我が子を胸に抱くことは疎か、一度も顔を見に来ていないのだ。むしろ、帝王はこの子を道具か何かのように捉えている。自分を含めた、他の死喰い人たちと同じように、ただの駒扱いだ。

それでも、ベラトリックスは微かに残った虚勢を張る。

「我が君のためになるのであれば、その子にとっても大変栄誉あることなのだ」

「……君がそう思うのであれば仕方ない。この子は返すでしょう」

男は赤子を抱えて近づいてくる。ベラトリックスは杖を下げ、大事な愛娘を受け取った。心なしか、他人の腕の中にいるよりも、ベラトリックスに抱かれている時の方が、赤子はリラックスして寝ているように見えた。男は親子の様子を見ると、静かに微笑んだ。

「ベラトリックス・レストレンジよ……去れ、そして行くと良い。君のいるべき場所へ」

その言葉を受け、ベラトリックスの心は揺れた。

「だが、もし君が望むというなら……私は君を喜んで迎え入れよう」

「迎え入れる、だと？」

ベラトリックスには、男が心からの言葉を述べているように思えた。

この男のもとでなら、個々人の能力を正當に評価してもらえる。

たとえ重大な失敗をしたとしても、評価するべきところは評価される。帝王のよ
うに失敗は失敗として、良かった点は評価されず、叱責に加え折檻、最悪「アバダ
ケダブラ」されることはない。ヴォルデモートは機嫌が悪い時、適当に周囲の人を
殺そうとする悪癖があった。

最近では、ベラトリックスは主君の怒りに巻き込まれないように、少し怯えなが
ら仕えている。

ベラトリックスは知っていた。

帝王が自身を評価していたのは、血筋と類稀なる戦闘能力だけだ。決して、特別
に愛されていたわけではない。

「私は……」

既に、ベラトリックスは三度も格下の人造人間に敗北してしまっている。帝王からの評価は最底辺まで落ち、もはや、己の取り柄は純血であることだけである。

ゆえに、次に失敗したが最後、「使えない純血」ということで殺処分される可能性が見え始めていた。

その時は、我が子も「使えない純血の腹から生まれた子」として処分されてしまいかもしれない。

ベラトリックスにとって、我が子は闇の帝王と同じかそれ以上に大切だった。そんな最も愛している娘も、いずれは自分のように死の脅威に怯え、道具みたいに扱われ、無残にも使い捨てられてしまうかもしれない――……。

「私は、君を正當に評価する。君も、その子も」

この男の手を取れば、娘が死に怯える暮らしから脱却できるかもしれない。

この子が駒ではなく、一人の人として生きることができるかもしれない。

「共に行こう、ベラトリックス。その子が怯えずに暮らせる未来のために」

パーシバルは優雅に手を伸ばす。

さながら、それは女性をエスコートする騎士のようだった。ベラトリックスは静

かに彼を見つめた。相手も目を細めてベラトリックスを見返してくる。

「この子が……安心して、生きるために」

ベラトリックスは震える指先で男の手を取った。パーシバルは微笑みを深くすると、後ろの二人を振り返った。

二人の反応は異なっていた。セオドル・ノットは眉間に皺を深く刻ませ、胡散臭そうに男を睨み、ロン・ウィーズリーはこのような緊迫した場にもかかわらず、ぽかんと呆けたように口を開けていた。

「それでは、我々も行動に移るとしよう」

男が宣言した、その瞬間だった。

ぱちんという音がロビーに木霊した。現れたのは、屋敷しもべ妖精だった。

「ドビー!？」

ロンが目を丸くしながら、屋敷しもべ妖精を見返した。

ドビーはテニスボールのような巨大な目を見開いて、足の先から耳の先まで震えていた。

「ドビーは、ハリー・ポッターをお助けに参りました」

「とても良いタイミングだ。君の力も借りるとしよう。……では、我々がすべきことを話そう。最も優先すべきことは、この場からの脱出だ」

男はドビーを含めた一同を見渡した。

「まずは、この赤子だ。この子を安全な場所へ届ける必要がある」

「それなら——……」

ロンが口を開きかけ、躊躇したように口を閉ざした。

「彼女を陣地に迎え入れるのが不安なのだな？」

男が尋ねると、ロンは沈黙を以て肯定した。

「ベラトリックス。この屋敷には、ポッターたちの他に、リドルに捕らえられた者はいないか？」

男はベラトリックスに視線を向ける。

「地下牢に数人、繋いでいる。オリバンダーと小鬼。それから穢れた血とラグブツの娘だ」

ベラトリックスはすらすらと答える。男は小さく頷くと、しもべ妖精に向き合った。

「赤子に加え、地下牢に繋がれた者たちを救助することが先決だ。その後、ポッターたちを救出する。頼りになるのは、しもべ妖精の彼だ。たとえ『姿くらまし防呪文』がかけられていたとしても、君なら自由に移動することができる」

「はい、ドビーめなら可能です。ですが、どちらへお連れしたらよろしいでしょう？」

「私が提案してもいいが……赤毛の青年よ、君なら良い隠れ家を知っているのではないかね？」

ロンはかなり躊躇っていたが、客間からハリーの「ハーマイオニー！」という悲痛の叫びを耳にすると、迷っている時間がないことを認識したらしい。

「ビルとフラーのところ。ティンワース郊外の『貝殻の家』へ！」

しもべ妖精は頷いた。

「人質と赤子を送り届けることに、時間はかからないはずだ」

男はドビーを見下しながら話を続ける。

「戻って来たら、闇の帝王の気を逸らしてほしい。一瞬でも逸らすことができれば、ポッターたちを救出することができる。君は隙を見て、我々を少しずつ『貝殻

の家』へ送り届けろ。

ベラトリックス、君は思った通りの行動をすればいい。ありのままの君で動けばいいのだ。君たちには——……」

ここで、男はロンとセオドルを振り返った。

「私が『目くらましの呪文』をかけよう。ベラトリックスの後ろから入室する。

そして、私が合図を出したとき、呼び寄せ呪文で助けるべき相手と呼ばせればいい。

……質問のある者は？」

誰も口を開かなかった。男は全員を見渡すと小さく頷いた。

「では、作戦開始だ」

これは数分前の出来事。

そして、現在。セレネは困惑で目を見張っていた。

ベラトリックス・レストレンジがヴォルデモートを刺している。

ヴォルデモートはもちろん、マルフォイ夫妻も困惑している中、セオドルとグリンドルバルドは冷静だった。このことから考えるに、ベラトリックスを調略したのは明らかであるが、にわかに信じがたい事実であった。

「ベラ、どうして……？」

最初に口を開いたのは、マルフォイの母親だった。

「……ナルシッサ。私は決めた」

ベラトリックスはナイフを抜き払うと、マルフォイの母親……ナルシッサを軽く睨み付けた。

「私は、デルフィーニのために命を捧げる！」

ベラトリックスは杖を振ると、ハリーの縄を解いた。ハリーは呆氣に取られていたが、すぐさまこちらに駆け寄ってきた。

「形勢逆転だな、リドルよ」

「ベラ、トリックス……貴様ッ!!」

ヴォルデモートは自身の傷口を治療しにかかっていた。かなり痛そうに顔を歪めていたが、ゆっくりと傷口が塞がっていくのが分かる。あの様子では、十分と経たないうちに戦いに復帰するだろう。

だが、時間稼ぎはできる。

「……では、これでさようならだ。

『プロテゴ ディアポリカ―悪魔の護り』」

グリンデルバルドは、ハリーが自分の元へたどり着いたことを確認すると、その場で回転し、自分の周囲に青い炎の円陣を描いた。

「入ると良い。忠誠心がある者だけが、この輪に入ることができる。さもなくば、死だ」

セレネは一瞬迷ったが、セオドルを連れて炎に飛び込んだ。

炎なのに熱くはない。一見すると悪霊の火のように見えたが、燃やす対象を限定しているのかもしれない。ベラトリックスは闇の帝王を一瞬振り返り、申し訳なさそうな表情を浮かべたが、意を決したように炎をすり抜けた。

セレネは周囲を見渡した。

いつの間にか、ロン・ウィーズリーとハーマイオニー・グレンジャーが姿を消している。彼らはどこへ消えたのか、それとも炎に焼かれてしまったのか。そんなことを考えていると、ぱちんと弾けたような音が足元から聞こえた。

「ハリー・ポッター！」

音と共に現れたのは、屋敷しもべ妖精だった。

「助けに参りました、ハリー・ポッター！」

「ドビー!？」

ハリーが目を丸くすると、ドビーと呼ばれた妖精は落ち着かないように長い耳をぱたぱた上下させた。

「ドビーめが、お友達のウィーズリーたちは既に安全な場所まで連れ出しました。残りはここににいる者たちだけです」

「よし、まずはポッターとベラトリックス、君だ」

グリンデルバルドが言うのと、しもべ妖精はハリーと手を繋ぎ、一瞬、躊躇ったが、ベラトリックスとも手を繋いだ。そして、空気に溶け込むように姿を消した。青白い炎の向こうでは、マルフォイ夫妻が炎を消そうと悪戦苦闘しているのが見えた。

ヴォルデモートの赤い双眸は忌々し気にこちらを睨み付けていた。ヴォルデモートが炎越しに緑の閃光を放っていたが、死の呪いすらも炎が打ち消している。

「これは悪霊の火、ではないな。いや、この魔法、まさか……!!」

ヴォルデモートの眼に驚きの色が奔った。瞬時に何かを理解したらしい。ヴォルデモートは傷口の治療を途中で切り上げ、すぐさま杖を振り上げると

『『フィニート——終われ』!』

と叫んだ。

オレンジ色の炎が青白い呪いの炎を飲み込み、打ち消そうとしてきた。青白い炎は抵抗するように唸り、天井へと飛び立とうとしていたが、それをオレンジの炎が阻止しようとしてくる。

「さすがだな」

グリンデルバルドは感心するように呟いた。グリンデルバルドは杖を指揮棒のように振ると、呪いの炎は勢いを増した。まるで鞭のようにヴォルデモートに襲いかかろうとする。

「黴の生えた魔法など、俺様には効かん!」

しかし、ヴォルデモートが荒ぶるように杖を勢いよく振るった。オレンジ色の炎は強大な蛇となり、より激しさを増しながら呪いの炎を飲み込んでいく。セレネたちを囲んでいる炎の一部もオレンジの炎に飲まれ、ヴォルデモートとの間に道を作ってしまった。

セレネはヴォルデモートを睨み付けたまま、グリンデルバルドに手を差し出した。

「助言者、私に杖を！」

「その必要はない」

グリンデルバルドが呟くと、再度、ぱちんという音が聞こえてきた。しもべ妖精が戻ってきたのだ。

「早く！」

しもべ妖精が手を差し出してくる。セレネがその手を握り返そうとしたとき、ヴォルデモートはまっすぐセレネたちに呪文を放とうと杖を向けてきた。

「させるか！」

ヴォルデモートの魔法を阻止したのは、セオドルだった。

彼は黒々とした両目を赤く染め、力を籠めるように闇の帝王を睨み付ける。瞬

間、ヴォルデモートが凝固した。呪文を唱えようと口を開け、杖を構えた姿勢のまま停止している。おかげで、しもべ妖精の手を取る時間ができた。セレネは左手にセオドールの手を握り、もう片方の手で妖精のか細い手を取る。しもべ妖精の反対の手には、すでにグリンデルバルドの大きな手が握りしめられていた。

「さらばだ、リドル」

グリンデルバルドの言葉と共に、風景が回転する。遠くでヴォルデモートの咆哮が聞こえた気もした。だが、それはもうセレネには関係ない話だ。気が付けば、セレネは知らない場所に「姿くらまし」をしていた。セレネは暗闇をすかして周囲を見渡した。一面に星空が広がり、少し離れたところに小さな家が建っている。近くには、先程「姿くらまし」したばかりのハリーとベラトリックスが佇んでいた。

「ここは……?」

『貝殻の家』でございます」

ドビーはそう言いながら、服の隙間から三本の杖を取り出した。そのうちの2本をハリーに渡しながら話し始める。

「ドビーはハリー・ポッターが助けを求めていることを聞きました。そして、助け

に向かったのです！」

次に、セレネに杖を渡す。

7年間、握り慣れた懐かしの杖だった。セレネはたった数時間、離れ離れになっていた杖の握り心地を確かめていると、少し強張っていた表情が緩み始めたのが分かった。

「あなたが杖を取り返してくれたのですね。ありがとうございます」

「ハリー・ポッターの友だちを助けるのは当然です」

ドビーは少し得意げな表情を浮かべた。

「それでは、ハリー・ポッター。ドビーは城に戻らなければなりません。また何か御用があるときはお呼びください」

ドビーは丁寧にお辞儀をすると、軽快な音と共に姿を消した。

セレネが意識を取り戻してから、1時間足らず。

短いけど、とてつもなく濃くて危険な時間だった。

命の危険は遠ざかった。ヴォルデモートの企みに自身の身体が利用されるのも回避できた。杖も戻ってきたし、一件落着——……のように思ったのは、数分だけだった。

「……それで、ハリー。どうして、この女がいるんだい？」

貝殻の家の主、ビル・ウィーズリーが硬い表情をベラトリックス・レストレンジに向けていた。

ここに集った全員に針を刺すような空気が漂ったのを感じる。まるで、一步誰かが動いた途端、崩れ落ちてしまう薄氷の上に立っているような緊張感が張り詰めていた。

ハリーも答えることができない。ハリーの視線がこちらに向けられる。だが、セレネも答えることができない。十中八九、グリンデルバルドが調略した結果だということは分かっていたが、その意図と調略内容まではつかみきれていなかった。

当の本人であるベラトリックスは、ビル・ウィーズリーが連れて来た赤子を抱きしめたまま黙したままだった。赤子を抱きしめた彼女は、以前の荒々しさは消え、少しばかり落ち着いているように見えた。

そんな彼女の代わりに口を開いたのは、グリンデルバルドだった。

「ベラトリックスは我らが傘下に下った。それ以上の言葉はいらない。そうだろう、赤毛の青年よ」

グリンデルバルドは、ロン・ウィーズリーに語りかける。赤子以外のすべての視線が、ロンに向けられていた。ロンは少し困ったように周囲を見渡し、おずおずと口を開いた。

「えっと、まあ、僕も信用しているわけじゃないけど……そもそも、お前は一体誰なんだ？」

ロンの指先がグリンデルバルドに向けられる。

「パーシバル・グレイブスと名乗っておこう。君には双子の兄がいるな？ 彼らの知り合いだ。」

……君たちがこの女を不審に思うのは無理ないだろう。私が外で見張っておこう。ついでに2、3、話しておきたいことがある。ビル・ウィーズリーだったか？ 君には、しばらく席を外してほしい」

ビル・ウィーズリーは考え深げな表情になると心配そうにハリーとロンを見比べ

ていたが、根負けしたのだろう。グリンデルバルドの人を落ち着かせるような柔らかな口調や雰囲気を感じ取り、悪人ではないと信じてしまったのかもしれない。

ビルは「終わったら教えてくれ」とだけ残すと、家の中へ入ってしまっていた。グリンデルバルドはビルが家の中へ入ったことを見届けると、軽く杖を振った。おそらく防諜の魔法をかけたに違いない。グリンデルバルドは小さな家を一瞥すると、残った者たちに視線を戻した。

「君たちだけを残したのは、他でもない。今後のために情報を共有する必要があるからだ。」

ハリー・ポッター、君に聞こう。アルバス・ダンブルドアは君に何を託した？」グリンデルバルドに話を向けられ、ハリーはグリンデルバルドの顔をじっと見返した。そして、申し訳なさそうに首を横に振る。

「誰にも言うことはできません」

「ダンブルドアの悪い癖だ」

グリンデルバルドは一蹴する。

「他者を信用することを恐れ、最も大事なことを秘密にしたまま事を運んだ。それ

が良い方向に運んだときもあるが、同時に不信も生み出している」

「……僕、それでも、ごめんなさい。助けてくれたのは嬉しいですけど、ダンブルドアはロンとハーマイオニー以外に明かすなって言われました。僕からは話せません」

「なるほど……君は、骨の髄までダンブルドアに忠実だな」

ハリーが少し躊躇いながら話す姿を見て、グリンデルバルドは小さく頷いた。

「では、聞き方を変えよう。」

ダンブルドアは分霊箱が幾つあると推察していた？」

「……え？」

「私もリドルの考え方を推察することはできるが、ダンブルドアの方があれと関わった時間は長い。あやつが幾つ分霊箱を作ったのか、私よりも正確に突き止めているはずだ」

ハリーは、まさか彼が分霊箱のことを知っているとは思わなかったのだろう。少し肝を抜かれたような顔をしていた。

セレネはそんなハリーを見て、小さく肩を落とした。

「ハリー、この男は私の助言者です。信頼してはいけません、信用できる人物です。」

それに、私も分霊箱が幾つ作られたのか非常に気になります。よろしければ、教えてもらえませんか？」

セレネが尋ねると、ハリーは一度目を瞑った。そして、ゆっくり眼を開けると、覚悟を決めたような声で答えてくれた。

「……ダンブルドアは、6つ作られたと予想していた。」

日記帳、スリザリンのロケット、マールヴォロの指輪、ハッフルパフのカップ、グリフィンドールカレイブンクローに属する宝物、それから、ナギニ。

このうち、日記帳は僕が破壊した。指輪はダンブルドアが……それから、ナギニとロケットはセレネが破壊したんだよね？」

「……まあ、そうですね」

本当は指輪も自分が破壊したのだが、セレネは面倒なので訂正しないでおいた。「つまり、ダンブルドアの予想が正しければ、残すところはカップとあと1つということになりますね」

セレネはここで、ちらりとグリンデルバルドに視線を向けた。

魔眼蒐集列車内で、ハリーが最後の分霊箱ではないかという仮説を立てたことを思い出す。ダンブルドアは気づいていなかったのか、あるいは、ハリーに伝えずに黙っていたのか、そのどちらだろうか。

セレネが少し悩んでいると、ハリーが口を開いた。

「たぶんだけど、ハッフルパフのカップはレストレンジ家の金庫にある」

ハリーが呟きながら、ゆっくりと視線を動かした。彼の視線の先には、ベラトリックスがいた。ベラトリックスはこわばった表情のまま赤子を抱きしめている。ベラトリックスは当初、ハリーの問いかけに対して何も語ろうとしなかったが、やがて重たい唇を開けると、苦しそうに言葉を紡いだ。

「……黄金のカップなら、レストレンジ家の金庫にある」

この瞬間、ハリーとロンの空気が晴れたのが伝わってきた。

答えが当たって喜ばしいのだろう。セレネとしても、自身の推察が的中したので嬉しい。少し心が浮足立つのを覚えた。ロンなんて少し興奮した口調で

「だったら話が簡単だ！」

と言いだめた。

「この女を連れてグリンゴッツへ行けばいい！ 自分の金庫に入るんだ、誰も怪しまないだろう？」

「それは違いますよ、ウィーズリー」

セレネは静かに指摘した。

「蛇男のことです。彼女が裏切ったことは既に方々へ広めていることでしょう。もちろん、グリンゴッツにも」

「じゃあ、カップも別の金庫に移動している可能性もあるってこと？」

「それは……可能性としては考えられますけど、蛇男には慢心する傾向があります。私たちが分霊箱を壊して回っていると知らない以上、移動させることはありえないかと」

セレネは答えながら、自身の考えに納得していた。

もし、既に分霊箱を破壊して回っていることが知れているのであれば、いつまでもレストレンジ家の金庫に保管しておくはずがない。自身の眼に届く場所に置いておいたり肌身離さず持ち歩いている方が、よっぽど安全である。それをしていない

ということとは、ヴォルデモートは分霊箱に迫りつつある危険を察知していないということなのだ。

「フロイライン、君の言う通りだ」

この考えには、グリンデルバルドも同意した。

「君とポッターは知らないが、しもべ妖精がマルフォイ家の地下牢に繋がっていた小鬼を解放し、あの家へ移送して来た。」

彼女の証言でレストレンジ家の金庫にカップがあると確証を持てた今、小鬼の力を借りてグリンゴッツへ侵入することができる」

「ですが、グリンゴッツに侵入したら蛇男に分霊箱を壊して回っていることが知れてしまうのでは——……いえ、それも良いかもしれませんね」

セレネが一人で納得すると、ハリーが不思議そうに尋ねてきた。

「どうしてだい？ あいつにバレたら、最後の一つの在りかを探すのが難しくなるんじゃないか？」

「ハリー、貴方は蛇男が怒り狂ったとき、その考えを読み取ることが出来ますよね？」

分霊箱を盗まれたことが分かったら、あいつは怒り狂って、最後の一つの場所を思い浮かべて安全かどうか確かめに行くのでは？」

「あっ！」

ハリーは目を見開いた。

「それなら、最後の一つの在りかが分かるかもしれない！ しかも最後の一つを破壊した場所で、あいつを待ち伏せすることができる！」

「そういうことです」

「これで、計画は決まったな」

セオドールが咳ばらいをすると、個々に残った全員を見渡した。

「小鬼と取引をして、レストレンジ家の金庫に入る手助けをしてもらう。その後、ポッターがあいつの考えを読み取り、最後の隠し場所に向かう。あの人と戦う準備をしながらな」

「その通りだ。しかし、実行に移す前に、やることが残っている」

グリンデルバルドはそう言いながら、ベラトリックス・レストレンジに目を向けた。

「リドルのことだ。まだ切り札を隠し持っているかもしれない。我々の知らない計画をひそかに進めているかもしれない。あいつは確かに慢心しているが、7つも分霊箱を作るほど慎重な一面もある」

ヴォルデモートは分霊箱以外に、なにか計画を企んでいるかもしれない。

たとえば、自身の不老不死を実現する転生を企んでいたように、他にも危険極まる計画や謀を張り巡らせているかもしれない。

セレネはベラトリックスに目を向ける。長い黒髪を背中に波打たせ、厚ぼったい瞼の下からグリンデルバルドを見つめ返していた。

「ベラトリックスよ。闇の帝王は他にどのような計画を実行しようとしているのかな？」

最も信の厚かった君ならば、知っているはずだ」

グリンデルバルドは後ろで手を組みながら、ゆっくりと彼女に歩き始めた。ベラトリックスの肩が僅かに震えたのが見えた。

「教えてくれ」

グリンデルバルドは人を安心させるような落ち着きのある声で問いたです。

誰も何も答えなかった。どこか近くで波が岩に打ち付けられている音だけが大きく聞こえていた。

「あいつを倒すために」

「……倒すために、か」

ベラトリックスの裂けた唇から小さな言葉が漏れ出す。

その瞬間、ベラトリックスの空気が変わった。まるで、しおれていた空気がピンッと背を伸ばすように変化する。

「……ホムンクルスの小娘」

ベラトリックスはグリンデルバルドに半分背を向けると、セレネと向き合った。そのまま腕に抱きしめていた赤子を手渡してくる。

「この子をどう思う？」

「え？」

セレネは赤子を見下した。

蛇男から生まれた子だが、父親とは異なり鼻があった。非常に整った顔立ちの赤子で、二重瞼に桃色の頬をしている。きつと浄眼持ちのこの子の瞳は、淡い青色に

違いない。セレネの腕の中で、赤子は心地よさそうに寢息を立てていた。

「……まあ、可愛いかと」

セレネは正直に答えた。

ベラトリックス・レストレンジとヴォルデモートの子だとさえ思わなければ、薄気味悪さの欠片もない普通の赤子だ。そもそも、あんな人間離れた蛇男に生殖能力があったなんて吐き気を催すが、そこから産まれた赤子自体には何も罪はない。転生魔法を行う上で魂の一部が付着していたら話は変わってくるかもしれないが、ヴォルデモートの口ぶりからしてそれはないだろう。

将来は美人になることを予想させるような、大変可愛らしい赤子であった。

「名前はデルフィーニ、ミドルネームはアルタイル。高貴なるブラック家とサラザール・スリザリンの血を引く、未来における本当のスリザリンの継承者だ」

ベラトリックスは少し誇らしげに赤子の名を口にする、長い杖を取り出した。彼女の雰囲気の変化。そして杖を取り出したことで、途端に臨戦態勢を整える。グリンデルバルドを除いた全員が杖を構え、ベラトリックスに向けていた。ベラトリックスは自身の周りを囲む杖を一瞥した後、グリンデルバルドに向けて薄い笑み

を浮かべた。

「私の口は、これ以上は明かすことはできない。

カップのことは、それなりに調べがついていたことなのだろう？ 私が明かさな

くても、我がレストレンジ家の金庫にあると乗り込む算段を考えていたのだろう」

「……」

「この私が最も愛しているのはデルフィーニだ。私の愛するデルフィーニ。私はこの子が道具としてではなく、誠に幸せになる未来を望んでいる。

だが、デルフィーニと同じくらい、私はあの御方を愛しているのだ」

ベラトリックスは最後の一言を紡いだ時、表情が恍惚と輝いていた。

「誰よりも……そう、私よりも強く、激しく、畏ろしく、とても輝いておられる。私に最もふさわしい活躍の場を与え続けてくれる。私を——……初めて認めてくれた御方だった。

だから、私は愛してる。闇の帝王を愛しているのだ」

ベラトリックスは杖を持ち上げる。

セレネはいつでも彼女を拘束する呪文を唱えられるように、片手で赤子を抱きな

から神経を張り巡らせた。ベラトリックスは恍惚な色をわずかに潜めると、グリーンデルバルドに向けて寂しげな微笑みを浮かべた。

「パーシバル・グレイブス。

半世紀早く貴方と出会っていれば、もしかしたら——……」

ベラトリックスはその先の言葉を告げなかった。

唇を硬く結ぶと、勢い良く杖先から緑の閃光を破裂させた。

「……嘘、でしょ？」

セレネは啞然とした。

アバダケダブラを避けるとか避けないとか、閃光に張り巡らされている死の線を切るとか、そういった次元の話ではなかった。

ベラトリックス・レストレンジは杖先を自身の胸元に突きつけて、死の閃光を放ったのだ。ヴォルデモートの副官としての杖捌きは武装解除の魔法を放つよりも早く、止めようがなかった。

ベラトリックスの黒髪が冬の風に揺れながら、地面へと倒れていく。

「……死んでしまっでは、開心術で読み取ることもできん」

グリンデルバルドは淡々と口にする。

「赤子をリドルから引き離しはしたが、あやつに対し深い愛を抱いていたのだろう。彼女は、リドルが不利益になる情報を漏らすまいと決めていたのだ。

……闇の帝王に対する忠誠心はなくなっていたかもしれないが、まだトム・リドルのことを強く愛していたのだろう」

「どうして、あいつを愛することができたんだろう？」

ハリーは困惑したように言葉を零した。

「人を人とは思わない極悪人なのに。自分の子どもすら道具としか見てない悪い奴なのに。」

あいつの立てた計画のせいで、大事な子どもの未来が破滅するかもしれないのに――

「愛のカタチは人によって異なる」

グリンデルバルドはハリーの肩に優しく手を乗せた。

「ベラトリックス・レストレンジは自身の愛に殉じたのだ」

「……なんて、身勝手な人」

セレネは小さく呟いた。

愛に殉じたと言えば美しい響きだが、赤子の未来を託して、罪を償うことなく死んだことに他ならない。我が子を愛すると同時に、我が子を利用しようとする男まで愛するなんて、我がままにもほどがある。

どこまでも自己中心的で、独善的な愛だ。自分の犯した大き過ぎる罪を償わず、自分の愛のために生きて死ぬなんて、誰が見ても卑怯すぎる。犯した罪の重さを思い知らずに、自己満足のままに死んでいくなんて、絶対にありえてはいけけないのだ。唯一、ベラトリックスの評価できるところは、愛娘をヴォルデモートの魔の手から引きはがし、安全と思われる場所に預けたことだけだった。

「母親として最低ね。自分の罪も償わないで死んだら、この子が辛い思いをするのに」

セレネの呟きには誰も答えなかった。

冬の夜空を彩る星々は霞み始め、東の空は白み始めていた。

海を臨む丘の上からは、水平線から空が桜貝色と淡い金色に染まりつつある。

「……だけどさ、どうするんだよ、その子？」

ロンがセレネの腕に抱かれた赤子を見ると、一段階低い声で聞いただしてくる。

「あの人とあの女の子だぜ。なんというか、邪悪そのものだ」

「それなら、殺しますか？」

セレネは自分の口調が少し尖っていることに気が付いた。腕の中の赤子はむずかしそうに顔を歪め、寝返りを打とうとしていた。

「……殺しは駄目だ」

ハリーが言った。

「この子は何もしていない。殺したら……あいつと同じになる」

ロンは何も答えなかった。手を汚さずに済み、少し安心しているようにさえ思えた。

この場集った全員が同じ意見のようだ。誰も、デルフィーニを殺そうという者はいない。それを見て、セレネは大きく肩を落とした。

「……はあ、この年で母親ですか」

「ご、ゴント!? 何を言ってるんだよ!」

「非情に不本意ですが、あの女から赤子を託されたのは私ですので」

最低最悪のベラトリックスだが、この子を想う愛情だけは本物だった。

母親の犯した罪の重さを押し付け、育児を突っぱねることは簡単だが、何度も言葉を重ねるが、子ども自身に罪はない。

それに、セレネとしては、この子が誰にも愛されることがなく成長し、第二のベラトリックスやヴォルデモートになることだけは避けたかった。

ずっと昔、ダンブルドアがセレネに言った言葉を借りれば、この赤子は「誰よりも闇に落ちる危険がある子」である。それならば、誰かが近くに寄り添い、闇に落ちないように導かなければならない。

セレネは、ここににいる者の中で、その役目を果たすことができるのは自分しかないと思った。

ハリーやロン、セオドールに務まるとは思えない。

まかり間違っても、グリンデルバルドには絶対任せてはいけない。それこそ、闇の魔法使いが新たに誕生してしまう。

「一応、私はスリザリンの血を引いています。……認めたくはありませんが、この子の血縁と言えるでしょう。」

さて、赤子の処遇が決まった今、一番大切なのはグリーンゴッツへの潜入方法についてです」

セレネは気持ちを切り替えるように、わざと一オクターブ高い声で言い放った。「作戦会議と行きましょうか」

残る分霊箱は1つ。

ハリーが分霊箱なのかは確証をつかめていないが、確実にゴールに近づいてきている。いる。

セレネはこの手でヴォルデモートを殺せる日が近づいてきていることを強く感じると、少しでも薄雲が漂っていた心が晴れた気がした。

海に面した小綺麗な丘の上。

セレネの腕に抱かれた赤子は、まだ眠り続けている。

まだ自分の生まれも知らず、母親からの愛と一緒に受け継がれてしまったあまりにも重く巨大な罪も知らないまま——……。

ベラトリックス脱落。

今回の題名は他に「ベラトリックスの罪」という案がありました。

そっちの方が良かったかなと、今でも悩んでいます。

ベラトリックスの忠誠心はヴォルデモート卿から離れていましたが、彼女は娘と同じくらい、ヴォルデモートも愛していました。

ハリー・ポッターの登場人物って悪役でも作中や設定を見て「可哀そうで悲しい人だったんだ」と思う人物も多いですが、ベラトリックス・レストレンジは絶対的に悪だと思います。

時代や生まれが悪かったかもしれないにせよ、彼女の罪を罪とっていない行動は大っ嫌いです。

彼女はグリンデルバルドの傘下に下ったとしても、自分の振る舞いを絶対に改心

する姿が想像できませんし、マグル生まれを蔑視する思考を変えることもないと考え、このような結末になりました。

彼女の娘は、ベラトリックスの愛と罪を背負って生きていくことになるでしょう。

「呪いの子編」はしっかり執筆しますので、ご安心ください。

「死の秘宝編」が終わるまで、残り9話。

次回「グリーンゴツ」は6月7日0時投稿予定です。

92話 グリンゴッツ

グリンゴッツ突入は1か月後に決定した。

本当なら1週間以内に決行する予定だったのだが、ゴブリンの体調が回復していないこと、そして、ハーマイオニーが受けた精神的なダメージが予想以上に大きかったことから先延ばしにすることが決まった。ハーマイオニーはヴォルデモートに服従の呪文をかけられ、味方に襲いかかってしまったショックが大きく、立ち直るのに少し時間が必要だった。

彼女が立ち直るまで、ハリーとロンでマルフォイ邸から救出したゴブリンに協力を要請。セレネがハーマイオニーの代わりにグリンゴッツ突入の作戦を立案することになった。

立案することになった、のだが——……

「ゴブリンが首を縦に振らない？」

セレネは小首を傾げると、両面鏡の向こう側にいる人物を見返した。

鏡の向こうのハリーは疲れたように頷いている。

「そうなんだ。助けてくれたことには感謝しているみたいだけど、グリンゴッツへ盗みに入るのは自殺行為だって」

「……まあ、正論ですよね」

セレネは少し頭を抱えた。

せめて、自分がいれば交渉がもう少し上手くいったかもしれないと思ってしまふ。だが、「貝殻の家」は大人数向けの家ではない。新婚夫婦向けのこじんまりとした一軒家だ。そこに長らく滞在するわけにもいかず、ましてやベラトリックスの赤子、死喰い人の息子、正体を隠した闇の魔法使いを滞在させるのは、ビル・ウィーズリー夫妻に申し訳ない。無害と分かっていたところで、警戒を解くことはできないだろう。

だから、セレネは到着して早々、ハリーたちと簡単な打ち合わせと今後の方向性を決めた後は、ひとまず別れることに決めたのである。

とはいえ、作戦の立案や打ち合わせを守護霊の魔法でやり取りするのは時間の無駄だ。

故に、セレネが以前使っていた両面鏡をハリーに貸すことで、この問題を解消し

たのである。

しかし、セレネは貝殻の家を出たのは早計だったかもしれないと思い始めていた。

「ゴブリンが欲している報酬などはありませんか？」

「それも良く分からなくて……というか、魔法使いのために働きたくないって感じが強いんだ」

「そう、ですか」

これは最悪、ゴブリンなしの作戦を立案するしかないかもしれない。

セレネはハリーとの通信を切ると、がつくりと肩を落とした。そのままベッドに倒れ込む。

「一番手っ取り早いのは服従の呪文を使うこと、だけど……ね」

自分で呟いてみて、その案はないと首を振る。

服従の呪文を使うには抵抗感がある。理論は知っているのでかけられるとは思いますが、相手の意思を剥奪し、意のままに操るなんてぞっとする。なによりも、この呪文はヴォルデモートを連想させた。

「ま、なるようにしかならないか」

セレネは諦めるように言うときき上がり、ベッドの脇に目を向ける。

サイドテーブルのように置かれたベビーベッドには、毛布に包まれた赤子がすやすやと寝息を立てている。両面鏡で通話を始める前まで、ミルクが欲しいと泣いていたことが嘘のようだ。

赤子はミルクを欲しがり、おむつが濡れたことを教え、時折、人のぬくもりを欲する。

ヴォルデモートの子とさえ思わなければ、ごくごく普通の赤子である。

「……変な感じ」

セレネは呟いてみる。

自分のベッドとか服とかが置いてある空間に赤子がいるのは、なんだか不思議な感じがする。

グリンデルバルド子飼いの死喰い人が捕まったことにより、セレネ一行は別の住居へ移動していた。それは、セレネがもともと住んでいた家だ。その住居一帯に防犯魔法と「秘密の守り人」の魔法をかけ、潜伏している。

この家に移動した理由は、簡単に言えば、かくれんぼの理論である。鬼は「そこ

にはいない」と判断した場所は、もう一度探しに来る確率が低い。実際、ヴォルデモートか死喰い人が家探しした痕跡はあったが、それは何か月前のようで、他に誰も足を踏み入れた形跡は見当たらなかった。

よって、セレネは半年以上ぶりに自宅に帰れたのである。

グリンデルバルドが住処としていた住居や魔眼蒐集列車の部屋に比べると貧相だが、セレネにしてみればホグワーツの寮と同じくらい落ち着く空間だった。

『『アクシオ―来い』』

セレネは軽く杖を振ると、魔法史の教科書と呼び寄せる。教科書をぱらぱらとめくり、お目当てのページで止めた。

「ここだ……ゴブリンの闘争」

魔法使いとゴブリンとの間では、騒動が絶えなかった。

もちろん、グリンゴッツという小鬼が経営する銀行を魔法使いも使っているが、それとは別個にゴブリンとのいさかいは絶えたためしかない。これはゴブリン側に非があることもあるが、魔法使い側にも悪い所がある。

その騒動の中心となる大半は、ゴブリン製の宝物だ。

そもそも、ゴブリンは特殊な魔法を扱い、切れ味がよく、汚れを落とす必要のない武器を製造する。特にゴブリン製の銀製品は自身を強化するに値するものを吸収する性質があるのだ。

セレネ的にゴブリンとは邪悪な雑魚モンスターのイメージが強いが、現実のゴブリンはドワーフに近い。

ゴブリンは不思議な宝や特殊な武器を生産することに長ける反面、守銭奴気味で宝を手放したがない。特に、魔法使いとの騒動の論点になってくるのは、宝の継承権に関してだ。

ゴブリンはゴブリン族の創り出した貴金属は「金を払った者に貸す」だけと考えているため、人間がゴブリン製の貴金属を購入後に承継するしきたりを敵視している。購入者が死んだときは、ゴブリンに返すべきだと考えているのだ。その採め事のせいで、軽い戦争に発展した事件が歴史上に数多く存在する。

「つまり、ゴブリン族の宝ともいえるべきものをゴブリンに返せば……なんとかなら？」

セレネは口元に指を当てながら考え込む。

もちろん、そんな都合の良い宝物など持っていない。唯一、セレネが持っているゴブリン族の貴金属と言えば、スリザリンのロケットだ。だが、あれも分霊箱を破壊した際、ほぼ二つに割れてしまっている。溶かせば金としての価値はあるかもしれないが、ゴブリンは満足してくれないだろう。

では、他のゴブリン製の貴金属や武器を用意する必要がある。そこまで考えたとき、セレネは少しだけ口の端を持ち上げた。

「そうだ、あの手があるじゃない」

セレネは顔をにやけさせたまま、杖を軽く振った。杖先から大蛇が現れると、するすると動きながら窓の向こうへと消えていく。あとは、待つだけだ。セレネはまだ寝息を立てている赤子に目を向ける。

「ちょっと行ってきますね、デルフィーニ」

あまり意味がないだろうが、眠る赤子に断りを入れると、セレネは部屋から出ることにした。

ちょうど、リビングに降りた時だった。

玄関の呼び鈴が慣らされる音が聞こえてくる。セレネは杖を構えるのとはほぼ同時

に、チャリティ・バーベッジが扉の方へ駆け寄るのが見えた。

この住居には「秘密の守り人」の呪文がかかっている。玄関まで入ることが許されている者は、セレネたち一行の他、先程、守護霊で伝言を送った人物しかない。「セレネ。貴方が呼んだって言ってるけど……」

玄関に足を向けると、チャリティが困惑した顔を浮かべていた。セレネはチャリティから訪ねてきた人物の名前を確認すると首を縦に振った。

「大丈夫です。入れてください」

セレネはそう言いながら、玄関のドアを開けた。

すると、汚らしい髪をした小男が敷居に転がり込んできた。念のため、セレネは小男に杖を向けると

「『レベリオ―正体を現せ』」

と呪文を唱えてみた。

変化は何も起きない。セレネは、男の目線まで屈んで見せた。

「久しぶりですね、マンダンガス」

「な、なんだよう急に俺を呼び出して！俺にだって商売があるってんだ！」

「実は、その商売に関する話です」

セレネはニッコリと微笑みながら、どこか怯えた小男を見つめた。

「以前、私は言いましたよね？　ホグワーツの創始者に関する品か、宝物が隠されていそうな神秘的な場所を探してくるように、と」

「あ、ああ、言われたなあ。でも、ホグワーツ創始者のゆかりの品なんてねえよ！」

「神秘的な場所は？　何かが隠されていそうな、神秘的な場所がありましたか？」

「あー……まあ、あったにはあったが……」

マンダンガスの歯切れが悪い。

セレネはますます笑みを深めながら、少し声を弾ませながら探りを入れた。

「もしかして……私に教える前に、先に潜り込んでみたとか？」

セレネが言うと、マンダンガスの身体がびくりと震えたのが分かった。少し顔を逸らし、たらたらと汗を流し始めている。どうやら、凶星のようだ。

「どこを探してたのですか？」

「……コーンウォールの遺跡だ」

「で、なにか見つけましたか」

マンダンガスは押し黙ったまま答えない。だから、セレネは彼の耳元で一言

「契約」

と告げた。

「け、剣だ！ ああ、白銀の剣だ！ 値打ちもんだ！」

「現物は？」

「これだよ！ ここにある！」

マンダンガスはシミや汚れだらけの肩下げ鞆に手を入れると、清廉な長剣を取り出した。如何なる銀よりも白く輝いており、手で触れるのが申し訳なくなってくるような剣であった。柄は血を滴らせたように赤々しく燃え、輝いている。

セレネは剣とその出自を踏まえ、自分の知識に照らし合わせ、あつと驚いてしまった。

「……まさか……クラレント？」

セレネは仰天する。

アーサー王伝説に登場する王位継承を現す剣だ。反逆の騎士モードレッドが武器庫から盗み出し、アーサー王との最後の戦いで用いた剣である。カムランの丘とさ

れるコーンウォールの遺跡から発掘されても不思議ではない宝物だ。

セレネが問い返すと、マ ندダンガスは重々しく頷いた。

「数年前、あの場所でエクスカリバーの鞘が発見されたんでえ。他の値打ちもんもあるんじゃないかと、探したらよう、これが出てきたんだ」

「エクスカリバーの鞘！」

そこらもかなり魅力的な品であるが、数年前となると他の者が手に入れた可能性が高い。

問題は今、マ ندダンガスの手にある白銀の剣だ。マ ندダンガスを呼び出したのは、ゴ布林製の宝物を手に入れてないか探るためだったが、これは嬉しい誤算である。クラレントと思わしき剣は、アーサー王の時代から千年以上経過しているというのに、いまだ失せない輝きを放っている。この時点で、ゴ布林製であることは間違いなかった。

「これ、讓ってくれませんか？」

「な、なに言ってやがる！ 嬢ちゃん、さすがに嬢ちゃんでも無理な話だ！」
マ ندダンガスは怒ったような顔になると、クラレントを強く抱きしめた。

「俺がどれだけ苦勞して、こいつを手に入れたと思っただよう！ 安く見積もっても100万ガリオンはするぜ!? うんにゃ、もともっと値段を吊り上げたとしても、欲しがる連中はたくさんいる！」

「そうでしょうね。でも、忘れたとは言いませんよ？」

私、貴方の代わりにポッター作戦に協力したせいで、蛇男とその配下に殺されかけたんですから」

セレネは声のトーンを落とした。

「もし、私が代わりを申し出ていなければ……貴方はサイコパスと戦う羽目になっていたんですよ？ 後ろから放たれる死の呪いを絶えず躲し、1時間以上飛行する……貴方にそれができますか？」

「う、うぐう……そんなとき、俺だったら『姿くらまし』を——……」

『姿くらまし』をしたら、作戦がバレてしまいますよね。もしかしたら『姿くらまし』をしようとした貴方を止めようとしたムーディに死の呪いが当たってしまうかもしれません」

マndanガスはますます縮こまった。その様子がありありと想像できたのだろ

う。

「でもよう、それは全部『もし』の話だ！」

「……ですが、私との契約がなければ……コーンウォールの遺跡に入ろうとも思わなかったのでは？」

「それは……そうだけだよ」

「ただで引き取るとは言いませんよ」

セレネは財布を取り出すと、金貨を取り出した。

「10ガリオンでいいですよね？」

「じ、10ガリオン!? そんな馬鹿な!! かなり桁が足りねえよう！」

「いいですよね? それとも、契約をお忘れですか? 絶・対・服・従」

マندانガスは、セレネに服従しなければヒキガエルに早変わりだ。

彼はかなり不服そうなしかめ面をしたが、カエルに変わるの嫌だったのだらう。セレネから10ガリオンを受け取ると、しぶしぶクラレントを渡してきた。

「ありがとうございます。今度は、私から儲け話を提示しますね。」

あ……それからもう一つだけ、お願いしてもよろしいでしょうか」

セレネが満面の笑みでクラレントを抱きかかえると、さらに声を潜めて話しかける。

「お尋ね者ではない魔法使いの髪と、その人物のグリンゴッツの鍵を手に入れてくれませんか？」

「お尋ね者ではない魔法使い？」

「ええ。今月末に持ってきてください。そうしたら報酬として、20ガリオン払います」

セレネが金貨を提示すると、マンドングスは悪態をつきながら帰っていった。

「おーい、なんか悪徳な取引をしてなかったか？」

「気のせいです。それでは、貝殻の家へ行ってきます」

いつの間にか後ろにいたセオドルからじっと湿った視線を向けられる。けれど、セレネは気にすることなく貝殻の家へ向かった。

結果は良好。

セレネがゴブリンの前でクラレントを提示し、「これをゴ布林族に返還する代わりに、協力してほしい」と協力要請を出したところ、喜んで食いついてきた。

ゴ布林は悩んでいるふりをしていたが、クラレントを見た瞬間、がらりと様子が変わった。意地悪そうな目が爛々と輝き、クラレントに釘付けになっていたのである。

ゴ布林が、この剣を喉から手が出るほど欲しいのは一目瞭然だった。

事実、その日の午後にはゴ布林から、今回の取引を受け入れるとの回答を手に入れることができた。

ところが、ゴ布林は『ハツフルパフのカップを手に入れた後に、クラレントを渡す』という交換条件を疑っているらしい。セレネがクラレントと一緒に家を去った後、ハリーたちは「小鬼に監視されているみたいだ」と両面鏡越しに教えてくれた。

そして、運命の日が訪れた。

「1 番楽な方法は不可能と分かったので、2 番目の方法を実行します」

セレネは集った全員に告げた。

1 番楽な方法とは先日助けてくれた屋敷しもべ妖精の力を借り、レストレンジ家の金庫の前まで『姿くらまし』をしてもらう案である。だがしかしゴブリン曰く、グリンゴッツの最深部はしもべ妖精の魔法ですら太刀打ちできない防衛措置が施されているらしい。

そうなる、取るべき方法は限られてくる。

「正攻法でグリンゴッツに入ります。正面突破です」

セレネは、ポリジュース菓を掲げた。

貝殻の家の前には、セレネの他にハリー、ロン、ハーマイオニーの三人組が勢ぞろいしている。1 月の真冬の明け方ということもあり、まるで心の隙間まで凍えさせるような風が吹き荒れていた。防寒魔法をかけてもなお、風は鋭く吹きつけている。ただし、ハリーの足元に佇むゴブリンだけ寒さを感じていないらしい。吹きすさぶ風を特に気にすることなく佇んでいた。

「ポリジュース菓で変身できるのは1 人です。ですので、私と誰か1 人は目くらましの魔法で姿を消すことになります。ハリーとゴブリンの彼は——……」

「僕の透明マントを被る。でも、誰に変身するの？」

ハリーが尋ねてきた。

セレネは髪の毛が飛ばされないように気を付けながら、薬に入れ込んだ。

「ナイトバスの運転手、アーニー・プラングの髪です」

「そいつなら、僕がやるよ」

ロンがセレネからポリジュース薬の瓶を受け取った。

「ナイトバスなら乗ったことがあるんだ。運転手とも話したことがあるよ……乗り心地は最悪だったけど」

「では、私とハーマイオニーは『目くらまし』で問題ないですね」

セレネが言うと、ゴブリン以外の全員が頷いた。セレネが唯一首を縦に振らなかったゴブリンに視線を向ければ、こちらに少し疑った眼差しを向け返してきた。

「お嬢さん、クラレントはありますよね？」

ゴブリンが少し棘のある口調で尋ねてくる。セレネは鞆の中からクラレントを取り出すと、ゴブリンの前でかざして見せた。

「すべて終わってから渡します。迅速に。それでいいですね？」

「……かしこまりました。その約束さえ守ってくだされば問題ありません。協力しましょう」

「ありがとうございます。では、計画の全体を話します」

セレネは少し声を潜めると、ロンに鍵を渡した。

「まず、ウィーズリー。貴方はアーニー・プラングのふりをしてください。この鍵を使って、自身の金庫を開けるように請求するのです。」

その後は貴方——……名前は……」

「グリップフック」

「グリップフックさんの出番です。トロッコを運転して、レストレンジ家の金庫まで案内してください」

「最下層の金庫を守っているのは魔法ではありません。ドラゴンです」

ゴブリンのグリップフックは言った。

「グリンゴッツのドラゴンを避けるためには、鳴子が必要です」

「そこは問題ありません。私が何とかします。ですので、私がドラゴンの相手をしている間、貴方たち4人はレストレンジ家の金庫に侵入し、カップを手に入れて

ください」

「でも、どうやって脱出するの？」

ハーマイオニーが尋ねてくる。

「運が良ければ、アーニー・プラングとして堂々と外に出れます」

「運が悪ければ？」

「強行突破です。全力で押し通ります」

随分と頭の悪い言い方だが、それ以外に言い様がない。

金庫破りだとバレたが最後、敵と戦うのは目に見えている。下手に策をこうするよりも、強行突破した方が分かりやすい。

「それに、強行突破した方が、あの蛇男に伝わると思いませんか？」

「まあ、そうだけどさ」

ロンとハーマイオニーは不安そうな色を隠せなかった。代わりに口を開いたのは、ハリーだった。

「セレネ。君は……一人で大丈夫かい？」

「一人？」

「グレイブスって人やノットはいなくて大丈夫？」

「……ああ、そのことですか」

セレネは問いかけに対し、さらっと答える。

「あまり大人数で金庫破りするのは大変でしょう？ グレイブスには自宅待機、セオドールには睡眠薬を盛ってきました」

もちろん、セオドールが新しく手に入れた「静止の魔眼」があれば、ドラゴン封じに良いかとも思ったが、人数が多くなりすぎる。

セレネはグリンゴッツにはマグルの紙幣との両替に訪れた程度で、金庫まで降りるトロッコに乗ったことはない。だが、ハリーからの情報によると、ハグリッドと自身が乗ったら一杯になったらしい。ちなみに、ハグリッド一人で成人魔法使い3人分の横幅がある。そう考えると、これ以上の人数で作戦を決行するのは困難に思えた。

無論、セオドールはそのような事実を伝えて引き下がる人物ではない。というこ
とで、セレネは睡眠薬を盛ることにしたのである。

彼を失神させることも考えたが、それは優雅ではない。それに、睡眠薬を盛るこ

とは、魔眼蒐集列車で騙してきた仕返しでもあった。

夕食に睡眠薬を盛る作戦は功を奏し、セレネが出立するときには、まだ彼は自室で眠りこけていた。

セレネは軽く目を瞑った後、全員を再度見渡した。

「では、ぬかりなく行きますか」

「その前に、クラレントをポッターかそちらの二人にお渡しください」

グリップフックが付け加えるように言った。

「カップを手に入れた後、クラレントを渡してほしいのです。そのためには、こちらの三人が持っていた方が良いと思います」

「カップを手に入れ、グリーンゴッツを出た後に渡します。ですが、不安なのであれば、彼らに預けましょう」

セレネはクラレントをハーマイオニーに渡した。

ハーマイオニーが自身のビーズバックにクラレントを仕舞い込む様子を、グリップフックは少し陰険な目で見ていた。

その後、ハリーがグリップフックを背に乗せると透明マントを被り、ロンはポリ

ジュース菓を飲んだ。ロン・ウィーズリー特有の赤毛はふさふさの白髪へ変わり、そばかすは皺へと変わった。

「どう、僕？」

ロンは声まで老人のようにしゃがれていた。

「いい感じ。貴方だとは思わないわ」

ハーマイオニーがそういうと、ロンは嬉しそうな、しかし、どこか不満そうな顔をした。

セレネはハーマイオニーと顔を見合わせると、互いに「目くらまし」の魔法をかける。こうして、貝殻の家の前に立っているのは、疲れ果てた老人一人になった。「じゃあ行くよ、3つ数えたら漏れ鍋に出発だ。3……2……1！」

透明マントの下のハリーが掛け声をかけた。

セレネは漏れ鍋に意識を集中させると、ハリーの合図とともに回転した。数秒後、セレネの足が歩道を打ち、視界にはチャリングクロス通りが広がっていた。朝ということもあるのだろう。マグルたちが眠そうな顔で出勤していくのが見えた。当然ながら誰も、漏れ鍋の存在に気付かずに慌ただしく通り過ぎていく。

アーニー・プラングの変身したロンが漏れ鍋の扉を開いた。

セレネが初めて訪れた時、漏れ鍋はローブ姿の魔法使いで満ちていたが、悲しいまでに誰もいなかった。

朝という時間帯もあるのだろうが、なんとなく陰気な感じが立ち込めている。腰の曲がった歯抜けの亭主がグラスを磨く手を止め、ロンに話しかけた。

「アーン、一杯飲んでいくかい」

「悪いトム。用事があるんだ」

ロンが答えると、亭主は寂しそうに腰を曲げたまま、グラスを磨く作業に戻った。

ダイアゴン横丁も静まり返っていた。

開店の時間には少し早く、買い物客の姿はほとんどいない。それを考慮するにせよ、最初に訪れた時と比べて寂しいくらい様変わりしていた。これまでになく多くの店が閉じられ、窓には板が打ち付けられている一方、前回来た時にはなかった店が数軒あった。そのすべてが闇の魔術専門店で「問題分子」と説明書きの付いたハリーやセレネの顔が睨んでいる。自分に睨まれるのはあまり良くない気分である。

ぼろを着た人たちが何人も店の前で蹲っていた。

金銭をせびったり、自分は本当に魔法使いなのだと訴える声が虚しく響く。

これが、ヴォルデモートの望む世界なのだろうか。

セレネは片目を包帯で覆い、足を引きずりながらまばらな通行人に「私は魔法使いだ！ 半純血なんだ！ 助けてくれ」と訴える男を横目で見ながら、暗い気持ちになった。

明るく賑やかで彩り豊かなダイアゴン横丁の面影は一切ない。

きつと、ヴォルデモートがトム・リドルだった頃、訪れた横丁は賑わいに満ちていただろう。それを見たりドル少年は、心を弾ませなかったのだろうか。それとも、あの頃から、このように暗い世界を望んでいたのだろうか。

その横丁で、唯一変わらない建物があった。

曲がりくねった石畳の道を、小さな店舗の上に一際高くそびえる雪のように白いグリンゴッツだ。セレネはひっそりとロンの後ろを歩いた。大理石の階段の下に着くと、扉の両側には細長い金属の棒を持った魔法使いが立っている。

門番の魔法使いたちはロンが上がってくることに気付くと、金の棒を掲げて近づ

いてきた。

たぶん、あまり良い目的ではない。

『コンファンド―錯乱せよ』

セレネは金の棒がロンの身体に触れる直前、門番2人に錯乱呪文をかけた。ロンはその隙によぼよぼと階段を上っていく。グリーンゴッツの敷居をまたいであら振り返ると、門番たちは眩暈がしたかのように、額をなぞっていた。

細長いカウンターの向こう側で、脚高い椅子に座ったゴ布林たちが業務に没頭している。

ロンは広々とした大理石のホールを少し怖氣ついたように歩きながら、カウンターに近づいた。

「アーニー・プラングだ。自分の金庫に入りたい」

「鍵はお持ちですか？」

「これだ」

ゴ布林はロンから鍵を受け取ると、若いゴ布林が現れた。

セレネたちは若いゴ布林に案内されるままトロッコに辿りついた。朝が早い

らだろう。周囲には他の客の人影はもちろん、ゴブリンすら見当たらない。

『『ソムナーヌー眠れ』』

セレネの呪文は若いゴブリンに当たると、ゴブリンはこてんと眠り始めた。

「さあ、早く！」

グリップフックは透明マントの下から現れると、トロッコの御者台に乗った。ハリーも透明マントをしまい、ハーマイオニーも呪文を解く。セレネも目くらましを解くと、念のために眠りこけた若いゴブリンを抱え、トロッコに飛び乗った。

ここまでは上手くいった。

ここからが本番である。

トロッコはがたと音を立てると発車した。どんどんと速度を上げ、くねくね曲がる坂道の迷路を下へ下へと進んで行く。セレネはまるでジェットコースターのようだと感じた。天井から下がる鍾乳石の合間を飛ぶように縫いながら、地の底へと深く潜っていく。

セレネは念のため道を覚えようと努力したが、右、右、左、三叉路を直進しての右、左と目まぐるしく動いていくので、とてもではないが覚えきれなかった。

「この先にドラゴンがいます」

グリップフックが叫んだ。

「対処方法は本当にあるのですね？」

「ありますのでご安心を——……ッ」

次の瞬間、火の玉がトロッコを掠めた。

巨大なドラゴンが行く先の地面に繋がれ、最も奥深くにある5つの金庫に誰も近づけないように立ちはだかっていた。長い間、地下に閉じ込められていたのだろう。色の薄れた鱗は剥がれ落ちやすくなり、両眼は白濁したピンク色だった。両方の後ろ脚には足かせが嵌められ、巨大な杭に鎖でつながれていた。

「私が動きを止めます。その隙に金庫へ！」

セレネはトロッコから到着する前に飛び降りると、今まさに火を噴こうとするドラゴンの鱗の剥がれた場所に狙いを定め、鋭く呪文を唱えた。

『『アレスト・モメンタム―動くな』！』

ドラゴンは火を吐く姿勢のまま固まった。その隙についてハリーたちが1つの金庫に向かって駆けだす。その足音が天井高くまで響き渡っていた。もしかしたら、

あの足音で気づかれるかもしれない。セレネは危惧したが、自分は自分のすべきことに専念する。

セレネはドラゴンの眼に照準を合わせると次の魔法をかけた。

『ソムヌー眠れ』！』

セレネは出来る限りの魔力を練り込み、眠りの魔法を放つ。

眠りの魔法がドラゴンにも有効だということは、4年生の時の三校対抗試合「第一の試験」でフラァ・デラクールが実証している。彼女は獰猛なドラゴンを眠らせ、その隙に金の卵をとったのだ。もちろん、ドラゴンの大部分は魔法を弾き返す鱗に覆われているため、普通の呪文は効果がない。

しかし、ドラゴンの急所である眼なら話は変わってくる。

唯一、鱗に覆われていない両眼に眠りの魔法をかければ、意外と効果があるのだ。セレネの呪文を受けたドラゴンは、白濁した眼をとろんとさせ、瞼を降ろし始めた。

「……これで、ドラゴンは無効化できた。あとは、ハリーたちに託すしかありませんね」

セレネはハリーたちが消えていった金庫に視線を向けた。

1分……5分……10分経っても出てこない。いったい、何をぐずぐずしているのだろうか。セレネが金庫の方に近づこうとした、その瞬間だった。セレネは貫くような殺気を感じた。弾かれたように振り返った途端、頬のすぐ傍を閃光が掠めた。

「侵入者だ！ 金庫破りだ！」

その数、100人を超すゴブリンたちが警備の魔法使いを連れて、わらわらわらと降りてくる。

ゴブリンたちの手には短刀が握られ、その表情は鬼気迫るものがあつた。

もしかしたら、予定外の金庫が開けられたことがゴブリンたちに伝わり、金庫破りが発覚したのかもしれない……なんてことを頭のどこかで考えながら、セレネは盾の呪文を展開した。魔法使いたちの放つ呪文を弾き返しながら、金庫に目を向ける。ハリーたちはまだ出てこない。

「盗人だ！ まだ中にいるぞ！」

ゴブリンの大半はセレネではなく、金庫の方へと駆けだしていった。

やはり、ゴブリンは金庫に誰かがいることを知るシステムでもあるのかもしれない。とはいえ、セレネも危ない状況であることには変わらない。魔法使いたちが放つ魔法のせいで天井が揺れ、ドラゴンが眠りから覚めようとしている。

『ステューピファイ―麻痺せよ』

セレネは赤い閃光を放ちながら、一人、また一人と撃破していく。

ドラゴンは薄らと瞼を開けると、低い声で唸り始めた。

そのうちに、ゴブリンたちが金庫の前に辿りついた。

一人のゴブリンが金庫に指を通し、重々しい扉を開ける。その次の瞬間、扉の向こうから眩いばかりの金銀財宝が津波のように押し寄せてきた。これには、体の小さいゴブリンたちは、足どころか体の自由を奪われてしまう。短剣を手にしたまま、全員が金の洪水に埋もれ、波に流されていった。

その波の上を滑るように、ハリーたちが姿を現した。

「やったよ!!」

ハリーがカップを掲げている。

セレネはそれを見届けると、すぐさま自身の鞆から箒を取り出した。

「ハリーとウィーズリーで乗ってください！　ハーマイオニー、こちらへ！」

「君、正気か!？」

ロンが呪文の合間を縫い、息を切らしながら言った。

「どこに飛ぶんだ？　ここは地の底だぞ!？」

「だから、上に行けばいいんじゃないですか！」

セレネはハーマイオニーの手を取った。

「とにかく上を目指せば、出口ですよ」

自分たちは地の底へ、底へと進んできた。

ならば、逆の行いをすれば外に出ることができる。つまり、ひたすら上へ登ればいい。

『ヴォラートー飛べ』！

セレネはハーマイオニーの手を握りしめると、地面を蹴り飛ばした。

身体が浮き上がり、天井へ向かって一直線で飛び始める。下方のハーマイオニーが悲鳴を上げる声が聞こえてきた。

「飛べってどこに!？　トンネルに向かって!？」

「最初は考えましたが、あれは自殺行為です」

トンネルの中に戻るのは無謀である。

当初の脱出計画だと、来た道をひたすら飛んで戻るつもりだったが、あそこまで入り組んでいたのだ。きつと、上へ逃げる泥棒への対策として、通行止めになっている道もあるのだろう。むしろ、侵入者が現れたのだから、ほとんどの道を通行止めにしていく可能性が高い。

「だから、別の方法で地上に戻ればいいんです」

一番いいのは、自分たちで天井を掘り進めることだ。

ここにはスプーンもシャベルもないが、もっと便利な穴掘り魔法がある。もちろん、ちんたら掘っている暇など存在しない。ならば、この場で最も破壊力を秘めた存在に助けてもらえば良いだけの話だ。

セレネは杖を下に向けた。すっかり目を覚ましたドラゴンは、魔法使いへ向けて火を吐き散らしている。

セレネは空に浮かんだまま、まずはドラゴンの鎖に向かって

「『レラシオ―放せ』」

と唱える。そのすぐ後に、ドラゴンの頭の辺りに向かって軽い衝撃魔法を放った。ドラゴンからすれば小石をぶつけられたような感じだろうが、頭上に敵がいることを察したことに他ならない。ドラゴンは身体を上を浮かすように持ち上げ、火を噴こうとした。そのとき、ドラゴンは気づいたようだ。足がどこまでも持ち上がる。つまり、がっしりとした足枷が外れ、自分が自由になったことを悟ったのだ。自由と敵を比べたら、当然、自由の方に手が伸びる。

ドラゴンは両方の翼を開くと、金の波に埋もれて悲鳴を上げるゴブリンたちを薙ぎ倒しながら、ぐんっと舞い上がった。すぐにセレネたちが飛んでいる辺りまで到達し、その先の天井に頭をぶつける。ドラゴンからすれば、自分の行く手を塞ぐ邪魔な天井だ。ドラゴンは迷うことなく炎を吹くと、トンネルを吹き飛ばした。

ドラゴンが行く手を破壊するたびに、岩と煙、そして熱が押し寄せてくる。

『プロテゴ―守れ！』『プロテゴ―！』

セレネは、自分たちと少し離れたところを飛んでいるハリーたちに盾の魔法をかける。

このおかげで、随分と視界がはつきりした。少なくとも巨石の落下を恐れ、避け

る手間が省ける。

「『ディフォディオー掘れ』！」

セレネの後ろで、セレネの意図を組んだハーマイオニーがドラゴンを手助けし始めた。ハリーやロンもハーマイオニーに倣い、穴掘り魔法を連発して天井を吹き飛ばしにかかる。セレネも助きたいが、飛行魔法と盾の呪文を継続させることに全神経を集中させているので、長々と穴掘り魔法を連発することが難しい。ハリーたちとドラゴンが天へ天へと進みゆくさまを黙って見届けるしかなかった。

ゴブリンたちが何かをがらと鳴らす音が聞こえたが、その音もだんだんくぐもり、前方にはドラゴンの吐く炎で、着々と道が開けた。

呪文の力とドラゴンの怪力、炎の力が重なり、ついに大理石のホールを吹き飛ばした。

これにはゴブリンたちや一般客たちも悲鳴を上げ、身を隠す場所を求めて逃げ惑い始める。とうとう翼を広げられる空間に到達したドラゴンは、入り口の向こうに爽やかな空気を嗅ぎ分け、角の生えた頭をその方向へ向けて飛び立った。金属の扉も力尽くで突き破り、捻じれた蝶番がぶら下がった扉をしり目に、ドラゴンはよろ

めきながらダイアゴン横丁に進み出ると、そこから高らかに大空に舞い上がった。

「僕たちはどうするの!？」

ハリーがドラゴンのすぐ脇を飛びながら尋ねてくる。

「『貝殻の家』に戻るわけにはいきませんので、ひとまず私の家へ!」

セレネは自宅の住所を告げると、ハーマイオニーと手をつないだまま、その場で回転した。

義父と育った自宅の前に現れると、セレネはほっと安心した。わずか1、2時間程度の時間だったが、安全地帯に戻ってくることができる、どれだけ引き締めた心も緩むものである。

「ごめんなさい、セレネ」

ハリーたちが到着するのを待っていると、ハーマイオニーが口早に話しかけてきた。

「クラレント、グリップフックに渡し損ねたの」

「あとで落ち着いてから渡しに行けば、特に問題ありませんよ」

セレネが答えた時、ちょうどハリーとロンがよろめきながら現れた。

「うへー、箒に乗りながら『姿くらまし』なんてするもんじゃないや」

ロンが気持ち悪そうな顔をしていた。ハリーの顔色も良くないが、2人とも五体満足らしい。セレネは彼らの無事を確認すると、玄関の扉を開いた。

「戻りました」

セレネが入ると、グリンデルバルドが近づいてきた。

「その様子だと上手くいったようだな」

「ええ、まあなんとか」

「離れて、セレネ!!」

セレネが会話していると、ハーマイオニーが鋭く叫んだ。彼女は眼に恐怖を浮かべせながら、両手で杖を構えている。ハリーとロンは彼女の変化に戸惑っているように見えた。

「その人から離れて、セレネ!」

「……あー……そういうことですか」

セレネは自分のミスを悟った。

今までグリンデルバルドは彼らに「パーシバル・グレイブス」として接していた。

ところが、今の彼はどう見てもグリンデルバルドに他ならない。ハリーたちは分らないらしいが、しっかり魔法史を勉強している女性には正体が露見してしまったようだ。

セレネは疲れたように息を吐くと、杖を取り出した。

「ハーマイオニー、この人はからかうのが好きなんです。それでも不安なのでしたら……『エクスペリアームス―武器よ去れ』」

セレネは軽く杖を振るい、グリンデルバルドから杖を取り上げる。

「私が彼の杖を持っていますので、ご安心ください」

グリンデルバルドの持っていた節の多いダンブルドアの杖を振りながら、セレネはこの杖の持ち主と化していた人物を見上げた。その男は何かを考え込むように、杖を持っていた手を握ったり離したりしていた。

「グレイブス、変身を解いてください。それ、本当に心臓に悪いですよ」

「……フロイライン、それが君の望みならばそうしよう」

グリンデルバルドは自身の身体に手をかざすと、パーシバル・グレイブスの姿に変身した。まるで変身が解けるかのように変身術をかけるのは、やはり見事とし

か言いようがない。それも、杖なしでやって遂げるのだから、この男の能力は異常だった。

ハーマイオニーはまだ訝しむような視線を向けていたが、ハリーとロンはすっかり信じ切っているように見えた。

「さあ、お茶を淹れましょうか。疲れたでしょう？」

チャリティー・バーベッジが優しく微笑むと、茶の準備を始めた。

紅茶とスコーンを食べると、心も落ち着き始めた。肩の荷が下りたような安らかさがある。セレネはスコーンを食べ終えると、かぼちゃジュースを飲み始めたハリーに言葉をかけた。

「それで、ハリー。分霊箱は？」

「ここにあるよ」

ハリーはポケットの中から純金のカップを取り出した。穴熊の刻印が押されている。セレネは魔眼殺しを外すと、カップに目を落とした。

「……さてと、行きますか」

カップには、またとない程の死の線がこびりついている。

セレネが狙いを定めていると、カップに宿ったリドルの欠片は死の危機が迫っていることを察知したのだろう。カップはカタカタと揺れると、カップの底に赤い目玉が一つ現れた。後ろから見ていたバーベッジとハーマイオニーが、小さく悲鳴を上げる声が聞こえてくる。

「『お前は——』」

「ごめんなさい、話している暇はありません」

せつかなので、セレネはダンブルドアの杖で線をなぞった。

不思議なことに、いつもの沙羅の木の杖よりも手に馴染み、力を込めずに死の線を絶ち切ることができた。あつという間に赤い目玉は二つに分かれ、断末魔のような悲鳴を上げる暇もなく粉々にされる。

これまでの内、最も呆気ない分霊箱の最後であった。

「この杖……?」

「これで残る分霊箱は1つだ」

グリンデルバルドが言うのと、ロンが嬉しそうにガッツポーズをとるのが分かった。

「あとは『例のあの人』が分霊箱の場所を思い浮かべるだけ——……ハリー?」

ロンがハリーの方を向くと、ハリーが額を抑えて床に蹲るところだった。苦しうに呻きながら、荒い息を吐いている。

「ハリー！」

ハーマイオニーが気づかわしそうにハリーの背中を撫でる。ハリーの目の焦点が定まっていない。ただ、ゆっくりと焦点が定まっていく。ハリーはどこか長旅をしてきたかの後のようなこえで、ぽつりと呟いた。

「……あの人は、知った。僕たちが、分霊箱を破壊して回っていることを」

「それで、最後の一個の場所は分かった」

「うん……最後の一個はホグワーツにある。ホグワーツに隠されたレイブンクローに関する品だ！」

ハリーの声が静まり返った部屋に響き渡った。

「ホグワーツ」

セレネは呟き返す。

魔法使い トム・リドルにとって始まりの場所。

セレネにとっても魔法使いとして歩み始めた最初の場所だ。そして、セレネたち

が7年間過ごした神秘と魔法の城でもある。

そこに、最後の分霊箱が眠っている。

まるで何かの因果のようだ、とセレネは感じた。

「あいつはすぐにホグワーツに行かない。他の隠し場所を確かめてから、ホグワーツを確かめに向かうみたいだ。最初はゴーストの小屋、次は洞窟だ」

「では、まだ時間がありますね」

「でも、どうやって忍び込むつもり？」

ハーマイオニーが不安そうに尋ねる。

「ホグズミードに行こう」

ハリーが言った。

「学校の周囲の防衛がどんなものか見てから策を考えよう。時間はあるけど、あまりないんだ！　すぐに行動しないと！」

ハリーは透明マントを広げた。

「これに隠れて行こう」

「でも、私たち全員は入りきらないわ！」

「シリウスが隠れていた洞穴に『姿現し』すれば問題ないよ」

ハリーが急かしてくる。

無理もない。今この瞬間にも、ヴォルデモートはゴーストの小屋に向かい、分霊箱がないことに気付くはずだ。

「焦りは禁物ですよ、ハリー」

「セレネ、時間はないんだ！とにかく、ホグズミードから侵入しなくちゃ！」

「だから、そんな危ない真似をしなくても問題ありません。

だって、私たちには内通者がいるではありませんか」

セレネは口元に弧を描いてみせた。

グリンゴッツの脱出は、もっとダイナミックにしても良かったかなと反省中です。
次回更新は6月13日0時を予定しています。

○クラレント

モードレッドが盗み出した王位継承の剣。

コーンウォールの遺跡から発掘され、マンダンガスが盗み出しました。

現所持者はハーマイオニー。切れ味は抜群。

先に出土したエクスカリバーの鞘がどこにいったって？ ご想像にお任せします。

○グリンゴッツのドラゴン

原作同様、自然に帰りました。

魔法省の役人がマグルの記憶からもみ消すのに苦労したでしょう。

たぶん、ガス会社のせいにしたんだ。

○グリップフック

今頃、帝王様に殺されてる。

○ニワトコの杖

さらっと保持者が更新されました。

○内通者

原作とは異なり、まだ死んでいない人物。

○ソムーヌー眠れ

睡眠魔法。4巻でフラーがドラゴンを出し抜くときに使った。
しかし、呪文がなかったので勝手に創りました。

93 話 ホグワーツの秘密主義者

ホグワーツは魔法の城だ。

純血及び半純血の青少年が集められ、魔法によって守護されている。

そして、「お尋ね者」のハリー・ポッターが戻ってくる可能性が高い場所でもある。ゆえに、防衛魔法が張り巡らされているのは確実であり、吸魂鬼を始めとした闇の魔法生物や闇の呪文で周囲を固められているだろう。おそらく、お膝元に位置するホグズミード村もしかりだ。

つまり、シリウス・ブラックがホグワーツに侵入した頃と比べ、難易度は倍くらい増していると考えるのが妥当だろう。

では、どうやって侵入するのか。

答えは簡単である。

ハリーは協力者を呼び出すと、その小さな協力者に話しかけた。

「だから、ドビー。君の魔法で校内に入れてもらいたいんだ」

「もちろん、かまいません、ハリー・ポッター。ですが……」

屋敷しもべ妖精のドビーは二つ返事で了承したが、その後すぐに顔を曇らせる。怖がるように耳を伏せ、某のような足をかすかに震わせていた。

「今のホグワーツはハリー・ポッターがいた頃とは異なります。お戻りになられるのは、とても危険です」

「心配してくれてありがとう、ドビー。でも、僕たちはホグワーツに戻らないといけないんだ」

ハリーはドビーの視線の位置まで屈みこむと、彼の瞳をまっすぐ見つめた。

「君の力が必要なんだ」

「ハリー・ポッター……」

ドビーは怯えたように背を丸めていたが、小さく頭を振ると、ハリーの緑色の瞳を見返した。

「ドビーは自由なしもべ妖精です。ハリー・ポッターの頼みを叶えます！」

「ありがとう、ドビー！」

「ですが、ハリー・ポッター。ドビーはホグワーツへ侵入する前に会って欲しい人がいます」

ドビーは言った。

「ハリー・ポッターの危機を教えてくれた人に会ってもらいたいのです」

ハリーたちは互いに目を見合わせた。

セレネもハリーが持っている両面鏡の存在は聞いていたが、対の鏡の所持者までは知らなかった。ドビーを遣わしてくれたことから「不死鳥の騎士団」のメンバーかそれに類する者であることは分かっていたが、何者かまでは特定できていない。おそらく、ハリーは、対の両面鏡を持つ人物が気になったのだろう。ドビーに問い返していた。

「誰なの？ 僕も知っている人？」

「ホッグズ・ヘッドのバーテンです、ハリー・ポッター」

「ホッグズ・ヘッドですって!？」

ハリーが口を開く前に、ハーマイオニーが面を喰らったような声を上げた。

「あの胡散臭いパプの!？」

「……言い過ぎですよ、ハーマイオニー」

セレネは彼女を嗜めたが、彼女同様、ガツンと頭を殴られたような衝撃を感じて

いた。

ホググズ・ヘッドは一度訪れたことがあったが、あまり良い印象のない場所だ。掃除も行き届いておらず、埃が何重にも溜まり、バタービールの瓶もべっとり汚れていた。客層も好ましいとは言えず、フードを目深に被り怪しげな取引をする魔法使いや魔女が見られた。

正直なところ、セレネはホググズ・ヘッドこそ、ヴォルデモート陣営と最も密接な関係を築いているパブだと思い込んでいた。

「ホググズ・ヘッドのバーテンが、君を？」

ハリーは声を潜め、ほとんど囁くように尋ねた。

「その通りでございます。」

あのパブのバーテンはダンブルドア様の弟君に当たるのです。つまり、アバーフォース・ダンブルドアなのです」

しもべ妖精は少し誇らしそうに名前を口にした。

ハリーたちはもう一度、顔を見合わせる。誰もが驚きと困惑で満ちていた。何を言うべきか、悩んでいるようにも見える。その中で、最初に口を開いたのは、ロン・

ウィーズリーだった。

「会いに行ってもいいんじゃないかな？　だって、もしかしたら、ダンブルドアから大切なことを聞いているかもしれないだろ？」

「でも、ロン。私たちには時間がないのよ。早くお城に戻らないと——……」

「僕は行くべきだと思う」

ハーマイオニーの反論を遮るように、ハリーがロンの考えに賛同した。

「ダンブルドアの実の兄弟だ。可能性は低いかもしれないけど、聞いてみる価値はあると思う。」

それに……助けてくれたお礼をしたい」

「それは、そうだけど……」

ハーマイオニーの心が僅かに揺れたようだったが、完全に傾かせるまで行かなかったらしい。

「どう思う？」

ハーマイオニーは言いながら、こちらを見てきた。

セレネはハーマイオニーの「自分の意見に賛同して」とでも言いたそうな視線を

感じながら、小さく息を吐くと肩を落とした。

「時間がありません。限られた時間内で、全ての可能性を試す必要があります。」

……私は、バーテンと会うことに賛成です」

セレネが淡々と答えると、ハーマイオニーは心外そうに顔を歪めたが、気もちが吹っ切れたのだろう。

「分かったわ。私も賛成。そうと決まれば、早く行かなくちゃ」

「では、手を繋いでください」

ドビーが言うと、ハリーとロン、続いてハーマイオニーが手を繋いだ。セレネも自分の荷物を確認すると、ハーマイオニーの手を握りしめた。ハーマイオニーの小さな手を感じながら、もう片方の手を隣の人物に差し出す。

「助言者、貴方はどうします？」

「無論、行く……と言いたいが、私は遠慮しておこう」

グリンデルバルドが断ったので、セレネは意外だと驚いた目付きで彼を見上げた。「ここで待つと？」

「アバーフォースとは生きるか死ぬかの大喧嘩をしたことがある。私が行くと色々
と面倒だろう。ここで朗報を待つとしよう」

グリンデルバルドはそう言いながら、少し屈みこみ、セレネの耳元で囁いてきた。
「武器は多い方がいい。これを持っていけ」

グリンデルバルドは何を渡したのか、ハリーたちに知られたくないのかもしれない。
大きな体でセレネを隠しながら、小さなものを手渡してきた。手触りからし
て、冷たい鉄だ。特に装飾された様子はなく、長さは10センチ程度だろう。

「飛び出しナイフだ。きつと、役に立つだろう」

「……それは、貴方が視た未来ですか？」

セレネは疑念の眼差しを向けると、グリンデルバルドは唇を反り返すように笑っ
た。それだけで、特に言葉を返してこない。セレネはナイフをポケットに入れる
と、グリンデルバルドは身体を退かした。

「君の周りには、魔眼持ちが数多く存在する。きつと、君のために働いてくれるだ
ろう」

グリンデルバルドの微笑みは「私も含めて」と言っているように見えた。

「……では、また後程。紅茶とお菓子を準備して待っていてくださいね」

セレネは自身の口に微笑が滲んできたことを感じながら、グリンデルバルドに向かって言葉を投げかけた。彼は何も答えない。ただ右手を挙げた。その手は了承を指しているのか、はたまた別れの意味なのか。セレネには分からなかった。

「それでは、準備は良いですか？」

ドビーが4人を見渡した。

ハリーが全員を見渡す。セレネも含めた3人は頷き返した。

「オーケー。ドビー、よろしく頼むよ」

「承知しま——……」

「待て！」

ドビーの言葉をかき消すように、大量のドングリを落としたような音を立てながら、階段を駆け下りてくる音が聞こえた。セレネは、まるで大量のドングリを上から落としたような音である、なんて考えながら、音の主の到着を待った。数秒と経たず、支度を整え終えたセオドルの姿が現れる。余程急いだのか、襟元が少し乱れ、髪には寝癖がついたままだった。

「こらっ、ゴースト！ 謀ったな！」

「さあ、何のことでしょう？」

「しらばっくれるな。オレを置いて行こうとしてるだろ！」

それは、グリンゴツのことですか？ それとも、ホグワーツに行くことですか？

セレネはそう答えようとしたが、面倒が増し、時間がかかりそうな気がしたので、何も答えないことにした。眠り葉が切れ、起きてしまったなら仕方あるまい。再度、睡眠の魔法で落とすのも面倒だ。

「寝ていたので、起こさなかっただけです」

セレネはそう答えると、空いている方の手を差し出した。

「ホグワーツに行きますよ。……一蓮托生でしょう？」

彼からは疑いの眼差しを向けられはしたが、追及はしてこなかった。代わりに、差し出された手を握り返してきた。

「ああ、もちろんだ」

セオドールは挑戦的な笑みを向けてくる。彼の参加に文句を言う者は誰もいな

かった。我先にと反論しそうなロンですら「仕方ないさ」と力なく笑っている。

これで、全員揃った。

ドビーは5人がしっかり手でつながっていることを確認すると、指を鳴らすような音と共に世界が回転した。親しみ慣れた居間が、そこに佇むグリンデルバルドの姿が急速に遠のいていく。

そして、次の瞬間、埃っぽい床に足を打っていた。

「ここです、ハリー・ポッター」

そこは小さな部屋だった。

足のガタついた椅子とテーブル以外に目立つ家具はない。他に目につくのは、壁にかけられた小さな長方形の鏡と浮世離れた少女の絵だけだ。

ハリーは鏡に近づくと、自身の巾着から両面鏡の破片を取り出すと、静かに目を落とした。壁にかけられた鏡は、ハリーの姿を映し出していた。

「これが、対の鏡だ。でも、どうして、アバーフォースが……」

「ダンクから買った。一年ほど前に」

部屋の入り口から声をかけられる。

ホッグズ・ヘッドのバーテンこと、アバーフォース・ダンブルドアだった。兄弟と言われなければ、ダンブルドアとの共通点を考えもしなかっただろう。だがしかし、兄弟と指摘されれば、確かに似通った顔立ちとも言えなくはなかった。とりわけ、ダンブルドアのすべてを見通すような青い瞳とほとんど瓜二つの瞳をしている。「兄から、これがどういうものか聞いていたんだ。ときどき君の様子を見るようにしていた。」

だが、何故戻ってきた？ 死喰い人がお前さんたちを捕まえようとウロウロしている場所に！」

アバーフォース・ダンブルドアはかなり怒っているようだった。

「いままで助けてくれて、ありがとうございます。僕、そのお礼を言いたかったんです」

ハリーが一步前に出ると、口を開いた。

「僕たちは、これから城に入らないといけない。だから、その前に貴方にお礼を言いたかった」

「城に入るとするのは、俺の兄の命令か？」

アバーフォースが言った。

「兄のアルバスは、いろいろなことを望んだ。そして、兄が偉大な計画を実行している時は、決まって他の人間が傷ついたものだ」

「でも、僕たちはダンブルドアの遺した仕事をやり遂げる義務があるんです」

「へえ、そうかね。成人になりたての魔法使いに任す仕事だから、簡単な仕事だろうな？ 楽しい仕事だろうさ。あまり無理せずできる仕事か？」

アバーフォースの言葉に対し、ロンはかなり不愉快そうに笑い、ハリーとハーマイオニーは緊張した面持ちだった。セオドールはどっちつかずの顔をしている。ドビーはおろおろとハリーとアバーフォースの間に立ち、交互に視線を向けていた。「兄は死んだ。だから、忘れろ。兄と同じところに逝っちまう前に！」

ポッター、俺は兄を知っている。秘密主義を母親の膝で覚えた男だ。秘密と嘘をな」

アバーフォースはそう言いながら、少女の絵に寂しげな視線を向けた。

「ダンブルドアさん。その、あれは……貴方の妹さんでしょうか？」

ハーマイオニーが遠慮がちに聞いた。アバーフォースは素っ気なく頷いた。

「妹のアリアナだ。妹がどうして死んだか知ってるか？」

兄はグリンデルバルドと偉大なる計画を行おうとした。『秘宝』を探し、魔法界の秩序を正す計画を練る。家長としての役割も忘れ、病気の妹を見守る役目も放り出した！ 妹をないがしろにしようが、アルバスは『より大きな善のため』だからと言って聞き入れようとしなない！」

アバーフォースの口調に熱がこもり始める。だんだんと危険な表情が浮かび上がってきた。

「しかも、アルバスは『より大きな善のため』とやらの計画に、妹を連れて行こうとした！ 俺は『すぐにやめろ』と言った。アリアナは動かせる状態じゃない！ アリアナは『オブスキュラス』なんだ。6つの時に、マグルの男の子三人組に襲われ、乱暴された。それから、オブスキュラスになっちまったんだ！ オブスキュラスの子で成人に達した者は滅多にいないと知っているだろう!？」

アバーフォースが理解を求めるように視線を向けてきたが、ハリーとロン、そして、セオドールは困惑したままだった。無理もない。オブスキュラスについては、詳しく学ぶ機会は少ないのだ。セレネは彼らを一瞥すると、彼らに解説するよう

に、どこか少し低い声で話し始めていた。

「オブスキュラスとは、魔法族の子どもが精神的または身体的に虐げられ、自分の魔力を隠さないと抑圧されたときに宿るものです。オブスキュラスが宿った子は、自身の感情のコントロールを失った時、ずっと抑圧されていた魔力がオブスキュラスとして暴走し、周囲を攻撃します」

「……オブスキュラスの宿った子を育てるためには、ストレスフリーの生活環境を整えることが大切となります。ですが、精神を安定させ続けるのは極めて難しく、魔力を暴走させたまま死亡してしまうケースが多いです。

10 歳を超えて生存している子は滅多にいません。成人年齢に達したオブスキュラスは……」

「もういい」

アバーフォースは、セレネと、セレネの語りを引き継ぐように話し始めたハーマイオニーの言葉を制した。

「アリアナは14歳だった。いつ死んでもおかしくなかった。その妹を危険な旅に連れていけるわけないだろ？」

俺は説明した。そしたら、兄は機嫌を悪くした。グリンデルバルドに至っては、気を悪くするどころではなかった。あやつは怒った。

『ばかな小僧だ！ 自分と優秀な兄の行く手を邪魔しようとしている。自分たちが世界を変えてしまえば、隠れている魔法使いを表に出すことができる。マグルに身の程をわきまえさせ、哀れな妹を隠しておく必要もなくなる』……グリンデルバルドは、そう言った」

セレネはアバーフォースの話聞いて納得した。確かに、あの男なら言いそうなセリフである。そして、このあと起こった展開を予想できるような気がした。

「俺とやつは口論になった。俺は杖を抜き、奴も抜いた。兄の親友ともあろう者が、俺に『磔の呪文』をかけたのだ。

これには、アルバスも止めようとした。それから、三つ巴の争いになり、閃光が飛び、激しい音が鳴り響いた。

妹は発作を起こした。アリアナには耐えられなかったのだ」

当時のことを思い出したのだろう。アバーフォースの顔からは、まるで瀕死の重傷を負ったように血の気が失せていった。

「アリアナは……きつと、戦いを止めさせたのだと思う。優しい子だった……だが、自分が何をしているのか、暴走して分からなくなっていたのだ。そして、誰がやったのかは分からないが……妹は死んだ」

最後の言葉は泣き声になり、アバーフォースは傍らの椅子にがっくり座り込んだ。全員に暗い雰囲気の流れ始める。ドビーに至っては自分の服で鼻を噛み始めていた。

セレネは話を聞いて、どうしてグリンドバルドが同行を拒否したのか理解した。

「先生は……」

鉛のように重たい空気の中、ハリーが話し始めた。

「ダンブルドア先生は、亡くなったあの晩、魔法の毒薬で幻覚を見ました。叫び出し、その場にいない誰かに向かって懇願していました。」

『あの者たちを傷つけないでくれ。頼むから、代わりにわしを傷つけてくれ』

ダンブルドアは、あなたとグリンドバルドがいる昔の場面を見ていたんだと思う」

セレネ以外の皆が目を見張り、ハリーを見つめていた。

セレネだけは、ハリーの方を見ることができなかった。地面の一点を見つめ、固く唇を結んでいた。

ダンブルドアが飲んだ毒薬を用意したのは、ヴォルデモートではない。毒薬の作成者は、彼の大事な人たちを傷つけ、殺したかもしれない男なのだ。

セレネは、吐き出したいような自己嫌悪にかられた。あの洞窟でセレネたちがやったことについて、早い段階でハリーたちに伝えるべきだった。このことを今ほど後悔したことはない。せめて、協力者の名を伏せてでも、ダンブルドアに伝えるべきだったのだ。

「その場面を見せつけられることが、先生にとって拷問だった。先生は、ずっと悔やんでいたんだ」

「ダンブルドアが、お前のことを……小さな妹と同じように使い捨てに思うわけではないのか？」

アバーフォースの問いに、ハリーはまっすぐ頷いた。アバーフォースは一気に十年歳をとったような顔になった。しわがれた顔のまま立ち上がり、アリアナの肖像画の方に歩いて行った。

「どうすればいいのか、分かっているね」

アバーフォースが言うと、絵の中のアリアナは微笑んで、後ろに向かって歩き始めた。背後に描かれた長い長い坂道を歩いていく。アバーフォースはアリアナが道の向こうに消えていったのを見届けると、ハリーたちと向き合い、話し始めた。

「ホグワーツに続く入り口は、今はただ一つだ。」

秘密の入り口は全部抑えられている。学校と外を仕切る壁には吸魂鬼が取り巻き、校内にも定期的に見張りが巡回している。死喰い人とみて間違いない。

だが、もし……それでも君たちに何ができるのか分からないが行くのだろうか？

まあ、死に行くようなものだがな」

「どういうことだ？ ……あっ！」

セオドールが顔をしかめながら、アリアナの絵を見た途端、息を飲む音が聞こえた。

アリアナが道の向こうから戻ってきた。

それも、一人ではない。アリアナよりも背が高い誰かを連れている。近づくにつれて、だんだんと姿が大きくなっていく。しかも、興奮した足取りで歩いてくるの

だ。服は引き裂かれて、ところどころ破れていた。顔にも複数の傷跡が目立つ。

そして、ついにアリアナたちが画面全体に映し出された時、画面全部が壁の小さな扉のようにパツと前に開き、一人の青年がトンネルの入り口から現れた。

「ハリー！ 僕は信じていた！ 君が来ると信じていたよ！」

ネビル・ロングボトムだ。彼は歓声を上げながら、ハリーたちに抱き着いた。見れば見るほど、彼の姿がひどいものだと分かる。ホグワーツのローブはボロボロで、あまり上手とは言えない縫い痕だらけだった。顔の傷も治された形跡はあったが、それでも片目は腫れあがり、頬にも紫の痣が確認できた。

「その傷……？？」

「ああ、大したことはないさ。シェーマスの方が酷い。あ、そうだ。アバーフォース、あと二人来るかもしれないよ」

「あと二人!？」

アバーフォースは陰悪な声で繰り返したが、ネビルは気にも留めていないようだった。

「さあ、こっち！」

ネビルが手招きをしている。彼は手を差し出して、ハーマイオニーがトンネルを通るのを手伝い、ロンがその後に続いた。セオドールが先に入り、残されたのは、セレネとハリーだけになった。ハリーはアバーフォースに何やら礼を言い、ここまですててくれたドビーに感謝の言葉を口にした後、トンネルに入り込む。セレネも続こうとしたが、ふと、思い至って、アバーフォースを振り返った。

「あなたは……パーシバル・グレイブスという男をご存知ですか？」

「知ってる。やつに殺されたアメリカの闇払い局長官だ。なぜ、そんなことを聞く？」

「……いいえ。なんとなくです」

セレネはそれだけ言うとは軽く頭を下げ、トンネルをくぐった。

グリンデルバルドは数多くの人を殺してきた。その最初の殺人は、彼の妹だったかもしれない。果たして、あの男は悔いているのだろうか。アリアナやパーシバルの命を奪ったこと。アバーフォースやダンブルドアたち多くの人たちを傷つけてきたこと。

風の噂では過去の行いを悔いているとされている。けれど、それは本当なのだろう

うか。

レイブクローに纏わる分霊箱を探しに行くというのに、そればかりが頭を支配していた。

「ホグワーツは変わった。アンブリッジの時以下だよ。

ルックウッドの『闇の魔術に対する防衛術』は酷いよ。罰則を喰らった生徒たちに『磔の呪い』をかけて練習することになってるんだ」

トンネルを歩きながら、ネビルがホグワーツの現状を話し始めた時、セレネはようやく意識をそちらに戻した。

「えっ!？」

みんなの声が一緒になって、トンネルの端から端まで響いた。

「あれは違法だろ？」

「でも、今は違法じゃないんだ。でも、僕はやらないって言った。だから、罰せられた。」

もちろん、はまってる奴もいる。クラブとゴイルなんて、喜んでやってるさ」

「……あの二人なら、やりそうですね」

セレネはぼつりと呟いた。それと同時に、親衛隊のスリザリン生たちがどうなっているのか気になった。クラブたちのように、嬉々として「磔の呪い」をすることは思えないが、いったいどうなのだろう。

「マグル学は必修で、こっちも死喰い人のロウルが教えてる。マグルは我々とは違う間抜けで卑しい下等生物だって。

僕たち我慢できなくて、立ち上がったんだ。それが、みんなに希望を与える。僕はね、ハリー、君がそうするのを見て、それに気づいたんだ」

「もしかして、ダンブルドア軍団の活動？」

「うん、はじめはダンブルドア軍団だった」

「だった？」

ネビルの言葉が過去形だということに気付いたハリーが声を上げる

「いまはDAじゃない。ADなんだ」

ネビルが答えた。

「アンブリッジの時の教育令が復活してさ、ほら『3人以上が集まるチーム及び課外活動は許可制にする』という奴。もちろん、ダンブルドア軍団が許可されるわ

けない。そもそも、地下活動だしね。許可申請することを考えたこともなかったんだ。

僕たちは地下活動で色々やった。『ダンブルドア軍団募集中』の張り紙をはったり、罰則にあった子を助けたり、死喰い人たちをこらしめる魔法を使ったり、自分たちが立ち向かうための魔法の腕を磨いたり……でも、難しいこともあってさ。マイケル・コーナーが地下牢に吊るされた1年生を助け出すところを見つかつて、手ひどく罰を受けたんだ。

でもさ、他の子たちにも『マイケルみたいになってくれ』なんて言えないだろ？
ダンブルドア軍団の今後の活動を考えていた時、カローが相談を持ち掛けてきたんだ」

「カローって、フローラとヘスティアか!？」

セレネより先に、セオドールが反応した。

「ヘスティアだよ。ダンブルドア軍団とセレネ親衛隊の合併を持ち掛けてきたんだ。目的の方向性は同じだから、協力しようってね」

セレネはハーマイオニーの視線を感じた。実際に「親衛隊」と名前を出されると、

身体がむずむずする感じがした。

「まあ、この続きはあとで。もう到着するよ！」

ネビルは話を切り上げると、トンネルの角を曲がり、短い階段を降り始める。セレネからは見えにくいのが、先に進む人の合間から、ネビルが小さな扉を開けるところが見えた。

「みんな、朗報だぞ！」

ネビルが扉の向こうにいる人々に話しかけ、ハリーに道を譲る。次の瞬間、悲鳴や歓声が沸き起こった。

「ハリー！」

「ハリー・ポッターだ!!」

大歓声だった。ロンやハーマイオニーの名前を叫ぶ人もいる。

セレネもトンネルから抜けると、部屋を見渡した。色鮮やかな壁飾りやランプや大勢の顔が見え、少し頭が混乱した。情報を整理しながら周囲を見渡していると、人の塊がこちらに駆け寄ってくるのが分かった。

「ゴント先輩！ 隊長！」

セレネが構えるより先に、誰かが抱きついてきた。ヘスティア・カローだった。続いて、ダフネとアステリア・グリーングラス姉妹やノーマン・ウォルパートと次々に背中を叩いたり、握手を求めてきたり、泣きついて来たりしている。セレネがスリザリン生たちにもみくちゃんにされながら横目で確認すると、どうやらセオドルも同じ目にあっていた。

「セレネ、おかえり！ 良かった。本当に、無事で良かったよ……！」
ダフネが涙で頬を濡らしながら喜んでいる。

「……ただいま。心配かけてごめんなさい」

セレネの冷静な部分が『こんなことをしている暇はない。早く分霊箱を探しに行くべきだ』と訴えていたが、そのことを気に留めず、目尻を緩めながら、出来る限り一人一人に応じていた。

「はいはい、そこまでそこまで！ 私だって話したいんだから、いまは我慢しなさいって。きつと、あとで時間があるわよ」

ミリセント・ブルストロードがばんばんと手を叩きながら、スリザリン生たちを落ち着かせていた。その向こうで、ネビルがミリセントと同じようにハリーたちに

群がる子たちに向かって呼びかけている。

ここで、ようやくみんなが一步引いたので、周囲の様子を眺めることができた。まったく身に覚えのない部屋だった。

とびつきり贅沢なツリーハウスかノーチラス号のように巨大な船室のような感じもした。色とりどりのハンモックが、天井から、そして窓のない黒っぽい板壁に沿って張り出されたバルコニーからぶら下がっている。グリフィンドール、レイブンクロー、ハッフルパフ、そしてスリザリンのタペストリーがかかり、本で膨れ上がった本棚や寂れたラジオが置かれている。

セレネの記憶に該当する部屋はない。

けれど、まるでレジスタンスが潜伏しているにふさわしい部屋である。となると、思いつく場所の一つしかなかった。

「まさか、ここは必要の部屋？」

「今までで最高だろう!？」

ネビルが答えてくれた。

「ルックウッドたちは僕たちの活動に否定的でさ、僕を大人しくさせようと色々な

真似をしたんだ。ホグズミード村行きを禁止したり、ばあちゃんを捕まえようとしたり——……」

「なんだって!？」

ロンが声を上げると、ネビルはにやりと笑った。

「ばあちゃんを人質にするつもりだったみたいだ。でも、ばあちゃんを侮り過ぎたんだ。ばあちゃんは死喰い人を返り討ちにして、逃亡中だよ。」

まあ、そんな感じで、僕を黙らせておく方法はないと悟ったみたいでさ、アズカバン送りにしようとしてきたんだ。それ以降、僕はここに隠れている。もともと、ADの活動拠点だったし」

「ネビル、さっきから言っているけど、ADってなに？」

ハーマイオニーが尋ねると、ネビルの代わりにヘスティアが声を上げた。

「正式名称は『全ての寮を防衛する協会—All dorm Defence association』。通称は『アルバス・ダンブルドア軍団—Albus Dumbledore's army』になりますの。ダンブルドア軍団と活動内容はほぼ同じですが、学校から認可された団体という点では異なりますわ」

「許可されたのかい!？」

ハリーが目を見開くと、ネビルが杖を振り巻物呼び寄せた。確かに、そこは認可証でしっかり校長印が押されている。

「こういうことを思いつくのは、さすがスリザリン生だよね。彼女たちが申請したら、ほとんど確かめもせずにOKが出たって」

「前例があったからこそその作戦でしてよ」

ヘスティアは謙遜するように言った。

「そもそも、ダンブルドア軍団の活動は危険が多すぎます。大々的にやり過ぎで、逆に敵から攻撃される理由を与えるなんて、まったくもって優雅ではありません」
「表向きの活動内容は『全ての寮を見回り、例のあの人』に反抗的な生徒から寮生を防衛する』ことです」

アステリアがヘスティアの言葉に続いて説明を始めた。

「罰則で地下牢に吊るされている子を救い出す理由は『これ以上痛めつけると、反体制へ走る危険性があるから』。ダンブルドア軍団の団員が入隊している理由は『入隊させて、間近で監視するため』」。

……ほとんどこじつけですけど、スリザリン生が見張っていたり言い訳をしたりする間に、他寮の子たちが行動を起こすのが、最も安全で素早く行動できると考えました。

その……やり過ぎ、ですか？」

「いえ、良いと思います」

アステリアから上目遣いで尋ねられ、セレネは自然と頬を緩めていた。

死喰い人たちは、純血の多いスリザリン生に強く出られないのだろう。それを上手く活かした作戦である。

「本当にいいわ！」

セレネの隣で、ハーマイオニーも賛同していた。

「各寮が団結していて、とっても良いと思う。ほら、組み分け帽子も言っていたじゃない？ 『危険が迫っている時だからこそ、各寮が団結せよ』 って」

「ハーマイオニー、組み分け帽子の言葉を覚えているのは君くらいだよ」

ロンが口を挟むと、ハーマイオニーは軽く睨み付けた。

その時、ちょうどハリーが立ち眩みをしたように、ふらついたことに気付いた。

おそらく、ヴォルデモートの思念を垣間見てしまったのだろう。きっと、ヴォルデモートが、どこかの分霊箱が失われていることに気付いてしまったのだ。

「ハリー、大丈夫？　椅子に座る？」

「ありがとう、パーバティ。」

でも、僕たちは行かないといけないんだ。先に進まなくちゃいけない」

「それじゃあ、ハリー。僕たちは何をすればいい？」

シエーマスが声を上げる。

「計画があるんだろ？　あいつらを倒す計画が！」

「計画？」

ハリーが傷痕を抑えながら繰り返した。

「ごめん、シエーマス。僕たちは……僕たちはやらないといけないことがあるんだ。大切なことを、やらないといけない。君たちには……話せないんだ」

「何なの？　僕たち、なんでもやるよ！」

ネビルが眉根を寄せると、ここに集った者たちも熱心に、ある者は厳肅に頷いた。クリービー兄弟なんて椅子から立ち上がり、すぐにでも行動する意思を示して

いた。

「僕……」

ハリーが言い淀んでいる。

そんなハリーを見て、セレネは気が付くと言葉を漏らしていた。

「明かせる範囲で明かせばどうです？」

「……セレネ？」

「知識は多い方がいいですし……」

セレネは、脳裏に洞窟での出来事を思い浮かべながら話していた。

ハリーはしばらく悩んだようだったが、覚悟を決めた表情になると、アルバス・ダンブルドア軍団のメンバーを見渡した。

「僕たちは……あるものを探しているんだ。『あの人』を打倒する助けになるものだ。ホグワーツにある。でも、どこにあるのか分からない。レイブンクローに関する宝物だ。たとえば、鷲の印のある何かを、どこかで見かけたことはない？」

ハリーはどこか期待を込めた眼差しで、レイブンクローの寮生たちを見た。

パドマ・パチル、マイケル・コーナー、テリー・ブート、アンソニー・ゴールド

スタイン。誰も答えない。黙したままだった。

「ずっと昔に、失われたものかもしれないんだ。昔はあったけど、今はない物でも構わない」

「失われた髪飾りがあるよ」

ハリーの問いかけに対し、後ろから夢見心地な声をかけられた。

振り返ると、扉が開き、トンネルの向こうから、ルーナ・ラグブッド、ジニーとフレッド、ジョージ・ウィーズリー、リー・ジョーダン、セドリック・ディゴリー、そして、チョウ・チャンが現れた。

ロンが目をむいて、突然現れた団体に尋ねた。

「どうしてここに？」

「伝言を貰ったのさ、ホグワーツに稲妻光るってね」

フレッドが偽ガリオン金貨を持った手を掲げた。

「これから、もっと来ると思っぜ。なんてったって、『例のあの人』を打倒する祭りの始まりだ」

「それは……さすがに、言い過ぎじゃないかな？」

フレッドに対し、セドリックが曖昧に笑いながら言葉を挟む。

『『あの人』を倒す祭り、だなんて……おかしい』

「セドリック、おかしいなんてナンセンスだぜ？」

「そもそも、今の世の中自体がおかしくて、行き過ぎてる」

フレッドとジョージがセドリックを見ながら交互に話し始めた。セドリックが肩をすくめ「僕が悪かった」と苦笑いをする、双子の兄弟はハリーに視線を戻した。

「それで、ハリー。髪飾りがどうしたんだ？」

「髪飾りとやらを見つける計画なのか？」

「いや、まだ髪飾りだと決まったわけじゃないんだ。その、レイブンクローの髪飾りはいつ失われたの？」

ハリーがレイブンクロー生に問いかけた。

「レイブンクローの髪飾りが失われたのは、何百年も前という話よ」

チョウが言うと、ハリーはあからさまにがっかりした表情になった。

「フリットウィック先生がおっしゃるには、髪飾りはレイブンクローと一緒に消えたんですって。みんな探したけど、でも……」

チョウは、レイブンクロー生に向かって訴えかけるように言った。

「誰もその手掛かりを見つけられなかった。そうよね？」

レイブンクロー生が一斉に頷いた。それを聞いたロンが口を開いた。

「あのさ、髪飾りってどんなものなんだ？」

「冠みたいなものだよ」

アンソニーが言った。

「魔法の力があって、それをつけると知恵が増すと考えられていたんだ。

でも、誰も見たことがない」

「あつ、でも、ハリー」

アンソニーが言い終えるのとほぼ同時に、チョウがまた口を開いた。

「その髪飾りの形状なら、私たちの談話室に連れて行って見せてあげられるけど？
レイブンクローの像がそれを着けているわ」

「ありがとう。誰か案内してくれる？」

ハリーが言うと、レイブンクロー生よりも先にジニーが立ち上がった。

「ルーナ、ハリーを案内してくれる？」

「いいよ、もちろん！」

ルーナが嬉しそうに言うのと、出口に向かって歩き始めた。ハリーも彼女の後に続く。出口の扉を覗き込むと、必要の部屋がある8階の廊下ではなく、狭くて急な階段が続いていた。

「行く先が毎日変わるんだ。だから、あいつらは絶対に見つけれない」
ネビルが解説をしている。

「ただ問題は、出て行くのは良いんだけど、行く先がどこになるのか分からないんだ。気を付けて、ハリー。あいつら、必ず夜は廊下を見回っているから」

「大丈夫、すぐに戻るよ」

ハリーとルーナは階段の向こうに消えていった。

それを見計らったかのように、ラベンダー・ブラウンが動いた。彼女はロンに駆け寄り、質問をし始める。

「ねえ、ロン。グリーンゴッツを破ったって本当？」

それを皮切りに、また部屋の中が騒がしくなった。

「そういえば、ヘスティア」

セレネはヘスティアに顔を向けた。先ほどから、ずっと疑問に思っていたことを尋ねる。

「フローラはどうしたのですか？」

彼女の双子の姉、フローラの姿が見当たらない。

ネビルの話からも、ヘスティアの名前は出たが、フローラの実在は確認できなかった。姉の名前が出た瞬間、ヘスティアの輝いていた顔が一気に曇った。

「その……姉様は、もういません」

「いないって……どうということ？」

セレネは問い返していた。

フローラとヘスティアは鏡で互いを映し出しているような双子だった。仲睦まじく、ちょっと過激な思想も似ていて、どこへ行くにも2人寄り添っていた。健康そのもので、病気にかかったところを一度も見ることがない。

「時折、ホグワーツに死喰い人が視察に訪れるのです」

ヘスティアは顔を青ざめ、細い声を震わせながら教えてくれた。

「ラバスタン・レストレンジが視察に訪れた時、あの男は姉様に目を付けたんです。

ご存知の通り、姉様は純血の娘で器量がよく、魔法力にも優れていました。それで、あの男は……あの男は……」

ヘスティアはその先の言葉を口にするのが辛かったのだろう。そのまま俯き、声を押し殺すように泣き始めた。彼女の代わりに、傍にいたノーマンが重たい口を開いた。

「フローラさんはレストレンジの申し出を断ったんです。

『私は学生です。結婚はしませんし、したくありません』って。そしたら、あいつはフローラさんに『服従の呪文』をかけ、連れて行っただけです。僕たちは連れ戻そうとしました。でも、止められなくて……」

「……そう、ですか……」

ノーマンも辛そうに唇をかみしめた。

ラバスタン・レストレンジはベラトリックスの本来の旦那、ロドルファス・レストレンジの弟だ。軽く見積もっても、10歳以上年齢が離れている。セレネはフローラが服従の呪文にかけられ、自意識を喪失する瞬間を思い浮かべると、ぞっとするくらい寂しくなった。セレネは自分の気持ちを固めるように、一度、瞼を強く閉じ

た。

「……レストレンジ家は、フランスにあると聞きます」

セレネはそう言いながら、ゆっくりと目を開いた。

「すべて終わったら、服従の呪文を解きに行きましょう」

そもそも、ホグワーツが敵の手に落ちなければ、フローラが無理やり婚姻させられることもなかったのだ。

このような状況を打破しなくてはいけない。そう考えると、ここで留まっている時間がもったいなく思えた。

「私……私、少し調べたいことがあります」

セレネは一人で外に出ようと歩き始めたが、すぐに足を止め、振り返った。

一人で行動を起こしてもいいが、今は時間がない。セレネは一人でも信用できる手が欲しいと思った。

「アステリア、ノーマン。状況に変化があった時は、守護霊を飛ばしてください。セオドル、ヘスティア、ついてきてくれませんか？」

四人は二つ返事で答えてくれた。

「必要の部屋」はますます騒がしくなっていた。ホッグズ・ヘッドと繋がった扉が時折開き、ウィーズリー夫妻やビルとフラー夫妻、マッドアイ・ムーディーが現れ始め、ホグワーツをスネイプの手から解放し、ヴォルデモートと戦う方法について話し始めている。ADのメンバーたちはいよいよ迫った決戦を思い浮かべ、呪文の練習をしたり、歴戦の猛者たちが話し始めた作戦を熱心に聞き入っていたりしていた。

誰も、セレネたち数人が消えたことを気にする者はいない。

「何をするんだ」

しんと静まり返った廊下に出ると、セオドルが尋ねてきた。

記憶が正しければ、5階の廊下である。目的の場所に行くには、少しばかり遠く、時間がかかる場所だ。セレネは壁の方に歩きながら、短く

「調べものです」

と答える。セレネは壁を触り、時折こんこんと叩いた。

「ゴント先輩、図書室に行くということでしょうか？」

「いえ、秘密の部屋です」

「秘密の部屋って……あの秘密の部屋かよ？」

「ええ、その秘密の部屋です」

セレネは壁に向かって蛇語で語りかけながら、ゆっくりと歩いた。

「先輩。どうやって、秘密の部屋に……？」

「当然、パイプを伝ってですよ」

「そりゃ、パイプの中を移動したら、巡回の奴らに見つかからないかもしれないけどさ……」

セオドールが呆れたような口調で言った、次の瞬間だった。

『お呼びですか、主？』

パイプの向こうから、ぬうつと巨大な蛇が現れる。セレネは後ろで彼らが腰を抜かす気配を感じながら、蛇の滑らかな身体を撫でた。

「サラザール・スリザリンはレイブンクローと交流がありました。もしかしたら、髪飾りに関する文献が残っているかもしれません」

セレネは、アルケミーの身体を撫でながら話を続けた。

秘密にすることはできた。自分一人で行くこともできるし、その方がはるかに楽

だ。ところが、時間がない。自分である大量な蔵書から文献を探し出すことは難しいように思えた。

それに、今の自分には信用できる友人がいる。多少の秘密を明かしても、ちゃんと守ってくれる信頼がおける人たちがいる。一緒にリータ・スキーターをはめたり、グリンデルバルドの正体を知っても黙ってくれたりしてくれた。だから、今回もきつと問題ない。それでも、万が一のことがあったら、それは見る目がなかった自分や時と場所が悪いというだけだ。

セレネは『アルケミーと出会った頃の自分だったら、絶対に打ち明けないだろうな』と考えながら、呆然としているセオドルとヘスティアに微笑みかけた。

「さあ、1000年前に封印された部屋へ『髪飾り』の痕跡を探しに行きましょう」

次回更新は 6 月 20 日を予定しています。

次回もよろしくお願いします。

原作との大きな変更点は以下の通りです。

○ダンブルドア軍団 (DA) ↓アルバス・ダンブルドア軍団 (AD)

ダンブルドア軍団と親衛隊が合併してできた組織。

原作ではスリザリン生皆無でしたが、たぶん、仲間になりたかった子もいたんじゃないかなって思います。

○闇の魔術に対する防衛術とマグル学の教師

6 章末で死喰い人のカラー兄妹が再起不能の重傷を負ったため、同じく死喰い人のルックウッドとロウルに変更。授業内容は同じ。体罰も同じ。

○アリアナがオブスキュラス

原作中では明記されていません。ですが、アリアナの病状とあまりにも似ているので、オブスキュラスだということにしました。

94 話 レイブンクローの髪飾り

「……少し埃がたまってるわね」

セレネは秘密の部屋の最奥部に辿り着くと、アルケミーの頭から滑り降りた。約1年ぶりに訪れる「秘密の部屋」は、相変わらず湿り気が多く立ち込めていた。特に隣接された書斎は1年間誰も足を踏み入れていないこともあり、埃が少しばかり溜まっている。歩いてみると、自分の足跡がくつきり残っていた。

7年生になったらホグワーツに戻ってくるつもりだったこともあり、読みかけの本が机の上に置きっぱなしにされていた。セレネがその表紙を指でなぞると、その部分だけ薄らと蓄積された灰色の埃が払われ、本来の色がくつきり浮き立った。「ゴースト先輩、ここが……秘密の部屋、ですか？」

ヘスティアが、どこかおっかなびつくり周囲を見渡しながら尋ねてきた。セレネは彼女の問いに頷きながら、ダンブルドアの杖を取り出した。

「正確に言えば、スリザリンの書斎です。『スコージファイー清めよ』」

セレネは「埃っぽさと湿り気が少しマシになればいい」程度の気持ちで杖を振る。

ところが、予想以上に埃が一扫され、湿り気が遥かに緩和された。息苦しさは皆無で、息を吸い込むと冷気を吸い込んだ時みたいのに、ずっと肺までクリアになっていく気がした。書棚に積もっていた埃も消え、くっきり足跡を残していた床も磨き抜かれ、顔が映りそうなくらい輝いている。

この快適さ、しもべ妖精が毎日かかさず掃除をしているスリザリン寮の談話室より居心地が良い。

「さすが先輩。素晴らしい魔法です！」

「……ありがとう、ヘスティア」

セレネは礼を言いながら、ダンブルドアの杖に目を落とした。

ダンブルドアの杖は、物の数秒足らずで空気清浄機と除湿器が数時間で為せる技をやったのけた。それどころか、部屋全体が新品同然のレベルまで掃除がされている。

7年間慣れ親しんできた沙羅の杖では、最悪の状態から最善の状態に部屋を清めるまで、もう少し魔力を込めて意識を集中させる手間がかかる。いや、全力の魔力を込めて集中したところで、ここまで完璧に清掃できるとも思えない。

不思議と手に馴染む杖は、自分の力を万全以上に引き出している。

この杖があれば、もしかしたら——……

「それで、ゴント。何をすればいいんだ？」

セオドールの咳払いで、セレネは我に返った。

「え、あ、そうでした。サラザール・スリザリンの日記があります。そこに、レイブクローの失われた髪飾りに関する記述がないか、手分けして探そうと思います」

セレネはそのまま杖を振り、無言で日記帳を呼び寄せた。呼び寄せた、と表現すれば軽く感じる。どちらかといえば、日記帳の山を移動させたと表現するのが正しい。セレネが考えるより先に、杖が日記帳の山を均等に3つ築いてくれた。一つの山が2学年分の教科書の山に等しい。

セオドールが顔を青ざめさせながら

「げっ、この量を読むのかよ」

と呟いたことに対し、セレネは反論できなかった。

「サラザール・スリザリンは几帳面だったのかもしれないね」

セレネはそれだけ言うと、義父から貰った銀時計を取り出した。

「制限時間は一時間です。一時間を過ぎたら、諦めて、ハリー・ポッターたちと合流します。いいですか？」

セレネが告げると、2人は異論なしと日記帳の束に取りかかった。

スリザリンは丁寧な一日、一日の記録を書き連ねていた。

生徒たちの理解が悪いことや講義の反省といった仕事の内容はもちろん、ヘルガ・ハッフルパフの料理が見事で美味しかったことや魔法生物の研究、新たな魔法薬の生成など、スリザリンの日常がよく分かった。

特に日記の大半を埋めているのは、ゴドリック・グリフィンボールに関する内容だ。彼とは魔法学校を建てる理想を元に手を組んだが、どうやって彼のマグルやマグル生まれを贖する悪癖を直させようか思案する様子が強く伝わってくる。

レイブンクローの話題は、たまに上がってくる。

グリフィンボールと言いつ争いや決闘をしていると、必ずレイブンクローとハッフルパフが仲裁に入ってきたこと。

レイブンクローと新しい魔法薬や魔法理論について語り合ったこと。

スリザリンの腹心だった“男爵”が、彼女の娘に熱を上げていたこと。

その娘が出奔後、レイブンクローは深い悲しみに暮れていたこと。時折咳き込むようになっていたが、自ら自作した魔法薬を常時携帯し、講義の合間に飲む姿が見られたこと。

そんな内容が、ぽつぽつと日常の切れ間に挟まってきている。

セレネとしては、出奔した娘の足取りや髪飾りの行方について知りたくて、一字一句見落とさないように慎重に読み進めていった。ところが、読み進めれば読み進めるほど、レイブンクローの話題はあまり出てこなくなった。代わりに、グリフィンドールに対する抗議や愚痴、マグル生まれを排斥する方法が日記帳の大部分を埋め始めていた。

「……ゴースト！ ちょっと来い！」

スリザリンがバジリスクかグリシャ神話のメドゥーサを秘密の部屋に潜ませるべきか思い悩む記述を読んでいた時、セオドルが声を上げた。セレネは急いで彼が開いているページに目を落とした。

「髪飾りのことですか!？」

「いや、違う。気になったことがあったんだ。ここ、読んでみる」

セレネは彼の指さした箇所を目を走らせる。

スリザリンが城を去ろうとした直前、自身の腹心の男爵が長旅から帰還したことが記されていた。スリザリンとしては彼に自分が去った後の寮を任せようとしたらしいが、彼の肉体は生身ではなく、ゴーストだったことを残念がる様子が書かれていた。

『白銀の身体は血まみれで、重たい鎖を身に着けている。本人は“悔恨のため”だと言ったが、何に対する悔恨なのか。いくら尋ねても、頑なに口を開こうとしなかった』。

……身体が血まみれで、鎖を着けている、スリザリンに関するゴースト？ まさか……」

「先輩、『血みどろ男爵』では!？」

セレネたちは顔を見合わせた。

血みどろ男爵は生前のことを語らない。気難しく、怒りっぽいので話しかけにくいという理由もあるが、彼から話しかけてくることも稀だった。

セレネ自身、男爵と会話した経験は指で数える程度だった。自ら男爵を探し、話しかけたことは1度しかない。そのことに思い至った時、セレネははっとした。

「そういえば、5年生の時……男爵に話しかけたことがありました」

セレネは指を口元に添えながら、当時のことを回想する。

「男爵はホグワーツのゴーストとして長く城にいるから、彼にスリザリンやレイブンクローの秘宝の在りかを知らないか尋ねようとしたんです」

「それで、結果は？」

「激怒されました。『くだらん失われた宝を探す暇があるなら、学生らしく試験勉強をしたらどうか!』と。」

……つまり、男爵はスリザリンの時代の人で、『失われた宝』……おそらく、レイブンクローの髪飾りについて何か知っているのではないのでしょうか？」

セレネは少々考えが飛躍しすぎているようにも思えたが、我ながらに良い線をついているのではないかと感じていた。

「私は秘宝の在りかを知らないか、としか尋ねていません。それなのに、あの男爵は『失われた宝』とわざわざ口にしていました」

「では、これから男爵を探しに行くということですね」

セレネはヘスティアの提案に頷くと、もう一度、自身の銀時計に目を落とした。予定の一時間が迫っている。素早く動かなくてはいけない。今、ここで日記に目を落としている瞬間にも、ヴォルデモートが城に迫っているのだ。

「一度、上に戻りましょう」

セレネたちは日記帳を置いたまま、秘密の部屋から抜け出した。途中、銀色の鳩がセレネの肩のあたりに舞い降りた。鳩は小さな嘴を開けると、アステリアの声で『マクゴナガル先生から全校生徒は大広間に集まれと言われました。私たちも大広間に向かいます。死喰い人たちは拘束され、スネイプ校長は城から逃げ出したそうです』

と教えてくれた。

大広間に集まれ、ということとは、生徒を避難させるため、そして、残って戦う者を振り分けるためだろう。おそらく、ハリーたちもそこにいる。

そして、ちょうど、大広間の辺りまで戻ってきた時だった。

甲高くて冷たい、はつきりとした声が城を震わせたのだ。どこから聞こえてくる

のかは定かではなく、まるで周囲の壁そのものから、何世紀にもわたってそこに眠っていた怪物が話し始めたかのように思える声だった。

『お前たちが、戦う準備をしているのは分かっている』

ヘスティアが小さく悲鳴を上げる声が聞こえた。道案内役のアルケミーが一瞬、動きを止める。セレネはヴォルデモートの声が途切れた合間を縫って、素早くアルケミーに命令した。

『アルケミー、進みなさい。あいつは遠くから話しかけているだけ』

『……承知しました』

アルケミーが進み始める。アルケミーは元の主の声に、少し怯えているようにも見えた。

『俺様には敵わぬ。お前たちを殺したくはない。ホグワーツの教師に、俺様は多大な尊敬を払っているのだ。魔法族の血を流したくはない』

大広間の前まで迫り着いた。セレネはアルケミーに隠れているよう手で指示をすると、こっそり大広間に入り込む。生徒たちは怯え切っていた。恐怖で顔を歪ませながら、互いにすがりついている生徒もいる。

『ハリー・ポッターを差し出せ。そうすれば、誰も傷つけはせぬ。ハリー・ポッターを俺様に差し出せ。そうすれば学校には手を出さぬ。』

真夜中まで待つてやる』

声がやむ。

城中が静まり返ったように思えた。鼓膜を押し付ける静けさだ。

「あそこにいるじゃない！」

パンジー・パーキンソンの鋭い声が飛んだ。胸には新しい監督生バッジが輝いている。

「ポッターはあそこよ！ 誰かポッターを捕まえて!!」

彼女の視線の先には、ハリーがいた。しかし、彼が口を開くより早く、周囲がどつと動いた。グリフィンドール生が、パンジーからハリーを守るように全員が立ち上がる。次にハッフルパフ生が立ち、ほとんど同時にレイブンクロー生が立った。少し遅れて、スリザリン生の半数が立ち上がる。立ち上がった全員がハリーに背を向け、パンジーに対峙して、あちらこちらでもマントや袖の下から杖を抜いていた。

「な、なによ。信じられない！ 『あの人』と戦おうって言うの!？」

パンジーは予想外の展開に、後ずさりしている。

「どうも、ミス・パーキンソン」

マクゴナガル先生が、きっぱりと一蹴した。

「あなたは、フィルチさんと一緒に大広間から最初に出て行きなさい。

もう一度言いますが、未成年者が残ることは禁じます。残って戦いたいという者は、成人に達した者たちだけです。」

他のスリザリン生は、ミス・パーキンソンの後に続いて出てください」

セレネの耳に、ベンチが床をこする音に続いて、スリザリン生が大広間の反対側から出て行く音が聞こえた。

「レイブンクロー生、続いて！」

マクゴナガル先生が声を張り上げる。

四つのテーブルから次第に生徒がいなくなった。レイブンクローのテーブルには高学年の生徒が何人か残っていた。ハッフルパフのテーブルにはさらに多くの生徒が残った。グリフィンドール生は大半が席に残り、マクゴナガル先生が壇から降りて、未成年のグリフィンドール生を追い立てていた。

スリザリン生で残っている生徒はまばらだった。

全員、セレネの見知った顔である。親衛隊に所属している上級生や過去に在籍していた卒業生だ。卒業生で元幹部のエイドリアンはセレネがいることに気が付くと、駆け寄ってきた。

「お久しぶりです、ゴースト様」

「様はよしてください。でも、貴方がどうして？」

「僕が知らせたんです」

ノーマンが得意そうな顔をしながら近づいてきた。

「守護霊の呪文で、元親衛隊に所属していた人たち全員に」

「ありがとう、ノーマン。でも、貴方は未成年でしょ？」

「はい。でも、僕は戦えます！ 今のスリザリン寮で一番強いのは僕です！」

ノーマンは頑として避難しないつもりらしい。セレネは銀時計に目を向ける。真夜中まで30分しかない。わずか30分で男爵を説得し、レイブンクロウの髪飾りを破壊しないといけないのだ。

セレネはノーマンの頭に、ぽんっと手を置いた。

「確かに貴方は強い。でも、今は避難しなさい」

「でも、セレネ先輩！ 僕はもうすぐ4年生で——……」

「未成年者は避難する。生き残ることができれば、万が一の時、再起することでもできる」

セレネはノーマンと視線を合わせると、静かに言った。

「常に最悪な事態を想定して行動しなさい。分かりましたね、ノーマン」
それだけ言うと、彼から視線を外した。

スリザリンのテーブルには、まだ下級生が残っている。グリーン格拉斯姉妹は口論をしていた。姉のダフネが『ここから逃げよう』と言うのに対し、妹のアステリアは『残って戦う』と言い張り、両者ともに一步も譲っていない。

「……時間がありません。この場は貴方とヘスティアに任せますね」
セレネはセオドールの腕を叩くと、そのまま大広間を去ろうとした。

「待てよ。オレも血みどろ男爵を——……」

「もう貴方の眼では、男爵を見つけないでしょう？」

セレネが指摘すると、セオドールは悔しそうに唇をかみしめる。彼にもう浄眼は

ない。この世のものではないゴーストを見ることは不可能であった。

「それに、親衛隊を取り仕切るのは、隊長の仕事では？」

セレネが口元に微笑を浮かべると、彼は考え込むように強く目を閉じた。

「分かった。だがな、約束しろ。人を殺すことだけはしないって」

彼は瞼を開けると、まっすぐセレネを射抜いてきた。

「……分かってますよ。人を殺すことはしません」

「絶対だぞ。何度謝っても、人殺しだけは許さないからな」

「分かってますって！」

セレネはそれだけ言うと、彼に背を向けて駆け出そうとした。けれど、二、三歩ほど進んだところで一度、振り返り、言い忘れていた言葉があることに気付く。

「全部終わったら、祝杯でもあげますか。睡眠薬なしのボトルを取り寄せて」

「……ああ、せっかくだ。二十年物のワインを買って飲もうぜ」

セレネは彼と拳と拳を乾杯するように軽く叩きあわせると、再び背を向けて駆けだした。

後ろでセオドールが親衛隊員たちに指示を飛ばし始める声を聞きながら、大広間

から走り出し、血みどろ男爵を探し始める。

避難中の生徒たちで玄関ホールはごった返していた。監督生が大きな声で指示を出し、自分の寮の生徒たちをしっかり引き取ろうとしていた。どこもかしこも押し合いへし合いで、ザカリアス・スミスが一年生を押し倒して列の前に出ようとしているのが見えた。

セレネは生徒の流れに乗りながら、血みどろ男爵を探し始める。

すると、スリザリン生の一団の上に真珠のような姿が漂っているのが見えた。

「男爵！ 男爵!!」

セレネは流れの合間を縫うように、男爵の方へと進んだ。男爵はセレネを見止めると気難しそうな顔をしたまま、人気のない廊下の方へと流れていった。セレネは男爵を追って廊下に出ると、人気のない通路で男爵が待っていてくれた。

「久しぶりだな、ゴースト」

「また会えて光栄です、男爵」

「世辞は良い。用件は何だ」

男爵は堅い声色で尋ねてきた。

「まさか、挨拶をしに来たわけではないだろう？」

「気を悪くしたら申し訳ありません。貴方は……ロウエナ・レイブンクローをご存知ですか？」

セレネがレイブンクローの名を口にする、男爵は固まった。一瞬だけ、彼の気難しい表情が拭い去られ、無表情になる。だが、次の瞬間、彼の透明な頬が半透明になり、声が熱くなっていた。

「何を問われるかと思えば、ロウエナについてだと!？」

「すみません。貴方ならご存知かと思ひまして……」

「……ああ、知ってる。良く知っている。しかし、それが何の役に立つ？ ヴォルデモートとの決戦が迫っている時に！」

血みどろ男爵の眼に苛立ちの色が強く滲みだしていた。セレネは出来る限り低姿勢を維持しながら、彼に問いかけ続けた。

「ありがとうございます。もう1つだけ、よろしいですか？」

「なんだ!？」

「レイブンクローの髪飾りについて教えていただけませんか？ いつ、どうして

失われた——……」

「そんなことを聞くために、わしを呼び止めたのか!？」

男爵は火山が噴火する勢いで怒り始めた。

「ヴォルデモートの決戦が迫ってる！ 元スリザリン生の恥を払拭するため、わしに協力を求めているのかと思えば、髪飾りだとい？ 髪飾りが何の役に立つというんだ!？」

彼の逆鱗に触れてしまったのだろう。男爵は唾を飛ばす勢いで怒り始める。もちろん、ゴーストなので実際に唾は飛ばないが。

セレネは男爵が全て言い終えるのを待つと、きわめて静かな口調で尋ねた。

「レイブンクローの髪飾りこそ、ヴォルデモートを倒すために必要なアイテムなのです。」

お願いします。断片的な情報でも構いません。どうか、教えていただけないでしょうか？」

男爵は宙に浮いたまま、セレネを見下ろしていた。顔が半透明で強く刃を噛みしめているのが分かる。

「髪飾りは知恵を与えるものだ。レイブンクローの英知を授かろうとしているのか？ バカバカしい。多少知恵をついたところで、あやつを倒せるとは思えん！」

「いえ、髪飾りを被るつもりはありません。使うつもりありません。」

私は、髪飾り自体を探しているのです。お願いします。なんでも構いません。髪飾りに関する情報を教えてください」

男爵はセレネの言葉を聞くと、ふんつと鼻を鳴らした。

「髪飾りの場所なら知っている」

じゃらりと身に着けている鎖が重たそうな音を立てる。

「だが、諦めることだ。あれはアルバニアの森にある」

「アルバニア？」

セレネは言葉を繰り返した。

「ロウエナの娘、ヘレナ嬢が髪飾りを盗み、アルバニアの森に隠れ住んでいた。髪飾りがあるとすれば、あの森だろうよ」

男爵の声は未だに大半が怒りで満ちていたが、わずかに郷愁の色が混じっていた。「これで満足か？ お前は戦が始まるうとしている時に、アルバニアまで行くの

か!? 仲間を見捨てて!」

「……いえ、行きません」

セレネは男爵との会話に思考の半分を裂きながら、もう半分で情報を整理していた。

アルバニアといえば、ヴォルデモートが長期に渡って隠れ住んでいた場所だ。

彼はアルバニアが隠れやすいから、そこに潜伏していたのではない。

目立たず、邪魔されずに潜伏する場所が必要になった時、貴重な髪飾りが1000年近く隠され続けていた森が、素晴らしい避難場所に想えたのではないだろうか。だが、そこに髪飾りはない。

グリンデルバルドは「そこに分霊箱のヒントがあるかもしれない」と渡ったが、アルバニアの森に分霊箱はなかった。おそらく、そこにあったはずの髪飾りは、ヴォルデモートが手に入れ、隠し場所を変えたのだ。

ここ、ホグワーツに。

では、どこに隠した? 貴重な分霊箱を本来あるべき城のどこに隠したのだろ

う？

「……あいつは……いつ、アルバニアに行った？　　いつたい、ホグワーツのどこに隠した？」

セレネは独り言のように呟いた。

「ダンブルドアが絶対に見つけられない場所……模範生はもちろん、一般の生徒が見つけられない場所……」

普通に考えれば、秘密の部屋だ。

サラザール・スリザリンの末裔のために用意された部屋だ。

だがしかし、あそこに髪飾りはなかった。

そもそも、スリザリンの隠し部屋にレイブンクローの品を隠そうとは思うまい。そう考えると、レイブンクローの談話室になるわけだが、ヴォルデモートはスリザリン生だ。レイブンクローの談話室に入った時点で怪しまれ、ダンブルドアに目を付けられる可能性が高まる。

ヴォルデモートは、どこに隠した？

「……物を隠すことに特化した場所……誰にも見つからない場所……誰にも……見

つからない……」

セレネはそこまで呟いたとき、酒を飲んだときのような熱い衝撃が身体を貫いた。「……わかった。ありがとうございました、男爵!!」

セレネは難しい顔をしたままの男爵に礼を言うと、すぐさま床を蹴った。

誰にも見つからない場所。

そんな場所、あるわけがない。第一、本当にそのような場所があれば、ヴォルデモートさえ見つけることができない。つまり、見つけるための鍵があるはずなのだ。秘密の部屋の場合、それは蛇語だった。

では、他に見つからない場所は？ 簡単な話だ。見つからない場所を用意すればいい。無論、ヴォルデモートはホグワーツの創始者ではないので、一から部屋を創るのは不可能だ。しかしながら、自分の用件をすませるために姿を変える便利な部屋が1つだけ、ホグワーツには存在している。

セレネは階段まで戻ると、駆け上り始めた。

生徒の避難は大方終わったのか、人通りは少ない。戦うために残った生徒や不死鳥の騎士団は、防衛のために校舎の外に出てしまっているのだろう。

「セレネっ！」

ふと、下から声をかけられた。階段の棧に身を乗り出すように下を覗いてみれば、ハリーたち三人組が上ってくるところだった。

「セレネ！ 髪飾りはヴォルデモートが就職を頼みに来た夜に隠したことが分かった！」

ハリーが階段を上りながら叫んでいる。

「あいつは、ダンブルドアの校長室に行く途中か、そこから戻る途中で髪飾りを隠したんだ！」

校長室は3階。そこから下の階に隠した可能性が高い。

「それより上の階に隠したかもしれないぜ。ほら、フクロウ小屋に行く途中とか。

『面接の結果を手下たちに伝えたい』とかいう理由でさ」

ハリーの考えに上乘せするように、ロンが考察する。2人から少し遅れて、ハーマイオニーが階段を上ってきた。彼女は少し息が上がっている。

「セレネは、どこに行く途中だったの？」

「必要の部屋です。あそこなら『誰にも見つからずにモノを隠せる部屋』になるこ

とができます」

「あ……ああっ！　そうだ、その通りだよ！」

セレネが言うと、ハリーは目を見開いた。

「僕、髪飾りを見た！」

「「ええっ!？」」

ハリーの発言に、セレネとハーマイオニーは目が点になる。ロンは言葉も出ないのか、口をあんぐり開けていた。

「去年、プリンスの本を必要の部屋に隠したんだ。その時、近くにあった石の像に古い黒ずんだティアラを被せたんだ。あれがレイブンクローの髪飾りだったんだ！」

ハリーはそう言いながらセレネを追い越し、8階を目指して上り始める。セレネもその背中を追いかけた。

「あの場所は何世紀にもわたって、みんなが隠し場所にしてきたところだったんだ。あいつは、自分しかその場所を見つけれないと思ったんだ」

「ダンブルドア先生やマクゴナガル先生は、確かに見つけれなさそうですね」

模範生や優等生たちは、8階の一步脇にそれた場所へ足を踏み入れる理由がない。たとえ、その道を偶然通ったところで部屋が開かれるわけでもなく、開いたとしても、ヴォルデモートが髪飾りを隠した部屋が開かれるわけがない。通常、優等生は物を隠すような後ろめたい行いをするわけがないのだから。

セレネたちが必要の部屋に戻ると、ホッグズ・ヘッドに続く道からリーマス・ルーピンが出てくるところだった。久しぶりに会うルーピン先生はますます白髪が増え、ローブはくたびれていたが、瞳だけは爛々と輝いていた。

「ああ、ハリー。ロン、ハーマイオニー、セレネも」

「リーマス、ここにいて大丈夫なの？」

ハーマイオニーがルーピン先生を気遣うような声をかける。

「トンクスは？」

「彼女は行きたいと言っていたけどね。でも、彼女は出産間近だ。実家で安静にしているよ。戦いが終わるころには、産まれているかもしれない」

ルーピン先生は少ばかり苦渋の表情を浮かべていた。

「それは……トンクスの傍にいてあげた方がいいんじゃない？」

「ハーマイオニー、これは大事な戦いなんだ。イギリス魔法界を左右するほどのね。私は生まれてくる子がより幸せに暮らせるような世界を作るために、戦わないといけないんだ」

ルーピンは自分に言い聞かせるように答えると、にっこり笑って走り去っていった。

これで、必要の部屋に残っているのは、セレネたち4人だけになった。必要の部屋は誰かが部屋にいる限り、姿を変えることができない。最後にもう一度、誰もいないことを見届けると、部屋の外に出た。

「じゃあ行くぞ」

「ハリー、ちょっと待った！」

ロンが鋭い声を上げた。彼は、まじめな顔で全員の顔を見渡した。

「僕たち、誰かのことを忘れてる！」

「誰？」

「屋敷しもべ妖精たち。全員、下の厨房にいるんだろう？ 脱出するように言わないといけないよ。僕たちのために死んでくれなんて、命令できるわけない——……」

ロンが全て言い終える前に、ハーマイオニーが動いていた。彼女はロンに駆け寄り、その両腕を首に巻き付け、彼の唇に熱烈なキスをした。ロンも彼女に応え、ハーマイオニーの身体を床から持ち上げてしまうほど夢中になっている。

セレネは冷たい視線を二人に向けると、ハリーに顔を向けた。

「ハリー、さっさと始めましょう」

ハーマイオニーは慎み深い方だと思っていたのに、状況をわきまえずに夢中になるとは……と、セレネは呆れ果てた。セレネはキスをしたことがないので気持ちの良いものなのか、熱くなれるものなのかは分からないが、時と場所を選べと強く思う。ただ、それを止めることに時間を割くのは無駄な気がした。

ハリーは2人の親友に苛立ちを隠せない様子だったが、セレネに言われて必要の部屋を『すべての物が隠されている場所』に変えるために動き始める。

ハリーが三度、壁の前を通り過ぎた時、扉が現れた。ハーマイオニーとロンは気づかない。むしろ、ますますヒートアップしているように見える。ハリーが口を開く前に、セレネは杖を取り出した。

『「レラシオ―放せ」。……まあ、まだ続けたいならどうぞ。私たちは先に進みます

から」

2人の間に軽く火花を飛ばすと、弾かれたように離れた。2人とも顔を赤らめると、咳払いをして杖を構えた。部屋に入り、扉を閉めた途端、部屋は静寂に包まれた。

セレネは、まるで摩天楼の都市に放り出されたかと思った。大昔からの何千人という生徒たちが隠した品物がビルのように積み重なり、いくつも高くそびえ立っている。

「こっちの並びだと思う」

ハリーが進み始めた。

トロールの剥製の横を通り抜けると、がらくたのビルが立ち並ぶ。どこも似たり寄ったりの風景で、おそらくハリーも分からなくなったのだろう。

「手分けして探そう」

ハリーはセレネたちを振り返った。

「老魔法戦士の石像を探してくれ。戸棚の上に載っている像だ。ティアアラを着けている。そのティアアラが分霊箱なんだ」

四人はそれぞれ、隣り合わせの通路へ急いだ。セレネも像を探して歩き始めたが、ふと足を止める。足音だ。それも、四人どころの足音ではない。もう三人分ほど多い。嫌な予感が胸を過り、セレネは道を引き返した。足音は聞こえる。姿は見えない。

「『目くらまし』か」

セレネは眼鏡を外した。同時に黒い線がのたくっていく。何分、周囲にがらくたのビルが建っているせいで、余計、死の線が目立って視えた。

だがしかし、目くらましの呪文には、これが一番効くのだ。目くらましの呪文で消せるのは、外観だけだ。死の線までは消えない。

「……あれか」

耳に神経を集中させながら進むと、何もない空間に死の線の塊が三つ分見えた。目くらましで隠れている者は三人。それが誰かまでは特定できない。ヴォルデモートではないと思うが、それに与する者であることは確かだ。後ろから狙い撃つのは簡単。1人は文句なく倒せる。2人もいける。けれど、3人目は？ ダンブルドアの杖を使えば簡単に倒せるだろうが、ベラトリックス級の死喰い人、たとえ

ば、ドロホフのような手合いだった場合、打ち損じてしまったら面倒だ。周囲はがらくたのビルが鬱蒼としている。火を使われたら、こちらが不利だ。悪霊の火を操られたら、目も当てられない。

「……ま、悪霊の火だったら、よほどの使い手じゃない限り、この状況で使わないか」

悪霊の火ほど制御の難しい魔法はない。

ベラトリックス級ならともかく、それ以下の魔法使いが火の回りが速そうな状況下で使うわけがない。使うとすれば、クラブとゴイル級の馬鹿だ。もっとも、あの二人が使えるわけがないので、ありえない話である。

セレネが後ろから三人を追跡する。

どうやら、三人の方はハリーを追跡しているようだ。ハリーは荒く息をしながら通路を進んで行く。追跡には気づいていない。

「あった！」

ハリーは歩みを止めた。痘痕面の石像が埃っぽい古いかつらを被り、もっと古そうな黒ずんだティアラをつけている。あれがレイブンクローの髪飾りだ。ハリーは

手を伸ばしながら近づこうとし——……

「止まれ、ポッター」

セレネの顔を歩く三人組、マルフォイ、クラブ、ゴイルが目くらましを解いた。セレネはビルの陰に隠れ、身を潜めながら様子を窺う。ハリーの額には汗が滲んでいた。

「俺たちは褒美をもらうんだ！」

クラブが唸るように言った。表情は見えなかったが、大きな背中からは勝ち誇った喜びが滲み出ている。

「ポッター、おまえを『あの人』のところに連れていくことに決めた！」

「俺たちは外の廊下に隠れていたんだ！俺たちはもう『目くらまし術』ができるんだぞー！髪飾りを探しているらしいな？それって、なんだ？」

ゴイルもクラブが続けて話し始める。

セレネは『目くらまし』ではなく『目くらまし』だ」と心の中で突っ込みながら、眼鏡を再びかける。あの三人程度なら、直死の魔眼なしでも無力化できる。とはいえ、一歩間違えれば、がらくたの山に埋もれ、窒息してしまう。周囲に振動を

与えかねない魔法は使えない。

つまり、取るべき行動は1つだ。

一瞬で杖を奪い取り、行動を無力化する。

『『エクスペリアームス―武器よ去れ』』

セレネが通路に躍り出て鋭く呪文を唱えると、三人の杖が一気にセレネに向かってきた。セレネは杖をキャッチすると、そのまま縄を出現させる。

『『インカーセラス―縛れ』！』

セレネの出した縄は、マルフォイ、クラブ、ゴイルをそれぞれ縛り上げる。セレネが思い浮かべた通りに縛り上げていく。やはり、この杖はセレネの力を十全以上に取り出している。セレネは満足そうに杖を握り直すと、ハリーに近づいて行った。

「追跡するなら、追跡されていることも想定しましょうか」

「――ッ、ゴント！」

三人が忌々し気に睨んでくるのを涼しい顔で受け止めながら、セレネは歩みを進めた。ところが、次の瞬間、クラブが動いた。縄で縛られたまま、近くのがらく

たのビルに突進したのである。がらくたはたちまちバランスを失い崩れ、周囲のビルを巻き込みながら、セレネに向かって雪崩を起こし始めたのだ。

クラップが嘲笑う。

「人間もどき！ さっさとくたばれ！」

「嘘でしょっ!？」

セレネは愕然とした。

こんなところで山に刺激を与えたら、確かにセレネも倒せるだろうが、自分だって巻き込まれかねない。馬鹿なのか!？ ああ、こいつは馬鹿だった！ セレネは急いで呪文を唱えた。

「『プロテゴ―守れ』！」

周囲を球で覆うように、盾の魔法を展開させる。生き埋めにはならなかったが、盾で逸れた分が更に周囲へ流れ落ち、ますます周りのビルが崩れ始め、川のように流れていく。それでも、ビルを吹き飛ばして生き埋めを防ぐよりかは、周囲への被害は少ない。

「やめろ！ この部屋を壊したら、その髪飾りとやらが埋まってしまうかもしれないぞ!!」

セレネが雪崩から身を守っている最中、マルフォイが叫ぶ声が聞こえてきた。

「それがどうした？」

クラッブの声が聞こえる。

「闇の帝王が欲しいのはポッターだ。髪飾りなんて、誰が気にするってんだ！」
「ポッターはそれを取りに来た。その意味を考えろ！」

マルフォイは仲間の血のめぐりの悪さに、いらいらを隠せない口調だった。それに対し、クラッブは狂暴性を剥き出しにしてマルフォイに食ってかかった。

「意味を考えろだ!? お前がどう考えようと知ったことか？ ドラコ、お前の命令なんかもう受けないぞ！」

縄が千切れる音が聞こえる。どうやら、クラッブかゴイルは自力で縄を引き千切ったらしい。

「やめろ、クラッブ！ ポッターを殴るな!!」

マルフォイがクラッブを怒鳴りつけた。その声は巨大な部屋に響き渡った。

「闇の帝王は、生きたままのポッターをお望みなんだ！」

「それがどうした？ 俺は殴っただけだ。殺そうとしていないだろう？」

駄目だ、こいつ。なんとかしないと。

セレネは強く思った。長く続いた雪崩が終わり、視界が晴れる。クラップの足元にハリーが蹲っていた。セレネはクラップに迷うことなく杖を向ける。

「それに、俺はやれたら殺っている。闇の帝王は、どっちみち、やつを殺りたいんだろう？ なら、それが少し早まったところで——……」

彼が最後の言葉を言い終える前に、セレネは失神呪文を飛ばした。赤い閃光はクラップの背中に直撃し、彼の巨体はぐにゃりと崩れ落ちた。

「ハリー、大丈夫ですか？」

セレネが駆け寄ると、ハリーの鼻が曲がっていた。大きく青い痣ができ、鼻から血が絶えず流れ落ちていく。クラップは手加減なしで殴りかかったらしい。

「『エピスキー——癒えよ』」

「あ、痛っ！」

あまりにも急に鼻が治り過ぎたせいか、ハリーは痛そうに鼻を押さえた。

「ごめんなさい、ハリー。それで、これが髪飾りですね」

セレネは黒ずんだティアアラをつかんだ。

この場で壊してもいいが、また三人に邪魔されたら面倒である。

「一度、外に出ましようか」

セレネはティアアラを握りながら、再度、三人を縛り上げる。

とはいえ、彼がこのまま出ることができず、餓死しましたーでは、気分が悪い。クラッブは復活したとき自力で破るかもしれないが、マルフォイと言いつつにいた感じからして、残り2人を助けるとも考えにくい。

なので、2時間ほど経過すれば、自動的に解けるように細工しておいた。

あまり仲は良くなかったが、同じ寮で過ごしてきたよしみである。

「ハリー、何事!？」

ハーマイオニーが杖を握りしめながら駆け寄ってくる。その後ろには、ロンの姿もあった。

「おっどろき！ こいつら、残ってたんだ！」

ロンが目を見張ると、マルフォイとゴイルは非常に不服そうな顔をした。

「じゃあさ、早くそれを破壊しようぜ！」

「外に出てからです。……また、邪魔されたら敵いませんから」

四人はマルフォイたちを残して、必要の部屋を立ち去った。

部屋の外に出た途端、バーンという大きな音が何度も城を揺るがした。透明な騎馬隊の大群が疾駆し、叫び声をあげている。辺りを見渡した。8階の廊下なんて辺鄙な場所なのに、どこもかしこも戦いの最中だ。退却するゴーストの群れよりも、もっと多くの悲鳴が聞こえてきた。

「さて、いきますか」

セレネは眼鏡をとった。

ティアラには「はかり知れぬ英知こそ、われらが最大の宝なり」と小さな文字が彫ってある。セレネはダンブルドアの杖をくると手の中で回し、髪飾りに走る線を突き刺した。切り込みを入れた途端、黒くねっとりとした血のようなものが、流れだし始める。それに構わず、線を切り刻むと、突然、激しく震え、真つ二つに割れた。遠くからの微かな苦痛の叫びを耳にする。校庭からでも城からでもなく、たったいま破壊した髪飾りから響いてくる悲鳴だった。

「これで、完了ですね」

セレネは分霊箱を放り投げた。

「ねえ、これで髪飾りを破壊したわ」

ハーマイオニーが囁くように言った。

「つまり、あとは……」

しかし、ハーマイオニーは言葉を切った。叫びや悲鳴が先ほどよりも間近で聞こえ、まぎれもない戦いの音が廊下一杯に聞こえ始めたからだ。セレネはどきりとした。死喰い人がホグワーツに侵入していた。セレネは動く階段の上で二人の死喰い人と戦うミリセント・ブルストロードの姿を見止める。ミリセントは死喰い人の猛攻に防戦一方だった。しかも、足場が動いている。死の呪文が彼女の髪すれすれで通り過ぎていくのを見た瞬間、セレネは階段から飛び降りた。

『ペトリフィカス・トタルス―右になれ』！」

セレネは落下しながら、ミリセントを狙う死喰い人たちを石化させる。そのまま足が階段に着く直前、クッション呪文で落下を緩和させる。体感にして2階ほどの高さから飛び降りたが、足が痺れるような痛みもなく、彼女の前にふわりと着地

した。

「大丈夫ですか、ミリセント」

「セレネっ！ あ、あたしは大丈夫」

ミリセントの化粧ばっちりの顔には、いくつも傷がついている。記憶の中の彼女は、お世辞にも魔法が得意とはいえなかった。正直なところ、全然大丈夫には見えない。

「あなたは陰で休んでいなさい。戦いには休息も必要です」

セレネはミリセントの手を引きながら、石化した死喰い人たちをしり目に走り始める。

至る所で戦いが勃発していた。死喰い人側が優勢のように見えた。ホグワーツの生徒たちが懸命に死喰い人の猛攻を食い止めようとしている。

「……ここなら、安全です」

「ありがとう、セレネ」

セレネはミリセントを一本奥の廊下に連れ込むと、彼女の手を離した。

「礼には及びません。貴方は友だちですから」

「……セレネ、私のこと友だちって思ってくれてたの!？」

ミリセントがぽかんと口を開けている。セレネは自分らしくないことを言ったかな、と頬を少し掻いたが、すぐに戦いに意識を戻す。

「それでは、またあとで」

「うん！ 戦いが終わったら、あんたに聞くことがうんつとあるんだから!!」

互いに笑い合うと、セレネは廊下を駆け出した。

分霊箱は全て壊れた。

ハリーが分霊箱かもしれない、という仮説は残っている。

とはいっても、ハリーを殺すわけにもいかない。こんな状況で「分霊箱かもしれないから死んでくれ」なんて頼めるわけがないし、あやふやな仮定をハリーが受け止めてくれるとも思えなかった。

なので、セレネにするべきことは1つ。

ヴォルデモートを実際に垣間見て、死の線が身体に映るかどうか見極める。ヴォルデモートに死の線が映れば分霊箱はすべて破壊したことになり、死の線が見えなければ、ハリー分霊箱説が真実味を帯びるということだ。

「大変だ！ 蜘蛛が襲ってくるぞ!!」

セレネが階段を駆け下りていると、脇の窓から岩ほどもある巨大な蜘蛛の大群が入り込んでくるのが見えた。

「どうやら、簡単に辿りつかせてもらえなそうね」

セレネは唇を舐めると、蜘蛛に杖先を向けた。

次回更新予定は、6月28日0時を予定しています。

95 話 最後の分霊箱

軽自動車ほど巨大な蜘蛛が側壁の大きな窓から這い上ろうとしていた。

それも、一匹ではない。二匹、三匹、と続けざまに窓から姿を現してくる。

『アラーニア・エグズメイ―蜘蛛よ、去れ』

セレネが呪文を叫ぶと、白い光が蜘蛛の怪物めがけて奔った。呪文は脳天に激突し、仰向けになって吹っ飛んだ。足を気味悪く痙攣させながら、這いあがってくる。後続の蜘蛛を巻き込み、窓の外へと落下していった。

「蜘蛛を引き連れてくるなんて」

セレネは魔法生物について教科書に掲載されていた程度の知識しかないが、いま吹き飛ばした蜘蛛が毒蜘蛛であることくらいは分かっていた。階段を駆け下りながら窓の外に視線を走らせれば、破壊された校庭に蜘蛛の仲間だけでなく、5メートルを超す巨人の群れが石像と交戦していた。

「……巨人、か」

英国に巨人はいない。とうの昔に絶滅した。

つまるところ、ヴォルデモート陣営は巨人を異国から呼び寄せたことになる。巨人の皮膚は魔法攻撃を弾き返すと聞く。現に、半分巨人の血が流れるハグリッドは、闇払いから失神呪文を浴びるように受けても平然と立ち、相手を殴りかかって気絶させていた。

ハグリッドでさえ、闇払いの失神呪文を防げるのだ。本当の巨人は闇払いが束になっても敵わないだろう。そんな巨人がセレネが確認した限りでも3人はいた。これなら、トロールの軍勢と戦う方がまだ勝ち目がある。

この戦い、長期戦は不利だ。

一刻も早く、ヴォルデモートを討つ必要がある。

親玉を失えば、死喰い人たちは確実に動揺し、巨人の制御もきかなくなる。事実、ハリーが母親の愛の力でヴォルデモートを倒した後、あのサイコパスに殉じたり、探し求めたりした死喰い人たちは限られた者たちだった。

ベラトリックス・レストレンジは死に、ルシウス・マルフォイの地位は底まで落ちた現状、ヴォルデモートの代わりに死喰い人を取りまとめ、指揮ができる人物は存在しない。

セレネは、ヴォルデモートを殺そうと誓っている。

もちろん、「人を殺すな」と言われてるし、その信条を捨てるつもりは全くないが、ヴォルデモートだけは別だ。

あいつは人ではない。自分が不死になるためだけに、殺人を犯し、魂を幾つも分断した。確かに孤児で親の愛情もなく育ったかもしれないことを考えれば、可哀そうな人物なのかもしれない。だが、いまのあいつは心も体も悪に染まり切った怪物である。

これまでに積み上げた罪を、償わせなければならない。

セレネは、その仕事は誰でもない自分が果たしたいと強く感じていた。

人を殺したくないけど、ヴォルデモートだけは別だなんて、矛盾しているようにも思える。

けれど、その矛盾は聞こえないふりをした。今は、自分の為すべきことを果たす。そのために、全力を注ぐ時である。

「さて、と」

セレネは階段を駆け下りながら、視界に入った死喰い人に失神呪文を放ち続けた。セレネが走り過ぎた後には、気絶した死喰い人が死んだように転がっている。どの死喰い人も手配書で見たことのない雑魚ばかりだ。セレネは玄関ホールへ急ぎながら、埃と煤で曇った周囲から、見たことのある死喰い人を探そうと努力する。右も左も下の階も戦いの真っ最中。

マクゴナガル先生に率いられた机の群れが、全力疾走で怒濤の如く死喰い人に雪崩れ込んだ。この学校の副校長であり、現時点で最も強い先生ですら、髪はほどけ、片方の頬は鋭く切られ、赤い血が絶え間なく流れ落ちていた。

階段に掲げられた絵画には、様々な絵の主たちが集結し、大声で助言をしたり、応援をしたりしている。ディーン・トーマスがドロホフに一騎で立ち向かい、その近くで、アーニー・マクミランがトラバースと戦っている。アーニーはトラバースの猛攻に押され、ついに杖を飛ばされ、階段の下へ転げ落ちた。

セレネは素早くアーニーへ杖を向けた。

「『アレスト・モメンタム―動きよ、止まれ』！」

これで、彼は墜落死することはない。セレネはそのまま彼がどうなったのかは確

認せず、杖先をトラバースに向けた。トラバースはセレネを見ると、少しばかり嬉しそうに口元に笑みを浮かべた。

「ホムンクルス！ 『クルーシオ―苦しめ』！」

トラバースの声色が上がっている。

まあ、大方のところ、ヴォルデモートへ献上して、死喰い人としての地位を上げようと画策しているのだろう。セレネはそんなことを考えながら、無言で盾を展開した。

「私も貴方に用があるの。付き合ってくださいね」

セレネは杖を鞭のように振ると、足元の瓦礫が大蛇に変身した。

「『オパグノー襲え』！」

大蛇はまっすぐトラバースに向かって飛び、彼の両脚に巻き付いた。男は前のめに倒れ込み、蛇は二本の毒牙を突き立てようとした。けれど、トラバースのは脚の自由こそ奪われていたが、両手は自由のままだ。左手で身体を起こそうとしながら、右手に握りしめた杖を足元の蛇に突きつける。

「『ヴィペラ・イヴァネスカ―蛇よ消えろ』！」

蛇は悲鳴を上げる暇もなく、白い煙となって消え去った。

セレネはその様子を見届けると、近くの廊下へ逃げるように転がり込む。後ろから、トラバースが追いかけてくる音が聞こえた。足音が近づいてくる。セレネは廊下の角を曲がると、壁に背中を預けた。そして、トラバースが現れた瞬間、

「『ペトリフィカス・トタルス―右になれ』」

彼が呪文を放つ前に、セレネは鋭く叫んだ。トラバースはまっすぐ胸に全身金縛りの呪文を受け、そのまま後ろ向きに倒れ込んだ。眼だけが忌々しそうにセレネを睨み付けている。

「……もう少し反抗すると思いましたが、あっけなかったですね」

セレネは彼の額に杖を突きつけると、トラバースの顔から血の気が失せていくのが見て取れた。先ほどの憎悪に近い感情は失せ、両眼からは死への恐怖の色が滲み出ていた。そんな哀れな死喰い人を見下し、セレネは口元を綻ばせた。

「大丈夫ですよ、殺しはしません。ちょっと情報を抜き取りたいだけですから」
セレネはにっこり笑いながら、あまり使いたくなかった呪文を唱えた。

「『レジリメンス―開心せよ』」

例えるなら、それは飛び込み台からプールに飛び込むようだった。

小さく波打つ記憶の海に頭から突っ込む。トラバースに蓄積された記憶がセレネの周りを何重にも回転し、小間刻みで場面が変わるビデオテープのように流れていった。この男の生まれ育ちなど、どうだって構わない。肝心なところは唯一つ——……ヴォルデモートの今現在、どこにいるか、だ。

セレネは記憶の奔流の中から、ヴォルデモートに関する記憶のみを抽出する。

ヴォルデモートの圧倒的強さに惹かれ、死喰い人に加わったこと——……どうでもいい。

ヴォルデモートの命令で日本へ飛んだこと——……どうでもいい。

ヴォルデモートの命令でとある女性を探したこと——……どうでもいい。

ヴォルデモートの命令で——……どうでもいい。

様々な記憶をざっと目を通しながら、セレネは焦った。

外側の身体は無事だ。今の自分は身体から釣り糸を垂らすように、記憶の海にダイブしているに過ぎない。酸素ボンベもなく、息継ぎなしで潜水しようものなら、身体が悲鳴を上げるのは当然のことだ。事実、身体からは絶えず釣り糸を引き戻す

ような強制力を感じる。意識を少しでも外に裂こうものなら、すぐに浮上してしまうことだろう。

集中する。

身体から「戻れ！」と訴える強制力に負けないように、ヴォルデモートに関する記憶に指を伸ばし続ける。

刻一刻と強くなる引き戻すが魂を軋ませ、息が苦しくなってくる。空気が吸いたい。苦しい。記憶なんて蹴り飛ばして、安全な場所に浮上したい。その気持ちを気力で抑え込み、ついに——……セレネはその記憶に手を伸ばす。

——ノイズが奔る。

ヴォルデモートが裸足で立っている。

陰気で壁紙が剥がれた部屋に、一人で立っている。

『——』

彼の口から何か言葉が零れた。

誰かがそれに対し——……——……、そして、嘲笑う。

『巨人たちを——……なのだ。ラダルファスは戻ってくるなと伝えろ。——……あいつは大事な——……』

視界が割れる。

言葉が聞き取れない。記憶を浮上させろ、これ以上は限界だと魂が悲鳴を上げている。

『ベラトリックスが……のだ。………けには、いかん………』

だがしかし、ここで引き下がるわけにはいかない。

セレネは記憶に触れ続けた。

『トラバース、行け——………俺様は………もう少し、ここで戦局を見守ろう』

ヴォルデモートは杖をいじりながら答えた。

彼の位置からだ、城が遠くに見えた。防壁魔法が徐々に張られ、上空に待機していた吸魂鬼が退避するのが分かる。

『では、我が君。行ってまいります』

トラバースは頭を下げると、踵を返した。

そこは廃墟だった。テーブルは傾いているし、シャンデリアには蜘蛛の巣が張っ

ている。部屋の隅には、ところどころ灰色の埃が固まっていた。

そして、トラバースは虫食いだらけのソファアの横にある扉から、外へと歩き出した。

「分かった!!」

セレネは水面に向かって水を蹴るように、喘ぎながら意識を浮上させた。

視界が一気にクリアになり、目の前にトラバースの蒼白な顔が広がった。セレネは肩で息をしながら、初めての開心術の余韻を感じていた。

「……あの場所、間違いない」

セレネは、あの虫食いだらけのソファアに偉そうに腰を下ろしていた男を思い出す。

5年生の時、グリンデルバルドを若返らせた場所……叫びの屋敷だ。

ホグズミード村のはずれにある「叫びの屋敷」で戦局を観戦している。誰もが命がけで戦い抜く様子を、楽しいゲームのように観戦しているのだ。そう考えると嫌

な気持ちになったが、場所さえわかれば、後は簡単だ。とるべき行動は一つである。

「……と、その前に」

セレネはトラバースから離れた。

普段より強めに「金縛り呪文」をかけたので、おそらく解呪されるのは2、3時間後だ。しかしながら、彼の仲間がやってきて終了呪文を唱えられたら終わりである。

トラバースは、セレネが何の記憶を欲していたのか分かっている。セレネがこの廊下を離れてすぐ、死喰い人仲間がやってきたら不味い。

ヴォルデモートに迫る危機を伝えられたら不味い。

「安心してくださいね」

だから、セレネはトラバースにもう一度、杖を向けた。

「すべてが無事終わったら、解呪してあげますから。」

『フェラベルト―杯になれ』

トラバースの身体は歪みながら縮み、ちょうど炎のゴブレットと同じくらいの杯に変わった。

これなら、元死喰い人だとバレないだろうし、ここは戦いの中心から離れた場所だ。硬い石造りの杯なので、そう簡単に割れることはないだろう。

「……ホグズミード村のはずれ……遠いわね」

セレネはトラバースを一瞥すると、近くの窓を開け放った。

途端、外の騒音と魔法が飛び交う音が一層耳に届いてきた。加勢したい気持ちもあつたが、まずはヴォルデモートである。セレネは目くらましの呪文をかけると、窓の棧を一気に蹴り飛ばした。

『ヴォラートー飛べ』!!』

風を切り、落下する音が聞こえる前に飛行呪文を唱える。セレネは空気を蹴るように、脚で舵を取りながら夜空へと飛び出した。

頭上も満天の星が広がっているが、眼下は色とりどりの流れ星が飛び交うようだ。時折、緑の流れ星が飛んでいる。不吉な予感が胸を過り、一層早く飛べと身体に命ずる。この戦いをいち早く終わらせるためには、ヴォルデモートに「死の線」が奔っているか視る必要があるのだ。

セレネは街の灯りがある方へと飛んだ。

ホグズミード村からは、避難したホグワーツ生が泣きじゃくる声が風に乗って聞こえてきた。セレネはホグズミード村の遙か手前、寂れて誰も寄り付かなくなった屋敷が見えたところで減速する。誰も住んでいないはずの屋敷に、灯る橙色の光が際立つように目立っていた。

十中八九、ヴォルデモートがいる。

セレネは慎重に近くのベランダに降り立つと、窓に向かって

『アロホモロー―開け』

と囁いた。窓は鍵の音も立てずに、そっと外側へ開く。

セレネは目くらましの呪文をかけたまま、自身の足にクッション呪文をかけた。若干、歩きたびにふわふわと浮遊するような感じになってしまいが、その代わり、足音が消える。

ゆっくり、ゆっくり歩きながら、灯りが見えた方向へと歩き出す。

暗がりで見えにくいのが、その分、橙色の光は分かりやすい目印だった。ぼんやりとした灯りの部屋の扉は少し開いており、中から声が聞こえてきた。

「我が君、差し出がましくお許しください。戦いを中止なさり、城に入られてはい

かがでしよう?」

ルシウス・マルフォイの囁き声が聞こえた。

一氣に十年、年を取ったような声である。

「我が君……我が君ご自身が、ポッターをお探しになる方が、賢明だと思し召されませんか?」

「ルシウスよ、偽っても無駄だ」

ヴォルデモートが嘲笑う。

「おまえが停戦を望むのは、息子の安否を確かめたいからだろう?

俺様は、まだポッターを探す必要はない。だが、どこにいるか知らせるくらいはするべきだろう。ポッターの方から俺様を探しに来るようにさせればいいだけの話だ」

セレネは扉の隙間に顔を近づけ、そっと眼鏡を外した。

ルシウス・マルフォイが見える。黒い線で覆われ、今にも崩れそうだと。

部屋の全貌も同じ。どこもかしこも音を立てて崩壊しそうなくらい、線が引き詰められている。

ところが、ヴォルデモートはいつも通りだ。

死の線が、全く見えない。

「……」

セレネは気づかれる前に、先程侵入して来た部屋に戻った。

ヴォルデモートの死の線が視えない。つまり、まだ分霊箱が破壊し切れていない。それなら、最後の答えは簡単だ。

ハリー・ポッターだ。彼が最後の分霊箱なのだ。彼の中のヴォルデモートの魂を殺せば、サイコパスの不死性を取り除かれる。

セレネは飛行呪文を囁き、夜空高く飛び出しながら、ほくそ笑んだ。

今の自分には、最強の杖がある。この杖と自分の魔眼があれば、ヴォルデモートを殺すことが出来る。

故に、すぐにハリー・ポッターを探し出し、彼に宿るヴォルデモートを殺す必要があった。

「……あれ……でも、待って」

セレネは飛行しながら、ふと……とある事実を思い出してしまう。

いままで、セレネは数多くの分霊箱を破壊して来た。

ゴーンの指輪。

スリザリンのロケット。

ハッフルパフのカップ。

ヴォルデモートのナギニ。

そして、レイブンクローの髪飾り。

特に最後の一つなんて、髪飾りが誘惑をしてくる前に破壊した。

そう、破壊である。

今までの分霊箱は全て、破壊して来た。

直死の魔眼でヴォルデモートの魂を破壊すると、入れ物はすべて割れてしまった。震えて割れるところから考えるに、ヴォルデモートの魂が切り殺され、飛散する衝撃に耐えられず、器となった宝物まで壊れてしまったのだらう。

だから、全部壊れた。スリザリンのロケットなんて美術的価値が高そうなのに、綺麗に二つに割れてしまっているせいで、ただの壊れたガラクタになってしまっ

いた。

では、最後の分霊箱はどうなるのだろうか？

セレネが直死の魔眼の力で魂を破壊することは、前例の通り可能だ。

しかし、肝心な器の方はどうなるのか。

セレネの考えがそこまで至った時、絶望の端まで押し出されたような感覚に陥った。喉が渇き、手足から凍えていくような感じがする。

前例通りならば、ヴォルデモートの魂を殺した衝撃に耐えられず、器となった入れ物は崩壊する。つまり、ハリー・ポッターという名の器は破壊される。

つまり、これは「生き残った男の子」を殺すということになる。

ハリー・ポッター。

最初に知り合った魔法使いで、1年生の頃から一緒にヴォルデモートと戦ってきて、三校対抗試合のときは競い合った好敵手で、セレネのことを一番最初に好きだと言ってくれた人。

全体で見れば、彼のことを利用したことの方が多し。

正直、駒扱いしていたことも多かった。

だがしかし、これまで共に戦ってきた仲間であることには変わりなく、たぶん、きつと、彼は「友人」というカテゴリーに属しているのかもしれない。

その相手を殺す。

殺さなければ、先に進むことが出来ない。確実に殺さなければ、ヴォルデモートの不死性を剥奪することが出来ない。

ヴォルデモートを殺すと決めた時より、ベラトリックスに死の呪いを撃ちこもうとした時より、心が鉛のように重く、恐怖が激しく胸の奥で躍動した。心臓の音が耳元で聞こえるように感じるくらい、激しく脈を打っている。

殺すのは簡単だ。

ハリーなんて簡単に殺すことが出来る。ダンブルドア軍団の模擬戦で、こちらの方が遥かに強いことを実感している。たった2年で、あの実力差を埋めることは不可能だ。

だから、とっても簡単。

指輪やロケットが囁いてきた誘惑と同じように、ハリーの呪文なんて捌くのは楽勝だし、マッチ棒を針に変身させるより早くことを終えられる。

だけど、その一步が踏み出せない。

爪先立ちで崖の縁に立たされている。その選択肢を選んだら最後、この崖から身を投げることになる。

もう、戻ってこれない。

今までの自分には、二度と戻れない。

『セレネ、人を殺すのは駄目だよ』

義父の声が耳の奥で聞こえる。

セレネはニワトコの杖を強く握りしめた。

「私……どうしたら……」

ホグワーツ城に向かって飛びながら、セレネは歯を食いしばった。

そんな時だった。

『お前たちは、よく戦った。ヴォルデモート卿は勇敢さを称えることを知っている』
背後から冷たく甲高い声が聞こえてきた。

セレネは満天の星空に浮遊しながら、その声に耳を傾けた。

その頃、ホグワーツ城。

ハリー・ポッターも同じ声を聞いていた。

ホグワーツ生も死喰い人も、巨人たちも戦いの手を止め、ヴォルデモートの声に聞き入っている。

否。聞き入っているのではない。ヴォルデモートの声の強制力が、全ての者を従わせていた。

『しかし、お前たちは多くの死傷者を出した。俺様に抵抗し続けるなら、一人、ま

た一人と全員が死ぬことになる。そのようなことは望まぬ。魔法族の血が一滴でも流されるのは、損失であり浪費だ』

ヴォルデモートの息を首筋で感じ、死の一撃を受けそうなほど近くに「あの人」が立っているかのように、はつきりと声を聞いていた。

『俺様は慈悲深い。俺様は我が戦力を即時撤退するように命ずる。

一時間やろう。死者を尊厳をもって弔え。傷ついた者の手当てをするのだ。

さて、ハリー・ポッター。俺様は今、直接お前に話す。お前は俺様に立ち向かうどころか、友人たちがお前のために死ぬことを許した。俺様はこれから一時間、「禁じられた森」で待つ。

もし、一時間ののちにお前が俺様のもとに来なかったならば、降参して出てこなかったならば、戦いを再開する。

そのときは、俺様自身が戦闘に加わるぞ。そして、お前を見つけたし、お前を俺様から隠そうとしたやつは、男も女も子どもも、最後の1人まで罰してくれよう。

一時間だ』

ロンもハーマイオニーも、ハリーを見て強く首を振った。

「耳を貸すな」

「大丈夫よ。あの人が森に行ったのなら、計画を練り直す必要があるわ」

ハリーたちはヴォルデモートを殺すため、彼の思念を読み取り「叫びの屋敷」に向かっていたが、城の方へ足を引き返した。

その間、誰も口をきかなかった。

ハリーの頭の中には、ヴォルデモートの声はまだ響いていた。

城の芝生には、小さな包みのような塊が幾つも転がっていた。

夜明けまで、あと一時間くらいだろうか。しかし、あたりは真っ暗だった。城の中も異常に静かで、いまは閃光も見えず、衝撃音も悲鳴も聞こえない。誰もいない玄関ホールに敷石は、血で染まっている。

大理石の欠片や木片に混じって、寮の得点を示すルビーやエメラルドが床一面に散らばっていた。

「みんなはどこかしら？」

ハーマイオニーが小声で言った。

ロンが先に立って大広間に入った。ハリーは大広間の光景を一目見た途端、入り

口で足がすくんだ。

各寮のテーブルは失せ、大広間は人でいっぱいだった。

生き残った者は互いの肩に腕を回し、何人かずつ集まって立っていた。一段高い壇の上で、マダム・ポンフリーが、アーニーやラベンダーたちに手伝わせながら、負傷者の手当てをしていた。

ケンタウルのフィレンツェも傷つき、わき腹から血を流して立つことが出来ず、身体を震わせ横になっていた。

死者は、大広間の真ん中に横たえられていた。

見覚えのある顔を見つけ、ハリーの顔から血の気が失せた。

フレッド・ウィーズリー。

双子のジョージが頭のところに跪き、ウィーズリーおばさんはフレッドの胸の上に突っ伏して身体を震わせていた。おばさんの髪を撫でながら、おじさんの頬には滝のような涙が流れていた。

ハリーには何も言わずに、ロンとハーマイオニーが離れていった。

ハーマイオニーが顔を真っ赤に泣き腫らしたジニーに近づき、抱きしめるのを見

た。ロンはビル、フラー、パーシーの傍に行った。

ハーマイオニーがジニーを家族の方へ近寄らせようと移動した時、ハリーは隣に横たわる亡骸をはっきり見た。

リーマス・ルーピンだ。

白い顔は静かで安らかだった。魔法のかかった暗い天井の下で、まるで眠っているように見えた。

「——ッ」

ハリーは入り口から、よろよろと後ずさりした。

胸が詰まった。そのほかに誰が自分のために死んだのかを、亡骸を見て確かめることなどできない。

はじめから、自分が我が身を差し出していれば、フレッドは死なずに済んだかもしれない。ルーピンも産まれてくる子を抱くことが出来たかもしれない。

ハリーは大広間に背を向け、大理石の階段を開け上がった。

心を引き抜いてしまいたい。腸も何もかも、身体の中で悲鳴を上げているすべての物を、引き抜いてしまえばいいのに。

ハリーの足は校長室に向かっていた。

校長室を護衛している石のガーゴイル像の前に辿りついたとき、ハリーは足を止めた。

「……ダンブルドアの肖像画……」

校長室には、歴代校長の肖像画がある。

ダンブルドアの肖像画もあるはずだ。肖像画の中の校長先生に気持ちを吐露すれば、これから進むべき道を示してくれるかもしれない。

そんな思いを込めて、ハリーは

「ダンブルドア！」

と叫んだ。

驚いたことに、ガーゴイルは横に滑り、背後の螺旋階段が現れた。

円形の校長室に飛び込んだハリーは、ある変化が起こっていることに気付いた。周囲の壁にかけられている肖像画は、すべて空っぽだった。歴代校長は全員、姿を消してしまっていた。

どうやら、全員が状況をよく見ようと、城にかけられている絵画の中を駆け抜け

ていったらしい。

ダンブルドアの肖像画も空っぽだった。

ハリーはがっかりして壁にもたれかかった。

心が空虚になっていく——……。

「ポッター、何を呆けている？」

瞬間、前から声が聞こえた。

ハリーは弾かれたように顔を上げる。死人のように冷たい暗い眼が、ハリーを見下していた。

「グリフィンドール 10 点減点。

闇の帝王が与えた貴重な一時間を呆けたまま過ごすつもりか？」

そこにいたのは、セブルス・スネイプだった。

ねっとりとした黒い髪が、細長い顔の周りに下がっている。

スネイプを城から追い出したときは、心に憎しみが煮えたぎったものだが、今はあの時ほど燃え上がる怒りを感じなかった。自分のせいで多くの人を苦しませ、死に迫りやってしまった悲しみと後悔が、激しい怒りを締め出していた。

「情けない……今になって、ようやく閉心術を習得するとは」

「……僕を、ヴォルデモートのところへ連れていくつもりか？」

ハリーはやっとの思いで言葉を口に出す。

「闇の帝王のところへ行くか行かないかは、これを見てから判断しろ」

スネイプは淡々と告げると、杖を自分の頭へ向けた。

青みが勝った銀色の気体でも液体でもないものが、ゆらゆらと流れ出てきた。ハリーはそれを一度、見たことがあった。持ち主の記憶である。

「我が輩が言うよりも、見た方が分かるだろう」

スネイプはそう言いながら、「憂いの篩」に記憶を落とした。

ハリーは少し悩んだが、記憶を見ることにした。あのスネイプがハリーに見せる記憶だが、今は誰か他の人間の頭に逃げ込めれば、どれだけ気が休まることだろうか。

記憶は篩の中で、銀白色の不思議な渦を巻いた。

ハリーはどうにでもなれと自暴自棄な気持ちで、自分を責め苛む悲しみを、この記憶が和らげてくれるとでも言うように、渦の中へと飛び込んだ。

そこで見た光景は、スネイプの原風景だった。

スネイプはリリー・エバンズを愛していたこと。

年齢を重ねるごとに亀裂が入り、スネイプが誤って「穢れた血」と呼んでしまったせいで、リリーから絶交されてしまったこと。

リリーが憎きジェームズ・ポッターと結婚したこと。

トレローニーの予言から、ヴォルデモートがリリーの子が「闇の帝王を打ち負かす者」だと判断し、ダンブルドアにリリー一家の保護を頼んだこと。

ダンブルドアに保護を頼む代わりに、自分のすべてを彼に差し出したこと。

リリーが死に、ヴォルデモートが復活した時に、命の危険にさらされるであろう男の子を護ることを誓った。

愛するリリーが産み、その緑の眼を受け継いだ息子——ハリーを護ると。

『ハリーは知ってはなんのじゃ。最後の最後まで、必要となるときまで』

ダンブルドアが深夜の校長室で話し始めた。スネイプはダンブルドアの前に佇み、彼の話の先を待っている。

『セブルス、よく聴くのじゃ。わしの死後に、ヴォルデモート卿とハリーが戦わなければならぬ時がやってくるじゃろう。ヴォルデモート卿は狼狽し、リトル・ハングルトン村の小屋やありとあらゆる場所を廻った後、ハリーと直接対決する日が来る』

『狼狽する？』

『さよう。その時には、ハリーに話しても大丈夫じゃろう』

ダンブルドアはそこまで言うのと、深く息を吸い、目を閉じた。

『こう話すのじゃ。』

ヴォルデモート卿があの子を殺そうとした夜、リリーが盾となって自らの命をヴォルデモートの前に投げ出したとき、『死の呪い』は跳ね返り、破壊された魂の

一部が、ハリーに引かなかったのじゃ。

ヴォルデモート卿の一部が、ハリーの中で生きておる。その部分こそ、ハリーに蛇と話す力を与え、ヴォルデモートとの心の繋がりをもたらしめているのじゃ。

そして、ヴォルデモートの気付かなかった魂の欠片がハリーに付着し、ハリーに守られてる限り、ヴォルデモートは死ぬことが出来ない』

ハリーは、長いトンネルの向こうに、2人を見ているような気がした。

2人の姿は遥かに遠く、ハリーの耳の中で声が奇妙に反響していた。

『すると、あの子は……死なねばならぬと?』

スネイプは落ち着き払って聞いた。

『ヴォルデモート自身の手によって、それをなさねばならぬ。それが肝心なのじゃ』
長い沈黙が流れた。

そして、スネイプが口を開いた。

『私は……この長い年月、リリーのために、あの子を守っていると思っていた。リリーのために』

スネイプは酷く衝撃を受けた顔をしていた。

『あなたは、死ぬべき時に死ぬことができるようにと、今まで彼を生かしていたのですか？』

あなたのために、私は密偵になり、嘘をつき、あなたのために、死ぬほど危険な立場に身を置いた。すべてが、リリーの息子を安全に守るためだったはずだ。

いまあなたは、その息子を、屠殺される豚のように育ててきたのだと言っている！』

『なんと、セブルス。感動的なことを』

ダンブルドアは真顔で言った。

『結局、あの子に情が移ったというのか？』

『彼に？』

スネイプが叫んだ。

『エクスペクト・パトロナム——守護霊よ、来たれ』

スネイプの杖先から、銀色の女鹿が飛び出した。

女鹿は校長室の床に降り立って、一跳びで部屋を横切り、窓の向こうへ姿を消した。ダンブルドアは鹿の軌跡を見つめ、スネイプに向き合ったとき、

『なんと……これほどの年月が、経ってもか？』

ダンブルドアの眼に涙があふれていた。

『永遠に』

ハリーの身体が上昇し、「憂いの篩」から抜け出ていった。

先ほどまで彼らが話していた全く同じ部屋の、絨毯の上に立っている。そのまま、ハリーは床に俯せに顔を押し付け、ついに自分が生き残るはずではなかったことを悟った。

ハリーの役目は、ヴォルデモートの生への最後の絆を断ち切ることだった。

杖を上げて身を護ることもせず、観念してヴォルデモートの行く手に自らを投げ出しさえすれば、綺麗に終わりが来る。

「……僕は……」

恐怖が床にうつぶせになるハリーを波のように襲い、身体の中で葬送の太鼓が打ち鳴らされていた。

「……理解したか」

頭上から降りかかる声も、鏡を一枚隔てた向こう側から聞こえている気がした。さまざまな想いが、真実という妥協を許さない絶対が体表面に打ち付けた。

真実。ダンブルドアが明かさなかった真実。

ハリーは死ななければいけない。終わりが来なければならない。

「安心しろ、ポッター」

感情のこもっていない声が聞こえた。

「闇の帝王がお前を殺した後、我輩が闇の帝王にとどめを刺す」

ハリーは答えることが出来なかった。

自分が最後の分霊箱だ。

スネイプなら自分亡きあと、ヴォルデモートが新たな分霊箱を創り出す前に殺すことが出来るだろう。

ハリーは立ち上がった。

心臓が激しく脈を打つ。まるで、残されている時を数えているようだ。もしかし

たら、最期の時が来る前に、一生分の鼓動を打ち終えてしまおうと決めたのかもしれない。

校長室の扉を閉め、ハリーはもう振り返らなかった。

かつ、かつと歩く。

透明マントを被って下の階に折り、玄関ホールに向かった。

スネイプがついてくる気配がした。オリバー・ウッドとすれ違ったが、彼は反応しなかった。スネイプも目くらましで姿を消しているのかもしれない。

ほとんど誰もいない。

ロンもハーマイオニーも、ジニーもネビルもセレネもルーナもいない。

玄関ホールの石段を下り、暗闇に足を踏み出した。校庭は死んだように静まり返り、ハリーがなすべきことを成し遂げられるかどうか、息を潜めて見守っているようだった。

「……そうだ」

ハリーは禁じられた森へと続く橋の手前で、わずかに足を止めた。

透明マントを脱ぎ、感覚のない指で金のスニッチを取り出す。スニッチには『私は終わるときに開く』と刻まれている。

人生という長いゲームが終わり、スニッチは捕まり、空を去る時が来たのだ。

「僕は、まもなく死ぬ」

ハリーが告げると、金色の殻がぱっくり割れた。

二つに割れたスニッチの中央に、黒い石があった。真ん中にギザギザの割れ目が奔っている。「蘇りの石」は、ニワトコの杖を表す縦の線に沿って割れていたが、マントと石を表す三角形と円は、まだ識別できた。

ハリーは手の中で石を三度転がした。

すると、記憶が実態になったような姿の人影が、それぞれの顔に愛情のこもった微笑を浮かべ、ハリーの周囲に佇んでいた。

「……お母さん、お父さん……シリウス……リーマス……」

ハリーは言葉が詰まった。

尋ねたいこと、言いたいことがたくさんある。

死ぬのは苦しいのか、死なせてごめんなさいとか、ずっと傍にいて欲しいとか。

けれど、それを尋ねる前に、冷ややかな声が降ってきた。

「……そう。私の指輪、そこにあったのね」

一人の少女が橋の棧に腰を掛けていた。

とんとと棧から降り、悠々と近づいてくる。

「さようなら、ポッター。早速で悪いけど、私に殺されなさい」

セレネ・ゴーストが禍々しいまでに青い眼を爛々と輝かせ、ハリーに照準を定めていた。

次回更新予定は7月5日です。

96 話 蛇と蛇、そして獅子

セレネは冷めた目で、ハリー・ポッターを見据えた。

彼の手にあるのは、間違いなく自分の指輪である。

正確に言えば、指輪の中心に嵌められていた黒い石だ。先ほどハリーが零していた言葉の内容から推察するに、あれは最後の死の秘宝「蘇りの石」だ。

「……やっぱり、ズルいですね」

ダンブルドアは、セレネに断りを入れず、ハリー・ポッターに石を譲渡していた。

それも、死者を蘇らせる魔法の石だ。

「私だって、それを使いたかったです」

かつかつと靴を鳴らしながら、ハリーに向かって歩き始める。

「やっぱり、お母さんに会いたいのに」

たぶん、蘇りの石で彼女を復活させたところで、セレネのことは見てくれないだろう。

それでも構わないから、もう一度、セレネは母親に会いたかった。会ったところ

で絶望したとしても、それで自分の中に区切りがつく。

「せめて一言、口にして欲しかった」

胸の内に、静かな怒りが湧き上がってくる。

ダンブルドアに頼らなかつた自分に非があるけど、それを差し引いても、ハリー・ポッターを鼻^ノ負^ミし過ぎである。

セレネはハリーの中の「死」を直死しながら、ゆったりと杖を構えた。

「だから、死んでください」

口元にだけ微笑を浮かべると、私はニワトコの杖を軽く振った。万が一の抵抗をされないように、ハリーが握りしめた杖を弾き飛ばす。杖と一緒に飛んだ黒い石を呼び寄せると、そのままポケットにしまった。

「あっ……」

ハリーは呆然とした表情のまま、根が生えたように突っ立っている。

セレネは杖を構え、身を低くして、一息でハリーへと走り出した。

ハリーは戦う術を失い、杖を拾いに行こうともしない。

あまりにも、ハリー・ポッターは無防備だった。

行ける。

この直感は正しい。このまま一思いに、ハリーの中心に渦巻く黒い線の塊を突き殺すことができる。あと一步、踏み出すだけで、ハリー・ポッターは人生の幕を閉じる。

そう思ったが――……

「……ッ!？」

セレネは視界の端に、こちらへ奔る赤い閃光の存在を捉えた。そのまま弾かれたように後ろへ跳ねる。セレネは赤い閃光を避けると、腰を低く構え、閃光が飛んできた方向に目を奔らせた。

「何をしている、ポッター！　すぐに杖を構えろ！」

セブルス・スネイプが目くらましの呪文を解き、ゆったりと現れた。

ハリーへ意識を集中させるあまり、もう一人の伏兵の存在を見落としていた。セレネは唇を強く結んだが、すぐにスネイプ先生に意識を集中させる。

スネイプ先生は死喰い人でダンブルドアを殺した人物だ。しかし、この状況でハリーを助けたことから推測するに、実は味方だったのだろう。

「先生。ハリー・ポッターを殺さないと、ヴォルデモートは死にません」

セレネの口からは「どうして？」という疑問より、現状を説明する言葉が放たれる。一分一秒が惜しく、本当は焦るべき時なのに、セレネの冬の湖面のように静かで淡々としていた。

「信じてもらえないと思いますが、本当のことです」

「知っている。だが、ヴォルデモート本人の手によって殺されなければならん」

「ヴォルデモートのアバダケダブラで？　それでは、ハリーだけが殺される可能性だってあります」

アバダケダブラが、ハリーの魂に寄生するヴォルデモートを殺せるのであれば良い。

だが、もし、アバダケダブラがハリーの魂の方だけを殺してしまったら？

それでは、まったくもって意味がない。下手したら、ヴォルデモートが空っぽになったハリーの肉体を奪い、闇の帝王が二人に増えてしまうことだってあり得る。

「そんな危険、私なら犯せません」

セレネはスネイプ先生と睨み合う。

互いに譲らないと直感する。きっと、いくら言葉を並べて説明しても、スネイプ先生は首を縦に振らないだろうし、逆に説得されても、セレネは受け入れない。

セレネは杖を手の中で回した。

「仕方ありません。セブルス・スネイプ。あなたを排除することにします」

「やれるものなら、やってみたまえ」

スネイプは言葉を言い終えないかのところで、信じられないほど素早く動いた。その杖が空を切り、眼にもとまらぬ速さで呪文が飛ぶ。セレネは敏速な盾の呪文を展開し、その呪文を押し返した。スネイプは僅かに体勢を崩したが、周囲の瓦礫を鉄の鎖に変え、投げ縄のようにこちらに向かって飛ばしてくる。

セレネは縄を蛇に変身させると、自分の周囲に控えさせた。

セブルス・スネイプ。

セレネ・ゴントの名付け親。

否、名付け親だった人であり、名付け親にさせられた人だ。

推測に過ぎないが、彼は彼自身の意志で名付け親になったのではない。

おそらく、セレネの母親が「最高傑作のホームンクルス」をヴォルデモートの魔の手から安全に守護するための保険として、近所に住まう魔法使いの男の記憶を改ざんしたのだ。そうでもなければ、元死喰い人でマグルと関わりを持たない男が、生粋のマグルである義父と親しくしているはずがない。

ここ数年の、セレネに対して一步引いた余所余所しい態度から考えるに、そのことを彼自身も気づいているのだろう。

故に、彼の杖捌きには余計な感情が入っていない。

もともと、卓越した閉心術の使い手という事実もあるのだと思う。

『襲え』

セレネは蛇たちに命令すると、そのままニワトコの杖を大きく振り上げた。

周囲の風を巻き上げ、砂塵でスネイプの視界を奪う。これで、彼はどこから蛇が飛んでくるのか分からない。

『コンフリゴ―爆発せよ』

ところが、スネイプは爆発呪文を唱え、周囲の空気を一斉に爆散させる。その風圧に巻き込まれ、蛇も宙を飛び、セレネも後ろに飛ばされそうになった。足に力を

入れ、踏み止まる。が、そうこうしている間にも、スネイプの攻撃が畳みかけてくる。セレネは向かってくる閃光を防ぐべく、盾の呪文を前方に集中させ、なんとか身体を防御する。

ニワトコの杖でなければ、この防御は間に合わなかっただろう。

セレネは落下する蛇を煙へと変化させた。そのまま煙を粘土のように丸め、あっという間に青々とした宝石へ姿を変える。

スネイプが一瞬、眩い光を醸し出す宝石に目を奪われた隙に、セレネは地面を蹴り飛ばし、急速に接近する。

『『エバネスコ―消えろ』』

スネイプの杖めがけて、消失呪文を唱える。

単なる武装解除では打ち負かされてしまいそうなので、杖だけを消してしまうことにした。

「――っ、『エンゴージオ―肥大せよ』！」

だが、やはり一筋縄ではいかない。

スネイプは間一髪で手近な石を蹴り上げ、大きな盾のように肥大させる。消失呪

文は石に激突し、石が空気に溶けるように消えていった。石の盾が消えるか消えないかのところで、スネイプは貫くように呪文を告げた。

『セクタムセンプラー切り裂け』

それは、一際鮮烈な光だった。

詠唱ありの呪文は鋭く、セレネはステップを踏むように避けていく。今まで自分の立っていた地面に刻まれていく爪痕じみた裂傷。あまりにも鋭い一撃に、セレネは頭の片隅で「あれを真面に受けたら死ぬな」と確信した。下手な失神呪文を受けるよりも質が悪い。

「宝石で目を逸らさせるとは、らしくない」

「ええ、物真似ですから」

魔眼蒐集列車で共に戦った女の子を思い出しながら、セレネは次の呪文の準備をする。

あの子みたいな格闘戦は、自分には難しい。華麗に優雅に見惚れるまでのプロレス技を披露できるとは思えず、それが大の男であるスネイプに通じるとも思えない。直死の魔眼と組み合わせた純粹な格闘技をするには、それ相応の目逸らしが必

要になってくる。

だから、そのことは一旦、棚に置くことにした。

けれど、宝石というのは、我ながらに良いアイディアなのではないかと思った。

「それっ！」

セレネは落下した宝石をキャッチすると、そのままスネイプめがけて投擲する。セレネの放った宝石は空中でナイフへ変化し、スネイプへ襲いかかった。当然、その程度の攻撃がスネイプに通るわけがない。スネイプはナイフを杖一振りで弾き飛ばすと、数本のナイフと瓦礫を固め、岩のゴーレムを鑄造した。

ゴーレムは重厚な剣を携え、セレネに向かって地響きをたてながら近づいてくる。その背後から、スネイプが散弾のように失神呪文を放ってきた。セレネはゴーレムに向かって駆けだす。

「っ……!!」

失神呪文が肩を掠めた。

気絶させるほどの痛みが左肩に白熱する。

だけど、足を止めるわけにはいかない。とはいえ、あれほどのゴーレムを变身さ

せたり、ニワトコの杖で破壊するための魔力がもったいない。

「ったあ!!」

セレネは痛みから立ち直り、すぐに攻撃を仕掛ける。

目前に迫る凶器に奔る線を、セレネはニワトコの杖で一気に切り裂いた。

重厚な剣の一部が崩れたが、まだ全部の線を切り裂いたわけではない。残った部分で押し切ろうとしてくる。だが、攻撃を止める程度には十分だった。

剣の風圧がセレネの黒髪を浚ったが、攻撃までには至らない。

「これで、どうです！」

セレネはゴーレムの懷に潜り込むと、全力で線を中心めがけて杖を突きあげた。ゴーレムは崩壊の音を木霊させながら、セレネの頭の上で崩れ落ちる。ゴーレムの残骸をセレネは雨に変え、自分に当たる直前で、雨の雫を全て前方に集中させる。セレネの眼前に、ぷかりと水の球が浮かび上がった。

水の球を意識しながら、別の呪文の準備をする。

「『ネビュラス―霧よ』」

スネイプの周囲一帯が薄らと霧で覆われる。

こんどは爆風で飛ばせる量でもなければ、その程度の質でもない。

セレネは左手をポケットに突っ込むと、いつも持ち歩いている例の石を数個取り出す。その間、ニワトコの杖を操りながら、水の球を水流へと変化させた。

「それっ！」

セレネは水流に石を向かって投げると、石の数だけ水流は分裂し、さながら東洋の龍のようにスネイプの周囲を回り始める。

水龍は、それぞれ一匹につき一人ずつセレネ・ゴーンの姿を映し出し、スネイプにセレネが分身して周囲を囲まれたかのように錯覚させた。

スネイプは、セレネが龍の外側から見ているということも知らず、幻影に呪文を放っていく。失神呪文、妨害呪文、武装解除の呪文——……

「……そういうことか」

スネイプは、先ほどの強烈な切断呪文で幻影の一つを切り裂いたとき、納得したような声を上げた。

どうやら、トリックがバレたらしい。もともとたいして時間は稼げないと思っていた。セレネがそんなことを考えながら外側から眺めていると、次の瞬間、スネイ

プは飛んだ。黒いマントを蝙蝠のように羽ばたかせながら、空高くへと舞い上がる。彼は霧も水龍もついてゆけないほどの速度で飛び上がると、下に向かって

『フィニートー終われ』！』

強烈な終了呪文をかました。

セレネの生み出した霧も水龍も一斉に吹き飛ばされ、あたり一帯が水たまりになった。セレネが水龍に組み込んだ石は、からんと音を立てて地面に転がった。

『『アクシオー来い』』

セレネは石を手元に集めると、夜空を背に浮かぶ先生に視線を向けた。

「お見事です、先生。もう少し、解くのに時間がかかるかと思いました」

「その魔法の本質は、霧に取り組んだ敵を攪乱させ、同士討ちをさせるものだろう？」

我輩1人相手に使う呪文ではない」

「……確かに、そうかもしれませんね」

セレネは不敵な笑みを浮かべた。

敵の代わりに、自分の姿を反射させたが、あまりにも動かず、敵対行動を示して

こなかったことが、仇となったのだろう。

まあ、それでも構わない。

当初の目的は達成できた。セレネは懷からナイフを取り出した。

「さて、まだやるかね？」

ヴォルデモートが指定した時間が迫っている。

スネイプとしても、ここで終わらせたいところなのだろう。セレネに引かせようとしているのは、彼にわずかに残った名付け親としての恩情なのか、それとも別の何かなのか。

「君自慢の魔法はことごとく敗れ去った。我輩と戦うのは時間の無駄ではないのかね？」

スネイプはとんと地面に足を付ける。

このまま空中戦へと洒落込むのは、時間の無駄だと両者ともに理解していた。

「いえ、無駄な時間などありませんでした」

セレネはナイフと石を軽く投げる。

スネイプはすぐに盾の呪文を展開したが、その必要はない。セレネは石もナイフ

も、自分の顔の高さまで放り投げた。そして、それらが宙に留まっている隙に、ニワトコの杖を振るう。

『リクエチェームス―溶ける』

セレネの呪文と共に、石がナイフの刀身に溶け込んでいく。

セレネが作り上げたパラケルスス版の賢者の石。

不死の力を与える石ではなく、魔力や呪文を吸収する程度の効果しかない石だ。否、それこそが、パラケルススが生み出した賢者の石の神髄だ。

この賢者の石は確かに、ニコラス・フラメルのように不死性を与えることもできない。なければ、黄金を生み出すこともできない。

だがしかし、この石は、敵対者の放った魔力を即座に解析、対応、侵食し己の物として奪い取ることができる。さすがに、死の呪いを吸収したら容量オーバーで割れてしまうが、それ以外の呪文なら耐えて、石の内部に溜め込むことが出来る。

「さて、これで終わりにしましょうか」

セレネはナイフを右手でキャッチする。

ただのナイフは、これでちょっとした魔法の礼装へと変化を遂げた。発動の鍵

は、本で知っている。あとは、その呪文を詠唱するだけだ。

スネイプの前で、賢者の石を披露したことはない。

彼にはセレネが何をしようとしているのか、理解することさえできないだろう。だが、セレネが勝利に辿り着く何かをしていることは察したらしい。

スネイプは盾の呪文を解くと、周囲の瓦礫を片っ端から浮き上がらせ、一斉にセレネめがけて打ち放ってくる。セレネに避ける暇はない。避ける時間も盾を構築する時間も惜しい。

セレネはナイフを前に突き出すと、ありったけの魔力を込めて叫んだ。

「真なるエーテルを導かん。我が妄念、我が想いの形——ッ!!」

パラケルススの想いを込めた賢者の石を取り込んだナイフ。

それは、きっと彼の思い描いたものとは雲泥の差。実戦で使うのは初めてだし、練習だっただけのことがない。ぶつつけ本番、やつつけ仕事の礼装で、とにかく魔力をこめただけの一撃。間違いなく、真作の100分の1にも満たない贋作だ。

だがしかし、雑な贋作とはいえ、一応は設計図通りの品物だ。

真作の100分の1の力を発揮することはできる。

魔剣と化したナイフの周囲に五色の弾が浮かび上がり、目を疑う速度で回り出す。そして、セレネは瓦礫が目前に迫った次の瞬間、

「『元素使いの魔剣』!!」

贗作礼装の名を力いっぱい叫んだ。

五色の弾が刀身の先で纏まると、強烈な光をスネイプめがけて発射する。彼の繰り出した瓦礫は光の前で塵となり、スネイプが慌てて展開した盾は貫かれた。セブルス・スネイプの身体は哀れにも、そのまま城の方まで弾き飛ばされた。スネイプのちっぽけな身体が城壁に激突し、そのまま動かなくなるのが見える。

「……ごめんなさい、スネイプ先生」

セレネは淡々と謝罪を口にする。

セレネの目が確かなら、激突する直前、わずかに杖を動かすのが見えた。たぶん、クッション呪文で衝撃を緩和させたのだ。だから、きつと息はあるのだろうが、あの勢いで激突したのだ。前線復帰は困難だろう。

その様子を遠目から確認していると、くらりと視界が揺れた。

「ッ、……思ったより、吸われた……」

セレネは地面に膝をつく。

吐き出す息が荒い。残り魔力はわずか。

初めて創り出したパラケラススの神秘は、セレネからごっそり削るように魔力を吸い取っていった。ナイフの刀身から力を失った賢者の石が、ころころ地面に転がり落ちる。

つまり、贗作の宝具はただのナイフに戻ったというわけだ。

さすがに、贗作とはいえ、無茶な技をしたせいとか、刀身に少しヒビが入っている。ただのナイフをポケットにしまうと、次の戦闘に思考を切り替える。

「さて、次は貴方の番ですよ」

セレネはハリーがいた方向に目を移しながら、失神呪文を放った。

あっけなく倒れるかと思ったが、ハリーはすぐに右へよけ、赤い閃光を放ってきた。

セレネは、軽々と彼が放った赤い閃光を弾き飛ばすと、ハリーを睨み付けた。

そこにいるのは、先ほどまでの虚無感を漂わせた弱弱しい姿ではない。ハリーは鋭くこちらを見据えている。その表情は、戦士と言っても過言ではない。

「セレネ、僕は君に殺されるわけにはいかないんだ」

「残念。私は貴方を殺さないといけません」

ハリーはスネイプとの戦いを見て、心に火が付いたのかもしれない。

だが、所詮は、ハリー・ポッターに過ぎない。セレネは呆れたように笑いかける。

「今の戦いを見て、私に勝てるか？」

「やってみないと分からないだろ？ 『エクスペリアームス―武器よ去れ』！」

ハリーは馬鹿の一つ覚えみたいに、武装解除の魔法を放ってくる。

セレネはニワトコの杖を軽く振って弾き返すと、何もない所から縄を出現させた。呪文を唱えることなく、生まれたばかりの縄をハリーに向かって奔らせる。

「『インセンディオ―燃えろ』」

ハリーは縄を炎で燃やした。

彼が変身術で瞬時に物を変身させることができないのは、よく知っている。つまり、彼の行動はセレネの思う壺だ。セレネはその炎を操り、火の縄のように彼の周囲で回転させた。

「5年生の時を思い出さない。貴方は、私に絶対に勝てない」

そう言いながら火の輪を狭め、ハリーの身動きを封じにかかる。

ハリーは苦しそうに顔を歪めたが、それでも、緑の瞳に闘志を宿したまま杖を振った。

『インペディメンター妨害せよ！』

ハリーは火の輪を吹き飛ばし、すぐにセレネへ杖を向けてきた。

瞬間、セレネのくるぶしが見えざる手に捕まれ、強制的に浮かび上がる。

どうやら、ハリーは無言呪文で身体浮遊の魔法を使っただけ。

「これで、勝ったつもりですか？」

セレネは笑みを浮かべたまま、反対呪文で地面へ舞い降りる。

ハリーが無言呪文を不得手にしていることは、授業でも明らかだった。身体浮遊は成功したが、他はどうだか分からない。

「終わりです」

「ハリー!!」

セレネが呪文を放とうとすると、誰かの叫び声が耳を貫いた。

素早く目を奔らせれば、遠く離れた城の入り口から、ちっぽけな影がわらわらと

飛び出してくる。スネイプが城壁にぶつかった衝撃で、外で戦闘が行われていることに気付いたのかもしれない。

「さすが、ハリー・ポッター。悪運が強いですね」

おそらく、城から出てきた援軍は、セレネに味方してくれない。十中八九、ハリーに加勢し、こちらに敵対してくるだろう。

もっとも、加勢してくるダンブルドア軍団程度、一人で十分相手に出来るが、その隙にハリーが禁じられた森へ走っていく可能性があった。

ハリーに逃げ出されては困るし、今はダンブルドア軍団や大人の魔法使いを相手にしている時間が惜しい。

ヴォルデモートが指定した刻限が迫っている。

その前に、この戦いを終わらせたかった。

ハリーは運だけは強い。

それを覆すには、自分の何かを捨てる必要がある。セレネは覚悟を決めるように、深呼吸をした。

「セレネ、引いてくれ」

「では、これで最後にしましょう」

セレネはハリーに向かって駆けだした。

どうせ、ハリーを殺すには、彼に蔓延る線を斬らないといけない。杖を持っているようとなかろうと、接近する必要があった。

「——ッ、『エクスペリアームス』！」

この期に及んでも、ハリーは未だ武装解除を放ってくる。

馬鹿の一つ覚えとはこのこと。本当に哀れな雑魚だ。世界最強のニワトコの杖を前にして、2年生の決闘クラブで習った程度の勝ち目があると思っっているのが不思議である。

「ハリー!!」

そろそろハリーと接敵するという時に、ハーマイオニーの鋭い声が飛んできた。その声を合図に、雨嵐と言わんばかりの魔法が降ってくる。ハーマイオニーの強力な呪文を一瞥し、その方向に限定して、盾の呪文を展開する。

そう、その一瞬。

わずかに気を逸らした、一瞬だった。

「『エクスぺリアームス』!!」

ハリーの放った赤い閃光が、セレネの右手に直撃する。

「……えっ？」

セレネの思考が、空白に染まる。

呆けたように口を開き、宙を舞う杖を視界の端に収めた。

「セレネ、君の負けだ」

ハリーが勝利を宣言する。

ニワトコの杖は、セレネの手から失われた。

あと、数歩のところで、杖が消える。

セレネは唇を血が出るほど噛みしめ、諦めずに足を踏み出した。

「……油断大敵、ですよ！」

ムーディの口癖を叫び、右手でしまったばかりのナイフを、そして、もう片方の手で使い慣れた沙羅の木の杖を引きずり出す。

「『フリペンド―撃て』!!」

セレネの放った衝撃呪文がハリーの胸に直撃する。

彼との距離は、十歩とない。ハリーは防ぐことが出来ず、仰向けになって倒れた。その間も、セレネは走った。

なにをするべきなのは、十分すぎるほどわかっている。セレネはハリーに駆け寄って、その無抵抗な身体に圧しかかった。セレネは馬乗りになって、ナイフを振り上げる。

「……セレ、ネ……」

緑の瞳が、セレネを映している。

殺す。

ここで、殺す。

ハリー・ポッターを殺さないといけない。

彼を殺さないと、ヴォルデモートの不死性は取り除かれない。

ハリーと紡いだ記憶が、蘇る。

最初は無関心。

あのマグルの公園で出会ったとき、こんな長い付き合いになるとは思ってもいな

かった。

彼を利用しながら戦って、5年生の時は肩を並べて戦って、つい数時間前だつて、一緒にグリーンゴツツを攻略したし、必要の部屋でレイブンクローの髪飾りを壊した。

不必要な会話は、たぶんなかった。

だいたいどれも会話の内容といえ、ヴォルデモートのことばかり。

ああでも——……

一緒に、ハンバーガーを食べた。

一緒に、スラグホーンのパーティーに行った。

あの一瞬は、少し楽しかったかもしれない。

心が微かに弾んだような気がする。

これといって、そこまで悪い思い出なんか、1つとしてなかった。

『——ッ!!』

臓腑を抉られる葛藤に追い打ちをかけるように、大切な人と交わした言葉が耳の奥で蘇る。

そう、大切な人。

セレネ・ゴーストにとって、大切な人たちとの約束が頭で響き渡っている。ずっと心に背負ってきた願いが消えることなく、永遠に木霊している。

「……うん、だから私は……」

いつかの約束に答えるように、セレネは呟いた。

大切な人との約束は、絶対に守りたい。

けれど、大切な人たちがヴォルデモートに殺されるのは絶対に嫌だ。だから、ヴォルデモートを殺そうと決めたのだ。

そのことを想起するだけで、心がナイフで幾重にも引き裂かれたように辛い。いつそのこと、狂ってしまえば悲しみを忘れることが出来るのかもしれない。だが、心を彼岸へ連れて行ったとしても、きっと大切な人たちを失った悲しみは癒えることなく、自分を苛み続けるはずだ。

だから、大切な人たちを護るために、その約束を破却する。

「貴方を殺します」

もう、躊躇いはしない。

これ以上、立ち止まる時間はない。

彼との思い出は、これっきりすべて忘れる。

ヴォルデモートの魔の手から大切な人たちを守りたい。そんなエゴイズムのために、友だちだったハリー・ポッターを殺す。後悔も、懺悔も許されない。後悔しても足りないのではなく、その考えを抱くこと自体が許されないのだ。

人を殺した時点で、もう人として死ぬことはできない。

その罪は一生ついて回り、罰を受けるときが必ず訪れる。

後悔したことで、喪ったものは戻ってくることはなく、これまでのように生きていけるはずがない。常に自分を責め続け、全身を剣で貫かれる以上の苦しみを背負うことになるだろう。

ああ、それでも——……そのおかげで、大切な人たちを護れるというのなら……自分が、喪ったもの以上の煌めきを手にすることが出来なくなったとしても、惜しくはない。

「さようなら、ハリー・ポッター」

いつか、人を殺すと決めたあの時より、ずっと心は静かだった。

あの時に感じていた狂うような熱はもうない。

セレネは彼のうちの「死」に狙いを定め、重い腕を迷うことなく振り下ろした。自分の静かな哀しみと胸を抉る辛さの先に、きつと大好きな人たちの希望があると信じて。

「……」

抵抗はなかった。

きっかり一撃で、セレネはハリー・ポッターの命を止めた。

次回更新予定は7月12日0時を予定しています。

本作オリジナル魔法

『リクエチエームス―溶けろ』

物体を溶かす魔法。

文字通り固形物を溶かす他、固形物を液体にして、別の固形物に溶かし入れることもできる。

○パラケラススについて

リメイク版を構想し始めた当初、蒼銀 Fate はこの世に出ていませんでした。だから「ニコラス・フラメル側じゃなくて、こっちから賢者の石を作ることでもあるんじゃない？」という浅はかな考えで書き始めたら、Fate に登場したもののだから我ビックリ。

空白期間の間に練り直し、なんとかもつとこの設定を活かせないかなと考え、最終的にこのシーンまで辿り着きました。

後悔はしていない。

97話 セレネ去る／キングズ・クロス

静寂。

誰の声も聞こえなかった。

風で木の葉が揺れる音すら聞こえない。

「……」

セレネはナイフを引き抜き、ゆっくりと立ち上がる。

不思議なことに、ナイフには血が一滴たりとも付着していない。服にはナイフで貫かれた痕が残っていたが、肉体は無傷のようだ。どうやら、無事、魂のみを壊せたようだ。

ただ、やはりというべきか。

セレネは、ヴォルデモートだけでなく、ハリーの魂までも壊してしまったらしい。ハリーの瞼は閉じたままで、呼吸もしていない。セレネは少しだけ目を細めた。

「……さよなら、ハリー・ポッター」

この言葉は、もう二度と彼に届くことはない。

セレネは彼に背を向けて歩き出した。ここでようやく、時が動き出す。

「あ、ああああ!!」

マクゴナガル先生の声が聞こえる。

普段から冷静沈着で論理的に行動している先生が、あんなに悲痛の声を出すとは思わなかった。わずかに胸が軋む思いがする。

その声を皮切りに、ハリーの名を呼ぶ声が校庭に響き渡る。

セレネは振り返らない。

セレネに見えているのは、前だけだった。校庭から禁じられた森へと通じる石造りの橋を渡り始める。巨人やゴーレムを導入した激しい戦の惨劇の痕が残り、橋の棧が崩れたり、セレネの頭ほどある石の礫がごろごろ落ちていた。非常に歩きにくいので、杖で軽く払いながら進む。払われた瓦礫は、まったく底の見えない谷間へと落ちていった。

そうして、セレネが歩いている時だった。

『『ステューピファイ―麻痺せよ』!!』

憎悪の叫びが背後から聞こえてきた。

セレネは振り返りざまに盾の呪文を展開し、失神呪文を弾き返す。ハリーの死体のところに、ハーマイオニーとロン、そして、ジニーが立っていた。特にジニーは猛然とすざまじい勢いで、セレネに向かって来ていた。今の一撃も、彼女が放ったものだったのだろう。

「ハリーを……ハリーを、よくも!!」

「ジニー・ウィーズリーでしたね。彼は……必要な犠牲でした。より大きな善のため」

セレネは自分に言い聞かすように、淡々と誰かの言葉を真似る。

すると、ハーマイオニーが泣きはらしたような目で、セレネを睨んできた。微かに手を震わせながらも、杖をまっすぐこちらに向けている。

「セレネ。それは、グリンデルバルドの言葉よ」

「……そうかもしれないね。ですが、どうでもいいでしょう?」

セレネはつまらなそうに答えた。

「セレネは……ハリーを殺して、ヴォルデモートに仕えることが良いことだって言うの?」

「まさか！ 私がヴォルデモートのことが大っ嫌いなのは重々承知でしょう？」

セレネが言うと、ハーマイオニーは言葉に詰まった。

「だったら、どうして……」

「ハリーは最後の分霊箱でした。ハリーを殺さない限り、勝ち目はありません」

事実を提示する。

ハーマイオニーは愕然と立ちすくんだ。ロンも目を見開く。分霊箱を知らないジニーだけが、疑念と憎悪で燃える視線をセレネに向け続けていた。

「ハリーを殺した言い訳に決まってる!!」

ジニーが叫んだ。

「必要な犠牲!? そんなこと、あるわけないわ!!」

「……ッ、ハーマイオニー！ だから、僕は最初から言ってただろ！ こいつを仲間に加えちゃダメだって！ ハリーが分霊箱？ ありえない!! だいたい、そんな大事なことを、ダンブルドアが伝えないはずはないし、もし、それが本当だったら、ダンブルドアは殺される家畜みたいにハリーを育てて来たっていうのかよ!?

だから、狡猾いスリザリン生を信じるのは駄目なんだ!! ましては『例のあの

人』の血縁者なんて、信用できないって!!」

ロンが妹に続くように声を荒げた。

聞き捨てならない言葉に、セレネは瞬間的に杖を振っていた。ロンはセレネの放った失神呪文を真面に喰らい、後ろへと弾き飛ばされる。

「あの男の血縁者ではありませんよ。」

……さてと、時間がありません。おしゃべりはここまです。『プロテゴディア
ポリカ―悪魔の護り』

セレネはロンが飛ばされる様を見ながら、橋の入り口に向かって呪文を放った。
青黒い炎が壁のように燃え盛り、セレネとの間を遮断する。

「先に忠告しましょう。この炎を潜れるのは、私に忠誠を誓う者だけ。少しでも疑
念がある者は、炎に触れただけで塵になります」

セレネが静かに言うのと、ハーマイオニーの青ざめる表情が炎の向こうに見えた。
たぶん、彼女は文献でこの呪文を知っているのだろう。しかしながら、ジニー・
ウィーズリーは知らなかったらしい。勇敢にも炎に向かって突き進んでくる。

「そんな脅し、私に通用しないわ。『アグアメンティ―水よ』!」

ジニーの杖から水が濁流のように放出された。

だがしかし、その程度の水が悪霊の火に連なる業火の護りに敵うはずもない。水は炎に触れた瞬間、白く音を立てながら蒸発し、炎はより一層勢いを増した。地獄の業火は蛇のようにうねりながら、ジニーの杖にぶつかった。彼女の杖はたちまち青い炎に包まれ、塵芥と化していく。さすがの彼女も杖を落とし、慌てて後退した。青い炎はジニーを飲み込もうと襲いかかっていたので、セレネは脅すだけで良いと念じながら杖を振る。これで、ジニーの杖以上の犠牲が出ることはないだろう。ともあれ、これで、一番襲ってきそうな相手は戦えなくなった。

まだ、ハーマイオニーが残っているが、彼女はこの炎について知っている。この呪文は単純な終了呪文でも止められない。10人前後の優秀な魔法使いが全力を出して、ようやく止められる業火だ。その準備をしているうちに、セレネは禁じられた森へたどり着くことが出来るだろう。

セレネが彼女たちに背を向け、歩き始めた——……その時だった。

「『フィニート——終われ』!!!」

鼓膜を貫くような叫び声。

セレネが弾かれたように振り返ると、青黒い炎はオレンジ色の正常な炎に包まれ、瞬く間に消滅していく。セレネは目を見張ってしまった。

あの炎は、ミネルバ・マクゴナガルでも消すのに戸惑うはずだ。それを一瞬で、消した人物がいる。

「まさか……嘘でしょ……?」

「私の娘に何をする!!」

モリー・ウィーズリーだった。

こちらに駆け寄りながらマントをかなぐり捨て、両手を自由にする。しゅつと杖をしごきながら、業火の護りが消え失せた橋を渡り始めた。

セレネはすぐさま応戦する。双方の杖から閃光が噴き出した。セレネとモリーの足元は熟され、亀裂が走った。セレネは感じた。この女性は、本気で自分を殺すつもりだと。

「おやめ!!」

ハーマイオニーが応戦しようと駆け寄ったが、モリーは鋭く言い放つ。

「下がっていきなさい。下がって!! この女は、私がやる!」

「あなたも下がってください、モリー・ウィーズリー。あなたでは、私に勝てない」
セレネは呪いを繰り返しながら、モリーに関する情報を整理する。

彼女は、ウィーズリー家の母親。

三校対抗試合では、ハリーの観戦に訪れていた心優しそうで家庭的な女性だった。話を聞く限り、ごく普通の主婦で魔女。戦闘能力に秀でている話は聞かないし、彼女の息子や娘の戦闘能力から推察するにしても、そこまで実力者ではないはずだ。それなのに、なぜ……あの「悪魔の護り」を一撃で消したのか。

どうして、自分との決闘で拮抗状態を維持することが出来ているのか。

いくらスネイプとの戦いで消耗した上、ニワトコの杖を使用していなかったとしても、彼女程度は簡単に倒せるはずなのに、まったく押し返すことが出来ない。娘を護るために、これほどまでの力を行使しているというのだろうか。

「ここで、貴方が私を殺しても……なんの、解決にもならない!」

セレネはモリーの放った呪文を弾き返すと、周囲の瓦礫を数十本もの剣に変身させる。剣はセレネの背後に展開するように浮かび、指示を待つように留まっている。

「私は……私が、ヴォルデモートを倒す」

大量の剣はセレネの宣言を合図に、まるで弾丸のようにモリーへと襲いかかる。

「私は大切な人たちを護るために、犠牲を払ってきたんだ！」

グリンデルバルドを助言者に迎え入れるため、大犯罪者の脱獄に手を貸した。

リータ・スキーターを間接的に死に追いやった。友人だったハリー・ポッターを殺した。そのために、大好きだった先生を城に叩きつけた。

最愛の義父とセオドルと交わした誓いも破った。

「こんなところで、後戻りなんて、絶対に出来ない!! 『エクスパルソ―爆破!』」

先に飛び出した数本の剣を爆破し、モリーの視界を奪う。

その煙を突き破るように、剣が矢のように彼女へ襲いかかった。モリーを砕くつもりはないが、足や腕の腱を切らない限り、彼女は迫ってくることは明白。「悪魔の護り」を突破した人物を無視して、ヴォルデモートを殺しに向かったところで、背後から討たれたら意味がない。

「そんなことは……分かり切ってるわ!!」

ところが、剣の雨は彼女に傷一つ付けなかった。

すべての剣がモリーを前にして停止し、石化していたのだ。モリーは腕を突き出すように「粉々呪文」を放った。石化した剣はことごとく粉碎され、その風圧がセレネに襲いかかってくる。セレネは思わず、右腕で顔を覆い隠した。

「だけど、その犠牲の上に成り立つ計画に、私の愛する息子たちや、娘を巻き込むなんて——……」

モリーが叫んだ。

「絶対に、許さない——ッ!!」

モリーの呪いが炸裂する。

セレネは弾き飛ばそうと杖を突きだした。だがしかし、セレネの伸ばした片腕の下をかいくぐって躍り上がり、胸を直撃した。

「——ッ!?!」

セレネの身体は、橋の外へと放り出される。

自分の表情が凍りついたのが分かった。

「わた、しは……」

なにが起きたのか、一瞬だけ理解する。

「磔の呪い」に匹敵する失神呪文を受けた心臓が強烈な痛みを訴える。まるで、見えない手で強く握られているかのようだ。

否、そんな事実はどうでもいい。

大事なことは、なぜ、負けたかだ。

視界の端に、激しく肩で息をする女性を視止める。

彼女は、彼女の愛する者のために、杖を握った。

自分も、同じだったはずだ。

自分も大切な人のために、頑張ってきたはずなのに……。

「……ああ、そうか……」

ふと、セレネは悟った。

もし、いま悟ったことが事実なら、モリーに勝てないのは道理だし、納得がいった。

納得がいくと同時に、浮遊状態から落下する。

飛行呪文を唱えるだけの力はなく、瞼はひたすらに重かった。

風が轟々と耳元で鳴り響き、ひたすら身体が落下していくのが分かった。

何もできないので、空を見上げる。

夜明けが近いのだろう。濃紺の夜空の端から、薄い銀色が広がり始めている。暁の爽やかな薄明りが、夜の微睡みを覚ましていくみたいだ。

明けない夜はない。

何はともあれ、セレネがヴォルデモートの不死性を断ち切ったことは事実だ。

モリーか、ハーマイオニーか、はたまた、ネビルか。誰か分からない。けれど、きっと誰かが、ヴォルデモートを殺してくれることだろう。

そして、彼らがセレネの選びたかった未来を紡いでくれるはずだ。

「……でも、やっぱり、私……」

その言葉を最後に、セレネは瞼を閉じた。

ハリー・ポッターの話をしよう。

目が覚めると、彼は静寂の中にいた。

明るい靄の中に横たわっている。これまで経験したどんな靄とも様子が違っていった。雲のような水蒸気が周囲を覆い隠しているのではなく、むしろ、靄そのものがこれらの形を作っていくようだった。

ハリーが横たわっている床は、どうやら白い色のようで、温かくも冷たくもない。

「……ここは……？」

ハリーは立ち上がった。

先ほど、自分は確かに殺された。まっすぐ、胸をナイフで突き刺された。服の上から刺された場所を触ってみたが、まったく痛みは感じなかった。傷跡もなく、血が出た様子もない。

不思議に思いながら、もう一度、あたりを見渡した。

眺めているうちに、だんだん目に入るものが増えてきたのだ。

頭上には大きなドーム型のガラス天井が、陽光の中で輝いている。誰もいないドームを歩きながら、ふと、ハリーは長いベンチの存在に気付いた。そのベンチを覗き込み、びくっと身を引いてしまう。

そこには、小さな裸の子どもの形をしたものが、丸まっていたのだ。

肌は皮を剥がれでもしたかのように、赤くざらざらとして生々しく、誰からも望まれずに押し込まれ、必死に息をしながら震えている。

ハリーはそれが怖いと思った。

小さくて弱弱しく、傷ついて怯えているのに、ハリーは近寄りたくなかった。慰

めてやらなければと思いつながらも、それを見ると虫唾が走るのだ。

「君には、どうしてやることもできん」

ハリーはくるりと振り向いた。

アルバス・ダンブルドアが、ハリーに向かって歩いてくる。流れるような濃紺のローブを纏い、背筋を伸ばして、軽快な足取りでやってくる。

「先生？」

「あれは、我々の救いの及ばぬものじゃよ。」

ハリー、君はなんとも勇敢で素晴らしい子じゃ。さあ、一緒に歩こうぞ」

ダンブルドアは両腕を広げた。

手は両方とも白く、完全に無傷だった。ハリーが呆然としてみると、ダンブルドアは悠々と歩き去る。ハリーは慌てて後を追いかけた。

「先生は、死んでいる？」

ダンブルドアは生前の姿だった。

右手こそ黒ずんでいないが、長い銀色の髪や顎髭、ブルーの瞳に折れ曲がった鼻。すべてが、覚えているままの姿で微笑んでいる。

「おおそうじゃよ」

「それなら……僕も、死んでる？」

「ああ。君は『それが問題だ』、というわけじゃろう？」

全体として見れば、ハリーよ、わしは違うと思うぞ？」

「でも、僕は死んだはずだ。僕は、防げなかった！ あいつに殺されるつもりだったのに、セレネに殺された!!」

「そうじゃよ」

ダンブルドアの顔から光のように、炎のように、喜びが溢れ出ているようだった。

「分かっているかもしれないが、ハリー。君が、最後の分霊箱じゃった」

「それで、僕の中にあつたヴォルデモートの魂は……なくなった？」

「まさしく、その通りじゃ！」

ダンブルドアはますます熱く頷き、晴々と励ますような笑顔を向けてきた。

「だけど、僕は……ここにいます。つまり、その、死んでる」

「死んだのは、あの者の魂だけじゃ。いまや君の魂は完全無欠で、君だけのものじゃよ」

ダンブルドアの優しい言葉に、ますます疑問符が浮かび上がってきた。

彼の言葉が正しければ、自分は生きている。殺されたけど、生きているというな
んとも不可思議な状態だ。

「でも、どうして？」

「直死の魔眼は、その者が『殺したい』と思ったところを的確に殺す。あの者は、
君に寄生する魂のみを破壊することに成功したのじゃよ」

「……それなら、どうして、最初からセレネに頼まなかったのですか？」

ハリーは質問した。

ダンブルドアは、スネイプに「ヴォルデモート自身の手によって殺されなければ
ならない」と言伝を頼んでいた。スネイプは分霊箱について知らず、この命令を
苦々しく受け取っていた。

もし、ダンブルドアがセレネに「すべての分霊箱を壊したら、最後にハリーの中
にあるヴォルデモートの魂を壊して欲しい」と言えば済んだことだ。

ハリーがそんなことを考えていると、ダンブルドアは静かに言った。

「それを説明する前に、ハリー。1つ、振り返ってみて欲しい。

ヴォルデモートが無知の故に、欲望と残酷さの故に、何をしたのかを思い出すのじゃ」

ハリーは考え込む。

椅子の下にいる発育不良の生き物が、すすり泣く声だけがホールに木霊していた。

「……あいつは、僕の血を入れた？」

「まさにそうじゃ！」

ダンブルドアが言った。

「あの者は君の血を採り、それで自分の生身の身体を再生させた。あの者の血管に流れる君の血が、リリー・ポッターの守りが、2人の中にあるのじゃ。

あの者が生きている限り、あの者は君の命を繋ぎ止めておる！

つまり、ハリー。リリーが君を護るために命を捨ててかけた魔法が、ヴォルデモートに僅かながら取り込まれた。母君の犠牲の力を、あの者が生かしておる。

そして、その魔法が生き続けている限り、君も生き続け、ヴォルデモートも生き続ける」

「待ってください！」

ハリーはここで、一つ重要な欠陥を見つけてしまった。

「僕の中にいたヴォルデモートは死んだ」

「さよう。殺された」

「だけど、まだあいつの身体の中には、僕の母さんの血が流れてる？　だから、つ

まり……」

「守りの力は、ヴォルデモートの中で生きていると言いたいんじゃない？」

ダンブルドアの言葉に、ハリーは頷いた。

最後の分霊箱を破壊しても、まだヴォルデモートに「リリーの魔法」が流れている限り、ハリーも死なないし、ヴォルデモートも死なない。

それなのに、ダンブルドアはくすくすと笑っていた。

「これが、直死の魔眼の面白い所じゃ。」

あの目は強力での。二重存在であれ、魂の欠片であれ、殺してしまえば、その崩壊は本体へたどり着く。これまでは、他の分霊箱のおかげで本体は護られておったが、既にそれはなくなつた。

直死の力はあやつに流れるリリーの魔法を殺し、いずれ、ヴォルデモートも死に

至るじやろう」

「なら……」

「ただ、君の中にいたヴォルデモートが殺されたことで、繋がりとは断ち切れ、リリーの魔法の効果も消えたとも考えられる。

セブルスに頼んだ通り、ヴォルデモート自らの手で君を殺し、繋がりをは断ち切るにせよ、セレネが君を殺すにせよ、結果は同じじゃ。

しかし、わしは、セレネではなくセブルスに頼んだ。

端的に言えば、あの娘の魂を引き裂かせたくなかった」

ダンブルドアの目に、一瞬、悲し気な色が映った。

「友人を殺す選択をしたとき、あの者の魂は傷つくじやろう。

老人の苦痛と屈辱を回避するための殺人と、かなり毛色が異なる」

「……だから、先生は……スネイプに頼んだ？」

「左様。

セブルスがわしを殺し、周り廻って、ヴォルデモート自身の手によって、君を殺すことで、自ら分霊箱とその間の繋がりを断ち切り、不死性を剥奪するつもり

じゃった」

ダンブルドアは話を続けた。

「この一年あまり、あの者が求め続けていた品が何か知っておろう？」

「……ニワトコの杖、ですか」

「ニワトコの杖、最強の杖じゃ。つまり、わしの杖のことじゃよ。」

あの杖に纏わる血に塗れた伝説は知っておろう？ あの杖は、殺人によって、持ち主を継承していくとされている。

セブルスがわしを殺すことで、ニワトコの杖の所有権を継承させ、ヴォルデモートに継承されないようにする。

そうすれば、あの者がわしの墓を暴いたとしても杖は真の力を発揮しない。

わしの杖で、君を殺し損ねることができるとのじゃよ」

ハリーは長いこと考え込んだ。

いや、数秒だったかもしれない。ここでは、時間などをはっきり認識するのが、とても難しかった。

「……でも、先生の杖は……墓にない」

ダンブルドアの杖は、セレネに継承された。

そのことは本人からも聞いたし、最期の戦いで使いこなしていた。

「もし、ヴォルデモートの手に杖が渡らなければ、僕は……完全に……」

「間違いなく、本当に死んでおった」

ハリーが言い淀んでいると、ダンブルドアが言葉を明るみに出した。

「あの者の杖から放たれた『死の呪い』は持ち主の力を満足に引き出し、あの者の魂だけでなく、君の魂も殺しておったじゃろう。

だから、当初の遺言には『セレネ・マールヴォラ・ゴースト』の名は書かれておらん」

「杖は、先生の墓に眠る予定だったと？」

ハリーは混乱した。

ならば、何故、遺言が書き変えられたのか。

なにかが起きた時、遺言が書き直されるような魔法をかけていたのか。それが出来るのであれば、事前のうちに、スネイプへ直死の魔眼を使う計画を伝えておけばよかったのに。

「さすがのわしも、自分の死んでからのことは推測することしかできん。

だから、まずは教えて欲しい。わしの死について、誰かに話したかね？」

「それは……はい」

ハリーは正直に頷いた。

「ロンやハーマイオニー。ハグリッドやウィーズリー一家に騎士団の人たち」

一人一人、話した順番に思い返していく。

「スクリムジョールには、話ませんでした。マダム・ポンフリーに、マクゴナガル先生。セレネやバチルダ・バグショットにも話しました」

「……なるほど……察するに、バチルダと出会ったのは、わしの葬儀じゃな？」

「はい。どうして、分かるのですか？」

「これらすべての謎を解き明かす根幹に、葬儀に出席したバチルダが絡んでおる。そうじゃのう……わしが殺される間際、マルフォイ少年に武装解除されたとき、バチルダは衝撃を受けていたはずじゃ。少々、気が動転していたかもしれない」

「ええ、まあ」

ハリーが事実を伝えた時、明らかに様子が一変していた。

それまでは死を悼むような雰囲気だったのが、いきなり、ぶつぶつと呟き、鬼気迫る顔で唸り始めたのだ。あの老婆はダンブルドアが子供に杖を盗られた事実を突きつけられた衝撃で、頭がおかしくなってしまったのかとさえ思ったものだ。

「……先生のことを『最期まで失敗だらけの人生だったな』と言ってました」

「……彼の言う通りじゃな。」

つまりじゃ、ハリー。わしの失敗でズレた軌道を修正したのが、あの男だったというわけじゃよ」

「男？ バチルダ・バグショットは女性ですよ？」

「もちろん、バチルダは女性じゃ。わしが話しているのは、その時、バチルダの皮を被っていた男のことよ」

ダンブルドアは笑いの消えた真面目な表情で、語り始めた。

「これは、わしの推測に過ぎんが……わしがセブルスに殺されたと聞いた時点で、あの男はわしが立てた計画に気付いておった。じゃが、ニワトコの杖の継承権が、マルフォイ少年に移ったと聞き、その計画が破綻したことを察したのじゃ。」

ヴォルデモート卿が、杖の継承者が最後にわしを武装解除した者……すなわち、

マルフォイ少年に移ったと知ったら、間違いなく、あの子を殺すじやろう。

あの子を殺せば、ニワトコの杖の継承者は、ヴォルデモートになってしまう。それだけは、避けねばならない」

「では、その……バチルダの偽物が、遺言書を書き変えた？」

遺言書について、ハリーは詳しく知らない。

ただ、筆跡を鑑定するだろうし、魔法で本当の遺言書かどうか、必ず調べるであろうことくらいは分かった。その目を潜り抜け、誤魔化し切ることが出来るのだろうか。

ハリーが悩んでいると、ダンブルドアは考えを見透かしたように頷いた。

「あの男は……わしの兄弟、アバーフォース以上に親しかった。わしの字の癖を真似るくらい造作もないし、魔法省の目を誤魔化すなど朝飯前じゃ。

これも、あくまで推測にすぎんが、あの者は、どこかのタイミングで、……それも、ヴォルデモートの目の前で、マルフォイ少年から杖を奪い、自らに継承権を移動させた。マルフォイ少年は純血じゃ。継承権が移動した以上、ヴォルデモートは純血の少年を殺さない。その程度の分別は持ち合わせておる。

その後、時機を見て、セレネに真の意味で杖を継承させたのじゃ」

ハリーはダンブルドアの話を黙って聞いていた。

ダンブルドアの話を聞いているうちに、ふと、ある男の名前が浮かび上がってきた。ダンブルドアが口を閉ざしたとき、ハリーは恐る恐る尋ねてみる。

「もしかして……その男は、グリンデルバルド？」

ハリーは口に出してみても、自分の考えが飛躍しているかもしれないと思った。

ダンブルドアと兄弟以上に親しい人なんて他にもいるだろうし、何より、この人物はとうに死んでいる。

だけど、ハリーはこの考えに不思議と確信を持っていた。

グリンデルバルド以上に、この答えに相応しい人物はいない。しかしながら、ダンブルドアとグリンデルバルドが繋がっているとも思いたくなかった。

ダンブルドアは黙したままだったが、やがて、苦しそうに話し始めた。

「……わしは、愚かな過ちを犯した」

ダンブルドアは、ぽつり、ぽつりと言葉を呟いた。彼は泣いているように見えた。「愚かな過ちじゃ。あの男と知り合い、彼と一緒に、自分たちの描いた未来を到達

することに夢中になった。

死の秘宝を3つ集め、死を克服し、魔法界の秩序を正そうとしたのじゃ……あの者たちと同様、死を克服しようとしたのじゃよ」

「先生は、ヴォルデモートとも、グリンドルバルドと違います」

ハリーはすぐさま答えた。

「先生はヴォルデモートみたいに分霊箱を求めなかったし、グリンドルバルドみたいに、クラムのおじいさんや関係ない人たちを犠牲にすることはなかった」

「……そうじゃ……そうじゃな」

ダンブルドアはため息をついた。

「だが、はたして、わしは正しかったのだろうか。今でも思うのじゃよ、ハリー。わしは……怖かったのじゃ。グリンドルバルドと戦うことが……。君も知っているはずじゃ。わしとアバーフォース、そして、グリンドルバルドの戦いを……。そこに巻き込まれた哀れな妹の最期を……。」

わしは、怖かった。グリンドルバルドと決闘することではない。その決闘の最中、あの者に『お前が妹を殺したのだ』と指摘されるのが怖かったのじゃ……」

二人は長い間、黙ったままだった。

背後の泣き声は、ハリーにはもうほとんど気にならなかった。

「……グリンデルバルドは、ヴォルデモートを倒すため力を貸してくれました」
しばらくして、ハリーが言った。

「先生の計画を正してくれました。おかげで、僕はここにいます。ヴォルデモートの不死性はなくなりました」

ダンブルドアは、膝に目を落として頷いた。

まがった鼻に、涙がまだ光っていた。

「……風の便りに、孤独なヌルメンガードの独房で、あの者が悔悟の念を示したと聞いていた。そうであって、欲しいと思う。自分がしたことを恥じ、恐ろしく思っただと考える。」

わしに協力してくれたのは……その償いをしようとしたからであろう。ヴォルデモートが秘宝を手に入れるのを、阻止しようとしたのであろう……」

「……それとも、先生の墓を暴くのを阻止しようとしたのでは？」

ハリーが思ったままを言うと、ダンブルドアは目を拭った。

「先生、僕は……帰らなければならないのですね？」

「君次第じゃ。ところで、ここはどこだと思う？」

「……僕は……」

ここで、もう一度、ハリーは周囲を見渡した。

「キングズ・クロス駅に見えます。列車はないけど、なんとなく……」

「キングズ・クロス！」

では、もし、君が帰らぬと決めた場合には、たぶん……そうじゃな。乗車できるじゃろう」

「それで、汽車はどこに連れていくんですか？」

「先へ」

ダンブルドアは、それだけしか言わなかった。

「僕は……」

「もし、君が帰ることを選ぶなら、ヴォルデモートの息の根を完全に止める可能性はある。約束はできぬがの。」

しかし、ハリー。わたしには、これだけは分かっておる。君が再びここに「戻るとき

は、ヴォルデモートほどここを恐れる理由はない」

ハリーは頷いた。

この場を去ることは、禁じられた森へ向かい始めたときに比べれば、難しいとは言えない。

しかし、ここは温かく、明るく、平和なのに、これから戻っていく先には痛みがあり、さらに多くの命が失われるおそれがあると分かっている。

それでも、戻らないといけない。

「最後に一つだけ教えてください」

ハリーが言った。

「これは、現実のことなのですか？ それとも、全部、僕の頭の中で起きていることなのですか？」

ダンブルドアは晴れやかに笑いかけた。

明るい靄は再び濃くなり、ダンブルドアの姿をおぼろげにしていたが、その声は、ハリーの耳に不思議と大きく響いていた。

「もちろん、君の頭の中で起こっていることじゃよ。しかし、だからと言って、そ

れが現実ではないと言えるじゃろうか？」

セレネの物語が完結まで残り3話。
最後まで、よろしくお願いします。

98 話 誤算

気が付くと、ハリーは再びうつ伏せになって倒れていた。

違うことは、周囲がやけに騒がしいことだろう。薄目を開けてみると、モリー・ウィーズリーが吹き飛ばされるところだった。アーサー・ウィーズリーが彼女を受け止める姿が見える。

あまり時間は経過していないらしい。世界は藍色で、少しずつ白み始めている。

「命拾いしたな、女よ」

ハリーはぎょつとして身体を動かしそうになった。

すぐ真上から、ヴォルデモートの声が聞こえてくる。

「まさか、生き残った男の子が裏切り者によって殺されているとは思ひもしなかった」

死喰い人たちが嘲笑うような歓声を上げる。

ハリーは再び目を閉じて、死んだふりを続けた。

「この小僧は、自分だけが助かろうと逃げるところを殺されたのだ。本当は裏切り

者に褒美をやりたいところだが……」

ヴォルデモートの言葉は、どこか楽しむ響きがあつた。

「無様に転落死したなら、仕方あるまいな。ここに転がる杖を、俺様が代わりに

——……」

しかし、ヴォルデモートの言葉はそこで途切れた。

小走りに駆けだす音、叫び声。そして呪文が炸裂する音が聞こえ、誰かが痛みに呻く声があった。ハリーは、ごくわずかに目を開けた。

誰かが群れから抜け出し、ヴォルデモートを攻撃したのだ。その誰かが、地面に打ち付けられるのが見えた。

「一体誰だ？ 負け戦を続けようという者が、どんな目に遭うか……進んで見本を示そうというのは誰だ？」

ヴォルデモートは、蛇のようにシューシューと息を吐きながら言った。

「我が君、ネビル・ロングボトムです！ ルックウッドたちを散々手こずらせた小僧です！」

「……ふむ、なるほど」

ヴォルデモートは、やっと立ち上がった少年を見下した。

敵味方の境の戦場には隠れる場所がなく、ネビルだけが立っていた。ネビルの白い頬は真っ赤に切り裂かれ、身体のいたるところが傷だらけだった。手には薄汚れた組み分け帽子を握っている。杖はない。先ほどの武装解除で飛ばされてしまったに違いない。実際、ヴォルデモートの左手には、ネビルの杖が握られていた。

「しかし、お前は純血だ」

ヴォルデモートは今拾ったばかりの杖——……ニワトコの杖を握りながら、薄ら笑いを浮かべていた。

「お前は高貴な血統だ。貴重な死喰い人になれる」

「地獄の釜の火が凍ったら、仲間になってやる！ ダンブルドア軍団——！！」

ネビルが叫んだ。

その叫びに応えて、城の仲間から歓声が沸き起こった。ところが、その歓声はヴォルデモートの杖一振りで静められてしまう。

「残念がらだな、ロングボトムよ」

ヴォルデモートは凍てつくような冷笑を口元に歪ませる。

「お前たちが守ろうとした存在は、とつくに死んだ。もはや戦う意味など、どこにもない」

ヴォルデモートが高笑いをする。

追従するように死喰い人たちも笑いだす。小馬鹿にするように口笛を吹く者もいた。

「……確かに、ハリーは死んだ」

ネビルは認める。

けれど、その声に苦しい色はなかった。

「でも、ハリーは……死んでいった皆は、ここにいる！ 僕の、僕たちの胸の中にいる!!」

だから、僕は戦う!! 最期まで!!」

ネビルが高らかに宣言すると、くたびれた組み分けの帽子からグリフィンボールの剣を引き抜き、ヴォルデモートに向かって勇猛果敢に走り始める。

それは、無謀ともいえる突撃だ。

ヴォルデモートに剣が届くとは、到底思えない。事実、ヴォルデモートは薄ら笑

いを浮かべたまま、ネビル・ロングボトムに狙いを定めている。

だから、ハリーは死んだふりを止めることにした。

素早く立ち上がり、ヴォルデモートに杖を向ける。

『『エクスぺリアームス―武器よ去れ』！』

不死鳥の杖から赤い閃光が奔り出す。

ヴォルデモートは辛うじて防いだが、ダンブルドア軍団に歓喜を、死喰い人に動揺をもたらすには十分だった。なにしろ、死んだはずの人間が生き返ったのだ。

長い人類史上、死んでも生き帰った人物は、ただ一人しかない。

そして、その人物は、神と崇められることになる。

「ハリー！」

「ハリーが生きている!!」

ダンブルドア軍団が沸く。

ネビルの掛け声で燃え始めた闘志に油が注がれ、その士気は最高潮までに達していた。

一方の死喰い人側はというと、死人が生き返ったことへの動揺が隠しきれない。

ある者は狼狽え、またある者は忌避し、ある者は逃走する。特に、深く死に関わってきた魔法省の処刑人マクネアは誰よりも早く橋の方へ逃げ出した。

一人逃げ出してしまえば、後に続けとばかりに怯んだ者たちが逃げ出し始める。

「逃げるな！ 戦うのだ!!」

ドロホフが指揮を執ろうとするが、互いの士気の差は明白だった。

マルフォイ夫妻は率先して城に飛び込んで行ったが、杖をとって戦うことはせず、息子の名前を叫んでいる。

もし、これでヴォルデモートが戦いの指揮をとれば、死喰い人たちの戦意は多少上がっていたかもしれない。ところが、彼はハリーが生きていると分かった時点で、標的を一人に絞り込んでいた。

「ハリー・ポッター!!!!」

ヴォルデモートの憎悪の瞳は、ハリーのみを映し出している。

一切の躊躇いもなく、彼はニワトコの杖から死の呪いを放った。当然、ハリーは避ける。そして、走った。ヴォルデモートの放った流れ弾が、万が一にでも仲間にあたったら最悪だ。近くの瓦礫を跳び越え、城の中庭に転がり込む。

『クルーシオ―苦しめ』!」

ヴォルデモートの杖から「磔の呪い」が飛んでくる。

ハリーの背中にまともに当たったが、予想していたような痛みはなかった。せいぜい、針でちくりと刺された程度の刺激である。針刺し呪いや失神呪文の方が、遙かに激痛だ。

ハリーは振り返り、ヴォルデモートと対峙した。

「……なぜだ」

ヴォルデモートの顔に困惑の色が浮かぶ。

当然だ。「磔の呪い」のダメージがまったく見られない。

「なぜ、平然としていられる!!」

肌を焼き尽くさんばかりの憎悪を向けられ、ハリーは怯みそうになった。

ところが、ハリーは大変落ち着いていた。心は冬の湖面のように静かで、さざ波ひとつ立っていない。殺される覚悟で「禁じられた森」に歩き出したときよりも遙かに穏やかで、そして、勇気を胸に抱いていた。

「蘇りの石」で死んでしまった大切な人たちと出会った。

彼らは、見えなくても永遠に傍にいる。

それに、不思議と一人ではない気がした。先ほど、ネビルが力強く叫んだ言葉が、自分の胸にも根付いているのかもしれない。たった一人で最強にして最悪の魔法使いと相対しているのに、とても心強い思いを抱いていた。

「ハリー!!」

否、実際に一人ではない。

ハーマイオニーがヴォルデモートの後ろから駆け寄ってくる。

数歩遅れて、ロンが彼女の後に続いた。

「邪魔をするな」

だがしかし、彼らがハリーの元に辿り着くことはできなかった。

ヴォルデモートは透明な壁を作り、ハーマイオニーたちの前を塞ぐ。

「俺様がポッターを殺してから、相手をしてやるとしよう」

「大丈夫、二人とも」

ハリーも二人を安心させるように笑いかける。

「こいつは、僕が倒さないといけない。僕でなければダメなんだ」

「ポッターは本気ではない」

ヴォルデモートは赤い目を見開いた。

「ポッターのやり方はそうではあるまい。今日は誰を盾にするつもりだ、ハリー・ポッター？」

「誰でもない。分霊箱はもうない。残っているのはお前と僕だけだ。

一方が生きる限り、他方は生きられぬ。2人のうちのどちらかが、永遠に去ることになる」

「どちらかだと？」

ヴォルデモートが嘲笑った。

全身を緊張させ、真つ赤な両眼を見開き、今にも襲いかかろうとする蛇のようだ。
「勝つのは自分だと考えているのだろうか？ 偶然生き残った男の子。ダンブルドアに操られて生き残った男の子」

「偶然？ 母が僕を救うために死んだことが、偶然だというのか？」
ハリーが問い返した。

二人は互いに等距離を保ち、完全な円を描いて、横へ横へと回り込んでいた。ヴォ

ルデモートがハリーしか見ていないように、ハリーにもヴォルデモートの顔しか見えなかった。

「偶然だ。お前は常に誰かを身代わりにしてきた」

「でも、もう今夜のお前は、他の誰も殺させない」

ぐるぐる回り込みながら、互いの眼を見据え、緑の眼が赤い目を見つめて、ハリーが言った。

「お前はもう決して、誰かを殺すことはできない。僕は……お前が皆を傷つけるのを阻止するために、死ぬ覚悟だった」

「しかし、お前は死ななかった。しかも、裏切られた！」

「死ぬつもりだったし、裏切られていない。

僕のはしたことは、母の場合と同じだ。それに、セレネが殺したのは僕ではない。僕の中に残っていたお前の魂だ。

僕は……お前には分からない大切なことをたくさん知っている。お前がまた大きな過ちを犯す前に、いくつか聞きたいか？」

ヴォルデモートは答えず、獲物を狙うように回り込んでいた。

「……また、愛か？」

ヴォルデモートが言った。蛇のような顔が嘲笑っている。

「ダンブルドアのお気に入りの解決法だ。だが、愛は奴が塔から落下して、古い蠟細工のように壊れるのを阻止しなかったではないか。

さあ、俺様が攻撃すれば、愛とやらが守ってくれるというのか？ なにがお前の死を防ぐというのだ？」

「一つだけある」

ハリーが言った。

「今お前を救うものが愛ではないのなら、俺様にはできない魔法か、さもなくば、俺様より強力な武器を持っていると信じているのか？」

ヴォルデモートはニワトコの杖をちらつかせる。

「両方持っている」

ハリーが言うのと、蛇のような顔に衝撃がさっと走るのを、ハリーは見逃さなかった。しかし、それはたちまち消えた。ヴォルデモートは声を上げて笑い始めた。悲鳴よりも、もっと恐ろしい狂気じみた声だった。

「俺様をしのぐ魔法を知っているというのか!? ダンブルドアでさえ夢想だになかった魔法を行った、この俺様が!？」

「ダンブルドアはお前より多くのことを知っていた。知っていたから、お前のやったようなことをしなかった」

「そのダンブルドアに、俺様が死をもたらした。

ダンブルドアは、死んだ!!」

ヴォルデモートは、ハリーに向かって言葉を投げつけた。

その言葉が、ハリーに耐えがたい苦痛を与え、それでも言うように。

「あいつの骸は、大理石の墓で朽ちている」

「そう、ダンブルドアは死んだ」

ハリーは落ち着いて答えた。

「ダンブルドアは、自分の死に方を選んだ。死ぬ何か月も前に選んだ。

セブルス・スネイプによってダンブルドアを殺させ、その杖の所有権をスネイプに移させた」

「何を……」

「だけど、それは失敗に終わった。この戦いが始まった時の持ち主は、セレネ・ゴーストだった。本当の持ち主が使わない以上、その杖は威力を発揮できない」

「バカバカしい！ 杖が魔法使いを選ぶというのか!!」

ヴォルデモートの声は邪悪な喜びで震えていた。

「それならば、お前を殺した後、あのホムンクルスの遺骸を貶めればいい。運良く生きていれば、息の根を止めよう。そうすれば、この杖は真に俺様のものに——……」

「ならない」

ハリーが断定する。

ヴォルデモートの胸が激しく波打っていた。ハリーは、いまにも呪いが飛んでくるを感じ取っていた。自分の顔を狙っている杖の中に、次第に高まっているものを感じていた。

「言ったはずだ。彼女は、この戦いが始まった時の持ち主だと」

ハリーは不死鳥の杖をぴくぴくと動かしした。

「僕は武装解除で、セレネの杖を弾き飛ばした。

もちろん、その後に殺されたけど、彼女が殺したのは僕じゃない。僕の中のお前

だ」

ハリーは囁くように言った。

「つまり、お前の手にあるその杖が、最後の所有者が武装解除されたあと、再び奪い返せなかったことを知っていれば、ニワトコの杖の真の所有者は、僕だ」

ハリーが最後の言葉を告げると同時に、東の空に眩しい太陽の先端が顔を出した。

光は同時に、ハリーたちの顔に当たった。ヴォルデモートの顔が、突然ぼやけた炎のようになった。ヴォルデモートの甲高い叫びを聞くと同時に、ハリーは不死鳥の尾羽の杖で狙いを定め、一心込めて叫んでいた。

「アバダケダブラ！」

「エクスペリアームス!!」

大砲のような音と共に、二人を囲む円の真ん中に黄金の炎が噴き出し、二つの呪文が衝突した点を印した。緑の閃光と赤い閃光は拮抗状態を保っている。だが、やはり実際の能力値は、ハリーよりヴォルデモートの方が強いのだろう。ヴォルデモートが圧しだしている。ところが、それは最初の一瞬だけで、すぐにニワトコの

杖は武装解除に負けて、くるくると回りながら本当の主人の元へ向かった。ハリーは空いている片手で、スニッチをキャッチするように杖を捕らえる。

ただ、やはり、ヴォルデモートは今世紀最恐にして最悪の魔法使いだ。

ニワトコの杖が手から逃れて宙を舞ったことに驚きながらも、すぐさま跳ね返ってきた死の呪いを避けて躲す。そして、ネビル・ロングボトム of 杖で反撃に打って出た。

「アバダケダブラ!!」

ネビルの杖から、先程とは比べ物にならないほどの緑の閃光が噴射される。ニワトコの杖が放った閃光が刺繍糸だとすれば、今度の閃光はジェット噴射だ。

なにしろ、所有者になりえなかった杖ではなく、ネビルの杖は先ほど奪ったばかりの杖だ。ヴォルデモートの真の威力を発揮している。ハリーはニワトコの杖ではなく、不死鳥の尾羽の杖で立ち向かおうとする。

「エクスペリアームス！」

ハリーは武装解除呪文を放つ。

ヴォルデモートと同じ呪文は使いたくない。その思い一心で放った魔法は、轟音

と共に迫りくる激しい緑の閃光に押し負けそうになる。ハリーは齒を噛みしめ、賢明に耐えるが、少しずつ、しかし、確実に、死の呪いが迫ってくる。ヴォルデモートが底冷えするような笑い声を上げ、ハリーが死ぬ様を楽しみにしているようだ。た。

「ハリー!!」

「負けるな、ハリー!! くっそ、この壁!!」

ハーマイオニーとロンたちの声が聞こえる。

自分が死んだら、次は彼らの番だ。

「僕は……もう、誰も死なせない!!!!」

ハリーは全身全霊の力を込めて叫んだ。

空高く響き渡った叫びは、木々まで揺らす。武装解除の呪文の威力が高まり、死の呪いを押し返し始めた。

「それはそれは、良い心がけだ。

だが、俺様は殺せない。俺様はお前を殺し、お前の味方となる者をすべて殺す!! これで、終わりだ! ハリー・ポッター!!」

「……いいえ、終わりではないわ」

空から一閃。

夜空に残る星座から放たれた矢が発射されるように、黒髪の少女がハリーとヴォルデモートの合間を分つ。

彼女の手にしたナイフで緑の光が消失し、圧しとどめる存在を失った武装解除の閃光がまっすぐヴォルデモートを貫いた。

ヴォルデモートは再び迫りくる閃光を防ごうとした。

まだ、彼にはイチイの木の杖が残っている。兄弟羽の杖は互いに攻撃することはできないが、盾で防ぐことくらいはできる。その間に、あそこで立ち往生している者たちから杖を奪えばいいと考えていた。

「この程度……ッ!？」

ところが、ここでヴォルデモートの動きが止まる。

ぴたりと、地面に縫い繋がれたように停止する。身体を動かしたくても、指先一つ動かすことが出来ない。ハリーの放った武装解除の呪文は、ヴォルデモートの胸元にまっすぐ命中した。ネビルの杖が弾き飛び、ヴォルデモートは声にならない悲

鳴を上げた。

ヴォルデモート卿の身体は、すでに壊れ切っていた。

命を繋ぐ分霊箱はすべて破壊された。その半数が「直死の魔眼」で破壊された。それは、たとえ大昔に本体と別れたものとはいえ、同一の存在だ。直死で切られた魂の崩壊は、そのまま本体まで辿り着く。

繰り返す度、5つ。

5度までの魂の崩壊に、塵程度まで切り刻まれた本体の魂が耐えられるはずがない。

そう。武装解除の一撃で、身体が崩壊してしまうほどに。

ヴォルデモートの真っ赤な目の、切れ目のように細い瞳孔が裏返った。

両腕を広げて仰け反り、爪先から、指先から、服までもが弱弱しく萎びながら塵となっていく。

こうして、ヴォルデモート卿は完全に消滅した。

ハリーたちを隔てた壁も取り払われ、まっさきにハーマイオニーが彼に抱き着いた。良かったとか嬉しいとかありきたりの言葉はなく、ただ全身で喜びと安堵を表

現していた。ハリーはハーマイオニーを抱き留め、続けてロンに手を向ける。しかし、ロンは喜びではなく、困惑と申し訳なさが入り混じった表情を浮かべていた。

「あの……ゴント、僕……」

ロンが何か言おうと口を開く。

だが、最後まで言わせないと言わんばかりに、セレネは話し始めた。

「ま、誰にでも間違いはあるものですよ」

黒髪の少女はナイフをポケットにしまった。

「私も……逆の立場なら、同じ行動をとっていたかもしれませんし」

少女は静かに答えると、傍にいた少年を連れて去ろうとした。

その背中に、ハーマイオニーが声をかける。

「……セレネ、1つ教えて」

ハリーから手を放し、不思議そうな目を向けてくる。

「どうやって、ここまで戻ってこれたの？」

彼女の疑問は尤もだった。

セレネが落とされたのは、底も見えない峡谷だ。

普通に考えれば、死ぬ。死ななかったとしても、すぐに戦線に復帰できるわけではない。セレネは三人を振り返り

「さあ、どうしてでしょう？」

とだけ告げると、悪戯っぽく笑った。

彼女たちには、秘密を告げたくなかった。

セレネは間違いなく、橋から落下した。

命綱もなく、箒もない。飛行魔法を使えるだけの魔力もない。

普通に考えれば死んでいたし、死を覚悟した。

だけど……

「……でも、やっぱり、私……」

その言葉を最後に、セレネは瞼を閉じる。

人を殺しておきながら、皆と未来を生きたいと願ってしまった。

だから、最後に力を振り絞って、自身に変身呪文をかけた。

身体が一気に縮まり、物言わぬ羽になっていくのが分かる。

変身術は、身体の構造を変える魔法だ。

羽に変身すれば、魔力が切れるまで一生羽のまま。

もう二度と、目覚めなくなるかもしれない。

変身が解けず、ただの羽に成り果てるかもしれない。逆に、途中で魔力が切れて、

結局はそのまま落下することになるかもしれない。

ああ、でもそれでも構わない。

セレネは、我儘にもまだ生を手放したくないと思ってしまった。

小さくて、軽い羽は、風に乗って前後に揺れながら、ふわりふわりと落ちていく。

そして、再び瞼を開けた時、セレネは小川に半身浸かっていた。

雪解け水を含んだ小川は、足の先まで凍り付きそうなほど冷え切っている。その冷たさが、セレネにまだ生きているという実感を与えていた。

そう、生きている。

それは泣きたくなるほど嬉しい。しかしながら、指一本すらも動かすことができない。杖を握っていたところで、魔力はからっからなのだから、救出を求めることが出来ない。否、むしろ、助けてくれる人などいるのだろうか。皆の前でハリーを殺し、約束を破っておきながら、それを求めるのは、随分と我儘なのではないか。

モリーに負けたのは意外だったけど、納得はしていた。

これは罰なのだと。

元々、感情で行動する者の気持ちが理解できなかったが、理解しようとしなかった。それが、たぶん敗因なのだ。

空は蒼い。

まだ端っこのところが深い藍色に染まり、星の名残が残っていたが、心地よい蒼さだ。

戦いは終わったのか。

それとも、まだ再開されていないのか。

谷底は、どこまでも、どこまでも静かだった。

「……ま、これも定め、かな」

かすれた声で呟いてみる。

誰も拾ってくれない、最期の声だと感じながら。

「馬鹿、何が定めだ。勝手に悟るな」

セレネは突然、微睡みから覚めたような気持ちになった。

見知らぬ人を見るかのような目で、こちらに近づいてくる男を視認する。ローブはボロボロで、腕は鮮やかな切り傷だらけだった。

「約束、破りやがって」

「どうして……?」

「ん? そりゃ、一蓮托生だろ?」

平然と答えながら、右手で握っていたおんぼろ箒を壁に立てかけた。

セレネは苦笑いを浮かべる。

「……なんだ、飛行魔法じゃないんだ」

「あんな複雑な魔法を使えるのは、お前くらいだろ」

彼はそう言いながら、セレネを川から引きずり出した。セレネに体力を回復する魔法薬を手渡すと、大きくため息をついた。

「……はあ。やっぱり俺が見てないと、何をしでかすか分かったもんじゃない」

「……すみません」

セレネは魔法薬を飲みながら謝った。

身体中に魔力が行き渡っていくのが分かる。ほかほかと内側から温まっていくな感じがした。

それなのに、心は冷え切っている。

自分は約束を破った。絶対に許されない。それなのに、なぜ彼は来てくれたのだろうか。どうして、助けてくれるのだろうか。それが、セレネには分からなかった。

「……許してくれるんですか？」

「まさか!!」

セレネの問いかけに、即答で返される。

「一生許すわけないだろ!! まったく……金輪際、こんなことがないように、俺が一生、お前を傍で見張ってやる。いいな!」

「……そうですか」

「き、危険なことがあっても、絶対に守ってやるし、最期まで付き合ってやる!」

「……ありがとうございます」

「………それだけかよ」

「他に何か?」

「……いや、何でもない」

どこかがっかりしたような彼の言葉を感じながら、セレネは空を見上げる。

甲高い笑い声が谷底に響きながら落ちてくる。ヴォルデモート卿の嘲笑う声だ。

セレネはそれを聞いていると、身体がむず痒くなっていくのを感じた。

「まさか、戦いに戻るつもりか?」

呆れたような問いかけに、セレネは頷いて返した。

人を殺しておきながら、こんなことを言うのは非常に虫の良い話である。

「だけど、やっぱり……ヴォルデモートはこの手で仕留めたい」

セレネは、拳を握りしめる。

今更戻ったところで遅いかもしれないし、両方の陣営から叩かれるかもしれない。それでも、城まで戻りたかった。

「もう魔法は扱えないだろ。走るのも無理じゃないか？」

セオドールの言う通りだった。

魔法薬で回復したとはいえ、それは一時的なモノ。すぐに力尽きてしまうから、せめて半日ほど身体を休ませてからでないと、戦線に復帰しても足手まといだ。

そのことは百も承知だったが、身体が、心が、ヴォルデモートを倒したいと訴えてやまない。そう伝えると、彼は心底疲れ果てたように、肩を落とした。

「……そうだよな、お前ってそういう奴だよな」

そう言いながら、彼はポケットから何かを取り出す。

「それに付き合ってやる俺も、十分どうかしてるけど」

彼は取り出した金色の物体を見せつけるように掲げた。

とても綺麗な金の砂時計だった。首飾りのように金の輪がかかり、砂時計がゆらゆら前後に揺れている。セレネは記憶が刺激され、驚愕に目を見張った。

「それって……逆転時計ですか!？」

「逆転時計以外の何物でもないだろ。」

これで、半日前まで戻る。こっそり身体を休めて、お前が落下したあたりから再スタートだ。目くらましをかけておけば、攻め込むタイミングは自由に選べる」

「それは分かりましたけど、でも、どうして、逆転時計が……？」

セレネが尋ねると、彼の耳が少し赤くなった。

「……魔法省に侵入した時、欲しがってただろ？　なんとかってライブに行きたいって」

「ライブエイドのことですか？」

確かに、そんなことを言った気がする。

「その……まあ、あれだ。1つくらい無断で借りても、死喰い人のせいでできるなって思ってたさ。」

ただ、これは年単位じゃなくて、戻るのは時間単位だ。そこを年単位にできない

か試行錯誤していたわけだが……こんなところで役に立つとはな」

「……あなた……泥棒ですよ、それ」

「グリンデルバルドを脱獄させた奴に言われたくない。」

問題は、どこで身体を休めるかだ」

「それは、秘密の部屋でいいでしょう」

セレネは即決する。

「いや、過去の俺たちと鉢合わせするんじゃないか？」

「隅の方に隠れていれば問題ありませんよ。アルケミーも協力してくれるはずですよ」

その時、セレネは思い出した。

数時間前、アルケミーと再会した時、あの大蛇は「久しぶり」とか「ずっとお待ちしていました」という懐かしむ単語を一切口にしていない。もしかしたら、あの時、すでに自分と再会し、口止めをしていたのではないだろうか。

そして、セレネたちは時を逆転させると、ずっと秘密の部屋に隠れていた。

せっかくなので、自分たちがやってきたときに、すぐ目当ての日記が分かるよう

に順番を入れ替える。それ以外は、特にやることはなかった。

ヴォルデモートが休戦を告げるのと同時に、目くらましで外に出る。

その頃には、もうすっかり身体の調子は戻り始めていた。

セレネがスネイプと戦う様子を陰から確認する。スネイプが勢いよく城の壁に激突しそうだったので、ついクツション呪文で衝撃を緩和させてしまったが、他は特に介入しなかった。

セレネがハリーを殺し、ウィーズリー一家がセレネを攻撃する。

セレネは自分が橋から落下し、すぐさま、セオドルが箒に乗って後を追いかける様子を眺める。

その後、ハリーが復活した様子を見たときは、喜びよりも胸がいっぱいになり涙が出そうになった。

無事、ヴォルデモートの魂だけを殺せたのだと安心する。

だが、友人を殺そうとしたことには変わりがない。

「……私は空からハリーを見守ります。あなたは、彼の後ろについてください」

セレネは囁くと飛行呪文を使い、ハリーとヴォルデモートを上空から追いかけた。

そして、ハリーが殺されそうになった瞬間、セレネは飛び出した。

死の呪いを一閃して、ハリーに勝機をもたらすために。

「でも、良かったのか？ 勝ちを譲って」

セレネが橋を渡っていると、セオドルが追いかけてくる。

戦いは既に勝利で終わり、城の中はやんややんやと喜びの渦に包まれていた。親衛隊の生徒たちはセレネの無事と無実を喜び、一緒に祝おうと誘ってくれたのだが、セレネは断り、城の外に出てきたのである。

「お前なら、もっとあっさり倒せたんじゃないか？」

「そうかもしれないけど……あれでいいのです」

セレネはぐっと伸びをしなから答える。

確かに、隠れていたのだから、後ろからヴォルデモートの死を切り殺すこともで

きた。だがしかし、それをしてしまうのは反則のように感じた。

ハリーは真剣にヴォルデモートを殺そうとしていた。

稲妻のごとき視線でヴォルデモートを睨み付け、実力差を理解しながらも、自身の考えを揺るぎなく抱いて立ち向かっていく姿は、セレネには眩しく輝いて見えた。

こちらから手を出す時は、彼が失敗した時、もしくは失敗しそうな時。

一度は本当に殺そうと覚悟し、実際に殺してしまった相手に対する償いという気持ちもあったのかもしれない。

「これから、どこに行くんだ？」

「城に戻っても、居心地が悪いでしょうから……家に帰りますか」

紅茶を飲みながら、お菓子を食べたい。

一人ではなく、彼と一緒に。チャリティも囲んでいいし、グリンドルバルドはおまけだ。そこまで考えて、ふと……足を止める。

「あ、もちろん、私が帰るのは私の自宅ですけど」

ヴォルデモートが倒れた以上、彼まで隠れ住む必要はなくなった。

つまり、セレネの家に来る必要性もなくなる。

彼がいることを自然に感じていたが、普通に考えれば自然ではない。彼には彼の家があるのだ。戦いが終わった以上、彼は彼の家に帰るのが道理だ。

けれども、彼は断らない気がした。

だが、同意は貰っておきたい。そんな想いを込めて、セレネはいつかのように、くると振り返る。腕を後ろに組んで、汚れた彼の顔を見上げ、口元に微笑を浮かばせてみせる。

「来ますよね？」

「当たり前だろ」

違うのは、彼がはにかんでいないこと。

当然のように頷いている。むしろ、わざわざ何故聞いてきたのか疑問に思っているようだった。セレネはこてんと首を横に傾ける。

「……照れないのですか？」

「何を今さら。」

それに、言っただろうが。俺が一生、お前を見張ってやるって。もう二度と、見失うものか」

「はぁ……そうですか」

見張ってやるとは、なんとも無粋な言葉である。

セレネは彼に背を向けると、後ろで手を組んだまま再び足を動かした。見張られなくても、別に一緒にいるつもりなのに。

そう考えた瞬間、はたと……変なことに気付いてしまう。

一生見張ってやるとか、危険なことから守ってやるとか、最期まで付き合ってやるとか。

その言葉は、まるで……

「まさか、プロポーズのつもり？」

彼に背を向けたまま、冗談っぽく言ってみる。

返答はない。あとをついてくる気配もない。セレネが顔を少しだけ後ろに向けると、熱湯で茹で過ぎたみたいに顔全体を赤らめている。顔一面から、湯気が立ち昇りそうだ。

「……そうですか」

セレネはそれだけ言うと、再び前を向いて、今度は少し気持ち早足で歩き始める。

「お、おい！ それだけか!? 返事は!？」

「さあ、なんのことでしょう?」

セレネは素知らぬ声で答える。

振り返るわけにはいかなかったし、正直、自分の顔を見られたくない。早くホグワーツ城の周囲に張り巡らされた結界を抜け、姿くらましをしてしまいたかった。

「……」

朝陽に照らされた道を進む。

瓦礫も残骸も死骸もすべて、夜の名残を照らしている。

数日以内には、ここも綺麗に清掃されてしまう。

それこそ、デルフィーニがホグワーツに入学する頃には戦いの傷は過去のものとなり、それこそ歴史になっているかもしれない。

これまで、ヴォルデモートに復讐するために生きてきた。

これからは、大好きで大切な人たちと未来を紡いでいく。

新世界で自分が何をしていけばいいのか、正直なところ霞よりぼんやりとしていて、まだよく分からない。

だけど、未来を考えることが出来る。

それはきっと、とても素晴らしいことなのだ。

セレネは照れながら微笑んだ。

先ほどより、ティースプーン一杯ほど深い笑みで。

次回「19年後」

7月26日0時更新予定です。

セレネの物語は残り2話。ちょっぴり寂しい。

99話 19年後

「連鎖反応」という言葉がある。

悪が滅んでも、その滅びをきっかけに、また別の悪が目覚めることがある。

ヴォルデモートはハリー・ポッターに敗れ、この世から消え去った。

しかし、完全に消え去ったわけではない。

ハリー・ポッターの放った魔法の威力により、ヴォルデモート卿の身体を粉碎した。そう、粉碎だ。粉碎ということは、欠片や断片が散りばめられたことに他ならない。

つまり、欠片や断片を寄せ集め、そこに知性を与えることができれば、ヴォルデモート卿は復活してしまう。

あれから、19年。

ヴォルデモート卿の信者が散りばめられた膨大な欠片を繋ぎ止め、拾い集め、かき集め、ついに一個の人格の修復に成功した。さながらそれは、ヴォルデモートの二代目と言っても相応しい。

そして、二代目は遂行する。

ヴォルデモートの目的の果たせなかった目的を。

マグル生まれの排除を、不老不死を、世界で唯一最強の悪の魔法使いになることを！

ハリーたちは疲弊しきっていた。

数か月にわたる逃亡生活や悪と向かい合った戦闘の傷は、心身ともに簡単に癒えるものではないのだ。

だから、彼女は立ち向かった。

彼女だけが、二代目の悪に魔法の杖を向ける。

「二代目？ 笑わせますね。所詮は寄せ集めに過ぎませんよ」

セレネ・ゴーストは不敵な笑みを浮かべた。

「――■■■■ッ!!」

二代目のヴォルデモートは黒いマントを被り、蛇のような赤い双眸をセレネに向けた。その口から出るのは獣のような咆哮だ。もはや、言語にすらなっていない。だが、セレネが敵対心を持っていることだけは、薄い脳みそで理解したのだろう。

二代目は轟くような声と共に、骨のような杖から緑の閃光が連続して放った。

「遅いっ！」

セレネは華麗に避けると、空高く飛び上がった。

くるくると手の中で魔法の杖を回すと、ピンクの杖に向かって語りかけた。

「行きますよ、ルビー！」

「はいはい、セレネさんは杖使いが荒いですねー」

二代目といっても、所詮は寄せ集め。

セレネからすれば、初代と比べ物にならないほど雑魚だ。杖に流れ込む魔力の奔流を強く感じながら、二代目に狙いを定める。

「『多元重奏飽和砲撃——クウィンテットフォイア——ッ！』」

魔法の杖から放たれた壮大な閃光。それは、まさに星の光にも匹敵する殲滅力を誇る。誇る。

初代ならともかく、継ぎ接ぎだらけの二代目にはひとたまりもない。二代目は声すら上げることなく、光の奔流に巻き込まれ、完全に消滅した。

「……これで、平和が戻りましたね」

セレネはゆっくりと地面に降りる。

最後の敵にしては味気のなく、倒しがいのない相手だった。

「さすがです、セレネさんー！　とっても魔法少女らしかったですよ！」

「不本意ですが、長年やってきていますから」

セレネは魔法の杖——マジカルルビーを見下すと、少しだけ目尻を緩めた。

「でも、そろそろ引退を考えています」

「またまたー、セレネさんは若々しいですよ。本当、10代の頃と容姿がまったく変わっていないんですから！　背も胸も！」

「胸は余計です。」

「けど、もう敵はいませんね。世界は平和になったんだもの」

セレネは寂しげにそう告げると、夕日を眺めた。

初代ヴォルデモートも、二代目も倒した。イギリス魔法世界に巨大な悪の影は残っていない。

世界は、どこまでも平和だった。

「大変です、セレネ!!」

黒塗りのメルセデスベンツがセレネの真横で急停車する。

窓から顔を乗り出した青年、ジャスティンは酷く青ざめていた。

「は、ハイドパークで事件が……とにかく、来てください!!」

セレネは彼の運転する車に飛び乗る。

ハイドパークに近づくにつれ、魔法が花火のように打ちあがっているのが見えた。セレネは厳しい表情で窓を開け放つと

「ありがとうございます、ジャスティン。先に行きます!」

「気を付けて、セレネ!」

セレネはジャスティンの言葉を背中ではけると、窓から外に飛び出した。身体強化を発動させ、そのままハイドパークまで一気に飛ぶ。

「これは……!?!」

緑豊かな静かな公園、ハイドパークに闇払いたちが伏せていた。

セレネは一人に駆け寄り、容体を確認する。生きてはいるし、外傷は見当たらないので、よほど強力な睡眠魔法を受けたのだろう。皆がすっかり眠りに落ちており、意識のある者は誰もいなかった。

「いったい、誰がこんなことを……？」

「ようやく来たわね、プリズマ☆セレネ！ 戦いは終わってないわよ！」

「誰ッ!？」

セレネが弾かれたように顔を上げる。

そこには四人の少女の姿があった。

赤い猫耳少女、モーニングスターを振り回す銀髪少女、和服姿の狐耳少女、そして、金髪赤眼の白い少女だ。

「愛と正義の別世界魔法少女、カレイドルビー！」

「慈愛と平和の虐待魔法少女、マジカルカレン！」

「陰謀と調略の超銀河系天才魔法少女、マジカルアンバー！」

「そして、白き月姫、ファンタズムーン！」

四人はそれぞれ名乗りと決めポーズとると、自身の武器を握りしめ戦闘体制に移行する。

「「「いざ、魔法少女の雌雄を決するとき！」「」」

「……っは、冗談じゃありませんよ」

セレネはそう言いながらも、どこか嬉しそうにルビーを掲げた。

「正義と平和の魔法少女、プリズマ☆セレネに倒せない敵はありません!!」

こうして、魔法少女の頂点を決める戦いが巻き起こる。

セレネの運命は!? そして、どの魔法少女が最も優れているのか!?

五人の魔法が激突し——……

「——ッは!?!」

物凄い勢いで跳ね起きる。

肩で息をしながら、夢の残滓を思い返してみる。とても悍ましい夢を見ていた。

「い、いまのは……一体……」

頭を抱えていると、部屋の扉が開かれた。

「朝食、食べないつもりですか？」

これも先ほど見たばかりの悪夢の影響だろうか。

部屋に入ってきた人物を見て、つい尋ねてしまう。

「ねえ、お母さん。魔法少女になったことある？」

「なに言ってるの。早く支度しなさい、デルフィー」

セレネは飽きたように言うのと、部屋を去ってしまった。

デルフィーニは頭を掻きながら窓の外に目を向ける。木の葉が真夏の日差しを浴びて活き活きと輝いていた。小鳥がさえずりや義妹の声が聞こえてくる。

まさに、平和そのものだ。

デルフィーニはベッドから起き上がると

「……ま、二代目ヴォルデモートとかありえないよね。ナンセンスだわ」と呟いた。

義母が魔法少女として恥ずかしい衣装で飛び回ると同じくらい、ヴォルデモー

トの二代目なんて現実的にありえない。

デルフィーニは、それっきり夢のことは忘れることにした。

なぜなら、今日はとっても大切な日。

9月1日。

義妹のリザがホグワーツに入学する日である。

デルフィーニは昨年度までホグワーツに在籍していたので、トランクも準備せず、見送りにだけ行くのは不思議な感じがした。服装を整え、少し癖のある黒い髪を緑のリボンで高く結びあげる。

そう、緑。

デルフィーニは、緑こそが自分に最も似合っている色だと強く感じていた。

義両親ともスリザリン生で、本当の両親であるロドルファスとベラトリックス・レストレンジもスリザリン生だと聞く。それに加え、自分自身もスリザリン生として7年間過ごしてきた。スリザリンカラーである緑色に愛着があるのは当然で、次

点で縁を縁取る銀色が好きだ。

スリザリンに偏見がある人がたくさんいることも知っているし、レストレンジ家に恨みがある人もたくさん見てきた。

だけど、デルフィーニはスリザリン寮であることを誇りに思っていた。

「デルフィーニ！」

「今行きます！」

デルフィーニはセレネの呼ぶ声に應えると、すたすたと階段を下りた。

食卓には自分用の朝食だけが残されていた。ところが、一人で食べるのは可哀そうだと思ったのだろうか。祖父のクイールがゆったりと腰を下ろし、のんびりと食後のコーヒーを飲んでいた。彼は正確には祖父ではなく、義母の義父である。本来は、義義祖父と呼ぶのが的確なのかもしれない。

だが、本人たつての希望で、彼のことは「おじいちゃん」と呼んでいた。

「おじいちゃんは、リザの見送りに行かないの？」

デルフィーニが尋ねると、クイールはにっこりと微笑んだ。

「あまり大勢で行くと大変だからね。プラットホームは狭かった記憶があるし……

それよりも、デルフィーは行って大丈夫なのかい？」

「平気よ。今日は講義がないから」

デルフィーニはパンを千切りながら祖父の問いかけに答えた。

ホグワーツ卒業後、デルフィーニは時計塔に進学した。今はルーン文字と魔法人形について学んでいる。同期で時計塔に進学したのは自分だけなので少し寂しいが、ホグワーツ時代とは異なる新たな発見の連続で、勉強が心から楽しくて仕方がない。

それに、ホグワーツと違って、夜には家に帰って来ることができる。義母は海外で仕事をしているので滅多に顔を合わせることができないが、義父や祖父が温かな料理と共に待っていてくれた。

だから、デルフィーニが寂しさを感じる時間はとても短い。

「ごちそうさま」

デルフィーニは素早く食事を詰め込むと、軽く杖を振った。皿が自然と浮き上がり、流しで洗浄され、食器の乾燥機へと移動する。祖父は「ベルトコンベアーみたいだ」と例えるが、ベルトコンベアーが何なのかは知らないし、今は考えている暇

が惜しい。

リザが出発する時間が、刻一刻と近づいてきていた。

さっと歯を磨き、化粧のノリを確認すると、いそいで玄関に向かう。

そこには、既に先客がいた。

本日の主役たる女の子が、ちょこんとトランクの上に座っている。

「あれ？ どうしたの、リザ？」

リザは青い眼を輝かせながら、足をふらふらと揺らしている。デルフィーニと同じ黒髪だったが、彼女の艶やかな黒髪はまっすぐ背まで伸びている。デルフィーニは結ばないと髪が爆発しそうになるので、彼女みたいな髪質が羨ましい。

そんなリザはいつも後ろで結わいているのだが、今日に限って髪をおろしていた。

「珍しいわね。ポニーテールにしないの？」

「ホグワーツデビュース、デルフィーニ姉さん」

義妹は、どこかかしこまった口調で答えた。

「ホグワーツ、デビュース？」

「リザは入学を機に、髪型を変えることにしました。姉さんの髪型を真似ないと決

めたのです」

リザは足をふらふらさせるのを止め、つんと突き放したような口調で言った。
デルフィーニは義妹の心境の変化に少し驚いたが、すぐに理由を悟った。

「……デビュールというか、一人で髪を結べないんじゃないの？」

「んなつ！ そんなことは、まったく、断じてありません！」

リザは朱に染まった頬を隠すように、ぷいっと明後日の方向に視線を向ける。その時点で、その通りだと公言したのも同然だ。デルフィーニは義妹の姿にくすりと微笑む。少し悪戯心が沸き上がってきた。

「そうねー、まさか11歳にもなって、お父さんに髪を結んでもらっているわけないものね」

「そういうことです。リザは髪を結べないのではなくて、これはイメチェンという奴です」

「でも、大丈夫？ 女の子は髪を結べないと、箒に乗せてもらえないのよ？」

「へえっ!？」

デルフィーニがわざと困ったような口調で言うと、リザが動揺して顔を青ざめさ

せた。デルフィーニは心の中で笑いながら、だけどそれを表情に出さず、ますます深刻そうな声色で話し続ける。

「髪が長いと落下して死ぬ確率が高くなるの。だから、女の子は全員、安全のために髪を結んでから飛ぶのよ。飛行術のフーチ先生が口酸っぱく言ってたわ」

「そ、そんな……」

「ほら、お母さんだって髪が短いでしょ？ あれは空を飛ぶ時に、邪魔にならな
いためのな」

「おい、嘘を教えるな」

デルフィーニが半分泣き始めた義妹をからかっていると、疲れたような声をかけられる。黒い眼に長身の義父が、呆れたように髪を掻きながら近づいてきた。眉の上に薄ら残る傷が特徴的な男性だ。

「髪が長いと落下する可能性があるのは事実だ。だがな、髪が箒に絡まったり、前が見えなくなったりしない限り問題ない。そこまで教えないと駄目だろ」

「……ごめんなさい」

どうやら少しかい過ぎたらしい。

デルフィーニは少し舌を出しながら謝罪をする。リザは心から安心したように息を吐くと、とんととトランクから降りた。

「まったく、デルフィーニ姉さんには困ったものです。リザは危うく騙されるところでした。姉さんの言うことは信じられません！」

「本当にごめんね。お詫びに今度、有名店の新作カップケーキを送ってあげるから」
「……ま、まあいいでしょう。それで手を打ちますが、今回のことは決して忘れませんからね！」

リザの怒っていた空気は急速に和らいでいく。態度こそ怒ったように振る舞っているが、見えない尻尾をぶんぶん振っているのが丸わかりである。あと数分も経てば怒っていたことを忘れ、いつも通り嬉しそうな顔を見せてくるはずである。

デルフィーニは「この子、本当にちよろいな」と再確認した。ちよろくて素直な好意を見せてくる彼女は、やっぱり可愛い。デルフィーニはリザと血は繋がっていないが、赤子の頃から接しているのです、本当の妹のように想っていた。

「お前たちなあ……ほら、行くぞ」

義父が大きいため息を吐く音が聞こえてくる。振り返ってみれば、義父の後ろか

ら義母が現れるのが見えた。自分を起こしに來た時とは異なり、マグルのスーツを着こなしている。デルフィーニは少し首を傾げた。

「お母さんは、これから仕事ですか？」

「まあそうですね。リザを送り終えたら、南米に飛ばないと……はあ、一昨日までインドに出張だったのに」

セレネはぼやいていた。

義母のセレネは魔法省に勤めていた時期もあったが、今はロンドン郊外のブロッコリー農場で働いている。

よくブロッコリーの買い付けや品種の研究のため海外を飛び回っているが、実際のところ胡散臭さがむんむんだ。リザはセレネの話を真剣に受け止めているようだが、デルフィーニとしては「たかがブロッコリーの買い付けや研究で、一年のほどを海外で過ごすものなのか？」と問いただしたい。

この問いになると、いつも煙に巻かれてしまう。

だから実際には、たぶん人には軽々しく言えないような仕事をしているのだろう。ちなみに、義父のセオドールは仕事をしていない。

昔は義母と一緒に魔法省で働いていたらしいが、リザの出産を機に退職。もともと、義父は聖28族に名を連ねるノット家の現当主でもある。先祖代々伝わる土地の権利を所有しており、それを不動産会社を通して客に貸し付けて利益を得ている。正直、働かなくても収入があるわけだが、どうしても、義母を止めることはできなかったらしい。

とまあ、つまるところ、いつも家に居て、義母の尻に敷かれる。

義母の友人ジャスティンさんの方が、ずっとカッコいい。

彼はマグルの貿易会社の社長だし、博識だし、優しいし、物腰穏やかで紳士的だ。なぜ、セレネは彼と結婚しなかったのか、不思議で仕方ない。

ぐーたら親父より、ずっとずっと素敵な人なのに。

「デルフィーニ、なにか良からぬことを考えただろ？」

訂正。

ぐーたらだが、勘だけは人一倍鋭い。

あと怒ると怖い。ちょっとリザを驚かすつもりで悪戯を仕掛けようとしたら、義父の静止の魔眼で動きを止められ、説教されたことがある。義母も魔眼を持ってい

るが、デルフィーニにとって普段はいない義母よりも、義父の魔眼の方がよっぽど恐ろしかった。

魔眼、といえば、デルフィーニも少し変わった眼を持っている。

誰にも言えないし、話したところで信じてもらえない魔眼ではない。

セレネは「魔眼殺し」という眼鏡を勧めてきたが、いい年して母とお揃いなんて少し恥ずかしいので断った。事実、魔眼殺しなんてなくても、この眼を制御することが出来ている。

「デルフィーニ姉さん？」

リザが、青空のような澄んだ瞳を向けてくる。

デルフィーニはニッコリ微笑むと、彼女の手を握った。

ロンドンまでは一瞬だ。

「姿くらまし」で、一気にキングズクロス駅へ到着した。

キングズクロス駅は、いつも騒がしい。

フランスまで行ける国際線が開通してから、一段と人通りが多くなった気がする。

いまでも眼を疑いたくなるほど大勢のマグルたちが、とにかく忙しく歩き回っていた。最近では、スマホなる通信端末に目を落としながら小走りで進む人が多い。デルフィーニも、時計塔に進学してからスマホを使うようになったが、まだ歩きながら使う高等テクニクは難しく、マグルがどうして衝突しないのか不思議だった。

それに、こうしてマグルを横目で眺めていると、8年前。初めてホグワーツ特急に乗るため、ここを訪れた日のことを思い出す。

あの時、たまたま出会ったパーシバルおじさんが

『どうだい、レディ？ 君は、あの愚かなマグルたちを全員吹き飛ばしたくはないかね？』

と囁いてきたことを思い出す。

パーシバルおじさんは謎の多い人物で、義母からは蛇蝎のごとく嫌われているが、不思議な魔法道具をくれるし、大変高度な魔法を教えてくれる。ただ、たまに物騒なことを言いだすので、ちょっと油断できない人だ。

デルフィーニは、マグルは魔法族より多いと感じていたが、なにも全員吹き飛ば

したいとは思わない。それは闇の魔法使いの悪行であり、アズカバン行きの犯罪である。

ヴォルデモートでもあるまいし、そんな大犯罪は御免被る。

「デルフィー姉さん、一緒に行きませんか？」

ふと気が付けば、9番線のホームに到着していた。

リザがトランクを載せたカートを押しながら、袖を引っ張って来る。壁に突っ込むのが怖いのか、少し目が不安そうに陰っていた。

「もちろん、一緒に行こう」

デルフィーニはとびっきりの笑顔で答えた。

義父が「俺がリザと一緒に went 行ったかった」と言いたげな表情を浮かべているが、選ばれたのは自分である。デルフィーニは勝ち誇った笑顔を浮かべると、リザと一緒にカートを押しながら、だんだんと速度を上げた。壁に近づくと、リザは怯んだような顔をしたが、もちろん衝突することはない。

デルフィーニとリザは9と4分の3番線に現れた。

紅色のホグワーツ特急がもくもくと吐き出す濃い白煙で、あたりが少しボンヤリ

していた。その霞の中を誰だか見分けがつかないくらい大勢の人影が動き回っている。おしゃべりの声と重いトランクの擦れ合う音をくぐって、フクロウがホーホーと不機嫌そうに鳴いている。

デルフィーニとリザは後ろから両親が現れるのを待ってから、ホグワーツ特急の方へ歩き始めた。

もうこの汽車に乗ることはないのだと思うと、デルフィーニは寂しさと胸が縮むような感覚に陥った。

「リザ、きよろきよろしない。まっすぐ前を見なさい」

セレネがリザを注意する。義妹は、きよろきよろと誰かを探すように辺りを見渡していた。

「でも、お母さん——ッ、きゃっ！」

言わんことではない。

リザの押すカートが前の人にぶつかって、義妹は反動で転んでしまった。

「大丈夫ですか？」

義妹が立ち上がろうとする前に、ぶつかった青年が手を差し出してくる。見事な

金髪をした青年は王子様のような微笑みを浮かべ、義妹の手を取った。

「こ、こちらこそ、ごめんなさい。前を見ていませんでした」

「いや、僕が避ければよかったんだ……って、デルフィーじゃないか」

金髪の青年はデルフィーニを見ると少し驚いたように眉を上げた。

「そうか、この子が君の妹さんだね」

「エドモン、貴方はどうしてここにいるの？」

デルフィーニは自身の腰に手を当てると、胡散臭い目で元同級生を見た。

「僕は仕事だよ。上司の手伝いでビラ配り中」

エドモンはそう言いながらホームの端に視線を向けた。そこには赤毛で長身の男性が、声色高々に箒に関する規則について述べている。

「正直、箒に関する規制はそこまで厳格にはいらなと思うんだ。どれほど高級な箒であったとしても、杖が人を選ぶように、箒も乗り手を選ぶからね。

ところで、後ろにいるのが君の御両親？」

エドモンはそう言いながら、セレネたちに完璧な微笑みを向けた。彼は右手を心臓の辺りに置き、わずかに腰を曲げると口を開いた。

「エドモン・カローです。母が生前、大変世話になったと聞いております」

「……フローラの息子ですか！」

セレネが少し目を見開いた。

「はい。魔法省の魔法運輸部で働いています」

「なるほど。だから、パーシー・ウィーズリーの部下でここにいますね」

セレネが納得すると、エドモンは静かに頷いていた。

エドモンの生い立ちは、かなり複雑だ。

デルフィーニが知る限りだと、フローラ・カローとラダルファス・レストレンジの子としてフランスで育てられたが、生後間もなくして母を亡くし、父親に育てられたらしい。ところが、彼が10歳の時に、父親が死喰い人として逮捕され、以後は母方の実家であるカロー家に引き取られたそうだ。

つまり、彼とはレストレンジ家の血を引く親戚同士ということになる。

ただ親戚同士ということを意識したことは最初だけで、すぐに仲良くなり、今では同じスリザリン寮に属した友だち同士という関係だ。

それ以上でも、それ以下でもない。

「それでは、僕はこれで。仕事に戻らないといけなないので。デルフィー、また今度」
エドモンは軽く会釈をすると、赤毛の男の方へと姿を消した。

「デルフィー姉さま、随分とカッコいい人と友達なのですね」

「まあ、非の打ちどころのない人だけど……」

デルフィーニは言葉を濁しながら、リザの代わりにカートを押した。

相変わらず、駅のホームは多くの生徒や保護者で騒がしい。エドモンの上司による箒に関する演説なんて、誰も聞いていなかった。濃い蒸気の中で人が見えにくいというのもあるが、皆が楽しそうに話したり、家族と別れのハグを交わしたりしている。今すれ違ったばかりのレイブンクロー生なんて、女の子を口説き落とすので夢中のようなのだ。

「僕たちが出会ったのは、運命なんだ。この手を離したくない。いや、この手を離したらきつと災いが降りかかる！ さあ、一緒に運命について語り合うコンパトメントを選ぼうではないか！」

「手を離してください」

デルフィーニは、残念なレイブクロー生をしらっと見ながら通り過ぎる。

一応、顔を知った仲ではあるが、わざわざ話しかけるのも面倒だし、知り合いだと思われたくない。

デルフィーニたちがしばらく歩くと、霞の向こうに例の八人の姿が見えてきた。デルフィーニは彼らを避けようとリザを誘導するが、時すでに遅し。リザが彼らの姿を見た瞬間、大事そうに押していたカートを置き去りにして、思いつき駆けだした。

「アル様ーっ！」

リザは一人の少年に向かって勢いよく抱きついた。

「エリザベス!？」

「リザと呼んでください。リザはこの一年間、ずっとアル様に会いたかったです！」

アル様と呼ばれた黒髪の少年は戸惑いながら、彼女を引き離そうとする。しかし、リザは彼の腕にしがみついたまま離れようとしなない。

「ねえ、エリザベス。その……いい加減、アル様って呼ばないで欲しいな」

「いいえ、アル様。リザにとって、アル様は白馬に乗った王子様なのです。迷子のリザを助けてくれたあの時から……いいえ、理由なんて後付けなのです。あなたを一目見たあの瞬間から、ずっとずっとお慕いしています。だから、アル様なのです！」

「エリザベス、やめなさい！」

リザの暴走を止めたのは、セレネだった。セレネはリザの襟元をつかみ上げ、無理やり引き離す。リザが抵抗するように手足をばたつかせていたが、セレネには効果がない。

「まったく、はしたないでしょう。それに、困っているのが分かりませんか？」

セレネはほとほと困り果てた顔で、アルバスとその両親に頭を下げた。

「本当に申し訳ありません。特にアルバス、ごめんなさい。いつも娘が迷惑をかけて……」

「い、いえ。僕は別に迷惑なんかじゃ……いや、迷惑だけど、うん」

アルバスが歯切れの悪い答えをしていると、アルバスの父親がぷつと噴き出すのが分かった。

「……ハリー・ポッター？」

「いや、ごめん。セレネたちと似てないなと思ったんだ」

ハリー・ポッターはすまなそうに笑った。

他の人たち……ハリーの妻であるジニーとその息子のアルバスと娘のリリー。そして、ロンとハーマイオニー、その娘たちの全員が同じことを思っているらしい。これに関しては、デルフィー二も同感だ。

義両親とも比較的落着いており、感情を表に出すタイプではない。セオドールはともかく、セレネに至っては心を鎧で覆い固めていると思うほど、冷静沈着だ。義父と二人っきりの時、もしくは、よっぼどのことがない限り、その仮面を剥がそうとはしない。

それにもかかわらず、義妹のリザは無邪気で裏表がなく、感情表現が豊かである。あの義両親から産まれた子どもとは思えない。リザが自分と同じように血の繋がらないのではないかとさえ思ってしまうが、外見はセレネに瓜二つだし、彼女の腹から産まれたのは間違いなく事実であった。

なにしろ、デルフィー二はその瞬間に立ち会った。

あの時の光景は、きつと一生忘れない。デルフィーニがそんな郷愁を抱いている間にも、話が進んでいた。

「……ハリー・ポッター。あなたは、いつもそうですね。一言、多い」

セレネが心底呆れたような目で、ハリーを見据えている。

周りの人たちは何も言葉を返さなかった。

彼らの仲は複雑だ。

ロン、ジニー、ハーマイオニーとウィーズリー家に連なる者たちは、セレネに対して謝罪と後悔の念を抱いているらしい。セレネの方はウィーズリー家に対して興味はないが、ハリー・ポッターに対して負い目がある。

リザがアルバスに惚れこんでさえいなければ、関わりを全くもっていなかったはずだ。

「アル様。一緒に寮になるといいですね！」

「いや……僕、君とは違う寮がいい」

「安心してください。リザは、アル様の寮と同じ寮が良いと組み分け帽子に強く願いますから」

「リザ、何を考えているのよ」

ローズ・グレンジャー——ウィーズリーが、やれやれと首を振った。

「ノットのNとポッターのPだから、リザの方が早く組み分けされるに決まっているじゃない。まだ決まってもないのにお願いされたら、組み分け帽子も困るわ」

「た、確かに……！ では、いったいどうしたら……」

リザが真剣に悩み、ローズが付き合って打開策を考え、アルバスが疲れたように二人を見ている。デルフィーニは少し屈みこみ、アルバスの顔を覗き込んだ。

「リザは嫌い？」

「そ、そんなことはないけど……」

デルフィーニが話しかけると、アルバスの顔は真っ赤に染まった。

この少年が自分のことを好いているのは、なんとなく察しがついている。確かに、可愛らしく謙虚で控えめな性格は好感が持てた。だからといって、こちらが恋心を抱くわけではない。デルフィーニから見たアルバスは恋愛対象としてはあまりに幼く、弟のようにしか見えなかった。

それに、義妹が恋心を抱いている人物を横取りするような真似はしたくはない。

確実に義妹が泣く。大泣きする。

「ねえ、デルフィー。その……新入生全員に、ピーブズが腐った卵を投げつけてくるって本当？」

アルバスがデルフィーニにしか聞こえないくらい声を潜めて尋ねてきた。

まったくもって事実無根である。おそらく、彼の兄であるジェームズが弟にありとあらゆる怖い嘘話を吹き込んでいるのだろう。デルフィーニの口元は小さく弧を描いた。

「それは嘘。もちろん、ピーブズは誰かれ構わず悪戯を仕掛けてくるけど、自分を強く持てば大丈夫。

それでも、もしピーブズの被害が酷かったり……他にも困った時や辛いことがあったりしたときは、寮監や医務室助手のキアラさんに相談すれば、だいたい解決するわ。友だちに相談するということのも良い手よ」

「本当？」

「本当よ。私もそうだったもの。私の本当のお母さんが色んな人たちにさんざん迷惑をかけてたせいで、入学当初は誰もが私のことを避けていたわ。ま、それも当然

だけど……」

デルフィーニは1年次を思い出して、少し気持ちに影が差し込んできた。

上級生や同級生からは「嫌な子」「邪悪そのもので薄気味悪い」「レストレンジって名前を聞いただけで吐き気がする」なんて悪口のオンパレード。

本当の両親がした悪事を思えば納得はするが、やはりそんな両親であっても軽蔑されるのは良い気分ではない。どの生徒にも優しいと有名な薬草学のネビル・ロングボトム教授が余所余所しく接して来た時には、酷く虚しくて、心にぽっかり穴が空いたような気持ちになったものだ。

「でもね、みんなが私を無視したり避けたりしていたけど、全員ではなかった。寮監の先生やキアラさんが優しくしてくれて、ティディやエドモンと友達になれて、クイディッチを通じてビクトワールとも仲良くなれたわ。他にもたくさん友だちができた。」

死喰い人の娘でも、なんとかあったから、きっとアルバスも平気よ。今から怯えることはないわ」

「本当？」

「本当よ！ だから、どんと胸を張りなさい」

デルフィーニはそう言うのと、アルバスの背中を軽く叩いた。

アルバスは少しだけ自信を取り戻したような顔になると、ハリー・ポッターの方へ歩いて行った。丁度、アルバスの兄のジェームズ・ポッターが「デディ・ルーピンとビクトワール・ウィーズリーがキスをしているところを見た！」と駆け込んできたところで、場が少し盛り上がっている。

その喧騒から離れた場所で、セレネがリザに心構えを伝えていた。

セレネは「お行儀よくすること」「アルバスに抱きついたり迷惑をかけたたりしないこと」「はしたないことをしないこと」など熱心に繰り返し、リザが真剣に頷いていた。

リザは母親の注意を一身に受け止めているようだが、どこまで持つか分からない。デルフィーニは、ホグワーツ特急が発してから数分以内に、リザが母の教えを破る気がした。

そのうち、紅色の列車のドアが閉まり始め、汽笛がホームを震わせ始める。

リザがアルバスやローズと一緒に列車に飛び乗り、その後ろからジニーがドアを

閉めた。一番近くの車窓のあちこちから、生徒たちが身を乗り出していた。汽車の中から外からも、ずいぶん多くの顔がハリー・ポッターの方を振り向くように見えた。

「どうしてみんな、じろじろ見ているの？」

リザやローズと一緒に首を突き出していたアルバスが、他の生徒たちを見ながら聞いた。

「君が気にすることはない」

ロンが言った。

「僕のせいなんだよ。僕はとっても有名なんだ」

これには、アルバスも、ローズ、リザ、ヒューゴ、リリー、そして、デルフィーニも笑った。

汽車が動き出すと、デルフィーニは興奮で輝いている義妹の顔をじっと見ながら、大きく手を振った。自分が汽車に乗らず、義妹だけがホグワーツへ旅立つのは、なんだか生き別れになるような不思議な気持ちになったが、デルフィーニは微笑みながら手を振り続けた。

蒸気の最後の名残が、秋の空に消えていった。

「デルフィーニ」

デルフィーニがホグワーツの方を見つめていると、義母がそつと呟くように話しかけてきた。

ホームには、薄らホグワーツ特急の蒸気が残っていた。

セレネは、リザを寂しそうに見送った義娘に問いかける。

「デルフィーニ。いまは、幸せですか？」

「……はい！」

デルフィーニは突然の問いかけに少し驚いたような顔をした後、満面の笑顔で答えた。

嘘をついているように全く見えない、問答無用で幸せそのものの笑顔だ。セレネは義娘の笑顔を見ると頬を緩めた。

「……そうですか。良かった」

その笑顔を見ただけで、ここまで育ててきた甲斐があったものだ。

これなら近い将来、彼女に出生に関する秘密を明かしたとしても、人の道を踏み外すことはないだろう。

「お母さん？」

デルフィーニが不思議そうな顔をしている。セレネは彼女に微笑み返すと思いきり伸びをした。そして、かつて義父から貰った銀時計を開いてみる。

「南米行きの移動キーが発効するまで、まだ時間がありますね。それまで、ロンド

ンで時間を潰すとしますか」

「……お母さん、アマゾンへブロッコリーの買い付けに行くの？」

「極地で育つ品種の研究です」

さらっと嘘をついたが、まあ他に言い様がない。

魔法省大臣直轄秘密情報部の隊長をしているなんて、口が裂けても言えるわけがなかった。

闇払いがイギリス国内の治安を保ち、闇の魔法使いと戦う軍隊的な一面が強いのに対し、セレネが新設させた機関はイギリス魔法界の重要政策に関する情報の収集及び分析し、その他の調査に関する事務組織だ。

つまるところ、国内外の諜報や情報工作が仕事である。

主目的はヴォルデモートに次ぐ悪の存在を排除したり、各国魔法界の動向に関して情報を収集することだが、実際は、魔法の隠蔽工作が主だった。

21世紀になり、マグルの情報メディアは飛躍的に発展を遂げている。

魔法の存在が露見するまで、そう時間はかからないだろう。

マグルの魔法再発見が目前に迫っていることに対し、イギリス以外の諸国におけ

る魔法族全般的に危機意識が薄い。

100年前までなら問題にならなかった魔法が、現代では隠匿できないことが多いのだ。

セレネの主仕事は、国内外問わず魔法の再発見を遅らせること。

本当は他の国の魔法族の力も借りたいところだが、危機感が薄いのだから仕方ない。

その間に、イギリス魔法省大臣が各国に呼びかけて、注意意識を促す算段だ。

今回の仕事も、とある魔法生物を眠りから呼び起こそうと、猫系魔法族が接近中の情報を受けての出動だ。あの魔法生物が目覚めたら最後、マグルに魔法生物の存在が露見し、世界が混乱に包まれてしまう。

接触計画の阻止と魔法族の捕獲、最悪の場合、排除することになるのだが……移動キーの出発時刻は動かしようがないし、選りすぐりの先遣隊が派遣済みだ。

数時間程度、問題ない。

なお、この職につくにあたり、セオドルと一悶着あったわけだが、それは別の話だ。

「デルフィー、行きたい場所がありますか」

「私のか？」

「普段は色々とりざに譲っているでしょ？ 数時間しかありませんが、今日は貴

方の我儘を聞きたいんです」

セレネはまっすぐな気持ちを伝えた。

デルフィーニはぱちくりと瞬きをする、鼻の辺りまで赤く染めながら顔を背け、ほとんど聞き取れないくらい小さな声で

「一緒にご飯が食べたい、かも」

と囁いてきた。

セレネは表情を緩めた。

「ええ、行きましょう。お代はお父さんに全部払ってもらいましょうか」

セレネはデルフィーニと並んで歩きながら、ちらつとセオドルに視線を向けた。

「お、おい！ オレはマグルの金なんて持ってないぞ!？」

「立て替えますのでご安心を。デルフィー、せっかくだから高級ホテルのフレンチでも行きますか？」

「うーん、それもいいけど、ロックなレストランに行きたいな」

デルフィーニの舌は意外とジャンクである。

顔程もあるハンバーガーやステーキが大好きだ。

ついでにいうと、ロックが好きで、自宅にいるときはエレキギターを弾いている。

最近では、趣味の範囲で動画サイトにアップしているらしい。

貴族的な純血主義で凝り固まった本来の両親が知ったら嘆くだろうが、そんなこと知ったことではない。

デルフィーニはデルフィーニだ。

特殊な魔眼持ちでヴォルデモートとベラトリックスの子だとしても、関係ない。グリンデルバルドにそそのかされても悪に屈することなく、マグルに忌避意識を持つこともなく、純血主義に染まることもなく、まっすぐ育ってきた。

19年、セレネが育ててきた自慢の愛娘だ。

「では、そこに行きましょう。ですが、あの店は結構量が多いですよ」

「平気よ。食べたいものを片っ端から注文して、残った分は、お父さんに食べてもらえばいいわ」

「デルフィーニ！」

「ま、その通りですね。彼のおごりなので、派手に頼みましょうか」

「セレネまで！ オレは了承してないぞ!!」

セレネとデルフィーニは顔を見合わせて笑った。

セオドールの声を背中に聞きながら、セレネとデルフィーニは連れ添って歩いた。

あれから、19年。

セレネの世界は、どこまでも平和だった。

2014年の冬から5年。

ようやく「19年後」まで書き終わりました。

あの頃はそもそも「呪いの子」が世に出ていなかったもので、この次の話が本来の最終話となります。

実は、私、ロンドン旅行中です。

偶然「19年後」を更新する日をロンドンで迎えるのはミラクルと表現すべきか、なにかの導きと表現すべきなのか。とても不思議な感じです。

せっかくなので、キングズクロス駅の9と4分の3番線で更新したかったので、時差とか考えるのが大変なので、日本出立前に予約投稿しました。

……そこが、ちょっと悔しい

ロンドンのホテルで、この99話を読もうと思います。

100話は8月2日0時に更新します。

100話 月の娘の物語

ふと、目が覚めた。

広い夜だ。

どこまでも、どこまでも夜空が広がっている。

星は視えない。握り拳くらいの満月が煌々と輝き、星の瞬きを打ち消している。

セレネは草原に寝転がり、ぼんやりと満月の支配する空を眺めていた。

周りには誰もいない。

獣の息遣いもフクロウの鳴き声も聞こえない。風の草を揺らす音だけが、ただただ囁いていた。

一人になりたくて草原に寝転がったのはいいのだが、どうやら沈み込むように眠ってしまったていたらしい。幸か不幸か、目が覚めても寝ている間も一人ぼっちだった。寂しさは感じない。

普段は周りに誰かしらいるので、ちょっと新鮮。

たまの一人は心地よいものだ。

「……静かね」

セレネは月を見上げながら呟いた。

こうして寝転がっていると、一区切りついた気がする。

昨日までの死闘も、楽しかった喜びも、すべてが遠い幻のようだ。

ここで「人生をもう一度、最初からやり直せ」と、記憶も何も白紙の状態で過去に送り返されたとしたら、きつと違った偶然が積み重なって、別の人生を送っているかもしれない。

だから、セレネ・ゴーンの人生は偶然の上に成り立っている。

「……ああ、それはなんて……」

かけがえのない時だったのだろう。

セレネの呟いた声は風に浚われ、どこかへと消えていった。

怖いことや辛いことも多かった。だがしかし、それを相殺できるくらい、嬉し

かったことや幸せなことがある。故に、きっとこの後の人生も同じくらい辛くて怖いことがあるし、同じくらい嬉しくて幸せなことがある。

これからも、かけがえのない一瞬一瞬の偶然が積み重なっていくのだ。

そう思った瞬間だった。

「うぐっ——ッ!？」

心臓が一際高く鼓動を打ったかと思うと、急激に内側へと収縮する。熱した鉄の棒で心臓を抉られるような痛みに、セレネは呻き声を上げた。

「——ッくう」

セレネは心臓を掻きむしるように胸を抑える。強烈な痛みに背を反らせ、荒い息を吐く。次第に痛みは治まってきたが、代わりに背中まで汗が染みだしてきた。冷や汗が風に当たり、身体を芋虫のように更に縮ませる。

「はあ……はあ……」

浅い呼吸を繰り返し、痛みが引いていくのを待つ。

ここ数年、唐突に訪れる痛みについては誰にも話していない。

医者にかからなくても、その原因は予想できていた。

これまで、何発の磔呪いを受けてきたのか。

これまで、何発の失神呪文を受けてきたのか。

数えるのが億劫になるほど、この身に受けてきた。

磔呪いを受けても無理して立ち上がり、ベラトリックス・レストレンジに向かって走ったことは、今でも昨日のことのように覚えている。

自分はホムンクルスと人間の子で、フラスコの中で人工的に造られた生命体である。ただでさえ寿命が短いのに身体に鞭を打ち続けてきた。しかも、そのうえ直死の魔眼を通じて、ずっと死を視続けてきた。

おそらく、きつと——……あの夏の日、ダンブルドアが予見したほどは生きられない。

この後も、かけがえのない日は続く。

けれど、自分はどれだけの間、あと何回、その日々を味わえるのだろうか。

それを思うと、心に空っ風が吹き始める。背後から一步一步確実に迫ってくる闇に対し、柄にもなく足が震えそうになった。

セレネは、もう一度、瞼を閉じて、これからのことを考えないようにする。

視界が、暗闇に覆われていく。

「君。そんなところに寝ていると、危ないわよ？」

その刹那。

とても懐かしい声が聞こえた。

「……え？」

セレネは目を開けた。

「あなたは……？」

「こんな夜更けに、こんな草原で寝てるなんて。あなた、意外と暇なのね」

それなりに気配に敏感だったつもりだ。

「姿くらまし」の音すらなかった。

「あやうく、蹴り飛ばすところだったわよ？」

だけど、現に彼女はそこにいた。

大きなトランクを持ち、赤くて長い髪をたなびかせながら、少し不機嫌そうに

言った。

「それは……あなたに、私が蹴り飛ばされる……ということでしょうか？」

セレネが身体を半分起こしながら尋ねると、彼女は隣に腰を下ろした。

「決まってるじゃない。ここに居るのは、私と貴方だけなんだから。私以外、誰が居るっていうの？」

彼女は腕を組むと、自信たっぷりに言っていた。

そのまま、2人は何も言わなかった。ただ黙って月を眺めていた。

セレネは初めて会ったはずの女性が、どこか懐かしく感じた。

「どこかで会いましたか？」なんて、尋ねるのは野暮な気がした。懐かしく感じるのだから、きっと遠い昔、記憶にないどこかで出会ったのだ。暗示の魔法にかけられている気配もないし、なんとなくそれでいい気がした。

「ところで、さっきまで酷く苦しそうだったけど？」

「……見ていたのですか？」

「まあね。でも、貴方はいつも苦しそうね」

「あなたと会うときが、たまたまそうなだけですよ」

セレネの口は考えるよりも先に、静かな言葉を紡いでいた。

「昨日まで不眠不休で仕事をしていました。その無理が来たのかもしれない」

「あら奇遇ね。私も昨日まで、この辺りで仕事をしていたの」

仕事の内容は互いに語らなかった。

ただ、なんとなく同じ系統の仕事だという気がした。

「……これは、いつものことですので、気にしないでください」

セレネは胸から手を離し、無理やり口の端を上げた。

「もう慣れてますから」

「そう？」

女性は難しい顔をしている。

彼女の青い瞳は、一瞬、ダンブルドアを思い出した。どこまでも人を見透かすような青い瞳。だけど、この女性の方があの老人よりも感情的で、優しく、人間味があるような気がする。

そんな風に心の緊張を緩めていたからだろうか。

彼女の鋭い指摘に、セレネは言葉を失ってしまった。

「……あなた、自分が長くないってことに気付いている？　もって、あと数年でしようね」

女性は、はっきりと断定した。

「……」

衝撃で、何も答えることができない。

寿命の短さに驚いたわけではない。彼女が断定してきたことに驚いたのだ。あのダンブルドアですら寂しげに告げた言葉を、彼女はきっぱりと言い切る。そんなところも、彼女らしいと言えそうなのだろう。余命を断定されたこともそうだが、出会ったばかりの人なのに、彼女らしいと感じる自分にも、いささか驚いてしまった。

「まあ、それなりに分かっています」

「その割には落ち着いているわよね。貴方の實力なら、体に負担をかけない仕事にも就けるはずよ。」

もしかして、死が怖くないの？」

やはり、じろりと不機嫌そうな顔で視てくる。

セレネは小さく微笑みを浮かべた。

「それは、怖いですよ。死にたくないです」

幼い頃に観測した、強烈な「」のイメージは頭をこびりついて離れない。

けれど……

「でも私、先のことよりも今を優先したいんです」

この仕事以外の職に就くのは、非常に簡単なことだ。

なぜなら、つい先日、魔法大臣にハーマイオニー・グレンジャーが就任した。浅からぬ縁の彼女に頼めば、どんなポストにも就くことができるだろう。

しかしながら、今のセレネはしたくないと訴えていた。

「私は……」

瞼を閉じれば、いつも自分の大切な人たちが浮かんでくる。

昔は——……それこそ、ホグワーツに入学する前は、そんな人、誰もいなかった。自分さえ良ければそれでいい。

賢者の石を使って、自分だけ死を回避できればそれでいい。

馴れ合いの友達はいらなかった。

上位の成績をキープしていれば、周囲から認めてもらえる。魔法界にしろ、マグル界にしろ、優秀な成績を収めていれば、将来の就職にも有利だし、将来的には一

人で食べていくことができる。

同級生は、自分の保全のために利用できるか否かの存在でしかなかった。

一人で生きていくことに疑問は覚えなかったし、それ以外の選択肢など考えもしなかった。

ああ——……だから、きつと昔の自分が今の自分を見たら「偽善者に成り下がったのか」とか「お前は退化した」とか散々嫌味を言われるだろう。

それでも、セレネは構わない。

「私は、大切な人たちが過ごす世界を、少しでも良くしていきたい」

最初、義父だけだった。

義父さえ幸せなら、それで良かった。

それが、1人、2人と増え始め、気が付くと両手の指では数えきれないくらい増えていた。

そんな大切な人たちが生きる世界を守りたい。少しでも良くしていきたい。セオドルからは顔を合わすたびに「そろそろ、俺と同じ後方支援に回れ」と言われる

が、たとえば、自分が死んでも彼らが幸せに生きることが出来るように、精一杯後悔のない生き方をしたかった。

「そう……でも、あなたは気づいているのかしら？」

すっと、女性は色のない目で見つめてきた。

それは、時計塔の研究者たちの視線によく似ていた。

「貴方の浄眼は直死の魔眼へと変貌を遂げ、人とは違ったモノが見れる特殊なチャネルになった。つまり、根源の渦という世界の縮図を垣間見れる特別な目を持っているわ。

……貴方は根源の渦と繋がっている」

根源の渦。

すべての原因が渦巻いている場所。

すべてが用意されていて、だから、何もない場所。

「ただ繋がっているだけだけど、その一部であることには変わらないし、同じ存在ということに他ならないわ。

だから、あなたはその力を駆使して、新しい世界で古い世界を握りつぶすこと

だってできるのよ」

セレネは根源の渦との繋がりがなんて、まったくもって自覚していない。

だけど、理論としてはありえる話だ。

セレネとしての意識の方が浮上しているだけで、もしかしたら奥底に眠ったまま起きてこない「もう一人のセレネ」がいて、それこそが、根源を強く繋がった部分の自分なのかもしれない。

「ねえ、セレネ。

貴方はやろうと思えば、大切な人たちの世界を簡単に良い方向へ作り替えることもできるのよ。心臓だって強く作り替えることが出来る。死を先延ばしにすることだってできるかもしれないわ。

私なら、根源に繋がった一面を引っ張り出す手伝いもできる。……セレネ、やってみる気はある？」

「いいえ」

セレネは即答する。

「だって、それは反則ですから」

そう言うと、悪戯っぽく笑った。

もうひとりの自分がいて、その自分が根源とやらの力を使いこなすことが出来たとしても、とてもつまらないことだ。

「今の私は、今の私ができる範囲で努力したいんです。

第一、そんな超常的な力が使えたら、人生、きっと楽しくないですよ」
遠い昔。

なにも分かっていたいなかった3年生のクリスマス。大切な人が教えてくれた言葉が蘇る。

「教えてもらったんです。『もっと、楽しめ』って。

クリスマスも、ダンスパーティーも、他にも色々なことを楽しんできました。きっと、これからも、もっともっと楽しいことがあると思うんです。

ぶっちゃけ神様みたいになったところで、今みたいに楽しめるかって言われたら、たぶん違います。もちろん、苦勞したくないですし、死にたくないですけど、そこを書き換えたならルール違反ですよ。

だいたい、私自身が神様のな力を使える自覚ないですし、いまさらになってそん

な力を使いこなせるようになったら……今までの努力も楽しみも辛さも全部、無駄になってしまいます」

かけがえのなかった日々が、いきなり別の概念で塗り替えられたら、それはきつと悲しいことだ。

楽しさも辛さも喜びも悲しみも、1つ1つがかけがえのない日常の積み重ねだったのに、それをハンマーで潰して新たなものに作り替えるのは、残酷で寂しいことなのだ。

「だから、今のままで十分幸せです」

これ以上、何も望まない。

辛かったり悲しかったら、それを自分で努力して乗り越えていきたい。その先に大きな苦しみが待ち受けているかもしれないけど、パンドラの箱の最後に希望が残っていたように、きつと楽しいことだってあるはずなのだ。

少なくとも、今のセレネはそう信じている。

「……はあ、そうか」

彼女は大きく息を零すと、研究者としての側面は消え、先ほどまでの暖かな雰囲気

氣に戻った。

「セレネ」

セレネは名前を呼ばれた。

「私ね、その眼鏡を貴方に渡した時……この世界に干渉していいのか悩んでいたの」
セレネはまっすぐ女性の眼を見た。

話すにつれて、記憶が解れるように過去のやり取りが浮かび上がって来ていた。
ずっと昔、見たときは目線は遥か高かったような気がする。その視線が、少し近くなっていた。

「貴方が魔眼で悩んでいたから、つい、魔眼殺しを渡しちゃった。だけど、あの後、よく考えてみたの。もしかしたら、アルバス・ダンブルドアに預けて、彼から渡して貰えたら良かったんじゃないかって。」

そもそも、魔眼殺しなんて渡さずに、見て見ぬふりをした方が良かったんじゃないかって」

「……」

「それに、もう少し言葉をかけてあげたら良かったかもって思ったのよ。」

『神様は余分な力を与えないから、それはきっと意味のあるものよ』とか『まっすぐ生きなさい』とか。

でもね、別の男の子にそれを言った後、私は後悔したわ。生き方を縛ったんじゃないかって」

彼女の青い眼差しには懐かしそうな色が混じった。

「私は、眼鏡を貰えて嬉しかったです」

セレネは本当の気持ちを伝えた。

「何かしらの形で受取りが歪んで先延ばしになっていたら、もしかしたら……今の私はここにいなかったかもしれない。『もっと早く渡してくれればいいのに』とダンプルドアを恨んでいたり、別の誰かを憎んでいたりしたかもしれません。」

貴方から特別な言葉を貰っていたとしても、それをどう感じ、どう受け取っていたかは、その時の自分だけにしか分かりません」

それは、ありえたかもしれない平行世界の話。

ここにいるセレネ・ゴントには関係ない。

よって、今のセレネから彼女に伝えるべき言葉は一つだけだ。

「私、あの時、眼鏡を渡してくれて嬉しかったです。

ありがとうございます」

セレネは心からの感謝を伝えた。

すると、女性はいきなり驚いたように瞬きをした後、眩しそうに目を細めながら口元に微笑みを浮かべた。

「そっか。それなら良かった、かな」

女性はトランクに手を伸ばした。

「そういえば、その男の子も同じ眼を持っているんですか？」

「ええ、そうね。将来、素敵な男の子になりそうな子よ」

女性は立ち上がる。セレネもゆっくり立ち上がった。

そして、女性は「それじゃあね」と背を向けようとしたので、セレネは呼び止めた。

「あの、まだ名前を聞いていませんでした」

「え、そうだった？」

女性は「忘れていた」と小さく舌を出して笑ってみせる。

「蒼崎青子よ」

「私はセレネ・ゴントです。イギリスの魔法使いです」

「ふふ、私も魔法使いよ。五番目の魔法使い」

アオコ・アオザキはそれだけ言うと、再び背を向ける。

風はない。

草は揺れず、背中だけが遠ざかっていく。

ただ、彼女は何かを思い出したように立ち止まる。赤い髪を流しながら、いつもの笑顔で振り返った。

「元気でね、セレネ。」

縁があったら、また会いましょう」

澄みきった青空ようで、その名の通りの青い瞳。

今まで見てきた浄眼とも異なる気高く美しく、見惚れるほど純粹に透き通っていた。

それは、ありきたりの別れの言葉。

セレネは、たぶん次はないと薄々感じていた。その証拠に、青い瞳の奥に少しの寂しさを滲ませている。セレネも表情を緩めて、彼女へ最後の言葉をかける。

「先生も、お元気で」

先生、という言葉を選んだのは、本当に直観である。

「アオコさん」でも「アオザキさん」でも、しっくりこない。

あの夏の日、自分が何者なのかも定かではなく、死が蔓延る世界で辛くて苦しんでいた自分を救ってくれたのは、間違いなく彼女だった。その人物は、きっと、先生と呼ぶにふさわしい。

アオコ・アオザキは何も答えなかった。

答える代わりに、何でもないことのように手を軽く振る。

そして、一陣の風が吹いた。

草原が音を立てて揺れ、月が雲に隠れたのか、月光が途切れる。

そのあと、風に浚われたかのように、彼女はいなくなっていた。

「姿くらまし」を使ったのかもしれないが、そうではないと感じている。

風のように現れ、風のように消えていった。

草原は再び無音に戻り、空には雲が泳ぎ始めていた。

月はそろそろ、灰色の雲に隠れようとしている。

「……さてと、そろそろ行かないと」

セレネは大きく伸びをした。

雲が途切れれば、月が顔を出すように、また彼女と会うことが出来るかもしれない。

魔眼殺しを受け取ったあの日、セレネ・ゴーストが始まったのだとしたら、ここがセレネ・ゴーストの物語の終着点だ。

もちろん、現実には自分の物語は続いていく。

やっぱり、かけがえのない日々が続いてくのだろう。それを思うと、楽しみで口元が歪んだ。その中でまた再び、あの先生と会えたらいいなと願う。

その時には、今日話せなかった今まで楽しかったことやこれから起きる楽しい出来事について、話したいと思った。

貴方が魔眼殺しをくれたおかげで、私はこんなに楽しい日々を送ることができて

います、と。

さて、次の物語へ進むとしよう。

終着駅から、次の汽車に乗るように。

冴え凍えるような夜風が、黒髪を揺らした。

セレネは魔眼殺しの付け心地を確認すると、草原を歩き始めた。

ここまで読んでくださった皆様、そして、感想や励まし、ご指摘を送ってください。さった方々、本当にありがとうございます。

ここに至るまでの気持ちとか、諸々の思いとか、後書きとして記したいことはたくさんありますが、そのあたりは後程、活動報告の方で書かせていただきます。

ようやく、死の秘宝編まで執筆することができました。

本当に、ここまでありがとうございました!!

※間違えて早めに投稿してしまい、申し訳ありませんでした。

生命力が宿っている。

動物も植物も、大人も子供も、魔法族もマグルも。

みんなに命が巡っている。それはさながら地下鉄の路線図みたいで、血管のようで、迷路みたいで、落書きみたいだった。

みんなに見えてるのか、分らない。

でも、物心ついたときから、少し目に魔力を集中すれば、そんな光景が当たり前のように見えた。

もちろん、年離れたフクロウにも線が描かれている。

だから、それはちょっとした好奇心。

ガラス細工に触れるようにそつと、フクロウに張られた迷路に触れてみた。フクロウはむず痒そうに身体を揺らす。

そのとき、自分の指がぷすりと入った。羽の隙間ではなく、迷路の上に。首を傾げながら、なぞってみる。

なぞる度に、変な音がした。

最初はフクロウの嫌がる声かと思ったけど、よくよく耳をすませば違うことが分かった。ざくざくと切るような音。その音に気付いた瞬間、なんだか無性に怖く

なって、フクロウから離れた。

おっかなびっくり、なぞった部分を見える。なにかを切るような音だったけど、フクロウの身体は斬られていない。でも、フクロウは鳥籠の中で苦しそうに倒れてしまった。

フクロウは辛そうに呻いた後、糸が切れたように動かなくなってしまう。

1分経っても、堅く瞼を閉ざしたままで、羽はぴくりとも動かない。

「お、お母さんっ!!」

フクロウを抱き上げ、走りだす。

階段で転びそうになりながら、急ぎ立てられるように走った。

後悔からか、悲しくて混乱していたのか、正直、今でも分からない。込み上げる涙を精いっぱい我慢しながら、お母さんの胸元に駆け込んだ。

「……?」

お母さんはフクロウを大事そうに受け取ると、眼鏡越しに鋭く目を細めた。

杖をフクロウに当てながら、いつになく真剣な顔でフクロウを観察し、時折、複雑な呪文と呟いている。たまたま家に遊びに来ていたパーシバルおじさんの囁くよ

うな声に頷き、言葉返している姿も見られた。

「大丈夫、なんとかなる」

父がぽんっと頭に手を乗せてくれる。

少しだけ心が落ち着いた気もしたけど、それは気がしただけ。

フクロウの命を奪おうとしてしまった。

わざとではない。

だけど、うすうすこうなると識っていた。

あの線を視た時から、なんとなく分かっていた。たとえば、アズカバンに入れられる法律がなくても、勝手に命奪うのはいけないことだ。人でも動物でも、もちろん、フクロウでも同じこと。

それでも、やってみたいと思う気持ちに負けてしまった。

数時間経った気がする。

でも、実際には数分だったのかもしれない。母の手に抱かれたフクロウは薄目を開け、ホウ……と小さく鳴いた。

老いた黄色の瞳が自分を映したとき、心がいっぱいになって泣いてしまった。物心ついてから、一度も泣いたことなんてなかった。

けれども、涙がボロボロ出てくるし、嗚咽が止まらないし、大声で意味のないことを叫んでしまう。

「……いっぱい泣きなさい。こういうとき、泣ける子でよかった」

母は目尻を緩めながら言ってくれたけど、その意味は全く分からない。

自分が殺そうとしたのに、なんで褒めてくれるのだろう。まったくもって、理解できない。嗚咽交じりにそう伝えようと、母の代わりに父が口を開いた。

「ごめんねって思えることが大事なんだ。生き返って良かったと喜び、反省できるところが、お前の良さだ。ほら、もう絶対しないって思えるだろう？」

泣きじゃくりながら、うんうんと何度も頷いた。

もう絶対しない。ごめんね、ごめんねとフクロウを抱きしめる。

「飲みなさい。落ち着きますよ」

少し涙が落ち着いてきたとき、母がホットミルクを渡してきた。

温かいミルクは心の奥から湧きあがってきた冷たい感情を温め、洗い流してくれ

るみたいだった。

ほっと一息ついていると、母が尋ねてきた。

「どうしてこうなったのか、教えてくれますか？」

問いかけを受け、不思議な線のことを話す。つかえつつかえ話しながら、母たちの眼が鋭く尖っていくところを見て、「あ、やっぱり、他の人には見えてなかったんだ」と改めて思った。

「……直死の魔眼のようだな」

パーシバルおじさんが言ったけど、母は首を横に振った。

「いえ、私の魔眼はこうはなりません。切れた痕がまったくくない」

「生命力だけを切る魔眼か？ ……普通はありえないと言い切れるが、デルフィーニの父親の所業を考慮すれば、こうした特異体質が生じるのも理解できる。……さしずめ、直死と似て非なる魔眼といったところか」

「偽・直死の魔眼ね……デルフィー」

母が目位置まで屈みこむ。

眼鏡の黒眼が一瞬、怖いくらい青く輝いたような気がした。

「線を視た時、頭が痛くなります?」

「……ならない」

「床とか天井にも視えます?　なんか、死が迫ってくるような、足元から崩れ落ちるようなことを感じますか?」

正直に首を横に振った。

母の眼が怖かった。観察しているような、内面まで覗き込むような眼を見ていると、背中を蛇が這っているような恐怖を覚える。

「それでは、もう一度だけ質問しますよ。」

また、線をなぞりたいと思いますか?」

「絶対いや!!」

考えるよりも先に叫んでいた。

もう二度と、あの線をなぞらない。身体全身で叫ぶと、母の眼は元に戻った。頬を緩め、心の底から嬉しそうな顔をする。

「良かった。それなら、心配ないですね。」

私の言えることではありませんが、命を軽率に考えてはいけません」

「……うん」

母が言っている内容は、いまいち分らない。

「これから、その魔眼と折り合いをつける方法を一緒に考えていきましよう。」

私たちは、家族なんですから」

「かぞく？」

「ええ、血は繋がっていなくても、一緒に笑って、困った時は頼ることが出来る間柄……私は、それが家族だと考えています」

母の言葉はよく分からない。

だけど、花が綻ぶような笑顔は、とっても眩しくて。

その笑顔が曇るところを見たくなくて、こくと頷いた。

あれは、もう何年も昔の話。

いまでも気を抜くと、あの線が視えるけど、絶対に触れない。

「……ずいぶん、懐かしい夢をみたな」

2016年9月。

昨夜の夢の名残に浸りながら、デルフィーニ・レストレンジはホグワーツの廊下を小走りで進んでいる。

彼女が走る度に、小さなショルダーバックはごとごとと不釣り合いな音を出した。教科書やら水晶玉が中で転がっているのだろう。

だけど、いちいち気に留める必要はない。

デルフィーニはそんなことを思いながら、足を踏み外しそうな梯子階段を登り始めた。

目的は単純明快。

その先の教室で授業が行われるからである。

「失礼します」

デルフィーニは部屋に入った。

むわっとした香の立ち込めた教室に、初見のときこそ閉口したが、ここに通って4年目だ。もうとっくに慣れている。

「ミス・レストレンジ。いらしたのですね」

霧の彼方から届くような細かい声が、自分の名前を呼ぶ。

「占い学を選択している7年生が、貴方だけというのは……実に悲しいことですわ」

占い学の教授が姿を見せた。

シビル・トレローニー。

スパンコールで飾った服を纏い、大きな眼鏡をかけたその姿はまるでキラキラ輝く巨大トンボのようである。

この魔女の装いは胡散臭いし、占い自体も怪しい。一学年下のビクトワール・ウィーズリーなんて

『占いなんて、ナンセンス！ 未来は自分の力で切り開くものでーす!!』
と、きっぱり占い学を否定している。

ただ、シビル・トレローニーの占いは地味に当たる。

もちろん、それは後で考えればあれって関係あるのかも……と思う程度の当たりで、信じていない人も多い。だが、それでも、未来が視えるというのは素敵だ。

視えないよりかは、見える方がいい。

そんな軽い思いで、この授業を履修している。

「今日は水晶玉を使った遠見をしますわ」

「はい、先生」

デルフィーニは水晶玉を取り出すと、テーブルの上に置いた。

そして、先生の顔を見上げた瞬間、事件が起きた。

「せ、先生!？」

デルフィーニは仰天した。

シビル・トレローニーが白目を剥いている。苦しそうに左手で胸を掻きながら、

デルフィーニに迫ってきた。

「……時間が、逆転したときだ」

普段の神秘的な声と比べられないほど、男のように荒々しく太い声だった。

「逆転した時間が、星に真の輝きを与える。見えない子供たちが父親を殺すとき、

闇の魔法使いが再び降臨する」

デルフィーニは呆然とした。

言葉を挟むこともできず、トレローニーの声を聞いていることしかできない。彼女は更に迫ってくる。水晶玉を押しつけ、デルフィーニの肩に激しく震える両手を置いた。

「魔眼の娘、スリザリンの継承者が——……」

予言者は語り続ける。

何かに憑りつかれたように、前後に揺れながら言葉を吐く。そして、最後の一句まで語り終えた時、がくつと再び体が大きく仰け反り、そして……トレローニー先生の焦点が合った。

「……あら、御免遊ばせ。私、つい、うとうとと……ミス・レストレンジ？」
かしさんと水晶玉が割れる音が遠くで聞こえた。

「……闇が再び広がる？」

「レストレンジ？ 何を言っているのです？」

「ですが、今、先生が……」

デルフィーニは言ってから、はたと気づいた。

いまのは、噂に名高いシビル・トレローニーの本当の予言なのではないか。

ダンブルドアが聞き、ハリー・ポッターが聞いたとされる予言なのではないだろうか。

デルフィーニは先生にそのことを伝えたが、まったく理解を示して貰えなかった。トレローニーは「本当の予言」に対し懐疑的なのだ。

なにしろ、本人に自覚症状がない。

有名なところだと、ハリー・ポッターの予言だが、トレローニー先生本人は「記憶にない」と否定している。

今回も同じだった。

「きつと、あなたは幻聴を聞いたのでしょうか。では、授業を始めますよ」

先生に流されるように、授業が始まる。

そのうち、デルフィーニは予言のことを忘れた。

7年生は最終試験に向けての勉強が死ぬほど辛い。予言の内容の意味を考え込む時間があるなら、ルーン文字の取得や変身術の理論を頭に叩き込む。

デルフィーニ・レストレンジが予言の意味について、考え始めるのは2年後。

そして、彼女は知ることになる。

これまで隠し通されてきた、自分の出生の秘密を。

「スリザリンの継承者―魔眼の担い手―」

ホグワーツ七不思議／呪いの子編。 近日更新予定。
もうちょっとだけ、続きます。

ホグワーツ七不思議編

特別番外編 「俺様ゲーム」

お気に入り登録件数 6000件突破記念。

本当にありがとうございます！

にじファン時代のPV記念番外編のリメイク作品です。完全お遊び時空。ご存知の方も、新規の方も楽しんでいただけると嬉しいです。まだまだ、本編は続きますが、引き続きよろしく願います。

「えー、突然ですが！ ホグワーツの戦いのルールが変わりました！

名付けて『チキチキ！絶対に笑ってはいけないホグワーツの決戦！俺様ゲーム』

！」

リー・ジョーダンがマイクを片手に宣言した。

「司会はクイディッツの名解説者にして、ポッターラジオのパーソナリティーこと、リー・ジョーダンがお送りします。そして、こちらが解説者の――」

「……ミネルバ・マクゴナガルです。公正公平なゲームかつ司会を頼みますよ」
ミネルバ・マクゴナガルは感情を押し殺した顔で座っていた。

「質問、よろしいでしょうか？」

セレネは周囲の者たちを一瞥すると、そつと手を挙げた。ほぼ同時に、ハーマイオニー・グレンジャーも挙手している。リーは二人を見比べた後、ハーマイオニーを指さした。

「はい、ホグワーツ随一の頭脳明晰、通称『歩く図書館』ことグレンジャー選手！」

「その紹介からして、いろいろ言いたいところがあるけど、まずはこっちなね。」

そもそも、『俺様ゲーム』って何？」

ハーマイオニーの質問に、セレネも頷き返した。

「ホグワーツの戦い自体が変わったのも不自然だわ。もちろん、分霊箱は全部破壊したけど……」

「いい質問ですね。さすが、『歩く図書館』！」

「ジョーダン。真面目に司会進行を」

「分かってますよ、ミネルバ。」

さて、ここにお集まりの紳士淑女の皆さん、誰もがグレンジャー選手と同じ考えを抱いていると思います」

リーは愉快そうに笑いながら、木の箱を取り出した。

ちょうど、ここに集まった人数分のクジが入っている。

「皆さんには、クジを引いてもらいます。そのクジには、ランダムに数字か『俺様』と書かれています。ちなみに、『俺様』は一人だけです。

『俺様』のクジを引いた人が、『例のあの人』の役になり、数字の人に命令をすることができます。ただし『アバダケダブラしろ』『磔け呪文をかけろ』『自害せよ』といった言葉はNGです。

もちろん、杖の使用も禁止ですね」

リーはクジを取り出しながら説明する。

「例えば、俺様に当たった人が『5番の人は3回廻ってワンと鳴く』と命令した

とします。そうしたら、5番の人は命令をこなさなければなりません。

ここで大事なのは、『5番の人』『3番の人』と言ったように、数字の人を差ししてください。決して『2番の人は、ハリー・ポッターの眼鏡を取れ』みたいなことはルール違反になります」

セレネはここでもう一度、手を挙げた。

「はい、スリザリンのファザコン、ゴースト選手！」

「ジョーダン！」

「ふぁざこん？」

セレネは首を傾げる。

ファミコンの聞き間違いかと思ったが、生粋の魔法族がファミコンを知っているはずがない。少し悩んだが、またあとで聞けばいいかと、頭を切り替えた。

「ふぁざこんが何か分かりませんが、俺様の出した命令というのは、断ることはできないのでしょうか？」

「良い質問です。」

この命令を断った場合、脱落することになってしまいます」

リーはにやりと口の端を歪めた。

「あとは、今回の大会名通り『絶対に笑ってはいけない』」。

俺様ゲームを10回行い、最後に残った人が多い陣営が勝利となります。勝利した陣営が敗者に命令することも可能です」

セレネは説明を聞きながら、頷いた。

各陣営はそれぞれ3人ずついる。

この勝負に勝利すれば、余計な死者を出すことなく、敵を滅することができる。ホグワーツの戦いを制することになるのだ。

「あの……リー、いいかな？」

ハリーが手を挙げる。

「はい、我がヒーロー『選ばれし者』、ハリー・ポッター選手！」

「その……『俺様』というか、ヴォルデモートはそこにいるんだけど」

ハリーは前に座る男を横目で見た。

「俺様が勝利するためだ。仕方あるまい」

ヴォルデモートは杖を弄りながら大人しく座っている。

赤い眼は閉じられており、何を考えているか分からない。両隣には、ルシウス・マルフォイとベラトリックス・レストレンジが控えている。両者とも、必ず勝つという信念とご主人様に対する不安が入り混じった複雑な表情をしていた。

「……素朴な疑問なんだが」

今度はセオドールが質問をする。

セレネは右にセオドール、左にアステリア・グリーングラスに挟まれていた。

「はい、1年次からのストーカー男」

「ス、ストーカーとか言うな！」

その、オレの記憶が正しければ……ベラトリックス・レストレンジは既にこの世にいないと思うのだが。というか、すべてに決着がついて、オレ的に幸せな生活を送っていた気がする」

セオドールは頭を抱えながら質問する。

リーは、くっくくくと笑った。

「それはですね。」

これが、『PV400万記念の企画』のリメイクだからです!!」

しん、と静まり返った。

代わりに、マクゴナガル先生が淡々と解説を始める。

「今作は、『スリザリンの継承者』が今は亡き二次創作投稿専門サイト『にじファン』で連載されていた時期に投稿された記念作品となります。

今回は本作ブックマーク件数『6000件突破記念』として、PCの奥底に眠っていた『俺様ゲーム』をサルベージし、リメイクを行いました。つまり、番外編ですので、何でもあるの『ご都合主義のお遊び時空』ということでしょう」

「そ、そんな、メタな……」

アステリアは頭を抱えながら呟いていた。

「どうしてかな……私が、無駄にテンションの高い司会をしていた気がする……」

「駄目よ、アステリア。それ以上、思い返してはいけません」

セレネはアステリアの肩を抱いた。

リーは他に誰も質問者がいないか確認すると、箱を各陣営の前に持ってきた。

「それでは、始めますよ！

『俺様だーれだ』！」

全員がくじをひく。

セレネは『俺様』ではなかった。『俺様』を『俺様』が引いたら面白いな、と思ったが、少なくとも一回目は違ったらしい。

「あ、僕だ」

ロン・ウィーズリーは『俺様』と書かれた棒を見せびらかすと、にまにまと楽しそうに笑った。

「それじゃあ……3番の人は下着になれ！」

セレネは急いで自分の番号を見て、ほっと息をつく。

しかし、えげつない戦略だ。

選ばれた人は、恥ずかしがって断る可能性があるし、その哀れな姿を見て、周りの笑いを誘うこともできる。さらにいえば、ロンはハーマイオニーと付き合っていると聞く。上手くいけば、ハーマイオニーの下着姿を眺めることができる。

ロン・ウィーズリー。

まさか、ここまで恐ろしいとは。セレネが固唾をのんで成り行きを見守った。

そして、悪夢が始まった。

「……」

ロン・ウィーズリーの顔は白くなっている。

誰も笑わない。誰もが言葉を失っている。膝を穴が開くほど睨み付け、恐怖で震えていた。

3 番の人。

ヴォルデモートが下着姿になっていた。

身体全体が細く、肉が最低限にしかついていない。緑身がかった白い肌は骨が浮き出ているように見える。ブリーフを穿いているのは、時代背景的に納得がいった。1948年のロンドンオリンピックではイギリス代表チームが支給品の1つとして、男性選手にブリーフが1着ずつ配られるほど流行していたと聞く。その時代に青少年期を過ごした者が、ブリーフを穿いても不思議ではない。

断ればいいのに……と、セレネ含めた全員が思った。

ヴォルデモートは「闇の帝王」としての矜持故に、「断る」ことを選択できなかったに違いない。断った場合、自ら敗北を宣言することになってしまふのだ。

セレネはちらっと視線を上げると、真紅の眼が怒りで燃えているのが分かった。ぴくっぴくっとな筋を微動させ、杖を握りしめている。ルールがルールなので「アバダケダブラ」はしてこないが、ロン・ウィーズリーは、ヴォルデモートに睨まれ、蛙のように縮こまっていた。

「……誰も笑いませんね」

マクゴナガル先生は疲れたように息を吐いた。

「くすりと笑っていません。顔が強張っていますね。それでは、ジョーダン。先に進みましょう」

「……ええ、そうですね。ミネルバの言う通り、2回戦、行きましょう」

さすがのリーも顔を背けながら、箱を差し出した。

「俺様だーれだ」

「よし、私だ!!」

ベラトリックスが高らかにクジを掲げた。

「1番の者は、ご主人様に服を貸すのだ！」

「レストレンジ選手、名指しは禁止です」

「つく、忌まわしきルールめ」

ベラトリックスは爪を噛む。怒りで上気した頬を抑えながら、椅子に座りなおした。少しばかり考え込むと、良い案が思い浮かんだのだろう。口元に弧を描くと、低く笑った。

「では、1番の者が、一番寒そうにしている者に服を貸すのだ。今すぐに！」

セレネを含め、ここにいる誰もが「上手い」と感心した。

これなら、『アバタ・ケタブラ』される心配がなくなる。

誰しもがホッと一息ついたことだろう。そして、1番の人は黙々と服を脱ぎ、この場で1番寒そうな人に服を貸すのだった。そう、これで安堵の空気が漂う――

「……」

なんてことはない。現実には、そんな甘くはないのだ。

誰もが血の気の失せた顔で、床に落ちているわずかな埃を真剣に見つめている。

ベラトリックスは、もうこの世の終わり……だというような顔をしていた。身体が燃え尽きて灰になっている。ちょっとした風が吹いただけで、消えてなくなりそうになっていた。心なしか、ルシウス・マルフォイも生気が失せ、白目を剥いているような気がした。

1番の人は、ヴォルデモートだった。

彼の姿に関することは、描写しない。ご想像にお任せすることにしよう。

「……俺様の俺様は俺様だった……」

ロンが呟き、それを真面に見てしまった被害者ハーマイオニーは「破廉恥な」と顔を赤らめた。

なお、この呟きを拾った俺様に射殺されるほど睨まれ、ロンも魂の抜けた人形のように崩れ落ちていた。

なお、1番の人の下着を受け取ったのは、ベラトリックス・レストレンジだった。彼女は、露出度の高い黒いドレスを好んでいる。自分の容姿に対する自信から来ているのだろうが、今回は完全に裏目に出ていた。闇の帝王の下着を震える指でつ

まんでいる。

「これは、レストレンジ選手は続行不可能だと思いますね」

この南極大陸並みに冷え込んだ状況下で、マクゴナガル先生だけが淡々と解説をしていた。全ての感情を押し込めて、仕事をしているともいえる。さすがは、一癖も二癖もある生徒職員と個性が強すぎる校長の間に挟まれ、副校長として長年働いてきただけのことはある。

「戦意を消失しています。むしろ、これ以上の失態を重ねる前に、自ら降参を認めた方が良いかと」

「残念ですが、ミネルバ。ルールは絶対です。」

それでは、三回戦を開始します」

「俺様だーれだ！」

セレネはちらつとクジを見る。

今回も「俺様」ではない。なお、ベラトリックスはルシウスによって引かされていた。

「ミネルバ、マルフォイ選手がレストレンジ選手に無理やりくじを引かせていまし

たが、これは、こういった意図なのでしょいか？」

「言わなくてもわかるでしょう。マルフォイ選手は、『名前を言ってはいけないあの人』の怒りを恐れているのです。ここで、レストレンジ選手が続行不可能となった場合、あちらの陣営は圧倒的不利かつ圧倒的痴態を晒すことになるのですからね」マクゴナガル先生は追い打ちをかけるように解説をしている。

その傍で、ハリー・ポッターが仲間たちに囁きかけていることに気付いた。

セレネが耳を傍立てようとしたが、すぐ隣で聞こえた言葉に耳を奪われてしまった。

「つくそ、オレが俺様かよ……」

セオドール・ノットが面倒くさそうに頭を掻いていた。

「この状況を挽回なんて不可能だろうが……」

「……まあ、これ以下はありませんよ」

セレネが彼の背中を叩いた。

「ここが最底辺です。あとは上がる一方なので、気にしないで命令をしなさい」

「いや、気にするだろ。この状況をどうにかしないと、オレの命が危ない」

セオドールは長い長い息を吐くと、静かに命令を口にする。

「9番の人、ホグズミード村でトランクスを買ってこい」

セオドールは得意げな顔で宣言する。

ここに集った全員が、一斉に自分のクジを確認する。セレネの数は3番、隣のアステリアは4番だった。望みを託すように、ハリー陣営を見たが、誰も動き出さない。

がたん。

誰かが立ち上がる。

セレネは隣に座る自身の右腕が震えているのを感じた。

「お待ちください、我が君！　どうか断ってください！」

ルシウスの叫びが空間に木霊する。

続けるように、ベラトリックスが甲高い声でセオドールを非難した。

「貴様ッ！　純血なのにホムンクルス側についただけでは飽き足らず、我が君の痴態を他の者に見せるとは！　何たる無礼！」

「そ、そんなつもり、あるわけないだろ！」

「我が君、どうかご再考を！ 我らだけでも、あとで挽回しますので！」

「お前たちに任せて、成功したことがあったか？」

ヴォルデモートは胃の奥から凍り付くような声で言い放つ。

「俺様の辞書には降伏も失敗の文字もない！」

「ですが、今回ばかりは!!

——ッ、おのれ、小僧めが！ アバダケダブラ!!」

ベラトリックスが杖を鞭のように振る。

セレネは咄嗟に眼鏡を外すと、セオドルの前に躍り出た。直死の魔眼で迫りくる緑の閃光を斬り捨て、ベラトリックスを睨み付ける。

「ホムンクルスめ、邪魔をするな！」

「ルール違反ですよ、ベラトリックス。それとも、ここでやり合おうというのですか？ 私に、一度も勝てたことがないのに」

「この……ッ、調子に乗るな、小娘が！」

ベラトリックスは腕をまくると、セレネに照準を定める。

そこに待ったをかけたのは、ハーマイオニー・グレンジャーだ。

「二人とも落ち着いて。今回の——ッ」

「うるさい、穢れた血め！」

ベラトリックスの杖から閃光が迸る。ハーマイオニーはすぐに避けたが、栗毛の髪を掠めた。それを見た恋人は自身の髪の色より顔を赤くすると、ベラトリックスの前に突っかかっていく。

「ハーマイオニーに何をする！ 『ステュービファイ——麻痺せよ！』」

「ははっ、血を裏切る者の攻撃が当たるとでも？」

ベラトリックスは高笑いをしながら避ける。失神呪文は完全に外してしまったが、余計な人物に当たってしまった。ヴォルデモートに。もちろん、ヴォルデモートは直接失神呪文を喰らうほど落ちぶれてはいない。こちらに向かってくる呪文を視認した瞬間、盾の呪文を展開していたので無傷ですんだ。

「……そうか、そのようなルールになったのだな？」

ヴォルデモートは不敵な笑みを浮かべと、ベラトリックスの隣に立った。ベラトリックスは愕然と主人を見ると、すぐにロン・ウィーズリーを睨み付けた。

「血を裏切る者め！ 防備が薄そうなおれが君を狙うとは、なんと傲慢な！」

いや、お前が避けたからだろ。

セレネは心の中でツツコミを入れたが、すぐにそのような暇もなくなった。

「俺様直々に皆殺しにしてやる。まずは、その赤髪からだ！」

「ロン！ ヴォルデモート、僕が相手だ！」

ヴォルデモートにハリーが向かっていく。

ベラトリックスはロンとハーマイオニーに牙をむき、ルシウスは悩んだ末のセレネたちの方へ向かってきた。

「アステリア、貴方は下がってなさい。

セオドル、一人で行けますか？」

「無論だ。お前はポッターのところへ！」

セレネとセオドルは互いにタッチをすると、そのままセレネはヴォルデモートの方へ駆けだした。ヴォルデモートの防御力はゼロだったが、これは魔法戦だ。身体的防御力がゼロであっても、魔法で全てカヴァーすることができている。

「ハリー、加勢します！」

ヴォルデモートの方が圧倒的に強い。

ましては、いまは怒りで更に力が強まっている。

「ありがたい、セレネ！」

「忌々しいポッターとホムンクルスめ！　ここで葬ってやる！」

会場は混沌に陥った。

あちらこちらで色とりどりの閃光が飛び交い、命を懸けた勝負が続く。
そして、戦いは佳境を越え、誰もが力尽き、その場に崩れ落ちた。

「……えー、俺様ゲームの勝者ですが……」

リーは隠れていた壁から顔を出すと、死屍累々の会場を眺めた。

「大多数の選手が『杖使用を禁じる』というルールに反していたので、失格とさせていただきます。

よって、勝者はただ一人！」

「アステリア・グリーングラスだけですな」

マクゴナガル先生も疲れたように額に手を当てた。

「えっと……私、でいいのかな？」

アステリアはセレネの言いつけを護り、一人隠れていたものであった。

「では、勝利の栄冠は、アステリア選手へと渡されます。

アステリア選手。貴方がホグワーツの戦いの勝者です。この場にいる全ての敗者に、命令を下すことができます。なお、この命令は絶対です。彼女の命令を破った場合、魂を魔法拘束させます」

「なん、だと？」

ヴォルデモートが呻く。

その隣で、セレネが俯きながらアステリアを見つめた。

「アステリア、そのの、蛇男に向かって、『自害せよ』と命令しなさい」

「つく、この、人でなしが」

ルシウスが呟く。

ヴォルデモートは赤い瞳で忌々しく娘を睨んでいた。アステリアは闇の帝王の双眸に「ひいっ」と小さく悲鳴を上げた後、考えるように目を閉じた。

「うん、分かった。私は——」

アステリアは目を開けると、ゆっくりと全員を見渡す。

この場にいるすべての者の視線が、小さな女の子に向けられていた。

「あの……とりあえず、喧嘩を辞めて仲良くしましょう。差別もなく、みんな平等に。」

あと、これが一番大事なことですけど……」

アステリアは目を迷わせた後、ちよつとだけ頬を朱色に染めて、ほとんど囁くように言った。

「誰でもいいから『名前を言ってはいけないあの人』に服を貸してあげてください……」

ハリーたちと闇の陣営の間に協定が結ばれ、マグル生まれに対する差別もなく、誰もが一つになろうと努力し、英国魔法界はぽかぽか暖かい世界になった。

そして、俺様はぽかぽか暖かい服に包まれ、高ぶっていた感情が収まり、アステ

リアの下で世界平和のために働くことになるのでした。

めでたし、めでたし。

※元ネタは、主にカーファンと銀魂ネタ。

純血令嬢の序奏

呪いの子編……を、いきなり書きたかったのですが、セドリックが死んでないとかデルフィーニがロウルに育てられていないとか、原作からの変更点がたくさんあります。

ですので、まずは「スリザリンの継承者版 呪いの子編」の前日譚「ホグワーツ七不思議編」を執筆することになりました。

ここから先の話は、八割ほどオリジナルの展開になってきます。

セレネの物語も「死の秘宝」で終わりなので、長い後日談という形で楽しんでもらえると嬉しいです。

※本編は次回からです。今回は前日譚よりさらに前、新規登場のオリキャラの過去話になりますので、この話を読まなくても問題ありません。早く続きが読みたい方は、次にお進みください。

女の子は、恋に恋していました。

今日もお砂糖とミルクをたっぷり注いだ紅茶をテーブルに置いて、ちょっと高めの椅子に座ります。ふらふらしてしまう足をピンっと伸ばして、蒼い瞳をきらきら輝かせながら

「おじいさま、これは素敵な物語ですね！ リザは懂れます」

と、テーブルの向こうの祖父に話かけました。

今まで読んでいた本をテーブルに置き、祖父に題名を見せつけます。

「……また、その話か」

祖父は預言者新聞から顔を上げると、大きくため息をつきました。

祖父の皺が寄った険しい顔は、最初こそ怖く感じたものでしたが、どこことなく声色に馴染みがあり、いまでは親しみを持っていました。

「この話は好かん。どうして、懂れる？」

「だって、お父さまとお母さまの馴れ初めの物語ですもの」

女の子は細い指で『ハリー・ポッターと陰に隠れた娘』と書かれた題名をなぞります。

「お父さまがお母さまを支え、お母さまはお父さまたちを護るために蛇男に立ち向かう……お父さまの愛がお母さまを覆っていた現実勝ち、お母さまの恋から育まれた感情が愛なき怪物を打ち倒す。」

ポッターの英雄譚に隠れてますけど、こっちの物語の方が好きです！

これが実話だなんて……おじいさま、もっと詳しく教えてくださいな」

「本人に聞けばいいだろ」

「教えてくれないのです」

女の子は、ぷくうっと頬を膨らませます。

「お母さまはさっさと切り上げてしまいますし、お父さまは顔を赤くするばかり。

家のおじいさまは詳しく知らないみたいでしたし、姉さまは興味がないみたい」

「消去法か、わしは」

「ね、おねがいます。おじいさましか聞ける人がいないのです！

お父さまとお母さまの恋模様について！」

女の子は祖父を見つめました。

祖父はしばらく黙り込んでいましたが、根負けしたのでしょう。肩を落とすと、ぶっきらぼうな口調で話し始めてくれました。

「ホムンクルスは知らん。

だが、あの馬鹿息子はホグワーツに入学した時から好いていたそうだ」

「やっぱり、一目惚れでしょうか？」

「……感情に名前を付けるなら、それが一番相応しいだろう。

ホムンクルスの傍にいたために魔法の腕を極め、組織を設立し、眼まで売り払った。もはや狂気としか思えん。

一目惚れとは、呪縛の魔法のようなものだ。吸い寄せ、引きつけ、放そうとしない。逃げるに逃げられない恐ろしい魔法だ」

「そうでしょうか？」

女の子は疑問を口にする。

「無我夢中になるくらい恋して、すべてを差し出せるほど愛する……リザは、とっ

でも素敵なことだと思います」

「相手が……誰であれ、か？」

祖父は不機嫌な顔になりました。

でも、いつものことなので、女の子は気にしません。

「ええ。相手がホムンクルスでも野獣でも。

たとえ、その恋が実らなくても、輝かしい思い出として心に残ると思うのです。

人魚姫が王子に恋をしたように……」

「……エリザベス、わしはそうは思わん」

祖父は首を横に振ると、新聞を折り畳み始めました。

タイミングを見計らったように、しもべ妖精がせかせかと近寄ってくると、新聞を片付け、代わりに淹れたてのコーヒーをテーブルに置きます。祖父はコーヒーを口に運びながら、話を続けました。

「人魚姫……以前、お前が聞かせてくれた話だが、わしにはちっとも良さが理解できません。いやいや、お前の話し方が悪かったわけではない。とても感情のこもった音読は、大変聞きやすかった。

だがな、死んでしまつては元も子もないだろ？」

祖父は真剣な目を女の子に向けました。

「わしは……馬鹿息子……お前の父親と喧嘩した。大喧嘩だった。

わしは言ったのだ。

『ホムンクルスに一目惚れ？ 冗談ではない。純粹な人間でない上に、闇の帝王の敵だ。そいつを好いているなど知られてみる。お前の命が危ない。

嫡子として、お前には家を引き継ぐ義務がある。

甘ったれたことを言っていないで、現実を見るのだ。危険すぎる恋に身を投じるより、ブルストロード家やパーキンソン家の娘と一緒になれ』

とな。まあ、あいつは反対して、出て行ってしまったが……」

「……」

「恋は盲目だ。危険だ。恐ろしいものだ。他人の忠告まで聞き入れることができないくなってしまう。

……幸いなことに、あいつは生き残り、関係は修復しているが……」

祖父は一旦、口を閉ざしました。

一度、青い空を見上げ、そして、女の子に視線を戻します。祖父は寂しそうに目尻を緩めながら、囁くような声で

「だけど、あの時……義務があるなんて言葉ではなく、お前を愛しているからだと伝えていれば……」

「お父さまは止まった？」

「……いや、出て行っていただろう。あいつは、そういう奴だ。だが、こちらの気持ちは伝わったかもしれない。互いに意地を張ることなく、もっと早くに和解することが、できたかもしれない……」

再び、テーブルに沈黙が訪れました。

重苦しい空気ではなく、互いに自分の考えを深めているような、静かな沈黙でした。

「エリザベスお嬢様、お帰りのお時間です」

沈黙を破ったのは、しもべ妖精でした。

時計を見ると、短針が5の文字を差しています。

「ありがとうございます、シェリー。先に玄関で待っていてくれますか？」

「かしこまりました、お嬢様」

しもべ妖精は深々とお辞儀をすると、出発の準備のために出て行きました。

女の子は、まだ1人で「姿くらまし」をすることができません。しもべ妖精に付き添いして貰わないといけませんでした。女の子も急いで紅茶を飲み干します。

その様子を見て、祖父が一言

「エリザベス、わしはお前を愛している」

と告げました。

女の子はカップを持ったまま、きょとんと祖父を見つめます。

「わしの孫として、この世界の誰よりも愛してる。だから、無茶な真似はしないと約束してくれ。」

誰かに恋をしても、どうか命まで投げ出さないでくれ」

女の子は祖父の言葉を静かに受け止めると、とんと椅子を降りました。

あまりに高い椅子でしたので、ふわりと黒いスカートが膨らみます。そして、女の子はもう一人の祖父が買ってくれた麦わら帽子を被ると、大好きな祖父に笑いかけました。

「ありがとうございます、おじいさま！」

そして数歩歩き、ふと、思い出したように振り返りました。

「おじいさま、リザはおじいさまとピクニックに行きたいです。お父さまたちの仲直りの記念で、家族みんな一緒に。ランチバスケットを持って！」

女の子は祖父の口元が綻ぶのを見てから、玄関で待つ妖精の元へ走り出しました。

「おじいさまは恋が危険だっていうけど……」

女の子は口の中で呟きます。

「やっぱり、恋は素敵なものですよね？ 特に、一目惚れには懂れます」

女の子はしもべ妖精に語りかけましたが、妖精は静かに首を横に振ります。

「私には何とも……しかし、お嬢様。どうして、一目惚れや恋にこだわるのですか？」

しもべ妖精は不思議そうに尋ねました。

妖精から見て、女の子はすべてを持っていました。

水に濡れたような長い黒髪、幼さ特有の愛らしさを持ち、立ち振る舞いは無邪気な子どもなのに、大人びた理性を持った青い浄眼。

スリザリンの血を引き継いでいるので蛇語も話せます。

調子に乗ってうっかりミスをしたり、義姉の悪戯に簡単に引っかけたり、慢心するあまり失敗したりするところさえ直れば、将来はどこへ出しても恥ずかしくない娘になることでしょう。

「エリザベスお嬢様なら、向こうから素敵な殿方がやってきますよ。

そこから、ゆっくりと互いのことを知っていく恋も良いのでは？」

「そうね……じゃあ、シェリーには特別、教えてあげます」

女の子は無邪気に笑うと、その場でくるっと回りました。

「恋って、ドキドキするんですよね？」

女の子は橙色に染まり始めた空を見つめます。

「リザ、ドキドキしたことがないんです。もちろん、うっかり魔法薬の配合を間違えたり、お父さまのワイングラスを落としたりしたこともあるけど……そのドキドキとは違うのですよね？」

「そうですね……その動悸と恋の動悸は違うと思います」

しもべ妖精は一般論で答えていきました。

「リザは、みんなが大好きです。一緒にいると幸せで、ほんわかします。

でも、それを超えるようなドキドキする感情……凄く素敵だなんて」

「エリザベスお嬢様……」

「だから、リザは理想の王子様と恋に落ちるときが、とっても楽しみなんです！」
女の子は夢をみるように指を絡めて、門の方へと浮足立って歩きだします。

「きつと、背が高くて、キリつとしてるけど、ちょっと破天荒で向こう見ずな人だ
と思います。リザは、そういう人が——……ふべっ！」

しかし、女の子は敷居の段座に気付かず、派手に転んでしまいました。

「お嬢様っ!？」

「うう……へ、平気です。問題、ありません」

女の子は半分泣きながら立ち上がりました。

そして家路を急ぎながら、思うのです。

はやく、理想の王子様と恋に落ちたいと。

これから、数か月後のことです。

女の子は両親に連れられ、クイディッチワールドカップに来ていました。

アルゼンチンのパタゴニア砂漠で行われた大会でしたが、ちょうど良い機会とばかりに「アルバス・ダンブルドア軍団」の同窓会もかねているらしく、両親——……特に父親がスリザリンOBの人たちと会話に花を咲かせていました。

「お父さまたちは楽しそう……」

ですが、女の子は大人たちの会話なんて、ちっとも面白くありません。

女の子が少しつまらなくなった、そんな時でした。

「ねえ、リザ。聞いた？ ハリー・ポッターが来てるんだって。見に行かない？」
義姉のデルフィーニが誘いをかけてきたのです。

「でも、デルフィーニ姉さま。ハリー・ポッターがいるのは特別区ってお母さまが言っていましたよ？」

本当は両親も特別区に誘われたらしいのですが、母親が「変身術を使えば問題な

いでしょ」と言ったため、一般区画にテントを張っていたのでした。

実際、女の子の母親は有名人でしたが、このキャンプ場に到着して以来、ずっと髪の色と瞳の色を変えて過ごしていました。

「ええ、そうね。でも、ちよろつと魔法を使えば問題ないわ」

「姉さま？ 学校の外で魔法を使うのは……」

「禁止。ええ、分かっているわ。だけど、こんな広い会場なもの。バレない、バレない」

デルフィーニは杖を振りながら、にこっと笑いました。

それでも、女の子は渋い顔をします。

「リザは、ハリー・ポッターに興味はありません。」

「だいたい、お母さまに怒られるような危険なことは……」

「あー、もしかして、怖気づいてる？ いいわ、私一人で行ってくるから。リザはお留守番してなさい。帰って来たら、デジカメで撮った写真を見せてあげる」
デルフィーニはからかうように笑うと、颯爽とテントを出て行ってしまいました。
「ま、待ってくださいー！ リザを置いて行かないでー！」

女の子は慌てて義姉を追いかけます。

ハリー・ポッターに興味はありませんでしたが、義姉に馬鹿にされたまま黙っていられる性格でもありませんでした。

「デルフィー姉さまー！」

「ほら、行くわよ。しっかり付いてきなさい」

女の子はデルフィーニの背中を追いかけてました。

特別区の入り口は外から有名人を見ようと凄い人ばかりでしたが、デルフィーニが女の子の手をしっかりと握ってくれたのではぐれることはありません。

遠回りして裏の方に行くと、警備担当の魔法戦士が厳しい表情で佇んでいました。デルフィーニは真剣に狙いを定め

「『コンファンダス―錯乱せよ』」

呪文を放ちました。

すると、魔法戦士の頭が前にかくんと不自然に揺れます。その隙に、デルフィーニは女の子と一緒に走り出しました。

女の子たちが傍を通り過ぎる際、魔法戦士は慌てたように彼女たちを見て

「と、止まりなさい。君たちは——……」

「セレネの娘です。外から戻ってきました」

「あ、ああ、あの直死の魔眼の……おかえりなさい」

「どうもー！」

デルフィーニはにやっと悪戯っぽく笑うと、あっさり通り抜けてしまいました。女の子は魔法戦士の耳に聞こえない距離まで来ると、義姉に尊敬の目を向けました。

「デルフィー姉さま、さすがです！」

「錯乱させたのは、義母さんに関する部分だけよ。義母さんは本来、この特別区に入る人だからね。簡単だったわ。ふふ、警備の魔法使いも大したことがないのね。

さてと、ポッターはどこかな……？」

義姉は女の子から手を離すと、足を弾ませながら探し始めます。

女の子はきよろきよろと辺りを見渡しました。

さすがは、特別区。

一面、巨大なテントが立ち並んでいましたが、一般区より人が少なく感じました。

背の高い魔法使いたちが談笑しながら緩やかに歩いたり、互いにハグしたりする姿が目立ちます。

しかし、ちょっとした事件が起きてしまったのです。

「つまずい、ロングボトム先生だ」

デルフィーニは素早くテントの陰に隠れたのですが、女の子は周囲の様子に気を取られていたため、義姉が隠れたことに気付かなかったのです。

「デルフィーニ姉さま、不思議な服装の人がいますね。……あれ？」

ワールドカップ出場国の国旗を組み合わせたデザインのローブを着た銀髪の女性の傍を通り過ぎたとき、ようやく女の子は姉とはぐれたことに気付きました。

「姉さま？」

義姉の姿は、どこにも見当たりません。

あたりは皆、知らない人ばかり。両親からも遠く離れ、義姉がいなければ区画の外に出ることも難しいでしょう。杖さえあれば、女の子にもこの場を潜り抜けることができたのですが、父親の教育方針上「杖を持つのは、ホグワーツに入学する年になってから。それまでの魔法の練習は、オレから杖を借りること」となっていた

のです。

「姉さま、姉さま……」

ことさらに人通りの少ない場所に迷い込み、女の子は半分べそをかきながら進みます。

もう二度と、義姉と会うことはできないかもしれない。

それどころか、両親と会うこともできないかもしれない。

8歳の女の子は一人ぼっちで心細くて、途方に暮れて進むことも戻ることもできなくなってしまう、やがて、泣くものにも疲れ果て、女の子は膝を抱えて小さく小さく座り込んでしまいました。

こうして蹲っていると、ますます世界から切り離されて、一人ぼっちになったような錯覚に陥ってしまいます。

特別区の片隅で、女の子は一人ぼっちの子ウサギのように寂しさに震えていました。

そんな時でした。

「君、どうしたの？」

暗い雨雲の中に差し込んだ一筋の日差しのような声に、そっと顔をあげます。

そこにいたのは、ゆるっとした黒髪に緑の瞳をした男の子でした。

「迷子？」

こちらを案じる視線、心から心配している声を聞いた瞬間、女の子の身体に衝撃が奔りました。

「……違う」

女の子は愕然とします。

そこにいるのは圧倒的なまでに、自分の理想とは違う男の子でした。

体格が良くて、もっと鋭い表情を浮かべる男性が良かったのに、ぶっきらぼうで、ちよっと荒っぽい所もあるような人が好みだと思っていたのに、なにもかも理想と正対な人なのに。

あまりに違うことばかりで、間違いなく女の子は一人ぼっちの悲しみなど吹っ飛ばくくらい驚いて、優しさに喜んで、心臓が破裂しそうなくらいドキドキして——……エリザベス・ノットは、一目で恋に落ちたのでした。

「違うの?」

男の子はきょとんと首を傾げます。

そんな何気ない姿まで愛おしく思えるほど、女の子の瞳は男の子に釘付けでした。

「ううん、迷子です」

「そっか。うーん、じゃあ、僕と一緒に探してあげる。どこから来たの?」

「え、……あの、そのまえに姉を探さないと……」

「あー、そのお姉さんから探さないといけないのか。子どもがいそうな場所ってどこだろう……? ローズに聞けば分かるかな。付いてきて」

男の子が歩き出そうとした瞬間、女の子は男の子の袖をつかんでいました。

「あ、あの……! 手をつないでも、いいですか!？」

「……? うん、いいよ」

男の子が少し戸惑いながら、女の子の手を握ります。

女の子は男の子と並んで歩きながら、身体の内側で燃え上がる初恋の炎に終始どきどきしていました。

なよっとしているけど、初めて会った自分を気にかけてくれる優しい人。

いいえ、そんなのこと、本当の理由にもならないでしょう。

「その……リザは……エリザベスって言います。リザって呼んでください」

彼のことが好き。

他のすべてが霞んで見えてしまうくらい、彼のことが好き。

すべての理由は後付けで、彼を一目見た瞬間から、心を奪われてしまったのです。

「僕は——……あー……アルでいいよ。ただの、アル」

「アル様……」

「いや、アルでいいよ?」

困ったように笑いながら歩く男の子に惹きつけられながら、エリザベス・ノットは彼の名前を繰り返します。

男の子の素性なんて、どうでも良かったのです。

絶対に、この手を離したくないと思いました。どうやっても、この人の緑の瞳に視線が吸い寄せられてしまいました。

「……いいえ、アル様と呼ばせてください」

この人が、自分の生涯で最も特別な人だ。

祖父の言葉通り、命を投げ出すような真似はしたくありませんでしたが、この人と一緒に地獄だって付き合えると思うほど、心に熱が灯っています。

「あなたは、リザに手を差し伸べてくれた……王子様なのですから」

エリザベスは赤くなった頬を隠すことなく、男の子に心から微笑みかけました。

この後、ハリー・ポッターはセレネの娘から

『リザに息子さんをください！ 絶対に幸せにしてみせます！』

と言われたことに衝撃を受け、セレネは娘の奇行に頭を悩ませることになるので

した。

これは、「19年後」に続く物語。

次回、第一話「未知との遭遇」。

今後、物語の視点はリザではなく、基本的にはアルバスで行く予定です。

「呪いの子」では、アルバスとスコープウス以外の孫世代が活躍していなかったの
で、「七不思議編」では満遍なく活躍できるように気を付けて執筆していきたいで
す。

投稿予定日は6日の0時です。

お待ちしております。

1話 未知との遭遇

「ホグワーツ七不思議」編、開始します。

呪いの子編のオリジナル前日譚です。

かたん、ことん。

真紅の汽車は、魔法の城を目指して走り出した。

ほとんどの生徒はコンパートメントに座り、夏休暇の思い出を友人たちと語り合っている時間だったが、新入生の3人は車両の通路を通り抜けている。

アルバス・ポッターは組み分けに関する恐怖を胸に溜め、エリザベス・ノットはアルバスのことだけを考え、そして、ローズ・グレンジャー―ウィーズリーはホグ

ワーツに対する興奮で頬を上気させていた。

「いい、2人とも。気持ちを集中させるのよ」

ローズは肩で風を切るように歩きながら、後ろに続く二人に声をかけた。

「誰と友だちになるのか決めるの。私のパパとママがアルのパパに出会ったのは、ホグワーツ特急だったのだから」

「生涯の友だちを決めるの？ それって、僕、すっごく怖いよ」

「アル、何を言ってるの？ 私、わくわくするわ！ 私はグレンジャー——ウィーズリーだし、リザはゴーンの娘、あなたはポッターよ。みんなが友だちになりたがるわ。選り取り見取りじゃない！」

「アル様、安心してください。アル様に友だちができなくても、このリザが傍にいますので」

「はいはい、エリザベス。ありがとう。」

それで、ローズ、どうやって決めるの？ どのコンパートメントに座るかって」
アルバスはリザを軽く受け流すと、ローズに質問を投げかけた。

ローズは得意げに背筋を伸ばしながら、

「全員を評価して決めるのよ！」

手近なコンパートメントの扉を開く。

そこには、一人……寂しげなブロンズの少年が座っていた。アルバスが少年に笑いかけると、彼もにこっと笑みを返してくる。

「この席……」

「空いてるよ、僕一人だ」

「よかった。じゃあ、僕たち……ちよつとの間だけ、座ってもいいかな？」

アルバスはローズの顔を窺いながら、少年に尋ねる。

「いいよ、座りなよ」

アルバスとリザ、そして、ローズは並んで座った。

「僕はアルバス。アルだ」

「僕はスコルピウスだ。君はアルバスで、僕はスコルピウス。それで、君は確か……」

「ローズよ」

ローズは少し強張った表情で応える。

「やあ、ローズ。ファイファイ・フィズビーは食べる？」

「結構よ。朝食を食べたばかり」

「じゃあ、君は？ えっと……」

「リザです。ごめんなさい、リザはファイファイ・フィズビーが苦手です……アル様は好きですよ？」

「エリザベス、人前でその呼び方止めて。」

でも、まあ、僕はそのお菓子好き。ママが甘い物を食べさせてくれないんだ」

アルバスはお菓子を受け取ろうとしたとき、ローズが背中を叩いてきた。

不審そうに彼女を見るが、ローズは強張った顔をしていた。

「ローズ、なんで叩くんない？」

「あら、叩いてないわ」

アルバスはそこで一回黙り込む。

スコーピウスは怪訝そうな顔をしたが、すぐに表情を戻した。

「アルバス、お菓子は好き？ 他のもあるよ。激辛ペッパーに蛙チョコレートも。母の考えなんだ。『スイーツがあれば、きっと友だちになれる』って……あ、でも、

馬鹿げた考えだな」

「僕、少し貰うよ。でも、どれから食べればいい？」

アルバスが会話を続けようとすると、再びローズが背中を叩いてきた。

「ローズ、やめてよ」

「なにもしてないわ」

「叩いてる。痛いよ」

アルバスが重ねて言うのと、スコープピウスの顔が曇った。

「僕のせいで叩いてるんだ」

「え？」

「僕は君が誰なのか知ってる。だから、君も僕のことを知らないとフェアじゃない。君はアルバス・ポッターで、彼女はローズ・グレンジャー——ウィーズリーで、その子はエリザベス・ノット。そして、僕はスコープピウス・マルフォイ。僕の父親は……君たちの両親と相性が悪かった」

「そんな生易しいものじゃないわ！ この子のパパとママは死喰い人よ！」

ローズが断定する。

すると、スコープピウスの眉間にしわが寄った。

「父はそうだったけど、母は違う。知ってるだろ、アステリアはADのメンバーだった！」

スコープウスに返されて、ローズは目を逸らす。

彼女の反応を見た途端、スコープウスの声に怒気が混ざった。

「あの噂を知ってるんだね。でも、嘘だ」

「なんの噂？」

「僕の両親には子供ができなかった。そういう噂だよ。父と祖父がマルフォイ家の血筋を絶やさないと強い後継ぎが欲しくて必死だった。だから、二人は……逆転時計を使って、僕の母を過去に送り——……」

「過去の、どこ？」

「アル様……ヴォルデモートが生きていた時代ということですよ」

リザが少し重たい口調で答える。

その先の言葉は、はっきりと口にしなかったが、アルバスにも理解できた。アルバスも視線を逸らした。すると、彼の上質なトランクが目に見え込んできた。そこには黄色のスプレーで『ヴォルデモートの息子！』と落書きされていた。

「トイレから戻って来たら、こうなってたのさ」

スコルピウスが肩をすくめた。

ローズは一瞬、気の毒そうな顔をしたが、いつもの気の強そうな表情に戻ると「まったく、たぶんいい加減な噂よ。だって、あなたには鼻があるわ」

と言い切り、杖を取り出した。

「『スコージファイ―清めよ』!」

トランクの文字が歪んだ。あいかわらず黄色は残っていたが、少なくとも、何が書いてあるのか分からない程度にマシになった。

「ありがとう!」

張り詰めていた空気が少し緩み、スコルピウスは嬉しそうに笑った。

「感じの悪い言葉だったから消しただけよ」

「それでも嬉しいよ!」

それに、僕は父とそっくりなんだ! 鼻も髪もね。それが別に素晴らしいってことじゃないんだけど……父と息子の問題、それがあるしね。だけど、いろいろ考えると、僕はマルフォイ家の息子の方がいい。なんていうか、闇の帝王の息子より

ね」

はにかみながら話してくれた言葉を聞いて、アルバスは少しだけ目を見開いた。アルバスは生まれてからずっと、どこへ行っても偉大なる父の名前が付いて回る。周りから噂されるし、ハリー・ポッターらしい兄のジェームズとも比べられる。

自分は目立ちたくないのに、親のことで話題に上がってしまう。スコープウスも同じだと知って、アルバスはなんだか通じ合うものを感じた。

「アルバスったら……」

そんな二人を見て、ローズは大きく肩を落とした。

「さあ、どこか別のところに座った方がいいわ。二人とも、行きましょう」

「いや……僕はここがいい。君だけ行って」

「アルバス、待たないわよ？」

「ああ、勝手にすればいいさ。僕はここに残る」

ローズは少し驚いたように一瞬、アルバスを見つめると立ち上がった。

「リザ」

「ローズ、ごめんなさい。リザもここに残ります」

ローズはりざを見て呆れたように息を吐くと

「ご自由に！」

荒々しい足取りで、外へ出ていった。

コンパートメントには三人だけが残された。気まずい沈黙が流れる。

「えっと……リザは、うん。気にしてませんよ。おじいさまは死喰い人でしたが、
とっても優しくて、博識です」

「……ありがとう、二人とも」

「ぼ、僕は君のために残ったわけじゃないさ！」

アルバスは慌てて、スコルピウスから目を逸らした。

そして、必死に残った言い訳を考える。

「僕がここに残ったのは……そう、フィフィ・フィズビーのためだよ。他にもス
イーツ、持ってるんでしょ？」

「もちろん！」

スコルピウスは大きく頷くと、にやっと笑った。

「ねえ、アルバスって呼んで欲しい？　それとも、アル様？」

「アルバスにして！」

アルバスは即答する。

すると、スコーピウスは雨上がりの日差しのように晴れ晴れとした笑顔で

「アルバス！ スイーツのために残ってくれて、ありがとう！」

と叫んだ。

アルバスも照れくさそうに髪を掻きながら

「うん、まあね」

と答える。

ここまで喜ばれるとは思っていなかったの、どのような反応をすればいいのか分からなかったのだ。

「アル様は優しいですね」

「優しくないよ。リザはローズと行かなくてよかったの？」

「アル様のいるところ、エリザベスあり！ リザは、どこまでも付いてきます」

「……この子、こういうところあるんだ。たまに鬱陶しい」

アルバスは申し訳なさそうにスコーピウスを見た。リザは邪険にされたが、にこ

にことした笑顔を崩さない。

「よろしく、エリザベス」

「こちらこそ、よろしく願います」

ホグワーツ特急が汽笛を鳴らす。

それからの時間は、アルバスにいつになく早く感じた。

アルバスはローズと一緒にいると気疲れすることも多かったが、スコープウスと話していても疲れることがない。むしろ、その逆で、楽しくなって会話が弾んだ。話せば話すほど、彼が「ヴォルデモートの息子」だなんて噂は嘘だと確信する。ヴォルデモートの息子だったら、ハリー・ポッターの息子を毛嫌いするに決まっているし、もっと暗くて陰気な人だ。

「アルバスは、スリザリンになりたくないの？」

「うん、そうなんだ」

アルバスは少し声を潜めた。

アルバスは、どこか恥ずかしいことを告白したような気持ちになった。

「その……勇敢な魔法使いの寮じゃない」

「スリザリンはセブルス・スネイプ先生の寮ですよ」

リザが教師の名前を上げた。

「蛇顔男のスパイとして長年働き、アル様のお父様を護るために最後まで戦った勇敢な英雄です。愛に殉じた人……リザは彼の生き方に憧れます」

「本人は英雄扱いが嫌みたいだけどね」

スコープウスが話しを続けた。

「いろんな歴史家が彼にインタビューをしに行くんだけど、すぐに追い返されちゃうんだってさ。『本を読め。我が輩が語ることは何もない』って。そういうところ、ちよつとカッコ良いよ。……でも、アルバスが言いたいのは、そういうことじゃないんだろ？」

「……うん」

アルバスは怖かった。

勇敢な魔法使いの寮……グリフィンドールに入れなかったら、さらに父との確執が開いてしまいそうで怖かったのだ。

ハリー・ポッターのように勇敢でもないし、機知に富んでいるわけでもない。似ているのは髪の色と目の色だけ。むしろ、その繋がりのおかげで、周りの人たちは

『彼が一番、ポッターに似ている』

と勘違いしている。

アルバス自身は、そこまで父と似ているとは思わないし、それが息苦しいまで重く圧し掛かっていた。

「僕の両親はスリザリンだった。僕がスリザリンじゃないと、父はがっかりすると思う」

スコープウスが考えながら話し出す。

「でも、僕は僕だ。グリフィンドールでもハッフルパフでも、スコープウス・マルフォイであることには変わらない。エリザベスはエリザベスだし、アルバスがアルバスであることには変わらないさ」

「スコープウス……」

「……あー、ごめん。でも、やっぱり、落ち込むかも」

スコープウスは苦笑いを浮かべた。

そんな彼を見て、アルバスも表情を緩めた。

「君って、優しいね」

「ありがとう、アルバス」

こんな調子で時が流れていく。

だから、アルバスは汽車にいる時間が好きだった。このまま時が止まればいいのに、とさえ思ってしまったほどだ。

しかし、現実は一層厳しい。

汽車は駅に着き、新入生はハグリッドと一緒に船で城まで向かう。アルバスはスコープウスとリザの間に隠れるように、少し頭を低くして船に乗り込もうとしたが、ハグリッドに見つかってしまった。

「ん？ おお、アルバス。そんなところにいたのか！ 元気にしとったか？」

ハグリッドはアルバスを見つけるや否や、コガネムシのような瞳をきらきら輝か

せ、弾んだ声で話しかけてくる。

「懐かしいわい。お前の親父さんもこんなちっこい時に船に乗ったんだ」

彼に他意はない。

純粋な喜びなのは分かるが、そのせいで周りに「アルバス・ポッター」の存在が知れ渡ってしまった。船から身を乗り出して見ようとしたり、隣の子と囁き合ったりしている。アルバスは身体がむず痒くなった。

「……あの連中、湖に落としましょうか」

リザが腰に下げた杖に右手を伸ばしながら尋ねてきた。

アルバスは急いで首を横に振り

「いいよ、気にしてないから」

と、すぐに止めさせた。

リザは杖から手を放したが、どこかびりびりした様子で周囲を見渡していた。

湖から望むホグワーツ城は絶景で心を奪われた。その間は誰もが城に夢中になっていたので良かったが、大広間に入る前、組み分けを待つ間は、これまでの人生で一番苦痛の時間だった。

「ほら、あの子、見た？ 黒髪の女の子の隣の……」

「ハリー・ポッターと瓜二つだ」

「同じ髪をしてる。眼の色も同じよ」

周囲のざわめきが聞こえてくる。

その声、一つ一つが重く鉛のようにアルバスの首を絞めつけているように思えた。もっとも、

「そうよ、私のいとこだもの」

ローズが腰に手を当てながら声を上げた一瞬、全員の視線が彼女に向けられた。

「ローズ・グレンジャー・ウィーズリーです。初めまして」

この言葉で、ローズに注意が逸れた。

同じ一年生たちは全員、ローズの周りに集い、質問したり話に花を咲かせたりしている。ローズはまんざらでもない表情で一人一人に応えていた。

きつと、まだ「全員を評価して友だちを決める」を実行しているのだろう。

「ローズは人気者ですね……」

リザが感心したように呟いていた。

「エリザベスだって、両親の名前をあげれば周りに人が寄ってくるさ」

アルバスは少し投げやりな気持ちで答えた。

「んー……でも、リザだったらああはなりません」

リザは蒼い瞳を少し細めた。

「人は集まりますが、盛り上がりません。ローズはリザとは違い、人を従えるような気配を漂わせていますから」

「そうだね、僕はローズとは違う」

アルバスは人だかりの中心にいる赤毛の少女を眺める。

いとこ同士だが、性格は全然違う。

ローズは自分の出自に誇りを抱いている。どこことなく、兄のジェームズに近い気がした。二人とも親の偉業を重荷とは思わず、むしろ当然と受け止めている。偉業に恥じないだけの実力がある。先ほどだって、ローズは上級生で習う呪文を使っていた。

アルバスは、まだ呪文を使ったことがない。

訂正。使えたことがない。父の杖をこっそり使ったことがあったが、居間を壊し

て叱られた。

「いいえ、アル様の周りに余計な人が集まらないのは違いますよ」

リザが真顔で否定する。

「どうして？」

「リザの眼が黒いうちは、不屈き者を近づけさせないからです」

「いや、そういうのいいから」

「おしゃべりは、そこまでにしたまえ」

アルバスとリザが話していると、上から黒い影が降ってきた。

顔を上げると、そこには土気色の顔に鉤鼻の男が立っていた。髪は黒くねっとりとしており、肩まである長髪の前髪を左右に分けている。

「寮も決まっていらない諸君から減点はできない。よって、退学という形の処分をくだすことになるやもしれん」

しん、と静まり返る。

セブルス・スネイプ副校長に睨まれた新入生たちは、蛙のように縮こまった。アルバスも怖くて小さくなる。ちらっと周囲を見たかぎり、スコープウスだけがらん

らんと目を輝かせ、スネイプ副校長を見上げていた。

「ついできたまえ」

スネイプは漆黒のローブを翻して歩き出した。

アルバスたち新入生は彼の後に続く。大広間は想像していたよりも狭かった。生徒たちから先生まで、びっしり四つのテーブルに座っているからかもしれない。

「入学おめでとう、皆さん」

真ん中に座っている深緑のローブを着た魔女が立ち上がった。

「学校長のミネルバ・マクゴナガルです。歓迎の宴の前に、組み分けの儀式が行われます。恐れることはありません。帽子が皆さんに最もふさわしい寮を決めます」

マクゴナガル校長が杖を一振りすると、新入生の前に古びた帽子が現れた。

スネイプはマクゴナガルから帽子を受け取ると、長いリストに目を落とした。

「ポリー・チャップマン」

新入生の中から、ひと際背の高い女の子が颯爽と現れた。ぱっちりとした二重瞼に金髪の美少女は組み分け帽子を被る。

そして、帽子が叫んだ。

「グリフィンドール！」

ポリーは顔を輝かせながら、グリフィンドールのテーブルに加わった。

このように、帽子が選ぶのだ。それぞれの子が7年間過ごし、指針となる寮の名前を。

「ローズ・グレンジャー——ウィーズリー」

スネイプが平坦な声色で名前を呼んだ。

ローズは自信たっぷりの表情を浮かべていたが、アルバスの傍を通り過ぎるとき「大丈夫、落ち着いて」

と、自分に言い聞かせるように呟いていた。

そして、ローズの髪に帽子が触れるか触れないかのところで、帽子がくわっと

口を開き

「グリフィンドール!!」

と叫んだ。

ローズは歓声を上げるグリフィンドール生に加わった。

「ダンブルドア様、ありがとうございます!!」

ローズはダンブルドアに祈りを捧げる。

ダンブルドアは神様にも等しい。

ハリー・ポッターたちに英知を捧げ、不死鳥の騎士団を率いた賢者だ。ヴォルデモートに壊滅的な一撃を与えただけでなく、その前に名を馳せていた極悪人グリンドルバルドを倒したほどの実力者。

アルバスの名前は彼から来ているが、これも名前負けしてるようで恥ずかしく思っていた。

「リザは分かりませんね」

アルバスの耳元に、リザが囁いてきた。

「パーシヴァルおじさまは『ダンブルドアは神格化されるほど素晴らしい人ではない』って言ってましたよ」

「グレイブスさんだって、かなり胡散臭いと思うけどね」

アルバスがリザとひそひそ話していたときだった。

「エリザベス・ノット」

リザの名前が呼ばれ、彼女は少し早足で帽子に近づいて行った。

彼女にしては珍しく、少し緊張気味な顔で帽子を被る。

「……スリザリン！」

ややあってから、寮が決まった。

リザは少しほっとしたように肩を落とすと、テーブルの方へ走り出した。

「なんだ。エリザベスも不安だったんだ」

まったく気にしてないように振る舞っていたが、やはり両親や義姉のデルフィーニと同じ寮が良かったらしい。

アルバスは再び、組み分けに集中した。

スコーピウスが呼ばれて、歩き始めたのだ。スコーピウスは厳しい目付きで、組み分け帽子を被る。

「スリザリン！」

スリザリンのテーブルから喝さいが上がる。

スコーピウスは中途半端に微笑むと、そのテーブルに加わった。

「まあ、当然ね」

近くのテーブルから、そんな声が聞こえた。

声の方を見ると、ポリーがいた。彼女はスコープウスを小馬鹿にするような目で見ていたが、アルバスが見ていることに気が付くと、にっこりと微笑みかけてくる。アルバスは彼女からいそいそと目を逸らした。

新入生の人数が少しずつ減ってきている。

アルバスを含め、あと数人しか残っていない。

「アルバス・ポッター」

アルバスの名前が呼ばれた。

騒がしかった空気が、しんと静まり返る。生徒や先生たちの視線が一身に集まり、アルバスは足がすくみそうになった。

帽子を持っているセブルス・スネイプの視線も痛い。

このまま消えてなくなりたい、と思いつつながら、アルバスは帽子を被った。

『ふむ……ポッターの息子か……』

アルバスの脳内で帽子の声が響いた。

『難しい、非常に難しい……』

勇気もある。頭も悪くない。才能もある。さて、どここの寮へ入れたものか……』

アルバスは帽子の声を聞きながら、首を横に振る。

僕はそんな大したものではありません、ポッター家の落ちこぼれです、と。

『父と比べられるのが嫌なのかね？』

君には御父上から受け継いだ大きな才能がある。恥じるのではなく、誇るべきことなのだ。だが、そうだな……間違いない偉大なる道が開ける寮があると知ったら……その寮を選ぶかね？』

帽子が囁いてくる。

アルバスは少し悩んで首を縦に振った。

こんな僕でも少しでも偉大な父のようになれるのであれば、その寮に進みたいとすると、帽子は口を大きく開いた。

「スリザリン！」

瞬間。

静寂が重くなった。

完璧な、深い静けさだ。沈黙は重く、わずかに捻じれ、痛みを内包している。

「スリザリン？」

「ポッター家の子が？ スリザリンに？」

だがやがて、囁き声がさざ波のように広がっていく。

アルバスはどうしていいのか分からず、落ち着かない顔であたりを見た。

「スリザリンに行きたまえ、ポッター」

スネイプが声をかけてくる。

おそろおそろ顔を上げたが、のっぺりとした表情から何も読み取れない。アルバスは、この場から逃げるようにスリザリンのテーブルへ駆けだした。

「アル様、こっちです！」

「ここに来て、アルバス！」

リザとスコープウスが嬉しそうに笑いながら、手を大きく振ってくる。

「あ、ああ、うん」

アルバスはリザの前、つまり、スコープウスの隣に座った。

そこから一瞬遅れて、スリザリンのテーブルが歓迎ムードに包まれる。アルバスは困惑しながら、周囲に笑いかける。

「アルバス？ 何かの間違いよ、アルバス！ そんなはずないわ！」

ローズの悲鳴が一瞬、聞こえたような気がした。

だけど、それはスネイプの次の生徒を呼ぶ声でかき消されてしまう。スネイプが何事もなかったかのように進行してくれたから、アルバスは安心した。

「アルバス、心配いらないさ」

上級生たちが物珍しそうな目を向けてくる中、スコープウスが背中を叩いてきた。「スリザリンは、スネイプ副校長が寮監だよ。大船に乗ったつもりで過ごしたらいいんじゃないか？」

「でも……スネイプ先生は、父さんのことを……」

「意地悪をしていた。それは本当さ。本にも書いてある。でも、さすがに息子にまでそれを引き継ぐことには……ならないんじゃないかな、たぶん」

「スネイプ先生のことについて、ジェームズから聞かされていないのですか？」
リザが投げかけてきた。

アルバスはポークチョップをつまみながら、少し悩みこんだ。

「魔法薬の授業で、減点されない日はないって。見かけた途端、すぐに難癖付けて減点してくるから大っ嫌いな先生って」

「……それは、ジェームズの容姿と名前が原因なのでは？」

リザの答えに、アルバスは苦笑いをした。

セブルス・スネイプがアルバスの祖父を憎んでいたことは、すでに周知の事実だ。父が彼に授業のたびに虐められていたのは、それが起因しているらしい。

「いいや。きっと、僕もそうさ」

「それはないですって。デルフィー姉さんは言っていましたよ。なにかとスリザリン
最屑だって」

「デルフィーだからだよ。僕は……君の義姉さんほど優秀じゃない」

「まあまあ、二人ともそこまでにして。余計なことは考えない。明日一番の授業は
『飛行訓練』だよ。杖はいらない。何も気に病むことはない」

スコールピウスが配られたばかりの時間割を提示する。

それを見て、アルバスは一段と胃が重くなった。

「僕、箒に乗ったことがないんだ」

「えっ？」

スコールピウスが目を丸くする。

「君のお母さんはホリヘッド・ハーピースの選手だろ？」

「だった、だよ。今は日刊預言者新聞のスポーツ面の特派員」

アルバスの表情が暗くなった。

それを見て、リザは肩をすくめる。

「リザが聞いた話では、ポッター家では箒の使用が禁止されているそうです。危ないからって」

「シリウスおじさんが、ジェームズの1歳の誕生日に箒を贈ってくれたらしいんだ」

アルバスはスプを匙でかき混ぜながら話し始めた。

「だけど、ジェームズが近所の猫とかピグミーパブをひき殺しかけたみたいで……父さんとシリウスおじさんは面白がったんだけど、母さんが激怒してさ。『箒はホグワーツに入学するまで禁止です！ 入学してからでも、十分、クイディッチはできます！』ってね」

「うわっ……」

「だから、ジェームズは去年、おじさんから新しく貰った箒でたくさん練習したら

しいんだ。それで、すぐにグリフィンドールのクイディッチチームに入団したんだって。休みの間、ずっと喜んでいたよ。父さんや母さんと同じ、シーカーになったって」

アルバスはグリフィンドールのテーブルに目を向ける。

ジェームズがローズと話し込んでいる姿が見えた。ローズは背中だけしか見えな
いが、ジェームズはアルバスが見ていることに気付くと、一瞬、辛そうな顔になっ
たが、すぐに目を逸らした。

いつもの通り悪戯っぽく笑いかえされたり、冗談を言われたりする方が、ずっと
マシなのに。

アルバスの心が再び落ちていく。

「ということなので、アル様は箒を持ったことがあります。だから、まだまだ可
能性があるってことです」

リザがさらっと言葉をかけてきた。

「ジェームズより才能があるかもしれませんよ？」

「……そうかな」

「エリザベスの言う通り、アルバスは気にしすぎだよ。ほら、糖蜜パイがあるよ。食べる？」

「……ありがとう」

アルバスはスコーピウスから糖蜜パイを受け取りながら、少し気持ちが楽になっていく気がした。

箒で空を飛ぶのは、アルバスの夢だった。

たしかに、魔法は上手くできないし、ジェームズと比べて何もかも劣っている落ちこぼれだけど、箒で飛ぶくらいは父の才能を受け継いでいるのではないか？

それに、組み分け帽子も言っていたではないか。「君には才能がある」と。

糖蜜パイを食べながら、明日の授業に思いを馳せる。

風を切って自由に大空を飛ぶことができれば、それは、なんて気持ちの良いことなのだろうか——……。

そして、ついに次の日。

一時間目が「飛行訓練」だった。

グリフィンドールとの合同で、アルバスたちが校庭に入ると、ローズが近づいてきた。

「アルバス。もう一度、組み分けを頼んだらどう？」

「ローズ。組み分けは覆せないよ」

「貴方、そういうところが駄目なのよ。授業後、一緒にマクゴナガル先生の所へ行きましょう。きっと、やり直してくれるわ」

「だけど……」

アルバスがローズの言葉に圧されていると、

「私の親友。彼が遠慮しているのだから、放っておけばいいのよ」

ポリー・チャップマンが彼女の肩を叩いた。

「彼はスリザリン。私たちはグリフィンドール。決まったことですもの。ほら、行きましょう」

「ポリー……ええ、そうね。行きましょう」

ローズはポリーと一緒に、グリフィンドールの生徒たちへ交ざっていった。不思議と、悲しい気持ちにはならなかった。

「ああ、彼女って優しいな」

アルバスの隣で、スコープウスが声を上げた。

「ローズ……本当に人がいいね」

「そうかな？」

アルバスが首を傾けていると、フーチ先生が風を肩を切りながら歩いてきた。

「全員、箒の横に並ぶ！ もたもたしない！」

フーチ先生の檄で、アルバスたちは急いで箒の横に並んだ。

「箒の上に手を出して！ 『上がれ』と言いなさい」

「上がれ！」

誰よりも先に、ローズの箒が上がった。

それよりも半歩遅く、リザの箒も上がる。

アルバスの箒は動かなかった。

「さあ、怠け者には用がありません。『上がれ』と言いなさい。『上がれ』と本気で！」

「上がれ」

今度は、ほとんどの生徒の箒が上がった。

スコープウスやポリーの箒も上がっている。アルバスは焦った。

「上がれ！ 上がってば！」

箒は動かない。

ぴくりともしない。アルバスは幾度となく叫んだが、まったくもって音沙汰がない。アルバスは打ちひしがれて箒を見下した。

クラス中から忍び笑いが聞こえてくる。

「ふふ、マーリンの髭。なんて、恥さらし！ 父親とまるで違うじゃない？」

「くすくす、アルバス・ポッターはスリザリンのスクイブだ」

『「サーペンソーティア―蛇よ出よ」』

瞬間、ぱんっと大きな音が鳴った。

「人が言われて嫌なことを言っただけじゃないって、親から習ってこなかったんですか!？」

リザが杖を引き抜いていた。

ポリーとグリフィンドールの男の子が怯えたように尻もちをついている。彼らの前には一匹のヘビが蠢いていた。

『首をあげろ』

リザがシューシューと呟く。

すると、蛇が首を上げて、リザと一緒に威嚇するように二人を睨み付けた。リザの青い瞳の奥に、ちらちらと赤い色が混じっている。

「ノット、やめなさい」

しかし、この睨み合いは長く続かなかった。

フーチ先生が間に割って入る。軽く杖を振って蛇を消失させると、鷹のような目

でリザを一瞥する。

「勝手に呪文を使わない。スリザリンから2点減点！ ほら、貴方たちもぼさつとしていない。授業を再開します。さあ、飛んでみますよ」

「ですが、先生！ あの人たちは——……」

「まずは授業優先です。さあ、箒に跨って握りなさい」

フーチ先生は強い口調で言い放った。

リザは悔しそうに唇を噛みしめると、力強く箒を握る。アルバスは彼女の姿を横目で見ながら、地面に転がった箒を拾った。

「私が箒を吹いたら、地面を強く蹴ってください」

アルバスはその声を聞いて、ぐっと腹が振れるように気持ち悪くなった。

また、置いて行かれる。

また、後ろ指をさされる。

また、女の子に庇われる。

「箒を吹いたらですよ、一、二の——……」

アルバスは思いつき蹴った。

だけど、緊張するや怖気づくやの気持ちさがこったまぜになり、先生の唇が笛に触れる前に、思いつきり地面を蹴ってしまったのだ。

その後は、凄かった。

アルバスはシャンパンのコルク栓が抜けたかのように、ばびゅーんと城の三角に尖った屋根まで飛ばされた。箒を持つ指からも血の気が失せて、感覚が消えていく。けれど、ここで指を離したら、絶対に死ぬ。

アルバスは必死になって箒にしがみついた。地上に戻りたい、その一心を願ったら、今度は箒が地面へ急速に落ち始めたのだ。

真っ逆さまに落ちていく。

ずっと昔、両親に連れて行ってもらったマグルの遊園地の遊具「ジェットコースター」みたいに。あの時も心臓が縮む思いだったが、安全バーが身体を固定してくれたし、コースターは定められた線路の上を走っていた。

今回は、その両方がない。

「——ッ!!」

アルバスは声にならない悲鳴を上げた。

地面が近づく。

そして、草が見極められるほど近くまで接近したとき、アルバスは四肢が粉々になるような衝撃を感じた。周囲が暗転し、視界が黒ずみ、誰かが駆け寄ってくる音が遠くから聞こえる。

そして——……

「あら、目が覚めたのですね」

消毒液の臭いと一緒に、花のような甘い香りがする。

アルバスは瞬きをした。すると、穏やかな眼差しがアルバスを覗き込んでいた。

「フーチ先生から、箒で10メートル落下したと聞きました。骨が折れていましたので、僭越ながら貴方が眠っている間に治させていただきましたわ」

「はあ、ありがと——っ、うございます！」

アルバスは答えようと彼女を見上げ、すぐに視線を逸らした。

距離が、物凄く近い。

リザやローズがこのくらいの距離にいても（たぶん）何とも思わないが、今回ばかりは違った。しなだれかかっている女性の重みが肉感的で、正常の思考が追い付きそうにない。顔が真っ赤に茹で上がるのを感じる。

「元氣になられてよかったです。入学後、わずか1日も経たずに医務室の世話になる生徒がいるとは驚きでしたが、こうして初日から知りえたのも何かの縁。これからよろしく願いますね」

どこか夢をみるような声で言いながら、女性はようやく身体を退けてくれた。

ここで初めて、女性の全身を見る。煽情的な身体つきであることも眼を惹いたが、なにより物珍しかったのは服装だ。修道女のように黒い服を纏い、頭は白い布を巻き付けている。

「えっと、貴方は……？」

「ああ、申し遅れました」

女性はジニー・ポッターよりも豊満な胸に小さな手を添えると、少し屈みこんで
嫺やかに名を告げた。

「私、マダム・ポンフリーの助手、キアラと申します」

「キアラさん？」

アルバスは耳に馴染まない名前を口にしながら、ふと、デルフィーニに言われた
言葉を思い出す。

「もしかして……デルフィーの知り合いですか？」

「ええ、もちろん。彼女は私の後輩ですから」

キアラはふふっと清楚に微笑んだ。

「ですが、もしかしたら、私が彼女の後輩になる可能性もあったのですよ。私は14
歳の時にイギリス人の魔法使いに引き取られて、ホグワーツに編入しました。マク
ゴナガル先生は『学校に通ったことがないなら、1年生に編入しますか？』と優し
くおっしゃってくださいましたが、年齢通りの学年に入らせていただいたのです。

1年生に編入していたら、貴方たちの上級生であり、デルフィーニさんの後輩になっていました」

「キアラ。患者とおしゃべりばかりしない！ カルテの整理が残ってますよ」

医務室の奥の部屋から叱責が飛ぶ。

「マダム、申し訳ありません。すぐ戻ります。それでは、アルバス。ゆっくり休んでくださいね——……きゃっ」

キアラは立ち去ろうとしたとき、ヒールが少しずれて倒れ込んだ。

具体的には、アルバスの真上に。

「——ッ!？」

アルバスは、こんらんした。

物凄いインパクトに思考が乱れる。

息が、苦しい。

マシユマロで顔を圧迫されているような感覚から逃れるため、身体を押しつけるようにするのだが、アルバスの指は相手の柔らかい肢体に溶け込んでしまう。

「ああっ、女性のそのようなところに、手を触れるなんて……」

上で、誰かが、なにか言ってる。

だけど、それよりも、まずは凶悪な障害物を退けないと、息が苦しい。

押せば押すたび、瑞々しい肉の弾みが返ってくる。それでいて重さを支えた指先は衣服から離れず、むしろ、癒着するように食い込んでいく——……。

そんな、時だった。

「アル様、お怪我は大丈夫ですか？　ご安心を、薬草学のノートは——っ!?」

とつても聞き覚えのある声が、アルバスの耳に飛び込んでくる。

ここでようやく、キアラの強烈な身体が退けられた。

「ごめんなさい、アルバス。私、うっかりしていました……でも、貴方にあんな激しい一面があったなんて……」

キアラは、ぼつと頬を朱に染めて顔を背ける。

そんな助手の仕草を見て、入り口にいたスコープピウスは生暖かい眼をしていた。

「アルバス……君って意外に積極的だったんだね」

「ち、違う！　誤解だよ、スコープピウス！　リザも勘違いしないで……リザ？」

こんなとき、うるさく騒ぎ立てそうな娘は固まっていた。

リザは何か言おうとして口を開け、しかし押し黙るように口を閉ざし、また口を開けてと、わなわな震えている。顔に全身の熱が集まったかのように茹で上がり、形の良い耳まで真っ赤に染まっていた。

「リザ……大丈夫？」

アルバスがそつと尋ねると、彼女は声を絞り出した。

「な、な、なんて、はしたないことを！ 不潔！ そう、不潔です——ッ！」

これがホグワーツ初日。

そして、アルバス・セブルス・ポッターの始まりの物語だ。

原作からの大きな変更点&独自解釈

○スネイプ 副校長

呪いの子を読む限り、ホグワーツ校長職を辞して一般教員に戻っているようだったので、生き残った男は「魔法薬学」の先生に戻りました。

ただ、他に人がいないということで「副校長」の職に就いています。

○ハグリッド

呪いの子を読む限り、1年生を城まで案内していませんでしたが、7巻の最後に「ハグリッドのお茶の約束を忘れるな」と書いてあったので、これまで通り、1年生の案内係にしました。

○ポリー・チャップマン

アルバスたちと同学年の女の子。

「呪いの子」を読む限りだと、かなりの美少女でグリフィンドール生。

原作だとローズの人間関係がまったく出てこなかったもので、たぶん同室の彼女と行動を共にさせました。

○殺生院キアラ

型月屈指のR18。

本作ではR12くらいに引き下げ……られてる、のかな？

19年後で名前がさらっと出したとき、気にしている人も多かったのですが、セラフィックスに就職した時空と辿った道のりが近いです。

14歳の時にイギリス人癒者によって病を治療されて下山。そのままイギリスへ渡り、ホグワーツへ入学ルートです。

次回もよろしく願います。

2 話 七つの不思議

「……ってことが、ありましたよね」

リザに話を蒸し返され、アルバスは「またか……」と肩を落とした。

「エリザベス、それは1年生の時の話だろ？ 僕たちは、もう3年生だ。

あれ以後、僕とキアラさんは何もない！ 君も知っているだろう？」

「なら、手を出してください。リザが治療します」

アルバスは彼女に言われ、手を後ろに回す。

先程の薬草学の授業で扱った毒触手草の棘に指先を刺され、少しか腫れあがっていたのだ。アルバスの見た限り、授業中に棘に刺されたのは自分だけだったので、ロングボトム先生に見つかって周りに露見するのが恥ずかしく、黙っていたのである。

しかし、この幼馴染は見逃さなかったようだ。

「人に見られたくないのでしたら、あのタペストリーの裏で治療します。大丈夫、リザは治療魔法を練習しましたので！」

「……牙つきゼラニウムの傷を君に任せたら、余計に腫れあがったのを忘れてないからね！」

指先が赤黒く膨れ上がり、今にも落ちそうになってしまったので、慌てて医務室に駆け込んだのは、たしか3日前のこと出来事である。

そのことを指摘すると、リザも視線を右上に泳がせた。

「あー……今回は上手くいきます、たぶん！」

「たぶんじゃ困るんだよ。君、僕の指を失くしたいの？」

「アルバス！ アルバス・ポッター！」

アルバスがリザと軽く言い合っていると、後ろから声が追いかけてくる。

振り返ると、ネビル・ロングボトム先生が息を切らしながら走り寄ってきた。ネ

ビルはアルバスに近づくと、ほとんど囁くような声で

「さっき、棘が刺さってたよね」

と言ってきた。

アルバスは恥ずかしくて顔が赤くなるのを感じた。

「はい、そうですけど……」

「これ、毒消しの薬。塗れば良くなるよ。その……気づいていたんだけど、みんなの前で渡されるのは、恥ずかしいよね」

ネビルは他に誰も見ていないことを確かめると、そつと薬をアルバスのポケットに滑りこませた。アルバスはもぞもぞと礼を口にする。

「その、先生。いつも気を使わせてすみません」

「気にしないで。それでも良くなかったら、すぐに医務室に行くんだよ」
ネビルはアルバスの肩をポンツと叩いた。

「アルバスは、他に困っていることはある？ 僕で良ければ相談に乗るよ」

「いえ、僕は……」

「あら、ネビル！ アルバスとリザも久しぶりね！」

アルバスがネビルと話していると、階段から黒ローブの一団が降りてきた。

一団を率いる栗毛の女性を見た瞬間、アルバスは少し身を縮めた。しかし、つとめて存在感を消そうとするアルバスとは逆に、ネビルは嬉しそうに彼女へ声をかけた。

「ハーマイオニー！ いや、もう気軽に呼べないや。君、魔法省大臣になったん

だってね。おめでとう」

「ありがたい、ネビル。呼び方は今まで通りでいいわよ。肩が凝っちゃう」

ハーマイオニー・グレンジャー・ウィーズリーは苦笑いを浮かべる。

「でも、今日はどうして？ たしか、先週も来てたよね？ 君の娘のローズが

『ママがホグワーツに来ていたのに、クイディッチの試合を見てくれなかったのよ。せつかく、私がシュートを決めたのに！』って拗ねてたけど」

「私も忙しいのよ。これでも、魔法省大臣だから。」

今ね、ホグワーツ高等尋問官の復活について、ミネルバと話し合っているところなの」

ハーマイオニーがその単語を口にした途端、ネビルの顔がさっと変わった。

これまで見たことがないくらい青ざめ、ハーマイオニーを新種の生物のようにまじまじと見返している。ハーマイオニーは慌てたように言葉を付け足した。

「アンブリッジの時代の尋問官とは、もちろん違うわ！

ホグワーツの教師が、ちゃんとした授業を行っているか公平に査定するだけよ。

例えば、ロックハートの自著を読み解くだけの授業は、正直、闇の魔術に対する防

衛術の授業として相応しくないでしょ？ あれでOWL試験を合格できると思う

？」

「それは……難しいと思うけど……」

「それに、時代が変わったわ。セレネが魔法界をマグルから隠そうと必死に飛び回ってる。でも、その前に、旧時代的な考えを植え付けるような教育を変えないといけないわ。」

魔法使いはマグルを馬鹿にせず、むしろ、良き隣人として受け入れ、それでいて、そつと身を隠す。

そんな価値観を子どもたちに身に付けさせないといけないの」

それに対し、ネビルは怪訝そうに眉をひそめた。

「でも、それならマグル学を必修にすればいいと思うけど？」

「甘いわ。かぼちゃジュースよりも甘い考えね！」

マグルの首相の言葉を借りるけど、最も優先するべき改革は1に教育2に教育、3に教育なの！

イギリス魔法界の未来を背負っていく子どもたちの意識を高め、基礎的な魔法を

扱う水準を高めることが大事になってくるのよ。目の前に起こっていることを額面通りに受け取るだけでなく、自分で考え、情報を正しく取捨選択しながら、自分の意見を表出できるような子どもを育てていく必要があるんだから！」

ハーマイオニーの声にだんだんと熱がこもり、早口で言葉をまくしたて始めた。「高等尋問官は、ちゃんとした授業を行っているか確認するの。」

まずは学校長に査定結果を報告し、基準に達していない教師を雇っている理由と改善点を確認する。そして、次に来た時、改善した様子が見られないときは、魔法省ではなく、理事会の議題としてあげるの。

そうすれば、魔法省が過度に肩入れしなくて済むし、もっと開かれて透明化した学校運営が——……」

「……その二人」

ハーマイオニーが話していると、その後ろにいた金髪の青年が小さく囁きかけてきた。

「いまのうちに、黙って逃げな。長くなるから」

青年は小さく頷く。

確かに、ハーマイオニーは自分が語るのに夢中で、聴衆が一人二人減ったところで気づきそうになかった。アルバスはリザと一緒に小さく一礼すると、そそくさと別の廊下へ逃げ込んだ。

「あの人、確か、カローとかいう人ですよ。デルフィー姉さまの友だちです」

「デルフィーの……凄いな」

アルバスは叔父のパーシーが「出世は男の本懐だ」と話していたことを思い出す。ホグワーツを卒業してから数年で、ハーマイオニーと一緒に行動を共にする役職を手に入れるなんて、相当優秀なのだろう。

「……話は戻りますけど、ロングボトム先生は優しいですよ。葉をくれるなんて」
「違うよ。たぶん、僕の父さんたちから言われてるんだ」

アルバスは葉を指先に塗りながら、ますます気持ちが落ち込んでいった。

「父さんの友だちだからね。『僕のことを気にかけてくれ』とか頼まれているんだよ」

「でも、ロングボトム先生は他の生徒にも優しいですよ」

「それは、みんなが僕より優秀だからだよ。僕みたいな落ちこぼれは、どの先生

だって嫌ってる。だって、そもそも、僕はポッター家の——……」

アルバスはここで一度、言葉を切った。

ちようど、1年生の集団と鉢合わせてしまったからである。

しかも、運が悪いことに、グリフィンドールの1年生だ。赤毛の妹は友だちとおしゃべり花を咲かせていたが、アルバスを見ると会話を一度切り上げ、こちらに手を振ってくる。

「アルバス！」

「……はあ、今度はリリーに見つかった」

アルバスはすぐに別の道に入ろうとしたが、妹のリリー・ルーナ・ポッターが邪魔するように駆け寄って来たので、断念せざるをえなかった。

「兄さん。パパとママが心配しているわ！ まだ1度も手紙をくれなくて！」

「僕のことは気にするなよ。ほら、君の友だちも待ってる」

「それとこれとは関係ないわ！ 私は兄さんと話したいの」

「リリー、そんなやつ放っておけよ！」

リリーをからかうように、新たな声が加わった。

その声を聞き、アルバスは疲れたように肩を落とす。新たな声の主は友人たちに囲まれ、冷やかすような笑みを口元に浮かべている。

「ズルズルズルのスリザリン野郎なんてね！」

「ジェームズ！ あんまりだわ！」

リリーは少し怒ったような顔で、兄のジェームズを見上げる。

「リリー。怒り方がママに似てきたな。氣を付けた方がいいぞ？」

「ママは関係ないでしょ！ 私は、貴方がアルバスのことを言い過ぎだって思ってるだけよ！」

「行こう、エリザベス」

リリーの意識がジェームズに逸れた隙に、アルバスはリザの手を引いて別の廊下に駆け込んだ。

タペストリーの裏から別の廊下へ抜け、リリーたちが追ってこれない場所まで来た時に足を止め、彼女の手を離した。

「……言い過ぎ、か」

アルバスは妹の放った言葉を繰り返す。

彼女は「酷いわ」でも「そんなことない」ではなく「言い過ぎ」と叫んでいた。それは、グリフィンドールに入寮した妹も、アルバスについて兄と同じような気持ちを抱えていることに他ならなかった。

ぽつんと水に落とした黒い絵の具が浸食していくように、心が沈んでいくのが分かる。

ホグワーツも今年で3年目。

ジエームズは、クイディッチで素晴らしい成績を誇り、みんなから好かれている。リリーは、1年生だがグリフィンドール寮のムードメーカーとして楽しく学校生活を送っている。

二人に比べ、アルバスの評価は芳しくない。

ポッター家の落ちこぼれで、唯一のスリザリン生。何をやってもダメダメで、ポリー・チャップマン曰く

『アルバスが通ると肖像画でさえ、背を向ける』らしい。

なお、彼女はこの発言のすぐあと、エリザベスに「結膜炎の呪い」をかけられ医

務室に運び込まれた。

このせいで、スリザリンは20点減点。エリザベスは「アルバス・ポッターのブレーキが壊れた忠犬」という二つ名が付けられるのだが、本人はいたって平然としている。むしろ、「犬って可愛い二つ名ですよね!」とか理解に苦しむ喜びを口にしていた。

だから、アルバスはリリーたちから逃げる際、リザが余計な行動を起こさないように、連れてきたのである。

「……はあ、ジェームズの冗談はいつも通り相手にしないでね。報復とか駄目だから。というか、他の人が悪口を言っても気にしちゃだめだよ。だいたいが本当のことだし……エリザベス?」

アルバスは首を傾げた。

非情に難しい顔で黙り込んでいる。耳の先まで、まるで湯気が立ちそうなほど赤く染まっているので、無理やり、引き離されたことを怒っているのだろうか。

「エリザベス?」

「す、すみません……ちょっと、心の準備が出来てなくて……」

「なに言ってるか分からないよ。」

あーあ……こんなとき、スコールピウスがいてくれたら……」

アルバスは大きく息を吐いた。

一番の友だちは、昨日から自宅へ帰っている。母親のアステリア・マルフォイの容体が芳しくないらしい。スコールピウスは週末になる度に帰宅し、母親との最期の時を過ごしている。

「……スコールピウスのお母さんの病気……かなり深刻なんですね」

リザはいつもの顔色に戻ると、ちょっと俯いた。

普段なら月曜日の朝には帰ってくるのだが、水曜日になっても戻る様子はなかった。

アルバスは「きつと、大丈夫だよ」なんて無責任な発言をすることもできずに、重たい空気の中、ただ黙って廊下を歩く。

すると、正面玄関のところで見慣れたブロンドの髪が目飛び込んできた。少年はアルバスたちに気付くと、肩で息をしながら走り寄ってくる。

「アルバス、エリザベス！　ちょうど良かった、探していたんだよ」

「スコープウス、戻ってきて平気だったの？」

「母さんの容体が安定したんだ。そうしたら、父が『いまは学業に専念しろ』ってさ。そんなことより、大事な話があるんだ。ちょっと来て」

スコープウスは大広間に先導する。

すでに、昼食の準備が整えられていた。アルバスたちは端の方の席に座る。ほとんど満員だったが、アルバスたちの周囲一つ分ほど席が空いていた。

一致団結した寮風のスリザリンでも「ヴォルデモートの子とポッターの落ちこぼれ、ブレーキの壊れた忠犬には近づくな」という風潮が広まっていた。事実、同室のカルル・ジェンキンズはアルバスたちと一切の関わりを断っている。彼がアルバスの名を上げるのは、悪口を言う時くらいだ。

「ここなら、誰にも聞かれない。みんな昼食かおしゃべりに夢中だ。僕たちみたいな外れ者の話に耳を傾ける生徒はいない」

スコープウスは少しだけ声を潜めた。

アルバスは眉間にしわを寄せた。

「それで、話ってなに？」

スコールピウスはもったいぶるように笑うと、ポケットから綺麗に折り畳まれた羊皮紙を取り出した。

『『ホグワーツ七不思議』？』

リザが羊皮紙に書かれた文字を口に出して読む。

「この間、帰省する前に聞いたんだ。ホグワーツの七つの驚くべき話をね」

「ここに書かれているのが、その七不思議ってこと？」

アルバスは少し怪訝な顔で続けて書かれた文字に目を落とした。

「『首無しチェイサー』

『深夜2時に踊る鉢植え』

『グリフィンボール塔のダンブルドア』

『地下牢の亡霊』

『禁じられた森の狼男』

『青のジャック・オ・ランタン』。

七つの驚く話なんでしょ？ 1つ足りないよ？」

「最後の1つを知った人は、生きて帰れないんだって」

「はあ……その噂、ナンセンスです」

リザが呆れたように首を横に振った。

『七不思議』というのは、東洋の怪談ですよ。それをホグワーツに当てはめようとするなんて……その時点で、おかしいですって。

だいたい、ここは魔法学校です。謎だらけではありませんか！ 金曜日だけ通じる階段とか、くしゃみしないと開かない扉とか」

「甘いな、エリザベス」

スコルピウスは熱を込めて言い放った。

「いいかい、ここに記した不思議な出来事は、祖父がホグワーツに在学中にはなかった話なんだ。帰省した時に確認したら、1つも知らないって」

「お父さまはご存じだったのですか？」

『禁じられた森の狼男』だけね。後は知らないらしい。

……それで、ここからが大事な話なんだ。

新しい謎が七つもある。この新しい謎のうち、どれか1つでも解決できたら……
100点貰えるそうなんだ」

「100点!」

アルバスはリザと顔を見合わせてしまった。

ハリー・ポッターが「賢者の石」を護ったときや、シリウス・ブラックを助けに「魔法省」へ赴き死喰い人と戦ったときでさえ、50点しかもらえなかったのだ。

その倍ともなれば、一般生徒が一回で稼げる点数ではない。

「でも……これって、危険だよ。基本的に立ち入りが禁じられている場所だし、夜間の歩歩きはフィルチに見つかったら大変だ」

アルバスは親友の考えに疑問を投げかける。

禁じられた森に入ることは禁じられているし、地下牢だって薄気味悪くて行きたくない。深夜2時の鉢植えを確かめるためには罰則覚悟で夜歩きをしないといけないし、首無しチェイサーなんて想像するだけでおっかなかった。

「それに、僕たちが解決できるとは思えない。僕の父さんだったら別だけど……スコピウス、君らしくない」

兄のジェームズなら意気揚々と解決に乗り出すのだろうが、スコピウスがこの手の話を持ち掛けるのは珍しく、極めて異様に思えた。

アルバスが指摘すると、スコープウスは少しかり顔を俯かせる。

「……僕は、母を安心させたいんだ」

スコープウスは、ぼつりと言葉を零す。

「正直、僕は成績が良い方とは言えない。魔法史だけは自信があるけど、ずっと悪い噂が付いて回ってるから、母はいつも心配している。

……この中の1つでも謎を解決することができれば……母は安心してくれるんじゃないかなって思うんだ」

「スコープウス……」

「この事件を見事解決してさ、『心配しないで。僕は大丈夫だから』って言いたいんだ。100点は、そのオマケみたいなものさ。

だからその……ときどき、寮を抜けることがあると思うんだ。そのとき、ちょっと言い訳を考えてもらえると……」

「僕も手伝うよ、スコープウス」

アルバスは、スコープウスの言葉を遮った。

「君と一緒に謎を解く。だって、僕たち友だちだ。君の願いを叶えたい」

そう言いながらも、アルバスは頭の片隅で別のことを考えていた。

友だちの望みを叶えるのは、当たり前のことだ。

それに、もし、この謎を解決出来たら、誰も「スリザリンの劣等生」とか言われなくて済むのではないか。「ポッターの落ちこぼれ」とか後ろ指をさされずに済むのではないか。

スコルピウスは少し驚いたように瞬きをすると、目元を緩めた。

「……ありがとう、アルバス」

「いや、やっぱりおかしいですよ」

しかし、リザがまだ苦言を漏らしている。

「七不思議、だなんて……東洋の怪談……はっ、もしや、キアラさんが噂を流しているのでは？」

「そこは既に調査済みさ」

スコルピウスは少し得意げに鼻を鳴らした。

「キアラさんは、噂について全く知らなかった。それに、東洋系の生徒は大勢いるよ。レイブンクローのディゴリー先輩も東洋系の血を引いているし、エリザベスミ

たいに東洋の知識がある生徒は多い」

「うう……」

リザは反論の言葉を探すように唸った。

だが、ややあってから、彼女はとうとう折れた。

「分かりました。リザも手伝います。スコープウスは友だちですし、なによりも、アル様が危険に巻き込まれたら大変ですから」

「エリザベス、ありがとう」

スコープウスはアルバスとエリザベスを交互に見ると、やや挑戦的な表情になった。アルバスたちは無意識のうちに額を寄せ合い、羊皮紙を見下ろしていた。

「まずは、これを試してみたらどうかなんて思うんだ」

スコープウスは『グリフィンドール塔のダンブルドア』を指さした。

「1時11分にグリフィンドール塔の入り口に、ダンブルドアが現れる」

「1時11分……不吉な数字だね」

アルバスは身震いした。

111は「蛇の眼」を現す数字だ。あまり良い並びの数字ではない。

「1時11分って指定もあるから、確認しやすいと思ったんだ」

「だけど、スコーピウス。ダンブルドアは、その……死んでる。とっくの昔に」

「そう、だから不思議なんだよ。きっと、ダンブルドアのふりをした魔法生物か怪奇現象なんだ！」

スコーピウスが目を光らせた。

そして、その日の夜。

アルバスたちは談話室に残り、寮生が一人、また一人と部屋へ戻っていくのを待った。三人のことを気に留める生徒は誰もいない。

寮の結束の強いことはスリザリンの特質だったが、嫌われ者三人組は別扱いされている。そのことが、ここまで良かったと思ったことは一度もなかった。

「よし、行こう」

アルバスは、がらんとした談話室を見渡した。

廊下へ出たが、しんと静まり返っていた。高窓から月の光が廊下に縞模様を作っている。エリザベスが杖を取り出して、なにか唱えようとしたのが見えた。

「待って、エリザベス」

「ルーモスをしようとしただけです」

「こんな廊下で灯りを持って歩いたら、それこそフィルチに見つかってしまうよ」
アルバスが言うと、リザは渋々杖をしまった。

「こっちだよ」

スコープウスが辺りを確認しながら素早く移動した。

曲がり角をに来るたびに、アルバスは老いた管理人のフィルチか配下の猫のミセス・ノリスJRに出くわすような気がしたが、出会わずに済んだのは幸運だった。

大急ぎで廊下を走り、グリフィンドール塔に続く階段を進んだ。あまり走ると足音が城全体に響くのではないかと思うほど高らかに木霊したので、途中からは抜き足差し足でタペストリーの裏の隠しドアを潜りながら目的地を目指す。

「……ここが、グリフィンドール塔の入り口だよ」

スコープウスが立ち止まった。

アルバスたちは、ホグワーツ城の東にそびえる丸い塔の入り口に来ていた。

しん、と静まり返っていて、人どころか、ゴーストの気配すらない。アルバスは腕時計に目を落とした。

「1時5分。あと6分か」

三人は廊下の角に蹲る。

「11分になったら、ダンブルドアが現れるんですよ」

「そう。ゴーストじゃない、ダンブルドア本人がね」

「ダンブルドアは現れて、なにをするの？」

「冥界に連れていかれるんだって」

「冥界？」

アルバスは聞き返した。

「スコープウス、ありませんよ。ダンブルドアが生徒を死後の世界に連れていくなんて！」

「だから、ありえない怪奇なんだよ。」

もちろん、クー・フリンみたいに冥界へ下っても戻って来た戦士は神話に出てくるけど、あれは神話の話だし、現実的にありえない。だから、この謎を解決すれば

——…」

ここで、スコープウスは口を閉ざした。

アルバスは「どうしたの？」と尋ねようとしたが、彼の視線の先を見て、はっと息を飲んだ。グリフィンドール塔の奥で、なにかが、ゆらり、ゆらりと揺れている。たいへん背が高く、とんがった帽子を被り、ふわふわした白くて長い髭が揺れていた。

ちょうど目があると思われるあたりが、篝火に反射して、きらりと光る。まるで、眼鏡が反射するかのように。

「まさか……」

アルバスは咄嗟に杖に手が伸びる。

そして、スコープウスたちと目を見合わせた。

「1時11分。グリフィンドール塔のダンブルドア……」

アルバスは目が釘付けになっていた。

スコープウスたちもまさか本当に現れるとは思っていなかったのか。アルバスと同じように固まって動けない。

だから、三人は気づかなかった。

背後から忍び寄る、人物の存在に。

新規登場人物

○ハーマイオニー

「呪いの子」通り、魔法省大臣に就任。

原作だと政策とか何も見えてこなかったので、マグルへの偏見をなくすこと、そして、魔法教育に視点を置きました。

○ネビル・ロングボトム

原作通り、薬草学の教授。

おそらく、グリフィンドールの寮監。

「呪いの子」を読み始めた頃、どこで活躍するのかなー！ってわくわくしてました。

退任後のスプラウト先生の行方が知りたい……誰か、知りませんか？

○ジェームズ・シリウス・ポッター

グリフィンドールの4年生。

アルバスの兄。

原作で筈を貰っている描写があったので、クイディッチのシーカーという設定をつけています。

原作では、アルバスを虐める兄としてしか描かれていないから、とても悲しい。

○リリー・ルーナ・ポッター

グリフィンドールの1年生。

アルバスの妹。

原作にほとんど出てきていない……とても寂しい。

○エドモン・カロー

本作オリジナルキャラ。

魔法省大臣下級補佐官。

ラダルファス・レストレンジとフローラ・カロの息子。デルフィーニの友人。
19年後時点では魔法運輸部所属でしたが、下級補佐官に出世しました。

3 話 グリフィンドール塔のダンブルドア

投稿するまでに期間が空いてしまい、申し訳ありませんでした！

廊下の篝火に照らされて、三角帽子の長い影が伸びている。

スコープピウスの言う通り、あれが七不思議の一つ「グリフィンドール塔に現れるダンブルドア」なのかもしれない。

（あれが、そうなのかな？）

アルバスは脈打つ心臓を抑えつつ、スコープピウスとリザに囁きかけようと口を開きかける。

ところが、アルバスが口を開く前に、スコープピウスが小突いてきた。彼は片手で口を押えながら、こっそりと別の方向に指を向ける。

そこには、別の影があった。

物陰に隠れ、こそこそ動くように近づいてくる。アルバスは一瞬、巡回の先生が近づいてくるのかと焦ったが、大人の影より一回り小さい。第一、先生なら堂々と廊下を歩いてくるはずである。

では、一体誰なのか？

アルバスは不安な思いを押し殺しながら、その怪しげな影を見守った。

影の主は、アルバスたちに気付いていないらしく、するすると物陰を伝いながら次第に近づいてきた。

「やあ！」

無造作に廊下の曲がり角から片手を突き出し、スコープウスが影の肩をいきなりつかんだ。

声を上げかけた相手の口を慌ててアルバスが塞ぎ、同時の向こうもこちらの口を押えた。全員で座り込み、必死にお互いの唇の前で人差し指を立てる。

それから、アルバスは相手をまじまじと確かめた。

「君は……」

アルバスたちと背丈は変わらない少女だった。ローブにはグリフィンドルの紋章が縫い付けられている。暗闇のなかでも燃え上がるような赤毛は特徴的で、理知的な顔をした少女には非常に見覚えがあった。

「つて、なんだ。ローズじゃないか」

アルバスは脱力した。

改めてみるまでもなく、そこにいたのは、ローズ・グレンジャー・ウィーズリーだった。普段とは違い、気位の高そうな顔は驚きに歪んでいたが、すぐに不快そうな顔になった。

スコープウスが喜びの声をあげたからだ。

「奇遇だね、ローズ。君の髪は篝火みたいに綺麗だ！ 夜でも一目でわかったよ」
「そう、ありがとう」

ローズは彼から一步距離を取ると、アルバスたちを怪訝そうに見返してきた。

「貴方たち、何をしているの？ ここはグリフィンドル塔。スリザリン寮ではないわ」

「ええっと、これには理由があって……」

「アル様、スコールピウス」

アルバスが説明に困っていると、リザが袖を引っ張ってくる。

どうやら、三角帽子の影に変化があったらしい。スコールピウスは急に真面目な表情になると、アルバスの隣に戻って来た。

ぺたぺたと足音が近づいてくる。

ゆらりゆらりと三角帽子を揺らしながら、アルバスたちのいる廊下の向こう側を横切った。

「……見た？」

いつのまにか隣にしゃがんでいたローズが、アルバスに囁きかけてくる。

アルバスはこくこくと頷いた。

とはいえ、この位置からだと思しが見えない。廊下の壁に張り付くように進みながら、こっそり遠ざかっていく影の後ろ姿を伺い見る。篝火に照らされ、ハッキリと後ろ姿が浮き上がって見えた。

「あれって……」

影の主は、二つに分かれていた。

アルバスたちよりも小さな身体に不釣り合いなほどの帽子を載せている。色とりどりで大きさも多種多様な帽子を頭の上に積み上げた様が、まるで巨大な三角帽のように見えていたのだ。

そう、つまり帽子の正体は――、

「ドビーが噂の正体だったの？」

「違うわよ」

アルバスが呟くと、ローズが即座に否定して来た。

「ドビーに擬態した魔法生物に違いはないわ」

「でも、ローズ。あれは確かにドビーだったよ。1000個の帽子を被ったドビーだ」
「アルバス、もっと疑ってかかった方がいいわ。だって、噂の正体がドビーだったなんて、謎でも秘密でもなんでもないわ。少なくとも、ホグワーツ功労賞にあたいするような発見じゃ……あっ！」

ローズはしまったと自分の口を塞いだ。

「なんだ、ローズ。君も七不思議を追っていたのかい？」

アルバスが指摘すると、ローズは髪と同じくらい顔を真っ赤に火照らせた。彼女

は恥ずかしそうに一瞬口を堅く結び、俯いてしまったが、ややあってから吹っ切れたように口を開いた。

「ええ、そうよ。私は七不思議を追っていたの！」

「でも、不思議だな。君はその……規則を破るタイプじゃないだろう？」

アルバスは不思議そうに首を傾げる。

ローズ・グレンジャー・ウィーズリーは自身の出生に並々ならぬ誇りを抱いている。英雄の娘として、英雄の娘にふさわしくあれとの言葉そのものの具現化だ。成績はトップ、クイディッチの選手であり得点王。加点されることはあれど、減点されることなど一切ない、完全無欠の優等生なのだ。

「いまさら100点程度、君には稼ぐ必要がないじゃないか」

「はあ……アルバス。貴方の父親は誰？」

「……父さんのことは関係ないだろ」

「関係あるわ！」

ローズは鋭い目でアルバスを睨みつける。

「私はハーマイオニー・グレンジャーとロナルド・ウィーズリーの娘よ？ この

程度の謎、解けないはずがないじゃない！」

ローズは胸を張りながら、ずいっと詰め寄ってきた。

「いいこと？ 私たちは二年生。つまり、私たちのパパやママたちが『賢者の石』を守ったときより一年上で、『秘密の部屋』に挑んだ年なの。この意味が分かる？」

「僕——」

「私は二年生になるのに、何もなしえていないの」

「だけど、ローズ。君はクイディッチの選手じゃないか」

ローズが出場する試合は見に行ったことはないが、彼女のプレイが歓声を受けているのは知っているし、スリザリンのなかからも、ローズのプレイを馬鹿にする生徒はいない。

アルバスは、ローズは自分なんかより、ずっとずっと「グレンジャー——ウィーズリー」の名前に恥じぬ学校生活を送っていると思っていた。

「先学期だって、グリフィンドールがクイディッチで優勝したんだろ？ 君のおかげで」

「あれは、私だけの行いではないわ。チームのみんなが協力し、信じあったこそその

勝利よ」

ローズは一切の迷いなく言い切った。

「けど、今回は違う。あきらかに、今回の七不思議の発生は異様よ。これは……なにか背後にある。私は、ローズ・グレンジャー―ウィーズリーとして、解決する義務と責務があるの！」

「しかし、ドビーみたいに見間違いだったのでは？」

ぼつり、と。エリザベスが呟いた。

「たまたま見間違いが七つ集まったのかもしれないよ？」

「そんな偶然、あるわけじゃない。ドビーは間違いだったかもしれないけど、他は違うかもしれないわ。最後まで、可能性は捨てず、謎を解決するべきなの！」

ローズは断言すると、ぷいっとこちらに背を向けて歩き出した。

「ローズ、どこへ行くんだい？」

「温室よ。七不思議のひとつ『踊る鉢植え』を確認しに行くの」

「踊る、鉢植え？」

アルバスが呟くと、スコープウスが咳払いをした。

「魔力が最も高まるとされる時間……つまり、深夜2時に温室の鉢植えが一人に踊りだすって話さ」

「踊りだして……どうなるの？」

「こちらにも踊りに誘ってくるのよ。誘われて頷いたが最後、死ぬまで踊り続ける呪いにかけてってしまうの」

「死ぬまで……!?」

アルバスとエリザベスは同時に驚いた。

「そんなの僕らの手に負えないよ」

「デルフィー姉様が読み聞かせてくれたマグルの童話で聞いたことがあります……いえ、この場合は、童話だけじゃなくて、えっと……」

「エリザベス、私は『赤い靴』じゃなくて、妖精の踊りだと思うわ。『妖精の踊りに誘われたら、死ぬまで踊り続ける』という話。『イギリスにおける魔法生物図鑑』に書いてあったわ」

ローズは指を振るように説明する。

「ローズ、僕もその通りだと思うよ。同じ考えを持っているだなんて、運命みたい

だね」

スコルピウスが高らかに言えば、ローズは少し自慢そうな顔が失せ、複雑そうな表情で短く「そう」とだけ呟くと、再び距離をとった。だが、スコルピウスは気にならないらしく、そのまま語り続けた。

「きつと、鉢植えが妖精を呼び出しているんだ。妖精が相手となれば、対策を立てやすいってものさ」

「対策ですって？」

ばかばかしい、とローズは首を振る。

「いいこと？ 私が七不思議を解決するの。貴方たちが対策を練る必要はないし、関係はないわ」

ローズは言い切ると、肩で風を切るように歩き出す。

アルバスたち三人は顔を見合わせたが、誰に言うこともなしに頷くと、ローズの後に続いた。

ローズはアルバスたちの足音に気づくと、むっとしたように振り返る。

「どうしてついてくるの？」

「だって、僕たちも一緒のところへいくんだもの」

アルバスは答えた。

ローズは言い返そうと口を一度開いたが、諦めたように大きく肩を落とした。

「分かったわ。だけど、足だけは引っ張らないでよね」

それから、四人は温室への道をひっそりと歩んだ。

「ねえ、スコープウス。君は妖精をどうにかする方法があるって言ってたけど……どうすればいいの？」

アルバスは囁くように親友へ語りかけた。

「妖精は鉄が嫌いなんだ。だから、鉄を用意すれば問題ない」

「出現魔法を使うということでしょうか？」

エリザベスが首を傾げる。

「鉄を出現させる……私たちには、難しいのでは？」

「エリザベスも難しい？」

「マッチ棒を鉄に変身させることなら可能ですけど、出現となると……いい、いえ！ アル様のためでしたら、一晩で習得……は、さすがに難しいですけど、一週

間……三日間、不眠不休で習得すれば……!」

「そ、そこまで無理しなくていいから……!」

「貴方たち、静かにしなさい」

ローズがぴしりつと言いつつ放った。エリザベスは少し不満そうに口を結ぶと、できるかぎり声を潜めて質問をした。

「変身させればいいでしょう? 魔法植物のツタを鉄の檻を変身させれば、あっという間よ」

「ローズ、それはやめた方がいい」

スコープウスは、珍しく彼女を否定した。

「僕たちは温室の魔法植物を全種把握しているわけじゃない。たぶん、よくて二割」
「……なるほどね。たしかに、私たちは温室に生きるすべての植物の詳しい生態を知らない。妖精と遭遇したとき、そう簡単に変身術は使えないってことね」

「リザも同意します。ですが、出現呪文は難しすぎます。妖精を発見し、安全な場所に追い込んでから、変身術で鉄の檻を作成する、という手筈でどうでしょう?」
「追い込むって言うても、大きな音は立てられないわ。騒ぎすぎたら、ネビルが気

づくもの」

「だからさ、鉄の道具は他にもある。スコップとかね」

「スコップで追い込むの？ 原始的すぎないかしら？」

「リザはいいと思いますよ。杖と併用すれば、できなくはありません」

「追い込む係と鎖でつかまえる係に分かれる。変身術担当は、私とリザは当然でしょ？ 残りの二人が追い込む係になるけどいいのね？」

「適材適所。もちろんさ。いいよな、アルバス」

三人が、こちらに振り返る。

アルバスはややあってから頷いた。

「適材適所か」

ぽつり、と言葉が漏れる。

目の前で、額を寄せ合うように作戦を構築する三人組に入っていけず、自分は聞いているだけだった。そのことがどうしようもなく情けなく思ってしまったのだ。

「アルバス、行こう！」

スコールピウスが振り返り、こちらに笑いかけてくる。

「僕たちは僕たちで、どうやって追い込むか話し合おう」

「僕なんかが考えても、どうにもならないよ」

「そんなことないさ！　一緒に考えよう」

「……うん！」

アルバスは、先ほどよりも強く頷いた。

踊る鉢植え。

第三号温室の右から三つ目の鉢植え。

それが、真夜中に踊りだす。

アルバスたちは息をひそめると、こっそり温室を覗きみた。

そして――。

4 話 禁じられた森の生き残り

ことり。

ことり、ことり。

誰もいないはずの深夜の温室。

昼間はびくりともしないはずの鉢植えが、なにやら怪しげに動いている。

アルバスは「あっ！」と声を上げそうになったが、すぐさまローズの手が伸びてきた。彼女はアルバスの口を掌で塞ぐと、目を鋭く細め「黙って」と訴えてくる。アルバスはどうか言葉を飲み込むと、怖い気持ちを抑えて鉢植えを凝視した。

そして、気がついてしまった。

「よいしょ、よいしょっと」

鉢植えは、誰かによって動かされている。

誰って？

深夜2時なんかに温室で作業をしている人は、アルバスの知る限り一人しかいなかった。

「ふう……つかれた」

ネビル・ロングボトム教授。

ハリー・ポッターたちの親友にして、薬草学の教授である。数年前に結婚し、幾分かふくよかになった身体を揺らしながら、月の灯りが差す場所へ鉢植えを移動させている。

「あれは、月下美人でしょうか？」

「ゲッカビジン？」

アルバスがエリザベスの眩きを拾う。なにそれ？と尋ねる前に、ローズが「そんなことも知らないの？」とばかりに説明を始めてくれた。

「メキシコのあたりの植物よ。マグルの世界でも知られているけど、そっちは魔法植物から品種改良された安全な種。いま、ロングボトム先生が取り扱っているものが本元ね」

「デルフィー姉さんから聞いたことがあります。夕方から花が咲き、日が昇る前にしぼんでしまう……その姿から『月下美人』と名付けられたそうです。魔法薬やお酒の材料になるんですよ」

エリザベスもどこか得意げに付け足した。

「月下美人の隣に並んだ鉢は、たぶん悲嘆草ですね。エキスは解毒薬として有名なんですよ。私、アル様が再び毒触手に刺されてもすぐに治療できるように調合法を覚えたばかりなんです！」

「もう二度と毒触手に刺されたくないし、君の作った怪しげな解毒薬は飲みたくないかな」

アルバスがうんざりした口調で言ったが、エリザベスはどこ吹く風だった。

「怪しげではありません。ちゃんと姉さんから借りた上級魔法薬学の教科書に載ってました！ まだ一度も作ったことはありませんが、怪しい薬ではないですよ？」

「いや、そういうわけじゃなくて……あー、ちなみに、月下美人だっけ？ それ

はどんな効果があるの？」

アルバスはローズに話を振ることにした。

「月下美人の蜜は焼かれた喉を癒すことができるらしいわ。条件を整えれば、年に何回か開花するらしいの。きつと、ロングボトム先生は月下美人を何度も咲かせるための研究をしている最中なのだと思う」

ローズはそこまで言い終えると、つまらなそうに嘆息した。

「でも、これは七不思議にならないわ。まったく謎にならないもの」

「ローズの言う通りだね」

スコルピウスも同意するように、残念そうに力なく笑った。

「ホグワーツ功労賞を貰えるような怪奇じゃないな」

「ということは、今夜はこれでおしまい？」

「いや、もう1つ行こう。まずは、ここから離れないといけないし」

アルバスたちは目配せをすると、ロングボトム先生に見つからないように、抜き足差し足で温室から抜け出した。温室の灯りが遠ざかり、先生が月下美人の鉢を移動させる音も聞き取りにくくなったところで、アルバスは話し出した。

「たしか、残りの七不思議は……『禁じられた森の狼男』『首無しチェイサー』『地下牢の亡霊』『青のジャックオランタン』だっけ？」

どれも名前を聞いただけで、お腹が底冷えしてしまう。

特に、禁じられた森には入りたくない。狼男に偏見があるわけではないが、あの森には狼男以外にも猛毒の蜘蛛など恐ろしい怪物がうようよ生息すると聞いている。昼間ですら入りたくないのに、月の光すら差し込まないような夜の森になど、足を踏み入れたくなかった。

「スコーピウス、君はどれを探すの？」

「青のジャックオランタンは、ハロウィンの時期じゃないと出ないらしいんだ。だから、僕が次に狙おうと思っているのは、首無しチェイサーかな」

「うう、首無しチェイサーってことは、首がないチェイサーってことであってんだよね？」

アルバスは確認しながら、背筋がぞわっと逆立つのを感じた。

「首がないのに、どうして飛んでいられるの？」

アルバスが無意識に首を触りながら尋ねると、エリザベスが「そうですね……」と口元に指を添えて考え込んだ。

「おそらくですけど、首無し騎士の亜種なのではないでしょうか。きっと、アイル

ランドのデュラハンの物語が元ネタなのでは？」

「『ほとんど首無しニック』がいるんだから、いまさら首がないチェイサーなんて怖くもなんともないわ」

ローズとエリザベスはうんうんと頷きあっていた。

最初は夜の探索をやや怖がついていた二人なのに、いまでは平気な顔をして考察を交わしている。アルバスにとって女の子とはもっとか弱くて庇護しないとイケないようなイメージがあつたが、自分の方が夜の探検を怖がつているのが、とても情けなく思えて仕方なかった。

「……そういえば、アルバス」

アルバスが悶々としていると、ローズが振り返った。

「貴方、透明マントは持っていないの？ 透明マントがあれば、もっと簡単に先へ進めるわ」

「あれは、ジェームズのだから」

アルバスは肩をすくめる。

「グリフィン・ドール塔にあるんじゃないかな？」

ジェームズは父から愛されている。

だから、偉大なるハリー・ポッターの財産の一つを譲渡されたのだ。そのことを思うと、また心に薄暗い気持ち広がってしまう。アルバスは、その気持ちから目を逸らすようにそっぽを向いて——はた、と気づいた。

「スコルピウス、ちょっと見て」

アルバスは禁じられた森を指さした。

かなり夜が更けているので、ハグリッドの小屋の灯りも落ちており、背後の鬱蒼とした暗い森と一体化している。そんな木々の隙間に、ちらつと燃えるような赤い髪をした少女が消えていくのを見てしまった。

「あれ、リリーだよね？」

アルバスがグリフィン・ドールに組み分けされた妹を見間違えるはずがない。

「まさか、リリーも七不思議を……？」

「ありえないわ！」

ローズがアルバスの予想をまっさきに否定する。

「だって、リリーは『七不思議なんて、嘘っぱちよ。興味がないわ』って……」

「ですが、リリーはこんな夜遅くに禁じられた森で一体なにをするんでしょう？」
「とにかく、あとを追いかけよう」

アルバスは考えるより先に言うのと、禁じられた森へ足に向けた。

「まって、アルバス！ 『首無しチェイサー』はどうするの？」

「ローズ一人で調べてきなよ。僕、妹を連れ戻さなくちゃ」

リリーは、まだ1年生。

たしかに、リリーはハリーの子どもたちのなかで、ハグリッドと一番仲が良く、無類の動物好きだった。休日になると、ハグリッドと一緒に森を散策しているという噂を聞いたことはあったが、おそろしい噂の絶えない「禁じられた森」に一人で行くなんて無謀すぎる。おまけに、真夜中ともなれば危険この上ない。兄としては、妹の危険な行動をどうしても見逃せなかった。

「アルバスに賛成。僕もいくよ。友だちの妹がアクロマンチュラの生き残りとおぼつたり会って……ってことがないとは言いい切れないからね」

アルバスが小走り気味に進んでいると、スコープウスが追いかけてきた。

「す、スコープウス！ 怖いことを言うなよ！ 毒蜘蛛なんて、僕たちじゃどうすることもできないじゃないか！ 僕は妹が森に入って危険なことに巻き込まれる前に連れ戻さないといけないって思っただけで……」

「アル様、ご安心を。アクロマンチュラであれなんであれ、行く手に立ちふさがる脅威は私が一扫しますので！」

スコープウスに続いて、エリザベスもアルバスの隣に並んだ。

「あー！ もう！ 分かったわ！ 分かったわよ。私も行くわ。すぐに、リリーを連れ戻して、ついでに『禁じられた森の狼男』の謎も解いてみせるんだから！」
少し遅れて、ローズがどこか怒ったようにいつてくる。

リリーが木々の影に消えたところまで来たが、松明のような赤毛はどこにも見当たらない。暗く生い茂った木々の奥へと消えていく細い曲がりくねった獣道だけがある。

「リリー？」

ダメもとで名前を呼ぶが、かえってくるのは不気味な一陣の風のみ。

「行こう」

アルバスは覚悟を決めて歩き出す。

森はまっくらで、シーンと静まり返っていた。時々、枝の隙間から漏れる月明かりが世界を照らし出している。

「そういえば、『禁じられた森の狼男』ってどういう不思議なんですか？」

エリザベスが囁くような声でローズに尋ねていたが、その声さえ静かすぎる森のなかでは大きく響いて聞こえた。ローズは周りを警戒するように目を走らせながら、さらに小さな声で教えてくれた。

「最近、禁じられた森から狼の吼え声がするという話よ。禁じられた森には狼男が生息してるのだけど、基本的にはおとなしいの。頭も良くて人を襲うこともないのに、恐ろしい吼え声だけが最近頻繁に聞こえるらしいって」

「あのさ、でも……狼男って人だよ。テディのパパみたいに」

アルバスは率直な疑問を口にする。

「テディのパパは闇の魔術に対する防衛術の先生だったんでしょ？ 普段は人間だけど、満月の日のみ狼に変身したらしいって聞いたよ。だから、今日は平気なん

じゃないかな？」

「たしかに、今日は満月じゃない。だけど、この森に住まう狼人間は常に狼の姿なんだよ」

スコープウスも声を潜めながら答えてくれた。

『新説ホグワーツの歴史』に書いてあったよ。でも、ローズの言う通り、とても賢くて人を襲うことなんてなかった狼人間の一族なんだよ。だから、そんなに凶暴な吼え方をするなんてこと自体が信じられない」

「いきなり凶暴化したってことになるのかな？」

「だから、その謎を解決するの。もちろん、リリーを見つけたあとだけだね」

木々の葉がかすれるような声で話し合いながら、リリーの赤毛が見えないか目を凝らす。

「突然変異か、はたまた、なにか理由があるのか。ハグリッドがグロウプを森に連れてきたとき、禁じられた森の生態系が一部変化したって聞いたことがあるけど、新たな巨人が森に來たなんて聞いたこともない」

「ハグリッドが密かにドラゴンを飼っている可能性もありますよね」

「それはないとは言いきれないけど……すぐにマクゴナガルや他の先生方にバレるんじゃない？」

「だけど……」

エリザベスが何か言いかけた、そのときだった。

獣の吼え声が夜の森を振る合わせた。それと同時に、少女の金切り声がアルバスたちの耳を貫く。

「リリーの声だ！」

アルバスは考えるより先に、悲鳴が聞こえてきた方へ走り出していた。後ろから、スコープウスたちの声が聞こえてきた気もするが、走り出した足を止めるのも惜しい。

「リリー!!」

アルバスは力の限り叫ぶ。すると、前方からちらちらと赤毛が揺れるのが見えた。

「アルバス！」

リリー・ポッターだった。

彼女は顔に汗を浮かべながら、金色の獣を抱えて走ってくる。

「に、にげて！　すぐ、にげて！」

リリーが走りながら、息も絶え絶えに叫んでいた。リリーがどうして「にげて」と叫んでいるのか、尋ねる前にリリーの背後から巨大な青白い塊が現れる。

「な、なんだよ、あれ」

アルバスは青白い塊から目が離せなくなった。

狼人間のわけがないし、毒蜘蛛でもドラゴンでもない。いままで魔法生物飼育学でも習ったことがなかった。それは優にハグリッドの小屋を潰してしまうほどの巨大な生物で、たとえるならロブスターだ。だが、尻尾はサソリみたいに細く吊り上がっており、そのさきに木の幹ほどの太さもある針が光っている。

「逃げる、アルバス!!」

スコープウスの悲鳴に近い警告が後ろから貫く。

「僕の予想が正しければ、それは——っ！」

スコープウスの言葉は、巨大不明生物の尻尾先の針から火花が飛び散る音によってかき消される。火花が飛び散るといえば簡単に聞こえるかもしれないが、ちょっとした火花がさく裂したような爆発音だ。その音を聞いたとき、アルバスは先ほど

の轟音は獣の吼え声なんかではなく、目の前にそびえ立つ巨大不明生物が発した爆発音だと理解する。

「きゃっ！」

そんな巨大生物が放った大粒の火花は、リリーをまっすぐ狙っていた。彼女が間髪、爆発音に驚いてその場でしゃがみ込んでいなければ、火花は彼女の頭を貫通していたに違いない。だがしかし、直撃は避けられたとはいえ、爆発の余波から生じた風がリリーの小さな身体を吹き飛ばした。

「り、リリー！」

アルバスは転びそうになりながらも、必死になって妹のもとに駆けつけた。リリーは地面に叩きつけられ、すっかり気を失ってしまっている。

「リリー！ リリー！」

アルバスは妹を必死にゆすってみたが、まぶたがわずかに動いた程度。しかし、呼吸が乱れている様子はなく、命に別状はないようだ。瞼は開けなかったが、頑なに金色の獣を庇うように抱えている。アルバスが見たことのない小さな獣は子どものように、お腹のあたりに赤い傷がはしっていた。

「この傷は……?」

金色の獣も意識がなく、眠りこけているように動かない。とはいえ、こちらも死ぬほどの怪我を負っているようには見え、アルバスはひとまず肩を落とした。

「アルバス、すぐに逃げろ!」

アルバスがほっとしたのもつかの間、スコピウスたちが杖を構えて叫ぶ姿が視界に入った。彼らに答えようと顔を少し上げ、頭上から見下ろす巨大生物の頭に気づいた。目がどこにあるのかも分からぬのっぺりとした顔面なのに、アルバスはけたけたとあざ笑う笑うように見下ろされているように感じてしまう。

「な……」

リリーを背中中で隠すように手を広げてみるも、恐怖で歯がかちかち鳴った。あまりにも間近に死の臭いを感じる。そんな彼の耳に届いたスコピウスの叫んだ事実は、さらに彼の意識を絶望に追いやるのだった。

「そいつは、『尻尾爆発スクリュート』の生き残りだ!!」

5 話 “それ” と会ったら、終わり

“それ”を知る者は、言葉を濁す。

「僕はハグリッドの友だちだし、いまでも彼が大好きだよ。ただ、彼にはちょっと刺激的な生物が大好きっていう悪い癖があるだけで……うん、君が聞きたがってる“それ”はね、ハグリッド好みだった魔法生物において、最も危険で恐ろしい生き物だということには間違いないよ。ロンはアラゴグの方が嫌いかもしれないけど」

“それ”を授業で扱うはめになった者たちは、抗議の言葉を口にする。

「殺し合いが趣味なんて素晴らしい新生物を飼育できる一大プロジェクト、僕は二度とごめんだね。グラブリー・プランクの授業は刺激がないけど、絶対的に安心安全さ」

「はじめはね、ドラゴンの血のように、画期的な効力のあるものを持った生き物だと思っていたかったの。授業で扱うってことはそういうことでしょ？ でも、蓋を開けてみたら……ハグリッドには悪いけど、あれは孵化したばかりのときに踏みつぶ

すべきだったわ」

“それ”と戦うことになった者たちは、総じて目を逸らす。

「僕は魔法生物飼育学の授業を受講していなかったから、迷路で初めてそれと会ったんだ。噂には聞いていたから、なんとか対処はできたけど……」

「違法生物を生成した挙句、自分の手に負えなくなった怪物の後始末を代表選手に任せるという発想自体が……いいえ、文句を言っているではありません。代表選手は課題に反論できる立場ではありませんから」

“それ”と対峙した者たちは、誰もが口をそろえて答える。

「二度と関り合いたくない」と。

ただ一人、“それ”を生み出した張本人を除いて。

「なんでだ？ スクリュートは可愛いだろ？ こんな面白い生物、なかなかいねえぞ？」

※

「尻尾爆発スクリュート!? それって、全滅したんじゃないの!？」

アルバスはリリーを背中に隠すように立ちながら、必死になって親友に問い返す。
尻尾爆発スクリュートの存在は、さすがに耳にしたことがあった。

『尻尾爆発スクリュート』

ハグリッドが生み出した合成生物で、殺し合いが三度の飯より好きという恐ろしい怪物。スクリュート同士で殺し合いをはじめ、最終的に残った個体が三校対抗試合の第三戦に投入され、猛威を振るつたとされている。なお、代表選手たちもこの生物を一時的に無力化することはできても、殺すことはできなかった。

代表選手が弱かったわけではない。

歴代の代表選手と比較しても、頭一つ以上抜けた実力者の集まりだった。

ビクトール・クラムは、クイディッチ界のレジェンド。

セドリック・ディゴリーは、若くして歴戦の闇払い。

セレネ・ゴントは、直死の魔眼を持った今世紀最強の魔女の一人。

ハリー・ポッターは、いわずとしたヴォルデモートを葬り去った大英雄。

フラー・デラクルーのみ、めだつた活躍は歴史に残っていない。だが、卒業後にイギリスのグリンゴッツに入社できた時点で優秀さがわかるし、ビル・ウィーズリーと結婚さえしていなければ、フランス魔法界を背負うエースになっていたことだろう。

そんな彼らをもつてしても、＼それ＼は殺せない。

そんな化け物が、アルバスたちの目の前にいるのだ！

「とつくにいない生き物のはずなんだ！」

スコルピウスは大木の陰に身を隠しながら、アルバスに向かって叫んだ。

「ダンブルドアによって処分されたはずなんだ。少なくとも、記録ではそう残っている」

「待って！ つまり、ハグリッドはダンブルドアも欺いて、こっそり飼っていたってこと!? それこそ、ありえないわ！」

ローズがヒステリックに言った。

「だって、ハグリッドにダンブルドアを騙すなんて芸当できるはずがないもの！
そもそも、こんな巨大な生物がいたなら、どうしてこれまで話題になっていなかったの？」

「冬眠していたのでは？」

「リザ、尻尾爆発スクリュートは冬眠しないんだ。ありえるとするなら、休眠——
うわっ！」

スコープウスが言い切る前に、尻尾爆発スクリュートが動いた。

アルバスからすれば、スクリュートのどこに口があるのか判別することはできないが、声にならない咆哮をあげると、アルバスとリリーに向かって進軍を開始する。
「リリー、逃げろ！」

アルバスは妹だけでも逃がそうとゆすってみるが、彼女は気を失ったまま。腕に抱えた小さな魔法生物と一緒に、目を覚ます気配がない。アルバスが必死になって

いる間にも、スクリュートの魔の手が迫っていた。

『『アクシオ―来い』！』

アルバスたちを木っ端微塵にしようとする爆発音が響き渡る直前、ローズの声が夜の空を貫いた。瞬間、アルバスとリリーの身体はぐいっと見えざる手によって持ち上げられ、ローズのもとへと引き寄せられる。アルバスは背後に迫る爆発による熱風と煙を感じながら、ローズの足元に転がった。

「た、助かった。ありがとう、ローズ」

「礼はあとにして。とにかく、あいつをどうにかしないと……！」

「スコープウス！ 父さんたちは、あいつとどうやって戦ったのか知ってる？」

「たしか、失神呪文だった気がするけど……」

「失神呪文ですね、了解です！」

スコープウスの言葉を受け、エリザベスがスクリュートの眼前に躍り出た。彼女は青い瞳を輝かせながら、杖先をまっすぐスクリュートに向けると、意気揚々と呪文を唱えた。

『『ステューピファイ―麻痺せよ』！』

エリザベスの杖先から真っ赤な閃光がはしり、尻尾爆発スクリュートに直撃する。

「やったか!？」

「ふふん、リザにかければ、こんなこと簡単……って、え……?」

しかし、効果は見当たらなかった。

スクリュートは失神呪文が当たったことに気づいている様子さえなかった。エリザベスが渾身の一撃がまったく効いていない自体に茫然としていると、スコープウスは肩をすくめた。

「失神呪文が効果的らしいんだけど、分厚い殻にはじかれて効かないんだ。殻と殻の合間に何度も打ち込む必要があるんだって」

「そ、そんなの、無理ですよ……!」

エリザベスはひいっと悲鳴をあげると、スクリュートの攻撃から逃げるように大木の陰に飛び込んだ。手前に生えていた大木は爆発の餌食となり、ぐらりと地面に倒れる。エリザベスは倒れた大木を見ると、小さく震えていた。

「失神呪文はできませんけど、殻の隙間なんてほぼないじゃないですか!」

「エリザベス……」

アルバスはエリザベスの珍しく弱気な態度に驚きながらも、彼女の言い分に納得はあった。

尻尾爆発スクリュートの巨体はほとんど立派な殻によって覆われている。殻が覆っていない隙間に撃ち込もうとも、そのためには可能な限り接近するしかない。接近したら最後、スクリュートの反撃にあうのは目に見えているし、あれの恐るべき攻撃を避けながら的を狙い定めるのは至難の業だと容易に想像がついた。

「スコープウス、参考までに聞くけど、エリザベスのお母さんも失神呪文で倒したの？」

「セレネさんはスクリュートを縄で縛って動きを止めたあと、縄を爆発させることで気絶させたって」

「縄の出現呪文と爆発呪文の組み合わせ……爆発と光で目を回させたってことね」
ローズが思案するように口にしたが、すぐに首を横に振った。

「駄目。あんな大きなものを縛れるほどの縄なんて出現させられないし、爆発させることなんて……リザ、失神呪文と一緒に撃ち込むわよ！ 二対一ならなんとかいけるかもしれない！」

「わかりました。頑張ってみます！」

「ま、待って！ エリザベスもローズも待ってよ！」

アルバスはエリザベスが了承する前に叫んでいた。

「闇雲に呪文を唱えても勝ち目がないじゃないか！」

「アルバス！ それじゃあ、どうしろっていうの？ このまま逃げても追いつかれて殺されるのは、目に見えているでしょ？ だったら、どうにかして倒さない
と！」

「それは……」

ローズの糾弾に、アルバスは黙り込むしかなかった。

ローズとエリザベスしか失神呪文を使える人がいない以上、自分たちは見ていることしかできない。ただ、彼女たちが必死になって呪文を唱えたところで、殻によって弾き返されるのは火を見るより明らかだ。仮に運よく隙間に命中させることができたとしても、見上げるほどの巨体とまで成長したスクリュートを一撃で昏倒させられるとは思えない。せめて、何発も隙間に当てることができればいいのかもしれないが、そんな都合よくが進む前に、彼女たちは爆発の餌食になってしま

うだろう。

「せめてスクリュートの動きを止めてから、失神呪文を……」

「どうやって止めるのよ！ ここには、縄がないのよ！ いえ、縄があっても、相
当丈夫な縄でないと動きを止めるのは不可能。グロウプがいれば、抑え込んでもら
えたかもしれないけど……！」

ローズがそう言った矢先に、巨大な火花が落ちてくる。どうやら、尻尾爆発スク
リュートは手当たり次第に大木を倒すことを決めたらしい。次々と周囲の大木が倒
れ落ち、アルバスたちが隠れている木にまで大きな火花が迫っていた。

『プロテゴ―守れ』！』

ローズは上空に盾の呪文を展開する。火花は薄い盾に当たり飛散したが、耐え切
れずに霧散する。ローズは顔をしかめた。

「おしゃべりは終わり。アルバス、スコルピウスとリリーを連れて逃げなさい。こ
こは、リザと一緒に食い止めるわ」

「でも……」

アルバスは言い淀んだ。

勝ち目がない戦いに、女の子二人を残して自分たちだけ逃げるわけにはいかない。だけど、ローズの言う通りだった。丈夫な縄もなければ、それを出現させることもできない。巨人のグロウプがいれば、スクリュートと戦ってくれたかもしれないが、いまの彼はホグズミード村の奥の洞穴で暮らしている。呼びに行く前に全滅は必至だし、それをするくらいなら、全力でホグワーツ城に助けを求めに走るほうが得策だ。

そもそも、この場には助けくれそうな魔法生物などいない。見渡す限り、アルバスたちを優に隠せるほど巨大な木しかなかった。あの木の陰に誰か助っ人が隠れてたらしいのに、と思うが、そんな人物がいたら、きっとすぐに助けに来てくれるに違いない。そもそも、ここら一体に生えている木たちが人ならば……と、ここまで考えたとき、アルバスの脳裏に刺激がはしった。

「ねえ、ローズ！ この木、使えないかな？」

「はあ!? なに言ってるの?」

「倒れた大木を使って、あいつを下敷きにするんだ!」

尻尾爆発スクリュート自体が倒しまくった周囲の大木たちを一気に浮遊させ、目

標に落とすことができれば……気絶とまでは行かなくても、一時的に動きを止めることくらいはできるのではないだろうか。

「浮遊呪文なら、僕もスコルピウスも使えるから……失神呪文より、ずっといいと思うんだ」

「そんなの……爆発で吹き飛ばされるのがオチよ！」

「アル様！ 木を縄の代わりにすれば、いいんですね」

ローズが反論したが、エリザベスは勢いよく頷いた。

「『ウィングガーディアン・レヴィオーサ―浮遊せよ』！」

エリザベスが杖を振れば、先ほど倒れた大木が浮かび上がる。

「僕もアルバスに賛成！ 『ウィングガーディアン・レヴィオーサ』！」

スコルピウスも杖を取り出すと、手近な大木を浮遊させた。アルバスも杖を抜くと、気持ちを整えるように小さく息を吐いた。浮遊呪文は1年生の秋ごろに習う簡単だけど、ちょっと難しい呪文。特に発音が難しく、何度も何度も言い間違いを正されたのは忘れない。アルバスはみんなの前で恥をかけた記憶を思い出しながら、思いつきり杖を振った。

『ウインガーディウム・レヴィオーサ』！』

アルバスの唱えに応じて、大木が浮かび上がる。アルバスは、自分の呪文が成功したことに、ほっと安堵の息を零した。こうして、三本の大木が夜空に浮かぶ。

『ウインガーディウム・レヴィオーサ』

ほどなくして、ローズが四本目の大木を夜空に浮かべた。

「3つ数えたら、あいつの頭上に落とす。それから、振り返らずに走るんだ。森の外まで！ 1……2……3！」

アルバスが叫ぶのと同時に、夜空を浮遊する四本の大木はガラガラと音を立てながら落下する。さすがのスクリュートも自分より巨大な大木が一度に四本も落ちてきては、たまったものではない。爆発で吹き飛ばす前に、押し潰されてしまった。スクリュートが大木の下敷きになったのを見届ける間もなく、アルバスはリリーを抱えて走り出した。

スコープウスとローズもエリザベスも、来た道を必死の形相で走った。ただ、どうしても、アルバスはリリーを抱えている分、皆より足取りが遅くなってしまう。それに気づいたのか、エリザベスだった。彼女は走りながら振り返ると、荒い息を

しながら呪文を唱えた。

『ウィンガーディアム・レヴィオサー！』

すると、リリーの身体が浮かび上がる。意識のない彼女の腕はだらりと落ち、ゆるらと揺れながら、エリザベスの右横に追従する。

「アル様、走ってください！ リリーは、リザが引き受けます！」

「ありがとう、エリザベス！」

アルバスたちは走った。

後ろで下敷きとなっている化け物が、いつ復活して襲いかかってくるか分かったものではない。とにかく、走って走って、走って、走って——やっとの想いで森の入口までたどり着く頃には、月はかなり傾いていた。4人とも芝生に倒れ込むと、しばらく誰も話さなかった。

「さい——っ、あく！」

最初に口を開いたのは、ローズだった。

「二度とごめんだわ、こんな危険なこと！」

彼女は肩で息をしながら、よろよろと立ち上がった。

「狼男の遠吠えの正体はスクリュートの爆発音？　こんな命を危険にさらして見極める謎じゃない」

「ローズ……」

「ばかばかしい。七不思議のほとんどが謎でもなんでもないことばかり。こんなこととせいで、命を落としたらたまったものではないわ」

「ローズ、君は七不思議を追いかけていないってこと？」

スコープウスが尋ねると、ローズはふんつと鼻を鳴らした。

「馬鹿げた噂話のせいで、校則をこれ以上破って死にたくないもの。もっと悪かったら、退学ね」

ローズは吐き捨てると、ぶんぶん怒りながら走り去っていった。彼女の赤い髪が闇の中に消えていくのを見届けると、アルバスはぽつりと呟いていた。

「死ぬより退学の方が嫌だなんて……ローズらしいや」

「同感」

「不思議な人ですね、ローズは」

スコープウスとエリザベスも立ち上がると、いまだ倒れているアルバスの手を一

緒に引つ張った。

右手はスコープウス、左手はエリザベスに支えられ、アルバスもようやく立ち上がる。

「ローズらしいよ、校則を破って死ぬのが嫌だつてところも」

「ローズのパパとママは、毎年かなりの校則を破っていたのにさ」

「君のパパもね、アルバス」

スコープウスとアルバスは小さく笑いあつた。

「アル様、とても冴えてましたね！ カッコよかったです！」

エリザベスがアルバスの手を握つたまま、無邪気に笑いかけてきた。

「まさか、1年生にならつた呪文でスクリュートを止めるなんて……！」

「たまたまだよ、スクリュートが周りの木を軒並み倒してくれて、本当に助かった」
「アルバス、たまたまかもしれないけど、それを思いつくことが凄いよ」

「スコープウスの方が凄いて。僕、スクリュートのこと全然知らなかったから……」
スコープウスの知識がなければ、目の前の怪生物の正体を知ることできなかった。対策を立てることもできなかっただろう。

「エリザベスもありがとう。走っているときにリリーを浮遊させてくれて。僕一人だったら、いまごろスクリュートに追いつかれてたかも」

「えへへ……リザは当然のことをしたまで」

「それにしても、今日は大冒険だったね。スクリュートが生き残っていたなんて……ローズは謎でも何でもないって言いきってたけど、れっきとした謎だよ」

スコープウスはやや得意げに話し始めた。

「だって、狼男の吼え声だと思われていたのが、本当は違ったんだからね」

「その正体が幻の尻尾爆発スクリュート！ リザ、世紀の大発見だと思います！」
「世紀かどうかは分からないけど、謎の解明には違いなよね！ だって、尻尾爆発スクリュートが生き残っていたんだから」

「なにが生き残っていたって？」

3人が真夜中の大冒険について話に花を咲かせていると、冷ややかな声が降ってきた。

アルバスたちの興奮していた熱量は一気に冷め、3人とも血の気が失せていくのを強く感じる。

「尻尾爆発スクリュート、という単語が聞こえた気がするけど……どこで見つけたの？ もしかして、こんな真夜中に『禁じられた森』を探検していたわけじゃないよね？」

ネビル・ロングボトム教授が、規則違反の3人を冷ややかな目で見降ろしていたのだった。

ハリポタでは数々の名言がありますが、ロンの「死ぬより退学になるほうが悪いのかよ」は、「賢者の石」における屈指の名台詞だと思います。

6 話 秘密の部屋の密談

翌朝、スリザリン寮に悲鳴の嵐が巻き起こった。

一夜にして、60点も減点されていたのだ。

グリフィンドールも50点減点されていたが、リリーは医務室で面会謝絶となつてしまっているの、誰もことの詳細を聞き出すことはできない。だが、誰もが想像していた。3人で60点も減らした張本人たち——アルバス・スコープウス・エリザベスの3人の夜歩きに、可哀そうなりりー・ポッターが巻き込まれてしまったのではないかと。

「今日が日曜日で助かったよ……」

アルバスはテーブルに伏せると、大きく息を吐いた。

「こんな日に授業に出たくないし、ジェームズにつかまったらって思うと……気が

重いや」

いつもスリザリン寮どころか学校中の嫌われ者三人組であることに変わりはないが、今日みたいな日は寮内はもちろん、廊下を歩くだけで、普段がマシに思えるほど針の上に座っているような感覚だろうし、ジェームズは実弟以上に大事なグリフィンドール生の実妹になにがあったのか問いただしに来ることだろう。

「エリザベス、ありがとう。秘密の部屋に入れてくれて」

「えへへ、アル様の頼みですから当然です！」

エリザベスはバジリスクのアルケミーの鱗をなでながら、にっこりと笑った。

今日はどこにいても3人は注目されてしまうし、居心地の良い思いをしないことは明らかなので、エリザベスにアルバスとスコープピウスを秘密の部屋に招待してもらったのである。ここならば、詮索好きの目を避けられるし、蛇語を知らなければ、容易に入ってくることはできない。大切な日曜日にふさわしい、のんびりとした時間を過ごすことができた。

「でも、おかしいよな」

スコープピウスがぼつりと呟いた。

「尻尾爆発スクリュートがいた痕跡が完全に消えていたなんて」

「……そうだよ、あんなに激しい戦いだっただのに」

実際、あの爆発音自体は温室まで響いていたらしい。

ネビルは禁じられた森から響いてくる謎の音に不審感を抱き、いそいで調べに来たところ、アルバスたちを発見したらしい。その後、アルバスたちは「妹が禁じられた森に行くのを見かけたから、連れ戻しに行ったところ、尻尾爆発スクリュートに遭遇した」と説明するも、実際に案内した場所は爆発の後も形もなく、あんなに倒れていた大木も綺麗に片付けられてしまっていたのであった。

『夜歩きは50点の減点だけど、妹を助けに行った勇気は評価しないとね』ってことで、1人20点の減点ですみましたが……どうして、痕跡すらなくなっていたんでしょう?」

「七不思議だからだよ、きつと」

スコーピウスは口を開くも、どこか寂しげな様子だった。

「スクリュートはどこに消えたんだろう? それを解明できれば、100点もらえたのかな?」

「ネビル先生に聴いてみればよかったですね、七不思議について」

「たしかに」

アルバスはエリザベスの呟きに同意した。

あのときは、夜歩きが見つかったことやスクリュートが消えたことに気を取られて、七不思議について切り出すことができなかったのである。

「ちなみに、残る七不思議は？ たしか、首がないチェイサーが飛んでるって話があった気がするけど」

「『首無しチェイサー』のことだね。あとは『地下牢の亡霊』かな」

「それって、どんな怪異なの？」

「『ホグワーツの戦い』にまつわる最新の噂だよ」

アルバスが尋ねると、スコープピウスは自分たちしかないのにもかかわらず、わずかに声をひそめて話し始めた。

『ホグワーツの戦い』が始まる前、非戦闘員の生徒たちが『必要の部屋』からホグズミード村へ脱出したっていうのは有名な話だろ？ そのときに、逃げ遅れた生徒が戦いに巻き込まれて亡くなったあと、ゴーストとなって地下牢をさまよって

いるって話」

「でも、本当にそこで亡くなった生徒っているんですか？」

スコープウスの話を聞くと、エリザベスが不思議そうに首を傾げた。

「たしかに、当時はかなり混乱していたと聞いていますけど……」

「考えてみて、エリザベス。深夜にいきなり大広間に集められて、すぐにここは戦場になるから逃げろって言われただけでも大混乱さ。それに、まだ避難が完全にすんでない時点で戦いが始まったみたいだし、戻ってきて戦闘に参加する生徒がいても気がつかれなかったくらい大混乱だったみたいだって本に書いてあったよ」

「……こっそり大切なものを寮にとりに戻ったけど、戦闘に巻き込まれて死んじゃったってことはないと言いきれないよね」

アルバスは自分で言いながら、その通りだと思った。

夜中に何も知らされずに大広間に集合をかけられたと聞いているし、逃げる前に大事な荷物を取りに戻りたくなる気持ちはよくわかる。その荷物がかけがえのない大切な物であればあるほど、こっそり取りに戻りたくなるのは当然だろう。

「アル様の言う通りかもしれませんが、わざわざ地下牢にとどまり続けます？」

ゴーストになったのであれば、もっと自由に動き回っても良い気がしますけど」

『嘆きのマートル』がいるだろ？ ほら、自分が殺されたトイレに留まり続けるんじゃないか」

「マートルが三階の女子トイレを好んでいるのは、生前からだと聞いていますよ。いじめられて嫌な思いをしたとき、トイレに駆け込む習慣があったとか。……まあ、それが原因で殺されてしまったわけですが」

エリザベスはそう言いながら、くいつと人差し指を天井に向ける。

「もし、七不思議が本当なら……噂の女子生徒は地下牢に生前から愛着があったとしか考えられません。でも、そういう人っています？」

「地下牢に愛着があったというわけじゃなくて、地下牢に置いてあるものに執着があったのかもしれないよ。わざわざ取りに戻った大事な物が自分の亡くなった地下牢に放置されたままになっているとか」

スコーピウスが腕を組みながら、こうではないかと考察する。そのまま、彼は「どう思う？」と言わんばかりの視線をアルバスに向けてきた。

「うーん……」

アルバスは唸ることしかできない。スコープピウスの考察もエリザベスの考え、その両方とも筋が通っているように思える。どのように答えるべきかと悩んでいれば、先ほどまで眠そうにしていたバジリスクのアルケミーがいきなり起き上がった。

「――？」

エリザベスも不思議に思ったのか、アルケミーに鋭い口調で何かを尋ねる。アルケミーも答えていたが、アルバスにはシューシュー、ガラガラという音のやりとりにしか聞こえず、スコープピウスと息をのんで待つことしかできない。アルバスにはアルケミーの表情や蛇語の雰囲気を読み取ることなんて不可能で、エリザベスの雰囲気からなんとか会話の内容を察しようと努力したもの、エリザベスは眉間に皺を寄せたまま険しい表情を崩さなかった。

ところが、蛇語による会話は唐突に終わりを告げた。

「アル様！ 大変です！ いまから、お客様が来るそうですよ！」

エリザベスは表情を柔らかく緩め、うきうきと心弾むような口調で言い切った。蛇語を扱える者でなければ訪れることができない「秘密の部屋」まで訪ねて来ることができる人など、かなり限られている。まさか……と、思いながら、部屋の入

口に恐る恐る目を向ければ、扉の奥からかつんかつんっとヒールが床を叩くような音が響いてくるではないか。アルバスは思わず声を潜めて、エリザベスに尋ねていた。

「ねえ、お客さまって誰のこと？」

「それはですね……扉が開いてのお楽しみです！」

エリザベスがふふんっと鼻を鳴らしながら、そわそわと髪の毛を気にし始める。一体、誰のことなのかとアルバスが問いたただす前に、重たい扉は軋みながらゆっくりと開いた。

「おじゃまします」

どこまでも快活な声が部屋に木霊する。

その人物は絹のように美しい黒髪を優雅に流しながら、悠然と部屋に足を踏み入れた。魔法の城であるホグワーツに不釣り合いであるはずの灰色のマグル製スーツを着こなし、スラックスがすらっと伸びた長く細い脚を際立たせている。

「久しぶり、リザ、アルバス。そちらが、スコープピウス・マルフォイ君であつてるかしら？」

明らかに意志の強そうな瞳が三人を見止めた。

絶対にホグワーツにいるはずもない人物の登場に、アルバスは口をあんどり開けるしかなかった。

「で、デルフィー!? ど、どうして!?

「そうね、どうしてかしら」

その様子がおかしかったのか、デルフィーニはくすくすつと笑う。

「泥棒をしに来たの。さあ、金を出せ、杖を出せ、蛙チョコレートも出せ! って」

「デルフィー姉さん!」

「冗談よ、冗談。そんな怖い顔しないで」

デルフィーニはちょっと怖い顔になったエリザベスに手を軽く振りながら、スコピウスの前まで歩みを進める。

「はじめまして。リザの義姉のデルフィーニ・レストレンジよ」

「はじめまして」

スコピウスは硬い表情で彼女の手を握った。

「デルフィーニさん、どうやってここに?」

「聞いてない？ 私も蛇語がつかえるのよ」

「え？」

「レストレンジ家は代々純血の家系。家系図をさかのばれば、純血至上主義だったサラザール・スリザリンの血が入ってるの。かなり薄まった血だけど、数世代を経て遺伝したってとこね」

ほら、変なところはないでしょ？ と、デルフィーニは説明する。

「とはいっても、私はスリザリンの直系の末裔ではないから、アルケミーをエリザベスほど従わせることはできないし、秘密の部屋の正当な継承者ってわけでもないから、ここに来る頻度は少なかったけどね」

デルフィーニは確認するようにアルケミーを見上げた。アルケミーは静々と頷き、シューシューという気味の悪い音で答える。

「アルケミーは『セレネ様から直々に、自分の次は、エリザベスに仕えるように。秘密の部屋を継ぐのはエリザベス・ノット。その次は、エリザベスに一任する』と頼まれています。エリザベス様こそ、次代のスリザリンの継承者です』と言っていきます」

「へえ……そうなんだ」

アルバスは頷くしかなかった。エリザベスのことはキャンキャンと自分の周りうるさいほど駆けずり回る子犬のようだとしか思っていなかったが、改めて「スリザリンの末裔」なのだと実感する。

「それで、姉さんはどうしてこちらに？」

「ちよつと資料を探しに。いま、私が探している資料はホグワーツの図書室にしかなくてね。そしたら、なんだか大変なことになってるんだもの。驚いちゃったわ」
デルフィーニは呆れたように息を吐いた。

「大事な妹と妹の友だち三人組がスリザリンの嫌われ者になってるじゃない。しかも、大量減点……その真実を確かめるべく、ここに來たってこと」

彼女はここまで言うのと、近くの椅子に腰かけた。

「そんな騒ぎになってるの？」

「特に三階の女子トイレが大変な騒ぎよ。ジェームズ・ポッターが『アルバスは秘密の部屋に逃げ込んだんだ。出てきたら、兄として詳しく話を聞かないと！』って言い張って、女子トイレの前に座り込んで動かないんだもの」

「うわあ……忍の地図だ……」

アルバスは頭を抱えた。

ハリーたちがこそこそ動くうえで大活躍した祖父世代の遺産は、ジェームズがひっそりと父の机から持ち出していることは知っていた。その事実を父が黙認していることも知っている。あの地図を使って、アルバスたち三人が校内のどこにもいないと分かれば、「秘密の部屋」に隠れているのだと察してもおかしくはない。

「それから、これはたまたま廊下で会ったスネイプ教授に聞いたのだけど……」

デルフィーニはここで言葉を一旦区切ると、面白そうに目を光らせた。

「3年生のアルバス、スコープウス、エリザベス、それから1年生のリリーが『禁じられた森』で危険かつ不審な動きをしていたのに校長先生が懸念を抱いているみたいで、各ご家庭にフクロウ便を送ったとか」

「「え、ええー!!」」

3人の悲鳴が見事に重なった。

「デルフィー姉さん! それ、嘘ですよね!」

「嘘じゃないわよ。スネイプ先生が嘘をつくと思う? まあ、間違いなく……ポッ

ター家は来校するわね、リリーちゃんが大怪我したわけだし」

「う……」

「それから、うちの義父さんのことだから、リザの安全を確かめたいと思うでしょうね。ちょうど、義母さんも帰国してるから……夫婦そろって様子を見に来るんじゃない？」

「お、お父さんだけでなく、よりにもよって、お、お、お母さんまで……!?」

「ポッター家、ノット家。その両家が来てるのに、マルフォイ家だけ来ないっていうのは世間体が悪いとなれば……スコーピウス君のお父様も姿を見せるかもね」

「……それは……」

これまた、3人とも顔から血の気が引いていく。

アルバスは確実に両親から叱られ、特に父から「ポッター家の劣等生」だと突き付けられる姿を想像した。七不思議解決に協力したのはスコーピウスのためという名目もあったが、両親たちに——特に、父から「さすが、自分の息子だ」と褒められるためだったのに、真逆の結果になってしまった。

「ど、どうでしょう！」

アルバスが震えている横で、エリザベスが見たこともないほど狼狽していた。

「お父さんも怖いですけど、お母さんが来るなんて……うう、どうしたら……リザ、明日を生きて迎えられる自信がありません……！ デルフィー姉さん、どうにかなりませんか？」

「どうにかするために、私がここまで足を運んだのよ……それぞれの両親が来る前にね」

デルフィーニはそう言うと、どこからともなく杖を取り出した。そのまま、杖をすいーっと優雅に掃くように振るった。すると、アルバスたち3人が座っていた椅子が一斉に宙に浮かんできたと思えば、デルフィーニの傍に音もなく降り立った。「義母さんが来るとなれば、ここも安全じゃない。本当の『スリザリンの継承者』だからね。いまにも戸口に現れる可能性だってある。さあ、話して……なにがあったのか、全部」

アルバスたちは洗いざらい話した。

七不思議の話、解決したらホグワーツ功労賞がもらえる噂のこと、昨日の夜に探索に出かけたこと、禁じられた森で「尻尾爆発スクリュート」に遭遇したこと、命

からがら逃げる事ができたが、ネビルにつかまり、戻ってみれば戦闘のあとが跡形もなくなくなっていたこと。

デルフィーニは3人の話を目を輝かせながら、黙って最後まで聞いていた。

「……七不思議……聞いたこともないわ」

デルフィーニは杖を指で回しながら、なにやら考え込んでいた。

「残った七不思議は？」

『『地下牢の亡霊』と『首無しチェイサー』と『青のジャック・オ・ランタン』です』

「いまからでも間に合いそうなのは、地下牢の亡霊か……地下牢なら、パイプ伝いで見つからずに行けそうね」

デルフィーニは恐ろしいことをさらっと口にする。

「え、ええ!! いまから行くんですか!？」

「夜に起こる怪奇ってわけではないでしょ？　せめて、あと1つ確認してから諦めても遅くないんじゃない？　それを解決できれば、あなたたちはホグワーツ功労賞が貰えるのでしょ？」

「でも……また、消えたら……」

「だから、私がいるんじゃない。あなたたち3人に加えて、私まで目撃したってなれば信ぴょう性が増すわ。スクリユートの話も嘘じゃないって証明になるかもしれない」

それにね……と、彼女は言葉を続けた。

「たとえば、その噂自体が嘘で、功労賞の話もデマの類だったとしても……試してみる価値はあると思うわ。そんな怖い顔をしないで、大丈夫よ。私が協力してあげるから」

ホグワーツ在学中、7年間学年1位の座を守り通した秀才——デルフィーニ・レストレンジは杖を構えると、どこまでも悪戯っぽく笑った。

※読者の方々はご存じかと思いますが、デルフィーニが蛇語を操れる理由は別にあります。

7 話 地下牢の亡霊

ホグワーツには、地下牢がある。

「地下牢」と聞けば、恐ろしいイメージが先行するだろう。拷問が行われたり、罪人が閉じ込められたりするような場所、誰も近寄りたがらない——と、思われがちだが、ホグワーツのだいたいの生徒にとって地下牢とは恐るべき場所ではなかった。

ホグワーツに在籍する生徒のほとんどは、地下牢を毎週訪れている。

なにせ、スリザリン生は寮への入口が地下牢にあるし、5年生以下の生徒は魔法薬学の授業を受けるために地下牢にある教室に足を運ばなければならないからだ。だから、ホグワーツの生徒に「地下牢は怖い？」と尋ねても「ぜんぜん？」と返されるのが一般的な反応だろう。

しかし、彼らの答える「地下牢」とは、城の地下に広がる地下牢のごく一部に過

ぎない。

魔法薬学の教室、スネイプ先生の私室を通り過ぎ、スリザリン寮への入口のさらに奥へと進めば、過去には体罰の一環として生徒が吊るされたり、磔の呪いにかけてられたり、鞭で痛めつけられ閉じ込められたりした文字通り「本当の地下牢」がある。

今回、七不思議の『地下牢の亡霊』が出現されると言われるのは、こちらの方である。

こちらには、スリザリンの生徒はもちろん、ゴーストですら近づかない。ごくまれに新学期のはじめ、1年生が迷い込んでしまうことがあるくらいで、大多数の生徒は足を踏み入れたことすらないまま卒業することになるだろう。

事実、アルバスたち三人組もこちらの地下牢に入るのは初めてである。

「うー、緊張してきた」

アルバスはごくりとつばを飲み込んだ。バジリスクのアルケミーに先導され、狭いパイプを這うようにしながら進んできたので、強張った身体をもうすぐ伸ばせる

のが嬉しい一方、おそろしい地下牢に行かねばならない恐怖を感じずにはいられなかった。

「アルバス、大丈夫だよ。ほら、探索自体はデルフィーニさんと合流してからだし」スコープウスがやや明るい声色で返してくる。

「デルフィーニさんがいて助かったよ。彼女がいなかったら、君のお兄さんが『忍びの地図』で見張ってることを知らなかったし、もしかしたら、地下牢に繋がるパイプを出たところで、君のお兄さんが待ち構えてるってことも十分にありえるからね」

「それはそうだけど……」

アルバスは唸った。

誰よりも頼りになる助っ人の姿は、いまここにはない。

ジェームズに『忍びの地図』で居場所を知られてしまつては、七不思議探索も思うように進むわけがないので、デルフィーニが『忍びの地図』の脅威を取り除いてくれることになったのである。そのため、最も頼りになる助っ人は別行動中なのだ。「わかつてるよ。地下牢で合流するってわかつてるけど、デルフィーが来る前にな

にか起きたら……」

「アル様、心配はいりませんよ！ いざとなれば、アルケミーが一睨みでどんな強敵でも——……ん？」

エリザベスがそこまで答えたとき、先導するアルケミーが止まった。アルケミーが申し訳なさそうにシューツと息を吐くのが聞こえてくる。エリザベスはきよとんとした様子だったが、不思議そうに蛇語で問いかける。

「アルケミー、なんだって？」

「いやそれが……『この先に行くことは、サラザール・スリザリン様により禁じられています』の一点張りで……」

「え？」

『禁じられていなくても、とてつもなく嫌な気配がするので行きたくない』って……
エリザベスが困惑している。

「えっと……それって、おかしくない？ だって、アルケミーはスリザリンが遺した怪物じゃないか。それなのに、スリザリン生が一番関わりがある地下牢に入れないなんて」

アルバスは疑問を口にした。

エリザベスは困ったように眉をひそめ、蛇語で説得を試みているようだったが、アルケミーの返事はよくないものだったらしい。アルケミーはアルバスたちを降ろすと、申し訳なさそうにパイプの奥へと引き返していつてしまった。

「ねえ……デルフィーを待ってから進まない？」

アルバスは、気がつけばそんなことを呟いていた。

「その方がいいかもしれない」

スコープウスもやや不安げな顔であたりを見渡していた。

普段は絶対に足を踏み入れない奥のさらに奥ということもあるのだろうが、まったく人の気配を感じなかった。当然ながら窓のない石の壁は圧迫感があり、左右から押しつぶされてしまいそうに思えてたまらない。等間隔で壁に掲げられたロウソクの灯りだけが頼りになってくるのだが、いまにも吹き消えそうなほど細い炎。頼りないことこの上なかった。

「デルフィー姉さん、遅いですね」

エリザベスが腕をさすりながら、自身の腕時計に目を落とした。

「別れてから1時間は経ちますよ? ジェームズを撒くのに、そんなに手間取ります?」

「なにか予期せぬ事件があったのかもしれないよ。たとえば……すでに僕たちの家族が来校して、その足止めをしてくれているとか!」

「それはありえないかと」

エリザベスはスコープウスの考えを一蹴した。

「少なくとも、デルフィー姉さんにお母さんは止められませんから。お母さんを止められるのは、クイールおじいちゃんだけです」

「……そうだよ。さすがのデルフィーでも僕のパパやママの足止めをできるとは思えないや」

アルバスもはあ……とため息をついた。

「ははは……デルフィーニさんが足止めできるのは、僕の父だけってことか」

「わかりませんよ。スコープウスのお父様は愛情深い方だと聞いています。息子に危険が迫っていると分かれば、デルフィー姉さんが止められるかどうか定かではありません」

「それじゃあ、デルフィーはどうして来ないんだろう?」

ジェームズは頭もよく魔法にも優れているし運動神経だって抜群なのだが、デルフィーの方が二手も三手も上に思える。なぜ、彼女がここに来られないのか不思議に思えてならなかった。

「となると、僕たちが想像できないくらい大変なことに巻き込まれてるのかな」

「……かもしれません」

エリザベスの寂しそうな細い声を聞くのは珍しく、アルバスは無性に気まずくなった。3人は黙り込んだまま、地下牢の入口の方へ期待を込めた視線を向け続ける。ただでさえ人気のない地下牢の空気は胸がつかくなるほど重々しい。ひんやりとした寒々しい風が時折吹き、ぶるりと身体を震わせる。

アルバスは怖さに耐えかね、「もう少し入口の方に移動しない?」と提案しようとした——そのときだった。

「……ねえ、なにか聞こえない?」

スコープウスが目を見開くと、震える指で背後をさした。

誰もいないはずの地下牢——重々しい静けさのなか、耳をすませば、確かに奥からすすり泣くような音が響いてくる。

「……え、もしかして……」

「噂の『地下牢の亡霊』が出現したということでしょうか？」

「亡霊かどうかは分からないけど、誰かいるってことだよな」

泣いているのは誰なのか？

本当に亡霊がいるのか？ それとも、道に迷った生徒なのか？

「もし迷子がいるなら……」

アルバスは「助けに行かない」と言いかける。しかし、もし亡霊の声だったら……と考えると背筋が震え、もごもごと口ごもるしかなかった。

「アルバス。もうちょっとだけ奥に進もう」

「ちよつとだけなら、デルフィー姉さんもすぐに追いつきますって。こんなに声が響いてますし」

スコープウスがアルバスの右手を、エリザベスが左手を握りながら言った。2人

とも手が震えているのが伝わってくる。それでも、アルバスを安心させようと手を繋いでくれている——そう思うと、アルバスは自分だけ尻込みしてはいけなような気がしてきた。

自分は英雄の息子なのだから、こんなところで怖がってはいけない。

「うん、そうだね。僕たち、もう3年生だし……迷子の下級生がいるなら助けに行かないと」

アルバスは自分に言い聞かせるように話すと、3人並んで奥へと足を踏み入れた。

細長く続く薄暗い通路。かつん、かつんと自分たちの足音が不気味に響き渡る。普段絶対に誰も訪れないのに埃っぽさを感じないのは、ここまですっかり屋敷しもべ妖精たちが掃除しているからなのだろうか。両脇の壁からは絶えず水が滴り落ち、ぼちゃ……ぼちゃ……と音がする。そのたびに、アルバスたちのうち誰かがびくつと震えた。音につられて水が滴り落ちた個所に目を向けてしまえば、いつの時代か誰のものか分からぬ血の黒い跡がこびりついているさまを見てしまい、首筋がぞくりと逆立つ。

「あの……誰かいるの？」

そのなかで、すすり泣くような音は続いていた。音の方へ足を進めるほど、近づいていくのが分かる。しかし、その一方で進めば進むほど道は狭まり、壁と壁に圧迫されるような息苦しさを感じた。

「……誰もいない？」

スコピウスがぼつりと呟いた。

この頃になると壁に刺さったロウソクの数も乏しく、ほとんど灯りはなくなっていた。底冷えするような暗さのなか、必死に目を凝らしながら先に進んだ結果、待ち受けていたのは行き止まり。ずっしりとした石の壁がそびえたっている。それなのに、すすり泣く声だけは確かに壁から聞こえるのが不気味だった。

「もしかして、壁の向こうにいますか？」

「ここはホグワーツですから、壁に細工しているとかありえますけど……」

エリザベスが空いている手を伸ばし、壁をペタペタ触り始める。あちらこちら適当に触っているように見えたが、ちょうど自分たちの顔ほどの高さの位置でぴたりと動きを止めた。

「あ……わかりました、泣き声の正体！ ほら、ここ……石と石の隙間！」

アルバスとスコープウスも顔を近づけてみると、なんてことはない。石と石の隙間からいっそう冷たい風が吹き抜けてくる。

「つまり、これは……泣き声じゃなくて、風の音？」

アルバスは落胆を隠せなかった。

泣き声の正体は隙間風の音。不可思議な亡霊の仕業ではなかったのだ。こんなあっさり謎を解明できてしまい、物足りなさすら感じてしまう。

ところが、スコープウスは違ったらしい。

「ねえ、どうしてこの場所だけ隙間風が通ってるのかな？」

彼は青い瞳をきらきらと輝かせて、さらに石壁に近寄った。

「行き止まりなのに、向こうから風が吹いてくるのはおかしい。きっと、行き止まりじゃなくて奥に続く空間があるんだ」

「つまり、隠し扉ということですか？」

「たぶんね。すごいよ……地下牢に隠し扉があるなんて『ホグワーツの歴史』にも載ってなかった！」

「スコープウスが言うならそうなんだろうけど……どうやって開けるの？」

アルバスが言うのと、エリザベスが杖を取り出した。

『アロホモラー開け』

1年生で習った開錠の呪文を唱えるが、石壁に変化はない。エリザベスは小首を傾げ、ふむっと頷いた。

「まあ、ダメ元でやりましたが……」

「そう簡単に開くものじゃないってことか」

スコープウスがはははと力なく笑った。

「アルバス、どうする？」

「どうするって言われても……僕、なんにも思いつかないよ。そういうのは、君の方が詳しいだろ？　ホグワーツの歴史なんて読んでないし……ホグワーツの隠された部屋を開ける話なんて『必要の部屋』と『秘密の部屋』くらいしか知らないよ」

「それでは、試しに蛇語で言ってみましょうか？　開け……つまり『——』って」

アルバスには聞き取れなかったが、エリザベスは蛇語で『開け』と口にする。冗談っぽく、されど真剣に。奇妙なシューシューという音が彼女に小さな唇から紡が

れた瞬間、ちょうど隙間風が吹き抜けてくる部分が眩い白い光を放ったではないか。壁を構築する石の一つ一つが動き始め、小さな穴があいたかと思えば、みるみるうちにアルバスたち3人が通れるほどのアーチへと変貌を遂げた。

「え……」

誰もが啞然とした。

蛇語を唱えたエリザベス自身も目が点になっていた。

「この先、どうなってるのかな？」

アルバスは歯を食いしばって、石で組まれたアーチに一步近づいた。

「アル様、なにか見えましたか？」

「なにも。まっくらで見えない。でも……」

アルバスはアーチに頭をつっこみ、四方を見渡してみた。

「道は続いてない感じがする。ほら、足元を見て」

アルバスたちが立っている場所で道は終わっている。アーチの向こうは真っ黒な空間が広がるばかり。道は続いておらず、すぐ目の前にぽっかりとした大穴が口を開けている。

「行き止まりであることに変わりはないね」

「いや、この穴を隠してるのかも」

「この穴を探索するの？ どのくらい深いのかわからないのに」

やはり、ここから先はデルフィーニを待つてからの探索にしよう。

アルバスが提案しようと口を開こうとした瞬間、歓声のようなしわがれ声が割って入ってきた。

「誰かいるな。ここは立ち入り禁止の廊下だぞ」

管理人のフィルチの声だった。

アルバスは混乱した。地下牢が立ち入り禁止だとは聞いたことがない。アルバスは2人に確認しようと交互に目を見たが、両者ともに困惑しきった表情で首を振るばかり。

地下牢が立ち入り禁止とかいう校則はないし、今日は休日。ここにも校則違反にはならないのだが、フィルチは規則違反の生徒を見つけることを生きがいにしてている。見つけたら間違いない面倒なことになるだろう。

フィルチの声は聞こえても、その姿まで見えない。
しかし、何者かの足音だけは近づいてくる。

フィルチから逃げたい心か、それとも、彼に対する罰則への恐れからか。3人の足が大穴の方へ踏み出し、そのままバランスを崩して落下する。耳元でエリザベスの悲鳴が聞こえたと思ったときには冷たい湿った空気を切り、落ちて……落ちて……落ちて……どすつと湿った音をたて、なにかサクサクしたクッションの上に落ちた。

「ここは……?」

アルバスの声が空間に反響した。

「なにも見えないので分かりませんね……あの……ルーモス、使っていいですか?」

「当然だよ。なにも見えない。というか、いままでなんで使わなかったの?」

「え? 七不思議を探し始めた最初でしたよね。『ルーモスは使わないように』と言われたのは」

「はぁ……あのときといまとでは状況が違うじゃないか」

アルバスが呆れ果てると、エリザベスが杖を振る音がした。

『ルーモス―光よ』

杖に灯りがともる。

ここで、クッションになったものの存在が判明した。

巨大なヘビの抜け殻だ。毒々しい鮮やかな緑色の皮がとぐろを巻いて横たわっている。ざっと見ても5m近くあるに違いない。その周りを囲むように小さな動物たちの骨が散らばっていた。

「まさか、アルケミーの抜け殻……?」

「いや、違う」

スコルピウスが怯え切った声を出した。

「抜け殻の頭を見て」

長い長い一本の抜け殻だと思ったが、途中で枝分かれしている。少なくとも、バジリスクの頭は1つしかなかったはずである。

「頭が……たくさんある」

恐怖からその本数を数える気にもなれず、頭を上げたとき絶望する。

杖灯りをともしても、目と鼻の先しか見えない暗い空間——その向こうに光る目があった。金色の瞳は久々に見た獲物に歓喜と興味の色で満ちている。

しかしながら、その瞳は1つではない。

「なに、あれ」

エリザベスがひゅうつと息をのむ。

星の数ほどの蛇の目がアルバスたちを見おろしていたのだ。

8 話 もう1つの秘密の部屋

「なんだ、あれ……？」

アルバスは怪物から目が離せなかった。

足元に転がっている抜け殻から察するに巨大な蛇なのだろう。暗くて全体の詳細は見えないが、大きなバジリスクとあまり変わらない。バジリスクなら慣れているので、3年も経った現在はそのままで怖く思うことはなくなったが、バジリスクの頭は一つ。しかし、数えるのが億劫になるほど膨大な量の黄金の瞳が、闇の向こうからこちらをまっすぐ睨んできている。

「頭がたくさんある蛇……ヒュドラーでしょうか？」

エリザベスの怯え切った細い声が聞こえてきたが、スコーピウスがそれは違うと断言する。

「ヒュドラーの毒は確実な解毒方法がないんだ。そんな生き物を城の地下に住まわせるなんて正気の沙汰じゃない！」

「エリザベス！ とにかく、蛇語で話しかけられない!？」

「は、はい！」

エリザベスは慌ただしくシューシューと蛇に向かって唱えるも、蛇の頭のひとつが躊躇なく三人組に突っ込んできた。アルバスたちは反射的に手を離し逃げたことで、間一髪、蛇の攻撃を避けることはできた。蛇の頭は勢いを殺すことなく壁にぶつかり、べちゃりと生々しく潰れる音が響き渡る。アルバスは間近で聞いてしまった音に震え、ぞわりと鳥肌がたつのを感じた。

『——ッ!!!!!!』

蛇の不気味な声が暗闇に木霊する。あまたの頭から発せられた声は、まるで悪魔の合唱のように空間を恐怖で支配する。アルバスは堪らず耳を塞ぎ、座り込んでしまった。それでも、なんとか二人の安否が気になり、勇気を振り絞って声を発する。

「み、みんな、無事!？」

「僕はなんとか」

「わ、私も大丈夫ですけど、ごめんなさい！ む、無理です……！ まったく話を聞いてくれません！」

エリザベスの今にも泣きだしそうな震え声が、アルバスの耳に届いた。

『我はラードーン。我が主の命により、お前らを食い殺してやる』って……わ、私、蛇が言うこと聞いてくれないなんて、これが初めてで……」

彼女の声が聞こえた方に視線を向ければ、たよりない杖灯りに照らされた怯えた切った少女の顔があった。青い瞳は恐怖で濡れ、いまにも涙が零れ落ちそうだ。

「エリザベス……っ！」

アルバスは彼女の方に向かおうとするも、すぐ頭上から冷たい息と風が吹くようなシュューっという音がする。その正体を確認しようと振り返った途端、なにか重たいものがアルバスにぶつかった。

「うっ！」

アルバスの身体はその衝撃で吹き飛ばされ、壁に打ちつけられてしまった。あまりの痛さに歯を食いしばりお腹を抱えて丸まっていると、骨だらけの床を蛇が胴体を滑らせながら近づいてくる音が聞こえてくる。

「っ、あ、『アクシオ——来い』！」

蛇の毒牙がアルバスの身体を貫く寸前、見えないどこかに身体が引き寄せられ

た。自分がいた場所に蛇の頭が突っ込む姿を見ながら、どんどん後ろ向きに引き寄せられ、そのまま、スコープピウスの手前に投げ出された。

「やった……、呪文が成功した！」

スコープピウスはわずかに嬉しいような声を出しながらも、青白い顔は恐怖でひきつっていた。

「たすかったよ、スコープピウス」

「なんとかね。でも、状況はよくなっていないってところかな……まあ、ヒュドラーじゃなくてよかったってくらい」

「ラードーンってなに？」

「ギリシャの怪物。黄金の林檎を守ってたって伝説があるんだよ」

スコープピウスは小声で口早に言う。アルバスは背骨の痛みに顔をしかめながら、首を横に振った。

「ってことは、あの怪物もなにかを守ってるってこと？」

「その可能性が高いと思う。でも、かなりの強敵」

「それはわかるよ。あれだけ頭があるからね」

頭がひとつのスクリュートでさえ、命からがら逃げだすのがやっとだったのに、頭が100もある大蛇なんて勝ち目がないように思える。

「スコープウスの知ってる本では、どうやって倒したの？」

「ギリシャの大英雄ヘラクレスが、ヒュドラの毒を塗った矢で撃ち殺したって」

「ヒュドラの毒なんて持ってないよ！」

アルバスは口を尖らせた。

「他に方法はないの!？」

「本にはそれしか書いてなかったんだ……っ！」

スコープウスの表情がさらに強張った。その理由はわざわざ問うまでもない。蛇の舌が出入りする挑発的な音が、アルバスの耳の後ろから聞こえてきたのだ。ラードーンの頭のひとつ……もしくは、複数が迫ってきている。アルバスとスコープウスは鞭で打たれたように、ほぼ同時に走り出した。

「ねえ、スコープウス！ スネイプ先生の研究室になら、なんとかって蛇の毒もあるんじゃない!？」

アルバスは闇雲に走りながら叫んだ。

「そこから、呼び寄せできない!？」

「たぶん、先生も持っていないと思う。ヒュドラーの毒は神話級の貴重なものなんだ。運よく研究室に保管してあったとしても、生徒が悪用しないように呼び寄せ防止呪文をかけてあるはず……っわ！」

スコープウスがつまずき、床に倒れ込んでしまう。

「スコープウス！」

アルバスはすぐに引き返し、親友を起こそうとする。スコープウスは顔を強く打ったのか、青い痣が頬に広がっている。

「しっかりして、スコープウス……あ……」

アルバスは背後に迫る存在に、震える手で杖を向けた。杖灯りが巨大な蛇を照らし出す。毒々しい深緑色の胴体は「禁じられた森」の巨木並みに太い。その胴体が高らかにくねらせ、巨大な鎌首がまっすぐこちらに向かって来る。それも、みつつ。まだ、頭が1つしかないバジリスクを敵に回した方が楽だろうと気持ちなのだろうかと思いつながら、アルバスは呪文を唱える。

「ふ、『フリペンド—撃て』!!」

懸命に衝撃呪文を放つも、アルバスの杖先から出るのはヘナヘナとした弱々しい光だけだった。案の定、光はラードーンの鱗にぼすっという音と共に当たり、まったく効いていない。

「だ、だめだ……」

悲痛の声が口から洩れてしまう。アルバスはどうしたらいいのか分からず、ラードーンの口に光る二本の牙を見ていることしかできなかった。

『プロテゴ―守れ』！』

鋭い牙の前に、透明な盾が形成される。

「アル様！ スコーピウス！ いまのうちに逃げて！」

振り返れば、エリザベスが杖をかまえていた。アルバスは大きく頷くと、スコーピウスの手を引っ張り立ち上がるのを手伝った。

「ありがとう、アルバス」

「礼は良いから、とにかく走ろう」

そうこうしているうちに、ぱりんとガラスの割れるような音がする。エリザベスが作り出した盾が割れてしまったのだろう。アルバスはスコーピウスたちと走りな

がら、ぎゅっと拳を握り締める。握りしめた手のひらが汗に濡れ、指が痺れていくのが分かった。心臓なんて強く打ち過ぎて、胸から飛び出てしまいそうだ。

アルバスたちは蛇の気配を必死に探りながら、少しでも安全そうな柱の陰に身を隠した。迫ってきたラードーンの頭はアルバスたちの隠れた場所に限りなく近づきはしたが、どうにか見つからずにすみ、示し合わせたわけでもないのに、三人が三人とも同じタイミングで安堵の息を零した。

「これからどうする？」

「とにかく、あいつを倒さないと。いつまでも隠れるわけにはいかないよ」

「でも、どうやって倒しましょう？ ヒュドラーの毒に匹敵する毒なんて、……私、ダメもとで失神呪文を撃ちます？」

エリザベスは提案しながらも自信なさげにうつむいた。表情は見えなかったが、相変わらず声には涙の気配が滲んでいた。いつも自信満々な様子で魔法を使いこなす彼女からは、とてもではないが想像できない姿である。もしかすると、こちらが考えている以上に、尻尾爆発スクリュートに自慢の呪文がまったく効かなかった事実が尾を引いているのかもしれない。

「やめた方がいいと思う。頭一つか二つは失神させられるかもしれないけど、百本近くあるんだ。同時に昏倒させるか地道に削るかしか道はない」

予想通り、スコープピウスがエリザベスの案を却下する。彼女なら失神呪文を使えるが、ラードーンの頭を全部倒し終える前に魔力切れで倒れてしまうのがオチだ。

「……どうしよう」

アルバスはうなだれてしまった。足元に目を向ければ、嫌でも骨だけになった小動物の残骸が目に入ってしまう。自分たちの数分後もこうなってしまうのだろうかと考えるだけで、やっと収まっていた震えが再び込み上げてくる。

「やっぱり……デルフィーと合流してから動けばよかった……」

アルバスは自分で口にしながら、ますます落ち込んだ。

今回、先に進もうと行動したのは、自分なのだ。自分の軽率な判断が、スコープウスとエリザベスを巻き込んでしまった。せめて、バジリスクのアルケミーに無理を言っただけに来てもらえるように説得できていれば、ラードーンとの戦いにも光が見えたかもしれない。同じ巨大な蛇でも、バジリスクは一睨みで敵を殺すことができる。万が一、ラードーンがバジリスクの魔眼を知っていたとしても、不死鳥の

涙でしか癒すことができない毒の牙があれば善戦できたはずだ。

「毒の牙……あ……あつ、そうだ、エリザベス！ アルケミーの牙だけ呼び寄せることってできるかな？」

「できると思いますけど……抜けた牙は何本か『秘密の部屋』に保存してありますから……って！」

エリザベスは驚いたように顔を上げる。

「ま、まさか、アル様。アルケミーの毒牙で立ち向かうつもりですか？」

「ヒュドラーの毒の代わりに、バジリスクの毒を使うってこと？」

「うん。ヒュドラーって蛇ほどじゃないかもしれないけど、バジリスクの毒ってかなり強力だし、効くんじゃないかなって思ったんだけど……どう思う？」

アルバスはこわごわ尋ねてみる。

「いいと思うよ、アルバス。バジリスクの毒は分霊箱を破壊する手段のひとつになるほど強力なんだ。大丈夫だとは思う。思うけど……あの身体に刺すのは大変じゃない？」

「でも、やらないと殺されるんだ。それしか方法がない……僕、僕がやるよ。エリ

ザベス、呼び寄せ呪文をお願いできるかな？」

「了解です」

エリザベスは力強く頷くと、いつものように自信たっぷり杖を振るった。

「『アクシオ―来い』」

牙が飛んでくるまで、どれくらいかかるだろう？

それまで、見つかりませんように……と祈りながら、三人は部屋の隅で固まった。時折、近くを蛇の頭が通り過ぎたが、幸運にも黄金の眼はこちらに気づかない。ラードーンの気配が遠ざかるたびに、3人の身体から力が抜けるのが分かった。

そのうち、ラードーンが不気味すぎるシューっという声を発する。その途端、エリザベスの顔色がやや落ち着いた表情から恐怖の色に逆戻りする。

「……っ！ に、逃げましょう！ やばいです！」

エリザベスは弾かれたように立ち上がった。

「ど、どうしたの!？」

「あいつら、私たちに気づかなかったわけじゃないんです！ どの頭が私たちを食べるのか、相談してただけだったんです！」

エリザベスが叫んだときには、3本の頭が勢いよくこちらに迫ってくる所
だった。アルバスとスコープピウスも飛び上がり、3人は再び暗闇の中を走りだす。

「そ、それなら、はやく教えてよ！」

「ごめんなさいー！　いまの言葉で分かったんですー！」

「きつと、頭の中で話し合っていたんじゃないかな！　ほ、ほら、なんだっけ……

そう、テレパシーみたいに！」

スコープピウスが息を荒げながら解説してくれるが、アルバスにゆっくり聞いている
余裕はなかった。蛇の冷たい息が髪にかかるのを感じる。少しでも足を緩めたが
最後、あの口の中に入ってしまうこと間違いなしである。とてもではないが、他の
2人の気配を追うことはできない。悲鳴が聞こえないことが無事の証拠と信じな
がらがむしゃらに走っていれば、ラードーンの胴体のひとつが目の前に立ちふさが
る。

「とわっ！」

必死になって地面を蹴る。少しでも先に……昔、ちらっと見たマグルの走り幅跳
びでもするかのように、勢い良く地面を蹴る——が、思ったより跳躍することはで

きず、逆に胴体にぶつかってしまい、バランスを崩してしまった。咄嗟に頭を抱えて地面に転がると、蛇の頭が背中をかすめた。かすめた蛇の頭はそのまま前方に突っ込み、胴体を噛んでしまう。ラードーンの悲鳴が部屋に木霊し、アルバスは思わず耳を塞いだ。

「危なかった……っ！」

運良く難を逃れることができ、アルバスは少しでも距離を置こうと立ち上がった。もつれる足にいらだちを感じながら、疲れ切った足に鞭を打って走り出す。どこに逃げようかと顔を上げたとき、暗闇のなかを白くて小さなものが飛んでくるのが見えた。

「牙だ！ 牙が来たよ！」

アルバスは手を伸ばして、牙をキャッチする。

「とった！」

「さすがです、アル様！」

「あとはどうにかして、ラードーンに刺せばいいと思う！ 問題はその方法だけ
ど……っ！」

「それは任せて！」

アルバスは硬くて冷たい牙を握りしめると、足を止めた。

ひとつだけ、思いついた方法があった。こんな方法を言ってしまったら、2人ともやめろと言うだろうが、これしか思いつかない。

「さあ……来い！」

アルバスは蛇の頭を向かい合った。

ラードーンは今度こそ外さないと黄金の目を憎しみで輝かせている。今度の攻撃は狙いを違わず、まともにアルバスをとらえていた。アルバスは剣のように牙を握りしめると、大きく口を開けた蛇の口蓋にずぶりと突き刺した。バジリスクの牙は持ち手まで届くほど深く刺さり、生暖かい血がアルバスの両腕を濡らしていく。

だが、ラードーンもただではやられない。すぐに、アルバスの左腕の中段に焼けるような強烈な痛みが走った。ラードーンの牙がアルバスの左腕に刺さっていたのだ。アルバスは痛みには耐えきれず、バジリスクの牙から手を離し、よろよろと後退する。ラードーンの牙は破片をアルバスの腕に残したまま折れ、それと同時に、蛇の頭はぐったりと横ざまに床に倒れた。

「……痛っ！」

蛇の頭がひくひくと痙攣する姿を見ながら、アルバスは力の限り牙を引き抜いた。熱した鉄を押しつけられるような痛みが傷口から腕全体にゆっくりと広がっていく。

「アルバス！ 大丈夫！」

「アル様！」

2人がはしってくるのが分かったが、アルバスは動くことができなかった。

「しっかり！ ラードーンの毒に負けるな！」

「い、いま、止血します！」

エリザベスが自身のローブを引きちぎり、ぐるぐると巻き始める。しかし、そのローブにも、じわりじわりと自分の血で染まっていくのが見えた。そんなことしないでいい、と言葉したかったが、アルバスの口からは痛みにうめく声しか出てこない。

アルバスの悲痛の声を聞いて、2人は辛そうに顔をしかめた。

「大丈夫だよ、アルバス。この怪我なら、マダム・ポンフリーが治してくれる！」

「あととは出ることだけ考えましょう！　だから、大丈夫です！」

2人は嬉しいような泣きそうな声で言う声が、不思議と遠くに聞こえる。アルバスは最後の力を振り絞ると、もつれる舌で呟いた。

「うし……ろ……」

2人に知らせたかった。

だが、遅すぎた。

ラードーンはバジリスクの毒を受けた首を他の頭が食いちぎり、猛毒が全身に回るのを阻止しようとしていたのである。2人が振り返ると、食い千切った首が床に落ちるのは同時だった。

『——！』

ラードーンは怨嗟のこもった叫びをあげると、千切れた自身の一部を弾き飛ばす。100を超える頭のうち、たった1つを無力化することはできたのに、残りの99は健在のまま。むしろ、黄金の瞳の奥には先ほどよりも遥かに凝縮された憎悪の炎がちらついていた。

「もう、だめだ」

スコープウスが呟いた。

バジリスクの牙を呼び寄せている間に殺される。そもそも、1本程度の牙で残りの99の頭を破壊できるとは到底思えなかった。

『——ッ!』

ラードーンの99の頭は雄たけびを上げ、一斉に襲いかかって来る。

恐怖が3人の全身を麻痺させ、動くことも声を出すこともできなかった。黄金の眼が、ぐわりとあいた大きな赤い口が、ぎらりと怪しげに光る鋭い牙が視界いっぱいに見える。

どの口に食われるんだろう？ どの口に頭を潰されるのだろうか？

怖いのと結局なにもできなかった悔しさで、アルバスの頬に涙が伝った。目を逸らしたくても、目の前の現実を見ていることしかできない。大蛇の息を顔で感じ、視界全体に口蓋の赤色が広がり——白く染まった。

それは、とてもあたたかい光だった。

人は感じる痛みの極限を超えたから、一周回って温かく感じるのかな？　と思つたが、それにしておかしいことに気がついた。

蛇の口蓋に頭が覆われかけたときに感じた生暖かさは消えている。

アルバスの目の前を覆いつくしていた白い光は、白というよりも白銀だった。それも、なにか動物のように見える。それは、アルバスたちの傍からラードーンの数多の首を追い払うかのように、白銀の大きな動物がぐるぐる回っている。

アルバスは精いっぱい力を振り絞り、顔を少しだけ持ち上げる。白銀の光のなか、ラードーンを追い払おうとするそれは一角獣のように輝いていた。でも、おかしい。一角獣にしては、大きい角が二つある。それは、まるで——と、ここまで考えていると、白銀の獣がけん制する合間を縫うように、長い長い首がくねりながら迫って来る。

しかし、瞬間——風が吹いた。

このような密室で吹くはずのない一陣の風。このささいな違和感にラードーンの

首が気づいたとき、ずるりと頭部と首がスライドする。

「まったく。城の最深部にこんな奴が暮らしていたなんて……」

頭が床に落下したとき、ため息交じりの声が響き渡る。

「あなた、知ってました？」

「いや、僕も初めて知ったよ。城の怪物は、バジリスクだけだと思ってたからね」
その声を聞いて、アルバスは白銀の獣が牡鹿であると気づく。

「さて、どうします？ 私一人でもやりますが」

「いや、それは駄目だよ」

神話の怪物を相手にしているというのに、2人はスーパーで今日の献立を決めているような話しぶりだった。

「僕の息子が世話になったから、そのお返しをしないと」

「私の大切な娘とその友人でもすけどね」

アルバスは驚いたように振り返る。

アルバスたちが落ちてきた箇所が異様に明るい。月の灯りでも差し込んでいるか

のように輝く場所の中心には、会話の主たちの姿が懸命に浮き上がって見える。額に稲妻の傷が残る魔法使いが杖を構えている。その隣には、禍々しい青い瞳を爛々と輝かせた魔女がたたずんでいた。

まるで、死神のように。

スリザリンの継承者―魔眼の担い手―

著者 寺町朱穂

発行日 2024 年 2 月 21 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/22706/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
